リリカル剣魂スペシャル　侍たちと魔法少女

支配者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカル剣魂スペシャル　侍たちと魔法少女

【Ｎコード】
Ｎ１０５４Ｒ

【作者名】
支配者

【あらすじ】
赤夜叉さん達の許可をいただき書く事になりました。『リリカル銀魂』のありえない物語！赤夜叉さんの，『『銀魂×魔法少女リリカルなのは』～魔法少女と銀髪の侍～』黒龍さんの『リリカル銀魂ライダー～侍とカギと仮面と魔法少女と～』を参考に多くのアニメキャラを銀魂世界に溶け込ませて私なりに書いた参考小説です。舞台となるのは銀魂とはまた違う銀魂世界、ありえない万屋メンバー、剣心、ヤミ、セイバー、シャナが銀時たちと一緒に源外とララの発明により、リリカルなのはの世界に来てしまう。そこで銀さん

達は魔法少女達と出会いある事件に巻き込まれる。そして裏で暗躍するなぞの組織！！一体どうなってしまうのか！？面白いと思うんでどーかごらんくださーい。※駄文&キャラ崩壊&字間違いのゆっくり更新ですがそれでも「かまわないから、やれ」と言ってくれる心の広い方達。駄文ですがよろしくお願いします。他に出して欲しい作品などありましたらご要望は受け付けます。

第一訓　始まりはいつも突然に（前書き）

支配者「ど～も始めまして作者の支配者で～ス。ずっと書きたかったこの小説、赤夜叉さんと黒竜さん、黒神さんから許可をもらったんで掲載しま～ス。」
銀時「おい、作者」
支配者「あん？なによ」
銀時「この小説、滅茶苦茶すぎんだろ、なんだよいろんないろんなアニメキャラ混ぜ込むって」
支配者「いいじゃ～ンオモシれーんだから許可ももらったし」
銀時「ふざけんなァーー！！銀魂世界が滅茶苦茶じゃねーかァー！！」
支配者「ブフォオオ！！」
銀時にぶっ飛ばされる作者
支配者「何すんだこら！！出番なくすぞ！！」
銀時「うるせぇーー！！こんな小説ありえねーんだよ！！」
支配者「アア～もうほっといてリリカル剣魂スペシャル始まります。」
銀時「聞けぇーーーーーーーーーーー！！！」

第一訓　始まりはいつも突然に

大江戸ドーム。
今ここでは人気絶頂のアイドル寺門通のライブが行われていた。
「みんな～！今日は私のコンサートに来てくれてありがとうきびウンコォオ！！」
ステージに立つのはアイドルの寺門通。
「とうきびウンコォオ！！」
観客がお通の声に応える。
「それじゃあ最後の一曲『お前の母ちゃん××』！！聞いて下さいインドメタシン！！」
「インドメタシンンン！！」
最後の一曲をお通が熱唱し、ドームの中の熱気は最高潮に達した。

ライブが終わり、ドームの中から沢山の人が出てくる。
「いや～今日も盛り上がったなぁ！」
と口を開いたのは寺門通親衛隊のタカチン。
「そうだなぁ。お通ちゃんのライブは最高だよ！」
「なぁ軍曹…アレ？軍曹？」
タカチンは周りをキョロキョロ見て人混みの中、軍曹を探す。
「軍曹だったらそこで携帯いじってますよ」
一人の隊員が指差す。
そこには携帯の画面を見ながらニヤついてる軍曹がいた。
「何やってんだ軍曹のやつ？まさか、また女とメールしてやがんのか！？」
タカチンが額に血管を浮かべる。
「いいえ違います。なんか最近、リリカルなんとかってアニメにハ

マったらしくて、暇さえあればそのアニメの待ち受け画像や動画を見てるんですよ」

「アニメだとォ!?軍曹め、幹部のくせに何やってんだ!?」

タカチンが軍曹に掴みかかろうとした時。

「ぎゃぁあああ!!」

軍曹が悲鳴を上げた。

見ると一人の男が軍曹の鼻の穴に指を突っ込んで体を持ち上げていた。

「「「た…隊長ォオオオ!!!」」」

隊員達が恐怖に駆られた声を上げた。

軍曹を持ち上げている眼鏡男は寺門通親衛隊隊長・志村新八。普段は地味なツッコミ駄眼鏡だが、寺門通の事になるとドラ○ン○ールZのス○ウターがぶっ壊れるくらいの戦闘力を発揮し北斗の○のラ○ウのようになってしまう。

「軍曹ォオオ!貴様、寺門お通親衛隊隊規第十二条を言ってみろォオ!!」

新八は殺人鬼のような形相で軍曹を睨みつける。普段の新八にはない重い威圧感を放っている。

「いだだだっ!『たっ、隊員はアニメ等の二次元の作品を観ることなかれ』であります!」

痛みと恐怖に怯えながらも軍曹は答えた。

「その通りだ!軍曹ォオオオオ!貴様は幹部の身でありながらこれを破った!よって…」

新八の目がカッと見開かれる。

「鼻フックデストロイヤーファイナルボンバーストームの刑に処す!!!」

叫びながら新八は軍曹の頭を地面で擦り、回転させながらそのまま一本の太い木に向かって投げた。

「ほぎゃ!!」

軍曹は木にぶつかり、ズルズルと地面に落ちた。

「軍曹ォ！貴様の持ってるそのアニメのＤＶＤやグッズは全て没収だァ！全部俺が売ってやる！！」

約２時間後。
軍曹は泣く泣く全てのアニメのＤＶＤとグッズを新八に渡した。渡した後、軍曹は泣きながら帰っていった。
「ったく何がアニメだ！軍曹のやつお通ちゃんを裏切るようなまねしやがってェエエエー！！」
新八は怒りが収まっておらずそのＤＶＤを地面にたたきつけようとするが・・・
偶然、新八はＤＶＤのパッケージをちらっと見てしまう。そこには一人の少女が写っていた。
アニメ『魔法少女リリカルなのは』の主人公の高町なのはその人である。
新八はパッケージに写ってる、なのはを見て急にその手を止めて、顔を赤くした。
（あ…アニメなんて…アニメなんてェ…！！）
ＤＶＤを持つ新八の手が震える。
（くっ…！ありがとうございましたァ！！）
新八は頭を下げて心の中で礼を言った。一体誰に言ってんだよてめぇ。
そんで軍曹から没収した『リリカルなのは』のＤＶＤとグッズを売らずに家に持って帰った。
あんなことえらそうなこといっときながらこいつがイチバンの裏切り者である。

この世界・・・この世界は確かに「銀魂」の世界である。しかし、この世界にはありえないキャラがいっぱいいる・・・。

ここは主人公・・・ごぞんじ坂田銀時の根城、万屋銀ちゃんである

しかし、看板には「万屋銀剣ちゃん」と書かれている。

「つーかよぉ。主人公の俺の出番がこんなに遅いってのは問題じゃ

ねーの？ったくあの馬鹿作者が！」
ソファーに座って疑問を言うのは坂田銀時。白髪の天然パーマがトレードマークのこの物語の主人公である。
「そうアル。新八なんてダメガネより私達の出番を増やすべきアル！」
卵かけご飯を食べながら言ったのは神楽。宇宙最強の戦闘民族『夜兎族』の一人。
「まったくです。ダメガネが出たせいでお茶漬けがまずくなりました。」
そういって騎士甲冑をきた金髪女性セイバーがお茶漬けを食べている。
「本当よね、作者のやつなに考えてんだか・・」
菓子パンをほおばる黒髪の少女シャナもそういった。
「そうですね、たい焼きの味も台無しです。」
金髪ロングに肌の見えやすい黒服の少女ヤミもそういった。
「まあまあ、もう少し易しく言ってあげるでござるよ、みんな」
そういって赤髪の浪人姿をした左頬に十字傷の男、もうひとりの主人公、緋村剣心がそういった。

読者の皆さん、、もうお分かりかと思うが万津屋メンバーにしては明らかにおかしい人物が大勢いたであろう。
そう・・・この世界には他のアニメのキャラがいるのだ。

るろうに剣心の緋村剣心、灼眼のシャナのシャナ、Ｆａｔｅのセイバー、ＴｏＬＯＶＥるのヤミ・・・他にもいっぱいいる。

とりあえず、彼らのこの世界での設定を簡単に紹介しよう。
緋村剣心は銀時や桂小太郎と一緒に攘夷戦争に参加した経験がある。伝説とまで言われた最強の流派、飛天身剣流を使い、銀時同様、鬼人のごとき強さで、敵味方から恐れられ、紅夜叉と、呼ばれた最強

クラスの攘夷志士である。攘夷戦争後、妙な縁から、銀時と一緒に万屋を開くことになった。

セイバーは、銀時たちの知り合いである魔術師に暇つぶしの簡単な魔術を教えてもらったときに、それを試してみたら、なぜか昌霊術だったらしく偶然、サーヴァントのセイバーを呼び出してしまったのである。そして、銀時がマスターになり、万屋にいついてしまった。ちなみに、セイバーを呼び出したとき銀時は「霊じゃねぇ！こいつはスタンドだ！」と原作でも有名な決まり文句を言った。

シャナとヤミは、宇宙人（アマント）によって作られた、対侍用の生体兵器だったらしい、ぼろぼろになっていたところを銀時と剣心に拾われて今に至る。二人の能力は原作と同じである。ちなみにアラストールはいません。

とまあこんなところである。

「ッたく、まあ、んなことぁどうでもいいとして・・・・・・・・・・・、てめーらぁぁぁぁぁーーー！！！いい加減にしろぉーー！！！いつまで食ってやがんだぁぁぁぁーーー！！！」

ちなみに今月の万津屋ははやくも生活日がそこをつきかけていた・・・。原因はあほみたにくいまくる神楽とセイバーのせいである。

「なにいってるアルか、銀ちゃんまだ腹八分目アル。」

「そうですよぜんぜん食べたりませんよ。」

と神楽とセイバーが卵かけご飯とお茶漬けをバクバク食べながらそういった。

「ふざけんなァーーー！！！てめーらのせいでこちとら最近十分に糖分取れなくてイライラしてんだァアアアーーーーーーーーー

！！！！！！」
と、銀時はいつものようにぶちきれている。
「まあまあ、銀時落ち着くでござるよ」
いつものように、剣心が銀時をなだめる
「というより甘いもののとりすぎでござる、いい加減少しは抑えるでござるよ」
「うるせーナ、俺は好きなことして太く短く生きるって決めてんだよほっとけ剣心」
銀時と剣心はいつものような会話をしている。

しかし家計は火の車さすがにこれいじょうはやばい

「しゃあねえいつもの手を使うぞ」
銀時がそういったとき、
「おはようございます」
玄関の扉が開かれて新八が入ってきた。
「おい新八。なに主人公の俺たちより先に登場してんだコノヤロー」
「先に登場したって地味キャラはいつまで経っても地味キャラアルヨ」
「そうですよ、ジミーの癖に」
「ホンとよ、ジミーの癖に」
「そうです、ジミーの癖に」
銀時と神楽、セイバー、シャナ、ヤミは新八を睨みつける。
「いや僕に文句言わないでくださいよ！作者さんに言ってください！それとてめぇら地味地味言うな！！しつけーんだよ！！！！！」
5人にツッコみながら新八はソファーに座った。
「も～剣さんからも何かいってくださいよ」
「あきらめるでござるよ、新八殿」
「よーし。新八（ダメガネ）も来たことだし、あそこに行くか」
「そうですね。新八（ダメガネ）も来ましたし、いきますか」

「おい！二人して『新八』と書いて『ダメガネ』って読んだか！？」
「あ？だって地味って呼ばれるのいやなんだろ？」
「だからって、ダメガネっていうんじゃねェ！！」
立ち上がりながら新八はツッコんだ。
「じゃー『えっちぃ眼鏡サル』と呼びますか」
ヤミがたいやきを食べながら言う。
「ヤミちゃんひど！！」
ヤミの言葉を聞いて新八はショックを受ける。
「だめよ、闇、そんなこと言っちゃ」
「シャナちゃん」
新八はシャナがかばってくれたと思ったが、
「『えっちい眼鏡サル』に失礼だわ、こんなやつ『変態ゴキブリ眼鏡』で十分よ」
「そうですね」
「おい」
シャナのほうがひどいやつだった。

銀時たちがやってきたのは江戸城１３個分はあるかという馬鹿でかい西洋風の屋敷

「何だまた来たのか？今月でもう2回目だぞ」
そういって屋敷の主、銀時達、万屋のお得意さん、江戸きっての大財閥、三千院財閥の若き党首金髪ツインテールの少女三千院ナギはあきれたようにそういった。
「仕方ねーだろ食費がつきてもうやべーんだよ、パフェも食べられやしねーし、イチゴ牛乳も飲めやしねー。だからよ、仕事くれよナギ」
銀時は頭をかいてそういった。
「知るか、さっさと帰れ」
「ちょっと冷たくない！？、前に誘拐犯にさらわれそうなところを助けてやっただろーが！！」
「いつの話をしとるんだ、お前は」
「ハハハ、まあまあお嬢様、銀さん達困っているだからちゃんと聞いてあげましょうよ」
とナギの執事、綾崎ハヤテがそういった。
ちなみにハヤテはこの世界ではハヤテは地球人と夜兎族のハーフであり父親が攘夷戦争で戦死し母親が病死して路頭に迷っていたところをナギに拾われたのである。ハーフではあるもののいつも鍛えてあるため下手すると神楽よりも強い。ちなみに太陽の日を浴びてもそんなに影響を受けない、ハーフだからね。

「フフ、相変わらず苦労してるわねぇ、ねぇ、伊澄」
「はい」
「ホントデスワねぇ」
「ホントだらしねーなぁおめーら」

と、ナギの友人、江戸のきっての陰陽術師の本家本元家柄、鷺ノ宮家の長女、鷺ノ宮　凛（設定はＦＡＴＥの遠坂　凛）、妹の伊澄、

デビルーク星の皇女ナナとモモが笑ってそういった。
「売る背ーぞ、ぜんぶこいつら、2人と貞治のせいなんだよ。こいつらがあほみたいにバクバク食いやがるから、ツーか、凛、半分はてめーのせいだぞ。」
「なんでよ」
「あたりめーだろーが、この暴食騎士王が来たのは、てめーがあんな魔術教えやがるからだぞ」
「銀時、誰が暴食騎士王なんですか？」
とまあ、セイバーの突っ込みは無視して、銀時たちに魔術を教えたのは、他でもない、この凛である。本当は、陰陽師なのだが、西洋魔術に興味がありイギリスに留学して勉強していたのだ。
「お嬢様、お紅茶であります。」
とナギの護衛けんメイドのヴィルヘルミナがやってきた。
皆さんお気づきの通りこの人は、灼眼のシャナのヴィルヘルミナ・カルメルである。この世界では、シャナとやみ同様アマントに作られた生体兵器である、シャナたちのように道端でボロボロになって倒れていたところをナギに拾われ、ナギのメイドになったのだ。ちなみにヴィルヘルミナの能力はシャナやヤミと同じく原作と同じである。ティアマトーはいないけど。
「おう、すまんな、ああ一応こいつらにも紅茶を出してやれ」
「了解であります」
話を戻すが、
「ホント困ってるんでござるよ何とかならんでござるか、ナギ殿」
「そうアル、このままじゃ卵かけご飯が食べられないアル」
「そうです、お茶漬けも食べられません」
「いや、てめぇら、食いすぎなんだよ」
新八が大食い2人に突っ込んだ。
「そういわれても、今は頼む事がな「ナギ～源外さんからお電話ですよ、なんでも例のあれができたそうです」おおそうか、今いくと伝えてくれマリア」

「はい」
「おいお前ら、仕事ができたぞ」
「ああ、あれ出来たたのか、そういや姉上も手伝ってるって言ってたな」
「ああ、例のあれですわね」
ナナとモモも知ってる様子でそういった。
「おい、あれって何だ？」
銀時がナギに聞いた。
「いいからこい、出掛けるぞ」

「じーサンとララの『源外どのとララ殿の』あたらしいはつめいひん？」
「ああ」
歩いてる途中で銀時と剣心がナギに聞いた
「源外とプリンセスの発明だけあって少し怪しいですね」
ヤミが真顔で言う。
「ああ、私もそう思います。なにせあの人たち、私の大事な聖剣を前に醤油とかシロップとか出るように改造しましたからね」
セイバーが腕を組みながらそう言う。
「それ、私の刀もやられた、まったく・・・」
シャナも文句を言った。
「私の傘も変な風にされてしまったアル」
神楽もそういった。
「どーせロクな発明品じゃねーよ、あいつらの作るのなんて」
「まあそういうなあれはビックリする者だぞ」

やってきたのは源外の工場
「おーい、じじいー、ララー」
ナギが源外の工場の中に声をかけた。
「おー、来たか譲ちゃん・・ってなんだてめぇらもきたのか」
「あ～銀さん達だぁ～」
工場の中から一人の老人と変な格好の少女が出てきた。
平賀源外。江戸一番のからくり技師、少女はララ、デビルークセイの第一皇女である。趣味、発明
「おい、じーさん、ララ。何だよこいつぁ？」
「コイツはな瞬間移動装置だ」
「そうそう♪」
「瞬間移動装置？」
剣心は首を傾げた。
「原理はターミナルと同じだが、コイツは生身の人間を移動できるように作ってあるのよ」
「うぉおお！スゴイアル！！」
「ホントですね」
神楽とセイバーが興奮して装置をペタペタ触る。
「神楽ちゃん、セイバーさん。何が起こるかわからないから触っちゃダメだよ」
新八が注意する。
「「んだよダメガネ」」
「ハモッテいうな！！」
渋々、神楽とセイバーは装置から離れる。
「源がいどの、ララ殿、何でこんなもの作ったでござるか？」
剣心が源外に尋ねた。
「ああ、ナギの譲ちゃんに作ってくれって頼まれてなぁ。」
「うん」

「なんで？」
シャナがナギにたずねた。
「だっていちいちヘリや飛行機宇宙船に乗って旅行するって面倒だろ、だからだよ。これがあれば家から直通でいろんなところにいけるしな」
「ったく金持ちの道楽だなぁ、おい」
「うるさい」
銀時がナギを突っ込んだ。
「ところで拙者たちの仕事とは何でござるか？」
剣心がナギにたずねる。
「お前達に装置の中に入ってもらって瞬間移動してもらう」
「おいおい、俺達に実験台になれってーのか？」
銀時は目を細める。
「他に頼める奴がいないんだ。金はちゃんと払うから頼むよ、銀時」
「だからってよ「３００万でどうだ？」よーし、おめーら乗り込むゾー」
「「「「「「おい」」」」」」
新八たちが突っ込んだが銀時は無視した。
「いくぞ剣心、新八、神楽、セイバー、シャナ、ヤミ」
「分かったでござるよ」
「はい」
「キャッホォ～ウ！」
「マスターには従いますよ」
「まったくもう」
「しょうがないですね」
シャナとヤミはいやそうだったが神楽だけはテンション高かった。
ふと、銀時は足を止めて後ろにいる源外たちに振り返った。
「じーさん、ララ。装置の中に変なボタンとかねーだろうな？それと前に作ったぴょンぴょンワープ君の時みてーに服は飛ばせねーなんてことはねーだろーな？」

「ねーよ、んなもん。さっさと中に入れ」
「そーだよ、この子はパーフェクトだよ」
「わーったよ」
銀時達は装置の中に入った。装置の扉が重い音を立てて閉じた。
「それじゃ装置を作動させるね　スイッチオ～ン♪」
ララは装置のスイッチを押した。
装置の中が赤くなる。
「おおっ！中が赤くなったアル！」
神楽は一人わくわくしている。
「楽しそうだな（ね）。おい（おまえ）」
「やれやれ」
銀時とシャナ、剣心はため息をつく。
「ちなみに銀の字、剣の字。まだ装置は不安定でナ、どこに移動するかは俺たちにもわからん。せいぜい気をつけろ」
「そうなんだよね～」
「なんだそうだったのか、こいつらで試して正解だったな」
「ジジィイイ！！「源がいどのォオオ！！」そういうことは先に言えェエエ！！どこがパーフェクトだァアアア！！」
銀時達が怒鳴った直後。

ビービービー

突然、警報が鳴り響いた。
「おい！ジジィ！ララ！何だよこれ！？」
銀時は装置の外にいる源外に怒鳴る。
「ん？装置が何かに反応してやがる」
「ホントだ、どうなってんの？」
「ジジィ！ララ！また欠陥品作りやがったな！」

装置の中で銀時は怒鳴る。
「銀さん落ち着いてください！」
「銀時落ち着くでござる！」
「これが落ち着いてられるかァアアア！」
「ヘルペス！ヘルペスミーシー！！」
「ヘブペス！ヘルェタスミー！！」
「二人共、それをいうならヘルプミーよ」
慌てる神楽とセイバーに冷静にツッコむシャナ。
「銀の字！お前ら何か変な物持ってないか？」
「何も持ってねーよ！」
源外に怒鳴る。
「銀さん！とりあえず装置の外に出ましょう！」
「そうですね」
新八とヤミが歩き出した時。

カタン

新八の懐から何かが出て床に落ちた。
「「「「「「ん？」」」」」」
銀時達は床に落ちた物を見た。
新八は”げっ”という顔をして冷汗をダラダラ流す。
床に落ちた物は軍曹から取り上げた『魔法少女リリカルなのは』のDVDだった。
「新八・・・」「新八殿・・・」
「あ。いや、そのこれは・・・」
銀時と剣心はジト目で新八を見る。
セイバー・ヤミ
『・・・・・・・・』

２人も新八をジト目で見る。
「お前アニメオタクにもなったアルか？マジキモいアルな」
神楽はぺっとタンを吐く。
「やっぱり変態ゴキブリ眼鏡ね」
シャナが軽蔑の眼差しをこめてこういった。
外にいるナギも
「所詮はダメガネだな」
と、ジト目でいった。
「何だとォオオオ！！てめぇらァァァ！！」
「ああ～！！原因はそれだよォ！！」
新八がブチキレる。
「銀の字！剣の字！そのＤＶＤだ！そのＤＶＤに装置が反応してやがんだ！！」
「ＤＶＤ！？何でＤＶＤに反応してんだよ！？「るでござるか！？」
「そんなの俺達が知るか！！」
「てめェエエエ！！自分で作っといて何無責任なこといってやがんだァアアア！！」
騒いでる間にも装置内の赤い光が強くなる。
「ドワァァァァァァァァァァ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！何でおれたちがこんなめにィイイイ！！！！！！！」
ドカーーン！！！！という爆発音と銀時の悲鳴と共に装置の中から強い光が発した。だんだん光がおさまる。
源外がぶっ壊れた装置の扉を開ける。中に銀時達の姿はなく、床に落ちてるＤＶＤだけがあった。
「あ～あ、厄介な事にならなきゃいいがなァ」
「大丈夫かなァ銀さん達」
「まあ、あいつらなら大丈夫だろ」

銀時達がいなくなった工場で源外達は呟いた。

「おろォオォ・・・・」

ゆっくり瞼(まぶた)を開けて剣心は目を覚ました。

「いたた・・んん?」

上半身を起こす。周りを見渡した。どこかのビルの屋上らしい。そして空は暗く月が出ていた。

シャナとヤミが近くに倒れていたが銀時たちの姿はない。

「どこでござる、ここは?」

剣心は気づいたらまったく見知らぬ場所にいた。

第一訓　始まりはいつも突然に（後書き）

銀時「おい作者グダグダだな」
支配者『すいません次からもっとがんばります。リリカルキャラも出しますんで、では次回、アア～ちなみに万屋キャラ以外の出番はずっと先で～ス』
残りのキャラたち『おい！！！』

第二訓　初めての出会い何てこんなもんだ（前書き）

支配者「ハ～イ、第２話投稿デース。」
銀時「おい作者、俺達の出番は？」
支配者「ああ？次までないよ」
銀時「何でだよぉーーー！！！？？？」

第二訓　初めての出会い何てこんなもんだ

「アルフ。あの人達、誰なんだろうね？」
突然、屋上に現れた銀時を空から見下ろしながら金髪の少女が隣にいる『アルフ』という人物に話し掛ける。
「さぁ？管理局の魔導師・・・なのかねぇ？」
アルフは首を傾げた。
「…何だか三人ともおかしな恰好をしてるね。管理局の魔導師には見えないし、でも妙な力を感じるよ。」
「ホントだね。何なんだろ？この力」
二人は剣心たちの恰好を見た。見た目からして魔導師には見えない。バリアジャケットを着てないし、杖も持ってない。しかし、魔力とは何か違う力を剣心達から感じる。
「どうするフェイト？」
『フェイト』と呼ばれた金髪の少女は手に持つ杖を強く握った。
「捕まえよう。あの人達には悪いけど」
「わかった。次元転移による魔力は全く感じなかったから強敵かもしれない。気をつけてねフェイト」
「うん。アルフもね」
アルフにそう返して、フェイトは手に持ってる杖『バルディッシュ』を起動させる。
「私が初撃で誘導するから、アルフは捕縛用のバインドで捕まえて」
「ＯＫ！」

「全く、ここはどこなんでござるか？見た限り江戸ではないし銀時たちもいないし・・・まあ、とりあえず二人を起こすか。」
剣心は寝ているシャナとヤミを起こそうと体を揺り動かした。
「ほら、二人とも起きるでござるよ。」
「うう～ん」
「あれ、剣心ここはどこですか？」
二人はゆっくりと体を起こした。
「さあ、拙者にもわからんでござる。下手をすると地球ですらないかも・・・」
剣心は今の状況を簡単に二人に説明した。そのことを聞いた途端、二人は怒り出した。
「アアーもう！何で私たちがこんな目にあわないといけないのよ！！銀時達ともはぐれちゃうし！」
「全くです。こうなったのも全部源外達とあのアホ眼鏡のせいです。」
「まあまあ、二人とも気持ちはわかるが、落ち着くでござるよ。」
剣心は二人をなだめる。
「うるさいうるさいうるさい！だいたい剣心はあいつらに甘いのよ！！」
「ホントです。今回ばかりは勘弁なりません。帰ったらプリンセスだろうと全員ボコボコにしてやります。」
シャナはギャーギャーと怒りをむき出しにして怒っており、ヤミは暗がりの顔で怒りのオーラを放っている。
「あらら・・・（これは帰ったら源外殿たちが大変でござるね、今頃、銀時達も怒っているでござろうな～）」
剣心は、心の中で今後の源外達の身を案じながらため息をはいた。
剣心「とはいえ・・・これからどうするでござるかなァ・・・？」

剣心が今後のことを考え始めた。

すると、フェイトとアルフが上空から剣心達に迫る。

（ごめんなさい）

心の中で謝りながらフェイトは剣心達に向かって大量の黄色い魔力弾を放った。

「ん？」

剣心が魔力弾の光に気付きすばやく振り返る。そして腰に背負っている「逆刃刀・真打」（さかばとう・しんうち）を抜き、回転しながら素早く振って自分達に迫る魔力弾を全て切った。

「えっ！？」

「そんな！あれだけの魔力弾をすべて一撃で切った！？」

魔力弾を放ったフェイト達は驚いた。

「このっ！！」

剣心の後ろからアルフが殴りかかる。剣心はアルフに気付いて体を捻って拳をかわす。そのまま勢いをつけて銀時は逆刃刀をアルフの顔目掛けて振る。

「わっ！」

「アルフ！！」

フェイトが急いでアルフの元へ向かおうとすると、剣心は顔に当た

る直前で逆刃刀を止めた。
「「!?」」
フェイトとアルフは驚いて動きを止める。
「はい。終わりでござるよ」
そう言って剣心は逆刃刀を腰に差した。
目の前のアルフは口を開けてポカンとしてる。
「大丈夫アルフ?」
「う…うん。大丈夫だよフェイト」
「やれやれ、いきなり何をするでござるか、お主達は」
剣心はまた、ため息を吐く。
「何よ、お前達は?ただでさえこっちはイライラしてるって言うのに、喧嘩売ってんの?黒焦げにするわよ?」
「ホントです。切り刻まれたいんですか?」
ただでさえイライラしているのにいきなり襲われて、シャナは刀を抜き火炎をまとわせ、ヤミは変身能力(トランス)で手を剣に変え、怒りのどす黒いオーラをフェイト達に向けた。
「「ひっ!!」」
そのあまりのオーラの大きさにフェイトとアルフはひるんだ。
「こらこら、二人とも止せ、怯えているではござらんか」
「「剣心は黙って「止せといっているだろう」うっ・・・」」
剣心は二人をとめるため強い剣気を放って、二人をにらみつけた。
剣心は普段はやさしいが怒ると誰よりも怖かったりする。
「貴方達は管理局の人間なんですか?」
バルディッシュを構えて警戒しながら剣心達に問う。
「は?管理局?」
「なによそれ?」
「え?」
剣心達の返事にフェイトは思わず警戒を緩めた。
「というより、ここどこなんですか?」
「え?ここは、第97管理世界。地球、日本ってとこにある海鳴市

って町のはずだけど？」
「「「はぁ！？」」」
剣心達はアルフの言葉を聞いて驚いた。何せ聞いたことのない町名を言われたものだから。
フェイトたちは恐る恐る剣心達に話しかける。
「あの・・・」
「ああ、スマンでござる。」
「本当に管理局の人間じゃないんですか？」
「だから何でござるか？その管理局というのは？」

「じゃあ貴方達は気がついたら此処にいたんですね？」
「ああ」
剣心はフェイトとアルフに事情を説明した。
「フェイト。コイツら『次元漂流者』かもしれないね」
「『次元漂流者』？」
アルフの言葉に剣心達は眉を上げた。
「簡単に言えば迷子の事です。未開の世界から何かの拍子で別の世界に飛ばされた人間の事ですよ」
とフェイトが答えた。
「・・・マジでござるか？別の星ですらないとは・・・」
剣心達は屋上の端に行って街を見渡した。
「確かにここ、江戸の街じゃないしね…」
建物の形などが江戸の建物とは違うし、ターミナルもない。それに街を歩いてる人をよく見ると天人が一人もいない。
「あの、地図見たいな物持ってませんか？」
「地図？」
「はい」
そう言われてフェイトはヤミに地図を渡した。剣心達は渡された地図を見ると、一応、地球の日本とは書いてあったもののそこには知らない地名ばかりが書いてあった。
「ははは・・・やってくれたわねあのジジィにバカ皇女」
「ホントですね・・・」
シャナとヤミは顔を青ざめて力無く笑った。
「あの・・・大丈夫ですか？」
心配になったフェイトが剣心達に声をかけた。
「え・・・ええ。大丈夫よ（です。）」
ヤミは地図をフェイトに返した。
（あのジジィ！バカ皇女！帰ったらボコボコにした後、瞬間移動させてやるわ！！（やります！！））

心の中でシャナとヤミは源外とララに復讐を誓った。
「なんか・・・あの二人怒ってないかい？」
「そ・・・そうだね」
シャナとヤミの様子にフェイトとアルフは戸惑った。
「ははは・・・」
剣心は笑うしかなかった。

その後落ち着いた剣心達はフェイトたちと自己紹介を始めた。

「拙者は緋村剣心という。元の世界じゃなんでもやる万事屋ってのをやっているござる」
「私はシャナよ」
「私はヤミといいます」
「私はフェイト。フェイト・テスタロッサ」
「あたしはアルフ」

フェイト達も自己紹介する。
すると剣心はフェイトとアルフに質問した。
「あっ、そうだ。お主達。銀時とセイバーと新八と神楽という者達を知らぬか？」
「銀時とセイバーと新八と神楽・・・？」
「誰だいそいつら？」
二人は首を傾げた。
「拙者たちの・・・まあ・・・家族みたいなものでござる。多分この世界に飛ばされたはずだが知らぬか？」
銀時に言われてフェイトとアルフは考え込んだ。
「・・・・・ごめんなさい。私は知らない」
「・・・悪いけど、あたしも」
申し訳なさそうに二人は剣心達に謝った。
「そう・・・まぁ気にしないで。あいつらなら心配ないでしょ」
「あの・・・貴方達はこれからどうするんですか？」
「あ・・・そういえば考えてる途中でござったな」
「はい」

「剣心、泊まるところがないんだったら家に泊まらない？」
「えッ！いいのでござるか？」

剣心達はフェイトの突然の申し出に少し驚いていた。
「いいよ、突然襲って悪かったし、ね、アルフ？」
フェイトはアルフを見ながら聞いた。
「まぁフェイトがいいならいいけどね。」
アルフもフェイトに同意する。

「いいのでござるか？素性も分らない拙者達を泊めても？」
「うん」
「それはありがたい願ったり叶ったりでござる。では世話になるでござるよ。フェイト殿」
「ア～助かった。これで野宿しなくてすむわ」
「そうですね」

剣心達は安堵の息を吐きながら二人に言った。

「うん」

フェイトは答えた。

アルフ「よろしく～」

アルフは笑顔で返事をした。

他のメンバーはいったい何処にいるのでしょうか？

第二訓　初めての出会い何てこんなもんだ（後書き）

支配者「ハーイ、次はいよいよなのはと銀時たちの登場で～ス。」
銀時「ったくやっとかよ。つーか、シャナのキャラ微妙に違くね？」
支配者「しかもかなり危険な目にあいます。それとオリジナルの敵も登場します」
銀時達『おい！！！無視かよ！！！！』
」

第三訓　ありえない人物が来ると変な事が起こる（前書き）

支配者「はい、今回はオリジナルの敵キャラが登場します」
銀時「変なやつらが出てきやがったな」

第三訓　ありえない人物が来ると変な事が起こる

フェイト達と剣心達が会っていた頃銀時達は。

銀時は道の真ん中に座りこんでいた。

銀時「たくよぉ。どこなんだよ、ここはよぉ？」

銀時は顔を俯かせて呟く。

「元気出すアルよ銀ちゃん」
「そうですよ。しっかりして下さい」
神楽とセイバーが銀時を励ます。ちなみにあの時、神楽とセイバーは銀時の横で寝ていた。
「大体、銀ちゃんが金に釣られてあんなのに乗るからこんなことになったアル」
「まったくです。所詮金の亡者ですね」
「ふざけんな!!一番テンション高かったテメェらにンなこと言われたくネェよ!!」

「ああ、こんちくしょう!イライラする!あの綺麗な星空や満月までもがイライラする!あんなに綺麗なのにィ!!」
銀時は顔を上げて怒鳴る。

「確かに江戸じゃなかなかこの綺麗な星空は拝めないネ」
「ホントですね。こんなきれいな星空は久しぶりです。生きていたときに見て以来ですね。」
神楽とセイバーは満開の星空を見て目を輝かせる。

「おめェーらは呑気でいいよなァー!、つーか!セイバー!まるで自分が幽霊みたいなセリフ言うのやめてくんない!?」
「私は幽霊ですよ」
「幽霊じゃねえ!!テメェはスタンドだ!!」

神楽が呑気の事をセイバーが怖いことを言うので幽霊が苦手な銀時は不機嫌になる。

「チクショーっ!!ジジィとララのワケわかんねー装置のせいで分

けわかんねー所に飛ばされるしょぉ！いつの間にか夜になってるし！帰る方法もわかんねーんだぜ！！しかも何故か剣心達はいねぇーしよぉ！剣心のツッコミがなきゃギャグが成立しねーよ！俺がツッコミやれってか！？」

綺麗な星空に向かって銀時は愚痴を叫び続ける。

「あれ？新八はいいアルか？」

「ん？新八か？いいんだよアイツのウルセェだけのツッコミより剣心のやんわりなツッコミの方が良いんだよ。アイツのウルセェだけの突っ込みはもう飽き飽きなんだよ。」

「そうアルな、あいつのツッコミはうるさいだけアル」

「そうですね」

神楽、セイバー・・・少しは反論してあげましょうよ。

「それよりも、ちくしょう！あんの糞ジジィにバカ皇女！帰ったら絶対ボッコボコにしてやるからな！！」

銀時は怒りで拳を震わせた。

ドカーン

『『ッ！？』』

銀時達は少し遠くの方で何かが壊れる音がした。

「いくぞ神楽！セイバー！」

銀時は腰に差してある木刀『洞爺湖』を握り締め、音のするほうに向って走り出した。

「まってヨ、銀ちゃん！」

「待ってください、銀時！」

神楽も銀時の後を追った。

道路の真ん中を栗色の髪をツインテールにした少女『なのは』がフェレットを抱えて黒い大きなトカゲのような怪物から逃げていた。

私は頭の中に謎の声が聞こえて病院に来てみると、フェレットさんがなんか変な怪物に襲われていたの。

それで私はなんとかその怪物からフェレットさんを抱えて逃げていたら、い、いきなりフェレットさんが喋りだしてもう頭の中ぐちゃぐちゃなの。

すると突然怪物が襲い掛かって来て、だめだと思った私は目をつぶったの。

来るはずの痛みが来なくて、私が不思議に思って目を開けると、銀髪の着物を着た人が木刀で怪物を押さえ込んでいたの。

そう、なのはがピンチになっていたそのとき、銀時が現れ、怪物を木刀で押さえ込みそのまま後方までぶっ飛ばした。
怪物は呻き声を上げた。

「おいおい、いきなりトラブル遭遇とはついてねぇーな」

銀時は頭を掻きながらめんどくさそうに言った。

「おい、大丈夫か？」
「えッ！は、はいありがとうございます」

なのはは、銀時にお礼を言った。

「あの、ありがとうございます」

フェレットも頭を下げてお礼を言った。

「イタチが喋った！？」

銀時はフェレットが喋った事に驚いた。

「あの、フェレットなんですけど・・」
「イタチもフェレットもあんま変わんないだろ」
「いや、変わりますって！」

フェレットがそう言った時、また怪物が今度は銀時に襲い掛かって

来た。

「ホアチャー！」
「ハァッ！！」

神楽が突然現れ怪物を持ち前の怪力を使って、傘でまた後にぶっ飛ばした。
そこにすかさずセイバーが怪物の懐に行き、剣で縦や横や斜めに、目にも止まらぬ速さで切り裂いた。

なのは「す・・・すごい！」
フェレット「なんて強さだ・・・」

なのはとフェレットは銀時達の強さに驚いていた。ばらばらになった怪物はすぐに体を再生し始めた。

銀時「くそ、こいつ不死身か？」

銀時は怪物がいとも簡単に再生した事に驚いて、舌打ちした。

「そんな！？」
「いけない！あれをなんとかするには『封印』しなければいけないんだ！」
「その封印って、どうすればできるの？」

なのはがフェレットから封印の方法を聞こうとする。その間もセイバーと神楽は怪物と戦っていた。
しかしいくらばらばらにしてもすぐに再生するので二人は休み無く戦っていた。

「さっき言った事は覚えてる？」
「魔法のこと？」
「そう、それ使うにはさっき渡した宝石が必要なんだ」
「これの事？」

なのはは、さっきフェレットから貰った赤い綺麗な宝石を見せた。

フェレット「それで、それを手に、目を閉じ・・・心を澄ませて・・・僕の言ったとおりに繰り返して・・・」

なのはは目を閉じフェレットの言葉を繰り返す。

「『我・・使命を受けし者なり・・・』」
「『我・・使命を受けし者なり・・・』」
「『契約の元、その力を解き放て』」
「『えと、契約の元その力を解き放て』」
「『風は天に・・星は空に・・・』」
「『風は天に・・星は空に・・・』」
「『そして、不屈の心は・・・』」
「『そして、不屈の心は・・・』」

『『この胸に！』』

なのはとフェレットの声が重なった。

『『この手に魔法を・・レイジングハート！セーット、アーップ！！』』

するとなのはの体が光に包まれた。

レイジングハート〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ，ｓｅｔ　ｕｐ！〉

「うわァ！まぶし！」

「何ですか！？この光は！！」

「目がまともに開けられないネ！」

あまりの光に三人が目を細める。

光が収まると白いバリアジャケットを着て、手にレイジングハートを持って浮かんでいるなのはの姿があった。銀時と神楽はなのはのその姿を見て唖然とした。

フェレット「僕らの魔法は発導体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そしてその方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです！！そしてあれは・・・忌まわしい力の元に生み出されてしまった思念体。あれを停止させられるにはその杖で封印して元の姿に戻さないと行けないんです！！」

なのははレイジングハート見て聞く。

なのは「よく分かんないけど・・・どうすればいいの？」

フェレット「攻撃や防御みたいな基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力とする魔法には呪文が必要なんです！」

なのは「呪文？」

フェレット「心を澄まして・・・心の中にあなたの呪文が浮かぶはずです」

そう言われてなのはは目を閉る。そしてなのはは目を開ける、その

目は真剣そのものだ。

なのは「リリカル、マジカル」

なのは「封印すべきは忌わしき器、ジュエルシード！」

杖を掲げながら呪文を紡ぐなのは、それを見ながらフェレットは叫ぶ。

「ジュエルシード、封印！」

〈Ｓｅａｌｉｎｇ　Ｍｏｄｅ．　Ｓｅｔ　ｕｐ〉

なのはの魔力糸が敵を縛り上げ、怪物の額に「？？？」の文字が浮かび上がる。

〈Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ〉

「リリカル、マジカル・・・ジュエルシード、シリアル？？？、封印！」

その時銀時が、

「なに、あのセリフ！？恥ずくない！」

場の空気を壊すようなセリフを言った。

レイジングハートの声に答え、なのはは何故かくるくる横回転しながら呪文を紡ぐ。

レイジングハート〈ｓｅａｌｉｎｇ〉

そして、なのはの魔力糸が怪物を貫き、宝石の状態に封印する。

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れて「そうはいかんな」!?だれだ!」

なのははフェレットの指示に従い、レイジングハートの先を近付けるとジュエルシードが宙に浮かび杖のコア（赤い宝石）に取り込もうとしたが突如空から黒いコートで顔を隠した男が降りてきた。
「それを渡してもらおうか、小娘」
男はそういい、なのはに迫る。
「誰なんだ!?それはジュエルシード!!危険なものなんだぞ!!」
「フンッ!ユーノ・スクライアか、きさまなどに用はない」
「!?、なぜ僕の名前を!?」
突如現れた男が自分の名前を知っていたのでフェレットは驚いた。
「そんなことはどうでもいい、さあ、小娘それを渡せ」
男はなのはにジュエルシードを渡すように言う
「・・・・・・いやです」
「なに・・・?」
なのはがジュエルシードを渡すことを拒んだので男はおどろいた。
「一応理由を聞いておこうか、なぜだ?」
「あなたからはいやな感じがするからです。」
「・・・・・・・そうか、では貴様を殺して奪うとしようか!!」
「!?」
男はそういって剣を抜きなのはに襲い掛かってきた。
「よけて!!」
「きゃあ!!」
男はあっという間になのはの杖をはじいてなのはを追い詰める
「フン、馬鹿な小娘だ。なりたての魔導師が俺に勝てるものか、おとなしく渡しておけば命だけは助けてやったものを」
「ううう」
「逃げて!!」
フェレットはそういうがなのはは腰が抜けて立てない。

「死ね！」
男は剣を振りかざしなのは似向かって振り下ろしたが、

ガキィン！

「なっ！？」
「おいおい、こんなガキ相手になにやってんだ。発情期ですかこのヤロー」
銀時が男の前に現れ木刀で剣を受け止めた。
「貴様、さっきジュエルシードの怪物をふき飛ばした男か、邪魔をするな」
「そうは行きません！」
そういって、セイバーがおとこのよこに現れ剣をふり、男はそれを飛んでよけた。
「ちっ！」
しかし男の上には神楽が待ち構えていた。
「待ってたアルゥゥゥゥ！！」
神楽は思いっきりかさを振り下ろし男を地面に叩き付けた。
「ぐわっ！！（なっなんだ、今のパワーは！人間如きにこんな力が！？）」
男は神楽のパワーに驚いていた。
「おいテメェなにもんだ？」
地面に落とされたその男に銀時は尋ねる。
「おっおのれ『引け、ディアル』！？ジュド様！？」
「あん？」
ディアルと呼ばれたその男が急に念話で誰かと話し始めた
『ジュエルシードの回収は『あの人形』の役目だ、余計なことをするな』
「しっしかし『もう一度だけ言うぞ、引け』ハッハイ」
男は急に魔法陣のようなものに包まれその場から消えた。

「おい待て！チッ、消えやがった」
「銀ちゃん！」
「銀時、あの男何者だったんでしょう？」
「俺が知るかよ、ンなことより」
銀時はなのはに振り返り、
「おい大丈夫か？」
「ハッハイ、ありがとうございます。２度も助けてもらって」
「あの、早くジュエルシードを！」
「ああっそうだった！ジュエルシード封印！」
なのははジュエルシードを封印した。
そしてなのはの体がピンク色に光り、元の服の姿となり、杖は赤い宝石の姿に戻りなのはの手のひらの上に乗った。

「ふゥ～」

なのはは無事に事態が解決した事に安堵する。
するとフェレットがそのまま糸が切れるように気絶した。

「フェッ、フェレットさん！！」

なのは気絶したフェレットを抱きかかえる。

「な、なぁー」
なのは「えッ？な、なんですか！？おじさん」
「おじっ！」
銀時はなのはにおじさん扱いされショックを受ける。
「なぁ～俺、加齢臭とかする？お兄さんって呼んでほしいんだけど、まだ２０代だし」
「あっすいません、何ですかお兄さん」

銀時「いや、ここにいるとまずくね？」

銀時が周りを指差すと、さっきの戦いで所々道が壊れていた。

なのは「・・・・・・ご、ごめんなさァーーい！」

なのはは周りを見回して、現状を確認した後、急いでそこから退散した。

銀時達も慌ててなのはの後を追っていった。

そのころ、どこかのビルの屋上で
「ディアルよ、なぜ、余計なことをした?」
先ほどジュドと呼ばれた男が、ディアルという男にそう質問していた。
「申し訳ございません、みすみすユーノ・スクライアにジュエルシードを渡すわけには行かないと思いましたので」
「言い訳はいい、それよりやつらは何者だ?『時空管理局』の魔導師か?」
ジュドと呼ばれた男はディアルにそう聞いた。
「わかりません、ただあの銀髪の男からは魔力とは違う妙な力を感じました。それとオレンジ色の髪の小娘の方は人間とは思えないパ

ワーを持っていました」
「ふむ・・・」
ジュドはしばらく考え込んだ。
「それとあの金髪の女からはSランククラスの魔力を感じました。
あのツインテールの小娘のほうもＡＡＡランク級の魔力を持っていたかと」
「なにっ！？」
ディアルの言葉を聴いてジュドは驚いた
「こんな田舎の世界にそんなやつらがいたとはな」
「以下がいたしましょう、ジュド様」
「まあいい、それよりお前は『あの人形』を見張っていろ、やつらのことはいずれ何とかする。」
「ハッ！」
そういわれてディアルはその場から消えた。
（どこの馬の骨ともしれんやつらにわれらの計画を邪魔されてたまるものか、邪魔者はすべて消し去ってくれるわ！！）
ジュドは心の中でそう呟いた。

いったいジュドたちの計画とはなんなのか？

次回に続く

第三訓　ありえない人物が来ると変な事が起こる（後書き）

支配者「ジュドたちの正体はいずれ明らかになります」
ジュド「次を楽しみに待つんだな」

第四訓　新しい生活の始まりを告げる鐘の声（前書き）

支配者『今回は万屋メンバー全員でまーす。』
ヤミ「ではご覧ください」

第四訓　新しい生活の始まりを告げる鐘の声

あの後、銀時達は公園に来ていた。

銀時「とりあえず現状確認だな」

フェレットが目覚めた後、あらためて自己紹介をした。

「俺は坂田銀時だ。元の世界じゃなんでもやる万事屋ってのをやってんだ」

「私は神楽アル」

「私はセイバーです。よろしくお願いします」

「僕は『ユーノ・スクライア』です」

一通り自己紹介が終わった後、銀時達はユーノから魔法の事を聞いた。

まぁー途中、神楽は脳内処理が追いつかず、寝ちゃったりしていたが。

ユーノから説明を受けた後銀時たちも自分たちの事情を説明した。

その後ユーノは銀時達の話を聞いて、銀時達を次元漂流者だと言った。

説明もちゃんとしてある。

銀時「ははは・・・やってくれやがったあのクソジジィにバカ皇女」

他のメンバーも少々ショックを受けていた。

なのは「あの・・・大丈夫ですか?」

心配になったなのはが銀時に声をかけた。

銀時「お・・おお。大丈夫だ」

銀時（あんのクソジジィ！バカ皇女！帰ったらボコボコにした後、瞬間移動させてやる！）

心の中で銀時はシャナたち同様源外達に復讐を誓った。

「怒ってるアルね」

「まぁー私達もそうですけどね」

二人もこの事態を引き起こした原因の源外達に静かな怒りを感じていた。なのはとユーノはそんな銀時達の様子に戸惑っていた。

「でも、魔法があるなんて凄いアル！」

「何いってんだ、俺たちの世界にもあるじゃねえか」

神楽は魔法がある事に興奮していたが銀時がツッコむようにそういった。

「エッ！？銀さんたちの世界にも魔法文化があるんですか！？」

「まーな、俺はよくしらねエけど」

「銀時、私達の世界にあるのは魔術ですよ」

「似たようなもんだろ」

「はい。私も魔法がある事にビックリしました」

「なのはは魔法の事を知らなかったのか？」

「はい。魔法を使ったのだってさっきのが初めてですし」

「仕方ありません。なにせ彼女は管理外世界の住人ですし」

銀時達（なのはも含めて）

『『管理外世界？』』

ユーノは『時空管理局』の事や魔道師の説明をした。

「なんか胡散臭い組織だな」
「ほんとアル」
「そうですね」

三人はあまり時空管理局について良い印象を抱いていなかった。
その後もユーノはジュエルシードの事や自分の事を話した。
話を聞いて、なのはユーノの頼みを快く了解した。
その後、銀時はさっきの男についてユーノに聞いてみた。
「おい、アイツが何者なのか心当たりはねーのか？お前の名前知ってたじゃねーか」
「分かりません。多分僕達の世界から来たものだと思うんですが・・・」
「そうか・・・・・・」
「あの、それで銀さん達なんですけど・・・家に泊まりませんか？」
「えッ！いいのかなのは？」

銀時達はなのはの申し出に驚いた。

なのは「あの、さっき助けてもらったお礼がしたいので」

なのははさっき銀時に助けてもらった時の事を思い出していた。

一方ユーノはセイバーに不信感を抱いていた。

ユーノ（話を聞く限りじゃ、銀さん達はどうやら変わった魔法文化のある世界から来た様だけど・・・セイバーさんからは、尋常じゃ

ない位の魔力量を感じる・・・）

なのはの魔力量も信じられない位高いのだが、セイバーはそのなのはよりも遥かに高い魔力量を有していたのである。

ユーノ（あの人はいったい・・・？）

ユーノは銀時達と話しているセイバーに警戒心を抱いていた。

その頃、剣心達はフェイトの住んでいるマンションにいた。

「しかし、フェイト殿は良いマンションに住んでいるんでござるな」

剣心は窓の景色を眺めていた。

「もしかしてフェイトの両親て、お金持ちなんですか？」

ヤミがそう聞くとフェイトとアルフは暗い顔をする。

「あの、聞いちゃまずかったですか？」

ヤミが二人が暗くなった事に気づき、謝る。

「大丈夫。確かに父さんはいないけど、母さんはいるから」

フェイトはそう言いながら後の写真縦を見た。

「あれがフェイトの母親なの？」

「うん。私の大事な人なんだ」

フェイトは嬉しそうな、どこか悲しそうな顔をしていた。

しかし、アルフはフェイトが母親の話をした時、かなり顔をしかめていた。

（どうやら、フェイト殿達にも何かあるようでござるな）

剣心はソファーに寄りかかり腕を組ながら、フェイト達には何かあると、感じていた。

「そういばフェイト殿は魔道師・・だったか。それでアルフも魔道師なのでござるか？」

剣心はさっき聞いた魔道師の事を思い出して、アルフに唐突に聞いてみた。

アルフ「違うよ。あたしはフェイトの『使い魔』さ」

胸を張ってアルフが答えた。

「使い魔ですか？」

「使い魔は魔導師が使役する一種の人造生物さ」
「なるほど。アルフは犬の使い魔なの？」

シャナが顎に手をあてながらアルフの出ている耳と尻尾を見る。

「犬じゃない！あたしは狼だ！！」

シャナの言葉にアルフが声を上げた。

「そう。ごめん、犬にしか見えなかったから」
「なんか気に障る言い方だけど・・・いや、分ってくれればいいよ」

アルフは手を振りながら言う。

「ところで、使い魔って、魔道師なら誰に使役できるのでござるか？」
「いや、できるとしてもとても優秀な魔道師だけだよ」

アルフは嬉しそうに答える。

「なるほど・・・っと言う事はフェイト殿は優秀な魔道師と言う事か」
「そ・・そんな事ないよ／／／」

フェイトは剣心に褒められ、顔を赤くする。
フェイトの隣にいるアルフはニコニコ笑いながら尻尾を振ってる。
フェイトが褒められて嬉しいのだろう。

「あ・・・あの。今度は私から聞いてもいい？」

遠慮がちにフェイトが言う。

「なんでござるか？」

「剣心達は何者なの？」

フェイトは剣心達から不思議な力を薄々感じていた。

だから思い切って剣心達は何者か聞いたのだ。

「そうそう。フェイトの魔力弾は斬っちゃうし、あたしの攻撃もかわして反撃しようとしたし。一体何者だい？それと、シャナだっけ？そいつは剣から炎を出したし、ヤミは手を剣に変えていたし、それなのに魔力を全く感じなかったヨ？」

アルフがフェイトに続いて次々に質問する。

「それはそうよ。私達の力は生まれたときから持ってるものだもの、魔力なんか感じるはずない。ね？ヤミ」

「はい」

「「エッ！？生まれたときから！？」」

シャナの言葉を聞いてフェイトたちは驚いた。

「なっなんでそんな力を持っているんだい？」

「ああ、それは・・・・」

シャナは自分とヤミが宇宙人（アマント）と呼ばれるものたちに作られた特殊な力を持った人造生命体であることを説明した。攘夷戦争という戦争のときに兵器として駆り出されアマント達の為に自分達は必死でたかかっていたが大怪我を負ったために主人たちに見捨てられ、道端に放り出されていたのを剣心達に拾われたらしい。

「そうだったのかい。ごめんね辛いこと、聞いちまって」
アルフは頭を掻きながら申し訳なさそうにそう言った。
「別にいい。もう昔のことだし」
「最後に拙者でござるな。拙者は『侍』だ」
『『侍？』』
フェイトとアルフはまた首を傾げた。
「自分のルール武士道を持ってて、そいつを貫くのが侍でござる」
「自分のルール・・・」
フェイトが小さく呟いた。
「そうそう。実はもう一つ力があるのでござる」
「それはなんだい？」
アルフは剣心の独り言に質問する。
「『気』の力でござるよ」
『『気？』』
フェイトたちはまたまた首を傾げた。
「まあ、人間の潜在的な力でござるよ。機会があったらお見せする」
「ふぅ～ん。それよりもフェイト。そろそろ夕食にしない？」
フェイトの方を向きながらアルフが言った。

「あっ、そうだね」
フェイトが立ち上がる。
フェイトとアルフが夕食を用意すると言ったが、剣心が「居候させて貰う身だ。家事くらいは拙者がやるでござるよ」と言って、夕食を作るために台所に向った。
「・・・・」
剣心は冷蔵庫の中身を見て絶句した。
「どうしたの剣心？」
フェイトが固まっている剣心に声を掛けた。
「フェイト殿、冷蔵庫の中身がなんで空なんでござる？」
剣心は静かに聞いた。
「あッ、剣心違うよ。食べ物はこっちの方に入っているんだよ」
フェイトは何食わぬ顔で冷凍庫からインスタント食品と冷凍食品を出して剣心に見せた。
剣心はそんなフェイトを見ていた。
「ハァ・・・・・・」

剣心が溜息をついた。

「剣心？どうしたの？」

フェイトは剣心の様子がおかしいので心配そう声を掛けた。

「フェイト殿。アルフ殿。これは何でござる？」

銀時はテーブルの上を見た。

「何って夕食だけど…」

テーブルに置かれてるのはインスタント料理と冷凍食品ばかりだった。

「まったく、お主達は・・・」

テーブルに置かれた料理を見て剣心は溜息をはいた。

「「えっ！？」」

剣心に溜息を吐かれてフェイトとアルフは驚いた

「育ち盛りがこんなモノばかり食って、ちゃんとした食事を取らないとどーなると思ってるんでござるか」

剣心はあきれた顔で二人にそういった。

「あの…えっと……ごめんなさい…」

剣心にそう言われてフェイトは戸惑いながら謝った。

「ところでアルフ。お前は何を食べてるの？」

シャナはアルフを目を細めながら見る。

「何って・・・」

アルフは手に持ってる箱をシャナに見せる。

「ドッグフードだけど」
「やっぱり、お前犬じゃない・・・」
「だから狼だって！」

アルフは声を上げる。
その後、剣心は３０分掛けて、二人に食事の大切さを教える。

「食事って大切なんだねアルフ・・・」
「そうだねフェイト・・・」

「まあ、今日は夜遅いから材料調達とバイト探しは明日だな。それとこれからは料理は拙者が作るでござるよ」

剣心がこれからの方針を決める。
さすがに金銭面まで子供であるフェイトに頼れないので明日から剣心がバイトをする事になった。
まぁ～理由は剣心が一番稼ぐと言うか、このメンバーでまともにバイトができる者が剣心だけだから。
え？シャナとヤミは？前に二人にバイトをやらせた時、セクハラした客を撃退して店壊して速攻でクビになった事がある。

「なんか悪いねぇ剣心」
「さっきも言ったでござろう、居候する身だって」

剣心は台所に向かった。

「まあ、拙者がこれをうまい料理にして見せるでござるよ」
「剣心、料理なんてできるのかい？」

アルフが剣心にそう聞いた

「何いってんのよ。剣心の料理の腕はプロ級よ。そこいらの店よりよっぽどおいしいわよ。」

シャナがアルフの言葉をさえぎるようにそう答えた。

「そうなのかい？いや～そりゃ楽しみだね」

その後、剣心は自慢の腕を振るって、冷凍食品などを調味料を使って、“これ本当に冷凍食品？”っと思える料理を作った。

『『お、おいしい！』』

二人はいつもよりも剣心の料理が美味しくなっている事に驚いていた。

フェイトとアルフも出された料理をバクバク食べていた。

「そういえば剣心。あの・・・家族は探さなくていいの？」

夕食を食べた後フェイトがソラにさっき聞いた銀時たちを探す事を聞いた。

「おろ？ああ、銀時達か。バイトを探しながら探すつもりでござるよ」

剣心はソファーにより掛かりながら言った。

「そうなんだ・・・」

フェイトは剣心の言葉を聞いて少し悲しそうな顔をしていた。

（剣心達は・・・もし家族が見つかったら・・・ここから出て行くの？）

フェイトはもし剣心の家族が見つかったらここを出て行くと言う、不安に駆られていた。

家族が見つかったら剣心がここから出て行ってもっと広い場所で暮らすと考えているのである。

そのとき、剣心は妙な視線を感じた。

「ん?」

「どうしたの?剣心」

フェイトが心配してそう聞いた。

「いや・・なんでもない。(気のせいか?今誰かの視線を感じたような・・・)」

しかしそれは、剣心の気のせいではなかった。

空中でフェイトたちの部屋の様子を見ていた人物がいた。それは先ほど、なのはを襲った黒フードの男ディアルであった。

(あの連中何者だ?あの妙な格好といい、もしやさっきの連中の仲間か?それにあの赤毛の男一瞬俺の存在に気づいた様子を見せた。優男だが只者ではないな。)

ディアルは剣心達のことを見て警戒した。

(『あの人形』にまで妙な連中がついていたとは・・・とにかくこ

の事をジュド様にご報告しなくてはな）

ディアルはそういってその場から消えた。

第四訓　新しい生活の始まりを告げる鐘の声（後書き）

支配者「はーい、続きが気なる展開ですね～」
新八「ちょっと作者さん！！」
支配者「あん？」
新八「何が全員登場だ！！僕が出てないんですけど！！」
支配者「アア、いたの？ア～そういやお前のこと忘れてたわ」
新八「なんだとテメェーー！！早く僕を出せーー！！」
支配者「次はついでに出すから安心しろ」
新八「ついでかよ！！」

第五訓　新しい生活の始まりを告げる鐘の声２（前書き）

支配者「は～い今回は別のキャラも出ますよ」
剣心「拙者たちは出ないんでござるな」
支配者「まあ次は出しますから」

第五訓　新しい生活の始まりを告げる鐘の声２

剣心達が夕食を食べている頃、銀時達は。

海鳴市の住宅街にある高町家。

なのは視点

私、高町なのははは極々平凡な小学三年生のはずだったんだけど、何の因果か運命か、魔法少女なんてやってます。
私は違う世界からやって来たユーノ君のお手伝いでジュエルシードという物を集める事を決めました。
銀さん達も家族を探す事と一緒にジュエルシード集めを手伝ってくれるといいました。
私は嬉しかったんですが、ユーノ君が渋っていました。
でも神楽ちゃんが近くにあった石を握りつぶして、ユーノ君を説得？させました。
あれはどう見ても脅しだと思うの。
でもあの時銀さんが、「おいおい、いくらなんでもそんなあぶねぇーもんを１０歳を満たない女の子が集めるってどうよ？しょうがね

ぇ、俺も一緒にその樹液ミートだっけ、それを探してやるよ。居候させて貰う礼だ」銀さん、ジュエルシードなの。
それと、他の皆もジェルシード集めを手伝ってくれるって言ってくれました。
嬉しかったなぁ。
それと、家にいった時に新八さんという人がボロボロになって倒れていたの。
どうしてボロボロなのか銀さん達に聞いてみたら、『自業自得』と、声をそろえて言いました。
どういう意味なんだろ？
それに新八さんが私を見た時、教えてもいないのに私の名前「なのはちゃん」を言ってたけど、どうしてなんだろ？
それに顔を赤くしてなんだか落ち着かない様子だったし。
皆はそんな新八さんを軽蔑のこもった目で見てました。
それに嬉しい事にお父さんとお母さんに皆の事を話したらしばらくの間、家に泊めてあげられることになったのです。
もちろん家族には皆が次元漂流者であることや私が魔法を使えるようになったことは秘密にしてます。
それと銀さんは家で住み込みのバイトをする事になりました。
なんでも泊めてもらうだけじゃ悪いとの事です。
ジュエルシード集めを手伝ってもらうだけでも十分なのに。
他の皆ははぐれた剣心さん、シャナさん、ヤミさんの捜索をする事になりました。
それで今、お父さんの高町士郎、お母さんの高町桃子、お兄ちゃんの高町恭也、お姉ちゃんの高町美由希、そして私、高町なのはの五人家族と銀さんたちの3人で夕食を食べています。

なのは視点終了

「おかわりヨロシ？」
「おかわりをください」
茶碗を持ちながら桃子に尋ねたのは赤いチャイナ服を着た神楽と青い服を着たセイバーである。
新八「もうダメだよ神楽ちゃん」
神楽を注意するのは隣に座ってる地味なメガネ男の志村新八。
「そうだぞ神楽、セイバー。俺達は居候の身なんだから少しは遠慮しろ。すんません俺にもおかわりお願いしまっす」
そう言って、三杯目の御代わりをする万事屋のオーナー銀時。
「あんたも人の事言えないでしょ！つうかほんとにやめて！僕ら泊めてもらう身なんだから！」
新八は3人の図々しさに恥ずかしくなってツッコム。
「私の辞書に遠慮なんて字はないネ」
「その通りです」
胸を張って神楽とセイバーは言った。
「胸を張って言うような事じゃなねーだろーが！！」
新八が二人に怒鳴る。
「そうだぞ、二人共食い意地が悪いぞ」

と言いながら銀時は新八のおかずを目にも止まらぬ早さで取る。

「つうか、それ僕のおかずゥー！！あんたも十分食い意地悪いでしょ！！遠慮知らずだし！！」

新八はそう言いながら銀時のおかず強奪を防ごうとした。
しかし銀時の箸捌きが巧みで次々に取られた。

「仕方ねーだろ。俺は剣心のツッコミ分が摂取できなくてイライラしてんだよ。ウルセェだけのてめーのツッコミはもう飽き飽きなんだよ」

銀時は不機嫌そうに新八のおかずを食べる。

「聞いた事ねぇよ！そんな成分！つうかいい加減、僕のおかずを取るのをやめろォー！それと僕のツッコミを馬鹿にすんなァー！！」

新八は銀時に意味のない抵抗を続けた。

「スイマセン、桃子さん」
「うふふ。いいのよ。遠慮しないで、どんどん食べてね。それにこっちも人手が足りない時にちょうど来てくれたのだから、感謝してるわ」

桃子は優しく微笑んで神楽と銀時から茶碗を受け取り、ご飯を盛って二人に渡した。
新八におかずを出した。

神楽「ありがとうアル！」

お礼を言って神楽はご飯を食べる。

「新八君も遠慮しなくていいんだよ」

「どうもすいません」

新八は士郎に頭を下げた。

なのはは、そんな光景を楽しく見ながら食事を続けた。

桃子はそんななのはの様子が分ったのか、なのはを見ながらニコニコしていた。

新八は銀時のおかず強奪が済んだので、なのはの方を見た。

新八が向いた事に気付いたなのはは、新八に笑顔を向けた。

（それにしても。やっぱり本物のなのはちゃんは可愛いな～！）

なんて考えていると。

新八「！！」

新八は自分に向けられた鋭い殺気を感じた。

殺気の出所は父親の士郎と兄の恭也からだ。

最初になのはが銀時達を紹介した時、士郎と恭也が”娘《妹》はやらないぞ！！”と、新八と銀時に怒鳴ってきた。

新八はその時マジでビビッていたが銀時は特に気にしていなかった。

まぁ～銀時にしてみれば、歳がかなり離れている自分に言った言葉ではなく新八に言った言葉だと思ったのもあるが。

一方なのはは、特に何も感じない新八の方を向く事にした。

新八（やべッ！！なのはちゃん僕の方を見た！もしかして僕に気があるのかも！）

新八は1人勘違いをして、頬を少し赤くしながらニヤついていた。
そんな新八をまた士郎と恭也が殺気を篭った視線で見た。

夕食を終えて、なのはと銀時達はユーノと今後の事について話し合った。

「銀さん達には申し訳ありませんが、僕の力では銀さん達を元の世界へ帰すことはできません」

フェレット姿のユーノが申し訳なさそうに新八と神楽と銀時に謝った。

「そんなユーノ君が気にすることじゃないよ」

新八がユーノを励ます。

「そうだな。それにまだ剣心達も見つかってないしな」

銀時が腕組しながら言う。

「そうアル。元はと言えば新八が悪いアル」

神楽と銀時が新八を睨む。

「ううう・・・」

確かに新八がＤＶＤを持っていなければ、このような事にはなっていなかった。

「それで今後の方針だが、俺が店の手伝いで、ぱっつぁんと神楽とセイバーが剣心達探しで、後は全員でなのはとユーノの手伝いってところだな」

銀時は頬杖をつきながら各自の役割をあらためて確認する。

「はい。なのはちゃん、僕達もジュエルシード集めには協力するから遠慮なく言ってね」

新八がなのはを見ながら言う。

「私にどーんと任せるアル！」
「お任せください」
神楽が胸を張って言う。

「でも・・・ジュエルシードはとっても危険な物なんですよ？やっぱり無関係の貴方達を巻き込むわけには・・・」
「それを言ったら無関係の、なのはちゃんを巻き込んだ時点でダメでしょう、銀さんたちの話だとなのはちゃんは妙な男に襲われたって言うし」
「う・・・」

なおも渋ろうとするユーノが新八に痛い所を突かれて顔を俯いてしまう。
ユーノもここまで固くなに銀時達の協力を拒もうとするのも、実はセイバーは魔道師で、ジュエルシードを狙っていて、さっきの出来

事は芝居で銀時達もひょっとしてあのなのはを襲った黒フードの男の仲間ではないかと疑っているからである。

「あの・・・本当にいいんですか？」

なのはが三人に聞いた。

なのはもさっきは手伝ってくれると言ってもらえて嬉しかったがやはり銀時達に手伝って貰うのは申し訳ないと言う気持もあった。

「もちろんだよ、なのはちゃん」

「私達となのはは、もう友達ネ。友達助けるのに理由なんていらないアル」

「そうですよ、子供が無理しちゃいけません」

3人は笑顔で力強くなのはに言った。

「まッ、あんまガキが無理しないで、少しは大人を頼れってことだ」

「ありがとう。新八さん、神楽ちゃん。セイバーさん、そして銀さん」

なのはは笑顔で4人に礼を言った。

話は終わって新八と神楽と銀時は、なのはの部屋を出た。

「そういえば新八。お前このアニメのＤＶＤ持ってるアルな？」
「え？うん。家にあるよ」
「だったら、すぐにジュエルシードの場所が分るんじゃないんですか？」

ここは『魔法少女リリカルなのは』の世界。
なら、そのアニメのＤＶＤを持ってる新八ならジュエルシードのある位置がわかるのではないかと、神楽と銀時とセイバーは思った。
ちなみに、なのは達にはアニメ魔法少女リリカルなのはの話はしていない。

「ごめん神楽ちゃん、セイバーさん。僕まだＤＶＤ観てないんだ」

ははは、と頭を掻きながら新八は笑った。

セイバー・神楽・銀時
『『おめぇーはよォ！！』』

銀時と神楽とセイバーはそう言いながら新八を殴った。

「ゴハァッ！！」

新八はそのまま吹っ飛び床に落ちた。

銀時「ここに来たのは、てめぇーのせいなのに全然使えねぇーじゃねぇーか！！」

銀時は腕を組みながら怒って言う。

「まったくね、ほんと使えない眼鏡ネ！」

「どこまで役に立たないダメガネなんですか?」
神楽とセイバーも腕を組みながらムスッっとしながらそっぽ向いた。

新八「なにするんですかァ!!」

新八は鼻を抑えながら殴った3人を殴り返そうとしたが、返り討ちにあうのは目に見えているので我慢した。
銀時達は士郎の用意してくれた部屋に寝る事にした。
部屋割りは、新八と銀時が同じ部屋、神楽とセイバーが別の新八と銀時の部屋より大きい部屋で住む事になった。

銀時「・・・剣心の奴・・・今頃は何やってんだか・・・」

夜空に綺麗に輝く星空を眺めながら、銀時は小さく呟いた。

そのころ江戸、源外の工場では、

「ちょっと！源外さん！ララちゃん！まだ直らないの！？」
「そうせかすなよ、薫譲ちゃん、全部ぶっ壊れちまったから、治すのに相当時間がかかるんだよ」
「ア～ン、難しいよ～」

源外とララが薫という少女にそういった。この少女はかの「るろうに剣心」のヒロイン神谷　薫その人である。あの事故の後、とりあえずナギが一通り知り合いに連絡したのだ。そして、その話を聞いた薫が源外の工場に飛び込んできたのである。

「大体譲ちゃん、直ったって向こうにいけるかどうかは「グダグダ言ってないでさっさと直す！！」・・・はい」

源外は薫にそう言うが薫の怒りは収まらない。

「アア～剣心大丈夫かしら、今頃大変な目にあってなきゃいいけど」

薫がそう言うと

「おい薫、剣心以外のやつの心配もしてやれよ」

「そうだぜ薫、剣心達なら心配いらねえよ。滅茶苦茶強いんだからよ」

「そうよ薫、まあ今回もどうせ銀さん達のせいでこうなっちゃたんでしょうけど・・・」

ナギと一応薫の弟子である明神　弥彦、柳生家の次女、つまり九兵衛の妹、柳生ヒナギクがツッコムようにそういったが

「うるさい！あんた達は黙ってなさい！！」

「「「うっ・・・」」」

薫は物凄い怒りの形相で3人をにらみつけながらそういった。その迫力に押され3人は黙っているしかなかった。

「あの～薫さん・・・お嬢様にあんまりそういうことを言うのは「アン？」いえ・・・・・・なんでもありません」

ハヤテも薫の迫力に押されてしまうのだった。

「剣心・・・無事に帰ってきて、後ついでに他のみんなも」

薫はそう呟いた。

（ついでかよ・・・・）

他のみんなは心の中でそう呟いた。

第五訓　新しい生活の始まりを告げる鐘の声２（後書き）

支配者「いや～薫は怖いですね。では次回」

第六訓　謎の人物はしばらくは謎のままだ（前書き）

支配者「調子良いですね。もっと頑張ろ～っと！」

剣心「しかし、このままで新八殿の扱いは大丈夫なのか？」

銀時「さすがに俺もあつかいが哀れに見えてきた」

支配者「いいジャンあんなやつ、どうでも」

銀時「大丈夫かよ？まったく」

剣心『新八殿がかわいそうでござるな』

支配者『では第六話です』

第六訓　謎の人物はしばらくは謎のままだ

翌朝。
遠見市にある高級マンション。
フェイト達が住んでいる高級マンションだ。

アルフ〔ねえ、フェイト。やっぱり剣心達は連れていかないのかい？〕

フェイトとアルフは起きて朝食を用意している、剣心達を待ちながら念話で話しているのである。

フェイト〔うん。無関係の剣心達巻き込むわけにはいかないからね〕

そう言ってフェイトは視線をキッチンに向けた。
剣心はテーブルの上に朝食用のお皿を並べていた

アルフ〔そうだけど・・剣心達ってかなり強い見たいだよ？人手は一人でも多い方がいいし、フェイトの負担だって減るし・・・・・〕
フェイト〔ダメなものはダメだよアルフ〕
アルフ〔う、うん・・・〕

フェイトに念話で怒られ、アルフは諦めて席に着いた。
剣心は朝食にできたのでテーブルに料理をならべる。
食材はまだ買ってないので朝食もインスタント料理なのである。

フェイト「ありがとう剣心」

フェイトは朝食を作って、運んでくれた剣心に笑顔でお礼を言う。

もう全員起きて、席に着いている。

剣心「二人で出掛けるでござるか？」

朝食を食べてる最中にフェイトが話を切り出した。

フェイト「うん」

剣心「何をしに行くんでござる？」

食べながら剣心はフェイトに尋ねた。

フェイト「ちょっと探し物があって・・・」

剣心「それって、昨日言っていた、ジュエルシードとか言う物でござるか？」

実は、剣心達は例の「時空管理局」の話だけではなく、ジュエルシードなどの「ロストロギア」の話も聞いていたのである。

聞いた後、剣心はお茶を飲んだ。

フェイト「・・・うん」

フェイトは俯いて返事をした。

剣心「とりあえず、そのジュエルシードとやらについて教えてくれぬか？」

その後、剣心達はフェイトとアルフからジェルシードのあらかたの説明を聞いた。

剣心「なるほど。お主達はそのような危険な物を拙者達に黙って、探しに行こうとしていたござるか？」

フェイト「う、うん・・・」

アルフ「剣心。ジュエルシードは危険な物なんだよ！フェイトはあんた達を巻き込みたくなかったから・・・！」

アルフが必死に説明する。

危険な物と聞いて剣心はフェイトを見た。

剣心（危険なものでござるか・・・ジェルシードとやらがどのような物かよくわからぬが・・・子供のくせに無理をしてはならんよ）

剣心はため息を付いた。

「そんな危険な物なら探さない方が良くないか？」

腕を組みながら剣心が言う。

フェイト「・・・それはできないよ。私の母さんが・・・ジュエルシードを欲しがってるから・・・」

フェイトは拳を固く握る。

剣心はまた溜息をついた。

剣心（やれやれ・・・どのような理由があるのか知らぬが、自分の子供にそのような危険なものを探させ、自分はどこかで高みの見物

とは・・・）

剣心はまたしても溜息をついた。

剣心「仕方がない」

フェイト・アルフ
『『！』』

フェイトとアルフは視線を剣心に向けた。

剣心「拙者も手伝おう。そのジュエルシード集めを」
フェイト「えっ！」
シャナ「ちょっ、ちょっと剣心！」

フェイトとシャナは驚いて立ち上がった。

フェイト「で・・でも剣心！ジュエルシードは・・・」

フェイトは剣心の提案に動揺する。

剣心「危険な物だと言うのでござろう？だからお主たちだけじゃ危ないから、拙者も手伝うって言っているんだ」

剣心は目を瞑る。

ヤミ「でも剣心、銀時達を探さなくては・・・」
剣心「そちらのほうはお主達に任せるでござるよ」
フェイト「だけど・・・」
剣心「拙者の心配ならいらんでござるよ」

剣心は軽く頷いた。

フェイト「で、でも・・・」

それでもフェイトは断ろうする。

アルフ「もういいじゃないかいフェイト」

アルフがため息を付いた。

フェイト「アルフ」

アルフ「本人が手伝うって言ってるんだから。それに剣心は強いと思うからきっと心強いよ」

フェイト「・・・・・」

アルフに言われてフェイトは黙ってしまう。

剣心はフェイトの言葉を静かに待ってる。

フェイト「・・・剣心」

剣心を見つめてフェイトが口を開いた。

剣心「ん?」

剣心が静かに聞いた。

剣心もフェイトを見つめる。

フェイト「一人で無茶はしないって約束して」

真剣な顔でフェイトは言った。
フェイトの言葉を聞いて剣心は微笑んだ。
そしてシャナとヤミに殴られた。

ゴンッ！

フェイト「イタッ！」
アルフ「ちょっ、フェイトに何するんだい！」
シャナ「私達より子供の癖になに偉そうなこと言ってんのよ」
ヤミ「そうです。生意気極まりません」
剣心「そうでござるよ。それに今のはこちらのセリフでござる」

剣心は微笑みながらそう言う。

フェイト「え？」
剣心「頑固者のお主の方が拙者よりもよっぽど無茶しそうでござる」

あきれたような笑みを浮かべて剣心は言った。
剣心の言葉にフェイトは顔を少し赤くする。

ソラ「まあ、約束は守るでござるよ」
フェイト「う・・・うん。なら、これからよろしく剣心」

フェイトは少し照れながらそう言った。

剣心「ああ」
シャナ「ちょっと剣心。私達の事を忘れないでよ？」

シャナが少し不機嫌そうに言う。

ヤミ「そうです。剣心が手伝うなら、私達も手伝います」

剣心「おろ、そうでござるか。しかし・・・」

シャナたちの言葉に剣心は少し戸惑った。

シャナ「何よ、また自分ひとりで全部やろうとするつもり？」

ヤミ「そうです。私達にも頼ってください」

二人はそう剣心に行った。

剣心「そうでござるかでは頼むでござるよ」

二人は剣心の言葉と笑顔で少し顔を赤くする。

シャナ「うん」

ヤミ「任せてください」

フェイト「ありがとう。シャナ、ヤミ」

フェイトは嬉しそうに二人にお礼を言った。

その頃、銀時達は今、サッカーグラウンドに来ていた。

士郎が監督を務めている翠屋ＪＦＣのサッカーの試合を見ている。
なのはの友達のアリサとすずかもなのはと一緒に試合を見ている。
ちなみにアリサとすずかは銀時達と挨拶を済ましている。
まぁ、その時に銀時がアリサと神楽とこの場にいないがナギやシャナとも声が似ている事に気づいたけど。

で、話を戻すと、なぜ銀時とセイバーがいるかと言うと、今日は休みを貰ってたまたま見に来ていた。

銀時はめんどくさがっていたが、なのはの“銀さんも一緒にいかないの？（涙目＋上目ずかい）”で渋々来ていたのである。

新八はそんななのはを見て、顔を真っ赤にして、銀時達に軽蔑の眼差しで見られていた。

試合を見ていた途中で試合を見ていて興奮したのか神楽が「私も試合に出たいアル！！」っと、とんでもない事を士郎に言ってきた。

士郎もやはり最初は渋っていたが、神楽が頑として聞かない事と、相手チームがＯＫを出したので後半に出る事になった。

相手チームは試合に入って来た神楽を見て、“相手に女がいれば勝つのは楽勝だ！”っと、考えていた。

そう言う考えもあって、神楽が試合に出るのをＯＫしたのである。

しかし、試合が始まってすぐに相手チームはこの考えを後悔する事になる。

神楽にすぐボールが渡った。

相手チームが神楽からボールを奪おうと向って来たが、

神楽「うおりゃァアアアア！！」

ドッゴォオオオオン！！

神楽がその場でボールを蹴った。
神楽の凄まじすぎる怪力で蹴られたボールはそのままままるでミサイルの如く飛んで行き、相手選手を巻き込んでそのままゴールに入った。

相手と味方チーム
『『・・・・・』』

相手チームと味方チームはその光景を見て絶句した。
試合はそのまま続いた。
神楽は信じられないような怪力を使って、ボールがくればそのままゴールに入れると言う、チートプレイを行っていた。
アリサとすずかとなのはは、神楽のチートプレイを見て驚いていた。

アリサ「な、なのは。あの子何なの？」

アリサは目の前の光景をいまだに信じられないでいた。

なのは「ごめんアリサちゃん。私も正直信じられないの・・・」

なのはも神楽のチートプレイに驚いていた。

すずか「あッ、神楽ちゃんの蹴ったボールがキーパさんを吹き飛ばしながらゴールに入った」

すずかも目をまるくしながら“つうかこれ、いじめじゃね？”的な、試合を目を丸くしながら見ていた。
それに唯一驚いていないのは銀時とセイバーである。

試合結果は、２０－０と、翠屋ＪＦＣのコールド勝ちになった。
ついでに相手チームの選手のほとんどがボロボロの状態になっていた。
甲子園の決勝で負けて流す涙以上の涙を流した。
その後、神楽は士郎から試合のお礼で料理を御馳走され喜んでいた。

その後、その試合を見ていた一部の男子が神楽のファンクラブを作ったとか、作らなかったとか。

その夜、現在なのは達はビルの屋上に立っていた。
ちょうど暴走したジュエルシードを封印したところである。
なのはとユーノ後ろには銀時、神楽、新八、セイバーが立っている。
なのはは、今とても後悔していた。
なぜならジュエルシードの気配に気づいていたのにそれ勘違いだと思ってしまったからである。

今町はジェルシードの暴走ので発生した被害で酷い有り様になっている。

なのは「ごめんユーノくん私・・・ジェルシードの気配に気づいていたのに、それを勘違いだと思ってた」

なのはは、今にも泣きそうだった。

ユーノ「なのは・・・」

ユーノはどうなのはに言葉を掛けて良いか分らないでいた。

銀時「よぉ～なのは」

銀時はいつものダルそうな声でなのはに声を掛けた。

なのは「・・・銀さん」

なのはは、泣きそうな顔で俯いていた。
こんな失敗をして、銀時の顔をまともに見れないでいた。

銀時「別におまえが気に病む必要はねぇ。だからそうやって自分を責めるんじゃねぇーよ」
なのは「銀さん・・・でも、これは全部私のせいで・・・」

なのはは、まだ俯いて辛そうにしていた。
場の空気がさらに重くなった感じがした。

銀時「はぁー」

銀時は溜息をつきながら頭を掻いた。
なのははは、こんな事になったのは自分のせいだと言う考えが頭の中を巡っていた。
新八たちもなのはにどう声を掛けたら良いか分らないでいた。
長い沈黙が続いた。

銀時「いい加減にしろやァアアアアア！！」

突然、銀時が豹変して怒声を上げた。
鬼の形相になった銀時は、なのはの頭に拳骨を食らわせた。

なのは「ッ！！！」

なのははは、両手で頭を押さえて痛みに悶えた。

ユーノ「ちょッ！？銀さん、何やってるんですか！！」

ユーノは、なのはないも悪くないのに銀時が怒ったことに声を荒げた。

新八「ごら天パ！あんたいったい何やってんだ！！」

新八もなのはが殴られた事に腹を立てた。

銀時「フェレットもどきとダメガネは黙ってろ！！」

銀時の凄みのある声にユーノは押し黙ったが、新八はまだ何か言いたそうで銀時の所に行こうとした。
それをセイバーが新八の肩を掴んで止めた。
神楽とヤミはそれを黙って見ていた。

新八「なんで止めるんですか！！あの人は、なのはちゃんがあんなにも頑張ったのに、それを褒めもしないで怒ったあげく殴ったんですよ！！」

新八は納得がいかないく、怒ってセイバーに抗議した。

セイバー「あなたはどうやら頭に血が上りすぎて、何も分ってないようですな銀時が怒ったのは、なのはの失敗の事じゃありません」

新八「えッ！」

新八は二人の言葉を聞き、黙って銀時となのはを見る事にした。

銀時「なのは、俺が怒ってんのは別にお前が失敗したからじゃねぇ」

銀時は首を横に振りながら言う。

なのは「ふぇッ！」

なのはは、涙目になって、頭を抑えながら銀時の顔を見る。

銀時「そうやってお前がいつまでも後ろばっか向いているからだ」

なのは「ッ！」

なのはは、何か気づいた様な顔をした。

銀時は坦々と語り続ける。

銀時「確かに過去にあった事は消せやしねぇー。だからと言って、過去の過ちを振り返るなとも言わねぇー」

銀時は空を見ながら何かを思い返す様に言う。
その顔がどこか寂しさを漂わせていた。
再び銀時はなのはに顔を向ける。

銀時「だからそう言うもんを全部背負って前に進むんだ。なのは、おまえはどうしたい？」

なのはは、銀時の問いを受けて顔を俯かせる。
そして再び顔を上げる。

なのは「私、ただ誰かに傷ついてほしくなくて、ユーノ君のお手伝いでジュエルシード集めをしようって決めました。けど、今は違います！こんな失敗を起こさないためにも、皆を守るためにも、自分の意思でジュエルシード集めを続けます！」

なのはの顔には強い意思が篭っていた。

銀時「そうか」

銀時は薄く笑った。
そして、なのはの頭を撫でた。

銀時「けどな、なのは。お前はまだガキなんだからよ、もっと周りを頼れ。甘えていいんだよ。お前にはユーノだけじゃねぇー、新八や神楽やセイバーや家族や友達がいるじゃねぇーか」

微笑みながら銀時はなのはに言った。

銀時「ついでに俺もな。お前が立ち止まった時には、いつでも俺達がお前の背中を押してやるからよ」

そう言って銀時はなのはの頭から手を離した。

なのは「銀さん・・・」

なのはは銀時に顔を向けた。

新八「そうだよなのはちゃん！」

神楽「友達なら、助け合うのは当然ネ」

セイバー「自分は一人じゃないことを忘れないでください」

新八たちも次々になのはに励ましの言葉を掛ける。

銀時「もう一人で悩むんじゃねーぞ。いいな？」

なのは「うん！」

なのは嬉しそうに頷く。

なのは「銀さん、皆。本当にありがとう」

なのははその時、目を奪われそうなほど良い笑顔でお礼を言った。

新八「ぐはァッ！！」

新八はなのはの満面の笑顔を見て、胸に衝撃（？）を受け、胸を抑えながら片膝を地面についた。

ユーノもなのはの笑顔を見て顔を赤くしていた。

まぁ～フェレットだから誰にもそんな変化なんて分らないけど。

なのはは、顔を赤くしながら銀時への気持を新たな悩みとして考えていた。
銀時の顔を見ながら。
一方、銀時、神楽、セイバーは顔を真っ赤にして膝を付いて、息を“ハァ、ハァ”させている新八に呆れていた。

新八（やべ！今の笑顔はまじでやばかった！危うく呼吸困難になる所だった！）

新八もなのはへの恋心（？）を日に日に強くしていた。

一方、銀時達の様子を別のビルから見いてる2つの影があった。

???「やつらか、ジュド様やディアルが行っていた連中は」

黒いレインコートのような物を着て、フードを深く被った男達がジェルシードを手に入れた銀時達の被害を見ていた。

???「ケケケッ、ディアルのいっていたとおり只者じゃねーみてぇだなぁ」

もう一人の男もチャラけた用にそう答えた。

???「魔力もないのにあれほどの実力とは・・・おそらく気の使い手か何かか・・・・・・」

???「それに引き換えあのガキや金髪女はかなりの魔力だ。見た目もきれいだし・・・うまそうだなぁ～」

一人の男は何かを考える仕草でそういい、もう一人のほうはニタニタと笑いよだれをたらしながらそういった。

???「なぁ、ヘゾル、あれ食っちゃダメか？」
ヘゾル「ゲドラ、お前は馬鹿か、そんな勝手なことをすればジュド様のお怒りを買うぞ」

ヘゾルと呼ばれた男はゲドラという男にそういった。

ゲドラ「誰が馬鹿だテメェー！！」

ゲドラが怒ってヘゾルに飛び掛ろうとするが・・・

???「やめろ、ゲドラ」
ヘ・ゲ「ジュド様！！」

突然ジュドが二人の前に現れ喧嘩を止めた。

ジュド「二人とも身内の争いなどという無駄なことはやめろ、無意味なことだ」
ゲドラ「だっ、だけどよぉ、ジュド様ァ・・こいつが・・・」
ジュド「まだ文句があるのか？」
ゲドラ「いっ、いえ・・・」
ヘゾル「ジュド様、それで、やつらの処分はいかがいたしますか？」

ヘゾルがジュドにたずねた。

ジュド「お前達とディアルに任せる。隙にしてもかまわん、しかしあまり目立ちすぎるな、今はまだ『時空管理局』に気づかれては困る。」
ヘゾル「承知いたしました」
ゲドラ「ヒャッホォ～ウ」

ヘゾルは頷き、ゲドラは喜んだ。

ジュド「しかし、ディアルの報告ではやつらにはまだ仲間がいるようだ。しかもそいつらはあの人形のところいるらしい」
ゲドラ「イイーッ、マジッすか！」

ゲドラは驚いた。

ヘゾル「ジュド様、そちらのほうは」
ジュド「そちらのほうはまだ手を出すな、いずれおって伝える」

ヘ・ゲ「ハッ！」

二人は消え、そしてジュドも闇の中へと消えた。

第六訓　謎の人物はしばらくは謎のままだ（後書き）

剣心「やつらの正体気になるでござるな」

銀時「おい、作者あいつら何なんだよ」

支配者「いずれ、分りますよ。まあ楽しみに待っててください、アア、それと小説のストーリーのヒントとか思いついた人はアドバイスかなんかをください」

第七訓　知らない相手の事でも意外に早く分る時もある（前書き）

支配者「今回はついにジュドたちの正体が明らかに！」

セイバー「では第7話ご覧ください」

第七訓　知らない相手の事でも意外に早く分る時もある

午前１１時。

剣心はスーパーで買い物を済ませ、フェイト達の待っているマンションに帰っていた。ちなみに左頬の十字傷は目立つといけないのでシップを張って隠していた。

ちなみにフェイトとアルフはジェルシードの捜索をしていた。

シャナとヤミも二人とは別の場所で探していた。

剣心は買い物しながらバイト探しと、朝決まったのである。

しかし、なかなか良いバイトが見つからなかった。

剣心は帰っている途中でコンビニを見た。

剣心の目が一冊の本に止まった。

剣心「おろ？まさかこの世界にあったとは、『ジャンプ』が」

剣心はジャンプを買いたかったが、買わなかった。

剣心も銀時と同じくジャンプ読者ではあるのだが、フェイト達に借りたお金だったので買うのを断念した。

剣心がバイト探しにさらに力を入れる理由ができた。別のコンビニで銀時は働いたお金でジャンプを買っていた。

昼食の時間になったのでアルフとフェイトとシャナとヤミはジュエルシードを探しからマンションに帰ってきていた。

フェイトが剣心の帰りを待っていた。

フェイト「剣心、遅いな～剣心の料理早く食べたい」

フェイトはソファーに座って待っていた。

アルフ「フェイト・・・なんか嬉しそうだね」

アルフはそんなフェイトの姿を見て苦笑していた。

ヤミ「仕方ありません。冷凍食品であれなんですから。食材を使った料理が楽しみのはずありません」

ヤミは真顔でそういった。

剣心「ただいま帰ったでござるぞ」

そんな時買い物袋持った剣心が帰って来た。

フェイト「剣心！」

フェイトは剣心が帰って来たのが分ると、かなりの速さで玄関に走って行った。

アルフ「あ、あれ？フェイトがいつの間にか消えてるよ！？」

アルフはフェイトがいきなりいなくなり目をはしらせる。

シャナ「すごいスピードね」

ヤミ「はい」

シャナとやみもフェイトのスピードに少し驚いた。

剣心「フェイト殿、今帰ったでござる」

剣心も帰って来て早々、いきなりフェイトが出て来たことに少し驚いていた。

フェイト「お帰り、剣心」

フェイトは笑顔で剣心を出迎えた。

剣心は昼食にオムライスを作った。

フェイト達は剣心の作ったオムライスを食べて、それぞれ感嘆の声を上げた。

フェイト「とってもおいしいよ剣心！」

いつもはあまり食事を多く食べないフェイトも勢い良く食べていた。

アルフとシャナは無言で食べる事に集中していた。

ヤミ「相変わらず、剣心の料理はおいしいですね」

剣心「そうでござるか」

剣心も嬉しそうに答えた。
その後、アルフは御代わりし、シャナは2杯以上食べた。
フェイト（剣心の料理を食べたら、この後のジェルシード集めをもっと頑張れる）
フェイトは午後のジュエルシード集めに元気に出て行った。

一方、新八と神楽はなのは達と一緒に、なのはの友達の月村すずかの家に遊びに来ていた。
銀時は翠屋のバイトでいない。
今回はセイバーも手伝っている。

セイバーにメイド服姿にした時、桃子の目が輝いていた。
ちなみにセイバーが来たことで今日は翠屋の客の数がかなり増えていた。
銀時は執事服を着ていた。

銀時達は桃子がなんでメイド服を持っていたのか疑問に思ったが。

神楽「キャッホォオオウ！大きな屋敷アル！」

屋敷を見るなり神楽のテンションは高くなる。

新八「神楽ちゃんハシャギ過ぎだよ」

庭でハシャグ神楽を新八が注意する。
ちなみに新八はいつもの着物ではなく黒いワイシャツに青いズボンを着ている。
木刀は袋に入れて手に持っている。

なのは「新八さーん。神楽ちゃーん」

なのはが二人を呼ぶ。

新八「ほら、なのはちゃんが呼んでるよ」
神楽「わかったアル」

二人はなのは達の方へ向かった。

なのは達は庭で紅茶を飲みながら会話をしていた。

フェレットのユーノは月村邸の子猫に追い掛けられていた。
というより襲われていた。
キューキュー鳴きながら子猫から逃げるユーノ。
神楽は笑いながらその様子を見てた。
それにしても、と新八は思うのだった。

新八（女の子ばっかりでなんだか落ち着かないなぁ）

新八の周りには、神楽、なのは、アリサ、すずか、と女の子ばかりがいる。
一応なのはの兄の恭也も来ているが、すずかの姉の月村忍さん（つまり恋人）の部屋に行ってしまったので、この場にいる男は新八一人だけである。
あ、あとユーノ。動物だと思われているが

新八（でもユーノ君はフェレットだからなぁ・・・それに今、猫に襲われてるし・・・）

新八は子猫に襲われてるユーノを見た。
全速力で子猫の追跡を振り切り、なのはの肩に避難する。

新八（フェレットも大変だなぁ）

新八はユーノに同情の視線を送った。
その時、なのはは一瞬驚いたような顔をした。

なのは（ユーノ君！）

なのはは念話でユーノに話し掛けた。

ユーノ（うん。近くにジュエルシードがあるね）

ユーノは、なのはの肩から降りて森の中に走っていった。
アリサ達を巻き込まないためだ。

なのは「ごめんねアリサちゃん、すずかちゃん。ユーノ君どこかに行っちゃったみたいだから探してくるね」

そう言って、なのはは席を立つ。

アリサ「ユーノが？私たちも探すわよ？」
なのは「ううん、大丈夫。すぐ見つかると思うから」

手を振りながらなのはが言う。
なのは達の様子に新八と神楽は気付いた。もしかして二人がジュエルシードの反応を捉らえたと思ったのである。

新八「じゃあ僕達が一緒に探すよ」
神楽「フェレットハントアル」

新八と神楽が席を立つ。

なのは「神楽ちゃん！ハントしちゃダメだよ！」

初めて、なのはは神楽にツッコんだ。

なのは、ユーノ、新八、神楽は森の中でジュエルシードを探していた。
なのははバリアジャケットを着て、手にはデバイスのレイジングハートを持ってる。

新八「なのはちゃん。ここら辺にあるのかい？」
なのは「そのハズなんだけど・・・」

すると大きな足音のような音が聞こえた。

新八「な・・何だこの音!?」

新八達は辺りを見回す。

神楽「アレ！」

神楽が何かを見つけて指差した。

新八・神楽・ユーノ・なのは
『『!!』』

神楽が指差したモノを見て皆驚いた。

「にゃ～～」

皆の目の前に大きな大きな猫がいた

新八「デカッ！！」

新八はメガネに手をかけた。

なのは「えっと・・・・・これは・・・・」

ユーノ「多分あの子の『大きくなりたい』って願いが叶えられた・・・・んだと思う」

大きな猫を見ながら、なのはとユーノは苦笑いした。

新八「いやデカ過ぎでしょ！！どんだけいい加減な願いの叶え方してんですか！？」

大きな猫を見上げながら新八がツッコんだ。

神楽「定春よりも大きいアル～！」

神楽は大きな猫を見て興奮してる。

ユーノ「でも、あのままじゃ危険だから早く封印しないと」

ユーノは『広域結界』という辺りの空間と時間軸をずらす魔法を使った。

なのは「そ・・・そうだね。流石にあのままじゃ、すずかちゃん困っちゃうだろうし・・・」

そう言ってなのははレイジングハートを構えた。

新八「っと言うか、ガメラかなんかとして捕獲されちゃでしょ！！」

直後、背後から金色の光が通過して猫に直撃した。

巨大猫「にゃ～～！」

猫は悲鳴を上げてよろけた。

なのは「だ、誰！？」

員が光が発射された方へ振り返った。

そこには金髪のツインテールで黒い服を着た少女、フェイトが空中にたたずんでいた。

一方剣心は、ちょうどバイト先を見つけていた。

剣心「ちょっとお尋ねするでござる。バイトの募集を見て来た者なんですけ・・・ど・・・」

剣心はバイト先で働いている店員をみて絶句した。

銀時・セイバー

『『あッ』』

剣心がバイトに選んだ場所は喫茶翠屋である。

（私と同じ魔導師…）
白いバリアジャケットを着た女の子を見ながらフェイトは思った。
（でも…母さんのためにも…ジュエルシードは譲れない）
フェイトは、なのは達の方へ飛んでいった。

「あれは…まさか僕と同じ世界から来た魔導師!?」
フェイトを見てユーノが驚く。
「ってことは狙いはジュエルシード!?ひょっとしてあの男の仲間!?」
新八は袋から木刀を取り出した。
フェイトは木の上に着地した。
なのは達は木の上に立ってるフェイトを見つめた。

フェイトの持つバルディッシュが鎌のような形になる。
「申し訳ないけど、頂いていきます」
フェイトはバルデイッシュを構えて、なのはに襲い掛かる。
「なのは！」
ユーノが叫ぶ。
バルディッシュの刃がなのはに迫る。
だがバルディッシュの刃が、なのはに届くことはなかった。なのはに当たる直前、刃は一本の傘によって止められた。
「！！」
攻撃を止められた事にフェイトは驚いた。
「神楽ちゃん！」
なのはは自分を助けてくれた少女の名を言った。
「えっ！？」
なのはの言葉にフェイトは目を見開いた。
（神楽…？今この子、神楽って言った？）
フェイトは動揺しながら自分の攻撃を止めた神楽を見た。
「私の友達に何するアルかァアア！！」
叫びながら神楽はバルディッシュを弾いた。
「く…！」
フェイトは後方へ飛んだ。
「ぬァアアア！！」
神楽はフェイトを追って傘を横薙ぎに振る。
フェイトは上に飛んで傘をかわし、神楽の傘は後ろの木に当たった。
木はミシミシと軋み、大きな音を立てて倒れた。
「なっ！？」
倒れた木を見てフェイトは驚いた。
（魔法も使わずに、傘一本であの大木を倒した！？）
神楽の人間離れした怪力にフェイトは冷汗を流した。
「す…凄い」
近くで様子を見ているユーノも神楽の力に驚いていた。

「彼女は一体何者なんですか？」
「実は神楽ちゃんは、宇宙最強の戦闘民族『夜兎族』の一人なんだ」
「宇宙最強！？」
新八の言葉に、なのはは驚きの声を上げた。
フェイトは空中に浮いたまま神楽達を見下ろす。
（接近戦は厳しい…数も向こうの方が有利…）
神楽達を見つめながら状況を分析していると。
「フェイトー！」
他のジュエルシードの探索をしていたアルフがやってきた。
今のアルフは人間の姿ではなく狼の姿になっている。
「アルフ！」
「大丈夫かいフェイト！？」
「うん」
二人は地上にいる神楽達を見た。
「他の魔導師かい？」
「うん。それに……」
フェイトは少し躊躇ってから言った。
「剣心の家族も一緒にいる」
「剣心の！？本当かい！？」
「うん」
フェイトは頷く。
「よし！あたしが連中の相手をするから、その隙にフェイトはジュエルシードを回収して！」
「でもアルフ…」
「大丈夫。あたしはフェイトの使い魔だよ？心配いらないよ」
アルフはフェイトを安心させるように言った。
「それに銀時の家族は傷つけないように足止めするよ」
「…うん。お願いね」
アルフの言葉を聞いてフェイトは微笑んで、巨大猫の方へ向かった。
「マズイ！ジュエルシードを封印するつもりだ！止めないと！！」

ユーノが叫んだ。
「そうはさせないよ！！」
空からアルフが迫る。
「ユーノ君！」
なのはが走る。
「大丈夫だよ、なのは！」
ユーノは防御の障壁を張ってアルフの攻撃を防いだ。
「ちっ！」
アルフは一旦、ユーノから離れる。
「なのは！ジュエルシードを！」
「う…うん！」
ユーノに言われて、なのはが走り出す。
「させないって言ったろ！」
アルフは背後から、なのはに襲い掛かる。
「なのは！！」
ユーノが叫んで、なのは目を閉じる。
その時。
「うぉおおお！！」
新八が叫びながら、なのはとアルフの間に入って木刀で攻撃を防いだ。
「新八さん！！」
なのはが叫んだ。
「新八！？」
なのはの言葉にアルフは驚いた。
（このメガネが剣心の家族！？）
アルフがそう考えた時。
「ほぁちゃぁあああ！！」
神楽が横から傘を振ってきた。
「くっ！」
アルフは障壁を作って攻撃を防ぐ。だが神楽の怪力に押されて障壁

ごとアルフは吹き飛ばされた。
「うわぁあ！！」
木にぶつかってアルフは悲鳴を上げた。
「なのはちゃん！大丈夫！？」
新八は後ろにいる、なのはに振り返った。
「は…はい！ありがとうございます！」
なのはは新八にお礼を言った。
神楽「新八！たまには役に立つアルな！！そしてキモイアル」

神楽はキメ顔作りながらなのはに話しかける、新八に少し嫌気がさしていた。

新八「たまには、は余計だよ神楽ちゃん！そしてキモイとはなんだァー！！」
神楽に文句を言った後、新八はアルフを見た。
立ち上がったアルフは新八達を見つめた。
（あの神楽って子、なんて馬鹿力だい！？これじゃ手加減してたらこっちがやられちゃうよ！）
神楽の強さにアルフは戸惑う。
（けど剣心の家族を傷つけるわけには……！）
アルフが迷った時。
「アルフ！」
フェイトが戻ってきた。
「フェイト！」
「ジュエルシードは回収したよ。引き上げよう」
そう言ってフェイトはアルフを連れて去って行った。
ユーノ「しまった！ジュエルシードが！！」
ユーノが慌てて走り出す。
なのは達もユーノの後を追う。
巨大猫がいた場所に着いた。そこには、さっきまで大きかった猫が

元のサイズに戻って眠っていた。
ユーノ「やられた…仕方がない引き上げ「ちょっと待ちなァ」！？」
ユーノ達は突然聞いたことのない声を聞いた。
？？？「おまえらだよなぁ、例の妙な連中は？」
新八「だ、誰だお前！」

新八は突然木の陰から現れた男にそう聞いた。

ゲドラ「オレサマカァ？俺様は大顎のゲドラってもんだ。この間はディアルが世話になったそうだなぁ？」
ユーノ「ディアル！？まさかこの間の黒フードの男か！お前はそいつの仲間なのか！？」
ユーノがゲドラに訪ねる。
ゲドラ「まァ、そう言うこった。悪いがテメェらなんぞにジュエルシード集めなんざさせるわけにはイカねエんだ。・・・つーわけで、ここで俺に食われちまいなァ！！」
ゲドラはそういって突然ワニのような姿の怪人になった。
新八「なっ！！何だ、アイツ！？」
ユーノ「人間じゃない・・・・」
ユーノ達は突然姿の変わったゲドラに対して驚いていた。
ゲドラ「人間だぁ？俺たち魔人族をテメェら下等生物と一緒にしてんじゃネェよ。」
ユーノ達『魔人族！？』
みんなはゲドラの言葉を聴いて驚いた。
ユーノ「なっなんなんだ！その魔人族って言うのは！？」
ユーノはゲドラに質問した。
ゲドラ「まぁ、簡単にいやぁテメェらなんぞよりよっぽど優れた存在ってわけだ。」
なのは「優れた存在・・・」
ゲドラ「ツマンネェ話は終わりだ。さぁ・・・俺に食われちまいな

ァ！！」

ゲドラはそういって大口を開けてなのはに襲い掛かった。

なのは「キャアアア！！」

だがゲドラの歯が、なのはに届くことはなかった。なのはに当たる直前、歯は一本の傘によって止められた。

「！！」

攻撃を止められた事にゲドラは驚いた。

なのは「神楽ちゃん！」

なのはは自分を助けてくれた少女の名を言った。

ゲドラ（コイツカァ？人間離れした怪力女ってのは）

ゲドラはそう呟いた。

神楽「私の友達に何するアルかァアアア！！」

叫びながら神楽はゲドラを蹴り飛ばした。

ゲドラ「グオッ！」

ゲドラは後方へ飛んだ。

神楽「オリャァアアア！！」

神楽はゲドラを追って傘を縦に振りおろす。

ガシッ！

しかしゲドラは神楽の傘を簡単に受け止めた。

神楽「なっ！？」

自分の傘を止めたゲドラに神楽は驚いた。

新八「神楽ちゃんの傘を止めた！？」

新八もゲドラが神楽の怪力を受け止めたことに驚いた。

ゲドラ「くくくっ、たいしたパワーじゃねえカ、だが俺の力は魔人族の中でもトップクラスなんでなァ、そう簡単にはいかねぇんだよォオオオオ！！」

そういって、ゲドラは神楽を吹き飛ばした。

神楽「のわァアアアア！！」

新八・なのは「神楽ちゃん！！」

新八となのはが吹き飛ばされた神楽に駆け寄る。

なのは「神楽ちゃん、大丈夫？」

なのは達が神楽に近づく

ゲドラ「ククククッ」

ゲドラも神楽に止めをさそうと近づくが、新八となのはがゲドラの前に立ちはだかった。

ゲドラ「アン？」

新八・なのは「神楽ちゃんをこれ以上傷つけるな！」
二人はゲドラに向かってそう叫ぶが、ゲドラは大笑いし始めた。
ゲドラ「ハァ？、ギャハハハハハハハハ！！笑わせんな、テメェらごときが俺に勝てると思ってんのか！？」
新八「勝てなくったって関係あるか！！」
なのは「そうだよ、神楽ちゃんは友達なんだもん！私だって神楽ちゃんをまもる！！」
新八となのははゲドラにそう怒鳴りつける。

ゲドラ「あっそ、じゃあ・・・みんな仲良く食ってやるよ！！」

ゲドラがそういって襲い掛かったが突然誰かに吹き飛ばされた。

ゲドラ「グワッ！！」
銀時「おいおい、うちのガキどもに何してくれてんだ？このワニヤローは、発情期ですか？このヤロー」
新・神・な『銀ちゃん（さん）！！』

ゲドラを吹き飛ばしたのは桃子に言われてなのは達のおやつをもってきた銀時であった。

その頃、ジュエルシードを封印したフェイトとアルフはマンションへ向かっていた。アルフは人間の姿に戻ってる。

（あの神楽と新八って子…やっぱり剣心が探してる家族なのかな…）

フェイトは少し寂しげな表情を浮かべた。

（…やっぱり剣心にはちゃんと教えなきゃ…）

マンションの近くの公園。時刻は夕方で遊んでる子供はいない。
誰もいない公園のベンチに剣心は座っていた。
剣心「で？拙者に話とは？」
横に座ってるフェイトを見た。
フェイト「…今日、ジュエルシードを見つけた所で、剣心の家族に会ったんだ」
剣心「えっ！？」
フェイトの言葉に剣心は驚いた。
フェイト「赤い服を着た女の子で傘を持ってた。それと木刀を持ったメガネをかけた男の子もいた」
剣心「新八殿と神楽殿だな」
剣心は二人の名前を言った。
フェイト「やっぱり剣心の家族なんだ」
剣心「ああ。って、まさか新八殿たちもジュエルシード集めしてるでござるか！？」
フェイト「そうみたい。一緒に魔導師もいたから」
剣心「やれやれ、それでは銀時達も一緒ということだな…」

剣心は夕焼けの空を見上げた。
フェイト「剣心」
「ん？」
剣心はフェイトの方を見る。
「いいんだよ。家族の所に行って」
「……」
「ちょっとの間だったけど…剣心達といれて楽しかったよ」
「……」
「ありがとう」
フェイトは笑顔で剣心にお礼を言った。
だが剣心にはその笑顔が寂しげに見えた。
「行こうアルフ」
フェイトが席を立つ。
「フェ…フェイト…」
アルフは戸惑いながらフェイトの後を歩く。
「待つでござるよ」
剣心が二人を呼び止めた。
「二人とも勝手に決めてもらっては困るよ」
「え？」
フェイトが振り返る。
「途中でやめるくらいなら、最初から手伝うなどとは言わぬよ」
そう言って剣心もベンチから立ち上がる。
フェイト「剣心…」
剣心「最後まで手伝うでござるよ。料理も作るとも約束したし」
剣心は材料の入った袋を持つ。
「でも家族が…」
「かまわぬよ、実はさっき銀時に会って事情を話してきたでござる」

そう言いながら剣心は歩き出す。

剣心「では、家に帰って飯にするでござる」
そう言って剣心はフェイトの頭をポンッと叩いた。
フェイトは右手で自分の頭を撫でた。そして前を歩く剣心の後ろ姿を見つめた。
フェイト（……ありがとう。剣心）
剣心の背中を見つめながらフェイトは微笑んだ。

しかし、家に向かって歩いてる途中で剣心はフェイトを呼びとめた。

剣心「フェイト殿、すまぬが、先に帰っていてくれぬか」
フェイト「エッ、どうしたの剣心」
剣心「いいからさきに帰っているでござる」
剣心はきゅうに力の入った声でそういった。
フェイト「ウ・・ウン分ったよ。行こう、アルフ」
アルフ「あっ、フェイト」

そういってフェイトとアルフは先に帰って行った。

剣心「さて・・・こそこそしてないでいい加減出てきたらどうだ？」
？？？「ほう・・気づいていたか・・・やはりディアルのいっていたとおり只者ではないようだな」

剣心はそういうと一人の黒フードの男が出てきた。その男はジュドであった。

ジュド「いつから気づいていたのかな？」
剣心「拙者がスーパーから帰る途中からでござるよ」
ジュドの質問に剣心はそう答えた。

ジュド「ほう・・・それはそれはたいしたものだ・・・」
剣心「今度はこちらから聞こう、お主は何者だ？」

今度は剣心がジュドに質問する

ジュド「やれやれ・・それはこちらのセリフなのだがね、まあいいだろう、わたしは魔人族の『炎帝』のジュドという者だ。」

ジュドはそう答えた。

第七訓　知らない相手の事でも意外に早く分る時もある（後書き）

支配者「ハーイ、第7話いかがでしたか?ジュドたちはなんと人間ではなかったんですね～」

銀時「おいおい、かなりやべぇ連中みてぇだな、仮面ライダーの怪人みてぇじゃねえか?」

支配者「まあ、そんなところです。さて次回はどうなってしまうのか?お楽しみに!、何かご要望みたいなものがあれば受け付けます。後、「教えて!銀八先生」をやるかどうかはまだ未定です。」

第八訓　戦闘は実力差があると意外と短い（前書き）

支配者「今回は短いです、ではご覧ください」

第八訓　戦闘は実力差があると意外と短い

ゲ「なっなんだ、テメェは！」

突然現れて自分を木刀で吹き飛ばしたことにイラついたゲドラは銀時に向かってこう怒鳴った。

銀「おいおい、そりゃこっちのセリフだぜワニヤロー、テメェこそなんだ？ドンキーコングのクレムリン軍ですか？このヤロー」

銀時は頭を掻きながらそう答える。

ゲ「テメェ！この銀髪がふざけやがって！！」

ゲドラは怒り任せに襲い掛かってきたが銀時はあっさりとゲドラの攻撃をかわし、ゲドラを木刀で殴り飛ばした。

ゲ「グハッ！」

銀「パワーはあるみてぇだがその分スピードがねえんだよ。てめェは」

銀時はめんどくさそうにゲドラにこう言い放った。

ゲ「クソがぁ！今すぐぶっ殺して「それくらいにしておけ、ゲドラ」！？ヘゾル！？」

ゲドラはますます怒りをむき出しにして、銀時に襲いかかろうとするが、突然ゲドラの後ろに黒フードの男が現れてゲドラを止めた。

ヘゾルである。

銀「アン？何だテメェは？」
新「銀さん！そいつらはなのはちゃん襲った男の仲間なんです！！」
銀「なにっ！」

起き上がった新八の言葉を聴いて銀時は驚いた。

銀「テメェらなにもん何だ！」
ヘ「われわれは魔人族だ」
銀「魔人族？何だそりゃ？」

銀時は首を傾げる。
ヘ「貴様ら人間などよりもはるかに優れた上位の生命体だ」
銀「ハッ、つまりは化けもんの集まりってわけか」
ヘ「ふん、好きに捉えるがいい、われわれはここで退散させてもらう。」
ゲ「待てテメェ！何勝手なこと言ってやがる！！俺は今すぐあの野郎をぶっ殺して」
ヘ「いい加減にしろ、一人で先走って返り討ちにされたものがなにを偉そうな事を言っている」
ゲ「ンだと、テメェ！！」
ヘ「とにかく行くぞ」
ゲ「おい、テメェ！くそっ、覚えてろテメェら！この次は皆殺しにしてやるからなァ！！」

ヘゾルとゲドラはもめながらその場から消えた。

銀「くそっ、また消えやがった、まあ、今はそれよりも」

銀時は新八たちに振り返った。

銀「おい、お前ら大丈夫か？」
な「はっはい」
新「大丈夫じゃないですよ、も～」
神「ボロボロアルヨ～」

なのはは普通にうなずき、新八と神楽は文句を言った。

銀「ったく（それにしても何なんだ、あいつらはよぉ、なに企んでやがんだ）」

銀時達がゲドラ達を撃退したころ、剣心はなぞの男ジュドと話していた。

剣「魔人族？」
ジ「ああ、私はその魔人族の現在の長をつとめている」
ジュドは剣心の質問にそう答えた。
剣「その魔人族の長とやらが拙者に何の用でござるか？」
ジ「何、なぜ君はあの娘と一緒にいるのかと思ってね」
剣「フェイト殿のことを知っているのか？」
ジ「ああ、私は彼女の母親の知人でね。彼女にたのまれて秘密裏にあの娘のまわりを監視していたというよりも身の安全を守っていた」
剣「フェイト殿の母親に？」
ジ「そのとおり、そこに急に未確認の君達が現れたので何の目的で彼女に近づいたのかと思ってね。それで君達のことを調べるために後をつけていたのだよ」
剣「なるほど、それで拙者をどうするつもりだ？」
剣心はジュドを睨みながらそうたずねる。
ジ「別にどうもせんよ、君達が彼女の邪魔をせん限りはね」
剣「邪魔などする気はない、拙者たちはフェイト殿のジュエルシード集めを手伝っているだけだ」
ジ「そうかね。それはこちらとしてもありがたい、では私はこれで」
剣「待て」
ジ「ん？」
立ち去ろうとするジュドを剣心が呼び止めた。
剣「お前の目的は何だ？」

ジ「だから言っただろう、彼女の母親に頼まれ「嘘はやめろ」！？」

剣心にそう言われて、ジュドは少しは驚いた様子を見せた。

剣「貴様がそんな目的で動くような男には見えん、フェイト殿たちを利用して何を企んでいる？」

ジ「クックック、思っていた以上に洞察力があるようだな、ああそのとおり我々の目的はジュエルシードをあの子娘に手に入れさせる事だ」

ジュドは少し笑いながら剣心の言葉にそう答えた。

剣「フェイト殿たちにジュエルシードを手に入れさせて何をする気だ」

ジ「そこまでは教えられん、では今度こそ私はこれで」

そういって、ジュドはその場から消えた

剣「待て！クッ（あの男、いったい何が目的だ？）」

剣心はジュドの事を考えながらもその場で考え続けてもしょうがないと思い買い物袋を持ってフェイト達のいるマンションへと戻っていった。

第八訓　戦闘は実力差があると意外と短い（後書き）

支配者「少しシリアスな感じにしてみました。では次回をお楽しみに」

第九訓　主人公が二人いるからって同じものが好きとは限らない（前書き）

ヤミ「『リリカル剣魂スペシャル』第九話、始まります」

支配者「ではご覧ください、今回はあとがきに新八のためのお楽しみがあります」

新八「マジで!?やったー!!」

第九訓　主人公が二人いるからって同じものが好きとは限らない

なのはたちがゲドラという男に襲われた翌日の翠屋
現在の時刻は午後１２時。
銀時達は昼休みを取って、昼食を食べていた。
昼食で出た白いご飯の上に銀時はあるモノを乗せた。
セイバーも同じ行動をする。

高町家
『『えッ！？』』

高町家の皆は四人がご飯に乗せている物を見て同時に驚きの声を出した。

な「銀さん・・・それは何・・・？」

なのはが恐る恐る銀時に聞いた。ちなみ今日は休日でなのはも家にいる。

銀「これか？」

銀時は箸でソレを示した。

銀「小豆テンコ盛り『宇治銀時丼』だ」

誇らしげな顔で銀時は答えた。白いご飯の上に小豆を乗せた料理。
それが『宇治銀時丼』。
しかもそれを食べているのが銀時だけではない。セイバーも食べているのである。

美・恭「うっ・・・」

宇治銀時丼を見た美由紀と恭也は、顔を歪めて嫌悪感を露にした。

士「新八君、彼らはいつもこれを食べているのかい？」

士郎は目の前の宇治銀時丼を見ながら新八に聞いた。

新「ええ・・まぁ・・・」

新八は抑揚のない声で答えた。

銀時が宇治銀時丼を食べている光景は何度も目にするが、新八は未だに慣れていない。

銀「食うか？」

銀時はなのはに宇治銀時丼を差し出した。

新「ちょッ！やめてください銀さん！」

新八は慌ててなのはに宇治銀時丼を進める銀時を止めた。

な「あの・・・じゃあ・・・・・一口だけ・・・・」

恭「なのは！？」

恭也はなのはの言葉に驚いた。

美「よしなよなのは！絶対マズイって！！」

銀「おい。俺の宇治銀時丼をバカにすんな」

銀時は美由紀を睨む。なのははゆっくりと宇治銀時丼に箸を伸ばし、
少し摘んで口の中に入れた。
もぐもぐ、と口の中で噛んで飲み込んだ。

そのころ、シャナとヤミも宇治銀時丼を造って食べていた

剣「やれやれ、二人ともまたそれでござるか・・・」
フ「シャナ・ヤミ・・・それは何・・・？」

で、銀時達と同じ様な会話になっている。

シャナ・ヤミ
『『小豆テンコ盛り宇治銀時丼（よ／です）』』

二人が同時に言った。ちなみに剣心は甘党ではないので、こうゆう物は食べていない。というより食べる気になれなかった。

ア「うっ・・・」

宇治銀時丼を見たアルフは、高町家の人々同様顔を歪めて嫌悪感を露にした。

シ「食べる？」

シャナはフェイトに宇治銀時丼を差し出した。

フ「・・・じゃあ・・・一口だけ・・・・」
ア「フェイト!?」

フェイトの言葉にアルフは驚いた。

剣「ちょっ!フェイト殿よすでござる!!」
ア「そうだよフェイト!絶対マズイって!!」
シ「そんなことないわよ、結構いけるわよ」
ヤ「そうです。結構おいしいですよ」

二人はそう言いながら、モグモグ食べる。フェイトはゆっくりと宇治銀時丼に箸を伸ばし、少し摘んで口の中に入れた。もぐもぐ、と口の中で噛んで飲み込んだ。
ちょうどなのはが宇治銀時丼を食べた時と同じ時間である。

なのは・フェイト
『『おいしい』』

二人が意外なシンクロをした時であった。

高町家

なのは「おいしい」

新八・神楽・士郎・桃子・美由紀・恭也
『『えッ!?』』

なのはの感想に六人は顔を引きつらせた。

銀「おっ。マジで？」

銀時は少し身を乗り出す。

な「うん！凄くおいしいよ銀さん！」

なのはは目を輝かせている。

銀「おおっ！またこの味がわかる奴に出会えたぜ！（剣心の奴は食ってくれねえけどな）」

なのはという新たな同志が見つかって銀時は大喜びすると同時に宇治銀時丼を食べてくれない剣心に対してこう考えた。

新八・神楽・士郎・桃子・美由紀・恭也

『『嘘・・・？』』

六人は頭抱えた。

セイバー

「分る人には分かります」

セイバーは坦々と宇治銀時丼を食べていた。

フェイト側

フ「おいしい」

目を見開いてフェイトは感想を言った。

ア「えっ！？」

フェイトの感想にアルフは顔を引きつらせた。

シ「そうでしょ」

シャナは薄く笑みを浮かべた。

フェイト「うん！凄く美味しいよ！」

フェイトは目を輝かせている。

ア「嘘だろ・・・？」

剣「ハァ～・・・」

アルフと剣心は頭を抱えた。

二つの食卓で同じような事が行われていた、一時だった。

現在夜の十一時。

ソラとアルフはソファーに座っていた。

シャナとヤミは今二人でお風呂に入っている。

最初フェイトが「剣心も一緒にお風呂に入ろう！」などと、とんでもない事を言ってきた。シャナとヤミはその言葉を聴いて少し顔を赤くした。

剣心は「男が年頃の女子と一緒に入るわけには行かぬよ」と言って、なんとか断った。

そして、今にいたる。

剣心は前に座ってるアルフをジーッと見つめた。

剣（同じ獣の耳が付いていても全然違うものでござるな）

剣心は元の世界で万事屋の下の階に住んでる、全然萌えない猫耳年増女を思い出していた。

ア「ん？何だい剣心？」

剣心の視線に気付いてテレビ見ていたアルフが聞いてきた。

剣「いや、拙者の知り合いにも頭に獣の耳が付いてる者がいるんだが、その者は顔は濃いし、性格は悪いんでござる」

アルフ「そいつも使い魔なのかい？」

剣心「いや『あまんと天人』だ」

アルフ「あまんと天人？」

アルフは首を傾げた。

剣「要は宇宙人でござる」

アルフ「へぇ～」

剣「それで、そのものに比べたらお主の方がきれいと思ってな」

ア「えっ！？」

剣心の言葉にアルフは顔を赤くする。

ア「ちょっ・・！何言ってるんだい剣心／／／！？急にそんなこと言われたら恥ずかしいじゃなか／／／／！！」

アルフは両手で頬を押さえながら尻尾を左右に振る。

会話の後、剣心は昨日の夕方にあったジュドの事を考えていた。そのことについて剣心はアルフに聞いてみた。

剣「アルフどの」
ア「なんだい？」
剣「おぬしは魔人族というものを知っているか？」
ア「魔人族？なんだいそりゃ？」

アルフは首を傾げる

剣「では、ジュドという男に心当たりは？」
ア「いや・・・そんな奴知らないけど・・・・・」
剣「そうか・・・」
ア「剣心、いったい何の話をしてるんだい？」

剣心の質問を不思議に思ったアルフは剣心にそう聞いた。

剣「いや、何でもないこちらの事でござる」
ア「そうかい、ならいいんだけど・・」

そして、剣心は一人考え込む

剣（やはりアルフ殿はあの男の事を知らなかったか、やはりあの男がフェイト殿たちを陰から守っているなどという話はうそとしか思えぬ、ジュエルシードを使っていったい何を企んでいるのか・・・）
フ「剣心？どうかしたの？」

フェイトが剣心の様子に心配したのかそう聞いてきた。

剣「ん？いやなんでもないでござるよ」
フ「ホントに？」
剣「本当でござるよ」

心配するフェイトに剣心は笑顔でそう答える。

そのとき、シャナとヤミは風呂から上がってきた。

剣「二人とも上がった様でござるな。では、拙者は風呂に入ってくるでござるよ」
フ「ウン」
剣（あの男に油断はできぬ、警戒だけはしておかなくてはな）

そういって剣心は風呂場に向かった。

第九訓　主人公が二人いるからって同じものが好きとは限らない（後書き）

銀時「次回はいよいよ銀さん達と剣心達が温泉に行きま～す」

支配者「では後書き【新八の幸福の一時（改）】をどうぞ」

銀時「無視すんなァアアア！！」

新八は布団で寝ていた。
すると、新八の布団になのはが入ってきた。

新八（き、キタァアアアアアアア！！）
新八はテンションＭＡＸになった。

なのは「新八さんすみません。寒いので一緒に寝てくれませんか？」

新八（こ、この上ない喜びだァアアアアアア！！）
新八はテンション上がりすぎて余計な事は聞こえないようだ。

新八（や、やべェエエエエ！！せめて優しく抱きしめて寝るくらいなら）
そう思って新八は後ろを向きなのはを抱きしめようとすると、

「何してんだい、お前」
なのはがお登勢に変わっていた。
新八は抱きしめようしたせいでお登勢と新八の顔がかなり近くなってしまった。

新八「ぎゃァアアアアアアアアアアアアア！！！？（吐血）」
新八は後ろに吹き飛び吐血した。

支配者「はい。終了です。面白かったですか？」

シャナ「最高に酷いオチね」

剣心「新八殿が不憫すぎないか？」

支配者「いえ、そうでもないですよ。だって途中まではなのはだったし」

神楽「じゃーなんで変わったアルカ？」

支配者「それは新八がなのはを抱きしめようとしたからです。そのせいで、余計な行動と認識されて、お仕置きシステムの【なのはが転送されて一瞬でお登勢に】が発動したんです。それに・・・」

セイバー「それに？」

支配者「新八がひどい目にあわないと面白くないんですよ」

全員「うわぁ・・・・・」

支配者「ではまた次回♪」

新八「ちくしょぉオオオオオオ！！クソ作者ァアアアア！！覚えテロォオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！（血涙）」

第十訓　運命の出会いは何時起こるか分らない（前書き）

支配者「今回は剣心がフラグを立てます」

シャナ「なんか気に入らないけど、まあいいわ『リリカル剣魂スペシャル』第十話始まるわよ」

第十訓　運命の出会いは何時起こるか分らない

ジュエルシードを探す剣心達は次のジュエルシード発見場所に来ていた。

剣心「温泉旅館でござるか？」

剣心とフェイトとアルフとシャナとヤミは『海鳴温泉』と書かれた旅館の前に立っている。

ア「あたしが見つけたジュエルシードの反応場所がこの辺りなのさ」

そう言ってアルフは剣心といきなり腕を組んだ。

それをみたフェイトとシャナとヤミはアルフのその行動に黒いオーラを出した。

剣「何をしているんでござるか？」

ア「ねぇ剣心。こうしてるとあたし達、恋人同士に見えるのかな？」

剣「いやそれはないと思うが・・・・」

剣心はそういうがアルフは離れようとせずそのまま二人は腕を組みながら旅館の中に入っていった。

シャナとヤミとフェイトは従業員を見つけると、

シャナ・ヤミ・フェイト

『『あっ、フロントの人ですか？すみませーん。このバカ犬つまみ出してもらえませんか？』』

三人は息ぴったりに黒い笑顔でそう言った。

ア「三人ともちょっと怖いんだけど・・・（涙）」

アルフは剣心の腕にさらにしがみ付きながら震えていた。

剣「ハァ・・・・」

剣心は溜息をついた後、苦笑しながらアルフの頭を撫でた。
ちなみにフェイトは行く前に、

フ「探査は私達がやっとくから剣心達はゆくっり温泉で休んで来て」

とフェイトに言われたが、

剣「何を言っている。拙者達よりもお主たちの方が疲れているだろう。だからお主達も温泉で休んだほうがいい。別に旅館からでも捜索はできるござろう。別にお主一人が無理をする必要はない」

と剣心に言われ一緒に旅館に来ていた。

偶然なのか、銀時達も高町家と月村家と一緒に海鳴温泉に来ていた。
女湯では、なのは達が温泉に入っていた。

神「プーフッ。いい湯アル～」

温泉に入って神楽もご機嫌である。

セ「全くですね、温泉の名所というだけはありますね」」

なのはの隣でセイバーが気持よさそうに言う。

なのは「本当～いい湯だね～」

神楽の隣で、なのはが気持ちよさそうに一緒に温泉に入ってる。
その、なのはの腕の中には、

ユーノ「キューキュー！」

オス男のフェレットであるユーノが鳴きながら暴れていた。顔も赤い。

アリサ「ユーノったら、初めての温泉でそんなにはしゃいじゃって♪」
すずか「可愛いね」

一緒に入っているアリサとすずかがユーノに触れる。

ユーノ〔新八さん！銀さん！助けて～！！〕

ユーノは念話で隣の男湯に入ってる新八と銀時に助けを求めた。だ

が、魔導師でない新八と銀時に念話が届くことはなかった。

ユーノはアリサの拘束が緩んだ内に逃げようと考えていたが
新しく入ってきた美由紀にも捕まってしまいまた新八と銀時に念話
を送るはめになった。

隣の男湯。
新八と恭也と銀時は静かに湯に浸かっていた。
新「いい湯ですね～」
銀・恭「「そうだな～」」
三人とも頭にタオルを乗せて湯に浸かって、温泉を満喫していた。
この間にも隣の女湯にいるユーノは、ずっと新八と銀時に向かって
届くはずのない助けの念話を送っていた。

剣心は部屋でジャンプを読んでいた。
フェイトはジェルシードを探すための探査魔法に集中していた。

剣（しかし、頑張るでござるな。探査魔法だったか？それをしてから
らかれこれ二時間くらい経つでござるな）

剣心は集中しているフェイトを見ながらそう思っていた。

フ「ふ～。剣心、大体絞り込めたよ」

フェイトはちょっと疲れた様子で言う。

剣「そうでござるか。では拙者も温泉に入りに行くか」

剣心はそう言いながら温泉に行こうとする。

フ「うん。夜には封印の作業をしに行こうと思うから」
剣「けど、拙者にもジェルシード探索ができないものかなぁ。そうすればフェイト殿の負担を減らせるのでござるが・・・」
剣心はフェイトを心配してそう言う。
フェイト「剣心・・・そんなに気にすることないよ。手伝ってくれてるだけでも私すごく嬉しいし」
フェイトも剣心に心配そうな顔で言う。
剣「はぁ～。拙者としてはお主の負担を減らしたいんだが。考えても仕方ない。とりあず温泉で疲れを癒すとするかな」
剣心は苦笑しながらフェイトの方を向いて言う。
フ「うん」
フェイトは笑顔で答える。剣心とフェイトは部屋を出た。
温泉を目指して通路を歩いていると通路の途中でアルフが、先に温泉から上がった、なのはとアリサ、すすがと絡んでいた。
剣「ん?アルフ殿は何をしているのだ?」
剣心は片眉を上げてゆっくり歩き出した。
剣心はなのはとの面識がないため、いまアルフが絡んでいる少女の一人がなのはだとは気づいていない。
だからアルフが念話で、なのはに警告していることにも気付かない。

フ「！！」

フェイトはなのはの顔を見て驚きの表情を浮かべた。

フ（なんであの白い魔道師の子がここに！？）

そう思って、フェイトは剣心の服の袖を引っ張った。

剣「ん？如何したのでござるか？」

剣心は足を止めてフェイトを見る。

フ「あの肩にフェレットを乗せた、栗色髪の子が前に言った白い魔道師」

フェイトはなのはを視線を向けながら言う。

剣「ほう、あの子が・・・」

剣心は顎に手を当てながら言う。剣心はそのままアルフの所に行く。

フ「あッ！？剣心！？」

フェイトも慌てて剣心の後を追う。

剣「アルフ殿なにをしているのでござる？」

剣心がアルフに声をかけた。剣心の声を聞いてアルフは慌てて振り返った。

アルフ「けっ、剣心!?」

なのは達の視線が剣心に集まった。

な「・・・剣・・心・・・?」

なのははアルフが言った男の名前を聞いて銀時達が言っていた事を思い出した。

な（銀さん達が探してる剣心さんって・・・もしかしてこの人?けどもう会ったって聞いてるし・・・）

なのはは剣心をじっと見つめた。

剣「お主は何をやっている?こんな子供相手に、まるで酔っ払いの絡みみたいになっているでござるぞ」

ア「い・・いやだよぅ剣心!あたし酔っ払ってなんかないよ~!」

動揺しながらアルフは剣心に答えた。

剣「まったく・・・・」

剣心は頭を掻きながら、なのは達に視線を向けた。

剣「すまなかったなお主達。この者は拙者の連れの者でな。後で注意しておくくから許してくれぬか?」

なのは「は・・はい・・」

アリサ「今度から気を付けてくださいね（拙者?昔の侍みたいな話かたね、変な人、時代劇マニアかしら?それに左の傷がなんか怖い

し・・・）」

アリサは心の中で剣心にたいしてこう思った。

す「・・・・・・」

すずかは剣心の顔をじ～っと見ていた。

ア「ん？どうしたのすずか？」

アリサはすずかが何も言わない事を疑問に思い、すずかに声を掛けた。

す「ひゃわぁッ！？べっ、別になんでも無いよアリサちゃん！」

すずかは顔を赤くしながら両手を振って言う。

ア「なら、いいんだけど・・・」

剣「それでは行くぞ、アルフ殿、フェイト殿」

剣心はアルフと自分の後ろに隠れながらなのは達を見ていたフェイトに声を掛ける。

な「あッ！！」

ユ（あの子は！！）

なのはとユーノはフェイトを見て、驚愕の表情になる。しかし剣心達はそのまま気にせず、温泉に行こうとする。フェイトはその時、剣心の服にずっとしがみ付いてた。

な「あ・・あの！」

なのはが声を上げた。

剣「ん？」

なのはの声に剣心は足を止めて振り返った。

な「私、高町なのは。なのはって言います！よかったら・・その・・貴方達の名前を教えてください！」

なのはは剣心とフェイトを真っ直ぐに見つめた。

剣「拙者は緋村剣心というものだが？」

フ「・・・フェイト・・・フェイト・テスタロッサ・・・」

そう言って剣心達は温泉に向って行った。

な「緋村・・・剣心さんに・・・フェイト・・・ちゃん」

なのはは剣心達の後ろ姿を見つめながら呟いた。

すずか「綺麗な瞳・・・」

すずかは剣心の背中を見つめながら呟いた。

剣「全く、何のつもりでござるか？」

剣心はさっきのアルフがなのはに送った念話の話を聞いて、頭を抑えながら言った。

アルフ「ごめんよ～。だって、強く脅しておけばもう邪魔しに来ないと思って・・・」

アルフは両手を合せながら申し訳なさそうに言う。

剣「別に敵対しているのだから仕方がないが、あれではただの挑発でござるよ」

フ「それよりも温泉に入ろう剣心」

フェイトは剣心の顔を見ながら言う。

アルフ「そ、そうだね。温泉に入って疲れを癒そうよ！」

アルフも慌ててフェイトに同調する。

剣「そうでござるな」

剣心が男湯に向かおうとしたが、アルフとフェイトに腕を掴まれて止められた。

剣「何でござる？」

剣心は振り返って、二人を見た。

フェイト「あ・・あのね剣心・・／／／／」

フェイトとアルフは顔を赤くして少し落ち着かない様子をしている。

アルフ「一緒に入らないかい・・・／／／／？」

剣「は？」

剣心は片眉を上げた。

剣「それはだめだと言ったでござろう」

剣心は断ろうとしたが、

フ「剣心、私と一緒に入るの嫌なの？（涙目＋上目ずかい）」

剣「そんな目で見られても困るでござる。だからまえにもいったとおり男女で風呂にはいるわけには・・・・」

剣心は汗を大量に掻きながら手を前に出して言う。

フ「だめ？（強化、涙目＋上目ずかい）」

剣「いや・・・だから・・・」

剣心はたじろく。

フェイト「ううん、（さらに強化、涙目＋上目ずかい）」

もはや捨てられたとてもかわいい子犬のようである。

剣「ぐわッ！」

剣心に９９９９のダメージ。剣心は胸からなにか痛みを感じた。

剣「仕方のない・・・」

混浴。

剣心とフェイトとアルフは脱衣所で服を脱いでいた。

剣「なんで混浴があるんでござるか・・・」

服を脱ぎながら剣心は溜息をついた。

アルフ「ほら～剣心！早く入ろうよ♪」

フェイト「そうだよ剣心♪」

アルフとフェイトは体にタオルを巻いて既に入浴準備万端である。

剣「はぁ～」

剣心はまた溜息をついていた。

剣（いったいどうしてこうなったんでござる？）

剣心も腰にタオルを巻いて準備を整えた。
ドアを開けて浴室に入る。
人は誰もいなくて貸切り状態だった。

ア「三人だけだね剣心♪」
フ「心置きなく入れるね♪」

アルフとフェイトが剣心にくっつく。

剣「何でそんなにくっつくんでござるか」

剣心は体を洗おうとする。

フ「剣心、背中洗ってあげるね♪」

フェイトが楽しそうにそう言う。

ア「あッ、あたしも」
剣「いや、それくらい自分で・・」
フ・ア「「いいから」」

剣心は渋るがフェイトとアルフとフェイトに言われ仕方なくタオルを渡した。
アルフとフェイトは渡されたタオルで剣心の背中を洗う。
フェイトとアルフはその時終始笑顔だった。
三人とも体を洗い終わって温泉に入った。

フ「気持いい」

ア「ん～いい湯だね～」
剣「そうでござるな」

三人はゆっくりと温泉を満喫していた。その時、ピョコッとアルフの頭から狼の耳が出た。
剣心とフェイトはアルフの耳に気がついた。

フ「アルフ」
剣「耳が出ているでござるぞ」
ア「あっ」

慌ててアルフは耳を隠した。

しばらく風呂に浸かった後、剣心とフェイトとアルフが部屋に戻った。

その頃、部屋に戻ったなのはが新八達より先に風呂から上がって戻っていた銀時にさっきのことを話そうとしていた。

なのは「・・・銀さん」

なのはは、顔を俯きながら言う。

銀時「なんだ?」

銀時はなのはの様子に気づかないで聞く。

な「実はさっき・・・」

なのははさっき剣心に会った事を銀時に話した。

銀「剣心がなぁ～」

話を聞いて、銀時は驚きも慌てずもせずに天井を見ながら言う。

な「銀さん。この事新八さん達にも・・・」

銀「戻ってきたら言ったほうが言った方がいいだろ」

銀時は左肩を揉みながらそういった。

銀「新八達にも話した後、どうするか決めよォぜ」

ちなみにシャナとヤミは神楽達が温泉から出た後に温泉に入って、寛いでいた。

第十訓　運命の出会いは何時起こるか分らない（後書き）

支配者「いや～やっちゃいましたネェ～剣心は」

剣心「何がやっちゃいましたネェ～でござるか！！お主がやらせたんでござろう！！！」

支配者「まあまあいいじゃないですか、では次回」

剣心「ちゃんと聞いてほしいでござるぅうううううう！！！」

第十一訓　友達同士の喧嘩は大変だ（前書き）

支配者「今回はかなり長くしてみました」

銀時「ホントになげぇーな」

新八「では、第十一話始まります」

第十一訓　友達同士の喧嘩は大変だ

なのはと銀時は温泉から部屋に戻って剣心に会った事を話していた。

新「剣さんが！？」

なのはの話を聞いて新八は驚きの声を上げた。

な「はい」

なのはは頷いた。

銀「まさかなのは達と敵対している魔道師の世話になっているとはな」

銀時は知っていたくせに知らなかったふりをして腕を組みながら言う。

セ「と言う事はシャナとヤミもその魔道師側と言う事になりますね」

セイバーは少し元気がなさそうに言う。

新「どうして剣さん達はその人達と一緒にいるんだろ？」

新八は腕を組んで考えた。

神「本人に聞きに行くアル！」

神楽は立ち上がった。

新「ちょっ・・・神楽ちゃん！」

新八の声も聞かずに神楽は部屋を出た。でもすぐに戻ってきた。

神「剣ちゃんが泊まってる部屋ってどこアルか？」

神楽の言葉に全員（銀時以外）がズッコケた。

新・セ「わからないで行こうとしたのかよ！「していたんですか！」」

新八とセイバーがツッコんだ。

神「私は考えるよりも先に体が動くアル」

新「ちゃんと確認してから動け！！」

セ「そうですよ！」

銀時はそんな新八達の様子を頬杖をつきながら見て考えていた。

銀（たくッ、あのヤロー。フェイトとか言うガキが魔道師でジェルシード集めをしている事を黙っていやがったな。とは言え、その判断が賢明かもな。それを聞いたら神楽達が押し込んでとんでもない騒ぎになる可能性が有るからな）

そんなやり取りの後、新八達は部屋を出てフロントに向かった。

フロントの女性に剣心の特徴を言ったら何か明細に憶えていたらしく、部屋の事はすぐに分った。

銀時達は剣心とフェイトとアルフとシャナとヤミが泊まってる部屋に着いた。

神「剣ちゃんー！いるのはわかってるアル！おとなしく出てくるアル！！」

ドアをドンドン叩きながら神楽が大きな声で言う。

セ「無駄な抵抗はやめて出て来てください、田舎のお母さんが悲しみますよ」

セイバーはメガホンを持ってそう言う。

新「いや、僕ら警察じゃないから、誰だよ田舎のおかあさんって」

新八が二人にツッコンだ　すると、

ア「うるさいねぇ。一体何の用だい？」

温泉から上がってきたアルフが、顔をしかめてやってきた。

アルフは目の前にいる訪問者を見た。

ア「！！」

アルフは驚いて目を見開いた。

ア（げっ！剣心の家族の怪力チャイナ娘！！それと地味なメガネ！それに金髪の女まで！）

神「剣ちゃんはどこアルか！？」

アルフの動揺に気付かないで神楽は問い詰めた。

セ「ついでにシャナとヤミはどこですか？」
な「それとフェイトちゃんはいますか？居たら会わせて下さい！」

なのはとセイバーはアルフに詰め寄りながら言う。

ア「いや、部屋に三人はいないよ」

アルフは両手を振りながら慌てて三人がいない事を言った。
確かに三人は今部屋にいない。

神「じゃあどこアルかァアア！？」

神楽はアルフの胸倉を掴む。

新「神楽ちゃん落ち着いて！」
な「神楽ちゃん抑えて！！」

新八となのはが止めようとする。

ア「私もどこにいったか知らないんだよォ～」

アルフは涙目になりながら言う。
しかし、神楽は興奮してその事が耳に入らなかった。

神「言え！！言うアルゥウウウ！！」

神楽は胸倉を掴む手に更に力を入れた。

ア「だから知らないんだって！ちょっと・・離し・・・助けてぇえ
え剣心ンンンンン！！」

アルフは叫んで剣心に助けを求めた。

セ「おや？そう言えば銀時は？」

セイバーは神楽達の騒ぎから目を離した時、銀時が何時の間にかいなくなっていた事に気がついた。

アルフと神楽達がドタバタ騒いでいた頃、銀時は旅館の周りを歩いていた。

旅館の周りは森に囲まれていて、鳥の鳴き声などが聞こえてくる。

そんな森の中で銀時は探していた人物を見つけた。

銀「おお、いたいた」

剣心とフェイトである。

銀時は剣心達の様子を見に部屋に行く時、剣心とフェイトが外を歩いているところが見えたので、新八達を置いて追いかけてきたのである。

剣心とフェイトは気分転換の散歩と言う事で、外を歩いて景色や自然を見ていた。

ちなみ手を？いでいる。

フェイトは顔を赤くしながら歩いていた。

ちなみに手を？いでいる理由は、フェイトが歩いている途中で何も

言わず手を？いできて、それを剣心は何も言わずに手を握ったのである。
フェイトはその時、凄く嬉しそうな顔をしていた。

銀「おーい」
フ「ッ！！」

フェイトは突然の声に驚き後ろを振り向いた。
剣心は特に驚きもせずに後ろを振り向いた。

剣「銀時」

剣心は軽い口調で男の名前を言う。
銀時はそのまま二人に歩いて近づく。
フェイトは見知らぬ大人が近づいて来たので、剣心の後ろに隠れる。

剣「やはりお主らも来ていたか」
銀「まぁ～な」
フ「あ、あの。あなたは？」

フェイトは戸惑いながらも銀時に質問する。

剣（おろ？フェイト殿ってこんなにも人見知りだったか？）

剣心は自分の服を掴みながら後ろに隠れるフェイトを見てそう思った。
まぁ～簡単に言うと、今まで頼れる大人が一緒にいなかったので、剣心が来る前まではどんな相手にも弱いところなどを見せない様に振舞ってきたが、剣心と言う心の底から頼れる大人が一緒にいるようになったので、少し子供らしくなった、もとい、戻ったと言える。

剣「こやつは前に言った坂田銀時でござる」

剣心は銀時を指差しながらそう言う。

フ「えッ！じゃーこの人が剣心の言ってた家族の一人なの？」

フェイトは銀時を見上げながら言う。

銀「ああ、よろしくな。それと、呼び片は銀時でも銀ちゃんでも銀さんでも良いぜ」

銀時は右手を上げながら言う。

剣「ところでどうしてお主がここにいるのでござるか？」

銀「まぁ～お二人のデートの見学と言いますか・・・」

銀時は顎に手を当て、口元を吊り上げながら言う。ちなみに二人はまだ手を？いでいる。

剣「おろ？デート？何でござるかデートというのは？」

デートと言う感覚は一切、全くなくフェイトと手を？いで歩いていた剣心は銀時の物言いに首を傾げる。

フ「ふぇッ！？・・・デッデートォ／／／／」

フェイトは銀時の言った事を聞いて顔を真っ赤にして俯くが、どことなく嬉しそうである。

ちなみにまだ手は離していない。つうかむしろ手を握る強さを強く

した。

剣「と言うよりも、拙者達がフェイト殿が魔道師でジュエルシード集めを黙っていた事を言いに来たんじゃないんでござるか？」

フ「えッ！？剣心、銀時達に私達がジェルシード集めをしていた事を言わなかったの？」

フェイトはてっきり剣心がもう自分達事や何をしているか、銀時達に言っていたと思っていたのである。

剣「まぁ、そうでござるかな」

剣心は困ったような顔でそう言う。

銀時「どうせお前の事だ。あらかた、その事を言う事はフェイトの事を裏切る行為だ思ったんだろ」

銀時は頭を掻きながら言う。

フ「・・・剣心・・・ごめん。家族を傷つけるような事をさせて・・・」

フェイトは俯きながら申し訳なさそうに言う。そんなフェイトの頭を剣心が撫でる。

剣「フェイト殿が気にするひつようはない。別に黙っていた事は拙者達が勝手にした事でござる」

剣心はフェイトの頭を優しく撫でながら言う。

フ「・・・剣心」

フェイトは顔を上げながら心配そうに言う。

銀「別によぉ～。俺はジュエルシード集めをしていた事を黙っていた事に文句言うつもりなんざ、さらさらねぇぜ」

銀時は右肩を揉みながら言う。

剣「では、なぜ拙者たちに会いに来たんでござるか？」

銀「まぁ～とりあず、ジェルシード集めをしているもう一人の魔道師がどんな奴なのか見てみたくてな」

銀時はフェイトを見ながら言う。

剣「そうでござるか。でも、良かったのか？新八殿達に拙者達に会う事言わなくて？」

銀「そんな事したらあいつらもついて来るだろ。つうか、あいつらがついて来たら、フェイトがどうなるか分んねぇだろ。特に神楽や新八が何しでかすか分んねぇしよ」

銀時が頭を掻きながらめんどくさそうに言う。

剣「確かに・・・何をしでかすか分らんな」

剣心は頭を抑えながら言う。

銀「とりあず用件はこれだけだ。じゃ～俺はあいつらのとこ戻るわ」

銀時は後ろに歩きながら剣心達に手を振る。

剣「そうでござるか。ではまた」

剣心とフェイトは銀時とは反対の方向に歩きながら言う。

銀「剣心」

剣「ン？」

銀時は立ち止まって言う。その声で剣心と手を?いでいるフェイトも立ち止まる。

銀「ちゃんと守れよ、そいつ」

銀時は振り返らず言う。

剣「ああ。けど、それを言うならお主もでござろう」

剣心は銀時の方に顔を向けながら、薄く笑みを浮かべて言う。

剣「見たでござるよ、フェイト殿と同じ位の小さな女の子を」

剣心はそう言ってそのまま歩いていく。

銀時「けッ、おめぇーに言われなくても分ってらぁ」

銀時もそう言って歩いていく。

剣「どうしたアルフ殿？」
フェイト「アルフ？」

部屋に戻ったソラとフェイトは隅っこでうずくまってるアルフを見つけた。
神楽達の姿はなかった。
剣心に気付いてアルフは顔を上げた。

ア「剣心・・・」

アルフは立ち上がって剣心に抱き付いた。

剣心・フェイト
『『なッ！？』』

二人はアルフのいきなりの行動に同時に声を上げる。

剣「お、おい。どうしたのだアルフ殿？」

剣心は動揺しながらもアルフに声を掛ける。

ア「剣心のバカァアア！！あんたがいなかった間あたし大変だったんだからぁああ！！」

アルフはポカポカとソラを叩いた。

剣「一体何があったんでござる？」

わけがわからない、と剣心は首を傾げながらアルフのがポカポカ叩くのを防ごうとする。

フ「アルフ落ち着いて」

フェイトはアルフを落ち着かせようとする。

ア「ホントに大変だったんだよォオオ！！（涙）」

今度は泣きながら剣心に抱きつく。

剣「ホントに何があったんでござるか？」

剣心は抱きついているアルフの頭を撫でながら、頭を掻く。

ヤ「良い湯ですね」

頭にタオルを乗せたヤミが言う。

シ「はわぁ～～～」

シャナは完全に緩みきった顔をしている。

シャナとヤミはまだ温泉で寛いでいた。

その日の夜中、剣心とシャナとヤミとアルフとフェイトはジュエルシードのある地点に向った。
結局、銀時と剣心以外はまともに旅館内で話す事は無かった。
月が輝く夜の中、四人と一匹は森の中へ駆けていった。
ちなみにフェイトはバリアジャケットになり、シャナとヤミは翼を出して、空を飛んで移動している。

剣「アルフ殿、フェイト殿」

剣心が隣にいるアルフと横を飛んでいるフェイトに声をかけた。

ア「何だい剣心？」
フ「何、剣心？」
剣「はっきり言って、なのは殿は強いのか？」
ア「ああ、あの子かい？全然大した奴じゃないね。フェイトの敵じゃないよ」
フ「魔力は大きかったけど、魔道師としては動きがぎこちなかったからさほど脅威じゃなかったよ」
剣「そうでござるか」

剣心はそう言ってそのままフェイトの後を木の枝を飛びながらついて行く。
そんな話をしている内にジュエルシードがある場所についた。

フ「あそこにジェルシードがある」

フェイトは降り立って、川を指差した。
川の中から淡い光りを放っているジュエルシードがあった。

フ「じゃー封印するから剣心達は見ててね」

フェイトは後ろに振り向いて、剣心に笑顔で言う。

剣「わかったでござるよ」

剣心とシャナとヤミは二人の後ろで、封印の作業を静かに見守った。
封印作業が問題なく終わった時。

な「あ・・あれって！」

なのはとユーノがやってきた。

ア「あ～らあら。やっぱり来ちゃったか」

アルフが白々しく言った。

剣「なのは殿・・・だったか子供は寝る時間でござるよ」

シ「そうよ、剣心の言う通り」

ヤ「そうですね」

3人はなのはに対してこんなことを言う

な「ふぇッ!?剣心さん!それに女の子が二人!?翼があるって事は天使さん!?」

なのはは、剣心とシャナとヤミを見て驚きながら言う。

シ「翼があるから天使って・・・ドンだけメルヘンチックなのよアイツ・・・」

ヤ「全くですね、どうしてそんな発想にいたるんでしょうか?常識しらずですね」

二人はなのはに対してこんなことを言った。

ユ（あの二人はいったい!?魔力を感じないのに何であんな事ができるんだ!?）

ユーノはシャナとヤミの不思議な能力を見てそう思った。

ユ（けど、今はジュエルシードの事が最優先だ）

ユーノは二人の事は後で考える事にした。

ユ「それを・・ジュエルシードをどうする気だ!?それは危険な代物なんだ!」

ユーノがフェイト達に向かって叫んだ。

ア「さぁね。答える理由が見当たらないよ。それにあたし親切に言ったよね?良い子にしてないとガブッと行くよって・・・」

アルフは目をギロリと光らせた。

剣「いや、だからあれはただの脅しでござろう・・・」

剣心は途中で言葉を止めた。

剣心の隣で、アルフは人の姿から狼の姿へと変身したのだ。

シ「ありゃま」

シャナは声は上げなかったがほんの少し驚いていた。

ヤ「変身しましたね」

ヤミも声を出さず静かに驚いた。

シ「アルフ、お前い・・・狼にも変身できたのね」

アルフ「ああ。そういえば剣心達にこの姿を見せるのは初めてだったね。ていうか今、『犬』って言おうとしなかったかい?」

鋭い目でアルフはシャナを睨んだ。

シ「いや、つい・・・」

シャナは申し訳なさそうに言う。

ア「まったく」

アルフは溜息をつきながら言う。

ユ「やっぱり彼女は使い魔だったか」

狼のアルフを見てユーノが言う。

な「使い魔？」

なのはは首を傾げた。

ア「そう。あたしはこの子に造って貰った魔法生命。主の魔力を命とする代わりにその命と力の全てを賭けて護るのさ」

アルフが自分について説明した。

その時

新「なのはちゃん！」

神「なのは！」

新八と神楽がやってきた。

その後ろから銀時とセイバーがやってくる。

なのは「銀さん！新八さん！神楽ちゃん！セイバーさん！」

なのはは振り返って四人を見た。
剣心，シャナ，ヤミも銀時達に視線を向けた。

剣「やはりお主らも来たのか」

手を挙げて四人に声をかけると、

新八「シャナちゃん！！」
神楽「それにヤミも！！」

剣心達に気づいて、神楽と新八は声を上げる。銀時とセイバーはその様子を黙って見ていた。

新「剣さん！！なんでなのはちゃんを傷付けた子の味方をしているんですか！！」

新八が剣心の行動に説明を要求した。

神「そうアル！！その女、私の友達のなのはを傷つけようとした女アルよ！何でそんな女の味方するアルか！？」

神楽がフェイトを指差しながら叫んだ。フェイトは表情を暗くする。

セ「そうですね。私としても説明が欲しいところです」

セイバーは腕を組みながら言う。

神「とりあえず三十文字以内で説明するアル！！」
剣「いや三十文字では無理でござる」

剣心は即答した。

シ「そう言う銀時達こそ、ジュエルシードを集めている理由を三十文字以内で教えなさいよ」

銀「無理だ」

銀時は即答する。

ヤ「剣心。ジュエルシード集めを私達が手伝っている理由を銀時達に話さなかったんですか？」

ヤミが首を傾げながら言う。

剣「いや、銀時にしか話していないでござる」

新「エッ！何で僕らに言わなかったんですか銀さん！」

銀時「いや～悪ィな。そう言えば忘れてたわ」

銀時が頭を掻きながら言う。

新「このクソ天然パーマァ！！」

セ「そう言えば剣心。この旅館に泊まっていたんですか？」

アリスが後ろの温泉旅館を指差しながら言う。

剣「ああ、それで何の話でござったかな？」

神「なのはを傷つけたその女の事アル！」

神楽がまたフェイトを指差す。フェイトはまた表情を暗くする。

剣「・・・そうでござるか。まぁフェイト殿も本当はそんな事はしたくなかったはずでござる。許してやってくれないか？」

神楽「・・・なら、なのはに一言謝るアル！」

フェイトに向かって神楽が言った。フェイトは、なのはに視線を向けた。なのはもフェイトを見つめてる。そしてフェイトは静かに口を開いた。

フェイト「・・・ごめんね」

なのは「う・・うん」

フェイトの謝罪に、なのはは頷いて応えた。

剣「これで一件落着。では」

剣心がフェイト達を連れて帰ろうとすると、

新八「いや待ってくださいよ剣さん！」

新八が剣心を呼び止めた。

新八「何普通に帰ろうとしてるんですか！？」

剣「おろ？まだ何か？」

足を止めて新八に振り返った。

新「何かって、ジュエルシードですよ！ジュエルシード！」

新八が額に血管を浮かべながら怒鳴った。

新八「それは本来、ユーノ君が発掘した物ですよ。現状では所有権は彼にあります。今、剣さん達がやってる事はネコババと同じですよ」

相手がソラ達では説得は難しいが、新八は主張した。だがソラは怯まない。

剣「新八殿。フェイト殿たちにも事情があるのでござるよ」

新「どんな事情があるか知りませんけどジュエルシードはユーノ君の者なんですよ！それを勝手のもって行こうとするなんて！！」

新八は剣心に対してそういうが

神楽「新八、これ以上剣ちゃん達を説得しようとしても無駄ネ」

神楽が一歩前に出る。

神「かっ・・・・神楽・・・ちゃん？」

新八は何だかイヤな予感がした。

神「欲しい物は力ずくで奪うアルよ」

そう言って神楽は傘を構える。

シ「そう言う事よ、メガネ」

シャナは刀を構える。
炎の能力を使って刀に火を纏わせる。

ヤ「まあそう言う事ですね」

ヤミも能力を使って剣を構える。

シ「いえ、ここは私がやるわ。ヤミは下がってて」

シャナがヤミの前に出て右手を出して言う。

ヤ「そうですか。ではお任せします」

が、シャナに言われヤミはそう言って手を元に戻す。
うーむ、何だかヤバイ雲行きになってきたぞ、と新八は思い始めた。

神「これからは男ではなく、女が主役の時代ネ」
シ「そういう事、いくら神楽でも、剣心まで傷つけると言うなら手加減はしないわそれに・・・」
神楽「これからは私が主役アルゥウウウ!!」
シ「いや、私よォオオオオ!」

互いに同時に動き、刀と傘が火花を散らせてぶつかった。

新八「おいィイイイ!戦う理由が変わってるよ!!ていうか勝手に主役決定戦にしちゃってるし!!」

新八のツッコミが森の中に響き、神楽とシャナの壮絶な主役の座の奪い合いが始まってしまった。

剣「あらら・・・」

剣心は黙ってみているしかなかった。

シ「はァアアアア！！」

神「ほぁちゃァアアア！！」

神楽とシャナは叫び戦う。

フェイト達から離れながら二人は炎の刀と傘をぶつけ合う。

アマントによって作られた人造生命体と最強の戦闘民族夜兎、そして同じ声優さんつながりの二人は激しく戦いあった。

新「いや、声優ネタまで持ち出すなよ！！」

新八が作者である私に突っ込んだ

銀「お前らは参加しないのか？」

銀時はヤミとセイバーの方に顔を向けて言う。

ヤ・セ『別に主役の座には興味ありませんから』

二人は一緒になってそういった。

セ「そう言う銀時は？」

銀時「俺はほら、俺も主役だから」

銀時は自分を指差しながら言う。

フ「けっ・・・剣心」

フェイトはシャナと神楽の凄まじいバトルを見てオロオロしながら剣心に聞く。

剣「まぁ大丈夫でござろう。なんだかんだ言っても、あの二人仲良しでござるから（・・・・まあ、この森がなくなるかも知れぬがな）」

剣心はフェイトに心配ないというが、心の中ではこんなことを思っていた。

新八「ああもう！なのはちゃん、ユーノ君！僕が二人を止めるからここにいて！」

新八はシャナと神楽の後を追った。

な「し・・新八さん！」

なのはが叫ぶが、新八は止まらず走っていった。
その後なのはは銀時達の方を見る。

な「あ、あの、銀さん達は新八さんと一緒に二人を止めに行かないんですか？」

なのは首を傾げながら言う。

銀「どうせ止めに行っても、ロクな事にならねぇ～よ」
セ「それになんだかんだ言ってもあの二人は仲良いですし」

セイバーは剣心と同じ事を真顔で言う。

な「は、はぁ・・・」

なのは戸惑いながら言う。

銀「それよりもなのは。あのフェイトとって奴に何か言いたい事があるんじゃねーのか？」

銀時はフェイトの方を見ながら言う。

な「うん」

なのはは静かに頷く。

銀時「だったらおめぇーの伝えたい事をしっかりあいつにぶつけて来い。まっ、一応俺達が見守っていてやるから安心しろ」

銀時はなのはの頭を撫でながら言う。

なのは「わかりました！」

なのはは声を上げて返事をする。

なのはは銀時に頭を撫でられ今ならフェイトに勝てそうな気がしていた。

そしてなのははフェイトの所に歩いて向う。

そしてお互いの間の距離が八メートル位の所で止まり、フェイトを見つめる。

フェイトもなのはをしっかり見つめる。

な「話し合いで何とかできないかな？」

フ「・・・私達はジュエルシードを集めなきゃいけない。それは貴女も同じ事。だったら私達はジュエルシードを求めて争う敵同士って事になるね」

な「だから!そんな勝手に決めない為に話し合いって必要なんだと思う!!」

フェイトの言葉に、なのはは声を大きくして言った。

フェイトは目を閉じた。

フ「言葉だけじゃ・・・何も変わらない・・・伝わらない!」

そう言ってフェイトは目を開く。

フェイトの強い言葉になのはは一瞬怯む。

な「けど、だからって!」

なのはは負けじと言う。

フ「賭けて。それぞれのジュエルシードを一つずつ」

フェイトはなのはの意見を無視して言う。その後ソラの方を向く。

フ「剣心、私はあの子と戦うけど、剣心はどうする?もしかして剣心も家族と戦うの?」

フェイトは悲しそうな顔で剣心に言う。

フェイトは剣心が自分のために家族と戦う事になって傷ついて欲しくないと思っているのである。

剣「安心するでござるよフェイト殿。とりあえず話をしに、向こう

に行く位でござる」

フェイトは剣心の言葉を聞いて安心する。

剣「とりあえずフェイト殿は自分のしたい事をすればいい、拙者達がちゃんとついているから安心しておけばよい」

剣心はそう言いながらフェイトの頭を撫でる。

フェイトは頭を剣心に撫でられ、今ならなのはに圧勝できそうだと思った。

ここまではフェイトのメンタルメンはなのはと同じであろうしかしこの後のことでフェイトのコンディションはなのはを圧倒する事になる。

フ「うん！」

フェイトは満面の笑みで剣心に言う。

そして二人の戦いは始まった。

なのは「くっ！」

レイジングハート〈Ｆｌｉｅｒ　ｆｉｎ〉

なのはは足から翼の様なものを展開し、空に舞い上がってフェイトの初撃をかわした。

しかし、フェイトはもの凄いスピードでなのはに追いつき、スピードで撹乱しながら更に斬撃を浴びせる。

なのはは、フェイトの連撃に防御壁やシールドで防ぐか、避ける事しかできないでいた。

アルフはそんなフェイトの戦い方を見て驚いていた。

なにせフェイトがいつもより強くなっていたのである。

たぶん原因は剣心であろう

ユ「なのは！」

ア「あんたの相手はあたしだよ！」

なのはを助けようとするユーノにアルフが襲い掛かった。

ソラとリリスとライホースはその戦いを見ながら、銀時達の所に向った。

剣「銀時」

剣心は手を上げながら銀時達に声を掛ける。

銀「よォ」

銀時も剣心に手を上げて返事をする。

セ「私達はどうします。私は一応なのはを助けたいんですが」

セイバーがなのはの防戦一方の戦いを見て、心配そうな顔で言う。

剣「所詮拙者達は手伝いでござる。これは彼女達の問題だ。危ない時以外はあまり手を出さない方が良いだろう」

剣心が首を横に振りながら言う。

銀「そうだな。俺達が争っても疲れるだけだし」

銀時はメンドくさそうに言う。

銀「それにあのフェイトってガキも無闇に人を傷つけるような奴じゃないんだろ」

銀時がなのはを完全に圧倒した戦いを繰り広げているフェイトを見ながら言う。

剣「まぁそうでござる」

剣心が普通にそう言う。

ヤミ「しかしなのはという子は大丈夫でしょうか？」

ヤミは少し心配そうになのはを見ていた。

神「ふんごぉおおお！！」

シ「コノォ！！」

一方、シャナと神楽は壮絶な打ち合いをしていた。

剣と傘がぶつかる音が森の中に響く。

シ「はぁあああ！！」

シャナに向かって神楽は傘を横薙ぎに振るう。
体勢を低くしてシャナは傘をかわし、神楽の傘は後ろの木を倒した。
そして今度はすかさずシャナが炎の刀を神楽に横薙ぎに振るう。
それを神楽はジャンプしてかわし、後ろの木は切られて倒れた。
降り立った神楽が今度は縦に傘を振るう。
シャナはそれを剣で捌き、傘の軌道をずらす。
その後相手の出方を伺う様に二人の動きが止まった。

シ（さすが神楽ね。あんな攻撃を一撃でも受ければ私でも危ない）

シャナは神楽とまともに刀と傘の押し合いにならないように研ぎ澄まされた剣技で神楽の攻撃をいなしていた。
シャナもかなりの力を持っているので多少の剣の押し合いになっても負けはしないが、神楽の怪力に真っ向から挑むような愚行はしない。
神楽と押し合いの勝負になれば神楽の怪力に押し負けて、そのまま一撃を食らってしまうのは目に見えているからである。
シャナは夜兎族の神楽の戦闘力の高さを改めて実感していた。

神（さすがはシャナアルな。剣術が巧みで全然攻撃が通らない上に、油断してたらやられてしまうネ）

神楽もシャナの剣術の凄さは前から分かっているので、無闇に攻撃をしてスキを見せないようにしていた。
それにシャナの刀は炎を放っているので、シャナの刀の間合いを取れず苦戦していた。
しかし、そこは本能や野生の勘的な物で、避けたり防げたりしていた。

とは言え、さすがにそんな事に神経や集中力を回していたら、すぐにシャナにやられてしまう。
神楽もシャナの強さを改めて実感した時でもあった。

新八「ちょっとシャナちゃん！神楽ちゃん！ストップストップ！！」

新八は二人を止めようとして両手を出しながら叫んだ。

シ「何よ眼鏡！」
神「真剣勝負の邪魔すんじゃねーヨ！」

二人は止めに入った新八を睨む。

新「いや二人とも冷静になろうよ！僕らが戦うなんておかしいですよ！！」
神「ツッコミしか脳のない地味ザルはそこで指くわえてガタガタ震えてろヨ。地味メガネザル」
セ「そうよダメガネ！メガネを割って、ただのダメにするわよ！変態ロリコンメガネ」

シャナも真剣勝負の邪魔をされたため、口調がかなりきつい。もともと神楽並みにきついが

新八「（ピキッ）・・・んだとコラァアア！！」

二人の言葉に新八の堪忍袋の緒が切れた。
しまっていた木刀を取り出す。

新「よくも言ったな！！貧乳甘党女に貧乳エセチャイナがァアアア！！大体お前らおんなじ声してっから見分けつきにくいんだよ！

！！この貧入コンビが！！！！」

新八もかなり頭にきたらしく、かなり口調が荒い。

シャナ・神楽
『『（ピキッ）』』

二人は新八の言葉で顔に陰が掛かり、首に青筋を浮かべる。

シ「誰が貧乳甘党女ですって・・・それに人が気にしていることまで・・・・」

神「よくも言ったくれたアルナ・・・」

二人はそう言いながら新八に自分の得物を向ける。

セ「神楽、勝負はひとまず中断よ。今は・・・」

神「あのクソダメガネをぶっ飛ばすネェエエエエ！！！！」

シャナと神楽は新八に突撃する。

新「返り討ちしてやるよォ！！貧入コンビが！！」

新八も二人に突撃する。

神楽・新八
『『うォォォォォ！！』』

シ「はァアアアア！！」」

三人は同時に声を上げながら突っ込む。

はい、普通はこの時点で新八君もバトル参加決定でバトルはヒートアップする。
新八、死んだな。

フェイトと、なのはの空中戦。
っと言うか、完全なフェイトのワンサイドゲームみたいになっている。
まさしく言うなれば、ずっとフェイトのターンみいたいな感じである。
なのはが砲撃を撃とうしても、フェイトが高速で動くため狙いが定まらない。
一方フェイトは金色閃光を放ったり、フェイトは素早い動きから魔力刃の斬撃をだして、なのはを圧倒している。
それを銀時達は見ていた。

銀「ね、ねぇ。あの子、かなりなのはを圧倒してね？」

銀時はなのはとフェイトの方を震えた声で指差しながら剣心に顔を向けてそう言う。

剣「本当でござるな。フェイト殿があんなに強かったとは」

剣心は腕を組みながら言う。
いや、強くさせたのあなただから！

剣「そろそろ勝負が着きそうでござるな。拙者は戻るとしよう」

剣心は手を振りながら、元居た場所に戻っていく。

剣心の言う通り、ついになのはとフェイトの勝負が決する。

なのはの上空からフェイトは、鎌に変形したバルディッシュを振り下ろす。

な「！！」

鎌の刃は、なのはの首筋に当てられた。

勝負は決した。

レ〈Ｐｕｌｌ　ｏｕｔ〉

レイジングハートから女性の電子声が聞こえて、赤いコアからジュエルシードが一つ出てきた。

な「レイジングハート・・何してるの！？」

フ「きっと主人思いの良い子なんだよ」

フェイトはジュエルシードを受け取ると、そのまま剣心の所に向っていった

剣「では行くでござるか。アルフ殿」

剣心はアルフを見ながら言う。

ア「そうだね。しかし、ああも簡単に勝っちゃうなんて、さすがあたしのご主人様だね」

アルフは剣心達の元に戻りながら言う。

な「待って！」

なのはも地上に降りる。

しかし、フェイトになのはの声は届かなかった、

剣「すまぬが、もう行かなくてはいけないのでな」

剣心はそう言って、フェイトを連れて行った。

ア「ばいば～い」

ヤ「では、また」

アルフとヤミは剣心の後に続いて行った。

な「私の名前・・・言えなかった・・・」

なのは残念そうな顔をしてフェイトを見ていた。

剣心達はセイバーと神楽と新八を見つけた。

どうやら、勝負はもうついているようだった。

シャナは石の上に座り、神楽は黒焦げになって倒れて気絶していた。

新八？最初は二人に食らいついていたが、一瞬でボコボコにされて、

ボロ雑巾状態

新八は所詮新八である。

剣「終わったでござるか」

剣心はシャナに声を掛ける。
シャナは剣心の声で石からたち、剣心の方を見る。

シ「ああ剣心、こっちもなんとか勝ったよ。」

ヤ「ちなみにジュエルシードは手に入れました。そっちはどうなったんですか？神楽が黒焦げになってますが」

ヤミが真顔でジュエルシードについてシャナにそう言う。

シ「こっちはもう決着がついたわよ。新八（バカ）を倒した後に神楽と勝負を再会して、たぶん私の放った火炎弾が神楽に当たって、神楽はそのまま気絶したの」
剣「だぶんとは？」

シ「実はそれ後ろから飛んできたのよ。うまく操って私が当てたはずだと思うんだけど・・・よく分んないの」
剣「後ろから飛んできた？どういうことでござる？」
シ「さあ・・・私の火炎弾だのはずだと思うんだけど」

シャナは剣心たちに対して自身がなさそうながらもそういう

剣（一体どういう事でござる？火炎弾が木にあたって跳ね返るはずはないし）

剣心はその奇怪な現象に頭を悩ませた

ヤ「ていうか森で火炎弾なんか打ったら森が焼け野原になっちゃんじゃないんですか？」

ヤミがシャナに静かにツッコンだ

その頃なのはは、落ち込んだ顔で銀時の所に戻っていた。

な「私、結局何もできずに負けちゃいました・・・」

なのは俯きながら言う。

銀「確かにお前が負けた事に変わりはねぇ。けどな、くよくよして

ねぇで、次を勘張れば良いじゃねぇ～か。次は、フェイトとしっかり話せるように頑張りな」

銀時はそう言いながらなのはの頭を撫でた。

な「銀さん・・・はい！次はフェイトちゃんとお話ができるように頑張ります！」

なのはは銀時の言葉を聞いて、次も頑張れると思った。

銀「さぁ～て。新八と神楽を迎えに行くぞ」

セ「そうですね」

銀時達は気絶した新八と神楽を探しに森の方に行った。

しかしその戦いの様子を見ていた者たちがいた。全部で3人いる。

デ「さすがはジュド様ですね、お見事でした」

ジ「もしあの黒髪の小娘が負けてジュエルシードがとられる様なこ

とになっては困るからな、しかもあの小娘が私と同じ炎使いであったためにうまくごまかせたようだ」

ディアルが近くにいたジュドに対してそういった。ジュドはディアルに対してこう答える。実は神楽に向かって木に当てずに正確に火炎弾をぶつけたのはジュドだったのだ。

？「なによあの白い子予想以上に弱いじゃない、ねえディアル」

もう一人はどうやら女性のようである。

デ「ファイナ、あの小娘はともかく他の連中は甘く見るな、さっきの戦闘を見る限りでは思った以上に相当できるようだ」

ファ「分ってるわよ、ディアル、只者じゃないことはジュド様から聞いてるし、さっきの話を盗聴して聞いたところやっぱりあの人形と一緒にいる連中もあいつらの仲間みたいね」

ファイナと呼ばれた女性はディアルにそう答える。

ファ「で、いかがいたしますジュド様、人形と一緒にいるあいつらの事は」

ジ「奴らには精々われらの計画の役に立ってもらうとしよう、用がなくなればあの人形もろとも消えてもらうだけだ」

ファ「ハーイ、了解しました」

そういってジュドたち3人は消えていった。

第十一訓　友達同士の喧嘩は大変だ（後書き）

支配者「ジュドたちの計画、気になりますね」

シャナ「ホントなに企んでのかしら」

支配者「いずれ分りますので、もうしばらくお待ちください、では次回」

第十二訓　無茶をしてもいい事はない（前書き）

支配者「今回は結構シリアスですね」

銀時「そうだな・・・って自分で書いといて何いってんだよ！」

支配者「では第十二話ご覧ください」

銀時「聞けぇー！！」

第十二訓　無茶をしてもいい事はない

今日のフェイトは昼食を食べた後、満足気な表情で自分の部屋のベットに寝転がっていた。

フ「今日も剣心の料理おいしかったなぁ～」

フェイトは最初の頃はジュエルシード集めが辛くて食事が喉を通らなかった事が多かった。
けれど、今は違う。ジュエルシード集めはうまくいっているし毎日が楽しい。
必要な量の食事を取る事を自分から、優先的におこなっている。

フ「これも全部剣心達のお陰かな」

フェイトはまた笑顔になる。
フェイトは改めて剣心が一緒にいてくれ事の有り難味を実感した。
シャナやヤミにも感謝しているけど、やっぱり剣心の存在が一番大きいのである。

フェイト「もし、あの楽しい思い出に母さんも入ってくれれば・・・」

フェイトは、もう一人の大切な人である母を思い出した。

フ「ダメ。今の母さんは・・・」

フェイトは今思ったささやかな願いを心の奥に閉まった。

フ「今は剣心達が居てくれるだけでも十分なんだし、あんまり贅沢言っちゃだめだよね」

フェイトがそう思っていると、

“コンコン”

ア「フェイト入っても良いかい？」

アルフがノックをしてきた。

フ「うん良いよ」

フェイトがそう言うと、アルフが入ってきた。

ア「ホントにフェイトは変わったね。いつもの食事なら、あんまり食べないのに」

アルフは普段、良くフェイトが食事を取っている事に心から喜んでいた。

ア「剣心にはホント感謝してるよ」

主人思いのアルフにしてみれば、フェイトの食生活をより良くしてくれた剣心には心の底から感謝している。アルフはそれだけではないようだが。

フ「感謝しても、しきれないけどね」

フェイトは苦笑しながら言う。

フ（けど、感謝しているのはそこだけじゃないんだけどね）

フェイトはそう考えていると、自然と笑顔になる。

ア（あんなに嬉しそうに笑う子じゃなかったのに、ホントに変わったよ、フェイトは）

アルフはフェイトが歳相応の子供のように笑う事に喜んでいた。

ア（まぁ、変わりすぎてちょっと性格が変わった気がするけどね）

アルフはそう考えて苦笑する。

フェイトはゆっくりと体を起こした。

その時に見えたフェイトの背中にある無数の傷跡を見て、アルフは顔を悲痛に歪ませた。

ア「フェイト・・剣心には言わないのかい？」

フ「・・・・うん。剣心には余計な心配は掛けたくないから・・・」

ア「で・・でもさフェイト。剣心なら、あの人からフェイトを護ってくれるかもしれないよ」

フ「大丈夫だよアルフ。母さんは私の為だって言ってたし、剣心にも心配かけたくないしね」

そう言ってフェイトは立ち上がった。

フ「ジュエルシードの位置特定は大体出来ているから今日の夜にで

も剣心達と出発しよう。確か散歩だっけ？」
ア「う・・うん・・・・けどフェイト・・・あんまり無理しないでね」
フ「大丈夫だよ。私は強いから」
フェイトは微笑みながらアルフに言った。

その日の夕方。
銀時はジャンプの買った後に、翠屋に帰っているところだった。
そして、ジャンプを小脇に挟んで、考え事をしながら歩いていた。

―ジュエルシードは危険な物なんだ！―

ユーノが言ってた言葉を思い出す。

銀「危険な物ねぇ・・・それにあいつらか」

銀時は昨日のユーノの言葉だけではなく謎の集団である魔人族と呼ばれる異常な連中のことも考えていた。

銀「あいつらはいってぇなんなんだ、多分あいつらの目的はジュエルシードだろうがそれを使って何しようとしてんだ。まあ、でもあのフェイトって奴があいつらの仲間じゃねえのは確かだ。剣心は俺よかよっぽど感がいい。そんな奴らの仲間なんかに協力するはずねえしな」

そう呟いて夕焼けの空を見上げた。
そうやってサッカーグランウンドの側を歩いていると、銀時の目にサッカーグラウンドがある河川敷の川の近くで体育座りをして、川を見ているなのはの姿が目に入った。
なのはの顔はとても落ち込んでいる事が容易に分った。

銀「よォ。なのは」

銀時は声を掛けて、手を上げながらなのはの元に歩いていた。

な「あっ、銀さん・・・」

なのはは銀時に気づいて返事をするが、声は沈んでいて、表情もまた暗かった。

銀「おいおい。どうしたんだ、そんなに沈んで?」

銀時はそう言いながらなのはの横に座った。
ジャンプを読みながら。

な「あの・・・その・・・」

なのはは言葉が詰まり、中々言い出せないでいた。

銀「学校でなんかあったか?」
なのは「!!」

銀時の質問はかなり的を射ていたのか、なのはは身体をびくっとした。

銀「やっぱりな」

銀時はジャンプは今も読んでいるが、そんなのはを横目で見ていたのである。
だから、なのはの変化もちゃんと見えていた。

な「・・・あの・・なんでわかったんですか?」

なんはは銀時に顔を向けながら言う。

銀時「お前と一緒にいつも学校から帰っている、え～と、すずむしとアリンコだっけ?そいつらと一緒にいないからなんとなくそう思ったんだよ」

な「あの、すずかちゃんとアリサちゃんです」

なのはは、銀時の間違いを指摘する。

銀「まぁ。名前は間違えたけどよ、俺の言っている事は合っているだろ」

な「・・・はい」

なのはは、また顔を俯かせる。

銀「言いたくなければ言わなくていいけどよ。相談くらいは、乗ってやるぜ」

銀時はジャンプから目を離し、なのはの顔を見て言う。

なのは「実は・・・」

なのはは、学校でアリサを怒らせてしまった事を話した。

なんでも、月村邸での一件以来、フェイトの事が頭から離れないらしい。

しかし、そのお陰でなのはは、最近上の空になってしまい、アリサにそこを指摘され、終いにはアリサに曖昧な態度を取ってしまったためにアリサの怒りに火を点けてしまったらしい。

アリサが怒った理由は、親友である自分になのはがなにも相談してくれない事が彼女の怒りに触れる原因となった。

しかし、なのはとてユーノに言われて魔法の事を話す事ができないので、どうしても曖昧な態度になってしまった。
すずかはアリサをなだめるために今はアリサと一緒にいる。
結局そのまま二人の仲がギクシャクしてしまい、一人で下校をしていた事をなのはは、銀時に話した。

銀「ふぅ～ん。なるほどな。でよぉなのは。おめぇはこれからどうしたいんだ？」
な「え？」

なのはは突然の銀時の質問で顔を上げる。

銀「フェイトやアリサとの問題だよ。このまま放ったからしにするのか？」
な「そんな、放ったらかしになんて出来ませんよ！それにこうなったのも、わたしが悪いんですから・・・・」

最後になのはは自分を責めていた。
こんな事態になったのは全て自分の責任だと言わんばかりに。

銀「なのは、お前・・・そんな趣味があったかのか？」

銀時が目を細めながら、なのはを見て言う。

な「へっ？何がですか？」
銀「自分を責めていじめて喜んでいるドMの趣味でもあったのかって聞いてんだよ」
なのは「ち、違います！／／／／そんな趣味ありません！！／／／／・・・・って言うか、Mってなんですか？」

なのはは、顔を赤くして、両手を振りながら講義する。
その後、Mの意味が分らなくて首を傾げる。

銀「まぁ～あれだ、俺の知っている奴にMを体言した様な奴がいてな・・・なのは、ちょっと耳貸せ」

なのはは、銀時に言われ耳を傾けた。
銀時の話を聞いた後、顔を真っ赤にしていた。
まぁ簡単に言うと銀時が言った人物は始末屋の猿飛あやめ、通称さっちゃんである。
あ、ちなみに銀時が言った事は今までにさっちゃんがやった大まか事で、Mの詳しい内容は教えていない。
さっちゃんがしてきた行動がMの行動だと話した。
さすがに銀時でも子供、しかも女の子のなのはにMの事を教えるのは気が引けたようだ。

なのは「す・・・すごい人・・・なんですね」

なのは銀時の話を聞いて少し、いや、かなり引いてしまった。Mの詳しい説明聞かずこれである。本当に純真無垢以外の何者でもない。

銀「まぁ～な。って、話を戻すが、なのは。前にデカイ木のせいで町が壊された時に俺が言った事を憶えているか？」
な「・・・はい」
銀「そん時俺は言ったよな、“周りを頼れ”って」

なのはは、銀時の言葉に無言で頷く。

銀「別に魔法の事は言えなくても、相談してもらうくらいの事はできるだろ」

な「でも・・これは私の問題ですし、アリサちゃんやすずかちゃんに迷惑を掛けたくないから・・・」

なのはは、俯きながら自分の意見を搾り出すように言う。

銀「はぁ～。たくよォ、ガキのくせして何でもかんでも背負いすぎなんだよおめぇは」

銀時は溜息をつきながら頭を掻いて、面倒くさそうに言う。

な「えッ？」

銀「いいかなのは。俺達は王様でも神様でもなんでもねぇ。ただの人間だ。たとえ魔法が使えてもそれは変わらねぇんだ。だから困った時や悩んだ時は少しは誰かを頼れ。お前には頼れる奴がいるだろ」

銀時は最後の言葉を微笑みながら言う。

な「はい」

なのはは嬉しそうな顔で小さく言う。

銀「おめぇが挫けた時には手を貸して立たせてやる。おめぇが悩んだりした時は一緒になって頭抱えて悩んでやる。おめぇが悲しい時は慰めてやる。おめぇが困った時には助けてやる」

銀時の言葉がなのはの心に染み渡っていく。

銀「なのは、お前にはそうしてくれる奴が周りにはたくさんいるだろ」

なのはは銀時の言葉を聞いて、目を瞑って自分の大切な親友のアリサやすずか、自分の家族、そしてジュエルシード集めで新しく友達になったユーノや新八や神楽やセイバー、そして今目の前にいる人物、銀時の事を思い浮かべた。

な（自分一人だけで悩んじゃって、バカみたいだな私・・・）

なのは自分の胸に右手を当てて、自分の心が暖まっていくのを感じていた。

な「銀さん」

なのはは決意の篭った目で銀時を見る。

銀「なんだ？」

な「私、アリサちゃんと仲直りして、それで、フェイトちゃんにも私の気持を伝えるために頑張ります！」

銀「そうか」

銀時はなのはの言葉を聞いて、笑みを浮かべる。

な「だから、ジュエルシード集めと、私がフェイトちゃんとお話しする手伝いを改めてお願いします！」

なのはは頭を下げて銀時に言う。

銀「別に俺は、お前がそうやって頼まなくても手伝ってるぜ。前にも言ったろ、手伝ってやるってな」

銀時はそう言いながらなのはの頭を撫でる。

な「銀さん・・・」

なのはは嬉しいのか、目を潤ませながら銀時の顔を見る。

銀「さて、そろそろ行こうぜ」

銀時はそう言って、立ち上がり翠屋に行こうとする。

な「はい！」

なのはは、満面の笑みで返事をし、銀時の後について行く。

追いついた後、なのはは銀時の左手を握る。

銀「っておい、なんで手？いでんだ？」

なのは「あの、ダメでしたか？（涙目＋上目ずかい）」

なのはは悲しそうな顔をする。

銀時「いや・・・別に構わねぇけど」

手を？ぎながら銀時となのはは、翠屋に帰って行った。

余談だが、銀時となのはが手を？いでいる所を見た恭也と士郎と新八が銀時を木刀で襲おうとしたが、恭也と士郎は、なのはと桃子にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩを受けるために襟首捕まれて、別の部屋に連れて行かれて、新八はあっけなく銀時の返り討ちあった。

その時、高町家に二人の男性の悲鳴が響き渡ったとか。

同じ頃。
誰もいない公園で、剣心は一人ベンチに座って考え込んでいた。
―ジュエルシードは危険な物なんだ！―
銀時と同じ様にアルフやユーノが言ってた言葉とジュドと名乗ったあの男のことを思い出す。
―私の目的までは教えられんよ―
剣「危険な物でござる・・・か、そしてあの男の本当の目的はいったい何なのか・・・それに・・・」
そう呟いて夕焼けの空を見上げた。
そして剣心にはさらにもう一つ気になる点があった。
剣（温泉で見た、あのフェイト殿の無数の傷はなんだ？）
剣心はフェイトと温泉を一緒に入った時、フェイトの痛々しい傷が目に止まった事を思い出していた。
その時、アルフはフェイトの傷を見ないように極力目を傷から逸らす事が見て分った。

剣心はさすがにフェイトの傷の事はさすがにプライバシーに関わる事だと思い、聞かずに、心の中に留めて置く事にした。
それにフェイトの事を傷つける事になるかもしれないと思ったからだ。

剣（明らかにジュエルシード集めでできた傷ではなかった・・・・じゃあいったいどこだ？まるで鞭で叩かれた様な後みたいだったが・・・・）

剣心はフェイトの傷の事が頭から離れずにいた。
そう考えていると、徐々に頭の中に気になるキーワードが浮かび上がる。

ー私の母さんが・・・ジュエルシードを欲しがってるから・・・ー

フェイトの言葉である。

剣（そう言えば、その時アルフ殿が顔をしかめていた・・・・）

考えがそこまでに到ると、剣心は背筋に寒気を感じ、一つの嫌な答えに到った。

（まさか！？・・・・でも、それならフェイトのあの傷とアルフの態度のつじつまが合う・・・だとしたら、かなり厄介な事になりそうだな）

剣心は頭を抑えてため息をはいた。
剣心はフェイトたちとジュドの事を考えながらフェイトのいるマンションに向った。

剣心が帰ってきた後、五人は再び海鳴市へやってきた。
ビルの屋上に立って下の様子を見渡していた

剣「この人だかりの中から探すのでござるか？かなり厄介でござるな」

剣心は溜息をつきながら言う。

フ「ちょっと乱暴だけど、辺りに魔力流を打ち込んで強制的に発動させるよ」

フェイトが始めようとすると、

ア「ああ、ちょっと待った。それあたしがやる」

自分がやると言ってアルフが前に出る。

フ「大丈夫？結構疲れるよ」
ア「あたしを一体誰の使い魔だとお思いで？任せてよ」
フ「うん。それじゃあお願いね」

フェイトはアルフに任せた。

剣「少しよいか？フェイト殿」

剣心が右手を出しながら待ったをかけた。

フ「え？」

ヤ「どうしたんですか剣心？」

ヤミは剣心に顔を向けながら聞く。

剣「チョッと頼みがあるのだが、フェイト殿悪いが、ジュエルシード一個見せてくれぬか？」

フ「ジュエルシードを？」

剣「ああ」

剣心の目は真剣な眼差しだった。

フェイトは剣心の真剣な眼差しを見てジュエルシードを渡した。ちなみにフェイトの顔は微妙に赤くなっていた。

剣（あれ、気のせいか？フェイト殿の顔が微妙に赤くなっているような・・・）

剣心はフェイトが顔を赤くした事を少し疑問に思いながらもジュエルシードを受け取った。

フ「剣心？」

剣「・・・・・・・」

フェイトの声に応えず、剣心は険しい顔で、ジッとジュエルシードを睨むように見つめた。

フェイトとアルフとシャナとヤミは黙ってその様子を見てる。

剣「すまぬな、今返すでござるよ」

そう言って剣心はジュエルシードをフェイトに返した。

フ「どうかしたの剣心？」

シ「そのジュエルシードがどうかしたの？」

ジュエルシードを受け取ったフェイトは首を傾け、シャナは剣心に質問する。

剣「いや・・別になんでもないでござるよ」

それっきり剣心は黙ってしまった。

表情は険しいままだ。

ア「・・・それじゃあいくよ！」

アルフが構える。準備が終わったのだ。

ア「はぁあああ！！」

アルフの足下にオレンジ色の魔法陣が展開される。

それにジュエルシードが反応して空が暗くなり、海では激しく雷鳴が轟く。

剣「シャナ殿、ヤミ殿。少し耳貸して欲しいでござるよ」

シ「剣心？」

ヤ「どうかしたんですか？」

二人は首を傾げた。

アルフが作業をしている時、剣心は二人に自分の考えを話し始めた。

フェイトとアルフに聞こえないように。

なのは達も同じく街でジュエルシードを探していた。

な「こ・・これは!?」

別々に探してたユーノが街の異変に驚く。

ユ「こんな街中で強制発動!?」

空を見上げてユーノは叫んだ。

ユ「く・・!広域結界!間に合え!」

ユーノの足下に緑色の魔法陣が展開された。

剣「これが拙者の考えなのだが・・・」

剣心は自分の推理を二人に聞かせた。
聞いた二人は各々驚いていた。

ヤ「確かに信憑性は高いですね」

ヤミは自分の顎に手を当てながら言う。

シ「でも、もし、剣心の推理が正しいなら・・・フェイトが虐待されてるってことになるわね」

シャナもヤミ同様に自分の顎に手を当てながら言う。

それを聞いて剣心達は険しい表情になった。

剣「まあ、まだ確実にそうと決まったわけではないが・・・」
ヤ「後、ジュエルシードの事ですが・・・」
シ「まあ薄々だけど、なんとなくそんな気はしてたのよね・・・」
剣「やはりか・・・」
ヤ「この事を銀時達にもいったんですか?」
剣「一応、話したでござるよ」

剣心は頷く。

フ「見つけた!」

フェイトの声に反応して、剣心達はフェイトの方を見る。

ア「けど、あっちも近くにいるみたいだよ」

アルフが言った直後、ユーノの広域結界で世界の色が変わった。

フ「早く片付けよ。バルディッシュ」

バルディッシュ〈イエッサー〉

フェイトがバルディッシュを構える。

なのは達も別の場所でジュエルシードの光を確認した。

新「あれはジュエルシードの光!?」

光を見ながら新八が声を上げた。

なのははレイジングハートを構える。

な「リリカルマジカル!」

レイジングハートに桜色の光が集束される。

フ「ジュエルシード、シリアル19!」

バルディッシュにも金色の光が集束される。

なのは「封!」

フェイト「印!」

二人のデバイスから閃光が放たれた。
閃光を受けたジュエルシードは光を失い、宙にたたずんだ。
なのは達は急いでジュエルシードのある場所に向かった。
ユーノも走る。

ヤ「予想通り銀時たちも来ていますね」

ヤミは剣心に顔を向けて言う。

剣「ああ」

剣心は銀時達の姿を確認しながら言う。

フ「剣心もシャナたちも無理に戦わなくていいんだよ」
剣「大丈夫、心配無用でござる」

剣心は腰に差してある逆刃刀とは別に刺している木刀を抜いた。

フ「・・ごめんなさい。私達のせいで家族と戦うことになって・・・」

表情を暗くしながらフェイトは剣心達に謝った。

ヤ「気にしないで下さい。彼等との喧嘩なんていつものことです」

そう言ってヤミはフェイトに軽く微笑み掛ける。

剣「そう言う事でござるよ」

そう言って剣心はフェイトの頭を軽く叩いた。

シ「さっさと終わらましょう」
フ「・・うん。アルフはフェレットの方をお願いね」
ア「はいよ！」

剣心はフェイト達と一緒にジュエルシードへ向かう。
なのは達はジュエルシードの前に着く。
そこへユーノもやってきた。

ユ「やった！なのは、早く確保を！」
ア「そうはさせるかい！」

空からアルフが襲い掛かる。ユーノが障壁を張って防御する。
剣心とシャナとヤミはアルフの後から来る。ユーノはアルフを引き付けて、なのは達から離れる。

新八「剣さん！」
神楽「シャナ！ヤミ！」

銀時とセイバーは黙って剣心を見ている。
銀時達が剣心達と対峙する。

シ「この間の続きをする？神楽」

シャナは炎の刀を構える。

神「望むところアルよ」

神楽もそういって傘を構える

剣「すまぬが・・・今回は拙者も参加させてもらうでござるよ」

剣心も木刀を構える。
ヤミも戦闘態勢にはいる。
なのははフェイトと対峙する。

な（目的がある同士だから、ぶつかり合うのは仕方ないのかもしれない・・・）

なのはは真っ直ぐにフェイトを見つめる。

な（だけど知りたいんだ！）

なのは一歩前に出る。

な「この間は自己紹介できなかったけど・・私、なのは！高町なのは！私立聖祥大付属小学校三年生！」

なのははフェイトに自己紹介した。
だが、

バ〈Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ〉

フェイトはバルディッシュを鎌の形に変形させた。

な「！！」

なのはもレイジングハートを構える。

な（どうしてそんなに寂しい眼をしてるのか・・・）

フェイトがバルディッシュを振り上げて襲い掛かる。

レ〈Ｆｌｌｅｒ　ｆｉｎ〉

なのはは足に翼を展開させて空を飛んだ。

フ「この前は忠告できなかったけど、今度は言う。前みたいに手加減できないからできればもう、私達の前に現れないで」

フェイトは空中で佇みながら言う。

な「そう言うわけにはいかないの！」

なのはは、怯まずにフェイトに立ち向かう。

地上では、シャナと神楽が剣と傘で打ち合い。

剣心と新八とが木刀で打ち合い。

セイバーとヤミが戦闘態勢で睨み合っていた。

銀時は木刀を片手に持ち、その様子をセイバー達の後ろで見ていた。

新「剣さん！剣さんはこんなことする人じゃないじゃないですか！どうして僕達で争わなきゃいけないんですか！？」

木刀を交えながら新八が目の前の剣心に言う。

神「剣ちゃん、そんなにジュエルシードが欲しいアルか！？」

新八の隣でシャナと戦っている神楽も剣心の方に顔を向けて叫んだ。

剣心は表情を険しくしている。

新（・・・何だ？いつもの剣さんと様子が違う・・それにシャナちゃんとヤミちゃんも・・）

剣心達の様子に新八は違和感を感じた。

銀時も剣心達の様子がいつもと違うので、剣心達の様子を見ていたのである。

セイバーも剣心達の様子がいつもと違う事に気づいていた。

剣心が口を開いた。

剣「新八殿、神楽殿、セイバー殿、銀時。すまぬがこのまま拙者の話を聞いて欲しい」

新「え？」

神「剣ちゃん？」

最初は戸惑ったが、銀時達は剣心の言う通りにした。

剣「お主らすぐにジュエルシード集めをやめろ」

新「え？」

剣「もちろん、なのは殿とあの動物にもやめさせろ。こっちも何とかフェイト殿達を説得してやめさせる」

真剣な顔で剣心は二人に言う。

突然、ジュエルシード集めをやめろと言われて新八と神楽は戸惑った。

新「・・急にどうしたんですか剣さん？」
剣「さっきフェイト殿に頼んでジュエルシードを一つ見せてもらった」

そう言って剣心は宙に浮いてるジュエルシードを見た。

剣「手に取って見てわかった。あれは願いを叶える便利な道具なんかじゃない。あれは予想以上に危険なものだ」
神「どういう事アルか？」

神楽は首を傾げる。

シ「見た目は綺麗な宝石みたいだけど・・・中身はとてつもなく危険な感じがするものよ・・あれは・・私達が想像してる以上に・・・」

シャナは剣心の言葉を？げるように静かに新八達に話した。
話を聞いている新八と神楽は、いつの間にか冷汗を流していた。
しかし、セイバーと銀時は冷静な顔つきで真剣に聞いていた。

銀「やっぱりな」

銀時の言葉に新八と神楽は驚いた顔で銀時を見た。

新「銀さんはジュエルシードの危険性を知っていたんですか！？」
銀「まぁな。薄々は感じていたんでな」
セ「私もです。あれはかなり危険なものなんでしょう」

セイバーが腕を組みながら言う。

新「なんで言ってくれなかったんですか！」

新八は銀時達が大事な事を自分と神楽に言わなかった事に声を上げて叫んだ。

セ「確証がなかったんでしょう」

セイバーが冷静にそう言う。

確かに確証がないのにそんな事を言ったら、余計な不安を与えないために言わなかったのかと新八は思ったのでそれ以上は何も言おうとしなかった。

剣「とにかく、お主達はジュエルシード集めを止めろ」

新「で・・でも・・仮に僕らがジュエルシード集めをやめたとして・・他のジュエルシードはどうするんですか？」

街にはまだジュエルシードが散らばってる。

剣心の予想が本当なら、このまま放っておくわけにはいかない。

シ「フェイトから聞いたんだけど、『時空管理局』って言うのがあるらしいのよ。そいつらに他のジュエルシードを任せればいいのよ」

『時空管理局』。

数多に存在する次元世界を管理・維持するための機関。

銀時と新八と神楽とセイバーもある程度の事はユーノから聞いていた。

まぁ銀時やセイバー、神楽と同じく、剣心とシャナとヤミも時空管

理局にはあまり良い印象はもっていないが。

剣「こう言う事は、その道者達にまかせるべきでござる」

銀「けどよ、口で言うほど簡単じゃないぜ、なのはを説得するのは」

セ「確かになのはの決意は本物ですからね。一筋縄じゃいかないと思います」

神「難しいアル」

銀時、新八、神楽、セイバーは悩んだ。

剣「こっちもフェイト殿を説得できるか微妙なところだが・・・」

シ「フェイトってかなり頑固みたいだし・・・」

剣心、シャナ、ヤミは険しい表情で考える。

ヤ（拙者が言っても聞くかどうか・・・どうせ聞かぬだろうし・・・母親に止めさせるのは・・・無理だな。母親がフェイト殿にやらせているのはおそらく間違いない・・・）

剣心がそんな事を考えながら木刀を振ったら、新八の顎にクリーンヒットした。

新「ゴフッ！！」

新八は見事に宙に浮いた。

剣「あッ・・・すまんでござる」

フェイトは、なのはの後ろに回る。

レ〈Ｆｌａｓｈ　ｍｏｖｅ〉

足に展開した翼が羽ばたき、なのははフェイトの後ろに回った。

レ〈Ｄｉｖｉｎｅ　ｓｈｏｏｔｅｒ〉

レイジングハートから桜色の閃光が放たれる。

バ〈Ｄｅｆｅｎｃｅｒ〉

フェイトは金色の障壁を張って閃光を防ぐ。

な「フェイトちゃん！」

フ「！！」

突然、名前を呼ばれてフェイトは驚いた。

な「話し合いだけじゃ・・言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど・・話さないと、言葉にしないと伝わらない事だってきっとあるよ！」

フ「・・・・・・」

フェイトは何も答えない。

な「何も知らないのにぶつかり合うのは私、嫌だ！」

声に出して必死に自分の想いをフェイトに伝える。

な「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから。最初はユーノ君のお手伝いで集めてたけど、ジュエルシードの力で街の人や大切な人に危険が降り懸かったら嫌だから！」

フ「・・・・・」

フェイトは黙って、なのはの話を聞く。

な「これが・・私の理由！」

フ「・・私は・・・・」

なのはの想いに戸惑いながらフェイトが答えようとした時、

ア「フェイト！答えなくていい！！」

アルフがそれを止めた。

フ「！」

ア「優しくしてくれる人達の所で、ヌクヌクと甘ったれて過ごしてきたガキんちょに何も教えなくていい！！」

アルフの言葉に剣心は更に顔を険しくした。

剣（あの言い分だと、拙者の予想が当たりの確立がかなり高いな。）

表情を険しくしたまま剣心は考え込む。

ア「あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」
？「その通りだよ使い魔君」
ア「エッ！？」

突然後ろから聴いたことのない男の声を聞いて、アルフは驚く。

ドカアアアン！！

な「キャアッ！！」
フ「エッ！？」

なのはは後ろから火炎弾のようなもの当てられなのはは吹き飛ぶ

ユ「なのは！！」
ジ「君達はただ黙ってジュエルシードを回収していればいいのだよ」
ファ「そういうことね～」
剣「ッ！貴様は！！」
シ「だっ、誰よ！あんた達は！？」

そこに現れたのは魔人族の首領・ジュド、そしてファイナだった。

ジ「先ほどの事聞かせてもらったが、彼女に余計なことを言ってもらっては困るよ、剣客君」
剣「貴様ッ・・・！」
新「余計なこと・・・まさかさっきの話を！！」
ファ「そっ、聞いちゃったの、私の聴覚は普通の人間の数十倍もあるからねー」
ジ「そういうことだ。そちらの赤髪君以外は初めてだったね。私の名は炎帝のジュド、魔人族のリーダーだ。」
ファ「副官のファイナでーす」

銀「なにっ！？」

銀時はジュドの言葉を聴いて驚いた。

銀「テメェが、あのバケモンどもの親玉か！」

銀時がジュドに対して木刀を向ける。

ジ「まあ、君達から見ればそうなルね」

新「よくもなのはちゃんを！！」

なのはを襲ったジュドに腹を立てた新八が木刀を向け、新八がジュドに飛び掛る。

しかし、ジュドはそこから一歩も動かず、指を鳴らした。そのとたんに爆発が起こり、新八を襲った。

パチン！

ドカアン！！

新「グハッ！！」

銀・剣・神・セ・シ・ヤ『新八（殿）！！』

ジ「雑魚に用はないよ」

フ「あっ・・・あなたはいったい」

ジ「私の事などどうでもいいだろう。そんなことよりいいのかね、ジュエルシードの回収は？お母さんが待っているよ」

フ「！！」

ジュドの言葉でフェイトは我に帰り、ジュエルシードの方へ向かっ

た。
そして、バルディッシュがジュエルシードに触れたその瞬間、ジュエルシードから強烈な光が放たれた。
その時、強烈な衝撃波が起こり、フェイトを吹き飛ばした。
銀時達も衝撃波に吹き飛ばされそうになるが、離れていたので、飛ばされずに済む事ができた。

ア「フェイト！」

アルフが叫んだ。
銀時、神楽、セイバー・ユーノは急いで倒れているなのはの元に向った。
新八は気絶しているため銀時に背おわれている。
フェイトはジュエルシードから離れた。
フェイトは傷ついたバルディッシュを見た。

フ「大丈夫？戻ってバルディッシュ」
バ〈Ｙｅｓ，ｓｉｒ〉

バルディッシュは小さな三角系になり、フェイトの手の甲の手袋に戻った。
フェイトは目の前に佇んでるジュエルシード目掛けて走った。

ア「フェイト！ダメだ危ない！！」

アルフの制止も聞かず、フェイトはジュエルシードを掴み取る。
するとジュエルシードから強い光が放たれる。

フ「く・・！」

フェイトはその場に座り込み、魔法陣を展開させる。

剣「フェイト殿！」

剣心はフェイトの行動を見た途端にフェイトのいるところに走り出した。

フェイトはその場に座り込み、魔法陣を展開させる。

フ「止まれ」

光が激しさを増す。

フ「止まれ・・止まれ！」

手袋が破れて血が吹き出る。

剣心が近くまで来ようとした時、

フェイト「こないで剣心！」

剣「そういうわけにはいかんでござるよ！」

剣心はフェイトの手の中に強引に自分の手を入れ、ジュエルシードを両手で掴んだ。

直後、剣心の体に激痛が走り、手から血が吹き出た。

剣「ぬ・・ぬう・・！」

剣心は声を上げるのをこらえ、必死に激痛に耐えていた。

フ「剣心！」

銀時・シャナ・ヤミ・神楽・セイバー
『『剣心！』』

銀時達が剣心の名を叫んだ。
剣心は体に激痛を受けても剣心はジェルシードを離そうとはしなかった。
もし離してしまえば、またフェイトがジュエルシードを掴もうすると思ったからである。
フェイトは泣きそうな顔で剣心の両手を握っていた。

ア「剣心！魔導師でもないのに、なんて無茶するんだい！！」

アルフが悲鳴に近い声を上げる。

フ「剣心！」

フェイトが剣心の名を叫ぶ。

剣「はっ・・早く・・・拙者が・・・抑え込んで・・・いるから・・・早く・・封印を・・！」
フ「剣心・・！くっ！止まれ、止まれ、止まれ、止まれ！」

懇願するようにフェイトは剣心の手を握り締める。
やがてジュエルシードの光が収まり、魔法陣も消える。
剣心は地面に膝をついた。

フェイト・アルフ・シャナ・ヤミ
『『剣心！！』』

フェイトは剣心の体を抱え、アルフは剣心の木刀を拾い、人型に戻

って駆け寄る。
アルフに続いてヤミとシャナも駆け寄る。

フ「剣心！しっかりして！」

フェイトは涙を流しながら言う。
剣心の手からポタポタ、と血が地面に落ちる。

剣「・・・心配ない・・これくらい・・だい・・じょうぶで・・ござるよ・・」

そう言って剣心は、ゆっくりと目を閉じて気を失った。

フ「剣心！」

フェイトは剣心を抱く腕に力を入れた。

銀時・神楽・セイバー
『『剣心（ちゃん）！』』

銀時、神楽、セイバーが駆け寄ろうとした。
その時、アルフは振り返って射抜くような鋭い眼で新八達を睨みつけた。
フェイトもまた涙を流しながら射抜くような視線で銀時達を見た。
しかし、フェイトたちが睨み付けたのは銀時達だけではなかった。
アルフとフェイトは銀時達から視線を外し、ジュド達を睨みつけた。

ジ「クックック、いやぁお見事お見事、まさかあそこまでするとはね」

ジュドは手を叩いて拍手をした。

フ「よくも、剣心を・・・！」
ジ「よくも？私達は何もしていないが」
ア「とぼけるんじゃないよ！お前がフェイトをけしかけたから「先に、彼女をけしかけようとしたのは君だと思うが？」ウッ・・・」

ジュドの言葉にアルフは声を詰まらせる。
ジ「大体、君が無茶な事をしたから彼はああなったのだろう。それで私達や、彼らを睨みつけ、怒りをぶつけようとするなど筋違いにもほどがあると思うがね」
フ「う・・・うううっ」

フェイトもジュドの言葉に声を詰まらせる。

ジ「全く・・・これだから世間知らずの子供は困（ビュオッ！）ヌッ！」
シ「お前エエエエエ！！」
銀「その薄汚ねえ口を今すぐ閉じやがれ！！」

ジュドがしゃべっている途中で銀時とシャナが刀と木刀をジュドに向かって振り下ろした。そしてジュドはそれをサッと交わした。
そして、銀時達もジュドを睨みつける。

ジ「おお、怖い怖い。さてこちらの用は済んだし、我々は引き上げるとしよう。行くぞファイナ」
ファ「ハーイ、ジュド様♪」

そういってジュド達はその場から消えた。

銀「クソッ！また消えやがった！」

銀時はその場で唇をかみ締める。
そして銀時達は剣心の方に顔を向ける。

銀「おい、剣心大丈「来ないで！！」」ヌッ！？」

フェイトの制止の言葉に銀時達は足を止める。

フ「あなた達が私達の邪魔をするから剣心はこんな怪我を！」
フェイトが銀時達に対して涙を流しながらそういうがシャナが突然
フェイトの頬をぶった。

パアン！

ア「ちょっ、フェイトに何を！？」
アルフがシャナの所に行こうとするがヤミがそれを止めた。

ア「何で止めるんだいヤミ！そこをどい「ちょっと黙っていてくだ
さい」うっ・・・」

ヤミは冷たい顔でアルフを睨みつけた。アルフはその迫力に黙って
いるしかなかった。

シ「お前いい加減にしなさいよ！！お前がアルフの言葉を聴かずに
無茶なことしたから剣心がこうなったんでしょ！銀時達だけのせい
にしてんじゃないわよ！！」

シャナは怒りの言葉をフェイトに投げつけた。フェイトは叩かれた
方の頬を手で押さえてただ黙っていた。

シ「・・・もういいわ、帰りましょう。ヤミ、剣心をお願い」
ヤ「はい」

そういって、ヤミは剣心を持ち上げた。

シ「・・・・ごめん銀時、悪いけど今日の所は帰ってくれる」
銀「ああ・・」

ヤミは剣心を背おって、フェイトとアルフとシャナと共にビルを渡りながら去っていった。
銀時達も、気絶したなのはと新八を背負って帰って行った。

第十二訓　無茶をしてもいい事はない（後書き）

新八「結構つらい場面でしたね」

セイバー「そうですね」

支配者「ではまた次回もお楽しみに」

第十三訓　料理は適当に作るとろくなことにならない（前書き）

支配者「今回はほのぼの系です」

銀時「あんまほのぼの系とは思えねーがな」

支配者「あと新八のためのお楽しみ第2弾が後書きにあります」

新八「・・・・・・今度こそ本当にお楽しみなんでしょうね・・・・・・」

支配者「多分ね♪」

新八「多分かよ！」

第十三訓　料理は適当に作るとろくなことにならない

フェイト達はマンションの部屋に戻った。
気絶してる剣心を、フェイトの部屋のベッドに寝かせて傷の手当てをしている。
フェイトの方の傷は剣心が庇ったおかげて軽いもので済んだ。

ヤ「さて、これでいいですよ」

ヤミが剣心の傷の手当てを終える。

フ「剣心・・・」

フェイトは離れてその様子を見ていた。

フ「ごめんなさい・・私のせいで・・・・」

フェイトは悲しげに顔を俯かせた。フェイトの目から涙がポロポロと垂れる。

ア「フェイト・・」

隣に座ってるアルフは優しくフェイトの肩を抱いた。
シャナとヤミは剣心の近くに座って、心配そうに剣心を見ている。
フェイトも近くに行きたかったのだがシャナに「お前は来ないで！」ときつく言われてしまい近づけなかった。

シ（あの時私がもっとしっかりしていればこんな事にならなかった

のに・・・クソッ！）

シャナは剣心を守れなかった自分に怒りを感じ、拳を振るわせる。
それはヤミも同じであった。

フェイト「ごめん・・剣心・・・本当にごめんなさい・・・」

俯き、涙を流しながらフェイトは謝った。
その時。

剣「別にフェイト殿のせいではござらんよ」

声がした。フェイトは近くに言って剣心の顔を見た。。
剣心はいつの間にか目を開けていてフェイト達を見ていた。

フェイト・シャナ・ヤミ
『剣心！』

ア「気がついたのかい！？」
剣「ああ」

ゆっくりと剣心は上半身を起こした。

シ「剣心！良かった！」

シャナは思わず剣心に抱きついた。

フ「剣心ー！！」

フェイトもシャナと同時に剣心に抱きついた。

ヤ「よかったですね」
フ「うん！本当によかった！」
シ「って、何でどさくさにまぎれてお前も抱きついてんのよ！」
剣「やれやれ」

剣心は抱きついているフェイトとシャナの頭を微笑みながら優しく撫でた。
シャナはすぐ離れたが、フェイトはしばらくしてから剣心から離れた。

ヤ「剣心。体は大丈夫ですか？」
剣「もう平気でござるよ」

剣心は腕を回しながら言う。

フ「剣心・・本当にごめんね。私のせいで・・剣心を危ない目にあわせて・・・・・」

フェイトはまた悲しそうな表情で顔を俯かせる。そのとき、剣心がため息をついた。

剣「これは拙者の意志で動いてできた傷でござる。だからそうやって自分を責めるん必要はござらんよ」
フ「剣心・・・」

場の空気が少し和らいだ感じがした。

剣「しかし、フェイト殿」

剣心は微笑んで、しばし間をとった。

剣「それとこれとは話しは別でござる」

剣心は急に真顔になり、フェイトに拳骨をを食らわせた。

フ「っ！！」

フェイトは両手で頭を押さえて痛みに悶えた。

ア「剣心！あんた何やってんだい！？」

アルフが剣心に飛び掛かろうとして、

シ「伏せ」

ア「わんっ！・・・ハッ！」

シャナの突然の言葉でアルフは思わず、伏せをしてしまった。

剣「フェイト殿。前にお主が、拙者に何て言ったか覚えているでござるか？」

フ「・・・・・・」

フェイトは剣心に何と言ったか記憶を辿る。

剣「お主は拙者に“一人で無茶はしないで”と言ったでござろう」

フ「・・・・」

フェイトは顔を俯かせたまま黙って聞いてる。

剣「ところが、一人で無茶をしたのはフェイト殿。お主の方だ」
フ「・・・・・」
剣「子供が、何でも一人で背負おうとして・・お主は拙者が信用できないか？」
フ「そんなの事ない！」

フェイトは剣心の言葉を声を上げてはっきり否定する。フェイトの様子に剣心は二度目のため息をついた。そして、剣心の顔はどことなく笑っていた。そしてゆっくりと片手をフェイトに伸ばした。

フ「！」

また殴られると思ったフェイトは、ビクッと体を震わせて目を閉じた。
だが、頭には痛みではなく暖かさを感じた。
ゆっくりと目を開けると、ソラはフェイトの頭に手を乗せていた。

剣「お主はまだ子供なのだから、もっと周りを頼って欲しいでござる。甘えても良いのでござる。お主にはアルフ殿がずっと一緒にいてくれたでござろう」

微笑みながら剣心はフェイトに言った。言われてフェイトはアルフを見た。
アルフも微笑みながらフェイトを見つめてる。

剣「それに拙者もな」

そう言って剣心はフェイトの頭から手を離した。

フ「剣心・・・」

フェイトは剣心に顔を向けた。

剣「もう一人で無茶してならんよ」

フェイトを真っ直ぐに見ながら剣心がそう言う。

フ「・・うん」

フェイトは首を縦に動かして答えた。

フェイトの答に剣心は満足そうに笑った。

二人の様子を見守ってたアルフは嬉しそうに笑って尻尾を振っていた。

シ「ホント、剣心は甘いんだから」

ヤ「まあそれが剣心のいい所です」

そう言ってシャナとヤミもその様子を見ていた。

剣「それでは、夕食にするでござるか」

シ「あっ、剣心。その手で料理が作れるの？」

剣「あっ」

シャナに言われて剣心は自分の手を見た。

明日には治るだろうが、包帯でグルグル巻きになってる今の手では調理はできない。

しかもこのメンバーでまともに料理できる人物はいない。

シャナもヤミはもちろんできない。（料理の練習はしているらしいが、この前は真っ黒い料理しかできなかった）

どうしたものか、と剣心が悩んでいると、

フ「まかせて剣心！」

フェイトが声を上げて言う。

剣「おろ？」

フ「今日は私が作るよ」

フェイトは笑顔で言う。

ヤ「フェイトが料理なんてできるんですか？」

フ「実は、今日は私が料理を作って剣心に食べてもらおうと思ってたんだ」

フェイトは笑顔でそういう。

剣「そうでござるか。ではおまかせしよう」

フ「まかせて！」

フェイトは胸を張って言う。

フェイトは夕飯の材料を用意する。
フェイトが用意した材料が台所に並ぶ。
そこにはなぜかめちゃくちゃ新鮮な魚介類が並び始めた。

剣「アルフ殿。さっきフェイト殿が夜にも関わらず、マンションを出てった理由って・・・」

剣心がアルフに顔を向けながら言う。

ア「あ、ああ。あの新鮮な魚達を取りに行くためだよ」

アルフは汗を掻きながら言う。
実はフェイトは「新鮮一番！」とか言って、バリアジャケットになり飛んで、海の方に飛んで行ったのである。
って、ビニール袋に沢山の魚介類を入れて持って帰って来たのである。
出かけてから、マンションに帰ってくる時間、わずか４０分程度で戻ってきた

剣「いや、なぜかマグロとかまであるのだが・・・どう考えてもフェイト殿が持って帰れる大きさとは思えんのだが・・・」

剣心がフェイトが台所に乗せたマグロを指指しながら言う。

シ「鯛まであるわよ」
ヤ「おいしそうですね」

シャナとヤミはそんなことを言う

他にもフェイトは色々と食材をとってきていたが、食べられない者のほうが多かったので剣心がアルフと一緒に分けた。

ア「そう言えば、剣心。明日のバイトはどうするんだい？」

アルフが急に話を変えた。

アルフは剣心からバイトがいつあるか剣心から聞いているので、剣心が明日バイトがある事も知っている。

剣「ああ、そうでござるな。とりあえず今から翠屋に電話を入れて休む事にするでござるよ。一応念のために」

ア「悪いね剣心」

アルフは申し訳なさそうに言う。

剣「気にしなくていいでござるよ」

剣心はそう言って受話器に手を掛け、翠屋に電話をする。

剣「と言う訳なので、済まぬが明日は休みませて頂くでござる」

剣心は伝えたい内容を一通り桃子に伝えた。

桃子は快く剣心が休むのをOKした。
あ、魔法の事は隠して、嘘を織り交ぜて剣心は話した。

剣（とりあず休みは貰えたでござるな。銀時達が途中で電話に割り込まなくてよかったが、電話だといろいろと面倒な展開になりそうでござるしな。後はこれを捨ててくるか）

剣心は手に持っている、食べられない食材が入ったビニールを見る。

剣「ちょっとこれを捨てて来るでござる」

剣心はシャナたちに言いながらゴミ捨て場に向う。しかし、剣心は気づいてなかった。
シャナたちが冷や汗を掻いていた事に。

剣心がゴミを捨ててリビングに戻った後になぜか顔を青くして固まっているアルフとシャナとヤミが目に入った。

シ「どうしたんでござるか？そんなところで？」

剣心が声を掛けると、アルフが無言でキッチンを震える手で指差した。

剣心が不思議に思い、キッチンの方を見ると、

フ「ふんふ～ん♪」

笑顔で鼻歌歌いながら、虹色の何かを掻き混ぜているフェイトの姿が目に入った。

アルフの顔は涙目だった。声も泣きそうな感じである。

シチュー？あれがシチューなのか？つうか、シチューって何だ？どう考えてあれはシチューではないとおもいたい。

そもそもシチューだったらあの魚介類はいらないだろ。

そう考えていると、剣心の目に無残に切り刻まれた魚介類達の姿が目に入った。

剣（まさかフェイト殿は、取ってきた食材ほとんど、鍋に入れたのか？）

フェイトは今度はシチュー（？）にキノコを入れ始めた。

剣心が冷や汗流しながらその光景を見ていると、

剣「ん？」

シャナが剣心の服の袖を引張っていた。

シ「けっ剣心～（涙）」

シャナは涙目になり、泣きそうな声で剣心の名前を呼ぶ。

剣心にも泣きたいシャナの気持ちは良く分かった。

なにせ全員フェイトのあのシチュー（？）を食べなければいけないのだから。

フェイト「剣心。できたよ♪」

そこには、虹色から魔女がグルグル回した謎の液体みたいなもの、
もはやシチューと呼べるかどうかも怪しい物が入った鍋を鍋掴みで
持った、笑顔のフェイトの姿がそこにあった。

剣心、シャナ、ヤミ、アルフは目の前に置かれた物を見て絶句し、
顔面蒼白になっていた。

フ「さ、食べて」

剣心達の様子に気づかないフェイトは、剣心達にフェイトが作った
シチュー（？）を食べるように勧める。笑顔で。
しかし、誰一人としてそのシチュー（？）に手を付ける者はいない。
そりゃそうだである。こんな物食べたらただじゃすまない
だって皆命惜しいもん。

フ「どうしたの？」

フェイトは皆が一向に食べない事で首を傾げる。

剣（まっまさか・・・ここまで酷いとは・・・）
ヤ（まさか、ここまで酷い料理を作れる人間がまだいたとは）
シ（こっこれ食べたら死んじゃうじゃないの！？）
ア（フェイトが料理できないのは知ってたけど、これ程とは）

各々、頭の中で目の前のシチュー（？）の感想を思う。

フ「え、もしかして何かまずかった?」

フェイトは涙目で言う。

フェイトのその顔が、四人の良心にグサグサつきささる。

剣（仕方がない）

剣心は覚悟を決めて、シャナ、ヤミ、アルフよりも先にシチューを飲んだ。

シ・ア・ヤ

『剣心!』

剣「あ、意外に食べられるでござ・・・・（バタ）」

剣心は気絶した。

フ「え?剣心?剣心ーー!!」

フェイトは剣心にすぐに駆け寄った。

剣心は意識を失う前に“フェイトに絶対料理の特訓をやらせた方が良い”と思った。

その頃、ここは翠屋。
銀時達は今、テーブルを囲んで夕食を食べている。
なのはと新八の怪我はセイバーが治癒術で治していたのでみんなと一緒にご飯を食べる事ができていた。
本当は剣心の怪我も治したかったのだがそんな暇もなく剣心達は行ってしまった。

士「新八君。なんか帰ってからの元気が無いようだけど、何かあったのかい？ご飯もあまり食べてないし」

実際誰の目から見ても、四人が暗くなり、落ち込んでいるのは容易にわかる。
剣心の事が心配だからである。
銀時は特に変わった様子もなく夕食を食べている。
ただ、時たま、窓の景色を見たりしている。

新「ええ、まあ・・・」

新八は曖昧な返事をした。
さすがに剣心がジュエルシードを掴んで怪我したなんて言えないので、どう言えば良いのか考えていた。

桃「あ、そう言えばあなた。さっき剣心さんから電話があってね、明日はバイトを休むそうよ」

桃子が突然、剣心が休む事を士郎に言った。

新八・神楽・なのは、セイバー

『『！！』』

桃子の言葉で四人は動揺する。
銀時も箸を止める。

士「まあ別に人数が足りないわけじゃないから一向に構わないけれど何かあったのかい？」
桃「ええ。なんでも手を怪我したそうなのよ。でも、？一日もすれば治る”って言ってたからたいした事はないそうよ。念のために休むだけみたい」

桃子の言葉で新八、神楽、セイバー、なのはは、胸を撫で下ろす。
剣心の怪我が大した事なくて安心したのである。
銀時はまた箸を動かす。
まぁ今さっき、手の怪我よりも遥かにでかいダメージを剣心が受けた事は知る由もないが。

銀（ま、あいつがあれくらいでどうにかなるたまじゃねぇけどな）

なんだかんだで、銀時も剣心の事を気に掛けていた。

一方、フェイト達のマンションではシャナたちがフェイトの料理で倒れた剣心の看病をしていた。
その事を銀時達は知る由もなかった。
フェイトはこれからはもっと料理の勉強をしようと心に誓うのだった。

第十三訓　料理は適当に作るとろくなことにならない（後書き）

支配者「では後書き【新八の幸福の一時（2）】をどうぞ」

ここはとある部屋の中
そこで新八はソファに座っていた。

新八「何が始まるんだろう・・・」
新八がそんなことを考えていると何とお通となのはがやってきて新八の隣に座った

新八「ウッウソォオオオオ！！！！なのはちゃんとお通ちゃんが同時に僕の隣に！！！？？？」
新八はテンション超ＭＡＸになった。

お通「新八君」
なのは「新八さん」

お通・なのは
『”好きです（ハート）”』

新八（きゅッ究極の幸せだアアアアアアアアアアア！！！この二人に告られるなんてぇエエエエエエエエエエエエ！！！！）
新八はテンションの上がりすぎで鼻血を出しまくっていた。
さらに二人は

お通「新八君」
なのは「新八さん」

お通・なのは
『抱いて』
二人がこんな事を言うので新八は

ポーーーーッ

新八「今すぐ優しく抱きしめてあげるよお通チャアアアアアアアアン！！！なのはチャアアアアアアアン！！」
そういって新八はお通となのはに抱きつこうと飛び上がった瞬間

西郷「ウレシ〜い」
アゴ美「やさしく抱きしめて〜ン」
何とお通がお通の格好をした西郷に、なのはがなのはの格好をしたアゴ美に変わっていた。

パリィイイン

新八「ギャァアアア！！！！！！！！？？？？（大吐血）」

新八がこの世の地獄以外の何者でもない究極の恐怖を体験した瞬間であった。

支配者「はい。終了です。面白かったですか？」

シャナ「ひっ・・・酷すぎる・・・・」

神楽「さすがに・・・これはかわいそすぎアルな・・・・・・」

剣心「新八殿が不憫すぎて涙が出てきたでござる・・・・」

セ・ヤ「そうですね・・・（涙）」

支配者「そうでもないでしょ。だって途中まではなのはとお通だったんです。お通となのはに同時に告られるなんてありえない夢を一瞬でも見させてやったんですからむしろお礼を言って欲しいくらいです」

銀時「新八・・・・安らかに眠れ」

支配者「ではまた次回♪・・・・・ククククククッ」

新八「ドチクショォオオオオオオオオオオオオオオ！！クソ作者ァアアアアアア！！！！いつか必ずブッ殺してやるゥウウウウウウウウウ！！！！！！！！！（血涙）」

第十四訓　最近は子供の事を考えない親が増えた（前書き）

支配者「今回はプレシア登場です」

銀時「ッたくやっとかよ」

第十四訓　最近は子供の事を考えない親が増えた

剣心は朝食を食べ終えた後、翠屋に来ていた。
剣心がフェイトに（母親に会うなら何か手土産くらい持って行った方がいいでござろう）と言って、翠屋のケーキを買いに来たのである。

剣（ここの菓子は一味違うからここで買うの良いでござろう。それに今の時間帯ならなのは殿は学校に行っていていないはずであろうからな）

剣心は前になのはが通っている学校の事を桃子から聞いたのである。
剣心がなのはに会うのを避けているのは、なのはが自分とフェイトが協力してジュエルシード集めをしている事を知ってしまったので、会ったらたぶんフェイトに会わせてをしつこく言われ、それに銀時達も便乗してするだろう。
そうなれば銀時を達をフェイトのいるマンションに行かせないようにするのはだいぶ骨が折れるだろうと思ったからである。
銀時達ならまだ説得は簡単だが、なのはとなるとそうはいかない。
剣心から見てもなのはは、フェイトとお話をする事に必死な事が分る。
そして銀時達はそのなのはの手伝い、つまりなのはの味方をして、是が非でもなのはをフェイト会わせてを連呼するのが容易に分る。
銀時はともかく、新八達は必死になるだろう

剣（特に新八殿は説得するのがかなり厄介なはずだ。新八殿はなのは殿に好意があるようだし・・・せめて、銀時達がなのは殿を説得していれば良いんだが）

剣心はそう思いながら翠屋の扉を開けた。
そして、剣心の目の前にレジをしているなのはの姿が目に入った。
なのはは扉を開けた剣心に気づいた。
剣心は驚く

剣「なッ！？」
な「あ！剣心さん！」
剣「・・・失礼したでござる」

剣心は扉を閉め、ダッシュで逃げる。
なのは、レジを飛び越えダッシュで扉に行き、扉を開け剣心に追いつき。剣心の手を捕まえる。
その間、わずか十秒弱。

な「待ってください！フェイトちゃんに会わせて下さい！」

なのはは剣心の手を強く握りながら言う。

剣「いきなり用件を言ってきたでござるな・・・」

剣心ならなのはの手を振りほどく事は簡単だったが、なのはの後を追ってきた新八と神楽に拘束されてあえなく店でなのは達と話す事になった。

今剣心は翠屋の休憩所にあるテーブルに座り、剣心の正面になのはが座り、なのはの肩にはユーノが乗っている。
その後ろに執事服着た銀時とメイド服着たセイバーがいて、新八と神楽はテーブルの両側に座っている。
明らかに新八と神楽は剣心を逃がさないようにしているのが分る。
そんな状態でも剣心は物怖じしている
ちなみにユーノは傷ついたレイジングハートをなのはの部屋で見ている。

剣「で、用件はなんでござるかな？」
な「フェイトちゃんに会わせて下さい」

なのはは剣心の目をしっかりと見て言う。

剣「会ってどうするんでござるか？」
な「お話がしたいんです」

なのはの目は決意に満ちていた。

剣「そうでござるか。では」

そう言って剣心は席を立とうとするが新八が止める。

新「“では”じゃないですよ！なのはちゃんの話をちゃんと聞いてください！！」

新八は剣心の態度に声を荒げる。

剣「そういわれても困るでござるよ～」
新八「“困るでござるよ～”じゃねぇよ！！話を聞けって言ってん

でしょうがァ！！」

新八は首に青筋を立てて言う。

剣（そう言われても今、なのは殿とフェイト殿を今合わせるわけにはいかんでござるし・・・）

剣心はなんとかこの状況を打破できないか考えていた。
下手をすればなのはをフェイトに会わせなければいけなくなる。
そうなれば確実にまずい。
拠点を捨てなければいけないし、会った時点でバトルになって、最悪ジュエルシードを全部奪われる可能性がある。
そんなことになれば、正直言って笑えない。

剣「と言うかなのは殿。学校はどうしたんでござるか？今日は平日のはずだが・・・」
なのは「学校は今創立記念日で休みなんです」
剣（そうでござるか・・・運が悪かったな）

剣心は自分の運の悪さを少し呪った

剣「そうでござるか。それでなのは殿、お主はジュエルシードは全部集めるつもりか？」

剣心はなんとか話しを逸らそうとする。

な「はい。前に銀さん達にジュエルシードは予想以上に危ない物だから集めるのは止めるように言われましたけど、でも私はやっぱり止める事はできないと言いました。ジュエルシードの事もフェイトちゃんの事もこのまま中途半端で終わらせる事なんてできないんで

す」

強い意思の篭った目でなのはは言う。
剣心はなのはのその意見を聞いた後、銀時の顔を見る。
明らかに剣心の目は「説得はどうしたんでござるか？」と物語っていた。
銀時は目を逸らす。

剣（少しは予想はしていたがここまで意思が固いとは・・・・）

剣心は内心溜息を尽く。

剣「それで何の話でござったかな？」
な「だからフェイトちゃんに会わせて下さい」
剣（やはり話しはかえられんか・・・）
剣「だがなのは殿。拙者はフェイトの居場所を言うわけにはいかない」
神「どうしてアルカ！」
新「なのはちゃんの気持ちが剣さんには分らないんですか！」

神楽と新八は剣心の言葉に声を荒げて言う。

剣「拙者がフェイト殿の居場所をお主達に言った事を知ったらフェイト殿はどう思うでござるかな？」

剣心は両手で後頭部を抑えながらそう言う。

な「！！」

なのはは“はっ”っとした顔になり、顔を俯かせる。

少し経った後、なのはは真剣な顔になり顔を上げる。

な「わかりました。これ以上フェイトちゃんの事は聞きません」

剣「そうでござるか。では拙者は菓子を買って帰るとしよう」

剣心はそう言ってケーキを買いに行く。

新「良いのなのはちゃん？剣さんにフェイトちゃんの居場所を聞かなくて」

新八は心配そうな顔でなのはの顔を見る。

銀「良いんだよ別に」

銀時がなのはの変わりに答えるように言う。

銀時「なのはは気づいたんだよ。もし剣心に今フェイト居場所を聞いちまったらフェイトと自分の間に大きな溝ができるって事にな」

セ「そうですね。銀時の言うとおりです」

銀時とセイバーは剣心の背中を見ながら言う。

銀時の言葉で新八と神楽も気づく。

確かにこのまま粘れば、剣心からフェイト居場所を聞けるかもしれない。

しかし、フェイトが剣心から無理やり自分達の居場所を聞いたと知れば、フェイトと自分たちの間に大きな溝ができるのは言うまでもない。

なのはもそれがわかったから、剣心から聞く事を止めたのである。

な「銀さん・・・私、ちょっと焦りすぎていたのかもしれません」

なのはも剣心の背中を見つめながら言う。

なのは「フェイトちゃんと早くお話したいと思ってちょっと強引になってました。それに剣心さんが言ってくれなかったら、取り返しのつかない事になっていたと思います」

なのはは俯く。

なのは「でも、これからは・・・ゆくっりでも良いからフェイトちゃん分りあおうと思います」

なのはは顔を上げて、決意に満ちた目で言う。

銀「そうか」

銀時はなのはの頭をポンと叩いて仕事に戻る。

その顔はどことなく笑っていた。

剣心が戻った後、フェイトとアルフと剣心とシャナとヤミはマンションの屋上にいる。

フ「剣心・シャナ・ヤミ。準備はいい？」

剣・シ・ヤ

『『ああ（ええ）（はい）』』

これから母親に、これまでの報告とジュエルシードを渡しにいく

フェイトはさっき剣心が買った、ケーキの箱を持っている。

剣心からケーキの箱を渡された時フェイトは喜んで受け取った。

フ「じゃあ行くよ。次元転移。次元座標。８７６Ｃ　４４１９・・・・」

フェイトが呟くと魔法陣の光が強くなっていく。

フ「開け、誘いへの扉。時の庭園、テスタロッサの主の所へ！」

魔法陣が強い光を発し、三人を包み込んだ。

高次空間内『時の庭園』。

光が止み、三人は時の庭園に到着した。

剣「なんだか気分が悪いでござるな」

剣心は口を抑えて気分を悪くしていた。

フ「剣心!?」

ア「どうしたんだい!?」

フェイトとアルフは剣心の変化に気づき心配そうな顔をする。

ヤ「気分が悪そうですね」

シ「だ、大丈夫、剣心!」

二人も心配そうな顔で剣心に声をかける。

多分剣心は今までいた所とは別の環境の空間に来たから、環境に慣れていないせいで気分が悪くなったのであろう。

剣「というか・・なんでお主らは・・大丈夫なんでござるか・・・?」

剣心は顔を青くさせながら言う。

ヤ「たぶん我々はこういう空間に対してなんらかの耐性があるんだと思います」

剣「まあ。なんとなく・・・分る気もするが・・・」

フ「剣心、大丈夫?」

剣「ああ、なんとか・・・とりあえず・・フェイト殿は・・先に言っててくれんでござるか。拙者も回復したら・・すぐに行くから」

剣心は吐き気をなんとか堪えている。

ヤ「安心してください。私とシャナが残って剣心を見ています」

フ「う・うん。わかった。無理しないでね剣心」

ア「ゆっくり休んでな」

そう言って二人は母親の所に向かった。

二人が行った後剣心は、座り込んで気分を落ち着かせた。

しばらくしてソラは気分が落ち着いた

剣「やっと楽になったでござる」

ヤ「ではそろそろ行きましょうか」

剣心の気分が治ったのでフェイトたちの所に行こうとした時、

シ「そう言えばフェイトのお母さんの部屋ってどこだっけ？」

剣・ヤ

『あ』

ヤ「そういえば聞くの忘れてましたね。どうしますか？」

剣「仕方ない。とりあえずそこら中を歩いて探すしかないでござるな」

結局剣心達は広い時の庭園をあてもなく歩く事になった。

しばらく歩いていると長い廊下に出た。

剣心は歩きながらどうやってフェイトの母親を説得させるか考えた。

剣（ジュエルシードを欲しているのはフェイト殿の母親の方・・こっちの説得も難しそうでござるな・・・そう言えば虐待の事もあった・・・どうやって説得するでござるか・・・気難しい母親でなければ良いが・・・）

手に顎を当てて剣心は悩み続ける。
少し歩くとアルフを見つけた。
だが様子がおかしい。
アルフは扉の脇で頭を抱えてうずくまってる。

剣「どうしたのだアルフ殿は？」
シ「何か様子が変ね」
ヤ「とりあえず行ってみましょう」

近づくにつれ、剣心はあることに気づく。

フェイトがいない。

剣心がそれに気づいた時、嫌な予感がした。

剣（ま・・まさか・・・）
ヤ「こんな所でどうしたんですかアルフ？」

ヤミの声に反応したのか、アルフの耳がピクンと動いた。
ゆっくりと顔を上げて剣心を見た。

ア「剣心・・」

アルフは立ち上がり、涙目になって剣心に抱き付いた。

ア「剣心っ！！」
剣「アルフ殿！？どうしたでござるか急に！？」

剣心は慌てながらアルフに尋ねた。

ア「剣心・・お願いだよ・・・フェイトを・・フェイトを・・助けて・・・」
剣「！」

アルフの言葉に剣心の目が見開かれた。その時、扉の中から何か音が聞こえてきた。

シ「・・なに、この音？」

シャナは謎の音に不安になる。

ア「フェイトが・・フェイトが・・・アイツに・・・殺されちまう・・」

アルフの言葉で剣心はある事を確信した。
フェイトが虐待を受けている事を。

剣「シャナ殿は此処で待っていて欲しい。ヤミ殿は拙者と来てくれ」

剣心の言葉にシャナとヤミは無言で頷く。
明らかにその言葉には怒りが入り混じっていた。
剣心は扉の前に立った後、無言で扉を突き破った。
扉は開き、剣心とヤミは部屋の中に入る。
部屋に入って剣心とヤミは目を見開いた。
バリアジャケットを引き裂かれ、体中に傷ができたフェイトが倒れ

ていた。

剣・ヤ
『『フェイト（殿）！！』』

二人は急いでフェイトに駆け寄る。
剣心は駆け寄ってフェイトを抱き起こした。

剣「フェイト殿！しっかりするでござる！」
フェイト「・・ぁ・・・剣心・・・？」

フェイトはうっすらと目を開けて剣心を見た。

？「いきなり扉を開けて入ってきて・・貴方達、一体何者？」

前から声が聞こえた。
剣心とヤミは顔を上げて声の主を見た。
そこには、まるで虫けらを見るような眼で見てくる黒髪の女が立っていた。

剣「そう言うお主こそ誰だ？」

剣心は威圧的に言う。
剣心の言葉に黒髪の女性は不快そうに眉間にシワを寄せた。

プ「・・私はプレシア。大魔導師プレシア・テスタロッサよ」
剣「拙者は緋村剣心と申す、彼女の家で居候させてもらっている」
ヤ「私はヤミです。一応彼女の友人なのですが」

ヤミの言葉も威圧的になっていた。

この時が、緋村剣心と大魔導師プレシア・テスタロッサが初めて対峙した瞬間だった。

剣「ヤミ殿。フェイト殿を頼む」

剣心はフェイトを抱いたまま立ち上がり、フェイトをヤミに渡した。

ヤ「剣心はどうするんですか？」

剣「拙者は彼女と話しがある」

ヤ「分りました。気を付けてください」

ヤミはそう言うと、フェイトを抱いてアルフ達の所に向った。

部屋には剣心とプレシアの二人っきりになった。

剣「お主、何故このような事をしている？」

剣心は静かな怒りを感じながらプレシアを睨み付けて言う。

プ「どういう意味かしら？」

プレシアは顔色一つ変えずに聞き返す。

剣「お主はフェイトの母親だろう！それなのに何このような仕打ちをしたかということをきいている」

プ「何故？あの子は、この大魔導師プレシア・テスタロッサの娘なのよ。それなのに、回収してきたジュエルシードはたったの四つ。この程度の成果しか上げられなかったからしつけ躾をしただけよ」

プレシアの言葉に剣心は怒りを燃やした。

剣「・・フェイト殿がお主の為にどれだけ頑張ったか・・どれだけ辛い思いをしたか、お主は分っているのか！」

怒気を含んだ視線をプレシアに向ける。

プ「さぁ？そんなのは私の知った事じゃないわ」

剣「貴様！！」

プ「目障りだわ。いい加減消えなさい」

プレシアから紫色の雷が剣心に向かって放たれた。

剣「くっ！」

剣心は横に跳んで雷をかわした。

プ（速い！）

剣心の素早さにプレシアは少し驚いた。

プ（魔力による肉体強化？違うわ。あの男からは全く魔力を感じない）

プレシアは杖を剣心に向けて再び雷を放つ。

剣心は人並みはずれた身体能力で雷をかわし続ける。

プ「たいした物ね。でもいつまで逃げ続けられるかしら！」

剣（このままでは少々まずいな、とはいえフェイト殿の母親を傷つけるわけには行かぬし・・・）

剣心は後ろに跳び、雷は剣心の前に落ちた。
後ろを向くと壁があった。

剣（まずいッ！このままではあの壁にぶつかる！）

だが剣心は、壁にぶつからなかった。当たる直前に壁は横にスライドして道が開かれたのだ。

プ「！！」

この時、初めてプレシアは焦りの色を浮かべた。

剣「ぬっ！」

剣心は床に倒れた。

剣「ここは一体？隠し通路か？」

立ち上がりながら剣心は隠し通路を見渡した。
少し狭い通路の先に何かを見つけた。

剣「なっ！？」

そのある物を見て剣心は驚愕した。
通路の先にはガラス張りのケースのような物があり、その中に一人の少女が裸で入っていた。

剣「・・フェイト殿・・！？」

第十四訓　最近は子供の事を考えない親が増えた（後書き）

銀時「今までのリリカル小説と変わらない内容だな」

支配者「仕方ないですよ、あくまで参考にしている部分の方が多いんですから」

神楽「次からはちゃんと書けヨ」

支配者「ヘイヘイ、ではまた次回」

第十五訓　でもやっぱり子供の事を考えている親のほうが多い（前書き）

支配者「今回はちょっとした感動が！」

ヤミ「そうですかね」

支配者「まあ良いじゃないですか、では第十五話です。」

第十五訓　でもやっぱり子供の事を考えている親のほうが多い

剣心の前に、ガラス張りの大きなケースがあった。
その中には、緑色の液体の中を漂う金髪の少女がいた。

「フェイト殿が・・・もう一人・・？」

中にいる少女はフェイトに瓜二つだった。
剣心がケースに近づこうとした時、

プ「アリシアに近寄らないで！！」
剣「！」

プレシアの怒声と共に雷が剣心を襲った。

剣「ぬっ！！」

剣心はなんとか雷を回避した。
プレシアも通路に入ってくる。

剣「プレシア殿・・だったか、これは一体どういう事でござる？」

剣心は目の前にいるプレシアを睨みつけた。

剣「ここにいるフェイト殿そっくりの少女は誰でござるか？」
プ「フェイトにそっくり？ふん。笑わせないで」

剣心の言葉にプレシアは鼻で笑った。

プ「私の可愛い『アリシア』を、あんな人形と一緒にしないでほしいわ」
剣「人形・・・？」
プレシアの言葉に、剣心は目を細めた。
プ「フェイト・テスタロッサは、私がアリシアの代わりに造った生命体よ。『フェイト』の名前はその当時のプロジェクトの名残よ」
剣「な・・！？」
剣心は目を見開いて驚愕した。
プ「けど姿形は同じでも、あの子はアリシアではなかった。アリシアの記憶をあげても無意味だった」
剣心は黙って聞いている。
プ「アリシアはもっと素直で明るくて、いい子だった・・いつも私に笑顔を見せてくれた」
プレシアは遠い目をしていた。
プ「だから私は、あんな出来損ないを捨ててアリシアを蘇らせる事を決意したのよ！」
プレシアの目がカッと見開かれた。
プ「ジュエルシードを使って、失われた秘法を用いる約束の地『アルハザード』へ向かって、娘のアリシアを蘇らせるのよ！！」

プレシアは両手を高らかに挙げて言い放った。
剣心はジッとプレシアを見つめた。プレシアの姿を見て剣心の脳裏に一人の男が浮かんだ。

林流山。

剣心のいた世界の有名な機械技師だ。
剣心はプレシあの話を聞いて林流山の起こした事件を思い出した。
まぁ銀時達が関わる事件はニュースとか新聞でも大きく取り上げられていたものも多いからだいたいは誰でも知っていることだ。

自らの実験中に娘を死なせてしまい、死んだ娘を蘇らせようと【芙蓉プロジェクト】を計画した。
娘・芙蓉の人格データをからくりにんぎょう機械人形に引き継がせ、娘が死んでしまった苦しみや悲しみから逃れるために流山自身も実験体に使い、自分の人格データを機械人形に組み込んだ。
だが全ては死んだ娘のためではなく、自分のためだけにしたこと。
そのことを思い出した剣心は口を開いた。

剣「・・・プレシア殿」

プレシアは、上げていた視線を剣心に戻した。

剣「お主は娘のために、娘を生き返らせようとしているわけじゃない」
プ「・・・何ですって？」

剣心の言葉にプレシアは目を鋭くする。

剣「フェイト殿を造ったのも、アルハザードに行ってアリシア殿生

き返らせようとしているのも全部、自分のためでござろう」
プ「!?」

プレシアの目が見開かれる。

剣「お主は自分の寂しさを埋めるために、フェイト殿とアリシア殿の魂を弄んでいるだけだ」

プレシアの顔が怒りで歪んでいく。杖を握る手に力が入る。

プ「・・・黙りなさい」
剣「お主は、娘が死んだ事実から逃げているだけだ」
プ「・・黙れ」

剣心の言葉がプレシアの心に突き刺さる。

剣「たとえアリシア殿が生き返ったとして、今お主がフェイト殿にしたことを知ったら彼女はどう思う!今のお主が、アリシア殿に“母親”だと言えるのか!!」
プ「黙りなさいって言ってるのよ!!」

プレシアから、巨大な雷が剣心に向かって放たれた。
剣心はそれを避けて言葉を続ける。

剣「今のお主はアリシア殿に母親と呼べる者ではござらん!!」
プ「黙れぇぇえええ!!」

プレシアは涙を流すと同時にさっきよりも強い雷を剣心に向けて放つ。

剣「ぐッ・・・！！」

剣は避けようとせずに雷を受ける。

プレシア（避けなかった！？）

避けると思っていたプレシアは少し驚いた。雷がおさまる。
剣心は火傷を負い、着物は所々焦げて煙が出てる。
肩で息をしながら剣心はプレシアを見る。

剣「・・気は済んだか？」
プ「く・・！うるさい！その減らず口を黙らせ・・」

杖を掲げようとしてプレシアの動きが止まった。

プ「う・・・ごほっ！」

突然プレシアは手で口を抑えて、その場に膝をついて咳込んだ。

剣「プレシア殿！どうしたでござる！？」

プレシアの異変に剣心が駆け寄る。
床にはプレシアの血が付着していた。

剣「お主・・まさか病に・・・」

プレシアは杖を立てて立ち上がった。

プレシア「・・ふふ。大魔導師でも・・不治の病は治せないのよ・・」

プレシアは皮肉な笑みを浮かべた。

プ「・・私を殺すなら今がチャンスよ」

目の前の剣心を睨みつける。

剣「・・そんな事する気はない。お主を殺す気などない、どんな悪党でも拙者は人の命を取る気はござらん。それに・・」

剣心は一旦、言葉を切った。

剣「フェイト殿が悲しむ」

プ「・・・・・・・」

プレシアは顔を俯かせた。

プ「剣心・・だったかしら?」

剣「ん?」

プレシアはゆっくりと顔を上げた。

プ「貴方なら・・雷をかわしながら一気に私の懐に入り、その木刀で叩けたはずよ・・・何故そうしなかったの・・?」

剣「だから、拙者はお主を倒す気などないでござるよ」

剣心は軽く笑いながら答えた。

プレシアは顔を少し俯かせる。

プ「・・剣心・・」

剣「何でござるか？」
プ「フェイトの事をどう思う？」
剣「そうでござるな。頑固で、ちょっと変わっている所もあるが、それでとっても優しい女の子でござるよ。それに・・」
剣心はそこで言葉を区切る。
剣「虐待してくる母親でも“大切な人”と呼ぶ良い子でござるよ」
剣心はそう言って微笑む。
プ「そうね・・・あの子は私にはもったいないくらいできた子だわ」
プレシアはさっきまでの狂気に満ち溢れた顔ではなく母親が自分の子供をいとおしむ笑みを浮かべる。
剣「プレシア殿、やはりお主はフェイト殿の事を人形だなんて思っていないのでござろう」
プ「ッ！！・・いったい何時から気づいていたの！？」
プレシアは驚いた顔をした後、剣心の顔を見て言う。
剣「拙者がお主に“もし今のお主をアリシア殿が見たらアリシア殿はどう思う”って言った時にあんた苦しそうな顔をして涙を流していたのだろう。その時思ったのでござる、アリシア殿の事を言われてあんな涙を流すのはアリシア殿への申し訳無さとフェイト殿の仕打ちに対して後悔しているのではないかとそう思ったんでござるよ」
プ「そう。自分でも迫真の演技だと思ったんだけどね。やっぱりアリシアの事を出された上に、私の二人の娘に対する愛情が涙を自然と出させてしまったのかしら」

プレシアはそう言いながら苦笑する。

剣「まぁどうしてあんな仕打ちをしたのか聞く前にまずはお主の体力を少し戻ってから話をするでござるよ」

しばらくして

剣「落ち着いたでござるか？」

プ「ええ・・・フェイトになぜあんな仕打ちをしたか、理由を話すわ」

プレシアは目を閉じる。

プレシア「・・・あれはまだアリシアがまだ生きていた頃よ」

プレシアは目を開け、語る。

アリシアは過去にプレシアが受け持っていた実験の失敗により命を落とした事。

研究の失敗は『管理局』が無理やり催促させたせいで失敗した事。

その後、アリシアをなんとか蘇らせようとして、当時研究していた『プロジェクトF．A．T．E』を使ってフェイトを作り出した事。

結局フェイトはアリシアと似ても似つかない存在で最初は憎んでいた事。

剣「しかしあんな仕打ちをしたとは言え、フェイト殿のことを今は愛しているんでござろう？」

プ「ええ。確かに今は愛しているわ」

プレシアは頷いていう。

プ「前にアリシアが書いた作文を見つけたの」

剣「作文？」

剣心は首を傾げる。

プ「その作文の内容の一部に『もしかしたら私に妹ができるかもしれません。もし妹ができたら、妹の名前は『フェイト』にします』ってね」

プレシアは涙を流す。

プ「それを読んだ時私は思い出したのよ。前にアリシアとピクニックに行った時、アリシアが“妹が欲しい”って言ったの。・・・・その時私は気づいたわ。フェイトはアリシアの出来損ないの人形じゃない。アリシアの妹で、私の立派な娘って事にね」

剣「なるほど、最初にいったフェイト殿の名前はアリシア殿が決めていたのでござるか、プロジェクトの名前をそのまま使ったというのも嘘だったのでござるな」

プレシアは涙を流しながら微笑む。

ア「今から数年前まではフェイトと一緒に楽しい時間を過していたわ。その生活で私はアリシアを生き返らせると言う思いは消えていたわ」

剣「だとすると不に落ちない事がある。なんでお主はアルハザードとやらに向おうとしたのでござる？」

プレシア「ええ。問題はフェイトの出生と私の失敗した実験と私の

体にあったわ・・・・」

プレシアはまた語りだす。

フェイトはプロジェクトF・A・T・E　により生れた存在なのでこれから先の将来はとても辛い事になってしまう事。（特に管理局なんかがフェイトを実験動物にしてしまうかもしれないから）

実験の失敗は全部プレシアの罪にさせられてしまっているために、今自分は逃亡の身の事。

その事でフェイトの将来にさらなる障害になっている事。

そして何より自分が不治病に掛かっているために先が長くない事。

だからジェルシードに目を付け、事件を起こす事を決めた。

さらにフェイトを虐待して、フェイトはただ無理やり命令されて動かされ、さらには複雑な生れ方をした事を大体的に管理局に見せ付ければ、心の優しい管理局員がフェイトを保護してもらい、フェイトの将来を支えてくれる人間を見つけようと考えたからだ。

それに万が一アリシアを生き返らせることに成功すれば姉妹仲良く生きていけるだろうと思った。

剣「なるほど。つまり、この事件を起こしたのはフェイト殿の面倒を心から見てくれる者を事件を通して見つけようと言うわけか」

剣心はプレシアの一世一代の作戦に感心した。

プレシア「ええ。それにあれだけフェイトに酷い事をすれば、私が死んだとしてもあまり心の傷にならなくて済む上に、裁判でも有利になるからよ・・・それにできることなら、アリシアを生き返らせてフェイトに会わせてあげたいのよ」

剣「だが、そのような事をするはめになったのも元はと言えば管理局とやらのせいなのでござろう、正直言って、管理局のやり方には

かんしんせんな」

剣心の言葉には少し怒りが入り混じっていた。

剣心は自分達の評判のためにプレシアに罪を押し付けた管理局に怒りを感じていた。

プ「それと私からも質問させて頂戴、あなたから妙な力を感じるんだけど・・・」

剣「ああ、おそらく“気”の力の事でござろう」

プ「気？ああ、魔力と違って普通の人間にも宿っている人間の潜在的な力の事ね、でも、あなたの場合かなり鮮明に感じるんだけど？」

剣「まあ鍛えているでござるからな」

プ「あんまり理由になっていないと思うんだけど・・・まあいいわ、後もうひとついいかしら」

剣「何でござるか？」

プ「さっきの金髪の子はあなたの子供？」

剣「ブーーーーーーーーーーーッ！！」

プレシアの質問に剣心は思わずはいてしまった。

剣「いっいや、断じて違うでござるよ！！」

プ「そんなに必死に否定しなくても・・・じゃあどういう関係なの？」

剣「ヤミ殿は拙者の仲間でござるよ。もう一人シャナと言う子もここにきているでござる。だが・・・・・・・・・」

プ「だが？」

剣「実は・・・・・・シャナ殿とヤミ殿はフェイト殿と同じ境遇なんでござるよ」

プ「エッ、どういうことなの！？」

剣心はプレシアにシャナとヤミが自分達の世界で天人（アマント）と呼ばれる宇宙人によって兵器として作られた人造生命体であることを教えた。

プ「そうだったの・・・・」

剣「どこの世界にもいる者でござるな。人の命を弄ぼうとする者は、しかしまさかフェイト殿がシャナ殿達と同じ人造生命体だったとは思わなかったでござるよ」

プ「そうね・・・・私も驚いたわ」

その後剣心とプレシアは色々と話をした。そしてしばらくして

剣「では拙者はフェイト殿達の所に戻る。これ以上話しても進展しそうにないしな」

剣心はそう言って、フェイトの所に戻る。

プ「分ったわ」

剣「お主は決意を変えるつもりはないんだな？」

剣心はプレシアに顔を向けながら言う。

プ「ええ。ないわ」

プレシアははっきり言う。

剣「そうでござるか」

剣心はどこか悲しそうな顔をして言う。

プ「でも、いざというときのために知り合いにフェイトの警護を秘密裏に頼んでいるから大丈夫よ」
剣「！！」

剣心はプレシアの言葉を聴いて驚愕した

剣「プレシア殿、その知り合いという者はそれはもしやジュドという名前ではござらんか？」
プ「い・・・いえ、そんな名前の人じゃないわよ」
剣「そうでござるか・・・ならば良い」
プ「そのジュドとか言う人がどうかしたの？」
剣「いや、別になんでもないでござるよ。では拙者はこれで」

そう言って剣心は部屋を出た。

剣心はフェイト達のいる所に向って廊下を歩いていた。

剣（やれやれ、あれではプレシア殿を説得するのは無理か・・・だが気になるプレシア殿がいっていた知り合いとはいったい・・・・それに病気の件は何とかならぬ物かな）

剣心はフェイト達のいる部屋に入る。

ア・シ・ヤ
『『剣心！』』

剣心に気付いたアルフとシャナとヤミが駆け寄った。

ア「あんた・・！どうしたんだい、その体は！？」

プレシアの雷を受けてボロボロになった剣心の姿を見てアルフが叫んだ。

剣「ん?ああ、これはそこで転んだんでござるよ」
シ「剣心・・。その理由は無理があると思うけど・・・」

シャナは苦笑して言う。

ア「何言ってんだい!?あの女にやられたんだろ!?」
剣「大丈夫でござるよ。それよりフェイト殿は?」

剣心は、ベッドで寝てるフェイトを見た。

ヤ「今は落ち着いて眠っていますよ」

剣心は椅子に座って、眠ってるフェイトを見つめた。

フェイト「ん・・」

フェイトが目を覚ました。

アルフ「フェイト!」

アルフが目に涙を浮かべる。

フェイト「・・アルフ・・・シャナ・・・ヤミ・・・剣心」

フェイトは剣心達を見て小さく呟いた。

剣「フェイト殿大丈夫でござるか？」

剣心が声をかけた。

フェイトはボロボロになってる剣心の姿を見て驚いた。

フ「剣心・・！その傷・・どうしたの？」

剣「これでござるか？」

剣心は、ちょっと困った顔をする。そして、アルフに言ったのとは違う言葉を口にした。

剣「何、階段で転んだんでござるよ」

剣心はその後、シャナとヤミからもっと自分の体を気遣うように説教食らった。

一方その頃、アリシアの入った水槽が隠し部屋の中では、プレシアは水槽の前に立ってアリシアを見詰めていた。

プ「フェイト・・・」

プレシアは小さく自分の娘の名前を呟く。

プ（最初、フェイトは心良い管理局員に任せようと思っていたけど、予想よりも早くフェイトの事を安心して任せられる人を見つけたわね）

プレシアは少し笑みを浮かべる。

プ（剣心・・・彼ならフェイトを十分安心して任せられるわ）

コツコツ

プレシアがそう考えていると、プレシアの後ろから誰かの足音が聞こえてくる。プレシアはそれに気づき後ろを振り向き、真顔になる。

プ「ああ、あなたね・・・・一体どうしたの？」

プレシアが見た人物は全身を黒いローブで包み、包んだ男である。なんとその男はジュドであった。

ジ「何、ちゃんと約束を守ってくれた事に礼がいいたくてね」

ジュドは怪しい笑みを浮かべて言う。

プ「ええ、彼にはあなたのことを知らないと言っておいたわ、だからあなたも最後まで約束は守ってもらうわよ、フェイトの身を守ってくれるっていう約束をねジュド」

ジ「ああ、分かっているとも。私はただジェルシードさえ貰えれば何の問題もないからね」

プ「そう。用がそれだけならもう行って」

ジ「ククク、そうかね、では失礼するよ、ああそうそう」

プ「何？」

ジ「彼はずいぶんとあの人形を大事にしているようだネェ、それとまさか彼の近くにいた少女達も彼女と同じ人形だったとはね、クックックック」

そのとき、プレシアはジュドの向かって電撃を放った。

バチィッ！！

ジ「ヌッ！」

プ「・・・黒焦げにされたくなかったら、今すぐその口を閉じなさい！それとかってに人の会話を盗み聞きしないでもらえるかしら」

ジ「・・・・・・・これは失敬、では今度こそ失礼するよ」

ジュドはそのまま部屋を出て行く。

ジュドが部屋を出て行くと、一人の金髪の女と二人の男が待っていた。

ファイナとディアル、そしてゲドラである。

デ「ジュド様、プレシアは裏切りそうにないですか？」

ジ「ああ、問題なかろう、だが万が一の事も考えて監視はしておけファイナ」

ファ「ハ～イ、しかし、あの女もバカですよね～。結局自分が裏切られる事も知らずにほいほい協力しちゃって、あんな人形なんかの為にさ」

ファイナはニヤニヤ言う。

ゲ「ジェルシードの事以外は好きにしていいんすよね？」

ジ「ああ、好きにして構わん」

ゲ「くくく、あの女と出来損ないの人形をどうやって壊してやろうか楽しみで仕方ねえぜ」

ゲドラはそう言うとさらに嫌味な笑顔を浮かべる。

ゲ（そして今度こそあの銀髪とガキ共を食い殺してやる！！）

そして、ゲドラは銀時達に対する復讐の炎も燃え上がらせていた。

第十五訓　でもやっぱり子供の事を考えている親のほうが多い（後書き）

支配者「ハイ、盛り上がってきましたネェ～」

シャナ「そうね」

セイバー「では、次回ご期待ください」

第十六訓　運命の出会いは結構身近に起こる（前書き）

支配者「今回はきりのいい話にするために短くしました」

セ「では第十六話ご覧ください」

第十六訓　運命の出会いは結構身近に起こる

時の庭園から戻ってきた翌日
剣心は公園にいる。今彼は公園である人物を待っていた。

剣「やれやれ・・・やっと来たでござるか」

剣心はある人物が来た事に気づいたと同時に、約束の時間に三十分以上もオーバーしていた事に呆れていた。

剣「遅いぞ銀時。何していたんでござるか？」

遅れてきた人物、銀時を睨みながら剣心は言う。対する銀時は悪びれもせずにいる。

銀時「いや～悪いな。ちょっと糖のほうがよぉ～」
剣「はぁ。ケーキ屋で働いているとはいえ、あんまり甘い物ばかり食べ過ぎているとホントに糖尿病になるでござるぞ」
銀「いいんだよ。俺は太く短く生きるって決めたから、ほっとけ」
剣「お主知らないのか？糖尿病気味の人間がさらに糖尿病を悪化させるような真似していると・・・」

剣心がそこで言葉を区切る。

剣「尿と糖が化学反応を起こして、股間が爆発するらしいぞ」

銀時は剣心の言葉を聞いて、顔を青くして口をあんぐり開けて驚愕の顔になる。

銀「ま、まままままじか！！？お、おおおい！！俺はいったいどうすればいいんだ！！？」

銀時は慌てて剣心に詰め寄る。

剣「馬鹿かお主は、嘘に決まっているでござろう」

銀時「おいおい、なんだよ。脅かすんじゃねぇーよ、つーか、誰が馬鹿だァア！！」

銀時は嘘だと分かるといつものだらけた感じになる。しかしバカと呼ばれて切れた

剣「時間を守らなかったから脅かしただけでござる。というかお主、いい年してこんな嘘に引っかかってどうする」

剣心は単純な嘘を真に受けた銀時に呆れる。

銀「いや～。なんか前にもどっかの病院で言われた事ある気がするからやっぱりホントかと思ってな」

剣「ちょっと待て、その病院大丈夫なんでござるか？」

剣心は銀時の頭とその病院が本気で大丈夫か心配になった。

そして話は本題に入る。

銀「で、呼び出した用件ってのは、いってぇなんだよ」

剣「ああ、実はな・・・」

剣心は時の庭園で起きたこと、フェイトの母親プレシアの事を銀時に説明した。

銀「なるほどナァ～、あのがきの母親がジュエルシードを集めてんのにそんな理由があったとはな」

銀時は頭を掻きながらそういう

剣「ああ・・・お主にだけは話しておこうと思ってな」

銀「確かにこんなことなのはやあのフェイトには言えねえよな」

銀時はそう言った。

確かにこんなことをなのはが知れば、維持でもフェイトのためにジュエルシードを集めようとするだろう。

それではますますなのはが無茶をしてしまう。

それにフェイトもプレシアの為に全てを賭けて無茶をしかねない。

そして、銀時はまた口を開いた。

銀「あいつ等には・・シャナたちには言ってねえのか？」

剣「いずれ、時を見て話すつもりでござるよ。このことを聞いたらあの二人まで無茶しかねない」

銀「だよナァ～、まさかフェイトが自分達と同じ人造生命体だなんて知ったらな」

剣「とにかく、この事はお主の胸のうちに閉まって置いてくれぬか」

銀「ああ」

剣「それと銀時」

銀「ン？」

剣「ジュド達の事どう思う」

銀「ああ、あいつらか・・」

銀時は急に険しい顔になった。

銀「あいつらの本当の目的は未だによくワカンネェからな」

剣「ああ、それとプレシア殿に聞いたのだが、知り合いにフェイト殿の監視を頼んでいたらしい」
銀「それとあいつらと何の関係があんだよ」
剣「いや・・・プレシア殿の言った知り合いというのはおそらくジュドの事だ」
銀「ッ！！・・・おいおいマジか・・・」

銀時は剣心の言葉に少し驚いた。

剣「ああ、プレシア殿はジュドの事など知らぬといったが、おそらく嘘だろう」
銀「おい、って事はそいつの言ったジュエルシードを集めてる理由もうそなんじゃねえのか？」

銀時は剣心にこういう。

剣「いや、それは嘘とは思えん、その事を話しているときのプレシア殿の顔は優しかったからな」
銀「あっそ」

銀時は頭を掻いた後ベンチから立ち上がる。

剣「とにかく、よろしく頼むぞ、銀時」
銀「わあったよ」

そういって銀時は帰って行った。

その頃ヤミは図書館で読書にいそしんでいた。
ヤミは本が好きなので、こう言う本がいっぱいあるところ好きなのである。
実際、図書館に入って大量の本を見た時、目を輝かせていた。

ヤ（やはり良いですね。こうやって落ち着いた場所で読書をするのは）

ヤミはとても今の状況に満足していた。

ヤミ（今度はシャナや剣心も誘いますか。彼らにもたまにはああいう殺伐とした環境よりもこう言う知性を磨く場所の方にもきょうみをしめすべきです。まあ、二人とも銀時と違って頭が良いですからこうゆう場所も似合うでしょう。け、決して、剣心と一緒に読書したいと言うわけではありませんど）

一体頭の中で誰に説明しているか分らなかった。

ヤ（この本も読み終わりましたし、次の本を取りに行きますか）

ヤミは本が読み終わったので、次の本を読みに行こうとした時、

「う～ん。もうちょっとなのに、取れへん」

ヤミの目に車椅子に乗った女の子が必死に上の棚の本を取ろうとしている姿が目に入った。

ヤ（あのままでは危ないですね）

ヤミは車椅子の女の子がこのまま本を取ろうとしたら倒れてしまうと思ったので、助けることにした。

ヤ「はい、この本ですか？」

ヤミは女の子が取ろうとしていた本を先に取って上げた。

「へ？あ、ありがとうございます！／／／／」

女の子はヤミの行動に頬を赤くさせながら、お礼を言って本を受け取る。

ヤ「それにしても危ないですよ。あのままに取ろうとしていたら倒れて怪我をしていましたよ」

ヤミは呆れた様に言う。

「す、すみません。うち、どうしてもこの本が読みたかったもんやからつい・・／／／」

女の子は恥ずかしいのか、頬を赤くさせながら謝罪する。

ヤ「家の方とかは一緒に来ていないんですか？」

確かに、ヤミの言う通り小さな女の子が一人で図書館にいるとはおかしい。車椅子であるならなおさら親が付き添うはずである。

「実はうちの両親は二人とも他界して家には誰もいないんです」

ヤ「！」

ヤミはまずい事を聞いてしまったと思って直ぐに謝る。

ヤ「すみません。辛い事を思い出させてしまって・・・」

ヤミは暗い顔しながら言う。かつてはアマントたちの命令で数多くの人間の命を奪ってしまった事があるヤミ。しかし今は剣心達のおかげで兵器ではなく一人の少女として生活している事ができている。

「き、気にせんといてください！うちには親戚のおじさんや病院先生とかがおって、その人達に優しくしてもらっているから全然辛くなんかないさかい落ちこまんといてください」

女の子はヤミにフォローする。辛い思いでを話した女の子が落ち込むんじゃんくてヤミが落ち込むと言うなんとも奇妙な空間が出来上がってしまった。

ヤ「すみません。気を使わせてしまって」

「あはは、優しいんですね」

女の子は少し笑いながら言う。

ヤ（優しい・・ですか・・）

ヤミの顔に少し影が掛かった。

「どうかしましたか？」

女の子はヤミが喋らなくなったので、顔を伺いながら聞いた。

ヤ「いえ、何でもありません。ちょっと考え事をしていただけです」

「そうですか」

ヤ「話は変わるんですが、あなたは他にも取りたい本があるんですか？」

「はい。ここでも結構本を読んでいるんですけど、家でも何冊か借りて読んでいるから、まだ取りたい本があるんですよ」

ヤ「・・そう、ですか」

ヤミは女の子がそう答えると、少し考える仕草をして言う。

ヤ「もしよかったら本を取るのを手伝いましょうか？そのままだと危なそうなので」

「ほんまですか！」

ヤミの提案に女の子は嬉しそうにする。

ヤ「ええ、あなたが良かったらですが」

「もちろんで良いです。ほんまに嬉しいです！」

女の子は嬉しくてヤミの両手を握ってブンブン振る。

ヤ「ええ、それと敬語はしなくていいですよ」

ヤミは微笑んで言う。ただその微笑は彼女と長い付き合いの者でないと分らないような笑みだろう。
それと女の子はヤミに言葉で我に返って、すぐに手を話して誤る。

「あ！ご、ごめんなさい！嬉しくてつい・・／／／」

女の子は恥ずかしくなり、頬を赤くさせながらちょっと俯いて言う。

ヤ「別に私は気にしてないので謝らなくて結構です。それでは本を取りに行きましょう」

ヤミがそう言うと、女の子が声を掛ける。

「あの～できれば名前を教えてくれへんか？うちの名前も知ってもらいたいんで」
ヤ「ああ、そうですね。互いの名前を知らないのは少々不便ですね」

ヤミは一呼吸おいて自分の名前を言う。

ヤミ「私はヤミと言います」
はやて「うちは八神はやてと言います」
ヤ「エッ！はやて？」

ヤミは少女の名前を聞いて少し驚いた。

は「えっ、どないしたん？」
ヤ「あ・・いえ、すいません。知り合いにあなたと同じの名前の人

がいる者ですから・・」
は「へぇ～そうなんや、世の中意外と狭いもん何やね」
ヤ「フフ、そうですね（ッて、私別の世界からきたんですけど）」

ヤミは心の中で軽くツッコンだ。
すると後ろから黒髪の女の子が歩いてきた。

シ「ああ、いたいたやっぱりここね」
ヤ「あ、シャナ」

それはシャナであった。

ヤ「どうかしたんですか？」
シ「ジュエルシードが見つかったのよ。ほら、行くわよ」
ヤ「そうですか、分かりました」
は「エッ、もういくん？」
シ「ン？」

シャナははやてに気づいた。

シ「ヤミ、誰こいつ」
は「うちは八神はやてと言います」
シ「エッ！はやて！？」

シャナも驚いてしまった。

は「フフッ、ヤミちゃんと同じこと言うとる」
シ「なッ何よ、こいつ子供のくせにっ」
は「それを言うなら、そっちかて子供やン」
シ「なッなんですってぇ～！！」

ヤ「あの、シャナ図書館では静かにしてください」
シ「あ・・ごめん」

シャナはヤミに謝った。

シ「ああ～もうそんな事よりさっさといくわよ！」
ヤ「はいはい、分かりましたよ」
は「あっヤミちゃん」
ヤ「ん？」
は「また会おな」
ヤ「ハイ」

これが、ヤミとはやて出会いだった。
この出会いがこれから未来で起きる事件に大きく影響するとはまだ、
誰も知らない。

第十六訓　運命の出会いは結構身近に起こる（後書き）

支配者「いや～なかなかいい場面でしたね」

銀時「おい作者」

支配者「何です？」

銀時「いつになったら「教えて」『『銀八先生！』』をやるんだよ」

支配者「だってあんまり質問来ないんだもん」

銀時「テメェが大半部分を借りてるからだろーが」

支配者「仕方ないでショーが、一から全部考えるの苦手なんですよ、じゃあ次は軽くやりますんで」

銀時「頼むぜ」

支配者「ハイハイ、では次回をお待ちください」

第十七訓　ダメキャラはやっぱりダメキャラだ（前書き）

支配者「今回は新八が活躍！」

新八「するんですか！？」

支配者「しません」

新八「何でだよー！！」

第十七訓　ダメキャラはやっぱりダメキャラだ

午前五時。
まだ朝日が出始め、辺りがまだ暗い時間に町の中を走っている少女と青年がいた。
なのは新八である。その肩にはユーノが乗っていた。

新「なのはちゃん！この先にジュエルシードの反応があったんだね？」
な「はい。確かに感じます。ジュエルシードの力を」

なぜ銀時達がいないかと言うと、銀時達ははっきり言って、朝が弱い。だからまだ寝ているのである。
なのははジュエルシードを感じ取ったユーノによって起こされたが、新八以外のメンバーは連れてきていない。一応声は掛けたのだが、まったく起きないし、なのは自身も起こすのは悪いと思ったので起こさず来たのだ。
新八が一緒にいる理由はと言うと、新八この世界に来てから毎朝早くに起きて木刀を素振りしているのである。所謂朝稽古である。

新八は大好きななのはを少しでも助けたいと思い、少しでも強くなろうとしていたのである。
そして新八は朝稽古をしていた時に家から走っていくなのはを見たので、気になって追いかけて来て今に至ると言うわけである。ちなみにちゃんと木刀を腰に差して来ている。

さすがはロリコン、なのはの行動は逐一把握していると言う事か。

新八「誰がロリコンだぁ！！」

額に青筋を立てて怒る新八になのはが驚く。

な「ッ！！・・・あ、あの新八さん。一体どうしたんですか？」

新「あ、ご、ごめんなのはちゃん！ちょっと妙な声が聞こえたもんだからつい」

な「は、はぁ」

なのはは不に落ちなかったが、今はジュエルシードが優先なので気にせずに走る事にした。

ユ「あ！なのは！どうやらあの人が持っているみたいだ」

ユーノが前足で指した方には黒いレインコートにフードで顔を隠した男がジュエルシードを右手に持って立っていた。

なのはと新八は咄嗟に建物の影に隠れて様子を伺う事にした。

なのは「ど、どうしようユーノ君、新八さん！？あれじゃあジュエルシードがあの人に持っていかれちゃう！」

なのはは慌ててユーノと新八に相談する。

新八「落ち着いてなのはちゃん。わけを話してジュエルシードを譲ってもらえば良いよ」

ユ「でも魔法の事を話すわけには」

新八「別に魔法の事は話す必要はないよ。ちょっと嘘を交えて譲ってもらうんだよ」

新八の提案になのはは苦い顔をする。

な「でも嘘をつくのは・・・」
新「なのはちゃん、嘘も方便って知ってる？」
な「はい」

なのは頷いて言う。

新八「確かに嘘をつくのは褒められる行為じゃないけど、状況が状況なんだし仕方ないよ」

新八の言葉でなのは俯いたが、決心を決める。

な「・・分りました」
新「じゃあ僕があの人にわけを話して譲って貰ってくるからここで待ってて」

なのはは頷き、新八は黒いレインコート男の方に向かおうとした。
そしてなのははもう一度レインコートの人を見た。

なのは（それにしても、なんであの人は雨でもないのにカッパなんて着ているんだろう？）

なのはにはコートはカッパに見えたようだ。なのはがそう思った時、いきなりレインコートの男が消えた。
なのはと新八はそれを見て驚く。

新八「なッ！？」
なのは「ふぇ！？」

なのはがレインコートの人がどこに消えたか探していると、新八がなのはに向かって叫ぶ。

新八「なのはちゃん！危ない！後ろ！」
なのは「え？」

なのはは新八に言われて後ろを振り向くとレインコートの男が右手をなのはに向けて付きたて、その手の平からはなにか黒い雷のようなエネルギーが出ていた。

な「ッ！」

なのはは咄嗟に後ろに下がってレイジングハートを起動させバリアジャケット姿になる。それと同時に男の手から黒いエネルギーの球体がなのはに向かって放たれる。

な「くッ！」

なのはは何とかプロテクションを張って防いだ。
なのはは肩から降りたユーノに質問する。

な「ユーノ君！あの人、魔道師なの！？」
ユ「多分違う。あの人からはまったく魔力が感じられない」
な「え！？」

なのははわけが分らなかった。ならばなぜ魔力もないのに魔法のような攻撃ができるのか分らなかった。それはユーノも同じである。しかし、その男はなのはたちも知っている人物であった。

デ「なんだ、また貴様らか」
ユ「ッ！お前は！！」

そう、その男はディアルだったのだ。

デ「このジュエルシードは俺が先に見つけたのだ。貴様達に渡すわけにはいかん」

ユ「そうは行かない！お前なんかにジュエルシードはわたさないぞ！！」

デ「ふん、だったら力づくで奪ってみろ。もっとも貴様らごときが俺に勝てるとは思えんがな」

そのとき、新八がディアルの前に立ちふさがった。

デ「ん、何だ貴様？」

新「お前か！なのはちゃんを傷つけた奴は！！」

デ「だったらどうした？」

新「おしおきじゃアアアア！！」

そういって新八はディアルに突撃するが簡単に吹き飛ばされてしまった。

新「グハッ！」

な「新八さん！」

デ（こいつ、よわっ！！）

ディアルは思わず心の中でこう叫んでしまった。

な「新八さん、だいじょうぶですか？」

新「う、うんこれくらい平気だよ。なのはちゃん」

デ「そんな雑魚の心配をしてる暇があるのか？」

な「え？」

ディアルの抑揚のない声でなのははは我に返ったが、時既に遅く、ディアルは手に光の剣を作り、それを握り締めながらなのはに素早く近づいて光の剣でなのはを切ろうとした。反応仕切れなかったなのはは防御魔法も出す暇もなく切られようとした時、

ガキン！

新「なのはちゃんを傷つけさせない！」

新八が起き上がってなのはの前に現れディアルの剣を木刀で防いだ。しかし、その力は強く、新八は少し後ろに押されてしまった。

な「新八さん！」

デ「ほぉ、なるほど、少しは剣に覚えがあるようだな、ただの雑魚かと思ったのだが」

ディアルは驚いた様子もなく、新八を観察するかのように言う。

な「どうしてこんなことをするんですか！？」

なのははディアルに叫んで問う。

デ「こんな事とは？」

ディアルは新八と剣の押し合いをしながらなのはに聞き返す。

な「だから何で私達を襲ってきたんですか！？」

なのはは再度声を上げてディアルに問う。

新八「うわっ！」

新八は背中から倒れるがすぐに体勢を整えて立ち上がり、木刀を構え直す。

デ「馬鹿か、貴様は？貴様らが我々の計画の邪魔だからだ」

なのは「如何してこんな事をしている理由があるのかちゃんと教えてください。私にも何かあなたの手伝いができるかもしれません」

心優しいなのははディアルの戦う理由を知りたいのである。ただ相手の戦う理由も分らず戦う事が嫌いな彼女だからこそフェイトと会うたびに必死に話そうと頑張れたと言える。だから今度も目の前の黒いコートの男、ディアルの戦う本当の理由知った上でもし、自分にできることであればなんとかしてあげたいとも思っているのである。

新八は自分をいきなり襲った相手にもかかわらず、必死に相手と話そうとしているなのはを見て感動する。

なのはちゃんはなんて良い子なんだ！と思っていた。

だがディアルはそんななのはのことばをきいて笑い出した。

デ「ククククッ、ハハハッ、ハーッハッハッハ！！」

新「お前、何が可笑しいんだ！」

デ「ククククッ、これが笑わずにいられるかこの小娘が予想以上の大馬鹿者なのだからな。戦う相手にたいしてそんなことを言うとは」

ディアルから発せられた言葉はなのはの言葉を馬鹿にする言葉だった。新八はその言葉にキレる。

新「てめぇー！少しはなのはちゃんの気持も考えろ！」

デ「ハッ、バカバカしい、倒す相手の気持ちなど知ったことか」

新「なにィー！」

ディアルの言葉で新八は頭に血が上り、怒りにまかせて男に突っ込む。

デ「隙だらけだな、やはり唯の雑魚か」

ディアルは新八の後ろに回りこみ、新八を剣で吹き飛ばし意識を奪う。新八は力なく倒れる。

デ「今度こそ貴様らには消えてもらう」

ディアルは言うやいなや、ユーノに手を向けて、手の平から黒い球体を放つ。ユーノは防御魔法を展開して防ごうとしたが、黒い玉はユーノの防御魔法を破った。

ユ「うわっ！」

ユーノはなす術なく黒い玉に当たり後ろに吹き飛び気絶する。結局なんの役にも立たなかった。

な「新八さん！ユーノ君！」

なのはの悲痛な声で二人の名前を呼ぶ。ディアルはなのはの叫びも気にせず今度はなのはに向かって光の玉を撃ち込む。

なのは「っ！レイジングハート！」

レイハ〈フライアーフィン！〉

なのは靴から４枚の光の翼の羽を生やし、空に飛んで黒い玉を避け

る。
男はただ飛んだなのはを見上げていた。
ちなみにレイハはレイジングハートの略です。
な「アクセルシューター！！」
なのはは魔力弾を六つ作りディアルに向かって撃った。なのはは戦う決意をしたのである。
ディアルはいとも簡単に魔力弾を光の剣で切り裂く。ディアルはなのはを再度見る。
デ「ほぉ、なるほどな、あの時に比べて少しは戦えるようになったか」
しかし、さっきの魔力弾は囮であり、なのはは次の攻撃を用意していた。
なのは「ディバインバスター・フルパワーーー！！！」
極太の桃色の閃光がディアルを襲った。なのはが今持ちうる最大の攻撃である。なのはもディアルが強いと感じたからこそ使った技である。
なのはは男に『ディバインバスター』が当たった事に手ごたえを感じ勝利を確信した。
しかしなのはの予想は簡単に裏切られてしまった。
デ「なるほどな、大した威力だ」
な「！！」
ディアルは手を突き出し、なのはの砲撃を防いでいたのだ。

なのははその光景に驚愕していた。今の自分の最大の攻撃が目の前のディアルに通じなかった事に。

デ「自分の攻撃に余程自信があったのか知らないが、これくらいでは俺は倒せん」

なのははディアルの言葉で我に返り、再びレイジングハートを構える。今のなのはにディアルにダメージを当たえる手段が無い事はさっきの砲撃を防がれた事で分っているが、例え自分の攻撃が通じなくてもまだ勝利を諦めてはいない。だからこそ、諦めずに戦おうとしているのである。

ディアルはそんななのはの姿を見て、笑いながら喋りだす。

デ「クハハッ、まだやるつもりか、貴様に勝ち目など・・ぬぐっ！」

な「エッ！？」

突然、ディアルが苦しみだしたのでなのはは驚く

デ（何だこの痛みは！まさかさっきの砲撃を俺が防ぎきれなかったのか！？）

そうディアルはさっきのなのはの砲撃のダメージを完全に防ぎきれなかったのだ。

しかもダメージはそれほど軽くない

デ「クッ！小娘が今日のところは引いてやる。命拾いしたな！」

な「あっ！」

そういってディアルは引き上げていった。

な「いっちゃった・・・・あっそうだ、新八さん、ユーノ君！」

なのはは倒れている新八とユーノの基に駆け寄った。

その頃引き上げたディアルはどこかのビルの屋上にいた。、

デ「クソッ！あの小娘、唯魔力が高いだけで何もできないガキかと思っていたが・・・」

ディアルはなのはが予想以上に力を付けていたことに驚いていた。

デ「まあいい、ジュエルシードは俺の手にある、これでジュド様にも言い訳は立つはずだ、だが、このままでは済まさんぞあのガキめ！」

ディアルは心の中でなのはに復讐を誓った。

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八
「え～今回から時々ですが『銀八先生コーナー』をやらせてまぁ～す。質問や感想にじゃんじゃんご応募してください。」

剣心
「そして、副担任の剣心先生でござる。ちなみに司会は拙者と銀八先生でやらせてもらう。そしてアシスタントの・・・」

フェイト
「フェイト・テスタロッサです」

なのは
「高町なのはです」

剣心
「ちなみに二人の年齢はまだ一期なので、９歳でござる」

フェイト
「でもそれ高校生として成り立たないんじゃ・・」

剣心
「長谷川殿や近藤もいるから問題ないでござる」

なのは
「そうですか」

銀八
「まあそういう訳です。それでは記念すべき第一回目の質問。ペンネーム『黄色い何か』さんから。「この小説の『ハヤテのごとく!』のキャラ、ハヤテのハーフ設定の強さってサイヤ人方式ですか?それとも夜兎より若干弱い程度ですか?」

銀八「はい、おこたえします。いくらなんでもハヤテがサイヤ人より強いということはありません。まあでもラディッツぐらいよりは強いと思います。

神楽「まあ、ハヤテでもそれくらいは強いと思うアル」

銀八「え~と言う訳で、『黄色い何か』さん廊下に立ってなさい」

剣心「次の質問でござる。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから。剣心、薫、弥彦が出たということは、左之助は出るんですか?
あと、『真選組』のメンバーと言う形で、斎藤一は出るんですか?」

銀八「はい、おこたえします。作者は出すつもりだと言っています。
」

剣心「まあ拙者たちが出たんだから、いずれ佐野達もでるでござろうな」

銀八「まあそういうことなので楽しみに待っていたください。と言う訳で、『亀鳥虎龍』さん廊下に立っていなさい」

フェイト「では次の質問です。ペンネーム『ルシフェル』さんから。?フェイトのところで住んでいる人達に質問です
フェイトの料理はそのあとどうしましたか?
?銀さんに質問です
一日にケーキなどを食べているのですか?

銀八「ハイ、お答えします。フェイトの作った料理は剣心が気絶した後フェイトが捨てたとの事です。」

フェイト「だってそんなにもひどい料理だとは思わなかったから剣心に食べてもらったけどそんなに不味い物をシャナたちにまで食べさせられないし・・・」

シャナ「全く・・・あの時は寿命が縮まるかと思ったわ」

ヤミ「そうですね。私達も料理はできませんがあそこまでひどくありませんからね」

フェイト「ううう・・・」

剣心「まあまあこれから上手になっていけばいいでござるよ。フェイト殿」

フェイト「ありがとう、剣心」

銀八「ハイ、甘酸っぱいのはこれくらいにして第2の質問の答えいきます。そりゃあ銀さんといえば甘い物なので食べるでしょう。しかし銀さんはケーキよりもパフェのほうが好きなのでそっちのほうを食べるそうです。」

新八「まあ原作でも銀さんパフェばっか食ってますからね」

銀八「ハイと言うわけで『ルシフェル』さん、銀さんの好みをちゃんと研究してから質問してきてください」

剣心「では今回はこれまででござる」

フェイト・なのは『次をお楽しみに！』

第十七訓　ダメキャラはやっぱりダメキャラだ（後書き）

支配者「ハイ第十七話いかがでしたか？」

銀時「結局新八は活躍できねー運命なんだな」

神楽「所詮新八は新八ネ」

新八「おい、それどういう意味！？」

支配者「では次回お楽しみに」

新八「僕にも活躍させろぉー！！」

第十八訓　ＫＹが登場すると事体は変わる（前書き）

支配者「今回はＫＹ登場です。そしてついにあの五人も登場！？」

銀時「おいおい、あんな奴ら出すんじゃネエよ」

支配者「仕方ないでしょ、出さないわけには行かないんですよ」

銀時「ッたく、それじゃ第十八話始まるぜ」

第十八訓　ＫＹが登場すると事体は変わる

剣心達はジュエルシードがある場所にやってきた。海が見える公園。
公園内には剣心達以外、誰もいない。
そして、公園内にジュエルシードの光の柱が現れた。
そこには二本の腕が生えた巨大な木の化物がいた。

「ゴォオオオ！！」

気の化け物は声を上げながら叫ぶ。

剣「元気がいいでござるな」
ヤ「ホントですね」

木の化物を見ながら剣心が呟き、ヤミがその言葉に乗る。

ア「フェイト」
フ「うん。あの子達もいる」

フェイトは、なのは達の姿を捉らえた。

剣「フェイト殿」

今度は剣心がフェイトを呼んだ。

フ「何？」
剣「あの怪物の相手は拙者とシャナ殿とヤミ殿がしてやるから、お主は封印だけしてくれぬか」

フ「え？」

剣心の提案にフェイトは戸惑った。
剣心はシャナとヤミに顔を向けると二人は無言で頷く。

フ「でも・・」
剣「言ったでござろう？」

剣心はフェイトの頭に手を乗せた。

剣「お主は子供なのだから、もっと周りを頼ってよいのだ」
フ「！」

剣心は前に出る。
木の化物と対峙する三人。

新「剣さん！ヤミちゃん！」
神「シャナ！」
剣「ン？」

剣心達の姿を見つけた新八と神楽は声を上げた。銀時とセイバーは黙ってその様子を見ていた。

ユ「まさか・・彼等は魔法も使えないのにアレに立ち向かうつもりなのか！？無茶だ！」

ユーノは、剣心達の行動を無謀だと思った。
銀時は剣心達を見て目付きを変えた。

銀「行くぞお前ら」

銀時はダルそうに肩を揉みながら剣心達の所に向かう。

新「はい！」
神「おう！」
セ「分かりました」

新八と神楽は勢いよく返事をし、セイバーも頷いた。三人は銀時の後に付いて行く。

な「銀さん！新八さん！神楽ちゃん！セイバーさん！」

なのはが叫んだ。

新「なのはちゃんは、そこにいて！」
神「封印は任せたアル！」
銀「お前はそこでじっと見てな」

木の化物は、目の前にいる剣心、シャナ、ヤミを睨みつけている。

「ゴォオオオ！！」

三人を睨みながら木の化物は雄叫びを上げた。その雄叫びに銀時は耳をほじりながら肩に木刀を乗せながら歩いて言う。

銀「ギャーギャーギャーやかましいんだよ。発情期ですかコノヤロー」
剣「別にお主等までやる必要はないと思うが？」

剣心も逆刃刀を抜きながら言う。

神「剣ちゃん、こう言うのはノリアル」
セ「たまには運動もしておかないと体がなまります」
神楽は傘を肩に乗せ、セイバーは剣を抜いてそう言う。
そして新八も木刀を構える。

剣「銀時、別にお主の力は必要ないぞ。拙者達三人で充分だ」
銀「おいおい何言ってんだ。そう言う事言う奴に限ってバトルマンガとかじゃボロボロに負けたりするんだよ」
剣「やれやれ、どうしてそんな風にマンガと比べるんでござるかお主は、少しは大人になれ」
銀「うるセェな、男は何時までたっても永遠の少年なんだよ」
剣「いや、人は大人になるべきだ」
銀「うるセェなあ、男は少年でいりゃ良いんだよ」

新八はそんな二人の様子に呆れ、シャナは苦笑していた。他のメンバーは取りあえず話していた。剣心と銀時がそんな口論をしていると、

「ゴォオオオ!!」

木の化物が雄叫びを上げた。

銀「何だ?無視されて怒ったか?寂しがり屋ですかコノヤロー」

銀時は再び木の化物を睨みつける。

剣「とりあえず今は」

剣心は刀を構えた。

セ「あの化け物を倒しましょう」

セイバーも不可視の剣を構える。
新八、神楽、シャナも傘と木刀、刀を構え、ヤミは身構える。ふと神楽とセイバーが隣にいる新八を見た。木の化物を前にして体が少し震えてる。

神楽・セイバー
『『新八』』

二人は新八に声をかけた。

新八「な・・何、神楽ちゃん？セイバーさん？」

新八は、少し汗を流した顔を二人に向ける。
神楽とセイバーは新八に耳打ちをした。

神「新八。もし新八がカッコよくあの化物を倒したら・・・」
セ「新八の好きな、なのはが新八の事を好きになる可能性が出てくるかもしれませんよ？」

二人の言葉で、新八の魂に火がついた。

新「オルァ！てめーら！とっとと、あのザコモンスターぶっ潰すぞォオオオ！！」

と、新八の気迫が上がった。

銀「え？どしたの新八君？親衛隊長の時並のテンションなんだけど

？」

新八のテンションに銀時、剣心、シャナ、ヤミは若干引いている。

セ「なに、心配する事はありません。あのロリコンメガネに」

神「魔法の呪文を言っただけアル」

銀時と剣心はため息をついた。

だが、同時剣心は心地いい感じがした。

剣（全く・・こやつらがいると退屈せんな）

剣心は一人笑みを浮かべた。

銀「よーし。万事屋メンバーが揃ったところで、久しぶりにいくぜ！お前ら！」

新八・神楽・剣心・シャナ・ヤミ・セイバー

『『おおっ！！（ああ）（うん）（ええ）（はい）』』

言っている言葉は全員がばらばらであるが力強く答えた。

「ゴォオオオ！！」

木の化物が雄叫びを上げながら、木の根を振り上げた。そして銀時達目掛けて木の根を振り下ろす。

銀時・新八・神楽

『『うおおおお！！』』

剣心・セイバー・シャナ
『『はぁぁぁぁぁ！！』』

六人が叫びながら、その他のメンバーは声を上げずに木の化物目掛けて走り出した。

銀「だらぁあああ！！」
剣「はっ！」
シ・セ「「はあっ！」」

銀時、剣心、シャナは、木刀と刀、剣を振るって自身に迫る巨大な木の根を切り裂いた。

神「ほぁちゃあああ！！」

神楽も傘を振り回し、ヤミは両手や髪の毛を刃に変えて自由自在に髪や両手を使って木の根を切り裂く。

新「うぉおおお！！」

新八も、切り裂く事は出来ぬが木刀で木の根を防ぎ、攻撃をかわしながら前に進んでいく。
次々と襲い掛かる木の根をものともせず、万事屋パーティーは木の化物に迫る。
さすがに最強を誇る万屋メンバーである。木の化け物くらいでは相手にならないようだ。

ア「つっ、強っ！剣心達も他の連中も！あの眼鏡まで！」

戦いの様子を見てるアルフが驚きの声を上げた。
アルフは改めて、剣心や銀時達の異常な強さに驚いていた。

フ「剣心・・こんなに強かったんだ」

隣に立ってるフェイトも驚いていた。剣心達が強い事は知ってるつもりだったが、本当に『つもり』だったようだ。

な「銀さん、神楽ちゃん・・強い！」
ユ「新八さんにセイバーさんも凄い！」

なのはとユーノも銀時達の実力に驚いていた。
特にユーノは魔法も使わずに、あの木の化物と戦ってる銀時達の力に驚愕を隠せなかった。

ユ「一体・・彼等は何者なんだ？」

銀時「ジュエルシード斬りじゃあああ！！」
剣「ジェルシード斬りでござる！」

銀時と剣心は叫びながら、木刀を振り下ろして木の根を斬った。セイバー、シャナ、ヤミは無言で木の根を切る。

神「ジュエルシード蹴りじゃあああ！！」

神楽は強烈な蹴りで木の根を粉砕する。

新「ジュエルシード防ぎじゃあああ！！」

新八は木刀で木の根の攻撃を防ぐ。

剣心は木の化物の目の前まで迫った。

剣「ジュエルシード・・」

剣心は木の化物に攻撃するが、

「ガァアアア！！」

木の化物は、障壁を展開して防いだ。

剣「ぬっ！」

剣心は一旦、木の化物から離れた。

ア「あいつ、生意気にバリアなんか張ったよ！」

フ「今までのより強いね」

フェイトはバルディッシュを持つ手に力を入れる。剣心を助けたい気持ちを必死に抑える。

フ（大丈夫・・剣心ならきっと・・・）

フェイトは剣心を信じて待った。

「ゴォオオオ！！」

木の化物が両手を上げながら雄叫びを上げた。

銀時「近所迷惑だコノヤロー」

銀時は目を鋭くした。

銀「ジュー」
剣「エー」
セ「ルー」

七人はそれぞれ武器を構えた。

新八・神楽・シャナ
『『シード』』

七人は凄まじい気迫を放つ。ちなみにヤミは無言の圧力。

「ゴォオ!?」

銀時達の気迫に、初めて木の化物は動揺した。銀時達は地を蹴って、木の化物の顔の前まで跳んだ。

銀時・新八・神楽・剣心・シャナ・ヤミ・セイバー
『『割りじゃあああ!!（です!!）（でござる!）』』

それぞれの武器を振り下ろす。
木の化物は障壁を展開した。銀時達の攻撃は障壁に当たり、ガラスが砕けるような音を立てながら障壁は割れた。

銀時「うぉおおおお！！」

銀時と剣心は木の化物の眼前にまで迫った。

銀時・剣心
『『ジュエルシード狩りじゃあああああ！！！（でござる！）』』

上段から木刀を振り下ろし、木の化物を縦に斬った。
銀時と剣心は地面に着地した。二人が斬った木からジュエルシードが出てきた。

ア「やった！やったよフェイト！」
フ「うん！」

剣心達の勝利にアルフとフェイトは喜ぶ

な「やったよユーノ君！銀さん達が勝ったよ！」
ユ「す、すごい！」

なのはは喜び、ユーノは驚いていた。

剣「何をしているフェイト殿！早く封印を！」
フ「あっ！う・・うん！」

剣心に言われて、フェイトはバルディッシュを構えた。

銀「何やってんだなのは！お前もだ！」
な「は、はい！」

なのはもレイジングハートを構える。

な「ジュエルシード、シリアル7！」
フ「封印！」

ジュエルシードに光が降り注いだ。
光が収まり、空中にジュエルシードが佇む。フェイトとなのははジュエルシード挟むように対峙する。

フ「・・ジュエルシードには衝撃を与えたらいけないみたいだ」
な「うん。この間みたいになったら、レイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも可哀相だしね」

なのはの言葉にフェイトは少し戸惑った。

フ「・・だけど、譲れないから」

フェイトはバルディッシュを鎌の形状に変えた。

な「私は・・フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど…」

なのはもレイジングハートを構える。
銀時達は地上で二人の様子を見てる。

銀「アレ？何やってんの？何やろうとしてんの？嫌な予感がするんですけど」

二人を見上げて銀時は言う。

新「ちょっ・・あの二人戦う気ですよ！しかもジュエルシードの近くで！」

剣「それはマズイでござるな」

新八は叫び、剣心は険しい顔をする。ジュエルシードの近くで二人が戦ったら、またジュエルシードが暴走するかもしれない。

銀「おいィィィ!!なのは待てェェェ!!お前そんなトコでやり合ったら、またジュエルシード暴走するぞ!!」

新「なのはちゃん!一旦降りよう!いい子だから一旦地上に降りよう!!」

神「なのはァァァ!早まるなアル!!」

セ「レッツファイトです!」

新「煽るなぁぁぁぁぁ!!」

新八が青筋を立ててツッコム。

シ「フェイト!ストップ!ストップ!落ち着いてってば!」

銀時達が必死に叫ぶが、二人の耳には届いていない。ちなみに剣心とヤミはどうしようか考えていた。

フェイトと、なのはは同時に動いてデバイスを振り下ろす。

銀時・新八・神楽

『『あああああ!!』』

三人は頭を抱えて叫んだ。

だが二人のデバイスが当たる直前、

?「ストップだ!」

二人の間に青い魔法陣が展開され、そこから現れた黒いバリアジャ

ケットを羽織った少年がデバイスを受け止めた。

フェイト・なのは

『『！？』』

突然の乱入者に二人は驚いた。

？「ここでの戦闘は危険すぎる！」

地上にいる銀時達も呆然と見上げている。

ク「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

剣心は時空管理局と言う単語を聞いて眉をしかめた。

ク「まずは二人とも武器を引くんだ」

クロノに言われてフェイトと、なのはは一旦デバイスを引いた。

ジュエルシードを空中に残して、三人は地上に降りた。

銀（おいおい。ここで管理局のお出ましかよ・・）

銀時は、クロノと名乗る管理局の魔導師を見つめながら顔を険しくした。剣心も同じ様に顔を険しくしていた。

新「どうするんですか銀さん？」

新八が小声で銀時に話し掛ける。

銀「どうするって言われてもな…」

銀時は険しい表情のまま悩んだ。

シ「剣心どうする?」

シャナも剣心に小声で話し掛ける。

剣「取りあえず、様子を見るしかないでござるな」

剣心は険しい顔をしながら腕を組んで言う。

フェイトと、なのはの間に立ってるクロノは交互に二人を見た。

ク「このまま戦闘行為を続けるなら・・」

クロノが言いかけた時、突如空からオレンジ色の魔力弾が降ってきた。

ク「はっ!」

クロノは青い魔法陣を展開して魔力弾を防いだ。

全員、空を見上げた。アルフが空中に佇んでいた。

ア「フェイト!剣心!シャナ!ヤミ!撤退するよ!離れて!!」

アルフが再び魔力弾を放つ。

フェイトは戸惑いながらも空中にあるジュエルシード目掛けて飛んだ。

なのはとクロノは後ろに跳んで魔力弾を避けた。銀時達も離れる。

魔力弾は地面に当たり、土煙が立ち込めた。

フェイトはジュエルシードに手を伸ばす。
その時、クロノは青い魔力弾をフェイトに向かって放った。

剣「！」

剣心は、素早く逆刃刀を抜いて魔力弾に向かって投げた。投げたと同時に剣心は走り出した。
フェイトの手前で、魔力弾は剣心の投げた逆刃刀によって弾かれた。

フ「ああっ！」

フェイトは、魔力弾と木刀がぶつかった衝撃を受けて地面へ落ちていく。

ア「フェイト！」

急いでアルフはフェイトの元へ向かう。地面にぶつかる前に、アルフはフェイトを背中で受け止めた。
クロノは意識をフェイト達から剣心に向けた。

ク「何の真似だ！？」

剣心に向かって叫びながら黒いデバイスを構える。
だが剣心はクロノには何も答えない。

ク「抵抗するなら相応の対応をするぞ！」

言いながらクロノは数発の魔力弾を剣心に向かって放つ。
剣心は地面を蹴って魔力弾を避けながら一気にクロノに近づく。

アルフ・シャナ・新八
『『剣心！（剣さん！）』』

三人が叫んだ。
剣心とクロノの距離はどんどん縮まる。

ク（こいつ！魔法を使ってないのに、なんて速さだ！）

顔には出さないが、クロノは剣心の身体能力の高さに内心驚いていた。
クロノは再び魔力弾を撃った。剣心はクロノの上に跳んで魔力弾をかわした。

ク（上？今まで左右に避けていたのに何故？）

クロノは上に跳んだ剣心の姿を見た。
剣心の右手には、逆刃刀が握られていた。

ク「なっ！？」

剣心は、上段から逆刃刀を振り下ろしてクロノのデバイスを地面に叩き落とした。地面に着地して、逆刃刀をクロノの顔に向けた。

剣「これで終わりだ」

そう言って、剣心はクロノを睨みつけた。
剣心は神速の速さでクロノに詰め寄り、逆刃刀を抜いて攻撃したのである。
その場にいる全員が驚いた。
特に管理局や魔導師の事をよく知っているフェイトやアルフ、ユー

ノは驚愕を隠せなかった。

ア「か・・勝っちゃった・・」

剣心の後ろにいるアルフは、開いた口が塞がらなかった。

ア（あの管理局の人間は、間違いなく一流の魔導師だ。その魔導師に剣心は勝った!?しかもアッサリと!?）

木の化物に勝った事にも驚いたが、今はその時以上に驚いている。

フ「凄い・・」

フェイトも驚いて、目を大きく見開いていた。

逆刃刀を突き付けられてるクロノは動けなかった。

ク「き・・君達はどれだけ危険な事をしているのか分かっているのか!?」

剣「そのような事は知らぬ、なぜお主はフェイト殿たちを攻撃した」

ク「それは・・彼女達が戦闘行為を続行しようとしたからだ!」

剣「彼女達は武器を下ろしていたはずだが?」

ク「うっ、うるさい!!」

剣心に向かってクロノが怒鳴る。

銀時「そう怒るなよガキ。短気は損気だぜ?カルシウム摂れ。カルシウム摂れば全てうまくいく」

新八「いや。あんたうまくいってないでしょ」

何故か剣心の変わりに答えた銀時に新八がツッコム。

ク「そこ！話を逸らすな！あと僕はガキじゃなくてクロノだ！！」

クロノが怒鳴った時だ。

「下がってろクロノ」

男の声がした。

「テメーじゃソイツの相手は荷が重すぎる」

クロノの後ろの林の中から五人の男が現れた。

銀「なっ！？」

男達を見て銀時は驚愕した。

いや、銀時だけでなく剣心、セイバー、新八、神楽、シャナ、ヤミも驚いていた。

男達は黒い制服を着て、腰には刀があった。

新八「こ・・」

新八が口を開く。

「近藤さん！土方さん！沖田さん！斉藤さん！山崎さん！」

新八は男達の名前を叫んだ。

土方「モニターの映像を見てまさかとは思ったが・・本当にテメーらだったとはな」

たばこ煙草をくわえた男が言った。
土方十四郎。幕府の武装警察『真選組』の副長。鬼の副長と恐れられている。常に瞳孔開き気味。さらにはマヨラーで、ニコチン中毒者である。

土方「誰がニコチン中毒者だ！」

土方が地の文にツッコム。マヨラーは否定しねえのかよ。

沖田「いや～奇遇ですねェ旦那方ァ」

栗色のサラサラヘアの男が言う。
沖田総悟。真選組の一番隊隊長。組随一の剣の使い手で腹黒いドS。

近藤「おおっ！本当に新八君だ！元気だったか？」

ゴリラ顔の男が大声で言った。
近藤勲。真選組の局長。新八の姉・お妙に付き纏うストーカーでもある。ちなみにバカである。

斉藤「全く・・・こんな所でも貴様らアホゥ共の顔を見ることになるとはな」

目つきの悪い男が嫌そうにそう言った。
斉藤一、真選組の三番隊隊長。牙突と呼ばれる特攻剣の名手である。
ちなみに組一番のまじめキャラだ。

山崎「まさか旦那方がこの世界に来ていたなんてビックリですよ」

黒髪の新八並に特徴がない所が特徴の地味な男が頭を掻きながら言う。
山崎退。真選組の監察方（密偵）。
趣味はミントンにガバディーで、真選組1の苦労人。

新八「どうして皆さんがこんな所に!?」

新八は五人に聞いた。
すると土方は表情を曇らせた。

土「・・いろいろあったんだよ。それよりテメーらこそ何でこんな所にいる?」
銀「おいおい。まずは新八の質問に答えてもらおうじゃねーか」

木刀を肩に掛けながら銀時は土方を見つめた。

近藤「ま・・まさか・・!?」

突然、近藤が声を上げた。

近「まさかお前らも俺達と同じように、ナギお嬢様に頼まれて『魔法少女リリカルなのは』のDVDを持っている事に気付かないで瞬間移動装置を使ってこの世界に来たのか!?」
新「お前らもかいィィィ!!」

近藤の言葉に、新八は目を剥いて叫んだ。
周りにいるフェイト達は、銀時達の話の内容がわからず首を傾げている。
でも、待てよ。あの真選組の中に『魔法少女リリカルなのは』を観る者がいるのだろうか。新八は疑問に思ったが、すぐに“ある可能

性”が思い浮かんだ。

新「あの・・もしかしてＤＶＤを持ってたのは・・・」
斉藤「決まっているこのアホゥだ」

そう言って斉藤は土方を指差した。

土方「誰がアホだこらァアアア！！」
斉藤「今のお前にそう言う以外なんと言えばいいんだ？」
沖「斉藤さんの言う通りですぜぇ土方さん」
土方「うっ・・・」

斉藤と沖田に正論を言われて土方は黙り込んだ。

銀時達は視線を土方に向けた

煙草の煙を吐きながら土方が言った。

土方「チッ・・ああそうだよ！俺が持ってたんだよ！！」

土方は逆ギレ気味に煙草の煙を吐きながらそう答えた。

剣心・銀時
『『えっ！？』』

土方の言葉に二人は驚いた。セイバー、シャナ、ヤミも声は出していながが、驚いていた。
だが新八は驚かなかった。真選組のメンバーで、アニメのＤＶＤを持ってる可能性があるのは土方だけだと考えていたからだ。いや・・正確に言えばＤＶＤを持っていたのは『土方』ではない。

『トッシー』。土方が妖刀『村麻紗』を手にした事によって生まれた、もう一人の土方十四郎。主にアニメ等の二次元の作品が好きなヘタレたオタク。別人格ではなく、れっきとした土方十四郎の人格の一部なのだ。

土方「あの野郎・・いつの間にかアニメのＤＶＤなんざ懐にしまいやがって・・！」

土方は拳を握って怒りを燃やした。

銀「ブハハハハ！何？お前またトッシーに体乗っとられたの？」
シ「あははは！お前、それ、最高に笑える！」
ヤ・セ「あなたもですか・・・」

銀時とシャナは土方を見ながら笑い、セイバーは口を抑えて笑いを堪えていた。ヤミと剣心は呆れていた。

土方「テメーラ何笑ってやがんだ！斬るぞコラ！！」

土方が銀時達に掴みかかる。

剣「なんだ？やるのでござるかマヨネーズ？」
土「だぁれがマヨネーズだ！！」

何時も銀時と土方のバトルが始まるのだが、今回は剣心と土方のようだ。ちなみに言っておくが、剣心は土方とは仲は悪くない。剣心には考えがあった。

ク「君達！少しは落ち着いて・・・」

クロノが二人を止めようとするが、

土「うるせー！ガキはすっこんでろ！！」

土方に怒鳴られてしまう。

剣心の後ろで様子を見てるアルフは、どう動くべきか迷っていた。

その時、剣心はチラッとアルフに目配せした。

ア「！」

アルフは剣心の意図に気付いた。剣心は“逃げろ”とアルフに目配せしたのだ。

ア（剣心・・・ありがとう・・ごめんよ・・）

アルフは心の中で剣心にお礼と謝罪をした。フェイトを背中に乗せたまま、気付かれないように静かに動いて、アルフは去っていった。

剣心と土方はまだ言い争ってた。

土方「テメーの今回の発言には我慢ならねぇー。人に対して礼儀を教えてやるよ」

剣「ホントの事を言って何が悪いんでござる？」

剣心にこう言われてとうとう土方さんはキレた。

土方「上等だコラァアアア！！」

沖田「土方さん」

土方「何だ？総梧俺は今忙し」

沖田「金髪の魔導師、いなくなっちまいました」

土方「なにっ！」

沖田の言葉で、全員の視線が剣心の後ろに集まった。フェイトとアルフの姿はなかった。

ク「しまった！」

クは顔を険しくした。

土「・・緋村。テメーわざと俺と口喧嘩して・・」

土方は、目の前にいる剣心を鋭い目で見つめた。

剣「なんの事でござる？」

土「ちっ」

土方は舌打ちした。

斉「やられたなアホゥ」

沖「剣心の旦那に一杯食わされましたねェ土方さん」

土「ウルセェーー！！」

時空管理局の次元空間航行艦船『アースラ』。

緑色の長髪の女性がモニターを眺めていた。

？「戦闘行動は迅速に停止。ロストロギアの確保も終了。よしとし

ましょう。事情もいろいろ聞けそうだしね」

リンディ・ハラオウン。時空管理局提督アースラ艦長である。

公園。

銀時達の前にリンディの映像が現れた。

リ《クロノ。お疲れ様》

ク「すみません。片方は逃がしてしまいました」

リ《ううん。まぁ大丈夫よ》

リンディは視線を銀時達に向けた。

リ《その方達と話がしたいから、アースラに案内してくれるかしら？》

ク「了解しました。すぐに戻ります」

クロノが返事をすると映像は消えた。

森の中では黒いコートに黒いローブで顔を覆った五人、ジュド、ディアル、ゲドラ、ヘゾル、ファイナが銀時達の様子を見ていた。

ファ「あ～ん。あたしがせっかく闇の力で強化したのにあっさりやられた～～」

ファイナはワザとらしく頭を抱えて言う。

ゲ「バカみてェなこと言ってんじゃネエよファイナ」

ゲドラはファイナに突っ込んだ。

デ「チッ、それにしてもとうとう時空管理局がやってきたか」

ヘ「いかがいたしますかジュド様」

ディアルが舌打ちをし、ヘゾルがジュドに指示を仰ぐ

ジ「・・・時空管理局の者共などほうっておけ」

デ・ヘ・ゲ・ファ

「エッ!?」

ジュドの言葉に四人は驚いた。

デ「ジュド様放っておけというのはどういうことですか?」

ディアルが驚いてジュドの尋ねる。

ジ「分からんのかお前達、あの時空管理局の船には何人も魔導師が乗っているはずだ」

ヘ「ハイ」

ファ「そうですよね～」

ジ「だが船から出てきたのはあの青髪の小僧だけだ」

ゲ「それがどうしタンスカ？」
ジ「全くお前達は・・・つまりあの船に乗っている魔導師の中でやつらに対抗できるのはあの小僧だけということ、つまりあの船に乗っているのは雑魚ばかりと言うことだ、つまり我等の計画には奴らは何の障害にもならン」

ジュドはそう答え“なるほど”とゲドラとファイナは手を叩いた

デ「時空管理局の奴らは近年人材不足だというからな、ジュエルシード絡みの事件でもろくな戦力を回せなかったということか」
ヘ「しかし、ジュド様あの五人はいったい・・・」
ファ「アア～さっきの会話聞いた限りじゃあいつらの知り合いみたいよぉ～」
ヘ・デ・ゲ「なにっ！？」

ファイナはだらけたように答え、ヘゾル・ゲドラ・ディアルの三人は驚いた。

ゲ「クッ、また異世界の連中かよ」
ジ「ふん、そんなことだろうと思ったわ」
デ「ジュド様いかがいたしますか？」

ディアルはジュドに尋ねる。

ジ「我等の計画の障害となるのは、あの異世界の連中だ。奴らの行動に常に目を配っておけ」
デ「ハッ」
ヘ「了解致しました」

そういってディアルたちは消え、ジュドもその場から消えた。

その頃江戸の源外の工場では

薫「ちょっと源外さん！ララちゃん！装置直ったんならどうして教えてくれないのよ！！しかもまた壊れてるし！！」

薫が源外の胸倉をつかんで文句を言った。

源「仕方ネェだろ！薫譲ちゃんが剣の字を心配するあまり風邪引いちまって寝込んでる間にナギの譲ちゃんが俺達のいない間にせっかく直った装置勝手に動かして新撰組の連中をおくりこんじまったんだから！！」

薫「私はまたなんでまた装置が壊れてんのかって聞いてんのよ！！」

ラ「イヤ～そう言われても」

薫「そう言われてもじゃない！！」

薫は源外とララに対して怒り任せに叫んでいる。

源「とにかく、また直るまで待つしかねえんだよ譲ちゃん」

薫「アア～ン、どうしてこうなるのよ～剣し～ん」

源外の工場に薫の鳴き声が響き渡った。

第十八訓　ＫＹが登場すると事体は変わる（後書き）

支配者「イヤ～盛り上がってきましたネェ～」

新八「”盛り上がってきましたネェ～”じゃネエよ！！どんどんやこしいことになってんじゃねえか！！」

支配者「うルセェんだよ、ダメガネ」

新八「んだとコラァ！！」

支配者「皆さん、こんな奴は無視してさっさと次回を待っていてください」

新八「無視すんなぁー！！」

第十九訓　正義マンも卑怯な時がある（前書き）

支配者「ハイ、今回はユーノがひどい目にあうお話です」

ユーノ「エエッ！」

銀時「じゃあ、第十九話始まるぜ」

第十九訓　正義マンも卑怯な時がある

銀時達はアースラにやってきた。

銀「ファンタジーの次はＳＦか・・何でもありだな」
剣「ほぉ、これはすごいでござるな」

銀時と剣心が呟いた。
その他の万事屋のメンバーもそれぞれ驚いていたり、興味深々で見ていた。
魔法やら使い魔やらジュエルシードなど、いろんなモノを見てきた銀時達は、もう驚きはしなかった。それにもともと銀時達の世界もかなり滅茶苦茶でなんでもありの世界だ。
先頭に立ってるクロノが、なのは達に振り返った。

ク「ああ。もうバリアジャケットとデバイスを解除しても平気だよ」
ヤ「もしかして、無防備になったなのはを襲う気ですか？変態ですね」
ク「誰がそんなことするか！」

真顔で茶化すヤミをクロノが怒鳴りつける。なのははその時ヤミの言っている意味が分らなくて首を傾げた。

ク「とにかく、何もしないから。バリアジャケットとデバイスを解除してくれ」
な「あっ、はい」

なのははバリアジャケットを解除して、レイジングハートを待機状態にした。

クロノは視線をユーノに向けた。

ク「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないかな？」
ユ「ああ、そういえばそうですね。すっかり忘れてました」
な「え？」

なのはは首を傾げた、近くにいる新八、神楽、セイバーも同じく首を傾げた。
ユーノの体が光輝く。光の中でユーノの体は、フェレットから人間の姿に変わった。見た目は、なのはとそう歳が変わらないくらいの少年の姿だ。

な「えっ！？」

ユーノの姿を見て、なのはは驚いた。隣にいる新八と神楽とセイバーもだ。
銀時と剣心は、

銀「おお」
剣「やはりそうでござったか」

と呟いただけで、そんなに驚いた様子はなかった。ただ、シャナとヤミはユーノを睨みつけた。

ユ「ふぅ。なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

ユーノは顔を、なのはに向けた。
なのはは、驚きながらユーノを指差している。

な「ふぇぇぇぇ！！？」

アースラに、なのはの声が響いた。

ユ「な・・なのは？」

ユーノは首を傾げた。

な「ユーノ君って・・ユーノ君って・・！」

ユ「えっ！？ちょっ・・ええっ！？」

神「ユーノ、人間だったアルか！？」

セ「ビックリしましたよ！」

なのは、新八、神楽、セイバーはユーノの正体に動揺を隠せなかった。

剣「そんなに驚く事ござるか？アルフ殿も人の姿に変身してたでござろう」

シ「まあ、初めてあの犬女を見た時から予想はしてたけど」

新「って言うかシャナちゃん、アルフさんの事を今犬女って言いましたよね！？」

剣心とシャナは冷静に言う。新八はシャナの言葉にツッコミを入れ、これをアルフが聞いたら絶対怒ると思った。

土方「お前らの間で、何か見解の相違でもあるのか？」

今まで黙ってた土方が言った。

ユ「えっと・・なのは、僕達が初めて会った時、僕はこの姿じゃ？」

な「ち・・違う違う！最初からフェレットだったよ～！」

なのはは、首を横に振りながら答えた。
言われてユーノは記憶を辿った。額に指を当てて最初に会った時の事を思い出そうとする。

ユ「ああっ！」

そして思い出した。

ユ「そ・・そういえば、この姿まだ見せてなかった」
な「だ・・だよね？ビックリした～！」

なのはは大きく息を吐いた。

新「あれ？そういえば・・」

新八も何か思い出した。

新「ユーノ君。海鳴温泉に行った時、フェレット姿で、なのはちゃん達と一緒に温泉に入ったよね・・・？」
ユ「あっ！」

新八に言われてユーノは声を上げた。

な「・・！！」

思い出した、なのはは顔を赤くして俯かせた。

ユ「いや・・違うんだ、なのは！あれは・・」

ユーノが、なのはに説明しようとした時、

シ「つまりお前はフェレット姿なのを良い事に女湯を覗いて鼻の下を伸ばしていたってことね」

ユ「ちょっ！ちが・・・」

シャナが先に説明し、ユーノがそれを否定しようとした時、後ろから刃の歯がユーノ首筋に突き付けられた

ユーノは刃を見て顔を青くし、恐る恐る後ろを見ると、

ヤ「えっちぃのは嫌いです」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！

っと言いながら鋭い目でユーノを見ながら、右手を刃にしてユーノの首にその刃の歯を突き付けていた。

そして今度は、

セ「まだ、剣心や銀時にだって見られた事ないのに・・・」ゴゴゴゴゴゴゴッ！！

っと言いながら、ユーノの首に不可視の剣の剣先を突き付けているセイバーがいた。

ユーノはさらに青ざめる。

そして極め付けは、

シ「お前みたいな変態淫獣は黒焦げになるべきねぇ」ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！

と言いながらユーノに炎の刀を突きつけている笑顔のシャナがいた。

しかし、顔は笑っているがその笑顔はかなり怖かった。

そしてユーノの恐怖心は頂点に達した。

セイバーは過去にユーノがフェレットモードの時に一緒に温泉に入った事があるのである。
セイバーは裸を見られた事にかなりの怒りを感じていた。
子供とは言え、愛玩動物になって女湯に入ったユーノには相当キレているのである。
そしてHな奴が何より嫌いで許せないシャナとヤミもユーノに対してかなりの怒りを見せていた。
この状況に近藤は恐怖のあまり小便を漏らしそうになり、沖田はユーノを同様にどう弄ってやろうかと笑顔で考え、土方は顔を青くさせながらタバコを吸い、斉藤は呆れた顔でユーノを見つめ、クロノと山崎は顔を真っ青にさせ、神楽はユーノに軽蔑の視線を送り、なのははあまりの恐怖に銀時の足にそれぞれしがみ付いてブルブル震えていた。剣心と銀時はもはや涙目で顔を真っ青にさせていたユーノがあまりにも可愛そうだと思い、助けようと思ったが、怖くて動けなかった。それに剣心に至っては自分も温泉の時に幼女と風呂に入った身なので、余計な事を言ってボロが出るのを恐れて何も言えずにいた。
そして新八は、

新八「てめぇー、良くもなのはちゃんの裸を見たな」ゴゴゴゴゴゴゴッ!!

と言いながら、シャナ達並の怒気を含んだどす黒いオーラを出しながらユーノに近づいていた。

近（なにあれぇぇぇぇぇぇぇ!?何時もの新八君とは全然違うんですけどぉぉぉぉぉぉぉぉぉ!!??）
山（どうしちゃったの新八君ーーーーーーーーー!!??）

近藤と山崎は目の前の人物が本当に新八なのか疑う位の新八を見て、

信じられないと言う顔をしていた。
そして新八、シャナ、セイバー、ヤミに囲まれたユーノは恐怖のどん底に落ちた。
そして四人の制裁が始まった。

ユ「ちょッちょっと待ってごか「問答無用!!」あんぎゃあああ!!!!!!」

ドカ!バキ!シュッ!ガコッ!ボゥッ!ドカッ!バキッ!

拳、蹴り、刃、木刀、炎などがユーノを襲った。
ユーノは叫び声を上げながら四人にボコボコにさらた。
銀時達は震えながらその光景を黙って見ていた。

ク「艦長。来てもらいました」

銀時達は艦長がいる部屋に到着した。
中に入って、銀時達は少し驚いた。部屋の中には、盆栽やお茶の道具、畳や獅子脅しが置かれていた。
何この妙な和風空間?と銀時達は思った。
畳の上には、艦長のリンディが正座していた。

リ「ようこそ。まぁ皆さんとりあえず座って楽にしてくださいね」

笑顔でリンディが言った。ふとリンディはユーノの姿を見た。
ユーノは服はボロボロで、顔や腕、足には青アザ、体中に切り傷、やけどが出来ていた。しかも体は小刻みに震えていた。

リ「えっと・・君は何かあったのかしら・・？」

戸惑いながらリンディは尋ねた。

ユ「・・・いえ・・・何もありません・・・・」

力無くユーノは答えた。ユーノにして見ればさっきの事は二度と思い出したくないだろう。
ユーノの答にリンディは苦笑いをした。とりあえず銀時達は畳の上に座った。

リ「どうぞ」

銀時達の前に、お茶とようかん羊羹が差し出された。

新八・なのは・セイバー・ヤミ
『『ありがとうございます』』

四人が礼を言った。

リ「私は時空管理局提督『アースラ』の艦長、リンディ・ハラオウンです」

それから互いに自己紹介をしてユーノ達は、これまでの事をリンディ達に話した。

リ「まぁそうだったの。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね」

話を聞き終えたリンディが言った。

ユ「・・それで僕が回収しようと・・」

リ「立派だわ」

ク「だけど同時に無謀でもある！」

クロノの言葉に、ユーノは顔を俯いてしまう。

な「あの、『ロストロギア』って何なんですか？」

なのはがリンディ達に尋ねた。

銀時達はリンディ達から『ロストロギア』について話を聞いた。

次元空間の中には幾つもの世界が存在する。その中には、他の世界よりも進化しすぎた世界がある。その世界を滅ぼした危険な技術の遺産。それらを総称して『ロストロギア』と呼ぶ。使い方によっては世界どころか次元空間を滅ぼす程の力になる。

話を聞いた、なのは達は自分達がとんでもなく危険な物に関わっていた事を理解した。

ふと、なのははリンディを見た。

リンディはお茶の中に角砂糖を入れていた。

な「あっ！」

お茶に角砂糖を入れるという行為に、なのはは驚いた。しかもリンディは何の躊躇いもなく、角砂糖を入れたお茶を飲んだ。しかし、

銀時の隣にいるセイバーはピクピクと震えながら立ち上がり

セ「リンディ！なんですかそれは！？」

セイバーはリンディのやっていることに我慢できなかったのかリンディに怒鳴る。

リ「何って、お茶に砂糖を入れてるんですが」

笑顔でリンディは言いながらお茶を飲んだ。

セ「紅茶やコーヒーなら分かりますが、緑茶に角砂糖など言語道断です！」

食文化にうるさいセイバーはリンディに文句を言った。

新（うわぁ。銀さんとシャナちゃんみたいだな）

一方、新八は、そう思いながら銀時とシャナを見た。

二人は、リンディの行為を見ながら不敵な笑みを浮かべていた。

銀（面しれぇ）

シ（格の違いを見せてやるわ）

対抗心を燃やした二人は、角砂糖が入ってる器に手を伸ばした。なのは達とリンディ達が、二人の動きに気がついた。銀時はみんなの視線を浴びながら、リンディが入れた倍くらいの数の角砂糖をお茶に入れた。

リ「なっ！？」

二人の行為にリンディは驚いた。リンディだけでなく、なのは達も驚いてる。
二人は、リンディの前で沢山の角砂糖の入ったお茶を飲んだ。
リ（まさか、この二人も私と同じ!?しかも私よりも多く角砂糖を入れた!?）
リンディは目を見開いて驚いた。隣に座ってるクロノも目を丸くしている。
二人はリンディに不敵な笑みを見せた。
リ「!!」
二人の笑みを見たリンディは、更に角砂糖をお茶の中に入れた。
ク「か・・艦長!?」
クロノが驚きの声を上げた。
リ（さぁ、これで私の勝ちよ!）
そう思って、リンディは二人を見た。
リ「!!?」
そして驚愕した。
二人のお茶の中には、更に足した角砂糖と、お茶と一緒に出された『羊羹』が入っていた。
リ（よ・・羊羹をお茶の中に!!?わ・・私でもそんな発想はでき

なかったわ!!）

動揺しながら、リンディは二人の顔を見た。

二人は、またも不敵な笑みを浮かべてリンディを見ていた。

銀（ふん!糖尿病寸前まで糖分摂取をしてきた俺に敵うと思ったのか？）

シ（今まであらゆる甘い物を食してきたこの私に勝てると思ってるの？）

銀時は邪悪な笑み、シャナは軽く笑いを浮かべた。

銀時・シャナ

『『俺（私）とあんた（お前）とじゃ、糖の器が違う!』』

リ「!!」

二人の言葉を聞いて、リンディは畳に両手をついた。

リ「わ・・私の負けだわ」

悔しそうにリンディは顔を俯いた。

新・セ「いや、あんたら馬鹿だろ!!（あなた達バカでしょう!!）」

新八とセイバーが怒鳴った。

新「何くだらない争いしてんだよ!」

セ「これ以上食文化汚さないでください!!宇治銀時丼はおいしい

からまだいいとして！！」

セイバー…そっちはいいのかよ…

銀「バカヤロー新八、セイバー。ここで引いたら、糖分王の名折れだろうが」

シ「そうよめがね、セイバー。ここで引いたら、糖分女王の名が泣くわ」

剣（やれやれ、この二人は・・・）

言って二人は、角砂糖と羊羹が入ったお茶を飲んだ。そして二人のその姿に剣心は心の中で呆れていた。

新「そんなバカな称号捨てちまえ！！」

セ「そうですよ！この糖尿コンビ！！」

と、新八とセイバーが怒鳴った時、

土「メガネと騎士の言う通りだ」

土方が口を開いた。

土「お茶に角砂糖を入れるなんざ、テメーらの味覚はどうかしてるぜ」

そう言う土方は、お茶の中にマヨネーズを入れていた。

新「いや、あんたもおかしいから！」

即座に新八がツッコんだ。

新「何お茶にマヨネーズ入れてんですか!?」
セ「あなたこそ食文化を汚しているじゃないですか!!」
土「食い物だけでなく飲物にもマヨネーズを混ぜるのが、一流のマヨラーってもんよ」

土方はフッと短く笑った。

新「いやカッコよく言ってるけど、やってる事は間違ってるから!最悪だから!」
セ「そうです!!新八の言うとおりです!!」

四人の味覚馬鹿のせいで、場の緊張感は完全に消えていた。
なのは達は、銀時達の並外れた味覚に、ただただ目を丸くして驚くしかなかった。
リンディが敗北から立ち直って顔を上げた。コホン、と小さく咳をする。

リ「これよりロストロギア『ジュエルシード』の回収については、時空管理局が全権を持ちます」

なのは・ユーノ
『『えっ!?』』

リンディの言葉に、二人は戸惑った。

ク「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」
な「でも・・そんな・・・」
ク「次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけには

いかない」

なおも戸惑う、なのはにクロノが言った。新八とリリスも、うんうんと頷く。

リ「まぁ急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、それから改めて話をしましょう」

リンディが、なのは達に言った。

土方と斉藤は、リンディの言葉に目を細めた。

銀・剣「ちょっと待てよ（待つでござる）」

クロノが、なのは達を送ろうと立ち上がったところで、銀時と剣心が口を開いた。

リ「何かしら？」

リンディが銀時と剣心に顔を向けた。

銀「何で考える時間なんて与えるんだ？民間人を巻き込むつもりが無いなら、そんなもんは必要無いだろ」

剣「銀時の言うとおりだ。本気で辞めさせるつもりなら話などせずに今すぐ力づくでなのは殿のデバイスを取り上げるはずだ」

茶をすすりながら銀時と剣心が言う。

銀時と剣心の言葉で、新八もハッとなった。確かにそうだ。本当に事件から手を引かせようと考えているなら、話し合う時間など必要無い。なのに何でリンディさんはあんな事を言ったのか。

銀「まっ、あんたの考えてる事は大体読めるな」

銀時はそこでお茶を置いて言う。

銀「大方、コイツらの方から協力を申し出るように誘導して、足りない人員を補強しようって魂胆だろ？」

剣「そんなところでござろうな」

銀時は不敵な笑みを作りながら言い、剣心は軽くリンディを睨みつけた。

近藤、沖田、土方、斉藤、シャナ、ヤミ、セイバーは眼を鋭くしている。七人もリンディの考えに気付いていたようだ。

リ「・・・・・」

リンディは無言で表情を険しくした。

ク「本当ですか艦長！？」

クロノがリンディに尋ねた。どうやらクロノの方は、本心から手を引かせようと考えていたようだ。

銀「そんなキタネーマネしねーで、堂々となのは達に頼んだらどうだ？そしたら俺も余計な口は挟まねぇよ。決めるのはなのは達だからな」

剣「全くでござる」

そう言って、銀時と剣心はまたお茶を飲み始める。

近「リンディ艦長。立場上、あなた方の方から民間人に協力を頼めないのはわかる。だが、だからと言ってこのような手段で彼女達を巻き込む事を、俺達は認めることはできん！」

近藤がリンディに言った。
しばらく場が沈黙に包まれた。
な「あ・・あの・・！」
なのはが沈黙を破った。
な「私にお手伝いさせてください！」
全員が、なのはへ振り向いた。
な「その・・リンディさんに言われなくても・・きっと私、自分から頼んでいたと思います」
ク「し・・しかし・・・」
なのはの言葉にクロノが戸惑う。
な「お願いします！」
立ち上がって、なのはは頭を下げた。
ユ「ぼ、僕もお願いします！」
ユーノも立ち上がって頭を下げた。
銀「だとよ艦長殿」
銀時が笑みを浮かべて言った。

剣「拙者もお主のやり方は気に入らない。だがこの者達は、お主に
に言われたからではなく、本当に自分の意志で手伝うと言っている」

剣心は真っ直ぐにリンディを見つめてる。リンディも剣心の視線を
受け止めてる。

リ「・・・わかりました。あなた方の乗艦を許可します」
ク「艦長!?本気ですか!?」
リ「二人の善意を利用しようとした私には、この頼みを断る事は出
来ません」

リンディは静かに語った。

リ「高町なのはさん。ユーノ・スクライアさん。先ほどは、あなた
達を利用しようとして申し訳ありませんでした」

リンディは二人に頭を下げた。

な「い・・いえ・・そんな・・」

頭を下げられて、なのははあたふたする。リンディは頭を上げた。

リ「ご協力に感謝します。それと改めて、二人ともよろしくお願い
します」
な「は・・はい!よろしくお願いします!」
ユ「お願いします!」

こうして、なのは達は管理局に協力する事になった。

リ「では、なのはさんは一度ご家族とお話をして、また明日、公園

にきてください」
なのは「はい！」
リ「クロノ。二人を元の世界へお送りして」
ク「・・はい」

クロノはまだ納得していないようだったが、渋々了解した。
なのはとユーノ、クロノが部屋から出ていった。
リンディは銀時達に顔を向けた。

リ「あなた達はどうしますか？」
銀「あ？俺達か？」

銀時はお茶を飲み干した。

銀「俺達も協力させてもらうぜ。あいつらだけじゃ心配だからな」
新「はい。乗り掛かった船ですし」
神「友達を置いて帰らないアル！」
剣「同じく」
セ「銀時達が協力するなら私も協力しましょう」
シ「私も協力するわ、お前達は気に入らないけど」
ヤ「私もです。フェイトを放って置けませんし」

七人はそれぞれリンディに答えた。

リ「わかりました。あなた方もこれからよろしくお願いします。それと・・先ほどは失礼しました」

リンディは、なのは達を利用しようとした事を銀時達にも謝った。

銀「まぁ・・アイツらなら、どっちにしろ協力を申し出たかもな」

銀時が言った後、沖田が立ち上がった。

沖「あ～俺、腹減っちまいましたよ。そろそろ飯にしませんかィ？」

斉「俺もだ。下らん話はいい加減聞き飽きたんでな」

土「そうだな」

沖田と斉藤の言葉で、全員が立ち上がった。

リ「それじゃあ食堂へ局員に案内させます。」

そして銀時達は食堂に行った。

遠見市のマンション。
フェイトはソファーに座って、アルフはフェイトの前に座ってる。

ア「ごめんよフェイト・・・あたし・・剣心達を置いてきちゃったよ・・・」

アルフは今にも泣きそうな顔をしていた。
剣心に目で逃げろ、と言われたとはいえ、剣心を置いてきた事は心の底から辛かったようだ。

フ「大丈夫だよアルフ。剣心達は次元漂流者だから、管理局は保護してくれるよ」

安心させるようにフェイトが言う。だがしかしフェイトも心の中では剣心に会いたくて仕方がなく今にも泣きそうな位だった。

ア「・・ねぇフェイト・・もう止めようよ・・」

アルフはフェイトに詰め寄った。

ア「本気で捜査されたら・・此処だっていずれはバレちゃうよ」
フ「・・でも私、母さんの願いを叶えてあげたいの」
ア「あたしは・・！」

アルフが声を荒げる。

ア「フェイトには幸せになってほしいんだよ！フェイトが泣いたり悲しんだりすると、あたしの胸も苦しくなるんだよ！」

アルフは床に伏せて、必死にフェイトを説得した。

フ「アルフと私は精神がリンクしてるから、私の感情が流れちゃっているんだね・・ごめんね。私、もう泣かないよ」

フェイトの決意は固かった。アルフの説得もフェイトには届かなかった。

ア「なら・・約束して・・あの女の為じゃなくて、フェイトは自分の為に頑張るって！そしたらあたしは、全力でフェイトを護るよ！」
フ「うん。ありがとうアルフ・・」

フェイトは、優しくアルフの頭を撫でた。

フ（剣心・・）

フェイトは剣心の事を思う途端寂しさ心を埋めていき、表情が暗くなった。

フェイト（ごめんね剣心・・無理しないって約束・・破るかもしれない）

もう、剣心とシャナとヤミととアルフの騒がしい会話も聞けない。
剣心の手料理も食べれない。
微笑みいつも私達を心配してくれた剣心。
フェイトの目から一筋の涙が流れた。

フ（あれ・・？もう泣かないって・・決めたばかりなのに・・・）

アルフは顔を俯いていて、フェイトが泣いている事に気付いていない。

フ（剣心・・）

剣心の事を考えると、胸が苦しくなる。フェイトの目から止めどなく涙があふれ来た。

フ（・・会いたいよ・・・剣心・・・）

拭いても拭いても涙は止まらなかった。
俯いているアルフの頭にフェイトの涙が当たった。

ア「フェイト？」

アルフが気になって顔を上げると悲しそうな顔で涙を必死に拭いているフェイトの姿があった。
それを見て、アルフは悲しそうな顔をする。

フ「・・・ごめんね・・アルフ・・泣かないって・・・決めたのに・・・」

剣心が少女に与えたのは温もり、それこそが少女の心を少しづつ救った。だが、その温もりが消え、少女の心は寂びさに覆われ、心は悲しみにくれた。

ア「フェイト！」

アルフはフェイトを抱きしめた。

ア「良いんだよ。泣きたい時は泣いてさ」

アルフは胸の中でフェイトは泣き続け、アルフは剣心の事を思った。

ア（剣心・・・あんたならこうしただろ・・・）

アルフは剣心が帰ってくる事切に願った。

第十九訓　正義マンも卑怯な時がある（後書き）

支配者「ユーノはかなりひどい目にあいましたね」

ユーノ「何で僕がこんな目に・・・」

神楽「自業自得アル、この淫獣」

シャナ「そうよ、淫獣」

セイバー「そうです、淫獣」

ヤミ「そうです、えっちい淫獣」

ユーノ「淫獣淫獣って呼ばないでください！！」

支配者「では次回、お楽しみに」

ユーノ「聞いてぇー！！」

第二十訓　怒りっぽい奴はカルシウムを取れ（前書き）

ヤミ「リリカル剣魂スペシャル第二十話始まります」

第二十訓　怒りっぽい奴はカルシウムを取れ

ク「緋村剣心答えてもらう。あの黒い魔道師の隠れ家はどこにある？」

全員が食堂で食事をしている時クロノがこう質問してきた。

クロノの問いにシャナとヤミはおもわずマズイと言う顔をする。
二人はフェイトの居場所を言うのははっきり言って嫌だったが、クロノがそう簡単に誤魔化せる相手でない事も分かっている。
それに銀時、新八も知りたい様で、このままではフェイトの居場所を吐かなければならない事に内心焦っていた。
しかし、剣心はクロノの問に溜息混じりに答える。

剣「クロノ殿、お主は頭が悪いようだな」
クロノ「なにぃ！」

クロノは剣心の言葉で怒りをあらわにする。

剣「拙者がここに捕まっているのだから、隠れ家などとうに変えているに決まっているでござろう」

剣心は片手で頭を抑えながら言う。

銀「ああ確かにそれもそうだな」
セ「そうですね、剣心の言うとおりです」

銀時とセイバーが相槌を打ち、その他の面面も“ああなるほど”と言う顔をする。

クロノは納得がいかない様子だったが、剣心の意見が余りにも正論すぎるのでこれ以上は追求するのを止めた。
そう言ってリンディは立ち上がり、銀時達もその後について行った。

剣「これ以上聞く事は？」
ク「・・・では君達から感じられるこの妙な力は何だ？」
剣「気のことでござるか？」
ク「気？」

クロノは首を傾げた。

銀「おいおい、時空管理局の失望官様ともあろう者がそんなこともしらねえのか？」
ク「僕は失望官じゃない！執務官だ！」

銀時がワザとらしく間違えたのでクロノが怒鳴った。

剣「気とは人間の潜在的な力の事でござるよ」

剣心はさりげなくクロノにそう話した。

ク「・・・そうか分かった。もういい」
剣「他に質問は？」
ク「・・・もうない」
剣「では話は終わりでござるな」

そういって剣心達はまた食事に戻った。

剣「ほぉ～ここアニメの世界なのでござるか」

クロノの質問が終わった後、新八はこの世界がアニメの世界である事を話していた。

新「はい。『魔法少女リリカルなのは』っていうアニメです。多分、瞬間移動装置の中に持ち込んだ、そのアニメのＤＶＤが原因で僕らはこの世界に飛ばされたんだと思います」

銀「俺もよ～何でもありの銀魂でもそんなことはありえねぇと思ったけどよ、新八の説明を受けてやっと納得したんだわ」

銀時は頬杖をつきながら剣心にここはアニメの世界であると信じさせる。

新八「最初銀さん達僕の説明に対してこんな事言ってましたよね」

～過去回想～

なのはの家についてすぐの話、夕ご飯をもらう前の話である

銀時「つうかさぁ、さっきから気になってんだけど、結局『魔法少女リリカルなのは』って何なんだよ？」

今時のアニメとかゲームとか疎い銀時は『魔法少女リリカルなのは』と言う単語がいまいち分からないでいた。昔のドラクエ１とかのレトロゲームなら銀時は詳しいんだろうけど、いまどきの知識には疎い。そこら辺は爺臭いよなやっぱり。

銀時「誰だ！？人の事爺臭いって言ったのは！！」

つーか本当は３０代のおっさんなんじゃねぇの？年ごまかしてるだけで

銀時「誰が３０過ぎのおっさんだごらぁ！俺はまだ２０代だっつってんだろ！！年ごまかしてなんかねぇよ！どっかの芸能人じゃあるめぇし！！」

セイバー「ギントキ、誰に怒っているんですか？」

銀時「いや…何か誰かに罵倒された気がしてよォ」

銀時はおかしいな？と言う風に頭を掻く。

まあ、ナレーションの私が馬鹿にしたんですけどね

銀時「まあ、もう言いや…とりあえず『魔法少女リリカルなのは』について詳しく説明しろや、アニオタ眼鏡」

神楽「そうアル、さっさと説明しろやこのアニオタ眼鏡」

セイバー「そうです。さっさと説明してください」

新八「アニオタ眼鏡じゃないから！まあ、とりあえず『魔法少女リリカルなのは』アニメだってことは分かってますよね」

銀時「ああ」

新八の説明を聞いて銀時は頷く

新八「つまり、言いにくいんですけど僕達は源外さんの装置で『魔法少女リリカルなのは』の世界……つまり『アニメ』の世界に飛ばされたって事になります」

全『は？』

新八の言葉を聞いて、銀時、セイバー、神楽の時が止まる。

そして、

銀時・神楽
『『はっ？……はァァァァァァァァァァァァ！！！！？？？？』』

二人はとんでもない叫び声を上げ、セイバーは固まっていた

銀時「お前何言っちゃってんの！？何お前！？ここがアニメの世界！？ありえねぇにもほどがあんだろ！！アイドル追っかけすぎて頭おかしくなっちゃったの！？」
神楽「そうアル！いくらお前の頭が残念で２次元の世界に支配されてたからってそこまでアホになってるとは思わなかったアル！」
セイバー「前々からおかしいおかしいとは思ってましたけど…貴方そこまで落ちてたんですか…とうとう病院に入院しなければいけませんね」

銀時と神楽は声を上げて新八の意見を否定し、セイバーは頭を抑え呆れた様子で言う。
セイバーの態度はまさしく頭がついにイってしまった人に向けるそれだった。
セイバーの態度を見た新八が青筋浮かべて言う。

新八「なんですかその態度！！まるで現実と二次元の区別のつかない残念な奴を見るその感じは！！」
セイバー「自覚がないとは悲しいですね」
神楽「そうアル、そこまでいくともう現実世界の思考には戻れないアルな」
銀時「ぱっつぁん、一刻も早く精神科を退院できるよう祈ってるぜ」
新八「だからちげぇって言ってんでしょーがー！！！話をちゃんと聞け！！！！」

新八は3人の態度にブチキレながらも話を進める。

新八「いいですか、信じられないかも知れませんけどもう一度言いますよ。ここは『ア・二・メ』の世界なんですよ。分かりました?」

銀時「えっ?お前何?まだここがアニメの世界だと言い張るつもり?いだだだだだだ!痛いよォ~。おかぁさ~ん。ここに頭の怪我した子がいるよぉ~」

いくらなんでもありの銀魂の住人である銀時もアニメの世界に飛ばされたと言うような、オタクなら誰でも願うようなとんでも現象に遭遇したとは信じられなかった。

そして、腕に手を回して新八を痛い人を見るような目で見る。

新八「いい加減にしろやテメェー!!マジでぶっとばすぞゴラー!!」

セイバー「新八落ち着きなさい」

新八の怒りは爆発し銀時に飛びかかろうとした時にセイバーに止められる。

そしてセイバーはこう呟くのであった。

セイバー「何でこんなにもカオスになっちゃったんでしょうか?」

~回想終了~

新八「あの時はマジでぶっとばしてやろうかと思いましたよ」

神楽「お前が残念な頭の人の台詞を言うのが悪いアル。中二病」

新八「んだとゴラァァァ!!」

もううるさいので無理やり話を戻す。

剣「なにか証拠でもあるんでござるか？」

土「コイツを見ろ」

土方は剣心に、ある物を渡した。

剣心はソレを受け取った。渡された物は『魔法少女リリカルなのは』のＤＶＤだった。

真選組がこの世界に来た原因となったＤＶＤだ。そのＤＶＤのパッケージには、フェイトとなのはが写っていた。

剣「・・マジでござるか？」

土方「俺達も最初は信じられなかったが、魔術や超能力とは違う魔法やら時空管理局やらジュエルシードやらと、そのアニメの内容と全て一致する。信じるしかねぇだろ」

ため息をつきながら土方が言う。

神「っと言うか、（モグモグ）お前一応そのアニメの（モグモグ）内容全部見ていたんアルナ（モグモグ）・・・」

斉藤「全く・・・なんでこんなアホゥが俺たち新撰組の副長なんだ」

ケーキをなん皿も食べている神楽がワザとらしく土方に軽蔑の視線を向けながら言い、斉藤は呆れながら掛けそば食べていた。

土「そんな目で見んじゃねぇよ！斉藤も！俺だって好きでこんな物見てたんじゃねぇ！これは全てトッシーのせいだ！！それと口にケーキ入れながら喋んな！分りにくいだろーが！！」

シ「でもそのトッシーはお前の一部でしょ」

メロンパンを食べながらシャナは土方の意見を否定する。

土「違うって言ってんだろ！あんなのは俺にとって膿以外の何者でもねぇんだよ！」

土方は声を上げて言った後、落ち着くためにタバコを吸う。

沖「まったく、土方さんのせいで、侵入者に間違われたり大変でしたぜィ」

斉「全くだ、このアホゥが」

土「だから俺のせいじゃねーよ！トッシーのせいだ！それと斉藤！テメェさっきから人のことアホアホ言ってんじゃネエ！！」

隣に座って、オレンジジュースを飲んでる沖田と掛けそばを食べている斉藤を土方は怒鳴る。

真選組の五人は、気がついたらアースラの中にいた。最初は侵入者と間違われたが、事情を話すと次元漂流者という事で保護されたのだ。

銀「ここの連中は、ここがアニメの世界だって知ってんのか？」

銀時が土方に尋ねた。

土「リンディ艦長とクロノには、この世界がアニメの世界である事を教えてある」

近「まぁ最初はリンディ艦長達も、自分達がアニメのキャラクターである事には信じられなかったみたいだがな」

近藤が腕を組んで言う。

そりゃあそうだ。自分達がアニメのキャラクターで、住んでいる世

界が架空の世界だなんて、すぐに信じられるわけがない。

剣「それはちょっと違うのではないか？」

土「ん？それはどういう事だ？」

剣心の言葉に土方が怪訝そうな顔で言う。他のメンバーも剣心の言葉で視線を剣心に向ける。

剣「だって可笑しいと思わないか？そもそもここがアニメの世界なら拙者達はこの世界にこられないはずだろう」

剣心の言葉でヤミとセイバーがなるほどと言う顔をする。

セ「確かに三次元の存在である私達が二次元の世界に行けるのは可笑しいですね」

剣「それにもしここがアニメの世界なら、原作には出てこない拙者達が現れるはずがないでござろう？」

リ「なるほど。確かに剣心さんとセイバーさんの意見が最も論理的ですね。なら私達の世界は剣心さん達から見れば所謂並行世界、つまりパラレルワールドってことになりますね」

リンディも二人の意見が最も論理的な意見だと頷く。他のメンバーなる程と言う顔をするが、どうも神楽と近藤は分らない顔をしていた。

神「銀ちゃん？そのパラサイトポンポンって何アルか？」

銀「バッカちげぇよ。パラソルンクヘールドだよ」

新「どっちも全然違うから！パラレルワールドです！」

新八が即座にツッコム。

シ「パラレルワールド。つまり可能性の世界の事よ」

頭のいいシャナが説明するが、どうもまだ神楽と近藤は理解できないようだ。

ヤ「つまり掻い摘んで説明すると、もし神楽が朝、コーヒー牛乳飲んだとするでしょう。でももしかしたらその時神楽はコーヒー牛乳ではなくイチゴ牛乳を飲んでいたりする可能性もあるわけです。これで朝神楽が何をするかと言う可能性が二つできるでしょう？」

ヤミの説明に神楽が“うんうん”と相槌をつく。

シ「つまり平行世界って言うのは、そういういくつも有る可能性の世界って事よ」

神「ほぉ～なるほど～」

シ「本当に分ったの？」

シャナは目を細めて聞く。シャナは神楽が本当に理解したのか心配だった。

神楽「つまりゴリラ近藤が本物のゴリラになっていたり、サドがこの世から消えている世界も有るってわけアルな」

シ「まぁそんな感じよ」

沖田「じゃ～チャイナが蒸発している世界もあるってことでィ」

沖田は神楽の例えが気に入らなくて、挑発とばかりに言う。神楽はそんな沖田を睨みながら言う。

神「じゃ～てめぇがう○こになっている世界もある筈アルな」

沖「ならおめぇがち〇こになっている世界も有る筈でィ」

神楽と沖田は互いがどんな世界でどんな状態になっているかと言う、言い争いを始める。

新「ちょっと神楽ちゃん！女の子が気安くう〇ことか言わないで！沖田さんも刺激しないで！」

新八は慌てて二人の喧嘩を仲裁しようとする。

神楽・沖田

『『どんな世界でもメガネが本体の奴は黙ってろアル（でィ）』』

新八「んだとぉー！！」

新八はキレて二人と言い争いを始める。

リンディと剣心はその様子を苦笑して見ていた。

ク「ちょっといいかな？」

クロノが剣心の顔を見ながら言う。

ク「剣心。貴方に聞きたい事があります」

剣「ん？何でござる？まだ質問があるのか失望官殿」

ク「失望官じゃない！執務官だ！！明らかにワザと間違えてるだろ！！」

剣「はいはい。って一体なんでござるか？」

剣心は頬杖つきながら答えた。

クロノが、コホンと咳をする。

ク「貴方はあの金髪の魔導師と一緒に行動していた。彼女の目的は何だ？」

真剣な表情で剣心に尋ねるクロノ。

だが、剣心は。

剣「あっ、すまぬが、ご飯お替りでござる」

ク「人の話を聞けェェェェ！！」

叫びながらクロノは、強くテーブルを叩いた。

剣「そうそう。彼女の目的でござるか」

ク「ちゃんと聞いていたのか！？」

クロノは肩で息をしている。

剣「もう疲れたのでござるか？新八殿だったらもっとツッコムのだが」

ク「聞かれた質問にだけ答えろ！！」

新「クロノ君！落ち着いて！完全に剣さんのペースだよ！」

言い争いを止めた新八がクロノを落ち着かせる。

剣「質問の答えでござろう。目的はわからない。ちなみに彼女は、ある人物に言われてジュエルシード集めをしているだけでござる」

ク「それは一体誰なんだ？」

剣「そこまでは拙者も知らぬ」

ク「本当か？」

クロノは疑いの目を剣心に向ける。

剣「信じるかどうかは、お主の自由でござる」

互いに睨み合う。

先に視線を外したのはクロノだった。

ク「・・これ以上聞いても、無駄のようだな」

クロノはため息をついた。

剣「それにしても何でさっき聞かなかったのでござるか？」

新「それは剣さんや銀さんにボロクソ言われて疲れて聞けなかったからですよ・・・」

新八は呆れた様に言う。

ク「明日の会議で、君達の事を紹介する。遅れずに来てください」

剣「あい、分った」

剣心は軽く返事をし、クロノとリンディは食堂を去っていった。

ちなみにその頃フェイトは言うと・・・

ア「フェイト～剣心達が捕まっちまったんだし拠点の場所を変えたほうが・・・」

フェイト「だめ！剣心達がもしかしたら帰ってくるかもしれないか

ら絶対場所は変えない！」

フェイトは頑としてアルフの意見も聞かずにマンションから出て行こうとはしなかった。

アルフ「フェイト～（泣）」

剣心がクロノを丸め込まなければ危なかっただろう。

第二十訓　怒りっぽい奴はカルシウムを取れ（後書き）

支配者「クロノは新八なみにカラカイがいのあるキャラですね。今度クロノのためのお楽しみのあとがきを書こうと思います。」

クロノ「おっおい作者それだけは辞めてくれ！！」

支配者「いえ、やります。では次回をお楽しみに」

クロノ「イヤだ～！！」

第二十一訓　空気の読めない奴は馬に蹴られてしまえ（前書き）

シャナ「リリカル銀魂スペシャル第二十一話始まるわよ」

第二十一訓　空気の読めない奴は馬に蹴られてしまえ

翌日。
アースラの会議室。
局員達が椅子に座ってる。
その中には万事屋、真選組、なのはとユーノの姿もあった。なのはとユーノは、緊張のせいか表情が固い。
リンディが局員達に、これからの事について説明している。

リ「・・・というわけで本日をもって、本艦の任務はジュエルシードの回収に変更されます」

局員を見渡しながらリンディが言う。

リ「また、今回は特例として問題のロストロギアの発見者であり、結界魔導師でもあるこちら」

リンディがユーノを見る。

ユーノ「はい！ユーノ・スクライアです！」

ユーノは緊張しながら立ち上がり、自己紹介をした。

リ「それから彼の協力者でもある現地の魔導師さん」
な「た・・高町なのはです！」

なのはもユーノ程ではないが、緊張しながら自己紹介をした。

リ「最後に真選組以外の一般の協力者です」

新「銀さん」

新八が小声で自己紹介をするように促した。

銀「あ？たくっ。しょうがねーな」

メンドくさそーに銀時は立ち上がった。

銀時「どーも。坂田銀時です。キャプテンを志望してま～す。趣味は糖分摂取で、特技は目をあけたまま眠れることです」

緊張した様子もなく、ダラけた声で自己紹介する。

次に剣心が立ち上がった。

剣「拙者は緋村剣心と申す。よろしくお願い申す」

緊張した様子もなく自己紹介をする。

次に神楽が立ち上がった。

神楽「私の夢は！卵かけご飯を毎日おなかいっぱい食べることです！でも夢は叶うと寂しいから、胸の奥にしまっておこうと思います！」

次にシャナが立ち上がる。

シ「私はシャナよ。目標は世界中の甘い物を手に入れること♪」

シャナは笑顔で自己紹介をした。相変わらず銀時並の甘党発言をする。

次にセイバーとヤミが立ち上がった。

セ「私は銀時のサーヴァントのセイバーです。よろしくお願いします」
ヤ「ヤミです。特技は暗殺です。」
セイバーは普通にヤミは怖い自己紹介をした。
新八「剣さんとセイバーさん以外はもう少しマジメに自己紹介しろ！それとヤミちゃんはとんでもない特技を言うな！すいません皆さん！！」
四人にツッコんだ後、新八は頭を下げて謝った。四人に反省の色はない。
周りの局員達は、呆れた顔で四人を見ていた。
リ「え・・えっと・・彼らが臨時局員となって事態にあたってくれます」
なのは・ユーノ・新八・剣心
『『よろしくお願いします！（申す）』』
なのは、ユーノ、新八、剣心が頭を下げてあいさつする。ヤミとセイバーは無言で頭を下げる。
銀時と神楽とシャナは椅子に座ってあくび欠伸とあぐらをかいている。
新「お前らも頭下げろ大ボケ共がぁぁぁぁ！！」
新八が無理矢理、銀時に頭を下げさせた。
銀「神楽もシャナもちゃんと頭下げろ」

なぜか無理やり頭を下げさせられている銀時が二人に注意する。

新「お前が言うな！！」

結局神楽とシャナは新八に無理やり頭を下げさせられる。
真選組の近藤と土方と山崎と斉藤は頭を抱え、沖田はふざけたアイマスクをして寝ていた。
それを土方と斉藤が叩き起こした。
その様子を見てクロノは頭を抱えた。

森の中。
なのは達は管理局が見つけたジュエルシード発見場所にいた。
そこには不死鳥のような姿の巨大な怪鳥がいた。怪鳥は、ユーノの緑色の鎖に繋がれて鳴き声を上げながら暴れる。

沖田「あ～あ～ダメでさァ、ユーノ」

そう言いながらユーノに近づいたのは沖田だった。

ユ「沖田さん？」
沖「沖田鎖の締め具合いが甘ぇぜ。もっとキツく締めな」

そう言って沖田は、一本の鎖を思いっきり引っ張った。

「グァアアア！！」

怪鳥は先ほどよりも大きな悲鳴を上げながら暴れた。

沖田「おっ、なかなかいい悲鳴上げるじゃねぇか。道具持ってくりゃあよかったな～」

沖田は、道具を持ってこなかった事を心底後悔した。

ユーノ「あの・・この鎖は相手を痛ぶるための物じゃないんですけど・・」

ユーノは、やんわりと沖田に言った。

シ「その通りよ。鎖は相手を痛ふる物じゃないわ」

ザシュ！ザシュ！ザシュ！ザシュ！ザシュ！ザシュ！ザシュ！ザシュ！

そう言うシャナはなぜか怪鳥の背中に乗って、刀に炎の力を付与させて巨大な炎の刃を作り、怪鳥を背中から滅多切りにしていた。

「グギャアアアアアアアアアア！！！」

怪鳥はさっきよりも激しい悲鳴を上げた。

シ「こうやって鎖で動けない相手をズタボロにするための物よ♪」

シャナは笑顔で言った。

ユ「いや、確かにそうかもしれないですけど・・何か違うような・・

・って言うか、シャナさんて魔法が使えたんですか！？」
シ「これは魔法じゃなくて私の能力よ」

ユーノはシャナの言い分は確かに合っている気がするのだが、やっぱり何か違う気がした。そしてシャナが魔法を使えた事に驚いていたがシャナはこれは魔法の力ではないとあっさり否定した。

沖「俺もあの女に負けてられねぇ。他に道具はねぇのかィ？」
ユ「いや・・それは・・・」

シャナに対抗心燃やした沖田の質問に、ユーノは困った顔をする。

沖「じゃあ鎖の数もっと増やしな」
シ「ユーノ。私もそれには賛成」
ユ「いや貴方達、鬼？」
斉「下らん」
ユ「斉藤さん？」

斉藤が急に三人の前に出て刀を抜いた。

斉「苦しめるなど面倒だ。こんな奴さっさと斬り殺せば良いだろう」
ユ「ちょッ、辞めて下さい！！」

刀を抜いた斉藤をユーノが必死で止める。

そんなやり取りが行われている間に、なのははジュエルシードを封印した。

沖「あ～全然イジメ足りなかったけど、仕方ねぇや」
シ「あ～あ、もう少し黒焦げにしたかったわね」

斉「チッ、斬り殺したかった」

三人は少し残念そうな顔をした。
そんな三人を見て、なのはとユーノは顔を引きつらせた。

どこかの遺跡。
そこにはフェイトとアルフがいた。

ア「フェイト。ダメだ。また空振りみたいだ」
フ「そう」

フェイトは目の前にある遺跡を見つめた。

ア「やっぱり向こうに気付かれずに、隠れて探すのは難しいよ」
フ「うん。でも、もう少し頑張ろう」

フェイトは空を見上げた。

フ（剣心・・今頃どうしてるかな？）

時の庭園。
プレシアは一人王座に座っていた。

プ（フェイト・・・今頃、私のためにジュエルシードを集めてるの

かしら・・・）

プレシアは考えた。最愛の娘が自分の勝手な願いで傷ついていると思うと涙が出てきた。そしてこれからフェイトとの別れが近づいている事も。

「おやおや、大魔道師ともあろうお方がそんな事で涙を流すのかね？」

突然、人を小ばかするような声がプレシアの耳に届いた。
プレシアが声のする目の前を見ると、
朱色の髪に右目が機械で出きている男、魔人族の首領『炎帝のジュド』が嫌味な笑みを浮かべながら歩いてきた。

ジ「やはりあの人形の事が心配かな？」

ジュドの言葉がプレシアの勘に触り、プレシアはジュドに向かって雷を放つ。
するとジュドは炎の壁を作り出し、プレシアの雷を受ける。
そして、ジュドは何事もなかったかのように立っていた。

プレシア「！！」

自分の攻撃がまったく効かない事にプレシアは少なからず驚いていた。

ジ「まあ、君の魔法の中で一番威力が低い上に今の君は病で弱っている身だ。そんな君の攻撃がこの私に効くはずがないだろう」

ジュドは可笑しそうに言う。

そしてジュドは炎の壁を消す。

プ「それで、なんのようなの？」

プレシアは声音を強めてジュドを睨む。

ジ「そんなに睨まないでくれたまえよ。私はただ、ちょっと君の体を心配して様子を見にきただけだというのに」

ジュドは怪しい笑みを浮かべながらそう言う。

プ「（心にもないことを・・・）何も問題はないわ。もう言ってちょうだい」

プレシアは疲れたように顔をジュドから背けながら言う。プレシアはこれ以上ジュドのニヤついた顔を見るのが嫌だった。

ジ「そうかね、では失礼するよ・・・ククク」

ジュドは頭を下げてプレシアの部屋から出て行く。

ジ（ククク。せいぜい今の内にあの人形の事を思っているがいい。君達親子に最低のレクイエムを聞かせてあげよう）

ジュドの思惑も動きつつあった。

クロノとオペレーターの『エイミィ・リミエッタ』がフェイトについて調べていた。

ク「フェイト・テスタロッサ。かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

画面を見ながらクロノが言った。

エ「じゃあ、その関係者かな？」

ク「わからない。偽名かもしれない。でも、もしかしたら、その大魔導師と繋がりがあるかもしれない」

万事屋組はリンディと食堂で話をしていた。

剣心は時空管理局の人間にあまり自分たちのことや世界のことは教えたくはなかったが仕方なくある程度のことを話した。

ちなみにクロノはこの席からはずされた。

クロノの事はそんなに信用していないのだ。

そして剣心は自分が最も気にしていることであるジュド達魔人族のことをリンディに聞いた。

リ「・・・魔人族ですか？その人達もジュエルシードを狙っていると？」

剣「うむ、リンディ殿なら奴らのことを知っていると思ったのだが」

リ「・・・ごめんなさい、私も聞いた事もない存在だわ」

剣「そうか、リンディ殿も奴等の事を知らないか・・・」

剣心は頭を掻く、

時空管理局の提督であるリンディまで奴等の事を知らなかったのだ

から無理もない

リ「ですがその人達もジュエルシードを狙っているのなら放って置けませんね」

剣「そうでござるな」

剣心とリンディは魔人族に対抗するための話しをし始めていた。

そして、銀時達がアースラに移ってから十日目。なのはが回収したジュエルシードは8、9、10の計三つ。

一方、フェイトが回収した数は2、5の計二つ。残るジュエルシードは六つ。だが、その残り六つが見つからずにいた。

銀時達は食堂にいた。

それぞれ料理を持って、席に着いたのだが。

ユ「・・・・・」

ユーノと剣心は、苦い顔をしていた。原因は銀時となのはとセイバーとシャナとヤミと土方にあった。
万事屋組みとなのはは白いご飯の上に大量の『小豆』をかけた。
土方はカツ丼の上に大量の『マヨネーズ』をかけていた。
小豆テンコ盛りの『宇治銀時丼』と、マヨネーズたっぷりの『カツ丼土方スペシャル』。
ユーノと剣心はこの光景を何度も見たが、やはり慣れることはできなかった。

銀「おい。お前の犬のエサのせいで、ユーノと剣心が気分悪くしてるぞ。席移れ」
シ「ユーノと剣心の事も考えてよ。席外して」
土「フザケンな。お前らのイカれた食い物を見て気分悪くしてんだよ。お前らが席を移れ」

睨み合う両者。セイバー、ヤミは黙って食べ、『カツ丼土方スペシャル』を嫌そうに睨み、なのはは苦笑して『宇治銀時丼』を食べていた。

新八「あの・・剣さん・・」

新八が声をかけた。

剣「何でござる?」

土方から視線を外して、新八を見た。

新「フェイトちゃんの事なんですけど・・本当に管理局に保護を頼

まなくていいんですか？」

新八は、前から思ってた事を口にした。
公園の時に、体を張ってまでフェイト達を護ったのだ。剣心なら、リンディ艦長に頼んでフェイト達を保護して貰おうと考えそうなのだが。

剣「新八殿、今彼ら管理局にフェイト殿達を保護してもらっても、何の解決にもならんでござるよ」

剣心は新八にそう答えた。その顔は険しかった。理由を知っている銀時も険しい顔をしながら宇治銀時丼を食べていた。

近「何かワケありか？緋村」

近藤が剣心に尋ねた。

剣「ああ」

剣心は箸をテーブルに置いた。

剣「彼女はな。子供なのに一人で何でも背負おうとして、無茶ばかりする少女なのでござるよ」

そう言って剣心は近藤を見た。

銀「それを言えば、なのはも同じだな」

銀時は頬杖をつきながらなのはを見た。

な「・・銀さん。剣心さん」

剣心・銀時
『『ん？』』

唐突に、なのはが二人に話し掛けた。

な「私もね。小さい頃はよく一人だったんだ」

銀「・・そうなのか」

剣「・・・・・・」

銀時は黙って話を聞く。剣心と同じ様に周りの皆も黙って話を聞いてる。

な「私が小さい頃に、お父さんが仕事で大怪我しちゃって・・しばらくベッドから動けなかった事があるの」

なのはは話を続ける。

な「喫茶店も始めたばかりで、まだ人気はなかったから、お兄ちゃんやお母さんもずっと忙しくて」

銀時・剣心
『『・・・・』』

なのはの話を、二人は黙って聞いてる。
話をしている時の、なのはの顔は少し寂しい表情をしていた。

な「お姉ちゃんは、ずっとお父さんの看病で・・・だから私、割と最近まで家にいる事が多かったの」

そう言って、なのはは笑顔を作った。

な「銀さん、剣心さん」

銀時・剣心
『『ん？』』

な「一人ぼっちの子にしてあげるのは、大丈夫って優しく言う事でも、心配する事でもないと思うんだ」

銀時・剣心
『『・・・・・』』

二人は黙って、なのはの答を待つ。

な「同じ気持ちを分け合える事。悲しい気持ちも寂しい気持ちも半分こにできる事だと思うんです」

なのはが答を言う。
答を聞いた二人は、静かに目を閉じた。シャナとセイバーは俯いて考えた。

銀時も最初は一人だった。家族もいない。一人で生きてきた。そんな銀時を一人の人物が拾った。
それから銀時には仲間ができた。気持ちを分け合い、解り合える大切な仲間。
だが、その仲間の多くを天人との譲夷戦争で失ってしまった。

剣心には家族はいた。剣心がまだ小さかった頃にその両親や姉がわ

けの分からない滅茶苦茶な疑いをかけられアマント達に殺されてしまった。その後しばらく一人で生きていたが、自分の師匠である比古性十郎に拾われ、飛天御剣流を習った。そして、強くなった剣心はアマントに蹂躙されている日本を救おうと攘夷戦争に参加した。だが、銀時と共に戦った攘夷戦争で新たに出来た仲間の多くを失った。

そして時を経て、二人に新しい仲間。いや、家族と呼べる者達ができた。

二人は目を開けた。

銀・剣「・・そうだな（でござるな）」

そう言って銀時と剣心は微笑んだ。

その時、アースラ内に緊急事態のアラームが鳴った。

曇天の海。

海上には巨大な金色の魔法陣が展開されていた。

フ「アルタス、クルタス、エイギアス・・・」

魔法陣の上には、呪文を唱えてるフェイトがいた。

魔法陣から少し離れた場所には、狼形態のアルフが心配そうにフェイトを見つめていた。

ア（海の中にあるジュエルシードの位置を特定するために、電気の魔力流を海に叩き込んで強制発動させる。それは間違ってないけど・・）

アルフの表情が険しくなる。

フ「はぁあああ！！」

呪文を唱え終えたフェイトが、海に向かって巨大な雷を放った。

海から六つのジュエルシードの光の柱が現れる。

フ「見つけた・・五つ！」

フェイトの呼吸が荒くなる。

ア（これだけの魔力を打ち込んで、さらに全てを封印するなんて・・いくらフェイトの魔力でもとっくに限界を超えてる！）

フェイトの心配をしながら、アルフは数日前まで自分達と一緒にいた、赤い服を着た赤髪の男を思い浮かべた。

ア（剣心・・・あんたなら・・フェイトを上手く抑えられたのかな？）

アルフが考えていると、

フ「アルフ！」

フェイトがアルフに声をかけた。

フ「空間結界とサポートお願い！」

ア「あ・・ああ！任せといて！」

フェイトの言葉でアルフは考えを切り替えた。

ア（あたしが弱気になってどうするんだ！あたしはフェイトの使い魔なんだぞ！剣心は体を張ってフェイトを護ったじゃないか！だったら！）

アルフは決意を固めた眼をする。

ア（あたしも全力でフェイトを護るんだ！！）

フェイト達の前で、ジュエルシードの光は巨大な竜巻になった。

フ「いくよバルディッシュ。頑張ろう」

バルディッシュを構えて、フェイトは嵐の中を飛んだ。

緊急事態のアラームを聞いた銀時達は、ブリッジに入った。

銀時達は画面を見た。ジュエルシードの力に弾き飛ばされても必死に戦うフェイトの姿が映っていた。

剣・シ・ヤ

『『フェイト（殿）！』』

なのは

『フェイトちゃん！』

四人が、フェイトの名を叫んだ。

リ「なんとも呆れた無茶する子達だわ！」

画面を見ながらリンディが呆れ半分、心配半分に言った。

ク「無謀ですね。間違いなく自滅します」

クロノが悪びれた様子もなく言った。

その言葉に、剣心はわずかに眉をひそめた。

ク「あれは個人が出せる魔力の限界を越えている」

な「あの・・私急いで現場に行きます！」

なのはが、ブリッジの転送装置に行こうとした時、

ク「その必要はないよ。放っておけば、あの子は自滅する」

クロノがそれを止めた。

な「！？」

クロノの言葉に、なのはは驚いた顔をして動きを止めた。

周りにいるユーノや新八や神楽やセイバーも驚いている。銀時と剣心とシャナとヤミと真選組の五人は、表情を険しくした。

ク「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを叩けばいい。」

な「でも・・」

クロノの非情な言葉に、なのはは戸惑った。

ク「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

クロノの指示を受けたオペレーターが準備をする。

リ「私達は、常に最善の選択をしなきゃいけないの。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実よ」

リンディが険しい表情で画面を見上げた。

フェイトは、まだジュエルシードを封印しようと必死に戦っていた。

画面を見上げていた銀時が口を開いた。

剣「最善の選択？最低の選択の間違いでござろう」

ク「何だと！？」

クロノは、振り返って剣を睨んだ。

銀「剣心の言う通りだ。俺達のいた世界にも、幕府って組織があるが・・どうやらテメーらも、幕府と同じくらい腐ってるみてぇだな」

ク「貴様・・！口を慎め！！」

クロノが銀時に向かって叫んだ。

直後、銀時の眼がカッと見開かれた。

銀「目の前で苦しんでるヤツらを救おうともしねーで、世界を管理するなんて大層な事吐かしてんじゃねェェェ！！」

銀時の怒声がブリッジに響き渡った。

その声にクロノとリンディだけでなく、ブリッジにいる局員全員がたじろいだ。

新「銀さんの言う通りです」

新八が剣心の横に並ぶ。

セ「世界を救う前に、目の前で必死に戦ってる少女を救ったらどうなんですか？」

セイバーは剣心の横に立つ。

神楽「苦しんでる女の子を見捨てるなんて、お前ら薄情者アル！！」

シ「世界を救おうとする組織のする事がこれ？最低ね」

ヤ「あなた達の正義は、苦しんでいる少女を見捨てる事なんですか？」

万事屋メンバーが次々に言う。

ク「き・・君達は・・・！」

銀時達の言葉に、クロノは歯を食いしばる。

ク「土方さん！」

クロノは、真選組の方に顔を向けた。

ク「貴方達も、組織の人間ならわかるはずだ！」

真選組の五人に向かって叫んだ。

土方は、静かに煙草とライターを取り出した。

土「確かに何を優先させるべきかは、俺にもわかる」

そう言って土方は煙草に火をつけた。土方の言葉に、クロノは笑みを浮かべた。

しかし、続けて土方が言った言葉は、クロノにとって意外なものだった。

土「だがな。目の前で弱ってるガキを見捨てるテメーらと一緒にされるのは虫唾が走るぜ」

ク「な・・！？」

土方の言葉に、クロノは大きく目を見開いた。

続いて沖田が言った。

沖「目の前で苦しんでる奴がいたら、いい奴だろーが悪い奴だろーが手ぇ差し伸べる。でしたよね？近藤さん」

近「その通りだ！」

沖田の言葉に、近藤は大きく頷いた。

山「僕も目の前の女の子を見捨てる君達のやり方は理解できないよ」

山崎も自分の意見をしっかりと言った。

そして、斉藤はこう言う

斎「俺はこいつらのように奇麗事を言う趣味はないが、あんな小娘相手にこんな手を使わねば何もできんような連中と一緒にされたく

ないな」

そして近藤はリンディを見つめた。

近「リンディ艦長。俺達はあんたの部下でも管理局の者でもない」

隣にいる土方と沖田と山崎と斉藤も、目を鋭くしてリンディを見つめた。

近藤「俺達は真選組だ！」

毅然とした態度で近藤が言い放った。

銀時達や真選組の言葉に、クロノは表情をどんどん険しくした。

ク「貴方達は、事の重大さがわか（黙れ）！？」

近づくクロノの頭に斉藤が剣先を向けた。

ジャキン

ク「なッ何を・・・」

斉「いつから、俺たちが貴様らの手下になった。ガキが世の中のすべてを知った風な口を叩くな」

ク「う・・グッ」

そして斉藤は刀をしまうとクロノの頭を掴んで

斎「お前のようなアホゥは少し黙ってろ」

ク「へぶっ！！」

おもいっきり顔面を床に叩きつけた。

銀「お前ちょっとうるさい」

次に銀時が素早く倒れたクロノに近づいて、

ザシュ

ク「ぎゃあああ！！！」

クロノのケツにおもいっきり木刀を刺した。クロノはあまりの痛さに悲鳴を上げる。

それをリンディや局員は唖然と見ていた。

リ「あ、あのお二人のは・・その、いくらなんでもやりすぎですよ・・・」

リンディもクロノを止めようとしていたが、いくらなんでも二人のやり方は酷いと思った。

斉「聞きわけのないガキはこれくらいしたほうがいい、むしろ甘いくらいだ」

銀「はっきり言ってウザイ」

斉藤は悪びれた様子もなく、そう言う。

銀時は木刀をクロノのケツから抜きながら耳をほじって悪びれもなく言う。

ク「・・・・・・・・僕はガキじゃない！！それにウザくない！！何するんだ！！」

クロノは顔と尻をを抑えながら、怒鳴る。ちょっと涙目になりながらのた打ち回っていた。

クロノの怒鳴りに斉藤はまったく動じずに近藤達の所に戻る。新八達は戻った二人を「二人共やるじゃない」、「なかなかアル」、「さすが斉藤さんですネェ」「さすがは斉藤だな！」「私はもっとやってもよかったと思いますよ」、「最高ですね」などなど褒めていた。

なんとか立ち上がってまた近づこうとしたクロノをリンディが制した。

ク「か・・艦長！？」

クロノは戸惑いながら、リンディに顔を向けた。

な「リンディさん！」

なのはの声がブリッジに響いた。

な「私・・フェイトちゃんを助けたいです！！」

真っ直ぐにリンディを見つめながら、なのはが言った。その瞳には、強い決意が宿っていた。

リ「・・・・わかりました。行動を許可します」

ク「艦長！？」

リンディの言葉に、クロノは驚いた。

な「ありがとうございます！」

ユ「急ごう、なのは！」

リンディにお礼を言って、なのははユーノと一緒に転送装置に向かった。

その時、

剣「なのは殿」

剣心が、なのはを呼び止めた。

な「は、はい」

なのはは、足を止めて剣心を見た。

剣「悪いが今回、拙者は力になれんでござるよ。空が飛べないのでな」

そう言って剣心は、なのはに顔を向けた。

剣「フェイト殿を頼む」

な「はい！」

剣心の言葉に、なのはは力強い声で返事をした。

剣「そのかわりシャナ殿とヤミ殿をを連れて行ってやってくれ、彼女達なら空を自由に飛べる」

剣心は横にいるシャナとヤミを見る。

シ「そうね、私達もフェイトのこと放っておけないし」
ヤ「分かりました」

シャナとヤミも了解する

な「わかりました。よろしくシャナちゃん、ヤミちゃん」
シ「よろしくなのは」
ヤ「よろしくお願いします」

なのはは笑顔で、シャナとヤミは軽い笑顔で答える。
そして銀時はなのはに近づき応援の言葉を送る。

銀「頑張ってこいなのは」
な「はい！」

なのはは銀時の応援に笑顔で答える。銀時に応援でなのははさらに勇気が湧いた。なのははユーノと向かおうとする時、

剣「それから、なのは殿、シャナ殿、ヤミ殿」

再び剣心が、なのはとシャナ、ヤミを呼び止めた。

剣「一つ、彼女達に伝えてほしい事がある」

なのは・シャナ、ヤミ
『『え？』』

三人は、首を傾げた。

第二十一訓　空気の読めない奴は馬に蹴られてしまえ（後書き）

支配者「所詮クロノはＫＹですね」

銀時「ッたくこれだからＫＹは」

クロノ「僕をＫＹと呼ぶな！」

支配者「では次回、ついにクロノのためのお楽しみが！」

クロノ「なッなんだって！？」

支配者「では楽しみにお待ちください」

クロノ「イヤだァーー！！」

第二十二訓　銀魂は所詮ギャグアニメだ（前書き）

支配者「ハイ、今回はクロノのお楽しみがあります」

クロノ「辞めてくれェー！！」

神楽「では、第二十二話始まるアル」

第二十二訓　銀魂は所詮ギャグアニメだ

荒れ狂う海上で、フェイトはバルディッシュを構えて竜巻に突っ込もうとする。もう何度弾かれたかわからない。バルディッシュの魔力の刃も失った。
それでもジュエルシードを封印しようとした時。

フ「！！」

バリアジャケットを着て、レイジングハートを持った、なのはが現れた。

ア「フェイトの邪魔するなァァァ！！」

なのはに気付いたアルフが、噛み付こうとする。

ヤ「待ってください！！」
シ「アルフ落ち着いて！」
ア「シャナ・ヤミ！？」

シャナとヤミがアルフの前に飛び、アルフを止める。アルフは現れたシャナとヤミに驚いていた。
次にユーノが叫ぶ。

ユ「待ってくれ！僕達は戦いにきたんじゃない！」
ア「えっ！？」

アルフが驚きの声を上げる。

ユ「今はジュエルシードの封印を！」

叫んで、ユーノは巨大な緑色の魔法陣を展開した。魔法陣から緑色の鎖を放ち、竜巻に巻きつけて動きを抑える。
ヤミは髪の毛を変形させ、竜巻に巻きつけ押さえ込もうとする。
シャナも火炎弾を竜巻に撃って竜巻の力を弱めていく。

な「フェイトちゃん！」

なのはは、フェイトの隣に移動した。

な「二人でジュエルシードを止めよう！」

レイジングハートの赤い玉から、桜色の魔力が出る。桜色の魔力は、バルディッシュの黄色い玉に入っていった。

レ〈パワーチャージ〉

バルディッシュに魔力の刃が戻る。

バ〈スリープモード〉

フェイトは隣にいる、なのはに顔を向けた。
なのはは、頷いて応える。
ユーノとシャナとヤミが必死に竜巻を抑える。途中からアルフもオレンジ色の鎖を放って、一緒に竜巻を抑える。

な「ユーノ君とシャナちゃんとヤミちゃんとアルフさんが止めてる今のうちに！」

隣にいるフェイトに顔を向ける。

な「二人で”せーの！”で一気に封印するよ！」

レイジングハートを構える。

な「ディバインバスター、フルパワー！」

レイハ〈ＯＫ　ＭＹ，ＭＡＳＵＴＥＲ〉

なのはの足下に、巨大な桜色の魔法陣が展開された。

フェイトもバルディッシュを構えて、巨大な金色の魔法陣を展開する。

な「せーの！」

なのはが合図する。

フ「サンダー・・」

な「ディバイン・・」

二人ともデバイスを構える。

フ「レイジーー！！！」

巨大な雷が、竜巻に向かって放たれた。

な「バスターーー！！！」

桜色の閃光が竜巻に直撃した。

金色の光と桜色の光が六つの竜巻を飲み込んだ。

＊

アースラのブリッジ。

エ「ジュエルシード、五個全ての封印を確認しました！」

オペレーターのエイミィが報告する。

ク「な・・なんてデタラメな・・！」

クロノが驚く。

クロノだけでなく、ブリッジにいる全員が驚いていた。

沖「こいつぁスゲーや」

セ「豪快ですね」

斉「フン、小娘にしてはなかなかだな」

画面を見て、三人が呟いた。

神楽「やったぁ！なのはやったアル！」

神楽は嬉しさで飛び跳ねてる。

隣にいる銀時と剣心は、小さく微笑んだ。

＊

海上。

フェイトと、なのはの前に五つのジュエルシードが現れた。

嵐は収まり、雲が割れて太陽の光が差し込む。

な「えっと・・半分こは・・できなから三つはフェイトちゃんにあげる」
フ「えッ？」
フェイトは笑顔なのはの提案に驚いていた。
フ「・・いいの？」
な「うん」
フェイトは戸惑っていたが、なのはは笑顔で頷いた。
なのは二つ、フェイトは三つジュエルシードを回収し、全てのジュエルシードを封印した。
な「・・フェイトちゃん、私はあなたに伝えたいことが。あるんだ」
フェイトはなのはの顔を見た。そして雲が晴れ二人に陽の光が挿す。
な「私と・・友達になって欲しいの」
フ「！？」
フェイトは驚いた目を見開いて驚いて、何かを言おうとしたが、頭を振ってその場から立ち去ろうとする。
な「待ってフェイトちゃん！」
なのはは、フェイトを呼び止めた。
フェイトは振り返らずに止まった。
な「剣心さんが、フェイトちゃんとアルフさんに伝えてほしいって」

フ「えっ！？」

思わずフェイトは振り返った。隣にいるアルフも少し驚いた顔をした。

そしてフェイトはとんでもない早さでなのはに近づき、なのはの両肩を掴みブンブン揺らす。

フ「何！？剣心がなんて言ってたの！？」

な「にゃ～～～～！」

なのははあまりにも揺らされたので、目を渦巻き状にして目を回す。

ア「フェイト落ち着いて！」

ヤ「フェイト落ち着いてください！」

シ「そんなに慌てなくても良いでしょ！」

三人がなんとかフェイトを落ち着かせる。

なのははまだ多少目が回っているのか、右手で頭を抑えながら言う。

な「・・・“また無茶をしたら、二人ともお仕置きでござる”って」

フ「・・・！！」

フェイトは、目を見開いて一瞬肩を震わせた。

アルフも驚いてる。

ヤ「それと、“拙者がいなくても体にいい食事を取るように”って言ってました」

ヤミの言葉を聞いて、フェイトは後ろを向き、腕で目を拭いた後にアルフを連れて姿を消した。

な「フェイトちゃん・・」

フェイト達が去った後に、なのはは小さく呟いた。

マンションに向かうフェイトとアルフ。

フ（剣心・・・私達の事・・心配してくれてたんだ・・・）

フェイトは、胸に手を当てた。とても心の中が暖まっていく感じがした。

嬉しさで涙が溢れそうになった。

フ（ありがとう剣心・・）

心の中でお礼を言いながら、フェイトはアルフと共にマンションに戻った。

ブリッジに帰ってきたなのはは銀時達に褒められていた。

神楽「よくやったアルなのは！」

新八「すごいよなのはちゃん！」

セ「大したものですね。子供とは思えないほどの立派な働きです」

なのはは褒められて頬を赤くさせていた。

銀「ま、上出来だな」

銀時はなのはの頭を撫でた。

な「ありがとうございます！」

撫で終わった後、なのはは笑顔で銀時言った。

そうしているとなのはの目にある一人の人物が写った。クロノである。

しかしクロノはなぜかガタガタ震え、顔を真っ青にさせながら体育座りしていた。

バリアジャケットもなぜかボロボロだった。

な「クロノ・・くん？」

なのははクロノの様子が変なので首を傾げた。

沖「ああ、あのＫＹですかぃ？あいつは海の上でおめぇらがあのフェイトとかいうガキとジェルシードを分け合っていた時に“何でジュエルシードを渡しているんだ”とか言いながらあんた達の方に行こうとしてたんでねぃ、それでうるさかったんで奥の部屋で調きょ、ちょっと説教をしてやったんすよ」

沖田は笑顔で事の次第を説明した。

それを聞いてなのはとユーノは苦笑していた。

会議室。
万事屋、真選組、なのは、ユーノ、クロノとリンディが集まっていた。

ク「まったく。勝手にジュエルシードを渡して・・」

壁に寄り掛かりながら、クロノがため息をついた。

な「す・・すみません」

なのはが謝る。

銀「何もしようとしなかった奴が、文句言う資格があんのか?」

ク「何!?」

銀時の言葉に、クロノは食ってかかる。

沖「ほぉ〜まだお仕置き（せっきょう）が足りてなかったようだなァ?」

それを聞いてクロノは顔を青くさせ、首を横にブンブンと振って押し黙る。

土「で?今回の事件について、何かわかったのか?」

斉「どうなんだ?」

煙草をくわえながら土方と斉藤が尋ねた。

ク「ああ。エイミィ映像を」

クロノはテーブルに歩み寄った。

エ「はいは～い」

スピーカーからエイミィの声が聞こえた。

エイミィの声の後、テーブルの中心に映像が映し出された。

映し出されたのはプレシアだった。

リ「あら」

剣心・ヤミ

『『！』』

映像を見て、リンディは少し驚き、三人は表情を険しくした。シャナはプレシアの顔を見た事がないので映像を見ても誰だか分からなかった。

山「一体誰ですか？」

山崎がクロノに尋ねた。

ク「僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師。プレシア・テスタロッサだ」

映像を見ながらクロノが説明する。

ク「専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な大魔導師だったが、

違法研究と事故によって放逐された人物です」
な「テスタロッサって・・」

名前を聞いて、なのはが呟いた。

ク「あのフェイトという少女はおそらく」
リ「プレシアの娘・・ね」

リンディが険しい表情で呟いた。
なのはは、プレシアの映像を見つめる。

な「この人が、フェイトちゃんのお母さん・・」
土「つまり、この女が今回の黒幕ってことか・・」

土方が腕を組んで言う。

ク「プレシア・テスタロッサは、違法な素材を使った実験を行い失敗。中規模次元震を起こした事で中央を追放され、それからしばらくの内に行方不明となる。今わかってる事はこれくらいです」

クロノが説明を終える。
剣心と銀時はそれを聞いてさらに顔を険しくした。
なにせ二人が聞いた限りではプレシアは管理局の命令で無理やり実験を推し進められて結局失敗したのにそれがまったくクロノの提示した情報にはなかった。

剣（腐っているな。全てプレシア殿が犯人であるように捏造されているとは）

剣心は心の中で怒りを燃やしていた。それは銀時も同じだった。

リ「ご苦労様。貴方達は一休みした方がいいわね」

なのは達に顔を向けて、リンディが言った。

な「あ・・でも・・」

リ「特になのはさんは、長く学校休みっぱなしにするのはよくないでしょう」

優しく微笑みながらリンディが言う。

リ「一時帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せた方がいいでしょう」

そう言ってリンディは席を立った。

リ「万事屋と真選組の皆さんも、その間は自由に休んでください」

神楽「やったアル！久々になのはの家に行けるアル！」

休みと聞いて神楽がはしゃぐ。

剣心は険しい表情で、ジッとプレシアの映像を見つめた。

剣（プレシア殿・・大丈夫でござろうか）

時の庭園。

フェイトとアルフは、プレシアにこれまでの事を報告しにきた。
プレシアは玉座に座り、フェイトは部屋の中心に立ってる。

フ「・・ジュエルシードを、全ては回収できませんでした・・」

怯えながらフェイトが報告する。

プ「・・回収したジュエルシードの数は・・全部で九つ・・・」

プレシアは、宙に佇む九つのジュエルシードを見つめた。

フ「ご・・ごめんなさい、母さん・・・」

顔を俯かせて、フェイトはプレシアに謝った。

プ「・・・残りのジュエルシードを必ず回収するのよ。いいわねフェイト？」

フ「え・・？あ・・はい・・・」

フェイトは、少し呆然とした顔で返事をした。
いつもなら、ここでプレシアの折檻が始まるのだが、今回は違った。

プ「何をボーッとしているの？早く行きなさい」

フ「・・はい・・・」

言われてフェイトは部屋を出た。
扉の前で待ってたアルフは、プレシアの折檻がなかった事を不思議に思いながら、フェイトの後を歩いた。
二人がいなくなり、部屋にはプレシアだけになった。

プ「ゴホッ・・！ゴホッ・・！」

プレシアは口を押さえて咳込んだ。自分の手は赤く染まり、床には血の池ができている。

プ「・・・私には・・もう時間がないわ・・・」

口元に付いてる血を拭きながら、プレシアは顔を上げた。

プ「結局私の筋書き通りになってしまうのね・・・」

自分の死を覚悟しながら、プレシアはフェイトの幸せを考えた。

「あの男に何か言われたかね？」

プレシアがフェイトのことを呟いたとき柱の影からジュドが現れる。

プ「何の用？」

プレシアは血を口から出しながらジュドを睨む。

ジ「なに、君の事だからまたあの人形を折檻すると思ったのだがね」

プ「もうその必要はないわ」

ジ「そうかね、では失敬」

ジュドはそう言って消える。

プ（ジュド・・・あの男には、気を付けた方が良さそうね）

その頃、部屋を出たジュドは

ジ「フン、生意気な女だ、せっかくあの人形がいたぶられるところを見に来たというのに」
デ「ジュド様」
ジ「来たか、ディアル」

ジュドの前に急にディアルが現れた。

デ「ジュド様、何の御用で」
ジ「たしかお前はこの前ジュエルシードをひとつ回収しておいたのだったな」
デ「ハイ」
ジ「ジュエルシードが発動のエネルギーが生物にどのような影響をもたらすのかどうかデータを取りたい」
デ「ですがこの前あの鳥で試したのでは？」

この言葉から分かるように実はこの前の怪鳥がジュエルシードの力でおかしくなったのも実はジュド達の仕業であった。

ジ「そうだ。だが人間ではまだだ。われらに近い存在である人間にジュエルシードが宿ったときにどのような事が起こるのか見ておきたい。今後の計画のためにもな。誰か適当な人間にジュエルシードを使え。別に対象は誰でもかまわん」
デ「・・・それでしたら、例の異世界人の奴らの中に強い願望を持った者がいます。そいつに使えばいいデータが取れるかと」
ジ「ほう、奴らの中にか？」
デ「ハイ」
ジ「面白い、やってみろ」

デ「ハッ！」

そういってディアルは消え、ジュドもその場から消えた

高町家。

リ「・・・とまぁ、そんな感じの十日間でしたのよ～」

桃「まぁ、そうなんですか」

リンディと、なのはの母親の高町桃子は、意気投合して楽しく談笑

している。

新「ははは・・」

二人の様子を見て、新八は苦笑いをした。新八だけでなく、なのはとユーノも内心苦笑いを浮かべていた。
神楽は、用意されたお菓子などをバクバク食べている。
ヤミは本を読み、シャナと銀時はケーキを食べていた。

新（リンディさんの話・・内容が全て虚構で固められたフィクションだなぁ・・）

そんな事を思いながら、新八はお茶を飲んだ。
一方、真選組は特に用事も予定もないので、海鳴市の街を見て回った。
ちなみにシャナ、セイバーは翠屋で色々なお菓子を食べている。
フェイト達の使っていたマンションに行こうとしたが、クロノが今までフェイトと一緒に行動していた剣心達がフェイトにまた接触しないか疑って監視していたので、フェイトいたマンションに行かずに翠屋で時間を潰しているのである。
正直クロノは信じられないほどにウザかった。
全く、これだからＫＹは

ク「僕をＫＹとよぶな！！」

アレ？今なんか聞こえたかな？

リンディがなのはたちがどうしてしばらく留守にしていたかと言う桃子への説明が終わった後、ヤミは桃子に教えてもらった海鳴市の図書館へ、銀時は剣心と散歩へ、その他のメンバーは翠屋で談笑していた。
新八は一人公園にいた。まぁ理由はなんとなく気が向いて行きたかったからである。

新「さて、戻るとするかな・・・」

新八はベンチから立ち上がり翠屋に戻ろうとすると、

「ちょっと待て」
新八「え？」

新八は後ろから声がしたので振り向くと、黒いローブの男がいた。
それはディアルであった。

新八「オッお前は！」

新八は目の前にディアルが急に現れたので驚いたがすぐに木刀を抜いて構えた。
しかしディアルは

デ「まあ、待て今回は戦いに来たのではない」
新「そんな話信じられるか！」
デ「これをやると言ってもか？」

そう言ってディアルは新八にジュエルシードを見せた。

新「そっそれはジュエルシード！！」
デ「これが欲しいんだろう」
ディアルは新八にジュエルシードを見せる。
新「でっでも・・」
デ「良いから受け取れ！！」
ディアルは言った瞬間、新八の額にジュエルシードを埋めこんだ。
新八「ギャアアアアア！！何するんだ！？」
新八はディアルがジェルシードをいきなり自分の額に埋め込んだ事にもビックリした。
埋め込まれたジェルシードは輝きを放つ。そうすと新八の意識は段々と薄れてきた。
デ「解放しろ。お前の願望を」
新「僕の・・願望？」
意識が段々薄れていく中、新八は笑顔のディアルを見る。
デ「お前は見返してやりたいんだろう？お前の仲間達にお前がどれだけ凄いかって事を・・」
新八「ぅぅ・・」
デ「そして何よりも手に入れたいんだろう？自分が手に入らない物をどうしても、どんな汚い手を使ってでも・・」
新「そッ・・・そんなこと」
デ「思って…ないとでも？」

新「そっ…それは…」
デ「さあ、お前の闇を解放しろ！！」

そのディアルの言葉を聞いて新八の意識は途切れる。
意識が途切れ、倒れた新八をジュエルシードの光が包み込む。

銀時、神楽、なのは、剣心、ユーノ、シャナ、セイバー、土方、近藤、山崎、クロノは新八のいた公園に向かっていた。
アースラでジュエルシードの反応があったと聞いて向かっているのである。
ちなみに出掛けているアリスとリリスとアリアとヤミは呼ぶ事が出来なかったのでいない。沖田と斉藤は町を散策していたら何時の間にかどこかに行ってしまった。

そして１１人が公園に着くと、１１人は目の前の光景を見て目を丸くした。
公園にはムキムキのマッチョのデカ男で、髪が逆立ってどこぞの北斗真拳の伝承者みたいな姿になった新八（？）が立っていた。
銀時、神楽、なのは、剣心、ユーノ、セイバー、シャナ、土方、近藤、山崎、斉藤、クロノは目の前の光景に目を丸くしていた。
なにせ、新八（？）は髪が逆立った全身が鋼鉄と化したボディの鋼鉄男になり、まさしくその姿はラ○ウやアイ○ン○ンかと思わせるような姿なのである。
１１人は最初目の前の人物が誰だか分らなかった。
だが、目の前のマッチョマンは新八がいつも着ている服を着ていて、なにより銀時達にとって新八と思わせる有力な情報源は新八のして

いた眼鏡を鋼鉄マッチョマンがしていた事だった。

銀「し、新八ぃいいいい！！お前どうしちゃったのその姿ーーーー！！！？？」

銀時は目の前の鋼鉄男を新八だと認識すると、溢れんばかりの声で叫ぶ。

な「ふぇえええええ！？あの人新八さん何ですか！！？？」

ユ「って言うかなんであの人が新八さんだって分かるんですか！？」

なのはは新八の突然変異に驚き、ユーノは銀時が目の前のマッチョマンを新八だと分かった事に驚いた。

銀「間違いねぇよ。あの眼鏡は新八で間違いねぇ」

シ「そうね。あの眼鏡は新八ね」

銀時とシャナは汗を掻きながら真剣な顔で言う。

ユ「いや、それ新八さんの本体は眼鏡って言ってるって事でしょ！！」

ユーノは銀時とシャナの酷い推理にツッコム。

神「私も最初は誰だか分らなかったけど、あの眼鏡で確信したネ。あれは新八アル」

セ「ええ、私も同じです」

二人も汗を掻きながら真剣な顔で言う。

ユ（新八さん・・なんだか可哀想）

ユーノは眼鏡しか覚えられていない新八を哀れに思った。

シ「命名、鉄八」

ユ「言ってる場合ですか！」

シャナは勝手に目の前の鋼鉄マッチョ新八を命名し、ユーノがシャナにツッコム。

山「でもどうして新八君があんな姿に！？」

近「まさか！新八君は公園で鍛えている間にあのような姿に・・・！」

斉「いや、奴のアホパワーが過剰反応を起こしたんであああなったんだろう」

土「んなわけねぇだろ！！どんだけ地獄の特訓してんだよ！！それとアホパワーの過剰反応って何だァー！！」

ク「いや違う！彼の額を良く見るんだ！」

クロノは人差し指で鉄八の額を指す。全員は鉄八の額を見る。鉄八の額には輝きを放っているジュエルシードがあった。

神「ジェルシードアル！？」

土「こいつはどういう事だ？」

二人は疑問の声を上げ、他のメンバーもどうして新八の額にジュエルシードがあるのか分らなかった。

ク「どうして彼の額にジュエルシードがあるのかは分らないが、たぶんジュエルシードの力が原因で彼はあのような姿になってしまっ

たんだ」

執務管だけあって、クロノは今ある情報を使って現状を正確に分析する。

銀「え？じゃあ何？新八の願いってあんな姿になる事だったの？」

銀時は口を抑えて笑いを堪える。

神楽、近藤、土方、も笑いを堪えている。最初見た時はビックリしたものの、目の前の鋼鉄マッチョマンが元は新八だと思うと、なんだか可笑しかった。

クロノと斉藤は仲間があんな姿になったと言うのに笑いを堪えている銀時達に呆れた。

なのはとユーノは苦笑していた。

剣心とセイバーは真顔だった。

鉄「貴様らぁあああああ！！！黙って聞いてれば勝手な事を言いやがってぇえええええ！！！」

全員

『『！！』』

今まで腕を組んで黙っていた鉄八の怒鳴り声を聞いて銀時達は驚いて鉄八を見る。しかも鉄八の声は妙に野太かった。

銀「え？お前、喋れたの？」

ヤ「あんなふうになっても自我が残っているなんて妙な所でしっかりしているんですね。あのエッチイ眼鏡は」

銀時とヤミは鉄八にまさか自我があったとは思わなかった。

てっきりジェルシードの力のせいでただ暴れるだけの鋼鉄モンスターになっていたと思ったのである。

鉄八「ふん！この新八様をバカにするな！お前のような天然白髪パーマのプータロウニートの糖尿病野朗などにこの美しい筋肉が理解できるはずもないがな！」

鉄八はなぜかボディービルダーのようなポーズを取る。

銀「てめぇー！新八の分際で俺を罵倒するとはいい度胸だな！そしてあれでも俺は仕事してんだよ！そしておれは糖尿病にはなってネエ！！」

ユ「お、落ち着いてください！」

銀時は鉄八の暴言で額に青筋を浮かべる。そして鉄八に飛び掛ろうとするのをユーノが止める。

鉄八「もはや貴様など主役でもなんでもない！我が愛すべきこの素晴らしい鋼鉄ボディーを持つ俺こそ主役に相応しいのだ！！」

銀「てっめぇ！いい度胸だ！奪えるもんなら奪ってみやがれ！」

鉄八はポーズを変えて言う。

そしてさらに銀時は暴れる。

剣（こ、これは酷いでござるな）

剣心は一々ポーズを取って自分の筋肉をアピールする鉄八を見て顔を青くする。

体が鋼鉄のマッチョマンになった事もそうだが、性格が鋼鉄を愛す

る男に激変してしまった事上に偉そうな物言いを平気で言えるようになったことについてもあまりにも哀れだった。
剣心だけでなく、他のメンバーも鉄八見て引いていた。

神楽「・・新八、マジキモいアル」

神楽は目の前の鉄八を本当にキモと思った。

鉄八「はっ！いつも大量のゲロを吐いたり鼻をほじったりその鼻くそを飛ばしたり唾はいたりよだれたらしたりオナラしたり下品なことを平気で言ったり道端でも平然とう◯こしたりする貴様の方が美しい俺様より百倍キモいわ！！」

鉄八はまたポーズを変えて言う。

神楽「てめェー！！言いたい放題言いやがって！そこになおるアル！お前の頭勝ち割ったるネ！そして最後のは嘘だろゴラァー！！」

な「か、神楽ちゃん！気持は分るけど落ち着いて！」

顔は真っ赤になり額に青筋立てて鉄八に襲い掛かろうとする神楽をなのはが止める。

土「けっ、ジェルシードに魂を奪われるとは、お前も堕ちたもんだなメガネ」

斉「全くだ。このアホゥが」

土方と斉藤はタバコの煙を口から吐きながら言う。

鉄八「何を言うか！貴様はなんでもかんでも料理や飲み物にマヨネーズを掛けそこら中手当たり次第に吐き気を振り撒き、タバコを吸

っては副流煙を振り撒いて他人に迷惑を掛け、挙句の果てはアニメオタクになった貴様の方が俺よりよっぽど堕ちているわ!!それと貴様のほうはいつも人をアホアホ呼ばわりしている貴様のほうがよっぽどアホゥだ!!」

鉄八はまたポーズを（以下略）

土方「てめぇー!!待ってろ!今すぐお前をたたっ斬って地獄に落としてやる!!そして俺はアニメオタクに落ちてねぇー!!」

斉藤「今すぐ俺の牙突を食らわせて貴様の脳天を貫いてやる!!このアホ眼鏡が!!」

近藤「トシィー!!斉とーうゥゥ!!落ち着いて!あれはジュエルシードによって変わってしまった新八君で、本当の新八君じゃないから!!」

額に青筋浮かべながら鉄八を斬りに行こうとする土方と牙突を食らわせようとしている斉藤を近藤が抑える。

セ「まさかそのような姿になってしまうとは、侍として失格ですね」

セイバーは呆れたように言う。

鉄八「貴様こそ!いつも食べてばかりなのにまったく胸は大きくならず、いつも菓子や料理をむさぼり食らうだけのグウタラ貧乳暴食騎士王が偉そうに言うな!!」

鉄八はまたポー（以下略）

セ「よくも言ってくれたな!そこになおれ!剣の錆にしてくれる!そして胸は栄養取って少しは大きくなっています!」

剣「落ち着けセイバー殿！とりあえず余計な事も言っているでござるぞ」

額に青筋を浮かべ不可視の剣で鉄八を斬ろうとするセイバーを剣心が止める。

シ「フン、そんな気持ち悪いだけの馬鹿みたいな姿になるなんて哀れな眼鏡ね」

シャナは軽蔑のまなざしでそういう

鉄八「貴様こそ！天然パーマ同様に甘い者ばっか食べてぐうたら寝てるだけで頭が良いとかほざいてるくせにいざと言うときは暴力でしか物事を解決できない貧乳甘党オオバカ女の貴様のほうがよっぽど哀れだ！！」

鉄八は（以下略）

シ「お前ェー！よくも言いやがったわね！そこになおれ！今すぐの黒焦げの消し炭にしてやる！！それと貧乳って言うな！」

山「だアアア！シャナちゃんも落ち着いて！！」

額に青筋を浮かべ炎の刀で鉄八を斬ろうとするシャナを山崎が止める。

山「クロノ君！新八君を一刻も早く戻さないと色んな意味で取り返しのつかない事になるから早く止めて！つーか、このままじゃ新八君が殺される！！」

山崎はこれ以上鉄八に何か言わせるのはまずいと思ったので、クロノに懇願する。

ク「ああ分っている。こちらとしても早くジュエルシードは回収したい」

クロノは前に出て新八に杖を向ける。

ク「なのは！僕が彼の動きを封じるから君がその間にジュエルシードを封印するんだ！」

な「はい！」

なのはに変わり剣心が神楽を抑え、なのはは杖を構えて準備する。

しかし、世の中そう甘くは運ばなかった。

鉄八「ぬぉおおおおおおおお！！」

鉄八は拳を引きながらクロノに向かってダッシュで走って来た。

クロノ「何！？」

クロノは咄嗟に防御魔法を張って鉄八の攻撃を防ごうとしたが、

鉄「邪魔じゃこのＫＹがぁー！！」

鉄八のパンチの威力はあまりにも強く、防御魔法は砕かれそのままクロノの腹に命中した。

クロノ「だっ誰がＫＹ、ぐわっ！！」

バリアジャケット越しだと言うのにその威力はかなりのモノでクロノは吹っ飛ばされ岩の方に激突し、その岩は木っ端微塵になった。
銀時達はその光景に唖然とした。新八の力は鉄八と化した事でとんでもなくあがっていたのである。
剣心とセイバーとシャナはクロノがやられたの見た後にすぐに逆刃刀と不可視の剣と炎の刀を構える。

剣「新八殿。いくらバカにされているとはいえ、今のはやりすぎではないか？」

剣心は鉄八を睨みながら言う。

鉄八「ぶはははははは！！どうだ俺の鋼鉄の力は！！」

鉄八はま（以下略）
銀時達も状況を理解したのか、武器を構える。
ユーノはクロノの所に向かい、治療魔法を掛ける。クロノはダメージはあるものの大した怪我はしていないようだった。ちゃんと意識もあった。

ク「気を付けろ！どうやら彼はジェルシードの力のせいで暴走している！」
銀「んな事は今のでわかってらぁ！」

銀時は鉄八を睨みながら言う。
鉄八はまたもダッシュの体勢に入る。
銀時達はまた攻撃してくるのかと思ったが、予想外の事を鉄八はして来た。

鉄八「なのはちゃあああああん！！さぁ！我が愛しの鋼鉄筋肉を共に

愛そう！！」

と言いながらなのはにダッシュで近づいた。

な「ふぇぇぇぇぇ！？」

なのはは突然の鉄八の行動に驚いて反応が鈍り、ボディプレスしてくる鉄八を避けることができずに鉄八に押しつぶされようとした時、

銀時・剣心

『『お前（お主）は何をやってんだぁ！』』

と言いながら銀時と剣心が鉄八の顔を木刀と逆刃刀をバットの如く使って思いっきりぶっ飛ばした。

鉄八「あべしっ！！」

鉄八はまるで世紀末的な声を上げながら後ろに飛んだ。

すかさず神楽が仰向けに倒れた鉄八の上にまたがる。

神「てんめェー、さっきはよくも好き放題言ってくれたアルな、新八（駄眼鏡）のくせにィー！！」

黒いオーラを出しながら神楽は指をコキコキ鳴らしながら言う。

神「乙女に恥を掻かせた罪は重いネェー！！死ねコラァあああああ！！」

神楽は鉄八の顔に連続パンチを何度も食らわせる。しかもかなり本気で。

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドッ！！

鉄八「ゲフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゴフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゴフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゴフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゴフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゲフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゴフッ！ゲフッ！ゴフッ！」

鉄八は何度も神楽の凄まじいパンチを受けて顔が腫れてとてもじゃないが、かなり酷い顔に変形していった。

セ「さっきは良くも言ってくれましたね。二度とあんな事がいえないようにしてあげます」

シ「そうよこのロリコン屑眼鏡！今度こそ唯のダメにしてやる！！」

黒いオーラを出しながらセイバーとシャナは鉄八のチ○コに何度もキックをする。

鉄八「オボッ！！ゲフッ！オボッ！ゴフッ！オボッ！！ゲフッ！オボッ！！ゴフッ！オボッ！！ゲフッ！オボッ！！ゴフッ！オボッ！！ゲフッ！オボッ！！ゴフッ！オボッ！！ゲフッ！オボッ！！ゴフッ！オボッ！！ゲフッ！オボッ！！ゴフッ！オボッ！！ゲフッ！オボッ！！ゴフッ！オボッ！！ゲフッ！オボッ！！ゴフッ！オボッ！！ゲフッ！オボッ！！ゴフッ！」

鉄八は下と上から打撃を何発も受けると言う、とんでもない仕打ちを受けていた。

男性陣はそのあまりにも酷い光景に顔を青くさせ、なのははさっき

仕掛けられたボディプレスが怖かったのか、銀時にしがみ付いていた。

結局、剣心がすぐにセイバーと神楽とシャナを止めてなのはが封印すると言う形になった。
剣心もさすがにあの光景を長く眺める事はとてもできなかった。
そして、鉄八を斬り殺そうとしていた土方と斉藤は近藤に押さえ込まれていた。
ちなみに新八は鉄八になった時の記憶も怪我もなく、さらにはどうして自分の額にジュエルシードが埋め込まれていたのかも覚えていなかった。

新八「あの～。銀さんとユーノくんとクロノくんと真選組の皆さんはどうしてそんな顔を真っ青にさせているんですか？そしてなんでなのはちゃんは銀さんにしがみ付いているんですか？」

新八は意識が戻って目覚めて後、今の状況を把握するために銀時達に質問していた。ちなみになのはが銀時にしがみ付いている所を見て、新八は羨ましいと思い、少し嫉妬の炎を内心燃え上がらせていた。

銀「それ以上聞くな新八。人には時には知らないほうが良い事もあるんだよ」

剣「そうでござるな。知らないことがお主のためだ」

銀時と剣心は絶対さっきの事は新八には知られない方が良いと思った。もし新八がさっきの事をしれば絶対絶望のどん底落ちると思った。それはいくらなんでも可哀想だった。

そして何より、この場に沖田がいない事が不幸中の幸いだと思った。あの人なら絶対さっきのことで新八を弄る事は目に見えているからである。

新「は、はぁ～」

新八は二人の必死に訴えかける目を見て、取り合えず理由は気かないことにした。

ちなみに沖田はゲーセンでそこらのガキとゲーム対決していて、帰った後に土方と斉藤に怒られた。

場所は変わって、公園の近くの森の中。

そこには鉄八が新八に戻るまでの一部始終を魔人族のディアルとゲドラとヘゾルが見ている。ちなみに全員フードを被っている。

へ「なぁディアル。おまえはあの地味な雑魚メガネがあんな風になると分っていたのか？」
デ「ブハハハハハハハ！！俺も、さすがにあそこまで、バカな事になるとは、思わなかったわ！ガハハハハハハハハ！！」
ゲ「ゲヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！あの眼鏡最高だぜぇー！！ブヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！」

ディアルとゲドラは腹を抱えながら笑い、ヘゾルにそう言う。

へ（可笑しいと感じていないはずなのによくやるなディアルは、ゲドラはともかく・・・）
ゲ「多分あのヤローの強くなりたいと言う願いがあんなアホな姿にさせたんだろーぜ、ウヒヒヒヒ・・・」

ゲドラは腹を抱えて笑いながら新八が鉄八になった理由をいった。

へ「そろそろ笑うのを止めたらどうだ？ゲドラ」

ヘゾルは笑うゲドラを見ながら言う。ちなみにディアルが笑ったのは最初だけだ。

ゲ「へいへい、わーったよ」

ゲドラは直ぐに笑うのを止めた。

ゲ「これで全部のジュエルシードが集まったな、撤収すんのか？」
デ「そうだなデータも集まった。かなりふざけたデータだがジュド様もお喜びになるだろう」

ヘ「では行くぞ、ジュド様がお待ちだ」

ヘゾルの言葉を皮切りに、三人は闇の中に消えた。

第二十二訓　銀魂は所詮ギャグアニメだ（後書き）

支配者「では、後書き『クロノの夢の一時』をどうぞ」

クロノは風呂に入っていた。
そのとき何とエィミィが入って来た。

クロノ「エッエイミィー！何をしているんだ君はァアア！！」

クロノは急に入ってきたエイミィに対して慌ててそういう言う

エイミィ「クロノ君の背中を流そうと思って（ポッ）」
クロノ「なぜ君は顔を赤らめているんだァー！！」

クロノは動揺しまっくている。

エイミィ「じゃあ行くよ」
クロノ「いや・・・良いよ。それくらい自分で」
エイミィ「まあまあそう言わずに」

エイミィは無理やりクロノの背中を洗い始めた。
クロノはただ黙っていた。

クロノ（き・・気持ちいい）

クロノはこんなことを心の中で思っていた。

クロノ「エイミィ背中洗うのうまいんだな・・・」

アゴミ「ア～ラそう、可愛いわね。僕」

クロノはエイミィに振り返った。

しかし、エイミィはいつの間にかアゴ美に変わっていた。

おかげでクロノはアゴ美と顔が近づいてしまった。

クロノ「ギャアアアアアアアアア！！？（吐血）」

クロノは血を噴出して壁に激突した。

支配者「ハイ、終了です。面白かったですか？」

神楽「いい気味アルな」

シャナ「ＫＹはああなるべきよね」

銀時「しかし無理やりにでもあの女おいださなかって事は、アイツはスケベＫＹだったんだな」

新八「クロノ君、今日からイジラレ仲間だね」

クロノ「チクショォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！（血涙）」

第二十三訓　ラスボス打倒前には準備を（前書き）

支配者「いよいよ第1章も終わりに近づいてきました」

銀時「そうだな～結構かかってるけどな」

支配者「うるさいな、文句言ってんじゃないよ」

なのは「ハハハ・・・リリカル剣魂スペシャル第二十三話始まります」

第二十三訓　ラスボス打倒前には準備を

二日後の早朝。
時間はＡＭ５：３５。
なのは達は家の門の前に立ってる。

銀「ふぁ～。何もこんな朝早くに出なくてもよくね？」

欠伸をかきながら、銀時は背伸びをする。

銀「俺、朝弱いんだよ」
シ「私も朝は弱いのに・・」
な「ごめんなさい銀さんシャナちゃん」

なのはは眠そうな銀時とシャナに謝った。

新「いや、なのはちゃんが謝る事じゃないよ」
剣「そうでござるよ、朝は誰でも弱いモノだ」

二人がなのはを励ます。

神「そうネなのは」
ヤ「・・神楽、髪の毛滅茶苦茶ですよ」

ヤミの言う通り神楽の赤髪は山姥の如くボサボサのグチャグチャだった。

セ「（モグモグ）皆さん（モグモグ）だらしないですね（モグモグ）」

新「食パン食べながら喋ってるお前が言うな！！」

バターパン食べているセイバーに新八がツッコむ。

土方「お前ら。喋ってねーで、さっさと行くぞ」

そう言って土方が歩き出した。

公園に行く途中に歩きながら銀時がなのはに話しかけた。

銀「なぁ～なのは」

な「はい。なんですか？」

なのはは銀時の顔を見た。

銀「やっぱ、緊張してんのか？」

なのはは銀時の言葉を聞いて少し俯いて言う。

な「・・はい、少しだけ・・」

銀「ま、気楽にやりな。あんまりガチガチだと出せる力も出せねぇぜ。ま、俺らから言わせれば、勝利をもぎとんのはここ一番魂が強い奴だ」

銀時は自分の胸を親指で指しながら言う。

なのはは銀時の励ましを聞いて強く返事をする。

な「はい！」

なのはは笑顔で言った。

剣「お主もたまにはマシな事を言うのだな」

銀「うるせぇよ」

銀時は頭を掻きながらメンドクサソウに言う。

な（銀さん・・ありがとう）

なのはは自分の中に眠る強い思いをフェイトにぶつけようと決意する。

海鳴臨海公園。

時間はＡＭ５：５５。

なのは、銀時、剣心、ユーノの四人がいた。銀時と剣心以外の万事屋メンバー五人、真選組の五人は公園の入口で待機してる。

なのはは小さく深呼吸をする。

な「ここなら・・いいよ」

なのはが口を開いた。

な「出てきて、フェイトちゃん！」

姿の見えないフェイトに向かって、なのはが叫んだ。
朝の冷たい風が、頬に当たる。風に当たって林がざわつく。
なのはと銀時は、後ろを振り返った。
バルディッシュを持ったフェイトが立っていた。隣には狼形態のアルフがいる。

フ「剣心・・」

剣心を見つめながら、フェイトが呟いた。

剣「安心するでござる。これはお主と、なのは殿の戦いだ。接写と銀時とユーノ殿は余計な事はしないでござるよ」

そう言って剣心は腕を組んだ。
なのははバリアジャケットを着て、レイジングハートを持つ。

な「ただ捨てればいいってわけじゃないよね？」

片手にレイジングハートを持って、なのはは言葉を繋げる。

な「逃げればいいってわけでもない」

真っ直ぐにフェイトを見つめる。

な「きっかけはジュエルシード…だから賭けよう。お互いが持ってる全部のジュエルシードを！」
レ〈Ｐｕｔ　ｏｕｔ〉

なのはの周囲にジュエルシードが現れる。

バ〈Ｐｕｔ　ｏｕｔ〉

フェイトの周囲にも九つのジュエルシードが出る。

な「それからだよ。全部それから」

両手でレイジングハートを構える。

フェイトも下段にバルディッシュを構える。

な「私達の全てはまだ始まってすらいない・・」

銀時と剣心とユーノ、アルフが黙って見守る。

な「だから、本当の自分を始めるために・・」

対峙する二人の魔導師。

な「始めよう。最初で最後の本気の勝負！」

その頃、アースラ。

エ「戦闘開始みたいだね」

なのはとフェイトの戦いの様子を、画面で見ながらエイミィが言った。隣にはクロノが立っている。

ク「ああ、そうだな」

クロノとエイミィは、ただ戦いの様子を見守っているだけではない。
なのはが戦闘で時間を稼いでる内に、こちらで帰還先追跡をしておくという作戦だ。

ク「頼りにしてるんだから、逃がさないでくれよ」
エ「おう！任せとけ！」

エイミィが親指を立てて返事をした。

公園の上空で、激しくぶつかり合う二人の魔導師。

バ〈フォトンランサー〉

フェイトの前に複数の金色の魔力弾が現れる。

レ〈ディバインシューター〉

なのはも、複数の桜色の魔力弾を出す。

フ「ファイア！！」
な「シュート！！」

金色の魔力弾と桜色の魔力弾が、同時に発射される。
なのはは、上下左右に飛んで金色の魔力弾を避ける。
フェイトは、追跡してくる桜色の魔力弾を障壁で防ぐ。

フ「！」

フェイトが気付いた時には、なのははもう次の攻撃体勢に入っていた。

な「シュート！！」

再び桜色の魔力弾を、フェイトに向かって放つ。

バ〈サイスフォーム〉

バルディッシュを鎌の形に変形させ、自身に迫る桜色の魔力弾を切り裂く。

な（フェイトちゃん・・やっぱり強い！）

振り下ろされるバルディッシュを避けながら、なのはは思った。

な（でも・・負けられない！）

距離を取って、再び桜色の魔力弾を放つ。

な（フェイトちゃんの為にも・・私を信じてくれてる銀さんの想いに応える為にも・・）

揺るがない決意を胸に、なのははレイジングハートを強く握り締めた。

な（絶対に負けない！！）

フ（最初は、ただ魔力が強いだけの素人だったのに・・）

フェイトは自身に迫る桜色の魔力弾を、バルディッシュで切り裂く。

フ（・・強い！）

フェイトもバルディッシュを強く握り締める。

フ（でも・・負けられない！）

フェイトは空中で静止した。

フ（母さんの為にも・・絶対に負けられない！！）

両手でバルディッシュを掴んで、前に構える。フェイトの足下に、巨大な金色の魔法陣が展開された。

剣「ん？フェイト殿は何か大技でも出す気か？」

ユーノ達と、地上で観戦していた剣心が目を細めた。

ア「マズイ！フェイトは本気であの子を潰す気だ！」

アルフが焦った声で言う。

銀「つーことは・・アレがフェイトの切り札ってヤツか・・」

焦るアルフの隣で、銀時が冷静に言う。

空中にいるフェイトの周囲に複数の・・いや、無数の魔力弾が佇む。

なのはがレイジングハートを構えようとした時、

な「あっ!!」

なのはの両手両足を、金色の魔法陣が拘束した。

フ「ライトニングバインド」

フェイトが小さく呟いた。

ユ「なのは!今サポートを!」

ユーノが魔法陣を展開しようとした時、

銀「やめろ、ユーノ」

銀時がそれを制した。

剣心「余計な事はせんほうがいい」

ユ「余計な事!?」

ア「で・・でも剣心・・フェイトのアレは本当にマズイんだよ!」

アルフが戸惑いながら言う。

銀「これはアイツらの決闘だ。そいつを邪魔する事は俺が許さねぇ」

剣「そう言う事でござる、拙者も黙っておらんぞ」

今の二人の言葉には、普段にはない凄みが加わっていた。アルフとユーノは何も言い返せず、黙って二人の様子を見守った。

な（銀さん、剣心さん・・ありがとう）

四人の様子を見ていたなのはは、心の中で二人に礼を言った。

フ「アルカス、クルタス、エイギアス・・」

その間にもフェイトは、呪文を唱え続けていた。

フ「疾風なりし天神よ、今導きの元に撃ちかかれ。バリエル・ザリエル・ブラウゼル」

呪文を唱え終える。

フ「フォトンランサー・ファランクスシフト」

手を空に掲げ、バインドで拘束されてるなのはを睨み、

フ「打ち砕け！ファイア！！」

手をなのはに向けて振り下ろしたのを合図に、無数の魔力弾がなのはに襲い掛かる。

無数の魔力弾がなのはに降り注ぎ、爆発する。

ユ「なのは！」

ア「フェイト！」

ユーノとアルフが叫んだ。剣心と銀時は黙って見つめている。
やがて魔力弾を撃ち終える。フェイトは残った魔力を集めて、魔力弾を作る。なのはのいる所に煙が立ち込める。
フェイトは魔力弾を片手に、立ち込める煙を見つめる。
やがて煙が晴れてくる。

な「撃ち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね」

煙の中から、ほぼ無傷のなのはが姿を現した。
障壁を張って、あの魔力弾の雨を防ぎきったのだ。

剣「なッ!?」
銀「・・マジでか?」

流石の銀時と剣心も、この時は驚きを隠せず少し顔を引きつらせた。

な「今度は・・こっちの番だよ」

レイジングハートを突き出すように構える。

な「ディバインバスターーー!!!」

なのはの放った桃色の砲撃がフェイトに向かって放たれる。
フェイトはさっきの攻撃に疲労で動けずにシールドを張って防ぐ。
しかし、その威力はかなりのモノでフェイトの手袋やマントが段々ボロボロになっていった。

フ(あの子だって・・耐えたんだ!)

フェイトはなんとかなのはの砲撃を全て防ぎきったが、バリアジャ

ケットはもうボロボロで肩で息をしていた。

フ（・・なんとか、耐えた。・・・これであの子も魔力を消費しているはず）

なのはも今の攻撃で疲れている思ったフェイトは残り少ない魔力を使ってなのはに反撃しようとするが、

フ「っ！！」

フェイトがなのはを見た時、なのはがレイジングハートの先端に魔力を溜めている光景があった。

な「受けてみて・・ディバインバスターのバリエーション！」

前方に巨大な魔法陣を展開する。

フ（あれは、マズイ！）

フェイトはすぐに回避しようとしたが、

フ「バインド！？」

フェイトの四肢は桃色のバインドで縛られていた。もちろんなのはが掛けた物である。

レ〈Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ〉

桜色の魔力がなのはの前に集まり、集束され、巨大な桜色の魔力弾が生成された。

な「これが私の全力全開！」

レイジングハートを振り上げた。

な「スターライト・ブレイカー！！！」

なのはがレイジングハートを振り下ろすと、巨大な桜色の閃光がフェイトに向かって放たれた。それはさっき放った『ディバインバスター』よりも遥かに太く巨大だった。

フ「はぁ！！」

フェイトは、残った魔力で魔力弾作ってその魔力弾を桜色の閃光目掛けて放った。フェイトの魔力弾は、桜色の閃光に掻き消された。

フ「！！」

驚いたフェイトだが、すぐに障壁を張って防御する。だが、障壁は桜色の閃光の前に簡単に破れてしまう。

フェイトは、成す術もなく閃光の中に飲み込まれた。

その光景に銀時達は唖然としていた。

銀「・・・ね、ねえ、あれちょっと酷くね？あんな凄い攻撃を防ぎきった相手にさらに特大攻撃ぶつけるとか・・」

銀時は冷や汗を流しながら言う。

剣「ああ、さすがにあれは・・・」

剣心は冷や汗を流しながら言う。

剣（フェイト殿・・心の傷にならないとよいが・・・）

この時、剣心は心の底からフェイトを心配した。

やがて閃光が収まり、二人の姿が見えてきた。

ユ「なのは！」

ア「フェイト！！」

なのはは、空中で息を切らし、フェイトはバルディッシュを手放して海に落ちていく。

な「フェイトちゃん！」

海に落ちる前に、なのははフェイトを抱き抱え、バルディッシュも掴んだ。

フェイトを抱えて、なのはは銀時達の元へ飛んでいった。

フ「ん・・」

銀時達の元へ着いたところで、フェイトが目を覚ました。

ア「フェイト！」

な「あっ、フェイトちゃん気がついた？」

アルフとなのはが声をかけた。

フ「・・・私・・負けたんだね・・」

フェイトの表情が暗くなった。

剣「フェイト殿」

剣心が声をかけた。フェイトは、剣心に顔を向けた。

剣「よくやったでござるよ、お主は。最後まで諦めずに戦ったのだ。恥じる事なんてどこにもないでござるよ」

そう言って剣心は微笑んだ。

フ「剣心・・」

剣心の言葉に、フェイトは目に涙を浮かべ、ポロポロと流す。

ア「あんた・・本当にいい奴だねぇ剣しぃん・・・」

剣心の隣にいるアルフは泣いていた。

銀時「なんでお前が泣いてんの？」

バル〈Ｐｕｔ　ｏｕｔ〉

バルディッシュからジュエルシードが出てきた。

その瞬間。

フェイト「アアアアア！！！」

空が曇り、黒い雲から巨大な紫色の雷がフェイトに降り注いだ。

剣「フェイト殿！！」

な「フェイトちゃん！！」

剣心となのはが叫ぶ。

九つのジュエルシードは、雲に出来た歪みの中に消えていった。

よろけるフェイトを剣心が抱き抱える。

剣（プレシア殿・・いったい何故こんな事を・・・）

雲の歪みを剣心は睨み付けていた。

アースラでは、プレシアの居場所を突き止めようとしていた。

エイミィが座標を割り出した。

リンディが立ち上がる。

リ「武装局員、転送ポードから出動！任務は、プレシア・テスタロッサの身柄確保！」

時の庭園。プレシア・テスタロッサの部屋。

プレシアは、手で口を押さえて咳込んでいた。

プ「ハァ・・ハァ・・次元魔法は・・もう体が耐えられないわね・・・」

顔を苦痛で歪ませる。

プ「それに・・今のでこの場所も掴まれた・・・」

プレシアは、隣に映し出されてるフェイトの姿を見つめた。

プ「フェイト・・よくここまで戦ったわね・・・」

フェイトを見つめながら、プレシアは優しく微笑んだ。

プ「こんな母さんの為に・・・今まで、よく頑張ったわね・・・」

愛おしそうにフェイトを見つめる。

プ「剣心・・アルフ・・・フェイトをお願い・・」

プレシアは、二人にフェイトの事を託した。

プ「さぁ・・全てを終わらせましょう」

「ああ、全てを終わらせるとしよう」

プ「！」

プレシアは突然後ろから声がしたので、咄嗟に後ろを振り向いた。

後ろにはニヤついた笑みを浮かべたジュドが歩いて来た。

ジュドの後ろには４人の怪人がいた。ディアル、ヘゾル、ゲドラ、ファイナの４人である。

そして後ろには手が４本もあり３M以上もある巨大なトカゲの怪物

がいた

プ「ジュド！その怪物は一体！？」

プレシアは驚いた顔で言う。

プレシアはディアルたちのことは知っていたものの後ろにいる巨大な怪物には見覚えがなかった。

ジ「ああこれかね？君が完成させたプロジェクトＦの技術を利用してトカゲの細胞と我々の細胞を基にして私が作った、魔獣・ギガリザードだよ」

ギガ「グオオ・・・」

ジュドは可笑しいようにそういい、ギガリザードと呼ばれた怪物がジュドに答えるように唸る。

プ「何ですって！？」

プレシアは目を見開き驚いた。まさかジュドが自分の完成させたクローン技術であるプロジェクトＦを使ってあんな怪物を作り出せたことに驚いたのである。

プ「でも、あれはそう易々と扱えるモノじゃないわ！それに怪物を作り出すなんて・・・」

ジ「ククク、私を甘く見てもらっては困るよ、何のために何年も前から君に接触していたと思うんだね？君の技術をちょっと改造すればこれくらいの事はできるのだよ」

そうジュドはずっと前からプレシアに接触していた。

プロジェクトＦの研究を盗むために

そして、ジュドはプレシアを馬鹿にしたように言う。
プレシアは苦虫を噛んだような顔になる。

プ「でも、約束が違うわ。あなた達との約束はジュエルシードを渡すだけで、私の技術を勝手に使って良いと言う約束はしなかった筈よ」

プレシアとジュドとした約束は、“プレシアの手伝いをすればジュエルシードをジュド達に渡す”と言う内容なのである。
それ聞いてジュドは顔を手で抑えて可笑しそうに言う。

ジ「約束？本当にこの私が人間ごときとの約束を守ると信じたのかね？」
ゲ「ギャハハハ！おめでたい女だなァー！！」
ファ「ププッ、ホントホント」

プレシアはジュド達のその言葉を聞いて苦渋に満ちた顔をする。
確かにプレシア自身もジュド達の事を信用していた聞かれれば嘘である。初めからジュド達の事は信用していなかったし、ジュド達がただ自分を利用している事も分かっていた。

ジ「まぁそんなに睨まないでくれたまえよ。勝手に君の技術は使わせてもらったが、ちゃんと最後まで君の計画には付きあってあげるよ」

ジュドは憎たらしい笑みを浮かべながら言う。

プ「ええ、そうしてちょうだい。分かっていると思うけど、フェイト達には絶対手は出さないでちょうだい」

プレシアは声音を強めて言う。

ジ「ああ、分かっているとも」

ジュドはそう言って、ディアル達と共に部屋から出ていく。

プ（プロジェクトFの技術を使われてしまった事は誤算だったけど、後もう少しでフェイトの未来を守るための私の作戦は成功するわ。後はあいつらが余計な事をしない事を祈るしかないわね）

もうプレシアにはジュド達の相手をするほどの余裕はなかった。

管理局の武装局員が、時の庭園に到着した。

アースラのブリッジに万事屋、真選組、なのはとユーノ、それにフェイトと人間形態のアルフが入室してきた。

フェイトは銀時となのはの間に立っている。局員がフェイトに拘束具を付けようとしたが、

銀「んだコラ！お呼びじゃねーんだよ！殺すぞ！」

沖「ケツの穴にホース突っ込んで、水流して奥歯ガタガタ震わせてやりましょうかィ？」

神「お前らのキンタマ潰すぞコラァ！！」

シ「なんなら頭を鷲？んで脳味噌を潰してやるわよ？」

剣「子供にそのような物をつけるとは観心せんな・・・」

ヤ「・・・殺しますよ」

銀時と沖田とシャナと神楽の脅しと剣心とヤミのぶつける殺気のせいで拘束具は付けられなかった。
ブリッジには、時の庭園の様子が画面に映し出されていた。

リ「お疲れ様」

リンディが銀時達に近寄ってきた。それから、フェイトに顔を向けた。

リ「フェイトさん？初めまして」

フェイトは、手に待機状態のバルディッシュを握って顔を俯かせる。

「総員、玉座の間に進入。目標発見」

時の庭園では、武装局員がプレシアのいる部屋に突入していた。

《プレシア・テスタロッサ。時空管理法違反の容疑で逮捕します》
《速やかに武装を解除してください》

局員の言葉に、プレシアは動じる事なく玉座に座ってる。
局員がプレシアを囲み、数名の局員が後ろに回る。
プレシアは後ろに回った局員を睨みつけた。

剣（マズイでござるな・・・このまま映像が映し出されたら・・・）

剣心の顔に焦りの色が浮かんだ。
局員が隠し通路を見つけてしまう。
そして、アレを見つけてしまう。

剣「いかん！映すな！」

剣心が慌てて叫んだ。

だが、もう遅かった。

全員（銀時と剣心以外）

『『！！？』』

映し出された映像に、銀時と剣心以外の全員が絶句した。

ガラス張りのケースの中、緑色の液体の中を漂うアリシアが映し出された。

フェイト・なのは

『『・・・・・・・』』

フェイトとなのはは、驚愕に言葉も発せられなかった。

土方「おい、緋村・・・こいつァどういう事だ？」

斉藤「説明してもらうぞ」

動揺しながら土方と斉藤は、剣心に尋ねた。

だが剣心は、土方と斉藤には答えず顔を険しくして拳を強く握り締めた。

局員がアリシアの亡骸が入ったケースに近づいた時、

《ぐわぁあ！！》

ケースの前に現れたプレシアに弾き飛ばされた。

プ《私のアリシアに近づかないで！！》

局員を睨みながら叫んだ。

「う・・撃てぇ！」

局員は武器を構えて、閃光を放った。
だが、閃光はプレシアの障壁によって掻き消された。

プ《うるさいわ・・》

プレシアは、手を前に突き出した。

リ「危ない、防いで！」

リンディが叫ぶが、

《ぐわぁあああ！！》

玉座の間に沢山の雷が落ち、局員達は悲鳴を上げた。雷を受けた局員達は、その場に倒れた。

リ「いけない！局員達を送還して！」

リンディの指示で、局員達はアースラに転送された。局員達は怪我を負ったものの、死者は一人もいなかった。
だが剣心は気づいた。プレシアの放った雷は自分の受けた雷よりもずっと威力が低かった。

剣（手加減しているのか？・・・それとも予想以上に病が進行しているのか？）

プレシアを見つめながら剣心は心の中で考えた。

フ「アリ・・シア？」

フェイトは目を見開いて、映像に映る自分と瓜二つの少女を見つめた。

プレシアはゆっくりとアリシアに近寄った。

プ《もうダメね・・時間がないわ・・たった九つのジュエルシードで、アルハザードに辿り着けるかわからないけど・・・》

プレシアは後ろを振り返った。

プ《・・フェイト。そこにいるんでしょ？》

フ「！」

プレシアに名前を呼ばれて、フェイトは体を小さく震わせた。

プ《貴女はね・・アリシアの代わりにしようと・・私が造ったアリシアのクローンなのよ・・・》

フ「！？」

驚愕の事実に、フェイトは信じられないと言った表情をする。

シ「うそ・・それじゃあフェイトも・・・」

ヤ「私達と同じ人造生命体・・・」

シャナとヤミもプレシアの告げた事実に驚いた。

エ「・・プレシアは最初の事故の時に、実の娘のアリシア・テスタロッサを亡くしているの。『フェイト』と言う名は、当時の彼女の研究につけられてた開発コードです」

エイミィが険しい表情でみんなに話した。

プ「よく調べたわね・・・」

プレシアは、ゆっくりと体をこちらに向けた。

プ「フェイト。正直に言うわ・・・私ね・・貴女を造りだした時は、貴女を好きになれなかったの・・」

表情を暗くしながらプレシアは語る。フェイトは体をビクッと震わせた。

プ「何故、貴女を嫌っていたのか・・・ある人のお陰でようやくわかったわ。私は貴女を『アリシアの代わり』としてしか見てこなかった・・・」

フェイトも銀時も周りにいる全員が、黙ってプレシアの話を聞く。

プ「・・でもそれは間違い。アリシアの記憶をあげても貴女はアリシアじゃないし、アリシアの代わりでもない・・貴女は『フェイト』だもの・・・」

プレシアは遠い目をしながら話を続ける。

プ「フェイト・・貴女を『フェイト』という、私の娘として見た時に・・・私の気持ちは大きく変わったわ・・・」

フェイトはジッとプレシアを見つめる。

プレシア「ごめんなさいフェイト・・今更謝っても許されないのは、わかってるわ・・・でも・・これだけは貴女に伝えておきたいの・・」

そこでプレシアは優しく微笑んだ。

プ「フェイト・・貴女の事が大好きよ」

第二十三訓　ラスボス打倒前には準備を（後書き）

支配者「次は第1章最終局面に入ります」

剣心「奴らとの対決と言うわけでござるな」

支配者「まあ、そういうことです。では次回お楽しみに」

第二十四訓　黒幕はいつも最後のほうに出てくる（前書き）

新八「おらあああああ！！」
クロノ「ブレイズキャノン！！」

支配者「ひょいひょいっと」

銀時「新八とクロノは作者の奴になにやってんだ？」

剣心「なんでもあまりにも自分達の扱いがひどいから復讐だそうでござる」

フェイト「あははは・・・リリカル剣魂スペシャル二十四話始まります」

第二十四訓　黒幕はいつも最後のほうに出てくる

プ《フェイト・・貴女の事が大好きよ》

優しく微笑みながら、プレシアは娘に自分の想いを伝えた。

フ「・・・！！」

プレシアの言葉を聞いて、フェイトは体を大きく揺らした。
目からは大粒の涙が零れ、その場に泣き崩れた。

プ《アルフ。貴女もいるんでしょ？》

プレシアは、今度はアルフに声をかけた。

プ《こんな私が頼めた義理じゃないけど・・これからもフェイトをお願いね》

ア『プレシア・・』

その時、緊急事態のアラームが鳴った。

エ「大変！屋敷内に魔力反応多数！」
ク「何だ！？何が起こってる！？」

クロノが動揺する。
屋敷の床から、様々な形をした無数の傀儡兵とロボット兵が現れる。

「庭園敷地内に魔力反応！さらに謎の生物まで現れています！！し

かも５０、８０と数を増やしていきます！！」
リ「プレシア・テスタロッサ！一体何をするつもり！？」
プレシアは、アリシアの入ってるケースを固定装置から取り外した。
プ《それから剣心》
剣「！」
剣心は画面のプレシアを見上げた。
プ「最後に貴方にお礼と頼みがあるわ・・・」
笑みを浮かべるプレシア。
プ「ありがとう。そしてフェイトの事をお願い」
次の瞬間、九つのジュエルシードが強い光を発した。
「次元震です！中規模以上！！」
リ「振動防御！ディストーション・シールドを！」
リンディが局員に指示を出す。
「ジュエルシード九個発動！次元震、更に強くなります！」
リ「転送可の距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動！！」
「了解！」
指示を受けた局員が動く。
「規模は更に拡大！このままでは『次元断層』が！！」

『次元断層』とは、いくつもの並行世界を壊滅させる程の災害。
局員達が慌ただしく騒ぐ中、剣心は画面のプレシアを見つめていた。

剣（プレシア殿・・）

爪が食い込む程に、拳を強く握る。

「この速度で震度が増加していくと、次元断層の発生予測値まで、
あと三十分足らずです！」

局員が焦った声で、報告する。

エ「あの庭園の駆動炉も、ジュエルシードと同型のロストロギアです！それを発動させて、足りない出力を補っています！！」

エイミィが説明した。
リンディは、顔を険しくした。

ア「・・・剣心」

剣心の後ろに立っているアルフが呼んだ。
剣心は静かに振り返った。

ア「あんた・・・全部知ってたのかい・・？」

怒り、悲しみ、様々な感情が混ざった視線を剣心に向ける。

剣「・・・・・」

剣心はアルフの問いには答えず唯黙っていた。

そして銀時が喋る。

銀「ちなみに今更だが、俺も知っていた」

新「っ！！銀さんも知ってたんですか！？」

銀時の発言に新八だけでなく、他のメンバーも驚く。

銀「前に一度、俺一人だけが剣心に呼ばれた事があるだろ、そん時に聞いた」

銀時の言葉で新八、なのは、神楽、セイバーは銀時がなぜあの時剣心に呼ばれたかが分った。

セ「つまり、剣心は銀時には話して、私達には話していないと言う事ですね？」

セイバーの言葉で再び周りの視線が剣心に集まる。

剣「・・・・・」

剣心はまた黙り込む。

ア「答えてよ！」

アルフが声を荒げる。

剣「・・・すまぬ」
ア「謝って済む問題か！！」

感情に任せて、アルフは右拳を剣心の顔に振るった。
殴った後、アルフはハッとなる。

アルフ「あ・・・ご・・ごめん、剣心・・・・あたし・・・・」

アルフは、震える右手を引っ込める。

剣「・・お主が謝る必要はない」

場が重い沈黙に支配される。剣心は、隣で泣き崩れてるフェイトを見た。

剣「フェイト殿」

剣心がフェイトに声をかけた。

剣「すまぬ」

フェイトにも謝った。

フ「・・・剣心は・・・悪くないよ・・」

小さな声で、フェイトは答えた。
フェイトを見つめながら、剣心は口を開いた。

剣「・・フェイト殿。プレシア殿はアルハザードに行こうとしてい

る。アルハザードに辿り着けるかどうか、本当にアルハザードかあるかどうか・・それは拙者にもわからんでござる」

フェイトは俯いたまま、剣心の話を聞いてる。

剣心は、話を続ける。

剣「ただ、このままプレシア殿を放っておけば・・・彼女が、お主の手の届かない所に行ってしまう事だけは確かでござるよ」

まだ、真実を話すタイミングではないと思った剣心は今はまだ真実は隠しておく事にした。

剣心の言葉に、フェイトはかすかに、本当にかすかに肩を震わせた。

剣「ここでただ泣いているか、今の自分の殻を破って前に進むか・・お主が今ここで決めるべきでござる」

その言葉を最後に、剣心は黙った。

再び、場が沈黙になる。フェイトは考える。これからどうすべきか。

隣にいる剣心は、静かにフェイトの答を待つ。

フェイト「・・・私は・・今まで母さんの為に頑張ってきた・・・母さんに笑ってほしくて・・・」

顔を俯いたまま、フェイトが沈黙を破った。

フ「・・さっき母さんは・・私に笑ってくれた・・・・・でも・・！」

フェイトは、ギュッと両手を強く握った。

フ「あの時の母さんの笑顔は・・・すごく寂しい・・悲しい笑顔だ

った・・・！」

涙を流しながら、フェイトは言う。

フ「私は・・もう母さんに、あんな笑顔をさせたくない！」

フェイトの声が、ブリッジに響いた。

やがてフェイトは、ゆっくりと顔を上げた。涙は止まっていた。

フ「剣心」

フェイトは、剣心を見上げながら言葉を繋げた。

フェイト「私、母さんを助けたい！」

迷いのない、固い決意の宿った瞳で剣心を見つめながら、フェイトは答を出した。

その答を聞いて、剣心は微笑んだ。いや、剣心だけではない。銀時も新八も神楽もシャナもセイバーもヤミも、真選組の四人も微笑んでいた。

しかし、斉藤だけは剣心達とは別方向を向いていた。照れ屋だな。

ジャキン！

斉藤「・・・殺すぞ」

・・・すいませんでした。

ア「フェイト」
フ「アルフ・・また、私に力を貸してくれる？」
立ち上がりながら、フェイトはアルフに尋ねた。
ア「もちろんだよ！フェイト！！」
フェイトに抱き付きながら、アルフは答えた。
フ「ありがとう。アルフ」
フェイトは微笑みながら、アルフに礼を言った。
な「フェイトちゃん！」
呼ばれてフェイトは、振り返った。

なのはとユーノが立っていた。

な「私も一緒に行くよ！！」

ユ「僕も！」

二人が力強く、フェイトに言った。

フ「・・・！！」

なのは達の言葉に、フェイトは目を見開いた。

ク「僕も行く！このまま放ってはおけない！」

クロノが言った。

フ「みんな・・」

フェイトは、なのは達を見渡した。

剣「フェイト殿お主は一人ではない」

横から剣心の声が聞こえた。

フェイトは、剣心に顔を向けた。

フ「あの・・剣心・・」

剣「おろ？」

剣心は緩んだ顔を見せた。

フェイトは、頬を少し赤くしながら、何か言おうとして戸惑ってる。

フ「その・・一緒に来てくれる？」

上目遣いに、おずおずとフェイトが尋ねた。

剣心は微笑みながら、ため息をついた。

剣「もちろんでござるよ」

フ「！！」

剣心の答えを聞いて、フェイトは笑顔になる。

剣「拙者は万事屋だ。頼まれれば何でもやるでござるよ」

剣心は、力強くフェイトに言った。そして万事屋のオーナーである銀時が万事屋メンバーに声を掛ける。

銀「準備はいいか？お前ら！」

振返りながら、銀時は新八、神楽、シャナ、セイバー、ヤミ、に言った。

シ「もちろん、行くわよ」

セ「我が剣でどんな障害もなぎ払いましょう」

新「はい！」

神「いつでも準備オーケーアル！」

ヤ「フェイトを放って置けませんしね」

それぞれ木刀と傘と剣と刀を持って、五人は力強く答えた。

近藤「トシ！総悟！斉藤！山崎！俺達、真選組も行くぞ！」

近藤が、右手で拳を握りながら叫んだ。

土「ああ、久しぶりの喧嘩だ。思いっきり暴れるぜ」
沖「そろそろ体動かさねーと、鈍っちまいまさァ」
斉「面倒だが、仕方あるまい、それに久しぶりに悪党を斬りたかった所だ」
山「えっと・・できるだけ、頑張ります」

土方と沖田もやる気満々である。斉藤は少し冷たくそう言い、山崎は若干弱腰だった。

銀「よーし。行くぜお前ら!」
剣「ああ」

銀時が大声で叫び、剣心が力強く答えた。

新「待ってください、銀さん」
シ「待って、剣心」

新八が、銀時を呼び止め、シャナが剣心を呼びとめた。

銀時・剣心
『『何だ新八（シャナ殿）？』』

二人が振り返った直後、

新八・神楽・近藤・土方・沖田・山崎・シャナ・セイバー
『『うおりゃぁあああ（はぁあああ）（やぁぁぁ）！！』』

新八、神楽、近藤、土方、沖田、斉藤、山崎、シャナ、セイバー、

ヤミが二人に襲い掛かった。

剣「オロォォォォ！？」

銀「ごばぁ！な・・何しやがんだテメーら・・！？」

わけがわからないと、銀時は新八達に向かって叫んだ。

新「アリシアちゃんの事を黙ってた罰です！」

シ「そうよバカ、剣心はさっき一人じゃないって言ったばっかりなのに、ってかフェイトの事ちゃんと話しなさいよ！！」

セ「私達を信じてくれも良いじゃないですか！」

ヤ「今回は私も腹が立ちました、だから殴ります。」

神「五分の三殺しで許してやるアル！」

土「テメーも、一人で背負ってんじゃねェェ！」

近「万事屋！一言、俺達にも言え！」

沖「すんませんねぇ旦那方。流れ的に俺も殴りまさァ」

斉「俺はもともと貴様らを殴れる理由を探していたからな」

山「俺もそんな感じです」

それぞれ言いたい事を言い終わると、再び二人に鉄拳制裁を加えた。

剣・銀

『『ギャアアアアア！！』』

暴力の爆心地から、銀時と剣心の断末魔のような悲鳴が聞こえた。

フェイトとなのはは、オロオロしながらその様子を眺めてる。

やがて、鉄拳制裁が終わり、剣心が床を這いずりながらフェイトの方へ向かった。

フ「け・・剣心・・大丈夫・・？」

心配そうにフェイトが尋ねながら剣心に駆け寄った。

剣「あ・・ああ・・・何とか大丈夫でござる・・」

そう言いながら剣心は、顔を上げた。

剣「それでは行くでござるか。お主の母親の、本当の笑顔を取り戻しに」

フ「うん！」

剣心の言葉に、フェイトは力強く頷いた。
なのはも銀時に駆け寄って慰めの言葉を精一杯掛けていた。
そして銀時はなのはに声を掛ける。

銀「なのは・・俺達も行くか」

な「はい！」

なのはも力強く答えた。

一方銀時達が時の庭園に向かおうとしていた頃。
時の庭園の奥にあるプレシアの玉座。

ドコッ！

プ「くっ！」

プレシアはゲドラに押され壁に叩き付けられる。

ゲ「おい！こいつァ言ってえどういう事だぁ！？」

ゲドラは怒りをあらわにしながらプレシアに怒鳴り散らす。ゲドラの後ろにジュドとディアルがいた。

プ「何の・・ことかしら？」

プレシアは息を荒くさせながらも気丈に振舞う。その顔はささやかに笑みを浮かべていた。

ゲ「何であの人形への最後の言葉をあの人形を踏みつける言葉にしなかったんだって聞いてんだよ！話が違うじゃねえか！！」

ゲドラが怒っている理由はプレシアが計画を最後の最後で変えた事だった。
最初の予定ならプレシアはさっきの場面でフェイトを突き離す言葉を言うはずだったのにそれを言わなかったのである。
あの場面でそう言う言葉をプレシアがフェイトに言えばフェイトの心は壊れたはずなのにそれがなかった。フェイトの心が壊れる所を楽しみに待っていたゲドラにしてみれば、自分の楽しみを奪ったプレシアのさっきの行為はとてつもなく腹立たしい事だった。

プ「まさか・・私があなた達の考えに気づかないとでも思ったの？」

プレシアは不敵な笑みを作って言う。

ゲ「っ！！・・てめえ・・・まさか気づいていやがったのか！？」

ゲドラは驚きの顔をする。

プ「ええ、とっくにあなた達の腐った考えなんて気づいていたわ。だから最後だけはあなた達に嘘の計画を教えておいたのよ」

プレシアは笑みを作る。

ゲ「このクソアマァ！！」

ドカァ！！

ゲドラはそれを聞いてプレシアの頬を殴る。プレシアは倒れる。

ゲ「このやろう！俺の楽しみを奪いやがって今すぐぶっ殺して「や

めろゲドラ」ジュド様！？」

プレシアを殺そうとするゲドラをジュドが止めた。
そしてジュドがしゃがみ、プレシアの顎を持ってプレシアの顔を無理やり上げさせる。ジュドはプレシアの顔に近づけて言う。

ジ「ならば、あの人形の目の前で君を殺してあの人形のお仲間も全員殺すとしよう」

ジュドはそう言ってプレシアの顎を離す。

ジ「ディアル、ＧＧを出せ、後ギガリザードのテストも奴らで行う」

ジュドが近くにいたディアルにそう命令する。

デ「ご安心を、すでにＧＧは奴らのところに向かわせており、ギガリザードも待機させております」

ジュドとゲドラはそれ聞くと笑みを作る。

ジ「それとプレシア君。悪いが君がため込んでいた傀儡兵にちょっと細工をさせてもらったよ。私の言う事を聞くようにね」

そしてジュドは傀儡兵とＧＧとよばれたロボット兵に命令し、プレシアとアリシアの体が入った水槽を奥の部屋に連れて行った。
その時プレシアはここにやってくるであろうフェイトの無事を願った。

銀時達は、時の庭園に転送された。
直後、

新八・神楽・銀時・真選組
『『おぼろろろろろ!!!』』

新八、神楽、銀時真選組（斉藤以外）は盛大なゲロを吐いた。斉藤は気持ち悪そうに口で手を押さえていた。

な「きゃあ!?だ・・大丈夫ですか!?」
ユ「ど・・どうしたんですか!?」

なのはとユーノが驚く。

剣「やれやれ。今からそんなことでは、先が思いやられるでござるな」
ヤ「まったくですね」
シ「情けないわね」
セ「本当ですね」

四人呆れた様に言う。

ア「いや、剣心は最初に来た時、吐きそうになっていたじゃないか」

アルフが目を細めて言った。

新「あんたも同じじゃん！！」

アルフの言葉を聞いて、新八は剣心に怒鳴った。

剣「拙者は吐いておらんでござる」

新「そんなん、一歩出るか出ないくらいの差でしょうが！」

土「・・気持ち悪・・・」

斎「・・これは・・酷いな・・・」

口を押さえながら、土方達が立ち上がる。顔色はまだ少し青い。

フ「剣心もそうだったけど。ここはさっきまでとは別空間で環境も違うから、魔導師でない貴方達は慣れないと体調が悪くなるみたい」

フェイトが土方達に説明した。

土「なるほど・・つーかテメー知ってたんなら教えろや！」

銀「そうだコンチクショー！」

斉「斬るぞ、貴様！！」

三人は、剣心に向かって怒鳴った。

剣「いや～、すっかり忘れてたでござるよ～（棒読み）」

土「ふざけんなよ、コノヤロー！！」

土方が剣心に掴みかかる。

近「ちょっ・・止せ、トシ！」

新「土方さん、落ち着いてください！」

山「副長！争っている場合じゃないですって！」
斉「もっとやれ」
新「煽るなァアア！！」

三人が、二人を止めようとする。フェイトやなのは達は、困りながら様子を見ている。

沖「剣心の旦那ァ、土方さん」

沖田がいつもの、のんびりとした声で二人を呼んだ。

土「何だ！？」

イライラしながら土方は沖田に顔を向けた。

沖田「お二人が騒いでる間に・・」

言いながら沖田は、前方を指差した。
沖田が指差した先には、様々な鎧の形をした、沢山の傀儡兵が剣や槍などを持って構えていた。ＧＧと叫んでいる鎧や飛行タイプなど色々なロボット達も銀時達を取り囲んでいた。

沖「おいでなすったぜィ」
シ「久し振りにうでがなるわね」

ニヤリと二人は、笑みを浮かべた。
フェイト達もデバイスを構える。

な「い・・いっぱいいるね」

なのはは、緊張した表情でレイジングハートを両手で構える。

ク「まだ入口だ。中にはもっといる」

クロノは、前方の敵を見据える。
銀時と剣心がゆっくりとフェイト達の前に出た。

剣「フェイト殿。拙者達がこやつらを片付けるから、お主達は拙者達の後に続くでござる」
フ「え？」
銀「そう言う事だ」
な「銀さん？」

フェイトとなのはは、剣心と銀時を見上げた。二人の横には、いつの間にか万事屋メンバー、それに真選組の五人がいた。

フ「でも剣心・・」

心配になって、フェイトが声をかける。いくらなんでも敵の数が多すぎる。

剣心「フェイト殿はプレシア殿を助ける事だけ考えるでござるよ」

剣心は腰の逆刃刀『真打』に手をかける。新八達もそれぞれの武器を構える。

銀時「俺達は俺達の護りてぇもん護る」

銀時も腰の木刀『洞爺湖』に手を掛ける。
鋭い目で、眼前の敵を見据える。

沢山の傀儡兵とＧＧが一斉に銀時達に襲い掛かる。
剣心と銀時は逆刃刀と木刀を抜いて、横薙ぎに振るった。
次の瞬間、数十機の傀儡兵とＧＧは、胴が粉々になって吹き飛んだ。
フェイトやなのは達は、目を丸くした。

銀「はいィィィ！次ィィィ！！」
剣「土龍閃！！」

銀時は傀儡兵とＧＧの軍の中に飛び込みながら、さらに木刀とを振るった。
剣心は地面に刃を刺し地面を巻き上げ土の波を放った。
傀儡兵の頭は砕き、武器を破壊し、ＧＧは次々吹き飛ばされ倒されていく。

土「うらァァァァ！！」

土方の刀が、ＧＧを真っ二つに両断した。休まず刀を横薙ぎに振るって傀儡兵の首と胴体を切り離す。

神「ほぁちゃあああ！！」

神楽は、傘を振り回してＧＧを吹き飛ばす。時には、拳で殴って傀儡兵を粉砕する。

沖「チャイナには負けねぇぜィ！！」

神楽に対抗心を燃やす沖田も動く。目にも止まらぬ素早い剣技で、傀儡兵とＧＧ達を次々と切り裂いていく。

シ「それはこっちのセリフよ、バカ」

シャナは炎の刀を軽やかに振りＧＧと傀儡兵を切り裂いていく。しかしその剣技は力強くなおかつ華麗だった。他にも炎の太刀の力で火炎弾も放ち傀儡兵とＧＧを吹き飛ばす。

近「ぬぅおりゃあああ！！」

近藤が叫びながら、豪快に刀を振り下ろす。近藤の刀は、他より少しサイズが大きい傀儡兵を両断した。ＧＧを横凪に切り裂く。

ヤ「この程度、軽いですね」

ヤミは自分の髪と手を『トランス』で刃に変え、それを素早く縦横無尽に動かし近くの敵を切り裂いたり、はたまた髪を槍に変えて遠くの敵を貫いたりした。

斉「俺の牙突に死角はない！」

斉藤は刀を構え、凄まじい勢いで走って突っ込みながら牙突で傀儡兵とＧＧを吹き飛ばした。

セ「騎士の名にかけて負けてられません！」

セイバーは不可視の剣を巧みに振り、傀儡兵やＧＧを切り裂いていく。その洗練された剣技は中々のモノで一人振りで何体もの的を薙ぎ倒した。

山「どりゃぁあああ！！」

山崎もミントンで地味に敵を倒していった。

ア「なんでミントンなんだい！？」

アルフが山崎の戦いにツッコンだ。

な「す・・すごい・・！」

なのは達は、デバイスを持ったまま身動きができなかった。
ハッキリ言って、なのは達が出る幕は、これっぽっちもなかった。
まさに鬼神の如き強さで暴れ回る万事屋と真選組。中には特殊な力を使う者のいるのだが、それを差し引いてもなのは達に比べればまるで次元が違った。

ク「な・・なんてデタラメな連中なんだ・・」

クロノは、驚きを通り越して半分呆れていた。
もう誰にも止められない。銀時達が傀儡兵とＧＧを次々倒していく中、

新「うぉおおお！！」

新八が上段から木刀を振り下ろす。
だが木刀は簡単にＧＧの腕で受け止められてしまい、ＧＧの体当たりを顔面に受けて拭き飛ぶ。
所詮新八はやられ役だ。

新「何で僕だけェェェ！！？」

吹き飛ばされながら、新八は叫んだ。その時、新八のメガネが外れた。

銀「新八ィィィ！！大丈夫か！？」
セ「しっかりしてください！」
シ「もう、なにやってんのよ！」

傀儡兵とＧＧを倒しながら、三人は新八に駆け寄る。

フ「大丈夫ですか！？」

フェイト達も、新八に駆け寄った。

新「う・・うん。大丈夫だよ」

安心させるように、笑って答えながら新八は立ち上がった。

銀「どうやら無事みてーだな」
セ「そうですね」
シ「そうね」

屈んで三人が声をかけた相手は、地面に落ちた新八のメガネだった。

新「新八こっちィィィィ！！」

額に血管を浮かべながら、新八が怒鳴った。

な「銀さん、セイバーさん、シャナちゃん。ソレは新八さんのメガネなんじゃ・・」
銀「いやいや、違うぞなのは」
フ「え？違うの？」
セ「ええその通りです」

シ「そうよ、フェイト」

銀時は首を横に振りながら言った。落ちてる新八のメガネを拾う。
そしてセイバーとシャナは銀時の言葉を首を振って肯定する。

銀時「よく覚えとけなのは。新八の成分の９５％はメガネだ。そして３％は水だ。つまりこっちが新八だ」
セ・シ「つまりこのメガネが本体です（よ）」

メガネを持ちながら銀時が説明し、セイバーとシャナは眼鏡を指を指しながら言う。

新「違う違う！違うからねなのはちゃん！フェイトちゃん！普通に僕が志村新八だから！僕が本体だから！！」

新八は全力で、二人の言葉を否定した。
フェイトとなのはと剣心は、少し困ったような笑みを浮かべながら、三人の様子を見ていた。

土「おい、テメーら」

土方が声をかけた。

土「いつまでふざけてんだ。さっさと先に行くぞ」

見ると既に、入口前にいた大量の傀儡兵とＧＧは全滅していた。

銀「よし！行くぜなのは！」
な「はい！」
剣「進むぞフェイト殿」

フ「うん！」

二人の声に答えながら、なのはとフェイトは走り出した。

「そう言うわけにはいかんな」

全員

『『！！』』

扉の前からジュドとゲドラとヘゾルが笑みを浮かべて出てきた。

第二十四訓　黒幕はいつも最後のほうに出てくる（後書き）

支配者「次回はついに大バトル勃発！」

シャナ「私とヤミの大バトルよ」

ヤミ「次回をお楽しみください」

第二十五訓　パーティはちゃんと考えて決めろ（前書き）

支配者「今回は大バトルの話です」

なのは「リリカル剣魂スペシャル始まりま～す」

第二十五訓　パーティはちゃんと考えて決めろ

ジ「悪いがここから先に行くのはそこにいる人形だけにしてもらえないかな？」
ゲ「そういう請った」

ジュドとゲドラはフェイトを指差しながら二ヤついた笑みで言う。
ジュドの言葉を聞いて、フェイトは一瞬かたをビクつかせた。
剣心だけじゃなく、他の万事屋のメンバーと真選組の五人もジュドの言い方に怒りを覚えた。

剣心「・・・貴様は！」
銀時「おいおい何やってんだテメーらは？もう登場してるくせしやがって、いきなり出て来て謎の人物気取りですか？このヤロー」

銀時はジュドを睨みながら言う。

ヘ「下等種族が生意気な口を。私達はそこにいる出来損ないのゴミ人形に用があるのだ。貴様たちは邪魔だからさっさと消えろ」

ヘゾルはゴミを見るような目で銀時を一瞥した後またフェイトに目を向ける。
フェイトはジュドを睨み付けて言う。

フ「私に何の用だ？」
ゲ「ほぉ～人形のくせしやがってジュド様にそんな口を聞くとはいい度胸だ。まぁ良いぜ。俺達はただお前をお前のバカな母親の所まで連れて行ってやろうって言ってんだよ」

ゲドラは憎たらしい笑みを作りながら言う。剣心達ははっきり言って、ジュド達の口調もそうだが、ジュド達がフェイトに向ける、まるでゴミ以下を見つめるような目線が剣心達の怒りをさらに上げた。

剣「お前達、さっきから黙って聞いてれば随分な物言いだな。」

土「それでテメェらはなにもんなんだ?イライラさせるセリフを散々はきやがって」

剣心はジュド達を鋭く睨みつけながらそう言う。

土方はジュド達の事を知らないのでそう質問する。

ジ「私達かね。私は魔人族総帥『炎帝』のジュドという者だ。そして、後ろにいるのが私の部下、『大顎』のゲドラ、『飛翔』のヘゾルだ。なぁに私達はそこの人形の愚かな母親を利用していただけの者だよ」

ジュドの言葉でソラ達は目を見開いて驚く。

剣「やはり、プレシア殿の知り合いとは貴様のことだったか・・・」

斉「すると何か?貴様らがこの事件の真の黒幕と言う事か?」

斉藤の意見にゲドラが答える。

ゲ「ああその通りだぜ。しかし、あのの女も底なしのバカだったぜ。今まで頑張ってきたのに結局俺達に何もかもメチャクチャにされるんだからよ~ひゃーはっはっはっはっはっ!!!」

へ「全く、愚かな女だ。これだから人間という奴は・・・」

ゲドラは思い出したかのように笑い、ヘゾルは人間という種族をバカに仕切ったように話した。

今までの会話と戦闘で剣心達がジュド達に対しての見方は決まった。

剣「プレシア殿もこんな外道な連中に騙されたようだな」

ジ「何？」

ゲ「あ？」

溜息混じりに言った銀時の言葉を聞いたは剣心を睨み付ける。

銀「まったくだな。こんなクズヤロー共に騙されたプレシアに同情するぜ」

セ「ここまで外道な者達がいた事に私はビックリです」

シ「同感ね」

ヤ「私も色んな人物を見てきましたが、ここまで酷いのは初めてです」

四人は呆れ顔と軽蔑の視線をジュド達に向ける。

ジュドはともかく、ゲドラとヘゾルからして見れば、下等生物だと思っていた銀時達にバカにされるのはかなり腹立たしかったが、これから自分達の立てた計画の成功を考えたら怒りも収まった。

ジ「いつもの私たちなら、そう言う事を言う奴らはすぐに皆殺しにしてやる所だが、まぁ良い、これから怒る最高のショーでこのウップンを晴らさせてもらうとしようか」

ゲ「そういう請ったな、ケケケ」

ゲドラとジュドは怒りの顔からまた笑みを作る。

土方・斉藤「ショー？」

土方と斉藤は目を細くして言う。

ジ「この先に進めばいずれ分るよ」

ジュドは可笑しそうに言う。

クロノが唐突にジュドに声を上げて言う。

ク「どうやら話しを聞く限りだと、あまり良い事は考えていないようだな。お前達を事件の重要参考人として逮捕する！！」

クロノはデバイスを構える。

ゲ「ハア？お前みたいな雑魚に俺達が捕まえられるはずがないだろーが」

ヘ「ゲドラのいうとおりだ、身の程知らずの下等種族の小僧が偉そうなことをほざくな」

ク「何！？」

ゲドラとヘゾルの言葉にクロノは怒る・・・いや、ジュド達の人を人と見ないような話し方にはクロノも我慢の限界だった。それは銀時達も同じで、新八、神楽、セイバー、シャナ、近藤、山崎、ヤミなどはもうジュド達に飛び掛りそうだった。

ジ「私はプレシアと最下層で待っている。来たければ勝手に来たまえ。まぁ来れたらの話しだがね」

ジュドの言葉と共にゲドラがワニの怪人にとヘゾルが鳥の怪人に姿を変える。

剣心達と真選組の５人は驚きの顔をしていた。

なのは達は目の前の異形のバケモノの存在に驚いていた。

近「なんでぇぇぇぇ!?なんで『仮面ライダー』に出てくる怪人見たいなのが『リリカルなのは』の世界に出てくるのぉぉぉぉぉ!!?」

近藤はありえないと言わんばかりに叫ぶ。

新「っておまえいい年して仮面ライダーなんか見ていたんかぃぃぃぃ!!」

新八が驚きのツッコミをする。

沖「いや～近藤さんが、“仮面ライダーを見る事は隊士達の良い刺激になる”とか言って前に無理やりクウガからオーズまで全部見させられたんでさァ、あと戦隊ものも見せられました」

沖田の説明を聞いて剣心、銀時、新八、は呆れ、土方と斉藤は頭を抱える。

シ「お前・・・本当に警察?」

シャナが目を細めて聞く。

近「だって仮面ライダーやスーパー戦隊かっちょいいじゃん!あの正義を愛する心に俺は胸を撃たれたんだ!」

土「あんた大人だろ!どこまで小学生思考なんだよ!」

斉「全くどうしてどいつもこいつもアホゥな奴ばっかりなんだ・・・・」

土方と斉藤は呆れはてる。

剣「こんなのが警察とは終わったな、拙者達の国は・・・」
銀「そうだな・・」

二人はなんだか悲しい気持になった。
ちなみに剣心達がそんな会話をしている間に山崎と新八がクロノ達に仮面ライダーやスーパー戦隊の事と、魔人族の事を教えていた。

へ「下らん話し合いは終わったか?」
ゲ「そろそろ、始めようぜ、俺はテメェらをブチ殺したくてうずうずしてんだ」
ヘゾルとゲドラは戦闘に入ろうとする。

剣「そうでござるな、こっちもこれ以上時間は掛けたくないしな。残りの聞きたい事はプレシア殿から聞くとするか」

剣心は逆刃刀構えるが、剣心の前にシャナとヤミが前に立つ。

シ「こんなところで時間を食っている暇ないんでじょ?剣心」
ヤ「これくらいの相手なら私達で充分です」

シャナとヤミが強い意思の篭った眼で剣心に言う。

銀「おいおい、お前らだけで大丈夫か、あいつらかなり強いと思うぜ?」
銀時の問いにシャナは笑みを崩さずに言う。

シ「何言ってんのよ。昔からの付き合いでしょ。あんなの相手に私達が遅れを取らない事ぐらいお前が一番良く知っているじゃない」
ヤ「それにフェイトの事を人形と言ったのはどうしても許せません

からね」
ゲ「ん?あぁぁ、そういや~ファイナから聞いたんだがお前らもアイツと同じでアマントとかいう連中に作られた『人造生命体』つまり人形なんだってなぁ~」
なのは・ユーノ・クロノ
『エッ!?』
ゲドラの言葉を聞いたなのは達は驚いた。
な「シャナちゃん達もフェイトちゃんと同じ・・・」
ユ「人造生命体・・・」
ク「なぜ黙っていた!」
クロノが銀時達に怒鳴った。
銀「別にお前らに言うことじゃあねえだろうが」
銀時は面倒くさそうに頭を掻きながらそう答えた。
ゲ「ククククッ、テメェらも人形だからそこの人形をバカにしたのが許せない。人形同士仲良し子よしってか?くだらネェな」
ゲドラのそのことばをきいてシャナとヤミはゲドラを睨みつけた。
シ「本当にむかつくわね。お前・・・」
ヤ「・・・唯じゃ済ませませんよ」
シャナは炎の刀を構え、ヤミはトランスで手を剣に変える。

剣「先を急ごう」
銀「行くぞ、お前ら」

なのは・フェイト・ユーノ・アルフ
『『えっ!?』』

四人は驚きの声を上げ、なのはとユーノは銀時と剣心に抗議する。

ユ「剣心さん!いくらシャナさんとヤミさんでもあの二体の相手は無茶ですよ!ここは全員で倒した方が良いですって!!」
な「そうですよ銀さん!いくらなんでもあんな怪人の相手をシャナちゃんとヤミちゃんの二人だけなんて!」

なのはとユーノの意見に剣心は自身の篭った眼で見る。

剣「安心するでござる。あの二人なら大丈夫だ。お主らが思っている以上に彼女達は強い。それに拙者達だってこんな入口あたりでもたもたしていられないのは分っているでござろう?」

剣心の意見になのはとユーノは俯く。確かに剣心の言う通り、今は時間が惜しい。速くプレシアの所に行かないと取り返しの付かない事になるのは分っている。だからと言って大切な仲間であり、大切な友達でもある二人を怪人の前に置いて行くなどできなかった。

なのはとユーノは目の前の怪人二対が強いと言う事は肌からでも感じ取れた。
戦士が出す殺気、それを目の前にいる怪人ゲドラとヘゾルは放っていた。
二人の中の本能が警告していた、目の前の怪人二体は危ないと・・・

それはフェイトとアルフも同じだった。クロノだって、女性である二人よりも自分がでるべきだと分っている。だからこそ、自分が目の前の怪人二体を相手にするべきだと分っていた。
だからクロノは前に出ようとする。

土「止めておきなクロノ」

土方はタバコを吸いながらクロノを止める。

ク「土方さん！」

クロノは土方に顔を向けて言う。

土「お前はお前の仕事をしろ。それにあの二人はあんな怪人共にやられるようなたまじゃねぇ」
斉「その通りだ。それにあの二匹はお前なんぞの手に負える相手じゃない」

土方と斉藤の強い目線でクロノは押し黙る。

ゲ「ホ～よく分かってんじゃネエか、そこのお二人さん。確かにそんな雑魚じゃ相手にならねえしな」
ク「なに！？」

ゲドラの言葉にクロノが反応する。

へ「まあ良かろう。ではそこの人形の女の相手はこの飛翔のヘゾルがしよう」

ヘゾルがヤミの前に立つ。

ゲ「なら俺はそいつだな、テメェはこの大顎のゲドラさまが食い殺してやるよ」

ゲドラはシャナの前に立つ。

な「シャナちゃん！ヤミちゃん！」

なのはは悲痛な声で二人の名前を呼ぶ。
しかし、シャナとヤミはそれに笑顔で答えた。

シ「安心しなさいなのは」
ヤ「これくらい大丈夫ですよ」

そう言うと二人は怪人二体に走り出し炎の刀と剣を振るう。
ヘゾルとゲドラもそれに応戦する。

剣「行くぞフェイト殿」
フ「う、うん」
銀「あいつらの事も信じてやりな」
な「・・分りました」

なのは達はシャナとヤミを信じて時の庭園の中を進む事にした。

中に入って走り続ける。
床には所々、穴が空いていて空間が歪んでいる。

ク「その穴『虚数空間』だから気をつけて！」

クロノがみんなに叫んで注意した。

沖「虚数空間？」

近「何だそれは？」

沖田と近藤は首を傾げた。

ク「あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間だ。落ちたら重力の底まで落下する。二度と上がってはこれない」

クロノの言葉を聞いて、新八となのはは冷汗を流した。

銀「まっ、要は落ちなきゃいいんだろ」

剣「そう言う事でござるよ」

言いながら二人は、走り続ける。

前にある扉を蹴破って中に入る。部屋には、更に沢山の傀儡兵とGがいた。

クロノが上に続く階段を見つけた。

ク「ここから二手に別れよう」

クロノがみんなに提案した。

銀「よーし。そんじゃ公平に『ジャンケン』で分けるとすっか」

ク・剣『え？』

銀時の案に剣心とクロノは顔をしかめた。

ク・剣『銀時！こんな時にジャンケンなんて・・』

銀時・神楽
『『ジャ～ンケ～ン！』』

クロノと剣心の異議をスルーして、ジャンケンを始める銀時と神楽。
他のみんなも、戸惑いながらも手を構える。

銀時・神楽
『『ポン！』』

銀「ひ～じか～た君、さーいとーう君。何で君達は、いっつも俺と一緒になるんだ？友達になりたいのか？友達になりたいのか？」

不機嫌な顔で銀時は、隣を走る土方と斉藤を睨んだ。

土「そりゃこっちのセリフだ。何で俺がテメーなんかと・・！」

土方も銀時を睨みながら、眉を顰めた。

斉「俺に話しかけるな。アホが移る」

銀「んだと、コラァ！！」

銀時は斉藤と揉めた。

三人の後ろを剣心とセイバーとフェイトとアルフとクロノが走り、飛んでいる。フェイトは苦笑いしながら、アルフとクロノは呆れながら二人の様子を眺めた。

ジャンケンの結果、なのは、ユーノ、新八、神楽、近藤、沖田、山崎が最上階の駆動炉のロストロギア封印。剣心、銀時、土方、セイバー、フェイト、アルフ、クロノが最下層にいるプレシアとジュドの元へ向かう事に決まった。

ちなみにさっきの部屋にいた傀儡兵軍とＧＧ軍は、またも万事屋と真選組によって全滅した。

銀「足引っ張んなよ、大串君」

土「誰が大串君だ！」

斉「お前だ、アホゥ」

土「誰がアホゥだ！つかテメェどっちの味方だ！！」

斉「どっちの味方でもないわ」

さっきからず～っと、口喧嘩をしながら走る三人。

フ「あ・・あの・・」

剣「無駄だフェイト殿。ああなるとそう簡単にあやつらは止められぬ」

フェイトが三人に声をかけようとした時剣心が無駄と言われてフェイトは苦笑する。

クロノとセイバーがため息をつき、アルフが苦笑していた。

最上階。

なのは達はエレベーターを使って最上階にやってきた。

エレベーターから出ると、駆動炉を守る大量の傀儡兵とＧＧがいた。

だがしかし。

な「ディバインバスターーーー！！！」

沖「邪魔ですぜィ」

なのはと沖田が速効で敵を倒して言った。

なのは（銀さんと一緒が良かったのにーーーーー！！）

なのはは銀時と同じチームになれなかった事に怒っていた。

なのはが砲撃で敵を蹴散らした。

沖田は平然と大量の傀儡兵とＧＧを斬り裂いて行った。

その姿にユーノと近藤と山崎と新八は青ざめる。

神楽も二人に感化されたのか次々に敵を倒して行く。

新「な、なのはちゃん・・なんであんなに怒ってるんだろ？」

ユ「さ、さあ？」

二人は冷や汗を流しながら互いに聞きあう。二人にその理由は分ら

ないだろう。
そして新八はなのはの勇士を見て、
新「剣さんや銀さんみたく強くない僕はなのはちゃんを守れないのかなぁ・・・」
落ち込む。
新八「僕みたいなのを・・なのはちゃんが好きになるわけがない・・・」
新八は更に落ち込む。
そんな新八の様子を見た神楽がやれやれ、と首を横に振った。そして、また新八に魔法の呪文を囁いた。
神「ぱっつぁん、ピンチはチャンスアルよ。ここで、ぱっつぁんがカッコよく敵を倒せば、なのはがぱっつぁんを好きになる可能性が出てくるんじゃね？」
新「オルァ！覚悟しろよテメーらァ！！志村新八が成敗してくれるわァァァ！！」
神楽の囁きで、新八の魂に火がついた。

アースラ。
リンディが席を立った。
リ「私も出ます。庭園内でディストーション・シールドを展開して、次元震の進行を抑えます」

ガキン！ドカ！ズカ！バキ！
シ「はぁぁぁぁ！」
ゲ「ぬおぉ！！」
ヤ「・・・」
ヘ「ふんっ！！」

入口ではシャナとゲドラ、ヤミとヘゾルが戦っていた。
シャナは刀に火の力を付与させ刀の切れ味と威力をぐんと上げている。そのためにゲドラの岩のような強靭な体に傷を付けることができた。シャナはゲドラに隙ができればそこにすかさず剣撃を与えた。既にゲドラの体中に傷が見えた。

ゲ「このガキが！」
シ「フン・・そんなに遅くちゃ私を傷つける事はなんて出来ないわよ」
シャナはゲドラの戦闘パターンをあっさりと見切っていた。

ゲドラはその見た目通りの怪力と頑丈の体で相手を圧倒する戦い方をする。
しかも単細胞。
単純に力と力の真っ向勝負で勝てないと考えたシャナは素早い動きと素早い剣撃でゲドラを徐々に追い詰めていった。
だが、ゲドラとてジュド直属の魔人族のエリート戦士の集団にいる一人。このまま倒される程簡単な相手ではない。

ゲ「捕まえたぜ！」

ドカァ！

シ「くうっ！」

ゲドラはタイミングを合せてシャナに拳を当てた。シャナは刀の刀身を使ってガードするが、後ろに吹き飛ばされる。
しかし、空中で回転してすぐに体勢を立て直す。

ゲ「ククククッ、思ったよりやるじゃネエか、だったら次はこれを食らわせてやる。」

ゲドラはそういって大口を開け巨大な岩を吐き出した。

ゲ「食らえ！岩石砲！！」

シ「なッ！？」

ドカアアアン！

シ「ヌアッ！」

ゲドラが吐き出した巨大な岩がシャナの直前で大爆発しシャナを吹き飛ばした。

ゲ「どうだぁ、俺の岩石砲の威力は？」

シ「クッ・・・」

シ（こいつ・・強い。やっぱり簡単に勝てる相手じゃない）

シャナは何とか立ち上がりそう言った。

ゲ「まだ動けんのかよ。だったら次はフルパワーで食らわせてやる！」

ゲドラはそういい、再び大口を開ける。

シ「こうなったら、本気の炎で！」

シャナは刀を構える。

シ「はあああ！！」

シャナは掛け声と共に天に向けて刀を突き出す。そうすると刀の刀身に凄まじい勢いで炎が纏り始める。それは徐々に大きくなっていき、刀が巨大な炎の太刀になった。

ゲ「何をしてるか知らねえがいまさら遅ぇ！食らえ大岩石砲！！」

ゲドラはさっきはなった巨大な岩よりもはるかに大きな岩を打ち出した。

シ「はアアアア！いやぁ！！！」

しかし、シャナは自分が作り出した巨大な炎の太刀でゲドラのはなった大岩を切り裂いた。

ゲ「なッ、バカな!?」

シ「『覇龍烈火斬』!!」

ゲドラが自分の放った技をシャナが切り裂き猛スピードで向かって行きシャナが巨大な炎の刀を上段からゲドラに向かって振り下ろす。

ズバァ!!

ゲ「そんな馬鹿な・・・この俺がこんな人形なんぞにィイイイイイ!!」

ドカーン!!

上から真っ二つにされたゲドラは声を上げて爆発する。

シ「フン、ざまあみなさい、このバカワニ」

シャナがゲドラに対してそう言い放った。

一方ヤミとヘゾルの戦い。
ヤミは横目でゲドラがシャナに敗北した事を見た。

ヤ「あなたの仲間が負けましたよ」

ヤミはヘゾルの剣を盾に変えた腕で受け止めながらそういう。

ヘ「仲間？あんなバカ如きが死んだところでどうとも思わんね」

ヘゾルは剣を連撃するが、ヤミはそれをことごとく受け止める。

ヘゾルは凄まじい速さで攻撃してくる。
ヤミも髪の毛を槍や拳に変えて攻撃するがヘゾルの凄まじい速さにあしらわれ全く当たらなかった。

ヤ「ハッ！」

ヤミは攻撃を当てようとするが、またもヘゾルにかわされる。

ヘ「そんな攻撃がこの私に当たるとでも？」

ヘゾルはヤミの攻撃をあっさりかわし、ヤミを小バカにする。

ヘ「所詮は人形、この私に勝てるはずがない」
ヤ「だったらもう少し本気で攻撃してきたらどうですか？」

ヤミは今のヘゾルの言葉にカチンと来たのかヘゾルを挑発する。

ヘ「人形風情が生意気な口を・・・ならば私の最大の技を食らわせてやる！」

ヘゾルはそう言って空中で回転し始めた。それと同時にヘゾルの周りに風が纏わり始めていく。

ヤ（あれは、ちょっとまずいですね・・・）

ヤミはそういって盾を巨大化させる。

ヘ「食らえ！ストームストライク！！」

ヘゾルは超高速で回転しながらヤミに突っ込んできた。

ヤ「グウッ！！」

ヘゾルの技を受け止めたヤミの盾に凄まじい衝撃が走る。

ヘ「そんな盾でいつまでも防ぎきれると思うな！！」

ヘゾルの技がヤミの盾を襲う。
しかし、盾はなかなか壊れない。

ヘ「おのれ、まだ壊れんか！」

ヘゾルはさらに技のパワーを上げるが、まだヤミの盾は壊れなかった。

ヘ「なッ、なぜだ！？なぜ壊れん！」

ヤ「なぜ、あなたに私の盾が壊せないか分かりますか？」

ヘ「！？」

いつまでたっても、ヤミの盾の防御が破れないことにいらだつヘゾルにヤミは口を開いた。

ヤ「あなたが私達を人形などと馬鹿にしたからですよ」
へ「ハア!?」

ヤミがとんでもない理由で盾を敗れないと言い出したのでヘゾルは思わずそう答えてしまった。

へ「そっ、そんな理由で敗れんと言うのか!?」
ヤ「そうです。私は今怒っているんです。だから今の私の力は怒りのパワーと言うことです」
へ「ふッふざけるなぁー!!」

ヘゾルはぶちきれるが、ずっと技を放っていたせいか回転の勢いが弱まってきた。それを見たヤミは髪の毛を伸ばしてヘゾルを縛った。

へ「ドワッ、なっなんだこれは!?」
ヤ「捕まえましたよ」
へ「おのれ、離せ!」

ヘゾルがもがくがヤミの縛りは強く解けない。
そしてヤミは髪の毛を伸ばし、槍に変えた。

へ「まッ待て、待ってくれ!私が悪かった!」
ヤ「いまさら遅いです。それに私だけでなく私の友人まで散々バカにしてくれましたね。もう許しません」

そういってヤミは槍でヘゾルの体を貫いた。

へ「グアッ！ジュド様アアアア！！」
ヤ「うるさいですね」

バキィッ！

ヤミはヘゾルを殴り飛ばした。
そしてヘゾルは壁に激突して爆発した。
これでヤミとヘゾルの決着がついた。

シ「結構手こずったわね」

シャナが刀をマントの中に消すと、シャナがヤミに声をかけた。

ヤ「べつに手こずってません。手こずったのはあなたでしょう」
シ「（ムカッ！）何よその言い方！」

シャナは怒りながら言う。
しかし、すぐに剣心達のことを思い出して怒りを納めた。

シ「・・・もめてる場合じゃないわね。早くみんなと合流しましょう」
ヤ「分りました」

シャナとヤミは時の庭園の中に向った。

第二十五訓　パーティはちゃんと考えて決めろ（後書き）

支配者「次回は第一章決着編です」

剣心「ではお楽しみにでござる」

第二十六訓　最終決戦の相手がラスボスとは限らない（前書き）

支配者「今回は剣心のオリジナル飛天御剣流が炸裂します」

剣心「ほう、それは凄いでござるな」

セイバー「リリカル剣魂スペシャル第二十六話始まります」

第二十六訓　最終決戦の相手がラスボスとは限らない

時の庭園内。

銀「うおらァアアア！！！」

銀時達は、迫り来る傀儡兵達とＧＧ兵達を倒しながら前に進む。飛行型の傀儡兵とＧＧ兵は、フェイト達が相手をする。

剣「はあっ！」

剣心は逆刃刀から昇龍閃、土龍閃、九頭龍閃を放ってＧＧ兵と傀儡兵を倒していく。

フ「サンダー・レイジー！！」

フェイトから金色の雷が放たれた。雷を受けた傀儡兵達は爆発した。

セ「はぁぁぁぁ！！」

セイバーは不可視の剣で相手を次々に切り裂いていく。

ク「スナイプ・ショット！！」

クロノの黒いデバイスから、青い閃光が放たれた。閃光は傀儡兵達を貫いて、傀儡兵達は爆発した。

ア「はぁあああ！！」

アルフも鋭い爪で、傀儡兵を切り裂いていく。

銀「どけ、ガラクタ共ォオオオ！！てめーらに構ってる暇はねーんだァアアア！！！」

叫びながら銀時は、木刀で傀儡兵を斬り伏せながら先に進む。
広い部屋に着いた瞬間、大きな音を立てて壁が崩れた。崩れて出来た穴から、両肩に砲身を付けた大型の傀儡兵とＧＧ兵が姿を現した。

銀「へっ。デケーのが現れやがったな」
土「上等だコラ」
斉「ああ」

大型傀儡兵を睨みながら、三人は木刀と刀を構えた。
銀時と土方と斉藤は大型傀儡兵とＧＧ兵に向かって走り出したが、

セ「ここは私がやりましょう。エクス」

セイバーの不可視の剣が光、黄金の剣が現る。

銀時・土方・斉藤
『『え？』』

セ「カリバー！！！」

セイバーの放った極太の巨大な金色の閃光が真っ直ぐ大型の傀儡兵とＧＧ兵とそれに向かった銀時、土方、斉藤に向かって放たれた。

銀時・土方・斉藤
『『どわぁあああああ！！！』』

三人は咄嗟に約束された勝利のエクスカリバー剣を避ける。金色の閃光はそのまま大型の傀儡兵とＧＧ兵を粉砕する。

クロノ・フェイト・アルフ
『『・・・・・』』

三人はその光景を見て唖然とする。

セ「ふ～何とか倒せましたね」
剣「セイバー殿やりすぎだぞ・・・・」

セイバーは汗を拭いて何事もなかったような顔をする。そんなセイバーに剣心は青い顔をしていた。

銀時・土方・斉藤
『『な、なにすんだテメーーーーーー!!殺す気かーーーーーーーー!!!!』』

銀時と土方と斉藤はセイバーに怒鳴る。もしさっきのエクスカリバーがあたっていたら、間違いなく天に召されていただろう。

セ「急いでいますし仕方ありません」

セイバーは何が悪いと言うような顔をする。

土「だからって人がいんのに撃つんじゃねぇぇぇ!!俺達に一声くらいかけろ!!」
斉「そうだ貴様!斬り殺すぞ!!」

土方と斉藤は額に青筋立てて怒る。銀時も同様に青筋を立てていた。

ク「今のはなんだ!!明らかにロストロギ・・・」

剣心・セイバー
『『ふっ!』』

ドカ!×2

ク「ゴフッ!!」

剣心とセイバーはクロノの腹にボディーブローを食らわせた。クロノは白目を剥いて気絶する。
剣心はクロノを担いで呆然としているフェイト達に声を掛ける。

剣「先を急ごう」

このまま進もうとする剣心を見てフェイト、アルフは苦笑していた。
ちなみに銀時と土方と斉藤はまだ納得のいかない顔をしていた。

時の庭園、最下層。
プレシアは、アリシアの入ってるケースの隣に立っている。
そしてその前にジュドとディアル・ファイナが立っていた。

ジ「どうやら奴らは順調にこちらに来ているようだな」
ファ「ハイ、ジュド様」

ジュドは笑みを浮かべながら言う。ちなみにディアルは早くフェイトの前でプレシアを殺したくてうずうずしていた。

プ「管理局の執務官の事？」

状況が掴めないプレシアはジュドに尋ねた。

ジ「いや、君の可愛い可愛いお人形とそのバカなお仲間だよ」

ジュドはニヤつきながら答える。

プ「っ！！」

プレシアは信じられないと言うような顔をする。

デ「しかし、ジュド様・・・どうやらゲドラとヘゾルが連中にやられたようです」

ジ「そうか・・・まさかあの二人が倒されるとはな、もう少し使えるかと思ったが」

ジュドは少しだけ顔を下げたがすぐに顔を上げてそういった。

プ（そんな・・まさか・・・フェイトに・・・あの男がここに来るなんて・・・）

プレシアとそう思っていると。

ドカーン！

ジュド・プレシア・ディアル・ファイナ
『『！！』』

壁が壊れる。

「どうやら、ここが最下層らしいな」
「たく、随分時間を食っちまったぜ」
「オメーがもたもたしてるからだろ！」

三つの声の内、プレシアにとって聞き覚えのある声が聞こえた。
そして、壁に空いた穴から人影が姿を現した。

銀「どーも。万事屋で～す。クソ野朗をぶった押しに来ましたー」

銀髪の侍。

剣「プレシア殿無事か！？」

赤い服に身を包んだ、赤色の髪と藍色の瞳を持った侍。
そして、

フ「母さん！」

自分の愛する娘。

プ「剣心・・フェイト・・・」

プレシアは、信じられないと言った顔をする。
フェイトは、固い決意の宿った眼でプレシアを見つめた。
剣心はニヤつくジュドを睨んだ。

神楽「ふぁちょぉおお！！」

神楽は、傀儡兵の頭部を蹴りで破壊する。

沖「チャイナ！俺より目立つなァ！！」

新「イヤ、今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ！？」

沖田は新八のツッコミを無視して刀を振るい大型のＧＧ兵を斬り倒す。

山「なんのこれしき！！」

山崎も苦戦しながらミントンでＧＧと傀儡兵を倒していく。

近「頑張れ新八君！我が義弟よォ！！」

新「いや、あんたの義弟になる予定はないからァァァ！！」

近藤と新八が同時に剣を振り下ろし、最後の一体を倒した。

周りには、傀儡兵とＧＧ兵の無残な残骸が散らばっている。

新八達の背後で、赤い光が輝いた。振り返って見ると、なのはが駆動炉のロストロギアの封印に成功した。

ユ「やった！」

ユーノが声を上げた。

その時、

リ〔皆さん、よく頑張りました〕

なのはとユーノに、リンディからの念話が聞こえた。

リ〔私も現地で次元震を抑えています。おそらく、これで次元断層は起こらないでしょう〕

な「よかった・・」

リンディの言葉に、なのはは安堵のため息をついた。

これで最悪の事態は防げた。

残すは・・・・

最下層。

フェイトは銀時達と共に、プレシアの前に降り立った。銀時達がジュドとその横にいるディアルとファイナが何かするかと思ったが、プレシアの前から横にどいたのでとりあえず今は何もしないと言う事が分った。

ちなみに気絶したクロノは土方が抱えている。

プ「フェイト・・・どうして来たの・・？」

プレシアは驚いた顔で、目の前にいるフェイトを見つめた。

フ「母さん・・」

フェイトは、ゆっくりとプレシアに歩み寄る。

プ「貴女・・何しにきたの・・？」

目を細めてフェイトを睨む。その目にフェイトは足を止めてしまう。

フ「私は・・」

真っ直ぐにプレシアを見つめる。

フ「母さんを助けにきました」

プ「！！」

フェイトの言葉に目を見開く。体がかすかに震えた。

フ「母さん。私は、母さんに笑ってほしかった・・」

自分の想いをプレシアに伝える。

フ「母さんは・・さっき私に笑ってくれた・・・けど、私が見たかった母さんの笑顔は・・あんな悲しそうな笑顔じゃない！」

声が大きくなり、最下層にフェイトの声が響く。

プレシアと銀時達は、黙ってフェイトの話を聞く。

フ「母さんには・・・楽しそうに・・嬉しそうに笑ってほしいの・・・心からの、本当の笑顔になってほしいの！」

母に伝える娘の想い。

フェイトの言葉が、プレシアの心を揺り動かす。この娘は、こんな私をまだ『母さん』と呼んでくれる。こんな私の為に、危険を覚悟してここまできた。
杖を握るプレシアの手が震える。

フ「だから、母さん・・」

そっと、プレシアに手を伸ばす。

フ「一緒に帰ろう」

優しく微笑む。
フェイトの言葉に、笑顔に、プレシアは目を見開き涙が出そうになる。
フェイトは手を伸ばしたまま、プレシアの答を待つ。

プ「・・フェイト・・私は・・・」
ジ「ククククク・・ハーハッハッハッハッハッハ!!!」

プレシアの答えをジュドの笑い声がかき消す。
剣心達はジュドを睨む。

ジ「ワハハハハ、最高の茶番だな!!ここまで可笑しいのは久し振りだよ!!」
ファ「ホントですわ~ン、ジュド様♪ウヒヒヒヒヒヒ」

ジュドとファイナは腹を抱えて笑う。

剣「貴様ら。人の話しの邪魔をするな」

剣心は怒りの篭った声でジュド達に言う。

デ「ふんっ！そこにいる人形の言葉などどうせ、心があるように振舞って、それをあたかも心が籠もっているかのように喋っているだけのただの心のない言葉にしか聞こえんな！！」

ファ「そうそうディアルのいうとおり」

ディアルとファイナははき捨てるように言う。

剣「ふざけるな！！」

剣心の怒声にディアルとファイナは押し黙る。

剣「さっきから聞いていればなんだ今の言葉は。フェイト殿に心がないだと、人形などと人を人とも思わぬ発言をするとは」

剣心は前に進みながら言葉を言う。

剣「フェイト殿は人形なんかじゃない。魂がある、心がある。お前達がフェイト殿の魂を否定する権利などどこにもない！」

剣心はディアル達に対してそう怒鳴った。

ディアルは剣心の言葉に歯軋りさせる。

ジ「おやおや、随分とその人形の肩を持つのだね、君は」

剣心はジュドに顔を向ける。

剣「ジュド・・・」

ジ「私の放ったＧＧの大群までこうも簡単に倒してここまで来ると

はね。正直驚いたよ」

ジュドはにや付きながらそう答える。

剣「貴様・・・」

ジ「この女を直接殺すのはディアル、お前に任せる。貰う物は貰ったから私は引き上げる事にしよう。最高のお土産を残してね、行くぞファイナ」

ファ「ハーイ」

ジュドとファイナはそのまま炎に包まれて消える。

セ「逃がしましたね」

セイバーが悔しそうに言う。

デ「ジュド様の命だ、ここでお前達には消えてもらおう。この女を殺す前にな」

ディアルはさっき剣心に散々いわれたのが気に食わないらしく、プレシアを殺す前に剣心を殺す事に決めた。

そしてディアルは狼の怪人の姿に変わり、手に光の剣を持つ。

剣心は後ろに顔を向けて銀時達に言う。

剣「お主らは手を出すな。こやつは拙者が倒す」

銀時達は無言で頷く。

剣心は逆刃刀を構える。

デ「フン、調子に乗るなよ、言っておくがお前達の相手が俺だけだと思っていたら大間違いだ」

ドッスーン！！！

ディアルの言葉と大きな音と共に３Ｍ以上もある巨大なトカゲの怪物が落ちてきた。
それはジュドの作り出した魔獣・ギガリザードであった。

銀「ドワアアアア！何だコイツはァ！！」
セ「でかい！」
土「でけぇトカゲだな」
斉「ふん、少しはマシな奴が出てきたか」

銀時達は驚きながらも武器を構える。

デ「驚いたか、これがジュド様がその女の技術を使って作り出した魔道魔獣・ギガリザードだ」
ギガ「グオオオオ・・・」
ア「プレシアの技術を！？」
ギガリザードがディアルに答えるように唸り、アルフがディアルの言葉を聞いて驚く。

デ「ギガリザード、俺はあの赤髪の男をやる。お前は他の連中を始末しろ」
ギガ「グオオオオオオオオーーーッ！！」

ディアルに命令されて、ギガリザードが銀時達に襲い掛かってきた。

銀「このトカゲヤローが、グオグオ唸りやがって、ドラクエ３のモ

ンスターですか？このヤロー」
セ「こんなトカゲ、さっさと倒してしまいしょう」
土「当たりめーだ」
斉「ふん・・」

銀時達もギガリザードを迎え撃つ

銀「フェイト、お前はプレシアの所にいけ、こいつは俺たちがやる」
フ「う・・うん」
ア「フェイトあたしも行くよ！」

銀時に言われ、フェイトとアルフはプレシアの所に言った。
そして銀時達に向かってギガリザードが攻撃を仕掛けてきた。

銀「のわッ！」
セ「クッ！」
土・斉「ちぃっ！」
ギガ「グオオオオオオオーッ！！」

ギガリザードはその巨体を利用して物凄い勢いで襲い掛かってくる。
もう腕を振るうは、足で踏み潰してこようとするは、火炎放射を吐いて来るは、もうメチャクチャに暴れている。

銀「だあああああああッ！こいつムチャクチャだーッ！！」

一方、剣心とディアルは

ガキィン！キィン！キィン！キィン！

剣心とディアルはお互いが光の剣と逆刃刀で斬りあっていた。

デ「ふん・・なかなかやるな」

剣「・・・・・・」

ディアルは斬り合っている途中でも余裕があるように話しかけてくるが、剣心は無言だった。

デ「どうした？俺の剣を受けるのが精一杯で声を出す暇もないのか？」

剣「・・・・・・」

ディアルはなおも剣心に声をかけてくるが剣心は相変わらず無言である。

デ「貴様！何とか言ったらどうだ！」

ディアルは何も答えない剣心に対してとうとう声を荒げた。

そして、剣心は静かに口を開いてこう答えた。

剣「・・・この程度か？」
デ「何！？」
剣「お前の実力はこの程度かって聞いてるんだよ」
デ「クッ・・俺をなめるなーッ！」

ディアルは剣心の言葉にキレて剣心に突撃した。しかし、剣心はその場から消えた。

デ「ふん、バカめ、見えてる見えてる。そこだに・・・」

ディアルは剣心が移動した方向に顔を向けたが、剣心はディアルが向いた方向とは正反対の方向にいた。

剣「見えてる見えてるって、拙者の残像でも見えたのでござるか？そんなに早く動いたつもりはないんだがな」
デ「バッ・・バカなッ！」

ディアルは剣心の物凄いスピードに驚いていた。

デ（あっありえんっ！俺のスピードはジュド様やヘゾルに比べればかなり劣る。だがいくらこいつが気の使い手とはいえ、A級の管理局の魔導師の強化魔法を使った状態のスピードですらたやすく上回るスピードを出せるこの俺がこんな男に全く付いていけんだと！？）
剣「もう分かっただろう。お主では拙者は到底倒せん。さっさとあの怪物をつれて引き上げたらどうだ？」
デ「ふざけるな！この俺が人間ごときに・・・」

バキィッ！

デ「グハッ！」

ディアルは言い終わる前に剣心の逆刃刀の攻撃を受けて吹き飛ばされた。

剣「まだ、やるか？」

デ「グウウ・・・」

剣心が倒れたディアルに迫る。

デ（だっだめだ、この男は強すぎる！おのれ、こうなったら）

デ「すまん、俺が悪かった！」

ディアルが剣心に謝った。

デ「すまん！俺だって本当はこんな事したくなかったんだ。ジュドの奴に無理やり命令されて仕方なく・・・」

ディアルは泣きながら剣心に謝った。そして剣心は逆刃刀を鞘に収めた。

剣「お主の言葉すべてに信は置けぬが、これに懲りて足を洗うでござるよ」

デ「あ、ああ・・・」

そういって剣心はディアルから離れていく。しかし、ディアルは剣心の後ろ姿を見てニヤッと笑った。

デ「バカが、食らえ！」

そういってディアルは剣心に向かって黒い光弾を放った。
しかし剣心は、突如ディアルの視界から消え、黒い光弾をよけた

デ「なッ！？」
剣「やはりな」

剣心はいつの間にかディアルの後ろにいた。

剣「お前のような奴はこういった卑怯な手を使うと思ったよ」
デ「きっ、貴様・・」

ディアルは再び黒い光弾を打とうとするが、剣心すばやく逆刃刀を抜き黒い光弾を斬った。

ズバッ！

デ「なッ！？」
剣「つくづく救えん男だな。これで終わりにしよう」
デ「ひッ！まッ・・」
剣「飛天御剣流、気龍閃！」
デ「ぐわあああ！！ジュド様アアア！！！」

ディアルは剣心の技を食らって空高く吹き飛ばされ、虚数空間のほうへと落ちていった。
これで、剣心対ディアルの戦いは終わった。

剣「これで終わったな、後は銀時達だが・・・」

その頃、銀時達は・・・

銀「ぎょわー！」
土「ヌオあっ！」
セ「クッ！」
斉「ちいっ！」
ギガ「グオオオオオオオオオオオーッ！！」

ギガリザードの攻撃が激し過ぎて銀時達は反撃できないでいた。

ギガ「グオオオーッ！！」
銀「チッ、このやろう・・お痛も大概にしやがれぇー！！」

バキィッ！！

ギガ「グオオッ！？」

ギガリザードの攻撃に怒った銀時がギガリザードを木刀で思いっきり殴り飛ばした。その衝撃にギガリザードは一瞬ひるんだ。

セ「こうなったら、もう一度行きます！エクス・・・」
銀「えっ・・ちょっ・・・ちょっと・・・・セイバーさん？」
セ「カリバー！！」

セイバーの放った極太の巨大な金色の閃光が真っ直ぐ魔獣・ギガリザードとそれに向かった銀時に向かって放たれた。

銀「どわぁあああああ!!!」
ギガ「グオオオオオオーーーーッ!!」

金色の閃光はそのまま銀時もろともギガリザードを飲み込んだ。
ギガリザードは銀時もろとも吹き飛ばされる。
しかし、ギガリザードはセイバーのエクスカリバーをまともに食らってもいまだに生きていた。

セ「なッ!?」
土「あれを食らって・・・」
斉「まだ生きているだと!?」

そのとき今の一撃で崩れた瓦礫の中から黒焦げの銀時が這い出てきた。

銀「ッてコラァ!誰か俺の心配をしろぉ!!」
土・斉『何だ、テメェ（貴様）も生きていたのか。チッ・・・』
銀「舌打ちしてんじゃねぇー!!」

銀時が舌打ちした土方と斉藤に向かって怒鳴る。

セ「3人とも、揉めてる場合じゃないようですよ・・」
銀・土・斎「あん?」

セイバーがそういった。セイバーの指先を3人が見る。するとギガリザードが起き上がってきた。

銀「あのやろう・・」
斎「来るか？」

しかし、ギガリザードは銀時達のほうを向いていなかった。ギガリザードの視界の先には、プレシア達がいたのだ。そしてギガリザードは起き上がり走り出した。

セ「なッまさか！？」
銀「あのヤロー！プレシア達に標的を変えやがった！！」
フ「母さん！」
プ「フェイト！」

銀時達が今から向かってもとても間に合わず、フェイトとプレシアは悲痛な声を上げた。

ギガ「グオオオオオオオーーーーー！！！」

ギガリザードは爪を振りおろし、鮮血が飛び散る。

しかし、その血はプレシアのモノではなく、

ギガ「グオオ！？」

刀が右腕に刺さったギガリザードの血だった。
剣心が投げてたのである。
ギガリザードは痛みのあまり剣を落とす。

剣「お前の相手は拙者がする」

剣心は素早くギガリザードの正面に移動し、刀を腕から抜く

ギガ「グオオオオーーー！！」

ギガリザードは怒ったのか、剣心に向かって思いっきり巨大な腕を振り下ろしてきた。
しかし剣心は少しも慌てず、

剣「こうゆう相手にはこの技でござるな」

そう言って剣心は素早く刀を振った。

剣「飛天御剣流奥義、桜華百閃龍！！」

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！

剣心は気の力を込め、信じられないスピードで凄まじい剣撃を放ちギガリザードを吹き飛ばした。

ギガ「グオオオオオオオオオオ！！」

上空に吹き飛ばされたギガリザードは下へと落ちた。

剣心（これで終わったか…？）

剣心はそう思ったが

ギガ「グオオオオ…」

ギガリザードは尚も倒れず再び起き上がってこようとした。

剣心（まだ来るのか！？）

剣心は再び鋭い顔をして逆刃刀を構えた。

ギガリザード「グオオオオオオオオーーーッ！！！！」

ギガリザードは怒って再び剣心に突撃してきた・・・が！

ピシィ！

ギガ「グオ？」

なんとギガリザードのいた下の部分が崩れた。

ギガ「グオオオオオオーッ！！」

ギガリザードの重みに耐えられなかったのか地面は崩れてしまいギガリザードはディアルと同じように虚数空間へと落ちてしまった。

銀時「え？何？こんなんで終わり？」

銀時が思わずこの戦いの結末がこんな形で終わってしまったので思わずそんな風に言ってしまった。

剣心「まあ…なんにせよ…とりあえず一件落着でござるかな？」

剣心は安堵の息を吐いた。

フェイト達は唖然としていた。

銀時達は銀時達で唖然としていた。

第二十六訓　最終決戦の相手がラスボスとは限らない（後書き）

支配者「ハイ、今回の話しいかがでしたか？」

銀時「おい作者！俺たちが活躍してねーじゃねえかぁ！！」

支配者「そんなこと知りません」

土方「んだとぉ！」

支配者「ハイ、ではこんな奴ら無視してさっさと次回にいってください」

銀時・土方「無視すんなぁー！！」

第二十七訓　おかしなことは連続して起こったりする。（前書き）

支配者「いよいよクライマックスシーンに突入ですな」

銀時「結構かかったけどな」

神楽「かかったアルナ」

支配者「スイマセンね」

剣心「リリカル剣魂スペシャル第二十七話始まるでござるよ」

第二十七訓　おかしなことは連続して起こったりする。

剣心はプレシアに顔を向ける。

剣「そう言えばプレシア殿。まだ、フェイト殿の言葉に対しての答えを聞いていなかったな」

剣心の言葉でフェイト達はプレシアに顔を向ける。
そして再びフェイトは手を伸ばしプレシアに

フ「母さん・・一緒に帰ろう」

優しく微笑みながら言う。
フェイトの言葉に、笑顔に、プレシアは目を見開き涙が出そうになる。
フェイトは手を伸ばしたまま、プレシアの答を待つ。

プ「・・・・・」

プレシアは顔を俯いて、迷いを振り払おうとする。

プ「フェイト・・」

顔を上げてフェイトを見る。

プ「ごめんなさい」
フ「！」

プレシアは杖を掲げる。

剣「銀時！」

プレシアの考えに気付いた剣心は、銀時を呼びながら走り出す。

銀「分ってらぁ！」

剣心の意図に気付いた銀時も走り出した。

プレシアは掲げた杖を地面に叩いて、魔法陣を展開した。プレシアの足場が崩れていく。

フ「母さん！」

フェイトが叫んで走り出す。フェイトの横を銀時が通り過ぎた。

崩れた足場が、プレシアとアリシアを飲み込もうとした時、剣心がプレシアの手を掴んだ。

すぐ横にいる銀時もケースを両手で掴む。

フェイト・プレシア

『『剣心！！』』

プレシアとフェイトの声が重なった。

剣「なんとか間に合ったでござるな」

剣心は両膝を地面に着き、右手でプレシアの手を掴んでる。

プ「は・・離しなさい剣心！このままだと貴方まで・・！！」

プレシアは、剣心の手を離そうとする。

剣「プレシア殿・・お主、まだフェイト殿から逃げている事に気付かないのか？」
プ「え・・？」

プレシアの手の動きが止まる。

剣「フェイト殿が、本当はまだ自分を恐れているんじゃないかと・・自分が一緒にいたら、フェイト殿は幸せになれないと恐れて・・お主はフェイト殿から逃げているんだ」

剣心の後ろに立ってるフェイトとアルフと土方とセイバーと斉藤は黙って剣心の話しを聞いている。

剣「プレシア殿・・お主を助けるために、危険を覚悟でここまできたフェイト殿がお主を恐れてると思うのでござるか？自分の事を想ってくれる親がいて、他に何がいるんというんだ」

プレシアを真っ直ぐに見つめながら、剣心が言う。

剣「もう逃げる必要はないんだ！」

プレシアに向かって怒鳴る。
剣心の声に、プレシアは目を見開く。

剣「本当にフェイト殿の事を想っているなら、彼女の傍にいるべきなんだ」

剣心の言葉がプレシアの心に響く。

剣「その手で、その腕で、思いっきり抱きしめるべきなんだ！涙が出るくらいに強く抱きしめてやるんだ！」

剣心の叫び声が、最下層に響いた。

剣「この手は離さない」

プレシアの手を、更に強く握る。

剣「もう目の前で、大切なモノをなくさせはしない！」

プ「剣心・・」

必死に自分を助けようとする剣心を見つめる。

その時プレシアは、剣心の瞳に一瞬、悲しみの色が見えた気がした。

剣心がプレシアを引き上げようとした瞬間、地面に亀裂が入った。

ガラガラと音を立てて、剣心と銀時の足下が崩れる。

剣心・銀時

『『おろ（え）？』』

フェイトは目の前の光景が信じられなかった。フェイトの目の前で、剣心と銀時とプレシアが崩れていく足場に飲み込まれていく。

フ「剣心！！母さん！！」

ア「剣心！！」

フェイトとアルフが同時に走り出した。

土「万事屋ァァ！！」

セ「銀時ぃいい、剣心んん！！」

土方はクロノを置いて掛け出し、セイバーも掛け出す。
フェイトが落ちていく剣心に手を伸ばす。
だが、フェイトの手は虚しく空を掴み、剣心とプレシアと銀時とアリシアは虚数空間に落ちていく。
フェイト達は、ただその光景を見ている事しかできなかった。剣心と銀時とプレシアとアリシアは穴の中に消えていった。

ア「・・嘘だろ・・？」

アルフが震える声で小さく呟いた。

フ「・・母・・さん・・・剣心・・」

穴を見つめながら、フェイトが呟いた。

フ（嘘・・だよね。悪い夢・・だよね）

フェイトはその場に崩れ落ち、体を小刻みに震わせる。
フェイトはあまりにも目の前の現実を認める事ができなかった。
やった分りあえたかもしれない自分の母親と自分の大事な人が虚数空間に落ちて行った事に・・・

フェイトはショックのあまり気絶してしまう。

ア「フェイト！！」

アルフは倒れるフェイトの体を支える。

その時、アースラにいるエイミィから連絡が入る。

エ《みんな！庭園が崩壊するわ！急いで脱出して！！》

焦った声で脱出を求めた。

土「・・行くぞ。フェイト、アルフ、斉藤、セイバー」

斉「ああ・・・」

重い声で土方がクロノを担ぎながら四人に言った。

斉藤もうなずく。

ア「・・で・・でも・・剣心が・・・」

アルフは、今にも泣きそうな顔をしていた。

斉「アホゥ」

土「・・あいつらは、こんな事でくたばる奴等じゃねぇ」

そう言って斉藤と土方は、アルフを見ながら言う。

土「アイツを信じろ。信じて待ってろ」

斉「そういうことだ」

それだけ言って、土方と斉藤は振り返って歩き出した。

セ「私も、銀時と剣心を信じています」

セイバーも悲しそうな顔をしているが、その瞳は強く、銀時と剣心の無事を信じていた。

そして土方と斉藤の後に続く。

ア「フェイト・・」

アルフが心配そうに気絶しているフェイトを見た。
フェイトの手を強く握った。
アルフはフェイトを連れて走り出す。
崩壊する庭園の中、転移魔法を使い、アースラに帰還した。

アースラ。

「庭園崩壊終了。全て虚数空間に吸収されました」
「次元震停止します」
「断層発生ありません」
リ「了解」

局員の報告を聞いて、リンディは頷いた。
そしてアルフがフェイトを医務室に連れてった。
クロノは目覚めた後、事の次第を土方から聞かされた。

医務室。

新「ぎ・・銀さんと剣さんが！？」
シ「そんな・・・」

土方から話を聞いたクロノから、銀時とプレシアと剣心とアリシアの体が虚数空間に落ちた事を知らされた。新八と神楽とシャナとヤミとなのはとユーノは愕然とする。
なのはにしてみれば大好きな銀時が虚数空間に落ちた事についてはショックが大きかった。

ク「・・すまない」

クロノは頭を下げて、心からの謝罪をした。

な「何か助ける方法はないんですか！？」

僅かな可能性を求めて、なのはが声を上げて尋ねた。

ク「・・・方法は・・ない」

目を固く閉じ、拳を震わせながら、クロノは悔しそうに答えた。

な「そんな・・」

なのはは、表情を暗くした。
その時、神楽が立ち上がった。

神「銀ちゃんと剣ちゃんは絶対帰ってくるアル！」
な「神楽ちゃん」

全員の視線が、神楽に集まった。

シ「神楽の言う通りね」

ヤ「あの二人がそれ位の事で死ぬはずがありません」

二人の言葉を聞いた後、神楽は新八を見た。

神「新八！私達が信じないで、誰が銀ちゃん達を信じるアルか！？」

神楽の言葉を聞いて、新八の表情が変わる。

新「・・そうだよね。記憶を失った時も、どんなピンチだって切り抜けて、銀さんは僕達の所に帰ってきた！」

シ「剣心も、どんな絶望的な状況だって諦めないで切り抜けてきたんだし」

ヤ「そうです」

神「私達は信じて銀ちゃん達を待つネ！」

銀時と剣心を信じてる神楽、新八、シャナ、ヤミは、決して諦めなかった。

な「私も銀さんと剣心さんを信じます！」

ユ「僕も！」

なのはとユーノも声を上げた。

そんな新八達の様子を見て、クロノはため息をついた。

ク（まったく・・こんなに皆に信頼されて・・あの男達は幸せ者だな・・）

場の雰囲気が少し明るくなり、クロノも僅かだが希望を持つ。

ク（言いたい事は山ほどあるんだ。戻ってこなかったら承知しないぞ！）

病室

フェイトとアルフとセイバー、真選組が入っている。

フェイトの精神面と隊長を考えて独房行きはなく、拘束具も真選組が同室する事で付けられるなかった。

フェイトはさっき目覚めたが、やはりさっきの事がまだ信じられないでいた。

最初の時は「あれは、夢だよね？だってこれから剣心と一緒に母さんを助けに行くんでしょ？」っと、さっきの事が夢だと思いアルフに涙を流しながら必死に剣心達が虚数空間に落ちた事は夢だと聞いたが、

アルフとセイバーが説明し、やっとフェイトは現実だと理解した。

そしてフェイトはとめどなく涙を流した。

アルフはそんなフェイトを優しく抱きしめた。

真選組はそんなフェイトの痛々しい姿を悲しそうな目で見ていた。

そしてフェイトはあらかた落ち着いたが、ショックは大きく、俯いていた。

そんなフェイトにセイバーが声を掛けた。

セ「フェイト」

フェイトは潤んだ目でセイバーを見る。

セ「剣心達はまだ生きています」

フ「え！？」

セイバーの言葉にフェイトは驚きの顔をする。

それはアルフと真選組も同じだった。

山「どうしてセイバーさんにはそんなことが分るんですか？」

セ「銀時と私は魔力リンクで繋がっているんです。だから銀時が死んでいればそのリンクも切れますが、それは今もなおしっかりと繋がっています」

土「じゃあつまり」

土方がセイバーの言葉の意味を察する。

セ「銀時達は生きています」

二人の言葉を聞いて、フェイト達に僅かな希望が生れる。

そしてセイバーはしゃがんでフェイトと同じ目線になる。

セ「私達が信じていれば、きっと剣心達は帰ってきます。だからフェイトも信じてください」

セイバーは強い瞳を持って言う。その瞳には剣心達が無事に帰ってくるのを信じている事が良く分かる。

セイバーの言葉を皮切りに真選組もフェイトに声を掛ける。

近「元気出せ！お嬢ちゃん！万事屋と緋村の野郎は、そんな事でくたばるような男じゃない！きっとプレシアさんを連れて帰ってくるさ！！俺達が保証する！」

沖「旦那と剣心の旦那のしぶとさは、ゴキブリ並ですからねェ」

沖田も、いつもの軽い口調で言った。

斉「あのアホゥと緋村の悪運のよさは良く知っている。あれくらいで死ぬなど考えられん」

斉藤も煙草を吸いながらそう答える。

山「局長と隊長達の言うとおりだよフェイトちゃん」

山崎は微笑みながら言う。

フ「・・うん」

フェイトは小さく頷いた。

フェイト（剣心・・母さん・・・私、信じて待ってるから）

両手を胸に当てながら、フェイトは剣心達の無事を願い、信じて待つのだった。

「ん…」

坂田銀時は意識を取り戻した。

銀時が周りを見渡すと、倒れている剣心とプレシアとアリシアの体が入ったケースを見つけた。

銀「剣心！プレシア！！」

銀時はいそいで三人に駆け寄った。

剣「オロォ・・」

プ「ん・・」

三人は銀時の声で目を覚まし、銀時を見る。

銀「どうやら無事みてぇだな」

二人の命に別状がないことに銀時は安堵する。

剣「ああ、それにしても何でござるか？この黒い空間は？」

剣心の言葉で銀時とプレシアは当たりを見回し、銀時も改めて周りを見渡す。

その空間は何も無い真っ暗闇。だが明かりもないのに、自分達の姿だけ妙にハッキリと見える。

プ「ここは一体・・？」

プレシアは考えた。

剣「とりあえず、この状況をどうにかしないといかんな」

銀「俺、なんかこんな事前にもあった気がするんだけど・・」

剣「まさか、また変な仙人が出てきたりして・・・」

剣心がそんな不安を抱いた時、

ーーおお。これは驚きました。自力でこの空間に来るとはーー

どこからか、男の声が聞こえてきた。

全員

『『！！』』

すぐに三人は、周囲を警戒した。

周りには誰もいない。

ーーまぁ待って下さい。私は敵ではありませんーー

また男の声が聞こえる。

銀時「おい。コソコソ隠れてねーで、出て来たらどうだ？」

銀時と剣心は、互いに木刀と刀を持つ手に力を入れる。

プレシアも、杖を構えながら警戒を続ける。

ーー私なら、ここにいますよーー

銀「どこだよ？」

剣「誰もおらぬぞ」

銀時と剣心はキョロキョロと周りを見る。やはり誰もいない。

ーー今、貴方達がいるこの空間ですよーー

剣心・銀時・プレシア

『『え？』』

三人はポカンとなる。

互いに顔を見合わせる。それから顔を前に向ける。

プ「この空間が・・貴方？」

プレシアが戸惑いながら尋ねた。

ーーはい。申し遅れました。私は『アルハザード』と言いますーー

空間が自己紹介した。

銀時・剣心・プレシア
『『は？』』

三人は間抜けな声を出した。
しばし呆然となって、場が沈黙する。

ーーあの～ーー

沈黙に耐えられず、『アルハザード』を名乗る空間が三人に声をかける。
銀時と剣心の目が、カッと見開かれる。

銀時・剣心
『『アルハザードォォォォ！！？』』

ありったけの声で、二人は叫んだ。二人の声が空間に響いた。
プレシアも驚きを隠せないでいた。

プレシア「まさか・・ここが・・アルハザード・・・？」

プレシアは、再び周囲を見渡した。
自分達以外、誰もいない。何もない。ほとんど『無』に等しき空間。
ここが、自分が探し求めてた場所『アルハザード』。

銀時「嘘つくんじゃねェェ！こんな何もない真っ黒い空間がアルハザードだったらなァ、俺の家の押し入れもアルハザードだろうがァァァ！！」

剣心「全く何にもないでござるよここはぁあああ！！」

ーーちょっとォ！押し入れと一緒にしないでくださいよォ！ーー

銀時の言葉にアルハザードは怒る。

その時、

プ「ゲホッ・・！ゲホッ・・！ゴホッ・・！」

剣心の隣にいるプレシアが、急に咳込んだ。

銀時・剣心

『『プレシア（殿）！！』』

二人が駆け寄る。

剣心「大丈夫でござるかプレシア殿！？しっかりするでござるよ！」

剣心はプレシアの肩を抱きながら声をかけた。咳は激しくなり、最後には吐血をした。

プ「ハァ・・ハァ・・どうやら・・もう限界みたいね・・」

手に付着してる、自分の血を見ながらプレシアは呟いた。

剣「諦めるな！何か方法があるはずでござる！」

必死にプレシアを助ける方法を考える。

その時、

ーーあの〜ーー

アルハザードの声がした。

ーーそちらの男に、気を取られて気付かなかったんですが・・貴女は病気なんですか?ーー

プ「ええ・・不治の病よ・・・」

顔を上げながらプレシアは答えた。

プレシアの答を聞くと、アルハザードはしばし黙り込んだ。時折、う〜んと何か考え込んでいる声が聞こえた。

ーー・・わかりました。貴方達がここに来たのも何かの縁。すみません。その女性以外の人の名前は?ーー

銀「銀時。坂田銀時だ」

剣「拙者は緋村剣心でござる」

アルハザードに聞かれて、二人は名乗った。

ーー女性の方は?ーー

プ「プレシア。プレシア・テスタロッサよ」

プレシアも自己紹介をした。

ーーでは、坂田さん、緋村さん。テスタロッサさんから少し離れてくださいーー

剣「何するんでござるか？」

剣心は目を細めて空間を睨んだ。

ーーテスタロッサさんの体を調べます。大丈夫です。絶対に危害は加えないと約束しますーー

ハッキリとアルハザードが言った。

剣心はしばし考えた後、プレシアに顔を向けた。咳は収まったが、プレシアは苦しそうな顔をしている。

まだアルハザードの事を、完全に信用したわけではない。だが、他に方法はない。

剣「・・わかった。頼むでござる」

ーーはいーー

剣心の言葉に、アルハザードは力強く答えた。

剣心と銀時はプレシアから離れて様子を見る。

ーーでは、テスタロッサさん。そのまま動かないでくださいーー

プ「え・・ええ・・」

戸惑いながらも、プレシアはアルハザードの声に従った。

プレシアの足下に巨大な魔法陣が展開された。

ーーふむふむ・・・なるほどーー

魔法陣を展開してから、アルハザードはブツブツ呟く。プレシアの

体を調べているのだろう。
二人は静かに様子を見守り、プレシアも黙って座っている。
しばらくして、

ーーあ～はいはい。わかりましたーー

アルハザードの軽い声が響いた。

ーーじゃあ今から治しますんで、そのままじっとしてて下さいーー

プ「え？」

アルハザードの言葉に、プレシアはポカンとなる。
足下の魔法陣が少し強い輝きを放ったちプレシアを包む。時間にして二、三秒くらいか。輝きはおさまり、足下の魔法陣も消えた。

ーーオッケーですーー

アルハザードの声が聞こえるとプレシアの姿がはっきり見えてきた。

剣心・銀時
『『！？』』

二人は目の前の光景を見て目を丸くした。
なにせプレシアのいた場所になぜか黒髪の小さな少女がいて、プレシアの姿はなかった。
そしてその少女はプレシアを子供にしたような姿をしていた。そしてさっきまでプレシアが着ていた服をぶかぶかにして着ていた。

剣「銀時、拙者、目が可笑しくなってしまったようだ。プレシア殿

が子供になったように見えるんだが？」
銀時「剣心もか～。俺もプレシアが大人から子供にジョブチェンジしたように見えるわ」

二人は物前の光景を必死に否定する。
目の前の少女がぶかぶかになった服を引きずって銀時達に近づく。

少女「あ、あの、どうしたのあなたたち？な、なんだがあなたたちが大きく見えるんだけど・・・？」

少女は銀時達に声を掛けた。しかもその声は幼さがあるがプレシアの声にそっくりだった。
さらに自分の周りが変化したことに戸惑っていた。

銀「あの～おたくプレシアさんですよね？プレシアさんなんですよね？」
プ「そうよ。何当たり前の事を聞いているの？」
銀「じゃ～これ見てみろ」

銀時はどこから出したか分らないが、大きな鏡をプレシアの前に出す。

プ「！！？」

プレシアは鏡に写った自分の姿を見て目を丸くした。
そして自分の手をみたり、体を触ったりした後、

プ「えええええええええ！！？？何で私子供になってるのぉぉぉぉぉぉぉ！！？？」

ありえないとばかりに大声を上げて叫ぶ。

剣「アルハザード殿・・お主、病気を治したんじゃないのか？」

ーーいや～病気を治すついでにサービスで若返らそうとしたらやりすぎてしまいました。テヘッ♪ーー

銀「うぜぇぇぇぇ！！アルハザードうぜぇぇぇぇ！！めっちゃ腹立つんだけど！」

銀時は男声なのにテヘとかやられてかなりのウザさを覚える。

プ「ちょっと！早く戻して！！二十歳位に！」

銀「お前若返って嬉しいんだろ！」

ーーわかりました。すぐにすみますんで待って下さいーー

アルハザードがそう言うとプレシアの下に魔方陣が現れ、プレシアは光に2，3秒包まれると、元の大人の姿に戻っていた。

さらには肌も二十代位にツヤのある肌になり、しっかり若返っていた。

プレシアは自分の姿を確認した後、かなり嬉しいそうな顔をしていた。

女性にとって夢である若返りができたからである。

プ「それにしても・・信じられないわ。不治の病が治るなんて・・・！」

剣「拙者は若返った事も十分凄いと思うがな」

プレシアは改めて自分の体の調子を確認して体になんの異常も感じられない事に驚いていた。

ーーそちらの世界では、不治の病かもしれませんが、私にとってはそうではありません。あっ、ついでに病気で弱ってた体を回復させて、健康状態も良好にしときました。それなら別の病気にかかる心配はないでしょう。あ、後さっきも言ったようにサービスで若返らせときましたーー

と、軽い口調でアルハザードが説明した。
プレシアは、まだ信じられないと言った顔をして、自分の体を眺めてる。

銀「やるじゃねーかアルハザード！」
剣「ホントに凄いでござるな！」

ーーいや～それほどでもーー

二人の言葉にアルハザードは照れた。
その時、プレシアはある事をアルハザードに聞くことにした。

プ「あの・・アルハザードさん」

ーーあっ、呼び捨てで結構ですよーー

プ「じゃあ・・アルハザード・・・貴方に聞きたい事があるの」

ーー何ですか？ーー

そこでプレシアは一旦、言葉を止めて目を閉じた。深呼吸をして、

ゆっくりと目を開ける。

プ「貴方・・死者の蘇生は可能かしら？」

険しい表情でプレシアは尋ねた。

隣にいる銀時は少し驚いたが、口は挟まなかった。剣心はじっとプレシアを見ていた。

ーー死者の蘇生・・ですかーー

ポツリとアルハザードが呟いた。

プレシアは、手に汗を握りながら答えを待った。

そして、アルハザードはプレシアの問いに答える。

ーー申し訳ありませんが、いくら私の力でも死者の蘇生はできませんーー

プレシアは、アルハザードの答えを聞いて目を閉じた。

プ「そうよね・・無理よね・・・そんな方法があるはず無いわね・・・」

顔を俯いて呟いた。

ーー・・すみませんーー

本当に申し訳なさそうにアルハザードは謝った。

プレシアは顔を上げた。

プ「いいのよ、元々諦めていたことだから・・・」

――…すみませんーー

本当に申し訳なさそうにアルハザードは謝った。
プレシアは顔を上げた。

「いいえ。感謝しているわ。アルハザード」

――え？――

プレシアの言葉に、アルハザードはポカンとする。

プ「失ったモノは取り戻せない……そんな事はわかっていた事…なのに…私はそれを認めようとせず…逃げて…あの子を苦しめてしまった……」

プレシアは悲しい表情を浮かべた。
アルハザードと隣にいる銀時と剣心も、黙ってプレシアの話を聞いてる。

プ「でも…ようやく私は、今までの自分の殻を破って、新しい自分になる決意が出来たわ」

例え、アルハザードが死者の蘇生が可能だと答えたとしても、プレシアはソレを拒絶し、新しい自分になろうと考えていた。
そしてプレシアは、新しい自分になる決意をした。
隣にいる銀時は微笑んだ。

――なんか…よくわかりませんが。とりあえず、よかったのでしょうか？――

アルハザードは、いまいち話の内容がわからいでいた。

プ「ええ。それと、病気を治してくれてありがとう」

微笑みながらプレシアは礼を言った。

――いえいえーー

プレシアは銀時と剣心に振り返った。

「剣心、銀時。私はもう逃げないわ。ちゃんとフェイトと向き合って、二人で生きていくわ。アリシアの分まで」

銀時を真っ直ぐに見つめながら、プレシアが言った。その瞳には、今までのプレシアにはなかった、力強い意志が宿っていた。

銀「ああ」

剣「そうでござるか」

銀時は満足そうに微笑んだ。

プ「それじゃあ元の世界へ戻りましょう」

剣「プレシア殿」

プ「何かしら？」

プレシアは首を傾げた。

銀「どうやって戻るんだ？」

プ「あ…」

そうだ。自分達は虚数空間に落ちてここに来たのだ。一体どうやって戻る？また虚数空間に落ちるか？いや、そんな事をしたら今度こそ命はない。

――ご心配なく。私が皆さんを元の世界へお送りしますーー

三人の足下に魔法陣が展開された。

銀「悪ぃな」

剣「いろいろと世話になったでござる」

――いえいえ。あっ、ただし一つお願いがありますーー

銀・剣・プ「お願い？」

三人は首を傾げた。

――私の存在を外の世界に教えないでください。私の力を悪用しようとする者が、出てくるかもしれないのでーー

プ「ええ。わかったわ」

剣心「了解したでござるよ」

プレシアと剣心は頷いて答えた。

――貴方達だったら、いつでも歓迎しますけどね。まぁ何もない所ですがーー

「今度からキレイな姉ちゃん用意しときな」

笑みを浮かべながら銀時が言った。

――それは無理ですーー

銀「即答かよ」

そんな話をしてる内に魔法陣の光が強くなる。

そろそろお別れだ。

――それじゃあ皆さん、お元気でー、ーー

銀「ああ」

剣「世話になったでござるよ」

プ「ありがとう」

そして三人は光に包まれ、消えていった。

第二十七訓　おかしなことは連続して起こったりする。（後書き）

支配者「は～い、次回はいよいよ第一章最終回です」

銀時「楽しみに待ってろよ」

第二十八訓　実の親子の再会はやっぱり良いもんだ（前書き）

支配者「スイマセン。先走りしすぎて、前回最終回といってしまいました。実際はまだ続きます。」

銀時「ッたくどうしようもねえな、おめえは」

支配者「スイマセンね」

ヤミ「ではリリカル剣魂スペシャル第二十八話始まります」

第二十八訓　実の親子の再会はやっぱり良いもんだ

アースラ。
フェイト達が入ってる独房。
現在夜中の二時。
フェイトは眠れずにいた。真選組の三人とアルフは眠っている。
フ（母さん…剣心……）

両手を握って二人が帰ってくる事を祈る。
その時、フェイトの前で突然強い光が発せられた。

フ「！！」

あまりの眩しさに、フェイトは手で目を隠した。
やがて光がおさまり、フェイトは手をどけて前を見た。
ソレを見て、フェイトは目を大きく見開いた。

銀「どこだ、ここ？」
剣「薄暗いでござるな」
プ「どこかの部屋みたいだわ」

坂田銀時と緋村剣心とプレシア・テスタロッサが、フェイトの目の前にいた。

フ「母…さん…？剣…心？」
プ・剣「え？」

声に気付いて、プレシアと剣心は振り返った。
そこには、自分の愛する娘がいた。

プ「フェイト…」

プレシアは体が震えた。目から涙が零れる。

フ「母さん…」

フェイトがゆっくりと近づいてくる。

プ「フェイト！！」

プレシアは泣きながら、フェイトに抱き付いた。

フ「母さん！！」

フェイトも涙を流しながらプレシアを抱いた。

プ「フェイト……ごめんなさい…ごめんなさいフェイト！」

フ「ううん！母さん…母さんが生きててよかった！無事でよかった！」

プレシアとフェイトは涙を流しながら、離さないように互いの体を強く抱きしめた。

二人の様子を見つめながら、銀時と剣心は微笑んだ。

剣「よかったでござるな…プレシア殿、フェイト殿」

すると、近くで寝ていた近藤とセイバーが目を覚ました。

近藤「何だか騒がしいな…」

セ「どうしたんですか・・」

目を擦りながら体を起こす。
そして目の前の光景に驚く。

近藤「えっ!?万事屋!!?プレシアさん!!?」
セ「剣心!銀時!」

近藤とセイバーのデカい声が、独房に響いた。

銀「よォ。いい夢見たかいゴリラ?」
剣「ただいま戻ったでござるよ」

銀時と剣心とプレシアが虚数空間から生還した事実に、アースラ内の人達は全員度肝を抜いた。最初は幽霊だと騒いだ者もいたが、すぐに生きている生身の人間だとわかった。
銀時は新八や神楽やシャナやヤミに顔を見せた。その時、涙を流して叫びながら新八達は、銀時と剣心に殴りかかった。なのはは銀時に抱きついた。
その時の新八の銀時に対する嫉妬の目線が半端なく怖かった。

当然、クロノとかに問い詰められたり。

ク「一体どうやって虚数空間から戻ってきたんだ!?」
銀「海を漂ってたら、いつの間にか砂浜に着いてた感じ?」
ク「マジメに答えろ!!」
剣「あれでござるな。気が付いたらここにいたって言うか・・・」
ク「そんなはずあるか!!」

約束通り、銀時と剣心とプレシアはアルハザードの存在を誰にも話さなかった。

剣心と銀時は、また騒がしい日常に戻った。

翌日。
プレシアとフェイトはリンディに呼ばれてた。
部屋に入ると、リンディとクロノが待っていた。

リ「おはようございます。とりあえずお座り下さい」

リンディが椅子に座るように促した。
プレシアとフェイトは椅子に座った。

リ「それでは早速本題に入ります」

リンディは報告書を取り出た。

リ「フェイトさんは、本局の保護施設に移送する事になります。ただ、今回の事件の重要参考人なので暫くは事情聴取を受ける事にな

ります」

時折、紙に目を通してフェイトに説明した。

フ「あの…母さんは…？」

プレシアを心配そうに見ながらフェイトが尋ねた。

リ「…残念だけど、プレシアさんは管理法違反、しかも次元断層を引き起こそうとした張本人。私達も目をつむるワケにはいかないの」

険しい表情でリンディが語った。

フ「そんな…」

フェイトは表情を暗くする。

プ「大丈夫よフェイト。母さんは大丈夫だから」

プレシアは微笑みながら、優しくフェイトの頭を撫でた。

リ「じゃあクロノ。この報告書を提出して…」

リンディがクロノに報告書を渡そうとした時、

銀「異議あり！」

扉の向こうから、男の声が聞こえた。

全員が扉へ振り返った。直後、扉は勢いよく開かれ、スーツ姿の二人の男が中に入ってきた。

銀「いや～突然すいません」

男は、くいっと眼鏡を上げた。プレシアの横を通り過ぎて足を止める。

銀「私、急遽プレシア・テスタロッサの弁護をさせていただく…」

そこで男はプレシアとフェイトに振り返った。

銀「弁護士の坂田で～す。よろしくお願いしま～す」

ニヤリと笑みを浮かべるのは坂田銀時。

プ・フ「銀時！！？」

プレシアとフェイトの声が重なった。

銀「こちらは、助手の緋村君だ」

銀時は、となりにいるなぜかタキシードを着ていた剣心を紹介した。

剣「緋村でござる」

フェイト・プレシア

『『剣心！！？』』

二人はまた声を上げた。

ク「な…何のつもりだ！？」

クロノが二人に向かって叫んだ。

銀「先ほどのプレシア・テスタロッサの措置について異議がありましてねェ」

銀時は、不敵な笑みを浮かべる。

銀・剣「私は、プレシア・テスタロッサの無罪を主張します！！」

プレシア・テスタロッサの無罪を主張。

リンディとクロノの前で銀時と剣心はそう言い放った。

ク「ま・・また貴方達は無茶な事を・・！」

クロノが二人を睨みつけた。

リ「銀さん、剣心さん。いくら何でも今回ばかりは・・」

銀「報告書よこしなァ」

リンディが話してる途中で、銀時は報告書を取った。

ク「おい！勝手な事は許さんぞ！」

クロノが声を上げる。

だが、銀時と剣心は、クロノの声を可憐にスルーして報告書を見る。

プレシアとフェイトは、もう黙って成り行きを見守る事にした。こっちが何を言っても、おそらく二人は止まらない。今までの二人の行動でよくわかった。

銀「なるほどねぇ・・」

報告書を読み終わった銀時は、ため息をついた。

剣「思った通りでござるな」

隣にいる剣心もため息をついてる。

ク「い・・一体何なんだ？」

クロノが尋ねた。

二人は目を細めて、クロノ達を見た。

銀時「この報告書・・」

スッと報告書を前に突き出した。

銀「間違いだらけじゃねぇかァァァァ！！」

怒鳴りながら、報告書をデスクに叩きつけた。

リンディとクロノ、プレシアとフェイトは体をビクリと震わせた。

剣「全部書き直しでござるな」

ク「ちょっ・・ちょっと待て！書き直しってどういう事だ！？」

クロノが叫んだ。

銀時「だーかーらー、間違いだらけの報告書を書き直せって言ってんだよ」

銀時は、眼鏡をクイッと上げながら言った。

ク「どこも間違えてないぞ！」

クロノが反論する。

剣「じゃあ拙者達が間違いを指摘するでござる」

そう言って剣心は、報告書を開いた。

手には赤ペンを持ってる。

剣「『プレシア・テスタロッサはジュエルシードを使用して次元断層を引き起こそうとした』。ココが間違っている」

赤ペンで『×』を書きながら、剣心が言った。

ク「いや、間違ってないぞ！本人も認めてるんだ！」

クロノがデスクを叩きながら言った。

ここで銀時が手を挙げた。

銀「異議あり！どうせ不眠不休で相手を弱らせて、無理矢理、自供させたんだろ？そんな自供に証拠能力はありません」

ク「いや、昨日一回話を聞いただけなんだが・・」

クロノは顔をしかめた。

ここで剣心も口を開いた。

剣「次元断層が起きたのは事実でござる。だが、これがプレシア殿

本人が行った事ではなく、あのジュドと言う者の仕業である可能性がかなり高いでござる。それを踏まえればプレシア殿が本当にこの事件の主犯であるかどうか、甚だ疑問でござるな」

報告書を持った剣心は言った。

ク「疑問って・・プレシアが九つのジュエルシードを発動させて、次元断層が起こりそうになったんだぞ。貴方達も一緒に映像を見ただろ。それにそのジュドをプレシアが利用していた事や主犯はプレシアだと言う事も本人から話しは聞いている。」

クロノが負けじと反論した。

また銀時が手を挙げる。

銀時「異議あり！プレシアはそのジュドに脅されてジュエルシードを集めさせられていた可能性があります。ならば、むしろプレシアが被害者と言う事になります」

クロノ「いや、だからプレシア本人からそのジュドに協力をしてもらった上でジュエルシードを集めていたと本人から聞いていると言っているだろう！！この事件の主犯は間違いなくプレシアだ！」

確かに実際プレシアがジュドに協力を申し出たわけだから、計画を企てその上で事件を起こした主犯はやはりプレシアだと言う事はクロノ達もプレシアの証言で理解している。

プレシアも罪は償うべきだからと思ったからこそ主犯は自分であると証言したのである。

剣「異議ありでござる。そもそもプレシア殿がジュエルシードを集めてた目的は、危険なロストロギアを海鳴市から回収するためでござる。つまり善意でジュエルシードを集めていたのです。そしてジ

ェルシードを狙っていたジュドを監視するためにその者たちに協力を持ち掛けたのでござる」

プ「け・・剣心？」

プレシアが声をかける。

銀「つまりトロくて薄情でいい加減な組織、時空管理局の代わりに、テスタロッサ親子は必死になってジュエルシード集めていたってことですね」

銀時が剣心の後に続いて説明した。

そしてニヤリと憎たらしい笑みを浮かべる。

銀「むしろ～これは対応の遅れた、おたくら時空管理局に問題があるわけであり、プレシアとフェイトには何の罪もない」

クロノはグッと歯を食いしばり、リンディも険しい表情をする。銀時の言う通り管理局の対応が遅れたのは事実。

ク「だが・・次元断層が・・！」

クロノが反撃しようとするが、

銀「異議あり！あれは回収したジュエルシードが暴走した結果であり、プレシアに罪はない！」

剣心「そもそもジュエルシードを早く管理局が預かっていれば、あのような事にはならなかったとうワケでござるよ」

銀時と剣心は怯む事なくクロノに言った。

管理局の対応の遅かった点を攻める二人に、クロノはなかなか反論

できない。
そんな時、クロノはある事を思い出し、反撃に転じる。

ク「だが、時の庭園で映像はしっかりと保存してある。プレシアの局員に対しての攻撃を行為はどう説明する？」

クロノも意地とプライドを掛けて引き下がろうとはしなかった。
だが、剣心と銀時は怯まなかった。

剣「異議ありでござる！あれはプレシア殿が娘のアリシア殿を護るために行った行為！母が娘を護る行為を責める事は、誰にも出来ぬ！」
プ「剣心・・」

剣心の発言に、プレシアは思わず涙目になる。
銀時も剣心に続く。

銀「更に言えば、善意でジュエルシードを集めてたプレシアの城に、勝手に侵入した時空管理局の方が住居不法侵入罪です。むしろ犯罪者は時空管理局のほうですね～」

ニヤリと憎たらしい笑みを扇子の後ろから見せる銀時。

ク「う・・・」

銀時と剣心の主張に、リンディの顔は険しくなる。
リンディの隣に立ってるクロノは苦い顔をしている。ダメだ。僕らじゃこの二人は止められない。この二人に勝てない。

銀「おや？どしたのかなクロノ君？リンディさん？」

剣「まさか証拠もなく、プレシア殿を犯罪者にしたのでござるか？これは冤罪事件でござるな」

銀時と剣心が口元を歪める。

リンディとクロノは、返せる言葉がなかった。

時の庭園は崩壊して、証拠と呼べる証拠はない。

リンディは眉間にシワを作って考えた。部屋が静寂に包まれる。

しばらくして、リンディはため息をついた。

リン「・・・わかりました。報告書を書き直し、プレシア女史をフェイトさんと同じく、管理局で保護します。そしてジュドとその手下数名が今回の事件の主犯とします」

ついにリンディが折れて、プレシアもフェイトと一緒に管理局に保護される事になった。

いつもなら、ここでクロノがリンディに叫ぶのだが、今回はなかった。クロノは疲れ切った顔をしている。

ク（きっと向こうで裁判をしても・・この二人に勝てる検事はいないだろうな・・・）

なんて事を考えながら、クロノはため息をついた。

フェイト「それじゃあ・・私と母さんは・・・無罪ってこと・・・？」

フェイトは身を乗り出す。

リ「ええ、これから二人は一緒に暮らす事になります」

リンディはフェイトに言った。

フ『母さん！』

すぐにフェイトは、プレシアに顔を向ける。

プ「フェイト！！」

プレシアも笑顔でフェイトを見る。

そんな二人の様子を見て、リンディはため息をつきながら微笑んだ。

リ「ま・・これはこれで、よかったのかもしれないわね」

リンディは席を立った。

ク「まったく・・貴方は本当に・・・」

クロノは頭を抱えた。

銀「まぁまぁ。あんまり真面目すぎると、背が伸びねーぞ」

ク「背は関係ない！！」

今までで一番大きな声で、クロノが叫んだ。

フ「剣心！」

フェイトが剣心を呼んだ。

剣「おろ？」

振り返ってフェイトを見る。

フ「ありがとう」

笑顔でフェイトは、剣心に礼を言った。

剣「母親は大事にするでござるよ」

そう言って剣心は部屋を出た。

フ「銀時もありがとう」

フェイトは銀時にもは笑顔でお礼を言った。

銀時「母ちゃんに親孝行してやれよ」

銀時も部屋を出た。

リ「じゃあクロノ。悪いけど報告書の書き直し、お願いね」

ク「はい」

クロノは仕方なく報告書を受け取った。

第二十八訓　実の親子の再会はやっぱり良いもんだ（後書き）

支配者「次こそが本当に第一章最終回です」

剣心「楽しみに待っていて欲しいでござるよ」

第二十九訓　別れもいつも突然に（前書き）

支配者「は～い、今回は第一章最終回です」

銀時「長かったな」

剣心「長かったでござるな」

支配者「第二章の軽い予告もありますよ」

なのは・フェイト「リリカル剣魂スペシャル第二十九話始まります」

第二十九訓　別れもいつも突然に

ここは海鳴温泉。
旅館の宴会場に銀時達はいた。
プレシアも無罪となり、事件が無事解決した事を祝うために海鳴温泉で宴会を開く事になったのだ。
宴会場には、銀時、剣心、新八、神楽、セイバー、シャナ、ヤミの万事屋メンバーと、近藤、土方、沖田、斉藤、山崎の真選組の五人もいた。
もちろん、フェイト、プレシア、アルフもいる。
なのはとユーノも。
リンディも、クロノとエイミィも、アースラに乗ってた局員達もいる。
とにかくみんな、いた。
近藤がビールの入ったコップを片手に立ち上がり、宴会場を見渡した。

近藤「えー、皆さんの協力のおかげで無事、事件を解決する事ができました。今日は思う存分飲んで騒いで、疲れを癒してくれ。そしてパーッとはっちゃけてくれ」

そう言って近藤は、コップを上に掲げた。全裸で。

エイミィ・アルフ
『『きゃぁぁぁぁぁ！！／／／／』』

エイミィとアルフは顔を赤くして両手で目を隠し、剣心がフェイト、新八がなのはに手で目隠しをしていた。

山崎「局長ーーーーー！！あんた何やってんですかぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
土方「あんたはっちゃけすぎだろ！」
斉藤「ハア・・・・・・」

山崎は全力で叫んでツッコミ、土方と斉藤は呆れていた。

近藤「みんな、今までおつかれやしたー！！」

男性人（土方・銀時・剣心・斉藤・新八・山崎・クロノ以外）
『『おつかれやしたー！！』』

近藤の声の後、なぜか土方、銀時、剣心、斉藤、新八、山崎、クロノ以外の男性陣が乾杯した。

銀時・シャナ「お前は子供に、何卑猥な物見せてんだぁぁぁぁぁ！！」

ドカッ！

近藤「あんぎゃああ！！！！」

銀時とシャナは近藤のち〇こに飛び蹴りを食らわせた。
近藤はこの世の終わりのような叫び声を上げて障子を突き破り外までぶっ飛んだ。

ヤミ「斬ります」

ヤミは手を刃に変える。

近藤「やめてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

近藤はち〇こ隠しながら走って奥の部屋に逃げた。
その様子をリンディとプレシアとクロノとユーノは苦笑していた。
クロノは咳払いする。

ク「コホン。とりあえず、僕が仕切りなおそう。皆、今日は思う存分楽しんでくれ」

そう言ってクロノは、コップを上に掲げた。

銀「何でお前が仕切ってんだよ？」

酒を一口飲みながら銀時は呟いた。

神「うぉおお！ご馳走食べ放題アル！」
セ「本当です！食べ放題ですね！！」

神楽とセイバーはテーブルの上に並べられてる料理を片っ端から食べ始めた。
他のみんなもワイワイ騒ぎながら酒を飲んだり、料理を食べたりしてる。
沖田は、ユーノに絡んでいた。

沖「よォ、むっつりスケベ。今日はフェレット姿で女湯に入らねぇのかィ？」

酒を飲んで酔っているのか、沖田の顔は少し赤かった。

ユ「だからアレは誤解ですってば！」

ユーノは必死で沖田に訴えた。

土方はクロノの隣で酒を飲んでいた。

ク「土方さん。斉藤さん。お疲れ様です」

土「オメーもな。野郎共に振り回されて大変だったろ」

斉「まあ、奴ら相手では無理もない」

ク「ええ…まぁ」

クロノは苦笑いをした。

土「まぁ今日は飲もうや。愚痴を肴にしてな」

そう言って土方はクロノのコップにコーラを注いだ。その後、自分のコップにも酒を注いだ。

斉藤も酒を飲んでいた。

フェイトは、剣心とプレシア、アルフと一緒に料理を食べていた。

シャナは手にジュースの入ったグラスを持ちながら、剣心の背中に寄り掛かってジュースを飲みながら本を読んでいたヤミに近づく。

シ「ヤミは皆と一緒に飲まないの？」

ヤミ「私は騒がしいのはまだ苦手なので」

シ「・・・そう」

シャナはなんだか寂しそうに答えた。

な「フェイトちゃん」

そこへ、なのはがやってきた。

フ「あ…」

呼ばれてフェイトは、なのはへ顔を向けた。

な「一緒にいいかな？」

フ「う…うん」

フェイトは少し戸惑った顔をする。なのははフェイトの隣に座った。

な「私ね、フェイトちゃんに伝えたい事があるんだ」

フ「え？」

フェイトが少し驚いた顔をする。

フ「私、フェイトちゃんと友達になりたいんだ」

優しく微笑みながら、なのはは想いを伝えた。

フ「……あ…あのね…私…アルフ以外にちゃんとした友達とか出来た事ないから……どうすればいいのかよく分からなくて……」

胸に手を当てて、フェイトは戸惑う。

な「簡単だよ。友達になる方法…すっごく簡単」

なのはの言葉にフェイトは首を傾げる。

な「名前を呼んで」

フ「名前？」

な「うん。君とか貴女とかじゃなくて、その人の名前を呼んであげて。全部そこから始まっていくから」

優しく微笑んでるなのはを、フェイトは見つめる。

フ「……なの…は」

目の前にいる少女の名前を呼ぶ。

な「うん」

なのはは頷く。

フ「なのは…」

もう一度名前を呼ぶ。

な「うん」

なのはは頷く。

フ「もう私とフェイトちゃんは友達だよ」

笑顔でなのはが言う。

フェイトは少し照れた顔をする。それからフェイトは優しく微笑んだ。

フ「ありがとう、なのは」

ハッキリと、なのはの名前を呼んだ。

それを聞いたなのはは、嬉しそうな笑顔で頷いた。

な「うん！」

それから二人は笑顔で互いの手を握った。

互いが離れないように強く。

二人の様子を銀時と剣心は微笑みながら、プレシアは涙目で微笑みながら見つめた。
すると、
ア「ひっぐ……えぐ……」
プレシアの隣でアルフが泣いていた。

剣「アルフどの？」
銀「何泣いてんのお前？」
ア「だってさ…なのはってばスゴく優しい子だし……フェイトも嬉しそうに笑ってるし……」
涙を流しながらアルフが言う。プレシアが涙を拭いてあげた。

銀「そうだよな」
剣「そうでござるな」

微笑みながら銀時と剣心は、酒を一口飲んだ。
いい感じになってるフェイト達だったが、この雰囲気をブチ壊す人物が現れた。

近「よーし！次はカラオケいってみようかァ！！」

いつの間にか起き上がってきていた近藤が叫びながらカラオケセットを用意した。

近「じゃあまずは新八君から！」
新「ええっ！？ぼ、僕ですか！？」

いきなり近藤に指名されて、新八は戸惑った。

近「さぁ早く早く！」

近藤はマイクを新八に持たせた。

新「わ…わかりました」

マイクを片手に新八は立ち上がった。

銀時と剣心と神楽とシャナとヤミとセイバーは危険を察知した。

銀「フェイト、なのは、プレシア、アルフ。お前ら耳を塞げ」

フ・な・プ・ア

「え？」

銀時の言葉にみんな戸惑った。

剣「いいから早く耳を塞ぐでござるよ」

セ「早くしてください」

シ「取り返しが付かなくなるわよ」

そう言いながら剣心とセイバーとシャナは、自分の耳を手で塞いだ。

フ「なのは、母さん、アルフ。剣心の言う通りにしよう」

フェイトは耳を塞いだ。

プ「し…仕方ないわね」

プレシアも耳を塞いだ。

なのはとアルフも耳を塞いだ。

新「一番。志村新八。よろしくお願いします」

マイクを構える。

曲が流れ始めた。曲は寺門通の『お前の母ちゃん○人だ?』。

何でこの曲が『リリカルなのは』の世界にあるの?というツッコミはナシでお願いします。

新八は大きく息を吸い込み、

新「お前ェそれでも人間かァ!!お前の母ちゃん○人だァア!!」

新八の音痴が宴会場に響いた。

新八以外の全員が耳を塞ぐ。

新「いい加減にしねぇと!」

新八は一人歌い続ける。

プ「ちょ…ちょっと!何なのよコレ!?」

耳を塞いだままプレシアが叫んだ。

銀・剣「新八（新八殿）は音痴なんだよ（でござるよ）」

短く銀時と剣心は答えた。

プ「音痴って…!こんな酷い歌聞いた事ないわよ!!ほとんど騒音じゃない!!」

銀「それよりも厄介なのはなァ、新八本人が音痴であることを自覚してない事だ」

剣「そうなんでござるよ・・全くと言って良いほどに」
プ「えっ!!?」

プレシアは驚愕の表情を浮かべた。

ア「こんなに酷い歌で自覚なし!?どうなってんだいあの子は!?」

苦痛の表情でアルフが叫んだ。
新八は気持ちよさそうに歌ってる。

シ「あーもー!この音痴眼鏡!!いい加減にしないと・・・」

ブチッ!!

銀・剣・神・シ・ヤ・セ・真選組
『ブチ?』

その時、銀時達は、ブチッと何かが切れる音が聞こえた気がした。
一人の少女がゆっくりと立ち上がった。顔を俯いたまま新八に向かって歩いていく。

フ「な…なのは?」

フェイトは少女の名を呼んだ。だが、なのははフェイトには反応せずに新八に近寄った。
新八はまだ熱唱している。
なのははバシッとマイクを叩き落とした。

新「な…なのはちゃん!?」

なのはに気付いた新八が叫んだ。

な「新八さん…」

なのはは手にレイジングハートを構えた。

な「少し…頭冷やそうか……」

冷たい目で新八を見つめる。

新「え？」

新八は冷汗を流した。

な「スターライト・ブレイカー！！！」

新「ぎゃぁあああ！！！」

新八は桜色の閃光に飲み込まれた。

宴会場がシーンと静かになった。黒焦げになった新八は、バタリと倒れた。

この事件が『白い悪魔』誕生のキッカケになったとかそうじゃないとか。

この後にもいろいろ騒ぎが起こるのであった。

土「もう我慢できないでござる！！」

急に誰かが立ち上がった。
その人物とは。

ク「ひ…土方さん！？」
斉「お・・おい、まさか・・・」

隣に座ってるクロノと斉藤はビックリした。
銀時と剣心は片眉を上げた。

ござる？まさか……

銀時と剣心はイヤな予感がした。

土「フェイトちゃぁあん！！」

土方はフェイトに向かって走り出した。

フ「えっ！？」

フェイトは怯えて体を震わせた。

土「ぼぼ、僕と握手して下さい！それとサインをぉおおお！！」

興奮しながらフェイトに迫る土方。

プ・ア「フェイト！！」

プレシアとアルフがフェイトを護ろうとした時、

銀・剣「トッシーィイイイ！！！」

叫びながら銀時と剣心は、土方…いや、トッシーにドロップキックを食らわせた。

ヘタレたオタク、トッシー出現。

ト「ぶはぁあ！！」

トッシーは床に倒れた。

ト「な…何をするんだ坂田氏、緋村氏！？」

銀「汚ぇ手でフェイトに触ろうとすんじゃねェエエ！！」

剣「そうでござるよ！このバカモノ！！」

銀時と剣心はトッシーに鉄拳制裁を加えた。

しばらくして『トッシー』から『土方』に戻り、銀時、剣心と喧嘩になった。

斉藤は隣で呆れかえっていた。

その時、フェイトとなのははニコニコ笑いながら、白いご飯に小豆

を乗せている。

プ「フェイトォ！？」

プレシアは、顔を引きつらせながら叫んだ。

フ「宇治銀時丼って言って、凄く美味しいんだよ」

な「うん♪とっても」

そう言ってフェイトとなのはは、美味しそうに宇治銀時丼を食べ始めた。

プ「宇治銀時丼って……まさか！」

プレシアは銀時達の方を向いた。銀時とシャナとセイバーとヤミも白いご飯に小豆を乗せていた。

プ「貴方達、フェイト達に何てモノ教えてるのよ！！？」

銀・シ『え？何って宇治銀時丼だけど？』

銀時とシャナは首を傾げた。

プレシアはアルフの胸倉を掴んだ。

プ「アルフ！貴女がついていながら！！」

ア「あたしも、まさかフェイトがアレを気に入るとは思わなかったんだよ～！！」

顔を横に振りながら、アルフが言った。

銀時の前に、リンディがやってきた。

リ「あら、銀さん。何を食べてるんですか？」
銀「宇治銀時丼だ。食うか？」

銀時は宇治銀時丼を差し出した。

リ「いただくわ」

リンディは箸で宇治銀時丼を摘み、口の中に運んだ。

リ「う～ん。なかなか美味しいわね。ご飯に小豆を乗せるなんて、さすが銀さん！発想が違うわ！」
銀「おっ、おめえも気に入ったか？」
リ「ええ」

リンディは宇治銀時丼を気に入った。
プレシアとアルフついでに剣心は呆然となって、その様子を見ていた。
一方、フェイトとなのはは。

な「おいしいねフェイトちゃん♪」
フ「うん♪」

一緒に仲良く宇治銀時丼を食べていた。

まぁそんな騒がしい宴会にも終わりはやってくる。みんな酒を飲んで騒いで疲れ切って眠っている。起きている者もいた。
剣心は宴会場の入口に一人座ってる。
するとフェイトがやってきた。

剣「おや、どうしたでござるフェイト殿？」

フ「ちょっと、お手洗いに行ってくるね」

そう言ってフェイトは宴会場を出た。

剣心は、フェイトの背中に声をかけた。

剣「フェイト殿」

フ「何？剣心」

フェイトは足を止めて、振り返った。

剣「楽しかったでござるか？」

フ「うん！」

フェイトは笑顔で頷いた。また歩き出して角を曲がって剣心の視界から消えた。

そのあと一人になった剣心はため息をつきながら考えた。

プレシアも無事で、事件が解決したのはよかった。だが、肝心の元の世界に帰る方法はまだ見つかってない。

どうしたものかと剣心が思った時、目の前に小さな光が現れた。

剣「ん？」

目を細めて光を見る。

やがて光が消えてある物が床にあった。黒くて長方形の形をした物。

剣「これは…無線機でござるか？」

剣心がそう呟いた直後、

「銀の字！剣の字！応答願います！」

「銀さ～ん、剣さ～ん。いる～？」
「お～い、誰か応答しろ～」

無線機から声が発せられた。しかも聞き覚えのある声。

源「こちら源外だ！応答願います！」
ラ「お～い、誰か、いないの～？」
ナギ「誰でも良いから返事しろ～」

剣心はすぐに無線機を拾った。

剣「源外殿！ララ殿！ナギ殿！」
源「おお、剣の字無事か！？」
剣「無事か？ではござらんよ！」

怒鳴る剣心の真横に急に人影が現れた。

銀「テメーらのせいで俺達は大変な目にあったんだぞ！」
剣「ドワアアア！？銀時、おきてたんでござるか！？」
銀「ん？まーな」

いつの間にかおきていた銀時は無線機に向かって怒鳴った。

源「すまなかったな銀の字。後でちゃんと謝るから勘弁してくれ。ところで他の連中はどうした？」
ラ「そーそー、シャナちゃんたちは？」
銀「すぐそばにいる」

眠ってる新八達を見ながら答えた。

源「よし。今すぐ起こして全員一カ所に集まれ。すぐにこっちに戻す！」
銀・剣「え？」

『すぐに』、という言葉に銀時と剣心は眉を寄せた。

源「お前らを送った事で装置が故障してな。さっき、やっと装置の修理を終えたばかりなんだ。だが急いで直したもんだから、また何時故障するかわからん。だから急いで全員をここに呼んでこい」
ラ「そーだよ、早くしないとマジで帰ってこられなくなるかも」

少し焦った感じで源外とララが説明した。
元の世界へ帰れるのは嬉しいが、まさかこんな急に帰る事になるとは。

銀「…わかった。あと真選組の五人もいるから」
源「真選組？ああ～そういえばナギの譲ちゃんが送り込んだんだったな・・・」
ナギ「あれ、そうだったか？」
銀「そうだったか、じゃねえだろ」

無線機から源外とナギのすっかり忘れていたという感じの声が聞こえた。
そして、銀時がナギに突っ込んだ。

銀「とにかく連中も一緒に連れていくから、じーさんとララとナギは装置を動かしたらどっかに隠れてろ」
剣「そうでござる、見つかったら大問題でござるよ」

銀時と剣心はそう言った。

源外は前に、カラクリ軍団を使って将軍の首を狙った事で指名手配されているのだ。
それにララもデビルーク星の皇女、犯罪者である源外と一緒にいるところを見られてはまずい。
ナギに至っては幕府に顔が聞く立場ではあるが、犯罪者である源外と一緒にいたらまずい。

ナギ「確かに見つかったらちょっと面倒だな」
源「しょうがねーなぁ。わかった。そいつらも起こして連れてこい」
ラ「早くしてね」
銀「悪ぃな」
剣「スマンでござる」

無線機を片手に銀時と剣心は立ち上がった。
新八達を起こそうと振り返った時、

「帰っちゃうの？」

後ろから声が聞こえた。
銀時と剣心は声がした方を向いた。
そこには、表情を暗くしたフェイトとなのはが立っていた。

フ「剣心…」
剣「フェイト殿…」
な「銀さん…」
銀「なのは…」

本来、出逢うはずの無かった四人。その四人に別れの時がきた。

旅館の廊下で互いを見合う剣心とフェイト、銀時となのは。窓から差し込んでくる月明りが、四人の姿を照らす。

フ「…帰っちゃうんだね。剣心」

な「銀さんも・・・」

フェイトとなのはは、寂しい表情を浮かべる。

剣「スマンでござるな、フェイト殿。こればかりは・・」

銀「悪ぃななのは。急に帰る事になっちまった」

頭を掻きながら剣心と銀時が謝る。

フェイトとなのははは首を横に振る。
フ「謝らないで剣心。よかったね」
な「銀さんも帰れることになってよかったですね」
悲しい気持ちを無理矢理抑えて、フェイトとなのははは笑顔を作った。
それを見た剣心と銀時はため息をついた。
剣「フェイト殿そんなに悲しい顔をする者ではないでござるよ」
銀「なのはもだ。これが今生の別れになるわけじゃねーんだからよ」
剣心はフェイトに無線機を渡した。
フ「剣心？」
な「これは？」
剣「これは特殊な無線機でござる」
銀「これをやるよ。コレで源外ってじーさんに連絡すれば、俺達の世界に来れる」
そう言って銀時と剣心は新八達を起こしにいった。
フェイトは銀時から渡された無線機を、ギュッと握り締めた。
なのはもその横で無線機を見つめていた。

みんなを起こさないように、銀時と剣心は新八達を起こして事情を説明した。
土「元の世界に帰れるのか？」
斉「本当なんだろうな？」
目を鋭くしながら土方と斉藤が尋ねた。
銀「ああ」
剣「おそらくだが・・」
銀時と剣心は頷く。
近「まぁ他に方法はないんだ。信じてみよう」
山「そうですね、当てもないし」
近藤と山崎もそう言った。

隣で沖田は眠そうに欠伸をかいてる。
フェイトとなのはが剣心に歩み寄った。
フ「剣心。みんなは起こさなくていいの？」
な「そうですよ・・ちゃんと皆と一緒にお別れが言いたいのに・・・」
剣「うむ。だが・・・大勢で見送りされると、皆が泣いてしまうかもしれぬ」
銀「そういうこったな」
そう言って剣心と銀時は新八と神楽とセイバーとシャナとヤミを見た。
五人は寂しそうな表情を浮かべていた。だが、剣心と銀時の言葉を聞いて五人ともムッとした顔になる。
新「僕ら子供じゃないんですから、泣きませんよ！」
神「馬鹿にするなヨ！」
セ「そうです！どうして騎士である私が泣くんですか！！」
シ「こんなことくらいで泣いたりするわけないでしょ！ふんっ！！」
ヤ「バカにしないでください」
銀時と剣心に向かって叫んだ。
剣心は軽く微笑み、銀時は、はいはいと軽く手を振って答えた。それからまたフェイトとなのはに向き直った。
銀「オメーらから皆に、世話になったなって伝えてくんねーか？」
剣「よろしく頼むでござるよ、フェイト殿」
フ「うん」
な「分かりました」
フェイトとなのはは頷いて答えた。
その時、
「剣心？」
フェイトの後ろから声が聞こえた。
見ると、さっきまで眠っていたはずのアルフが立っていた。
フ・剣「アルフ（殿）」

銀「起きちまったのか」
銀時はメンドくさそうに頭を掻いた。
ア「フェイト。剣心達……どうしたんだい？」
不安がこもった声でアルフは尋ねた。
フ「…帰るんだって…元の世界へ」
ア「えっ！？」
アルフは驚いて目を見開いた。
ア「そんな…！何で急に……もう少しいてもいいじゃないか！」
剣心の肩を掴んでアルフが叫んだ。
剣「すまぬなアルフ殿。今帰らないと、次はいつ帰れるかわからぬのでござるよ」
アルフは我慢できずに、涙を流して泣き出した。
ア「そんな・・寂しいじゃないかぁ……剣心ん……！」
泣きながら剣心に抱き付く。肩を震わせながら涙を流す。狼の耳も元気なく、ペタンと倒れている。
そんなアルフの姿を見て、銀時はため息をついた。
剣「フェイト殿にも言ったが、別にこれで二度と会えなくなるワケではないのでござる。そう悲しまないでくれぬかアルフ殿？」
アルフの肩に手を置きながら剣心が言った。
アルフは嗚咽をもらしながら顔を上げた。
ア「ほ…本当かい…？」
剣「ああ」
剣心は優しくアルフの頭を撫でた。
アルフは腕で涙を拭いた。
ア「…わかった。絶対にまた会おうね、剣心、シャナ、ヤミ」
剣「ああ」
シ「ええ」
ヤ「ハイ」
微笑みながらアルフに答えた。
ア「銀時達もね」

銀「ああ」
神「また絶対遊びに来るアル！」
新「ハイ」
セ「騎士の名にかけて約束しますよ」
銀時達も笑って答える。
その時、剣心と銀時は窓の外を眺めた。
剣「そういえば、お主らと初めて会った夜も、こんな感じでござったな」
銀「そうだな。こんなきれいな満月の夜だったぜ」
夜空に輝く月を眺めながら剣心と銀時は呟いた。
フェイトとアルフも月を眺めた。いろんな事があった。最初は敵と勘違いして戦って、誤解が解けて一緒に暮らす事になった。ご飯の事で怒られたり、ジュエルシード集めを手伝ってくれたり、剣心が料理を作ってくれたり、一緒に寝たりした。
なのはの場合は銀時たちに怪物や怪人に襲われたところを助けられ、そして一緒にジュエルシード集めを手伝ってもらった。
なのはとフェイトの脳裏に今までの出来事が、頭に思い浮かぶ。苦しい事もあったけど、剣心達や銀時達がいて本当に楽しかった。
近「おお、そうだ！」
突然、近藤が声を上げた。
近「せっかくだから、ちゃんと俺達の自己紹介をしないか？」
新「そういえば…僕らフェイトちゃん達にちゃんとした自己紹介してませんでしたね」
シ「私たちもちゃんとなのはに自己紹介してなかったわよね」
近藤の言葉に新八とシャナは頷いた。
近「そうだろ？じゃあまずは俺達、真選組からだ！」
近藤がコホンと咳をする。
近「真選組局長、近藤勲だ！」
力強い声で近藤が名乗った。
土「…真選組副長、土方十四郎だ」

煙草をくわえながら土方は、クールに名乗った。
沖「真選組一番隊隊長、沖田総悟。でも明日には副長になってまさァ」
土「テメーはホント、いい加減にしろよ総悟」
副長の座を狙う沖田を、土方は睨みつける。
斎「…真選組三番隊隊長、斉藤一だ」
斉藤も煙草を加えながらクールに答えた。
山「え～と・・・真選組の会計係兼密偵の山崎退です」
山崎も地味に答える。
新「万事屋で働いてる、志村新八です」
新八が自己紹介した。
神「万事屋の神楽アル！」
神楽は元気よく自己紹介した。
セ「銀時のサーヴァントのセイバーです」
セイバーも自己紹介した。
シ「万事屋のシャナよ」
シャナも自己紹介した。
ヤ「万事屋のヤミです」
ヤミも普通に自己紹介した。
「そして俺はご存知。万事屋、坂田銀時だ」
銀時も自己紹介した。
「最後は拙者でござるな。万事屋の緋村剣心でござる」
最後に剣心も自己紹介した。
「私はフェイト。フェイト・テスタロッサ」
笑顔でフェイトは自己紹介した。
な「私は高町なのはです」
なのはも笑顔で元気に挨拶した。
ア「あたしはフェイトの使い魔のアルフ！」
神楽に負けじと、アルフも元気に自己紹介した。
互いに自己紹介が終わり、別れの挨拶に移る。

まずは真選組の五人から。
近「元気でな！フェイトちゃん！なのはちゃん！アルフ！」
土「…じゃあな。フェイト。なのは。アルフ」
沖「フェイトとなのはとアルフも、一緒に土方さんを殺りませんかィ？」
土「斬るぞテメェエエ！！」
斎「もっといってやれ、沖田」
山「ッて！斉藤隊長も副長を煽るようなこと言わないでくださいよぉおおお！！」
土方と沖田の喧嘩が始まった。近藤は必死に二人を止めようとする。
山崎も斉藤に対して叫んだ。
次は万事屋。
新「元気でね。何かあったらいつでも万事屋に来てね。なのはちゃん、フェイトちゃん、アルフさん」
神「なのは、フェイト、アルフ。コレお近づきの印にあげるアル」
そう言って神楽は、なのはとフェイトとアルフに酢昆布を渡した。
フ・な「ありがとう」
受け取りながら、フェイトとなのはとアルフは礼を言った。
シ「元気でね。フェイト、なのは、アルフ」
セ「これからも皆で仲良くしてくださいね」
ヤ「お母さんや家族の方々にもよろしく言っておいてください」
フ「うん」
な「ありがとう」
それからフェイトとなのはは真選組の五人を見回した。
フ「近藤…土方…沖田…斉藤…山崎…」
フェイトの目に涙が浮かんでくる。
次に万事屋の六人を見回した。
フ「シャナ…ヤミ…セイバー…新八……か…神楽…ぎ…銀時…」
泣きながら新八達の名前を呼び、最後に剣心を見た。
フ「…剣心……」

剣心の名前を呼んで、フェイトは顔を俯いた。
涙がポロポロと床に落ちていく。
剣「元気で。フェイト殿」
剣心は優しく微笑んで、フェイトの頭を撫でた。
銀「なのはとアルフもな」
な「ハイ！銀さん！」
ア「うん！」
なのはとアルフは涙目で頷いた。
源「銀の字！剣の字！そろそろいいか？」
ラ「そろそろ時間なんだけど…」
ナ「そーだぞ、早くしろ」
フェイトの手にある無線機から、源外とララとナギの声が聞こえた。
銀「ああ」
剣「もう大丈夫でござるよ」
銀時と剣心はフェイト達から離れて、新八達の所に立った。
フ「待って剣心！」
な「待ってください銀さん！」
フェイトとなのはが、バッと勢いよく顔を上げた。
無線機をアルフに渡すと、銀時に向かって走り出した。
銀・剣「ん？」
剣心はフェイトに銀時はなのはに振り返った。
フェイトとなのはは思いっきりジャンプして、剣心と銀時の胸の中に飛び込んだ。剣心と銀時は思わずフェイトとなのはを抱いた。
剣「フェ…フェイト殿…？」
フ「お…おい…なのは？」
フェイトとなのはの行動に剣心と銀時が戸惑っていると、フェイトは顔を剣心になのは銀時に顔を近づけた。
次の瞬間、フェイトは自分の唇を剣心の唇に、なのはは自分の唇を銀時の唇の上に重ねた。
剣・銀「！！？」

剣心と銀時は目を見開いて驚いた。
銀時と剣心だけでなく、万事屋メンバー、真選組の五人も唖然としている。特に新八の顔が青ざめた。
フェイトをよく知るアルフも、口を大きく開けて驚いている。この場にプレシアもいたら、一体どんな反応をしただろう？
キスをした後、フェイトは下りて剣心から離れた。顔を真っ赤に染めながらも、真っ直ぐに剣心と銀時を見つめた。
フ・な「剣心。（銀さん）貴方が好きです」
微笑みながらフェイトとなのはは、みんなの前で剣心と銀時に告白した。
剣・銀「…え……ちょっ……」
何とか我に帰った剣心と銀時が何か言おうとしたが、光が銀時達を包み、次の瞬間にはフェイト達の前から消えてしまった。
フェイトの後ろに立ってるアルフがようやく我に帰った。
「フェ…フェイト……あんた……！」
アルフは動揺を抑えられないでいた。
フェイトとなのはは、窓の外の月を見上げながら小さく呟いた。
「また会おうね。剣心（銀さん）」

江戸のかぶき町。
かぶき町にある、源外の工場内から強い光が発せられた。光は収まり、工場内にある装置の扉が開かれた。中から万事屋と真選組が出てきた。
「…本当に戻ってきたのか？」
真選組の五人は工場の外を見た。
居酒屋やスナックなどの店があり、街には着物を着た人達が行き交い、天人達も歩いてる。
忘れるはずのない自分達の町。江戸のかぶき町である。

土「…帰ってきたな」
斉「ああ」
土方と斉藤が小さく呟いた。
ふと、五人は後ろを振り返った。
そこには、フェイトとなのはにいきなりキスと告白の両方をされて、どうしたらいいかわからないで呆然と立ち尽くす剣心と銀時の姿があった。隣にいる新八達もどうしたらいいか困っている。
土「じ…じゃあ俺ら屯所に帰るわ」
近「じゃあな万事屋！」
沖「旦那方ァ、これから頑張ってくだせェ」
山「じゃ・・じゃあ」
真選組の五人は逃げるように去っていった。
真選組がいなくなったのを確認して、隠れてた源外とララとナギとハヤテが出てきた。
ナ「いや～悪かったな剣心、銀時。まぁ金はちゃんと払うから勘弁してくれ」
ハヤテ「ホントですよ。お嬢様」
ナギが頭をさげて謝った。
ハヤテはナギを見つめながらそう言った。
だが、銀時と剣心はナギの言葉に反応しなかった。
源「どうした銀の字、剣の字？」
ラ「なんか様子がおかしいよ」
ナ「おいどうしたお前ら」
源外達が尋ねた。
銀時は口を開いた。
銀「……じーさん、ララ、ナギ」
源・ララ・ナギ・ヴィル「ん？」
剣「拙者たちははどうすればいいんでござるか？」
源・ララ・ナギ・ヴィル「は？」
源外達は首を傾げた

ナギ「ホントどうしたんだよ。お前ら？」
ハヤテ「様子がおかしいですよ。それとなんで皆さん新八さんを押さえ込んでいるんですか？」
ハヤテとナギは心配になってシャナたちに聞く。

シャナ「言いのよハヤテ、ナギ」
ヤミ「気にしないでください」
ハヤテ「は・・はあ」
新八「このクソ天パアアアア！！！」

新八は今にも銀時に飛びかかりそうだった。
なぜかって？そりゃ愛しのなのはを銀時に取られたからだよ。
新八「・・・・・・お前ぇぇ・・・それでも人間かぁ？・・・（怒）」
新八は膨大なる殺意を放っていた。
新八「お前のかぁちゃん何人だアアアアアアアアアアアア！！！！！！！（激）」
神楽「ぱっつぁん、落ち着けよ！」
セイバー「恋は諦めが肝心です！！」
物凄い怒りを銀時に晴らそうとする新八を神楽達が必死に抑えている。

そして、剣心と銀時は外に向かって、ゆっくり歩きながら呟く。
銀時「どうすればいいの？なのはにキスされた俺はどうすればいいの？なのはに告白された俺はどうすればいいの？俺の心はどうすればいいの？」
剣心「拙者もどうすればいいんでござるか？まさかフェイト殿に告白されるなんて…」
外に出て銀時と剣心は足を止めた。そして大きく息を吸い込み、

銀・剣「教えてくれェエエ！レイジングハートォォォ（バルディッシュ殿ぉぉぉ）！！！」
青空に向かって叫んだ。
神楽達は力無く笑いながら、剣心と銀時の背中を見つめた。
雲一つない青空の下、銀時達はかぶき町に帰ってきた。
その後、源外達が呟いた

源「…この場に薫譲ちゃんがいなくて良かったな」
ララ「うん…」
ナギ「ああ…」
ハヤテ「…はい」
ヴィル「でありますな…」

この場に薫がいたらとんでもないことになっていただろうなと思った源外達であった。

そして、なのはたちの世界
そこにはあのジュドとファイナが海鳴市の海の上空に浮かんでいた。

ファイナ「ジュド様～ディアルとギガリザードもやられちゃったみたいですよ」
ジュド「出来損ない共が・・・まあ良い、ジュエルシードは手に入ったのだ。後は我等の本来の目的であるアレの発動を待つのみだ」
ジュドがジュエルシードを見つめながら笑ってそういう。
ジュド「とはいえ、また奴らの妨害があるかも知れんな…」
ジュドは今回の件で邪魔して来た剣心達のことを考える。
ジュド「ファイナ、本部に連絡して、増員を頼め。面倒な邪魔者が現れたと言ってな。今度は我が四天王にも来るように伝えろ」
ファイナ「は～い」
ジュドはファイナにそう言い、ファイナは頷く。
ジュド（・・・もうしばらくです。もう少しだけお待ちください。われらが偉大なる“王”よ）
ジュドは心の中でそう呟いた。

第二章に続く。

第二十九訓　別れもいつも突然に（後書き）

支配者「第二章ではついにジュド達の真の目的が明らかになります」

銀時「本当か」

支配者「本当です」

剣心「楽しみでござるな」

支配者「まあ第二章に入る前に番外編をいくつか入れますけどね。
それとキャラもかなり増やすつもりです」

神楽「では、次回をお楽しみにアル！！」

番外編　剣心の散歩（前書き）

支配者「今回から、しばらく番外編です」

銀時「お前、またキャラをずいぶん増やしやがったな」

支配者「ほっといてください」

番外編　剣心の散歩

剣心達がなのはたちの世界から帰ってきて数日がたった。
剣心は日課であるお昼の散歩に出ていた。
剣心「こうやってのんびりと江戸の町を散歩するのも久しぶりでござるな」
そうやって剣心はのんびりと歩いていた。
剣心「それにしても、まさかフェイト殿に告白されるとは思わなかったでござる」
剣心はいまだにあまりショックから抜けていなかった。それは銀時も同じである。ちなみに新八は今真っ白になっている。
なのはを銀時に取られて失恋したからだ。
剣心はぶつぶつ言いながら歩いている。
しばらくすると前から一人の青年が歩いて来た。
「よぉ～剣心」
剣「おや、左之」
前からとり頭に背中にあく一文字を背負ったその男は相楽左之助。
剣心達万事屋の知り合いで、気のいい風来坊である。ちなみに喧嘩がかなり強い。
相楽「おいこら！誰が鳥頭だ！！」

左之助は文句を言う。

剣「まあまあ、左之落ち着くでござるよ」

剣心が左之助をなだめる。

相楽「チッ・・・まあ言いや、そんなことより剣心おめえ銀時達と一緒に異世界ってとこに言ってきたんだってな。しかもその原因はあの眼鏡が美少女系のアニメのＤＶＤを持ってたってのが原因なんだってな」

剣「ブッ！！」

剣心は驚いた。

剣「左之・・・その話誰から聞いたんでござるか」

相楽「そりゃあ、ナギの譲ちゃんからだよ」

剣「やはりそうか・・・」

剣心はため息を突いた。面白いこと好きの上にそういった事を広めたがりやすいナギはいろんな知り合いに話していたのである。

剣「やれやれ・・・ナギ殿にも困った物でござるな」

相楽「まあまあ良いじゃねえか、それで相談なんだけどよ」

剣「何でござる？」

左之助はは再び剣心に話しかける。

相楽「今度は俺も連れてってくれよ」

剣「何でござるか？」

相楽「そりゃあその異世界ってのに興味があるからだよ。それに向

こうでなら面白い喧嘩できるかも知れねえしな」
剣「やはりそんな理由か・・・」

剣心は再び溜息を突いた。

剣「まあ、考えておくでござるよ」
相楽「そうか前向きに考えておいてくれよ」
剣「分かったでござるよ」
相楽「そうか、じゃあな」

そういって左之助は去っていった。
剣心は去っていく左之助を見送った後再び歩き出した。

剣心が歩いていると前から男子と女子の数人組が歩いて来た。

「あ、剣さん」
「あら、ホントですの」
「剣心さん、こんにちは」

「こんにちは剣心」
「剣心お兄ちゃんこんにちは～」
『こんにちは』

剣「こんにちはでござる。御坂殿、白井殿、守殿、綾子殿、坂井殿、クルス殿、セツナ殿、美緒殿、梔殿」

剣心は男女達に声をかけた。

皆さんも知っている名前が多くでたであろう。彼らは江戸の近くにある学園都市という特殊な学生機関に通っている学生である。ちなみに、この世界の学園都市を作ったのはアマントたちである。理由は地球人の持つ超能力などの能力を研究するためだ。最初はアマント達が統括していたが、三千院財閥を始めとする。高須財閥や鷺ノ宮家などの江戸の財閥グループが買い取った。ちなみに今、学園都市を統括しているのはなんとナギと綾子のおじいさんと鷺ノ宮の妖怪婆、銀華、そして、天王州アテネである。エッ？何でアレイスターじゃないのかって？だってあいつ嫌いなんですよ。だから登場させる気はありません。

では彼らを紹介していこう。

まずは御坂美琴、ご存知あのレールガンである。ＬＥＶＥＬ６の能力者である。アニメではＲＥＶＥＬ５であるがこの世界ではＲＥＶＥＬ７までランクが区切られているのでこの小説ではＲＥＶＥＬ６という事にした。でもその中でこの子だけ能力名が中二臭い。まあリアル中二だが。
セーラー服に身を包んだ姿はスケバンにしか見えないが、でも別にヨーヨーを武器にしたりはしない。そして、ツンデレである。

御坂「誰が、中二のツンデレよ！！」

そして白井黒子、御坂ＬＯＶＥのテレポーターだ。彼女を語るのに多くの言葉は必要ない。ただ一言、？変態？と書いておけば。

白井「変態とは聞き捨てなりませんの・・・」

そして、ちっちゃいほうの緑髪の男の子が吉村護、ご存知『護くんに女神の祝福を！』の主人公である。ちなみにこの世界ではＲＥＶＥＬ４くらいの能力者である。能力は良く分かっていない。綾子の恋人で家族にも了承されている関係である。ちなみにこの世界ではビアトリクスも超能力ということにしておくメンドクサイので

護「めんどくさいって・・・」

そしてヒロインの綾子。この世界では学園都市にたった三人しかいないＲＥＶＥＬ７の能力者であり、身体能力だけでも夜兎族をも上回りかねないほどである。そして強力な炎を操る能力も持つ。あまりにも強く、そしてかなり暴力的であるために魔女：ベアトリーチェなんて呼ばれて結構嫌われている。しかし、恋人である護にだけはあまあまのデッレデレである。

綾子「別にデレデレなんてしてないわよ！！」

そしてちょっと大きめの緑髪の男の子がクルス・シルト、『ＮＥＥＤＬＥＳＳ』のツッコミ役、通称：山田である。他は特にない。

クルス「僕はクルスです！あとなんか特徴言って！！」

そして、もう一人の男は坂井祐二、まあ一応灼眼のシャナの主人公

だ。こいつは・・・別にどうでもイイや、特徴なんて全くないし

坂井「ひどっ！」

そして、セツナ、未央、梔の『ＮＥＥＤＬＥＳＳ』少女部隊の３人組、彼女達はそれぞれ能力者である。ＲＥＶＥＬは５である。能力はそれぞれ原作と同じだ。原作では敵だが、この世界にはシメオン製薬なんてないので彼女達は普通に学生として暮らしている。性格も原作と同じ、ちなみに愛称は（妖怪キャラかぶり）（澪たん）（だんまり）である。

セツナ「キャラかぶりって言うな！！」

未央「ニャはは～」

梔『だんまりって何・・・』

これで彼らの紹介は終わりだ。

全員（剣心と護と未央以外）『まじめに自己紹介しろーーー！！！』

ほぼ全員が怒鳴った。

剣「ははは、まあまあ皆の衆落ち着くでござるよ」

剣心が御坂たちをなだめた。

御坂「ッたくもう・・・」

綾子「腹が立つわねぇ」

白井「全くですの」

セツナ「ホントよ、もう・・」

梔『ふんふん×、プンプン○』

この五人はまだ結構怒っている。

剣「ところで、お主達は学校が終わったから江戸に遊びに来たのでござるか？」

剣心が話題を急に切り替えた。

御坂「まあね」
綾子「暇だったから」
セツナ「それに剣さんに聞きたい事があって探してたのよ」
剣心「聞きたいこと？」

剣心は首を傾げる。

未央「剣心お兄ちゃんたち、リリカルなのはの世界に言って来たってホント～？」
剣「ブッ！」

剣心はさっきと同じように再び驚いた。

剣心「あの～その話はもしかして」
綾子「ナギに聞いたのよ」
剣心「やっぱり…」

剣心はまたしても溜息をはいた。

未央「ね～ホント？」
梔『尺条しろ×、白状しろ○』

澪と梔が剣心に迫ってきた。

剣心「まあ本当でござるよ」
未央「ワア～すご～い」
梔『凄い』
クルス「ほんとに凄いですね」
白井「別の世界に行ったなんて、俄には信じられませんが、あなた達ならありえなくもありませんの」

未央と梔とクルスと白井の四人は驚いた。他の皆も驚いている。

剣心「・・・それで皆の衆、何か言いたい事があるんでござろう」

剣心が再び重い口を開いてそういった。

御坂「今度はあたし達も連れてってよ」
剣心「やっぱり・・・」

剣心はまたまた（以下略）

未央「ね～いいでしょ澪達もなのはちゃん達と遊びた～い」
剣心「別にかまわぬが・・おぬし達学校は良いんでござるか？」
護「ああ、それならもうすぐ春休みですから大丈夫ですよ」
剣心「ああ・・そういえばそんな時期でござったな」

そう、今江戸はもうすぐ春休みな季節なのだ。まあなんて都合のいい。

綾子「今度行くときはちゃんと声かけてよね」
未央「絶対だよ～」

剣心「分かったでござるよ」

そういって剣心は御坂達と別れた。

剣心は再び歩き出し、川原にやってきた。

そこに竹刀を持って素振りをしている少女が二人ほどいた。

剣「勢が出るでござるな。箒殿にラウラ殿」

箒、ラウラ「あっ師匠！」

剣「嫌、拙者は師匠ではないでござるよ…」

剣心は二人に突っ込んだ。

剣心を師匠と呼んだこの二人は、Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｔｒａｔｏｓの篠ノ之　箒とラウラボーデヴィッヒである。

ちなみにどうしてこの二人が剣心を師匠などと呼んでいるかというと実はだいぶ前に剣道場同士の試合があり、ヒナギクに九兵衛と柳生四天王の東条以外の四人が食中毒にかかってしまい人員が足りないからといわれ依頼で剣道の試合に出たのである。そこで剣心は九兵衛と互角の実力を持つと呼ばれており相手方のキャプテンである、織村千冬をあっさりと剣道の試合で負かしてしまったのだ。その見事な剣技を一緒に来ていた箒とラウラに見られ，自分達のあこがれである千冬をあっさりと負かしてしまった剣心の腕にほれ込まれてしまいその跡で弟子にしてくれとせがまれてしまったのだ。

えっ、普通憧れの人がやられたらその相手を恨むんじゃないのかって？

まあ、細かいことは気にしないでください。

あとこれは、余談ですがこの世界にもＩＳがあります。作ったのはもちろん篠ノ之タバネである。

箒「師匠！」
ラウラ「今日こそ私達にご指導を！」
剣心「イヤ・・だから拙者、弟子をとる気は・・・」

剣心は断ろうとするが二人はどんどん剣心に迫ってくる。

箒「そこを何とかお願いします！」
ラウラ「あの見事な剣技を私達にも教えてください！」
剣心「イヤ・・だから・・・拙者の剣は後世に残すつもりは・・・」
箒・ラウラ「お願いします！！」

二人は思いっきり頭を下げた。

剣心「・・・さらばでござる」

そういって剣心は瞬動で逃げ出した。

箒「あっ逃げた！」
ラウラ「待ってくださーい！！」

二人は剣心を追いかけるが瞬動で逃げる剣心に追いつけるはずがなった。

その後、二人を何とか振り切った剣心は安堵の息をはいていた。

剣心「やれやれ、何でああなってしまったんでござるかな・・・」

剣心は再び溜息を吐いた。そこに緑髪の女性が歩いてきた。

「緋村じゃないか」

剣心「おや、これはアルカ殿」

この女性はアルカ・シルト、ご存知クルスのお姉さんである。能力は原作と同じでＲＥＶＥＬ７の力を持っている。ちなみにこの世界でのアルカの設定は幕府の女性能力者の特殊部隊『真女組』の一番隊隊長である。ちなみに局長はとある魔術の禁書目録に出てくる神裂香織である。

アルカ「どうしたんだ？そんなに息を切らして」
剣心「いや個人的な事情でこうなったんでござるよ。心配いらんでござる」
アルカ「そうか、ならいいんだが」
剣心「ところでアルカ殿はどうしてこんなところに？」

剣心はどうしてアルカがこんな所にいるのか疑問だった。なぜなら彼女は『真女組』の隊長の一人。かなり忙しい身である。休みの日でもない限りこんなところをのんきに歩いているような立場ではないのだ。

アルカ「実はこの近くに過激派の攘夷志士が潜伏していると言う情報があってな。それで確かめに来たんだ」
剣心「ああ、なるほど」

この言葉から分かるように『真女組』も真選組同様に攘夷志士の確保なんかも仕事している。と言っても特殊部隊でもある彼女達の場合は鬼兵隊のような危険な過激派専門で桂姉弟達のような穏健派の方はほとんど対応していないらしいが。えっ？桂姉弟って何だって？それはいずれ分かります。

アルカ「緋村、それらしい者達を見なかったか？」
剣心「イヤ見てないでござる」
アルカ「そうか見かけたら教えてくれ、じゃあな」
剣心「分かったでござる、では」

そういってアルカと剣心は分かれた。

そして、しばらくしてから剣心は散歩を終えて万事屋に戻ってきた。

剣心「ただいま戻ったでござる」
シャナ「お帰り剣心」
ヤミ「お帰りなさい」

シャナとヤミが剣心を出迎えた。

剣心「ハア～疲れたでござる」
神楽「剣ちゃん、どうしたあるか？」

神楽は疲れた感じの剣心に尋ねた。

剣心「今日は知り合いに多くあったんでござるよ」
セイバー「なるほどだから疲れてるんですか」

セイバーは納得したようにポンッ！と手を叩いた。

そして、銀時は相変わらずボーッとしていた。

番外編　剣心の散歩（後書き）

支配者「イヤ～ずいぶんとキャラが増えましたね」

シャナ「ッて、お前が勝手に増やしたんでしょ。祐司は目立たなかったけど・・・」

支配者「だから、ほっといてください。さて、次も番外編、次回はあんなキャラやこんなキャラが出ます」

万事屋メンバー『まだ出すのかよ!!!』

番外編2　脅威なる接触・前編（前書き）

支配者「今回の番外編、最初はギャグですが後でちょっとシリアスになります」

ヤミ「では、リリカル剣魂番外編、始まります」

番外編2　脅威なる接触・前編

番外編

なのはたちの世界から帰ってきて二週間、銀時達は暇をもてあましていた。

銀時「あ～暇だなぁ」
神楽「暇アルナ」
シャナ「暇ね～」
セイバー・ヤミ「暇ですね～」

全員が暇だ暇だと言っていた。ちなみに新八はいません。
まだなのはに振られたショックから抜けていないのだ。そんで家に籠ってる。

剣心「暇だったら，仕事でも探しに行ったらどうでござるかお主達は」

家事をしている剣心がだらだらしている銀時達に突っ込んだ。

銀時「別に良いじゃねえかよ～仕事なんて、ナギからたっぷり金もらったんだからよ～」
神楽・シャナ・セイバー『そ～そ～』

ヤミ以外のメンバーが愚痴をこぼした。

剣心「そうは言っても調子に乗っているとまたすっからかんになる

でござるよ」

剣心は正論を言った。そのとおりこの万事屋のメンバーならあっという間に今回の報酬も使い切ってしまいかねないのだ。だから剣心は今のうちに仕事をするべきだと思っているのである。

銀時「んなこといっても仕事の依頼なんかここ最近ねーじゃねーか」
ヤミ「だったらギルドにでも行きませんか？」

ヤミは急にそんなことを言い出した。

剣心「なるほど、ギルドでござるか」
セイバー「確かにあそこなら報酬のいい仕事が多いですしね」

剣心とセイバーが納得した顔でそう話す。

銀時「あそこ行くのかよ・・・結構メンドクセ～んだけど」
剣心「言いからいくでござるよ！」

剣心は銀時を引っ張り、ほかの万屋メンバーはその後についていった。

ここは江戸の町にあるギルド、簡単に言えば仕事紹介所みたいなもんである。
ここの仕事は誰かの手伝いから、賞金首の確保、原生生物退治など色々ある。

剣心「さて、では仕事を探すでござるぞ」
銀時「チッ、メンドクセエなあ～」
セイバー「そんなにメンドクサガらないでください、銀時」

そして、銀時達は賞金首の手配書が張ってあるコーナーに来た。

剣心「さて、どれがいいでござるかな？」
シャナ「どうせなら歯ごたえのある奴と戦いたいわね」
銀時「楽な相手でいいじゃねえか。いちいち強い奴となんかやってられるか」

銀時はいまだに愚痴をこぼしている。
そんな時後ろから誰かが話しかけてきた。

「よぉ、銀さんに剣心にヒメッチの妹じゃねえか」
「お～ほんとだ」
剣・銀『ん？』

後ろから栗色の髪の青年が話しかけてきた。さらにその後ろから帽子をかぶった緑髪に右目に眼帯を中年とヤミそっくりの女の子がや

ってきた。

銀時「何だおめえらか」
ヤミ「イヴ姉さん」
イヴ「久しぶり、ヤミ」

そう後ろからやってきたのは「ＢＩＡＣＫＣＡＴ」の主役チームのトレインハートネット、スヴェン・ボルフィード、イヴの３人組である。ちなみにどうしてヤミがイヴのことを姉さんといったのかはイヴとヤミは双子の兄弟という設定だからである。イヴが姉で、ヤミが妹だ。

神楽「お前ら日本に来てたアルか？」
スヴェン「ああ、ちょっと野暮用でな、跡でおめえらのとこにも寄ろうと思ってたんだ」
剣心「野暮用とは？」

剣心がスヴェンに野暮用のことを聞こうとすると，後ろから誰かが走ってきた。

「シャナた～ん！、ヤミた～ん！」
シャナ・ヤミ「ふん！！」

ドゴォッ！！！

「グハッ！！」

後ろから飛び込んできた銀時と同じ銀髪の男をシャナとヤミが吹っ飛ばした。
男は壁に激突した。

銀時「ちっ…やっぱあいつもいやがったか、だから来たくなかったのに…」
神楽「そういえばここはこのロリコンが出入りしてるところだったアルな…」

銀時と神楽は心底嫌そうな顔をしてぶっ飛ばされた男を見つめた。

男の名はアダム・ブレイド『ＮＥＥＤＬＥＳＳ』の主人公、天性のロリコン野郎だ。
ちなみに何で銀時が嫌そうな顔をしたかというと銀時とブレイドはかなり中が悪い。理由は同じ銀髪同士の上にブレイドの声が銀時の昔の仲間；高杉にそっくりだからだ。だから銀時はブレイドのことが気に入らない。そして、ブレイドもなんとなく銀時の事が気に入らないのであった。

「お～い、ブレイド～」
「どこにいった～？」

後ろから、青い髪のふんどしの女の子、金髪の黒い服の女の子もやってきた。
イヴ・ノインシュヴァンシュタインとセトである。

剣心「お～い、ノイン殿、セト殿」
ノイン「オオ、剣田」
剣心「イヤ、剣心でござる」

剣心が青髪の方のイヴに突っ込んだ。原作どおり相変わらず人の名前を間違えている。

セト「まあそんなことはどうでもいいんだ。そんなことより剣心、ブレイドを見なかったか？」
剣心「そこに倒れているでござる」

剣心はブレイドのぶっ飛ばされた方向に指をさした。

セト「またか・・・どうせ、シャナ達にたかったんだろ」
セイバー「その通りです。相変わらずロリコンですね。ブレイドは」

セトの質問にセイバーは心底呆れたように答えた。

ブレイド「いてて…」

ブレイドは起き上がった。

銀時「ちっ、起き上がってくんじゃねえよ。このロリコン」
ブレイド「んだとコラァ！この天パ！！」
銀時「んだとぉ！！テメーに天パの気持ちがわかんのか！！」
ブレイド「けッ、んなもん知るか」
銀時「ロリコンド変態野朗が偉そうなこと言ってんじゃねえ！！」

ブチッ！！

ブレイド「このやろう！テメェぶっ殺す！！判決してやる！！」
銀時「上等だこらぁぁぁ！！てめえこそ処刑台に上げてやる！！！」

銀時とブレイドは何時もの様に喧嘩を始めた。

剣心「あ～あ」

剣心は頭を抱えた。
トレイン達もその様子を唖然として見ていた。

５０分後

ようやくブレイドと銀時の喧嘩は終わった。剣心達が大暴れする銀時とブレイドを力づくで止めたのである。その時、ギルドが半壊状態になっていたのは言うまでもない。

そして銀時達はトレイン達を連れて万事屋に戻ってきていた。

剣心「それで、野暮用とは何でござるか？スヴェン殿」
スヴェン「実はこいつを追ってきたんだ」

スヴェンが取り出したのは一枚の手配書
手配書にはまるでヤクザの大ボスのような感じの男の写真が貼ってあり「ドン・トルネロ」と書かれていた。

ヤミ「この男をですか？」
イヴ「うん」
シャナ「こいつがどうかしたの？」

シャナはどうしてトレインたちがどうしてこの男を追ってわざわざ日本まで来たのか気になった。

トレイン「ここ見てくれよ」

トレインが手配書のある部分を指差す。
そこにはなんと懸賞金３０万ドルと書かれていた。

シャナ・セイバー・剣心
「さっ３０万ドル！？」

剣心達はその額を見て驚いた。

銀時「それって円だといくらだ？」
神楽「いくらアルか？」

銀時と神楽はドルの意味が良く分かっていないようにそう答えた。

シャナ「３０００万よ」
銀時・神楽「さっ３０００万！？」

銀時と神楽はその額を聞いて驚いた。

セイバー「結局そちらも金目当てでこの男を追ってきたんですか？」
スヴェン「それもあるけどよ」
トレイン「そっちはおまけだ」
シャナ「じゃあ、何で追ってきたのよ」

シャナは理由を尋ねる。
するとスヴェンは口を重そうに開いた。

スヴェン「・・・そいつがイヴとヤミを生み出す原因を作った奴の一人だからだよ」
万屋メンバー
『！！』

剣心達は驚いた。この手配書に乗っている男がイヴとヤミをを生み出す原因を作った男だというからである。

銀時「おい・・・それマジなのか？」

トレイン「ああ、マジだぜ。確かな筋の情報だ」
銀時の質問にトレインは真剣に答える。
剣心「それは拙者達も放っておけんでござるな」
シャナ「こいつは今どこにいるか分かってるの？」
スヴェン「ああ、こいつは今江戸の港にいる。自分達で作った生物兵器をあの宇宙海賊・春雨に売りさばくためにな」
剣心達「！！」
剣心達はさらに驚いた。あの春雨がトルネロの背後にいるだから。銀時達万屋はもはや春雨とは何度もやりあっている。春雨のほうにも自分達の顔は知られてしまっている。
シャナ「また…春雨」
スヴェン「ああ・・・だが今回の件にはもっとやばい連中もかかわってるらしい」
セイバー「それはいったい？」
トレイン「そいつはまだ良くわからねえがかなり危険な連中らしいぜ」
銀時達は息を呑んだ。あの春雨以上に危険な連中も絡んでいると聞いたからである。
シャナ「それって…まさか」
神楽「シャナ、知ってるアルか？」
イヴ「・・・宇宙帝国アークス」
「！！」
この場にいるほぼ全員が絶句した。『宇宙帝国アークス』それはあ

の春雨ですら足元にも及ばない、比較にならない程の戦力と科学力と軍事力を誇る全宇宙最強最悪の軍事国家。それが宇宙帝国アークスである。攘夷志士達のうわさでは春雨を裏で操っているのは宇宙帝国アークスではないかと呼ばれるほどなのだ。

銀時「おいおい・・マジかよ」
トレイン「よりにもよって性質の悪い…つか、イヴしってたんなら教えろよ!」
イヴ「…ごめん」
セイバー「剣心どうしますか?」
剣心「・・・・・」

剣心は腕を組んで真剣な顔でしばらく考えた。

剣心「とにかく港に言ってみよう。どうするかはそれから考えるでござるよ」
銀時「そうだな」

銀時達とトレイン達は万屋を出て江戸の港に向かった。

番外編2　脅威なる接触・前編（後書き）

支配者「次はなんと、あの大人気のモンスター達が登場！」

銀時「おいおい、あんなのまで出すのかよ」

剣心「ほんとに何でもありでござるなこの小説」

支配者「だから二次創作小説って言うんですよ」

セイバー「では次回をお楽しみに」

番外編３　脅威なる接触：後編（前書き）

支配者「は～い、前回の続きをやりま～す」

銀時「おめ～ホントメチャクチャしてくれるな」

剣心「ここまでするでござるか…」

支配者「いいでしょ、別に」

ヤミ「リリカル剣魂スペシャル番外編始まります」

番外編3　脅威なる接触：後編

江戸の港
春雨の宇宙船
船長室

トルネロ「いや～光栄でございます。よもや、宇宙帝国アークスの最高幹部の一人である、『強欲のバルバモン』様にこんな辺境の星まで来ていただけましょうとは」
船長「全くでございます。この記念すべき日をどう表現したらよろしいか」

見るからにマフィアのボスと呼べるような白髪の老人、トルネロと春雨の船の船長らしき天人がバルバモンと呼ばれた不気味な仮面をかぶり悪魔のような六枚の羽に杖を持った老人に対して手をこすりこびへつらうかのようなポーズをとっていた。

皆さんも知っているかもしれません。
このバルバモンとはデジモンなどに出てくる七大魔王とよばれている存在のことである。
ではこの世界でのデジモンの設定を紹介致します。この世界でのデジモンはデジタル星と呼ばれる特殊な惑星で誕生した原生生物という設定である。
もちろん進化の概念も存在しています。
そして、この世界ではバルバモンは宇宙帝国アークスの幹部という設定だ。

バルバモン「下らん話はやめてさっさと例の物をもってこんかお前達。皇帝陛下はアレをお待ちなのだ」

船長「ハッハイただいま！おい早くもってこい！」
「ハッ！」

春雨の船長に言われて船員が小さな箱に入った宝石らしき物を持ってきてバルバモンに見せた。

バルバモン「おお、これじゃこれじゃ、この宝石が陛下の手に入れば例の大計画も第二段階に進展するというものじゃ、ホッホッホ」

不気味な光を放つ宝石を見つめながらバルバモンは黒い笑みを浮かべた。

船長「あの～バルバモン様。その例の計画というのは？」
トルネロ「そろそろ我々にも教えていただきたいのですが」

二人はそういってバルバモンに尋ねるが

バルバモン「お前達如きが知る必要などないわ！！」
トルネロ「ハッハイ！」
船長「もっ、申し訳ございません。バルバモン様」

バルバモンは凄い剣幕で二人に怒鳴った。

バルバモン「・・・ふん、まあ良いわ。わしは一足先に本星に戻る。お前たちも早く生物兵器どもを船に運び入れろ！」
船長「りょっ、了解いたしました。おい、作業を急げ！」
「ハッ！」

バルバモンに言われて船長が船員に命令した。

ここは港
剣心達は春雨の船と思われる船を見ていた。

剣心「・・・あの船でござるか」
銀時「そう見てえだな」
スヴェン「ああ、間違いねえ春雨の船だ」

剣心達は隠れながら春雨の船に近づいていた。
比較的に近い位置で船の様子を見ると、天人達が君の悪い生物や普通の人間の子供と変わらないと思われる物が入っているカプセルを運んでいた。

銀時「ちっ…むなくそわりぃ」
神楽「気持ち悪いアル」
セイバー「…本当ですね」
剣心・トレイン・スヴェン
「…ああ」
シャナ、ヤミ、イヴ
「……」

銀時達はそれぞれその光景を見ながら意見を述べた。シャナ、ヤミ、イヴは黙ってその光景を見つめていた。あれは自分達と同じタイプの生体兵器であると感じたからだ。もしあれらの生物達が、トレイン達の言ったように人の手によって創られたものなら命を弄んでいる以外の何物でもない。
その時だ。

ゾクッ!!

剣心達・トレイン達
『!!』

銀時達はとてつもない寒気を感じた。
バルバモンとトルネロ、そして船の船長が春雨の船から出てきたのだ。

剣心「…誰か船から出てきたようでござるな」
スヴェン「…トルネロがいやがるな」
銀時「何だ?あの変な爺は?」
シャナ・ヤミ・イヴ『ッ!!あっあれはッ!!』

シャナ、ヤミ、イヴは思わず叫んだ。

セイバー「知ってるんですか三人とも？」
シャナ「・・・アイツは宇宙帝国アークスの最高幹部『二十の盾』（トゥエンティ・ガード）の一人強欲のバルバモンよ」
全員（シャナ・ヤミ・イヴ以外）
『さっ最高幹部！？』

三人以外の全員が驚いた。無理もない。全宇宙最強の軍事国家の最高幹部がこんな所にいるのだから

セイバー「モンが付くって事はまさか・・・」
シャナ「そう、デジモンよ。それも超強力な奴よ。並みのデジモンじゃとても歯がたたないわ」
銀時「…確かに、あの爺とんでもなくヤベエ感じがするな」
剣心「・・・そうでござるな、この気配、とてつもなく危険すぎる感じがする」
シャナ「・・・やばくて、当然よ。二十の盾は単体で惑星を破壊できるほどの奴ばっかりなんだから」
全員（シャナ・ヤミ・イヴ以外）
『！！！！』

銀時達は今迄で一番驚いた。単体で惑星を破壊できるなど信じられない。もし、それが本当なのだとしたらそのやばさは夜兎族ですら比ではない。

剣心「シャナ殿、何でそんなに詳しいのでござるか？」

剣心はシャナがアークスについてあまりにも詳しいのでそう質問した。

シャナ「・・・それは」

その時である。

「おい、そこで何をしている！」

剣心達

「！！」

後ろから春雨の天人に声をかけられた。そう見つかってしまったのだ。

「貴様ら、何者だ！？」

銀時「ちいっ！」

銀時達は思わず走り出した。

「逃がすな！うてぇ！！」

ズドドドドドドッ！！

天人たちは後ろから銃を乱射した。

バルバモン「ん？」

もちろんその音はバルバモン達にも聞こえた。

バルバモン「何の騒ぎだ」
トルネロ「おい、何があった！」
「それが、侵入者のようです」
船長「何！侵入者だと！」

船長は驚いた。

船長「早く、捕まえろ！！」
「そッそれが…」
トルネロ「どうした！？」

「ドワアアア！！」

その時、天人達の悲鳴が聞こえ、港のほうに吹っ飛んできた。

トルネロ・船長
『！！』
銀時「ちっ、結局見つかっちまったか」
剣心「仕方ないでござるな」
スヴェン「おいおい、どうすんだよ…」
トレイン「こうなったらやるしかねえだろ、スヴェン」

煙の中から銀時達とトレイン達が出てきた。

トルネロ「なッ何だ！貴様らは！？」
船長「ぬわっ！あの銀髪と赤髪は」

トルネロ「知っているのか？船長」
船長「あいつらは前に我等春雨の仕事を邪魔した連中だ！その上報告ではあの夜王・宝仙を倒したとか」
トルネロ「なっなにぃ！？」
バルバモン「…ほう、あれが噂のこの星の侍という奴か」

トルネロは船長の言葉に驚き、バルバモンは銀時達を興味深そうに見つめた。

バルバモン「やるではないかね、地球人程度の分際であの宝仙を倒すとは」

バルバモンが銀時達に話しかけてきた。

銀時「ケッ、テメーみてえなバケモンに褒められてもちっともウレシかねーんだよ」
バルバモン「ありがとう、我等二十の盾にとって化け物とは最高の褒め言葉の一つなのだよ」

バルバモンは自分に化け物といった銀時にお礼を言った。

スヴェン「バケモンって呼ばれて喜ぶのかよ…」
神楽「キモイアル」
セイバー「…ホントですね」

スヴェン、神楽、セイバーはバルバモンに対してわずかに嫌悪感を抱いた。
バルバモン「ところで君達はこんなところに何をしに来たのかね？」
トレイン「そいつを確保しに来たんだ」

トレインはそういってトルネロを指さした。

トルネロ「何！わしを確保！？」
バルバモン「そうかね。では、さっさと確保でも何でも済ませて帰ってくれたまえ。私は忙しいんだ」
トルネロ「バッ、バルバモン様！？」

バルバモンは後ろを向いて歩き出したが、

シャナ「待て！バルバモン！！」
バルバモン「ん？」

シャナがバルバモンを呼び止めたのだ。

セイバー「シャ、シャナ！？」
神楽「どうしたアルか！？」
バルバモン「…おやおや、誰かと思えば、ずいぶんと懐かしい客が来たものだな」

バルバモンは意味深にシャナを見つめた。

銀時「え、何？お前ら知り合い？」
シャナ「……」

銀時はシャナに質問するがシャナは答えない。

バルバモン「・・・クックック、かつてのアークスの幹部であり、わしと同じ二十の盾の鮮血のドウコクの右腕でもあった貴様がこんな星にいようとはな」
全員（剣心とシャナとヤミとイヴ以外）「アッ、アークスの幹部！

？」

バルバモンから信じられない言葉を聞いた銀時達は驚く。剣心は黙ってシャナの様子を見ていた。

バルバモン「皇帝陛下のお気に入りでもあり、唯の人形でしかなかった貴様に名前まで与えてくれたというのに、なぜ陛下を裏切ったのだ？」

シャナ「……」

バルバモン「ふん、だんまりか。で、裏切り者が私に何のようだ？」

シャナ「・・・その子たちを解放しなさい」

そういってシャナは人間の子供のようなものが入ったカプセルを指差した。

バルバモン「こ奴等をか？それはできん相談だな。こやつらは陛下にお届けする物なのだからな」

シャナ「だったら！」

イヴ「！！シャナだめ！」

イヴの静止を聞かず、シャナは刀をすばやく抜いて凄いスピードでバルバモンに接近した。そしてシャナはバルバモンにきりかかった。

だが

バルバモン「ふん…」

ピトッ

シャナ「なッ！？」

なんとバルバモンは指一本でシャナの刀を受け止めた。

銀時「なッ！あいつ」
セイバー「シャナの刀を・・・」
神楽「指一本で止めたアルか！？」

銀時達もその光景に驚きを隠せなかった。シャナの実力は自分たちが一番良く知っている。シャナの力は夜兎族にも匹敵するほどだ。そのシャナの刀をバルバモンは指一本だけで受け止めたのだから。

バルバモン「愚かな奴じゃ、アークスを離れてわしの恐ろしさまで忘れたのか？貴様ごときがわしにかなうはずなかろうが」
シャナ「クッ…」

バルバモンは軽く笑うとシャナの刀を掴んで投げ飛ばした。

ドガアッ！！

シャナ「ぬわっ！」
全員『シャナ！！』

全員が投げとばされたシャナに近づいた。

銀時「おい大丈夫か？」
セイバー「シャナ…」
バルバモン「ふん、人形風情が、無駄な時間をとらせおって」

バルバモンはシャナをゴミのような目で見つめた後、再び後ろを歩き出した。

剣心「待て」
バルバモン「ん?」

今度は剣心がバルバモンを呼び止めた。

バルバモン「何か用かね?」
剣心「彼女を人形と呼んだことを取り消せ、彼女は人間だ」
バルバモン「は?何をバカなことを・・・兵器として生み出された人造生命を人形と呼んで何が悪いというのだ?」
剣心「彼女の過去がどんな物かは拙者たちはよく知らぬが、彼女は今拙者達の仲間だ。そのようなことを言うような者は許せぬ」

そう言って剣心は逆刃刀を抜いた。

バルバモン「何だ?まさかワシとやるつもりか?」
ヤミ「剣心だめです!!いくら剣心でもあのバルバモンには・・・」
「その通りだ」
剣心「!!」

その時、誰かの声が聞こえ海から何かが飛び出してきた。

スヴェン「どわっ!?」
トレイン「でけえ、海蛇!?」
バルバモン「メガシードラモンか」

バルバモンは海から突然現れた海蛇に向かってそういった。

メガ「バルバモン様、ここは私にお任せを」
バルバモン「そうか、では任せる」

そう言って、バルバモンは帝国兵と思われる者が乗っている船に乗り込んだ。

バルバモン「出せ」
「ハッ」
剣心「待て！」

剣心が追おうとするが、

メガ「サンダージャベリン！」
剣心「クッ！」

メガシードラモンが放った雷は剣心の行く手をさえぎった。その隙にバルバモンの乗った船は飛び去っていってしまった。

メガ「貴様の相手は俺だ。地球人ごときがバルバモン様に挑もうなど百万年早いわ」

メガシードラモンはそういって剣心を上から見下すが

剣心「龍槌閃！」
メガ「ヌオッ！？」

剣心は逆刃刀でメガシードラモンのアゴを打ち上げた。メガシードラモンは後ろによろけるがすぐに体勢を立て直した。

メガ「グウウッ」
銀時「けっ、この蛇やろーが」
セイバー「調子に乗らないでください」

そして銀時とセイバーも飛び上がり、頭部に木刀と不可視の剣の一撃を食らわせた。

メガ「グアッ！おのれ地球人風情が！くらえサンダージャベリン！！」

怒ったメガシードラモンが剣心たちに雷撃攻撃をしてきたが、剣心達は紙一重でかわした。

トレイン「へっ、次はこいつをくらいな！！」

トレインはそういって、愛銃：ハーデスの中にバースト弾を込め、メガシードラモンに向かって打ち出した。

ドカアアン！！

メガ「グワああ！！おのれ調子に乗るなぁ！！」

メガシードラモンはますます怒って海から飛び出し体当たり攻撃を仕掛けてきたが

神楽「ウりゃアアアアアアア！！」

神楽が最大パワーで思いっきり傘を振りメガシードラモンふっ飛ばした。

メガ「どわあああああ！！！」

メガシードラモンはコンテナのある密集地帯に吹っ飛ばされ気絶した。

銀時「終わったか」
神楽「楽勝アル」
セイバー「ですね」

その頃、トルネロは

トルネロ「ひいいっ、あいつら化け物だ。メガシードラモンをあんなにもあっさりと・・・」

トルネロは銀時達の強さにおびえてその場から逃げ出そうとしていたが、

ヤミ「どこを行く気ですか？」
トルネロ「！！」

ヤミがトルネロの後ろから声をかけてきたのである。

トルネロ「なッ何で、貴様がここに…！？」
ヤミ「あなたが逃げ出そうとしているのが見えたものですから」
トルネロ「くっくそーーー！」

トルネロは銃でヤミをうとうとするが

ヤミ「ふん！」

トルネロ「ぶへっ！」

ヤミはトランス能力で髪を拳に買えてトルネロを気絶させたのだった。

その後、真選組がやってきて気絶しているトルネロと天人たちとメガシードラモンを連行していった。

銀時「しっかり働けよ～。税金泥棒ども」
土方「誰が税金泥棒だ！」

銀時がいつものように土方を茶化すのだった。

剣心「シャナ殿」
シャナ「？」

剣心が顔を沈めているシャナに離しかけた。

剣心「おぬしの過去のことはよく知らぬ。今は話したくないと言うのであればそれでいい。しかし拙者達は仲間でござる。それだけは変わらないでござるよ」
銀時「そういう請った」
シャナ「…うん、ありがとう銀時、剣心」

シャナは笑顔で二人に答えるのだった。

番外編3　脅威なる接触：後編（後書き）

支配者「いかがでしたか、今回の話」

銀時「デジモンまで出すって・・・やりすぎだろ」

剣心「遠慮って物を知らないんでござるか？」

支配者「うるさい！まあとにかく今回で番外編は終わりです。次はオリジナルキャラのキャラ設定を行います」

セイバー「では次回をお楽しみに」

キャラ設定1（前書き）

支配者「今回はオリジナルキャラであるジュド達の設定です」

キャラ設定1

キャラ設定

炎帝のジュド
魔人族のリーダー。
見た目は４０代後半くらい。
性格は狡猾で冷静、そして残忍である。
炎帝の名前の通り強力な炎の力を操る。

音響のファイナ
ジュドの副官。魔人族の女性。
見た目は２０代くらい。
性格は明るい感じ
蝙蝠の怪人で耳がとてつもなくいい。
強力な音波攻撃を得意としている。

黒狼のディアル
ジュドの配下の一人
性格は冷酷非常である。

見た目は３０代後半くらい。
黒狼の怪人で光の剣の攻撃と黒い光弾攻撃を得意とする。
勝つためには手段を選ばず卑怯な手も平気で使う。

大顎のゲドラ

ジュドの配下の一人
性格は乱暴で凶暴、そしてガサツ極まりない
見た目はディアルと同じで３０代後半くらい。
ワニの怪人で体が岩の様に硬く夜兎族並みのパワーを持つ。
岩石を打ち出す攻撃も得意としている。

飛翔のヘゾル
ジュドの配下の一人
性格はジュドの配下の中でもっとも冷静だが人間という種族をまるでゴミくず程度にしか思っていない。
見た目はディアルと同じで３０代後半くらい。
隼の怪人でスピードはトップクラス、風の力を操って攻撃する。

ギガリザード
プレシアのプロジェクトFを利用したジュドの手によって作り出された魔道魔獣
３M以上の巨体と凄まじいパワーを誇り、力のままに暴れまわって攻撃する。
理性という者はほとんどなく、ジュド達の命令のままに動く。

キャラ設定1（後書き）

支配者「とまあ、こんな感じです。次回からいよいよ第二章に突入です」

セイバー「第一章のときよりはるかに激しい戦いが待ち受けていますよ！」

シャナ「強敵がどんどん登場するからね」

支配者「では、お楽しみに！あと、第2章からは質問コーナーも増やしますので質問がある人はどんどんご応募ください」

第三十訓　物騒な者が現れると新しい展開になる（前書き）

支配者「いよいよ、今回から第二章スタートです！」

剣心「リリカル剣魂スペシャルはじまるでござるぞ」

第三十訓　物騒な者が現れると新しい展開になる

ジュエルシードの事件から約一ヶ月。
剣心達は元の世界で平和な毎日を送っていた。平和というか、依頼が来なくてグータラな毎日に戻っていた。
瞬間移動装置は、まだ調整が完全でないのでフェイト達の世界には行けない。その代わり源外達が送った無線機をフェイトが持っているので、それを使って連絡をとる事ができる。
そのフェイトは、銀時と剣心の無茶苦茶な弁護のお陰で無罪となったプレシアやアルフ達と一緒に楽しく暮らしている。
ちなみに銀時達がみんなに黙って帰った後、眠りから起きたリンディ達がフェイトとアルフから銀時達が帰った事を聞いた時は、黙って帰った事に激怒したとか。

そしてなのは達の世界。
６月４日。ＡＭ０：００。
海鳴市の中丘町。八神家で、ある魔導書が起動した。一人の少女の前で本は輝きを放ち、少女の中から小さな光の玉が出て、本に触れて強い光を放った。
光が収まると、少女の前に、見知らぬ四人の男女がいた。女性三人は黒いワンピースで、男性は黒いタンクトップとパンツ姿だった。

「『闇の書』の起動。確認しました」

ピンク色の髪でポニテールの女性が言った。

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でございます」

次に金髪の女性が言う。

「夜天の主の下に集いし雲」

白い髪で獣の耳と尻尾を付けた逞しい肉体の男性が言う。

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を」

最後に赤い髪を三つ編みにした女の子が言った。
四人とも片手と膝を床につけ、頭を下げて主の命令を待った。
しかし、いつまで経っても命令が来ない。焦れた赤い三つ編みの女の子が、少女に近寄ってみた。

（ねぇ。ちょっとちょっと）

女の子は念話で仲間に話し掛けた。

（ヴィータちゃん、静かに）

金髪の女性が、赤い三つ編みの女の子『ヴィータ』に注意する。

ヴィータ（でもさぁ）
（黙っていろ。主の前で無礼は許されん）

ポニテールの女性もヴィータを注意する。
ヴィータ（無礼ってかさぁコイツ…）

ヴィータは倒れてる少女の顔を覗き込んだ。

ヴィータ（気絶してるように見えんだけど）
「ええっ！？」

気絶した少女の名は、八神はやて。
両親を早くに亡くして、一人暮しをしている足が不自由な少女だ。
突然、目の前に得体の知れない人達が現れて、ビックリして気絶し

てしまったのである。
守護騎士達は慌てて、はやてに駆け寄った。

ここは銀魂の世界
しかし皆さんが知っている銀魂世界とは違い多くの別のアニメキャラがこの世界に存在している。
それがこの『超銀魂』とでもいうべき世界

そして、江戸のかぶき町。
そこに何でもやる万事屋があった。部屋の中で七人の人物がテレビを見ている。
死んだ魚のような目をした銀髪の天然パーマの男、坂田銀時。
赤い髪に左頬に十次傷を持った浪人、万事屋一の苦労人、緋村剣心
地味な駄眼鏡男、志村新八。
宇宙最強クラスの戦闘種族『夜兎族』の一人、神楽。
騎士王の異名を持つ銀時のサーヴァント、セイバー
炎の力を操る少女、シャナ
変身能力を操る少女、ヤミ
七人が見ているのは『魔法少女リリカルなのは無印』のＤＶＤである。見終わって、新八はＤＶＤをデッキから取り出した。

新八「本当ならプレシアさんとフェイトちゃんは、解り合えないまま別れちゃったんですね」

セイバー「本当なら、悲しい結末になってしまっていたんですね」

新八とセイバーそうが言った。

ちなみに、新八は最近ようやくなのはに振られたショックから立ち直ったのである。

銀時「俺達が介入した事で、向こうの世界の未来が変わったんだな」

剣心「そのようでござるな。まあ、こうなってよかったでござるよ」

指で耳の穴をほじりながら、銀時が言い、剣心がうなずくように答えた。

シャナ「でもやっぱり、フェイトとプレシアは一緒にいる方がいいわ」

フェイトから送られた写真を見ながら、シャナが言った。

そこには、笑顔のフェイトとプレシアとアルフの姿が写っていた。

銀時・剣心「そうだな（でござるな）」

剣心と銀時は小さく頷いた。

そしてなのは達の世界

八神家。

はやて「そっか。この子が闇の書ってもんなんやね」

車椅子に座り、手に闇の書を持ちながらはやてが言った。

「はい」

ポニテールの女性が答える。

はやて「物心つく頃には棚にあったんよ。綺麗な本やから、大事にはしてたんやけど…」

言いながら車椅子を動かして、棚の前に移動する。

「覚醒の時と眠ってる間に、闇の書の声を聞きませんでしたか？」

金髪の女性が尋ねた。

はやて「ん～私、魔法使いとちゃうから、漠然とやったけど……あ、あった」

答えながら、はやては探し物を見つけた。

はやて「とりあえずわかった事が一つだけある。闇の書の主として守護騎士達みんなの衣食住なんかを、キッチリ面倒見なアカンゆうことや」

「え？」

「は？」

はやての言葉に、ポニテールの女性と赤い髪の少女ヴィータがポカンとなる。

はやて「幸い住むトコはあるし、料理は得意や。みんなのお洋服、こ買うてくるからサイズ測らせてな」

そう言ってはやては、手に持ってるメジャーを伸ばした。

はやての少しズレた考えに、守護騎士達は呆然とする。

はやて「ほんならまず…えっと……」

ポニテールの女性を見つめながら、はやてが悩む。

シグナム「私はベルカの騎士ヴォルケンリッターが将。『剣の騎士』シグナムと申します」

ポニテールの女性、シグナムが自己紹介した。

ヴィータ「あたしは『鉄槌の騎士』ヴィータ」

赤い三つ編みの女の子、ヴィータも自己紹介した。

シャマル「私は『湖の騎士』シャマルです」

金髪の女性、シャマルがヴィータに続いて自己紹介した。

ザフィーラ「『盾の守護獣』ザフィーラ」

最後に獣の耳と尻尾がある男性、ザフィーラが名乗った。

はやて「ほんなら、シグナムからサイズ測ろうか」

笑顔ではやてが言う。

はやての、これまでの主とずいぶん違った接し方にシグナム達は戸惑ったが、悪い気はしなかった。

この時、守護騎士も、はやても、誰も気付いていなかった。闇の書の中に眠る強大な『悪』の存在を。

その『悪』の鼓動に、誰も気付いていなかった。闇の書の中に眠る『悪』は、静かに時を待った。自分が復活する時を。
だが、誰も知っているはずのないそのことを知っている者達がいた。

「ようやく、闇の書が目覚めたか」
「ああ」

八神家の上空に浮かぶ二つの影黒いローブまとっており顔は見えない。
だがこの二人はある男の配下だった。

「さあ、早くこの事をジュド様にご報告するぞ」
「ああ、もうすぐなのだな。我等の悲願がかなうのは」
「そうだ」
「ククク、楽しみだな」

そういって二つの影はその場から消えた。
戻ったのだ。
ジュエルシードをめぐり、剣心達万事屋と争った男、魔人族の首領ジュドの元へと

時は流れ。１２月１日。
時空管理局艦船アースラ内。

「管理局本局へのドッキング準備、全て完了です」
リンディ「ん～予定は順調ね」

砂糖とミルクの入ったお茶を飲みながら、リンディ・ハラオウンは頷いた。

エイミィ「やっと私達も一休みできますね」

エイミィ・リミエッタがやってきた。

リンディ「そうねぇ」
エイミィ「レティ提督の方は大変みたいですけど…」
リンディ「一級捜索指定のロストロギアで、捜索担当班は大変みたいね、頼んでおいた例の魔人族とか言う連中の所在も全く掴めてい

ないそうだし…」

リンディはため息をついた。

アースラの戦闘訓練室。

フェイト・テスタロッサとアルフ、クロノ・ハラオウンの三人が戦闘訓練を終えた。

アルフ「はぁ～疲れたぁ～」

背伸びをしながらアルフが訓練室を出た。その後ろをフェイトとクロノが歩く。

フェイト「アルフ、クロノ。お疲れ様」

アルフ「フェイトもお疲れ～」

クロノ「ああ、お疲れ」

三人は汗をタオルで拭きながら廊下を歩いた。

クロノ「じゃあ僕はシャワーを浴びてくるよ」

フェイト「うん」

フェイト達と分かれて、クロノはシャワー室へ向かった。

プレシア「フェイト、アルフ」

廊下の向こうから、プレシア・テスタロッサが二人に声をかけた。

フェイト「母さん」

二人はプレシアに駆け寄った。

プレシア「二人ともお疲れ様。おやつ作ったんだけど、食べる？」

フェイト「うん！」

アルフ「わ～い！」

二人は喜びながら、プレシアと一緒に部屋に向かった。

部屋に入った三人は、おやつを食べながら話をしていた。

プレシア「そういえば、もう少しで剣心達がこっちの世界に来れるのよね？」

お茶を飲みながらプレシアが言った。

アルフ「本当かい！？」

アルフが嬉しさのあまり席を立つ。

プレシア「うん。装置の調整がもう少しで完成するって、源外さんとララって子が言ってたよ」

フェイトも嬉しそうな表情をしている。

アルフ「あ～！早く剣心に会いたいなぁ！」

アルフは、剣心達との再会を楽しみにしながら、バクバクおやつを食べる。

プレシア「アルフ、一人で食べ過ぎよ」
アルフ「は～い」

プレシアに注意されて、アルフは少しへコんだ。
そんな様子を見ながら、フェイトは微笑んだ。

フェイト（私も…早く会いたいな剣心達に）

一枚の写真を手に取って見る。
剣心達から送られた写真。写っているのは万事屋の七人。

１２月２日。
海鳴市の市街地。
闇の書を巡る戦いが始まる。

第三十訓　物騒な者が現れると新しい展開になる（後書き）

神楽「今回はここまでアル」

支配者「次から、物語のいいところに入ります」

銀時「次回を楽しみに待ってるこったな」

第三十一訓　ピンチのときに主人公は現れる（前書き）

支配者「はい、今回はなのはとヴィータの出会いの話です」

なのは「とても、出会いって呼べる感じゃないけど…」

支配者「スイマセンね。原作をモチーフにしてますんで」

フェイト「リリカル剣魂スペシャル第三十一話始まります」

第三十一訓　ピンチのときに主人公は現れる

なのはたちの世界

なのははレイジングハートと一緒に魔法の練習をしていた。

なのは「どうかな？レイジングハート」

レイハ『お上手ですよ。マスター』

なのは「そうかな。そうだと良いんだけど」

レイハ『すばらしいです。並の魔導師でこうは行きませんよ』

レイジングハートの言葉になのはは笑顔で答える。

なのは「でも・・・まだまだだよ。銀さんたちに比べたら私なんか全然」

レイハ『ですがマスター、彼らは魔導師ではありませんよ？』

なのは「魔導師じゃないからこそだよ。私なんかレイジングハートがいなきゃ何にもできないけど、でも銀さんたちは魔力なんかなくても私よりずっと強いもん」

レイハ『ご謙遜過ぎませんか？マスター』

レイジングハーとは心配そうになのはに聞くが

なのは「大丈夫。だからこそ努力してるんだよ。フェイトちゃんの話だと、もうすぐ銀さんたちがこっちにこれるみたいだし、前より強くなった私を見てもらうんだ」

レイハ『そうですか。ではもう少しがんばりましょうか』

なのは「うん」

銀時達が自分達の世界から、元世界に返っておよそ5ヶ月もたって

いた。努力の甲斐あってかなのはの魔力は以前よりもアップしていた。

そして、銀時への愛も

なのは（銀さん、早く会いたいな♪）

なのはもフェイトたち同様彼らとの再会を楽しみにしていた。

その日の夜
なのはたちの町の上空に二つの影があった。

「確かなのか？ヴィータ？」
「ああ、間違いねえよ。ザフィーラ。最近ここいらから凄い魔力を感じてんだ。こいつを捕まえりゃ一気に２０ページくらいはいくはずだ」

その二つの影はヴォルゲンリッターの二人、鉄槌の騎士ヴィータと盾の守護獣ザフィーラである。

ザフィーラ「別れて探そう。闇の書は預ける」
ヴィータ「ＯＫ、ザフィーラ、あんたもしっかり探してよ」
ザフィーラ「心得た」

そういって、ザフィーラはヴィータからはなれた。そしてヴィータは自分のデバイス、グラーフアイゼンを構える。

ヴィータ「行くよ。グラーフアイゼン、封鎖領域展開！！」

グラ『イエッサー』

ヴィータがそう叫ぶと、巨大な魔法陣が現れた。ヴィータはしばらくそこでじっとし、大きな魔力反応を感じた。

ヴィータ「・・・魔力反応、大物見っけ！」

ヴィータはそういって、魔力反応のあった場所に飛んでいった。

そこは海鳴市の市街地。
高町なのはのいるところ
そしていきなり、なのはは、謎の襲撃者に襲われた。
襲撃者はヴォルゲンリッターのヴィータ。赤いドレスのような恰好で、手にはハンマーのような物を持っている。
なのはもバリアジャケットを着て、レイジングハートを構える。
ヴィータは鉄球を上に上げて、なのはに向かったて鉄球をハンマーで打った。
障壁を張ってなのはは、鉄球を防いだ。同時に二つの桜色の魔力弾を出した。
ヴィータ「どらぁあああ！！」

ハンマーを振り下ろしながら、ヴィータがなのはに迫る。
なのはは横に飛んで、ハンマーをかわした。

なのは「いきなり襲い掛かられる覚えはないんだけど…！」

空中で止まって、ヴィータに向き直る。

なのは「どこの子!?一体なんでこんな事するの!?」

大きな声でヴィータに理由を尋ねる。

ヴィータは黙って指の間に、新たな鉄球を出す。

なのは「教えてくれなきゃ、わからないってばァ!」

そう言ってなのはは、先ほど出した二つの魔力弾『ディバインシューター』を操作して、ヴィータの背中目掛けて放った。

ヴィータは一発目を避けて、二発目を障壁で防いだ。

ヴィータ「このやろぉおおお!!」

ヴィータは怒りながらハンマーを振り上げて、なのはに襲い掛かる。

振り下ろされるハンマーを、なのはは後ろに飛んでかわした。レイジングハートをシューティングモードにして、距離をとる。

なのは「話を!」

レイジングハートを構える。

なのは「聞いてってばァ!!」

ヴィータに向かってディバインバスターを放つ。

ディバインバスターはヴィータの左側を掠った。その時に、ヴィータがかぶっていた帽子が落ちてしまった。

落ちていく帽子を見ながらヴィータは怒り、なのはを怒りの形相で睨んだ。睨まれたなのはは、少したじろいだ。

ヴィータは、足下に赤い魔法陣を展開する。

ヴィータ「グラーフアイゼン！カートリッジロード！！」

ヴィータが叫んだ後、ハンマーがガシャンと撃鉄を打った音を立てて、ハンマーの形が変わった。

なのは「え…え～！なッ、何で！？」

ハンマーの形が変わって、なのはが驚く。

ハンマーは片方の先の部分が尖って、もう片方の面は噴射口みたいだった。

ヴィータ「ラケーテン！」

片方の面がジェット噴射して、ヴィータは回転する。

回転の勢いを使って、なのはに襲い掛かる。なのははすぐに障壁を展開するが、簡単に破られ、レイジングハートに直撃してしまう。

「ハンマー！！！」

ヴィータはハンマーを振り抜き、なのははビルに向かって吹き飛ばされる。

なのは「あああああ！！」

窓ガラスを破って、ビルの中に突っ込んだ。

埃や煙が立ち込める中、なのはは咳をしながら立ち上がった。

ヴィータ「でぇえええい！！」

ハンマーを構えたヴィータが、突っ込んでくる。再び障壁を張って防ぐ。

ヴィータ「ぶち抜けェエエ！！」
グラ［了解］

ヴィータの叫びに、持っているハンマーが応えると、障壁は破られた。
バリアジャケットも破壊され、なのはは後ろに吹き飛び、壁に叩きつけられる。
ヴィータがなのはに近づく。
なのはは、なんとか傷ついたレイジングハートをヴィータに向ける。
なのはの前でヴィータはハンマーを振り上げる。

（こんなので…終わり？嫌だ……ユーノ君…クロノ君…剣心さん…フェイトちゃん…銀さん！！）

なのはは固く目を閉じた。
その直後だ。金属同士がぶつかる音が前で響いた。
なのはは、ゆっくりと目を開けて恐る恐る前を見た。
そこには黒いマントを羽織って、自分を護っているフェイトの姿があった。

ユーノ「ごめんなのは、遅くなった」

横から声をかけられて、なのはは見た。

なのは「ユーノ、君…」

隣にいたのは、ユーノ・スクライアだった。

ヴィータ「く…！仲間か！？」

ヴィータはフェイトから距離をとった。

フェイト「友達だ」

バルディッシュを鎌に変形させ、構えながらフェイトが答えた。

フェイト「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ」

ヴィータ「なんだテメェ？管理局の魔導師か？」

ハンマーを構えながらヴィータが睨む。

フェイト「時空管理局嘱託魔導師、フェイト・テスタロッサ」

一歩前に踏み出す。

フェイト「抵抗しなければ、弁護の機会がキミにはある。同意するなら武装を解除して」

バルディッシュを構えながら、一応武装の解除を促す。

しかし、ヴィータの答えは

ヴィータ「誰がするかよ！」

ヴィータはフェイトの制止の言葉を無視してビルの外へと勢いよく飛び出た。

フェイト「ユーノ、なのはをお願い！」

ユーノ「うん！」

すぐにフェイトは、ヴィータの後を追った。
残ったユーノは、なのはに回復の魔法をかける。
空中でヴィータとフェイトが対峙する。

フェイト「バルディッシュ」

フェイトは、バルディッシュの金色の魔力の刃をヴィータに向かって放った。
ヴィータも四つの鉄球をフェイトに向かって打ち放った。ヴィータは障壁を張って魔力の刃を防いだ。
フェイトは鉄球をかわすが、追尾型の鉄球はフェイトを追い続ける。
その時、突如現れたアルフがヴィータに拳を放った。ヴィータがアルフに意識を向けた瞬間、フェイトは上に避けて鉄球同士がぶつかった。
フェイトとヴィータがデバイスで打ち合う。十数回打ち合って、フェイトが一旦離れる。
その直後、アルフがバインドでヴィータの動きを止めた。

ヴィータ「く…！」

ヴィータが歯を食いしばる。

フェイト「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてもらうよ」

ヴィータにバルディッシュを向けながら言った。
しかしその時、突如フェイトの前に剣を持ったシグナムが現れた。
剣を横薙ぎに振り、フェイトはバルディッシュで防ぐが後ろに飛ばされる。

ヴィータ「シグナム」

ヴィータが呟いた。

ザフィーラ「おおおおお！！」

そして、別方向からザフィーラがやってきて、アルフに勢い良く蹴りを放った。

アルフ「ああっ！」

アルフは腕で防御するが、吹き飛ばされてしまう。

シグナム「レヴァンティン。カートリッジモード」

シグナムの持つ剣が撃鉄を起こす。

直後、剣が炎に包まれた。

シグナム「紫電一閃！！！」

フェイトに向かって剣を振り下ろす。

バルディッシュで剣撃を防ごうとする。バルディッシュは真っ二つに斬れてしまった。

シグナムが再び剣を振り下ろす。フェイトは障壁を張って防御する。

フェイトはビルの屋上に叩きつけられた。

アルフ「フェイト！！」

アルフがフェイトの元へ行こうとする。が、

ザフィーラ「逃がさん！」
アルフ「クッ！」
ザフィーラに行く手を阻まれた。

アースラ内。
結界によって、画面に現地の様子が映らない。局員達が結界の解析を急ぐ。

クロノ「何だあの術式は…術式が違う。ミッドチルダ式の結界じゃない」
エイミィ「そうなんだよ」

砂嵐の画面を見つめながら、クロノは表情を険しくし、エイミィは焦りの表情を浮かべる。
二人の後ろで、プレシアが心配そうに画面を見つめてる。現地の様子がわからなくて、プレシアの不安は大きくなる一方だった。

プレシア「フェイト…アルフ…」

プレシアは意を決して、黒い無線機を取り出した。
プレシア（まだ無理かもしれないけど……あの子達を助けて！剣心！！）
プレシアは無線機のスイッチを入れた。

シグナムはヴィータの前に浮かんだ。
シグナム「どうしたヴィータ？これ位の相手にてこずるとは油断でもしたのか？」
ヴィータ「うっせーよ。こっから逆転するとこだったんだ！」
シグナム「そうか。それは邪魔したな」
そう言ってシグナムは、ヴィータにかかってるバインドを破壊した。

シグナム「だが、あまり無茶はするな。無茶をして怪我でもしたら、我らが主が心配する」
ヴィータ「わーってるよ！」
ヴィータはそっぽを向いてしまう。
「ほら。落とし物だ。主から頂いた物なのだ。大切に持っておけ」
シグナムはヴィータの頭に、先ほど落ちた帽子をかぶせた。
ちなみに破損はシグナムが直してある。
ヴィータ「…ありがと。シグナム」
ヴィータは俯きながら礼を言った。
ユーノも加わって、状況は三対三になった。
シグナムは、フェイトが落ちた屋上に降り立つ。倒れてるフェイトに近づいた。
フェイト「く…！」
フェイトは、目の前に立つシグナムを見た。
シグナム「じっとしていろ。抵抗しなければ、命までは取らない」
そう言って剣を上に掲げる。
フェイト「だ…誰が……！」
フェイトは足に力を入れて立ち上がろうとする。

シグナム「いい気迫だ。だが…残念だがここまでだ」

しかし、シグナムは無常にも剣を振り下ろす。
フェイトは目を閉じた。頭に浮かんだのは一人の男。

フェイト（剣心！）

とても強く、自分が好きになった男の名を心の中で叫んだ。
直後、フェイトとシグナムの間に光が出現した。

シグナム「何っ！？」
フェイト「えっ！？」

驚いたシグナムは剣を止め、フェイトは目を開いて光を見た。
そして光の中から、一本の刀が現れ、シグナムに向かって突きを放った。

シグナム「くっ！」

シグナムは剣で刀の突きを防ぎ、光から離れた。
やがて光が収まり、一人の男が姿を現した。
フェイトは目を見開いて驚いた。フェイトはこの男を知っている。
赤い髪、赤い着物、そして、手に持っているのは変わった形の刀。

「怪我はないでござるか？」

男はフェイトに振り返った。

「久しぶりでござるな、フェイト殿」

笑みを浮かべながら、フェイトを見た。

「け…」

フェイトの顔が自然と笑顔になった。

「剣心っ！！」

大きな声で剣心の名を呼んだ。

剣心「まあ、再会を喜ぶのは後にするでござるよ」

剣心はシグナムに向き直った。

シグナム「貴様…何者だ？」

銀時に剣を向けながら、シグナムは鋭い眼で尋ねた。

「なに」

剣心は軽く笑みを浮かべた

剣心「唯の取りすがりの侍でござるよ」

第三十一訓　ピンチのときに主人公は現れる（後書き）

支配者「はい、今回の話しいかがでしたか？次はヴォルゲンリッター達との前哨戦です」

ナギ「私も出るぞ」

桂「俺やエリザベスも出る」

支配者「では、次回お楽しみに！」

第三十二訓　いろんなキャラが混ざるとそれだけややこしい（前書き）

支配者「今回はヴォルゲンリッター達とのバトルの前哨戦です」

未央「私やセツナも出るんだよね～」

支配者「そして、はやては意外な人物たちと出会います」

はやて「リリカル剣魂スペシャル第三十一話始まるで♪」

第三十二訓　いろんなキャラが混ざるとそれだけややこしい

空中ではザフィーラとアルフが戦っていた。

アルフ「ちっ！」

ザフィーラの攻撃に押され、アルフは防戦一方だった。

その時、

「わんっ！！」

上空から犬の鳴き声のようなものが聞こえた。

アルフ「えっ！？」

ザフィーラ「何だ？」

二人は思わず上を見た。

巨大な白い犬のような生き物が、ザフィーラに向かって上空から突進…というか落ちてきた。

ザフィーラ「なっ！？」

最初は驚いたが、すぐにザフィーラは障壁を張って防御した。白い犬はザフィーラの障壁にぶつかり、ザフィーラと白い犬はそのまま真下にあるビルの屋上に落ちた。

アルフ「な…何だいあの犬！？」

アルフが驚いていると、

「定春ゥウウウ！！」

また上空から声が聞こえた。
しかし、今度のは聞き覚えのある声。
アルフはまた上を見た。そこにいたのは、傘を持った赤いチャイナ服を着た少女だった。

アルフ「今の声って…神楽！？」

アルフは少女の名を叫んだ。

神楽「アルフ～！久しぶりアル～！！」

そのまま神楽は、定春とザフィーラが落ちた屋上に着地した。

神楽「定春～！」
定春「わんっ！」

神楽の声を聞いて、巨大な白い犬『定春』が駆け寄ってきた。

神楽「定春！無事でよかったアル！」

神楽は定春を抱きしめた。
アルフも屋上に降り立った。

アルフ「定春って……変わった名前だねぇ…ってか神楽のペットかい？」
神楽「可愛いでしょ？」

神楽は定春の頭を撫でる。
その時、ザフィーラが起き上がった。
神楽「定春、アルフ、下がってるアル」
ザフィーラを見て、神楽の目つきが変わった。
「ぬっ」
ザフィーラも神楽を睨みつける。
神楽「カモ～ン。ガキだと思ってナメてたら痛い目に遭うアルヨ～」
神楽がザフィーラと戦いが始まろうとしたその時
「ちょっと、待ちなさい神楽」
神楽「ん?」
青い長髪の少女が現れて神楽を呼び止めた。
アルフ「へ?…誰だいあんた?」
綾子「私?私は高須綾子よ」
突如現れた少女はアルフに対してこう名乗った。

その頃、ユーノもヴィータの攻撃に押されていた。

ヴィータ「ぶっ潰せェエエ！！」

ヴィータがハンマーを振り上げた直後、

「そこまでだ」

上空から声が聞こえた。

ヴィータ「えっ！？」

突然の声にヴィータは思わず驚いて上を見た。
上空から、刀を持った人物がヴィータに迫っていた。
そして、その人物が刀を振り下ろした。

ヴィータ「くっ！」

ヴィータはハンマーで、振り下ろされる刀を防いだ。
そのまま二人は屋上に着地した。刀を持った人物は一旦ヴィータか

ら離れた。
しかし、

「ねえ、あなた」
ヴィータ「!?」
「後ろががら空き何だけど?」

後ろからまた誰かの声が聞こえた。
ヴィータは思わず、その場から横の方向に飛んだ。

ヴィータ「だっ誰だテメェら!?」

突然の二人の乱入者にヴィータは怒鳴った。

乱入者は手に刀を持ち、黒い髪の毛を後ろに束ね、左目に眼帯を付けている。
もう一人のほうはピンク色の長髪に木刀を持っていた。
「柳生九兵衛(やぎゅうきゅうべえ)だ」
「柳生雛菊(やぎゅうヒナギク)よ」

隻眼でヴィータを見据えながら九兵衛と雛菊が名乗った。

「柳生…九兵衛?雛菊?」

屋上の真上にいるユーノは、首を傾げた。

「若ァアア!!姫ェエエ!!」

すると一人の男が九兵衛と雛菊と同じように、突然屋上の真上に現

れ、屋上に着地した。

「大丈夫ですか、若!?姫!?お怪我はありませんか!?」

長髪で目が細めで物腰柔らかそうな男、東城歩が九兵衛と雛菊に駆け寄った。

九兵衛「心配するな。」
雛菊「平気よ。怪我はなんてしてないから」
東条「そうですか。では…」

九兵衛と雛菊の返事に安心した東城は、どこからともなく鎧を取り出した。

東条「お二人とも。コレを着てください。雨が降りそうな天気なので」

と、東城が九兵衛と雛菊に鎧を着させようとした瞬間

ゲシッ!!

九兵衛と雛菊は無言で東城の頭に手刀を叩き込んだ。

なのはは、屋上でみんなの様子を見ていた。

なのは「剣心さん！神楽ちゃん！」

剣心達の姿を確認して、なのはも明るい表情になった。

他にも巨大な白い犬や、見たことがないの人が四人がいる。

犬の方は神楽ちゃんになついているから、神楽ちゃんのペットかな？あの三人は服装が銀さん達に似てるから、やっぱり銀さん達の知り合いなのかな？

一人だけなんか違うような気がするけど

と、なのはが考えていると、

「よぉ～なのは」

「なのはちゃん」

「なのは、ひさしぶり」

「なのは、大丈夫ですか？」

後ろから名前を呼ばれた。

なのはは振り返って後ろを見た。そこには志村新八とセイバーと自分の大好きな人、坂田銀時がいた。

なのは「銀さん、新八さん、セイバーさん、シャナちゃん！」

銀時「久しぶりだな」

新八「久しぶり、なのはちゃん」

シャナ「久しぶり」

セイバー「お久しぶりです」

なのはは笑顔で銀時と新八とセイバーとシャナの名を呼び、銀時と新八とセイバーシャナも笑顔で応える。
ふと、なのはは新八の隣にいる二人の女性と二人の男性に気付いた。

新八「紹介するね。僕の姉上の志村妙と隣の道場に住んでる神谷薫さん、そして、知り合いのクルス・シルト君と吉村護君」

妙の方を見ながら、新八はなのはに紹介した。

妙「初めまして。志村妙です」
薫「神谷薫です」
クルス「クルス・シルトです」
護「吉村護です」

ニッコリ笑いながら、妙と薫が自己紹介をしクルスと、護が頭を下げて挨拶した。

なのは「は…初めまして。高町なのはです」

ペコリと頭を下げながら、なのはも自己紹介した。
その時、薫がなのはに話しかけて来た。

薫「あなたがなのはちゃん?」
なのは「あっはい…」
薫「フェイトちゃんって子はどこかしら?」
なのは「あっ、フェイトちゃんだったら……ッ!!?」

その時、なのはは笑顔の薫から物凄~く黒いオーラを感じた。

薫「ねえ…どこにいるの…?そのクソガ…じゃなかった女の子は?」

全員（妙以外）（ヒイイイイイイイイイイッ！！！？？）

薫は一瞬本音を言いかけたが、すぐに言いなおした。
皆さん、薫のこの黒いオーラの感じでお分かりだろう。
薫のこの黒いオーラはフェイトに対しての憎しみのオーラである。

薫（私だってまだなのに、ガキんちょの分際で剣心にこくった挙句，あろうことか剣心の唇を奪ったですって～！！（激怒））

そう、あのあと、銀時達は薫に帰ってきてからの剣心の様子がおかしいのでなにがあったのかと問い詰められて、ついしゃべってしまったのだ。
だから、薫は剣心の唇を奪ったフェイトに復讐しようと今回付いてきたのだ。
薫は笑顔だが発せられている黒いオーラが当然もの凄く怖かった。
そして妙以外の全員が薫のオーラにおびえていたのだった。

銀時「…そッ…それにしてもなんだか大変な事になっ…なってるみたいだな…アッハハハハ」

状況を見ながら銀時が何とか無理やり話を切り替えた。。

新八「でも僕達が来たからには、もう大丈夫だよ！助っ人もいっぱい連れてきたから」

なのはを安心させるために、新八が力強く言った。

「はい！…って助っ人？」

新八の言葉に、なのはは笑顔で頷いたが、助っ人と聞いて驚いた。

シャナ「ん?そういえばヤミは?」

その頃、神楽たちは

アルフ「あっ…綾子?神楽の知り合いかい?」
神楽「そうアル!綾子の姉御アル」
アルフ「あっ姉御!?」

神楽に目の前にいる綾子を姉御と呼んだので驚いた。
そして、綾子は神楽に振り返った。

綾子「こいつは私がやるから、神楽はその子を連れて下がっててくれる?たまには運動したいから」
神楽「了解アル!」
アルフ「え…ちょっと神楽!?」

神楽はアルフを抱えると定春に乗ってその場から離れた。

そして、綾子はザフィーラに振り返った。

ザフィーラ「俺も見くびられた物だな。」

綾子「何が？」

ザフィーラ「お前からは全く魔力を感じん。そのような者が一対一で俺とやるつもりか？」

綾子「言ってくれるじゃない。之でも私、魔女；ベアトリーチェとか呼ばれてるんだけど？」

ザフィーラの言葉に綾子は余裕の表情で答える。

ザフィーラ「ほう、ならばその魔女とやらの実力を見せてもらおうか！」

綾子「望むところっ！」

こうして綾子とザフィーラの戦いがはじまった。

その頃、アルフと神楽

アルフ「ちょっ、ちょっと神楽あの子放っておいていいのかい！？」
神楽「大丈夫アルよ」

アルフは神楽が綾子を一人あの場に残して引き上げたことに納得がいかなかった。

アルフ「大丈夫って…あいつ相当強いよ！あの子一人だけなんて」
神楽「問題ないね！綾子の姉御は私より強いアル！」
アルフ「ええっ！神楽よりも！？」

神楽の言葉を聞いてアルフは驚いた。

その頃、ヴィータと九兵衛達

ヴィータ「うぉおおおお！！」

ヴィータが叫びながら、グラーフアイゼンを振り下ろす。
それを九兵衛は刀で『受ける』のでなく『受け流して』グラーフアイゼンを捌き、ヴィータに向かって剣撃を放つ。
ちなみに2対1では卑怯だからと雛菊は離れた場所で東条と一緒にその戦いを観戦していた。

九兵衛「はあっ！」
ヴィータ「くっ！」

ヴィータは紙一重で剣撃をかわす。

ヴィータ（まただ！）

一旦、九兵衛から離れる。

ヴィータ（コイツ…力を力で受けるんじゃなくて、私の力を受け流して攻撃してきやがる！）

九兵衛を睨みながら、グラーフアイゼンを構える。

ヴィータ「なら、これでどうだ！」

鉄球を四つだして、九兵衛に向かって打ち放った。
それを九兵衛は、無駄のない小さな動作で素早く鉄球をかわす。だが追尾型の鉄球は、また九兵衛に迫る。避けても無駄だと判断した

九兵衛は動きを止めた。

ヴィータ（諦めたか？）

ヴィータがそう思い、鉄球が九兵衛に当たる直前、

九兵衛「はあっ！！」

九兵衛は神速の速さで刀を振るった。

四つの鉄球は、それぞれ真っ二つに斬れた。

ヴィータ「う…嘘だろ！？」

ヴィータは驚愕の表情を浮かべた。

東条「おおっ！さすがは若！」

雛菊「まあ、姉さんならあれ位は楽勝ね。それにあの子の攻撃って力任せすぎるのよ」

九兵衛の戦いを見守っている東城が声を上げ、雛菊は当然という顔をしていた。

九兵衛はヴィータに向き直った。

九兵衛「まだ続けるか？」

ヴィータ「ちっくしょう！だったらこれでどうだ！アイゼン！！」

グラ「イエッサー」

ヴィータは叫ぶとグラーフアイゼンを構える。するとグラーフアイゼンのカートリッジがロードされ巨大化した。

九兵衛「なっ！？」
ヴィータ「これなら受けようがねえだろ！ブッ潰れろ！！ギガントシュラーク！！」

そういってヴィータは巨大化したグラーフアイゼンを九兵衛に向けて振り下ろした。

東条「まずいっ！あれでは受け流せない！若！！」
雛菊「姉さん！！」
九兵衛「クッ！」
ヴィータ（勝った！！）

ヴィータがそう思ったその時

ガシッ！！

ギガントシュラークが九兵衛に振り下ろされる前に途中で止まったのだ。

九兵衛「えっ！？」
ヴィータ「なッ！？（ギガントシュラークが止まった！？）」

ヴィータはギガントシュラークが途中で止まったことに驚いた。
ちなみにそれを止めたのは

「うんしょっと…九兵衛おねえちゃん大丈夫～」

九兵衛よりも小さいピンクのセミロングに黄色いリボンの女の子が後ろにいる九兵衛に話しかけた。

「「未央（殿）！？」」

そうそれを止めたのは未央だったのだ。
未央は小さいがパワーの能力者である。小さい体からは創造できないほどの怪力の持ち主なのだ。

ヴィータ（ウッ嘘だろ！まさかあんなチビが止めたっていうのか！？）

ヴィータは驚きを隠しきれなかった。それもそうだ。自分よりも小さな女の子があの巨大なアイゼンを簡単に受け止めたのだから。

そしてその後ろに青髪の少女が現れた。

セツナ「未央、それをあいつに返してやんなさい！」

そう、それはセツナであった。

未央「了か～いセツナ♪そうれっと！！」
ヴィータ「ウオわッ！！」

ヴぃータは未央の怪力に押されて後ろに飛ばされた。

セツナ「九兵衛さん、大丈夫？」
九兵衛「ああ、すまない、助かった」
ヴィータ「クソッ！何だ次から次へと！何なんだてめえらは！！」

ヴィータが凄い剣幕で突然現れた二人に怒鳴った。

セツナ「私たち？私はセツナ、この子は未央よ」

未央「よろしく～」

セツナと未央はヴィータに軽い感じで挨拶するのだった。

ちなみにユーノは目の前の光景に口を開けて唖然としていた。

ヴォルゲンリッターと超銀魂世界の者達が戦い始めたその頃、八神家では

はやて「皆遅いな～どないしたんやろ？」

はやてがいつまでたっても帰ってこないヴィータ達のことを心配していた。

はやて「様子見てくるって言うてたシグナムたちも帰ってこうへんし・・・なんかあったんやろか？」

はやてがシグナム達の心配していると

ドサァ！！

はやて「！！なッなんや、今の音！？」

突如庭先から何かが落ちてきた音がした。

はやて「まッまさか泥棒！？」

はやては思わずバットを持って、車椅子を引きながら玄関を出た。

はやて（皆が帰ってくるまでこの家はあたしが守るんや！）

はやては決意を固めて庭に出た。

だがしかし、庭にいたのは意外な人物たちだった。

「痛たた・・・ここはどこだ？」

「さあ・・・？俺にもここがどこだか」

「さあ…じゃないだろうが！！お前らいきなり装値に飛び込んできてどういうつもりだ！？」

少女が男の胸倉を掴む

「ナギ、気持ち分かりますが落ち着いて下さい」

『『落ち着いて』』

「うるさい！せっかく異世界に旅行に来たというのにこのバカ共のせいで全部台無しだ！しかもハヤテがいないし、ここはどこだか分からんし、どうしてくれるんだ！責任取れこのヅラ！！」

「ヅラじゃない桂だ！！」

「うるさいわ！おいヴィルヘルミナ！！このバカを叩きのめせ！！」

「了解であります」

「おっおい、気持ちはわかるが今は争って場合じゃないだろうが！落ち着け金田！！」

「ナギだ！一体何時になったら人の名前をちゃんと覚えるんだ！この能無しバカ！！」

「おいこら！今僕に向かって能無しバカって言ったか！？」

「ホントのことだろうが！このバカ！！」

「何だとぉー！いい度胸だ！！判決されたいらしいな！！」

「上等だ！やれるものならやってみろ！！」

「ちょっとあなた達いい加減に（ヤミちゃん？）…え？」

『ん？』

はやてはその場で喧嘩している者達の中に自分の知り合いがいることに気づきそこにいる者たちに話しかけた。

そこにいたのは、ヤミ、三千院ナギ、イヴ・ノインシュヴァンシュタイン、桂小太郎、エリザベス、梔、ヴィルヘルミナの七人であった。

第三十二訓　いろんなキャラが混ざるとそれだけややこしい（後書き）

支配者「はい、今回の話しいかがでしたか？次はヴォルゲンリッター達との最初のバトルの決着編です」

ナギ「おいこら作者！何で私があんな目にあっているのだ！」

イヴ「そうだぞ！何で僕まで巻き込まれてるんだ！」

支配者「物語を面白くするためです。我慢してください」

ナギ・イヴ「ふざけるなァー！！」

支配者「では、次回お楽しみに！」

ナギ・イヴ「人の話をちゃんと聞けぇー！！」

第三十三訓　因縁の相手との縁は切っても斬れない（前書き）

支配者「今回は剣心対シグナムの対決などのお話です。そしてついに因縁の相手が登場！！」

剣心「リリカル剣魂スペシャル第三十三話始まるでござるよ」

第三十三訓　因縁の相手との縁は切っても斬れない

綾子ＶＳザフィーラ。

綾子「はあああああ！！」

ザフィーラ「うぉおおおお！！」

雄叫びを上げながら、互いに拳を放つ。

二人の拳は激突し、腕に衝撃が走る。すかさず綾子は蹴りを放つ。

ザフィーラは障壁を張って防御する。

綾子「くあああああ！！」

綾子は障壁に凄まじい拳の連打を浴びせる。

激しい音を立てながら、障壁に拳を叩き込む。やがてビシッビシッと障壁にヒビが入る。

ザフィーラ「何っ！？」

ザフィーラは動揺した。無理もない。目の前にいる少女が魔力も何も籠っていない唯の拳で自分の障壁に亀裂を走らせたのだから。

綾子「うりゃあああああ！！」

綾子は、更に力を込め今度は蹴りをを放った。

蹴りは障壁を粉々に砕き、ザフィーラに届いた。

ザフィーラ「ぐっ！！」

ザフィーラはなんとか両腕で綾子の拳を防御した。

ザフィーラ（何だこの少女の力は！？明らかに人間の力を超えている！）

ザフィーラがそんな事を考えている間にも、綾子はザフィーラに迫る。

拳と蹴りの打ち合いになった。

ザフィーラ（魔女などと唯の冗談かと持ったが・・・）

ザフィーラは綾子の凄まじい強さに驚いていた。

ザフィーラ（もはや人などとは思わん！！）

ザフィーラは目を鋭くして綾子を見た。

ザフィーラは素早く綾子の腹に蹴りを叩き込む。腹を蹴られた神楽は口から涎を吐くが、すぐに左手でザフィーラの足を掴み、右足でけりをザフィーラの足に叩き込んだ。

「ぐぁあああ！！」

蹴りで足をやられたザフィーラは悲鳴を上げた。

だがいつまでも痛んでる場合ではない。ザフィーラは綾子の顔に拳を振るった。しかし、綾子は紙一重でザフィーラの攻撃をかわした。

その直後、ザフィーラの顎に衝撃が襲った。綾子がザフィーラの顎に蹴りを入れたのだ。

ザフィーラ「ぐあっ！！」

ザフィーラは後方によろけた。

綾子「これでおわりっ！！」

そして綾子は飛び上がってとどめの一発であるかかとお年をザフィーラの脳天に食らわせた。

ザフィーラ「ぐあああああああっー！！」

ザフィーラは勢いよく地面に叩き落された。

綾子「あんたも結構やるじゃない。けど私の勝ちみたいね」

倒れたザフィーラを見つめながら、綾子が言った。

ザフィーラ「ぐ…！」

口から流れた血を拭きながら、ザフィーラが立ち上がった。

アルフ「むっ…無茶苦茶強い」

離れた場所で戦いを見ているアルフは、綾子の実力に驚いた。

「わんっ！」

神楽「当然アル！」

アルフの隣で定春と神楽は、綾子にエールを送っていた。

その頃、シグナムは、屋上で剣心と対峙していた。

シグナム（一体何者だ、この男は？）

剣を構えながら、シグナムは剣心を見つめた。

シグナム（魔力は全く感じない…魔導師ではない……だが…）

剣を握る手に力を入れる。

シグナム（この男…強い！）

鋭い眼光を剣心にぶつける。

対する剣心は、対して緊張した様子もなくシグナムを見ていた。

剣心「やれやれ…お主、怖い顔していると、せっかくの綺麗な顔が台無しでござるぞ？」

シグナム「なっ！？」

剣心の言葉に、シグナムは少し動揺する。

剣心の後ろにいるフェイトは、少しムッとした顔になる。

剣心「そんな物騒なものは鞘に収めてとりあえず話を聞かせて・・・」

と、剣心が言いかけた所で、

グサッ！

フェイトが無表情で剣心の後頭部に、バルディッシュの魔力の刃を刺した。

剣心「オロォオオオオオ！？」

後頭部を押さえながら、剣心が悲鳴を上げた。

剣心「フェ…フェイト殿！？いきなり何を！」

剣心は涙を流しながらフェイトに怒鳴った。
プイッとフェイトは無言でそっぽを向いた。

剣心「フェ…フェイト殿。助けたのに、それはないんではござらぬか？拙者がいったい何をした？」

剣心が、そっぽを向いてるフェイトに話し掛ける。
が、フェイトはそれを無視。

シグナム「ん…コホンッ！」

二人の様子を見ていたシグナムが、わざとらしく大きな咳をした。
そこで二人はようやくシグナムに向き直った。

剣心「あ…済まぬでござる」
と、剣心が謝った。

気を取り直して、シグナムが剣を構える。

シグナム「貴様が何者か知らんが、邪魔をするなら容赦はしない」

殺気をぶつけながらシグナムが言った。

剣心「フェイト殿下がっていろ」

フェイト「うん。剣心…気をつけて」

フェイトは後ろに下がり、剣心は逆刃刀を構えた。

剣心ＶＳシグナム。

侍と騎士の対決が始まる。

その頃、

未央「未央ちゃんぱ～んち！！」

ドガアッ！！

ヴィータ「グアアアア！！」

ヴィータが未央にボコボコにされていた。ヴィータは未央のパンチでビルの屋上に叩きつけられた。

ヴィータ「ちっくしょう！調子に乗るんじゃねえ！！」

ヴィータが怒って未央に反撃しようとしたその時、

セツナ「はい、そこまで」

ガシッ！

ヴィータ「ヌアッ！」

セツナがスピードの能力でヴィータに接近し、後ろから起き上がったヴィータを押さえつけた。

ヴィータ「ちくしょう！離せ！！」

ヴィータはもがくがセツナは離れない。

セツナ「離す前に言う事があるでしょ？何でこんなことしたわけ？」

セツナはヴィータを押さえながらそう訪ねるが、

ヴィータ「うるせえ！てめえらには関係ねえだろ！！」

ヴィータは叫ぶばかりで答えようとはしなかった。

雛菊「全く…これじゃ話にならないわね」

東条「若、この者どういたしますか？」

九兵衛「そうだな…とりあえず銀時達のところへ連れて行こう」

セツナ「それが良いわね」

九兵衛とセツナがそう考えたその時である。

「困るなぁ～、そんなことをされては」

九兵衛・雛菊・東条

『なッ！？』

ヴィータ「えっ！？」

ドガアッ！！

セツナ「グアッ！！」

未央「セツナ！？」

突然、黒いフードの男が現れて、ヴィータを押さえつけているセツナを蹴り飛ばした。

「こいつを今、時空管理局に引き渡されちゃ困るんだよ」

謎の男は九兵衛達にそう話しかける。

ヴィータ「なっなんだ、お前…」

ヴィータは急に現れたその謎の人物にそうたずねた。

「俺のことなんかどうでもいいだろ。それより早く引き上げねえとお前らの主が心配するぜ？」

ヴィータ「！！」

ヴィータはその言葉で我に帰ったのか、その場から勢いよく飛び出して行った。

雛菊「ちょっ！あなた、待ちなさい！！」

雛菊の言葉で全員がヴィータを追おうとするが

「お～ッと、ここから先は通行禁止だぜ」

黒フードの男が九兵衛達の前に立ちはだかった。

九兵衛「貴様、何者だ！」

九兵衛が目の前の男に険しい顔つきでそう怒鳴った。

「おれかぁ？おれは魔人族四天王の一人『音速』のゼルバン様だ」

謎の男は九兵衛たちに向かってそう答えた。

ビルの屋上で、剣がぶつかり合う音が響く。

逆刃刀『真打』とアームドデバイス『レヴァンティン』が火花を散らせてぶつかる。

シグナム「く…！」

シグナムは剣心に苦戦していた。

シグナム（速い！何だ？この男の剣は！？）

シグナムは剣心と剣を交えて思った。剣心は凄まじく早い剣戟を次から次へと繰り出している。

この男の剣には、決まった『型』はある。しかし、動きが速く変幻自在だった。。

シグナム（正規の剣術ではあるようだが…いったい何の流派なんだ！？）

今まで出会った事がない剣心の剣筋に、シグナムは苦戦していた。剣筋が読み難いだけでなく、この男自身の身体能力も高い。力と速さ、反応速度が並の人間を大きく超えている。魔法を使わず、純粋な剣の腕のみでベルカの騎士の私と剣を交えている。まあ、気も使っているんだけどね

シグナム（今まで戦ってきた剣士の中にもこんな相手はいなかった…こんな人間は初めてだ！）

二人の剣の打ち合いはドンドン激しさを増していく。

剣心「はあああああ！！」

剣心が両手で持ちながら、逆刃刀を上段から振り下ろした。

ガキィン！！

シグナム「くっ！」

シグナムは剣を頭上に構えて、逆刃刀の一撃を防いだ。
剣心は、素早く逆刃刀を引いて今度は右手に持ち替えて、横薙ぎの一撃を放った。シグナムも反応して剣で木刀を防ぐ。
戦況はシグナムが押され始めていた。

シグナム（強い…くっ！やむを得ん！）

シグナムは一旦、剣心から離れて距離をとった。

シグナム「レヴァンティン！カートリッジロード！！」

レヴァンティンが撃鉄を起こした。
直後、レヴァンティンの刀身が炎に包まれた。

剣心「な…！？（シャナ殿と同じ炎の剣！？）」

それを見た剣心は、驚いた顔をする。

シグナム「紫電一閃！！！」

高速で剣心に接近し、炎を纏ったレヴァンティンを振り下ろした。
振り下ろされたレヴァンティンによって床が砕け、辺りに煙が立ち込めた。

フェイト「剣心！！」

下がって戦いを見守っていたフェイトが叫んだ。
レヴァンティンの炎が消えた。シグナムは悲痛な顔で煙を見つめた。

シグナム（すまない…殺すつもりはなかったが…コレを使わなけれ

ば、私がやられていたかもしれんのだ）

シグナムが心の中で剣心に対してそう思った直後、

「やれやれ」

煙の中から声が聞こえた。

シグナム「！！？」

シグナムは目を見開いて煙を見た。

煙は晴れていき、中から服を埃だらけにし、頭から少し血を流した剣心の姿が現れた。

剣心「全く…危ないでござるな。当たったらどうするつもりでござるか」

いつもと変わらぬ口調で剣心が言った。

シグナムとフェイトは驚愕した。いや、一番驚いているのは、やはり技を放ったシグナムだった。

シグナム（ば…馬鹿な！！紫電一閃を初見でかわしただと！！？）

シグナムは驚愕を隠せなかった。

今までこの『紫電一閃』を初見でかわされた事は一度もない。

シグナム（この男の実力…甘く見ていたワケではないが……！）

再び剣心から距離とって、シグナムは剣を構え直した。

だが、さすがに今度は剣心もシグナムを追って距離を縮めた。

剣心が横薙ぎに逆刃刀を振るうと、シグナムは上に飛んで避けた。

「！」

剣心は、空に飛んだシグナムを見上げた。

シグナム「我らは負けるワケにはいかないのだ！レヴァンティン！」

シグナムが叫んだ直後、レヴァンティンは連結刃形態『シュランゲフォルム』となった。

剣心「ちょっ！ちょっと待てお主！何だそれは！？それもう『剣』じゃないでござるよ！？」

シュランゲフォルムを見て剣心が思わず叫んだ。

シグナムは構わず連結刃で剣心を攻撃した。

剣心「くっ！」

剣心は横に跳んで刃をかわした。

連結刃は蛇のように動き、剣心を翻弄する。

シグナムは連結刃の刃に紫色の炎を纏わせた。

シグナム「…すまない」

シグナムは小さな声で、剣心に謝罪をした。

そして炎を纏った連結刃を操る。

シグナム「飛竜一閃！！！！」

炎を纏った連結刃を剣心に放った。
屋上は大爆発を起こした。

「シグナム！？」
「何だ！？今の爆発は！？」
「お～お～派手にやってるねぇ～」

周りで戦ってる人達の意識が、シグナム達が戦ってるビルに向いた。
ビルの屋上には大きな穴が空き、中から煙が立ち上る。

フェイト「け…剣心…？」

フェイトはゆっくりと穴に近づいた。
剣心が負けた？死んだ？
フェイトの目に涙が浮かんだ。

フェイト「剣心ンンン！！」

フェイトの叫び声が響いた。
空中に浮いてるシグナムは、肩で息をしていた。

シグナム（赤髪の男…せめて倒す前に、お前の名を知りたかった……）

シグナムは静かに目を閉じた。
そしてシュランゲフォルムを解除しようとするが、

シグナム「えっ？」

何かに引っ掛かっているのか、連結刃がピンッと真っ直ぐに張っていて戻らない。

シグナム（レヴァンテインが何かに引っ掛かっている？一体何に……）

シグナムがそう考えた時、

「全く…お主は」

下から声が聞こえた。

シグナムは額から汗を流した。ゆっくりと声がした方……屋上に出来た穴を見た。

声を聞いたフェイトも穴を見た。

煙が晴れて、屋上の下の階にいる一人の男が姿を現した。

剣心「今のは正直怪我ではスマンでござるぞ」

連結刃を逆刃刀に絡め、両手で木刀を上段に構えている剣心が立っていた。

右肩には連結刃でやられた傷があった。

フェイト「剣心！！」

シグナム「な…！？（バカな！飛龍一閃まで防いだというのか！？）」

フェイトは嬉しさで剣心の名を呼び、シグナムは目を見開いて驚愕した。

剣心「すまぬが…お主らにも譲れぬ物があるようだが…」

逆刃刀を持つ両腕に力を入れる。

剣心「拙者にも譲れぬ物がある！！」

そう言って剣心は、思いっきり逆刃刀を振り下ろした。

シグナム「うわあっ！！」

レヴァンティンを持ってるシグナムは、引っ張られて屋上に叩きつけられた。

床は砕け、シグナムも剣心がいる階に落ちた。剣心は絡めた連結刃を解いた。

シグナム「くっ！」

シグナムは立ち上がって、シュランゲフォルムを解除し、元の長剣に戻した。

剣心「お主らにどんな理由があるのか知らぬが・・・」

逆刃刀を突きつけながら、シグナムに言った。

剣心「この剣の範囲に届く者を守ると拙者はそう決めている」

鋭い眼光をシグナムにぶつける。

剣心「拙者の大事な物を傷つける者は何であろうと…」

両手で木刀を握って構える。

シグナムも刀身を炎で包んで構える。
フェイトは屋上から戦いを見守る。

剣心「この剣の一撃にて沈んでもらう！！」

二人は同時に地を蹴って動いた。

剣心「九頭龍閃！」
シグナム「紫電一閃！」

すれ違い様に二本の刃が振り下ろされた。
二人の動きがピタリと止まった。
わずか二、三秒の沈黙の後、

シグナム「…無念」

ドサッ

シグナムが床に倒れた。
剣心は逆刃刀を腰に差した。

フェイト「剣心！！」

フェイトが剣心に駆け寄った。

フェイト「剣心！大丈夫！？」
剣心「心配いらんでござるよ。フェイト殿」

そう言って剣心は、フェイトの頭に手を乗せた。

シグナム「ん…」

シグナムは意識を取り戻した。うっすらと目を開ける。

シグナム「あ…私は……」

ゆっくりと体を起こした。

剣心「お主」

声をかけられて見ると、剣心とフェイトがすぐ側に座っていた。

シグナム「き…貴様ら…！？」

シグナムはすぐに立ち上がろうとしたが、

シグナム「ぐっ…！」

剣心にやられた傷が痛んで、立てなかった。

剣心「怪我をしているんだ。急に立ち上がろうとしたら危ないでござるよ」

そう言って剣心は、シグナムに手を差し出した。

シグナム「え…？」

シグナムは呆然となって、差し出された手を見た。

剣心「ほら」

シグナム「あ…ああ」

戸惑いながらも、シグナムは剣心の手を掴んで立ち上がった。

剣心「やれやれ。お主のせいで服がボロボロでござる」

服を叩きながら剣心が呟いた。

シグナム「…魔法を使わず、剣の腕だけで私を倒すとは…強いな」

剣心「なァに。お主も強かったでござるよ」

シグナムと剣心は、互いに笑みを浮かべた。

シグナム「私はベルカの騎士、ヴォルケンリッターが将。『剣の騎士』シグナム。貴公の名は？」

剣心「拙者は剣心。緋村剣心だ」

シグナム「剣心か…魔導師の方の名は？」

シグナムはフェイトに顔を向けた。

「時空管理局嘱託魔導師。フェイト・テスタロッサ」

「テスタロッサ…二人の名前、しかと覚えた」

互いに自己紹介をした。

先ほどまでの緊張感はなくなっていた。

「シグナム。貴女達の目的を教えてもらえませんか？」

フェイトが真剣な表情で尋ねた。

「…すまないが、それは言えない」

シグナムも表情を険しくして答えた。

フェイト「・・・そうですか。では申し訳ありませんがあなたを拘束させてもらいます」

シグナム「そッ、それは（それは困るな）！？」

突如、男の声が聞こえたと思うと

ズドォン！！

フェイト「キャア！！」

剣心・シグナム「なッ！？」

火炎弾らしきものが飛んできてフェイトを吹き飛ばした。

「困るのだよ。彼女を拘束されては」

剣心「きっ…貴様は！！」

その場の空中に突如として現れた男、剣心のように赤い髪に右目が機械でできている。その男。かつて、プレシア親子を利用し、まんまとジュエルシードを奪っていった魔人族の首領

ジュド「久しぶりだねえ、剣客君」

剣心「ジュド！」

再び、剣心達とジュド達魔人族の戦いの幕が上がろうとしていた。

第三十三訓　因縁の相手との縁は切っても斬れない（後書き）

支配者「次回は、いろんな事があります。ちなみにジュド対剣心の話ではありません」

銀時「おい、作者！」

支配者「ん？何ですか？」

銀時「何だよ！宇宙帝国アークスって！そんなとんでもない連中付け足してんじゃねえよ！！」

支配者「えっ！いまさらそれ言うの！？」

銀時「なんか言うタイミング逃してたんだよ！あいつらは何なんだ！言えコラ！！」

支配者「いっ今は秘密です～！」

銀時「言えっつってんだろーがぁー！！」

支配者「今後の展開で分かりますからそれまで待ってて下さいー！！では次回！！」

銀時「言いやがれー！！」

第三十四訓　いきなりあってアレをするなんてありえない（前書き）

支配者「今回はあのキャラが登場してシグナムにとんでもないことを言います」

シグナム「作者…とんでもない事とはいったいなんだ?」

支配者「それは見てからのお楽しみです」

ヤミ「リリカル剣魂スペシャル第三十四話始まります」

第三十四訓　いきなりあってアレをするなんてありえない

九兵衛「魔人族四天王？」
ゼルバン「そうさ」
首を傾げる九兵衛達にゼルバンと名乗った男はそう答えた。
雛菊「あなた、あの子の仲間なの？」
雛菊はゼルバンに向かって険しい顔をしながらそうたずねた。
ゼルバン「仲間ァ？ヒャ～ハッハッハ、あんな奴仲間なんかじゃねえよ」
九兵衛「では、何故逃がしたんだ？」
九兵衛がゼルバンに向かってその意味のない感じの行動の意味について尋ねた。
仲間でもないのに何故ヴィータを助けたのかと
しかし、ゼルバンは
ゼルバン「さあ、何故だろうなぁ？」
九兵衛の質問に真面目に答えようとはしなかった。
九兵衛「ならば，その理由をはいてもらおう！」
そういって、九兵衛は神速のスピードでゼルバンに近付き斬りかかった。
しかし、

ゼルバン「ハッ！」

ガシッ！

九兵衛「なッ！？」

ゼルバンは九兵衛の刀を簡単に受け止めた。

東条「若の剣を…」

雛菊「受け止めた！？しかもあんなにあっさりと！？」

東条と雛菊は驚いた。九兵衛の神速の剣をゼルバンは簡単に受け止めたからだ

ゼルバン「ホ～、なかなか早いじゃねえかよ。早え事はいいことだぜ」

九兵衛「くっ…」

ゼルバン「だが…俺には通用しねえ！」

そういって、ゼルバンは九兵衛を投げ飛ばした。

九兵衛「ぐあっ！」

東条「若！」

雛菊「姉さん！」

未央「九兵衛お姉ちゃん！」

東条達はゼルバンに投げ飛ばされた九兵衛に近付いた。

ゼルバン「悪いが俺はお前らにかまってられるほど暇じゃねえんだ。

用も済んだしな。あばよ！」
雛菊「ちょっと、待ちなさい！…くっ」
雛菊の制止の言葉もむなしくゼルバンは魔法陣に包まれその場から消えた。

その頃

ジュド「君に会うのは時の庭園での一見以来だねぇ、剣客君」
剣心「貴様・・・今度は何を企んでいる！」

剣心は突然現れたジュドを強く睨みつけながら怒鳴った。

ジュド「企むなどとは人聞きの悪い…私は唯人助けをしているだけだよ」
剣心「嘘をつくな！」

剣心は再びジュドを怒鳴る。

ジュド「まあ、どう思おうと君の勝手だよ」

ジュドは剣心を半分無視してシグナムに振り返った。

ジュド「さあ、今のうちだよ。早く引き上げたまえ」
シグナム「きっ…貴様はいったい」

ジュド「私のことはいいだろう。それより早く引き上げないと君の主が心配しているよ」
シグナム「・・・・・」
シグナムは黙って頷こうとしたその時、
ピカッ！
突然目の前が光に包まれた。
剣心・シグナム「なッ！？」
ジュド「ぬ！？」
「お～やっとついたか」
その光の中から現れたのは銀髪の男に黒コートの男だった。
シグナム（なっ、何だ？この男は？）
ジュド（こいつは？…）
シグナムとジュドはきゅうに目の前に現れたその男を見つめた。
剣心「ブッ…ブレイド殿（汗）」
そして、剣心はその男の名を呼んだ後なぜか冷や汗を流していた。
ブレイド「さ～てと、なのはたんとフェイトたんはどこかなっと…ん？」
ブレイドと呼ばれたその男はシグナムを見つけて見下ろした。

じ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜ッ

シグナム「な、何だ……？」

ブレイドの自分を見つめる視線にシグナムは思わず後ろへとたじろいだ。

ブレイドはサングラスを外してロングコートの中の内ポケットに閉まった。

剣心（ま…まさか）

剣心はなんだか嫌な予感がした。
そして、次の瞬間。

ブレイド「つき合ってください！！！」

手品のごとく花束を出してブレイドはシグナムに告白した。

シグナム・ジュド
「「えっ……ええええーっ！！！？？？」」

告白されたシグナムは顔を真っ赤に、ジュドは突然の出来事に思わず愕然となった。

剣心（はぁ…やはりこうなったか）

剣心はこうなる事がわかっていたかのように深い溜息をはいた。

シグナム「いやいやいや！今いきなり会ったばかりなのに付き合ってってそんな！
私はまだ一度も男の手を握ったこともないというのに！いや、さっき握ったか…いやそういうことじゃなくて！あの…その…」
ジュド（なっ…何なんだ？…こいつは）

いきなり目の前に現れた男に生まれて初めて愛の告白をされたシグナムは完全暴走状態に突入した。
そしてジュドもこのメチャクチャな光景に唖然としていた。

剣心「シグナム殿・・・気持ちは分かるが落ち着くでござるよ」

剣心は何とかシグナムを落ち着かせようとしたがシグナムはオロオロし続けていた。
そして、フェイトが目をさまして起き上がってきた。

フェイト「…ん」
剣心「ああ、フェイト殿気が付いたでござるか？」
フェイト「剣心…なにこの状況？」

フェイトは目の前のおかしな状況を見て思わず剣心にこう質問した。

剣心「いや…なんと言うべきか…」

剣心も思わず目の前の状況をフェイトにどう説明すればいいのかと悩んでいた。

その時だ。
「なのはちゃん！！」
「なのは！！」
新八と銀時の叫び声が聞こえた。
ブレイド「あん？」
剣心「何だ！」
銀時達の叫び声に剣心は立ち上がり、フェイトも新八達の声がした方を見た。
なのはの体から、何者かの腕が出ていた。
なのはの体から出てる手の中に、光の玉があった。
フェイト「なのはァアア！！」
すぐにフェイトは飛んで、なのはの元へ向かった。
そしてなぜか、ブレイドがシグナムを睨みつけ、胸倉を掴んだ。剣心もシグナムに近付いた。
剣心「シグナム殿！これはどういうことだ！」
ブレイド「おいコラてめえ！なのはたんに何しやがった！？」
怒りの形相でブレイドはシグナムに怒鳴る。
つーかブレイドいきなり態度変わりすぎだろ。
シグナム「おっ…落ち着け！お前たち！！あれは『リンカーコア』を蒐集しているんだ！」
剣心・ブレイド
「「リンカーコア？」」

剣心とブレイドは片眉を上げた。

シグナム「リンカーコアとは魔導師が持つ魔力の源だ。それを奪われたら、しばらく魔法は使えなくなるが、命に別状はない」

剣心達を落ち着かせるように、シグナムが説明した。

剣心「…本当か？」

シグナム「嘘は言わん」

ブレイドと剣心は鋭い眼でシグナムを見つめ、シグナムも顔をそらす事なくブレイドと剣心を見つめる。

ブレイドは胸倉を掴む手を離した。

シグナム「…すまない。だが我らには、こうする以外方法がないのだ」

シグナムが苦悶の表情で剣心に謝罪した。

剣心「…お主の目的は何だ？」

剣心が尋ねた。

シグナムは意を決して目的を言った。

シグナム「…闇の書の完成です」

剣心・ブレイド「闇の書？」

聞き慣れない言葉に、剣心とブレイドは目を細めた。

その時、仲間のシャマルからシグナム達に連絡が入った。

シャマル（蒐集は完了したわ。みんな各自離脱して）
ヴィータ・ザフィーラ（了解）

綾子「ちょっとあんた逃げるき？」

突然飛び上がったザフィーラに綾子はそういった。

ザフィーラ「帰還命令が出たのでな。この仮はいずれ帰させてもらう！」

ザフィーラはそういって引き上げていった。

シャマルに答えてからヴィータも離脱し始めた。
シグナムも剣心達から離れる。

剣心「シグナム殿！」
シグナム「すまない剣心！我らは捕まるワケにはいかないのだ！」

そう言ってシグナムも離脱した。

剣心「……」
ブレイド「おい、何だこれ？」

剣心は静かにシグナムが去っていった方を見つめた。
ブレイドが何かを言っていたが剣心の耳には届いていなかった。
そしていつの間にかジュドもその場から消えていた。
ちなみにブレイドがなんでなのはのことを分かっていたかというと唯単にブレイドが幼女好きだと言うことだけで分かっていただきたい。

第三十四訓　いきなりあってアレをするなんてありえない（後書き）

剣心「今回の話はとんでもなかったでござるな」
銀時「あのバカシグナムにとんでもないことしやがったな」
シグナム「作者あああああああああああああああ！！」
剣心「とっどうしたシグナム殿？」
シグナム「どこにいる作者！！今すぐたたっ斬ってくれる！！」
銀時「はあ…なるほど今回の話が原因だな」
シグナム「作者あああああ！！どこだあああああ！！」

支配者「皆さん今回の話しいかがでしたか？次回は八神家のお話です。後、教えて！銀八先生もやろうと思いますので質問がある方はご応募ください。では次回もお楽しみに」
シグナム「ここにいたか作者…」
支配者「げっ！」

シグナム「死ねエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！」

支配者「ギャアアアアアアア！！」

第三十五訓　家に友達以外入れないほうがいいと思う（前書き）

支配者「今回は八神家のお話です」

桂「リリカル剣魂スペシャル第三十五話始まるぞ」

第三十五訓　家に友達以外入れないほうがいいと思う

リンカーコアを蒐集し、離脱したシグナム達は八神家へ向かっていた。

シャマル「シグナム、ヴィータちゃん、ザフィーラ、大丈夫？」

心配そうな表情で、シャマルが三人に聞いた。

シグナム「ああ、大丈夫だ」
ヴィータ「これ位なんともねえよ！」
ザフィーラ「我も問題ない」
シャマル「そう…良かった」

三人はシャマルになんでもなかったかのように答え、シャマルも安堵の息を吐いた。

ヴィータ「それより…シャマルこそ大丈夫かよ？その腕」

シャマルの左腕を見ながらヴィータが言った。
シャマルの左腕には大きなアザがあった。
実は左腕のアザは、お妙と薫にやられたのだ。なのはのリンカーコアの蒐集を終え、シャマルが腕を引っ込めようとした時、

お妙・薫
「「ぎゃぁあああ！！お化けェエエエ！！」」

ドッカア！！

シャマル「きゃあ！！」

悲鳴を上げながら、お妙と薫がシャマルの腕に蹴りを決めたのだ。
そのせいでシャマルの腕にあざが出来てしまったのだ。

シャマル「だ…大丈夫よ。これくらいすぐに治るから…いたた」

安心させるように、シャマルは笑顔で答えた。しかし結構痛そうである。

シャマル「…それにしても、途中から現れた彼らは何者かしら？」

シャマルは先ほどの戦いに現れた、剣心達の事について考えた。

ザフィーラ「魔力を感じなかったところを考えると…少なくとも魔導師ではないだろう」

狼形態になったザフィーラが言った。

ヴィータ「魔法も使ってねーのにどいつもこいつも結構強かったし…」

口を尖らせながらどことなく悔しそうにヴィータが言った。

ヴィータ「それに一番無茶苦茶なのは、あの十字傷の奴だ！一対一の勝負でシグナムに勝ちやがった…！それに…なんだよあの銀髪！！いきなり現れてシグナムに告白って…なに考えてやがんだ！！」

ヴィータが納得いかないと言った顔する。
シャマルもザフィーラも、シグナムが一対一で負けるとは想像もし

ていなかった。
そして、告白されるなどということも…
そのシグナムは、剣心の事を考えていた。魔導師でもない、魔法を使わず剣の腕前だけで自分を倒した男。剣心の姿が頭から離れない。いつの間にか、シグナムの頬は少し赤くなっていた。

シグナム（あの男強かったな…それに優しかった。って…そんな事よりも！）

そしていきなり現れて自分に告白したブレイドの事も考えていた。ブレイドの事を考えたら恥ずかしさの余りシグナムの顔が真っ赤になった。

シャマル「シグナム？」
シグナム「えっ！？あ…ああ、どっ…どうした？」

隣にいるシャマルに声をかけられ、シグナムは慌てて答えた。

シャマル「大丈夫？顔が赤いけど」
シグナム「だ…大丈夫だ。心配いらない」

平静を装ってシグナムが答えた。
そしてヴィータは自分たちを逃がしてくれた。謎の男達の事を考え始めた。

ヴィータ「それにしても…あたし達を助けてくれたあいつらは何者だったんだ？」
ザフィーラ「分からん…だが当面の敵ではないだろう、それに奴らがなんであろうとわれわれは主のために闇の書を完成させなければならんのだ」

ヴィータ「わーってるよ」

そしてヴォルゲンリッター一行は八神家に到着した。ドアを開けて中に入る。

シグナム「主、只今戻りました」
ヴィータ「ただいま～はやて」
シャマル「はやてちゃん、遅くなってごめんなさい」

中に入って四人が挨拶をする。

はやて「みんなお帰り～遅かったなあ」

車椅子に乗ったはやてが玄関に来た。

シグナム「申し訳ありませんでした主…ん?」

シグナムが遅くなった理由をはやてに話そうとしたが急に言葉を止めた。その理由は

「おお、お帰り～」
「お帰りなさいませであります」
『お帰りなさい』
「遅かったな～」
ヴォルゲンリッター
「「「え?」」」

その時、シグナム達は目を細めた。はやてに変わった所はない。シグナム達は、はやての後ろに立っている連中を見て目を細めたのだ。

ヴィータ「…誰だよお前ら？」

ヴィータが、はやての後ろに立ってる連中に尋ねた。
長い金髪の少女二人、金髪ツインテールの少女、長い青髪の少女、
メイド服を着ている女、黒い長髪に着物の男がいた。

ヴィータに聞かれ、はやてが答えた。

ヴィータ「あっ紹介するな皆、黒い服着てるほうの長い金髪の子は
ヤミちゃんって言うてあたしの友達何や、前に世話になってな」
ヤミ「始めましてヤミといいます」

ヤミは頭を下げて丁寧に挨拶した。

シグナム「あっ…これはどうも」

シグナムも思わず頭を下げた。

はやて「んで、他の人たちはヤミちゃんの知り合いで、この子が三
千院ナギさんって言うんや」
ナギ「三千院ナギだ。よろしくなお前ら」
ヴィータ「あ…ああ（何だこいつなんか態度でかいな）」

ヴィータはナギに対してこんな風に思った。

はやて「そんで、この人がナギさんのメイドのヴィルヘルミナさん
や」
ヴィルヘルミナ「よろしくお願いいたしますなのであります」
シャマル「はっ…はいこちらこそ」

ヴィルヘルミナが頭を下げて挨拶したのでシャマルも頭を下げた。

はやて「んで、この子が」

イヴ「僕はイヴ・ノインシュヴァンシュタイン。長いからイヴ・ノインシュヴァンシュタイン様、でいいよ」

ヴィータ「いや逆に長くなってるし！つーかなんで様付け！？」

ヴィータはメチャクチャな自己紹介をしたイヴに思わず突っ込んだ。

はやて「あはは…んで、この子が」

梔『私は梔、よろしく』

梔がスケッチブックに書いた文字をシグナムに見せた。

シグナム「あ…ああ、よろしく（何でスケッチブックなんだ？）」

シグナムはスケッチブックで挨拶してきた梔に対してこう思った。

はやて「んで、この男の人が」

桂「俺は桂小太郎。好物はそばだ」

シグナム「…何故、好物を言った？」

ヴィータ「そば出せってか？そば出せってか！？」

シグナムが眉を寄せ、ヴィータは桂を睨みつけら怒鳴った。

シャマル「まぁまぁ、二人とも落ち着いて」

はやてがシグナムとヴィータをなだめる。

はやて「ヤミちゃん達、私の家の庭に倒れててな。泊まる所もない

言うから、しばらく家に泊めてあげる事にしたんや」
はやてがみんなに説明した。
はやて「みんな仲良くしてな」
ヤミ・ヴィルヘルミナ・梔
「「『よろしくお願いします』」」
桂「よろしく頼む」
ナギ・イヴ
「「よろしくな」」

ヤミ達がシグナム達に頭を下げた。ナギとイヴはあくまで上から目線だったけど
まぁ悪い連中ではなさそうだから、シグナム達もとりあえず警戒を解いた。
するとふと、桂を見たシグナムは思った。

シグナム（この男の服装…剣心に似ている？）

そんな事を思いながら、シグナムは中に上がった。
一行は、はやてとヤミ達の後に続いて部屋に入った。

ヴィータ「うわぁあ！！？」

部屋に入って、ヴィータが驚きの声を上げた。
シグナム達も目を見開いて驚いている。
部屋の中に、白い体に黄色いくちばし嘴が付いた、ペンギンお化けのような奴がいたからだ。

ヴィータ「な…何だこの化物！？」

桂「化物じゃないエリザベスだ」
ナギ「まあ、こいつを始めてみた奴はそう思うよな」

ペンギンお化けみたいな生き物『エリザベス』を指差しながら叫んだヴィータに、桂が名前を教えた。ナギはヴィータが驚くのも無理もないというように答えた。
ちなみに桂は認めていないがエリザベスの中身はおっさんだ。

エリザベスは、
『おかえりなさい』
と書かれたボードを掲げた。

シグナム「た…ただいま」

とりあえずシグナム達は挨拶した。

はやて「ほんなら皆揃った事やし、夕飯にしよか」

はやてが台所に向かう。

シャマル「私も運ぶの手伝います」
ヴィルヘルミナ「私もお手伝いいたします」

シャマルとヴィルヘルミナも台所に向かった。

桂「ところで八神殿、そばはないか？」

と桂が言った直後

ドカッ！！
バシィーン！！

桂「ぐおっ！」

ヴィータがハンマーでヤミとナギとイヴがハリセンで桂の頭を叩いた。
つーか、どっからハリセン出したんだよ。
とまあ、八神家に騒がしい居候がずいぶん増えたのであった。

～おまけ～

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八
「え～今回は教えて銀八先生をやらせてもらいまぁ～す」

剣心
「そしてアシスタントはもちろん」

フェイト
「フェイト・テスタロッサと」

なのは
「高町なのはです」

銀八
「では早速質問にいくぞ。ペンネーム『真王』さんからの質問」

ネプテューヌ「『質問だけどあとどれくらいクロス作品を出すの？』」

銀八
「ってお前が質問すんの？」

ネプテューヌ
「いいじゃん別に」

銀八「まあ言いや…で作者答えは？」

支配者
「妖怪物と学園物をいくつか出そうと思っています。『緋弾のアリア』とか『ぬらリひょんの孫』とか」

剣心
「そんなの出すんでござるか？」

銀八
「つーかそれ・・・ネタばれになるんじゃねえの？」

支配者
「うるせーな。いいでしょ別に」

銀八
「まあ…言いや別に、で次は？」

フェイト「はい次の質問です。次もペンネーム『真王』さんから『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　銀の侍と４人の女神』の感想

を聞かせてくれ』そしてもう一つ『ズバリ、剣心は幽霊嫌いですか？』です」

銀八「はい、作者。んじゃ感想いえ」

支配者「はいはい、まあとても面白いと思います。リリカル銀魂とネプテューヌのコラボがかなり意外で新鮮味があると思います。しかしまさか「マリオ&ルイージRPG3」みたいな編に入るとは思いませんでした」

銀八
「つーかてめえちゃんと読んだ後に感想書けよ」

支配者
「スイマセンね。なんて書いたら言いか良く分からないんで」

銀八
「ったく…まあいいや。で次の質問の答え。はい剣心！」

剣心
「はいでござる。別に拙者は幽霊苦手ではござらんよ」

銀時
「何で苦手じゃねえんだよ！俺苦手なのに！」

剣心「そう言われても…」

銀時
「不公平だろうが！同じ侍アニメの主人公なのに！！」

銀八
「ギャグアニメと剣客の人生ドラマとじゃ天と地ほどの差があるんだよ」

銀時
「んだとぉ!!」

銀八
「はい、んじゃほっといて次の質問」

なのは
「はい次の質問はペンネーム『亀鳥虎龍』さんからの質問です。質問です。御坂が出たということは、上条やインデックスも出るんですか?」

銀八
「作者、どうなんだよ?」

支配者
「はいもちろん出すつもりです。とある魔術の禁書目録の準ヒロインが出たのに主役とヒロインが出ないんじゃだめですからね」

美琴「ちょっと!準ヒロインとはなによ!」

銀八
「ホントの事だろうが」

美琴
「(ブチッ!)あたしを準ヒロインって言うなーーー!!」

美琴は銀八に向かってコインを構えた。

銀八
「ちょっ…待てお前、外伝のほうじゃヒロインなんだからいいじゃねえか…だからそんな物騒なモン向けんじゃ…」

美琴「くらえーーーー！！」

ドカアアアン！！

銀八「ギャアアアアアアアア！！」

フェイト
「ははは…じゃあ今回はここまで」

剣心
「次もやろうと思うので質問をお待ちしているでござる」

銀八
「とりあえず質問した皆さん…廊下に…立っていなさい……ガクッ」

銀八は死んだ。

銀八
「死んでねえよ！」

第三十五訓　家に友達以外入れないほうがいいと思う（後書き）

支配者「今回のお話いかがでしたか？」

銀時「何で俺達の出番がねえんだよ」

支配者「まあまあ次はちゃんと出しますから」

剣心「では次回をお楽しみにでござる」

第三十六訓　友人でなくても行方不明者は探してやれ（前書き）

支配者「今回はちょっとした団欒の話です」

銀時「団欒かこれ？」

支配者「後、『教えて、銀八先生』は質問が少なかったのでお休みいたします」

フェイト「リリカル剣魂スペシャル第三十六話始まります」

第三十六訓　友人でなくても行方不明者は探してやれ

シグナム達との戦いを終えた銀時達は、なのはを保護して、時空管理局本局にいた。
なのはは、魔力の源であるリンカーコアが縮小している以外に、特に外傷はないのですぐに良くなるそうだ。
フェイトは剣心が通路を歩いている。

フェイト「それにしても本当に驚いちゃった。どうして剣心達が？」
剣心「お主の母上に呼ばれたのだ」
フェイト「え？」

フェイトは少し驚いた顔をした。

剣心「急に無線機に連絡があったのでな。それで聞いてみるとプレシア殿に『フェイトを助けて』って頼まれたのだ。装置の調整は大体完成していて、いけない事はなかったからな。源外殿とララ殿に無理を言ってこっちに来たのでござるよ」
フェイト「そっか…ごめんね剣心。迷惑かけちゃって…」

顔を俯きながらフェイトが謝った。

フェイト「なに。再会が少し早くなっただけだでござるよ」

笑って剣心が言った。
剣心の顔を見て、フェイトも微笑んだ。

フェイト「そういえば、今回はずいぶんと知らない人達がいたけど」
剣心「心配いらぬ。拙者の知り合いでござる」

ちなみにあのあと、ハヤテ、美琴、黒子、左之助、セト、ソルヴァ、アルカ、ナナ、モモなどもやってきた。弥彦は薫の命令で留守番させられた。
ちなみに凛等もいたが用事があるからこれないと言って断ったらしい。
後、祐司も来る予定だったが、直前になって風邪をひいて来られなくなってしまいました。
ちなみにソルヴァはセトの相棒である。原作と同じように
そして、何でアルカも来たのかというと「クルスを異世界に一人だけ行かせるなんて心配だ！私もいく！！」といって仕事があるというのに無理やり付いてきたのだ。
セト、ソルヴァ、ナナ、モモなども「面白そうだから、付いてく」と言って付いてきたのであった。
ちなみにブレイドが来た理由はもちろんなのはとフェイト目当てである。
そして、美琴と左之助とセトとアルカは

相楽「ちっ、そんな面しれえことになってたのかよ。俺もその喧嘩に参加したかったぜ」
美琴「そうよ、そんな連中なんかあたしのレールガンで打ち落としてやったのに」
セト「僕の『重力作成（グラビドン）』で押しつぶしてやったのにな」
アルカ「私の『炎神の息吹（アグニッシュワッタス）』で消し炭にしてくれたものを」
などと言っていた。

その言葉を聞いて、銀時、新八、クルス、護、ハヤテなどは顔を青くした。

剣心とフェイトは、フェイトとなのはのデバイスの修復作業が行われてる部屋に入った。
部屋の中にはクロノやアルフ、ユーノ。万事屋メンバーとお妙、九兵衛と雛菊と東城と綾子と護とセトとクルスとアルカと左之助がいた。

剣心「紹介しよう。彼女は柳生九兵衛殿だ。神速の剣の使い手だ。で後ろにいるのが妹の雛菊殿でござる」
九兵衛「柳生九兵衛だ」

雛菊「雛菊よ。よろしく」

剣心に紹介された後、九兵衛はフェイトに挨拶した。
「フェイト・テスタロッサです。よろしくお願いします」
フェイトも頭を下げて挨拶した。

剣心「隣にいるのは東城歩殿だ。頭は少々悪いが、剣の腕は柳生四天王最強なのでござる」
東条「誰の頭が悪いんですか？私はただ、カーテンのシャーってなるやつが気になっているだけです」
銀時「お前はロフトに行って、二度と戻ってくるな」

そう言って銀時は、東城の紹介を終えた。そして今度はお妙の方を向いた。

剣心「彼女は志村妙殿。苗字からわかる通り、新八殿の姉だ」
お妙「志村妙です。よろしくフェイトちゃん」
フェイト「こちらこそ、よろしくお願いします」

お妙とフェイトは、互いに頭を下げて挨拶した。
その時、

「あなたがフェイトちゃん？」

薫がフェイトに近づいてきたのだ。その様子を見て銀時達は“げっ！”となった。

フェイト「あっはい…あなたは？」
薫「私は神谷薫よ。よろしく」

そういって薫は笑顔を見せた。
だが、薫は物凄く黒いオーラを出していた。

全員（妙・フェイト以外）
（何この黒いオーラァアアアアアア！！！？？？）

お妙とフェイト以外のこの場にいる全員が心の中で叫んだ。

薫「さて…覚悟は出来てるわね？………このクソガキ」
フェイト「えっ？」

薫はそういって手をバキボキさせながらフェイトに近付いた。
その時である。

全員（妙、フェイト以外）
「わあああああああああああああ！！！！！！」

お妙以外の全員が薫を押さえつけた。

薫「離せゴラァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！（超激怒）」
銀時「落ち着け薫ぅううう！！！頼む３００円いや３０００円あげるからァアアア！！！！」
新八「フェイトちゃん！早く逃げてぇええええーーー！！！！」
クルス・セイバー
「「このままじゃ、殺されちゃいますよ！！」」
シャナ「早く逃げなさいフェイト！！」
左之助「逃げろ譲ちゃん！薫譲ちゃんは怒ったら手が付けられねーんだ！！」
綾子「薫に殺されるわ！！」

アルカ・セト
「「早く逃げろ!!」」
護「早く逃げてください!!マジで殺されます!!」
フェイト「えっ…えっ？」

フェイトは何が何だか分からずその場でオロオロしていた。

その後、剣心の説得によって薫を何とか落ちつかせることに成功した。
そして、フェイトとその場にいる全員とここにいない者達との自己紹介も終わった。
ちなみに何故、九兵衛と雛菊と東城、お妙や定春がいるのかと言うと。
プレシアから連絡があった時、新八の家に九兵衛と雛菊と東城がいたのだ。
電話で銀時から連絡を受けた新八が行こうとしたら、お妙も行くと言い出したのだ。理由は新八の話で聞いてた、なのはやフェイト達に一目会いたからというものだった。すると九兵衛と雛菊が、お妙の事が心配だからとついてきたのだ。東城も九兵衛と雛菊を二人だけで行かせるワケにはいかないとついてきたのだ。定春は神楽が連れていきたいと言って、連れてきたのである。そしてその話は隣の薫の道場にも聞こえていた。だから薫もやってきたのだ。

アルフ「そういえばさぁ、あの連中の魔法って何か変じゃなかった？」

頭に包帯を巻いたアルフが尋ねた。

クロノ「あれは『ベルカ式』だ」

アルフと同じく、頭に包帯を巻いているクロノが答えた。

新八・クルス・護・左之助
「「「ベルカ式？」」」
アルカ・セト
「「なんだそれは？」」」

今度は新八とクルスとアルカとセトと護と左之助が尋ねた。

ユーノ「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」

新八とクルスと護とアルカとセトの問いに、頭に包帯を巻いてるユーノが答えた。
え？何で三人とも頭に包帯巻いてるかって？そりゃあ定春に頭を噛まれたからですよ。

クロノ「遠距離や広範囲攻撃をある程度、度外視して対人戦闘用つまり近距離戦に特化した魔法で、優れた術者は『騎士』と呼ばれる」

クロノがユーノに続いて説明した。

セイバー「騎士？彼らも騎士なんですか？」
剣心「そう言えばシグナム殿は、セイバー殿のように自分のことを騎士と言っていたでござるな」

思い出したように剣心が言った。

ユーノ「最大の特徴はデバイスに組み込まれたカートリッジシステムと呼ばれる武装だ。儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイス

に組み込んで、瞬間的に爆発的な破壊力を得る事ができるんだ。なんとも物騒で厄介な代物さ」

最後にユーノがそう説明をした。

シャナ「あいつも私みたいに剣から炎を出してたわね」
銀時「あれは反則だろ」
綾子「あれくらい私達の世界では珍しくないでしょーが。私だって炎出せるし」
アルカ「全くだ」

銀時の言葉を聞いて、綾子とアルカがツッコンだ。
その時

クロノ「剣心、銀時」

クロノが剣心と銀時を呼んだ。

銀時「ん？」
剣心「何でござるか？」
クロノ「貴方達に会わせたい人がいます」

剣心と銀時はクロノの後ろを歩いている。剣心の隣にはフェイトもいる。
あの時フェイトが、

フェイト「剣心、私も一緒に行っていいかな？」

と言ってきたのだ。

クロノと剣心には特に断る理由もなかったので、同行する事になった。

クロノの案内で、銀時とフェイトは部屋に入った。中には一人の老人が座っていた。

クロノ「グレアム提督。彼らを連れてきました」
グレアム「やぁクロノ。ご苦労だったね」

この老人の名は、ギル・グレアム。時空管理局顧問官だ。
ふと、フェイトは剣心と銀時の顔を見た。何故か剣心と銀時は表情を険しくしていた。フェイトは、何故剣心と銀時がそんな顔をしているのかわからなかった。
グレアムに促された剣心と銀時とフェイトは、椅子に座った。

グレアム「私はギル・グレアムと言う者だ。君が緋村剣心さん、そちらが坂田銀時さんであっているかな」
剣心・銀時
「「…ああ」」

剣心と銀時はグレアムに対して素っ気ない返事をした。

クロノ「銀時！剣心！グレアム提督に失礼だぞ！！」

剣心と銀時の素っ気無い態度に、クロノが怒鳴る。

銀時「んなこと言ったって俺たちは時空管理局の人間じゃねーんだ。このじーさんへの対応何ざどうしたらいいかわかんねーんだよ」
クロノ「何だと！」

銀時の言葉にクロノは再び怒鳴るが

グレアム「いいんだクロノ、落ちついてくれ」

クロノ「グレアム提督…ですが！」
グレアム「いいんだ」
クロノ「は…はい…」

グレアムに強く言われて、クロノは大人しくした。
剣心の隣に座ってるフェイトは、剣心と銀時の態度に違和感を感じた。

銀時「で？俺達に何の用ですか提督さん？」

銀時がここに自分達が呼ばれた理由をグレアムに尋ねた。

グレアム「用という程の事ではない。ジュエルシード事件で魔法を使わずに活躍したという、君達の姿を一度見てみたくなったのでね」

穏やかな口調でグレアムがそう言った。

銀時「そうですか。じゃあ俺もう出ていいですか？糖分摂取してなくてイライラしてるんすよ」
剣心「用が済んだのであれば、拙者も失礼する」

そう言いながら剣心と銀時は立ち上がった。

クロノ「なっ！？ぎ…銀時、剣心！？」

部屋を出ようとする銀時に、クロノが叫ぶ。

フェイト「ま…待って剣心！」

慌ててフェイトが後を追う。

二人はそのまま部屋を出てしまった。

バタン！

クロノ「アッ、アイツら…！グレアム提督に対してなんて無礼な態度を！！」

グレアム「いいんだクロノ。私なら気にしていない。そう興奮しないでくれ」

クロノ「は…はい」

そう言いながら、クロノをなだめたグレアムは珈琲を一口飲んだ。

同じ頃、自販機の前では・・・エイミィがグレアムについて、新八やアルフ達に説明を行っていた。

エイミィ「グレアム提督は、クロノ君の指導教官だった人なんだよ」

グレアムはかつてクロノの指導をしていたらしい。穏やかな性格で有名な人物でもあるらしい。

神楽「何でそんなオッサンからあんなKYな奴が生まれるアルか？」

新八「ちょっ！神楽ちゃん失礼だよ！」

エイミィ「ハハハ、別にいいよ」

しかし、あんな穏やかそうな人からあんな固そうな教え子が出るとは想像がつかなかったりする。

エイミィ「歴戦の勇士。一番出世してた時で艦隊指揮官、後に執務官長だったかなぁ」

アルフ「めちゃくちゃ偉い人じゃん！」

新八「ホント凄い人なんですね」

護「びっくりしました」

グレアムの経歴を聞き、ビックリするアルフ、新八、護の三人と呆然とするユーノとクルス。神楽や他の皆は全く興味なさそうだった。

エイミィ「うん、でも良い人だよ～、優しいし」

そしてグレアムの部屋

クロノ「提督。先程は大変失礼しました」
グレアム「もういいんだよ。クロノ」
クロノ「では僕もそろそろ失礼します」
グレアム「ああ」
クロノ「あっそうだ提督」
グレアム「何だね？」

部屋を出ようとしたクロノがグレアムの方に向き直る。

クロノ「提督、もうお聞き及びかもしれませんが、先程自分達がロストロギア【闇の書】の捜索・捜査担当に決定しました」
グレアム「そうか、君がか…私などの言えた義理では無いかもしれんが、無理はするなよ」

クロノの身を案ずるグレアム。
闇の書がいかに危険な物か、グレアムは解っているみたいである。

クロノ「大丈夫です。急時にこそ冷静さが最大の友…提督の教え通りです。」

グレアム「うむ、そうだったな・・・」

クロノは微笑を浮かべ、言葉を返す。

グレアムは、かつて自分がクロノに教えた事を実行してくれる事を嬉しく思うのだった。

クロノ「では」

グレアムに一礼をしてクロノは部屋を出る。

そして剣心と銀時とフェイトは通路を歩いていた。

フェイト「ねぇ剣心、銀時」

銀時「ん？」

剣心「何でござるか？フェイト殿」

フェイト「剣心と銀時は…グレアム提督が嫌いなの？」

フェイトは、さっきから気になっていた事を二人に聞いた。

グレアム提督を見てから、剣心と銀時の態度は少しおかしかった。

剣心「別に嫌いとかそういう事ではないのでござるよ」
フェイト「え？」

嫌いとかじゃない？じゃあどうして。
フェイトが考え込んでると、銀時が言った。

銀時「なんつーか…胡散臭い感じがしたんだよなァ、あのオッサン」
フェイト「胡散臭い？」

フェイトは首を傾げた。

剣心「ああ、あのご老人…何かを隠している気がするでござる」
銀時「まぁ俺らの勘違いかもしれねーから、気にすんな」
フェイト「う…うん」

そう言って銀時は頭を掻き、剣心は腕を組んだ。
じはらく歩くと、前からプレシアがやってきた。

フェイト「母さん！」
プレシア「フェイト！」

プレシアは駆け寄って、フェイトに抱き付いた。

プレシア「フェイト！無事でよかったわ！」
フェイト「心配かけてごめんね。でも、もう大丈夫だから」

安心させるように、フェイトが言う。
プレシアは顔を上げて剣心と銀時を見た。

プレシア「ありがとう、剣心、銀時」
銀時「なァに、俺達は万事屋だ。頼まれれば何でもやるぜ」
剣心「その通りでござる。それに友人を助けるのは当たり前のことでござるよ」

プレシアのお礼に、剣心と銀時は笑って応えた。
すると、

「銀さーん！剣さーん！」

今度は新八とセツナとハヤテとセトとソルヴァが走ってきた。

剣心「おや、おぬし達どうしんたんでござるか？」
銀時「どうした新八？何そんなに息切らしてんだよ」

新八達は銀時達の前で止まって、呼吸を整えた。

セト「銀時！剣心！」
新八「はあ…はあ…大変なんです！ヤミちゃんと桂さん二人とエリザベスがいません！！」
ハヤテ「お嬢様とヴィルヘルミナさんもいないんです！！」
セツナ「梔とイヴもいないのよ！」

新八とセツナとハヤテとセトが大きな声で言った。

言われた剣心と銀時は数秒、呆然としてたが、やがて思い出したかのように目と口を大きく開いた。

剣心・銀時「あああああっ！！」

思い出したように、剣心と銀時は大声を上げた。

銀時「しまったァア！！あいつらの事すっかり忘れてたァアア！！」

銀時は頭を抱えて叫んだ。

フェイトとプレシアは、ワケがわからず首を傾げていた。

実は銀時達が装置の中に入った後、桂兄弟がやってきて『銀時！剣心！俺と共にこの国を変えよう！』『ナギちゃん！お金貸し手ェエエ！！』としつこく譲夷志士の勧誘と借金を頼みにきたのだ。そして無理矢理、装置の中に入って銀時達とは、はぐれたが結果的に『リリカルなのは』の世界にきたようなのである。おそらくナギを含めたその5人はその反動に巻き込まれて桂達と一緒にはぐれてしまったのだろう。ちなみにセト達後から来た組は一度装置が止まってからやってきた。

新八「どこを探してもその八人だけがいないんです！桂さんたちが無理矢理、装置に入ってきたからその八人だけが別の場所に移動しちゃったのかも！」

銀時「なにい！！ああ～あのバカ共のせいで！」

ハヤテ「あああ～どうしましょう銀さん！剣さん！お嬢様の身にもしもの事があったらぁ～～～！！！」

物凄く焦りながら新八とハヤテが言う。

剣心「新八殿、ハヤテ殿少し落ち着くでござるよ！！」

その時だ！

雪路「ええっ！小太郎達が！？」
銀時・新八・剣心『どわあああああ！！』

銀時と新八と剣心はいきなり現れた雪路におどろいた。
彼女は桂雪路。この小説では雪路は小太郎の姉ということにしてある。はっきり言ってバカどうしおにあいの兄弟とも言える

剣心「雪路殿！」
銀時「おいヅラ姉！テメー今までどこにいやがったんだ！！」
雪路「いや～なんか気づいたらここにいたのよ…ってヅラじゃない！桂よ！」

雪路が銀時にヅラ呼ばわりされて突っ込んだその時、

ガシッ！！

雪路「ぐえっ！！」

突然ハヤテが雪路の胸倉を掴んだ。

全員（ハヤテ、雪路以外）
「えっ！？」
ハヤテ「おいコラ…」

ハヤテの様子がなんだかおかしい。なんか明らかに怒っている。

ハヤテ「テメーらがあの時、装置に飛び込んできたせいでお嬢様がどっかいっちまったじゃねーか！！どうしてくれんだこのヅラ！！お嬢様に何かあったらどうすんだ！！テメー責任取れんのか！！え！？何とか言いやがれーーーーーー！！！」

雪路「ぐえ～～～～」

ハヤテが雪路の胸倉を掴みながらそう叫ぶ。雪路は胸倉を掴まれてかなり苦しそうにしている。

銀時「おぃいいいい！！ハヤテ君！？お前ってそんなキャラだっけ！？明らかにキャラ変わってんじゃねーかぁあああああ！！！」

銀時はハヤテの凄い変わりように思わずそう叫んだ。

その後、３０分もかかって剣心達は何とかハヤテを落ち着かせて話を戻した。

銀時「もう知らねーよあんなバカなんて！エリザベスも一緒にいんだから大丈夫だろ！つーかそんなことよりヤミたち探さねーと！」
ハヤテ「そうですよ！桂さんたちなんてどうでもいいからお嬢様たちを探してください！！」
雪路「ちょっと！小太郎達がどうでもいいってどういう意味よ！」
新八「そうですよ！桂さん達も、探してもあげましょうよ！」
剣心「そうでござるよ銀時！」
セツナ「梔も探しなさいよ！！」
セト「イヴもな！」

銀時達は、ギャーギャー騒ぎながら話し合った。
ちなみにフェイトとプレシアは苦笑いしながらその光景を見ていた。

その頃、クロノが出て部屋に独りだけになっていたグレアムは

グレアム（彼らの力は危険だ。魔力は感じないがその分気の力が強い。私の計画の障害にならなければいいが…）

グレアムはそう考えていた。

その時、

「グレアム君」

黒フードの男が急に現れて、グレアムに話しかけた。

グレアム「…ああ、君か、何か用かねジュド？」

グレアムは男にそう話しかける。そうグレアムに話しかけた男はジュドだったのだ。

ジュド「彼らを見てどう思ったかね？」

グレアム「…危険だね、それにまるで私の考えを読んでいるかのような目で見られたよ」

ジュド「だろうね。彼らは感がいい」

グレアムの言葉にジュドは納得したように答える。

グレアム「彼らをどうするね？ジュド」

ジュド「な～に、彼らのことだ。守護騎士共が何故闇の書を完成させようとしているかと言う理由を知れば邪魔しようとはせんだろう」

グレアム「…そうだといいがね」

ジュド「何、あくまで邪魔するようならばこちらもそれなりの対応をさせてもらうさ」

グレアム「余りやり過ぎないでくれたまえよ。私と君が協力関係にあるのは極秘なのだから」

ジュド「分かっているとも、そちらもそちらでちゃんと動いてくれたまえよ。グレアム君」

グレアム「ああ」

そういってジュドはグレアムの前から消えたのであった。

グレアム（あんな危険な連中と手を組みたくはないが・・・仕方あるまい闇の書を完全葬り去るためにはな）

そしてグレアムは、写真を一枚取り出した。
そこには男が一人写っていた。

グレアム（…もうすぐだクライド君。もうすぐ君の敵を討つ事が出来るよ）

グレアムは心の中でこう呟いた。

第三十六訓　友人でなくても行方不明者は探してやれ（後書き）

支配者「いや～今回は薫とハヤテが怖かったですねえ～」

銀時「おいコラあ！いくらなんでもあの二人のキャラ崩壊激しすぎだぞ！！」

支配者「その方が面白いんですよ」

銀時「てっんめえ！！いくら二次創作小説だからってなにやっても許されると思ったら大間違いだぞ！！」

支配者「うるさい！ダメ天パ！！」

銀時「んだとコラあ！！」

剣心「ははは…二人の喧嘩が終わりそうにないので次回予告をするでござる。次回はまた八神家のお話でござるよ」

フェイト「では、次回をお楽しみに」

第三十七訓　知る事ができない筈の事を誰かに教えてもらえる事ってたまにはあ

支配者「今回は八神家のお話。シグナム達がなんと闇の書の真実を知る羽目になる物語です」

剣心「こんな事してちゃんと話を続けられるんでござるか？」

支配者「大丈夫です。何とかしますから」

ナギ「リリカル剣魂スペシャル始まるぞ」

第三十七訓　知る事ができない筈の事を誰かに教えてもらえる事ってたまにはある

ここは八神家。
夜中に桂とヤミはなぜか目が覚めた。
ちなみに桂やヤミなどはベッドが足りなかったのでヴィルヘルミナの能力で作った包帯のハンモックで寝ていた。
するとリビングに明かりがついていた。
不審に思った桂とヤミが物音を立てないように静かに近づいた。
リビングにはシグナム達が集まって、何やら話合いをしているようだった。
するとなぜかナギとイヴと梔とヴィルヘルミナが壁に耳につけて中の話を聞いていた。
不審に思ったヤミと桂は小声で声をかけた。

ヤミ「何をしているんですかあなた達？」
桂「盗み聞きは良くないぞ。お主達」
イヴ「しーーーーっ、静かにしろ」
ナギ「今いいとこなんだ。この物語の大事なイベントのひとつが始まろうとしてるんだ。黙って聞いてろ」
梔『その通り』
ヴィル「なのであります」
桂・ヤミ
「「イベント？」」

二人がそういった瞬間

シグナム「誰だ！」
ナギ・イヴ・梔
「「『げっ！』」」

ヴィル「あらら」

あ～あ、みつかっちゃった。

シグナム「お前達、今の話し聞いていたのか？」

シグナムがナギ達にそう尋ねた。

イヴ「だったらどうしたんだよ」

イヴは大して反省している態度も見せずにそう答えた。

ヴィータ「シグナム、どうすんだ？」
シャマル「シグナム…」
シグナム「うむ…」

シグナムは悩んだ。ナギたちをどうすべきかと。いくらヤミ達がはやての友人だと言っても自分達の話を聞かれた以上唯では済ませられない。かといってヤミたちをどうにかしてしまえばはやてに「あれ、ヤミちゃんたちは？」と聞かれるに決まっている。その時はやてになんて説明すればいいのかと、するとナギが口を開いてとんでもないことを言い出した。

ナギ「どうせ『闇の書』について話してんだろ？別にいいだろうが聞いたって」
梔『減るもんじゃなし』
桂・ヤミ
「「闇の書？」」
ヴォルゲンリッター
「「「「なッ！？」」」」

シグナム達がナギの言葉に驚き桂とヤミが首をかしげた。

ヴィータ「なッ…何でお前、闇の書の事…はっ！さてはてめえ時空管理局のスパイかなんかだな！！」
ナギ「そんなわけあるかバカ！アニメ見てたから知ってるだけだ！！」
ヴォルゲンリッター
「「「「は？アニメ？」」」」

シグナム達がナギの言葉に訳が分からないと言う感じで首をかしげ

た。

ヴィータ「あっ…アニメって何だよ。アニメとあたしたちと何の関係があるって言うんだよ？」

ヤミ「はあ…実は」

ヤミがシグナム達にわけを話した。

シグナム「我々の事がお前達の世界ではアニメとしてかたられているだと？」
ヤミ「はい」

シグナムの問いにヤミはそう答えた。
ついでに自分達が異世界から来たのだと言うこともはなした。

ヴィータ「んなバカな話信じられるか！」
ナギ「だったらこれを見ろ」

そんな話は信じられないと言うヴィータに対してナギはシグナム達に『魔法少女リリカルなのはＡ，Ｓ』のＤＶＤを見せた。するとそこにはなのはやヤフェイトのほかにシグナムやヴィータの絵も描かれていた。その上ＤＶＤをプレイヤーに入れて中身を再生した。そこには，ヴィータがなのはを襲うところまでがはっきりと映像に映し出された。

ヴィータ「うっ…嘘だろ」
シグナム「まさか…」
シャマル「そ…そんな」
ザフィーラ「な…なんと」
ナギ「信用したか？」
シグナム「…ああ」

ナギにそう言われシグナム達は納得した。ナギは原作どおりアニメマニアなのだ。そして梔も。だからリリカルなのはも当然見た事がある。しかも今回リリカルなのはの世界に行くということでナギはリリカルなのはのＤＶＤをいくつか持ってきたのだ。
すると桂が口を開いた。

桂「それで結局お主達は何の話をしていたんだ？」
梔・ヤミ
「『はあ？』」
ナギ「…おいヅラ、お前今のやり取り見てなかったのか？」
桂「ヅラじゃない。桂だ」

話をちゃんと聞いていなかった桂に対してナギはそう言った。ヤミたちは呆れた。
するとシグナムは口を開いて

シグナム「…詳しい話を聞いてくれるか？お前たち」
ヤミ「はい」

ヤミは頷いた。

とりあえずシグナム達から闇の書について説明を聞いた桂とイヴは驚いた。

桂「なんと…！では闇の書を使えば、天竺への道が開かれるのか！？」

イヴ「デロドロンドリンクも手に入り放題か！？」

闇の書を手に取って桂とイヴは興奮する。

ナギ「アホかお前らはアアアアア！！」

ヴィータ「このバカ共！お前らの頭カチ割ってやる！！」

シグナム「ヴィータ！落ち着け！」

シャマル「ヴィータちゃん！」

ヴィル「お嬢様も落ち着いてください」

ヤミ「そうですよ。ナギ」

桂達にグラーフアイゼンを構えるヴィータ。必死にヴィータを止めようとするシグナムとシャマル。そして桂達を蹴っ飛ばそうとするナギを止めるヴィルヘルミナとヤミであった。

イヴ「まぁ落ち着けよお前ら。つまりこの闇の書ってもんは空白の６６６ページ全て埋めれば、所有者は大いなる力ってやつを得る。そういう事なんだろ？」

ザフィーラ「そうだ」

梔『分かってたんなら最初からそう言って』

ナギ「ていうかお前人の名前は覚えないくせにどうしてそういうことはすぐ理解できるんだよ」

イヴの言葉にザフィーラが頷き梔とナギがイヴに突っ込んだ。

桂「しかし八神殿は力を欲している様子はないが…何故お主達は闇の書を完成させようとしているんだ？」
ヤミ「その通りです。はやてはそんな力を望む子だとはとても思えません」

桂とヤミがシグナム達にそう尋ねるとナギが口を開いた。

ナギ「…闇の書を完成させなければ、はやてが死ぬからだろ？」
シグナム「…そうだ。そんな事まで知っているか」

険しい表情でナギが答えシグナムがその通りだと頷いた。

桂「何？」
イヴ「マジ！？」
ヤミ「それは本当なんですか！？」
ナギ「ああ、本当だ」

驚くヤミ達にナギは険しい顔でそう答えた。
ヤミ達は表情を険しくした。

シグナム「主はやての足は病気ではなく、闇の書の呪いなのです。それは徐々に上の方に進行している。それを止めるために、私達は蒐集を行っているのです」

シグナムが説明を終える。するとナギが口を開いた。

ナギ「だがなお前ら…普通に闇の書を完成させてもはやては死ぬぞ」
梔『残念だけどその通り』
ヴィル「……」

ヤミ・イヴ
「「えっ！？」」
ヴォルゲンリッター・桂
『なッ！？』

ナギの言葉にシグナム達とヤミとイヴと桂が驚いた。
そしてヴィータがナギの胸倉を掴んだ。

ヴィータ「そんなはずあるか！！闇の書を完成させたらはやてはのろいから開放されて助かるはずだ！！」

ヴィータはナギの胸倉を掴んでそう叫ぶ。

シャマル「ヴィータちゃん！」
ヴィル「あなた！お嬢様に何を「止せ、ヴィルヘルミナ」お嬢様！？」

シャマルとヴィルヘルミナはヴィータを止めようとするがナギがそれを止めた。

ナギ「お前の気持ちは分かるが事実だ」
ヴィータ「うるせえ！てめえさっきから調子のいいこと言いやがって！！お前に闇の書の何が分かるんだよ！！」
ナギ「…じゃあ聞くがお前ら闇の書が完成した後のこと見たことあるのか？」
ヴィータ「なっ！？…そっ…それは」

ナギの言葉にヴィータは急に口を詰まらせた。

ナギ「お前たちは闇の書が完成した後のことは見た事がないはずだ。

違うか？シグナム」
シグナム「…その通りだ」

ナギの言葉にシグナムは頷いた。

ナギ「闇の書は完成しても主の意思に関係なく暴走して主も食い殺す物なんだよ」

ナギは答える。

ヴィータ「そ…そんな、じゃあはやてを助ける方法はないってのかよ！！？」

ヴィータは愕然となり、シグナム達も下を向いた。

ナギ「安心しろ。はやては助けられる」
ヴォルゲンリッター
「「「「えっ！？」」」」
ヤミ「それは本当ですか！？ナギ！」

ナギの言葉にヤミは答える。

ナギ「ああ。まあ…そのためには結局闇の書を完成させなきゃいけないんだけどな」

ナギは深刻そうにそう答えた。

イヴ「でも、今お前完成させても死ぬって言ったばっかジャン」
ナギ「話しは最後まで聞け」

ナギはそう言って説明し始めた。

ナギ「いいか方法はこうだ。まずお前らの最初の予定通り闇の書を復活させる」

桂・シグナム「「ふむ」」

ナギ「そんで復活した闇の書本体のプログラムをぶっ飛ばしてはやてを闇の書から引っ張り出す。その後防御プログラムの方をやっちまえばはやては助かる。以上だ」

ヴィータ「へ？」

シャマル「…それだけ？」

ヤミ「…なんですか？」

ナギ「ああ、そうだ。そんだけだ。・・・最も闇の書の幻惑に打ち勝たなきゃいけないんだけどな」

ナギはそう言った。

イヴ「幻惑って？」

ナギ「この話が順調に進めば闇の書の奴は自分に近付いてきたものを自分が最もそうなっていたらっていたらいいなって言う夢の空間に落とそうとするんだ」

桂「ほう」

ナギ「その幻惑に打ち勝てば闇の書はおかしくなるからその隙を突いて闇の書を説得すりゃいいんだ。そうなれば闇の書ははやてを開放するはずだ」

ヤミ「なるほど」

ヤミはナギの言葉に納得した。

ナギ「まあ、それにな、闇の書の奴も本当ははやての奴をどうにか

したいなんて思ってないはずだ」
ヤミ「それはどういうことですか？ナギ」

ナギの言葉にヤミが質問する。

ナギ「闇の書は今までただの道具としてでしか扱われなかった。お前らもな。だがはやては違うだろ」
シグナム「はい」

シグナムはナギの言葉に頷く

ナギ「それはお前らを通じて闇の書の本体にも伝わっているはずだ。だから闇の書のことをちゃんと理解してやる奴が必要なんだ」
桂「…という事は闇の書本体もシグナム殿達のように意思を持っていると言うことか？ナギ殿」
ナギ「ああ、そうだ。だが奴自身も自分の力をちゃんとコントロールできないんだ。今までバカな主共のせいでな」
ヤミ「それはどういう事ですか？」

ヤミが再びナギに質問する。

ナギ「今までの奴らは自分の欲望のためだけに闇の書の力を手に入れようとしてきた。だから今までの奴らの邪なエネルギーでいっぱいになって自分の意思に関係なく主を呪うような呪われた魔道書になってしまったんだ。だから誰か闇の書を救ってやらなきゃいけないんだ」
シグナム「それが主はやての役目だと？」
ナギ「そうだ」

シグナムの言葉にナギが頷く。

桂「それにしても自らの意思に関係なく主を呪ってしまうとは…皮肉な話だな……ちなみに闇の書の完成以外に他の方法はないのか？」
ナギ殿」
ナギ「ない」

答えを聞いた桂は目を閉じて、腕を組んで考えた。しばらくして、ゆっくりと目を開けた。

桂「わかった。俺も闇の書の蒐集に協力しよう」
ヤミ「私も協力します。はやてを見捨てることは出来ません」
イヴ「僕も協力してやる」
梔『私も協力する』
ナギ「もちろん私たちも協力する。なあヴィルヘルミナ」
ヴィル「はい」
シグナム「えっ！！？」

桂達の言葉にシグナム達は驚いた。

桂「魔法とやらは使えないが、剣の腕には自信があるつもりだ。足手まといにはならん」
イヴ「僕とヤミも変身能力を持っているんだ。いわば全身武器みたいなもんだ。役立つぞ」
ヤミ「はい」
梔子『私も『香（フレグランス）』の能力を持ってるから役立つ』
ナギ「私にも切り札がある。それにヴィルヘルミナは私の護衛の中でも最強の実力を持っている。心配はいらん」
シャマル「あの…本当にいいんですか？」

シャマルが桂達に尋ねた。

桂「正直、やり方には反対だが…八神殿や闇の書殿を助ける手段がそれしかないのなら仕方なかろう」
ヤミ「はい」
ナギ「そういうことだ」
と桂が言った。

シグナム「貴方達の協力は嬉しいが…何故そこまで？ヤミ以外は主はやてとは今日会ったばかりなのでは？」
シグナムが理由を尋ねた。

桂「八神殿は素性も知れぬ俺を家に泊め、飯まで世話をしてくれた。俺は侍だ。侍は受けた恩は返す…行方の知れん姉上の事が少々気になるが…まあ姉上なら大丈夫だろう」
ナギ「目の前で死のうとしている奴を見捨てることは私の恥だ。それに私の執事の名前もハヤテと言うんだ。はやてつながりだしとてもじゃないが見捨てるこなどできん。未来を知っているのに何もせんというのもアレだしな」
イヴ「僕も死にかけてる奴は悪党以外はほっとけない性質だ」
梔子『右に同じ』

桂達はハッキリとそう言った。

シグナム「…わかりました。では、これからよろしく頼む」
シグナムが頭を下げて言った。

シャマル「それじゃあ問題は…あの十字傷の男ね」
桂・ナギ・ヤミ

「「「十字傷の男？」」」

シャマルの言葉に桂とナギとヤミは目を細めた。

ヴィータ「シグナムを一対一の勝負で倒した化物だよ」

ヴィータが桂達に教えた。

ヤミ「ちょっと待って下さいシグナム。その男の名前は緋村剣心というんじゃないんですか？」

シグナム「な…！？何故貴方が剣心の名を！？」

シグナムが驚いた顔でヤミに聞いた。

桂「やはり剣心か…」

桂はため息をついた。

ヴィータ「お前らアイツの事知ってるのか？だったら教えてくれよ！」

ヴィータが袖を掴んで聞いてくる。

ヤミ達は少し迷ったが、シグナム達に話すことにした。

桂「…昔、俺達の世界で、宇宙から来た異人、あまんと天人との戦『譲夷戦争』が起こった。その戦の中で剣心は、史上最強の流派や陸の戦艦と呼ばれた伝説の剣『飛天御剣流』を使いその鬼神の如き強さで数多の天人を倒し、敵はおろか味方からも恐れられ『紅夜叉（べにやしゃ）』と呼ばれたのだ」

桂は自分達の過去と、ついでに剣心同様に恐れられた銀時（白夜叉）

についても話した。

シグナム「紅夜叉…飛天御剣流…」

話を聞いたシグナムが呟いた。

桂「正直、俺でも剣心や銀時の相手は骨が折れる。それに剣心以外にも助っ人はいたはずだ」

ザフィーラ「うむ。凄まじい怪力を誇る青髪の少女一人と赤髪の少女一人と桃髪の少女が一人ずつ、目にも止まらぬ剣の使い手もいた。他にも何人かいたようだが・・・」

ザフィーラが桂に答えた。

ナギ「あいつらみんな強いからなあ・・・でもあいつらの大半はお前らみたいに空は飛べないはずだぞ」

「あっ！」

ナギの言葉に、シグナム達は同時に声を上げた。

ナギの言うとおり、魔導師でない剣心達は空を飛ぶことはできない。いかに剣の腕が凄くても、空に逃げられては攻撃のしようがない。

ナギ「地上や屋上に降りずに、空中にいれば剣心達との戦闘は避けられる。まあその場合は、管理局の魔導師とかと戦う事になってしまうがな」

ヴィータ「なら問題ないじゃん！魔導師相手なら負けはねぇ！」

ヴィータが強気な声で言った。

シグナム達もヴィータの言葉に頷いている。

しかし、ヤミが急に言葉を出した。

ヤミ「ちょっと待ってください。あの中にはシャナもいます。彼女は飛べますし、それに美琴のレールガンで狙われたら攻撃を受けますよ」
イヴ「ブレイドやセトもいるだろうしな～」
ナギ「まあ確かにな…でもあいつらくらいなら私達だけでどうにかできるだろ。今頃ハヤテも私を探している頃だろうし、私の護衛たちにも手伝わせるから問題ない」
イヴ「ああ、あいつらか」
ヴィータ「護衛？」
ザフィーラ「どこにいるんだ？」

ナギの言葉にヴィータとザフィーラは首を傾げる。

ナギ「今紹介してやる。ちょっと庭に出るぞ。ここじゃ狭いからな」
シグナム「ああ…分かった」

そういってリビングにいた全員が庭に出て行った。

――足りない――

ドクン

――まだ力が足りない――

ドクン

――もっと…もっと魔力が必要だ――

ドクン

――愚かな守護騎士共よ…せいぜい頑張って蒐集を続けるがよい――

ドクン

――ワシを復活させるために――

ドクン

――そして…暗黒の世界を築き上げるためにな…クックック――

ナギさえも知らない闇の書の中に眠る強大なる『悪』の存在。
その存在はずっと待ち続ける。自らの復活の時を……
そして…その時は目前まで迫ろうとしていた……

第三十七訓　知る事ができない筈の事を誰かに教えてもらえる事ってたまにはある

支配者「なかなか面白い展開になってきましたね」

銀時「おい、こんなことしてちゃんと話しつなげられるんだろうな！？」

支配者「だから何とかしますって、さて次回はこの話の続きです。ナギの謎の護衛達の正体も明らかになります。後、次こそは『教えて、銀八先生』をやろうと思いますので質問などじゃんじゃんお待ちしております」

はやて「次を楽しみに待っててや」

第三十八訓　謎の生き物ってなんか怖い（前書き）

支配者「今回はナギの護衛の正体が分かります」

銀時「おいおい、こんなのありか…」

ナギ「リリカル剣魂スペシャル始まるぞ」

第三十八訓　謎の生き物ってなんか怖い

ここは時空管理局の地球支部（仮）

ハヤテ「僕お嬢様達を探して来ます！後よろしく！」
銀時「ちょっと待て！」
シャナ「落ち着きなさいよハヤテ！」
ハヤテ「何ですか！止めないでください！」

ナギを探しに行こうとするハヤテを銀時とシャナが止めた。

綾子「探すって言ったってあんたどこ探す気よ」
美琴「そうですよ綾崎先輩」
ハヤテ「そんなのしらみつぶしに決まってるでしょ！」
セト「ちょっとは落ち着け綾崎」
セイバー「全くです」
アルカ「そうだぞ。大体ナギお嬢様は『アレ』を持っているんだろう？だったらそこまで心配しなくても…」
ハヤテ「それでも心配なんですよ！！」

ハヤテ達はギャーギャーと言い争っている。
その時フェイトは剣心に話しかけた。

フェイト「ねえ剣心」
剣心「おろ？何でござるかフェイト殿？」
フェイト「今アルカが言った『アレ』って何？」
剣心「ああ…それはでござるな…」

ここは八神家の庭

ヴィータ「おい、ナギ。お前が言ってた護衛って誰のことなんだよ？」

ナギ「そうせかすな。今出してやる」

シャマル「出すってどこから？」
ナギ「これからだよ」

そういってナギは携帯電話みたいな形の物を取り出した。

シャマル「それ…おもちゃなんじゃ…？」
ヴィータ「…そんなのどうすんだよ？」
ナギ「まあ見ていろ。…とりあえずこの二匹でいいか」

そういってナギはその携帯電話みたいな形の物を構えた。

ナギ「リロード。スパロウモン、グレイドモン」

ナギがそういうとその携帯電話みたいな形の物が光った。

ピカッ！

シグナム「ぬわっ！」
ヴィータ「まぶしっ！」

その光が晴れるとそこにはおもちゃの飛行機みたいな者と竜の仮面をかぶった黄金の騎士がいた。

「呼んだ？ナギ」
「お呼びですか、主」

二匹はナギに挨拶した。

ヴォルゲンリッター
「「「「どわあああああ！！」」」」

シグナムたちは突然の出来事に驚いた。
そしてヴィータが口を開いた

ヴィータ「おっ…おい！何だよこの変な連中は！？どっから現れたんだ！？」
「おいこらチビすけ！変とは何だ！」
ヴィータ「んだと！あたしはチビじゃねえ！」

おもちゃの飛行機みたいな物がヴィータと言い争いを始めた。
そしてシグナムが口を開いた。

シグナム「…彼らは？」
ヤミ「この二体は『デジモン』と言う生き物です」
シャマル「デジモン？」

シグナムの質問にヤミが答えシャマルが首を傾げた。

ヤミ「デジモンと言うのは私達の世界の宇宙空間にあるデジタル星という別の星に住む特殊な電子生命体のことなんです」
梔『その通り』
シャマル「へっ…へえーそう…なの…」

ヤミが説明した。そしてシャマルが苦笑いをした。
まあ、この小説ではデジモンはこういう設定ですから

シグナム「しかし…いったいどこから現れたんだ？」
ナギ「こいつからだよ」

そういってナギはその携帯電話みたいな形の物をみせた。

ナギ「こいつは「クロスローダー」って言ってな。デジモンをデータ化して大量に住まわせる事ができる便利な道具だ。デジタル星だけで聞く事ができる特殊な音波『デジメロディ』ってやつからデジモンを生み出すことも出来るって言うしな。前にデジタル星に宇宙旅行に行ったときにデジタル星でデジモンの研究をしてる天人の科学者から買ったんだ。六十億ほどで」

ヴォルゲンリッター

「「「「ろっ、六十億!!!?」」」」

ナギから平然ととんでもない大金の額のことをさらっと聞いたシグナム達が驚いた。クロスローダーの事を聞いた以上に

イヴ「こいつ超が3つつく位の大金持ちだからな」

ヤミ「私達の世界でもの五本の指に入るほどの大財閥のご令嬢ですからね。私たちや剣心も時々仕事をもらってるんです」

イヴとヤミがさらっとそう言った。

シャマル「そ…そうなの」

ザフィーラ「それにしてもこんな生き物がいるとは・・・ずいぶんとお前達の世界は不思議な世界なんだな」

イヴ「喋る犬のお前が言うか」

ザフィーラ「我は犬ではない」

イヴがザフィーラに突っ込んだ。

グレ「主…この者共は?それにハヤテ殿とマリア殿の姿が見えませんが…?」

スパ「そうだよナギ!なにこの偉そうなチビ!!」

ナギ「ああ…実はな」

グレイドモンとスパロウモンがナギ達に対して質問した。ナギが事情を話し始めた。

ナギ「…という訳だ」

ナギが先ほど話していたことをグレイドモンたちに説明した。

グレ「なるほど…事情は大体分かりました」
スパ「…お前らって結構苦労してんだな～」

グレイドモンがナギの話に納得しスパロウモンは感動して涙を流した。

ナギ「だからお前達も協力しろ、後で他の奴らにも言っておくのだぞ」
スパ「は～い」
グレ「承知いたしました」

スパロウモンとグレイドモンがナギの言葉に了解した。
すると、シグナムが

シグナム「ナギ。他にもこのようなものが多くいるんですか？」

と言った。

ナギ「まあな。まだ結構いるぞ」

ヴィータ「でもよう、こいつら強いのか？」

ナギが納得し、ヴィータがそんなことを言った。するとスパロウモンが

スパ「強いに決まってんだろ！お前みたいなチビ助より僕のほうが強いんだ！！」

ヴィータ「なんだとコラァ！あたしはチビじゃないって言ってんだろ！！」

ヴィータとスパロウモンがまた喧嘩を始めた。

シャマル「ヴィータちゃん！落ち着いて！！」

グレ「お前も止せスパロウモン！主の前だぞ！」

シャマルとグレイドモンは一人と一匹を止めた。お互いに向き合ってガルルルルと唸っている。

ナギ「…まあこいつらが強いことに間違いはない。それにとっておきの奴が四匹もいる。まあもっともその内の二匹ほどはでかすぎて町中じゃとてもじゃないが使えないがな…」

シャマル「で…でかいって…」

ナギの言葉にシャマルはちょっと顔を青くした。その時イヴが

イヴ「なあ…そろそろ寝ないか？僕眠いんだけど…」

梔『そろそろ話も頃合だと思うし…』

ヤミ「そうですね。（まあ…最悪剣心達なら事情をはなせば分かってくれる筈ですし・・・）」

シグナム「そうだな・・・では話はこの辺にしておこう」

桂「うむ。では皆あまり無理はせぬように」
ヴィル「お嬢様。早くベッドにお戻りください」
ナギ「ああ」

こうして話合いは終わり、ヤミたち七人も闇の書を巡る戦いに参戦する事となったのであった。

しかし、その様子を遥か空の彼方でその様子を見ていた男がいた。

？？？

「何だ奴らは…？あの守護騎士どもに妙な連中がついたな…まさか…ジュド様が言っていた例の邪魔者どもの仲間か？」

その男は黒フードをかぶっており素顔は見えない。
話を聞いている限りどうやらジュドの手下のようだ。

？？？

「それにあの妙な生き物共は・・・まさか！だとしたらやつらは例の世界からきた者共だと言うのか！？」

ジュドの配下と思われる黒フードの男は驚く。

？？？

「…こうしてはおれん。ジュド様にこの事をご報告せねば！！」

そういって黒フードの男はその場から消えた。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『『銀八先生！』』

銀八「今回はゲストに『ヴォルゲンリッター』を呼んでいま～す」

ヴォルゲンリッター
『よろしく』

銀八「じゃあまず最初の質問ペンネーム『ルシフェル』さんから「ヴォルゲンリッターに質問です桂達の第一印象はどんなんでしたか？」はい、どうなの？」

ヴィータ「そうだな～まあバカっぽい奴だと思ったな」
シグナム「みためは真面目そうなのだが・・・」
シャマル「その期待を見事に裏切りましたからねえ…」
ザフィーラ「そうだな…」
ナギ「まっ、バカだしな」
銀八「ホントだよな。ヅラはバカだ」
桂「バカじゃないヅラだ・・・いや間違えた桂だ」
ナギ「黙ってろバカ」

フェイト「では次の質問です。次もペンネーム『ルシフェル』さんから二つめの質問シグナムに質問ブレイドに告白されたけど…受け取る？（笑）」

シグナム「受け取るかぁあああああ！！（怒）」

全員『やっぱり…』

ブレイド「何でじゃお姉さん！俺の愛を受け取ってくれ！！」

銀八「ふざけんなこのロリコン神父！！テメーは綺麗な女なら誰でもいいんだろうが！！」

ブレイド「んだとコラァ！テメーに言われたくねえんだよ！！このダメ天パ！！」

銀八「おいコラァ！！それじゃ先生もお前見てえにロリコンみたいじゃねえか！！」

ブレイド「うるせエ！！俺は世界中の綺麗な女の子と仲良しになるんじゃ！！だから今回の告白もその計画の一部に過ぎん！！」

その時だ！

シグナム「おい…今の言葉どういう意味だ…？」

銀八・ブレイド『エッ？』

シグナム「貴様はそんな軽はずみな気持ちで私の心を弄んだのか…？」

ブレイド「エッ…あ…いやその…」

シグナム「どうやら死にたいらしいな…」

ブレイド「ちょっ…ちょっと…待って」

シグナム「死ねえええええ！！」

ブレイド「ギャアアアア！！」

シグナムはレヴァンテインでブレイドを切りつけた。

シグナム「『ルシフェル』！！貴様一生廊下に立ってろぉおお！！！！（激怒）」

剣心「ははは…では次の質問でござる。ペンネーム『匿名希望』さんから、「質問この作品の剣心は28ですか？29ですか？もしや人誅編後の三十路…？」」

剣心「いや…拙者はまだ28でござるよ」
神楽「まあ…剣ちゃんは見た目女みたいだし若く見えるアルよ・・・おっさんくさい銀ちゃんと違って…」
銀時「おいコラ神楽ァ！！オッサン臭いってどういう意味だコラァアアア！！！銀さんから加齢臭が出てるっ事か！？そうなのか！？」
新八「そのまんまの意味でしょ・・・なんでこんなクソ天パになのはちゃんは惚れたんだ・・・」
銀時「おいコラァアアア！！誰がクソ天パだ！！このダメガネ！！」
新八「あんだとコラァ！！ホントの事だろうが！！」
銀時「てんめ上等だ！！表に出ろ！！」
新八「望むところだオラァアあぁ！！」

銀八「あ〜はいはい。あんな奴らはほっといてとりあえず『匿名希望』さん廊下に立っていなさい」

シャマル「次が最後ね。ペンネーム『黄色い何か』さんから「質問です。薫よ、子供相手に怒り狂うなんてはっきり言って情けないですよ。『るろ剣』のヒロインとしての資格が疑われますよ」…ですって」

薫「うるさいわね！！ほっときなさい！！！！大体この世界は『るろ剣』の世界じゃないんだからいいのよ！！！！！」
銀八「おいおい…それって問題発言なんじゃねーの？」
薫「なんか…言った…？」

その時薫からは物凄く黒いオーラが出ていた。

銀八「いえ、なんでもありません」

薫「ふん…とにかく『黄色い何か』さん。あんた廊下にたってなさい」

剣心「では今回はここまでござる」

ヴィータ「次を楽しみにな」

第三十八訓　謎の生き物ってなんか怖い（後書き）

支配者「はい、驚きの展開ですね～。ちなみにナギはジェネラルじゃありませんよ。後、デジモンの設定はクロスウォーズ設定なので成熟期と完全体とかあんま関係ありません」

銀時「おい、バカ作者!!まさか俺たちとデジモンを戦わせる気じゃねーだろーな!!!」

支配者「なに言っての?番外編でも戦ったでしょ?」

銀時「確かにそうだけどよ!ナギの奴が馬鹿でかい奴がいるって言ってたじゃねーか!!そん時はどうすりゃいーんだ!!!」

支配者「そんなの知りません」

銀時「あんだとぉ!!」

支配者「はい、こんなの無視して皆さんは次回をお待ちください」

銀時「無視すんなぁー!!」

第三十九訓　結局主人公は物語に関わる。（前書き）

支配者「今回は銀時達のお話です」

シャナ「リリカル剣魂スペシャル始まるわよ」

第三十九訓　結局主人公は物語に関わる。

今回の『闇の書事件』も、リンディ率いるアースラメンバーが捜査を担当する事はすでに決定していた。もちろん剣心や銀時達も一緒である。
ちなみにハヤテは結局銀時達の言葉もむなしくナギを探しにいってしまった。
そして、いつの間にか雪路もいなくなっていた。アルカがいることに気付いたからだろうか
ちなみにあの後、なんやかんやあってなのはが銀時に惚れている事をブレイドが知ってしまった。
そして、

ブレイド「江戸では全くモテなかった貴様が異世界に来てから俺様好みの小さな幼女にモテてんじゃねえぞ！！」

ぶっちゃけブレイドが銀時への八つ当たりをしていた。
もちろん銀時も言い返した。

銀時「ウルセエ！！俺はてめえみたいにロリコンじゃねーんだ！！俺だって困ってんだよ！！！あのあと何度も新八に狙われて大変だったんだぞ！！！！！」

そう実は銀時はあの後しばらくの間外に出るたびに新八に襲われていた。なぜかって？もちろん愛しのなのはを銀時に奪われた八つ当たりの復讐ですよ。
まあ、結局何度も返り討ちにあっていたが
ちなみにこの場に新八はいない。リンカーコアを奪われて倒れてしまったなのはの様子を心配して見に行ったのだ。

まだあきらめてないのか。ッたくしつけえロリコンだな。

新八「ウルセエ！！僕の勝手だろうが！！！」

新八は思いっきり叫んだ。

どうせ寝ているなのはを襲う気なんだろ

新八「そんなことするかぁアアアアアアアアアアアアアア！！！！（激怒）」

新八はまたまた叫んだ。

その後銀時とブレイドの二人は結局大喧嘩を始めてしまったが剣心達にそろって押さえ込まれた。

その後、ようやくなのはも起きて、フェイト、銀時と話していた。

なのは「あの人達なんであんなことしてるんだろう？」

なのはは何故シグナム達が局員を襲っているのか良く分かっていなかった。闇の書の事はフェイトから聞いていたが何故その闇の諸完成させようとしているのかが分からなかった。そして守護騎士達を救ったジュド達の目的も

フェイト「分からないけど…悪い事をしているのなら止めなくちゃいけない」

銀時「そうだな。（あいつらはあんま悪い連中には見えなかったけどな）」

なのは「銀さんごめんなさい。いきなり迷惑かけちゃって…」

銀時「気にすんな。別に迷惑だなんて思ってねーよ」

なのは「フェイトちゃんも心配かけてごめんね」

フェイト「ううん。なのはが無事でよかったよ」

こんなふうになのは、フェイト、銀時は会話をしていた。そしてフェイトが口を開いた。

フェイト「…リンディ提督の話だと今回の事件もアースラメンバーが担当することになったって」

なのは「そうなんだ…」

なのはは少し不安になった。なのははヴィータに全くはがたたなかったからだ。今度はちゃんとヴィータと話がしたいと思っているがちゃんと理由を聴く事ができるだろうかと

銀時「安心しな。俺たちも手伝ってやるからよ。まッ、お前はお前のペースで動きゃいーんだ。俺たちが後ろかしっかり支えてやるからよ」

なのは「うん…銀さんありがとう」

銀時に励まされなのは微笑んだ。

その後、フェイトと銀時達は、リンディ達と共に地球に赴いた。アースラの整備が完了していないので、話し合った結果、闇の書事件司令部はなのはの近所に移す事になったらしい。しかもそこはフェイトの新しい家らしい。

なのは「うわ～！凄い近所だ♪」

フェイト「本当？」

なのは「うん。ほら、あそこが私の家♪」

なのはとフェイトは、ベランダから仲良く街を見ている。

部屋の中では、銀時達が汗を流しながら荷物を運んでいた。汗をかいていない者もいたが

東条「な…何故私達が引っ越しの手伝いをしなければ…いけないのですか？」

未央「めんどくさ～い」
相楽「全くだぜ…俺は喧嘩しにきただけだってのに」
ブレイド「かったりいなぁたく。こんなもんはコイツラ下僕どもの仕事だろうが」
銀時「管理局のやつら…俺達を便利屋か何かと勘違いしてやがんだ。あ～腹が立つ！……っておい！だれが下僕だコノヤロー！！」

荷物を運んで、汗を流しながら東城、左之助、未央とブレイドが不満を言い、銀時が文句を言う。ブレイドに対しても。ちなみに綾子やナナ達はヤミたちを探して町を歩きにいった。

剣心「銀時、あまり文句を言ってはいかんでござるよ」
セイバー「そうですよ、銀時、なのはやフェイトのためです」

剣心とセイバーが銀時達を諌めた。
そしてクロノが

クロノ「僕達はあなた達の無駄にあるその馬鹿力を有効に活用してるんですよ」

クロノが笑みを浮かべながら言った。

銀時「おい東城，未央、左之助、ブレイド。後でコイツにヤキ入れようぜ。ついでに定春も連れてこい」
未央「んいっ！」
相楽「賛成だ。このガキに礼儀ってモンを教えてやる」
ブレイド「調子に乗るなよ。この下僕が」
クロノ「なっ！？ちょっと待て銀時！定春だけはやめてくれ！！それと誰が下僕だ！！」
ブレイド「うるせぇ！山田2号！！」

クロノ「僕はクロノだ！！」

定春の名を聞いて、クロノは顔を青くした。散々頭を噛み付かれて散々な目にあったからだ。後ブレイドに下僕扱いされて文句を言った。ちなみにクロノのあだ名は山田2号にされてしまった。

プレシア「みんなお疲れ様。一休みして頂戴」

プレシアが剣心や銀時達に言った。

銀時「うース」

剣心「分かったでござる」

汗を拭きながら銀時達はリビングに向かった。

リビングにいるエイミィは、アルフとユーノを見つけた。

エイミィ「ユーノ君とアルフは、こっちではその姿なんだ」

アルフ「新形態子犬フォーム！」

ユーノ「なのはやフェイトの友達の前ではこっちの姿でないと…」

アルフは可愛い子犬姿で、ユーノは久々のフェレット姿になっていた。

フェイト「わ～アルフちっちゃい！どうしたの？」

プレシア「あら、本当！」

なのは「ユーノ君もフェレットモード久しぶり～！」

フェイトとプレシアは子犬フォームのアルフに驚き、なのはは嬉しそうにフェレット姿のユーノに近寄る。

アルフ「可愛いだろ♪」
フェイト「うん！」

アルフがフェイトの頬を舐める。
ユーノは、なのはに頬ずりされて苦笑している。
そんなユーノを見て神楽は

神楽「なのはに頬ずりされて喜んでる…やっぱりユーノは淫獣アルな」
ユーノ「何でですか！！」

するとそれを見た黒子が、

黒子「お姉様ぁあああ！私にも頬ずり」
美琴「するかァアアアア！！」

美琴はそう叫んで黒子をぶっ飛ばした。
……だが黒子にとって、この感触が繋がる感情は、快感以外の何物でもなかった。
何故なら、黒子を殴った相手というのが愛する美琴だからだ。

黒子「お姉様～♪ここじゃああれなので、邪魔者がいない奥のベッドで……」
美琴「一応ここ人の家なんだから、アンタは自重しなさいって言ってるのよ！！」

ビリビリビリビリビリビリビリ！

黒子「ピギャアアアアアアアアアアアアアアア！！」

黒子の身体を、美琴の電流が駆け巡る。
見ていると思わず卒倒してしまいそうな光景だが、それでも美琴ＬＯＶＥの黒子にとっては美琴からの自分への御褒美（？）にしか感じられないのだ。
何とも歪んだ愛情である。

黒子「ああ……♪何だか癖になってしまいそうですわ……うへへへへ……」
美琴「ひっ！（キモッ！）」

ついにはこんなことまで口走しったり思ってしまったりする始末。
そんな黒子に、美琴は本気で引いた。
そんなどうでもいいやりとりも、彼らにとって本当に久しぶりなものだった。

アルフ「！」

その時、アルフは銀時とシャナのイヤ～な視線に気付いた。
銀時とシャナはニヤリと笑った。アルフは嫌な予感がした。

銀時「アルフ！お前、今言ったなァア！！新形態『子犬』フォームだと！」
シャナ「つまり、お前は自分が『犬』である事を認めたワケねぇエエエ！！」

ビシッとアルフを指差しながら銀時とシャナが叫んだ。

アルフ「あっ…！いや…そうゆうんじゃなくて……！」
シャナ「もう遅い！お前のさっきのセリフは、このカセットテープに録音してあるのよ！」

銀時とシャナは片手に持ってるカセットテープを見せた。

アルフ「何でアンタ達そんなもの持ってんのさ!?」
銀時・シャナ
「「そこはツッコむな!!」」

銀時とシャナとアルフがギャーギャー言い争う。
久しぶりに銀時達とアルフの騒がしい会話を聞いて、フェイトは笑った。周りにいるなのはや剣心達も笑った。
その時

クロノ「なのは、フェイト。友達だよ」
フェイト・なのは
「「はーい!」」

クロノの言葉に、フェイトとなのはは嬉しそうな笑顔になった。

すずか「こんにちは!」
アリサ「きたよ~!」

玄関に行くと、アリサとすずかがいた。

なのは「アリサちゃん、すずかちゃん」
アリサ「はじめまして…って言うのもちょっと変かな?」
すずか「ビデオメールでは何度も会ってるもんね」
フェイト「うん。でも、会えて嬉しいよ。アリサ、すずか」

二人を見ながら、フェイトは嬉しそうに笑った。

アリサ「うん！」
すずか「私も！」

アリサとすずかも嬉しそうに笑う。
そこへ、新八と神楽とセイバーもやってきた。

新八「久しぶり。アリサちゃん、すずかちゃん」
セイバー「お久しぶりです」
神楽「二人とも元気だったアルか？」
すずか「新八さん！神楽ちゃん！セイバーさん！」
アリサ「久しぶりー！」

新八達にも再会して、アリサとすずかは喜んだ。
ついでに中にいる東条や左之助たちともアリサとすずかは挨拶をした。
その時、ブレイドがアリサ達を見てこう思った。
激萌少女＋キラキラな感じ＋靴下を履いている＋直球ドストライク。
ブレイドの激萌スロットが大当たりして、口から金貨が大量に流れる。
そんなブレイドを見てアリサとすずかは

すずか「キャアアアアアア！！？」
アリサ「なにこの人――――！！？」

とまあ当然の反応を取った。
その後、銀時達が無理やりブレイドを部屋の奥へと連れて行った。

剣心達は、リンディがなのはの両親に挨拶に行くという事で、ちなみになのはにせがまれ銀時はなのはと手を？ぎながら喫茶翠屋へきていた。
そして、銀時となのはが手を？いでいる所を見た恭也と士郎性懲りもなく銀時を木刀で襲おうとしたが、恭也と士郎は、なのはと桃子にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩを受けるために襟首捕まれて、別の部屋に連れて行かれてた。
その時、高町家にまたしても二人の男性の悲鳴が響き渡ったとか。

すずか「ユーノ君も久しぶりだね」
ユーノ「キューキュー」
アリサ「こっちの犬も可愛い～！」
アルフ「アンッ（犬じゃないんだけど…）」

外のテラスでなのは達は、アルフやユーノと一緒に談笑していた。
ちなみに剣心と銀時達はというと。

銀時「おお～！こっちのも、うまそうだな！」
シャナ「ホント、おいしそう！」
美由紀「それは今回作った家の新作なんですよ。銀さんとシャナちゃんとセイバーさんもよかったらお一つ食べてみますか？」
銀時「え？マジで！？」
セイバー「いいんですか！？」
シャナ「やったー！！」

翠屋のケーキに目を奪われながら、美由紀と仲良く話をしていた。

剣心「銀時…シャナ殿…セイバー殿まで…（呆）」

剣心はすぐにも甘い物に飛びついた銀時とシャナとセイバーに呆れた。

ちなみにバイトの件のことで翠屋の人達に最初剣心と銀時は色々と言われたが、そこらへんはなのはがうまくフォローしてくれた。

リンディ「……そんな訳で、これから暫くご近所になります。よろしくお願いします」
桃子「こちらこそお願いします」

リンディと桃子が挨拶をしてる。その時、店の扉が開かれて、フェイト達が中に入ってきた。フェイトは両手で小包を抱えていた。

フェイト「リンディ提と…リンディさん」
リンディ「はい。なぁにフェイトさん？」
フェイト「…あの…コレって…？」

戸惑いながらフェイトは、小包の中を見た。中に入っていたのは白い制服だった。

剣心「あれは…制服でござるか？」
銀時「何で制服？」

剣心が首を傾げて、銀時が片眉を上げた。

リンディ「転校の手続きを取っておいたから。週明けからなのはさん達のクラスメイトね」

笑顔でリンディが言った。

美由紀「あら素敵」
士郎「聖祥小学校ですか。あそこはいい学校ですよ。な？なのは」
なのは「うん！」
桃子「良かったわねフェイトちゃん」

フェイトに向かって優しく微笑みながら、桃子がそう言った。

フェイト「あの…えと…はい、ありがとう…ございます」

恥ずかしがりながらも、フェイトは嬉しそうに制服の入った小包を抱きしめた。

剣心「よかったでござるなフェイト殿」
銀時「よかったなフェイト。友達百人できるかな？」
シャナ「そう簡単に百人の友達なんて出来ないわよ」

と言いながら剣心は微笑み、銀時はケーキを食べた。シャナはケーキを食べながら銀時に突っ込んだ。
するとリンディが銀時と剣心を呼んだ。

リンディ「銀さん、剣さん」
銀時「ん？」
剣心「何でござる？」
呼ばれた剣心は振り返り、銀時は、フォークの動きを止めた。

リンディ「実は銀さんと剣さんにも…」

リンディは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

銀時「え？何？何か嫌な予感がするんですけど…」
剣心「…いったい…何をさせる気…でござるか…？」

瞬きしながら銀時が言い、剣心は冷や汗を流した。

リンディ「ところで…なんで士郎さんは顔があざだらけになっているんですか？」

リンディが顔中にシップを張っている士郎に尋ねた。

士郎「いえ…こちらの事なので気にしないでください…」
リンディ「そっ…そうですか…」

士郎の言葉にリンディは苦笑いをした。

そしてフェイトが、なのは達が通ってる小学校に転校する日。
聖祥大付属小学校。なのはのクラスはざわついていた。

先生「さて皆さん。実は先週急に決まったんですが、今日から新しい友達がこのクラスにやってきます。海外からの留学生さんです。フェイトさん、どうぞ」
フェイト「し、失礼します」

先生に呼ばれ、フェイトが教室の中に入ってきた。
なのは達と同じ白い制服を着て、教卓の前に立った。

フェイト「あの…フェイト・テスタロッサと言います。よろしくお

願いします」

恥ずかしがりながらも、フェイトは自己紹介をした。
クラスの皆は拍手をして、フェイトを笑顔で迎え入れた。フェイトは嬉しそうに微笑んだ。

先生「それともう一つ皆さんにお知らせがあります。実は今日から私に代わって、しばらくの間臨時の先生が皆さんの担任をやります。そして新しく副担任の方も来て下さいました」

先生がクラスの皆に言った。
その言葉に生徒達は再びざわついた。

フェイト（臨時の先生と副担任って…まさか！）

フェイトはハッとなって、教室の扉を見た。
なのはもフェイトと同じ事を考えたのか、教室の扉に視線を向けた。

先生「それでは入ってきてください」
「う～ス」
「分かったでござる」

扉の向こうから気だるげな声と真面目そうな声が返ってきた。
ガラリと扉が開けられ、一人の男が入ってきた。
ズレた眼鏡に、白衣とネクタイをだらしなく身につけた銀髪の天然パーマの男。と赤いリクルートスーツとネクタイをきちんと身につけ左頬の傷をシップかなんかで隠した男。

銀時「どーも。今日から皆さんと一緒におふざ…じゃねーや。授業をする事になりました、坂田銀八です」

剣心「…今日から副担任を勤めさせていただく緋村剣八でござる…。よろしくお願い致す……」

この場に新八がいたら『今おふざけって言いそうになったろ！』というツッコミが入りそうな自己紹介をして登場したのは、坂田銀時だった。剣心は青い顔をしながら生徒達に挨拶した。

銀時…いや、銀八先生を見た生徒達は静まり、フェイトはズッコけたが、なのはは嬉しそうだった。

ちなみに生徒達の中には『何であの真面目そうな人が副担任でこんなふざけた感じの奴が担任なんだよ！』と思っている生徒もいた。

銀時と剣心がなのは達の担任、副担任となって学校に来たのは、デバイスを持っていない二人の護衛のためである…と言われて無理やり二人はリンディに送り込まれたのだ。さすがにこんな所に例の守護騎士達が現れるとは思えないが念のためだと言われてしまったのだ

ちなみにブレイドも「僕もなのはたんたちを守りゅ！！」と先生役に立候補してきたがその場にいた全員に『断固死守・断固阻止』と睨みつけられてしまった。

その時ブレイドは「チッ」と舌打ちをした。

ちなみにリンディがどうやって彼らを担任に出来たのかは謎である。

その頃、フェイトのマンション。

新八「あの、クロノ君。そもそも闇の書って一体何なの？」
セツナ「それ私も聞きたかった」
未央「未央も～」

マンションに残ってる何人かがは、クロノに闇の書について尋ねた。
セツナと未央は闇の書についてはしらないようだ。栂は知ってたのに
そしてクロノは口を開いた。

クロノ「…闇の書は魔力蓄積型のロストロギアなんだ。魔導師の魔
力の根源であるリンカーコアを食って、全６６６ページを埋めると
その魔力を媒介に真の力を発揮する。ジェルシードのように次元干
渉レベルの巨大な力をね」
エイミィ「本体が破壊されるか所有者が死ぬかすると、白紙に戻っ
て別の世界で再生する」

クロノが説明をして、エイミィが補足をした。

九兵衛・アルカ
「「では、闇の書の破壊は不可能なのか？」」

九兵衛とアルカが同時にクロノに尋ねた。

クロノ「ああ。様々な世界を渡り歩き、自らが生み出した守護騎士によって守られ、魔力を食って永遠を生きる。破壊しても何度でも再生する、停止させる事ができない危険な魔導書…それが闇の書なんだ」

クロノが険しい表情で説明した。

雛菊「という事は…私達に出来るのは闇の書の完成前の捕獲…ということ？」

相楽「へっ、なんだ簡単じゃねえか。用はそいつを完成される前に奴らをぶっ飛ばせばいいんだろ」

涼やかな顔で雛菊と拳を合わせた左之助が言った。

エイミィ「そういう事になりますね」

クロノ「唯…ちょっと気になる事があってね」

セイバー「気になること？」

ソルヴァ「何ですか一体？」

急に意味深な顔になったクロノにセイバーとソルヴァが尋ねた。

クロノ「…つい昨日、例の騎士達に襲われた局員が変なことを言っていたんだ」

新八「変なこと？」

アルカ「一体なんだ？」

ブレイド「さっさと言え山田2号」

クロノに今度は新八とアルカとブレイドが尋ねる。

クロノ「僕はクロノだ！！…実はその局員が例の騎士達と一緒に『青い恐竜』がいたって訳の分からないことを言っているんだ。そしてその恐竜に尻尾で壁に叩きつけられたとか…」
新八達『！！』

クロノの言葉に一瞬新八達が驚愕し一瞬で壁際に集まった。

クロノ「どっ、どうしたんだ急に！？」

クロノが急に新八達が壁の方によって行ったので驚いた。

ブレイド「おい…どういう事だ…そりゃあ」
新八「青い恐竜ってまさか…」
アルカ「いやいやそんな筈は…」
雛菊「でも他に考えられないわよ！」
左之助「だっ…だよなぁ…」
セイバー「でも…だとしたらどうして？」
未央「何でだろ～セツナ分かる？」
セツナ「そんなこと私に聞かないでよ！！」
セト「ソルヴァはどうだ？」
ソルヴァ「私だって知るか！！」
九兵衛「とにかくこのことは銀時達が帰ってきてから話し合ったほうがいいな…」
東条「若の言うとおりそうするのが一番良いでしょうな…」

新八達は隅によってこそこそと言い合っている。

エイミィ「あの～どうかしたの？」

エイミィが新八たちに詰め寄って聞いてきた。

新八達
『いえ、こっちの話です』

新八達が一緒になってそういった。

聖祥小学校
昼休み。

なのは「フェイトちゃん、初めての学校の感想はどう？」
フェイト「年の近い子が、こんなに沢山いるの初めてだから、何だかもうぐるぐるで・・・」
すずか「あははは・・・」
アリサ「ま、すぐに慣れるわよ。きっと！」
剣心「そうでござるよ」

フェイト達は、お弁当を持って屋上へ向かっていた。剣心もフェイトたちに誘われて一緒に屋上に行った。屋上の扉の前に着いて、フェイト達は足を止めた。扉の前に『立入禁止』と書かれた看板のような物が立てられていたのだ。

すずか「おかしいわね。昨日まではこんな物なかったのに」

すずかが困った顔をする。

アリサ「こんなの無視しちゃえばいいのよ」

そう言ってアリサは、看板をどけてしまう。

フェイトが不安な顔になる。

フェイト「え？でも…いいの？」

アリサ「いいの、いいの」

剣心「こらこらアリサ殿、そんな勝手なことは…」

剣心の制止も聞かずアリサがドアノブを掴もうとした時、

「波ァアア！」

扉の外から声が聞こえた。男の声である。そしてその声はみんな聞いた事のある声だった。

五人は顔を見合わせた。

「波ァアアア！！」

また声が聞こえた。

アリサはドアノブを掴んで回すと、ゆっくりと扉を開けた。

そして五人は見た。声の主を。

「かーめー○ーめー波ァアアアア！！！」

銀時が両手を構えながら、銀時の愛読書『ジャンプ』の某メガヒット漫画『ド○ゴ○ボ○ル』に出てくる必殺技の練習をしていた。
フェイト達は、冷ややかな目で銀時を見つめた。

銀時「なんか違うんだよな～。もうちょいアレだな」

ブツブツ言いながら、銀時はまた構えた。

銀時「か～め～○～め～…」

構えながら、何気なく屋上の入口を見た。
「！！」
そこには、冷ややかな目で銀時を見るフェイト達がいた。

剣心「銀八先生・・・お主こんな所で何をしているんでござるか？」
銀時「いや…あのこれは…」
なのは「銀さん…」
アリサ「先生…いい年こいて何やってるんですか？」

剣心が銀時に寒い視線で見つめながら聞く。
フェイト達も

銀時「や…やめろぉオオオ！！俺をそんな冷ややかな目で見るなぁアアア！！お願いその目はやめて！頼む！３００円あげるからぁああ！！」
すずか・アリサ「何で３００円！？」

その頃の八神家

シャマル「それじゃあ、はやてちゃんの病院の付き添いよろしくね、シグナム」
シグナム「ああ。…ヴィータとザフィーラとヤミはもう？」
シャマル「出かけたわ」

はやての病院の付き添いがある為、シグナムが家を空ける事に。
イヴは万が一を考えてシャマルの護衛、桂も影ながらシグナムとはやてを護衛する。
ヴィータとザフィーラとヤミは既に出かけたらしい。リンカーコアの蒐集の為に、ちなみにナギはクロスローダーをヴィータにかしてやった。
そしてシャマルが、小さな箱を開けると…中には薬瓶の様な物が詰め込まれていた。

ナギ「それがカートリッジか？」
シャマル「ええ、昼間の内に作り置きしておかなきゃ」

ナギが聞いたらシャマルがそう答えた。
カートリッジの作成は、シャマルが請け負っているらしい。

シグナム「すまんな、お前一人に任せきりで」
イヴ「お前も大変だな」
シャマル「バックアップが私の役目よ。気にしないで」

シグナム「…じゃあ、家の事は任せたぞ。シャマル、ナギ、イヴ、カルメル、梔それとエリザベス」
シャマル「ええ」
ナギ「心配するな」

イヴ「僕らに任せとけ」
ヴィル「お任せください」
エリザベス・梔『ご心配なく』

そういってシグナムとはやてと一緒に病院に出掛けていった。桂も後ろからこっそりとついていった。なぜか木の棒を両手に持ちながら

ナギ「…何をやってるんだ?あいつは?」
シャマル・イヴ・ヴィル・エリザベス・梔
『さあ…?』

桂の後姿を見てシャマルたちは首を傾げた。

夕方。
帰りでアリサやなのは達と別れたすずかは、一人で図書館にきていた。
屋上の件は、あの後銀時は凄く落ち込んで、しばらく立ち直らなかった。
あんなことしていた銀時が悪いのだから仕方ないのだが
すずか（銀八先生…大丈夫かな？）
銀時を心配しながら、すずかはお目当ての本を探していた。
すずか「う～ん…ないなあ……どこにあるんだろう…あの本……」
すずかがそんなことを呟いていると
ドンッ
すずか「キャッ！？」
「いてっ！」
「おろ？」
隣にいる人達にぶつかった。
すずか「すっ！すみません！」
「いや、こちらこそ済まなかったでござる」
「悪かったな」
三人は謝りながら相手の顔を見た。
すずか「銀八先生と剣八先生！？」

銀時「えっ？すずか！？」
剣心「すずかどの！？」
顔を見て二人ともビックリした。
すずか「先生達…どうしてこんな所に？」
すずかが驚いた顔で銀時と剣心に尋ねた。
銀時「いや、暇つぶしに来てみたんだが…ちょっと失敗したな。字ばっかで頭がクラクラするぜ」
頭を掻きながら銀時が言った。
剣心「だからお主が本を読んでもこうなるだけだと言ったのに…」
銀時「あ！そりゃどういう意味だ！？」
剣心の言葉に銀時が怒鳴る。
剣心「お主が興味あることといったら甘い物を食べることだけでござろう」
銀時「おいコラ、それじゃまるで銀さんが甘い物しか食べた事ないみたいじゃねえか」
銀時が剣心に対して文句を言う。
すずか「あの～喧嘩はやめてください」
銀時「ああ…すまねえ。イや別に喧嘩してるわけじゃねえんだ」
と、銀時は急に申し訳なさそうな顔になった。

銀時「あのよぉ話は変わるけど…昼間の屋上の件はすまなかった…
…『立入禁止』ってやれば誰も来ないと思って……つい屋上で……」
すずか「あ、いえ！私達は大丈夫ですから、銀八先生も元気出して
ください！」

慌ててすずかは銀時を励ました。

銀時「サンキューな…」

すずかの励ましで、銀時は少し元気になった。
その時、車椅子の音が聞こえた。すずかは音のする方を見た。
そこにいたのは車椅子に乗ったはやてと、後ろで車椅子を引いてる
シグナムであった。

すずか「はやてちゃん！」

すずかが、はやてと言うを呼んだ。

はやて「あっ、すずかちゃん！」

はやてもすずかに気付いた。
シグナムもすずかの方に顔を向けた。

シグナム「なっ！？」

すずかの隣にいる剣心と銀時を見て、シグナムは思わず声を上げた。

剣心「おろ」
銀時「ん？」

剣心と銀時もシグナムを見た。

はやて「すずかちゃん。そちらの二人は？」

すずか「私のクラスの臨時担任の坂田銀八先生と副担任の緋村剣八先生です」

すずかが、はやてに教えた。

シグナム（た…担任教師！？この二人が！？）

シグナムは内心驚愕した。

はやて「シグナム。坂田先生達の事知ってるん？」

シグナム「あ…え、ええ……まぁ…」

はやての問いに、シグナムは曖昧な返事をする。

すずか「銀八先生、緋村先生。私の友達の八神はやてちゃんです」

すずかが銀時に、はやてを紹介した。

はやて「どうも。八神はやてです」

ペコリと頭を下げながら、車椅子に乗ったはやてが挨拶した。

銀時「あ～どうもこちらこそ。すずかのクラスの臨時担任の坂田銀八です」

剣心「臨時副担任の緋村剣八でござる」

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『『銀八先生!』』

銀八「はい早速質問行きます。最初の質問ペンネーム『匿名希望』さんから2つ質問です。剣心と薫は作中ではどんな関係ですか?恋人?夫と妻?あとこのままいけば銀さんと剣さんはロリコンになってしまいますか?」

支配者「一つ目の質問の答えは剣心と薫はそれほど親密な関係ではありません。まあ剣心にとってかおるが大切な存在だと言うことに

変わりはありませんが」

薫「そッ…そうなの。ちょっと嬉しいかも」

銀八「…で二つ目の質問答えですがおい二人とも…」

銀時・剣心
「「なってたまるカァアアアアアア！！」」

銀時と剣心は思いっきり叫んだ。

銀時「俺達をであのダ眼鏡やロリコン神父なんぞと一緒にしてんじゃねえ！！」

銀八「…だそうだ。はいじゃあ「匿名希望さん」廊下にたってなさい」

なのは「じゃあ次の質問です。ペンネーム「黒神」さんからです『質問します。新八とお妙へ僕の小説を見て、貴方達はどう思いますか？出番は無いけど。（黒笑）薫へ剣心は諦めて新しい恋を見つける手もありでは？（黒笑）』」

新八「何で僕達の出番がないんだよ！！主要キャラクターなのに！！」

お妙「そうだコラア！！このダメガネはともかく私は出せエ！！！」

新八「ちょっ！姉上！！？実の弟に向かってダメガネとは何ですか！！」

お妙「うるせぇ！！」

バキィ！！

新八「おブッ！！」

新八はお妙にぶん殴られて気絶した。

銀八「そしてもうひとつの質問の答えだが…アレ薫？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！！！！！

薫はとんでもなく巨大な黒いオーラを放っていた。

全員「ヒイイイイイイイイイいっ！！！？？」

全員がおびえた。

薫「黒神さぁあぁん？・・・・・・あんた死にたいのぉ？」

銀八「ちょっ…薫さん？」

薫「剣心は私の物なのよぉ…あんなポッとでの連中なんぞに……渡してたまるカァアア！！！！！！！！！！！！」

チュドーン！！！！！！！

全員「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

全員が薫の怒りの大爆発に巻き込まれて黒こげになった。

薫「『黒神』ィイイイイイイイイイ！！！！！！あんた死ぬまで廊下に立ってろォオオオオオオおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！！！！！！！」

銀八「じゃあ…今回は…ここまで…」

支配者「次と次回を…おたの…しみに…がくっ」

第四十訓　喧嘩するほど仲が良い（前書き）

支配者「今回は私が作ったオリジナルの物語です。後、今回は申し訳ありませんが『教えて銀八先生』はお休みさせていただきます。毎度毎度真に申し訳ありません」

ヤミ「リリカル剣魂スペシャル始まります」

第四十訓　喧嘩するほど仲が良い

シグナム達と剣心達が鉢合せしていた頃
ここはとある世界

森が一面に立ち込めて人の気配は全くない。その代わり危険な生物がおおくいそうな雰囲気を漂わせている。

この森の上空にヴィータとヤミそしてザフィーラ、そして、ヴィータはナギから借りたクロスローダーを持っていた。

ヤミ「ヴィータ、この森の生き物が魔力を持っているんですか？」

ヤミがヴィータにたずねた。

ヴィータ「ああ、そうだ。強けりゃ強いほど高い魔力を持ってる。一刻も早く闇の書を完成させるためにも強い魔力を持った物から蒐集するのが一番いい」

ヤミ「そうですね。はやてを救うためにはそれしかありませんから」

そういって三人は森の上空を飛んでいた。

ヤミ「・・・しかし、探すと言っても私は魔力を感知する事ができませんからどの生き物が魔力を持っているのか分からないんですが」

ザフィーラ「…確かにそうだな。どうするヴィータ？」

ヴィータ「んじゃ数でさがすか。リロード」

ヴィータはクロスローダーを使ってデジモンを呼び出した。

現れたのはスパロウモンとグレイドモンとメイルバードラモンだった。

スパ「何の様だよ?チビ」
ヴィータ「チビじゃねえ!…魔力を持った生き物を探すのに力を貸してくれ」
グレ「了解した」
メイル「ああ」
スパ「へいへい」

ヴィータがそういうと三匹が了解した。

スパ「魔力ねえ・・・魔術師ならナギに聞いたことあるけど魔力を持ってる生き物なんてわかんないよ僕・・・大体なんで僕があんなチビ助の言うことなんか」

シグナム達と分かれてメイルバードラモンと一緒に魔力の高い生き物を探すスパロウモンが溜息を吐きながら愚痴った。

メイル「愚痴るなスパロウモン。俺だって分からんが仕方ないだろうが、お嬢様のご命令なんだぞ」

メイルバードラモンはスパロウモンにそういった。

スパ「まあ・・・そうだよね。ナギの命令だし」

メイル「そうだ。分かったら黙って探せ」

スパ「はいはい」

その時、リスターがなった。

ヴィータ「魔力のかなり高い生き物を見つけた。かなりの強敵だ。すぐにこっちに来てくれ」

メイル「了解した。行くぞスパロウモン」

スパ「ホ～イ」

「ギャオオオオ！！」

ヴィータ「ちいっ！」

ヤミ「ハッ！」

ヴィータとヤミは巨大なトラのような生き物と戦っていた。

「グオオオオオオっ！！」

怪物は巨大な爪や牙を巧みに利用して攻撃してくる。その上動きがかなり素早い。

ヤミ「…強いですね」

ヴィータ「ああ、強い…だがその分魔力が高え。こいつから蒐集出来りゃ３０頁くらいたまるかもしんねえ」

ヴィータがヤミに向かってそう言う。

ヴィータ「はやての為に…こいつをぶっ潰す！グラーフアイゼン、カートリッジロード！！」

グラ『イエッサー』

そう言ってヴィータはアイゼンのカートリッジをロードした。
ハンマーは片方の先の部分が尖り、もう片方の面は噴射口と化した。

ヴィータ「ラケーテン！」

片方の面がジェット噴射して、ヴィータは回転する

ヴィータ「ハン・・・！！」

ヴィータがこう言い掛けたその時、

「ギャオオオオオオオ！！」

怪物が凄いスピードで振り返り尻尾でヴィータを弾き飛ばした。

ヴィータ「うわあああああああ！！」

ヤミ「ヴィータ！！」

ヤミが叫んだ。ヴィータはいくつもの木に激突しながら飛んでいった。
その時だ。

ガシッ！

グレ「大丈夫か？ヴィータ殿」
ザフィーラ「無事かヴィータ」

グレイドモンがヴィータを受け止めたのだ。

ザフィーラはその横にいた。

ヴィータ「…グレイドモン、ザフィーラ」
グレ「どうやら、大事はなさそうだな」
ザフィーラ「ああ」

グレイドモンがヴィータに向かってそういった。

ヴィータ「ああ…わりい。助かった」

ヴィータがそう言った時だ。

「ワハハハハハ！！」
ヴィータ「！！」

ヴィータの上のほうから笑い声が聞こえた。
その笑い声の主は

スパ「なッさけないな～チビ助。あんな奴にやられちゃったわけ？」
スパロウモンであった。

ヴィータ「てっんめえ！スパロウモン！笑ってんじゃねえ！！」
スパ「だってサ～あんなのにあっさりやられちゃってさ～プププ」

ヴィータは怒鳴るがスパロウモンはにやけた顔をやめようとしない。

ヴィータ「このおもちゃ飛行機！あいつの前にてめえからぶっ潰してやる！！」

とうとうヴィータがキレた。

スパ「面白いじゃん。やれるモンならやってみろチビ助！」
スパロウモンもヴィータを挑発した。
ヴィータ「上等だあああああ！！」
グレ「ヴィータ殿、落ち着かれよ！」
メイル「お前もいい加減にしろスパロウモン。あまりふざけているとお譲様に言いつけるぞ」
グレイドモンとメイルバードラモンがけんかする二人をそう諫めた。
スパ「うっ…！わっ…分かったよ」
ヴィータ「ちいっ！」
二人はまだ納得してなさそうだった。
その時だ。
「ギャオオオオオオ！！」
ヴィータ・スパ・グレ・メイル
「「「「！！」」」」
怪物の大きな咆哮が聞こえた。
ヴィータ「しまった！ヤミの奴向こうでまだアイツと！」
スパ「僕が行って来る！見てろチビ助僕の実力を！！」
メイル「あっおい、スパロウモン…行っちゃった」
メイルバードラモンの言葉も虚しくスパロウモンは飛んでいってし

まった。

ガキィン！！

ヤミ「くっ！」
「ギャオオオオオ！！」

ヤミは一人で巨大な怪物と戦っていた。
怪物は巨大な見かけのわりに物凄く素早く、ヤミの動きに対応し的確な攻撃を仕掛けてくる。

ヤミ（強い…パワーがある上にスピードもかなりのものですね…このままでは少しまずいかもしれません）

ヤミが怪物の強さに少し驚いていた。
この怪物はヤミが思った以上の強敵である。
ガキィン！ガキィン！

「ギャオオオオ！！」
ヤミ「グウウッ！」

ヤミはドンドンと追い詰められていった。
そして怪物は思いっきり爪を振りかざしヤミに振り下ろしてきた。

ヤミ（まずいっ！）

ヤミが急いで受けの体制に入ったその時、

「ランダムレーザー！！」

怪物の上にレーザーが降り注いだ。

「ギャオオオオッ！？」

怪物は急に攻撃を受けて驚き攻撃の手を止めた。

ヤミ「この…攻撃はスパロウモンのランダムレーザー？」
スパ「その通り！」

スパロウモンがヤミのところに飛んできた。
スパ「大丈夫？ヤミ」
ヤミ「ええ。大丈夫です」

スパロウモンの言葉にヤミは大丈夫と答えた。

スパ「こいつは僕がやるからヤミは下がっててていいよ」
ヤミ「大丈夫ですか？あの怪物はあなたの思っている以上に…」
スパ「平気平気♪黙って見ててよ」

そういってスパロウモンは怪物のほうへ飛んでいった。

ヤミ「あっ…スパロウ…全く、相変わらず人の話を聞かない人ですね。人じゃありませんけど」

ヤミは人の話をちゃんと聞かないスパロウモンに対して溜息を吐いた。

その頃スパロウモンは怪物を見つめていた。

スパ「あんなの僕だけで十分だっての」

そう言ってスパロウモンは凄いスピードで怪物に向かって急降下していった。

スパ「これでもくらえ！ウイングエッジ！！」

スパロウモンは翼の部分をカッターに変えて怪物に向かって突撃した。

ズガッ！

「ギャオオオオオオオオ！！」

スパ「おりゃおりゃおりゃあああ！！」

スパロウモンはスピードを活かしてウイングエッジを繰り出し続けた。

「ギャオオオオオオ！！」

怪物はその連続攻撃に悲鳴を上げて苦しんでいた。

スパ「な～んだ。やっぱ大した事ないじゃん」

スパロウモンは怪物があっさりやられ続けるので油断しきっていた。
その時である。

「ギャオオオオオオオオーッ！！」
スパ「いっ！？」

怪物がスパロウモンに突撃してきた。スパロウモンは油断していたために一瞬判断が遅れてその攻撃をまともに受けてしまった。

スパ「うわあああああ！」

スパロウモンは怪物の攻撃をまともに受けてしまった。

スパ「いたた…油断しすぎた…ッ！！」

すでにスパロウモンの目の前にはうでを振り上げた怪物がいた。そして思いっきり振り下ろしてきた。

スパ「！！」

スパロウモンは思わず目を瞑った。
その時である。

「ラテーケン…ハンマー！！」

ドッカアアン！！

「ギャオアアアアアア！！」
スパ「エッ！」

スパロウモンは恐る恐る目を開けた。すると怪物が横たわっていた。

スパ「な…なんで？」

「アッハハハハハハ！ざまあねえなおもちゃ飛行機！！」

スパ「！！」

スパロウモンは笑い声が聞こえた上の方を見上げた。

そこにはヴィータがいたのであった。

スパ「ちっチビ助！余計なことすんな！！」

ヴィータ「チビじゃねえって言ってんだろ！助けてやったのに何だその態度！」

スパ「誰が助けろなんて言った！」

ヴィータ「なんだとぉ！」

再び、ヴィータとスパロウモンが喧嘩を始めようとしたその時、

ヤミ「二人とも…喧嘩してる場合じゃないと思いますよ…」

ヴィータ・スパ

「え？」

ヤミが二人の近くにやってきてそういった。見ると怪物が起き上がって来ていた。

「グルルルルルルルル…」

ヴィータ「ちっ…アイツホントタフだな…」

スパ「全くだよね…」

ヴィータ「おい、おもちゃ飛行機。喧嘩は後だ。まずは…」

スパ「アイツをぶっとばす！！」

そういって二人は怪物に向かっていった。

夕方。
二人はあの後も喧嘩しながらも怪物をぶっとばして、蒐集を完了した。

スパ「チェッ…あんな奴僕だけで十分だったのに」
ヴィータ「そりゃこっちの台詞だ。このオモチャ」
スパ「なんだとぉ！やんのかチビ助！！」
ヴィータ「上等だコラ！！」
ヤミ・ザフィーラ

『はあ…』

ヤミとザフィーラは呆れていた。
ヴィータはクロスローダーに向かって叫び続けていた。
スパロウモンはクロスローダーの中に戻っていた。

ヤミ（まあ…でもあのあと協力してあの怪物を圧倒していましたけどね…）

ヤミはあの後の戦いを思い出していた。二人は喧嘩しながらも見事なチームワークで怪物を圧倒していた。スパロウモンのスピードで怪物を翻弄し、ヴィータのアイゼンの破壊力で怪物に最大の一撃を食らわせようやく怪物を気絶させたのである。

ヤミ（まあ…喧嘩するほど仲がいいって言いますしね）

ヤミは口喧嘩を続けるヴィータとスパロウモンを見つめながら微笑んでいた。
ザフィーラも見守るような顔をして飛んでいた。

第四十訓　喧嘩するほど仲が良い（後書き）

支配者「いかがでした今回のお話？あとメンドイのでクロスローダーはナギが登録した人物なら誰でも使えるということにしました」

銀時「作者、何度も何度も『教えて銀八先生』休んでんじゃねえよ」

支配者「こっちも色々と忙しいんですよ。いいじゃないですか別に」

銀時「いや、よくねーだろ！！」

支配者「次は必ずやりますから！勘弁してください！」

銀時「絶対だぞ」

支配者「はいはい。では次回もお楽しみに」

第四十一訓　大切な者は必ず守れ（前書き）

支配者「今回はまあ…ほのぼの系です」

銀時「まあ…って何だよ」

支配者「別にいいでしょ」

なのは「『リリカル剣魂スペシャル』始まります」

第四十一訓　大切な者は必ず守れ

図書館の近くにある公園。
そこではやてとすずかが楽しそうに話をしている。はやて達から少し離れたベンチに、剣心と銀時とシグナムが座っていた。

銀時「シグナム…だったか？お前子守のバイトでもやってんのか？」
剣心「シグナム殿…あの子はいったい…？」
シグナム「……」

剣心と銀時の問いに、シグナムは黙り込む。
夕焼けの空を見上げながら、剣心は考えた。

剣心「ひょっとして…闇の書とやらと彼女は何か関係があるのでござるか？」
銀時「いっ？そうなの？」
シグナム「！！」

剣心の言葉に、シグナムは動揺してしまい体が小さく震えてしまい銀時はきょとんとした様子でそう答えた。

銀時「あれ？もしかして当たり？あの、はやてって子が闇の書の主なの？」
剣心「どうやら…的を得たようでござるな」
シグナム「ウ…グッ…」

銀時と剣心と闇の書の事は、リンディやクロノからある程度の事は聞いていた。
シグナムは焦った。

感づかれた。だが何としても、主はやての事は管理局にバレる訳にはいかない。しかし、この場で戦闘をするワケにはいかないし、戦った所で剣心には勝てない。桂の話を聞いていた手前銀時の実力も剣心とほぼ互角といっても言い。それではもちろん銀時にも勝てない、というより二人いる時点でどう考えても勝ち目はない。どうする？

焦りながらシグナムは必死に考えた。そして、はやての事を管理局には黙っていてもらえないか、と頼んでみる事にした。苦し紛れかもしれない、何の意味もないのかも知れない…だが他に方法はなかった。

シグナムは剣心と銀時に顔を向けた。

シグナム「剣心と銀時…だったか…主はやての事は、管理局には黙っていてくれないか？」

意を決してシグナムは、剣心と銀時に頼んだ。

シグナム「敵であるお前達に、こんな事を頼むのはおかしいかもしれないが…頼む！主は我らが何をしているか知らないのだ！我らがやっていることは主はやての意思ではない！！…だから…どうか」

シグナムは銀時と剣心に頭を下げた。

この二人とは戦ってもどうやっても勝てない。こうやって頼むしか、主はやてを護る方法はない。断られても、なんとか銀時と剣心を説得してみせる。

シグナムがそう考えた時、

剣心「止せシグナム殿。拙者達などに頭を下げる必要はない」

銀時「そうだぜ。お前が頭下げる必要なんかねえよ」

剣心と銀時が軽く微笑みながらそう言った。

シグナム「剣心…」

言われたシグナムは、ゆっくりと顔を上げた。
剣心と銀時は、上がったシグナムの顔を見ながら言った。

剣心「安心するでござるよシグナム殿。はやて殿の事は、管理局の者たちに言うつもりはない」
銀時「ああ、そんなつもりねえよ」
シグナム「ほ…本当ですか！？」
剣心・銀時
「「ああ」」

シグナムの言葉に、剣心と銀時は頷いた。

シグナム「そうか。すまないな二人とも。恩にきる」
銀時「なァに、気にすんな」
剣心「うむ。そなたがそのように頼むということは何か訳があるのでござろう」

そう言って銀時と剣心は、すずかと楽しそうに会話をしてるはやてを見た。
シグナムは銀時と剣心の言葉に、ホッと一安心した。一度剣を交えて、剣心が信用できる人物である事はわかっていた。なら同じ武人である銀時の言葉も信用できる。出会ったのが剣心と銀時で本当に良かった。もし管理局の者と出会っていたら、主はやての事はバレて、最悪全員捕まっていた。はやては自分達がやっていることなど何も知らないというのに。

剣心「ところでシグナム殿。お主は何で闇の書を完成させようとしているのだ?はやて殿の意思ではないといっていたが…?」
銀時「そいつは俺も聞きてえな」

剣心と銀時が理由を尋ねた。

シグナム「……主はやては闇の書の呪いを受けている。その呪いから解放させるために、我らは蒐集を行い、闇の書を完成させようとしているのです」

シグナムが理由を話した。
しかしシグナム達はナギからはこう言われていた。

ナギ「いいか、万が一銀時達の誰かに会ってしまって逃げられなくなってはやてのことを話してしまわなければならなくなった場合私がつげた事実はお前達の口からは喋るな」
シグナム「何故ですか?」
ナギ「この事実は本来ならお前たちは知っているはずのないことだからだ。お前達の口からそんなことを話すとこの物語が根本から変わる可能性がある。最悪の場合…はやてが助からないケースが出てくるかもしれない」
シグナム「分かりました…肝に銘じておきます」
シグナム(本当ならすべて話すのがいいのだが…ナギは別の手段で伝えてくれると言っていたからそれを信じるしかない)

シグナムは心の中でそう呟いた。

そして理由を聞いた剣心と銀時は、はやての足を見た。はやては足が不自由のようだが、アレが闇の書の呪いなのだろう。

銀時「闇の書を完成させれば、はやての足は治るのか？」
シグナム「はい。少なくとも麻痺の進行は止まります」
剣心「そうでござるか…」

シグナムの言葉を聞いた剣心と銀時は、浮かない顔をした。
実際に闇の書を見たワケではないが、何か胸騒ぎのようなものがする。理由はわからないが、闇の書は完成させてはいけない気がする。
だが、これは確証のない単なる自分達の勘。それに闇の書を完成させる以外に、はやてを助ける方法がないのなら、シグナムに余計な事を言うべきではない。

すずか「銀八先生！剣八先生！」

銀時が考え込んでいると、すずかが銀時を呼んだ。すずかとはやては、銀時とシグナムの前まで来た。

すずか「そろそろ時間なので、私は帰ります」
銀時「おう。気をつけて帰れよ」
剣心「寄り道をしてはいかんでござるよ」
すずか「はい。さようなら。はやてちゃんもまたね」
はやて「うん。またねすずかちゃん」

銀時達に挨拶をした後、すずかは帰っていった。

シグナム「では主はやて。我らもそろそろ」

シグナムが、はやてに言った。

はやて「そやな。あっ、今度は銀八先生達ともお話したいです」
銀時「ああ。また今度な。はやても早く足よくなれよ」

剣心「お大事にでござる」
はやて「おおきに」

銀時と剣心の言葉に、はやては笑顔で応えた。

シグナム「では」

シグナムがベンチから立ち上がった。

剣心・銀時
「シグナム（殿）」
シグナム「何ですか？」

銀時と剣心が呼び止め、シグナムは二人を見た。

銀時「あんま無茶すんなよ」
剣心「無理はいかんでござるよ」
シグナム「！」

銀時と剣心の言葉に、シグナムは少し頬を赤くした。

シグナム「ああ。ありがとう二人とも」

少し嬉しくなり、シグナムは微笑みながら銀時と剣心に礼を言った。
車椅子を引いて、はやてと共に公園を出た。
剣心と二人だけになった銀時は、周りに誰もいない事を確認した。
確認した後、近くに転がってる石を拾った。
そして後ろの林に振返り、

銀時「そんでテメーは何やってんだァアア！！」

叫びながら石を投げた。

ドガァ！！

？？？「ぐはあっ！？」

投げた石は誰かに当たり、男の悲鳴が聞こえた。
銀時と剣心は、悲鳴が聞こえた方へ向かった。そこには一人の男が倒れていた。

銀時「こんな所で何やってんだ？ヅラ」
剣心「銀時…いきなり石を投げつけなくても良いでござろう…」
銀時「こいつがバカな事してるからだ」

男に向かって銀時が言った。そんな銀時に剣心が突っ込んだ。
男は桂小太郎だった。

桂「ヅラじゃない松だ…いや間違えた桂だ」

頭を押さえながら桂が立ち上がった。

桂「ふふ。やるではないか剣心、銀時。完全に松になりきった俺を見破るとは」
銀時「見破るも何も、テメー木の隣に突っ立ってただけだろーが。バカだろ。お前やっぱバカだろ」
剣心「うむ…さすがにこれはバカと呼ばれても仕方がないぞ小太郎」
桂「バカじゃない桂だ」

桂と銀時が睨み合う。剣心はあきれていた。

銀時「で？こんな所で何やってんだ？」
剣心「うむ」
桂「うむ。八神殿の事が気になってな。様子を見ていたのだ」
剣心「はやて殿の？」

桂の言葉に、銀時と剣心は片眉を上げた。

桂「実は今、俺とエリザベスとヤミ殿とナギ殿とヴィルヘルミナ殿とイヴ殿と梔殿は八神殿に家に世話になっていてな。俺達全員シグナム殿達から事情を聞いて協力しているのだ」
銀時「はやての家に？たくっ、はやても厄介な奴らを拾ったな」
剣心「ヤミ殿達も全員一緒だったのでござるか…ハヤテ殿が聞いたら安心するでござるな」
頭を掻きながら銀時が言った。剣心が安堵の息をはいた

桂「ちょうどいい。銀時、剣心実はお前達に話したい事がある。ナギ殿からの伝言だ」
銀時「…何？」
剣心「ナギ殿からの！？」

急に桂がシリアスな顔になって言った。
思わず銀時も真剣な表情になる。
桂はナギから聞いた闇の書の真実を二人に告げた。

銀時「やっぱりか…ナギの奴全部知ってやがったんだな」
桂「うむ…」
銀時の言葉に桂が頷いた。実は銀時と剣心はひょっとしたらナギだったら闇の書についてなにか知っているのではないかと思っていた。ナギはアニメマニアだ。だからリリカルなのはのアニメも見た事が

あるのではないかと

剣心「ナギ殿の話が真実ならば…はやて殿は闇の書の暴走に巻き込まれてしまうのでござるな…」

桂「…うむ…だが八神殿を救うためにはそれはどうあっても避けられないとの事だ。ヴィータ殿達は辛そうな顔をしていたが…」

剣心「そうでござろうな…」

銀時「それにあのグレアムって爺…自分の復讐のためにはやてを犠牲にしようとしてやがんのか…なんとなくいけすかねえ野郎だとは思ってやがったが…そんなこと考えてやがったとはな」

剣心「なんとも最低な考えでござるな…」

銀時はグレアムに対してかなりの怒りを感じていた。自分の復讐のために関係ないはやてを犠牲にするという身勝手な考えを持っていたからだ。

桂「うむ…ちなみにナギ殿がその話をした後ヴィータ殿を宥めるのが大変だった…今すぐそのクソ爺のところに殴り込みをかけるとか言って大暴れしてな…」

銀時「そうかも知れねえな」

銀時は桂の話に納得した。ヴィータの性格からしてもまず間違いなくそうしようとしただろう。ナギがはやてのために我慢してくれと何とか説得したらしいが
すると桂が口を開いた。

桂「話は変わるが…実は何者かが八神殿を監視している。ナギ殿の話ではそのグレアムとか言う男の使い魔とのことだが」

銀時「監視か…」

剣心「そうでござろうな」

桂の言葉に納得した銀時と剣心は少し考えた。

桂「機械か魔法か…どっちの方法かはわからんが、視線のようなものを感じた」

剣心「シグナム殿達は気付いてるのでござるか？」

桂「ああ、ナギ殿が使い魔のことを教えたからな…だが」

銀時「どうした？」

桂「ナギ殿の話では使い魔は2人とのことなのだが…その割に感じた視線が多かった。少なくとも3人以上の視線を俺とエリザベスは感じた」

剣心「何!?」

銀時「どう言うことだそりゃア・・・」

桂の話を聞いて剣心と銀時は驚いた。そして少し考えた。

剣心「銀時、ひょっとするとそれは…」

銀時「ジュドの野郎か…」

桂「ジュド？誰だそれは？ナギ殿はそのような者のことは言っていなかったが・・・？」

銀時「だろうな」

銀時達は前にリリカルなのはの第一期のＤＶＤを見たときに気付いていた。ジュド達魔人族が存在していないことに…ここはリリカルなのはの世界に良く似た平行世界。リリカルなのは本編とは似たようなことは起こってもすべて同じようになるとは限らないのだ。そしてとりあえず桂にもジュドのことを話した。

桂「そんな者たちがいたとはな…」

剣心「やはり奴らの狙いは…」

銀時「闇の書か…」
桂「…だがシグナム殿達の話では、闇の書は主以外には使えんらしいが」
主以外には使えない。ならグレアム達と一緒に監視しているジュドの目的は何だ？
桂「そのジュドとやらは間違いなく八神殿のことを知っているな…おそらく何らかの方法で闇の書を利用しようとしているのか」
銀時「いったいどうやってだ…？」
剣心「奴がグレアム殿のように闇の書の封印を望んでいるとは思えないが…」
銀時たち三人はしばらく一緒になって考えた。しかし結局いい答えは誰一人浮かばなかった。
銀時「…考えてもわかんねえな」
剣心「今日の所はとりあえず帰ろう。話はまたいずれ管理局の者たちがいないところで皆を交えて行おう」
桂「分かった」
話はそこで終わった。
桂「では俺は戻る。銀時、剣心、お前達も気をつけろよ」
桂は振り返って歩き出した。
剣心「ああ」
銀時「じゃあな、ヅラ」

銀時も振り返って歩き出した。
銀時の言葉を聞いて、桂は足を止めた。
桂「ヅラじゃない、桂だ」

帰り道二人は考え事をしながら歩いていた。
銀時「あいつら…なに企んでやがんだ」
剣心「分からぬ…だがジュド…奴はかなり狡猾な男だ。おそらくプレシア殿の時のようにグレアム殿のことも利用しているだけだろう」
銀時「そうかも知れねえが…封印が目的じゃねえとしたらいったい」
剣心「これは拙者の憶測の考えだが…拙者達が介入したことでこの世界の物語が少し変わっている。この世界はリリカルなのはとよく似た平行世界でござる。ひょっとしたら奴らだけが知っている闇の

書の秘密があるのかもしれぬ」
銀時「って事は…ナギもしらねえ秘密があるかも知れねえってことか」
剣心「おそらくだが…」
二人はこんな事を話し合いながら歩いていた。

マンション。
銀時は部屋に入った。

銀時「おーい。銀さん達が帰ったぞー」
剣心「ただいま戻ったでござる」

言いながら銀時はリビングに入った。

フェイト「あっ、お帰り剣心」
なのは「銀さんもお帰りなさい」

フェイトが笑顔で言った。手には待機モードのバルディッシュがあった。隣にいる、なのはの手にもレイジングハートがあった。

銀時「おっ、バルディッシュとレイジングハート直ったのか？」
フェイト「うん」

フェイトは嬉しそうに頷いた。

新八「それに、部品交換の時に新しい機能が付いたみたいですよ」
クルス「はい。なんでもパワーアップしたそうです」

新八とクルスが言った。

銀時「マジでか？そうだ新八。ついでにお前も新しい機能とか付けたら？」

新八「いや、何で僕が？」

新八は顔をしかめた。

銀時「脱地味だ」

新八「余計なお世話だ！」

新八がツッコんだ。

相楽「そういや第二章に入ってからおめえのツッコミが少なくなったな。この際そのメガネに新機能を付けて脱地味…」

新八「普通のメガネでいいわ！地味を馬鹿にするな！！それとなんであんたがそんな事知ってんだよ！！」

メガネに手を掛けながら新八が左之助に怒鳴った。

新八「それとツッコミが少ないとか言うな！僕だって気にしてんだから！！」

神楽「とうとう新八からツッコミがなくなったアルカ」

シャナ「とうとう唯のダメになったのね」

セイバー「と言うより唯のロリコンですね」

ソルヴァ「ブレイドと同じレベルになったってことですね」

ナナ「マジキモイな。二度とあたしに近付くな変態ロリコン眼鏡」

黒子「お姉さまに近付いたら粉々にしてやりますわ」

神楽、シャナ、セイバー、ソルヴァが、うんうんと頷きナナと黒子

が軽蔑のまなざしで新八を見つめた。

新八「いやツッコミなくならないから！ツッコミ続けるから！それと僕はロリコンじゃねえ！！！ナナちゃんと白井さんもそんな目で僕を見ないで！！！！」

神楽達にツッコむ新八。
その時である。

セト「おい剣心、銀時」
銀時「ん？」
剣心「何でござるか？セト殿」
セト「実は…お前たちに話しておかなければいけない事が…」
剣心「ああ…それだったら拙者たちも…（ビーッビーッ）ん？」

その時、室内に緊急警報が鳴り響いた。

エイミィ「至近距離で緊急事態発生！」

エイミィが皆に叫んだ。

九兵衛「例の守護騎士達か？」

片手に刀を持って九兵衛がやってきた。その後ろには東城と雛菊もいる。

エイミィ「ええ」

エイミィが九兵衛に頷いた。

フェイト「なのは」
なのは「うん」

フェイトとなのはは頷いた。

なのは「エイミィさん。私達、現場に行きます！」

なのはがエイミィに言った。

銀時「俺達も行くぜ」
剣心「うむ、当然だ」
相楽「よし今度こそ喧嘩が出来そうだな」
ソルヴァ「ボコボコにしてやる！！」
アルカ「悪人共をひっとらえてやろう」

銀時達も武器を持って、準備万端である。

エイミィ「わかった。皆お願いね」

銀時達は、現場に向かう事になった。

ブレイド「よし！行くぞ下僕ども！！」
全員『誰が下僕だ！！！』

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生!』

銀八「はい早速質問行きます。まずはペンネーム『亀鳥虎竜』さんから銀さんと剣心に質問です。僕の書く『万事屋奇譚幕』の自分を見て、ハッキリどう思います?」

剣心「なんとなくだが少し違う気がするでござるな」

銀時「原作見てえな性格になってねえんだよ作者の腕が悪いから」

支配者「悪かったな!!どうせ文力ねえよ!!」

銀八「はいそれでは『亀鳥虎竜』さん廊下にたってなさい」

なのは「では次の質問です。ペンネーム『黒神』さんから『質問します。

お妙へ

新八がなのはに惚れてオタクとして堕ちましたが、なのはは銀時に惚れてしまい新八は失恋しました。
そんな銀時に弟の惚れた女を落とした事を姉として許せませんか？

左之助へ

薫やお妙に向かって『この傲慢メスゴリラコンビ！！』ってはっきりと言い出す勇気はありますか？

マヨラーへ

僕の小説で活躍している近藤と山崎を見てどう思いますか？

以上です』

銀八「ではそれぞれの連中答えをどうぞ」

お妙「いえ別に？なんとも思いませんよ？新ちゃんは所詮そんな感じだと思いますし」
新八「ちょっとおお！！姉上それどういう意味ですか！！？」
お妙「それに銀さんも適当なこと言ってなのはちゃんの事だまくらかしたんでしょ？」
銀時「そんな事してネエよ！！なのはが勝手に俺に惚れやがったんだよ！！」

お妙「はいはい。言い訳はまた今度ね」
銀時・新八『言い訳じゃねえ!!』

んで二つ目の答え

左之助「言えるかぁあああああ!!そんなこと言ったら間違いなく俺殺されんだろ!!!おいコラァ!!俺に自殺しろっていいてえのか!!?」
銀八「まあ確かに間違いなく殺されんな」

そして3つ目の答え

土方「俺をマヨラー言うんじゃねえ!!後、近藤さんはともかく何で山崎なんぞが出て俺が出てないんじゃあああああ!!!」
山崎「副長より俺のほうが人気あるって事じゃないんですか?」

山崎はにやけた顔で土方にそう言った。

土方「(ブチッ!!)山崎ぃいいいい…てめえ斬り殺されてえらしいなぁアアアア…」
山崎「エッ…?副長…?」
土方「死ねオラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」
山崎「ギャアアアアアアアア!!!!!」

土方は刀を振り回しながら山崎を追いかけ、山崎は逃げ出した。

新八・銀時・左之助・土方

『『黒神』ィイイイイイ！！！お前一生廊下に立ってろオオオオオオ！！！』

剣心「ハハハ…では今回はここまででござる」

銀八・支配者
『次回もお楽しみに！』

第四十一訓　大切な者は必ず守れ（後書き）

支配者「次回はヴォルゲンリッター対なのは、フェイトとの戦いの前哨戦です」

剣心「原作でも有名な部分でござるな」

シャナ「そうね」

なのは・フェイト『では次回もお楽しみに！』

第四十二訓　戦いの前に口喧嘩はするな（前書き）

支配者「今回は原作に沿ったお話です」

なのは「リリカル剣魂スペシャル始まります」

第四十二訓　戦いの前に口喧嘩はするな

はやてとシャマルとナギとヴィルヘルミナは近くのスーパーに買い物に出ていた。

はやて「せやけど、最近みんなあんまりおうちにおらんようになってしもうたねぇ…ヤミちゃん達も…」
シャマル「えぇ…まぁ、その…なんでしょうね」
ナギ「ホ…ホント何でだろうな…アハハハ…なあヴィルヘルミナ」
ヴィル「はい…」

少し焦った顔をして言葉を返すシャマルとナギとヴィルヘルミナ。
ご存じの通り、はやてには闇の書の事は秘密で動いているからだ。

はやて「あぁ、別にあたしは全然良えよ。皆が外でやりたい事とかあるんやったら…それは別に」
シャマル「はやてちゃん…」
ナギ・ヴィル「はやて（八神様）…」

はやての言葉に、心配そうな顔になるシャマルとナギとヴィルヘルミナ。

はやて「あたしは…元々1人やったしな」
シャマル「はやてちゃん、大丈夫です！今は、みんな忙しいですけど…その…すぐにまた…きっと…」
ナギ「そっ…そうだ。すぐにまた皆と一緒にいられるさ。だからそんなに心配するなはやて」

寂しそうな笑顔を浮かべるはやて。

それを見て、シャマルとナギがはやてを励ます。

はやて「ん…そっか！シャマルとナギさんがそう言うなら、そうなんやね。今夜はすずかちゃんも来てくれるし…でも…ええのナギさん？こんな高いモンばっかり買うて…」

ナギ「心配するな。世話になってる礼だ。金ならあるしな。病人なんだから旨い物一杯食って早く元気なれ」

はやて「そうですか。それならお言葉に甘えさせてもらいます」

ナギの言葉にはやては笑顔で答える。

はやて「外は寒いし、今夜はやっぱあったかいお鍋やね」

シャマル「はい♪」

ナギ「そうだな♪」

ヴィル「ですね」

そんなやり取りをしながら、買い物を済ませて外に出る四人。

はやて「みんなも、外で寒ないかなぁ・・・」

寒さに少し震え、手を温めながら…はやてはそう呟くのだった

その頃街の上空にヴィータとザフィーラがいた。それに二人を取り囲む十人の管理局の魔導師がいた。更に結界も張ってある。ちなみにヤミはこの世界に戻ってきてから二人とは別行動をとった。自分は管理局に知られている身なので一緒にいるところは極力見せないほうがいいという結論に達したからだ。クロスローダーも今はヤミが持っている。
あんまり意味のない行動だと思うけど

ザフィーラ「管理局か」
ヴィータ「でもチャラいよ、コイツら。返り討ちだ！」

ヴィータがグラーフアイゼンを構える。
すると魔導師達は、一斉にヴィータ達から離れた。

ヴィータ「え？」
ザフィーラ「何のつもりだ？」

魔導師達の行動に、ヴィータとザフィーラは首を訝しげる。
その時ザフィーラは何かを感じた。

ザフィーラ「上だ！」

上を見てザフィーラが叫んだ。ヴィータも上を見た。
上空に無数の青い魔力の刃があった。無数の刃の中心に、クロノがいた。

クロノ「スティンガーブレイド！エクスキューションシフト！！」

クロノは杖を振り下ろし、魔力の刃の雨がヴィータとザフィーラに降り懸かる。

ヴィータ「ちっ！」

ザフィーラがヴィータの前で障壁を張る。障壁に無数の刃の雨がぶつかり、青色の爆発が起きた。

クロノ「…少しは通ったか？」

煙が晴れてきて、ザフィーラ達の姿が見えてきた。
ザフィーラの左腕に、数本の刃が刺さっていた。

ヴィータ「ザフィーラ！」
ザフィーラ「気にするな。この程度でどうにかなる程…ヤワではない！！」

ザフィーラは、腕に力を入れて刃を破壊した。

ヴィータ「上等！」

ヴィータは上空にいるクロノを睨んだ。
クロノも杖を構える。
その時、エイミィから通信が入った。

エイミィ「クロノ君、現場に助っ人を転送したよ。超強力なのをたっぷりと！」
クロノ「え？」

クロノは視線をヴィータ達から外した。屋上を見ると、フェイトとなのは、銀時達がいた。

ヴィータ「あいつらは！」
ザフィーラ「剣心とやらと仲間達もいるようだな」

ヴィータとザフィーラも、剣心や銀時達の姿を確認した。

なのは「レイジングハート！」
フェイト「バルディッシュ！」
「セーットアップ！！」

なのはとフェイトは、待機モードのデバイスを上に掲げた。

なのは「レイジングハート・エクセリオン！！」
フェイト「バルディッシュ・アサルト！！」

二人は自分のデバイスの新しい名前を叫んだ。
二人は守護騎士達に対抗するため『ベルカ式』の技術を自分達のデバイスに取り込んでおいたのだ。
デバイスに負担がかかると言われたのでなのはとフェイトは渋っていたのだが、レイジングハートとバルディッシュが自分達のマスターを守るために新しい力が欲しいと望んだらしい。そのためにベルカ式つまりカートリッジシステムを取り込むことを希望し二つのデバイスは進化したのである。
二人の体が光に包まれ、新しいバリアジャケットを身につけ、生まれ変わったデバイスを手に持つ。

ヴィータ「あいつらのデバイス…！アレってまさか！？」
ザフィーラ「カートリッジシステムか！？」

二人のデバイスを見て、ヴィータとザフィーラは驚いた。
二人のデバイスに新たに付けられたのは、カートリッジシステムだ

ったからだ。

ヴィータ（ナギの言ったこととってつくづくホントなんだな・・・）

ヴィータはこんなことを思い出していた。ナギに言われていたのである。今度のなのは達のデバイスには自分たちが使うのと同じカートリッジシステムが組み込まれているとヴィータはそんなの冗談だと思っていたらしいが

その頃結界の外では
結界を見るシグナムがいた。

シグナム「強装型の捕獲結界…ナギの言う通り、ヴィータ達は閉じ込められたようだ…」

シグナムはナギから助言を受けていた。ヴィータとザフィーラはおそらく今回の戦いで管理局員の張った結界に閉じ込められるだろうとだから急いで様子を見に行った方がいいと

レヴァン『いかがいたしますか?』
シグナム「聞くまでもないだろうレヴァンティン、お前の主はここで引くような騎士だったか?」
レヴァン『否』
シグナム「そうだレヴァンティン。私達は、今までもずっとそうして来た!」

カートリッジをロードし、剣に炎を纏わせるシグナム。
そして…結界を見据えるのだった…

そして結界の中

フェイト「私達はあなた達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて」
なのは「どうして闇の書を完成させようとしてるの？」

フェイトとなのはがヴィータ達に尋ねた。

ヴィータ「あのさぁ、ベルカの諺にこういうのがあんだよ」

腕を組みながら、ヴィータが言った。
隣にいるザフィーラが、ヴィータを見た。

ヴィータ「和平の使者なら槍は持たない」

それを聞いたなのはとフェイトは、顔を見合わせて首を傾げた。
銀時達も、わからないと言う風に首を傾げた。

ヴィータ「話合いをしようってのに、武器を持ってやって来る馬鹿がいるかって意味だよ。バ～カ！」
なのは「なっ！？い、いきなり有無を言わさず襲い掛かって来た子がそれを言う？」

ヴィータの言葉に、なのはが反論した。

新八「おいコラてめえ！！少しはなのはちゃんの気持ちも考えろ！！」
美琴「そうよ。だいたいあんたねえいきなりこの子の事襲っといて何勝手な事いってんのよ！！」
綾子「自分勝手な奴」
ソルヴァ「ぶっ殺すぞおらぁ！！」
ヴィータ「ウルセー！お前らには関係ねーだろ！！」

新八たちもそれぞれ文句を言いヴィータも言い返してきた。

セト「ああいう奴らに説得なんて無駄だ。僕が今すぐ地面に叩きつけてやる」
相楽「そうだな。ああいう奴らには一発ビシッと食らわせてやらなきゃな」
美琴「それもそうね。今すぐ打ち落としてやるわ」

そういってセトと美琴がコインと死神の大剣を構えた。左之助も拳を握り締める。

クルス「ちょっ！セトサン、美琴さん、左之助さん！！落ち着いてくださいよ！！」
護「そうですよ。あくまで平和的に！！」
アルカ・綾子「クルス（護）の言うとおりだ（よ）！！」

クルスと護が守護騎士達を攻撃しようとする三人を止めた。アルカと綾子もである。
すると銀時が

銀時「おいおいお前らがそれ言うの？いつも真っ先に手えだすタイ

プの癖によお。ホントお前ら弟と彼氏によえーんだな」
アルカ・綾子『うるさい！！』

銀時が二人にツッコミ二人が銀時に対して怒鳴った。
そしてザフィーラがヴィータに

ザフィーラ「ヴィータ。さっきのソレは諺ではなく、小話のオチだ」

と、ザフィーラがヴィータにツッコんだ。

ヴィータ「うっせーな！いいんだよそんな細かい事は！」

ツッコまれてザフィーラに怒鳴る。

銀時・神楽・ブレイド
『ブハハハハ！仲間にツッコまれてやんの！ダッセー！！』

ヴィータを指差しながら、銀時と神楽とブレイドは笑った。

新八「いや、あんたらも僕にツッコまれてるでしょ。ってか今もツッコんだし」
クルス「僕もいつも神父様にツッコんでますし」

と、新八とクルスが3人に軽くツッコんだ。

銀時・神楽・ブレイド
『うるせー！！山田にダメガネ！！！』
新八・クルス
『何でそこだけ意気投合してんですか！！』

銀時・神楽・ブレイドが二人に文句をいい二人も銀時たち3人に突っこんだ。
そしてヴィータも

ヴィータ「ゴチャゴチャうっせーんだよ！この天然パーマバカにチャイナバカにロリコンバカ！！」
銀時「何だと！？オメーに天然パーマの苦しみがわかるかァ！！」
神楽「誰がチャイナバカアルか！舐めてんじゃねーぞ赤チビがぁ！！」
ブレイド「俺はバカじゃねえしロリコンジャねえ！可愛くて小さな女の子が好きなだけだ！！」
クルス「いや！それをロリコンって言うんですよ！！」
ブレイド「うるせぇー！山田！！」
クルス「クルスです！！」

ヴィータと銀時と神楽とブレイドが怒鳴り合う。そしてクルスがブレイドに突っこんだ。

剣心「やれやれ…」

剣心は呆れながらも軽く微笑みながらその様子を見ていた。
その時、

ドカアアアアン！！

上空で爆発音が響いた。
ピンク色の雷が、銀時達のいる隣のビルに落ちた。屋上にシグナムの姿が見えた。
シグナムがレヴァンテインを使って結界内部に侵入したのだ。

フェイト「シグナム！」

シグナムの姿を確認したフェイトが声を上げた。

剣心（シグナム殿…）

銀時（アイツ派手な登場するなぁ）

剣心は少し心配そうな顔でシグナムを見つめ銀時は呑気にそんな事を思ってた。

なのは「ユーノ君、クロノ君。銀さんにシャナちゃんに他の皆も手を出さないでね。私あの子と一対一だから！」

ヴィータを見ながら、なのはが言った。

銀時「ああ」

シャナ「分かった」

銀時とシャナも了解した。他のみんなも無言で頷いた。セトや美琴、左之助はなんとなく納得いかないといった感じだった。ユーノやクロノはどうだか知らないが

そしてヴィータは

ヴィータ（なんだあいつ、あたしと一対一だと？この前あっさりやられたのもう忘れたのか？カートリッジシステムを取り入れたからってそれだけで勝てると思ってたら大間違いなんだよ！！）

なのはの言った言葉が気に入らなかったのか、ヴィータはなのはを睨みつけながら心の中でこう思った。

フェイト「剣心」
剣心「ん？」
フェイト「私も…彼女と一対一で…！」

シグナムを見つめながら、フェイトが言った。

剣心「ああ、分かったでござる手は出さない。その代わり気をつけるでござるよ」
フェイト「うん！」

剣心に言われて、フェイトは頷いた。

アルフ「それじゃ、あたしは野郎の相手をするよ。ちょっと話もあるしね」

そう言いながら、アルフはザフィーラを睨んだ。

銀時「え？何？発情期？」
セト「あの犬と交尾でもするきか？」
アルフ「違うわバカ！！」

バキッ！

銀時「うべッ！」

アルフは銀時の顔面を思いっきり殴った。セトは軽くアルフの拳を交わした。
銀時とセトのせいで緊迫感が削がれたが、シグナム達となのは達がそれぞれの武器を構える。

なのは「私が勝ったら目的を話してもらうよ！」
ヴィータ「おも知れえ！やれるモンならやってみろ！！」
フェイト「シグナム。今度こそあなた達の目的をはなしてもらいます」
シグナム「いいだろう。ただし…私に勝てたらな！！」
そして、戦闘が始まった。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

支配者「今回は一つしか質問がありませんがやらせてもらいます」

銀八「じゃあ質問読むぞ。ペンネーム『黄色い何か』さんから『新八に質問です。原作ではラブチョリスをと言うゲームをやってお妙と同じお姉さんキャラを選んでいましたけど、女性のタイプはロリ

コンなんですか？それともお姉さんキャラが好きなんですか？』だとよどうなんだメガネ君？」

新八「やあ～もう綺麗だったら何でも言いかなみたいな？そしてあんな事やこんな事ができれば…♪」

新八は妄想に浸っていた。

銀時「お前それ、最低の女たらしみたいなこといってねーか？」

新八「いや！そんなつもりありませんよ！！」

すると女性陣が

シャナ「お前最低ね」

神楽「女の敵アルナ」

セイバー「いっそのこと斬り捨てますか？」

ヤミ「えっちいのは嫌いです」

新八「えっ？」

神楽とシャナとセイバーとヤミが武器を構える。

新八「ちょっ…皆落ち着いて…」

ドンッ

新八「ん？」

すると新八は何かにぶつかった。

新八が後ろを見ると

セト「お前のような女たらしは許せん」
綾子「ボコボコにしてやるわ」
アルカ「いや黒焦げにしてやろう」

セト達がいた。しかも能力を全開にしている

新八「えっ…？何でみんなそんなに怒ってんの？」

そしてなのはもいた。

なのは「新八さん…少し頭冷やそうか…？」
新八「えっ…ちょっと皆まっ『問答無用！！』ギャアア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

新八は女性陣にボコボコにされた。

銀八「はい。では『黄色い何か』さん。廊下にしばらく立ってなさい」
支配者「ではここまでです」
銀八「次回もお楽しみにな」

第四十二訓　戦いの前に口喧嘩はするな（後書き）

支配者「はい。今回の話しいかがでしたか？次回はヴォルゲンリッター対なのは・フェイト・アルフ3人との戦いです」

銀時「原作どおりってわけだな」

剣心「では次回もお楽しみにでござる」

第四十三訓　戦いは激しければ激しいほど盛り上がる。（前書き）

支配者「今回はヴォルゲンリッターとの大バトルです」

銀時「原作どおりだな」

支配者「そして裏で動く”真の黒幕”の影が！？」

剣心「何！？それはどういうことでござるか！！？」

支配者「それは見てのお楽しみです」

なのは・フェイト

「リリカル剣魂スペシャル始まります」

第四十三訓　戦いは激しければ激しいほど盛り上がる。

上空を高速で飛びながら、ヴィータは後ろを向く。
後ろからは、なのはが同じくらいの速度で追いかけて来る。

ヴィータ「ふん、結局やんじゃねーかよ！」
なのは「私が勝ったら、話を聞かせてもらうよ…いいね！？」
ヴィータ「やれるもんなら…やってみろよ！てめーなんか速攻でブッ倒してやらぁ！」

ヴィータは鉄球を４つ取り出す。
そして…グラーフアイゼンで打ち出した。

なのはは『アクセルフィン』で飛び上がり、素早く鉄球を避ける。
前の『フライヤーフィン』よりも移動速度が格段に上がっていた。

ヴィータ「アイゼン！」
アイゼン『ラケーテンフォルム』

ヴィータがなのはに向かって飛び上がり、ラケーテンフォルムを起動する。
前回の戦闘でなのはを戦闘不能に陥らせた『ラケーテンハンマー』を発動させ、突入した！

「でえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇい！！」
「っ！」

なのはは咄嗟に強化されたバリア「プロテクション・パワード」でヴィータの攻撃を迎撃する。

その強度は、前の物とはまるで比べ物にならない程…頑丈だった。

ヴィータ「くっ……固ぇ・・・っ！」
なのは「ぁ…ホントだ」

新しいレイジングハーとのプロテクションはヴィータの『ラケーテンハンマー』を受けてもビクともしない程の強度だった。
レイジングハートは、想像以上のパワーアップを果たしていた。

レイハ「バーニング・ブースト」

レイジングハートがそう発した瞬間、バリアが爆発してヴィータを吹っ飛ばした。

ヴィータ「うわあぁぁぁっ！」

レイハ『『アクセルシューター』を撃って下さい』
なのは「うん…アクセルシューター！」
レイハ『アクセルシューター』
なのは「シュート！！」

なのははレイジングハートの言う通りに『アクセルシューター』を放つ。
そこから、一度に１２発の魔力弾が勢いよく飛び出した！

なのは「っ！？」
ヴィータ「あぁっ！？」

その光景に、ヴィータは勿論の事、撃った本人であるなのはも驚いた。

レイハ『マスター。コントロールをお願いします』
なのは「えっ…うん！」
レイジングハートがそう発すると、なのはは目を閉じて魔力弾の制御に集中する。
ヴィータ「アホか！こんな大量の弾、全部制御できる訳が！」
ヴィータはそう吐き捨てると、鉄球を４つ操作してなのはに向かわせる。
レイハ『出来ます。私のマスターなら』
ヴィータ「なっ！？」
すると、ヴィータの周りを飛び回っていたアクセルシューターが４つ、なのはの元に戻って行く。
そして、正確に鉄球を上から撃ち抜いた！
ヴィータ「うっ、嘘だろ…！？」
なのはの魔法弾の制御技術に驚愕するヴィータ。
なのは「約束だよ！私達が勝ったら、事情を聞かせてもらうって！」
なのははそう叫ぶと、右手を掲げる。
なのは「アクセル…シュート！！」
次の瞬間、ヴィータの周りを飛んでいた魔力弾が一斉にヴィータに

向かう。
それを見たヴィータはバリアを張って自分の周りを防御する。
ヴィータ「っく…このぉ…っ！調子にのんな！！」
だが…徐々にバリアにヒビが入って行き、ヴィータは顔をしかめるのだった

フェイトとシグナムも激しい空中戦をしていた。バルディッシュとレヴァンティンが火花を散らせてぶつかり合う。

フェイト「プラズマランサー…」
バル『プラズマランサー』
フェイト「ファイア！！」
シグナム「ハッ！！」

フェイトが、複数の金色の魔力の槍『プラズマランサー』を放つ。
それをシグナムは、炎を纏ったレヴァンティンではじく。

しかしフェイトは

フェイト「ターン！！」
シグナム「なにっ！？」

フェイトは蹴散らされたプラズマランサーを巧みに操って再びシグナムに放った。
シグナムは上空に飛んで交わすがそれでもしつこくプラズマランサーは追いかけてくる。

シグナム「レヴァンティン！！」
レヴァン『イエッサー』

シグナムはレヴァンテインのパワーを上げてプラズマランサーを確実にかき消した。
まさに二人は互角の戦いをしていた。

シグナム（やはりカートリッジシステムの影響か…前よりも技の威力が増している）

バル『ハーケン・フォーム』

フェイトはカートリッジを1発ロードし、『ハーケンフォーム』を発動させる。
前の『サイズフォーム』に相当するが、姿勢制御を行うフィンブレードを3枚増やしてフェイトの体感重量をより軽くすることで、かなり使いやすくなっている。

レヴァン『シュランゲ・フォルム』

レヴァンティンも、連結刃形態のシュランゲフォルムになる。
フェイト「ハーケン・セイバー！！」
シグナム「飛龍一閃！！」

そして…2人が必殺技が激突し、大爆発が起きる。
距離を取る2人だが、フェイトの左腕には2か所の切傷が、シグナムの胸元にも1つの切傷が残っていた。

シグナム「強いな…テスタロッサ。それに、バルディッシュ」
バル『Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ』

フェイトとバルディッシュを称えるシグナム。
バルディッシュはシグナムに一言礼を言う。

フェイト「あなたと…レヴァンティンも…シグナム」
レヴァン『ｄａｎｋｅ』

フェイトもまた、シグナムと同じく相手を称える。
レヴァンティンもまた、フェイトに礼を言う。

シグナム「この身に成さねばならぬ事が無ければ、心躍る戦いだった筈だが…仲間達と我が主の為、今はそうも言ってられん」

シグナムはそう言って、一度レヴァンティンを鞘に収める。
フェイトは、バルディッシュを構えてシグナムを見ている。

シグナム「…殺さずに済ます自信は無い」

足元に魔法陣を展開し、抜刀の構えのような物をとるシグナム。

シグナム「この身の未熟を…許してくれるか！」
フェイト「構いません…勝つのは、私ですから！」
互いにデバイスを構えて2人は向かい合い再び激突した

空中でアルフとザフィーラは、互いに拳をぶつけ合って戦っていた。
アルフ「はあああああああ！！」

ザフィーラ「クッ！」

アルフの激しい攻撃にザフィーラが少し押されていた。

アルフ「デカブツ、アンタは誰かの使い魔か！？」
ザフィーラ「ベルカでは、騎士に使える獣を使い魔とは呼ばぬ！」
アルフ「！？」
ザフィーラ「主の牙、そして盾、守護獣だァアアアア！！」
アルフ「おんなじような、もんじゃんかよォオオオオ！！」

2人の間で大爆発が起こり、爆炎が巻き起こる。
そして二人はまた距離をとる。

ザフィーラ（状況はあまりよくないな。ナギに言われた通り空中で戦う事によって、剣心達との戦闘は避けられた。だが魔導師達のデバイスが強化されていて、シグナム達も苦戦している…だからといってあの二人如きにシグナムやヴィータが負けるとは思わんが…ここは引くべきだ。主との約束もあるしな）

この結界内部の状況を見たザフィーラは表情を険しくした。

銀時達は屋上で、フェイト達の戦いを見守っていた。

神楽「いけー！なのは、フェイト！そこアルー！！」
新八「ガンバレー！！なのはちゃん、フェイトちゃん！！」
未央「二人ともガンバレー！！」

神楽と新八と未央が大声で、なのは達を応援してる。

シャナ「なかなかやるわね。なのはたちもアイツらも」
セイバー「はい。特にあのシグナムと言う人の剣技は見事ですね」
九兵衛「魔導師の戦いは始めて見るな」
アルカ「魔術師や能力者同士の戦いなら見たことがあるが…それとはまた随分違うな」
ソルヴァ「そうですね」

シャナとセイバーと九兵衛とアルカとソルヴァも興味深そうに、戦いを見ている。他の皆もそうだった。

相楽「ちぇっ…俺も喧嘩してエなぁ」
美琴「じれったいわねぇ、早く済ませればいいじゃない」
剣心「だめでござるよ左之、美琴殿」
セイバー「そうですよ。決闘は一対一が基本。横槍を入れてはいけません」
相楽「わあってるよ。んな事くらい俺も知ってらあ。俺だって自分の喧嘩邪魔されるのはいやだしな」
美琴「あたしも自分の喧嘩邪魔されるのいやだしね」
黒子「お姉さまぁ！！だったら私の相手を！」
美琴「あんたは黙ってろ！！」

ズバボカンッ！

黒子「ぶげっ！」

剣心たちはそんな会話をしていた。
その時だ

「うむ。魔導師の少女達もなかなかやるではないか」
『うぬ、なかなか見事な戦い』
「ホントですね。なのはもフェイトも前より強くなったみたいです。」
「まあ僕に比べれば全員大した事ないけどな」

桂とヤミとイヴとエリザベスが言った。

新八「そうですね…って桂さん、エリザベス！？」
ブレイド・クルス「イヴ（さん）！？」
シャナ・セイバー「ヤミ！？」

桂、ヤミ、イヴの言葉に応えた後、新八達は驚いた。

新八「ちょっとあんたら！何当たり前のように話に参加してるんですか！？ていうかいままでどこにいたんですか！？」

クルス「皆心配してたんですよ！」

新八とクルスは桂達に向かって叫んだ。

桂「桂じゃない。俺はキャプテン・カツー…」

銀時「その衣裳どこで用意しやがったァアア！！」

桂の言葉の途中で、銀時が桂にドロップキックをした。

今の桂の恰好は、左目にエリザベスの絵が入った眼帯をして、海賊のような服装をしている。エリザベスも桂と似たような格好をしていた。イヴとヤミはいつもの格好だった。

神楽「ヅラ、ヤミ、イヴ、エリー！お前ら今までどこに行ってたアルカ？」

アルカ「桂！お前そんな格好をして何をやっている！！」

クルス「姉さん落ち着いて」

皆さんは忘れているかもしれませんがアルカはこの小説では一応幕府側の人間。穏健派にはそれほど対応していないとはいえ全く無関係と言うわけではない。見つけたら捕まえるのが普通なのだが

クルス「姉さん。ここは異世界だから治外法権になるんじゃない？それに今はそんな状況じゃないっぽいし」

アルカ「まあ…そうか。クルスがそういうんなら・・・」

とクルスに言われてアルカは引っ込んだ
まあメンドクサイのでそういうことで
そして話を戻す

桂「ちょっと、いろいろあってな」
ヤミ「はい」
イヴ「早々色々会ったんだよ」

ドロップキックを受けた桂は立ち上がった。ヤミとイヴもそんな風に答えた。

銀時「おいヅラ。ナギとヴィルヘルミナはどうした？」
剣心「梔殿もいないようだが」
セツナ「えっ！？梔たちも一緒なの！？」
アルカ「ナギお嬢様もか！？」

二人がいない事に気付いた銀時と剣心は、桂達に尋ねた。
セツナとアルカも桂達にそう尋ねる

桂「ナギ殿達は万が一の時のために、八神殿の護衛をしている…ってヅラじゃない。キャプテン・カツーラだ」
エリザベス『そのとおり』
ヤミ「私達はシグナム達の様子を見にきたんです」
イヴ「そういう事、僕らは『赤井』達の様子を見に来たんだ」
新八「八神？」
護「誰ですか、その人？」

新八と護が首を傾げた。

桂「皆にも教えておこう。ただし管理局の者には言わないでくれ」
ヤミ「お願いします。管理局に知られたらその子の命が危ないんです」
新八「えっ！？」
美琴「どういう事よそれ？」
黒子「詳しく話していただけます？」
桂「今説明する。シグナム殿たちが闇の書を完成させようとしている理由もな」

そう言って桂は、新八達に銀時に話した事と同じ事を話した。

クルス「……ところでイヴさん…。「赤井」って言うのは誰のあだ名ですか…？」
イヴ「んあ？あのチビのことだよ」

イヴはヴィータを指差してそういった。

クルス「そっ…そうですか…（あの人達もイヴさんの犠牲者になったんだな…）」

クルスが苦い顔をしてそういった。そして同時に心の中でヴィータに同情もしていた
そう…物覚えの悪いというより人の名前をほとんど覚えられないイヴはしょう懲りもなくシグナム達四人にもあだ名をつけてしまったのだ。もちろん最初は全員抵抗したがナギから『無駄だ』と言われてしまった。ちなみにシグナムは『桃田』、シャマルは『海野』、ザフィーラは『犬塚』にされてしまった。
そして銀時達全員も苦い顔をしていた。

イヴ「なんか文句あんのか？山田！！」

クルス「いえ…別に…」

イヴには何をいっても無駄だと知っているのでこれ以上クルスも誰も口を開こうとはしなかった。

結界の外。

シャマルは屋上から様子を見ている。

シャマル（私の力じゃこの結界は破れない…ナギちゃんは私にそん

な事考えなくてもいいって言ってたけど…）

シャマルは闇の書の力を使って、結界を破るか迷っていた。
シャマルはほとんど攻撃手段を持っていない。シャマルの力ではどうがんばってもこの結界は敗れない
その時ザフィーラから念話が入った。

ザフィーラ（シャマル！）
シャマル（ザフィーラ！」

ザフィーラからの念話にシャマルが答える。

ザフィーラ（状況は…ナギの言ったとおりあまり良くないな…シグナムやヴィータが負けるとは思わんが、ここは引くべきだ。シャマル、おまえでなんとか出来るか？）
シャマル（なんとかしたいけど、局員が外から結界を維持してるの…私の魔力じゃ破れない…詩グナムのファルケンかヴィータちゃんのギガント級の魔力じゃないと…グレイドモンさん達もまだ来ないし…）

ナギからは結界を破るために自分のデジモンを使うからそんな必要はないといわれていたが今日は、はやてとの大事な約束がある。ソレを護るためにも、一刻も早く結界を破って離脱しなければいけない。

ザフィーラ（二人とも手が離せん。グレイドモン達もこないのでは止むを得ん、アレを使うしか…）
シャマル（解ってるけど、でも…それじゃ…！）

その時、シャマルは背後に気配を感じた。

クロノ「捜索しているロストロギアの所持、使用の疑いで貴女を逮捕します。投降の意思があるならそのままおとなしくしていてください。そうすれば弁護の機会もあります」

シャマルの背後で、杖を突き付けてそう言ったのはクロノだった。

アースラ内部では

エイミィ「やったークロノ君！グッジョブ！！」

リンディ「エエ」

シャマルを捕まえたクロノに対してエイミィとリンディが喜んでいた。

シャマル（ナギちゃんの言ってたとおりやっぱりこうなっちゃったわね…）

シャマルはナギから今回はどんな事が起こるかは大体聞いていた。

自分がクロノという管理局員に後ろを取られるかもしれないと言う事も

シャマル自身その事を気をつけてはいたがはやてのことを考えていたために油断していたのだ。

しかしシャマルは慌てなかった。なぜならこの後のことも聞いていたからだ。

乱入者が現れると言うことを

バキィッ！！

クロノ「グワッ！」

突然現れた仮面を付けた男が、クロノを蹴り飛ばした。クロノは隣のビルの屋上まで飛ばされた。

クロノ「な…仲間！？」

クロノは突如現れた仮面の男を睨みつけた。

シャマル（この人がナギちゃんの言ってたグレアム提督って人の使い魔・・・）

シャマル「あ…貴方は？」

シャマルが仮面の男に尋ねた。ナギから教えられて知ってはいたのたがナギからはやてのためにわざと知らない振りをしろと言われていた。闇の書が完成した最後の時までに大きく未来が変わるようなことを避けるためだ。本来ならシグナムたちは物語の最後まで真実を知るすべはない。グレアムの目的や仮面の男の正体を今シャマルが目の前にいる男にしゃべっては大きく未来が変わる可能性がある。警戒したグレアムが闇の書封印のために新たな策を出してくるかもしれないからだ。下手をすればはやてが助からない可能性が出てきかねないとまで言われては従うしかない

「使え」

シャマル「え？」

「闇の書の力を使って結界を破壊しろ」

シャマル「でもアレは…！」

シャマルは闇の書を使う事を戸惑った。

ナギからは必要ないといわれている。でもこのままではやてとの約束に間に合わない

その時だ

バキィッ！！

「がッ！？」

ナギのデジモン、グレイドモンが現れ仮面の男を蹴り飛ばした。

シャマル「グレイドモンさん！」

グレ「シャマル殿すまん！遅くなった！！」

グレイドモンの登場にシャマルは喜んだ。

クロノ「なッ…なんだまた仲間か…？」

向こうのほうで倒れかけているクロノがグレイドモンを睨みつけてそう言った。

グレ「小僧。おとなしくしていろお前に用はない。そっちの奴もおとなしくしていないとただでは済まさんぞ」

「……」

グレイドモンに飛ばされた仮面の男はただ黙って頷いた。

しかしクロノは

クロノ「お前は何者だ！？連中の仲間か！」

グレイドモン「お前には関係ないだろう」

クロノ「答えろ！！」

クロノはそう言いデバイスを向けるが

グレイドモン「うるさい小僧だ」
クロノ「なッ！？」

グレイドモンは一瞬でクロノの後ろに回りこみクロノを吹き飛ばした。

クロノ「ぐああっ！」

クロノは地面に叩きつけられた。そしてグレイドモンはシャマルの所に戻った。

シャマル「グレイドモンさん。結界の破壊は…」
グレイドモン「心配ないそれならば奴らがやる」

グレイドモンが指差した方向をシャマルが見た
そこには巨大な機械恐竜が浮かんでいた。
それはメイルバードラモンとグレイモンが合体したメタルグレイモンであった。
地面にも巨大な機械仕掛けのワニがいた。デッカードラモンである。

クロノ「なッ！？何だあの怪物は！！？」
「……」

メタルグレイモンを見たクロノは叫び仮面の男は絶句した。

グレ「シャマル殿。はやくシグナム殿たちに連絡を」
シャマル「ハッ…ハイ！」
シャマル（みんな、いまから結界を破壊するわ！うまくかわして撤退を！）

シャマルが念話でシグナム達に伝えた。

シグナム「桂、エリザベス、ヤミ、イヴ！シャマル達が結界を破壊する！結界を破壊したら撤退するぞ！」

シグナムが桂に向かって叫んだ。

桂「了解した」
エリザベス『合点承知』
ヤミ「わかりました」
イヴ「へいへい」

四人も了解した。

シャナ「ヤミも行くの？」
ヤミ「はい。はやてとの約束があるんで」
シャナ「そう。じゃあまたね」
ヤミ「はい」

シャナはヤミに対してそういった。
そして、メタルグレイモンとデッカードラモンが動いた。

メタルグレイモン「ギガデストロイヤー！！」
デッカードラモン「デッカードランチャー！！」

ズドッカッアアアアアアアアアアアン！！

メタルグレイモンが砲台からいくつものビーム砲を発射し、デッカードラモンが背中から大量のミサイルを発射して結界を破壊してしまった。その破壊力はなのはのスターライトブレイカーを上回るパ

ワーだった。
結界は大爆発を起こし粉々に砕けた。

クロノ「なッ…なんて破壊力だ…」

クロノはメタルグレイモンとデッカードラモンの凄まじいパワーに唖然としていた。それはなのはとフェイトも同じだった。

シグナム（凄まじいな…あれがデジモンの力か…）

シグナムもデジモンの凄まじい力を見て驚いていた。
ヴィータ達も、結界が破壊された事を確認した。

ヴィータ「あたしはヴォルケンリッター『鉄槌の騎士』ヴィータ。あんたの名は？」
なのは「なのは。高町なのは」

互いに名を名乗った。

ヴィータ「高町なぬ……な…えーい、呼びにくい！」
なのは「逆切れぇ！？」
ヴィータ「ともあれ勝負は預けた。次は殺すからな！ぜってーだ！」

そう言い残して、ヴィータは離脱した。

なのは「あ…えっと…ヴィータちゃん！」

なのははヴィータを追おうとしたが、
「ランダムレーザー！！」
なのは「キャッ！？」

当然光線が飛んできてなのはの横を掠めた。
なのはに光線を撃ったのは黄色い飛行機みたいな者だった。

「邪魔しないでよ～これから大切な約束があるんだからさ」
なのは「な、なにあなた？」
スパ「僕はスパロウモンだよ」
なのは「スパロウモン？」

なのはに挨拶したスパロウモンがそういった。

なのは「あなたは何が目的なの？」
スパ「そんなのお前にいう必要ないもん。僕はボスの命令でやってるだけだもん」
なのは「ボスって誰なの？闇の書の主の事？」

なのははそう尋ねるが

スパ「うるさいな！お前にいう必要なんかないんだよ！じゃあね！！」
なのは「あっ！待って！！」

なのはの制止も聞かずにスパロウモンは凄いスピードで行ってしまった。

ザフィーラ「悪いが我も離脱する。勝負はお預けだ」
アルフ「あっ！」

ザフィーラも離脱した。

アルフ「もう！なんなんだいあの怪物達は！？あんな簡単に結界を破るなんて…」

アルフは結界を破ったメタルグレイモン達に怒ったがメタルグレイモン達の破壊力に唖然ともしていた。

ちなみに剣心達は

剣心「相変わらずすごい破壊力でござるな～」

銀時「そうだな～」

なんて言っていた。

シグナム「すまん、テスタロッサ。この勝負預ける」

フェイト「シグナム！」

シグナムもフェイトから離れた。

だがすぐに離脱をせずに、剣心に近寄った。

シグナム「剣心！」

剣心「ん？」

シグナムに呼ばれ、剣心は振り返った。

シグナム「あ……その…まあ…色々あったが…その…今日の事とかも含めて」

シグナムは頬を赤くした。

シグナム「ありがとう」

少し照れながら、シグナムは剣心に礼を言った。すると剣心と銀時が

銀時「へぇ。照れてるところも可愛いじゃねーか」

剣心「うむ。やはり女子には笑顔が一番似合うでござるよ」

悪戯っぽい笑みを浮かべてそう言った。

剣心は微笑んだ。

シグナム「なっ！？わ…私をからかっているのか！？」

顔を赤くしながら、シグナムが反論した。

銀時「別にからかってねーよ」

剣心「それより早く主の所に戻られよ」

シグナム「う…うむ。ではなお前たち」

そう言って、シグナムも離脱した。

桂「では俺達も行くとするか」

エリザベス『了解』

ヤミ「はい」

イヴ「ああ」

桂達が去ろうとした時、

「待て！」

数人の管理局の魔導師が、桂達を取り囲んだ。

「逃がさんぞ！おとなしく投降しろ！」

杖を向けながら、魔導師が言った。

イヴ「何だよこの雑魚ども」

ヤミ「邪魔ですね」

エリザベス『うっとおしい』

桂「ふふ。これで俺達を囲んだつもりか？」

桂は懐に手を入れた。

魔導師達は警戒した。桂の懐から出てきたのは『んまい棒』だった。

桂「んまい棒、混棒駄呪（コーン・ポタージュ）！！」

ボウンッ！！

んまい棒を地面に投げ、辺りが煙に包まれた。

「ぶはぁッ！？」

「なっなんだこれは！？」

煙の中で魔導師達は混乱してる。その隙にヤミとイヴが

バキィッ！！ドッカア！！

「グハァ！！」

管理局員達を打っ飛ばした。

そしてそのまま逃げた。

銀時「ヅラ達を捕まえるには、詰めが甘すぎるぜ」
剣心「数も少なすぎるでござる」
アルカ「アレくらいで捕まえられる桂なら真選組も苦労しない」
セト「あんなんでイヴを捕まえようとするなんて百年早いな」

後ろで見てる銀時達が呟いた。

新八「剣さん」
剣心「ん？」

新八に呼ばれて、剣心は振り返った。

新八「なんか…シグナムさんって人と仲良い感じでしたよね？」

目を細めながら新八が言った。

神楽「付き合ってるアルカ？剣ちゃんとシグナムと付き合ってるアルカ！？」
シャナ「どうなのよ！剣心！！」

神楽とシャナが大声で剣心を問い詰めた。

剣心「いや…そんな訳なかろう」

剣心はいかにも誤解だといわんばかりに否定した

東条「少なくともシグナムという女性の方は怪しかったですな。あれはホの字ですぞ」
セト「確かにあれはホの字かもな」
未央「お兄ちゃんあの人と付き合ってるんだ～」

東城とセトと未央がカラカウようにそう言った。

剣心「イヤだから違うでござる！！」

剣心は否定する。

その時だ

「誰が誰にホの字なの？」

ドカアアアン！！

後ろから声が聞こえた。

それは薫だった。薫は思いっきり足元を踏み抜いた。因みになぜか薙刀を持っていた。

剣心「かっ…薫殿？」

薫「誰が誰にホの字ですって？」

薫は顔は笑っているがどす黒いオーラを放っていた。

そしてその凄まじいオーラに皆はおびえていた。

新八「薫さん少し落ちつい「あ！？」…いえ…なんでもありません」

新八は何とか薫を落ち着かせようとしたが無理だった。

薫「剣しぃ～ん？あの女は何？何があった訳？」

剣心「かっ…薫殿…拙者は何も…」

後ずさりしながら剣心が言う。

薫「問答無用！！」
剣心「あああああ！！」

剣心は悲鳴を上げながら、薙刀を振り回す薫から逃げた。
ちなみになのはとフェイトはその様子を抱き合いながら黙ってみていた。フェイトも参加使用としたが薫が怖すぎてそんな気になれなかった。なのはは震えていた。

そして八神家。
メタルグレイモンのお陰で、シグナム達は夕飯に間に合った。はやてやすずかと一緒に鍋を食べていた。
ちなみにデジモン達はグレイドモンが回収していた。

はやて「ヤミちゃん達。遅いなぁせっかくナギさんが豪華な鍋用意してくれたのに・・・」

そう鍋の中身は超豪華だった。ナギが世話になっている礼にと言って豪華な食材を買い揃えてくれたからだ。

シグナム「心配いりません、主はやて。ヤミ達ならもうすぐ戻ってきます」

梔『問題ない』

ナギ「そうだぞ。あいつらなら心配いらん。なあハヤテ」

ハヤテ「はい、お嬢様」

ヤミ達の事を心配してるはやてに、シグナム達が安心させるように言った。

さて皆さん、何でここにナギの執事であるほうのハヤテがいるのかと思ったでしょう。実はヴィータ達が出掛けたあとシャマルやヴィルヘルミナやナギと一緒にはやてが鍋の材料を買いに買い物に出ていましたでしょう。その時偶然ナギ達を探していたハヤテとであったのである。

あと、何故だか雪路とも偶然出会い今に至る。

ちなみに雪路はすでに酔っ払って寝ていた。

はやてとすずかはナギに「あんな大人にはなるなよ」と言われた。

はやてとすずかも苦笑いしながら頷いた。

そして

桂「ただいま」

ヤミ「遅くなってすみません」

イヴ「あ～腹減った」

と、ヤミ達が帰ってきた。

はやて「ヤミちゃん！おかえり！」

はやてが笑顔で言った。

ヤミ「遅くなってすみません。あれ？ハヤテいたんですか？」

ハヤテ「さっきカルメルさんやお嬢様と会う事ができたんです。ちなみに桂さんのお姉さんはそこで寝てますよ」

そういってハヤテは雪路を指差した。

桂「オオ。姉上無事だったか」

エリザベス『良かったですね桂さん』

雪路「グガーグガー」

雪路が見つかって安心したのか桂は安堵の息を吐いた。

雪路はだらしない格好で寝ていた。

桂「ところで…そちらが月村殿か？」

すずか「はい。初めまして。月村すずかです」

すずかは桂達に挨拶した。

するとイヴが

イヴ「じゃあ略して『水田』ね」

すずか「は？」

と、すずかにまであだ名をつけてしまった。

突然何を言い出すのかとすずかは首を傾げた。

ナギ「お前はいちいち人にあだ名をつけるな！！」
イヴ「え～いいじゃんかよ。別に～」
ナギ「良くないわ！！」
ハヤテ「まあまあお嬢様」

イヴに殴りかかろうとするナギをハヤテが止めた。
そして桂が

桂「俺は桂小太郎。好物はそばだ」

とすずかに挨拶した。

すずか「え？何で好物をいったんですか？」

すずかは何故桂が自分の好物を行ったのわからなった。
そしてヴィータとナギが

ヴィータ・ナギ「テメエ（オマエ）はいちいち好物を言うんじゃねェエエ！！（言うなあああああ！！）」
桂「ぶほッ！」

桂の言葉にいらだったヴィータとナギが、桂の顔面に飛び蹴りを食らわせた。

はやて「あかんよヴィータ！」
ハヤテ「そうですよお嬢様！！」
ヤミ「二人とも辞めて下さい！」
ヴィータ「ヴィータちゃん！」
エリザベス・梔『暴力はよくない！』

はやてとハヤテ、そしてシャマルとヤミ、エリザベス、梔が止めに入った。
すずかはオロオロして、ザフィーラは獣姿で様子を見守ってる。
イヴはのんきに鍋を食べていた。ヴィルヘルミナは台所で洗い物をしていた。
シグナムは、はやて達の賑やかな光景を見て微笑んだ

その頃、

「あの怪物は一体何なんだ?」

あの場からいつのまにか引き上げていた仮面の男が自分を蹴り飛ばしたり結界を破壊した生き物達に対してこう思っていた。

「まあ…おかげで闇の書のページを無駄に減らさなくてすんだが…あの凄まじい破壊力は危険だ。あの怪物達は一体・・・」

仮面の男がそう考えていると

「あれはデジモンと言う生き物だよ」

「!!」

突如後ろから男の声が聞こえた。仮面の男は驚いて振り返るとそこには一人の男がいた。

「…なんだ貴様か、驚かせるな」

男の顔を見た仮面の男は急に警戒を解いた。その男は仮面の男の知り合いだった。
その男はジュドであった。

「それで・・・デジモンとは一体なんだ?」
ジュド「意思を持った電子生命体の事だよ」
「電子生命体だと!?あれが!?」

ジュドの言葉に仮面の男が驚いた。あれが電子生命体などとは信じ

られなかったからだ。

ジュド「驚くのも分かるが事実だよ。君が見たとおりデジモンは凄まじい力を持っている。まあ弱いのも多いがね。だがあれらは少なくとも君には少々荷が重いだろう」

「ではどうするんだ!?あんな奴らがいては父様の計画が崩れるぞ!!唯でさえ余計な邪魔者がいると言うのに・・・」

ジュド「心配いらんよ。その為に我らがいるのだからね。デジモンへの対応はデジモンで行うべきだ」

「お前もデジモンとか言う怪物を連れていると言うのか?」

ジュド「まあね。君にも後で一体もたせて上げるよ。計画遂行のためには必要だからね。私の直属の部下たちにも手伝わせるよ。それで心配ないだろう……リーゼロッテ君?」

ジュドは仮面の男に対してそう言った。

リーゼロッテ「……この姿の時はその名前で呼ぶな・・・!!」

仮面の男・・・リーゼロッテはジュドを睨みつけながらそう答えた

ジュド「これは失敬…だがそれが君の名前なのだから仕方ないだろう」

リーゼロッテ「確かにそうだが…万が一念話を傍受されていたらどうするつもりだ!?それで父様に何かあったりしたら…」

ジュド「そんなドジは踏まんよ。それにリンディ提督達は内部にこの事件に関わっている者がいる等とは夢にも思っていないだろうしね」

リーゼロッテ「まあ…確かにそうだな」

ジュドの言葉にリーゼロッテは納得した。

ジュド「君はそろそろグレアム君のところに戻りたまえ。彼も心配しているだろう」
リーゼロッテ「ああ」
ジュドに言われて仮面の男リーゼロッテは引き上げていった。

リーゼが引き上げたのを確認した後ジュドが口を開いた。
ジュド「ふん…あの女以上に愚かな奴らだ。闇の書が本来どういったものなのかまるで分っていないのだからな」
ジュドはそう呟いた。
ザッ！
？？？「ジュド様」
ジュド「ん？」

その時ジュドの後ろに一人の男が現れた。男は巨大な剣を背負っていた。

ジュド「ジハードか」
ジハード「はい」

ジュドにジハードと呼ばれた男がそう答えた。

ジハード「ジュド様。本部から支給されてきた物です。お受け取りを」
ジュド「ああ」

ジュドはジハードからモバイルのような物をいくつか受け取った。

ジハード「ジュド様。闇の書そのものを奴らから奪わなくてよろしいのですか?邪魔ものどもがいるとはいえ主は所詮ただの小娘ですよ?」
ジュド「可能ならば奪ってもかまわん。だが…あまり目立つような行動はするな。“あのお方”からもそれは『出来る限りは止めろ』と止められている。それに・・・もともと我等の目的は闇の書その物ではなく闇の書に眠っておられる我らが“王”の復活なのだ」
ジハード「分かっております」

ジュドの言葉にジハードは頷いた。

ジハード「では守護騎士どものほうは?」
ジュド「そうだな…。別に始末してもかまわんか…いざとなれば闇の書の完成は我らがやればよい。どうせ最後には全員消すのだからな。だが…主だけは決して殺すな。最後の手段をとらなければいけなくなった時にいてもらわなくては困るからな。例の守護騎士も念

のために一人くらいは最後まで生かしておけ」
ジハード「ハッ。それにしてもジュド様驚きましたね。まさか例の連中が…」
ジュド「ああ。ファイナから『天人(あまんと)』と言う言葉を聞いてから妙だとは思っていたが…お前の報告にあった『デジモン』と言う言葉を聞いて確信した」

ジュドは険しい表情をしながら顔を伏せた。

ジュド「まさか・・・奴らが『我等の世界』から来たもの共だったとはな・・・」

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「今回はなんとゲストに『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』～攘夷戦争鎮魂歌～の作者「黒神先生」をお呼びしてま～す」

黒神「よろしく」
銀時「オオすげえゲストだな」
新八「作者さんが頼んだらＯＫをもらえたそうですよ」

しかし黒神の外見は完全に『ラグナ・ザ・ブラッドエッジ』と一緒だった。

銀時『おいー！！お前ただの『ラグナ』じゃねーかぁアアアア！！』
黒神「良く見てください。髪が銀色で、眼のオッドアイが黒と銀色

である。そして背中には長刀を背負っているでしょ?似てるだけですよ」

新八「そんなの小説でわかるわけないでしょ!!」

黒神「うるせえんだよ。ダメガネ」

新八「何!その態度の違い!!」

新八は黒神にツッコンだ。

支配者「ではせっかくなんで黒神先生にも質問したいと思います」

黒神「はい、何ですか?」

支配者「何が一番嫌いですか?」

黒神「偽善な存在と自分を一番と思っている者ですね。例えば『アースラメンバー』とかクロノとか」

クロノ「おいコラ!誰が偽善者だ!!」

黒神「うるさい!!フェイトを見捨てようとしたくせに!!」

バキッ!!

クロノ「グハッ!」

クロノは黒神に殴られて気絶した。

支配者「では次の質問です。逆に好きな物は何ですか?」

黒神「麺類料理:鍋類料理・漫画(特に銀魂・遊戯王)ですね」

銀時「意外と普通のものがすきなんだな」

黒神「うるさい」

支配者「では趣味は何ですか?」

黒神「クロノいじりです」

クロノ「なにぃ!!」

黒神「だからうるさい!」

ボキィッ！！

クロノ「ホブッ！」

クロノはまた殴られた。

支配者「では黒神先生そろそろ質問お願いします。」

黒神「分かりました。質問します。新八へそろそろなのはを諦めて、オタク卒業して侍としての自覚を芽生えたほうが良いのでは？」

新八「余計なお世話だ！！あんた僕の事けなしに来たのか！？」

黒神「だって何時までもみみっちいじゃん。僕の小説でもとっくになのはに振られてるんだし。真王さんの小説でも振られてるし…」

新八「うるセぇー！！お前らが僕の魅力をなのはちゃんにちゃんと伝えないからだろーがぁアアアア！！！」

神楽「新八に魅力なんてあったアルカ？」

シャナ「あんな奴に存在するとは思えないわ」

セイバー「強いて言うなら眼鏡が無駄に似合ってるってぐらいですね」

新八「僕には眼鏡以外に何の魅力もないのかぁアアアアア！！？」

銀時「だって新八って言ったら９９％眼鏡じゃねえか」

神楽「後は眼鏡掛け機ある」

新八「僕は妖怪眼鏡男か！！？」

黒神「あ、今のいいね。新しいフレーズとして使えそうかも？」

新八「使うんじゃねえー！！」

新八は怒鳴る。

銀八「ああ～何時までもきりないんで、黒神、次の質問してくれ」

黒神「了解。では次の質問。お妙へ、原作でも新八はオタクに堕ちちゃったから、せめてこの小説だけでもオタクを止めて侍としての自覚を目覚めて欲しいですか？」

お妙「そうね～いい加減オタクは卒業して欲しいわ」

新八「姉上！僕はオタクじゃありませんよ！！」

銀時「あんなことしてる癖しやがってオタクじゃねえは無理案じゃねえの新八君？」

新八「ゲームに嵌る位いいでしょうが！！」

銀時「そのゲームの内容が問題なんだろうが。いくら全くモテねえからって、二次元に逃げてんじゃねえよ」

新八「余計なお世話だ！！あんただって銀魂本編じゃ全くモテてねえだろ！！」

銀時「あんだとぉ！！テメーよりはモテてるわあ！！」

新八と銀時は怒鳴り続ける。

銀八「ったく之じゃきりねえな…んじゃ黒神。最後の質問言ってくれ」

黒神「はい。んじゃ最後の質問。セイバー、ヤミ、シャナ、御坂、ヴィータへ二年後の巨乳美少女と成長した神楽の姿をみて、貧乳の貴女方は羨ましいですか？（黒笑）」

銀時「っておい！！あんたそんな質問したら…」

ドカアアアアアアアアアアアアアアアン！！！！

！！！！！！！！！

銀時・黒神
『えっ？』

セイバー、シャナ、御坂、ヴィータ
『誰が貧乳だとぉ～！！（怒）』

ヤミ以外の貧乳キャ『アアン！！？』……美しい美乳キャラたちが黒神の後ろに迫った。

美琴「黒神ぃ～！！！（怒）」
セイバー「よくも言ってくれましたねぇ～！！！（怒）」
シャナ「だぁれが貧乳ですって～！！！（怒）」
ヴィータ「ぶっ潰されてえらしぃなぁ～！！！（怒）」
黒神「えっ…？ちょっ…ちょっと…皆さん？」

ヤミ以外の４人が武器を構え黒神に迫ってきた。

支配者「ちょっ！！あなたたち止めて！！せっかくの特別ゲストなのに「うるせえ！！」（バキィッ！！）グハッ！！」

止めようとした支配者が四人にぶっとばされて気絶した。

黒神「ああっ！支配者さん！」
セイバー、シャナ、御坂、ヴィータ
『覚悟は出来てるんだろーな…！！？』

黒神に４人が迫る。

銀八「おい待て！これ質問コーナーなんだぞ！！お前らちゃんと質問に答え『やかましい！！』（バキィッ！！）うべっ！！」

銀八もぶっとばされて気絶した。

黒神「ひっ！ちょっと待て僕が悪かっ『いまさら遅い！！』ギャアアア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

黒神は４人にボコボコにされた。

神楽「あれ？何でヤミは参加しなかったアルカ？」

ヤミ「別に胸の大きさにはこだわりありませんから。別に大きくしようと思えばいつでも出来ますし」

神楽「そうアルカ」

こうして銀八先生特別編は終了した。

ブレイド「んじゃ次回も楽しみに待ってろよ」

なぜかブレイドが占めた。

第四十三訓　戦いは激しければ激しいほど盛り上がる。（後書き）

支配者「さて今回の話しいかがでしたか？あと黒神さん。ぞんざいに扱ってスイマセン」

銀時「謝るくらいならやるなよ」

支配者「うるさい！！」

剣心「では次回予告でござる。次回はまたほのぼの系でござるよ」

支配者「では次回もお楽しみに」

銀時「ところで作者ジュドの奴が言ってた”あのお方”って誰なんだよ？」

支配者「ネタバレになるからそんな事いえません」

第四十四訓　黒幕はとっても悪い奴なのが当たり前（前書き）

支配者「今回はちょっと短めですが、結構盛り上がる話です」

銀時「リリカル剣魂スペシャル始まるぜ」

第四十四訓　黒幕はとっても悪い奴なのが当たり前

戦闘が終わった後、剣心と銀時達はリンディ達に呼ばれ、リビングに集まっていた。

リンディ「銀さん、剣さん。あの怪物達は一体なんですか？」

エイミィ「銀さん達なら知ってるんじゃないんですか？」

リンディとエイミィが結界をあっさりと破壊した怪物（デジモン）達について銀時達に尋ねた。

銀時「いや～俺達に聞かれても」

剣心「さっぱり分からんでござる」

銀時と剣心は頭を掻きながらそう答える。他の皆もうんうんと頷いている

まさか『ナギがデジモンという者を使って結界を破壊しました』なんて言える訳ないからだ。

クロノ「まあ・・・それはもういいですよ。その代わりこっちの質問には答えてもらいます。あの時局員達を伸して逃げたグループの中にヤミさんがいました。これはどういうことですか？」

今度はクロノが尋ねた。

銀時「さあ…ひょっとして連中に脅されて協力させられてるんじゃないか？」

クロノ「彼女ほどの実力者がですか？」

クロノはそう尋ねるが

シャナ「そんなこと言われたって私達だってわからない」
セイバー「彼女には彼女のわけがあるのかもしれませんが…私達にはなんとも」
クロノ「分かりました…もういいです。結局あなたたちにきいても無駄だと言う事ですね」

クロノは溜息を突いた。

九兵衛「すまない」
雛菊「ごめんなさいね」

九兵衛と雛菊が頭を下げて謝った。

東条「若と姫の責任ではありません！責任なら、この東城歩が取りましょう！」

東城は白い着物姿で、刀を持って座り込んだ。

新八「ちょっとあんた！これ位の事で切腹する気ですか！？」
クルス・護「いやいやいや！やり過ぎですよ東城さん！！」
アルカ「冷静になれ！！」

新八達が、切腹しようとする東城を止める。

九兵衛「東城！」
クロノ「い…嫌、ちょっと質問に答えられなかったぐらいで、な…なにもそこまでしなくても…！」

九兵衛とクロノが手を伸ばした。
その時、クロノの手が九兵衛の手に触れた。
その瞬間、

九兵衛「うがぁあああああ！！僕に障るなぁあああああ！！」

九兵衛は思いっきりクロノを投げ飛ばした。

クロノ「ぐわっ！！」

クロノは壁に叩きつけられた。

リンディ「クロノ！」
エイミィ「クロノ君！」

リンディとエイミィがクロノに駆け寄る。

東条「ああ、言い忘れてました。若は女性は平気ですが、男に触れられると投げ飛ばしちゃうんで気を付けてください」

新八達に止められ切腹をやめた東城が説明した。

クロノ「そういう事は最初に言え！！」

怒鳴りながらクロノが起き上がった。

エイミィ「でも、男が苦手な男なんて珍しいねぇ」
アルフ「ホントだねえ。変わった子だよ」

九兵衛を見ながら、エイミィとアルフが言った。

銀時「何言ってんの？九兵衛は『女』だぞ」
剣心「そうでござるよ」
銀時と剣心がそう言った。
なのは達「え？」
銀時と剣心の言葉に、『リリカルなのは』組は固まった。
雛菊「姉さんはね、私たち柳生家のちょっとした事情があって、今まで男として生きてきたのよ」
雛菊がフェイト達に教えた。
なのは達「えええええっ！！！？？」
フェイト達は驚いた。
どれぐらい驚いたかと言うと、今までテストで０点ばかり取っていたの○太が突然、１００点を取った時と同じくらい驚いた。とにかくめっちゃ驚いた。
まさに衝撃の事実である。
クロノ「今まで全然気付かなかった…！」
クロノも驚愕の表情をしている。
銀時「まぁ九兵衛が女だって知ってんのは僅かな人間だけだからな」
剣心「まあ彼女自身未だに女より男の部分のほうが強いでござるからな。ッていうか確か九兵衛殿を紹介する時“彼女”といったはず

でござるが？」

新八「僕も土方さんに教えてもらって、初めて知りましたし」

銀時と剣心と新八が言った。

こうしてフェイト達は、九兵衛が女性であるという事実を知った。

八神家。
深夜のリビングで、シグナム達が集まって話し合いをしていた。
話の内容はジュド達魔人族についてだ。

桂「銀時達に聞いた話ではジュドという男が闇の書を使って何かを企んでいるそうだ」

桂の話を聞いたヤミ達は表情を険しくした。

ナギ「そんな奴らがいたとはな…確かにこの世界は私が知っているのとは少し違うようだ」
梔『そうみたい…』
ヤミ「剣心もこの世界は『リリカルなのは』の世界に良く似た平行世界だって言ってましたからね…」
シグナム「そうらしいな。奴らも闇の書の完成を望んでいるのは間違いないみたいだが…」

ヤミやシグナム達も複雑な表情をする。

ヴィータ「そいつらがなに企んでるかしらねえがはやてには絶対手を出させねえ！！」

ヴィータの言葉にシグナム達は頷いた。
ジュド達が仮面の男達と一緒にはやてを監視しているのは間違いないだろうとヤミ達は思った。

シャマル「家の周りには厳重なセキュリティを張ってあるし、綾崎さん達も護衛してくれてますから、はやてちゃんに危害が及ぶ事はないと思います」

ハヤテ達を見ながらシャマルが言った。

エリザベスと梔は、
『心配無用！任せとけ！』
と書かれたボードとスケッチブックを掲げた。

ナギ「任せておけ。あいつはもう私の妹みたいな者だ。そんな奴らには絶対に手は出させん」
ハヤテ「はい！お任せください！」
イヴ「僕が本気を出せばそんな連中はいちころだ」

ナギ達もそう答える。

桂「うむ。だが用心のために俺も八神殿の側にいよう。俺は飛べんからやはり蒐集の手伝いは出来そうにない」
雪路「そうね。あたしもはやてちゃんの側にいるわ」

と、桂と雪路が申し出た。

ヤミ「では私は引き続きシグナムたちの手伝いをします」
ナギ「そうだな。ヴィルヘルミナお前もついていってやれ。お前は飛べるからな」
ヴィル「しかしそれではお嬢様が…」
ナギ「かまわん。ハヤテも来てくれたし、イヴやヅラ達もいるからこちらの守りは問題ない」
ヴィル「…了解しました。お嬢様がそうおっしゃるのでしたら…」
ナギ「まあ…私はお前たちと違って足手まといにしかならんからな…」

ナギは複雑な表情を浮かべてそう言った。

シグナム「そんな事はない。ナギ達がいなければ、我らは闇の書の力を使い、頁を減らしていた」
シャマル「そうですよ。皆さんには感謝しています。いろんなことも教えてくれましたからはやてちゃんへの守りも完璧な物を仕上げる事ができたんです。グレイドモンさんたちにも感謝していますし」

ザフィーラとシャマルが、ヤミ達に感謝の言葉を言った。

ヴィータ「…結界破ってくれて…ありがと…」

ヴィータも少し恥ずかしがりながら、ヤミ達に礼を言った。

スパ『何だよチビ助。お前でも素直になる事あるんだな』

スパロウモンがクロスローダーの中からヴィータを茶化すかのようにそう言った。

ヴィータ「何だと！別にお前なんかに感謝なんかしてねえよ！！」
スパ『なにぃ！それが手伝ってもらってる者に対して言う言葉か！！』
ヴィータ「別にお前なんかに手伝って欲しいなんていってねえ！！」
スパ『なんだとぉ！！』
ヴィータとスパロウモンはまた喧嘩を始めた。

ナギ「コラコラ寄せスパロウモン」
シャマル「ヴィータちゃんも落ち着いて」

二人がそういってヴィータとスパロウモンを止めた。
喧嘩が収まってちょっとした後
ふとヤミがヴィータを見ると、ヴィータは浮かない顔をしていた。

ヴィータ「ねぇ…何とか闇の書を暴走させずにはやてを助ける方法ってホントにないのかなぁ…あたしやっぱ嫌だよ……はやてをそんな目に合わせるなんて…デジモンに闇の書の暴走させないとかそういう力があるとか…そんな事できる奴とかいねぇの？ナギ」

珍しくヴィータが弱々しい声で尋ねた。

ナギ「そんな事ができる奴がいたら初めから紹介しておるわ。私だって嫌だがそれしかないんだから仕方がないだろ……」

ナギも辛そうな顔でそう言った。

ヴィータ「そうなんだけどさ…」
イヴ「何だよ一体」
ナギ「まだ何かあるのか？」

深刻そうな表情を止めないヴィータに対して、イヴとナギが険しい表情で質問した。

ヴィータ「私はなんか…なんか大事な事を忘れてる気がするんだ」
ナギ「どうせ闇の書の防御プログラムの事を言っているんだろ？私だってそれくらい知って「…違うんだ」！？」

ナギの言葉をヴィータがさえぎった。

ヴィータ「それ以外に…なんか…なんかあったような気がするんだ…」

よくわからないが、ヴィータは何か不安を抱いているようだ。

ヤミ「…シャマル。少し闇の書を見せてはくれませんか？」
シャマル「え？はい」

ヤミに言われて、シャマルは闇の書を渡した。
ヤミは手に取って闇の書を隅々まで見た。頁が増えてる以外に、特に変わった所はない。

ヤミ（やはり見ただけでは何もわかりませんね。しかしヴィータは何を不安に思っているんでしょうか…ナギの言った防御プログラムとやらの事じゃないとしたら一体……）

そう思いながら、ヤミがシャマルに闇の書を返そうとした時、

――――ククク…

ドクン

それは聞こえた。

ヤミ「えっ！？」

突然聞こえた音とかすかな声に、ヤミは驚いた。

シグナム「ん？どうしたヤミ？」

イヴ「ヤミ？」

桂「どうしたヤミ殿？」

シグナムとイヴと桂が尋ねた。

どうやらシグナムや他の皆には、今の音は聞こえていなかったらしい。

ヤミ（何ですか今の音は！？何か…心臓の鼓動音のような音が…そして今変な声が聞こえたような…）

ヤミは闇の書を耳に当てた。

シャマル「ヤミちゃん？」

ナギ「おい、どうしたんだ一体」

シャマルとナギが声をかけると、

ヤミ「すいませんが、皆ちょっと静かにして下さい」

ヤミが皆に静かにするように言った。

言われた通りシグナム達は黙った。それからしばらくして、ヤミは

耳から闇の書を離した。

ヤミ（…気のせい…ですか？）

ヤミは腑に落ちない顔をした。

ヤミ「シグナム、ナギ。闇の書が完成に近づくと、何か心臓の鼓動音や妙な声のようなものが聞こえたりするのですか？」

シグナム「心臓の鼓動音や妙な声？いや、そんなものは聞こえたりしないはずだが……？」

ナギ「お前何言ってるんだ？闇の書本体のプログラムが出してる鼓動音なんじゃないのか？」

ヤミの問いに、シグナムとナギは首を傾げながら答えた。

ヤミ「…そうですか。変な質問をしてすいません。今闇の書を返します」

シャマル「え…ええ…」

桂はシャマルに闇の書を返した。

ヤミ（あの音がもし私の気のせいでないとすれば……闇の書には、シグナム達やナギも知らない『何か』があるのか？）

ヤミは不安を抱きながら、険しい表情をした。

ドクン

――誰かがワシの事に感づき始めたか……――

ドクン

――……だが気付いたところでどうしようもあるまいて……――

ドクン

――貴様らはワシの為に……――

ドクン

――闇の書を完成させるしかないのだ……――

ドクン

――そして闇の書が完成し…見事ワシが復活したとき……――

ドクン

――貴様らに最高の褒美をやろう……――

ドクン

――貴様らと貴様らの大事な大事な主の“死”という褒美をな…

――

ドクン

――――踊れ踊れ…ワシの掌の上で踊り続けるがいい…ゴミ共よ！！

――――

ドクン

――――フフフ…ハハハ…ハーッハッハッハ……――――

ヴィータとヤミの不安は的中していた。

闇の書の中に眠る強大なる悪ははやてを救おうとするヤミやシグナム達の努力を嘲笑っていた。

闇の書の中に眠る強大なる悪は着実に力を付け始めていた……。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『匿名希望』さんから「質問剣心と銀時から見て攘夷戦争の時の桂と今の桂、まじめだったのはどっち？フェイトへ薫のことをどう思っていますか？恋敵？」だとよ」

銀時「やっぱり昔のほうのヅラだろ。今よりはアホじゃなかったと思うぞ」
剣心「まあ…戦っていた頃はそんな事を考える暇もなかったがな」
桂「ヅラでもアホでもない。桂だ」
銀時「うるせーぞヅラ。」
桂「ヅラじゃない！桂だ！！」

二人は言い争いを始めた。
銀八「ああ、うるせー。じゃあ二つ目の質問答えてくれフェイト」
フェイト「はい。あの人に剣心は渡したくありません」
薫「あ？」

フェイトがこういったので薫が出てきた。

薫「子供の癖に何いってんのよ。剣心は２８なのよ！９歳と釣り合う訳ないでしょ！！」

フェイト「愛に年は関係ないもん！！」

薫「生意気な事言ってんじゃないわよ！！」

とうとう二人は喧嘩を始めてしまった。

銀八「あ～あこりゃしばらくおさまらねえな。じゃあ『匿名希望』さん。廊下にたってなさい」なのは「じゃあ次の質問行きます。ペンネーム『マケマケ』さんから

「左之助に質問二重の極みは右手だけですか？

斎藤に質問

剣心は新技使ってましたが斎藤は牙突を零式以上にしたりしてないんですか？」だそうです」

銀八「じゃあ左之助と作者答えろ」

左之助「いや、左手や頭でも出来る様になってるぜ。かなり苦労したけどな」

銀八「だそうだ。次、作者」

支配者「スイマセン。まだ思いつきません。ていうかまだ『Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編』に斉藤を出そうかどうか迷っている状態ですし」

斉藤「作者。貴様俺を出さない気か？」

支配者「まあ…多分出すと思いますけど…」

銀時「多分かよ」

剣心「たぶんでござるか…」

支配者「うるさい」

銀八「じゃあ『マケマケ』さんそう言う訳なんで廊下にたってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに！」

第四十四訓　黒幕はとっても悪い奴なのが当たり前（後書き）

支配者「いかがでしたか。なかなか盛り上がる展開でしょう？」

銀時「なんか…かなりやばそうな感じの奴だな…」

支配者「少なく共赤夜叉さんの作ったゾーマより数段強い奴が封印されています」

銀時「ふ～んそうなんだ……ッておい！そんなやべー奴と戦わせる気かテメーは！」

支配者「大丈夫ですよ！……多分」

銀時「多分。って何だぁー！！？」

支配者「では次回もお楽しみに」

銀時「無視すんなぁー！！」

第四十五訓　平和はあまり長く続かない（前書き）

支配者「今回は軽い日常編です」

銀時「最後のほうで緊急出動になっちまうけどな…」

なのは「リリカル剣魂スペシャル始まります」

第四十五訓　平和はあまり長く続かない

時空管理局本局。
ユーノとクロノ、エイミィは通路を歩いていた。

ユーノ「じゃあ僕は闇の書について調査すればいいんだね」
クロノ「ああ、これから会う二人は、その辺に顔がきくから」

そして三人は部屋の中に入った。
部屋には猫の耳と尻尾を持った、二人の女性がいた。

クロノ「リーゼ。久しぶりだ。クロノだ」

クロノが挨拶した直後、

ロッテ「わぁお！クロすけ、お久しぶりぶり～！」

いきなりロッテが、クロノの顔を胸の方に抱き寄せた。

クロノ「ロッテ！離せコラ！このバカ猫！！」
ロッテ「何だとコラ！久しぶりに会った師匠に冷たいじゃんかよ～。うりうりうり～」

クロノが抵抗するが、ロッテから逃げられない。
クロノ「アリア！これを何とかしてくれ！！」
アリアに手を伸ばして、クロノは助けを求めた。
だが、
アリア「久しぶりなんだし、好きにさせてやればいいじゃない。それに、満更でもなさそうだし」
と、あっさり見捨てられた。
クロノ「そんな訳ないだ…」
リーゼ「ニャー！！」
クロノが言いかけた所で、ロッテがクロノを押し倒して何かいろいろやっている。
ユーノは呆然とその様子を見つめて、エイミィはアリアと会話をしながら見ている。
クロノは思った。ロッテはおバカだし、アリアは冷たいし…。何で…何でこんなのが僕の師匠なんだ?誰か助けてくれ。この際誰でもいい。母さん、フェイト、なのは、剣心、銀時ィイイイ！！
クロノは心の中で助けを求めて叫んだ。
その後ロッテに散々弄られたらしく顔中にキスをされまくりキスマークだらけになった。クロノは心の中で泣いていた。
エイミィ「リーゼロッテ、お久し。大丈夫クロノ君?」
クロノ「これが…大丈夫に…見えるのか?（泣）」
エイミィ「あははは……」

クロノが泣いているのを見てエイミィが苦笑いをした。

ロッテ「ふにゃ、エイミィ…お久し～」

ロッテもエイミィに挨拶した。
すると、ロッテは何かを感じ取ったのかユーノを見つめた。

ロッテ「そう言えば…なんか美味しそうなネズミっ子がいたような……どなた？♪」

ロッテはユーノに近付いて、笑顔で尋ねる。
彼からフェレットっていうかネズミの匂いでも感じ取ったのだろうか……

ユーノ「僕はネズミじゃない！！」

ユーノが文中に叫んだあと、ロッテが舌を出しながら近付いてきた。

ユーノ「うっ…（汗）」

ユーノは身の危険を感じたのか、少々後ずさる。
やっと騒ぎが落ち着き、クロノは二人に事情を説明した。

ロッテ「ああ、なるほど闇の書の捜索ね」
アリア「事態は父様から伺ってる。出来る限り力になるよ」

話を聞いた二人は、協力を承諾した。

クロノ「よろしく頼む」

クロノは協力してくれる事に礼を言った。
するとユーノが、隣に座ってるエイミィに小声で話し掛けた。

ユーノ「エイミィさん。この人達って？」
エイミィ「クロノ君の魔法と近接戦闘のお師匠様たち。魔法教育担当のリーゼ・アリアと近接戦闘教育担当のリーゼ・ロッテ。グレアム提督の双子の使い魔。見ての通り、素体は猫だよ」

エイミィが二人を紹介した。ロッテが笑いながらユーノに手を振ると、ユーノは苦笑いしながら手を振り返した。

クロノ「実は、彼の事で頼みがあるんだ」
ロッテ「食っていいの！？」
ユーノ「いっ！？」

クロノが言った瞬間、ロッテは満面の笑顔でユーノを見た。ユーノは怯えている。

クロノ「ああ。作業が終わったら好きにしてくれ」
ユーノ「なっ！？おい！ちょっと待て！！」

クロノの言葉に、ユーノは慌てて立ち上がる。
その姿にみんな笑ってしまった。

アリア「それで頼みって？」

アリアがクロノに尋ねた。

クロノ「彼の無限書庫での調べ物に協力してやって欲しいんだ」

世界の全ての書籍やデータが納められてる超巨大データベース『無限書庫』。
そこでユーノ達は、闇の書の情報を集める事にしたのだ。

翌日。
聖祥小学校。なのはのクラス。
銀時の、それはそれは適当な授業が終わって帰りの時間。教室に、
フェイト、なのは、すずか、アリサがいた。
フェイトの手には、様々な種類の携帯電話が載ってる本があった。

フェイト「な…なんだか、いっぱいあるね」
アリサ「まぁ最近はどれも同じような性能だし、見た目で選んでいいんじゃない？」

とアリサがフェイトにそう言った。

なのは「でも、メール性能がいいヤツがいいよね」
すずか「カメラが綺麗だと、いろいろ楽しいんだよ」

なのはとすずかも、それぞれの意見を言った。

フェイト「ん～」

フェイトは真剣な表情で、どれにするか迷ってる。
そこへ、

剣心「おや？皆の衆」
銀時「何やってんだオメーら？」

銀時と剣心がやってきた。

すずか「あっ、銀八先生と剣八先生！」
なのは「フェイトちゃんの携帯電話をどれにするか、みんなで相談してたんです」
剣心・銀時
『携帯電話？』

なのは達の言葉に、銀時と剣心は片眉を上げた。

アリサ「やっぱり色とデザインが大事でしょう」
すずか「操作性も大事だよ～」

アリサとなのはが意見を言い合う。

銀時「たくっ、ガキのくせに携帯電話なんて持ちやがって」

と銀時が言った。

剣心「まあまあ。良いではござらんか携帯電話くらい」

と剣心が銀時をなだめた。

なのは「銀さ…銀八先生は携帯電話、持ってないんですか？」

なのはが尋ねた。

銀時「電話なら家にあるので充分だろ？って言うかそれ以前に金がねーんだよ」
すずか「でも携帯電話なら音楽とか聞けるし」
アリサ「携帯電話でテレビも見れるしね」

銀時の言葉の後に、なのは達が携帯電話の話で盛り上がる。
銀時は、なのは達の話の内容にイラついた。

銀時「オイ、お前ら」
なのは「え？」

銀時の不機嫌そうな声を聞いて、なのは達は銀時を見た。

銀時「最近の携帯電話は、やれメール機能やら音楽機能やらテレビ機能やらカメラ機能やら付いてるけどよぉ」

銀時は、ドカッと机に座る。

銀時「よく考えてみろ。俺達は携帯電話で何をしたいんだ？テレビが見たいのか？音楽が聞きたいのか？画像が見たいのか？ゲームがしたいのか？ブログが見たいのか？メールがしたいのか？いや違う。俺達は、電話で話がしたいんだよォオオオオ！！」

銀時の叫びが教室に響いた。

剣心（子供相手に何を言っているのだこやつは…）

剣心は銀時に対して頭に手を押さえて呆れていた。
フェイトたちも苦笑いしていた。
だが…なのは・アリサ・すずかと言った良い友達を持ったフェイトは…とても幸せそうに見えた。

フェイトが銀時たちと携帯について論議していた頃
アリアとロッテが、ユーノに無限書庫について説明を行っていた。

アリア「管理局の管理を受けている、世界の書籍やデータが全て収められている、超巨大データベース」
ロッテ「いくつもの歴史が丸ごと詰まった…言うなれば、世界の記憶を収めた場所」
アリア「それがここ…無限書庫」

この無限書庫には、幾多もの次元世界の歴史が書籍やデータとなって収められている。
勿論、なのは達の地球に関しての事も解る。
但し、本来存在しない筈の異世界の地球…即ち、平行世界（銀時達の世界など）に関しては流石に解らないが。

アリア「とは言え、中身の殆ど全てが未整理のまま」
ロッテ「ここでの探し物は大変だよ～？」
アリア「本来なら、チームを組んで年単位で調査する場所なんだしね」

無限書庫は、あまりの広さの為に殆ど整理できず、半ば放置気味になっていたのだ。
本来なら、沢山の人数でチームを組んで、何年もの時間をかけて調査しなければならないのだから。しかしはユーノはこういった。

ユーノ「過去の歴史の調査は、僕らの一族の本業ですから。検索魔法も複数用意してきましたし、大丈夫です」
ロッテ「そっか…君は、スクライアの子だっけね」

アリア「私もロッテも仕事があるし、ずっとって言う訳にはいかないけど…なるべくは手伝うよ」
ロッテ「可愛い愛弟子、クロスケの頼みだしね♪」

ユーノの一族は、遺跡の調査などが本業なので、歴史に関しての作業は得意中の得意である。
同じスクライアの一族であるユーノも、例外ではない。
ユーノを中心に、アリア、ロッテは闇の書に関しての調査を始めるのだった…
しかしロッテとアリアは念話でこんなことを話していた。

ロッテ（クロスケの奴…余計な事を…）
アリア（慌てるなロッテ…これ位の事で父様の計画はバレやしない）
ロッテ（そうね…闇の書について調べるだけだもんね…）

二人は念話でこんな会話をしていた。もちろんユーノに聞こえていない。

帰りにプレシアと一緒に、フェイトの携帯電話を購入して、途中で食材の買物をしてマンションに戻った。

エイミィ「たっだいま～！」

しばらくしてエイミィが帰ってきた。

エイミィ「艦長も本局に出掛けちゃった？」

フェイト「うん。アースラの武装追加が済んだから試験航行だって」

エイミィの問いに、フェイトが答えた。

エイミィ「武装って言うと、アルカンシェルか。ふぅ。あんな物騒な物、最後まで使わずに済めばいいんだけど」

ため息をつきながらエイミィが言った。

なのは「クロノ君もいないですし。戻るまではエイミィさんが指揮代行だそうですよ」

と、なのはが言った。

銀時「え？エイミィが指揮代行？大丈夫なの？」

アルフ「責任ジューダイじゃん！」

銀時とアルフが、からかうように言った。

プレシア「コラ、銀時、アルフ。そんな事言わないの」

剣心「エイミィ殿に失礼でござろう」

プレシアが二人を注意した。

エイミィ「ふっ、まぁそれも物騒といえば物騒かな。まっ、とはいえ早々非常事態なんて起こるわけが…」

エイミィの言葉が言い終わらない内に、警報が鳴り響いた。

ハイ、非常事態発生！

新八が口を開いた。

新八「エイミィさん。非常事態、起きました…」

エイミィ「…マジで…？」

新八の言葉に呆然となってエイミィが呟いた。
とりあえず銀時達は、司令室に向かった。モニターを見ると、シグナムとザフィーラが映っていた。

エイミィ「文化レベル０。人間は住んでない砂漠の世界だね。結界を張れる局員の集合まで最速で四十五分。む～、まずいなぁ……このままじゃ」

険しい顔をするエイミィ。
フェイトとアルフはジッと画面を見つめ、顔を合わせると頷いた。

フェイト「エイミィ。私が行く」
アルフ「あたしもだ」

二人は出動を申し出た。

エイミィ「うん、お願い。」

エイミィは了承した。

エイミィ「念のために、銀さんと剣さんも一緒に行ってくれる？」
銀時「俺達も？しょうがねーな」
剣心「コラコラ文句を言う出ない」

暑そうだな～、とブツブツ文句を言いながら銀時は了承した。
剣心は銀時に注意した。

エイミィ「なのはちゃんや他のみんなはバックス。ここで待機して

て」
なのは「はい」
新八「わかりました」

なのはと新八達は、エイミィの指示に従った。

ブレイド・左之助「俺もい「バキィ！！」ブッ！」

ブレイドと佐之助も何か言いかけたがセト達に問答無用で殴られ気絶した。
そしてプレシアがフェイト達に声をかけた。

プレシア「フェイト、アルフ。気をつけてね」
フェイト「うん。行ってきます」
アルフ「おう！」

プレシアに返事をして、二人は司令室を出た。

プレシア「銀時、剣心」
銀時「ん？」
プレシア「おろ？」

プレシアに呼び止められ、銀時は足を止めた。

プレシア「フェイトとアルフをお願いね」
銀時「おお」
剣心「任せるでござるよ」

手を振ってプレシアに返事をしながら、銀時と剣心も司令室を出た。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから「新八に質問。僕の小説の新八もとうとうアニメオタクになりました。自分的にはどう思いますか？後左之助に質問。僕の小説で新たに活躍させるのですが、是非感想をお願いします！兄貴！！」…だとよ。良かったなぱっつぁん」

新八「良くないワァアアアア！！アニメオタクになんてされて嬉しい訳ないでしょうガァアアアアアア！！！つーか僕はオタクじゃネエェエエエエエ！！！！！！」
神楽「なに言ってるアルかこのアニメオタク」
新八「違うって言ってんでしょうがぁあああああ！！」

銀八「ああもう。うるせーから次左之助感想言え」
左之助「おうよ。期待してるからたっぷり活躍させてくれよな。強敵と喧嘩させてくれたら嬉しいぜ」
銀八「だそうだ。じゃあ「亀鳥虎龍」さん廊下に立ってなさい」

剣心「次の質問でござる。ペンネーム『黒神』さんから質問でござる。
剣心へ
師匠・比古清十郎は出てくると思いますか？
新八へ

なのはは銀時に惚れちゃったから、もう諦めたら？
佐之助と斉藤へ
とにかく新技のレピシを考えてあげましょうか？
返事を待っています。

剣心「いや…「良く分からんでござるよ…師匠は人前に出たがらないし…」
シグナム「私としては剣心の師匠と言う男とならぜひ戦ってみたいな」
ナギ「剣心に勝てないお前があいつに勝てるわけないだろうが…このバトルオタク」
シグナム「なんだと！！」

で二つ目の答え

新八「もうあきらめますよ…どうせなのはちゃんは始めから僕の事なんてどうでも良かったみたいだし…でもあの天パに渡すのもなあ…」
銀時「おいコラあ！！誰が天パだ！！」
新八「お前以外にいるかぁあああああ！！」

そして三つ目の答え

左之助「そうだなあ…考えてくれるんならありがたいな・・・」
斉藤「作者の奴が思いつかんのであれば、それもいいかも知れん…だがこの阿呆よりはマシなのを考えてくれ」
左之助「おいコラ斉藤！誰が阿呆だ！！」
斉藤「お前以外にいるか阿呆」
左之助「てめえー！！ぶっ飛ばしてやるぅー！！」

銀八「あああもう。うるせえなあどいつもこいつも…と言うわけで『黒神』さん廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

神楽「次回もお楽しみにアル！」

第四十五訓　平和はあまり長く続かない（後書き）

支配者「次回はオリジナル要素も含めたバトル編です」

銀時「俺たちはどうなるんだ？」

支配者「では次回もお楽しみに」

銀時「また無視かー！！」

第四十六訓　ピンチの時は助けてあげよう（前書き）

支配者「いよいよ今回で投稿五十部目達成です」

銀時「結構かかったな」

支配者「いいでしょうが、別に」

剣心「何か特別企画とか考えているでござるか？」

支配者「今のところちょっと…」

銀時「ったく、どうしようもねえな」

支配者「うるさい！」

シャナ「リリカル剣玉スペシャル、始まるわよ」

第四十六訓　ピンチの時は助けてあげよう

ここは砂漠の世界。
シグナムはザフィーラと別れ、巨大なワームか蛇か解らんような魔法生物と戦っていた。
巨大な体躯もさながら、砂の中から攻撃して来る為かなり厄介な相手である。

シグナム「はぁっ…はぁっ…はぁっ…ヴィータが、手こずる訳だな…少々、厄介な相手だ…レヴァンティ」
「グオオオオ！！」
シグナム「なっ…！！？」

そう言ってカートリッジを入れようとした瞬間、背後からワームの尻尾と触手が飛び出し、シグナムを捕えた。
レヴァンティンは手動でカートリッジを入れなければならない為、どうしてもそこで隙が出来てしまうのだ。

シグナム「くっ…しまった…！」

ワームが唸り声を上げて、縛り上げて捕えたシグナムを睨む。
そして、触手でシグナムを締め上げる。

シグナム「うっ…うあぁっ！」

ワームの怪物が先端の鋭い尻尾でシグナムを突き刺そうと動き出す。
その時クロスローダーが光った。

シグナム「な…なんだ？」

クロスローダーからグレイドモンとグレイモンが飛び出してきた。

グレ「シグナム殿！」
シグナム「グレ…イド」
グレイド「グレイモン！」
グレイモン「おう！！」

グレイドモンがグレイモンに言う。グレイモンは飛び上がるとワームの首筋に噛み付いた。

ワーム「ギャシャァアアアアア！！」

ワームは悲鳴を上げながらその場に倒れた。シグナムもその隙に脱出した。

シグナム「はあ…はあ…」
グレ「シグナム殿大丈夫か！？」

シグナムに近付いたグレイドモンがそう言った。

シグナム「ああ…大丈夫だ。だが…」

ワームの怪物はグレイモンに首筋をかまれ絶命していた。
これでは蒐集できない。

グレイモン「…すまん。せっかくの蒐集対象を…」

グレイモンはシグナムに謝った。

シグナム「いや、いいんだ気にするな。私の未熟が真似いた私のミスだ。それより新しい対象を探しに行こう」
グレイモン「それなんだが・・・」
グレイド「どうしたグレイモン？」
グレイモン「俺から蒐集するわけにはいかんか？」
グレイモンはこんな事を言い出した。

シグナム「お前からか？」
グレイモン「ああ、せめてもの詫びと思ったんだが…」
シグナム「そういえば…お前たちからは強い力は感じられるな…しかしだからと言って…」
グレイモン「かまわん。蒐集対象を潰した俺の責任だ。かまわずやってくれ」
シグナム「では…ためしに見てみるか…」
そういってシグナムがグレイモンに近付こうしたときだ。

バル『サンダー・ブレイド』
シグナム「なッ！？」
グレイモン・グレイドモン「ぬっ！？」
上から声が聞こえその直後金色の魔力刃が何発もグレイモンに降り注いで突き刺さった。

グレイモン「ぐおっ！？」
グレイドモン「グレイモン！！」
グレイモンはその場に倒れた。
シグナムとグレイドモンが上を見るとそこには金色の魔法陣を展開

しているフェイトがいた。

フェイト「ブレイク！！」

フェイトの言葉と共に魔力刃が爆発した。

グレイモン「ぐおあっ！？」

グレイモンは爆発でダメージを受けた。

シグナム「テスタロッサ…」

シグナムはフェイトを見た。

その頃、ザフィーラは雷が鳴り響いている方を見つめていた。

アルフ「ご主人様が気になるかい？」
ザフィーラ「…お前か」

ザフィーラが振り向いた先には、アルフがいた。
前回と違い、両腕と両足に武装が追加されている。

ザフィーラ「…シグナムは我らの将だが、主ではない…！」
アルフ「アンタの主は、闇の書の主…っていう訳だ！」

そう言って、互いに構えをとる2人。

再び、フェイトとシグナムは空中で静かに対峙していた。

エイミィ『フェイトちゃん！助けてどうすんの！捕まえるんだよ！』

フェイト「あっ、ごめんなさい…つい…」

通信でエイミィに怒られ、謝るフェイト。どうやらフェイトとエイミィはシグナムがグレイモンに襲われているように見えたようだ。

シグナム「…助けられた覚えはないぞテスタロッサ」

シグナムはフェイトを睨みつけながらそう言いシグナムはカートリッジをレヴァンティンに入れる。

フェイト「…お邪魔でしたか？」

シグナム「そういう意味ではない。彼らは私の協力者だ」

シグナムはグレイモンを見ながらそういう。

シグナム「わざわざさっきのやつの代わりにかわりの蒐集対象になってくれようとしていたところを貴様に邪魔された」

シグナムはフェイトを睨みながらそう言う。

フェイト「まあ、悪い人達の邪魔が私の仕事ですし…」

シグナム「そうか…悪人だったな、私は」

そう言って、カートリッジを1発ロードするシグナム。

その時だ。

グレイドモン「今の言葉聞き捨てならんな…」

グレイドモンがシグナムとフェイトの間に割って入った。

シグナム「グレイドモン？」

グレイドモンはフェイトを睨みつけながら口を開く

グレイド「己が主のために騎士の誓いすら破り主のために尽くし続けようとする真なる騎士を貴様は“悪”と呼ぶか…！」

グレイドモンは睨み付けながらフェイトに向かってそう言う。

するとフェイトが

フェイト「あなたは誰なんですか？」

グレイド「私はグレイドモンだ」

フェイト「グレイドモン？」

フェイトは首を傾げる。フェイトは剣心からクロスローダーの事は聞いていたが、デジモンの事は聞いていなかった。剣心は管理局にデジモンの存在を知らせるのは出来る限りに知られないようにした方が良いと思ったらしい。

フェイト「あなたはなぜシグナムと一緒にいるんですか？」

グレイド「わが主の命だ。そこに倒れているグレイモンと同じで闇の書の収集に協力している」

フェイト「あなたの主は闇の書の主なんですか？」

グレイド「違う。我らの主は闇の書とは関係ない」

フェイト「だったら…なんで…」
グレイド「貴様に話す必要はない…！」

グレイドモンはフェイトにそう言う。

フェイト「だったら話を変えます…何故怒っているんですか？あなたたちが悪い事をしているのは事実の筈です」
グレイド「何も知らん小娘がたいそうな口を利くな！！」
フェイト「！！」

フェイトの言葉にグレイドモンが怒鳴る。その声にフェイトは少し後ろへたじろく。

グレイドモン「私も主を守る騎士の身としてシグナム殿達の心の内が少しは分かるつもりだ…彼女達がどれほど苦しい想いで闇の書の蒐集を行っているのかということもな…」

グレイドモンは拳を握りながらこう言う。

フェイト「だったら…あなたたちが闇の書の蒐集を行っている理由を話してください！」
グレイド「管理局の犬に話す事などないわ！！」
フェイト「何か言ってくれなければ分かりません！」
グレイド「言葉だけでは何も伝わらんわ！！」
フェイト「！！」

グレイドモンの今の言葉にフェイトは思い出した。今の言葉は自分がなのはに向けていった言葉……ジュエルシードを巡って戦っていた時に自分が言った言葉だった。
フェイトは思った。私も偉そうなことはいえない。私自身が一番そ

う思っていた。言葉だけでは何も伝わらないという事を…でも…

フェイト「それは…違う！」
グレイド「何が違う…！」
フェイト「言葉にして話さなければ何も伝わらない！！」
グレイド「……うるさい小娘だ…貴様と話しても時間の無駄だ…！！」

グレイドモンはそういって剣を抜こうとする。

グレイドモン「グレイモンを傷つけてくれた仮を変えさせてもらうぞ…！！」

グレイドモンはフェイトを睨み付けながらそう言う。フェイトもバルディッシュを構えた。
その時だ

シグナム「待ってくれ、グレイドモン」

シグナムが剣を抜こうとするグレイドモンを止めた。

グレイド「シグナム殿…何のつもりだ」
シグナム「テスタロッサとは私が戦う、お前は手を出さないでくれ」
グレイド「しかし…」
シグナム「頼む」

シグナムは決意のこもった目でグレイドモンを見た。

グレイド「…わかった……シグナム殿の好きにされよ」
シグナム「すまないな」

グレイドモン「構わぬよ。私はグレイモンを見ているとしよう」
シグナム「ああ」

グレイドモンはそういってシグナムから離れグレイモンの近くに行った。

フェイト「結局あなたとは戦わなければいけないと言うことですか…シグナム」
シグナム「そうなるな」

フェイトとシグナムは地上に降りてそれぞれのデバイスを構えた。

そのころ銀時と剣心は

銀時「あああああああ！！」

叫びながら走っていた。

叫びながら、後ろから迫り来る巨大蛇から全速力で逃げていた。

銀時「おかしい！絶対おかしいィイイ！！何で俺達だけこんな目に遭ってんだ！？何でフェイト達とはぐれてんだ！？なあ剣心！何でこうなってんだよ！？」

銀時は涙目になる。

剣心「拙者に言われても困るでござる！！」

銀時は暑さで汗だくになり、息も荒く、体もバテバテだった。巨大ワームが雄叫びを上げながら迫る。剣心も必死で走っていた。

銀時「フェイトォオオ！アルフゥウウ！シグナムゥウウ！ヘルプミーィイイイ！！」

砂漠に銀時の叫び声が響渡った。

剣心「仕方あるまい…」

剣心は逆刃刀を構える。

剣心「飛天御剣流・・・龍槌閃！！」

そういって剣心は高く飛び上がり気の力を込めた一撃をワームの怪物に浴びせた。

ドガァ！！

「ギャアアアア！！」

攻撃を食らった怪物は悲鳴をあげ砂の中へ逃げていった。

銀時「はあっ…はあっ…ふう～」

銀時は怪物が逃げたところを見て安堵の息を吐いた。

剣心「これでもう大丈夫だろう…さあフェイト殿たちを探すでござ

るぞ」

銀時「ちょっ…ちょっと…待って…少し…休ませ…」

剣心「そんな暇はござらん！！」

そう言って剣心は銀時の服の襟を引っ張って行った。

その頃、エイミィ達の所に再び警報が鳴り響いていた。

エイミィ「あっ…もう1か所！？」

モニターには、1人で空を飛んでいるヴィータが映っていた。
しかも、闇の書を持っていたのだ。

エイミィ「本命はこっち…！なのはちゃん！」
なのは「はい！」

なのはが出撃使用した時

シャナ「待ってなのは、私も行く」
なのは「シャナちゃんも？」
シャナ「私は飛べるからね」
エイミィ「じゃあふたり共頼むよ！！」
なのは「はい！」
シャナ「ええ」

二人は出撃した。

同じ頃、本局ではグレアムとリンディが話をしていた。

グレアム「久しぶりだね、リンディ提督」

リンディ「ええ…ご無沙汰しております」
グレアム「闇の書の事件…進展はどうだい？」
リンディ「なかなか難しいですが、上手くやります」

グレアムからの問いに答えて、紅茶を飲むリンディ。
グレアムは一呼吸置いて、続ける。

グレアム「君は優秀だ。私の時の様な失態はしないと信じているよ」
リンディ「…夫の葬儀の時、申し上げましたが…あれは提督の失態ではありません」

そう言って、カップを置くリンディ。
そして、笑顔を見せてグレアムに答えた。

リンディ「あんな事態を予測できる指揮官なんて、いませんから」
グレアム「……そうかい。君にそう言ってもらえると少し気が楽になるよ…」

グレアムは…表情を変えずにリンディにそう言った。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生!』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『黄色いの何か』さんから新八に質問です。最新の原作で童貞オタク達から『童貞神』と崇められて嬉しいですか?」

新八「嬉しい訳あるかぁアアアアアア!!!誰が童貞神じゃアアアアアアアアアアア!!!それ人をバカにしまくってるってことでしょうがアアアア!!!!」

神楽「うっせーんだよ。童貞神(しんはち)」

新八「おいこらぁ!!今何とかいて新八って呼んだ!!」

銀時「おいおい何言ってんだぱっつぁんよお。たたえられてんだぞ。もっと喜べ」
新八「童貞呼ばれて喜べるわけねーだろ!!」

銀八「と言うわけだ。つー事で『黄色い何か』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「次の質問でござる。ペンネーム『黒神』さんから質問です。
「マヨラーへ
僕の小説の長編シリアス『狂乱編』を見てどう思いますか?真撰組の面影がないほどヅラの出番が多いので。(黒笑)」だそうでござるよ…土方殿」

土方「何で俺たちが活躍しねーでなんで桂なんかを活躍させてんだよ!!しかも魔道師にしてやがるし!!」
銀時「そうだコラァ!俺もあのシリーズは納得できねえぞ!!何だよヅラが主役のシリーズって!!」
桂「ヅラじゃない。桂だ」
土方「うるせえよ!覚悟しとけよ桂!そっち行ったら絶ってーとっ捕まえてやるからな!!」
桂「近藤は俺をこっちでは捕まえんと言っているぞ。俺はこっちでは英雄と言うことになっているからな」
土方「近藤さんが何言おうが関係あるか!!いや…いっその事ここでてめーをぶった斬ってやるー!!」

そう言って土方は刀を抜く。
しかし桂
桂「ふん…んまい棒『棍棒駄呪(コーン・ポタージュ)』!!」

ボウンッ！！

桂はそう言ってんまい棒を投げて逃げた。

土方「ゲホゲホ…くそ待て桂―！！」

銀八「あ～もうきりねえな…つー訳だから『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

セイバー「次回を楽しみに」

第四十六訓　ピンチの時は助けてあげよう（後書き）

支配者「次回はバトルが激しくなります」

銀時「なあ作者。グレイドモンの奴キザすぎねえか？」

支配者「いいじゃん別に、では、次回もお楽しみに」

第四十七訓　騎士も恋をする時があるらしい（前書き）

支配者「今回はとうとうおいしいシーンに入ります。そしてかなりの強敵も登場？」

シャナ「リリカル剣魂スペシャル始まるわよ」

第四十七訓　騎士も恋をする時があるらしい

砂漠で対峙しているフェイトとシグナムは、未だに睨み合っていた。
グレイドモンはグレイモンと離れた場所でその様子を見ている。

シグナム「……出来る事ならば預けた決着は、今しばらく先にしたいが、速度はお前の方が上だ。逃げられないのなら、戦うしかないな」
フェイト「はい。私も、そのつもりで来ました」

そう言って、互いに武器を構える2人。

フェイト「シグナム、1つ聞いていいですか？」
シグナム「？」

武器を構えたまま、フェイトがシグナムに尋ねる。

フェイト「…ヤミは、そちらにいるんですか？」
シグナム「……ああ。ヤミは、我々に協力してくれている」

フェイトの問いに、シグナムは頷く。

シグナム「…お前達の仲間である事も聞いている。それでも…彼女は我等が主の為に協力してくれているのだ」
フェイト「そう…ですか」
シグナム「…私も1つ聞こう。テスタロッサ…お前にとって、ヤミはどのような存在だ？」

シグナムの言葉を聞き、少々沈んだ感じで答えるフェイト。

ふと、シグナムがヤミについてフェイトに尋ねた。

フェイト「ヤミは…私の家族です。…ヤミは剣心と一緒に私を支えてくれましたから…」

シグナムも言葉にフェイトは力強くそう答える。

シグナム「そうか……ならばどうする…力ずくでヤミを取り返しに来るか？」

フェイト「いえ…それがヤミの決めた事なら、無理に取り返すつもりはありません。彼女には彼女の考えがある筈ですから…！」

シグナム「…そうか」

フェイト「もう一つだけ聞いてもいいですか？」

シグナム「何だ？」

フェイト「シグナムは……剣心が好きなんですか？」

シグナム「なっ…！？」

フェイトのあまりに予想外の質問に、シグナムは動揺して顔を赤くした。

これから戦うという時に、フェイトからそんな質問をされるとは思わなかった。

フェイト「答えてください」

シグナムを真っ直ぐに見つめながら、フェイトが言った。

シグナムは、どう答えるべきか迷った。しばらく考えた後、構えを解いて左手を胸に当てた。

シグナム「これが好きというものか、わからんが……剣心の事を考えると…胸が苦しくなる……」

胸に手を当てたまま、シグナムが答えた。

フェイト「それは貴女が、剣心の事が好きという事です」

フェイトが言った。

シグナム「…そうか……これが『好き』というものなのか……初めての感覚だな……」

シグナムはゆっくりと目を閉じた。
この胸の高鳴り。熱くなる体。抑えられない気持ち。
シグナムは目を開いた。

シグナム「これが好きと言う気持ちなのだとしたら……私は剣心が好きだ」

シグナムは、自分の気持ちをハッキリと口にした。

フェイト「私も剣心が好きです」

フェイトもシグナムに、剣心に対する想いを言った。

その頃

薫「ん？」

フェイトのマンションにいる薫が急に顔をしかめた。

お妙「どうしたの薫ちゃん？」

薫「いや……今なんか…すごく不愉快な言葉が聞こえたような……」

薫は本能的にシグナムが剣心を好きになったという事実を感じ取ったようだった。

戻って砂漠の世界
シグナムは、再びレヴァンティンを構える。

シグナム「戦う理由と、負けられない理由が増えたな」
フェイト「はい」

フェイトもバルディッシュを構える。

「はぁあああああ！！」

互いに譲れない想いを胸に、シグナムとフェイトは同時に駆け出した。
同時に武器がぶつかり合い、交差する。
そして、すぐさま体勢を変え、同時に次の攻撃を放つ。
すれ違いざまに、二人は攻撃をした。
シグナムの剣は、フェイトの障壁に阻まれる。
フェイトの攻撃もまた、シグナムの障壁によって阻まれた。
そして、再び互いに地面をけって近付いた瞬間にフェイトが残像を残すようなスピードで動き、シグナムの背後を取る。
そして、バルディッシュを振り下ろす

フェイト「はあああああっ！！」
シグナム「甘い！」
フェイト「なっ！？」

だが、シグナムはレヴァンティンを鞘に収め、それを防ぐ。
そして防いだと同時に足に力を込め、身体を少し後ろの方へとへ捻り、すぐさま鞘から出したレヴァンティンを一閃し、フェイトを弾き飛ばす。
フェイトもその一撃を受け止めようとしたが体の小さいフェイトでは衝撃を流しきれなかった。

フェイト「くあっ！？」
シグナム「まだだ！レヴァンティン！！」
レヴァン『シュランゲ・フォルム』

シグナムはカートリッジを1発ロードし、レヴァンティンを連結刃形態のシュランゲフォルムにする。
連結刃がまるで巨大な大蛇が獲物に飛び掛るようにフェイトに襲い

掛かるが、フェイトはそれをギリギリまで連結刃を引き付け、速度を上げて飛んでかわす。
フェイトは着地と同時にカートリッジを1発ロードし、ハーケンフォームに変形させる。
今まで斧状だったそれは、金色の刃が創り上げられ、鎌へと姿を変える。

フェイト「ハーケン…セイバー！」

フェイトは横に思い切り振りかぶり、バルディッシュを振る。
その鋭い振りから、魔力刃が射出された。
シグナムは連結刃を操作してフェイトを取り囲みハーケンセイバーを防ごうとする。
だが、ハーケンセイバーはそれをも掻い潜って飛んで来た。

シグナム「…はっ！？」
フェイト「はあああああああああっ！」

シグナムはそれを飛んでかわすが、上空からフェイトが襲い掛かり、バルディッシュを振り下ろした。
だが…シグナムは咄嗟にまた鞘を使って攻撃を防いだ。

フェイト「っ…また鞘…！？」
シグナム「くあああああっ！！」

フェイトが驚いた隙を見逃さず、シグナムはフェイトを蹴り飛ばす。
咄嗟に障壁を使ってガードしたフェイトだが、衝撃に耐えきれずに地面に落下していく。

フェイト「クッ…これくらい…バルディッシュ！！」

バル『プラズマ・ランサー』

だが、落下しながらもプラズマランサーを放つ。
それが…シグナムに向かって行き、爆発した。
シグナムがいた位置を中心として煙が立ち込める。
フェイトは空中で一度体勢を整えた後、そのまま地面に着地した。

バル『アサルト・フォーム』

着地すると同時に、通常のアサルトフォームに戻すフェイト。
それと同時に、直撃は免れたらしいシグナムが降りて来た。
彼女も直撃を避ける為にレヴァンティンを使って防御していたのだ。

レヴァン「シュベルト・フォルム」

シグナムもまた、レヴァンティンを長剣形態のシュベルトフォルムに戻す。
2人は互いにカートリッジをロードし、魔法陣を展開する。

フェイト「プラズマ…」
シグナム「飛龍…」

フェイトの掌に雷が集まり、シグナムの剣が再び連結刃になって炎を纏う。
そして、同時に必殺技を放った！

フェイト「スマッシャー！」
シグナム「一閃！」

必殺技同士がぶつかり合い、中心で凄まじい爆発を起こし竜巻のよ

うな風が吹き荒れた。
それとほぼ同時に2人が飛び上がり、それぞれカートリッジを1発ロードする。

シグナム・フェイト「「はあああああああああ！！！」」

そして再び、激しい打ち合いを開始した！

その頃、ザフィーラと戦っているアルフは…

アルフ「なあ…アンタ…」
ザフィーラ「……何だ？」
アルフ「…アンタも使い魔、守護獣ならさぁ…ご主人様の間違いを正そうとしなくて良いのかよ！？」

アルフは、ザフィーラ達のやっている事が許せなかった。
闇の書を完成させる為にリンカーコアを蒐集させるシグナム達ヴォルゲンリッターの犯罪行為。
それは如何考えても間違っている。
間違った道を進んでいる主人を正しき方向へ導く、それが守護獣としてであるザフィーラの架せられた役割なのではないか。
自分にもジュエルシード事件の時にフェイトの為に粗方の間違いを犯してしまった経験はある。だが…不用意に関係のない相手を襲った事はほとんどない。
それに、アルフは全てにおいてフェイトの言いなりに動いていたわけではない。何度かフェイトを止めようとしたこともある。
主の頼みを聞き、そして願いを叶える為にすべてを注ぐのも使い魔なら、そんな主が間違った方向へ歩もうとしているのなら、正しい方向へと導いてあげることもまた使い魔の仕事。
それを先の事件でアルフは今一度しっかりと学んだのである。
主の言いなりに動く事が使い魔の全てではないと言う事を

なのに、どうしてザフィーラ達は魔導師達を襲いリンカーコアを蒐集しているのか。
アルフにはそれが理解できなかった。主に間違いを犯させ続けていていいのかと
だが…ザフィーラの答えはアルフの想像とは全くと言っていいほどに違っていた。

ザフィーラ「……闇の書の蒐集は、我らが意志。…我らが主は、我等の蒐集については何もご存じない！」
アルフ「!?なんだって…そりゃ一体…!?」

ザフィーラの言葉に、驚きを隠せないアルフ。
そう…闇の書を完成させようと思っているのは、あくまで闇の書の守護騎士である自分達の意思。
そこに主であるはやての意思は含まれていないのだ。
すべては主であるはやての為に、呪いで苦しみ、命さえ失いそうになっている主を救う為に守護騎士達が初めて抱いた、はやてを『助けたい』という鋼のように強い意思…それが今のザフィーラ達にはあった。
今までになかった自分達でそう決めた事、自分たちを道具ではなく家族として扱ってくれたはやては自分達にとっては今までの主たちよりもずっと大切な存在となった。
ザフィーラの顔にはどんな事をしてでもはやてを助けたいという強い意思の表れが出ていた。
そのために自分達ははやてとたてた騎士の誓いすらも破った。
そしてザフィーラは握り拳を作るとアルフに向かってこう言った。

ザフィーラ「…貴様には関係のない事だ。だが…主の為であれば己が手や体を血に染まる事も厭わず。我と同じ守護の獣よ、お前もまたそうではないのか……!?」

そう言って、再び構えるザフィーラ。
アルフはザフィーラのその言葉を聞いて一瞬後ろにたじろいた。
主が間違いを起こそうとしているんじゃないとしたら闇の書の完成を望んでいるんじゃないとしたらなぜザフィーラ達はリンカーコアを蒐集しようとしているのか…それがアルフには分からなかった
アルフは戸惑いながらも再び口を開いた。

アルフ「そうだよ…でも、だけどさ！」
ザフィーラ「だけど…なんだ！？」
アルフ「…理由は知らないけど…あんた達の主が命令してるんじゃないとしたら…あんた達がこんな事してるなんて知ったら、その主は悲しむんじゃないのかい！？」
ザフィーラ「！！」

アルフの言葉にザフィーラは一瞬後ろへたじろく。
確かにアルフの言うとおりはやてはそんなことは決して望まないだろう
だが…はやてを救うには例え自分達の行動が間違いであろうと止まるわけには行かない…他に方法はないのだから
ザフィーラはアルフを睨み付け再び口を開いた。

ザフィーラ「……うるさい！黙れ！！」
アルフ「そいつはあんた達にこんな事して欲しいなんて思ってないんじゃないのかい！？」
ザフィーラ「黙れと……言っている！！」

ザフィーラは拳を振るい再びアルフに攻撃を仕掛けてきた。

アルフ「くっ……！」

アルフは障壁でその拳を受け止めた。

また同じ頃、ヴィータが山岳地帯を飛びながらシャマルと念話で話していた。

ヴィータ『シグナム達が…！？』

シグナム『うん…砂漠で交戦してるの。テスタロッサちゃんと、その守護獣の子と…』

シャマルから戦況を聞くヴィータ。
シグナム達がフェイト達位に負けるとは思えないが、万が一という事もある。

ヴィータ『グレイドモン達がいるだろうけど…長引くとまずいな他の仲間が来るかもしれないし…助けに行くか……ん？』

だが、前方に何かを発見し、急ブレーキをかけて止まるヴィータ。

シグナム『ヴィータちゃん？』
ヴィータ『くそぉ…こっちにも来た！しかも…2人いやがる！1人は例の白服…』
ヴィータ「高町なんとか！！」

なのは「なぁ！？なのはだってばぁ！な・の・は！」

崩れ顔で反論するなのは。

名前をヴィータに忘れられたなのはは、必死になって自分の名前を言う。

どーやらまだヴィータはまだなのはの名前を覚えて無いらしい。

シャナ「お前…人の名前とか覚えるの苦手なの？イヴみたいな奴ね…」

ヴィータ「こらぁ！！あんなアダ名野郎とあたしを一緒にすんな！！」

ちなみに、なのはの後ろではシャナがヴィータに対して目を細めて呆れた様子でこんな事を言い、ヴィータも言い返してきた。イヴみたいに物覚えの悪い奴と一緒にされたくなかったのだろうか……。

と言うよりヴィータは人を『赤井』呼ばわりするイヴの事が嫌いだった。

なのは「シャナちゃん、イヴって誰？」

シャナ「（やばっ！）えっ？さ…さあ…誰だった…かな？」

シャナは『しまった！』と思いなのはの前で懸命にごまかそうとした。

なのはは少し疑いの眼差しを向けたが、すぐにそれ止めた。今は関係ないと思ったのだろうか

なのはは気を取り直し、ヴィータに話しかける。

なのは「ヴィータちゃん…やっぱり、お話聞かせてもらう訳にはいかないかな…？もしかしたらだけど、手伝える事とかあるかもしれないよ？」

なのはヴィータに向かって優しい顔を向けてそう言った。
なのはは本気でヴィータの助けになりたいと思っている。
ヴィータは一瞬考えるそぶりをみせたがすぐにその考えを捨てた。
目の前にいるのは管理局の人間そんな奴は信用できない。
それに、自分達に知識をくれ闇の書の詳しい部分を知っているナギ達にも闇の書の修復方法など分からないのに闇の書について禄に知らないなのはの力で闇の書の壊れた部分など修復できる訳がない。

ヴィータ「うるせぇ！管理局員の言う事なんざ信用できるか！」
なのは「私、管理局の人じゃないもの。民間協力者…だから…何か力になれるかも知れないよ…？」
ヴィータ「ぐぅ…」
シャナ（あいつの言う事は否定できない…管理局なんて…はっきり言って信用できない連中ばっかりだし…）

ヴィータは怒鳴るが、なのはは表情を崩さない。
シャナは考え込んでいた。自分も…管理局を信用している訳ではない。と言うより疑いの気持ちのほうが強いだろう。

シャナ（どうする…ヤミから聞いて事情を知ってるからね…かといって今のなのはに教えたら間違いなくクロノやリンディに話すに決まってるし…）

シャナはヴィータを見ながらそう考えた。なのははっきり言って管理局を…クロノやリンディたちを信用している。事実を知ったら間違いなくリンディたちに相談するだろう。それでは最悪ヴィータたちの努力が無意味になる可能性が出てくる。はやてが助からなくなるかもしれない

ヴィータ（闇の書の蒐集は魔導師1人に付き1回・・・つまり、こいつを倒してもページにはなんないんだよな…）

ヴィータはなのはを見て考える。

なのはのリンカーコアは1度蒐集しており、もう蒐集する事は不可能なのだ。

ヴィータ（かといって…ヤミたちの話じゃあいつらの中で魔力を持ってるのはセイバーってやつだけらしいし…あのシャナってやつも魔力はないけど相当強いって言うしな…あたし一人だけじゃ……それに…ヤミの家族を襲うわけにも行かないし…）

ヴィータは戦闘を避ける方向で考える。

なのはからはもうすでに蒐集しているし、シャナには魔力が無いので、蒐集は出来ない。それに……何より蒐集に協力してくれているヤミの家族を襲いたくはない。

ヴィータ（カートリッジの無駄遣いも避けたいし…）

なのは「ヴィータちゃん…」

ヴィータ「…てめえをブッ倒すのは…また今度だ！」

そう言って、ヴィータが魔力の弾を形成し、なのはに向ける。

シャナ「むっ…！（何かするつもりね…）」

それを見たシャナがなのはの前に出て、ガードの体勢を取った。

ヴィータ「吼えろ！グラーフアイゼン！」

アイゼン『アイゼンゲホイル』

グラーフアイゼンで魔力の弾を叩くと、その場で強烈な閃光と爆音が響いた。
どうやら目くらましだったようである。

なのは「きゃぁっ！？」
シャナ「うわっ！？」

なのはは耳を塞ぎ、シャナは目を瞑りながら耳を塞いだ。
その隙に、ヴィータは飛ぶスピードを上げて遠くへと離れた。

レイハ『マスター』
なのは「うん…！」

それを見たレイジングハートがなのはに呼びかける。
なのはは、何をするか決めた様で、それに頷いた。

ヴィータ「よし、ここまで離せば攻撃も来ねえだろ……次元転送……いッ！？」

だが…転移魔法で離脱しようとした瞬間、ヴィータは目を疑った。
なんと、なのはとシャナがそれぞれデバイスと刀を構えていたのだ

なのは「行くよ！久しぶりの長距離砲撃…！」
シャナ「まあ…このさい仕方ないか…この技結構制御難しいんだけど…」

カートリッジを2発ロードして、発射態勢に入る。
シャナも炎のエネルギーを刀に集めた。

ヴィータ「まさか…撃つのか！？あんな遠くから！？（つーかなん

であいつまで撃とうとしてんだよ！？ヤミ達が事情を話してくれてたんじゃねーのか！？）」

ヴィータは見誤った…なのはの砲撃の精度を。そしてなぜかシャナまで攻撃しようとしていたのでヴィータは慌てながらも心の中でこう叫んだ。

なのは「ディバイィィィン…バスタアァァァァ！！！」
シャナ「火龍炎撃破！！」

なのは桜色の閃光をシャナは巨大な火炎竜をヴィータに向けてはなった。

ヴィータ「嘘…！」

ドカアアアン！！

そしてそれが…ヴィータのいる場所で大爆発した。

レイハ『直撃ですね』
なのは「ちょっと…やりすぎたかな？」
シャナ「…かもしれないわね（やっぱり止めておけばよかったかも…）」
レイハ『いいんじゃないでしょうか』

だが、その先には…ヴィータの前に包帯の壁が出来上がっていた。

なのは「ふぇ？なにあれ？」
シャナ「あれは・・・」

するとその包帯の壁が取り除かれ中からメイド服の女性が出てきた。
ヴィルヘルミナである。

ヴィータ「カルメル！」
ヴィル「ヴィータ様お怪我は？」
ヴィータ「大丈夫だ。それよりすげーな…あんな攻撃防いじまうなんて…」

ヴィータはなのはとシャナの攻撃を防ぎきったヴィルヘルミナの包帯の防御力に驚いていた。

シャナ「ヴィルヘルミナの包帯は一枚一枚がダイヤ並みの強度だからね」

シャナはそう言う。

なのは「ふぇ？シャナちゃんあの人の事知ってるの？」
シャナ「えっ？…ま…まあね…」

シャナは苦笑いしながらそう言った。

ヴィル「ヴィータ様はやく行ってください」
ヴィータ「ああワリイ」

なのはは再び砲撃を撃とうとするが…

シュバッ！

なのは「きゃあっ！？」
シャナ「ぬわっ！？」

ヴィルヘルミナの放った包帯に捕まってしまった。
ヴィータはその隙に転移魔法を使ってその場から消えた。

ヴィル「邪魔をしないでほしいであります……それと…そこに隠れているあなたも…」
シャナ「なっ！？アイツは……！！」

ヴィルヘルミナはそういって、なのはたちとは真横のほうを見た。
そこには例の仮面の男がいた。

「貴様……いつから気づいていた…？」

仮面の男はヴィルヘルミナを睨みながら涼しい声でそう言う

ヴィル「…それをあなたに話す必要が？」
「ふん…」

仮面の男はこれ以上は関わっても意味が無いと悟ったのか転移魔法を使ってその場から消えた。

シャナ「ヴィルヘルミナ…そろそろ解いてくれない？この包帯。あいつも行っちゃったし」

シャナはヴィルヘルミナは見ながらそう言う。これ以上は捕まっていても意味が無い。

ヴィル「今ほどくでありま…！？」

ヴィルヘルミナがそう言いかけた瞬間、

ズドォン！！

突如そこに雷が落ちてきた。

ヴィル「ぬっ！？」

ヴィルヘルミナは間一髪でその雷をよけた。それと同時になのはとシャナの包帯が解かれた。

？？？「ほう…今の状態で私の雷撃をかわしますか…」

雷が落ちてきた上空のほうには見た事もない黒フードの人物がいた。声からすると女性のようだ。

シャナ「お前…なに者！？」

？？？「私ですか？これは申し遅れました…私は魔人族四天王筆頭『雷帝』のザンダガと申します。以後お見知りお気を…」

ザンダガと名乗った女性はなのはたちに挨拶した。

シャナ「ジュドの手下…って訳？」

ザンダガ「まあ……そんな所ですね…」

なのは「私たちに何の用ですか？」

ザンダガ「いえなに、大した様ではありませんよ…。ちょっとあなた方に消えていただこうと思いまして……」

シャナ「十分たいした様じゃない…」

シャナは刀を向けながらそう言う。なのは達も構えた。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生!』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『真王』さんから「真王「あからさまに告白したな。『リリカルメンバー以外の皆さんの中で絶対に嫌だってものありますか?』物でも生き物でも人でもいい」アクターレ「俺様もリリカルメンバー以外の全員に質問だ。『もしこれのためならプライドなぞ捨てるって時はどんな時なんだ?』」真王「そして、『願いがかなうなら何がいい?』」はいじゃあお前らそれぞれどうぞ」

銀時「嫌な物ねえ…とりあえずムカつく奴だな、後糖分がきれるのも嫌だな。甘い物ためだったらプライドも捨てられるぜ。夢はかめ○め波をうつことだな」

剣心「人の大事な物を奪ったり、踏みにじったりする者でござるな。護る物の為だったら何でも出来るでござるよ。人を殺めたいとは思わぬが。願いが叶うとしたら皆仲良く生きていくことでござるよ」

新八「僕をぞんざいに扱う人は皆嫌です。後はお通ちゃんとなのはちゃんの為ですね。願いの事は言ったら童貞呼ばわりされると思うので言いたくありません」

神楽「変態やろうが嫌よ。たとえば新八とか新八とか。酢昆布のた

めなら何でも出来るね。願いは酢昆布一年分が欲しいアル」
シャナ「私も変態が嫌ね。たとえば新八とか新八とか、後メロンパンが好きよ。悠二もまあ…好きかな…。願いは世界一おいしいメロンパンを食べる事」
セイバー「私も変態が嫌です。たとえば新八とか新八とか。おいしい食べ物なら皆好きですけどね。プライドは捨てたくありませんけど。願いは世界グルメツアーにいくことです」
ヤミ「私はエッチイのが嫌です。たとえば新八とか新八とか。好きな物はタイヤキです。プライドの事は良く分かりません。願いは特にありません」
新八「おい！それってあからさまに僕が嫌って事か！！」

万事屋の女性メンバーの言葉に新八が青筋を立てて怒鳴る。
んで次、

桂「江戸を乱す天人だな。後高級蕎麦の為ならプライドもくそもない願いは江戸が再び侍の国になる事だ。後、松陽先生にも出来ればもう一度会いたい」
エリザベス『同じく』
お妙「ストーカー。ストーカーが全滅する事」
九兵衛「妙ちゃんを傷つける奴だ。妙ちゃんの為ならプライドなど必要ない。願いは妙ちゃんみたいになることだな」
東条「柳生家や若達の顔に泥を塗ることですね。後カーテンのシャーってする奴が気になりますから願いもそれで」
雛菊「胸なし呼ばわりされるのだけは嫌ね。好きな物は…まあ姉さんとハヤテ君かな…？願いはハヤテ君と…これ以上は言いたくない」
近藤「江戸の平和を乱す奴だな。お妙さんの為なら何でも出来るが。願いはもちろんとお妙さんと一緒になることだ！！」
お妙「そんな願いは絶対叶わねえよ！！」

ドゴォ！！

近藤「アアアアアアアア！！」

そして次

土方「ムカつく野郎だ。後、近藤さんとマヨネーズの為なら何でも出来るぜ。マヨネーズ王国に行く事が俺の願いだ」

斉藤「悪人と阿呆な奴だ。一応プライドを捨てるほどではないが一応近藤さんの為なら捨てるつもりだ。願いはこの世の悪を皆殺しにすることだ」

山崎「えっと…多分無いと…思います。しいて言うなら襲われるのが嫌ですね。後はアンパンが好きですね。やっぱりアンパンをたくさん食べることですね。願いは」

沖田「近藤さんの為ならプライドも捨てられやすがね。嫌いなものは土方さんでさぁ。いつか必ずぶち殺してやるぜ。願いは土方を百回殺すことでさァ」

土方「おいコラ」

んでまた次、

左之助「人をバカにする野郎だな。例えば斉藤とか、まあ喧嘩が好きだし、仲間のためならプライドも捨てられるぜ。願いは相良隊長にもう一度会いたいってとこかな」

薫「剣心を奪おうとする奴。好きなものも剣心だし。夢と剣心のお嫁さん♪」

弥彦「まあ弱いものいじめをする野郎だな。俺も仲間のためならプライドも何もねえぜ。願いは剣心や銀時みたいにすっげー強くなる事だな」

ブレイド「俺様の思い通りにならない奴だ。後は女の子だな。女の

子の為なら俺様は何でもするぜ。俺様の願いは理想のパラダイスを作ることだ」

イヴ「僕の思い通りにならない奴だ。好きな物はカロリーの高いもの。僕がプライドを捨てる事はないがな。願いはまあ…人の名前をちゃんと覚えられる記憶力が欲しいかな」

セト「金が無い事が嫌だな。金の為ならプライドも捨ててやる。願いはもちろん巨万の富だ」

ソルヴァ「私に逆らう奴だぁー！！全てを手に入れたいゾー！！願いは世界征服だー！！」

クルス「山田呼ばわりだけはされたくないです。後は姉さんが好きだしプライドも捨てられると思います。願いは姉さんとずっと幸せに暮らすことですかね」

アルカ「クルスを襲う奴だな。それに原作やアニメの私も嫌いだな。クルスの為なら何でもしてやるぞ。私の願いもクルスと一緒だ」

綾子「護を傷つける奴ね。護の全てが好きだしプライドなんて簡単に捨てられるわ。願いはもちろん護との結婚♪」

護「綾子さんが苦しむのが嫌です。綾子さんの事が大好きですから。僕の願いも綾子さんと一緒です」

銀八「ったく見せ付けやがって」

綾子「うるさい！！」

ドゴォッ！！

銀八「すだこっ！！」

そしてまた次

ララ「特に嫌なものなんてないよ。リトの事は大好きだよ♪まだ出てないけど…願いはリトのお嫁さ～ん♪」

ナナ「エロい奴がいやだ。好きな物は動物だ。願いは一応エロい奴

がこの世から消えることだな」
モモ「弄びがいのない方がいやですね。好きな物は植物ですね。願いはリトさんのハーレムに加わることですわ」
源外「幕府が嫌だな。好きな物はからくりだ。プライドは出来れば捨てたくねえがな。願いはもう一度三郎に会いてえってとこかな」
ナギ「まあ…気に入らない奴は全般嫌だな。特に私の爺。ハヤテの為なら何でも出来るぞ。願いはハヤテと……フフフフ」
ハヤテ「お嬢様をさらったり襲ったりする方ですね。お嬢様のためだったらプライドも捨てられますし、願いはお嬢様と一緒に幸せになりたいって所ですね」
ヴィル「同じく」
マリア「17歳の私を27歳とか37歳とか言う人です。まあ一応若く見られるためなら大抵の事は出来ますわ。願いはずっと若々しくいたいって所でしょうか」
セツナ「キャラ被り呼ばわりされる事よ。好きな物はまあ…未央と梔ね、願いは…理想の相手との結婚かしら」
未央「う～ん…特にないとおもう。でもセツナと梔は大好きだよ。未央の願いはお菓子の城に行くことかな～」
梔『男の娘がいないのが嫌、男の娘の為なら何でも出来る。願いは理想の相手とあんな事やこんな事を…』
悠二「嫌いなものは別にないかな。願いはまあシャナみたいに強くなりたいって所かな」
美琴「喧嘩で負けるのは嫌ね。好きな物はまあ…クレープと友達かな。ゲコ太ストラップの為なら大抵の事は出来るわよ。願いは…今の所ないわ」
黒子「お姉さまに群がる男ですわね。好きなものももちろんのお姉様ですし…お姉様の為だったら全てを捧げても…願いはもちろんお姉さまとあんな事やこんな事を…」
美琴「やめんか！！」

ビリビリビリビリビリビリビリビリ！！

黒子「ヒギャン！！」

んでまた次

凛「宝石が好きよ。嫌いなものはまあ…エッチな奴ね…。プライドはいざと言うとき以外は捨てたくないわね。願いが叶うなら…まあ世界中の宝石が欲しいわね」

イスミ「嫌いなものは特にはありませんけど…友達の為だったら何でも出来ます。願いは友達が幸せになる事です」

箒「嫌いな奴は情けない奴とふざけた態度を取る姉さんだ。願いはいえん」

ラウラ「情けない奴が嫌いだな。好きな物は一夏だ。プライドも捨ててやる。願いはもちろん一夏を私の嫁に…」

箒「コラ！そんなこと認めんぞ！！」

ラウラ「何をする！！」

支配者「とまあ…こんな所です。後ＢＬＡＣＫＣＡＴのメンバーはもう出ないので却下させていただきます。後、好きな物＝プライドを捨てられるものと思ってください』

銀八「と言うわけだから『真王』さん廊下に立ってなさい」

剣心「次の質問でござるペンネーム『亀鳥虎龍』さんから万事屋メンバーに質問です。僕の『万事屋奇譚幕』の感想を良ければ正直に答えて下さい。勿論、面白かったことや心に残ったこととか。」拙者は良い作品だと思ったでござるよ拙者の得意技もちゃんと書かれていたでござるからな」

銀時「俺が主役がじゃねえ所が気にいらねえんだよ。言いたい事はそれだけだ」

新八「僕の事変態みたいに書いてるところが嫌なんですけど…って言うかなんで僕がドーパントに取り付かれてなのはちゃんを襲わないといけないんですか！！」

神楽「何で私がヒロインじゃないね！！そこの所をちゃんと説明するアル！！」

セイバー「私はまだ出ていませんからなんともいえませんね。出してくれたら嬉しいんですけど…」

シャナ「私の出演予定はないんでしょ？だったら興味ないわよ」

ヤミ「別に興味ありませんね。私は出番は全くありませんから」

銀八「って事だ。と言うわけで『亀鳥虎龍』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第四十七訓　騎士も恋をする時があるらしい（後書き）

支配者「次回はいよいよ、残りの四天王も登場し大バトルに移転します」

銀時「かなり厳しい戦いになるって事か？」

支配者「そうなりますね」

剣心「では次回もお楽しみにでござる」

第四十八話　真剣勝負に横入りしちゃいけません（前書き）

支配者「今回は前回の戦いの続き、そして新たな戦いが起こります」

銀時「リリカル剣魂スペシャル始まるぜ」

第四十八話　真剣勝負に横入りしちゃいけません

またまた砂漠の世界
フェイトとシグナムの激闘は続いていた。
フェイトはスピードを活かした攻撃を繰り出し、シグナムは剣と鞘を巧みに操って攻撃を防ぎ、反撃する。
両者は、一旦距離を離して動きを止めた。二人とも息が乱れている。
互いのバリアジャケットもすでにボロボロ。
肩で息をする状態となってしまい、ところどころから血が流れ出ていた。

シグナム（流石に速いな……目で追えない攻撃が出てきた。早めに決めないと……マズイかもしれんな）
フェイト（今はスピードで翻弄してるけど、長くは続かない…誤魔化してるだけだ。まともに喰らったら……叩き潰される！）

両者共に、互いの強さを認識していた。
少しでも油断したら、その瞬間に敗北が決定する。
そして、長期戦にもたれこんでも、体力が追い付いていかない可能性が出てくる。
二人はそれぞれ解いていた構えをとる。
どちらが勝ってもおかしくはない状況。
ここまできたら、そう評価せざるを得なかった。
両者は、次の一撃で勝負を決めようとする。
グレイドモン達は、二人の戦いをただ見守るのみ。

グレイモン「グレイドモン。あの二人……どちらが勝つと思う？」
グレイドモン「分からん。スピードではあの小娘のほうが上だが…パワーや経験ではシグナム殿のほうがずっと上のはずだ…ならば普

通はシグナム殿の勝ちだとは思いたいが…」

グレイモンの質問にグレイドモンはこの戦いを分析しながらそう答える。

彼らがシグナムを応援するのは当たり前だ。

ここまで彼らが知り合ってきたのは、シグナム達ヴォルゲンリッターのみだ。

管理局の者であるフェイトが勝つことを望むはずがない。

グレイモン「そうか…だが万が一にも、シグナムが負けた場合は如何する？」

グレイドモン「その時は…我々の手であの小娘を倒してこの場から撤退するしかあるまい。傷ついた者を襲うのは不本意だが…お嬢様のご命令はシグナム殿達を助けろというものだからな」

グレイモン「そうだな…」

グレイドモンの言葉にグレイモンはそう答えた。自分達としてはそんな卑怯な真似はしたくはないが万が一のときはそれも止むを得ない。管理局に捕まる訳にはいかないのだから

シグナム「やはり強いな、テスタロッサ。それにバルディッシュも」

フェイト「シグナムとレヴァンティンも」

シグナムはレヴァンティンと鞘を構える。

シグナム（闇の書も、剣心への想いも譲れない！）

フェイトもバルディッシュを構える。

フェイト（この人に勝ちたい。だから全力を尽くす！）

二人が攻撃を当てる為、前へと動き出した。
……それで勝敗が決せられる、と誰もが思っていた。
だが、そこで信じられない事態が発生した。

シグナム「！！」
グレイモン「なッ！？」
グレイドモン「なんだあれは！？」

シグナムは目の前で起きた事態を見て、攻撃を止めその場で停止した。
グレイドモン達もその光景に目を疑った。
フェイトの胸から、何者かの腕が突き出しているのだ。
それは以前、シャマルがなのはにした時と同じ。
その手には、フェイトのリンカーコアらしき輝きが握られていた。
そう…ヤツが……仮面の男が現れたのだ。
仮面の男は、背後からフェイトのリンカーコアを取り出した。

フェイト「え……？」

フェイトは呆然となって、自らの体を貫いてる腕を見た。

シグナム「テスタロッサ！！」
フェイト「ぁあ…うぁあああああああっ！！！」
シグナム「貴様！！」
グレイド「一体一の決闘を汚すか！！」

シグナムとグレイドモンが仮面の男に向かって叫ぶ。
だが仮面の男はそんな事、気にも止めない。

「さぁ、奪え」

仮面の男が、フェイトのリンカーコアを差し出す。
仮面の男はシグナムにそう告げた。
そう、フェイトはまだ一度もリンカーコアを蒐集されていない。
つまり、今ここでフェイトのリンカーコアを蒐集すれば、それだけでかなりのページが埋まるはずなのだ。
本来ならばそれがこの世界で普通に進む出来事である。
しかしこの世界ではナギのデジモン達が結界を破壊した為にページは減っていない。
シグナムとグレイドモン、グレイモンは、仮面の男を睨んだ。
確かに、主はやてのためにもリンカーコアは必要だ。だが、こんな形で手に入れる事は誰も望んでいない。

「どうした？早く奪え」

仮面の男が、シグナムにリンカーコアを奪うよう促した時、

「オイ」
「貴様何をしている？」

仮面の男の背後から二つの声が聞こえた。
直後、大きな打撃音と共に仮面の男が吹き飛んだ。

ドゴォッ！！

「がはっ！！」

仮面の男は、十数メートル先まで吹き飛び、砂漠の地面に倒れた。
シグナムは、仮面の男を吹き飛ばした人物を見た。

銀髪の男と赤髪の男が右手に木刀を持ち、赤髪の男の方が左腕でフェイトを抱き抱えていた。
巨大蛇から逃げ切った銀時だった。

グレイドモン「…あれは…」
シグナム「剣心、銀時！！」

名を呼びながら、シグナムは剣心銀時に駆け寄った。

剣心・銀時（ギロ…）

ゾクッ

シグナム・グレイドモン・グレイモン
「うっ…」

その時、シグナム達は一瞬たじろいだ。
剣心と銀時は鋭い眼で仮面の男を睨みながら、静かな怒りを燃やしていた。

剣心「…シグナム殿。それにそこの二匹、フェイト殿を頼む」
シグナム「あ…ああ…」
グレイド「了解した…」

そう言って、剣心はシグナムにフェイトを預けた。グレイドモンも頷く。
銀時は仮面の男に向かって歩き出した。
シグナムは銀時の背中を見つめた。

シグナム（あれほどの怒りを表した剣心は初めて見る…）

砂漠の暑さの中、シグナムは冷汗を流した。

グレイド「“夜叉”が目覚めたか…」

グレイ「…そのようだな」

グレイドモンとグレイモンは意味深な様子でそう呟いた。

仮面の男が、頭を押さえながら起き上がった。

（な…何だ？一体何が起こった！？一瞬意識が吹き飛んだぞ！）

仮面の男は、頭を左右に振った。

立ち上がろうとした時、膝がガクガク震えた。

（ば…馬鹿な！？今の攻撃でもう足にきている！！）

動揺しながら震える足で、何とか立ち上がった。

その時、

銀時「オイ。素顔も晒せねぇ下衆仮面野郎」

銀時のドスの効いた声が聞こえた。

仮面の男は剣心と銀時を見た。その瞬間、剣心と銀時から凄まじい怒気を感じ、仮面の男は思わず震え上がった。

銀時「人の大事なモンに手ェ出したらどうなるか」

剣心「教えてやろうか？」

銀時と剣心の眼は、獲物を狩る獣の眼になっていた。

仮面の男は、やってはいけない事をやり、夜叉の怒りに触れてしまった。
最悪だ。
仮面の男は思った。よりにもよって、この男達と対峙するなんて。
しかもフェイト・テスタロッサに手を出した事で、男の怒りを買ってしまった。
管理局で噂になっている、『ジュエルシード事件』で魔法を使わず、木刀や刀一本で活躍した男達。
『銀髪の侍』坂田銀時。
『十字傷の赤髪の侍』緋村剣心。
銀時と剣心は鋭い眼で仮面の男を射抜き、仮面の男も二人を見つめる。

（……だが所詮は魔法も使えない、ただの人間だ。気の力を持っているといっても魔法に比べればたかが知れている…。今の不意打ちも油断さえしなければ…）

と仮面の男が思った直後、二人が動いた。
砂を蹴って高速移動術『瞬動』で、一気に仮面の男との距離を詰める。

「速…！！」

仮面の男が驚く間もなく、銀時と剣心は木刀を横薙ぎに振る。
仮面の男は障壁を張る。
だが障壁は、木刀と逆刃刀の一撃で粉々に砕け散った。

「ば…馬鹿な！？障壁を一撃で砕いた！！信じられない！！」

仮面で顔は見えないが、明らかに動揺している。

動揺しながらも、仮面の男は後ろに下がって、二人から離れようとする。たが二人は仮面の男を逃がさない。素早く動いて、仮面の男との開いた距離を詰める。

銀時「うぉおおお!!」
剣心「はぁあああ!!」

雄叫びを上げながら、再び木刀と逆刃刀を振るう。
今度は一撃ではなく、連撃を繰り出す。仮面の男は障壁と両腕で辛うじて防御する。

（な…なんてスピードとパワーだ!!バインドを仕掛ける暇も無い!!本当に人間か!?しかも剣筋が読めない!なんて無茶苦茶な攻撃だ!!）

まさに防戦一方。
仮面の男は剣心と銀時の猛攻を受けて、反撃する事が出来ない。
銀時と剣心は、容赦のない猛攻を続ける。

「まずい!」

仮面の男は思わず目を瞑った。
その時だ

バキィン!!
ガシッ!!

剣心・銀時
「なっ!?」

突然二人の黒フードが目の前に現れ剣心と銀時の攻撃を止めた。

???「ふん…情けない奴だ。これくらいでやられおって…」

???「そう言うなドラドス。人間とは思えんほどの凄まじい攻撃だぞ。今のは」

銀時「何だ…てめぇらは…!?」

お互いの武器がギシギシと唸る。銀時はにらみながら二人の黒フードの男に尋ねる。

すると二人の男は黒フードを取った。

???「お初にお目にかかる。私は魔人族四天王が一人『剛剣』のジハードと言う」

???「わが名は『竜皇』のドラドス！四天王一の怪力にして、完全無欠の狩人よ！！」

二人の男。巨大な大剣を持った銀狼の怪人ジハードがそう言い、ドラドスと名乗った竜の怪人が猛々しくそう言った。

銀時「魔人族…？って事ぁ…」

剣心「貴様ら…ジュドの手の物か！？」

ジハード「そう言う事だ」

剣心と銀時が睨みながらそう言い、ジハードが答える。

バキィン！！

剣撃が当たりあい四人が後ろへと下がる。

するとドラドスが仮面の男の方を向いて

ドラドス「お前はさっさと消えろ…邪魔だ雑魚が」
「なんだと!?」

と言った。
仮面の男は思わず怒鳴るが

ジハード「お主の手におえる相手か……？」
「うっ……わっ…分かった」

ジハードの言葉に仮面の男は了解し転移魔法を使ってその場から消えた。自分の力では銀時達にはどうやっても勝てないと言う事が分かっていた為おとなしく従ったのだ。

グレイモン「何だ貴様ら!!」

グレイモンが二人に対して怒鳴った。
すると

ドラドス「やかましいぞ虫けら!!」

ドカァアアアアアンンンン!!

グレイモン「グワアアアアア!!」
グレイド「グレイモン!!」

ドラドスが闘気弾を放ちグレイモンをふっ飛ばした。
グレイモンはダメージを受けすぎてクロスローダーに戻った。

シグナム「グレイモンを…一撃で…」
グレイドモン「貴様ら…!よくも…!」

シグナムとグレイドモンは武器を構える。

ドラドス「ふん・・・面倒だ。デジモンや守護騎士どもの相手はこいつ等にしてもらうとしよう…」

ドラドスはそう言うとモバイルのようなものを取り出した。

ドラドス「リロード！ＴＧヴェスパモン！フライモンズ！デビドラモンズ！」

ドラドスがそう叫ぶとモバイルが光りその中から蜂のような姿をした大柄の戦士と巨大な蜂の怪物達といかにも悪魔の獣と言った感じの怪物達が大量に現れた。

剣心「なっ！？あれはまさかデジモン！？」

銀時「おいてめえ！何でてめえらがデジモンを連れていやがんだ！！？」

剣心と銀時はドラドスがデジモンを呼び出した事に驚きそう叫んだ。

ドラドス「ククク…さあ？なぜだろうな？」

銀時「話す気は無しってか…」

剣心「そのようだな…」

一方シグナム達の方は

シグナム「グレイドモン！奴らもデジモンなのか！？」
グレイド「ああ…間違いない…あれはデジモンだ。だが…なぜ奴らがデジモンを連れているんだ！？」

シグナムとグレイドモンも驚いていた。それもその筈デジモンはこの次元には存在しない筈の生命体。それをなぜドラドスが呼び出せたのかグレイドモンには全く想像できなかった。

ジハード「ＴＧヴェスパモン。お前はあの騎士型デジモンを片付けろ。フライモンズはあの騎士を、デビドラモンズは上空で戦っているものたちを始末しろ」
ＴＧ「了解した。ジュド様のご命令だからな」
フライモンズ「シャアアアアア！！」

デビドラモンズ「ギャオオオオオ！！」

ジハードの命令にＴＧヴェスパモンは頷き、フライモン達とデビドラモン達は久々の獲物に歓喜の雄たけびを上げた。

銀時「ふざけんじゃねえ！！」
剣心「そうは行かぬ！！」

銀時と剣心はデジモンたちを止めようとするが

ガキィン！！

ジハード「おおっと」
ドラドス「お前達の相手は我々だ！」
銀時「チイッ！」
剣心「クッ！」

ジハードとドラドスが剣心達を止めた。
二人は思わず顔を顰めた。

そしてシグナム達

グレイド「シグナム殿来たぞ！！」
シグナム「分かっている！！」

シグナムにフライモンの大群が襲い掛かってきた。

フライモンズ「シャアアアアア！！」
シグナム「クッ！」

シグナムはレヴァンティンを使ってフライモン達の攻撃を受け止めた。

グレイド「シグナム殿！」

グレイドモンがシグナムを助けに行こうとするが

ＴＧ「貴様の相手は私だ！」
グレ「ヌウッ！」

ＴＧヴェスパモンが現れグレイドモンに攻撃を仕掛けてきた。
グレイドモンも剣で攻撃を受け止めた。

その頃上空のアルフとザフィーラは

アルフ「はあっ…はあっ…」
ザフィーラ「はあっ…はあっ…」

二人の激闘はあの後もずっと続いていた。
息も絶え絶え、お互い消耗しきっている。

アルフ「はあっ…あんたも…はあっ…相当しぶといね…」
ザフィーラ「はあっ…そう言う…貴様もな…はあっ…」

その時だ！

「ギャオオオオオオ！！」
アルフ・ザフィーラ「！！」

突然うなり声とともにデビドラモン達が現れ二人を取り囲んだ。

アルフ「なっなんだい、こいつら！？」
ザフィーラ「どちらかの味方……ではなさそうだな…」
アルフ「勝負は一時中断かね…？」
ザフィーラ「そのようだ…」

二人は背中を合わせお互いに構えた。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『マケマケ』さんから質問

剣心と斎藤が互角ということは斎藤は準最強？
支配者「まあ…そうかもしれません。実際、斉藤はメチャクチャ強いですから…」
斉藤「いずれ奴とは決着をつける」
剣心「拙者はそんなつもりはないのだが…」

銀八「はい、とりあえず二人の実力は互角という事です。というわけで『マケマケ』さん廊下に立ってなさい」

なのは「次の質問です。ペンネーム『黒神』さんから「質問します。剣心へ

僕の小説のキーパーソンとも言える7つのデバイス『七星神刀(しちせいしんとう)』に興味を持っていますか？

佐之助へ

もしよければ追加として『斬馬刀』を使ったオリジナル技レピシも考えましょうか？

返事を待ってます。

薫へ

調子に乗ると、ゴリラ女と呼ばれちゃいますよ？

暴走は控えめに」だそうです」

銀八「はい。それではそれぞれ答えをどうぞ」

一つ目

剣心「拙者は人殺める為の武器は持ちたくはござらん。まあ…非殺傷設定というものがちゃんと働いているというのならば少々興味は持つかも知れぬが…まあ、拙者にはこの『逆刃刀(さかばとう)・真打(しんうち)』があれば十分でござるよ」

んで二つ目

左之助「まあ…考えてくれるってんならありがてえが…俺の本当の武器はこの拳だからな。出来れば斬馬刀じゃなくてこっち方面の技を考えてくれる方がありがてえぜ」

斉藤「貴様如きが新しい技なんぞ持ったところで宝の持ち腐れだ阿

呆」
左之助「あんだとコラァ！！」
銀時「…お前らって会うたび喧嘩してねえか？」

そして三つ目

薫「そんな事いった奴はこの薙刀でズタボロにするわ」
銀時「いや！そんな事言ってるからゴリラ女とか言われんだろうが！！」
薫「あ？今…なんて言った？」

ジャキン！

薫が銀時に向かって薙刀を向けてきた。

銀時「あ……」

銀時の顔が一気に青ざめる。

薫「銀時ィ？今なんて言ったの？」
銀時「あ…いや…その…」

薙刀を向けて笑って近づいてくる薫に銀時は後ろへと後ずさる。

薫「覚悟は…出来てるわね…？」
銀時「たっ、頼む。頼むから落ち着いてくれ！３００円上げるから！」
薫「いるかあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
銀時「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

！」

銀時は薫にズタボロにされた。

銀八「……『黒神』さん…。薫を怒らせる質問はできるだけ控えて下さい」

剣心「では、今回はここまででござる」

支配者「では次回もお楽しみに」

第四十八話　真剣勝負に横入りしちゃいけません（後書き）

支配者「次回で砂漠の戦いは決着を迎えます」

銀時「あいつらだいぶ手強そうだな」

支配者「まあ、そうですね。かなり手強くしてありますから」

剣心「フェイト殿は大丈夫なんでござるか？」

支配者「多分大丈夫ですよ。では次回もお楽しみに」

剣心「いい加減でござるな…」

第四十九訓　怪物同士のバトルはかなり見ものだ（前書き）

支配者「今回は砂漠での死闘の完結です」

銀時「リリカル剣魂スペシャル始まるぜ」

第四十九訓　怪物同士のバトルはかなり見ものだ

ここは砂漠の世界

ＴＧ「…貴様がジュド様が言っていたデジモンか…」

グレ「貴様何故我等を狙う！？」

グレイドモンはＴＧヴェスパモンの攻撃を受けながらそう言う。

ＴＧ「貴様らにいられては我等の少々計画が狂うのでな…ここで消えてもらおう！！」

グレイドモン「グウッ！」

ＴＧヴェスパモンは凄まじいスピードでグレイドモンに襲い掛かってくる。

――ガギィン！

お互いに武器を打ち合う音が響く。

TGヴェスパモンがグレイドモンに斬りかかったのだ。

TG「はあっ！」

グレ「グウウッ！」

ガギンッ！キィン！キィン！ギギギンッ！

次から次へとラッシュを加えるTGヴェスパモン。

グレイドモンも何とか防いでいるが防戦一方であった。

TGヴェスパモンの方がグレイドモンよりもスピードが上なのだ。

それにレベルから言ってもTGヴェスパモンの方がグレイドモンよりもランクが高い。グレイドモンの明らかだった。

TG「ほう…なかなかやるな…これだけの攻撃を防いでいるとは…」

グレ「そう簡単にやられはせん！！」

TG「そうか…だが！」

グレ「ぐおっ！」

ガギィンッ！

グレイドモンはTGヴェスパモンの攻撃を受け止めた。しかし、攻撃の重さゆえか、何歩か後ずさってしまう。

TG「まだまだっ！これくらいでは終わらんぞ！！」

――ズガンッ！！バキィッ！！ズバッ！！

グレ「ぐうううう！」

何とかTGヴェスパモンの連撃を受け止めているグレイドモン。

しかし、一撃一撃がとても重く、受け止める度に顔を歪めている。
しかも、スピードが恐ろしく速く、反応するだけで精一杯だった・
これでは反撃どころでは無い。

一方ジハードやドラドスと戦っている銀時と剣心は

剣心「グレイドモン殿！！」
銀時「アイツなんてスピードだ！」

剣心と銀時はグレイドモンが押されているのを見ていた。だが

ジハード「デジモン如きの心配をしている暇がお前達にあるのか？」
ドラドス「そのとおりだ。我等との戦いに集中しろ！！」

――ズガキィン！！

剣心「クッ！！」
銀時「がっ！！」

ジハードが大剣が剣心にドラドスの大爪が銀時にせまってこうげきしてくる。

剣心（この者…強い…）
銀時「あの狼野朗やワニ野朗なんかとは比べ物になんねえ…」

剣心と銀時はジハードとドラドスに対してこう呟いた。

ジハード「ふん当たり前だ。あの出来損ないのゴミどもと魔人族四天王である私達を一緒にするな！！」
ドラドス「そうだ！我等と奴らとでは次元そのものが違うのだ！！」

そういってジハードとドラドスは二人に攻撃してくる、しかもその攻撃はかなりのスピードとパワーであった。

ガキィン！ガァン！ゴォン！ギギギンッ！スガンッ！

剣心「グウウ！」

銀時「チイッ！！」

銀時と剣心は何とかジハードとドラドスの攻撃を受け流していた。しかし受け流しているだけではなく二人もジハードやドラドスになんとか反撃を加えていた。

ジハード「さすがにやるな…ならばこれならばどうだ？」

ジハードはそう言って大剣を真上に掲げた。

剣心（何をするつもりだ…？）

剣心と銀時は警戒しながら刀を構える。

ジハード「ぬううん！！」

ジハードが大剣に力を込めると周りに数十本もの剣が現れた。

剣心「なっ！？」

銀時「なんだありゃあ！？」

突然の出来事に剣心も銀時も驚きを隠せなかった。

ジハード「消えろ…『ソルディック・ハーデス』！！」

ジハードがそう叫ぶとジハードの周りに浮かんでいた数十本の剣が剣心と銀時に襲い掛かってきた。

剣心「ぬっ！」

銀時「うおあっ！」

銀時と剣心は襲いかかって剣の嵐を持ち前の身体能力で何とかかわしていた。

だが、

ズバッ！

剣心「ぐあっ！」

ズバババッ！

銀時「ぐっ！」

完全には交わしきれず、体に所々切り傷がついた。

ジハード「ほう…この技を初見でほとんど交わすとは…」

ドラドス「たいした人間共だな…」

ジハードとドラドスは剣心と銀時の身体能力の高さに驚いていた。

あれだけの剣の嵐をほとんど交わしきったのだからそれは驚く。

ジハード「フッ…だが…」

ジハードは不気味な笑みを見せた。それと同時に空中に浮かんでいる剣たちが再び剣心達に襲い掛かった。

剣心「なっ！？」
銀時「また来やがった！」
ジハード「ククク…私の『ソルディック・ハーデス』は私の意志によって自由に操作が可能…相手を完膚なきまでに切り刻むまでこの剣の嵐がやむ事はない…」

ジハードはにやけた顔を見せながらそう説明する。

銀時「んだと！それじゃあ…」
ジハード「そうだ…貴様らが死ぬまでこの剣の嵐は止まん！！」

ジハードはそう言って勝利を確信した表情を見せる。

ドラドス「ふん…俺の出番はなしか…」
ジハード「すまんなドラドス」
ドラドス「別に構わんさ」

ジハードとドラドスは剣心たちをみながら余裕の表情でそんな事を話していた。

ズガンッ！バキィン！ガキィン！ズバキィン！

剣心「くっ…何という攻撃だ…」
銀時「このままじゃ…ヤベえな…」

剣心と銀時はそう呟いた。剣は次から次へと襲い掛かってくる。何とか刀と木刀を振って受けきっているが、このままではまずい。

剣心「銀時！」
銀時「おう！」

二人は上空に木刀と逆刃刀を振りかざすと力を込めて思いっきり振り下ろした。

剣心「ヌアァァァァァァ！！」
銀時「てぇえええやあぁぁぁぁぁぁ！！」

ズドォーン！！

そのとき凄まじい衝撃波が起こり空中に浮かんでいた数十本の剣を吹き飛ばした。

ジハード「なっ！？」
ドラドス「なんだとっ！？」

ジハードとドラドスは思わず声を荒げた。
剣心と銀時によって吹き飛ばされた数十本の剣は砂の上に落ちた。

ジハード「私の『ソルディック・ハーデス』を…」
ドラドス「驚いたな…」
銀時「形勢逆転…って奴か？」
ドラドス「調子に乗るな！！」

ズガンッ！

銀時「ぐッ！」
剣心「ぬうっ！」

ドラドスとジハードが再び二人に向かって襲い掛かってきた。

そしてシグナムは

シグナム「剣心！銀時！」
フライモン「シャアア！！」
シグナム「邪魔だあ！！」
フライモン「ギャッ！！」

シグナムはドラドスが放ったフライモンの大群と戦っていた。

フライモン「デットリースイング！！」
シグナム「クッ！」

フライモンが針を飛ばして攻撃してくる。シグナムはレヴァンティンをふってそれをかわす。

シグナム「レヴァンティン！」
レヴァン『シュランゲ・フォルム』

シグナムガカートリッジをロードし、レヴァンティンを『シュランゲフォルム』へと替えた。

シグナム「飛龍…一閃!!」

ズバアアアアアアアア!!

フライモン「ギャアアアア!!」

シグナムは剣心と銀時の様子を見ながらも次々とフライモン達を倒していっていた。だが状況的にはかなりこちらが不利であった。

シグナム「このままでは…」

その時だ。

???「俺を出せシグナムとやら」

シグナム「!!誰だ!?」

ザフィーラ「どこにいる!?」

急に聞き覚えのない声が聞こえシグナムとザフィーラは驚いた。

???「俺ならここだ」

その声はナギから借りていたクロスローダーから聞こえた。

???「状況が悪いな…あのＴＧヴェスパモンは相当レベルの高いデジモンだ。グレイドモンもかなり強いが相手があれではな…その上グレイモンをああも簡単に倒したジハードやドラドスとか言うの

もいる。こうなれば俺達のうちの誰かが出るしかない。今回は俺が出る」

シグナム「お前は？」

？？？「主が言っていただろう。『とっておきの奴が４匹いる』とな。俺はその内の一匹だ」

シグナム「お前がそうなのか？」

？？？「そうだ早く出せ。このままではお前達も危ないぞ」

シグナム「分かった。リロード！！」

シグナムはそのデジモンを呼び出した。

その頃ザフィーラとアルフは

デビドラモン「ギャオオ！！」
アルフ「おらぁああ！！」
ザフィーラ「はぁあああ！！」
デビドラモン「ギャッ！！」

アルフとザフィーラも大量に現れたデビドラモンの軍団を相手に戦っていた。

デビドラ「クリムゾンネイル！！」
アルフ「クッ！」

デビドラモンの攻撃をアルフは障壁で防ぐ。

アルフ「ったく！何なんだいこいつらは！？あんたの仲間じゃないのかい！？」
ザフィーラ「こんな奴らは知らん！！」
デビドラモン「ギャオオオ！！」

アルフとザフィーラが話している間もデビドラモン達は襲ってくる。

アルフ「このぉ！！」
ザフィーラ「調子に乗るな！！」

その頃なのは達は

ズドォン！ズドォン！

シャナ「クッ！」
なのは「キャア！」
ヴィル「ヌウッ！」
ザンダガ「どうしました？交わしてばかりないで少しは反撃してきてください」
シャナ（クッ！好き勝手な事言って！！）

なのはたちは突如として現れた魔人族四天王筆頭『雷帝』のザンダガの放つ嵐のような雷撃攻撃をよけ続けていた。

シャナ「はあっ！！」

シャナは負けじと火炎弾を放つが

ザンダガ「ふん…」

ズバァ！！

ザンダガは雷撃を放ち攻撃を相殺した。

ヴィル「フッ！」

なのは「アクセルシューター！！」
ザンダガ「遅いですね」

シュン！シュン！

ヴィルヘルミナやなのはの攻撃もザンダガは軽くかわしてしまう。

シャナ「はあ…はあ…」
なのは「あの人…ものすごく強い…」

なのははこう言った。目の前で戦っているザンダガの強さは半端ではない。なのはのディバインバスター並みの攻撃力がある雷撃波を平然と連発してくる上にこちらは隙をついてやっと攻撃していると言うのに全然当たらない。

ザンダガ「思ったより他愛のない方たちですね…そこのか弱い魔導師はともかくとして…ゲドラを倒したと言うあなたまでその程度とは……そろそろ終わりにしましょうか……」

ザンダガは溜息を吐きながらそういって拳を握り締める。

シャナ（何か…来る！）
なのは「レイジングハート！！」
レイハ『プロテクション』
ヴィル「……」

シャナとヴィルヘルミナは防御体制をとりなのははプロテクションを張った。

ザンダガ「防御などこの技の前では無意味ですよ…」

シャナ「なっ！？」
なのは「なにこれ！？」
ヴィル「これは・・・！？」

シャナ達は下を見ると蜘蛛の巣のような陣が展開されていた。

ザンダガ「さようなら……『雷魔束縛陣』！！」

ズバアアアッ！！

ザンダガが展開させた蜘蛛の巣のような陣から雷撃が発生し、なのは達を襲った。

なのは「キャアアアア！！」
シャナ「ヌァァァァァァァ！！」
ヴィル「グアアアアアア！！」
シャナ「クッ…こんな…も…ぬあっ！？」

シャナたちは『雷魔束縛陣』から抜け出そうとするがまるで蜘蛛の巣に絡めとられたかのように動く事が出来ない。

ザンダガ「はあ…なんと歯ごたえの無い……本当にもう終わりのようですね」

ザンダガはつまらなさそうに溜息を吐いた。
その時である。

シュン！！

ザンダガ「ぬっ！？」

誰かがザンダガに攻撃を仕掛けてきた。

ヤミ「そこのあなた…何をしているんですか？」

ザンダガに攻撃を仕掛けた来たのはヤミであった。
そしてザンダガが動いた事によって雷魔束縛陣の拘束も解けた。

シャナ「ヤミ！」
ヤミ「大丈夫ですか？」
ヴィル「ええ…まあ…私達は、でもこの魔道師の少女が…」

ヴィルヘルミナが包帯をとっさに伸ばしてなのはを受け止めていた。
なのははさっきのザンダガの技で気絶していたのだ。

ザンダガ「フッフッフ…弱いからそうなるのですよ…」
シャナ「何！？」
ヴィル「貴様…！」

ザンダガのなのはをバカにした言葉にシャナとヴィルヘルミナがザンダガを睨み付けた。ヤミも無言で睨み付けている。

ザンダガ「おやおや…怖い怖い。さすがに本気になった『炎髪灼眼の打ち手』、『万条の仕手』『金色の闇』を私一人でお相手するのは少々きついですかね…」

シャナ・ヴィル・ヤミ
『なっ！？』

ザンダガの言葉に3人は驚いた。

シャナ「お前！どうして私達の昔の異名を！？」
ザンダガ「フフフ…私達には私達の特別な情報網がありましてね…まあ…その事に関してはあなた達にお話しすることはありませんので…今日のところはこの辺で、さようなら」
シュン！
そう言ってザンダガはその場から消えてしまった。
シャナ「待て！…クッ！」

グレイドモンとＴＧヴェスパモンの戦闘は続いていた。
武器を撃ち合い、激突し、そこら中の砂漠の中にあった岩壁などが砕け、崩れる。
なにせ、グレイドモンもＴＧヴェスパモンもスピードが武器と言えるデジモン。
その高速戦闘は凄まじい物だった。
その頃モニターを通して銀時達の闘いの様子を見ていたエイミィ達

は激しく驚いていた。

エイミィ「なッ…なんなのこれ…」

クロノ「なんて…でたらめな戦いをしているんだ…」

エイミィ達は映っている戦闘のあまりの激しさにただ驚いていた。

ちなみにブレイドやセト達はただ黙ってその様子を見ていた。

グレ「うおおおおおおっ！」

ＴＧ「ふん…その程度か！」

グレイドモンが双剣『クロスブレード』を放つ。

しかし、ＴＧヴェスパモンはそれを何の苦も無く避けてしまう。

不意を突いたつもりだったが、相手の反応力が半端では無かったのだ。

やはりスピードはＴＧヴェスパモンの方がずっと上だった。

ＴＧ「隙あり！」

ズドンッ！

グレ「がああっ！！」

TGヴェスパモンの一撃をまともに喰らってバランスを崩すグレイドモン。
相手は攻撃力も半端ではない。

グレ「くッ…まさかこれ程とは…」
TG「ふん…もう終わりか？まだこちらは必殺技を出していないんだぞ」

TGヴェスパモンは余裕の表情でグレイドモンを見つめた。

グレ「このままでは…」

グレイドモンはどうすればこの状況を打破できるか考えていた。しかしどう考えても自分ひとりの力ではどうしようもない。

TG「まあ…俺を相手にここまで戦っただけでもたいした者だ。褒美に俺の必殺技で止めをさしてやろう。『ローヤルマイスター』！！」

そう言ってTGヴェスパモンは必殺の攻撃の一つをグレイドモンに放った。

グレイドモン剣を使って防御体制をとろうとしたが間に合わない

グレイドモン（ここまでか…）

グレイドモンがこう思った時

？？？「情けないなグレイドモン」

グレ「エッ！？」

グレイドモンの目の前に竜の鎧武者のような者が現れグレイドモンを守った。

ＴＧ「なッなんだ！？貴様は！？」

ＴＧヴェスパモンは突然現れた乱入者に対してそういった。

「俺か？俺はガイオウモンだ」

鎧武者はＴＧヴェスパモンに対してそう答えた。

グレ「ガイオウモン様！」

ガイ「グレイドモン貴様は下がっていろ」

グレ「はっ」

ガイオウモンはグレイドモンにそう言い、グレイドモンは下がった。

ＴＧ「ガイオウモンだと？ええい誰だろうと俺に勝てるものか！！食らえ！『ロイヤルマイスター』！！」

そう言ってＴＧヴェスパモンは再び攻撃を放つ。

しかしすべての攻撃をガイオウモンは一掃してしまった。

ＴＧ「なっ！？」

ガイ「何だ…貴様の力はこんなものか？」

ガイオウモンはＴＧヴェスパモンに対してそう言い放った。

TG「なッ…何故だ…何故私の攻撃が通じんのだ…!?」
ガイ「知らん。貴様が弱いだけじゃないのか?それにお前はどうか知らんが、俺はお前より強い奴をいくらでも知っているぞ」
TG「ほっ…ほざけー!!」

ガイオウモンの言葉に怒ったのかTGヴェスパモンはガイオウモンに拳を振るった。

ガイ「やれやれ…困った小僧だ」

ガイオウモンはそういうと刀を抜いて技を放った。

ガイ「燐火斬!!」
TG「ぐあああっ!」

ガイオウモンの攻撃を受けたTGヴェスパモンは吹き飛ばされた。

シグナム「つっ…強い。グレイドモンがかなわなったデジモンをああも簡単に・・・」

シグナムはガイオウモンの強さに驚いていた。無理もない。あれほどの力を見せていたTGヴェスパモンを圧倒していたのだからあのクラスの実力者が放つ砲撃ならば、あの時の並みの管理局員達の結界など、ガラス細工みたいな物だろう。シグナムはそう思っていた。

シグナム「…測り知れん…な」

シグナムは自然とそんな言葉が出してしまった。

TG「おのれえ…こんな…はずでは…」

TGヴェスパモンはボロボロの体を引きずって起き上がってきた。

ガイ「まだ…やる気か？」

TG「調子に乗るなぁああ！！これで終わりにしてやる！！食らえ

『マッハスティンガーV』！！」

TGヴェスパモンが、最速の一撃を繰り出した。
最強の必殺技、『マッハスティンガーV』である。

シグナム「今までよりも速い・・・！！」

シグナムがそのスピードに驚く。
だが…

「ふん…」

――バキィッ！

TG「な、何ぃっ！？（ドゴッ！）ぐはっ！」

ガイオウモンはパンチ一発でTGヴェスパモンを吹き飛ばした。

ガイ「これで終わりにしよう『ガイアリアクター』！！」

ガイオウモンは凄まじいエネルギー波をTGヴェスパモンに放った。

TG「ぐあああああ！！ジュド様に栄光あれー！！」

TGヴェスパモンはそういって大爆発した。

シグナム「やったのか…」
グレイドモン「…そのようだな」

シグナム達もその光景を見ていた。

グレ（さすがはガイオウモン様…ナギさまの切り札の一つであるだけのことはあるな）

グレイドモンもそんな事を思っていた。

その光景はもちろん戦っていた剣心達にも見えていた。

ジハード「まさか・・・TGヴェスパモンがやられるとはな・・・」

ドラドス「デビドラモン達も全滅したようだ。今日のところは引き上げるとしよう」

そういってジハードとドラドスは引き上げていった。

剣心「まてっ！！く…」

銀時「…行っちまったな」

銀時と剣心は消えたジハードとドラドスのことを見てそういった。

そして銀時と剣心はシグナム達の前まで来た。

シグナムは、ジッと剣心を見つめた。

私は剣心の事が好きだ。テスタロッサのお陰で、ようやく自分の気持ちがハッキリとわかった。

シグナムは拳を強く握った。
だが、その想いは伝えられない。私と剣心は敵同士。その関係が余計に胸を苦しめる。こんな形で出会わなければ、自分の想いを剣心に伝えられたかもしれない。
そう思いながら、シグナムは一瞬辛い表情をした。ザフィーラはそんなシグナムを黙って見つめていた。

シグナム「では剣心と銀時。私達はもう戻る。いつまでも此処にいたら管理局の連中が来てしまうからからな」

シグナムは、いつもの表情に戻って剣心と銀時に言った。

銀時「ああ」
剣心「分ったでござる」

銀時と剣心は短く返事をした。
銀時と剣心の返事を聞いた後、シグナムはグレイドモン達を回収して去っていった。砂漠には銀時と剣心と気絶しているフェイトだけが残った。

「そういや…剣心」
「ん？」

残された銀時は呟いた。

銀時「俺らはどうやって帰るの？」
剣心「あ…」

剣心と銀時はしばらくの間呆然とした。
しばらくしてアルフがやってきて、帰ることができた。ザフィーラ

はいつの間にかいなくなってしまったらしい。後でクロノとエイミィに、何でチャンスだったのにシグナム達を逃がしたのかと怒られたが、剣心と銀時はそれを可憐にスルーした。ちなみにシャナもヤミとヴィルヘルミナを逃がした事をいろいろといわれたがやはりスルーするのであった。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生!』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから質問だ。「剣心、銀時、左之助、シグナムに質問。僕の小説の主人公及びヒロインで、戦い相手は?上条当麻、奴良リクオ、鑢七花、神裂火織」はいではそれぞれ答えをどうぞ」

剣心「拙者は別に好き好んで戦いたいとは思わぬが…まあしいて言うならリクオ殿でござるな・・・女子である神裂殿と戦うわけにはいかぬし・・・あの中で刀を使うのはリクオ殿だけでござるからな・・・」

神裂「何ですか?私が女という理由だけで戦わないと?それは私をバカにしているんですか?」

剣心「そう言う意味ではないでござる！」

次、銀時

銀時「決まってんだろ…当麻の野郎だ…不幸バカの分際で俺から主役の座を奪いやがって…」

銀時は当麻に主役の座を奪われ、全く活躍できないのが相当気に入らないようだ。当麻に対してかなり殺気の篭ったその言葉を贈った。

当麻「おい銀さん！誰が不幸バカだよ！」

銀時「うるせえぇぇぇぇぇ！！テメェのせいで俺が全く活躍できねーんだよ！どうしてくれんだ！！え！！！？」

当麻「そんなの俺のせいじゃないだろ！文句なら作者に言え！！」

銀時「うっせーえんだよ！テメェさえいなくなりゃあ……俺が主役だぁアアアアア！！」

当麻「ギャアアアアアアア！！不幸だァァァァァァァァ！！」

銀時は当麻に対して八つ当たりに木刀を振り回しながら追いかけ当麻はいつもの決め台詞をはきながら逃げ出した。

次、左之助

左之助「同じ、拳と拳で万全にやり合えるって言ったら・・・やっぱ七花だよな。当麻じゃ役不足だし、リクオは普段は情けねえし、神裂は女だしな、やっぱ七花だろ」

次、シグナム

シグナム「七花とはもう戦ったからな…。同じ女剣士として神裂と

はぜひ戦ってみたい。いざと言うときに力を発揮できる心強さを持つリクオともぜひ戦ってみたいな。それにこの小説の上条も相当強いようだこれはなんとしても戦ってみたい」
ヴィータ「結局強けりゃ誰とでも戦いたいんだろ？シグナムは…」
シグナム「何か言ったか？ヴィータ」
ヴィータ「別に…はぁ…」

ヴィータはシグナムの戦闘好きに少々頭を悩まされているようだ。

銀八「はいこんなわけですから『亀鳥虎龍』さん廊下に立ってなさい」

フェイト「次の質問です。ペンネーム『黄色い何か』さんから「銀時に質問。原作で銀時はラブチョリスと言うゲームをやってピン子に『もちろんピン子の事は愛している』って言って更にラブホテルに行こうとしていました、これは明らかになのはに対する浮気ととらえてもよろしいですよね？」
銀時「そんな訳ねえだろぉぉぉぉぉぉ！！つーかなのはとは付き合ってすらいねーのに何で浮気者扱いされんきゃいけねーんだァァァァァァ！！つーかホントはピン子なんか愛してねーんだよ！！話の流れで仕方なく言っただけだ！！仕方なく！！」

ピン子「人をおもちゃにしたのかいこの人は…よよよよよよよ」

銀時「泣くなァァァァァァ！！」
神楽「最低アルナ」
シャナ「女の敵ね」
セイバー「こんな人がこの小説での私のマスターだなんて見損ないました」
ヤミ「新八並にえっちいですね。今の銀時は」

銀時「お前らアァァァァァァァ！！そんな目で俺を見んじゃねエエエエエエエエ！！」

銀八「はい。と言うわけで銀時最低の女たらしですね。と言うわけだから『黄色い何か』さん。廊下にしばらく立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに！」

第四十九訓　怪物同士のバトルはかなり見ものだ（後書き）

支配者「次回からはしばらく日常編が続きます」

剣心「次の戦闘はいつでござるか？」

支配者「まあ・・・最終決戦の前に一つくらいれるかも知れませんけど…今のところ未定です」

銀時「パッとしねえなあ。おい」

支配者「うるさいな。とりあえず次回もお楽しみに」

第五十訓　真の黒幕は本当に怖い（前書き）

支配者「今回で記念すべき五十話達成です」

銀時「おお。やっとここまで来たな」

支配者「これからも応援よろしくお願いします。そして今回で恐るべき裏の黒幕が現れます」

剣心「では、リリカル剣魂スペシャル始まるでござるぞ」

第五十訓　真の黒幕は本当に怖い

明け方の八神家

ナギ「しかし…ホント何なんだろうな?その魔人族とか言うのは」

ヤミ達やシグナム達が集まって話し合っていた。話題はもちろんジュド達の事である。

ヴィル「奴らの目的は全く分からないのであります。一体なぜ闇の書の完成を望んでいるのかも…」

シグナム「完成した闇の書を、利用しようとしているのかも知れんが……」

ヴィータ「ありえねえ!だって、完成した闇の書を奪ったって、マスター以外には使えないじゃん!」

ナギ「…だよなあ。万が一にも闇の書を制御できるとしたら…はやてだけの筈だ」

そう、完成した闇の書は…マスターであるはやてにしか使えない代物である。

仮面の男達の目的はナギが教えてくれたから分かっている。

しかし…、何故魔人族が闇の書を完成させようとするのかが解らなかった。

桂「やはり…闇の書には何か裏があるのではないか?」

ヤミ「……」

ヤミは桂の言葉を聞いて考え始めた。

ヤミ（私があの時聞いた鼓動音と声…やはり気になりますね…ひょっとしたら…それが奴らの狙いなのでは…）

ヤミはそう考える。完成した闇の書には利用価値は無い。グレアム達の目的は闇の書の完全封印だが、ジュド達のような存在がそんなことのために闇の書を狙ったり、完成させたりするとは思えない。何かしらの方法で闇の書の力を手に入れようとするはずだ。だとしたら残る可能性はヤミが聞いたあの鼓動音と声のみだ。

シャマル「うん……家の周りには、厳重なセキュリティを張ってあるし……万が一にも、はやてちゃんに危害が及ぶ事も無いと思うけど……」

シグナム「それに……もしセキュリティを突破されたとて、主はやての傍には常に桂達が付いているしな」

桂「うむ。それについては心配ない。今もエリザベスが八神殿を見ている」

ハヤテ「はい！僕らが必ず護りますから！」

シグナム「…すまないな……お前達には本当に迷惑をかける」

ナギ「なにを言っている。みんな好きでやっているんだ。誰も迷惑などと思っておらん」

ナギがシグナム達にそう言う。

シグナム「ああ…本当にありがとう」

シグナムがそう言ったときだ

――ガチャン！

『あああーーー！！』
シャマル「は、はやてちゃん！！」

2階から、ガチャンと何かが倒れる音と叫び声がした。
ヤミ達と守護騎士達が駆け付けると……そこには胸を押さえて苦しんでいるはやてと、その傍で混乱気味のエリザベスがいた。

エリザベス『あわわわわわわ……』

エリザベスは如何したら良いのかとプラカードを出しながらオロオロしている。
そしたら皆が大慌てで2階に上がってきた。

ヴィータ「はやて！？」
シグナム「はやてちゃん！？」
はやて「うっ……ううううっ」

ヴィータとシャマルが呼びかけるが、はやては苦しんだまま動かない。

ヴィータ「はやて！はやて！」
ヤミ「はやて！」
雪路「何！？どうしたの！？」
イヴ「おい！大丈夫か！？」
桂「八神殿しっかりしろ！！」
梔・エリザベス
『お気を確かに！！』
ナギ「シグナム！病院に連絡だ！早く救急車を！！」
シグナム「解った！」
ハヤテ「動かしてはダメです！そっとしておかないと！」

ナギがシグナムに救急車を呼ぶ様に指示を出す。

ナギ（まずいな……そろそろ限界が近づいてきたか…）

ナギが唇をかみ締めながら心の中でそう呟く。

そして、動かさずに救急車の到着を待つのだった……

もはや、一刻の猶予も許されない状況に突入してしまった。

会議室。
銀時やリンディ、クロノ、なのは達が集まっている。その中には、グレアム提督の使い魔のロッテもいた。
エイミィ「銀さん達が出動してからしばらくして、管制システムがクラッキングであらかたダウンしちゃってね。映像だけは映せたん

だけど…指揮や連絡が取れなくて……ごめんね。私の責任だ」

エイミィが皆に謝った。

ロッテ「んなことないよ。エイミィがすぐシステムを復帰させたから、アースラに連絡が取れたんだし、仮面の男の映像だって残せた」

ロッテがエイミィを励ましながら、仮面の男の映像を出した。

リンディ「でもおかしいわね。向こうの機材は管理局で使っている物と同じシステムなのに、それを外部からクラッキングできる人間なんているものなのかしら」

エイミィ「そうなんですよ。防壁も警報も全部素通りで、いきなりシステムをダウンさせるなんて……ユニットの組み替えはしてるけど…もっと強力なブロックを考えなきゃ」

リンディの疑問にエイミィも意見を言った。

なのは「それだけ凄い技術者がいるって事ですか？」

なのはが尋ねた。

二人の話の内容は、なのはには複雑だったが、大変な事だという事はわかった。

一方、銀時と剣心はイラついていた。

これだけの人数がいて何故誰も『内部犯行』を思いつかないのか。

フェイトが被害に遭った事で、銀時と剣心は少し熱くなっていた。

仮面の男の正体を二人は知っていた。本来なら今すぐにでもその正体であるロッテとアリアに飛び掛りたいと思っていたのだが、何の証拠もないためそれが出来なかった。アニメを見て知っていたなんていってもそんな事は証拠にならない。それにはやての為にも未来

を変える行為は出来るだけ控えて欲しいと桂を通じてナギからも言われていた。余計な事は言わないつもりだったが、我慢できなかった。

銀時「あのよォ」

剣心「お主達。もう少し広い視野で物事を考えてはどうだ?」

銀時と剣心が頬杖をつき腕を組みながら口を開いた。

皆の視線が二人に集まる。

銀時「内部犯行だって誰も思いつかねえの?」

かなりイラついた声で銀時がそう言った。

クロノ「内部犯行だって!?」

クロノが驚きの声を上げた。

他の皆も驚いている。

ちなみに一瞬だけだったがロッテが軽く険しい顔をした。それを剣心は見逃していなかった。軽く横目をそらしてロッテを見ていたからだ。

銀時「管理局内部の人間なら、システムのクラッキングも楽にできんじゃねーの?」

剣心「銀時の言うとおりだ。管理システムとやらにそれほど容易く入り込めると言う事は、犯人はそのシステムを熟知しきっている者である管理局員の可能性が高い」

リンディ「そんな…管理局の人間が……」

銀時と剣心の意見に、リンディは驚きを隠せなかった。

他の皆も信じられないと言った顔をしている。どうやら本当に誰も、内部犯行を考えていなかったようだ。

銀時（本当に全く考えてなかったのかよ…）
剣心（呆れて物も言えんでござるな…）

その事に銀時と剣心は心の中で呆れた。

リンディ「…だけど…どうして管理局の人間が、捜査の邪魔をして闇の書の完成の手助けを？」
なのは「そうですよ銀さん。何で管理局の人がそんな事を…」

リンディとなのはが銀時に尋ねた。

銀時「さぁな」
剣心「そこまでは拙者達にも分からぬ」

ため息をつきながら、銀時と剣心は答えた。本当は知っていたが黙っていた。正直な話し外部犯の反抗だと思いきっていたリンディ達では何の当てにもならないと思っていたからだ。

ロッテ（あいつら…まさか…）
アリア（慌てるなロッテ。まだ何の証拠もない）
ロッテ（だけど…）
アリア（大丈夫だ。下手な事をすれば逆に怪しまれるぞ）
ロッテ（う…うん…）

一方犯人であるアリアとロッテは念話で話し合っていた。しかし二人は気づいていなかった。横目をそらして自分達を見ている剣心と銀時の二人に

そして海鳴大学病院

石田「うん、痛みは惹いたみたいもう大丈夫ね、良かったわぁ」
はやて「はい、ありがとうございます」
桂「うむ。安心したぞ八神殿」
ヤミ「本当に良かったです」
ナギ「全くヒヤヒヤさせおって」

桂達が石田先生の言葉に安堵する。
すっかり意識を取り戻したはやてが、石田先生と話していた。
傍らには…シグナム、シャマル、ヴィータ、ヤミ達がいる。
ちなみに、雪路と梔とエリザベスとザフィーラは八神家で留守番中である。

シャマル「はぁ…ホッとしました…」
ハヤテ「はい…」
はやて「せやから、ちょぉ目まいがして胸と手が攣っただけやって言うたやん。もう、皆して大事にするんやから」

ナギ「いやいや、アレ見たら誰だって焦るだろ…」
ヤミ「何かあったら大変ですから…」
桂「そうだぞ八神殿。病人たる者いついかなるときも体は大切にせねばならん」

一安心するシャマルと、苦笑しながら言うはやて。
だが、ヤミとシグナム達も心配そうに言う。

石田「まぁ、来てもらったついでに、ちょっと検査とかしたいから…もう少しゆっくりしていってね」
はやて「はい…」

石田先生の言葉に、苦笑しながら答えるはやて。

石田「さて…シグナムさん、シャマルさん、ちょっと…」
シャマル「はい？」
シグナム「なにか？」

石田先生に呼ばれ、病室を出るシグナムとシャマル。

石田「今回の検査では何の反応も出て無いですが…攣っただけ、と言う事はまず無いと思います」
シグナム「はい…かなりの痛がり様でしたから……」
石田「マヒが体全体に広がり始めているのかもしれません…今まで、こういう兆候は無かったんですよね？」
シャマル「……だと…思うんですけど……はやてちゃん、痛いのとか辛いのとか隠しちゃいますから…」

どうやら、遂に闇の書の浸食がヤバい所まで進んでいるらしい。
はやての体の麻痺が広がって来ていたのだ。

石田「発作がまた起きないとは限りません…用心の為にも、はやてちゃんには少し入院してもらった方が良いですね。大丈夫でしょうか？」
シグナム「はい…」

石田先生から入院を勧められ、頷くシグナム。
このまま病院にいた方が、少しは安全だと判断したのだろう。
それに、入院していれば対処はすぐにできる。

はやて「入院？」
シャマル「ええ…そうなんです。あぁ、でも検査とか念の為とかですから……心配無いですよ。ね？シグナム」
シグナム「はい」

はやてを安心させる為、理由を言って宥めるシャマル。
シグナムも花瓶を置いて、シャマルの言葉に同意する。

はやて「いや、それはええねんけど…あたしが入院しとったら、皆のご飯は誰が作るんや？」
ヴィータ「うっ…」

はやての言葉に、ヴィータが思わず言葉を詰まらせる。

ナギ「それだったら心配ない。こいつが作るから」

ナギがハヤテを指差してそう言った。

ハヤテ「はい。料理のレパートリーならほとんど熟知していますから何の問題もありません」

ハヤテが自信満々にそう言う。ハヤテの料理のうではプロ級だ。そんじょそこらの店の料理よりよっぽどうまい。

はやて「そっかぁ…じゃあ、綾崎さん…お願いするな?」

ハヤテ「はい。お任せください!!」

そうはやてに自信満々に言うハヤテ

桂「うむ。では綾崎殿早速だが蕎麦を…」

そう桂が言いかけた時

ドゴォ!!

桂「グハッ!」

イヴが後ろから硬化した腕で殴って桂を気絶させた。

イヴ「空気読めボケ!」

そう言ってイヴが桂を病室から連れ出した。

そして話を戻す。

ヴィータ「毎日会いにくるよ!だから、大丈夫…」

はやて「ヴィータは良え子やなぁ…せやけど、毎日やのうてもええよ?やる事無いし、ヴィータ退屈やん」

ヴィータ「ううう…でも…」

はやて「ええんよ…そこまで気ぃつかわんでも…」

ヴィータは、毎日会いに行く、とはやてに言う。
はやてはヴィータの頭を撫でながら、ヴィータに配慮して毎日は遠慮した。

はやて「ほんなら私は、3食昼寝付きの休暇をのんびり過ごすわ♪」
ヤミ「それが良いですよ。ゆっくりと体を休めてくださいね。はやて」
はやて「うん。ありがとうなヤミちゃん」

ヤミが易しくはやての頭を撫でながらそう言う。
はやてもヤミにお礼を言った。

はやて「あ、アカン！すずかちゃんがメールくれたりするかも…」
シャマル「ああ、それだったら私が連絡しておきますよ」
はやて「うん、お願いや…」

ヤミに慰められて立ち直ったシャマルがはやてに言う。

シグナム「では、戻って着替えと本を持ってきます。ヤミ、主はやての傍に付いててくれ」
ヤミ「はい」

シグナム、シャマル、ヴィータ、そしてナギ達は一旦家に戻る事にした。
家にはエリザベス達もいるがなにを持って来たらイイかおそらく分からないだろうと言う事で戻ってとってくる事にしたのだ。
はやての着替えや本を持って来る為である。
ヤミがはやての側に付いている事になった。いざと言う時の用心の為である。

はやて「なあ…ヤミちゃん」
ヤミ「どうしたんですか？」
はやて「うち…どうなってしまうんやろ…まさか……このまま死んでしまうんやろか…」

はやては皆の前では笑顔で振舞ってはいたが、内心は怖がっていた。
するとヤミがはやてに近づいて頭を撫でながらこう言った。

ヤミ「大丈夫です。私やナギ達やシグナム達がついていますから。だから…きっと大丈夫ですよ…これからも…ずっと皆と一緒にいられますよ…」
はやて「うん…ありがとうな…ヤミちゃん」

ヤミの言葉にははやては少しだけ安心して笑顔を見せた。

その頃、剣心、銀時、クロノ、エイミィ、ロッテは司令室にいた。
これからユーノが、闇の書について報告をするのだ。

ユーノ「まず、『闇の書』っていうのは本来の名前じゃない。古い資料によれば正式名称は『夜天の魔導書』。本来の目的は、各地の偉大な魔導師の技術を蒐集して研究するために作られた、主と共に旅する魔導書」

ユーノが報告をする。
銀時達は、黙ってモニターを見つめながら報告を聞いてる。と言ってもナギから聞いているのでほとんど知っているのだが

ユーノ「破壊の力を振るうようになったのは、歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したからだと思う」
アリア「ロストロギアを使って、無闇矢鱈に莫大な力を得ようとする人が今も昔もいるってことね」

アリアが呆れた口調で言った。

クロノ「転生と無限再生はその改変が原因か」

クロノが意味深な顔をしてそう呟いた。

ユーノ「一番酷いのは、持ち主に対する性質の変化。一定期間蒐集がないと持ち主自身の魔力や資質を侵食し始めるし、完成したら持ち主の魔力を際限なく使わせる。無差別破壊のために。だから、これまでの主はみんな完成してすぐに……」
クロノ「ああ。停止や封印方法についての資料は？」

クロノがユーノに尋ねる。

ユーノ「それは今調べてる……ただ……」
クロノ「ただ？どうした？」

ユーノの様子に、クロノは首を傾げた。

ユーノ「闇の書を調べている内に、気になる文を見つけたんだ」

銀時「気になる文？何だよ？」

今度が銀時が尋ねた。

ユーノ「一冊の本に書いてあったんだ。『闇の書は、魔導師の技術の研究のために作られた物ではない』って」

クロノ「なっ！？だったらさっき言っていた事と違うじゃないか！」

ユーノの言葉に、クロノは思わず声を大きくする。

ユーノ「うん。だから僕もおかしいなって思ったんだ。気になって少し調べてみたんだけど、他には何も記されてなかった」

エイミィ「何かの間違いじゃないのかな？」

エイミィがそう言った。何かの間違いであるならそれに越したことはないが

クロノ「だがもし……それが本当だとしたら…闇の書って一体何なんだ？」

とクロノが言った。

銀時と剣心は表情を険しくした。

銀時（…どうやら、俺達が思ってる以上に厄介な事になりそうだな……）

剣心（…やはり…闇の書には何か裏があるということか…）

銀時と剣心は闇の書が予想以上に危険なものである事は理解していた。しかし事態は二人が知っている以上にとんでもない方向へと向

かっていることに二人はまだ気づいていなかった。

その頃海鳴市大学病院の屋上

？「フフフ…面白くなって来た…いよいよクライマックスね…」

謎の人物がはやて達の様子を監視していた。その顔はローブで隠されていて全く見えない
するとそこに黒コートの人物が新たに現れた。

？「姫様」
？「ん？ああザンダガ、なんか用？」

そこに現れたのは四天王のザンダガだった。ザンダガは目の前にいる人物を“姫”と呼んだ。

ザンダガ「姫様。どうやら例の連中が闇の書の謎に感づきつつあるようです」
？「ふ～ん…そうなんだ…ピピ～」
ザンダガ「ふ～ん…って姫様。もう少し真面目にお聞きください…」

ザンダガの言葉に姫と呼ばれた人物は銀時達にの事に大して興味もなさそうに口笛を吹いた。

？「別にばれたっていいじゃない……あいつらあのお譲ちゃんを助ける事しか頭にないみたいだし…“あいつ”の事がばれたって何の

問題もないんじゃない？」
ザンダガ「しかし…万が一にも奴らが闇の書の蒐集をやめるようなことになったら計画が全て台無しに」
？「そうなったらそうなったでかまやしないわよ。いざと言うときはあたしが動くから…それに…どっちにしたって闇の書は完成するわ。そうすればあのグレアムとか言うバカ爺も用なしよ」
ザンダガ「では……ジュド様にはなんと…？」
？「適当に言っとけば？もうすぐあいつの役目も終わるんだし、あいつがある程度納得するように報告しときゃいいのよ」
ザンダガ「本当に…それで宜しいのですか？」
？「それで“パパ”も納得してくれるわ。いいからあんたは言われたとおりにしなさい。分かった？ザンダガ」
ザンダガ「はい…。すべては“あのお方”の為に」

そう言ってザンダガは消えた。

？（ふふふ…精々私の掌で踊って頂戴…おばかさん達♪…うふふふふ）

“姫”と呼ばれた人物もその場から消えた。

姫と呼ばれたものの正体とは一体？そして裏に潜む“あのお方”とは一体何者なのか？
そして闇の書に眠る恐るべき存在の正体は！？
次回に続く！

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『マケマケ』さんから質問だ。
斎藤と桂に質問
蕎麦好きな二人が蕎麦に求めるものはズバリ？」と言うわけだ。答えてくれ」

斉藤「蕎麦に求めるものか…。急に言われてもな」
桂「まあ…しいて言うなら素朴さとおいしさであろうな…」
支配者「だ、そうです」
銀八「てな訳だ。と言うわけで『マケマケ』さん廊下に立ってなさい」

剣心「次の質問でござる。ペンネーム『匿名希望』さんから「質問大方、予想はつきますが万事屋で働いてる皆さん、ズバリお給料はもらったことありますか？」

新八「ここ2，3ヶ月ろくに給料なんかもらってませんよ…」
銀時「仕方ねーだろうが！！バカみたいに食うやつら2人もいんのに給料なんか出せるカァアアアアアア！！日々の生活を送るだけで精一杯なんだよ！！」
神楽「情けねーアルナ（モグモグ）死ぬ気で働いて（モグモグ）給

料出せよ」
セイバー「全くですね（モグモグ）皆の為に（モグモグ）ちゃんと働いて（モグモグ）下さい」
銀時・新八『って！言ってるそばからくってんじゃねーよ！！』

いつの間にかまた万事屋の食料を食いまくっている神楽とセイバーの二人に銀時と新八は思わず突っ込んだ。

シャナ「全くもう…こんなんだから、ろくにメロンパンを買えないのよね」
ヤミ「まあ…時々剣心からお小遣いもらって好きなもの買ってますけどね…」
剣心「ははは…」
支配者「とまあこういう具合に実は万事屋のみんなの給料は少しではあるがこっそりと剣心が皆にあげたりしています。まあさすがに毎回とはいきませんが…」
銀八「だそうだ。と言うわけだから『匿名希望』さん。廊下に立ってなさい」

なのは「次の質問です。ペンネーム『黒神』さんから『質問します。

弥彦へ
剣心は誰と付き合ったほうが幸せだと思いますか？
正直に答えてください。

斉藤へ
そば好きの貴方でも、そば入りの『シャマル鍋』を食べられる自身はありますか？

支配者さんへ

もし四乃森蒼紫、志々雄真実、雪代縁、鵜堂刃衛も出てくるのであれば、彼等のオリジナル必殺技も考え良いでしょうか、返事を待っています」はいそれではお答えどうぞ」

弥彦「やっぱ・・・剣心のこと真剣に考えて支えてくれる女と結婚したほうがいいと思うぜ。薫みたいなブスゴリラ女と結婚したら剣心の人生はお終いだな」

弥彦がこんな事を言うもんだから

薫「弥彦ぉ～。誰がブスゴリラ女ですって?」

薫がどす黒いオーラを放って出てきた。

弥彦「ゲエッ!!薫…」
薫「いい度胸してるじゃない…あんな事言うなんて…」
弥彦「うっせえ!お前がブスなのは本当じゃねえか!!」
薫「何ですってバカ弥彦ー!!」

次、斉藤

斉藤「誰が食うか。あんな犬の餌にもならんような物。次に言ったら斬り殺すぞ」
黒神「そこまで言いますか…」
斉藤「当たり前だ。あんな物即刻どぶ川に捨てるべきだ」
シャマル「ひっ…酷い…酷過ぎる…（泣）」

斉藤の余りに酷い毒舌にシャマルは涙を流した。

んで私の答え

支配者「いつもいつもありがとうございます。すでに『黒神』さんにはお返事をして強力な技をいくつか考えてくださっています。本当に感謝の仕様もございません」

銀八「はい。と言うわけで『黒神』さん。いつもいつもありがとうございます」

なのは「では今回はここまでです」

ナギ「次回も楽しみにな」

第五十訓　真の黒幕は本当に怖い（後書き）

支配者「今回は謎めいた人物が現れました」

銀時「あいつが本当の黒幕なのか？」

支配者「黒幕の関係者ってとこですね。ちなみに真の黒幕の正体は最終決戦終了時に明らかになります」

剣心「ほう…それは楽しみでござるな」

支配者「では次回もお楽しみに」

第五十一訓　真実は結構簡単に明らかになったりする（前書き）

支配者「いよいよクライマックスが近付いてきました。これからいい部分に入っていきます」

銀時「リリカル剣魂スペシャル始まるぜ」

第五十一訓　真実は結構簡単に明らかになったりする

司令室を出た銀時は、フェイトが眠ってる病室に向かった。
中に入ると、フェイトは目を覚ましていた。病室にはプレシアとアルフもいる。

フェイト「剣心、銀時」
剣心「フェイト殿、起きたでござるか」
銀時「よォ。もう大丈夫そうだな」

フェイト「うん。心配かけてごめんね」

微笑みながらフェイトが言った。

プレシア「剣心と銀時。フェイトを護ってくれてありがとう」

プレシアが剣心と銀時に礼を言った。

銀時「なァに。礼なんていらねーよ」
剣心「そうでござるよ。当たり前の事をしただけでござる」
アルフ「素直じゃないな～」
銀時「うるせえんだよ。この犬ッコロ」
アルフ「誰が犬っころだ！」

アルフがからかうように言った。その後銀時がアルフの事を犬っころと呼んだのでアルフと銀時が喧嘩を始めた。

その翌日
フェイトとなのはは、学校に向かっていた。
フェイトは体に異常はなく、すっかり元気になっていた。二人共しばらくは次の呼び出しがあるまで、普通の生活を送るように言われている。
バスに乗り、学校に到着。

フェイト「入院？」
なのは「はやてちゃんが？」

教室に入った二人は、すずかから、はやての入院を知った。

すずか「うん。昨日の夕方に連絡があったの。そんなに具合いは悪くないそうなんだけど…検査とかいろいろあってしばらくかかるって…」

心配そうな表情で、すずかが言った。はやての病気が少しだけだが悪くなってしまったと聞いて本当に大丈夫なのかとすずかは不安になった。

アリサ「そっか…じゃあ放課後に皆でお見舞いに行く？」

アリサがそう提案した。

すずか「え？いいの？」

すずかがアリサに聞いた。

アリサ「すずかの友達なんでしょ？紹介してくれるって話だったし

さ。お見舞いもどうせなら賑やかな方がいいじゃない」
なのは「う～ん。それはちょっとどうかと思うけど…」
と、なのはが言う。病院では静かにするのが普通なのにアリサはなにを言っているのだろうか。
フェイト「でも、まあ、いいと思うよ」
フェイトは頷いて言った。本当にいいのかな？大勢で行ったりして
すずか「ありがとう！」
すずかは笑顔で、みんなにお礼を言った。
その時、教室の引き戸が開かれて、銀時が入ってきた。
すずか「あっ、剣八先生。おはようございます」
剣心に気付いたすずか達が挨拶した。
剣心「皆の衆。おはようでござる」
剣心はにこやかに返事をした。
すると剣心は、フェイトに顔を向けた。
剣心「フェイト殿。済まぬが携帯電話貸してくれぬか？」
フェイト「え？別にいいけど…」
フェイトはそう言って携帯電話を剣心に貸してやった。

翌日のマンション。
部屋にはプレシアが一人でいた。
リンディ達はアースラの方にいるので、部屋にはプレシアしかいないのだ。
プレシアが本を読んでいると、テーブルに置いてある携帯電話が鳴った。フェイトの携帯電話と同じ型のやつだ。すると携帯がなった。

プレシア「あら？フェイトから？何かしら」

携帯電話を手に取ってボタンを押す。

プレシア「もしもし？」
剣心「プレシア殿。拙者だ。剣心だ」
プレシア「剣心！？」

プレシアは驚いた。
フェイトの携帯電話からかかってきたのに、何故剣心が出てくるのか？

全く予想だにしていなかったからだ。

プレシア「それフェイトの携帯電話じゃ…」
剣心「フェイト殿から借りているだけでござる」
プレシア「貴方ねぇ…自分の携帯電話を買ったらどうなの？」

少し呆れながらプレシアは言った。

剣心「すまぬな。今はちょっと持ち合わせが…」

剣心が申し訳なさそうにそう言った。
持ち合わせがない…つまり金がない。
それを言われたら、プレシアはもう何も言い返せなかった。

プレシア「はあ…銀時はともかくあなたからそんな台詞を聞く事になるとはね…それで？用件は何？」
剣心「うむ…その前にプレシア殿。この事はフェイト殿たちには言わないと約束してもらえぬか？」

剣心が急に声に力を入れてそう言った。
そしてプレシアもその言葉を聞いて顔を真剣な表情に変えた。

プレシア「それは…どういう事？フェイト達に聞かれたらまずいの？」
剣心「うむ…実はなプレシア殿…」

剣心は桂から聞いた話をプレシアに伝えた。

プレシア「仮面の男の正体がグレアム提督の使い魔！？それにジュド達がグレアム提督と手を組んでいるですって！」

剣心「ああ…」

剣心の説明にプレシアが驚き、剣心が声を低くしながらそう言う。
まさか管理局の人間だとは思わなかった。プレシアはすぐに冷静になって考えた。姿は恐らく変身魔法で変えているのだろう。

プレシア「それに…グレアム提督の目的が闇の書への復讐だったなんて…」
剣心「ああ…。そのためにあの老人は、ある少女を犠牲にしようとしている」

プレシアは仮面の男の目的は、完成した闇の書を何らかの方法で横取りする事だと思っていた。
だが、実際はその逆。目的は闇の書の封印だった。

プレシア「…リンディから聞いた事があるわ。グレアム提督は十一年前、闇の書の封印に失敗して、クロノの父親クライドを失ったと……」
剣心「動機はおそらくそれでござるよ。プレシア殿」
プレシア「やはり…そうなのね…」

十一年前の悲劇。
クロノの父、クライドが闇の書の暴走に巻き込まれ、戦艦と共にアルカンシェルで吹き飛ばされ、命を落としてしまった事件。そのアルカンシェルの発射を命じたのは他でもないグレアム提督である。
あれからグレアム提督は自分の一番の部下でもあったクライドを一人犠牲にしてしまった事を悔やみ、ずっと責任を感じ続けているらしい。

プレシア「でも…それなら何故闇の書の完成を?それに闇の書の封

印は不可能のはずよ？」
剣心「多分、その封印方法は、闇の書が完成した後じゃなきゃできないのであろう。（どんな方法かは聞いておらぬがな）」
流石の剣心も、封印方法まではわからなかった。と言うか聞いてなかったのだ。
プレシア「そう…」
プレシアは短く答えた。
プレシア「それにしても、一体どうやって気付いたの？」
剣心「知り合いがこの世界の未来をアニメを通じて見ていたらしくてな…」
プレシア「ああ…なるほどね…ハハハ…」
プレシアは軽く苦笑いをした。この世界の事が剣心達の世界ではアニメとして語られている事は聞いていたが、やはりそんなメチャクチャな理由では信憑性が薄すぎて余り慣れなかったのだ。
プレシア「…グレアム提督の目的は分かったわ。でもどうしてジュド達が闇の書を狙うの？闇の書は奪うことは出来ない筈…完成させても利用価値なんてないわよ？あの男にとって闇の書の封印なんてどうでもいいとしか思えない。この世界がどうなろうとあの男にとってはどうでもいいはずよ。それなのにどうしてグレアム提督と？」
プレシアは疑問に思いながら剣心にそう質問する。ジュドの目的が闇の書の封印だなんてプレシアにはどうしても思えなかった。ジュドがグレアム提督のように復讐のために闇の書を封印しようとしているとも思えない。闇の書を封印してもあの男には何のメリットも

ない。それなのにどうしてジュドが闇の書を狙っているのか分からなかった。

剣心「それは拙者にも分からぬ…だが奴の目的が闇の書の封印などとは拙者にはどうしても思えない。これは拙者の個人的な考えだが……奴はおそらく闇の書に関して何か重大な事実を知っている」

プレシア「重大な事実？」

剣心「ああ、ユーノ殿も言っていたでござるからな。『闇の書は、魔導師の技術の研究のために作られた物ではない』と」

プレシア「と言う事は……闇の書は本当は別の目的で作られたと言う事？ジュドは闇の書の本当の意味を知っていると言う事かしら？」

剣心「まだ何の確証もないがな…とりあえず伝えたい事はこれだけでござるよ。まあ…最後の方はまだ拙者の想像だが…」

プレシア「いや…おそらくあなたの想像は当たっていると思うわ。ほかに考えられないもの」

剣心「出来れば、はずれて欲しいのでござるがな…」

剣心はこう思った。この予想が当たっているとしたらおそらくナギが言っていた以上に大変な事になるかもしれない。剣心はそう思っていたのだ。

プレシア「とりあえず私の方でも出来る限り調べてみるわ。教えてくれてありがとう」

プレシアは、剣心の言葉を信じて礼を言った。

剣心「そうでござるか。おや、もう授業が始まってしまうな。それではこれで失礼するでござる」

プレシア「ええ」

剣心が時計を見ながらそう言い、そこで電話は切れた。

プレシア「さて…これから如何動くべきかしらね…」

プレシアは、これからどう動くべきか考えた。

昼・・・八神家では、シャマルが皆の為にお弁当を作っていた。

シャマル「えっと…こうかしら…」

ハヤテ「そうそうその調子ですよ。シャマルさん」

隣ではハヤテがシャマルに料理を教えていた。なんでもシャマルもはやてに自分のおいしい料理を食べさせてあげたいとの事らしい。それでこの中で一番料理の旨いハヤテに料理を習っていたのだ。このお陰で、料理が死ぬほどド下手なシャマルは核兵器並みの破壊的な料理を作らずに済んでいるらしい。

シャマル「何か凄くひどい事言われてるような気が…」

ハヤテ「まあまあ、気にしないで続けて下さい」

シャマルは文中の文章を見てなんだか泣きたくなっていた。
かつて、シャマルの料理を面白半分に食した全員が、シャマルの料理を食べて戻した事がある。ヤミいわくあの時のフェイトの料理並みのひどさだったとの事らしい。あの時実はちょっとだけフェイトの料理を舐めたらしいから。ちなみにこれは余談だがヴィルヘルミナもハヤテに教えてもらって料理の作り方を覚えたらしい。

プルルルルプルルルルル

シャマル「ん？」

その時ふと、携帯に着信が入った。
入って来たのは、すずかからのメールだった。

ハヤテ「メールですか？シャマルさん」
シャマル「ええ、そう見たい。あ、すずかちゃんから」

メールの内容はこうだった。

すずか『シャマルさんへこんにちは　月村すずかです今日の放課後　友達と一緒にはやてちゃんのお見舞いに行きたいのですが行っても大丈夫でしょうか？お返事いただけると嬉しいです』
シャマル「すずかちゃん…良い子ね」
ハヤテ「そうですね」

丁寧なすずかのメールに感心するシャマルとハヤテ。
そして、添付されている写真を見ると…

シャマル「ええっ！？」
ハヤテ「ああっ！これは！！」

なんと、すずかと一緒にアリサ、なのは、フェイトが映っていたのだ。
これには驚きを隠せないシャマルとハヤテ。

すずか『もし、ご都合が悪いようでしたらこの写真をはやてちゃんに見せてあげて下さい』

メールの最後には、そう書かれていた。
そして、蒐集の為に別の次元世界に行っていたシグナムとヤミの元に、シャマルから連絡が来た。

ヤミ『エエッ！？すずかだけではなくなのはやフェイトまではやてのお見舞いに！？』
シャマル「そうなの…テスタロッサちゃんとなのはちゃん、管理局魔導師の2人が今日、はやてちゃんに会いに来ちゃうの！すずかちゃんのお友達だから！あぁ、どうしよう…どうしよう…！」
ハヤテ「シャマルさん。落ち着いてください。大丈夫ですよ向こうにはお嬢様たちもいますから…」
シャマル「でも…」
シグナム『落ち着けシャマル。大丈夫だ。幸い、主はやての魔法資質は殆ど闇の書の中だ…詳しく検査されない限りバレはしない』
シャマル「それは、そうかもしれないけど…」
シグナム『つまり、私達と鉢合わせる事が無ければ良いだけだ』
ハヤテ「そうですよシャマルさん。幸いお嬢様と梶さんのことは管理局にはばれてませんし、イヴさんは二階で寝てますから」
シャマル「うーん…顔を見られちゃったのは失敗だったわ…。出撃した時、変身魔法でも使ってれば良かった…」

ハヤテ「僕もそういえばその事話すの忘れてました…」

なのは達が来る事でパニクっているシャマルと、それを宥めるシグナムとハヤテ。

ヤミも、シグナムの横で話を聞いている。

ヤミ『済んだ事を悔やんでも仕方ありませんよシャマル…その時は私達が席を外すしかありません』

シグナム『あとは主はやて…それから石田先生やナギ達に、我等の名を出さぬようにお願いを』

シャマル「はやてちゃん…変に思わないかしら…」

ハヤテ「大丈夫ですよ。少し変に思われるかもしれませんが、お嬢様たちが何とかフォローしてくれます。とりあえずヴィルヘルミナさんと桂さん達には急いでこちらに帰って来てもらいましょう。この間の事で管理局にこの件に関わっている事がばれちゃいましたからね」

シャマル「そうね…」

ヤミが、なのは達が来る時は自分達が外すように提案し、シグナムは自分達の存在を隠してもらう事をはやてと石田先生とナギ達にお願いする事を考えた。正直、怪しまれる心配はあるが…今はこれしか方法が無いのである。

シグナム『とりあえず頼んだぞ。シャマル』

シャマル「うん・・・」

シグナムとの通信を切るシャマル。

そのシャマルを見て、ハヤテが話しかけて来る。

ハヤテ「はあ・・・まずい事態になって来ましたね…」

シャマル「ええ…なんとか、管理局との接触は避けないと…」
ハヤテ「…なのはちゃん達だけなら、僕ならまだなんとか出来ますけど…シャマルさんの場合は絶対にばれますからね・・・」
シャマル「ええ…」

ハヤテの言うとおりなんとしても、なのは達との御対面は避けたい守護騎士達。
だが、運命の歯車は…ゆっくりと回り始めていたのだった…
そして…恐るべき存在の復活も……

夕方、海鳴大学病院のはやての病室。
病室のドアをノックする音が聞こえる。

はやて「はーい、どうぞー」

――ガララッ

なのは達「「「「こんにちはー！」」」」

剣心「お邪魔するでござるよ」

ドアを開けて現れたのは、なのは・フェイト・アリサ・すずか、そして引率で付いて来た剣心だった。ちなみに剣心の場合ははやての事がなのは達にばれないようにとついてきたのである。ナギにはすでに連絡を入れておいた。もう一回だけフェイトに携帯を借りたらしい。

はやて「こんにちは！いらっしゃい！」

ナギ「おお。いらっしゃい」

梔『いらっしゃいませ』

はやてとナギがそう答えた。

すずか「お邪魔します・・・はやてちゃん、大丈夫？」
はやて「うん、もう平気や。あ、みんな座って座って！」
なのは「えっ～と…ところでそっちの人達は…？」
ナギ「ああ、私か？こいつの…友達の姉だよ。姉！なあ口子？」
梔『そうそう』

ナギと梔は自分達の事を聞いてきたなのはに向かってそう答えた。何か苦しい言い訳だけど…、ちなみにナギは梔の名前には偽名の名前をなのは達にいった。名前だけは知られているかもしれないからである。

アリサ「何か、私と声が似てる…」
ナギ「声が似てる奴くらい結構いるもんだぞ。細かい事は気にするな」
アリサ「はあ…」

アリサの言葉にナギがこう答えた。そう言えばえらく釘〇さんボイスの人が多い気がする……

その頃…

シャマル「……」

ハヤテ「シャマルさん…その格好やめませんか？後は僕が見ておきますから帰ったほうが・・・」
シャマル「いいえ、私も見てます」
ハヤテ「ええ～…でも…」
シャマル「見てます！」
ハヤテ「……はい」

中でワイワイやっているはやて達を、ドアの外から見てる人物がいた。
サングラスとコートを着込（笑）んでいたシャマルである。ちなみにハヤテも心配だからとついてきた。ハヤテはシャマルには帰ったほうが言いといったのだがはやての事を見ておきたいとシャマルは言って聞こうとしなかった。

そこに・・・

？「…何やってんだ？お前ら？」
シャマル・ハヤテ「ん？ぶッ！？」

…そこには桂のようにキャプテンの格好をした銀時がいた。
それを見たシャマルとハヤテは…色んな意味でかなりビックリした。
シャマルがちょっと警戒したそぶりを見せるが、それを見て銀時が声を出した。

銀時「おっと、前にもシグナム辺りに説明してると思うが、俺はお前らとやり合うつもりはねーぞ」
シャマル「そ、その恰好で言われても…」
ハヤテ「って言うか銀さん…。何でそんな格好してるんですか？」
銀時「細かい事は気にすんな。なのは達にばれないようにしてんだよ」

ハヤテ「いや…１００％ばれると思いますけど…」

ハヤテが銀時に突っ込んだ。
キャプテン＆右手のフックを見せて『やり合うつもりが無い』とか言われてもあんまり説得力が無い。むしろ今すぐサメの餌にでもしてやるぞコノヤローって感じである。
これで銃やら大砲でもあれば決定的だろうが、そんな物持ってたら間違いなく警察にとっ捕まるので流石にそんな事はしていない。というか大砲を持ち歩く奴なんているわけねーし。

銀時「…中に入れば良いじゃねえか…ってそれは無理か・・・ハヤテはともかく」
シャマル「えっと…あの…」
銀時「えっと…シャマルだっけか?ちょっと向こうで話さねえか?ハヤテ、お前は中に入ってろ」
ハヤテ「あ、はい」
シャマル「あの…綾崎君…」
ハヤテ「大丈夫ですよ。銀さんなら管理局に通報なんか絶対しませんから」
シャマル「うん…」

２人は席を外し、待合の椅子に座っていた。

銀時「お前らのところで、ヤミ達が世話になってるみてえだな。ありがとよ」
シャマル「い、いえ…ヤミちゃん達には、私達の方がお世話になってるくらいで・・・」

とりあえず、銀時はヤミ達が世話になっている事に付いて礼を言う。
シャマルは銀時の自然な態度に困惑しながらも、返事をする。

銀時「…闇の書の呪いは…進行中ってとこか？」
シャマル「……ええ」

銀時のその言葉にシャマルは辛そうに顔を下げた。

銀時「…病院の奴らは、勿論呪いの事なんて知らねえんだろうが…はやての為にあいつらはあいつらで全力で戦ってくれてるんだろうな」
シャマル「…はい」

銀時の問い掛けに、ただ一言返すだけのシャマル。銀時は構わずに話を続ける。

銀時「ナギ達から聞いたがな…はやての奴はかなり苦しんでるって聞いた。一番辛いのははやて自身だ。そうだろ？」
シャマル「はい…」
銀時「…けどな、お前達守護騎士や、すずかやヤミ達と言ったダチ連中が支えてやる事で、少しくらいは元気になれんじゃねえか？だからちゃんと支えてやんな。はやてがちゃんと最後まで闇の書の呪いと戦えるようにな。まっ、敵側で事情知ってる俺がこーいう事言うのはおかしいんだろうがな」
シャマル「は…はい…ありがとう…ございます」

銀時はシャマルを見て、頭を掻きながらそう言う。しかし表情は真剣なものだった。
それを聞いたシャマルは、ちゃんと理解してくれる人がいたのが嬉しかったのか、
涙を流していた。
銀時の事は、ヤミ達から聞いている。

ヤミ達曰く、銀時は普段はだらしなさの塊のような男だが自分の大切なものや困っている者達のためなら命を投げ出してくれるような人である。それにヤミが、銀時、そして剣心の事を話す時は何処か嬉しそうなのだ。
それを知っていた為、シャマルは銀時相手に警戒心を抱く事はたいして無かったのである。

銀時「…っと、余計な話しちまったか?…そろそろ俺ァ戻るわ」
シャマル「あ…はい…」

銀時はそう言うと、ゆっくり歩いて去って行った。

そしてはやての病室

シャマル「お友達のお見舞い、どうでした？」
はやて「うん、皆ええ子やったよ。楽しかったし…また時々来てくれるって」
シャマル「それは良かったですね…」

なのは達が帰った後、シャマルははやての病室にいた。
花瓶の中の花を入れ替えながら、はやてと話している。

はやて「そやけど、もうすぐクリスマスやな・・・皆とのクリスマスは初めてやから、それまでに退院してパーっと楽しく出来たらええねんけど」
シャマル「そうですね、出来たら良いですね・・・」
ナギ（確かにそうなれば良いが・・・正直もうすぐクリスマスどころじゃなくなるんだよな…）

ナギはこう思っていた。闇の書の暴走は如何あっても避ける事は出

来ない。そうつまりクリスマスどころではなくなってしまう…。ナギの知る限りでは闇の書の暴走は後数日に迫っていた。

ナギ（クリスマスまで…あと１０日ちょっとか…手を打ってはいるが…やはり心配だな…）

ナギが心配そうにカレンダーを見た。
カレンダーは１２月１３日を差している。
クリスマスまで、あと１２日…つまり闇の書の暴走も近い…

おまけ

銀八

「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『匿名希望』さんから質問だ。
「アルフ、フェイト、シグナムへ
もしも剣心からプロポーズされたらどうする？
真撰組へ
出番のないことについてはどう思ってる？」はいでは答えをどうぞ』

アルフ・フェイト・シグナム『嬉しい！！』

銀時「即答かよ」

アルフ「そりゃ嬉しいに決まってるよ。好きな人から好きだって言われたら」

フェイト「そうだよね♪」

シグナム「ああ」

で、次は真選組

土方「まあ…出番が何のは気にいらねえが・・・どのリリカル銀魂小説でもA，S編は俺達の出番ないと思うしな」

山崎「まッ、そうですよね」

沖田「土方さんなんか見たところで読者にとっては目の毒でさァ」

斉藤「全くだ。この阿呆のオタクが移っては読者が気の毒だ」

土方「んだとこらぁあああ！！てめぇら俺をバカにしてんのか！！つーか俺はオタクじゃねえぇぇぇぇ！！オタクはトッシーだけだ！！」

沖田「俺と斉藤さんはいつも土方さんの事バカにしてますぜ」

斉藤「やはりお前のような実力も中途半端な上に阿呆では副長の座

は務まらん。俺か沖田と変われ」
土方「てんめぇ！中途半端かどうか試してみるかぁ！！」
斉藤「ふん…『ユーノ・スクライア外伝』では俺に惨敗した貴様がか？」
近藤「ちょっと斉藤君！？別の小説の話し出さないでよ！！」
土方・沖田・斉藤
『黙ってろゴリラ』
近藤「ちょっとおおおおおおおお！！！何でそこだけ皆してはもっていうのおおおおおおおお！！？」
銀八「とまあこういう訳です。近藤うざいですね。とりあえず『匿名希望』さん廊下に立ってなさい。後『重要大事』さん勝手に小説名を出してスイマセンでした」

剣心「次の質問でござる。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから「万事屋メンバー&シグナムに質問、1．三つの長編を読んでいたら、三人の主人公達の活躍で、一番良かったのは？　2．新八に質問。僕の小説の新八は彼女が出来ましたが、どう思います？　3．クロノに質問。斎藤にコキ使われている挙句、空気扱いの自分をどう思います？　4．銀さんに質問。オタク化した自分をどう思います？」

一つ目の答え

銀時「当麻の野郎が活躍すると俺がめだたねぇ・・・それに他の奴らの事なんか知るか…俺が活躍できてねーのに…魔術編の当麻の奴が無駄にかっこいいのも腹たったな。まあ・・・しいて言うならリクオが神裂の為に頑張ったって言うのが良かったんじゃねえか」
剣心「七花殿とリクオ殿の活躍が目覚しかったでござるな。特にリクオ殿には何か拙者とつながる部分を感じたでござるよ…なんせあ

の刃衛と戦ったんでござるからな…」
神楽「私もヒロインの座を下ろされて苛立ってるね！！ほかの奴らの活躍なんか面白くもなんともないアル！！特にヒロインっぽくない神裂の活躍が面白くなかったアル。リクオはかっこいいと思ったアルが」
新八「皆かっこいいと思いますよ。特にリクオ君の活躍が凄かったと思います。ただなんで僕がドーパントにならなきゃいけないかったんだろう…」
セイバー「魔術編なのに、私がヒロインじゃありませんでしたね…それにまるであれじゃ悪役ですよ…まあ…当麻の活躍が良かったんじゃないですか？あの言峰を倒したんですから」
シャナ「リクオが良かったんじゃない。仲間の為に全て捨てられるって勢いでかかっていったのが良かったと思うわ」
ヤミ「七花の活躍が良かったと思いますよ。彼の暗殺剣はなんだか暗殺者である自分と繋がる所があるきがしますから…」
シグナム「読んでいて思ったが、皆強いな…出来る事なら全員と戦ってみたいぞ・・・私としては強者の活躍は全てすばらしいと思う。つまり全員頑張ったという所だな」

で二つ目の答え

新八「うらやましいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！」
銀時「亀鳥虎龍の奴、新八の野郎にずいぶん太っ腹な事しやがったな」
神楽「原作じゃ絶対にありえないネ。新八なんかに彼女が出来るなんて」
新八「ちょっとそれどういう意味！？」
支配者「そのまんまの意味だと思いますよ。こっちでも新八に彼女作ってあげようかな…」
新八「エッ！？マジですか作者さん！」

支配者「気が向いたらね」

んで３つ目の答え

クロノ「…かなり辛いです。何で僕があんなに目立たないんだ…それに絶えず阿呆阿呆言われるし…」

斉藤「いちいちうるさいぞ。このド阿呆」

クロノ「だからド阿呆って言わないでください！！」

斉藤「仕方ないだろうが。大体貴様の声があの究極のど阿呆と同じなのが悪い」

銀時「おいコラァ！それってまさか俺のことといってんのか！！？」

斉藤「お前以外にいるか阿呆」

４つ目の答え

銀時「こらテメェ！名に俺を勝手にオタクにしてやがんだあぁぁぁぁ！！」

亀鳥虎龍「だって面白いと思ったんですもん」

銀時「ざけんなあぁぁぁぁぁ！！オタクは新八だけで十分なんだよおぉぉぉぉ！！」

銀八「とまあ、こんな感じです。と言うわけで『亀鳥虎龍』さん廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに！」

第五十二話　辛い時は泣いたっていい（前書き）

支配者「はい、いよいよクライマックスまで後一歩となってきました」

銀時「つまり…決戦が近付いてきたって事か？」

支配者「その通りです。後、質問のストックが切れたので『教えて、銀八先生』はお休みさせていただきます」

剣心「リリカル剣魂スペシャル、始まるでござるぞ」

第五十二話　辛い時は泣いたっていい

あの話し合いから少し後、八神家では・・・
シャマルがカートリッジを作りながら、シグナム達に念話を飛ばしていた。

シャマル（闇の書がはやてちゃんを侵食する速度が、段々上がって来てるみたいなの…このままじゃ、持って一月…もしかして、もっと短いかも…それにナギちゃんの話だと・・・たぶん一月どころか2週間ちょっとがいい所かもしれないって・・・！）

シグナムは、巨大な岩の身体を持つ魔法生物を倒して一息ついている所に。
ザフィーラとヤミは砂漠地帯を飛行しながら。
そして、ヴィータは嵐が吹き荒れる海の上を飛んでいた…

ヴィータ（何かがおかしいんだ…こんな筈じゃないって、アタシの記憶が訴えてる…でも…今はこうするしかないんだよな…！）

ヴィータは、何か違和感を感じていた。
自分のかつての記憶が、このままではダメだと警鐘を鳴らしている。
このままでは何か…取り返しのつかない状況に陥る気が…
ヴィータもなんとなく分かっていた。闇の書の中に眠る恐るべき脅威の存在を・・・
しかし、止まる訳には行かない。
今の主を…楽しい生活を失う訳には行かないのだ。
はやてを救う為なら何でもする…ヴィータ達はそう心に誓ったのだ。

自分達を始めて唯の道具ではなく、大切な家族として接してくれたはやての為ならどんなに自分達の誇りを汚しても…どんなに自分達を傷つけてもと…

ヴィータ「はやてが笑わなくなったり…死んじゃったりしたら……やだもんなぁ…！！」
グラ『マスター……』

涙を流しながらグラーフアイゼンを構えるヴィータ。
グラーフアイゼンもまた、自らの主の想いに同意する。
海が渦巻くと、その中心から巨大な魔導生物が現れる。

ヴィータ「やるよ、アイゼン！」
グラ『ｇｅａｒ　ｐｕｅｅｒｕ』

グラーフアイゼンが形を変え、巨大なハンマーに変形する。
ヴィータはそれを構え、飛びかかって行った。…涙を流しながら

ヴィータ『ギガント！ぶっ潰せえぇぇーーーーーーーっ！！』

しかし闇の書の中では

ドクン

――――気色の悪い・・・プログラム如きが涙など流しおって・・・

――――

闇の書の中に眠る恐るべき闇の存在がヴィータに対してバカに仕切ったようにこう思った。

ドクン

――無駄な足掻きをしよるわ…あんなボロ雑巾のような小娘の為なんぞに……――

ドクン

――貴様らの必死の努力も全て無駄になる…維持でもあの小娘の息の根、ワシの手で止めたくなったぞ……――

ドクン

――その日はもうすぐ訪れる――

ドクン

――そう……もう…まもなくだ――

ドクン

――フハハハハ…アーハハハハ……――

数日後・・・高町家。

食卓には高町家の面々に、フェイト、そして銀時達と女の子数人がいた。他の男連中はうざいので遠慮させた。護だけは綾子に連れられてきたが
テーブルの下には子犬フォームのアルフもいる。
テーブルの上には、桃子お手製の豪華な夕飯が並べられていた。

銀時「ほれ、なのはとフェイトの取り皿」
なのは「ありがとうございます♪銀さん」
フェイト「ありがとう、銀時」
剣心「ほう…どれもこれも美味そうでござるな…」
シャナ「これを1人でだなんて桃子って剣心並みに凄いかも…」
神楽「早く食べたいアル！」
セイバー「そうですね。もう腹ペコですよ」

銀時はなのはとフェイトに取り皿を配り、剣心とシャナは桃子の料理の腕に感心し、神楽とセイバーは料理を見渡しながら腹の虫を鳴らしている。
テーブルの下では、アルフが美味しそうに骨付き肉を頬張っていた。
物凄いイイ顔で食べている。
これじゃまるっきり飼い犬だ。

アルフ「ワンワンワワン！（あたしは犬じゃない！！）」

アルフは犬語で文中にこう突っ込んだ。

士郎「フェイトちゃんは、今年のクリスマスイブはやっぱりご家族と過ごすのかい？」
フェイト「はい、母さんと一緒に」

士郎の問い掛けに、頬を赤らめて嬉しそうに答えるフェイト。

何せ、母・プレシアと平和に過ごせる初めてのクリスマスだ。
嬉しくない訳が無い。

士郎「うちは今年も、イヴは地獄の忙しさだな」
美由紀「あたし、今夜の内に値札とコップ作っておくから！」
剣心「なら、拙者と銀時も手伝おう。桃子殿達だけでは大変だろうからな」
銀時「え～…なんで俺まで…」
新八「なに言ってんですか。銀さん元々ここのバイトだったんでしょ？」
神楽「そうアル。文句言ってないでちゃんと働けよこのダメ人間が」
ソルヴァ「そうですよこのダメ人間。ちゃんと働けやコラァ！！」
セイバー「そうですよ、このダメ人間。たまにはちゃんと体を動かして皆の為に働きなさい」
銀時「んだとコラァ！お前らにだけはダメ人間なんていわれたくねえよ！！」

イヴの事を考えて苦笑する士郎。
なのはは、少しでも皆の苦労を軽減しようと、下準備を行う事にした。
剣心もそれを手伝うようだ。銀時はめんどくさがった所を神楽とソルヴァとセイバーに突っ込まれ三人と喧嘩を始めた。
その様子を見たフェイトが、キョトンとしている。

なのは「翠屋のクリスマスケーキ、人気商品だから…イヴの日はお客さんいっぱいなの！」
美由紀「それにね、イヴを過ごす恋人同士とか、友達同士の為に、深夜まで営業してるんだよ」
フェイト「そうなんですか」
黒子「ロマンチックですわねぇ……。お姉さまァァァァ！！私達

も恋人同士してロマンチックなクリスマスの夜を…」
美琴「過ごすかあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

ビリビリビリビリビリビリ！！

黒子「ピギャアアアアアアアアアア！！！！！」

綾子「護。私達もイヴの夜はロマンチックに過ごしましょ♪」
護「はい綾子さん♪」
シャナ（はあ～あ…私も悠二と過ごしたかった……って！なに考えてるのよ私は！！）
セト「ん？おい、シャナ。なぜ顔を赤くしているんだ？」
シャナ「なんでもない！」
銀時「なんだぁ～。何かエッチな事でも考えてたのか？」
シャナ「そんな訳あるかーー！！」

バキィ！！

銀時「いだっ！何しやがんだ！！」
シャナ「うるさいうるさいうるさーい！！」

翠屋は、クリスマスイブは深夜までの特別営業らしい。
今日の豪勢な夕飯も、一足先のクリスマスパーティーという意味合いがあるのかもしれない。
それを聞いて、納得するフェイト。
それを聞いて美琴に飛びかかろうとした黒子を電撃で気絶させた美琴。
それを聞いて恋人同士である自分達もクリスマスの夜はロマンチックに過ごしたいと考える護と綾子。
そして実は自分も悠二とクリスマスを過ごしたかった…なんて考え

ていたシャナであった。考えた後で顔を真っ赤にした。その事で銀時にからかわれ二人は喧嘩を始めてしまったのであった。そしてみんなはその喧嘩を止めようとするのであった。

３０分後

美由紀「恭ちゃんは良いよねー♪店の中で忍さんとずーっと一緒だし♪」

恭也「それは別に関係無いだろ・・・」

仕事中とはいえ、恋人とずっと一緒にいられる恭也を茶化す美由希。

恭也は、すずかの姉・忍と交際中なのだ。実際…護や綾子と同じでかなりラブラブらしい。

銀時「ほーぅ、仕事中とはいえ好きな人といられる…良いねぇ♪この色男」

シャナ「どさくさに紛れて変な事しないでよね。エッチな事とか」

セト「言えてるなそれは、こういう奴に限って恋人とあんな事やこんな事をするからな」

恭也「誰がするかそんな事！彼女にそんなバカな事するわけないだろ！」

美由希に便乗して、銀時とシャナとセトも恭也を茶化す。
言葉にこそ出さないが、剣心やセイバー達も微笑しながら恭也を見ている。
恭也はムキになって反論するのだった。

フェイト「好きな人…かぁ…」
美由紀「お、何々？もしかしてフェイトちゃん好きな子いるの？」

ボソリと言葉を漏らしたフェイトに食いつく美由希。
年頃の乙女はこーいう話題には異常に敏感だ。

銀時「そりゃー、フェイトは剣心にぞっこんだからな」
フェイト「っ…銀時っ…／／／！」
剣心「ブッ！」

銀時の茶化した言葉に顔を真っ赤にするフェイト。そして剣心は思い切り吐いてしまった。
まあ、フェイトにとっては思い切り図星なのだから仕方がない。

剣心「ほー、剣さんねえ。そりゃあ中々の優良物件だわ♪顔をはいいし優しいし強いし家事出来るし、非の打ち所が無いしねぇ♪」
フェイト「あぅ…／／／」
士郎「こら美由希。あんまりフェイトちゃんをからかうんじゃない。と言うか剣さんの前でそんな話をするな。代々年があんなに離れているのにお前はなにを言っているんだ」
美由紀「はーい…♪」
剣心「はあ…」
なのは（クリスマスかぁ…私も銀さんと過ごしたいなぁ…）

剣心の事を思い浮かべて真っ赤になるフェイト。
美由希は士郎に怒られて、笑いながら引き下がる。
そして剣心は如何したら良いのかと思っていた。
なのははなのはで銀時と過ごすクリスマスの事を考えていた。

美由紀「アリサちゃんちとすずかちゃんちの分も、ちゃんとキープしておくからね」
なのは「うん、ありがとう！」
士郎「リンディさん達からも予約頂いてるからなぁ。お楽しみにね♪」
フェイト「あ、はい・・・ありがとう、ございます・・・／／」

お得意様であるバニングス家と月村家は優先されており、その分のケーキはしっかりキープしているらしい。
今回はハラオウン家からも予約を貰っている。

剣心（ふふ、楽しいクリスマスになれば良いでござるな…だが、何か嫌な予感がする…ジュド達の件もある…何も起きなければいいのだが…）

皆が笑い合う中、剣心はただ1人嫌な予感を感じ取っていた…

その頃海鳴市の上空では

ジュド「ついに時は満ちたか…」
ファイナ「ハイ、ジュド様♪」

ジュドとファイナが何かを話し合っていた。どうやら闇の書に関する話のようだ。

ジュド「闇の書の完成までもう僅かだ…ページもだいぶ溜まりつつある。予定通り奴らを生贄に捧げれば事足りるだろう。あの二人やジハード達にもそう伝えておけ」
ファイナ「は～い。これでもうあいつらも用済みって訳ですね」
ジュド「その通りだ…。やつらの始末は私自らやる。必要ないとは思うが…お前も念のために待機しておけファイナ」
ファイナ「分かりましたぁ～♪それにしてもホントバカな連中ですよね～。あの爺も使い魔どもも」
ジュド「全くだ…やつらは復讐を完成させられると喜んでいるだろうが…誰がそんな事などさせるものか…闇の書の封印などされては困る。我らが“王”復活の為にもな…これで…“あのお方”もお喜びになられるだろう」
ファイナ「そうですね。ジュド様」
ジュド「では行くぞファイナ。王復活を祝う準備をしておかなくてはな」
ファイナ「は～い（フフフ…）」

そして、話を終えたファイナとジュドはその場から消えた。
しかし…ジュドは気づいていなかった。最後にファイナが自分に向かって怪しい笑みを浮かべていた事に……

第五十二話　辛い時は泣いたっていい（後書き）

支配者「はい、次はいよいよなのは達とヴォルゲンリッターが鉢合わせします」

銀時「闇の書の復活まであと少しって事か」

支配者「その通りです。では次回も」

なのは・フェイト『お楽しみに！！』

第五十三訓　おとなしい人ほど怒ると怖い（前書き）

支配者「今回はヤミの大バトルがあります」

ヤミ「私のですか」

シャナ「どんな風になる訳？」

支配者「それは見てのお楽しみです」

銀時「リリカル剣魂スペシャル始まるぜ」

第五十三訓　おとなしい人ほど怒ると怖い

翌日のＰＭ４：２５　海鳴大学病院では

ヴィータ「はやて…ごめんね。あんまり会いに来れなくて」

ヴィータがはやてに申し訳なさそうにそう言った。
ここ最近、彼女はリンカーコアの蒐集の為、そして管理局の追跡から逃れる為、あまりはやてに会いに来られなかった。
それはシグナムとて同じことだった。

はやて「ううん。ええんよ、ナギさん達が変わりにいてくれたし・・・ヴィータは元気やったか？」
ヴィータ「メッチャメチャ元気♪！」
はやて「そうか、それは良かったわ」

時間を作ってはやての見舞いに来たシグナム、シャマル、ヴィータ。
ヴィータは自分がとっても元気にやっている事をはやてに見せた。
はやてもそんなヴィータを見て笑顔になった。
ヴィータははやてに頭を撫でられながら、嬉しそうな表情を浮かべる。
ザフィーラは蒐集活動、ヤミはそれに付き添っている。
え、ナギ達はどうしたかって？病室の隅っこにちゃんといますよ。
桂もね。雪路とエリザベスは留守番です。

――コンコン

ふと、病室のドアをノックする音が聞こえる。

シグナム「ん？誰か来たのか？」
シャマル「今日は誰も来ないはずだけど…」
ナギ（ん？なんか忘れているような…あ！！そういえば確か…）

ナギは急に顔をしかめた。どうやら彼女は何かを忘れていたようでそれを今思い出したようだ。

「「「「こんにちはー！」」」」

すると・・・なのは、フェイト、アリサ、すずか。
そして剣心と銀時が入って来たのだ・・・！

ヴィータ「…っ！」
ナギ「あちゃ～…」
ハヤテ「ブッ！？」
イヴ「あら…」
梔『あ…』
ヴィル「な……」

なのは達を見て、表情を険しくするヴィータ。シグナムとシャマル、ハヤテ達も同様である。ナギはしまったと思い急に頭を抱えた。

剣心「な・・・！」
銀時（オイィィィィィ！！何でお前らがここにいるんだぁぁぁぁぁ！！？）

銀時は心の中で思いっきり叫んだ。剣心は表情にこそ出していなかったがやっぱり驚いていた。二人はこの場にはシグナム達はいない筈だと思っていたからだ。

すずか「あ、皆さん今日はお揃いですか？」
アリサ「こんにちは、初めまして！」

すずかとアリサが笑顔でシグナム達に挨拶する。
アリサは初対面の為、礼儀正しく挨拶した。

なのは・フェイト「「あっ……」」
シグナム・シャマル「「ッ……！」」

なのはとフェイトはシグナム達を見て驚き、シグナムもまた、顔を強張らせる。
シャマルも、不安そうな表情を浮かべている。

はやて「・・・？」

はやては当然事情を知らない為、シグナムとなのは達を交互に見て、首を傾げていた。

アリサ「あっ…すみません、お邪魔でした？」
シグナム「あ…いえ…」
シャマル「いらっしゃい、皆さん……」

アリサの言葉で我に返ったシグナムとシャマル。
ぎこちないが、平静を装いながら返事をする。

すずか「なんだ、良かった…」
はやて「ところで、今日はみんなどないしたん？確か今日は見舞いに来るって聞いてへんかったけど……」

とりあえず何事もなかったかのように、はやてはすずか達に尋ねる。
はやてに尋ねられると、アリサとすずかは顔を見合わせて笑う。
そして、持っていた『何か』にかぶせられたコートを取る。

すずか・アリサ「「サプライズプレゼント！」」
はやて「わぁ…！」

それを見て、一気に笑顔になるはやて。

すずか「今日はクリスマスだから、はやてちゃんにクリスマスプレゼント！」
はやて「わぁ…ホンマかー？ありがとうなぁ♪」
アリサ「皆で選んで来たんだよー？」

和気あいあいとした雰囲気のアリサ・すずか・はやて。
それを尻目に、シグナムはシャマルとアイコンタクトを取る。
なのはとフェイトも、不安そうに表情を歪めている。
銀時と剣心、そしてナギ達も、『こりゃ困った』と言った感じで、
頭を掻いたりおでこを抑えたりしながら立っている。
ヴィータに至っては、未だになのはとフェイトと銀時と剣心を睨みつけていた。

はやて「？…なのはちゃん、フェイトちゃん、銀八先生に剣八先生それにナギさん達も…どないしたん？」
なのは「あ、う、ううん、なんでも…」
シャマル「ちょっと、ご挨拶を…ですよね？」
ナギ「そうそう」
梔『なんでもない…』
フェイト「あ…はい…」
銀時「ああ、別に何でもねーから…気にすんな」

剣心「そ…そうでござる…」

はやてに言われ、慌てて言葉を返すなのは。
フェイトと銀時、剣心も、その場で取り繕うように返す。
流石に剣心達は落ち着いたようだが、なのはとフェイトは若干動揺を隠せていなかった。

シグナム「はい…」
シャマル「ああ、みんな…コートを預かるわ」

シグナムも只一言、なのは達に合わせた。
シャマルは、なのは達のコートを預かる。

フェイト「…念話が使えない…通信妨害ですか？」
シグナム「シャマルはバックアップのエキスパートだ。この距離なら、造作も無い」

コートをハンガーに掛けながら、小声で呟くように話すフェイトとシグナム。

銀時「ナギ。ちょっと話があるから～、廊下に出てくんない？」
剣心「頼むでござる」
ナギ「あ…ああ」

銀時と剣心、ナギは病室を出てドアを閉めた。
銀時と剣心は一度ため息をついてから、ナギを見た。

銀時「何でシグナム達がいるんだよ！？闇の書の蒐集やってたんじゃねーのか！？」
剣心「そうでござる！？これはどう言う事でござるかナギ殿！？」

中にいるはやて達に聞こえないように、銀時は小声でナギに言った。

ナギ「今日はクリスマスだしはやてに心配をかけないように、皆で見舞いにきたんだ！銀時達こそ、どうして黙って見舞いにきた！？」

銀時「はやてを驚かせようと思って黙ってきたんだよ！そしたらシグナム達がいて逆に俺達が驚いたちゃったじゃねーか！逆ドッキリかコレ！？」

ナギ「勝手な事するなぁーーーー！！」

銀時「つーかナギ！お前未来知ってんだろ！何でこの状況を回避できなかったんだよ！？」

ナギ「仕方ないだろ！いろいろ合って忘れてたんだよ！！」

言い合った後、三人は気分を落ち着かせた。

少しだけドアを開けて、中の様子を見る。

ヴィータはまだなのはを睨んでる。

銀時「ヤベーよ、ヴィータ超睨んでるよ。なのはやフェイトの事ガン見だよ。メンチ切ってるよ。マジやべーよ…マジありえねえーよ」

剣心「確かにこれは気まずいどころではないな……」

ナギ「ど…如何しよう…」

小声で銀時と剣心とナギが呟いた。今にも戦闘が行われそうなくらいまずい雰囲気である

なのは「っ・・・！」

ヴィータは未だになのはを睨み続けている。

完全になのはへの敵対心が剥き出しの状態だ。

アリサ・すずか・はやてそれにナギ達がいなければ、すぐにでも飛

びかかっていただろう。

なのは「えっと、あの、そんなに睨まないで…」

ヴィータ「睨んでねーです。こう言う目つきなんです！」

ヴィータがぶっきらぼうに言葉を返した。

その後

はやて「コラヴィータ！何なのはチャンの事にらんでんねんな！！」

はやてがヴィータの事怒った。

そして外では

銀時「なぁ。この後どうすんの？俺はどうすればいいの？何とかしてくれ剣心、ナギ。頼む。３００円あげるから！」

剣心「３００円なんかもらったって如何しようもないでござる！！」

ナギ「お前こそ何とかしろ！３００万やるから！！」

銀時「俺で何とか出来たら苦労しねーよ！あ、でも３００万は欲しいな…」

剣心「迷って如何する！！」

病室のドアの前で、銀時と剣心、ナギはそんなやり取りをしていた。

その頃ヤミはザフィーラと共に異世界の砂漠にいた。
ザフィーラとヤミは一緒に移動していた。

ザフィーラ「ん…？おかしいな…シグナム達と念話が繋がらんぞ・・・？」
ヤミ「え…？」

シグナム達と連絡しようと念話を飛ばしたザフィーラ。
だが、シャマルが通信妨害を掛けていた為、外からの連絡も受け付けなくなっていた。

ヤミ「何か・・・あったんでしょうか？」
ザフィーラ「良くない事かもしれん…ヤミ、一旦地球に戻る…！！」
？『おっと、そうさせる訳にはいかねえな・・・』

すると二人の目の前に魔人族四天王の一人音速のゼルバンが現れた。

ザフィーラ「おっ・・・お前は・・・あの時の」
ヤミ「ザフィーラ。知っているんですか？」
ザフィーラ「ああ…前にヴィータを逃がしてくれた奴なんだが…」
ゼルバン「ああ～そんなこともあったな・・・だが今回は違うぜ」

そう言うとゼルバンは不気味な笑みを浮かべてこう言い放った。

ゼルバン「お前らを始末しにきたんだよ」
ヤミ「・・・やはりそうですか・・・あなたもジュドの手の者・・・」
ゼルバン「…クックック…そう俺は魔人族四天王の一人音速のゼルバンだ。…今はな…」
ザフィーラ「今は・・・だと？どういう意味だ！？」

ゼルバン「お前らに言う必要はねえよ。ちょうど今面白い事になってんだ」
ヤミ「面白い事？」
ゼルバン「そうさ・・・。魔道師のガキどもと闇の書の守護騎士連中が接触したんだよ」
ヤミ・ザフィーラ
『なッ！？』

ゼルバンの言葉に二人は驚愕した。

ゼルバン「主の小娘の手前おとなしくしちゃいるが・・・ありゃすぐにでも戦闘開始だろうなあ…でもお前らにまでいられちゃ面倒なんでな、ここで俺がお前らを始末してやるよ」
ヤミ「そう言う事ですか…なら！」

ヤミが手を武器に変えてゼルバンを睨み付けた。

ヤミ「あなたを片付けてはやての元に向かわせてもらいますよ…！！」
ゼルバン「ケヘヘヘヘ…出来ると思ってんのか？俺は他の四天王とは違う・・・俺の真の姿を見てもそんな口が叩けるかあ！？」

ゼルバンはそう言うと光を放ちその中で体をメキメキと変形させた。

ヤミ「なッ！？」
ザフィーラ「な…なんだ…あの姿は…！？」

そして晴れていく光の中でゼルバンの姿を見た二人は驚愕した。
その姿はまるで6メートル以上もある蛇のような姿で巨大な翼竜…古代の始祖鳥の羽を携えたまるであの伝説の魔獣・コアトルのよう

だった。

ゼルバン「ゲハハハハ！！驚いたか！！これが俺様の真の姿よ！！他の四天王よりも俺様は完成した存在だ！！つまり…俺様が四天王最強って訳だ！！」

ゼルバンはそう言うと目にも留まらぬ速さで二人に攻撃を仕掛けてきた。

ビュビュン！！
ズガアッ！！

ザフィーラ「グアッ！」
ヤミ「アアッ！？」

ゼルバンのその巨大な体格からは信じられないほどの凄まじいスピードに二人は全く反応できなかった。

ザフィーラ「な…なんだ…この速さは…」
ヤミ「速過ぎる・・・！！」
ゼルバン「当たり前だ・・・俺のスピードについてこられる奴なんていねえよ！！」

ゼルバンはそう言ってものすごいスピードで次々と攻撃を仕掛けてくる。

ビュビュビュン！！
ズガガガガガッ！！

ザフィーラ「グアアアア！！」

ヤミ「アアアアア！！」

二人はそのスピードに全くついていけず次々と攻撃を食らってしまう

ゼルバン「ゲハハハ！！弱い！弱すぎるぜ！！」

ゼルバンは笑いながら音速攻撃を仕掛け続ける
しかしザフィーラとっさに障壁を張り、ヤミも腕を盾に変形させて攻撃を凌いでいた。

ゼルバン「ケッ…思った以上にしぶといな…じゃあこいつで終わらせるか！！」

ゼルバンはそう言って大きく羽を広げた。

ザフィーラ（な…なんだ…！？）

ヤミ（何を仕掛けてくるつもりですか…！？）

二人はゼルバンのその動作に警戒する。

ゼルバン「ケヘヘヘ・・・消えろ！！ブラストウインガー！！」

ゼルバンはそう言うと光に包まれ異常な速さで二人に連続攻撃を放った。

ズドドドドドドドドドッ！！

ザフィーラ「ガアアアアアアアアッ！！」

ヤミ「ウアアアアアアッ！！」

二人は凄まじい攻撃を受けて障壁と盾は簡単に破壊され一瞬でボロボロになった。

ゼルバン「ハッ…これで終わり…！！」

しかしゼルバンの凄まじい攻撃を受け続けながらも、ヤミとザフィーラは未だ希望を捨ててはいないそんな発言をゼルバンの目の前で口にする。

ゼルバン「手前等…アレだけ攻撃を受けながらまだやる気か？いい加減くたばれよ…お前らに勝ち目なんかねえんだよ！」

ザフィーラ「そうは…いかん…」

ヤミ「私達はこんなところでやられるわけにはいきません…はやてを…救う為にも…」

ゼルバン「はっ・・・何を言い出しやがるかと思えば・・・あんなゴミ見てえなガキを救う為だと・・・笑わせやがる…」

ゼルバンは二人の言葉に対してそう言いはなった。

ザフィーラ「なんだと…貴様今なんと言った！！」

ゼルバン「ゴミだっつったんだよ。あのガキの事を」

ヤミ「はやての事をゴミだと！！」

ゼルバン「だってそうじゃねえか…くたばる寸前なんだろ？そのガキ。死に掛けの奴なんてほっときゃいいんだよ…どうせ助からねえんだし…時間の無駄だぜ」

ザフィーラ「き…貴様…主はやては我ら闇の書の守護騎士を…道具ではなく家族として扱ってくれた唯一の存在なんだ…その主を…ゴミだと！取り消せ！！」

ゼルバン「家族？ギャ～ハッハッハ！プログラム風情の事を家族だあ！？気色の悪い！！」

ゼルバンは笑いながら話を続ける。

ゼルバン「お前らにはもう希望はねえ。あいつらは殺されるのさ。我らが“王”にな」

ヤミ「“王”？」

ザフィーラ「なんだ…それは…」

ゼルバン「お前らが知る必要はねえよ・・・どうせお前らもあのガキももう死ぬんだからよ」

ヤミ「な…んだ…と？」

ゼルバン「そうさ…ボロ雑巾みたいにズタボロになり…そして死んでいくのさ・・・絶望に泣き叫びながらな！！ギャ～ハッハッハ！どうせ何やったってあのガキは助からねえんだよ！！ゴミとして死んで行くしかねえんだよ！！お前らやってきた全部無駄・・・無駄だったんだよ！！それなのに必死で動きやがって…何もかも無駄だってのによお！！」

ゼルバンははやての事をゴミと罵りながら大笑いし続ける。

ヤミとザフィーラはかなりキツイ目でゼルバンをにらみつけた。

そのときのヤミの目が…真っ赤に染まっていた。

ヤミ「黙れ…」

ゼルバン「そうだ・・・いっそのことお前らを始末したらあのガキも俺が始末してやるよ！！もちろん他の守護騎士や異世界の連中もな！！」

ヤミ「黙れといっている…」

ゼルバン「ヒハハハハ！あのガキや守護騎士どもをどう痛振り殺してやろうかな～？今から楽しみになってきたぜ！ハハハハハ！！」

ゼルバンがそう言ったときである。

ズバン！！

なんとゼルバンの片翼が血を噴き出したのだ。

ゼルバン「が・・・がああああああ！！な…なんだこりゃあああああ！！？」

ゼルバンは突然の出来事に訳が分からず痛がった。

ゼルバン「ど…どうなってやがんだぁぁぁぁ！！？何で・・・なんで俺の翼ガァァァァ！！？」

ヤミ「私がやったんですよ…」

ヤミがゼルバンの目の目に表れそう言った。その闇からは異常なまでの強い殺気が出ていた。

ゼルバン（ゾクッ！な…なんだ…この寒気は…）

ゼルバンは目の前に現れたヤミの凄まじい殺気に怯え後ろに下がった。

ヤミ「よくも…好き放題言ってくれましたね…誰がゴミですって…」

ヤミは激しい殺気を混ぜ込みゼルバンを睨み付けた。

ヤミ「誰を殺すですって・・・はやてを…皆を…殺すですって…はやてを救う為にみんなからだをボロボロにしてがんばっている行為が無意味ですって…彼らがどれだけ今まで必死になっていたかあな

たは…しっているんですか……！？」

ヤミは凄まじい殺気を混ぜ込みゼルバンに近付く。

ゼルバン「ヒイッ！」

ゼルバンはそのヤミの姿に恐怖を覚えた。

ゼルバン（お・・・怯えているだと！この俺が…こんな人形のガキに！？あ…ありえねえ…）

ザフィーラもボロボロのからだを支えながら今のヤミを見てこう思った。

ザフィーラ（何だこの凄まじい殺気は…あれがヤミなのか？）

ヤミ「ザフィーラ」

ザフィーラ「！！」

ヤミ「今のうちに行ってください。こいつは私が片付けます」

ザフィーラ「な・・・なにを言っているんだ！？こいつの強さは半端ではない！お前一人で勝てる訳が！！」

ヤミ「いいから行ってください。さもないと…あなたまで殺してしまうかも知れない…」

ザフィーラ「！！」

ヤミは異常なまでの殺気を振りまいていた。それはまるでこの場にいる全員に振りまかれているかのようだった。そのヤミの言葉に気圧されたのかザフィーラは

ザフィーラ「…分かった…」

そう言うと飛んでいった。

ゼルバン「待てぇ！誰が逃げて言いつった！！」

ゼルバンはそう言ってザフィーラを追おうとするが

ガシッ！！

ゼルバン「ヌオッ！？」

ヤミがゼルバンの尻尾を掴み信じられない怪力で下の砂漠へと叩きつけた。

ゼルバン「グアッ！！」

ヤミ「お前の相手は私ですよ…」

ヤミはそう言ってゼルバンをにらみつけた。そのときのヤミの目は血で染まった様に真っ赤のままであった。

ゼルバン「こ…このガキィ～！！」

ゼルバンも激しくヤミを睨みつけ怒りの言葉を放った。

ゼルバン「調子こくのもいい加減にしろよぉ・・・」

ヤミ「それはこっちの台詞ですよ…」

ゼルバン「ああ！？」

ヤミ「もう…手加減できません…あなたを殺すまで私は止まらない…」

ゼルバン「はあ！？何言ってやがる！俺を殺すなんて無理に決まってんだろ！！さっきは油断したがな…今度はそうはいかねえ！！」

ゼルバンはそう言って超高速のスピードでヤミに攻撃を仕掛けた。

ゼルバン「吹っ飛べ虫けら!!」

しかし

バシッ!!
ドウン!!

ゼルバン「え…?」

ゼルバンは目の前の光景に目を疑った。なんとヤミが片手で自分の巨体を生かした頭突き攻撃を受け止めていたのだ。ヤミが受け止めた瞬間大きな衝撃が外へと走った。

ゼルバン（ば・・・バカな!?俺の超速攻撃を受け止めた!?しかも片手でだと!?ありえねえ!俺の巨体をこんな簡単に受け止めちまうなんて・・・こんな小せえ・・・ボロボロの人形のガキのどこにそんな力が!?）

そしてヤミが激しい殺気の籠もった赤い眼でゼルバンを睨み付けてこう言った。

ヤミ「なんだ…思ったより大した事ないんですね…」
ゼルバン「なんだとお!!調子に乗るんじゃねえ!!」

ゼルバンはそう叫ぶとヤミから距離を離し光の玉を作りそこから巨大な閃光を放った。それはなのはのスターライトブレイカー以上に巨大な閃光の砲撃だった。

ズドオオオオーーーーッ！！

ゼルバン「ギャハハハ！吹っ飛びやがれー！！」

ゼルバンは勝利を確信し大笑いを始めた。

ところが

ヤミ「フン…」

ズバア！

ゼルバン「なああ！！？」

なんとヤミが瞬時に右手を巨大な剣に変えて閃光を切り裂いた。真っ二つにされた閃光は後方で大爆発を起こした。

ゼルバン（う…嘘…だろ…！）

ゼルバンは目の前の光景に信じられないと言った顔をしていた。

ヤミ「もう…終わりですか？」

ゼルバン「ヒイイッ！！」

ゼルバンはヤミに対して再び恐怖を覚えた

ゼルバン（ど・・・どうなってやがんだ・・・！！さっきまで俺のほうが圧倒していたのに…）

ゼルバンは信じられなかったさっきまで自分の方がヤミを圧倒して

いたはずなのに今は圧倒的に自分が押されていたのだから

ゼルバン（ど…如何してなんだ…！？最強の生命体であるはずのこの俺が如何してあんな奴に押され始めてんだ…！？）

ヤミ「そろそろ…終わりにしますか」

ビュオン！！

ヤミはそう言って目にも留まらぬスピードでゼルバンの体を切り裂いた。

ゼルバン「グアアアアッ！！？」

ゼルバン（バッ…バカな！？俺よりも速い速度で攻撃してきているだと！？）

ヤミはゼルバンの叫び声など全く聞こえていないかのように次々と攻撃を仕掛けていく

ズバズバズバン！！

ゼルバン「グアアアッ！！クソがあっ！！」

シュルルン！！

ヤミ「むっ！」

ゼルバンは巨大な尻尾でヤミを捕まえそのまま締め付け始めた。

ゼルバン「ガハハハハッ！！このまま絞め殺してやる！！」

しかしヤミは少し表情を歪めずに髪の毛を刃に変え

ズバアアア！！

ゼルバン「ギャアアアアア！！」

それを巧みに操ってゼルバンの尻尾を細切れにした。

ゼルバン「グ…ガアアアーーーッ！！」

ゼルバンは今度は大きな羽を広げて羽をマシンガンのように飛ばして攻撃してきた

しかしそれも今のヤミには全く当たらずゼルバンの体はヤミの剣を受け続けてボロボロになっていく。

ゼルバン「グアッ！ギャアアアー！！」

ゼルバンは体中に走る激しい痛みに耐えきれなくなって来ていた。

ゼルバン「なッ…なんで…俺の攻撃が…あたらねえんだアアアア！！」

ヤミ「あなたもいい加減しぶといですね…」

ゼルバン「クソオッ！クソオオーッ！！」

ゼルバンは再び体当たり攻撃を仕掛けてきたが

ズバアアアッ！！

ゼルバン「ギャアアアアアアーーッ！！！」

ヤミはその攻撃をかわし瞬時にゼルバンの体をまたしても切り裂いた。ゼルバンはまた断末魔の叫びを上げた。

ヤミ「もういい加減終わりにしていいですか…？」

ゼルバン「ヒッ…ヒアアアアー」

ゼルバンは今までの中で心の底から震え上がり怯えた叫びを上げた。

ゼルバン（ば…化け物だ…！！）

ゼルバン「ジュッ…ジュド様ァァァァァァ！！タッ…助け」

ゼルバンはその場から全速力で逃げ出した。

だが

ヤミ「逃がしませんよ…」

ヤミは一瞬でゼルバンの目の前に移動した。

ゼルバン「ヒエエエエ…タッ、助け…」

ヤミ「いまさら遅いですよ…あれだけの事を言っておいて今更命ごいなど見苦しい…」

ズバアン！！

ヤミは右手の剣を巨大化させその巨大な剣でゼルバンを真っ二つ切り裂いた。

ゼルバン「そんな…俺は…最強の…生命…体……」

ドカアアアアン！！

ゼルバンは最後にそう言い空中で大爆発を起こし消滅した。

ヤミ「さようなら…愚かな…人…」

ヤミはそう言うとザフィーラの後を追って高速で飛行し始めた。

ヤミ（はやて…待っていてください…！！）

そして…その戦いの様子を見ていた者達がいた。

？「あれが…『金色の闇』…か…」

？「驚いたな…あのゼルバンをああもたやすく倒すとは…」

その様子を見ていた二人…それは同じ四天王のジハードとドラドスであった。

ドラドス「しかしわからねえな…どうしてゼルバンがああも容易く…途中まではゼルバンが圧倒的に押していたというのに…」

ジハード「恐らく…奴の逆鱗に触れたんだろう…」

ドラドス「逆鱗？だと…」

ジハード「ああ…恐らくゼルバンの奴が不用意に奴が大切に思っているものを必要以上なまでに侮辱したのが奴の敗北の原因だろう」

ドラドス「そんな…事でか？」

ジハード「ああいうタイプは怒りに支配されると信じられない力を発揮する…あの二人がいい例だろう…“白夜叉”と“紅夜叉”がな…」

ドラドス「なるほどな…」

ドラドスはジハードのその言葉に納得した。

ジハード「どうせ奴の事だ・・・奴の目の前であの主の小娘をいたぶり殺すとか奴らの努力など全て無意味だとか散々罵ったんだろう…相手の真の実力も分からずにな。相手はあの宇宙に名をはせた最強の暗殺者『金色の闇』だというのに…それに…あの守護獣まで殺そうとして如何する…奴は生贄だというのに」

ドラドス「愚かな奴だ全く…これから如何する?」

ジハード「とりあえず俺は予定通りに動く。我らの情報網の限りではもうまもなく闇の書は完成する筈だ。つまり我らが“王”の復活の条件がそろう」

ドラドス「そう言うことか…間もなくなのだな」

ジハード「ああ…さすがに“王”の前ではあの金色の闇や他の奴らの力など無意味だ…結局のところ奴らの怒力も無駄に終わる…」

ドラドス「ククク…そうだな…」

ジハード「では行くぞ。ドラドス」

ドラドス「ああ」

そう言って二人はその場から消えた。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生!』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『匿名希望』さんから質問だ。「支配者さんに質問です。この小説ではサウンドステージ編とかやりますか?」だそうだ。どうなの作者?」

支配者「いいえ、やりません」

銀八「即答かよ」

支配者「だって分からないんだもん」

銀八「まあとにかくそうらしいです。『匿名希望』さん。楽しみにしていたのならすいません。んジャ次の質問行くぞ。ペンネーム『黒神』さんから「質問します。

セイバーへ

神楽の二年後は、メッチャナイスバディでルックスもスタイルもいい美女となっています。
貧乳である貴女はそんな神楽の存在を憎いですか？（黒笑い）

弥彦へ

僕の小説に出てくるリリカルキャラの中で最も注目している人物は誰ですか？

斉藤へ

そば好きならば、同じそば好きの桂とは気が合いそうですか？」だそうだ。んじゃお前ら答えてくれ」

一つ目

セイバー「毎回毎回腹の立つ質問をしますね…。正直に言うと憎いです。私はもう死んでいるのと同じですからこれ以上は成長出来ませんし…未来のある神楽が羨ましいです…」

２つ目

弥彦「気になる奴か…銀時とスバルだな。銀時の剣はメチャクチャだけど凄いしスバルの神速の剣を見てたら剣心と似た感じがするし

な。ヅラもいるけど…どうでも言いやアイツは」
桂「ヅラじゃない。桂だ」

3つ目

斉藤「そんなはずがあるか阿呆。奴はテロリストだ。見つけ次第切り殺すのが俺の仕事だ。蕎麦談義などどうでもいい」
黒神「ホント真面目キャラですね」
斉藤「斬るぞ、阿呆。俺の後ろに立つな」
黒神「…すいません」

銀八「はいと言うわけだから『黒神』さん。廊下に立ってなさい」
剣心「じゃあ今回はここまででござる」
なのは・フェイト
『次回をお楽しみに！』

第五十三訓　おとなしい人ほど怒ると怖い（後書き）

支配者「さて、今回はいかがでしたか？」

銀時「ヤミ…恐えな…」

セイバー「本気で怒らせたら何されるか分かりませんね…」

支配者「まあ…実際本気で怒ったら相当恐いでしょうし…こんな感じにしました」

剣心「まあ、とりあえず次回もお楽しみにでござる」

第五十四訓　信じるべきは本当の仲間と理解者（前書き）

支配者「今回でついに闇の書が復活！の兆しがあります」

銀時「いよいよクライマックスか」

新八「つーか兆しですか…」

剣心「リリカル剣魂スペシャル始まるでござるぞ」

第五十四訓　信じるべきは本当の仲間と理解者

ヤミとゼルバンの戦闘が終わってしばらくたったその頃
海鳴大学病院の屋上では・・・
シグナムとシャマル、そしてなのはとフェイトが対峙していた。
銀時と剣心そしてナギ達は、それぞれ後ろから見ている。
なのは達はともかく、自分達は戦う訳には行かない…その為、静観を決め込んでいた。

なのは「はやてちゃんが…闇の書の主…」
シグナム「悲願はあと僅かで叶う」
シャマル「邪魔をするなら…はやてちゃんのお友達でも…！」

なのはとフェイトを睨みつけるシグナムとシャマル。
だが、それを見た銀時達が一歩前に出る。

銀時「おいおいちょっと待て！まずは話をだな…！」
剣心「お主達に話があるのだ！頼む少し話を…」
ナギ「少しおちつけ。とりあえずこいつらにも私が詳しい話を…」

剣心と銀時が出て来た事に若干動揺するシグナム。
シャマルも、警戒を強めた。

剣心「闇の書にはなにか裏がある！それにある男が関わって…」
銀時「そうだ！ジュドの野郎が何か企んでんだ！闇の書をこのまま復活させちまったら…」
ヴィータ「だぁぁぁっ！」

すると、剣心が言いかけた所に上空からヴィータがグラーフアイゼンを振りかぶり、
襲い掛かった。

ナギ「ヴィータ！バカ止せ！！」

ナギが静止の言葉をかけるがヴィータは止まらなかった。

銀時「っ！？」
なのは「銀さんっ！」

なのはが銀時の前に立ち、障壁を張ってヴィータの攻撃を防ぐ。
だが、ヴィータは力ずくでなのはと銀時を吹っ飛ばした。

なのは「きゃぁぁっ！」
銀時「うおぁぁっ！」

銀時は、咄嗟になのはを抱きしめ、なのはを庇って金網に激突する。

フェイト「なのは！！」
剣心「銀時っ！」
シグナム「うおおおおおっ！」

フェイトと剣心が吹っ飛ばされたなのはと銀時の方を見る。
だが、即座にシグナムがレヴァンティンでフェイトに斬り掛かって来る。
フェイトは高速移動でそれをかわし、バルディッシュを起動させる。

シグナム「管理局に、我らが主の事を伝えられては……困るんだ」

シャマル「私の通信妨害範囲から出す訳には…いかない……！」

シグナムとシャマルがそう宣言する。
そう、ここではやての事を管理局に報告されるわけにはいかない。
ならば、ここで口封じをしてしまうほかない。
つまり……武力でなのは達を制圧をするほかはないということだ。
そのためシグナムはレヴァンティンを構えた。
本当ならこんな事はしたくはない。だが主を…はやてを守る為には
こうする以外にない。
一方、銀時となのはの所には、ヴィータが迫っていた。
ヴィータはバリアジャケットを装着し、2人を睨みつける。

ヴィータ「邪魔、すんなよ…もうあとちょっとで助けられるんだ…
はやてが元気になって…アタシ達のとこに帰って来るんだ…！」

ヴィータの、グラーフアイゼンを持つ手が震えている。
目に涙を浮かべながら、ヴィータは言葉を繋ぐ。

ヴィータ「必死に頑張って来たんだ…元々関係ねー筈のヤミ達まで、
はやての為にアタシ達を手伝ってくれたんだ…もう、あとちょっと
だから…」

目から溢れる涙を止めず、怒りにまかせてヴィータがグラーフアイ
ゼンを振り上げる。
そして、カートリッジをロードした。

ヴィータ「邪魔、すんなあぁぁーーーーーーーーーーーーーーっ
！！！」

――ドオォォォォン！！

ヴィータがグラーフアイゼンを振り下ろす。
その衝突音と共に屋上の端が大爆発を起こす。
そして、その辺りが炎に包まれた。

だが、そこから出て来たのは・・・
白いバリアジャケットに身を包んだなのはだった。
ヴィータは激しくなのはを睨みつける。

ヴィータ「悪魔め…！」
なのは「悪魔で…良いよ…悪魔らしいやり方で、話を聞いてもらうから！」

なのはがそう言ってレイジングハートを構える。
しかしヴィータ花の葉のこれから言う事をが分かっている口調で話し始めた。
まあ…ナギから聞いたからね。

ヴィータ「テメェの話なんざ分かってんだよ…。闇の書を完成させたらはやてが大変な事になるとでも言いてぇんだろ！」
なのは「そんな…わかってるんならどうして闇の書を復活させようとするの！？」
ヴィータ「それ以外にはやてを助ける方法はねぇんだ！このまま闇の書が完成しなかったらはやては確実に死ぬ！お前ははやてにこのまま黙って死ねって言いたいのか！？」
なのは「そんなつもりは…！」
ヴィータ「うるせぇ！お前の話しなんか聞きたくねぇ！！」

ヴィータは下がって、シグナムの隣に立つ。シグナムも、レヴァンティンを右手に構えなおす。

銀時「シグナム…」
剣心「シグナム殿…」

煙の中から出てきた銀時、そして剣心はシグナムを見た。

シグナム「シャマル。お前は離れて通信妨害に集中していろ」
シャマル「うん」

言われた通りに、シャマルは後ろに下がった。
シグナムは両手でレヴァンティンを構える。
ヴィータもアイゼンを構えた。

シグナム「…すまない、剣心、銀時。我らを許してくれとは言わない。だが…」

シグナムは悲痛な顔をする。
前髪に隠れている目から、一筋の涙が零れる。

シグナム「我ら守護騎士は…主の笑顔のためならば、騎士の誇りさえ捨てると決めた」

目から涙が溢れ出る。
目の前の愛しき人に刃を向ける。
シグナムにとっては苦しくて仕方がない
心が張り裂けそうな思いだ。
しかし…自分にとって何より大切なのは主であるはやてだ。その為ならば初めて好きになった相手であろうとシグナムは刃を向ける。
はやての未来を守る為に

シグナム「もう…止まれんのだ！！」

涙を流しながら、シグナムは剣心に向かって叫ぶ。
剣心と銀時は、覚悟のこもったシグナムとヴィータの気迫を受け止めながら、目をそらす事なくシグナムとヴィータを見つめた。

剣心「フェイト殿…下がっていろ…」
銀時「お前もだ…なのは…」
フェイト「剣心…！」
なのは「銀さん…！」

銀時と剣心は二人を後ろに下がらせた。

ナギ「バカ！ハヤテ！ヴィルヘルミナ！何をしている！早く止めろ！！」

ナギはこれ以上見ていられなくなったのか。二人にそう命令する。
しかし二人は

ハヤテ「お嬢様・・・」
ヴィル「ここはあの二人に任せましょう」
ナギ「だ…だが…！」
イヴ「心配すんな。本当にやばくなったら力づくで止める」
ナギ「あ…ああ…」

イヴの言葉にナギは頷き後ろに下がった。
シグナム・ヴィータと対峙する剣心、銀時。

シグナム「はぁあああ！！」
ヴィータ「だあぁぁぁぁ！！」

シグナムが走り出す。
両手でレヴァンティンを握り、剣心に向かって突きを放つ。
ヴィータも飛び上がって銀時に向かってアイゼンを振り下ろした。
一方の剣心と銀時は、木刀さえ持たず、避けるそぶりすら見せない。

ヴィータ「え…!?」
シグナム「な…!?」
ハヤテ「なッ!?」
ヴィル「まさか・・・あの二人避けないつもりでありますか!!」
イヴ「やばい!」

この状況が不味いと判断したのか3人はとっさに動こうとした。
そしてシグナムとヴィータの中で迷いが生まれた。
その迷いが突きの軌道をズラした。レヴァンティンは剣心の右肩に刺さった。傷口から真っ赤な血が出る。
ヴィータのハンマーも頭部の右半分の少しずれたところに当たった。
しかしそれでも銀時の頭からは血が出ている。
その様子にこの場にいる全員が驚いた。

剣心「ぐぅ…!」
銀時「がッ…!」

剣心と銀時は歯を食いしばった。
シグナムとヴィータは、信じられないと言った顔で剣心と銀時を見た。
周りのみんなも、剣心と銀時の行動に驚いている。

ヴィータ「お…お前ら…なんで…?」
シグナム「…何故避けなかった…?お前達ほどの者なら…簡単にか

わせたはずだ…！」

僅かに声を震わせながら、シグナムとヴィータが言った。
剣心と銀時の実力ははっきり言って自分達を上回っている。なのにどうしてかわせる筈の自分達の攻撃を避けなかったのか二人には理解できなかった。

銀時「…こんなもん…はやてやオメーらが味わった苦しみや痛みに比べたら…どうってことねーよ」
剣心「その通りだ…。もうこれ以上自分たちだけで苦しまないでくれ…」

銀時は不敵な笑みを浮かべ剣心は悲しみの目を向けた。

シグナム「！！」

シグナムの体が震えた。
わざと受けたのか？
お前の命を奪っていたかもしれないのに……。

銀時「シグナム…ヴィータ…シャマル…あと…ザフィーラだっけ…？」

銀時が、守護騎士達の名前を一人ずつ言った。
名前を言われたヴィータ達は、少し驚いた顔をした。

剣心「もういいだろう。もうお主達だけで背負い込む必要はないんだ」

剣心は右手で、自分を刺してる剣を掴んだ。

剣心「よく聞け、シグナム殿、ヴィータ殿。拙者達は正義の味方でも、ましてや管理局の味方でもない」
銀時「そうだぜ。俺達はそんな奴らの味方じゃねえ」

真っ直ぐにシグナムを見つめながら、剣心と銀時は続けて言った。

銀時・剣心「テメーら（お主達）の味方だ」
シグナム「！！」

その言葉にシグナムは目を見開いた。
銀時の言葉はシグナムの心の奥にまで届き、シグナムは再び涙を流した。
後ろにいるシャマルも涙目になり、ヴィータも動揺している。

銀時「テメーらにとっちゃ、周りの奴ら全員が敵に見えてるんだろーが、それでも俺達はテメーらの味方だ」
剣心「そのとおりだ。おぬしたちは悪などでは決してない。一人の少女を救う為に全てを投げ捨てられる心優しきものだ。これ以上お主達だけが苦しまなくてもよい」

嘘偽りの無い銀時と剣心の言葉。
シグナムとヴィータは嬉しかった。武器を向けた自分に、そんな言葉をかけてくれるとは、思ってもいなかった。
シグナムは、剣心の右肩に刺したレヴァンティンを抜いた。
ヴィータもグラーフアイゼンを下げた。

シグナム「……すまない…剣心…銀時……」
ヴィータ「ごめん…あたし…」

顔を俯かせ、涙を流しながら剣心と銀時に謝った。

銀時「…謝る事はねーよ。お前らは、お前らの護りてぇモン護ろうとしただけだ」

剣心「その通りだ。護りたい者を守る為に必死になってしまうのは仕方のないことだ」

そう言って銀時と剣心は微笑んだ。

シャマルも武器をおろした。

ナギ「全く…冷や冷やさせおって…」

ハヤテ「もう少しで力付くで止めるところでした・・・」

ヴィル「でありますな…」

イヴ「ああ…」

様子を見守っていたフェイトとなのはは、とりあえず一安心した。

だが安心したのも束の間、突如青いバインドが現れ、剣心と銀時を拘束した。

シュバン！

銀時・剣心「なっ！？」

銀時と剣心は、自分達を拘束したバインドを見て驚いた。

ナギ「ヌワッ！？」

ハヤテ「お嬢様！がっ！？」

ヴィル「グッ！？」

イヴ「オウワッ！？」

シグナム・フェイト

「剣心！！」
なのは「銀さん！！」

シグナムとフェイトとなのはが叫んだ。
その時、

「よし。まずは一番厄介な奴らから拘束した」

上から声が聞こえた。
シグナム達は上を見た。そこには仮面の男がいた。

シグナム「貴様！剣心達を放せ！！」
「うるさいぞ。貴様らの役目はもう終わりだ」
シグナム「うわっ！？」

シグナムが仮面の男に立ち向かおうとするが、青いバインドに拘束されてしまう。フェイト達やヴィータ達も全員、バインドに捕まってしまった。

「よくやった」

そこへ、もう一人仮面の男が現れた。

なのは「えっ！？二人！？」

仮面の男達を見て、なのはは驚きの声を上げた。

剣心（やはり…！）
銀時（二人いやがったか…！）

剣心と銀時は仮面の男達を睨んだ。

「では、始めるとするか」

仮面の男が右手を上げた。すると闇の書が現れた。

シャマル「いつの間に！？」

闇の書を見て、シャマルが驚く。
いつの間にか闇の書が仮面の男の手に渡っていたからだ。

銀時「おい」

銀時が仮面の男達に声をかけた。
仮面の男達は、銀時に顔を向けた。

銀時「闇の書はまだ完成してねーぜ」
剣心「どうするつもりだ？グレアム殿の猫の使い魔達？」

不敵な笑みを浮かべながら銀時と二人を睨み付けながら剣心が言った。

「なっ！？」

銀時と剣心の言葉に、仮面の男達は動揺した。

「く…構うな。ソイツらが何を知っていても、今の状態では我々の邪魔はできん」

仮面の男が、闇の書を持ってる仮面の男に言った。

ナギ「そうは行かんぞ！お前たち出て来い！！」
「なッ！？」

ナギが叫ぶとしたからナギのデジモン軍団
スパロウモンに乗ったシャウトモン、メイルバードラモン、ベルゼブモン、グレイドモンが病院の上空から現れた。

銀時「あ…あいつら…！」
剣心「いつの間に…」
ナギ「これから起こる事は分かっていたからな。念の為にあいつらを待機させておいたんだ」

ナギが得意気にそう答えた。

「なッ…なんだと？こいつら…」
「いつのまに！？」
ナギ「お前達の目的は全部知っているんだ！今からお前達が闇の書を完成させる為にシグナム達のリンカーコアを抜き取る事もお前らが復讐の為にはやてを犠牲にしようとしている事もな！！」
「なにっ！？」

仮面の男がナギの言葉に驚いた。今から自分達が使用としていたことをナギに言い当てられたからだ。その目的でさえも

「貴様…！なぜそんな事まで知っている！？」
ナギ「誰がそんな事教えるか。お前達の思い通りにはさせん！！お前達そいつらを叩きのめせ！！」
シャウト「オッケー！お前らの思い通りになんてさせっかよ！この悪党ども！！」

スパロウ「そうだよ！チビ助を…ヴィータをお前らの復讐の犠牲になんてさせないぞ！」
メイル「貴様らの思い通りされるのは面白くない」
ベルゼブ「同感だな」
グレイド「貴様らの企みもここまでだ！！」
「グッ…！」
銀時「ハッ…こりゃあ」
剣心「形勢逆転でござるな」

仮面の男達が互いに背中を合わせてデジモン達を睨みつけた。そしてこの状況を如何したらいいのかと考え始めた。
その時である。

？「そこまでだ」
ナギ「ヌアッ！？」

ジャキン！

突如何者かが現れてバインドで縛られたナギの首筋に剣を当てた。

ハヤテ・ヴィル「お嬢様！」
スパロウ・シャウト・ベルゼブ・シグナム・ヴィータ・シャマル「ナギ（ちゃん）！」
グレイド・メイル『主！』
イヴ「金田！」
銀時「てっ…てめえは！」
剣心「ジハード！」

そう、ナギの首筋に剣を当てたのは魔人族四天王の一人、剛剣のジハードだったのだ。

ジハード「動くなよ貴様ら。動けばこの小娘の命はないぞ」
ナギ「ハッ…ハヤテ～」

ジハードはナギの首筋に剣を当てながらそう言う。

ハヤテ「お嬢様！」
シャウト「てんめぇ！汚ねえぞ！」
スパロウ「ナギを離せよ！」
ジハード「離して欲しければおとなしくしていろ。もちろん貴様らもな」

ジハードは剣心達を見ながらそう言う。

銀時「てめえ…！」
剣心「貴様…！」

剣心と銀時はナギを人質にしているジハードを睨み付ける。

ジハード「そんな目をしても無駄だ。今の内だお前達。早くそいつらのリンカーコアを奪え」
「ああ、分かった」

ジハードが仮面の男達にそう促した。仮面の男が闇の書が開いて、紫色に光る。

シグナム「う…うあああっ！！」

シグナム達から、それぞれ光の玉が現れる。

銀時「シグナム！！」
剣心「シグナム殿！！」

銀時と剣心が叫ぶ。

ジハード「最後のページは、不要となった守護者自らが差し出すのさ。これは決定事項だ」

ジハードの言葉の後に、闇の書が蒐集を始める。

シャマル「あああああ！！」

シャマルが闇の書に蒐集され、姿が消えた。
シャマル達は闇の書の一部。
どっちかというと魔力で出来た生命である。
つまりリンカーコアを抜き取られたらシャマル達は存在を維持できず消えてしまうのだ。

ナギ「シャマル！」
ハヤテ「シャマルさん！」
イヴ「海野！クソオッ！」

ナギや皆が苦虫をかんだように顔を顰める。
次にシグナムの蒐集が始まる。

シグナム「あああああ！！」

シグナムの体が下から消えていく。

銀時「シグナム！！」

剣心「シグナム殿！！」
ハヤテ「シグナムさん！」
フェイト・ナギ「「シグナム！！」」

叫びながら銀時達は、必死にバインドを解こうとする。

シグナム「け…剣心…皆…あ…主…はやてを……頼…む……」

そう言い残してシグナムも消えた。
剣心は目を見開いて、呆然と立ち尽くした。

ヴィータ「シャマル！シグナム！」

ヴィータが叫ぶ。

「所詮あれは呪われたロストロギア…あんな物で誰も救える筈が無い…」
ジハード「その通り、貴様らのやってきた事は全て無駄だ」
ヴィータ「……何なんだ？何なんだよテメーらは！？」

ナギを人質にしているジハードとそして仮面の男達に向かってヴィータが怒鳴る。

「プログラム風情が、知る必要はない」
ジハード「我らの目的などな」

ジハードと仮面の男が静かにそう言った。

ヴィータ「畜生！はやてをお前らの復讐の道具にされてたまるかアアアアア！！！」

ヴィータがそう言って仮面の男に向かってグラーフアイゼンを振ろうとするが

ジハード「じっとしていろ!!ゴミが!!!」

ドカァァァァン!!

ヴィータ「うわあぁぁぁぁぁぁ!!」

ナギ「ヴィータ!!」

ジハードが右手から闘気弾を放ちヴィータを吹き飛ばした。

「プログラム風情が無駄な足掻きを」

「貴様らに出来る事などもう何もないのだ」

仮面の男たちが吹き飛ばされたヴィータに対してバカに仕切ったようにそう言った。

その何気なく言った言葉が、あの男達の怒りを買うとも知らずに。

銀時・剣心「……じゃねーぞ（な）」

銀時と剣心が小さく呟いた。

「ん?」

ジハード「何か言ったか?」

仮面の男達とジハードが銀時と剣心を見た。

ヴィータも、なのはもフェイト、全員の視線が銀時と剣心に集まる。

銀時「ふざけんじゃねーぞ」
剣心「ふざけるなよ…貴様ら…」

顔を伏せたまま銀時と剣心が言った。

銀時「プログラム風情？ふざけんなよ」
剣心「貴様ら下衆どもに、シグナム殿達の何がわかる…」

明らかに銀時と剣心の雰囲気が変わった。
荒々しい怒りの感情が出ている。
次の瞬間、銀時と剣心は顔を上げて仮面の男達を鋭い眼で睨んだ。
その眼には怒気以外に、凄まじい殺気も含まれていた。

「な…！！？」

滅多に放たない、銀時と剣心の凄まじい殺気を受けて、仮面の男達とジハードは身を震わせ冷汗を流した。

銀時「テメーら如きが、シグナム達の気高い魂を汚すんじゃねェ」
剣心「そうだ…貴様ら如きにそんな事を言う資格などない」

血が出るくらいに拳を強く握る。腕に力を入れる。

ヴィータ「銀時…剣心…」

ヴィータは驚いていた。敵である自分達のために、銀時は仮面の男とジハードに怒っている。ヴィータは、その事が少し嬉しかった。

銀時「このクズ野郎どもがァアアア！！シグナム達を返しやがれェエエエ！！！」

剣心「ヌァァァァァァァァァ！！」

怒りの形相で銀時と剣心が叫ぶ。
更に腕に力を入れて、無理矢理バインドを壊そうとする。すると、バキバキッと音を立てバインドにヒビが入った。

ジハード「な…！？」
「な…何！？馬鹿な！腕力だけでバインドにヒビを……！！？」

仮面の男達とジハードがうろたえる。
腕力だけであの強力なバインドに皹を入れるなど信じられなかったからだ。

「守護騎士達に傷を受けた体で…どこにあんな力が！？」
「こ…コイツら本物の化物だ！！」

銀時と剣心の力に仮面の男達は恐怖した。

ジハード（グッ…まさか奴らがこれほどまでとは…）

ジハードも目の前の光景に思わず心の中でそう呟いた。まさか腕力だけであの強力なバインドに罅を入れられるとはジハードといえど考えていなかったのである。あの二人…リーゼ姉妹もはっきり言って相当強力な魔導師である。なんせあのクロノの師匠だ。その二人が架けたバインドなのだからかなりの拘束力があるはず、それを力だけで罅を入れたのだからさすがのジハードも驚きを隠せなかった。

「うぉおおお！！」

銀時と剣心は雄叫びを上げながら、必死にバインドを壊そうとする。

ヴィータ「が…頑張れ銀時！もう少しだ！！」
ナギ「剣心も頑張れ！！」

ヴィータとナギが銀時達を応援した。

なのは「銀さん！」
フェイト「剣心！！」
イヴ「行けお前ら！！」
ヴィル「坂田銀時！緋村剣心！」
シャウト「いいぞお前ら！！」
スパロウ「いけいけー！！」

なのはとフェイト、ハヤテ、イヴ、ヴィルヘルミナも、銀時と剣心の名を叫ぶ。
だが、そこで仮面の男が動いた。

ドカッ！

銀時・剣心『え？』

銀時と剣心それぞれの腹に蹴りを入れて、屋上の外に突き飛ばした。

フェイト・なのは「え？」

フェイトとなのは目を見開いてその光景に驚いた。

「これで終わりだ」
ジハード「いくらお前達が人外の化物でも、この高さから落ちたら命はあるまい」

銀時と剣心を見下ろしながら、ジハードと仮面の男が言った。

銀時・剣心「うぁあああああ!!」

銀時達はバインドで縛られた状態で、二十階のビルの高さから地面に向かって落下した。

フェイト「剣しいぃぃぃん!!」
なのは「銀さぁぁぁぁん!!」

フェイトとなのはが涙目で銀時と剣心の名を叫んだ。
止まる事なく、銀時と剣心は落ちていく。

ナギ「お前達!早く銀時たちを助け、ムグッ!」
ジハード「余計な事を言うな小娘。貴様らも動くなよ。動けばこの小娘の命はない」
「ぐううっ…!」

全員が激しくジハードを睨みつけた。
銀時と剣心の意識はそこで消えた。
そこに

ザフィーラ「でえええええっ!てやぁぁーーーーっ!!」

遥か遠方からザフィーラが猛スピードで飛行して来た。

ナギ「バカ!来るな!!」

ナギは止めるように叫ぶがザフィーラは止まらない

ザフィーラは渾身の一撃を仮面の男にぶち込もうと拳を突き出した。
が、仮面の男は障壁を展開し、ザフィーラの拳を易々と防いでしまう。

「そうか・・・もう一匹いたな・・・」
ジハード「早く済ませろ…」
「ああ…」
『蒐集』
ザフィーラ「ぐっ…ぐおぁっ…ぐぅおおおおおおっ!!」

蒐集されながらも、更にもう一撃を加えようとするザフィーラ。
だが、その一撃も虚しく防がれてしまうのだった。

ザフィーラ（ある…じ……）

そしてザフィーラも仮面の男達にやられ屋上に落下して気絶してしまった。

ジハード（ククククッ…これで条件が揃った。もう間も無く『あの方』復活の準備が整う…ハハハハッ！）

ジハードはこの光景を見て心の中で笑っていた。
もう間も無く蘇るであろう自分達“魔人族の王”の復活を喜びながら

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『真王』さんから「真王「ありゃりゃ、四天王の割にはあっけないな」

勇斗「全くだ。俺なら四天王どころかその王ごとぶち殺せるけどな」

真王「当然だな。勇斗は神が１０００人来てもなぶり殺しに出来るからな」

勇斗「ジハードもドラドスも何時かあっけなく死ぬな」

真王「まぁリーダー的な奴はまだ生き残るけども…」

勇斗「んじゃ銀魂組とリリカル組以外の奴らに質問だ。『もし世界を半分くれてやろうと言われたら受け入れて自分の物にするか？』」

真王「俺も同じく『次のうちこのモンスターは嫌だ！ってのはどれですか？

屍族・ゾンビキング（ゾンビ）
死骨族・スカルキング（骸骨男）
妖霊族・ファントム（ゴースト）
毒虫族・ベノムワーム（デカイ毛虫）
邪龍族・ババハムート（ドラゴン）
魔道巨人族・マスターゴーレム（ゴーレム）
夜魔族・リリス（サキュバス）
猫娘族・バステト（ネコマタ）
死告族・デス（死神）
殺人機族・キラーマシンΩ（キラーマシン）
鳥女族・ハーピィクイーン（ハーピィ）
魔蛇族・ラミアクイーン（ラミア）
人魚族・リヴァイアサン（マーメイド）
龍人族・ドラゴンキング（リザードマン）
邪鬼族・ギガース（オーガ）』」

奏「あ、最後は私が、『そう言えばここまで出た作品ってどれだけあるの？』」

真王「確かに―ドレスとるろうとハヤテと…まだありそうだな」

勇斗「ま、頑張ってくれよな」

真王「それじゃ」はい、ではお答えどうぞ」

セト「僕だったらそいつをぶっ殺して世界全部をいただくな」
ソルヴァ「私も同じだぁ！！」
ブレイド「俺様もだ！！」
イヴ「同じくだな」

それ以外『興味ない（です）』

2つ目の質問

雪路「ベノムワームが嫌かもね…毛虫だし」
斉藤「俺に苦手な者などない。全て斬り殺すだけだ。まあ…しいて言うなら女形のモンスターだな」
ヒナギク「ハーピィがいやかもね…だって高いところに連れて行かれそうだし…」
ナギ「恐いのと暗いのが苦手だから…やっぱりお化けのファントムだろう」
ハヤテ「デスが嫌です。なんか不幸の象徴みたいですし…」
ヴィルヘルミナ「苦手な物等考えた事も無いのであります」
マリア「やはり…虫系のベノムワームですわね…ゴキブリみたいな感じだったらもっと嫌ですわ…」
綾子「まあ…やっぱりベノムワームかしらね…」
護「僕はファントムでしょうか…」
ブレイド「女の子は傷つけたくないから…リリスじゃないか?多分…」
イヴ「僕には苦手な物なんて無いぞ。まあお化けのファントムが嫌かな。多分…」
クルス「恐いのが大体苦手なんで…強そうなのは皆苦手でしょうか」
アルカ「苦手な物なんて考えた事無いから分からんが…まあやっぱり虫のベノムワームかな…一応私だって女だし」
セト「僕も同じくだ」
ソルヴァ「私もそうです」
未央「未央も虫さんとお化けが苦手かも」
梔『私も同じく』
セツナ「私もそうね」
イスミ「虫が苦手なので…ベノムワームかもしれません」

凛「私もそうかもね。お化けとかは見慣れてるし…」
美琴「骸骨とかかしらね。多分」
黒子「お姉さまが苦手な物は私も苦手です」
箒「まあ…でかい毛虫か幽霊の類だな…苦手な物は…」
ラウラ「わたしもそれだな。特にゾンビは勘弁してくれ」
悠二「僕もゾンビとかはちょっと」
ヤミ「苦手な物なんて考えた事無いんで分かりません」
シャナ「私も、幽霊とかも平気だし、怪物とかも斬るしね」
セイバー「私は…バハムートでしょうか…」

んで3つ目

支配者「これまで出た作品は「銀魂、るろうに剣心、リリカルなのは、灼眼のシャナ、ハヤテのごとく、Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ ｎｉｇｈｔ，ＴｏＬＯＶＥる、とある魔術の禁書目録、護君に女神の祝福を!、デジモン、ＮＥＥＤＬＥＳＳ、ＩＳ（インフィニット・ストラトス）、ＢＬＡＣＫ ＣＡＴ」などです。私適にはまだ増やすつもりです」
銀時「まだ増やすのかよ…捌ききれんのか？」
支配者「だって…そうしないとストーリが出てこないんだもん…」
銀八「はい、まあこんな所です。と言う訳で『真王』さん。廊下に立ってなさい」

なのは「では次の質問です。ペンネーム『マケマケ』さんから「剣心に質問、そういえば今、比古清十郎は陶芸家のままですか？」

剣心「多分、そうだと思うでござるよ。人嫌いの師匠は目立たない仕事を好むでござるから」
銀時「まあ…あの親父はそうだろうな」
銀八「まあ、そうらしいです。てな訳で『マケマケ』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「では、今回はここまででござる」
支配者「次回もお楽しみに！」

第五十四訓　信じるべきは本当の仲間と理解者（後書き）

支配者「はい、今回の話いかがでしたか？」

銀時「ジハードの野郎…卑怯なやつだぜ…！」

桂「うむ、武士の風上にも置けぬ…」

新八「いや、アレ武士じゃないでしょ」

支配者「では次回もお楽しみに」

新八「アレ！？また僕の事無視！？」

第五十五訓　人の心は追い詰められると闇になる（前書き）

支配者「今回でいよいよ闇の書復活です」

銀時「リリカル剣魂スペシャル始まるぜ」

第五十五訓　人の心は追い詰められると闇になる

その頃、病院の屋上から落とされた剣心と銀時は意識を取り戻した。
ゆっくりと瞼を開ける。視界がぼやけている。背中に固く冷たい感触がする。
目の前は真っ白だった。いや、黄色い部分もある。だんだん視界がハッキリしてきた。そして、真っ白いモノの正体がわかった。
正体はエリザベスだった。

銀時「うぉおおお!!?」
剣心「のわあぁぁぁ!!?」

ビックリした銀時と剣心は、慌てて起き上がった。

剣心「エ…エリザベス殿か!?」
銀時「ビックリさせんじゃねーよコノヤロー!!」

銀時がエリザベスに向かって怒鳴る。
どうやら剣心と銀時は、エリザベスに助けられたようだ。
すると、シグナム達にやられた傷が痛み出した。それで思い出した。
屋上での出来事を。仮面の男達とジハードが現れ、シグナム達が消えた事を。

剣心「くそっ!」

銀時「あのクソ野郎共！」

剣心と銀時が傷を押さえながら立ち上がろうとした。
その時、自分達はまだバインドで縛られてる事に気付いた。

？「ナギ殿の指示通りにエリザベスを付近に待機させておいて正解だったな」
？「ホントね」
？『大事がなくてよかった』

背後から声が聞こえた。
後ろを見ると桂と雪路と梔がいた。

剣心「小太郎！雪路殿！梔殿！」
銀時「ヅラとヅラ姉それに梔！何でこんな所に！？」
桂「ヅラじゃない桂だ。ナギ殿の指示で念の為に姉上達とここに待機していたのだ」
雪路「そうよ。万が一の為にね」
梔『その通り』

桂と雪路がそう言った。梔もスケッチブックを見せながらそう答える。ナギは念には念を入れて桂達にも病院の近くで待機しておくように支持していたのだ。
そして鞘から刀を抜いて構えた。

桂「バインドを斬る。二人とも動くなよ」

桂は刀を振り下ろし、剣心と銀時を拘束してるバインドを斬った。

桂「一体何があった？」

刀を鞘におさめながら、桂が尋ねた。

銀時「仮面野郎どもと魔人族が現れやがった」
剣心「そして…シグナム殿たちが消されてしまった…」
桂「なに!?それをさせない為にナギ殿が手を打っていた筈だぞ!?どういう事だ!」

驚きながら桂が尋ねた。ナギはシグナム達の事を考え自分のデジモン達を１０日前から常に病院の屋上に何体か待機させておいたのだ。はやての安全を護る為でも合ったが、万が一原作通りにシグナム達が消されはやての心が絶望で染まらないようにするのが目的…それがナギの狙いだった。しかし魔人族というイレギュラーの存在のためにその立てていた計画も脆くも崩れ去ってしまったのであった。

銀時「あいつらナギを人質にして無理やりシグナム達のリンカーコアを蒐集しやがったんだ」
桂「なんと卑怯な…」

その時、ビルの屋上で大爆発が起こった。
三人は屋上を見上げた。

桂「何だ!?」
雪路「何事!?」
梶『やな予感』
銀時「まさか闇の書が!?」
剣心「どうやらそのようだ」

銀時と剣心は舌打ちした。

「銀さぁあああん！！」
「剣しぃぃぃん！！」

自分を呼ぶ声が聞こえた。
銀時は声がした方を見た。新八、神楽、シャナ、セイバー、セツナ、未央、ブレイド、セト、ソルヴァ、美琴、黒子、クルス、アルカ、護、綾子、定春、お妙、薫、左之助、九兵衛、ヒナギク、東城がこちらに向かって走っていた。

剣心「皆の衆！」
銀時「お前ら！」
神楽「銀ちゃん！無事アルカ！？」
薫「剣心も大丈夫！？」

新八達は銀時達の前に来た。

銀時「お前らどうしてここに？」
お妙「プレシアさんに頼んで、連れてきてもらったのよ」

銀時の問いに、お妙が答えた。

剣心「プレシア殿に？」

剣心がそう言った。

左之助「ああ…それより何だよこの状況！」
美琴「何が起こってるの！？」
剣心「闇の書が…復活する…」
新八「ええ！？」
神楽「マジアルか！？」

銀時「ああ…このままじゃ全てを破壊するまで暴走しちまう…何とか止めねえと」

そして、

「管理局の魔導師…なのはとフェイトそれにほかの奴らは大丈夫か…？」

「奴ら用のために作り上げた八重の超バインドに大型のクリスタルケージだ…いくらなんでも抜け出すのに数分は掛かる」

ジハード「ならば早く済ませろ」

なのはとフェイト、ナギ達はバインドで縛られた上、檻状の巨大なクリスタルに閉じ込められていた。

外部からの力が無い限り、すぐには脱出出来ないだろう。

デジモンたちも閉じ込められており内側からの脱出も出来ない

そんなやり取りをしている間に、仮面の男達は・・・

「闇の書の主…目覚めの時だな…」

「因縁の…終焉の時だ…」

なんと、なのはとフェイトの姿に変身する。

なのは「ええっ！？」

フェイト「私達の姿に!?」

クリスタルケージの中から様子を見ていたなのはとフェイトが驚いた。

無理もない、仮面の男達が自分達の姿になったのだから

ナギ「クソッ!あいつらやっぱり…」

イヴ「何がやっぱりなんだよ!」

ナギ「あいつらお前らのせいにしてはやてに絶望を味あわせるつもりだ…」

なのは・フェイト

『ええっ!?』

なのはとフェイトはナギの言葉に驚いた。

フェイト「でもどうして私達の姿を?」

ナギ「友達だって信じている奴らに家族をやられた方がより絶望しやすいだろ…あいつら闇の書…いや『夜天の書』を封印しやすくする為にわざとはやてを絶望のどん底に叩き落すつもりだ」

なのは「そんな…はやてちゃん!」

なのはは悲痛な叫びを上げた。

ナギ「くそっ!お前達早くこれを破れ!!」

スパロウモン「さっきからやってるけど…」

シャウトモン「これメチャクチャ硬いんだよ!!」

グレイドモン「どうやら我々の事も考えて相当強化しているようですね」

ナギ「くそっ!アイツらめ!!」

仮面の男達は屋上に魔法陣を使ってはやてを呼び寄せる。

はやて「なのはちゃん…フェイトちゃん？何なん…何なんこれ…？」

苦しそうにしながらも、辺りを見回すはやて。

そして彼女の前に、力無く倒れているザフィーラがいた。

さらに、仮面の男が変身した偽者のなのはとフェイトの二人が空中で浮いていて、その二人の間に、空中で縛り付けられていて、力なく項垂れているヴィータがいた。

それに構わず、仮面の男達は喋り始める。

「君は病気なんだよ…闇の書の呪いって病気…」

「もうね…治らないんだ…」

はやて「え……？……呪い？」

はやてには目の前に浮かんでいるなのはとフェイトの言葉の意味が分からなかった。そもそも自分の病気が呪いだなんて事、自体彼女は知らなかったのだ。

「闇の書が完成しても…助からない…」

「君が救われる事は…無いんだ…」

2人の言葉を聞いたはやては、ショックを受ける。

しかし、すぐにヴィータとザフィーラを見る。

はやて「そんなん、ええねん…ヴィータを離して…ザフィーラに何

したん…？」
「この子達ね…もう壊れちゃってるの…」
「私達がこうする前から、とっくに壊れていた闇の書の機能も、まだ使えると思い込んで無駄な努力を続けてた…」
はやて「無駄ってなんや！？シグナムは…シャマルは…」

はやてが後ろを見ると・・・シグナムとシャマルの服だけが残されていた。

はやて「あれって…シグナムとシャマルの服…？な…なんで…二人の服だけ…」
「先に壊れたからだよ…そこの二匹は…」
はやて「！！」

それを聞いて、はやての顔が絶望に染まり始める。
いくら目の前で起きていることが真実なのだとしても、こんな真実を彼女に受け入れられるはずがなかった。
嘘だと言って欲しい。
如何して…如何してシグナム達がこんな目にあわなければいけないのかと…

「こっちの二人も…もう壊れてる」
「壊れた機械は…役に立たないよね…」
「だから壊しちゃおう…」
はやて「ちょ…やめて…そんなんやめてぇぇぇぇぇ！！」

二人だけは助けて欲しい…そう必死に叫ぶはやて。
だが、２人には届かない。

「止めて欲しかったら・・・」

「力ずくでどうぞ・・・」
はやて「なんで・・・なんでやねん！なんで・・・こんな・・・」

はやては何故二人がこんな事をするのか理解できなかった。
どうして二人がヴィータ達をこんな目に合わせるのか…
しかし、はやては知らなかった。
この二人が偽者のなのはとフェイトだという事に

「ねえ、はやてちゃん・・・」
「運命って残酷なんだよ・・・」

そして、次の瞬間・・・ヴィータとザフィーラははやての目の前で・・・消されてしまった。

はやて「あ…あああああ……」

はやての顔は絶望に染まりきり・・・瞳が赤に変わる・・・
そこにベルカ式の魔法陣が展開され・・・はやての目の前に闇の書が転送されて来た。
白かった魔法陣は紫…否、闇の色に染まって行く。

ジハード（ククククク…確かに運命は残酷だ。だがそれは貴様らにも言えること・・・バカな奴らめ…貴様らももうすぐ消されるとも知らずにな。この世界と共に……せいぜい今の内に喜んでいるがいい、今日が貴様らの終焉の時でもあるのだ）

ジハードが顔をにやけさせ心の中でそう呟きながら仮面の男二人を見つめた。

「「「はやて！」」」

「はやてちゃん！」
「おい！しっかりしろ！」
「八神様！」
「落ち着くんだ！あれは偽者…！」

漸くバインド＋クリスタルケージから抜け出したなのはとフェイトそしてナギ達。
皆がはやてに呼びかけるが・・・その声は最早届かなかった。

はやて「う…うあぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！」

はやてが叫んだ直後・・・屋上で大爆発が起こった！
そして、闇色の光は天を衝くかのような巨大な柱となった。

はやて「我は闇の書の主なり…この手に、力を…封印、解放」
『解放』

はやての身体が段々変化していく。
身長が一気に伸びて行き、体も成長する。
栗色の髪も伸びていき銀髪のロングヘアーとなる
漆黒のバリアジャケットに身を包み、頭部と背中には合わせて６枚の漆黒の羽根が生えている。
その姿に、もはやはやての面影は全く無かった。
ただ破壊と殺戮を繰り返すだけの、生体兵器としての存在がそこにあるだけ。

闇の書「また、全てが終わってしまった。一体幾度、こんな悲しみを繰り返せばいい？」
なのは「はやてちゃん！」

フェイト「はやて…」
ナギ「不味い！」

目を閉じたまま天を仰ぎ、涙している彼女になのはとフェイトが呼びかけるが、
今の彼女には届いてはいない。

ナギ「こんな形で完成させるつもりはなかったのに…！」

ナギは苦虫をかんだようにそう言った。
ナギの計画はこうだった。
闇の書を完成させるといってもこんな形で完成させるつもりはなかった。
闇の書が完成させた瞬間ヴィルヘルミナの包帯で動きを封じそこからデジモンたちの攻撃でおとなしくさせた後原作通りの方法で闇の書を説得し後で防御プログラムを何とかするつもりだった。
しかし自体は最悪の方向に進んでしまった。

ナギ「・・・私のせいだ…私がこんな奴に捕まったから…本当ならシグナム達を護ってやれるはずだったのに…」
ハヤテ「お嬢様…」
闇の書「我は闇の書。我が力の全ては――」

「デアボリック・エミッション」

彼女が空へ向かって右腕を挙げると闇の書が光を放ち、彼女の右手の上に闇色の球体が現れ、一気に巨大化していく。

闇の書「主の願いのそのままに・・・」
ジハード「くくく…遂に覚醒したようだな今は退くとしよう…」

ジハードはそう言うと、ワープ用の魔方陣でその場を離脱する。
その頃、別のビルの屋上では、仮面の男が魔法陣を展開していた。

「よし・・・結界は張れた。デュランダルの準備は？」
「出来ている・・・」

1人の仮面の男が、カードを出す。
そして・・・なのは達のいる方を見つめた。

闇の書の意志が作り出した巨大な球体が、空に昇って行く。
これはどう見ても攻撃にしか見えない。

「ぁ・・・っ！」
「空間攻撃・・・！！」
ナギ「不味い！お前たちはなれろ！！」

なのはとフェイトがそれを見て驚愕する。
あんなのを生身で喰らえば、間違いなく死ぬだろう。

「闇に・・・染まれ・・・」

巨大な球体が、突然弾けるように広がる。
「ラウンド・シールド」
ヴィル「クッ！」

なのはは咄嗟にフェイトの前に出て、腕を突き出す。
ヴィルヘルミナもとっさに大量の包帯で防御幕を作る

地上にいる銀時達にも、黒い球体は迫っていた。

美琴「なッ！何よあれ！？」

セイバー「凄まじい魔力の塊です！あんなの食らったら一溜まりもありませんよ！！」

桂「いかん！逃げろ！！」

桂が叫んだ。

新八「逃げるってどこに！？」

クルス「どこにも逃げる所なんてありませんよ！？」

パニックになりながら、新八とクルスが叫んだ。

すると九兵衛が近くのマンホールの蓋を斬った。そして斬った蓋を外した。

九兵衛「この中に逃げ込め！」

マンホールの中を指差しながら、九兵衛が叫んだ。

銀時「でかした九兵衛！！」

東条「さすが若！」

一人ずつマンホールの中に飛び込む。

が、

桂「俺が先だ！」

左之助「いーや！俺が先だ！！」

雪路「あたしを先に入れて！」

ソルヴァ「私が先に決まってるだろーが！！」

銀時「ざけんな！傷を負ってる俺が先だろーが！！」

神楽「なに行ってるアルか！ここは海鳴市の女王である私が先アル！！」

ブレイド「ざけんじゃねえ！下僕のお前らが後に決まってんだろうが！！」

美琴「何言ってんのよ！レディーファーストに決まってんでしょ！！」

黒子「お姉さまの言うとおりですわ！！」

マンホールの入口で、桂と銀時と左之助と雪路とソルヴァとブレイドと神楽と美琴＆黒子が喧嘩する。

新八「いや、こんな時にまで喧嘩すんな！！」

剣心「こんな時まで言い争いをして如何する!!」

新八と剣心が怒鳴りながら、銀時達を無理矢理、中に引っ張った。
銀時達は間一髪、黒い球体の攻撃を免れた。
数秒の後、黒い球体は消えた。銀時達は外に出た。外に出た銀時と剣心は、闇の書がいる屋上を見上げた。

東条「若、姫。とりあえず今は、ここから離れましょう」
九兵衛「ああ」
ヒナギク「そうね」

東城の言葉に、九兵衛とヒナギクは頷いた。

新八「銀さん!剣さん!一旦、僕達もここから離れましょう!」

新八は銀時と剣心に向かって叫んだ。
だが銀時と剣心は、ジッと屋上を見つめてる。

新八「銀さん?」
シャナ「剣心?」
セイバー「如何したんですか?さあ早く!」

新八とシャナは首を傾げセイバーは二人を急がせた。

銀時「お前らは先に行け」
剣心「拙者達は闇の書に会ってくる」
新八「えっ!?」
神楽「二人とも!本気アルカ!?」

新八と神楽が驚いた。

周りにいる桂達も驚いている。

銀時「悪ぃな。シグナムに、はやての事頼まれちまったからよ」
剣心「それにフェイト殿やナギ殿たちもいる。彼女たちをおいて行く訳にも行かぬだろう」

新八達に振り返りながら、銀時と剣心が言った。

新八「そんな…無茶ですよ、銀さん達！そんな体で！」

傷ついた銀時と剣心の頭と体を見ながら新八が叫んだ。

銀時「ヅラ、コイツらの事は任せたぜ！」

銀時は走って、ビルの中に入った。

新八「銀さん！！」
シャナ「ちょっと銀時！剣心！」
薫「剣心！待って！」

新八とシャナと薫が二人を追い掛けようとした。
だが桂とセイバーと左之助に肩を掴まれて、止められてしまう。

新八「桂さん！？」
シャナ「セイバー！？」
薫「ちょっと！何よ左之助！離しなさい！！」
セイバー「私達にはふたりは止められません」
左之助「行かせてやれ。譲ちゃん」
桂「そうだ。二人の事を思うならな。第一言ったところであの二人は止まらんだろう」

険しい表情でセイバー、左之助、桂が言った。
新八とシャナと歯を食いしばった。悔しくて拳を強く握った。
薫は辛そうな顔をしていた。

九兵衛「…行こう、皆。ここに居ては、彼らも安心して戦えない」
アルカ「そうだ…とりあえず一度退いて体勢を立て直した後、再び戻ってこよう」

九兵衛とアルカがそう言った。
二人の言葉の後に、新八達は走ってビルから離れた。桂は一旦、足を止めて銀時と剣心が入っていったビルの入口を見た。

桂「…ヅラじゃない、桂だ」

桂は再び前を向いて走り出した。

その頃仮面の男達は・・・

「持つかな?あいつら・・・」

「暴走開始までの瞬間までは・・・持ってほしいな・・・」

二人の仮面の男…リーゼ姉妹が上空にいるなのは達を見つめながらそう言った。

彼女達の最終的な目的は、闇の書の完全封印。

それも、八神はやて諸共。

闇の書を完全に封印するには、術者を介してその存在が前に出ている必要があるのだ。

だからこそ、リーゼ姉妹ははやてにあれほどまでの悪夢を見せ、そして覚醒させたのだ。

だが、その時だった。

しかしそのとき紫色のバインドが二人を捕まえた。

「なっ！？」

「これは！？」

？「捕まえたわよ」

二人の前に一人の魔導師が現れた。

「お…お前は！？」

魔導師を見て、仮面の男達は驚いた。

魔導師は、長い黒髪の女性で片手に杖を持ち、黒いマントを羽織っていた。

魔導師の名は、プレシア・テスタロッサ。

プレシア「さぁ。素顔を晒しなさい！！」

プレシアが杖を仮面の男達に向け、紫色の光を放った。

「うぁあああ！！」

光を浴びた仮面の男達は叫んだ。

プレシア「変身魔法を解除させてもらうわ」

仮面の男達を睨みながら、プレシアは呟いた。

仮面の男達の変身魔法が解け、正体を現した。仮面が床に落ちる。

そしてロッテとアリアが本来の姿に戻った。

アリア・ロッテ「プレシア・テスタロッサ！」

アリアとロッテは、バインドで拘束されたままプレシアを睨んだ。

プレシア「剣心の言葉通りだったわね」

二人を見ながら、プレシアが言った。

ロッテ「剣心!?やっぱりあいつら…気付いて……!!」

ロッテは悔しそうに顔を歪めた。

プレシア「さて。話があるから、二人ともついてきてもらうわよ」

プレシアは、二人に冷たい視線を向けた。
その時である。

ズバァン!

プレシア「なッ!?」

赤いバインドが突如プレシアを拘束した。

??「困るよプレシア君。私の脚本を勝手に変えてもらっては…」

プレシア「その声は…ジュド!」

プレシアが畏怖の念をこめてジュドの名前を叫んだ

ジュド「君はこの場から退場したまえ」

ドカアアアン!!

プレシア「キャアアア！！」

プレシアはジュドの火炎弾を受けて屋上から下へと落ちていった。

ロッテ「ジュド！助かった！」
アリア「早くバインドを解いてくれ！」

ロッテとアリアはそう叫ぶ。
しかし、その時ジュドは二人に向かって怪しい笑みを浮かべた。

ジュド「まあまあ・・・その前に私は君達に言う事があってね・・・」

ロッテ「言う事？こんな時に何だ一体！？」
アリア「そんな事より早くバインドを！」

二人はジュドの言葉にそう叫んだ。
暴走まで時間がないのに呑気に世間話をしている場合じゃない
それなのにこの男は何を言っているのだろうかと二人はそう思ったのだ。
しかし…その瞬間であった。次にジュドが発した言葉に二人は思わず声を失った。

ジュド「そんなに慌てなくてもいいだろう。とにかく聞いてくれたまえ私からの君達への……お別れの言葉を」
ロッテ・アリア『……え？』

ズバァ！！

ジュドは瞬間的に炎の剣を作り出し二人を切ったのだ。

ロッテ「アアアッ！？」
アリア「グアアアッ！？」

斬られた二人はその場でバランスを崩し血を流した。

ロッテ「ジュ…ド…な…ぜ…！？」
ジュド「なぜ？どういう意味かな？それは」
アリア「どう…して…私…達に…攻撃を…」
ジュド「ハハハハ…何だそんな事か、何を言い出すかと思えばそんな事決まっているだろう？用済みの君達を始末しにきたんだよ」
ロッテ・アリア
『なっ！？』

ジュドは笑いながら二人の質問にそう答え、二人は驚愕した。

ジュド「もう君達には何の用もないからね・・・これ以上勝手な事をされては困るから君達を消しにきたのだよ…プレシア君が君達の正体に気づいていたのは少々誤算だったがね。まあ、どうでもいいが」

ジュドはそう言うと二人に近付きアリアの懐からデュランダルを取り出し握りつぶした。

グシャア！
バキイィィン！！

デュランダルは音と共に砕け散った。

アリア「ああっ！」

ロッテ「デュランダルが！！」
ジュド「こんな物があっては困るのだよ。こちらの計画が狂ってしまう」

ジュドは顔をにやけさせながらそう言った。

ロッテ「そっ…そんな…どう…して…！」
アリア「お前の目的は…闇の書の封印だろう！お前も父様みたいに闇の書に恨みがある。お前も闇の書のせいで故郷を失ったから…復讐するから…闇の書を完全に封印する方法を知っているから協力させてくれって…言ったじゃないか！！」
ジュド「はぁ？ハッハッハ…ばかばかしい…あきれてものも言えんね…そんな与太話が本当に真実だとでも・・・？」
ロッテ・アリア『何ッ！？』

ジュドの話を聞いてロッテとアリアの二人は驚愕した。
ジュドはかまわず話を続ける。

ジュド「私は始めから闇の書を封印する気などないよ。そんな事をされてはせっかくのこちらの本当の計画が台無しになってしまう…そもそもあんな封印を施したところでいずれまた誰かが必ず封印を解くよ。君達に教えたのは元々そう言う封印なのだから・・・どんな手を使っても闇の書の完全封印など不可能だよ」
アリア「だ…騙した…な…」
ジュド「フン・・・まあ君達など利用しなくても別に良かったんだがね・・・君達など隠れ蓑にしなくても管理局如きの追ってなど私達にとっては無意味だ。別に君達の協力がなくても、闇の書を完成させることなどたやすい事だよ…」
ロッテ「お…お前…それならなぜ…父様に…近づいたんだ…？」
ジュド「聞きたいかね？」

ジュドはそう言いながら顔をさらに緩めた。

ジュド「あの男が予想以上の大馬鹿者だからだよ」
アリア「な…」
ロッテ「何だ…と…」

ジュドのその言葉を聞いて二人がキツイ目でジュドを睨み付けた。
ジュドは全く気にも留めず話を続ける。

ジュド「部下の為の復讐などという下らん理由で闇の書を封印しようとするという目的が余りにもバカバカしくて…笑えて仕方がなかったのでね。面白そうだから封印方法をワザと君達に教えて利用させてもらったのだよ・・・暇潰しにの為にね…」
ロッテ「ひっ…暇…潰し!?」
アリア「下らない…理由だと…!」
ジュド「そうじゃないか」
ロッテ「クライド君を思う父様の気持ちを…バカにするのか…!!」
ジュド「部下の犠牲など、君達の組織にとっては日常茶飯事だろう？」

ジュドは二人に向かってそう言う。

アリア「日常茶飯事…だと!?」
ジュド「そうじゃないかね…。君達の上層部はいつもそうだよ。平気で部下など捨て駒にする。第一…そもそも彼は、クライド君とやらは勝手に犠牲になったんだろう?勝手に死んだ奴の事など、気にするだけ時間の無駄だアホらしい…」
ロッテ「何だと…!!貴様…!!!」

ロッテは体から血を流しながらもジュドを睨み付けた。
ジュドの言葉はロッテとアリアにとっては余りにも許しがたい言葉だった。

ジュド「全く笑えるよ…。自分の身だけを守る事を考えていればいいものを使えない雑兵を逃がす為に自らを犠牲にして朽ち果てるとは……ククク…ハーハッハッハッハッハッハ！！」

ジュドはクライドの事を完全にバカに仕切ったように大笑いを始めた。ジュドから見てみればクライドが死んだ理由はバカバカしい以外の何物でもなかった。

アリア「キ…キサマァァァァ！！」
ロッテ「クライド君は！皆を・・・私達を・・・世界を護る為に…助ける為に自分を犠牲にしたんだぞ！！そのクライド君をバカにするのか！！」
ジュド「だからそれがバカだと言うのだよ…赤の他人の為に動いてどうする…」

ジュドは炎の剣を構えた。

ジュド「そろそろ下らない話は止めにしよう。君達はさっさと消えたまえ…君達を始末したらグレアム君もちゃんと君達の後を追わせて上げるから…」
ロッテ「お前…父…様を…」
ジュド「もちろん殺すよ。始めからそのつもりだったからね」
アリア「クッ…クソ…！」
ロッテ「ちく…しょぉ…！」

アリアとロッテは悔しさのあまり唇をかみ締め、涙を零した。

ジュド「そうだ・・・私もたまには正義の味方を気取ってみようか。何の罪もない少女を犬死にしたゴミの為などという下らん理由で殺した悪魔二人を始末すると言う正義だ。ふははは…実に面白い…まさに最高の善意だね。主君、守護騎士諸君・・・今・・・敵を討ってあげるよ…」

ジュドはそう言って笑いながら剣を振りかざした。

ジュド「さようなら・・・愚かな男のバカな使い魔諸君…ククク…ハーハッハッハッハ！！」

ロッテ・アリア『クソオォォォォォォォ！！』

ジュドがそう言って剣を振りかざそうとしたとき

？「スティンガーブレイド！エクスキューションシフト！！」

ジュド「ヌッ！？」

突如大量の青い魔力の刃が降ってきてジュドに襲い掛かった。ジュドは寸前のところでその魔力刃を交わした。

クロノ「大丈夫か！？ロッテ、アリア！」

ロッテ「ク…クロ助…」

アリア「クロノ…なんでお前…ここに？」

クロノ「説明は後だ」

その魔法を放ったのはクロノだった。

ジュド「ちっ…小僧が…余計な事を…」

クロノ「貴様の思いどおりにはさせないぞ！ジュド！」

クロノはそう言ってジュドにデバイスを向ける。

ジュド「なぜそんな連中を助けるのだね?そいつらは犯罪者の上に人殺しだよ?」

クロノ「犯罪者は貴様だろう!今度こそ貴様を逮捕する!」

ジュド「やれやれ全く子供だねぇ君は、そんな奴らは生かす価値などないと思うがね」

クロノ「黙れ!!」

クロノは構わずジュドにデバイスを向けていた。

その時である。

?「今回ばかりは奴に賛成ですね…そんな奴らは生かす価値がない…!!」

クロノ「え…なッ!?」

ジャキン!

そこに突然ヤミが現れなんとクロノに刃物を向けた。

クロノ「ヤミ!何をしているんだ!!」

ヤミ「その二人をこちらに渡しなさい。私が止めを刺しますから」

クロノ「君は何を言っているんだ!そ「黙れ…!」うっ!」

ヤミは激しい殺気を見せてクロノの言葉を遮った。

ヤミ「シグナム達を…はやてを…あんな目に合わせ…犠牲にしたその二人を・・・グレアムを…私は許さない!!」

クロノ「落ち着け!君の気持ちは分かる!だが!」

ヤミ「何が分かるというんだ…！口先だけでそんな事を言うな！！」
クロノ「うっ…！（何だこの激しい殺気は…これが…あのヤミなのか…？）」

ヤミの目は怒りで真っ赤に染まっていた。
クロノはヤミの激しい殺気を受けて思わず後ろへとたじろいた。

ヤミ「いいからそこをどきなさい…邪魔をするなら…あなたも殺しますよ…！！」
クロノ「ウグッ…！（不味い…彼女は本気だ。本気でロッテ達を殺そうとしている…力づくで止めるしかない！）」

クロノは思わずヤミにデバイスを向けた。
その時である

バシュン！

ヤミ「なっ！？」

紫色のバインドがヤミを拘束した。

？「ヤミ！落ち着きなさい！！」

そのバインドをかけたのはプレシアだった。所々に火傷の跡があるがそれでも動けなくなるような怪我ではなかった。

ヤミ「離せぇー！！」
プレシア「落ち着きなさいといっているでしょう！こんな所で争っている場合じゃないはずよ！！」
ヤミ「黙れ！邪魔をするなら貴様も殺す！！」

ビキビキビキッ！

プレシア「なッ！？」

ヤミは力づくでデバイスを破壊しようと力を入れた。するとバインドにひびが入った。

プレシア（腕力だけでバインドにひびを…！！）

プレシアは驚愕した。目の前のヤミの目は血塗られたように真っ赤だった。

プレシア（なんて危険な目なの…。完全に怒りで我を忘れている…この子がこんなに恐ろしい存在だったなんて…）

プレシアは目の前にいるヤミに対して恐怖を感じていた。

ヤミ「殺す…！殺してやる…！！」

プレシア（不味い…！このままじゃバインドが持たない！！）

プレシアがそう思った時であった。

バシィン！

ヤミ「ヌアッ！！」

大量の包帯がヤミを包み込み拘束した。

ヤミ「これは…！！」

？「落ち着けヤミ！！」
？「ヤミさん。落ち着いてください！」
？「落ち着くであります！！」

ヤミを拘束したのはヴィルヘルミナだった。その後からスパロウモンに乗ったナギとハヤテがやってきた。その後ろにはメイルバードラモンに乗ったイヴもいた。

ヤミ「離せ…離せー！！」
ナギ「落ち着けと言っているだろうが！このバカモノ！！」
ヤミ「黙れ！邪魔をするものは誰であろうと」
ナギ「仕方ない…ヴィルヘルミナ！！」
ヴィル「はっ！」

ドゴォ！！

ヤミ「グハッ！」

ヴィルヘルミナがヤミの腹を思いっきり殴って気絶させた。
気絶したそのヤミをヴィルヘルミナが受け止めた。

ジュド「なんだかおかしな展開になったね…フン…まあいい…私はひとまず引き上げるとしよう」

その光景を見たジュドはその場から消えた。

ナギ「あいつも消えたな…」
プレシア「奴のことは気になるけど…とりあえずグレアム提督の元へと行きましょう。あなた達もついてきてくれる？詳しい話を聞きたいから」

ナギ「ああ」
ハヤテ「はい…」

その頃、黒い球体から逃れたなのはとフェイトは、ビルの陰に隠れていた。

フェイト「なのは、ゴメン。ありがとう。大丈夫？」

お礼を言いながら、フェイトはなのはの事を心配した。
先ほどの攻撃から身を守ってくれたなのはに、フェイトがお礼と謝罪の言葉を述べる。
なのはは少し手を痛めている様子だった。

なのは「うん。大丈夫」

フェイトを安心させるように返事をした。

フェイト「あの子、広域攻撃型だね。避けるのは難しいかな。バルディッシュ」

フェイトはバリアジャケットを変えた。
右手に持っていたレイジングハートをなのはに渡す。
なのは「……はやてちゃん」

渡されたなのはは、一度闇の書がいると思われる方向を見た。
闇の書を見ながら、悲しそうな顔をしてなのはが呟いた。
その時だった。

「なのは！」
「フェイト！」

その時後ろからユーノとアルフが二人の所にやってきた。
二人とも人型であり、それぞれ心配そうな表情を浮かべていた。

「ユーノ君、アルフさん！」

二人の名前を呼んだなのは。
そしてユーノとアルフの二人がなのは達と合流したその瞬間に。
直後、突風が起こり、街を何かがスッポリと覆った。

アルフ「前と同じ、閉じ込める結界だ」

アルフがフェイト達にそう言った。

フェイト「やっぱり、私達を狙ってるんだ」

ユーノ「今、クロノが解決法を探してる。それにプレシアさんも」
フェイト「母さんも？」

フェイトはユーノに振り返った。

ユーノ「それまで、僕達で何とかするしかない」
フェイト「うん」

フェイト達が話し合う。
その時、闇の書の様子を見ていたなのはが声を上げた。

ユーノ「って…あ…あれ、銀さんと剣さん！？」
「えっ！？」

ユーノの言葉を聞いたフェイト達は、驚きながら闇の書がいる屋上を見た。
確かに闇の書の後ろ、屋上の入口に銀時と剣心が立っている。

フェイト「剣心！！よかった…無事だったんだ！」
なのは「銀さんも！…よかった…！！」

剣心と銀時の姿を確認したフェイトとなのはは、安堵と嬉しさで涙目になる。

ユーノ「それにしても…どうしてあんな所に？」

ユーノが疑問に思った。

アルフ「まさか！二人だけで闇の書を止めるつもりじゃ！！」

アルフが声を大きくして言った。
確かに銀時と剣心ならありうる。

フェイト「みんな、行こう！」

フェイトがなのは達に言った。

「うん！」

なのは達は頷いた。

時空管理局本局。
とある一室にプレシアとクロノ、グレアム提督とアリアとロッテ、
そして…ナギ達がいた。ヤミはソファで寝かされている。

プレシア「二人に指示を出していたのは、やはり貴方ね…グレアム

提督」
クロノ「そしてジュド達と手を組んでいた…そうですね提督…」
目の前にいるグレアムを見つめながら、クロノとプレシアが言った。
ロッテ「違う…プレシア！クロノ！」
アリア「私達の…独断だ。父様は…関係ない！」
傷をとりあえず包帯で押さえているロッテとアリアが反論するが、
プレシア・ナギ「貴女達（貴様ら）は黙ってなさい（いろ）！！」
大魔導師としてのプレッシャーを放ちながら、プレシアは二人を睨んだ。
そしてナギも凄い剣幕で二人に怒鳴った。
睨まれた二人は、たじろいだ。
グレアム「ロッテ、アリア、いいんだよ。クロノとプレシア女史はもうあらかたの事は掴んでいる」
二人を宥めながらグレアム提督が言った。
剣心から教えられたプレシアは、独自にグレアム提督について調べていたのだ。
そしてクロノも銀時達の内部犯行の話を聞いて独自に怪しい人物を調べていてそれがグレアム提督だと調べ上げたようだ。
クロノ「…11年前の闇の書事件以降、提督は独自に闇の書の転生先を探していましたね」
プレシア「そして見つけたのね…闇の書の在り処と現在の主、八神はやてを」

クロノ「見つけたんですね・・・闇の書の、永久封印の方法を」

更に説明を述べるクロノとプレシア。

グレアムはしばしの沈黙の後、漸く口を開いた。

グレアム「…両親に死なれ、体を悪くしたあの子を見て、心は痛んだが……運命だとも思った。孤独な子であれば、それだけ悲しむ人は少なくなる。それに…どちらにしろ闇の書の呪いを受けている以上あの子は助からないとも思ったしね…ちょうどいいと思ってしまったんだ…」

はやての映像を見ながら、グレアムは語った。

クロノは、はやてと守護騎士達が楽しそうにしている写真を出す。

プレシアは冷たい表情を保ちながら、内心怒っていた。悲しむ人は少なくなる?数でしか人を理解出来ない最低な人間の考えだわ。

そんな事を思いながら、以前、自分がフェイトにした事を思い出した。

プレシア（…私も偉そうな事は言えないわね）

そう思いながら、プレシアはグレアムに向き直った。

クロノ「あの子の父の友人を語って、生活の援助をしていたのも…提督ですね」

グレアム「…永遠の眠りにつく前くらい、せめて幸せにしてやりたかった…」

グレアムは目を閉じて、少し顔を下げた。

グレアム「…偽善だな」

たしかに偽善の行為ではあるが、それでもはやては幸せな時間を送ることが出来た。
少ない期間ではあるが、はやては幸せになることが出来たのだ。
だからもう十分だ。
グレアムはそう思った。
どうせこのまま放っておいても、闇の書の呪いの影響で彼女は…はやては息絶えるだけ。
ならば、今後闇の書が覚醒しないように、闇の書に呪れているはやてを闇の書諸共どこかに封印してしまえばいい。
かつて闇の書の脅威をその身で感じたグレアムだからこそ、そんな残酷な判断を下すことが出来た。
クライドが死んでしまった時のような悲劇をもう生み出さない為にはやてを犠牲にすること彼は選んだのだ。

プレシア「封印の方法は、闇の書を主ごと凍結させて、次元の狭間にでも閉じ込める。そんなところかしら?」
グレアム「ああ。そうすれば闇の書の転生機能は働かない…そう教えてもらったんだ…彼に…ジュドにね。私自身もそれを確認した…そうしたらその方法ならば確実だと承認されたよ」

プレシアの問いに、グレアムは答えた。
グレアムはさっきのジュドの言葉を通信を通して聞いていた為に自分がジュドに騙されていた事に気付いたようだ。
答えを聞いたプレシアは顎に手を当てて考えた。

プレシア(あの男…ジュドはなぜそんな事を知っていたの?分からない・・・あの男の目的は一体何なの?)

プレシアは考える。

すると、ロッテ達が口を出してきた。

ロッテ「これまでの闇の書の主だって、アルカンシェルで蒸発させたりしてんだ。それと何にも変わんない！」
アリア「プレシアさん、クロノ私達を解放して。早く何とかして闇の書を凍結させないと…もう時間がないんだ！」
ナギ「貴様ら…！！まだそんな事を言うか！！」
イヴ「本気でぶっ潰すぞ！！」
ロッテ「うるさい！お前達に何が分かるんだ！！」
ハヤテ「うるさいのはそっちですよ！！彼女がなにをしたって言うんですか！」
ナギ「そうだ！大体大切な物は数で考えるものじゃない！…あいつを…はやてを思う人間が1人でもいる限り、絶対に命を奪っちゃいけないんだ！第一、はやては何の罪も犯していないだろうが！！お前らのやっている事は唯の犯罪だ！！」
ロッテ「そのせいで、そんな決まりのせいで悲劇が繰り返されてんだ！クライド君だって…クロノのお父さんだって……！」

プレシアの言葉に、ロッテは傷ついた身を乗り出して声を荒げた。

プレシア「貴女達がやろうとしてる事は単なる復讐よ。八神はやてを、貴女達の復讐の犠牲者にはさせないわ！」
ナギ「そうだ！それになんでこの世界とはやての両方を助けようってお前らは考えないんだよ！！」

プレシアとナギは怯まずロッテ達にそう言った。
彼女達の意見も最もである。叶うのならばそれが一番いいに決まっている。
しかしアリアは負けずにナギに怒鳴った。

アリア「そんな事が出来るならとっくにやっている！それが出来ないからこうやって…！」
ナギ「方法ならある！」
アリア「エッ！？」
グレアム「何だって！？」

ナギがそう言った。
その言葉にアリア達は驚いた。

ナギ「闇の書の暴走を押さえ込んで、はやての意識を覚ましていったん闇の書から開放する。その後で防御プログラムだけを吹き飛ばして宇宙空間でアルカンシェルで消滅させる！そうすれば闇の書本体ははやての中で溶けて消える！もう暴走する事はない！！」
クロノ「君、なんでそんな事を知って…」
ナギ「企業秘密だ！！」

ナギは自信満々でそう言いクロノの質問には企業秘密といって黙らせた。そう言われてはクロノはもう黙っているしかなかった。

ロッテ「そんな事…本当に出来るのか！？」
ナギ「やり方なら知っている！後はどうとでもなるわ！！」

ナギの言葉にロッテはもう何も言い返せなかった。
プレシアとクロノはグレアムに向き直る。
話を聞いたグレアム提督は、目を閉じて考えた。

クロノ「提督失礼します…」
ナギ「私達も行くぞ！」
イヴ「おう！」
ハヤテ「はいお嬢様！」

ヴィル「了解であります」

クロノ、そしてナギ達は立ち上がって部屋を出ようとする。

グレアム「待ってくれ」

その時グレアム提督が皆を呼び止めた。

プレシア達は立ち止まって振り返った。グレアム提督は一枚のカード、待機状態の『デュランダル』を差し出した。

ロッテ「父様！それは…」

アリア「さっき…ジュドに破壊されたはずじゃ…」

グレアム「…私とて完全にあの男を信用していたわけじゃない…もしもの時に備え、念の為にもう一枚用意しておいたんだ。氷結の杖『デュランダル』だ。どう使うかは、クロノ…君に任せる」

クロノ「分かりました…」

クロノはデュランダルを受け取った。

プレシア「頼めるかしらクロノ？」

クロノ「はい」

そして皆が部屋を出ようとしたそのときである。

ヤミ「待ってください…」

気絶していたヤミが起き上がって来ていたのである。

ナギ「ヤミ…お前…」

ヤミ「私も連れて行ってください…大丈夫。もう暴走したりはしま

せん…」
ナギ「分かった…行くぞ」
ヤミ「はい…」

そのときヤミは振り返ってグレアムを睨みつけた。

ヤミ「グレアム…。後ではやて達の前で謝って貰いますよ…」
グレアム「…ああ」

ヤミは一言グレアムにそう言うとナギ達と一緒に部屋を出た。
しかしプレシアはその場に残った。

グレアム「君は行かないのか?プレシア女史」
プレシア「まだ、貴方の事を完全に信用したわけじゃないのよ、それに…」
グレアム「それに?」
プレシア「ここに残って貴方にもう少し聞きたいことがあるのよ。ジュドについてあなたが知っている限りの事を話して貰うわ」
グレアム「……君が知っている以上に知っているとは思えないが…まあいいだろう」

そう言ってプレシアとグレアムはジュドについて話を始めた。

ビルの屋上。
闇の書は、街を見渡していた。
その時である

？？？『ククク…またしても最悪な目覚めを果たしたな…闇の書…いや『夜天の書』よ』
闇の書『……貴様か…』

闇の書の中に眠る内なる声が闇の書に話しかけた。その言葉を聞いたとき闇の書の表情は一気に険しくなった。

？？？『いい加減観念してワシを外に出したらどうだ…？これ以上苦しみたくはあるまい』
闇の書『黙れ…お前を私の外に出すわけには行かない…！』
？？？『ククク…相変わらず頑固な奴よ…だが良いのか？その小娘を犠牲にしてしまって…その小娘ならばお前の事も受け入れてくれる筈だぞ』
闇の書『貴様の口車には乗らない…どうせそんな事をしても貴様は私や主を消すつもりだろう…！』
？？？『ちっ…ん？』

その時、後ろからカツン、カツンと二つの足音が聞こえた。闇の書は後ろを振り返った。そこには銀髪の男と赤髪の男が立っていた。

？「オイオイ。闇の書がこんな綺麗な姉ちゃんなんて、聞いてねーぜ」
？「そんな事を言っている場合かお主は…」

銀髪の男、銀時が頭を掻きながらそう言い赤髪の男、剣心が銀時に突っ込みながらそう言った。

闇の書「お前…達は……」

銀時と剣心を見ながら、闇の書は呟いた。

銀時「俺か？俺ァ坂田銀時」
剣心「拙者は緋村剣心」
剣心・銀時
「侍だ」

ニヤッと笑いながら銀時はそう答え剣心は真面目そうな顔でそう答えた。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生!』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『黒神』さんからいやぁ、毎度毎度質問感謝します。

ではもう一度、質問します。
新八へ

お通一筋なのに、なのはに恋路を抱くなどお通ファン失格だと思いますが？
お通に新八が浮気していると言って良いでしょうか（黒笑）

マヨラーへ

僕の小説では銀時も桂も魔法が仕える侍、魔剣士化になりました。
自分も魔剣士となりたいですか？
目立つ為に？（黒笑）

斉藤へ

貴方は弟子を作る気ありますか？
牙突の伝承させるために。」はい。それではお答えどうぞ」

新八「ウグッ…！！」

新八はこの質問に唯口を黙らせた。

神楽「おい、さっさと答えるね。この浮気裏切り者」
新八「ちょっと神楽ちゃん！いきなり浮気裏切り者って言わないでよ！！」
綾子「何言ってんの？どう考えてもアンタ裏切り者でしょうか！」
護「何が『寺門お通親衛隊隊長』ですか！！あなた最低です！！」
シャナ「そうよこのゴミくず！！反省しろ！！」
ヤミ「ホント最低にえっちいですね」

新八「酷い！皆酷いよー！！ミギャアアアアアアア！！」

新八は泣きながら思いっきり叫んだ。

んで２つ目

土方「うるせぇよ！！いつもいつもムカつく質問ばっかしやがって

！そんなの俺に喧嘩うりてーのか！！バカにしやがって！！魔導師なんて興味ねーよ！！別に目立ちたくもねーし！！」

しかしトッシーならば？

トッシー「僕もなのはチャン達みたいに魔法使いになりたいでござる～！！」

…だそうです。

土方「やらすなアァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！」

んで３つ目

斉藤「考えた事も無いから分からん。まあ、自分の子供が生まれたら教えてやるかも知れんがな」

銀八「こう見えても斉藤君は結婚してますからねじゃあ『黒神』さん廊下に立ってなさい。次の質問行くぞ～。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから「１．土方さんに質問。　僕の小説では、土方さんが禁煙にされて、可笑しくなった挙句に、お登勢さんにボコボコにされました。　どう思う？　２・銀さん、剣心、シグナム、なのは、フェイトに質問。　３．僕の小説の４番目の主人公を一方通行にしました。　ヒロインは勿論打ち止めです。感想は？　４．銀さんに質問、キャプテンの服装は、警察沙汰になりませんでしたか？　あと、僕の小説ではシグナムとヤバイ関係になっています。　シグナムと共にその感想を。」はい。ではお答えどうぞ」

土方「何で…俺がボコボコにされなきゃいけねーんだ…」

斉藤「お前が禁煙如きで取り乱すからだ。このど阿呆が」
沖田「斉藤さんのいうとおりですぜぇ土方さん。いっその事さっさと肺真っ黒になって死ねよ土方」
土方「なんだとコラアァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」

2つ目

銀時「ずいぶんと主人公っぽくない奴が主人公なったって思ったな…。ヒロインもあれだし」
剣心「拙者も同意見でござる……」
なのは「私はよく分からないけど…面白いとは思ったし、一方通行さんもかっこいいって思ったの」
フェイト「私もなのはと同意見です」

3つめ

銀時「まあ…あの後あの格好はトイレで着替え直したんだよ」
シグナム「しかし・・・それにしても、私達とんでもない関係にされてるな…銀時……」
銀時「ああ……さすがにあれじゃ変態だぜ……」

銀時がそう言った瞬間である。

神楽「銀ちゃん最低変態野朗に成り下がったアルな」
ヴィータ「シグナムもあれじゃあ変態淫乱女じゃねぇか…あんなんであたしらの将を名乗らないで欲しいんだけど……」
銀時「オイィィィィ！！神楽あぁぁぁぁぁぁ！！！なんてこと言いやがるんだあぁぁぁぁぁ！！！」
シグナム「ヴィータまでなんだ！！その蔑んだ目は！！！！」

「じ～～～～～～～～～～ッ」

他の皆も変態を見るような目で銀時とシグナムを見ていた。

銀時・シグナム『止めろおおおおおおおおおお！！！そんな目で俺（私）たちを見るなあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！頼むその目は止めてくれえぇぇぇぇ！！！３００円上げるからあぁぁぁぁぁぁ！！！！！』

銀八「はい。まあこんな所です。という訳で『亀鳥虎龍』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第五十五訓　人の心は追い詰められると闇になる（後書き）

支配者「次回はいよいよ闇の書との戦いが始まります」

銀時「俺達怪我してんのに闇の書に勝てんのか？」

支配者「さあ？」

剣心「さあ？…って」

支配者「まあ…次回で分かりますんで、それまでお待ちください」

第五十六訓　人はボロボロでも戦わなくちゃいけないときもある。（前書き）

支配者「はい。今回は闇の書との戦いです。といっても余りオリジナル性ありませんけど・・・」

銀時「お前ホント文才力ねぇな」

支配者「うるさいよ!!」

剣心「ハハハ…。リリカル剣魂スペシャル始まるでござるよ」

第五十六訓　人はボロボロでも戦わなくちゃいけないときもある。

銀時は、屋上で闇の書と対峙していた。屋上の中心辺りに闇の書が立っている。
白く染まった長い髪、黒いバリアジャケットを身に纏い、背中には黒い翼を生やしている。

闇の書「さか…た…ぎん…とき…ひむ…ら…けん…しん」

闇の書が銀時の名を呟いた。

闇の書「…貴方が銀時そして剣心か」
銀時「俺達の事知ってんのか？」

銀時が闇の書に尋ねた。

闇の書「はい。私は騎士達とは心がリンクしていますから」

闇の書がそう答えた。

剣心「…はやて殿とシグナム殿達はお主の中か？」
闇の書「はい」

銀時と剣心は顔を険しくした。
いざとなったら、闇の書を破壊するしかないと考えていたが、そういう訳にはいかなくなった。
闇の書を見つめながら、銀時は尋ねた。

銀時「お前の目的は何だ？」
闇の書「主の願いを叶える事です」
銀時「はやての願い？」

銀時は目を細めた。

闇の書「はい。愛する守護騎士達を奪った者達と、この世界を破壊し、主に穏やかな永遠の眠りを……」

目を閉じ、胸に手を当てながら闇の書は答えた。

銀時「世界の破壊だ？」
剣心「そんな事を八神殿が望んでいると……お主は本気で思っているのか？」
闇の書「例えそうじゃないとしても……私は止まる事は出来ません。それに…私が止まってしまったら、『奴』が私の中から出て来て、数多に存在する全ての世界を破壊する」

悲しそうな表情で銀時と剣心を見つめながら闇の書が言った。
その時、銀時と剣心は闇の書の話の中で、気になる言葉を見つけた。

銀時「『奴』？」
剣心「『奴』とは何だ？防衛プログラムの事でござるか？」
闇の書「貴方達に教える必要はありません。…知った所で意味はない……」

どうやら闇の書は『奴』に付いて教える気はないらしい。

闇の書「銀時、剣心。どうか邪魔をしないでください。守護騎士達

…特にシグナムは剣心…貴方を愛おしく思っていました。できれば貴方達とは戦いたくない」

戦いたくはないが、破壊行為はするつもりらしい。
結局、戦う事になるのか。銀時と剣心はため息をついた。
正直、シグナム達から受けた傷がある、今の状態で戦うのは少しキツい。それでも引くわけにはいかない。

銀時「悪ぃな。俺達にも譲れねーモンがある」
剣心「そうだ。拙者達にも護りたいものがある。退くわけには行かない」

銀時は腰に差してある木刀を抜き、剣心も逆刃刀を抜いた。

闇の書「そうですか。では…残念ですが、主の願いを叶えるため…貴方達には消えてもらいます」

闇の書が、重いプレッシャーを放ちながら銀時と剣心を睨んだ。
両者は口を閉ざし、静寂が訪れた。
屋上に強い風が吹いた後、銀時と剣心、そして闇の書は動き出した。

その頃、ジュド達は離れたところでその様子を見ていた。

？「ジュド様」
ジュド「何だ？ジハード」

ジハードがジュドに声をかけた。

ジハード「ジュド様。闇の書を破壊しなくてよろしいのですか？」
ジュド「まあ待て…なかなか面白い展開になっている。もうしばらく様子を見よう…」
ザンダガ「しかし、ジュド様。奴らだけで闇の書を止めるのはさすがに無理なのでは…」
ジュド「それならばそれで構わん。奴らの力ならば闇の書を倒すことできずとも弱らせる事ぐらいは出来るだろう…その後で奴を破壊すればいい。そうすれば我らの負担も減らせるし苦労せずに目的も達成できる」
ドラドス「確かにそうですが…」
ジュド「まあ…しばらくはこの余興を楽しむとしようではないか…」
ジハード「は…はい…」
ザンダガ「分かりました」
ドラドス「御意」

ジュドの言葉にジハード、ザンダガ、ドラドスの3人は頷いた。
ジュドはこの状況を楽しんでいるかのように怪しい笑みを浮かべた。

フェイト達は、剣心と銀時、そして闇の書がいる屋上に向かっていた。

アルフ「あっ！もう戦いが始まってるよ！！」

屋上を指差しながらアルフが言った。

フェイト「剣心！」

フェイトとなのはが叫んだ。
その時である。

？「おーい！！」
フェイト「え？」
アルフ「あ…あれは…」
なのは「ヤミちゃん！？」
ユーノ「それと…あれは誰だ？」

そこにスパロウモンに乗ったナギとヤミ、ヴィルヘルミナが飛んできた。

ナギの事を知らないユーノは首を傾げた。

フェイト「ヤミ！」
ヤミ「フェイト！今どうなっているんですか？」
ユーノ「剣さんと銀さんが闇の書と戦っているんだ」
ヤミ「え！？」
ナギ「何だと！？」

ヤミの質問にユーノが答えその事を聞いたナギとヤミが驚いた。

ナギ「あいつら…あの怪我で何を考えているのだ！」
ヤミ「相変わらず無茶をしますね…」
スパロウモン「ナギ。如何するの？」
ナギ「加勢するに決まっているだろう！行くぞお前ら！！」
ユーノ「あの～所で君は？それにその変な生き物は？」

ユーノがナギとスパロウモンに君は何者なのかと聞いた

スパロウモン「誰が変な生き物だ！この淫獣フェレット！！」
ナギ「そうだ淫獣！貴様は黙ってろ！この除き魔！！」
ユーノ「ええーーーーーー！？初対面でいきなりそれ！？ていうかなんでそんな事知ってるのさ！！！！」

ユーノは驚きながらそうナギ達に質問するが、

ナギ「やかましい！いいから行くぞ！！」
ユーノ「アッ！ちょっと！」

ナギは無視してさっさと行ってしまった。

その頃剣心と銀時は闇の書と対峙していた。

銀時「うぉおおおお！！」

剣心「はぁあああああ！！」

銀時は雄叫びを上げながら、闇の書に木刀の連撃を繰り出す。
剣心も飛天御剣流・龍巻閃や土龍閃を繰り出して攻撃する
闇の書は障壁を張って連撃を防ぐ。障壁で防ぎながら、闇の書は魔力で強化させた拳を放つ。
拳に反応した銀時は、木刀で剣心は逆刃刀で防御する。そこから闇の書が、両拳のラッシュで一気に攻める。二人はそれぞれの武器で両拳を防ぎながら、少しずつ後ろに退がっていった。
それを見た闇の書は大量の魔力弾を放つ。二人はそれに驚きながらも木刀と逆刃刀で魔力弾を全て切り裂いた。

銀時（ちっ！シグナム達にやられた傷が痛みやがる！）
剣心（長くは戦えないか…！！）

痛みに耐えながら、銀時と剣心は攻撃を防ぎ続ける。
すると突然、闇の書が目の前から消えた。一瞬驚いたが、気配と殺気を感じて、頭を下げて体勢を低くした。
直後、銀時と剣心の頭上を、背後に回った闇の書の横薙ぎの両手の手刀が掠めた。

闇の書「ムッ！」

手刀をかわされ、闇の書が少し驚いた。
手刀をかわした銀時は、背後にいる闇の書目掛けて木刀を振るった。
闇の書は後ろに跳んで、木刀をかわした。
剣心はさらにその後ろから逆刃刀を振るったがそれも闇の書は紙一重で交わした。
距離を開けて三人は動きを止めた。

銀時（速ぇな。それに障壁も硬ぇ）
剣心（あの二人の障壁に比べたらかなり頑丈でござるな）

銀時と剣心は額の汗と血を拭きながら思った。
この闇の書の力はかなり強大だ。
凄まじい魔力の攻撃と身体能力である。
今まで銀時と剣心が戦ってきた相手の中でもかなり格上の相手であろう。
闇の書はジッと銀時と剣心を見つめている。

闇の書（あの手負いで、これ程の強さ。もし万全の状態であったら……）

戦って初めて闇の書は、銀時と剣心の強さを知った。

闇の書（……この男達なら…銀時と剣心なら『奴』を倒せるか……？）

銀時と剣心を見つめながら、闇の書は考えた。

闇の書（いや……無理だ……この程度では……例え何者でも、『奴』を倒す事はできない）

闇の書は、表情を険しくした。
今までどれだけの強大な力を持った魔導師達が『奴』に葬り去られてきた？
『奴』に勝てる存在など考えられない。
それほどまでに『奴』は強い。いや…強すぎるのだ。
この二人であろうと間違いなく殺される。
そしてこの世界も滅ぼされる。

もちろん主はやても『奴』に殺される。
無駄な希望を持っても苦しいだけだ。
思い直した闇の書は再び銀時と剣心を睨み付けた。

その時、

フェイト「剣心！」

フェイトとヤミの声が聞こえた。
剣心と銀時は、空に浮いてるフェイト達を見つけた。

フェイト「剣心！大丈夫！？」
ヤミ「銀時！大丈夫ですか！？」

屋上に着地しながらフェイトとヤミが尋ねた。

銀時「あんま大丈夫じゃねーな」
剣心「うむ…さすがにちょっと…」

肩で息をしながら、銀時と剣心が答えた。
なのは達も銀時の側に立つ。

アルフ「アンタ達が苦戦するなんて珍しいね」
スパロウモン「全くだよ」

と、アルフとスパロウモンが言った。

銀時「そういう時もあんだよ」
剣心「拙者達は無敵ではないからな」

銀時と剣心が答えた。
フェイト達はデバイスを構えた。
ヤミも手を剣に変えた。
ナギとハヤテはスパロウモンに乗っている。
そしてグレイモンとメイルバードラモンを呼び出し合体させてメタルグレイモンにした。
するとバルディッシュが、一般市民を見つけた、とフェイト達に告げた。

ユーノ「よし。フェイト達は、銀さんと協力して闇の書を止めて、僕となのはが一般市民の保護に向かおう」

と、ユーノが言った。
みんな頷いて答えた。
その時ナギが

ナギ「なのはにHな事するなよこの淫獣」
ユーノ「だからしないってば!!行こうなのは!」
なのは「うん!」

ユーノとなのはは、空を飛んだ。

なのは「銀さん!フェイトちゃん!アルフさん!ヤミちゃん!それにナギさん達!すぐに戻ってきますから!」

なのはの言葉を聞いた銀時と剣心は、手を振って応えた。
なのは達は一般市民の保護に向かった。

銀時「そんじゃ、もう一頑張りすっか」

銀時は両手で木刀を構える。

剣心「そうでござるな」

剣心も両手で逆刃刀を構えた。

フェイト「いくよアルフ、ヤミ、バルディッシュ」
アルフ「うん！」
バルディッシュ［Ｙｅｓ　ｓｉｒ］
ヤミ「分かりました」

アルフとバルディッシュが、フェイトに応えた。

ナギ「お前達！闇の書をおとなしくさせろ！！」
ヴィル「了解であります」
グレイドモン「はっ！」
メタルグレイモン「御意」
ベルゼブモン「ああ」
ガイオウモン「お任せを」

ナギの言葉にヴィルヘルミナ達も頷いた。

ナギ「私はさすがに邪魔だから避難する。後は任せたぞ。ハヤテ！」
ハヤテ「はい！お嬢様！！」

ハヤテはナギを抱えるとビルを飛び越えながら非難して行った。

なのはとユーノは、結界内に取り残された一般市民の所へ向かっていた。
なのはとユーノは地上に降りて、辺りを見回した。すると、なのはは二人の人影を見つけた。

「あの、すみませーん！危ないですから、そこでジッとしててください！」

人影に向かって叫んだ。
二人の人影は足を止めて、振り返った。

「え？」
「今の声って…」

二人は、声の主を見た。

アリサ「なのは！？」
すずか「なのはちゃん！？」

なのはを見て、二人は驚いた。
二人を見て、なのはも驚く。

なのは「アリサちゃん！すずかちゃん！」

人影は、アリサとすずかだった。

「なのはちゃん」
「ねぇ、これってどうなってるの？」

アリサがなのはに聞く。
なのはは、どう説明したらいいか悩んでいる。隣にいるユーノも、困った顔をしている。

「あの…ごめん。今は説明できなんだ。すぐに安全な場所に運んでもらうから」

なのはの言葉の後、アリサとすずかの足下に魔法陣が展開された。
その直後、二人は転移された。

「二人に見られちゃった…」

なのはは少し、沈んだ顔をした。

「なのは」

ユーノが声をかけた。

「二人は、なのはの友達なんだから、きっと大丈夫だよ」

優しく話し掛けて、なのはを励ました。
「ユーノ君……うん。ありがとう」

なのはは、微笑みながらユーノにお礼を言った。
その時、

「なのはちゃーん！」

なのはを呼ぶ声が聞こえた。

なのは達は声がした方を見た。新八達がこちらへ向かって走っていた。

「新八さん！それに皆さんも！」

「みんなどうしてここに！？」

新八達を見て、なのはとユーノは驚いた。

「銀さんや、なのはちゃん達の事が心配で来たんだよ」

新八が答えた。

すると、遠くから爆発音が聞こえた。音は銀時達がいるビルから聞こえた。

「銀さんと闇の書が戦ってるんだわ」

「剣心も戦ってるのね」

ビルの方を見ながら、お妙が言った。

九兵衛「そういえば、フェイトとアルフの姿がないが？」

セイバー「確かにそうですね。如何したんですか？」

周りを見ながら、九兵衛とセイバーが言った。

「フェイトとアルフは、銀さん、剣さんと一緒に闇の書と戦っている」

「フェイトちゃんとアルフさんも！？」

新八達は驚いた。

なのは「皆さん。私も銀さん達を手伝いに行きます！だから皆さんは、転移したアリサちゃんとすずかちゃんをお願いします！！」

なのはは宙に浮いた。

なのは「ユーノ君！新八さん達を、アリサちゃん達の所に案内して！」

ユーノ「わかった」

なのはの言葉に、ユーノは頷いた。

シャナ「なのは！私も行く！！」

なのは「シャナちゃんも！？」

シャナ「当たり前でしょ！お前達だけに任せて置けないわよ！！」

なのは「じゃあお願い！」

シャナの言葉になのはは頷いた。

神楽「なのは！無茶したらダメアルヨ！」

セイバー「シャナもですよ！」

桂「高町殿！シャナ殿！銀時達を頼む！」

「はい！」

「当たり前よ！！」

神楽達の言葉に応え、なのはとシャナは銀時達が戦っているビルに向かって飛んでいった。

ヒナギク「じゃあユーノ君。なのはちゃん達の友人の所まで案内してくれる」
セト「早くしろ。淫獣」
ユーノ「はい、って言うか淫獣って言わないでください！！」

ヒナギクとセトに言われ、ユーノは案内した。

＊

「うぉおおおお！！」

「龍巻閃！！」

雄叫びを上げながら、銀時は木刀を振り下ろした。
剣心も十八番技である逆刃刀で『龍巻閃』をはなった。
闇の書は、障壁を張って木刀で逆刃刀を防いだ。

フェイト「アークセイバー！！」
スパロウモン「ランダムレーザー！！」
ベルゼブモン「デス・ザ・キャノン！！」

フェイトは、バルディッシュを横薙ぎに振って、金色の刃を闇の書目掛けて飛ばした。
スパロウモンも腕を振りまくってレーザーを発射した。
ベルゼブモンはキャノン砲から緑色のエネルギー弾を放った。
闇の書は、金色の刃とレーザーとエネルギー弾も障壁で防いだ。防がれた攻撃は消えた。
闇の書は、魔力を纏った脚で銀時と剣心の腹を蹴った。銀時と剣心は腹を押さえながら後ずさった。

アルフ「はあっ！！」
ヴィル「ふっ！！」

アルフが闇の書の両手を、バインドで止めた。
ヴィルヘルミナは大量の包帯で闇の書を包み込む
銀時と剣心とフェイトが同時に斬りかかる。闇の書は障壁で防御する。

闇の書「砕け」

闇の書が呟いた。

直後、両手のバインドが砕けた。
包帯も全て引きちぎってしまった。

「剣心！下がって！！」
「銀時も下がれ！！」

闇の書から距離を取り、フェイトはバルディッシュを構える。
ガイオウモンと両手の刀を強く握り、メタルグレイモンも砲門にエネルギーを貯める。
銀時と剣心はフェイト達の後ろに下がった。

「プラズマ・スマッシャー！ファイア！！」
「燐火斬！！」
「ギガデストロイヤー！！」

バルディッシュから金色の閃光が放たれる。
ガイオウモンは十字の斬撃を放つ。
メタルグレイモンもエネルギー砲を放った。

「盾」

闇の書は、巨大な障壁を張った。
障壁とプラズマ・スマッシャー、燐火斬、ギガデストロイヤーが、火花を散らせて激しくぶつかる。嵐のような風が吹き荒れる。
やがて巨大な閃光が消えた。闇の書はかすり傷一つ無い。

「く…！」

フェイトは悔しそうに顔を歪めた。

ガイオウモン「全力ではないとはいえ…」
メタルグレイモン「俺達の攻撃までも防ぐとは…」

ガイオウモンとメタルグレイモンも闇の書の障壁の防御力に対して驚いていた。

闇の書「刃を撃て…血に染めよ」

闇の書を中心に、周りに複数の赤い刃が現れた。

闇の書「穿て…ブラッディ・ダガー」

大量の赤い刃が、剣心、銀時、フェイト、アルフ、ヴィルヘルミナ、デジモン軍団に向かって放たれた。
フェイトとアルフは障壁を張って、何とか赤い刃を防ぐ。
ガイオウモンとグレイドモンも両手の刀で防ぐ。
スパロウモンとメタルグレイモンはレーザーで打ち落とす。
ヴィルヘルミナも包帯で防御する。
銀時は木刀を振るって剣心も逆刃刀を振るって赤い刃を弾く。
だが、やはり傷ついた体では全ての赤い刃は防げず、左肩、左足に赤い刃が刺さる。

「ぐ…！」

銀時と剣心は刺さった赤い刃を抜く。

フェイト「剣心、銀時！大丈夫！？」
アルフ「剣心、銀時！！」

フェイトとアルフが剣心と銀時に駆け寄る。

銀時「なァに。心配いらねーよ…」
剣心「これくらい…問題ないでござるよ…」

笑みを浮かべながら、フェイト達に答えた。
闇の書が手を突き出し、攻撃をしようとした時、

なのは「ディバイン・バスター！！」
シャナ「はあっ！」

桜色の閃光と巨大な火炎弾が、闇の書に向かって放たれた。
闇の書は、ディバイン・バスターと火炎弾を障壁で防いだ。
屋上の上空に、なのはとシャナがいた。

フェイト「なのは！シャナ！」

フェイトが声を上げた。

なのは「遅くなってゴメン、フェイトちゃん」
シャナ「ちょっと時間かかった」

なのはとシャナは屋上に降り立った。

なのは「闇の書さん！もうやめてください！」

闇の書に向かって、なのはが叫ぶ。

なのは「世界を破壊して、それではやてちゃんが喜ぶと思ってるんですか！？」
闇の書「主は、自分の愛する者達を奪った世界が…悪い夢であって

ほしいと願った。私は主の願いを叶える道具。だから私は、主の願いを叶える」

なのはの言葉を聞いても闇の書は、破壊をやめようとはしない。

なのは「闇の書さん！」

なのはが叫ぶ。

シャナ「お前！はやてを助けようとは思わないの！？あいつはお前のことだってきっと受け入れてくれるはずよ！防衛プログラムのほうなら私達で何とかするからはやてを開放して！！」

スパロウモン「そうだよ！それくらい僕達で何とかしてやるよ！！」

闇の書「…何故あなた達が私の防衛プログラムの事を知っているのかは知りませんがそう言う問題ではありません。防衛プログラムを如何にかしよう物なら…」

グレイドモン「何だ！？どうなるというんだ！！」

闇の書「…あなた達が知る必要はない」

シャナ「だーッ！！この頑固者！！！」

シャナの言葉を聞いてもやはり闇の書は破壊を止めようとはしなかった。

すると、銀時と剣心が前に出た。

「銀さん…」

「剣心…」

銀時「確かに…大切なモンを失った時はそう思うさ。だがな…どん

なに辛くて悲しい事でも、その事を忘れようとしちゃいねーんだよ」
剣心「そうだ…。辛いからと言って逃げていては何も解決しない…
立ち向かわなければならないんだ…」

銀時と剣心も譲夷戦争で多くの大切な仲間を失った。
いっそ忘れてしまった方が楽になれる。だが銀時と剣心は忘れない。
失ってしまった大切なモノを、忘れるような事だけは絶対にしない。
二人は闇の書の前に立つとこう宣言した。

銀時「闇の書。テメェは…」
剣心「拙者達が止める」

剣心と銀時は、出来るだけ呼吸を整える。目の前にいる闇の書を、
鋭い眼で睨む。

ゾクッ

闇の書「うっ…」

その眼を見て、闇の書は寒気を感じた。

闇の書（寒気…？この…私が？）

闇の書は表情を険しくした。
眼だけでなく、明らかに剣心と銀時の雰囲気が変わっている。そう、
アレは獲物を…魂を狩る夜叉の姿だ。
銀時は、右手に木刀を持ちながら走り出した。
剣心は左手に逆刃刀を持って走り出した。
その速度はまさに瞬動術を使って移動しているのと同じであった。

闇の書（速い！！？）

闇の書は、驚いた。
銀時と剣心の体は、戦いで傷ついているにも関わらず、その動きは先ほどよりも速くなっていた。
銀時と剣心は素早く木刀と逆刃刀を横薙ぎに振った。
闇の書は障壁を張って防御する。
すると目の前の銀時と剣心が突然、視界から消えた。

「えっ！？」

闇の書だけでなく、フェイト達も驚いた。
次の瞬間、闇の書の背中に衝撃が走った。

闇の書「あぐぅ！！」

背中を攻撃された闇の書は、振り向いて後ろを見た。
そこには、剣心と銀時がいた。

闇の書（馬鹿な！？いつの間に背後に！？）

闇の書は驚愕した。後ろに下がって、剣心と銀時から離れた。
次の攻撃が来るかと思われたが、剣心と銀時は床に膝をついた。息が荒くなり、傷口から血が出る。

剣心「はあっ…はあっ…」
銀時「くそっ…！力が…はいらねえ…」

フェイト「剣心、銀時！」
なのは「剣心さん！銀さん！」

フェイトとなのはが二人の名前を叫んだ。
闇の書「…どうやら二人とも限界のようですね」
闇の書は、右手を前に掲げた。
「苦しいでしょう?今、楽にしてあげます」
哀れむような目で銀時と剣心を見つめる。
「咎人達に…滅びの光を」
闇の書の右手の前に、桜色の魔力が集束されていく。
「あれって…まさか…!?」
フェイトは驚愕の表情を浮かべる。
「スターライト・ブレイカー!?」
なのはも信じられないと言った顔をする。
ユーノ「なのはは一度、闇の書に蒐集されてる。その時に魔法をコピーしたんだ!」
アルフ「ってマズイよ!いくらあの二人でも、あんな状態でくらったら……!!」
アルフとユーノが焦る。
銀時と剣心は殆ど動けない状態だ。

闇の書「星よ集え…全てを撃ち抜く光となれ」

魔力がどんどん溜まっていく。

「銀さん！！」

「剣心！！」

シャナ「不味い！！」

フェイト達が剣心と銀時を助けようと動く。

闇の書「無駄です」

だが突如、闇の書が手を出すと床から触手が出現し、フェイト達の体に縛り付いて動きを止める。

フェイト「く…この…！！」

スパロウモン「う…動けないよ…！！」

メタルグレイモン「グオオ…！！」

シャナ「コノォ…！！」

フェイト達は必死に、触手を振りほどこうとする。

闇の書「貫け…閃光」

だが、闇の書は魔力の集束を終えてしまう。

闇の書「スターライト・ブレイカー」

闇の書は、銀時に向かって巨大な桜色の閃光を放った。

閃光の光に、フェイト達は思わず目を閉じた。剣心と銀時は成す術もなく、桜色の閃光に飲み込まれた。
やがて閃光がおさまり、フェイト達は目を開けた。辺りに煙が立ち込めてる。
闇の書はジッと煙を見つめてる。

「剣心…！」
「銀さん…！」

煙のせいで剣心の銀時の姿が確認できない。
煙が晴れてきた。

「なっ…！！？」

闇の書は、目を見開いて驚愕した。
目の前に、剣心と銀時が立っているのだ。

フェイト「剣心！！」
なのは「銀さん！！」
シャナ「剣心、銀時！！」

三人が銀時の名を叫んだ。フェイトは今にも泣きそうな顔をしている。

「アレをまともに受けて…生きて…立っている…！？」

闇の書は額から汗を流した。
銀時と剣心は、頭や体中血だらけになり、服もボロボロだった。それでも右手にある木刀や逆刃刀は、放さないように固く握っていた。

「何故…？どうして…？そんなにボロボロなのに……」

闇の書は、ボロボロの銀時と剣心を見つめる。

「何故…貴方達は倒れない……」

闇の書の目から涙が流れた。

「……闇の書……」

「……闇の書殿……」

剣心と銀時が口を開いた。

闇の書は、ビクッと体を震わせた。

剣心と銀時は、顔を上げて闇の書を見る。

銀時・剣心「なんで（なぜ）…泣いてんだよ（いる）……？」

涙を流す闇の書を見ながら言った。

「こ…この涙は……主の涙だ…私は唯の道具…涙など…流すわけが……」

動揺しながら、闇の書は答えた。

剣心と銀時は、左足を引きずりながら歩き出した。ゆっくりと、ゆっくりと闇の書に近づいて行く。

闇の書は動かなかった。

いや、動けなかった。何故だかわからないが、体が言う事を聞かなかった。

銀時は闇の書に近寄り、顔に手を伸ばした。

闇の書の目から流れる涙を、手で拭いた。

銀時「たくっ…泣くくらいなら……最初から…こんな事すんじゃねーよ…」

笑みを浮かべながら銀時が言った。

闇の書「銀…時…」

銀時「ああ…俺達が倒れない理由か……？」

思い出したように言った。

銀時「俺達は…俺の武士道、貫いて……俺の護りてェモンを護る……」

涙目の闇の書を見つめながら、銀時は語る。

剣心「だから……お主が、どんなに凄い魔法を撃っても……拙者達は倒れない……」

剣心と銀時の体がフラつく。

銀時「…だからよォ……お前が…本当にはやてを…大事に想ってんなら……」

意識が薄れていく。

視界がぼやける。

剣心「…はやて殿の事を……諦めるんじゃ…ない……」

そこで剣心と銀時の意識は途絶えた。

倒れそうになる剣心と銀時を、闇の書が抱いた。

闇の書「剣心…銀時……もし、万全の状態であったら……私に勝っていたかもしれないな……」

ギュッと強く剣心と銀時の体を抱く。

闇の書は再び涙を流す。

闇の書「剣心…銀時……ダメなんだ…私は…止まれないんだ……私が止まったら…『奴』が…」

今流れている涙は、はやてのものか。それとも闇の書のものか。それは誰にもわからなかった。

「…貴方達は強い……よく、ここまで戦った……」

闇の書は、足下に黒い魔法陣を展開した。

「銀さん!!」

「剣心!!」

「闇の書!アンタ、剣心と銀時に何する気だい!?」

フェイトとアルフが叫んだ。

「闇の書さん!!」

なのはも叫ぶ。

「強き魂を持った侍よ。もう休むがいい」

魔法陣の光が強くなる。

闇の書「剣心、銀時。私の中で」

剣心と銀時の体が薄れていく。

闇の書「眠れ」

剣心と銀時の姿は消えた。

「剣しぃぃん！！」
「銀さァァン！！」

フェイトとなのはは叫んだ。
アルフとヤミ、シャナ、ヤミ達も呆然となる。

闇の書「剣心、銀時よ。私の中で…安らかな…永遠の眠りを」

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『黄色いのなにか』さんから「1．新八に質問です。僕が感想に書いた『新八の至福の一時第3弾』でホモに目覚めましたか？

2．新八以外の万事屋に質問です。僕が感想に書いた『新八の至福の一時第3弾』で感想を聞かせてください

1

新八「誰が目覚めるかアア！！！！！！！！！！！！！！！！！僕はホモじゃねエエエエエエエエエエエエエ！！！！」

銀時「モテねーんだからいっその事ホモになったらどうだ？」

新八「なるかアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

2

剣心「かわいそうだと思うでござる」

剣心以外「いい気味だ（よ）（です）（アル）」

銀八「はい。まあこんな所です。という訳で『黄色いなにか』さん。廊下に立ってなさい」

なのは「次の質問です。ペンネーム『真王』さんから「勇斗「今度は銀魂組とリリカル組に『もし世界を半分くれてやろうと言われたら受け入れて自分の物にするか？』」

真王「そして俺も同じく『次のうちこのモンスターは嫌だ！ってのはどれですか？

屍族・ゾンビキング（ゾンビ）
死骨族・スカルキング（骸骨男）
妖霊族・ファントム（ゴースト）
毒虫族・ベノムワーム（デカイ毛虫）
邪龍族・バハムート（ドラゴン）
魔道巨人族・マスターゴーレム（ゴーレム）

夜魔族・リリス（サキュバス）
猫娘族・バステト（ネコマタ）
死告族・デス（死神）
殺人機族・キラーマシンΩ（キラーマシン）
鳥女族・ハーピィクイーン（ハーピィ）
魔蛇族・ラミアクイーン（ラミア）
人魚族・リヴァイアサン（マーメイド）
龍人族・ドラゴンキング（リザードマン）
邪鬼族・ギガース（オーガ）』

今回はこれだけ。それじゃ」では、お答えお願いします」

沖田「俺がそんな事言った奴を調教して世界全てを俺の物にしてやりまさぁ。そしてそいつを使って土方を亡き者に…」
土方「テメェは結局それかぁ！！！つかどんだけ俺の事殺したいんだよ！！」
沖田「いつも土方さんの命は狙ってまさぁ。土方殺す為だったら悪魔とでも手を組みますぜ」
土方「てんめぇ・・・だったら俺も魔王と手を組んでテメェをぶっ殺してやるゥー！！」

土方と沖田は喧嘩を始めてしまった。
無視して銀時達の答え

近藤「悪に心を売るほど俺は落ちぶれていないぞ！たとえお妙さんと結婚させてやるといわれても断る！！」
銀時「本当かよ…」
近藤「本当だ！！」

では残りの皆の答え

桂「そんな者の言葉になど誰が乗るか！！」
エリザベス『桂さんの言うとおり！！』
他の皆『興味ない（です）』

では２つ目

銀時「ファントムとデスとゾンビキングだ・・・。お化けは勘弁してくれ…って！お化けなんていねぇ！！皆スタンドだ！！」
剣心「前回答えるのを忘れていたので、お答えするでござる。まあ、ラミアクイーンとバステトあたりでござるな…女子系の怪物のほうが相手しづらいでござるから…」
ララ「私も前回答えるの忘れてたから答えるね～。私は別に無いよ。お化けや虫さんも平気だし」
モモ「私もお姉さまと同じで」
ナナ「あたしは動物は平気だけど、虫やお化けは苦手だぞ」
新八「ドラゴンキングとかファントムですね・・・凄い強そうだし…」
神楽「やっぱりでかい虫とかでっかい怪物とか苦手アル。ギガースとか…バハムートとか・・・」
桂「まあ…俺としては鬼が苦手だな・・・妖怪みたいだから…」
エリザベス『桂さんと同じく』
源外「俺は別に…まあ、いきなりドラゴンとか出てきたら死ぬほどびっくりするだろうけどな」
お妙「まあ…やっぱりベノムワームかしらねぇ…大きい虫はさすがに嫌だし」
九兵衛「僕と妙ちゃんと同じ物が苦手だ」
東条「まあ…私も若と同じ物が苦手ですな…」
近藤「俺は…ゾンビと骸骨が苦手だな…」
土方「ファントムとデスだよ…見たくもねーからな……」

沖田「キラーマシーンΩでさァ。ロボットは調教できねーだろーからなぁ」
銀時「お前ホントSだな！！」

銀時が沖田に突っ込んだ。
んで次

山崎「俺が苦手なのはギガースです。鬼は副長だけで勘弁して欲しいですから」
なのは「私もお化けは嫌なので…ファントムさんとかです。虫とゾンビも嫌だけど…」
フェイト「私もなのはと同じ」
はやて「あたしもやな」
ヴィータ「あたしも」
シャマル「私もです」
シグナム「まあ…私もだな……」
アリサ「私もそうね」
すずか「私も…」
プレシア「私もそうかもね」
リンディ「私も」
クロノ「僕は女性系のモンスターが苦手かもな」
ザフィーラ「我はバステトだろうか」
アルフ「あたしもそうかも」
銀時「ああ、お前ら犬だもんな。だから猫が気に入らないってわけだ」
アルフ・ザフィーラ『犬じゃない！狼だ！！』

銀八「はい。とまあ、こんな感じですというわけで『真王』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第五十六訓　人はボロボロでも戦わなくちゃいけないときもある。（後書き）

支配者「次回は闇の書との戦い大詰め魔であと少しのところまでいきます」

銀時「もうそこまで行くのか？」

支配者「だって早く進めたいんだもん」

剣心「では次回もお楽しみにでござる」

第五十七訓　夢の中逃げてもいい事はない（前書き）

支配者「今回は少々投稿が遅れてしまって申し訳ありません」

銀時・新八『遅すぎじゃぼけぇぇぇぇぇーーー！！！』

バキィ！！

支配者「グハーーー！！」

支配者は思いっきり殴られた。

銀時「もっと早く投稿しやがれぇぇぇぇーーー！！」

新八「もっと出番よこせコラァァァーーーー！！！」

ドカバキ！！

支配者「ごめんなさい！ごめんなさい！」

剣心「ははは……リリカル剣魂スペシャル始まるでござるよ」

第五十七訓　夢の中逃げてもいい事はない

目の前は真っ暗だった。
銀時は重い瞼を開けた。
目の前に沢山の子供達がいて、木の机の前で正座して座っていた。
手には教科書らしき物がある。
それに隣には自分のように剣心が寝ていたりした。

銀時（寺子屋か…ここ？それになんで剣心が俺の隣に？…つか…なんであのうるせぇ親父までいやがんだ？）

そう思いながら銀時は、視線を前に向けた。
そこには、子供達に勉強を教えている先生がいた。
その先生を見て、銀時は驚愕した。

銀時「…松陽…先生……」

そして剣心は

？？？「おい…何ボーッとしてんだバカ弟子」

剣心は重い瞼を開けた。
そこには自分の師匠である比古清十郎がいた。
しかもそこはどこかの寺子屋のようだ

剣心「…比古…師匠……？」
清十郎「あん…？何今更人の名前を呼んでやがる」
剣心「何で師匠がこんな所に？」
清十郎「あ？なに言ってんだ。勉学が疎かにならねぇように今日は

松陽の所にきてんだろうが」
剣心「……え？」

清十郎はそう言った。
実はこの小説では人嫌いな比古清十郎が唯一親友と呼んだ人物それが吉田松陽だったりするのだ。
ちなみに剣心も目の前にいる人物を見て驚いた。

剣心「…松陽…先生…」

その頃

フェイト「剣心と銀時が……」
なのは「闇の書に…」
シャナ「取り込まれた……」

その光景を見た3人は呆然とした。
もちろん他の皆もである。

闇の書「あの二人は眠りについた…永遠の安らかな眠りに……だから……お前達ももう眠れ……」

対峙する闇の書の意思が、なのは達に宣言する。
闇の書のこの言葉を皮切りに皆は再び武器を構えた。

ヤミ「待ってください」

その時ヤミが皆を止めた。

シャナ・フェイト「ヤミ!?」
なのは「ヤミちゃん!?」
スパロウモン「如何したんだよ!?」
ヤミ「私に彼女と話をさせてください」

ヤミはそう言った。

シャナ「話って…」
グレイドモン「奴は話など聞いてくれるような奴ではないぞ!!」
スパロウモン「そうだよ!力づくで止めるしか…」

皆はそう言うがヤミを首を横に振る。

ヤミ「私は出来れば彼女を傷つけたくはないんです。少しの間だけでいいんです。私に時間をください。それに力づくで止める事になったとしても最後の最後までみんなは手を出さないでもらえませんか?」
アルフ「だけど……」
フェイト「わかった」
なのは「フェイトちゃん!?」
アルフ「フェイトなに言ってるのさ!こんな時に!!」

皆はフェイトにそう言うが

フェイト「ヤミがああいってるって事は何か考えがあるんだよ。お願い少しだけ待ってあげて」

フェイトは皆にそう言った。

なのは「……分かったよフェイトちゃん。皆もそれでいいかな」

アルフ「しょうがないな。フェイトは頑固だし」

シャナ「ヤミも結構頑固出しね」

ガイオウモン「まあ…良いか……いざとなれば本気を出して止めるまでだ。お前達もそれでいいな」

「はい（ああ）（ウン）」

ヴィル「了解であります」

他の皆も納得してくれた。

ヤミ「ありがとうございます。では」

ヤミはそう言って闇の書に近づいていった。

そして闇の書の中

銀時は信じられなかった。

子供達の前に立っているのは、死んだはずの恩師・吉田松陽先生だった。

もちろん剣心も信じられなかった。

実は剣心も時々ではあった物の清十郎に連れられて松陽の寺子屋に来ていた事があったのだ。

松陽「ん？どうしました銀時？剣心まで？」

清十郎「二人そろって何ボーットしてやがんだ」

松陽先生が起きた銀時と剣心に気付いて、声をかけた。

???「どーせまた寝てたんだろ。つかなんで剣心まで寝てんだよ？銀時のが移ったか？」

頬杖をついた男の子が言った。

銀時は男の子を見た。短い黒髪の男の子。

小さい頃の高杉晋助だ。

銀時・剣心「高杉!?」

少年姿の高杉を見て、銀時と剣心は驚いた。

高杉「あ？何デケー声出してんだよ。うるせーな」

耳を押さえながら、高杉が言った。

???「銀時、静かにしろ。今は休憩時間じゃないぞ。剣心までなんだ？銀時と同じように眠り癖でもついたか？まったく、お前はいつも松陽先生の話を聞かず授業を受けおって、松陽先生に申し訳ないとは思わないのか？」

長い黒髪を後ろに束ねた男の子が言った。

小さい頃の桂小太郎だ。

銀時「ヅラ!?」

桂「ヅラじゃない桂だ！いい加減そのあだ名はやめろ!!」

相変わらず自分をヅラ呼ばわりする銀時に対して桂が怒鳴った。

???「ちょっと銀時君！人の弟をいつもいつもヅラ呼ばわりしないでっていつも言ってるでしょ！！」

今度は一人だけ青い色の髪をしている少女が怒鳴ってきた。若い頃の桂雪路だ。

銀時「ヅラ姉！？」

雪路「ヅラじゃない桂よ！！あんたいい加減にしなさいよ！いつもいつもあたし達姉弟の事ヅラ呼ばわりして！！」

自分に対してもヅラとしか呼ばない銀時に対して雪路も怒鳴った。

???「全く…二人そろってふざけやがって……」

後ろにいる高杉同様に単髪の黒髪の男の子が言った。

銀時・剣心『志々雄！？』

そう…それは小さい頃の志々雄真実だった。

皆さんは『何でこいつまでいるの！？』と思ったでしょうが…まあ……細かい事気にしないでください。高杉とかと同じ理由ですので……

志々雄「なんだぁ？さっきから人の名前を愚痴口と呼びやがって…」

志々雄が剣心と銀時の二人をにらみ付けた。

すると、松陽先生が、手をパンッパンッと叩いた。みんなが松陽先生に注目する。

松陽「はいはい。喧嘩は終わりですよ」

松陽先生の言葉で、みんな教本を手にした。
桂と雪路は真面目に教本を見ている。
高杉と志々雄は頬杖をつきながらジッと松陽先生を見ている。
銀時と剣心は周りを見回した。全員の顔に見覚えがある。
一緒に松陽先生の元で学んだ仲間たちだ。
これは、松陽先生に拾われ、先生の学舎で学んでいた時代……
つまり、これは過去。

銀時（どうなってんだ？俺達はタイムスリップでもしたのか！？）
剣心（全く分からん……）

銀時と剣心は少しパニックになった。
ふと銀時と剣心は思った。そういえば松陽先生も比古師匠も他のみんなも、大人の姿の俺を見ても全然驚いてない。何の反応もない。
何故だ？
そう思った銀時と剣心は、自分の体を見た。手も足も、体全体が小さい。桂達と同じ子供の姿になっていた。

剣心（子…子供になっている！？）
銀時（ま…マジでか！？……あれ…？…ってことは……）

銀時は恐る恐る、自分のアソコを覗いた。
見た途端、銀時は青ざめた。銀時のアソコは毛が一本も生えていなかった。

銀時「俺のチ〇コがアァァァァァァァァァ！！」

ショックを受けた銀時は、ありったけの声で叫んだ。

高杉・志々雄『うるっせーよ銀時!!』

その言葉に高杉と志々雄がキレた。

そして

バキィッ!

思いっきり二人は銀時を殴った。

銀時「ぶべッ!何しやがんだ!!」

高杉「テメェがうるせぇから悪いんだろーが!」

志々雄「そうだこの天パ野郎!!」

銀時「んだとコラ!犯罪者コンビのくせしやがって!!」

高杉・志々雄『誰が犯罪者コンビだ!!』

銀時と高杉・志々雄の二人は大喧嘩を始めた。

そして剣心と雪路はその光景を苦笑いしながら見つめていた。桂、松陽、清十郎の3人は頭を抱えていた。

高杉、志々雄と喧嘩して松陽先生に止められたが、収まらなかった。しかし清十郎に思いっきり拳骨を食らわされた。しかも、その時なぜか剣心まで殴られた。

清十郎曰くノリで殴ったらしい。

もちろんぶちきれた剣心は清十郎に殴りかかっていった。

その時松陽と皆に何とか止められた。

そして、そのまま授業は終わった。

そして、闇の書の外では

闇の書「……」

ヤミ「……」

ヤミと闇の書が向かい合っていた。

闇の書「……貴方はヤミですね…」

ヤミ「……やはり私の事も知っていますか」

闇の書「はい、主を支えてくれた主の親友…いや家族の一人とでも言える存在です」

闇の書はヤミに向かってそう答える。

ヤミ（“家族”ですか…血塗られた過去を持つ私にとっては夢のような言葉ですね

……）

ヤミ「はやてがそんな風に私を思ってくれていたなんて嬉しいですよ」

闇の書「貴方はここに何をしにきた?」

ヤミ「貴方を止めに来たんです」

闇の書「貴方も私の邪魔をすると?主の願いを叶えようとするこの私を」

ヤミ「貴方のやろうとしている事ははやての本当の願いではありません」

闇の書「……貴方もあの二人のようにそう言うのですね…ですが私

は止まれない。それは貴方も先程の事でよく分かっている筈だ」

闇の書はヤミに向かってそう言う。

ヤミ「やはり…そうですか……」

闇の書「はい。できる事ならば主の家族といえる貴方とも戦いたくはないのですがあくまで邪魔をするのであればあなたにも消えてもらいます」

闇の書はそう言って魔法陣からレヴァンティンを取り出しヤミに向けた。

ヤミ「どうしても止まってはくれないんですか？はやてを開放して闇の書の防衛プログラムを止めればはやては助かるはずですよ」

闇の書「防衛プログラムを破壊してしまえば『奴』が出てきてしまう……そうなれば主はやては無残にも『奴』に殺されてしまうでしょう。ならばこのまま私の中で安らかに眠らせてあげればいい」

ヤミ「『奴』？」

ヤミは闇の書の「奴」と言う言葉が気になった。

ヤミ（もしや…私があの時聞いた鼓動音と声の正体がそれ？それが闇の書がはやてを開放しない理由だというんですか？）

ヤミはそう考える。と言うより他に考えられなかった。

ヤミ「それが貴方がはやてを開放しない理由なんだとしたら、私がその『奴』と言う存在を止めて見せます」

闇の書「無理です。『奴』は貴方如きの手に負えるような相手ではない」

ヤミ「……私には無理かもしれないとしてもあの二人ならば止めてくれる筈です」
闇の書「それこそありえない話……あの二人は私の中で永遠の安らかな眠りについたのです。もう目覚める事はない。あの二人は自分達が望んだ世界で永遠に暮らすのです」

闇の書はヤミに向かってそう言った。
しかしヤミは
『フッ…』
と軽い笑みを見せた。

闇の書「何を……笑っているのですか？」
ヤミ「いえ……貴方はあの二人を軽く見すぎていると思いましてね」
闇の書「どういう意味です？」
ヤミ「あの二人は夢の世界に取り込まれるような弱い人間ではありませんよ」

ヤミは闇の書に向かってそう言う。

ヤミ「すぐに分かりますよ。あの男達が貴方の考えているような弱い人間ではないと言う事が」
闇の書「……」

闇の書は無言でレヴァンティンを構えた。
そしてヤミも右手を剣に変えた。
そして二人は激突した。

授業が終わった後、銀時と剣心は学舎を出て、少し離れた所に2人で座った。

銀時「…なあ、剣心…これどうなってんだ？」
剣心「拙者にも分からん……だが確かナギ殿は闇の書殿にはこう言った力があるといっていた気がするでござる」
銀時「まあ…そうだよな……他に考えらんねーし……」

一体どうなっているのだろうと二人は考えた。自分達は確か、闇の書と戦って、途中で意識を失い……気付いたら此処にいた。ということは、これは闇の書……『夜天の書』の仕業か？此処は闇の書が創った世界と二人は考えた。

？？？「どうしました銀時」
？？？「どうしたバカ弟子」

すると松陽先生と比古師匠がやってきた。

銀時「松陽先生…」
剣心「比古師匠…」

顔を上げて松陽先生と比古清十郎を見上げた。
見間違えるはずがない、自分達の恩師。

松陽「今日の銀時と剣心は、少し様子がおかしいですねぇ。銀時の居眠りはいつも通りですが」
比古「テメェもなんだか様子がおかしいじゃねぇか。季節外れの五月病にでもなったか？俺に対する尊敬の念がないのは相変わらずだけどよ」

微笑みながら松陽先生が言う。
比古師匠も腕を組みながらそう言う。
小さい頃、何度も見た松陽先生の笑顔。松陽先生の顔を見て、銀時と剣心は懐かしく思った。
比古師匠はいまだに生きてはいるが松陽先生はあの時幕府に捕まって処刑されたはずである。最もその時の光景を剣心は見ていないが松陽先生だけではない。高杉も桂も志々雄も他のみんなも昔のままだ。高杉や志々雄と喧嘩したり、その様子を松陽先生が笑って見守り、桂が止めに入るが、最終的に四人の喧嘩になる。騒がしかったあの頃のままだ。剣心は剣の修行の為に比古清十郎と山に籠もっていたので時々しかここにはこなかったがそれでもここは剣心にとっても大切な場所であった。時々銀時達と喧嘩もしていたし

松陽「何かあったのですか？」

松陽先生が尋ねた。
銀時と剣心はどう答えるか、しばし考えた。

銀時「松陽先生…」
剣心「比古師匠…」

意を決して言う。

「此処は…この世界は夢か何かですか？」

松陽先生と比古師匠に尋ねた。

松陽「はい。そうです」

比古「やった気付いたのか、このバカ共」

表情を崩さず、微笑みながら松陽先生は答えた。

比古師匠はむすっとした顔で答えた。

松陽「此処は、闇の書が銀時達の記憶を基に創った世界です」

比古「つまり俺達は偽者ってわけだよ」

松陽「ここは貴方達が望んだ。夢の世界、本当に欲しかった物が具現化した世界です」

松陽は二人にこう説明した。

少し強い風が吹いた。

学舎の外では、子供達が遊んでいる。桂と高杉と志々雄が何やら睨み合っている。

松陽「銀時、剣心。この世界にいれば、私や仲間達とずっと一緒にいられますよ」

比古「そうだ。ここにいりゃあ、面倒な戦いもしなくて済むぜ」

松陽先生と比古師匠がそう言った。

失ってしまった大切な恩師である松陽、大事な仲間達。この世界にいれば、譲夷戦争もなく、松陽先生や仲間達とずっと一緒にいられる。

最も二人は『この親父は余計だな』と比古師匠は見つめながら心の中でそう呟いた。

一瞬心が迷った。

松陽「夢でもいいじゃありませんか二人共、ここにいましょう。私もここでなら生きていられる。貴方達の先生でいられるんです」

大切な恩師と……皆と一緒にいられる。銀時が望んでやまなかった、今はもう、叶える事が出来ない、儚き夢……剣心も自分に大切な事をいろいろと教えてくれた松陽とは一緒にいたいと思っていた。銀時に比べればいた時間は遥かに短かったかもしれない。それでも自分にとっても松陽は比古師匠と同じ大切な恩師の一人なのだ。

銀時「……」

剣心「……」

松陽「ここでならずっと皆一緒にいられます。貴方達の欲しかった幸せが全部手に入りますよ」

比古「ああ、その通りだ。ここでなら何にも考えずずっと皆と一緒にいられる。苦しい事はもう何もねぇんだ。だからここにいていいんだ。皆と一緒にいようぜ」

だが、銀時と剣心は首を横に振った。

銀時「悪ぃ…松陽先生…」

前を真っ直ぐ見つめながら、銀時は松陽先生に謝った。

剣心「比古師匠……俺達…向こうに大事な物が出来たんです」

そう、俺達には今、掛け替えのない大切なモノがある。

新しく出来た仲間達という大切な物が

過去の思い出にしがみついて、今あるその大切なモノを捨てる訳にはいかない。自分の武士道を捨てる訳にはいかない。

そして、この世界は夢。夢での幸せは本当の幸せではない。

銀時「だから俺達は、向こうに戻らなきゃいけねェ」
剣心「大切な者達が待っているんです」

ハッキリと自分の意志を、松陽先生と比古師匠に伝えた。

比古「そうか」
松陽「そうですか」

松陽先生は微笑みを崩さない。
比古師匠も態度を変えない
すると答えを聞いた松陽先生は、銀時の頭に手を乗せ比古師匠は剣心の頭に手を乗せた。

松陽「よく、その言葉を言いました」
比古「ヒヨっ子のワリには少しは成長してたらしいな」
「え？」

銀時と剣心は松陽先生と比古師匠を見た。
松陽先生は、満足そうな笑みを浮かべて比古師匠も軽く微笑んでいた。

松陽「自分の幸せのために、大切なモノを捨てるように教えた覚えは、ありませんからね」
比古「ああ、現実を無視して夢の中に逃げるような逃げ腰の腰抜けにした覚えはないからな」

そう言って、松陽先生と比古師匠は銀時と剣心の頭から手を離した。

松陽「もし、この世界にいたいなんて答えたら、私達は貴方達を斬っていました」
比古「そうだな。そんな腰抜けどもには用はねぇからな」
「ええっ！！？」

銀時と剣心は思わず体が震えた。

松陽「ふふ。冗談ですよ」

笑いながら松陽先生は言った。
冗談に聞こえねーよ、と銀時は小声で呟いた。

比古「俺は冗談じゃねーぞ」

アンタの場合はそうだろうよ。と剣心は小声で呟いた。
すると、銀時達の前に光が現れた。驚いた顔で銀時と剣心は光を見つめた。

松陽「この光の中に入れば、この世界から出られます」

光を見ながら、松陽先生が言った。
銀時と剣心は立ち上がって、光に近づいた。

松陽「銀時」
比古「剣心」

その時松陽先生と比古師匠が銀時と剣心を呼び止めた。
銀時と剣心は足を止めて振り返った。

松陽「貴方達が本当に戦うべき敵は闇の書ではなく、闇の書の中に

いる『真の闇』です」
「闇の書の中の『真の闇』？」

銀時と剣心は考えた。
ヤミが闇の書から聞いた、心臓の鼓動音。そしてユーノが見つけた『闇の書は魔導師の技術の研究のための物ではない』という言葉。
そしてジュド達の目的
それと関係があるのか？

比古「そして、ジュドつったか？そいつの目的はその闇の書の『真の闇』を復活させる事だ」

比古師匠の言葉を聞いて二人はこう思った。やはりそれがジュドの目的なのだと、ジュドが闇の書を求めていた本当理由がその『真の闇』の復活である事を

比古「闇の書の闇を倒しちまえばそいつは蘇る」
松陽「『真の闇』の力は闇の書を遥かに上回ります」
比古「恐らくはあの夜王・宝仙に匹敵するか或いはそれ以上の化け物の可能性もある」
松陽「今の貴方達二人の力をもってしても勝てる確率はかなり低い。それでも貴方達は行くのですか？」

銀時と剣心の覚悟を確かめるように、松陽先生と比古師匠は尋ねた。
あの夜王・宝仙並の力を持つ怪物。
それが闇の書に封印されている『真の闇』本当に倒すべき敵
銀時と剣心は松陽先生と比古師匠から目をそらさず、真っ直ぐに見つめた。

銀時「相手が誰だろうと、俺達は俺達の大事なモンを護る」

松陽先生と比古師匠は、黙って銀時の答を聞く。

剣心「それが俺達の武士道です」

眼に強い決意と信念を宿しながら、剣心は答を言った。

松陽「二人とも良い眼ですね」

比古「ヒヨっ子にしては言うようになったじゃねぇかバカ弟子が」

松陽先生は、再び満足そうな笑みを浮かべ比古師匠はまた軽く微笑んた。

松陽「行きなさい銀時。貴方が信じる道を」

銀時「はい」

比古「行ってこい、バカ弟子。せいぜい殺されねぇようにな」

剣心「師匠こそさっさと成仏して欲しいよ」

比古「勝手に殺すんじゃねぇ、俺はまだ生きてるっつーの。この幽霊と違って」

松陽「誰が幽霊ですか」

松陽先生に応え、銀時は前を向いて歩き出した。

剣心も比古師匠と軽く口喧嘩してから歩き出した。

後ろを振り返らず、前に進む。

松陽先生……またアンタに会えて…嬉しかったぜ

比古師匠…お元気で……

心の中で恩師に別れを告げ、銀時と剣心は決意を胸に光の中へと入っていった。

比古師匠は生きてるけどね……
消える直前松陽はこんな事を言っていた。

松陽「清十郎……私は貴方がうらやましいですよ……」
比古「あ？何でだよ」
松陽「貴方は自分の弟子と酒が飲めるんでしょう？」
比古「ハッ、どうだかな。本物の俺とアイツとはもう何年も会ってねぇしな」
松陽「現実でも私ももっとあの子達と一緒にいたかったですよ……」

松陽先生と比古師匠はそう言って後ろの寺子屋と共に光となって消えていった。

光から出た銀時と剣心は、真っ暗闇にいた。
すると闇の書が姿を現した。

闇の書「銀時…剣心…」

闇の書は、少し驚いた顔をしている。

銀時「よォ」
剣心「また会ったでござるな」
闇の書「銀時…剣心…何故…夢の世界から抜け出した?あそこにいれば、何も失わず、穏やかで安らかな夢を見れたのに……」

闇の書は、わからないと言った顔をする。

銀時「簡単な事だ。夢や思い出は、逃げ込む場所じゃねーからだ。まっ、俺は元から逃げるつもりはねーけどな」

剣心「そうだ…。思い出は心の奥底にしまっておく大切な物でござる。現実が嫌になったからといって逃げていい場所ではござらんよ」

思い出は大事にすべきモノだが、決して逃げ込むための場所じゃない。

闇の書はどうするか考えている。

剣心「闇の書殿。はやて殿を助ける方法は、本当にないのでござるか？」

剣心が尋ねた。

闇の書はどう答えるか迷っている。

銀時「もしはやてを助ける方法があるなら、はやてを助けやがれ」

剣心「その通りだ。彼女をこのままにしておいていいのか！？」

闇の書「…だが……私がこの行為をやめてしまったら……」

闇の書は口ごもった。

主の事は助けたい。死なせたくない。

だが、

？？？『フハハハハハハハ……！！』

闇の書の頭の中に『奴』の存在がよぎる。

自分を遥かに超える信じ難い力を持つ『奴』の存在が…

その存在によって破壊しつくされる世界の姿が

そして『奴』に無残にも殺される主の姿さえも…
主を助けたら『奴』が外に出てしまうかもしれない。
『奴』が外に出たら、全ての世界が破壊されてしまう。
そうなったら主も『奴』に殺されてしまう。
それなら、苦しんで死ぬよりも、安らかな永遠の眠りにつかせた方が……。

「闇の書（殿）」

銀時と剣心が呼んだ。

銀時「お前の中に何がいるのかは知らねェ。けど、もしソイツが外に出たら、俺達がソイツを止めてやる」
剣心「そうだ…。この命に変えてもな」
闇の書「無理です。『奴』はあなた達の手に負える相手ではありません。あなたたちは確かに人間の本来のスペックを超えた力を持っている。しかし『奴』は本物の化け物です。倒す事など出来るわけが……」
銀時「じゃあ…そいつの為にこのままはやてを見捨ててもいいのか？」
闇の書「それは…」

闇の書は戸惑った。
確かにこの二人の強さは桁違い。
脅威の物といえるだろう。
最強の破壊兵器と呼ばれたこの私で恐れを抱くほどにだが……『奴』に比べれば……

銀時「ソイツのせいでお前やはやてが苦しむなら…涙を流すなら、俺がソイツをブッた斬ってやる」

剣心「拙者達の手でそ奴を黙らせよう。必ずな」

銀時と剣心が力強く剣を握りながらそう言った。

闇の書「銀時…剣心」

剣心「女子に涙は似合ないでござるよ。笑っている方がずっといい」

銀時「笑ったお前の顔も見てみてーしな」

闇の書「……！！」

銀時と剣心の言葉に、闇の書は思わず頬を赤くした。

笑った私の顔が見たい？そんな事を言われるとは…人からそんな事を言われたのは初めてだ。

闇の書は、何とか気持ちを切り替えて銀時と剣心を見た。

この二人は『奴』の信じ難い強さと恐ろしさを知らないだが…この男達なら、銀時と剣心なら『奴』さえも何とかしてくれるかもしれない。

あの信じ難い強さを持ったあの怪物さえも、闇の書はそんな気がした

闇の書は決意した。

闇の書「…わかった。これから主の所へゆく」

銀時「ああ。頼むぜ」

剣心「よろしく頼むでござるよ」

三人は、はやての所へ向かった。

はやても真っ暗闇の中にいた。

「ん…」

はやては重い瞼を開けた。周りは暗く、目の前には闇の書と銀時と剣心がいた。

はやて「銀八先生と剣八先生!?」

車椅子に乗ってるはやては、銀時と剣心を見て身を乗り出した。

闇の書「銀八先生と剣八先生?」

銀時と剣心を見ながら、闇の書が呟いた。

銀時「ああ、それは本名じゃねーんだ。本名は銀時。坂田銀時だ。なんなら銀ちゃんって呼んでもいいぜ?」

剣心「拙者は緋村剣心でござる。拙者の事も好き呼んでもらってか

まわんでござるよ」

はやてに本名を教えた。

はやて「それじゃあ銀ちゃんと剣ちゃんって呼ぶわ」

すると、はやては周りを見渡した。

はやて「銀ちゃんに剣ちゃん、ここはどこなんや？それにその子は？」

闇の書「私は闇の書です。そして、ここは私の中です」

闇の書がはやてに答えた。

はやて「えっ？あなたが闇の書!?」

はやては驚いた。

それから闇の書は、はやてに今までの事を全て話した。はやては真剣に闇の書の話を聞いた。

話を聞き終えたはやては頷いた。

はやて「わかった。ほんなら名前をあげる。闇の書なんて名前は、貴女には似合わへん。私は管理者や。私にはそれが出来る」

闇の書「……ですが主一言よろしいですか？」

はやて「何や？」

闇の書がはやてに話しかけてきた。

闇の書「ここで眠っていれば貴方の欲しかった幸せが手に入ります」

銀時「おい、今更何言って……」

剣心「銀時」

闇の書がはやてに向かってここで寝ていたほうがいいような事を言い出したので、銀時が話しに割り込もうとしたが剣心に止められた。

剣心「大丈夫でござるよ。八神殿ならば我々は黙ってみているでござるよ」

銀時「あ…ああ……」

剣心にこう言われ銀時は黙った。

はやて「あたしが、欲しかった幸せ……？」

闇の書「健康な体、愛する者たちとの暮らし。ここで眠っていれば、夢の中で、貴方はずっと、そんな世界にいられます。誰にも邪魔されずにずっと……」

自分の目の前にいる闇の書は、主たる少女はやてを、眠りへと誘おうとする。やはり彼女は心配なのだ。『奴』の絶大すぎる力を闇の書は恐れている。だからもしはやてが望むであればこのまま夢の中で守護騎士達と一緒にずっといさせてやるのがいいのではないかと思っていた。だが、その言葉を聞いた、はやての出した結論は

はやて「……でも、それは唯の夢や」

はやては首を振りながらこう言った。

闇の書「主……」

はやて「私、こんなん望んでない。あなたも同じはずや。違うか？」

自分の望んでいるのは、そんな幸せではない。夢の中で得られるモ

ノでは、ないと。それは、目の前にいる女性も、同じなのではないのか、と……

闇の書「私の心は、騎士達と深くリンクされます。だから私も、貴方の事を愛おしく思います。だからこそ、貴方を殺してしまう、自分自身が許せない」

はやて「……」

はやては、目の前の闇の書の言葉を、聞いていた。深く、鋭い刃に貫かれるような、強い痛みと共に

闇の書「自分ではどうしようも出来ない力の暴走。貴方を侵食させてしまう事も、暴走して、貴方を食らいつくしてしまう事も、止まらない……止める事が出来ないのです……」

闇の書は、自分の罪を、懺悔のように、言っていた。自分には役目を遂行する為の呪われたプログラムがある。そして『奴』という恐るべき存在を眠らせている。だから、何も救えない。最愛の、主すら……銀時と剣心の二人の事は信じている。だが『奴』の脅威という言葉が闇の書の頭から離れない。もしこの二人が殺されてしまえば次は確実に主はやてが『奴』に狙われるだろう。自分の力では『奴』は止められない。そんな自分が、唯一できるのは、せめて夢の中で、自分の願いを、叶えてあげるしか、ないのだと……

はやて「……覚醒の時に、今までの事少しは分かったんよ……望むように生きられへん悲しさ、私にも少しは分かる。シグナム達と同じや。ずっと悲しい思い、さびしい思いしてきた……」

闇の書「…主……」

はやては、自分も、彼女達と……あなたとも同じだと、伝えた。

それでいてなお、はやての瞳に、強い意思が宿り始める。闇の書は悲しそうな目ではやてを見つめている。

はやて「せやけど、忘れたらあかん」

闇の書「!?」

足もろくに動かせない、それなのに、少女は今乗っている車椅子の肘掛を握り、力を込めて腕を伸ばし、闇の書の頬に、触れた

はやて「マスターは今は私や。主の言うことは、ちゃんと聞かなあかん」

暗い空間に、真白く輝く魔法陣が、その世界を照らし出した

はやて達の足下に白い魔法陣が展開される。

新八達は、アリサとすすがと一緒に戦いの様子を見ていた。
なのは達は、海上で闇の書と戦っている。

新八「見てる事しか出来ないなんて…」

新八は悔しくて、歯を食いしばって拳を強く握った。

美琴「ねえ…あたし達もやっぱ行ったほうがよくない？」
セト「そうだな…僕達も行った方がいいだろう」

美琴とセトがそう言ったので他の皆も頷いた。

九兵衛「では遠距離攻撃ができる、美琴とセト、ブレイド、ソルヴァ当たりが銀時達の応援に行くべきだろう。それ以外の皆がここでアリサ達を守る。そんなところでどうだ？」

九兵衛の提案に皆が納得した。
その時である。

？？？「お～い」

『え？』

誰かの声が聞こえた。
誰かがビルの間を飛んで来ていた。
それはナギとハヤテであった。

ナギ「別にいく必要はないぞ。もう決着はつくだろうしな」
セツナ「え？」
アルカ「どういう意味ですか？それは」

アルカがナギに尋ねた。

ナギ「元々闇の書…いや……リィンフォースの防衛プログラムを破壊するのはあいつらだけで十分なんだ。もうすぐそれが現れるだろうしな」
神楽「ナギ。リィンフォースって何アルか？」
ナギ「はやての奴が闇の書に新しくつける名前だよ」

神楽の質問にナギはそう答えた。

ナギ「とにかく防衛プログラムさえ破壊すればハッピーエンドだ。今更向かった所でたいした事は出来んぞ」
左之助「なんだよ…そうか……」
美琴「結局喧嘩の一つも出来なかったわね」
ブレイド「ちッ、体がなまっちまうぜ」

ナギの言葉を聞いて左之助、美琴、ブレイドの3人は少し残念そうな顔をした。

ナナ「だと…いいんだけど……」

ナギ「ん？」
モモ「如何したのナナ？」
ナナは急に不安げな声を上げた。気になったモモがナナに尋ねた。
ナナ「あたし…なんだか嫌な予感がするんだ……」
薫「私も……」
モモの質問にナナはそう答えた。薫もなんだか不安そうな顔をしていた。
桂（…確かに俺も嫌な予感がする……ナギ殿の話しでは確かに闇の書の闇とはその防衛プログラムの筈だが…なぜか……それを破壊してはいけない気がする…それを破壊しては…もっととんでもない“何か”が出てくる気が……）
桂も心の中でなにやら悪寒を感じていた。とてつもない何かが闇の書の中から出てきそうな…そんな予感がしていた。
桂（例のジュドたちという男達の件もある…俺の考えすぎでなければいいが…）
桂はこう思っていた。その悪い予感が現実の物となってしまうのであった。

ヤミは一人で闇の書と対峙していた。なのは、フェイト、アルフ、シャナ、そしてデジモン軍団は空中でその様子を黙って見守っていた。

何発か魔法攻撃を撃ったが、闇の書には通用しない。

結局ヤミの近接戦闘も余り効果がなかった。

ここに来るまでに戦いなどを繰り返したり高速で飛び続けていたりしていたので体力は限界を迎えていた。

ヤミ（これ以上はさすがに不味いかもしれませんね……）

ヤミがそう思った時であった。

突然闇の書の動きが鈍くなった。

その時、

はやて（外の方！管理局の方！）

なのは達は念話を受けた。

はやて（そこにいる子の保護者、八神はやてです！）

「はやてちゃん！？」

「はやて！？」

念話を受けた二人は驚いた。

（えっ！？なのはちゃんとフェイトちゃん！？）

はやても驚いている。

なのは（うん！なのはだよ）

フェイト（いろいろあって、闇の書と戦ってるの）

二人ははやてに返事をした。

はやての声を聞いて、二人は少し安心した。

ヤミ「はやて！大丈夫なんですか！？」

はやて（ヤミちゃん！？そこにおるの！？）

ヤミ「はい。私も闇の書と戦っていましたから」

はやて（ウン。ありがとうなヤミちゃん。あたしはもう大丈夫や）

ヤミ「そうですか。よかった……」

はやての無事を確認したヤミも安堵の息を吐いた。

はやて（ゴメンなのはちゃん、フェイトちゃん。それに皆。何とかその子止めてあげてくれる？）

「え？」

はやて（魔導書本体からはコントロールを切り離したんやけど、その子が走ってると管理者権限か使えへん。今そっちに出てるのは、自動行動の防御プログラムだけやから。管理者権限が使えれば、銀ちゃんと剣ちゃんも外に出せる）

はやてがなのは達に説明した。

「わかった。魔力ダメージを与えればいいんだね」

なのは「やろう、フェイトちゃん！」

フェイト「うん！」

なのは「シャナちゃんや他の皆もお願いします！」

シャナ「了解！」

グレイドモン「心得た」

ベルゼブモン・メイルバードラモン

「了解した」

スパロウモン

「こっちはいつでも準備ＯＫだよ！！」

シャウトモン「キングの俺に任せときな！！」

二人は、闇の書に向けてデバイスを構えた。

デバイスの先に魔力を溜める。

他の皆も技を放つ準備を始めた。

闇の書の中。

はやて「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る」

はやては両手を闇の書の顔に添える。

はやて「強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール。リインフォース」

闇の書に新たな名を贈り、魔法陣は強く輝いた。

なのは「スターライト・ブレイカー！！！」

フェイト「プラズマ・スマッシャー！！！」

シャナ「火龍炎撃破！！」

ヴィルヘルミナ「はあっ！」

シャウトモン「ソウルクラッシャー！！」
スパロウモン「ランダムレーザー！！」
メイルバードラモン「プラズマキャノン！！」
ベルゼブモン「デス・ザ・キャノン！！」
ガイオウモン「ガイアリアクター！！」

桜色の閃光と金色の閃光が同時に放たれた。
そして凄まじい砲撃攻撃攻撃やレーザーなどの技が一斉に放たれた。
それは集まってとてつもなく巨大な砲撃となり闇の書を飲み込んだ。

リィンフォース「新名称『リインフォース』認識。管理者権限の使用が可能になります」
はやて「うん」
リィンフォース「ですが、防衛プログラムは止まりません。放って置けばこの世界の全てを破壊するでしょう」
はやて「まぁ何とかしよ」

はやての前に一冊の本『リインフォース』が現れた。

はやて「行こか。リインフォース」

はやてはリインフォースを抱いた。

リィンフォース「はい。我が主。マスターはやて」

はやては光に包まれた。

外にいるなのは達に、エイミィからの通信が入る。

エイミィ「みんな気をつけて！闇の書の反応、まだ消えてないよ！」

海に黒い球体が現れた。闇の書の防御プログラムだ。

すると、なのは達のすぐ近くに白い光が現れた。

はやて「おいで…私の騎士達…」

白い光を囲むように、守護騎士達が現れた。

シグナム「我等、夜天の主の下に集いし騎士」

烈火の将シグナム。

シャマル「主在る限り、我等の魂尽きる事無し」

湖の騎士シャマル。

ザフィーラ「この身に命在る限り、我等は御身のもとに在る」

盾の守護獣ザフィーラ。

ヴィータ「我等が主、夜天の王、八神はやての名の下に」

鉄槌の騎士ヴィータ。
はやてによって、守護騎士達が復活した。

フェイト「シグナム！」
なのは「ヴィータちゃん！」

シグナム達を見て、フェイトとなのはは名前を呼んだ。
光の中には、はやてとリインフォースがいた。

はやて「リインフォース。私の杖と甲冑を」
リィンフォース「はい」

はやては黒いバリアジャケットを見につけ、杖を手にした。
直後、光は消えて、中からはやてが姿を現した。

はやて「夜天の光よ、我が手に集え！祝福の風リインフォース。セーットアップ！！」

髪の色が変わり、騎士甲冑をイメージしたようなバリアジャケットを身に纏い、背中には翼のようなものが出た。

新八「あっ！あれシグナムさん達だ！」

様子を見守っていた新八が叫んだ。

神楽「じゃあ、あの真ん中にいるのが、はやてアルカ？」

桂「うむ。間違いない、八神殿だ！どうやら救出できたみたいだ！」

神楽の言葉に、桂が答えた。

お妙「よかったわ」

梔『よかった、よかった』

お妙はホッと一安心した。
梔も嬉しそうにスケッチブックを掲げた。

ユーノ「それじゃあ、僕もなのは達の所に行きます」
新八「うん。気をつけてねユーノ君！」
ナギ「死なないようにがんばれよ淫獣」
神楽「なのはにHな事するなヨ淫獣」
ユーノ「だから淫獣じゃないってば！！」

ユーノはなのは達の所へ向かった。

アルカ「あの…ちょっといいか？」

アルカが手を挙げながら言った。

クルス「姉さん？」
ナギ「如何した？アルカ？」

みんなの注目がアルカに集まる。

アルカ「坂田と緋村の姿がないが…」
未央「ホントだ…お兄ちゃん達は？」
『……え？』
「…あれ……？」

さっきまで喜びで上がっていたテンションが一気に下がった。
そういえば、銀時と剣心の姿が見当たらない。
なのはちゃん達から念話を受けたユーノ君の話では、銀さんと剣さ

んは闇の書に吸収されてしまったらしい。

お妙「まさか…銀さんと剣さん……なのはちゃん達の攻撃で、闇の書と一緒に吹っ飛ばされちゃったのかしら…」

左之助「いやいや…あの二人に限ってそれはねぇだろ…」

ソルヴァ「ですよね…」

ブレイド「心配ねーだろ。あいつらなら」

薫「剣心……」

心配そうな顔で、お妙が言った。

新八達はイヤな汗を流した。

左之助とソルヴァ、ブレイドは心配ないと言っているがやっぱり心配だった。

薫はすでに泣きそうになっていた。

すずか「あの…皆さん？」

すずかが恐る恐る声をかけた。

が、誰も反応しなかった。

銀時達は何処へ？

そして…闇の書の奥底では……

ドクン

――もう…間も無くだな……――

ドクン

――この忌々しい封印が解けるのは…――

ドクン

――早くしろ…早く破壊してしまえ…この忌まわしい卵の殻を――

ドクン

――そうなった時が……――

ドクン

――――貴様らの最後の時となるのだ……――――

その時であった。

？？？『聞こえるか？■■■よ…』

謎の存在が闇の書の中にいる存在に話し掛けてきた。

？？？『！！この声…もしやあなた様は……』

？？？『そうだ…私だ……今はあるロストロギアの力を使いお前に話し掛けている』

？？？『あなた様自らが…一体私目に何の御用で……』

？？？『うむ…お前に言っておくことがある。我が配下の者達をお前復活の為に動かしていた』

？？？『な…何と……』

？？？『もう間も無く封印も解けるのであろう……私にとってはつい最近の事だが、お前にとっては私の声を聞くのも数千年ぶりとなろう……永きに渡りお前を放って置いてすまなかったな……』

？？？『滅相もございません…元はといえば人間如きに不意を疲れ封印された私目の責任、そのような私如きのために兵を動かしてくださった事この■■■。感謝の極みにございます……』

？？？『そうか…そう言ってもらえると私も嬉しい……お前の為に“餌”も用意しておいた。お前の前に一番に現れるものがそうだ。数千年ぶりの食事を存分に味わうがよかろう…』

？？？『はっ、ありがとうございます。それで私はその後いかが致しますれば？』

？？？『その後の指示はメッセンジャーを送っておいた。その者から聞けばよかろう』

？？？『そうですか。了解いたしました』
？？？『今後の計画の為…お前にも働いてもらう事となろう……その時は期待しているぞ』
？？？『お任せください。二度とご期待を裏切りはしません』
？？？『そうか。ではまたな』

そう言ってその謎の存在は闇の書に封印された存在との通信を切った。

――ふふふ…まさか“あのお方”自ら動いてくださっていたとは……ハハハハッ！――

闇の書に眠っている存在もそのまま再び闇の中へと消えた。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生!』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『匿名希望』さんから「最近、るろ剣の追憶編を観てます。
池田屋は最高ですわ、本当に!!
剣心ＬＯＶＥなフェイト、シグナム、アルフへ２つの質問です。
1，貴方達は「るろうに剣心」作中にて剣心を死ぬほど愛した雪白

巴さんをどう思う?

2，「るろ剣」のｏｖａ，劇場版のｂｌｕ－ｒａｙ化になりますが欲しいですか?」はい、ではおこたえどうぞ」

フェイト「まあ、あんなに剣心に愛されてうらやましいとは思います」

アルフ「というより剣心にそんな女がいたとは……」

アルフ「ちょっとショックかもね」

フェイト「ＤＶＤの方はちょっと見てみたいかも」

シグナム「そうだな。剣心の見事な剣技が見られるのであれば私も見たい」

アルフ「でも、その雪白巴って人と愛し合ってるのを見るのはちょっと腹立つね」

フェイト・シグナム『確かに……』

銀八「……そんなに気にする事ですかね。まあと言う訳で『匿名希望』さん廊下に立っていなさい。次の質問行くぞ～。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから「銀時以外の万事屋メンバー&御坂、なのは、フェイト、シグナムに質問。

僕の小説に登場する組織と万事屋の中で、入隊（万事屋メンバーの場合は転職）したいならどれ?

1．万事屋

2．真選組

3．天草組

4．奴良組

5. 『グループ』
6. 『アイテム』

質問2．真選組、天草組、奴良組の主要人物で、「この人なら組織の上に立つに相応しい」と思う人物は？

1. 奴良リクオ
2. 土方十四朗
3. 神裂火織
4. 近藤勲
5. 沖田総悟
6. 五和
7. ぬらりひょん

「ではお答えどうぞ」

新八「僕は『アイテム』がいいですね。まあ…剣さんがいるなら万事屋でもいいですけど……」
神楽「私は天草組がイイアル。まあアホの『真選組』に似てきたのがちょっと嫌アルけど……」
シャナ「私も天草組よ。まあ・・・確かに『真選組』に似てきたのはちょっと嫌だけど」
ヤミ「私もですね。万事屋ばかりではタイヤキが余り食べられませ

んからね」
セイバー「まあ、一応私の剣技が役立つのでしたら『天草組』がいいかもしれませんね」
美琴「私は暴れたいから、『天草組』がいいわね」
フェイト「私はもちろん『万事屋』がいい」
シグナム「私もだ」
アルフ「あたしも」
なのは「私も銀さんと一緒に『万事屋』がしたいの♪」

質問2の答え

全員『リクオ（さん）か神裂（さん）』
銀時「って、即答かよ」
神楽「当たり前アル」
シャナ「少なくともゴリラとマヨ方とドSはありえないわ」
ヤミ「あんな人達の下に付く位なら死んだほうがマシです」
セイバー「同感ですね」
近藤「ちょっとおぉぉぉぉーーー!!そこまで言う!?酷すぎんでしょ!!」
土方「誰がマヨ方だこの野郎!!好き放題いいやがってこのバカ女どもたたっ斬られてーのか!!」
シャナ「ホントのこと言って何が悪いのよ」
土方「テメェー!!今すぐ叩っ斬ってやるぅー!!」

こうして喧嘩は始まった。

銀八「はあ～もういいや、とりあえず『亀鳥虎龍』さん、廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第五十七訓　夢の中逃げてもいい事はない（後書き）

支配者「今回は今までで一番長くしました」

銀時「確かに長かったな」

支配者「そしていよいよ次回この小説最強の敵出現です」

剣心「では次回もお楽しみにでござる」

第五十八訓　そして最強の闇が動き出す（前書き）

支配者「ついに今回この小説最強の敵登場です！」

銀時「ドンだけやべぇ奴なんだ……」

剣心「さあ…？」

フェイト「リリカル剣魂スペシャル始まります」

第五十八訓　そして最強の闇が動き出す

ヴィータ「はやて…」

ヴィータは目に涙を浮かべている。
はやては優しく微笑んだ。

シグナム「すみません」
シャマル「はやてちゃん……あの…ごめんなさい」

シグナムとシャマルが、はやてに謝った。
はやては首を横に振った。

はやて「ええよ。みんなわかってる。リインフォースが教えてくれた。そやけど細かい事は後や」

はやては嬉しそうに微笑んだ。

はやて「おかえり。みんな」
ヴィータ「う……うあああああ！！」

はやての温かい言葉を聞いた後、ヴィータが泣きながら抱き付いた。

ヴィータ「はやて！はやて！はやてぇぇぇぇ！！」

涙を流しながら、ヴィータははやての名前を叫んだ。
はやては優しくヴィータを抱いて、頭を撫でた。
そこへ、なのはとフェイトとヤミがやってきた。

はやて「なのはちゃんとフェイトちゃんもゴメンな。ウチの子達がいろいろ迷惑掛けてもうて」
なのは「ううん」
フェイト「平気」

申し訳なさそうな顔で二人に謝るはやてになのはとフェイトは笑顔で答えた。

はやて「ヤミちゃんも悪かったな。あたしのせいでえらい苦労掛けてもうたみたいで」
ヤミ「私が自分の意思でやったことです。はやてが気に掛ける必要はありません」

ヤミも軽い笑顔ではやてにそう答えた。

はやて「他の皆もあたしの為にありがとうな」
シャナ「気にしなくていい」
ヴィルヘルミナ「はい」
スパロウモン「そうそう」
グレイドモン「我らの主の命で動いただけだ」
メタルグレイモン「その通りだ」
ベルゼブモン「ああ」

はやての言葉にシャナやヴィルヘルミナ、デジモン達も普通に答えた。皆はやてを助ける為に動いていた。それでいいのである。
すると、

リィンフォース「主、申し訳ありません」
はやて「ん？」

いきなりリインフォースが、はやてに謝った。

リィンフォース「銀時と剣心を少し離れた所に出してしまいました」

シャナ「えっ！？」

はやて「あっ！そういえば銀ちゃんと剣ちゃんがおらん！！」

慌ててはやて達は辺りを見回した。

なのは「銀さん達をどこに出したんですか？」

なのはがリインフォースに尋ねた。

リィンフォース「上です」

全『上？』

言われて全員が、顔を上に向けた。

すると上から銀時と剣心が落ちてきて、

シグナム「んがっ！！」

シャウトモン「ぐえっ！！」

スパロウモン「おろっ！！」

シグナムとスパロウモンの上に乗っているシャウトモンにぶつかった。

シグナム「痛たた…」

シャウトモン「…ッたく」

スパロウモン「危ないじゃんか！もう！」

左手で顔を押さえながら、右手で剣心を抱えた。シグナムの腕の中

に、体中傷ついた剣心がいた。シャウトモンも傷ついた銀時を両手で支えていた。

シグナム「剣心！？」
シャウトモン「あ！天パ！！って……ボロボロ！？」

傷ついた剣心と銀時の姿を見て、シグナムとシャウトモンは驚いた。

シグナム「どうして二人共、こんな…傷だらけに……！？」
リィンフォース「主を救うために、私と戦って傷ついたのです」

リインフォースがシグナムにそう教えた。
シグナムは思い出した。自分が消える間際に、剣心と皆に言った言葉を。

『主はやてを頼む』

剣心は私の頼みを護るために、主はやてを護るために、こんなに傷つくまで戦ったのか。
私達から受けた傷も、浅くはなかったはず。
シグナムは剣心を強く抱いた。

シグナム「…ありがとう、剣心……」

涙を流しながら、剣心に礼を言った。

ヴィータ「…銀時」

ヴィータは銀時を見つめた。
シグナムとの約束を護るために、二人共……こんなにボロボロになな

るまで戦ったのかよ。
シャマルとザフィーラも剣心と銀時を見つめた。
するとエイミィから通信が入った。

エイミィ『皆！暴走開始まで、残り２０分しかないよ！』

エイミィの口から、緊迫した言葉が出る。
それを受けて、皆の身体が自然と引き締まった。
これは、最初で最後の、一発勝負。
失敗は許されない。
失敗したその瞬間、すべてが終わる
全てが闇の書の防衛プログラムの闇に飲み込まれる。

シグナム「……時間がないな。シャマル。剣心と銀時の治療を頼む」
シャマル「はい」

シグナムの言葉を受けてシャマルは頷いて答えた。
指にはめていた金色の指輪に、唇で軽く触れる。
瞬間、彼女の周囲に緑色の魔力が現れ、足元に緑色の魔法陣が展開される。
そしてシャマルは、癒しの言葉を口にした。

シャマル「クラールヴィント、本領発揮よ。静かなる風よ。癒しの恵を運んで」

緑色の花びらが風に舞う。銀時と剣心、それにフェイトとなのはとシャナとヤミ、デジモン軍団の傷を癒した。

シャウトモン「おっ！疲れが一気に抜けた！」
グレイドモン「之は凄いな……」

シャマル「『湖の騎士』シャマルと『風のリング』クラールヴィント。癒しと補助が本領です」
フェイト「凄い！」
なのは「ありがとうございます、シャマルさん！」
シャナ「へ～、やるじゃない」

皆は傷が癒えて回復した。
シャナとグレイドモンはシャマルの回復魔法の手際のよさに思わず感心した。
剣心と銀時も傷は癒えたが、まだ目を覚まさない。

シャマル「剣さんと銀さんの傷も癒したけど、目を覚ますにはもう少し時間がかかるわ」
シグナム「うむ。充分だ」

シグナムは頷いた。

そこへクロノがやってきた。

クロノ「すまないが。水を差してしまうんだが、時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。時間がないので簡潔に説明する」
シャナ「何？今頃来たの？」
ヤミ「今まで何をしていたんですか？ホント役に立たないＫＹですね」
シャウトモン「ほんとＫＹだよな」
スパロウモン「ＫＹ，ＫＹ」
クロノ「僕をＫＹと呼ぶな！大体僕の力は後で必要になるからとい

って後からこいッ言ったのは君達の主というあのナギって子じゃないか！！大体僕はあのイヴという子を安全なところまで運んでいたんだぞ！君達が僕におしつけたんじゃないか！！」

ヤミ「彼女にエッチイ事はしてないでしょうね」

クロノ「そんな事する訳ないだろ！！」

シャナとヤミがクロノを睨み、スパロウモンとシャウトモンがクロノをからかった。クロノが遅れたわけはナギに空を飛べないイヴを地上に下ろして来いと命令されたからである。それに後から自分の力が必要なるからといわれてしばらく傍観していたのだ。それなのに遅れてきた事を責められしかもＫＹ呼ばわりされたのでは怒鳴りたくもなる。その上ヤミに変態扱いされまたしてもクロノは激しく怒鳴り散らした。

クロノ「はあ…とりあえず皆あれを見てくれ」

クロノは半泣きし溜息をつきながらも視線を黒い球体に向けた。

クロノ「あそこの黒い淀み。闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する。僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在二つある」

クロノはグレアムからもらった待機状態のデュランダルを取り出した。

クロノ「まず一つは、極めて強力な氷結魔法で停止させる。二つ、軌道上に待機してあるアースラの魔導砲『アルカンシェル』で消滅させる」

クロノやアースラの皆では他に案が浮かばなかった。

クロノ「これ以外に他にいい手はないか？」

クロノが他に意見を求めた。

シャマルが手を挙げた。

シャマル「えーと…最初のは多分難しいと思います。主のない防衛プログラムは、魔力の塊みたいなものですから」

シグナム「凍結させてもコアがある限り、再生機能は止まらん」

シャマルとシグナムが渋い顔で言った。

ヴィータ「アルカンシェルも絶対ダメ！こんな所でアルカンシェル撃ったら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！！」

ヴィータがアルカンシェルに反対する。

「そ…そんなに凄いの？」

なのはがユーノに尋ねた。

ユーノ「え～っと、発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅を起こさせる魔導砲。って…いうと大体わかるかな？」

ユーノが二人に説明した。

なのは「あの、私もそれ反対！」

フェイト「同じく！絶対反対！！」

アルカンシェルの説明を聞いた、なのはとフェイトも反対した。
確かにそんなものを撃ったら、はやての家どころか街まで消滅してしまう。

クロノ「僕も艦長も使いたくないよ。でもあれの暴走が本格的に始まったら被害はそれより、遥に大きくなる」
エイミィ『はい、みんな！あと十五分しかないよ』

エイミィが通信で伝えた。

「何かないか？」

守護騎士達に尋ねた。

シグナム「すまないが、無い。あまり役に立てそうも無い」

悔しそうにシグナムが言った。

ザフィーラ「暴走に立ち会った経験が、我等には殆どないのだ」

と、ザフィーラが言った。

アルフ「ああ！なんかゴチャゴチャ欝陶しいなぁ！みんなでズバッとぶっ飛ばしちゃうわけにはいかないの？」

焦れたアルフがそんな事を言った。

ユーノ「ア…アルフ。そんな単純な話じゃ…」

ユーノが顔を青くさせながらそう言った。
フェイトは考えた。
シグナムも考えた。
こんな時、銀時と剣心なら何て言うだろう。
そう思いながら、シグナムは背中に背負った剣心を見た。フェイトも、シグナムの背中で眠ってる剣心を見た。
ヴィータもシャウトモンに抱えられている銀時を見た。
銀時と剣心なら、きっと誰も思いつかないような事を考える。
するとスパロウモンが手を上げた。

スパロウモン「あのさ～」
ヴィータ「なんだよ？」
スパロウモン「ナギは宇宙で撃てばいいって言ってたよ。そのアルカンシェルって言うの」

スパロウモンはそう言った。

なのは「えっ！？」
フェイト「クロノ。アルカンシェルってどこでも撃てるの？」

フェイトが尋ねた。

クロノ「ああ、一応どこででも打てる。そういえば彼女も宇宙空間で打てばいいといっていたな」

クロノはそう答える。ナギの原作知識だ。ここは普通に進む。

話を聞いていたエイミィは、得意げな笑みを浮かべた。

エイミィ『ふふふ…その通り管理局のテクノロジー、ナメてもらっ

ちゃ困りますなぁ』

右手の親指を立てる。

エイミィ『撃てますよ。宇宙だろうが、どこだろうが！』

自信満々に答えた。

クロノ（あのナギという子から聞いた作戦……本当にやるのか？）

クロノは不安げな表情を浮かべていた。

すずか「あの…海にある黒いのは何だろ?」

すずかが不安げに言った。

アリサ「一体何なの?まさかこんなのが…このままずっと続いたりしないよね?」

アリサも不安になる。

ナギ「心配するな」

ナギが二人に言った。

すずか「ナギさん？」

二人はナギを見た。

ナギ「あいつ等の力なら大丈夫だよ。きっと上手くいく」

ナギは二人にそう答える。

新八「そうだよ。剣さんや銀さん、なのはちゃん達が、きっと何とかしてくれる」

そう。あの人達ならきっと何とかしてくれる。

今まで、どんなピンチだって切り抜けてきたんだ。

だから。

新八「信じよう。剣さんや銀さん達を信じて待とう」

笑顔で新八が言った。

神楽「新八のくせに、たまにはいい事言うアルな。そしてやっぱりキモイアル」

新八「だから”たまには”は余計だよ神楽ちゃん。そしてやっぱり“キモイ”とは何だぁー！！」

新八が神楽に言った。

そしてまたしても“キモイ”と言われたので新八が神楽に怒鳴った。

ナナ「ダメガネの癖してかっこいいこと言うと気持ち悪く聞こえんだよ」
セト「確かにな」
ソルヴァ「似合わない事しないでください」
セイバー「そうですよ気持ち悪い。熱でもあるんじゃないですか？」
黒子「気を確かに持ってくださいまし」
新八「オイィィィィ！！僕がまともな事言ったらそんなにおかしいってか！？ふざけんなゴラァァァァァ！！！！」

皆が新八が真面目な事を言ったのでけなし始めた。流石にそんな事を言われたら新八だって怒るのは当たり前である。というか怒らないほうがおかしいだろ普通。

すずか（新八さん…かわいそう）
アリサ（さすがに哀れすぎるわね……）

アリサとすずかは新八に同情のまなざしを向けた。
そしてそれ以外の人は気にもせずに話を進める。

九兵衛「普段はふざけている男だが、銀時はやる時はやる男だ」

九兵衛も軽い笑顔を見せてそう言った。

左之助「剣心もそうだぜ、情けなく見えるときもあるけどあいつほどいざと言うときに頼りになる侍はいねぇよ」

銀時と剣心の強さを知っているからこそ、皆も銀時と剣心を信じている。

お妙「私も信じます。なのはちゃんとフェイトちゃんも強い子だし

ね」

言った後、お妙はすずかとアリサに顔を向けた。

お妙「二人は、なのはちゃん達のお友達なんでしょ？なら、なのはちゃん達を信じましょう」

微笑みながら二人に言った。

ナギ「まあ、心配するな。シャナ達や私の配下達もいる。それに私の知る限りではあいつらがどうにかなる事なんてない。友達なら信じて待っててやれ」

ハヤテ「そうですよ。皆すぐに戻ってきます」

ナギも二人にそう言う

みんなの言葉を聞いて、すずかとアリサは不思議と不安はなくなり、表情が明るくなった。

すずか「はい。なのはちゃん達を信じます！」

アリサ「私も！私達は友達だもん！」

しかし薫と桂の表情は相変わらず優れなかった。

薫（何なの？胸騒ぎが止まらない……）

桂（一体……何が起ころうとしているのだ……）

リンディ「なんとも、まぁ…。まるで発想が銀さんみたいねぇ、その子の作戦って……」

ナギが立てていた作戦を聞いたリンディは驚き半分呆れ半分の、複雑な笑みを浮かべた。

エイミィ「計算上では実現可能というのが、また恐いですね。クロノ君。こっちのスタンバイはオーケー。暴走臨界点まであと十分！」

エイミィはキーボードを操作しながら言った。

クロノ「なんとも個人の能力頼りで、ギャンブル性の高いプランだが……やってみる価値はある」

クロノが皆に言った。

僅かでも可能性があるなら、それに賭けるしかない。

はやて「防衛プログラムのバリアは、魔力と物理の複合四層式。まずはソレを破る」

と、はやてが言った。

フェイト「バリアを抜いたら本体がむけて、私達の一斉攻撃でコアを露出」

と、フェイト。

なのは「そしたらユーノ君達の強制転移魔法で、アースラの前に転送！」

空を見上げながら、なのはが言った。

リンディ「あとはアルカンシェルで蒸発」

リンディが言った。
グレアムとリーゼ姉妹は、現地の様子をモニターで見ている。

リンディ「アルカンシェル、チャージ開始！」
局員「はい！」

リンディの指示に局員が応える。
アルカンシェルの発射準備をする。
海上では、なのは達が防衛プログラムを止めるために、それぞれのデバイスや武器を構える。剣心は、狼形態に変身したアルフの背中に乗せられている。
銀時はスパロウモンの上に乗せられている。
防衛プログラムの周辺に、数本の禍々しい黒い柱が立つ。防衛プログラムが暴走を開始する。

はやて「夜天の魔導書を、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム。闇の書の『闇』」

はやてが呟いた。
黒い球体が消え、中から防衛プログラムが姿を現した。
カニのような足があり、カラスのような黒い翼が生えていて、獣のような鋭い爪を持った前足、幾つかの動物を合わせたような機械の怪物だった。頭部には、紫色の女性のようなモノがあった。

シャナ・スパロウモン・シャウトモン『気持ち悪……』
ヤミ「あれが…」
グレイドモン「闇の書の闇か……」
ガイオウモン「まるで“キメラモン”だな……」

闇の書の防衛プログラムを見て思わずシャナ、スパロウモン、シャウトモン、ヤミ、グレイドモン、ガイオウモンがそれぞれ感想を言った。

ユーノ「チェーン・バインド！！」
アルフ「ストラグル・バインド！！」
ヴィルヘルミナ「はあっ！」

アルフのオレンジ色のバインドと、ユーノの緑色のバインドが、そしてヴィルヘルミナの特殊な包帯の束で防衛プログラムの周りにある尻尾のようなモノを捕らえる。

ザフィーラ「鋼のくびき！！」
グレイドモン「クロスブレード！！」
ガイオウモン「鱗火斬！！」

ザフィーラから白い魔力の線が出る。
白い線は複数の尻尾を斬った。
そしてグレドモンとガイオウモンが二刀の刀で触手を斬り裂いた。
その一方で、切られなかった部分の触手が伸びて行く。

メタルグレイモン「ギガデストロイヤー！！」

メタルグレイモンがなのは達の方向に向かっていた触手をビーム砲で消し去った。

シャナ「邪魔な触手ね」

シャナはそう言うと愛刀の大太刀『贄殿ノ遮那』をマントからとりだした。

シャナ「私は『炎髪の灼眼の打ち手』シャナ！私の炎に燃やせない物はない！！」

シャナはそう言うと『贄殿ノ遮那』を構えて自分の一番の得意技で触手を切り裂いた。

シャナ「『断罪』！！」

シャナの炎の剣が大量の触手を灰にした。

ヴィータ「ちゃんと合わせろよ、高町なのは！」

なのは「ヴィータちゃんもね！！」

空中では、ヴィータとなのはが二人で合わせて攻撃をする場面に移行していた。

ヴィータ「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーフアイゼン！」

アイゼン『ギガント・フォーム』

掛け声と共に、グラーフアイゼンの声も響く。

瞬間、そのハンマー部分はとてつもなく大きくなり、宙にそれを大きく振り上げた時、さらにその大きさを増す。

ヴィータ「轟天爆砕！　ギガントシュラァァァーーーク！！」

超巨大なハンマーとなったグラーフアイゼンは、撓りながらも目標を叩きつぶす為に宙から降りる。

重力に逆らうことなく落ちてくるそれは、破壊力としては申し分ないものだった。

それは防衛プログラムが張った障壁に衝突すると、その一枚目の障壁を割る。

なのは「高町なのはと、レイジングハート・エクセリオン。行きます！！」

なのははそう宣言すると、足元に魔法陣を展開させ、レイジングハートを宙に高く上げる。

その瞬間に、レイジングハートがカートリッジを四発ロードさせる。

ロードした後、レイジングハートには四枚の大きな桃色の羽根が生えていた。

なのは「エクセリオン……バスタァアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

レイハ『ファイア』

彼女の言葉に合わせて、レイジングハートの杖先より衝撃波が飛ぶ。

その衝撃波は、なのはに向かって攻撃してきた化け物の攻撃を切り裂き、そして消滅させる。

だが、なのはの攻撃はこれで終わりではない。

なのは「ブレイク……」

さらにレイジングハートの周囲に環状の魔法陣を展開させる。

杖先には先ほどよりもかなり大きい魔力が集まり、そして。

なのは「シュート！！」

その掛け声と共に、一気になのはの攻撃は放たれた。

まっすぐに伸びる一筋の光は、防衛プログラムが張った二枚目の障

壁に衝突する。
そして、バリン！　という音と共にその障壁を打ち破った。
だが、まだ障壁は残されている。

シグナム「『剣の騎士』シグナムが魂、『炎の魔剣』レヴァンティン！」

レヴァンティンを上に掲げる。

シグナム「刃と連結刃に続く、もう一つの姿」

鞘とレヴァンティンを合わせる。
撃鉄を起こして、レヴァンティンと鞘は合わさって『弓』になった。
魔力で矢を作り、防衛プログラムに向けて構える。

シグナム「翔けよ、隼！！！」
レヴァンティン『シュツルム・ファルケン』

瞬間、弓矢に魔力が込められて、一気に放たれる。
放たれた弓矢は、三枚目の障壁に衝突し、突如として巨大な爆発をする。
ドォン！　という音を立てたと思ったら、三枚目の障壁を打ち破る。
それと共に、四枚目の障壁も破られる。

フェイト「バルディッシュ！ザンバーフォーム！！」

バルディッシュの形が変形する。
金色の刃が出て、剣の形になる。

フェイト「フェイト・テスタロッサ、バルディッシュザンバー！行

きます！！」

足下に金色の魔法陣が展開される。
バルディッシュを上に掲げ、撃鉄を起こす。

フェイト「撃ち抜け、雷神！！！」

バルディッシュを振り下ろし、金色の魔力刃が伸びる。
伸びた金色の魔力刃は、バリアを破って防衛プログラムを斬った。
防衛プログラムからミミズのようなモノが現れ、光線を放とうと魔力を溜める。

ザフィーラ「『盾の守護獣』ザフィーラ！攻撃など撃たせん！！」

ザフィーラが白い魔法陣を展開する。
白い魔力の柱が、ミミズのようなモノを貫いて動きを止めた。

ヤミ「動けないうちに斬らせて貰いますよ」

ヤミはそう言うと両手を剣に変えて動きの止まっている触手を全て斬り裂いた。

はやて「彼方に来たれ、宿り木の枝。銀月の槍となりて撃ち貫け！！」

はやては白い魔法陣を展開する。
防衛プログラムの上空に、七ツの白い光を出す。

はやて「石化の槍、ミストルティン！！！」

はやては杖を振りおろす。
すると、それがまるで攻撃の合図となったかのように、一気に七本の槍が化け物を襲った。化け物の身体に刺さった槍は、たちまち化け物の身体を石化させていく。
やがてその石化は全範囲に及び、女性の形をしていた部分が、石化すると同時に砕けた。
そして海の中へと、カケラとなって落ちて行った。
だが、化け物はその壊れた部分を修復するように姿を変える。
この程度の攻撃では、この化け物はまだ倒れない。
しかも今度は石化した防衛プログラム内から、獣の顔をした機械やら尻尾やらが無茶苦茶に出てきた。

アルフ「うわ～！なんか凄い事になってるよ！」
スパロウモン「ホント凄いや！」
シャウトモン「…なんで俺見てるだけ？」

アルフは防衛プログラムの姿に若干引いた。スパロウモンははしゃいでいる。ちなみにシャウトモンは銀時を抱えていたので何も出来ずにいた。

エイミィ『やっぱり並の攻撃じゃ通じない！　ダメージを入れたそばから再生されちゃう！！』

通信を通じてクロノに聞こえる、エイミィの声。
だが、クロノは確信していた。
通じていないわけではない。
変化せざるを得ない状況に立たされているということは、つまり…
…弱っている防衛プログラムは。

クロノ「だが攻撃は通っている。プラン変更はなしだ！　行くぞ、

デュランダル！」
デュランダル『ＯＫ，ＢＯＳＳ』

杖の形へと姿を変えているデュランダルが、そう返事をする。
クロノは目を閉じ、そして呪文の詠唱を始めた。

クロノ「悠久なる凍度。凍てつく棺の内にて、永遠の眠りを与えよ」

その言葉と共に、クロノの足元に魔法陣が展開される。
そして、防衛プログラムを中心に周りの海が凍り始め、防衛プログラムの身体まで凍り始める。

クロノ「凍てつけ！！」
デュランダル『エターナル・コフィン』

その言葉と共に、化け物の身体は一気に凍りつき、その身体の一部が欠けて、氷柱となって海の中へと落ちて行く。

なのは「行くよ、フェイトちゃん、はやてちゃん！」
フェイト「うん！」
はやて「了解や！」

なのはの言葉に、二人は頷いた。
最後は、三人による一斉攻撃だ。
なのはの前に魔法陣が展開され、桜色の魔力が集束される。

なのは「全力全開！スターライト――」

レイジングハートを振り上げる。

フェイト「雷光一閃！プラズマザンバー――」

足下に金色の魔法陣を展開し、バルディッシュを構える。
空から紫色の雷が落ちて、金色の魔力刃に当たる。
はやては杖を空に掲げて魔力を溜める。

はやて「ごめんな…おやすみな……」

防衛プログラムを見つめ、はやては辛い顔をして呟いた。

はやて「響け終焉の笛、ラグナロク――」

三つの白い魔力の弾を作り出す。

『ブレイカー！！！！』

三人が同時に叫び、桜色と金色と白色、三つの閃光が防衛プログラムに向けて放たれた。
閃光は直撃し、大爆発を起こした。

ドクン

防衛プログラムの中で鼓動が強くなった。
そして鼓動は防衛プログラムから消えた。

ユーノ「捕まえた！」

シャマルが防衛プログラムのコアを捕らえた。

ユーノ「長距離転送！」
アルフ「目標軌道上！」
ユーノとアルフが転送準備をする。
『転送！！！』
シャマル、ユーノ、アルフの三人によってコアは転送された。

エイミィ「アルカンシェル、バレル展開！」

キーボードを操作しながらエイミィが言った。

リンディの前に発射装置が現れた。

リンディ「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します。準備を！」

局員「了解！」

局員が応える。

そしてアースラの前に、防衛プログラムのコアが転送された。

リンディは発射装置にキーを差し込む。

リンディ「アルカンシェル発射！」

キーを回す。

アースラからアルカンシェルが発射された。

光の中に飲み込まれ、コアは完全に消滅した。

退避したアースラは、コアの消滅を確認した。

エイミィ「現場のみんな、お疲れ様！無事に終了しました！」

エイミィが通信でみんなに知らせた。

みんな安心し、喜びで笑顔になる。

なのはとフェイトとはやては、ハイタッチした。

フェイトはアルフの背中で、眠っている銀時と剣心を見た。

これで全てが終わった。

銀時と剣心も起きれば、はやて達や皆も混ざって、また騒がしくて楽しい毎日が始まる。

誰もがそう思った時だった。

しかしヤミだけは違っていた。

フェイト「ヤミ？」

シャナ「如何したの？恐い顔して」

一人だけ険しい顔をしているヤミに向かって皆は心配そうに見つめた。

ヤミ「皆…どうやら大変なのはこれからみたいですよ……」

全『え？』

皆が首を傾げたその時である。

エイミィ「…え？嘘……？何これ！？何なのこれ！！？」

突然、エイミィが驚きの声を上げた。

クロノ「どうしたんだエイミィ？」

不審に思ったクロノが尋ねた。

エイミィ「みんな気をつけて！海にある防衛プログラムの残骸から、物凄い魔力反応が…！！」

クロノ「何だって！？」

通信を聞いたクロノは、防衛プログラムの残骸を睨んだ。

コアはアルカンシェルで、完全に消滅したはず。

なら一体何が？

全員の視線が残骸に集まる。

リィンフォース「……できれば防衛プログラムのコアと共に、アルカンシェルで消滅してほしかったのですが…やはり弱まったコアから出ていましたか……」

リインフォースが険しい顔をしてそう言った。

はやて「リインフォース？」

首を傾げながら、はやてはリインフォースを見た。

ザバァ

その時、海の中から何かが出て来た。

全『！！』

みんなは黙ってソレを見た。
ソイツは海から上がると、防衛プログラムの残骸の上に立った。
その瞬間、空気が重くなった。吐き気が襲った。

？？？「ゴミが………」

そして、ソイツは魔力の波動を放ち一瞬で周りにある防衛プログラムの残骸を消し去った
その後、人型で三メートルを越える大きさのソレは、ゆっくりと空を見上げた。

？？？「やっと……外に出られたわい………」

そして大きく息を吸い込み、

？？？「スウゥゥゥ………グゴォオオ

オオオオオオオオオオオオオオオオーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ドグオオオオオオオオーーーーーーーーーーーッ！！！！

凄まじい歓喜の咆哮を上げた。
その時に暴風が吹き荒れ、魔力の嵐が起きた。
『外』に出れた歓喜の咆哮。
地を激しい揺るがすような、禍々しき歓喜の咆哮。
リィンフォースの中にいた真の闇………『奴』は…………ついに、『外』に解き放たれてしまった。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『黒神』さんから「剣心に質問です。ゲストとして呼ばれた佐之助ですが、彼が無事に帰ってくると思いますか？

弥彦へ

第３期では香より目立ちたいと願うのであればオリジナル技を募集しましょうか？
返事を待っています。

斉藤へ

新八の事を侍だと思っていますか？」はい、ではお答えどうぞ」

一つ目

剣心「いや…かなり酷い目にあって帰ってくると思うでござる…」
シャナ「最初は出たいとか思ってたけど……」
ヤミ「正直呼ばれなくて良かったです……」
セイバー「向こうの私に同情します……」
他の皆『呼ばれなくて本当に良かった』

ちなみに左之助は

左之助「誰かぁぁぁぁぁぁぁーーー！！俺と変わってくれーー！！俺を助けてくれぇーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！あんなもん食いたくねぇーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

二つ目

弥彦「オリジナル技かぁ…考えてくれるんなら嬉しいな」
剣心「弥彦のオリジナル技か…よいものだとよいでござるな」

三つ目

斉藤「思うわけあるかこの阿呆。アイツは侍の恥さらしだ」
新八「ちょっと斉藤さん！そこまで言いますか！？」
斉藤「よるな阿呆。貴様の阿呆が移るだろうが」
新八「そこまで言いますか！！？」
銀時「テメェはホント毒舌だな……」
斉藤「貴様もだ。ど阿呆が」
銀時「おいいいいいいいいー！！俺は関係ねぇだろうがーーー！！！！」

銀八「とまあ…こんな感じですね。では『黒神』さん廊下に立ってなさい。次の質問行くぞー、ペンネーム『ケン』さんから、「統夜「もしソルジャー時代に戻れたらという夢はいいかもな・・・イグニスや達哉、明久と馬鹿やってた頃に・・・」

遊輔「だが・・・」

統夜「今はどんなに悲しい事や辛い事があっても・・・前に進まないといけないんだ・・・」

銀さんや戦える人達に質問です。吸血鬼と真ルシファー、五気（魔力と気力、霊力、妖力、覇気）のリミッター解除した統夜と戦ってみたいですか？」はい、それではお答えどうぞ」

シグナム「私はぜひ戦って見たいぞ。大妖の力に興味があるからな」
ブレイド「潰しがいあるんなら戦ってやってもいーぜ」
銀時「俺は面どくせーから戦いたいなんて思わねーぞ」
剣心「拙者は無駄な勝負はこのまんでござるよ」
他の皆『（銀時）（剣心）に同感』

銀八「まあ…大半の奴はそうだろうな……。と言う訳で『ケン』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第五十八訓　そして最強の闇が動き出す（後書き）

支配者「次回は奴の名前が分かりますよ」

銀時「どんな名前なんだよ？」

支配者「だから次回を待てつってんだろうがこの天パ」

銀時「オイィィィィィィ！！何でそんなに偉そうに言われなきゃいけねぇんだよぉぉぉぉぉぉぉー！！！」

剣心「ははは…では次回のリリカル権魂スペシャルを」

桂「活目して待て！！」

第五十九訓　コンビだと最強はさらに最強（前書き）

支配者「はい、今回は今まで謎だった事がいろいろと分かります」

剣心「それって”真の黒幕”の事とかも分かるんでござるか？」

支配者「それはまだ秘密です。後あのキャラがなんともあっけない最期を遂げてしまします」

銀時「あのキャラ？」

シグナム「一体誰だ？」

支配者「それは見ればすぐ分かります」

ヤミ「リリカル剣魂スペシャル始まります」

第五十九訓　コンビだと最強はさらに最強

防衛プログラムの残骸の上に立っているソイツは、咆哮を上げた後、ジッと海の向こうを見つめていた。
アースラでも、モニターでソイツの姿は確認している。

リンディ「な…何なのアレは……！？」

リンディは冷汗を流した。
手もいや…体全体が震えている。
モニター越しからでも、ソイツの禍々しい感じが伝わってくる。

エイミィ「わ…わかりません……突然、海に現れて…」

エイミィも声が震えている。

エイミィ「…それに艦長……あの化け物の魔力量……どう少なく見積もってもＳＳ＋かＳＳＳはあります……」
リンディ「そッ…そんな……」

エイミィからその出鱈目な魔力量を聞かされてリンディの顔は絶望に染まった。

時空管理局本局の一室。
モニターで様子を見ているグレアム達も驚愕していた。

アリア「と…父様……アレは一体!?」

アリアが震える声で、グレアムに尋ねた。
隣にいるロッテも、恐怖で震えている。

グレアム「わ…私にもわからない…!何だあの化物は!?」

グレアム自身も闇の書事件に関わり、その後も闇の書についてそれなりに調べてきた。
だが、あんな化物の存在は知らない。
同じ部屋で、プレシアもモニターで現地の様子を見ていた。
モニター越しからでも化物の禍々しさは伝わってきた。こんな危険な存在には、今まで出会った事がない。
恐らくその脅威は、闇の書の防衛プログラム以上。
いや……闇の書の防衛プログラムなど比べ物にもならないほど強大な力…最強の破壊兵器の闇と言われたあの力でさえちっぽけな物にしか見えないほどの力…あの怪物にはそれが感じられた。
そしてプレシアはこうも思っていた。

プレシア（まさか…あれがジュドの狙い!?ジュドの目的は…あの怪物の復活!だとすれば、全ての説明がつく!!）

プレシアはずっとジュドがなぜ闇の書を狙っていたのかとずっと考えていた。利用価値のないものをなぜあの男が狙うのか・・・もしあの怪物の復活こそがジュドの目的だったのだとしたら全ての説明がつく。

プレシア（フェイトが・・・皆が危ない！！）

プレシアは、急いで杖を持って部屋から出た。

その頃ジュド達は

ジュド「フハハハハハハ！！ついに！ついに蘇られたぞ！！我らが王『ゾーグ』様が！！」

ジュドは歓喜の声の叫び声を上げた。
ついに自分達の目的が達成されたからだ。
そう…ジュド達の目的はあの怪物・『ゾーグ』の復活であったからだ。
そう…あの怪物こそがジュド達魔人族の王『魔人王・ゾーグ』なのである。

ザンダガ「おめでとうございます。ジュド様」
ジハード・ドラドス
「おめでとうございます」
ジュド「ああ」

ザンダガ、ジハード、ドラドスの3人はジュドにその喜びの言葉を贈った。
ジュドもそれに頷く。

ジュド「さて…早速私はゾーグ様にご挨拶してくる。お前達はここにいろ」
『ハッ』

ジュドの言葉に3人は頷いた。

そしてジュドはその場から消えた。

ザンダガ「ジュド様…」
ジハード「これで…見納めか…あの方も…」
ドラドス「ああ…」

3人はなぜかその場から消えたジュドに対してそのように呟いた。
何か意味深のようになっている。

???「な～に、あんた達意味深になってんの～？」
『姫様！！』
???「あいつの事そんなに慕ってた訳？以外ね」

そこに姫と呼ばれた人物が現れた。
しかしその人物はなんと

ファイナ「マッ、私も一応形だけとはいえ副官勤めてたしね～」

そう、何とジュドの副官ファイナだったのだ。

ザンダガ「姫様…本当にこれでよろしかったのですか…？」
ファイナ「なぁに？“パパ”の決定に文句がある訳？」
ザンダガ「まッ…まさか……そのような事は……」
ファイナ「とにかく私も行ってくるから、あんたたちは後であたしに合流。いいわね♪」
ジハード「はい」
ドラドス「了解致しました」
ザンダガ「はい……」

ファイナもその場から消えた。

フェイト達は上空から、化物を見ていた。向こうはまだコッチに気付いてない。

化物が出てきてから、明らかに空気が変わった。
化物の大きさは三メートル以上。二つの、血のような真っ赤な目。
頭からは二本の角のような物が生えている。そして顔は恐竜のようになっており体は黒く、鋼のような強靭な肉体をしていた。
フェイト達は青ざめて、大量の冷汗を流した。呼吸が荒くなる。
本能が”逃げろ”と告げている。
アレに近づいたらダメだ。
アレと戦ったらダメだ。
間違いなく…

“殺される”

全員がそう直感した。

新八「な…何だアレ…？」
セト「分からないが…でもこの気配…とんでもない奴だってのは間違いないみたいだな…」

化物を見て新八とセトが呟いた。
新八も今まで、いろんな生物や敵と出会ってきた。
宇宙海賊、ターミナルに寄生した巨大えいりあん、持ち主を支配する刀。『紅桜』
だが今、新八達が見ている化物は、それらを遥かに凌駕した存在に見えた。
セトも仕事柄かなりの異星の怪物や凶悪な犯罪者を狩って来たがあれほどの化け物を見た事は一度もなかった。想像を絶するほどの覇気をあの化け物は放っていたからだ。

九兵衛「あれは…一体何なんだ……？」
ヒナギク「ナギ、アレも闇の書の一部なの？」
ブレイド「どうなんだ？ナギたん」

九兵衛とヒナギクとブレイドも化物から、ただならぬ脅威を感じて冷汗を流している。
神速剣の使いである九兵衛や自分も神速の領域の剣を振るう事が出来るヒナギク、そして人並みはずれた身体能力と強力な能力を多く持つブレイドでさえもあの怪物には些か脅威を感じずには入られなかったのである。

ナギ「しっ、知らない…なんだあいつは!?あんな奴見た事ないぞ!?」

ハヤテ「確かに…あんな奴が出てくるなんて…僕らの知る限りじゃありえませんよ!」

ナギもハヤテもそう言う。あんな奴はリリカルなのはのどのシリーズでも見た事がない。ナギはこの後すぐに皆で喜び合える。そう思っていたのに・・・あんなとんでもない怪物が現れるなんて予想外にも程があった。ナギは思わず震え上がって、ハヤテに抱きついた。

護「綾子さん…あれは一体なんなんでしょう……」

綾子「分からないけど……とんでもない奴よアイツ……」

護の言葉に綾子も思わず冷や汗を流して答えた。学園都市で3人しかいないＲＥＶＥＬ７の彼女でもあの怪物の脅威を感じずに入られなかった。

セイバー（…なんなんですかあの怪物は…魔力だけでもすでにサーヴァント数人分はあるかもしれない……）

騎士王のサーヴァントであるセイバーもあの化け物を見てそうおもっていた。あの化け物魔力量は半端ではない。サーヴァント数人がかりでかかったとしてもあの怪物に太刀打ち出来るか如何か分からない。それ程の威圧感と魔力量をあの化け物からセイバーは感じとっていた。

その時である。

???「おい!何だよこの状況!」

誰かが屋上に上がってきてそう叫んだ。

因みにその誰かとは

全『イヴ（さん）（ちゃん）！！』

そうイヴであった。

イヴ「おい金田！何だよあの化け物！あんな奴がいるなんて聞いてないぞ！『本能フリーダム』とか言うのをぶったおせば解決じゃなかったのかよ！！」

ナギ「私に聞かれても知らんわ！つか何だよ『本能フリーダム』って！？防衛プログラムだよ防衛プログラム！！ぜんぜんあってないではないか！！」

怪物を見たイヴが思わずナギの胸倉を掴んで声を荒げながらそう質問した。イヴにも分かっていたのだ。あの化け物がとてつもなく危険な存在だという事が、そのために声を荒げていたのである。因みにその時イヴがメチャクチャな事を言い出したのでナギが突っ込んだ。

すずか「お妙さん…」

アリサ「怖い…何なのアレ…？」

お妙「大丈夫よ・・・（何なのアレは…？なんて恐ろしい気配…）」

後ろでは、お妙が震えるすずかとアリサを安心させるように抱いている。

桂「俺にも分からん…あれは…一体…」

桂も険しい表情で化物を睨んでる。

桂（もしや…ヤミ殿が闇の書から聞いたという、妙な音の正体があれか！？）

化物は街とは反対方向の、海の向こうをジッと見つめていた。
すると、化物は口を開いた。鋭い牙が見えた。

？？？「……久しぶりの…外だ……やはり外はいいのう……」

海を見つめながら、化物は喋った。
首を動かしてゴキゴキと鳴らしている。
やっと外の世界に出れた。
何故、自分は今まで外に出れなかった？
クズ人間どもに……あのゴミ魔導書の中に封印されたからだ。
化物の中で、ふつふつと怒りと憎しみが込み上げてきた。
拳を強く握って、鋭い歯を食いしばる。

アースラにいるエイミィは、化物の魔力の上昇を確認した。

エイミィ『みんな気をつけて！化物の魔力がどんどん上がってる！何かする気だよ！！』

全『えっ！？』

エイミィから連絡を受けたフェイト達は、化物を見た。

？？？「下等なゴミ屑の人間如きが……ワシを封印しおってェエエエーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

怒鳴りながら、化物は口を大きく開き、

？？？「ドゴオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！」

開いた口から、とてつもなく巨大な黒い魔砲を放った。

黒い魔砲は、真っ直ぐに数十キロ先まで飛び、次の瞬間、海の上で黒い大爆発を起こした。

ズッ………ズッドオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

その爆発の規模はおよそ数十キロ。

星の形を変えてしまうほどの大爆発を起こした。

全『………！！！』

化物の魔砲の威力を見て、皆は言葉を失った。
自分達の砲撃魔法とは比較のしようもない出鱈目過ぎる威力だったからだ。
魔砲を撃った後、化物は空を見上げた。

???「…アア……最高の気分じゃわい……」

化物は後ろを振り返った。そして上も見た

???「ん?」

そして、街の存在とフェイト達の存在に気付いた。

???「しまったわ…ワシとした事が人間の町と魔導師共がいることを忘れておったわい……」

街とフェイト達を見た化物は、ニヤリと笑った。

新八「な…何なんですかアイツ!!?ビーム出しましたよ!!ビームで海を吹っ飛ばしましたよ!!あんなの食らったら、この街どころか周辺もまとめて跡形も無く吹っ飛びますよ!!」
神楽「あ…あんなの反則アル!!」
セイバー「バ…バカな……あれは如何少なく見積もっても私のエクスカリバーの数十倍の破壊力がある!!」
セト「……何なんだアイツは!!あんなのレベル7の能力すらはるかに超えているぞ!!」
ブレイド「おいおい…ありゃいくらなんでも……!」
セツナ「でたらめ…すぎる……」
相楽「なんつう…バケモンなんだ……」
アルカ「あ…あんな奴が…存在…するのか?」

化物を指差しながら、新八達が叫んだ。
その魔砲の余りの威力に全身が震え上がったのだ。
松っちゃん砲や蝮Z、なのはちゃん達の魔砲攻撃など、いろいろ見てきたが、それらとは比べ物にならないくらいのデタラメな威力だった。
もしあんな物を町に撃たれていたら今頃自分達は海鳴り市もろとも周辺を含めて塵と化していただろうことは明白だった。

シグナム「……い……一体ヤツは……何なんだ……！？」

魔砲の威力に体が震えながらもなんとかシグナムが口を開いた。

？？？『知りたいか？』

全『！！』

突然心の中に声が響いてきた

ゾーグ『我が名はゾーグ。魔人王ゾーグ』

その声の主は自分をゾーグと名乗った

なのは達『ゾーグ？』
ゾーグ『礼を言うぞ…貴様らが愚かだったおかげでようやくワシは数千年振りに地上に出られたわ』
シグナム「何！？どういうことだ！？」
ゾーグ『その理由が知りたければそ奴にワシの事を聞いてみるが良かろう…のう…闇の書よ』

リインフォースが下をむいた。

シグナム「え？」

シグナムはリインフォースを見た。
他のみんなも、リインフォースに注目する。

リィン「……奴は『魔人王・ゾーグ』。数千年も昔にとある世界の上空から落ちてきた卵から生まれた正体不明の『生物型ロストロギア』です」
クロノ「『生物型ロストロギア』だって！？」

クロノは驚いた。
今まで様々な事件に関わり、沢山のロストロギアを見てきたクロノでも、生物型ロストロギアなんて見た事も聞いた事もない。

リィン「その昔。とある魔導師が一つの卵を拾いました。しかしそれがすべての災いの始まりでした……その卵から一つの恐ろしい怪物が生まれました。それがあのゾーグです」

リィンフォースは説明を続ける。

リィン「卵から生まれたゾーグは信じ難い力で暴れまわり破壊の限りを尽くしました。凄まじい魔力と圧倒的なまでの破壊力を持ち幾つもの世界を破滅させました。特に先ほどの魔砲の威力は余りにも強大なまでの破壊力があります。あの魔砲だけで世界のほとんどを破壊しつくしました。その為最強最悪の魔導生物兵器と呼ばれたのです。何十人、何百人もの強力な魔導師達の力によって、やっとゾーグを私の中に封印したのです。しかしそれが叶うまでに膨大な犠牲を払いました……」

はやて「リインフォースの中に封印！？」

リインフォースの話に、はやては驚いた。

リィンフォース「はい。私が作られた目的は、『奴』を……ゾーグを封印する為です。そのために、数多くの魔導師達の魔法や魔力を蒐集して、その力でゾーグを封印していたのです」

リインフォースから語られた意外な真実に、なのは達は驚いた。

まさか、リインフォースが封印の魔導書だったとは……。

一方でユーノは納得していた。自分が見つけた文の意味は、こういう事だったのか。

リィンフォース「ですが、ゾーグは私の魔力を奪って外に出ようとしました。そこである魔導師が、私のプログラムを改変し、魔導師の魔力を蒐集して私の魔力を高め、その力で一定期間ゾーグの活動を停止させる事にしたのです。そして活動停止させた後は、ゾーグに余計な魔力を奪われないよう、破壊活動をして魔力を消費する。転生と再生機能は、私が破壊されてもゾーグが外に出てこられないようにするためです」

リインフォースが説明を終えた。

リインフォースの真実。

『魔人王・ゾーグ』

夜天の魔導書は、本当は呪われた魔導書なんかではなく、ゾーグという強大な『悪』を封じていた封印の魔導書だったのだ。

ゾーグ『クックック…まあそんなところだ…』

再びゾーグが念話で語りかけてきた。

ヴィータ『ワシは貴様らがそこの小娘一人助けようと必死で闇の書を完成させようとするのをそ奴の中でずっと見ておった』

ゾーグは説明を続ける

ゾーグ『なんと愚かな奴らよ……貴様らのせいでこの世界は終わるのだ…そんな小娘さっさと見捨てればよかった物を……』

ヴィータ「何だとテメェ！！」

シャマル「ヴィータちゃん落ち着いて！！」

ゾーグの言葉にヴィータが怒鳴りシャマルがヴィータをなだめる。

ゾーグ『そうだ…。最後にいい事を教えてやろうか…。その小娘に呪いを掛けていたのは実はこのワシだ』

全『！！』

ゾーグの言葉に全員が耳を疑った。今まではやてに掛かっていた呪いは闇の書の防衛プログラムによる物だと思っていたのにじつははは

やてに呪いを掛けていたのがゾーグだったと言うのだ。

ゾーグ『今までの主全員にも何かしらの呪いを掛けておいたのだ。万が一にも貴様らに蒐集を止められてはワシの復活するチャンスが減ってしまうのでな…最も命に関わる呪いを掛けていたのはその小娘が初めてだがな。正直そんな欲の欠片もないような小娘のところに送られて来た時はヒヤリとしたわ…。案の定その小娘が蒐集はしなくていいと言いおったからな。念の為に生まれた時から命に関わる呪いを掛けておいて正解であったわ』

ゾーグは再び説明を続ける。

ゾーグ『貴様らはワシの思うとおりに動いてくれたわ…。貴様らの主への忠誠心は大した物よのう。それに、闇の書を完成させれば強大な力を手に入れ思うが侭にその力を震えるというデマを流したのもワシだ。ワシの力が影響したのか夜天の書はそういう風に変化していき『闇の書』と呼ばれるようになったのだからな。闇の書の防衛プログラムがあのような怪物のような姿に変化していったのもワシの魔力の影響によるものだ。それに最初のうちは封印されていても小さい使い魔の一匹くらいは外に出す事が出来たのでな。デマを流すのにもさほど苦労はしなかった。そうしたら愚かな魔導師どもはこぞって闇の書の力を手に入れようとしおったわ。そんな事をしてもワシを復活させる危険が増すだけだというのにな。それに貴様らの中枢神経にも闇の書は完成させたら強大な力を手に入れられる物、願いを叶えられる物だとワシは貴様らに思い込ませ続けておいたからな。そうしたら面白いくらい上手くいきよったわ。フハハハハ……』

ヴィータ「そんな…それじゃあ……初めから…あたしらはお前の為だけに闇の書を完成させてきたって言うのかよ……」

シャマル「そ…んな……そんな…事っ…て……」

ザフィーラ「……」

ヴィータとシャマル、ザフィーラはゾーグの言葉を聞いて愕然となる。

ゾーグ『その通りだ。ようやく気付きおったか愚かなプログラム共が』

シグナム「貴様アァァァァ！！」

シグナムは怒りのあまりレヴァンティンを抜き取りゾーグの所に向かって飛んでいこうとしたが

なのは「シグナムさん！」

フェイト「シグナム落ち着いてください！」

シグナム「離せ！！」

はやて「シグナム落ち着きぃ！」

リィンフォース「そうですシグナム！今の魔力の消費しきった貴方では奴に傷一つつける事すら出来ない！！」

そういわれシグナムは涙を流しその場にたたずんだ。

シグナム「クソッ…クソゥ…！！」

ヴィータ「ちく…しょぉ…！！」

シャマル「うう……」

ザフィーラ「グッ……」

はやて「シグナム…皆……」

シャナ「アイツ…！！」

フェイト「許せない…！！」

シャウトモン「あんのクズヤロォ…！！」

皆はゾーグに対してかなりの怒りを見せていた。
シグナム達ヴォルゲンリッターにとっては余りに酷な衝撃の事実であった。
ヤミも怒りのあまり再び暴走しそうになったが体はすでにボロボロでそんな無理をする事は出来なかった。

ゾーグ『フハハハ…本当に今までご苦労であったなぁ…愚か者共よ。今までの労いの為に貴様らにはなにか褒美をやらねばなあ…ワシをよみがえらせてくれた礼だ。貴様ら全員ワシが消してくれよう…この世界の奴らも…そして時空管理局のゴミ共もな！！』

そういってゾーグの念話は途絶えた。

なのは達は複雑な気持ちになった。
シグナム達ヴォルゲンリッターは悔しくて涙を流していた。
無理もない。今まで自分達がやってきたことは全てあのゾーグを復活させる為だけの物だったのだから。長きに渡り自分達はずっとあのゾーグに利用され騙され続けていたのだ。そう思うとシグナム達余りの悔しさに気がどうにかなってしまいそうであった。
だが、今は気持ちを切り替えて、ゾーグを何とかしなければ。
しかし、ゾーグを見る限りまるで勝てる気がしなかった。
桁違いの魔力と圧倒的なまでの威圧感を目の当たりにしたからだ。
フェイト達がそう思った時、

剣心「ううーん」
銀時「うるさくて、眠れねーなァ」

気だるげな声が聞こえた。
全員の視線が、アルフとスパロウモンの背中に集まる。
銀時が起きて、頭をぽりぽりと掻いていた。

「銀時！！」
「剣心！！」

フェイトとシグナムは、弾んだ声を出した。

銀時「よォ。おはよう」
剣心「…などとのんきな事を言っている場合ではござらんか…」

こんな時でも、呑気に挨拶をする銀時。
剣心はこの状況が相当まずいと言う事は理解していた。
そして銀時と剣心は、海上にいるゾーグを見つけた。

銀時「リイン。アレがお前の中にいたヤツか？」
リィンフォース「はい」
剣心「なるほど…お主があれを外に出したくないというのも分かるでござるな…」
銀時「だな……ありゃ相当やべぇ。バカ王子の連れ込んだエイリアンなんてかわいく見えるぜ」

リインフォースは答えた。
銀時と剣心は険しい表情で、ゾーグを見つめた。
巨大な威圧感と凄まじいまでの魔力を持つ化け物『魔人王・ゾーグ』
アレが松陽先生と比古師匠が言っていた『真の闇』。本当に倒すべき敵。

銀時「……誰か足場とか作れねーか？俺達飛べねーからさ」
剣心「頼むでござるよ」

と、銀時と剣心がみんなに尋ねた。

フェイト達は驚いた。
まさかアレと二人だけで戦うつもりなのか？

クロノ「二人だけで戦うつもりか！？いくら貴方達でも無理だ！ヤツは海も吹っ飛ばす魔砲を使うんだぞ！！」

クロノが銀時と剣心を止める。
すると、リインフォースが言った。

リィンフォース「あの魔砲は、膨大な魔力を使うので、いくらゾーグと言えど次に撃てるようになるには、もう少し時間がかかります」

今、魔砲を撃ったゾーグは、しばらくは魔砲を撃てないらしい。
それでも、ゾーグが脅威である事に変わりはない。
するとフェイトが口を開いた。

フェイト「……クロノ。デュランダルで海を凍らせれば、足場が作れるよね？」
クロノ「フェイト！？」

フェイトの発言にクロノだけでなく、全員が驚いた。

アルフ「フェイト…！どうして剣心と銀時を止めないんだい！？」
フェイト「…ごめんね、アルフ。でもアルフもわかってるでしょ？私達が何を言っても、剣心は止まらない」
なのは「銀さんだって止まらないよ。クロノ君」
クロノ「う…それは……」

アルフとクロノは言い返せなかった。
止めても無駄だという事は、アルフにもクロノにもわかっていた。

クロノ「フェイト…本気で言ってるのか？」

クロノが確認するように尋ねた。

クロノ「うん。お願いクロノ」

フェイトも本当は、剣心と銀時を止めたかった。一緒に戦いたい。
でも剣心と銀時は、きっと止まらない。防衛プログラム破壊の時に、
魔力を消費した私達じゃ足手まといになるだけ。
なら、せめて銀時と剣心のためにしてやれる事は、やっておきたい。
シャナとヤミとヴィルヘルミナも体力を消耗していた
それにあのゾーグの強さは群を抜いているだろう。
たとえ全開の状態の自分達でもとても太刀打ちできる相手じゃない。
その時、クロノが声を出した。

アルフ「だったら、あのデジモンとか言う生き物達に手伝わせればいいんじゃないのかい？」

ヴィルヘルミナ「それは無理であります」

「えっ？」

ヴィルヘルミナの言葉に皆が驚いた。

ガイオウモン「もうすぐクロスローダーのエネルギーが切れる」

グレイドモン「エネルギーが切れたら我々は実体化していられん」

スパロウモン「強制的にクロスローダーの中に戻されちゃうんだよ」

クロノ「そッ…そんなそれじゃあ……」

ベルゼブモン「ああ…俺たちも援護は出来ん」

ベルゼブモンの言葉に皆は少々愕然とした。

銀時「結局アイツとまともに戦えんのは」
剣心「拙者達だけでござるか」

そして海の上ではゾーグが腕を組んでいた。
ゾーグ「さて…どう料理してやろうかのう……」
ゾーグは、街とフェイト達をどう攻めるか考えていた。
その時である。
ジュド「ゾーグ様！」
ゾーグ「ン？」

ゾーグの前にジュドが現れたのだ。
ジュド「ゾーグ様。ご復活おめでとうございます」
ゾーグ「お前は？」

突如現れたジュドにゾーグは尋ねる
ジュド「私はあなた様を生み出された“あのお方”からの使いの者でございます。あのお方よりゾーグ様を復活させよという任を受けやってまいりました」
ゾーグ「そうか…貴様が“あのお方”からの使いか…」
ジュドの説明を聞いたゾーグはにやけた顔でジュドを見つめた。

ゾーグ「では貴様があのお方が言っておられたワシの“餌”という事だな？」
ジュド「え？」

ガシッ！

ジュド「がッ！？」

ゾーグはいきなりジュドの頭を掴んだ。そしてゾーグは大口を開けた。

ジュド「ゾッ、ゾーグ様！？なッ、何を！？」
ファイナ「は～い、ジュド様♪」
ジュド「ファイナ！？」

ゾーグに頭を掴まれたジュドの後ろに突如としてサキュバスのような姿をした女、ファイナが現れた。

ジュド「ちょうど良かったファイナ！！ゾーグ様をお止めしろ！！このお方は何か勘違いしておられるのだ！！私が“餌”などと…」
ファイナ「いいえ。間違っていませんわ♪だってその為だけにあなたは生まれたんだもの」
ジュド「なに！？そんなばかな！？」

ファイナの言葉にジュドは驚愕する。

ファイナ「あのお方からのからのご伝言ですわ。“今までご苦労であったジュド。ゆっくり休むがいい”ですって♪」
ジュド「そ…そんな……そんなはずはない！長年“あのお方”にお

仕えしてきた私がゾーグさまの餌になるためだけに生まれてきたなどと……」

ファイナ「長年使えてきた？何言ってるの？あなたが生まれたのは今からちょうど5年前よ？」

ジュド「なッ！？何だと！！？」

ファイナの言葉にジュドは驚愕する。5年前と言えば自分がちょうどプレシアに接触した頃のときだ。

ジュド「そんなバカな！？私にはあのお方に何十年にも渡って仕え続けた記憶が…」

ファイナ「それは万が一にもあなたが“あのお方”の命令を無視して身勝手な行動をしないための緊急措置よ。つまりあなたの記憶は全嘘っぱちってわけ♪ついでに言うと私あんたの監視役兼あんたの最後を看取る係♪」

ジュド「嘘だ…うそだ！そんな…そんな筈はない！！」

ファイナ「純粋な奴ねぇ～本気でそんな風に思ってたなんて…笑っちゃうわ」

ファイナはジュドをバカに仕切ったような言葉を浴びせる。

ジュドにゾーグの口が迫る。

ジュド「ヒッ！」

ファイナ「グッバイジュド様♪ゆっくりおやすみなさい♪」

バリバリバリバリ……

ジュド「ギャアアアアアーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！！！」

ジュドの断末魔の叫びが響き渡った。ジュドはゾーグに食われてしまった。

ゾーグ「ゲフ♪」

ゾーグはジュドを食って満腹になったようだ。

ファイナ「どうゾーグ？久しぶりの食事は？」

今度はファイナがゾーグにはなしかけた。

ゾーグ「ああ…悪くはない…ところでお前は何だ？奴の最後を見取るとか言っておったが…それだけではあるまい？本当は何しにきたのだ？」

ゾーグは今度はファイナにそう質問する

ファイナ「あら？私の事忘れちゃったの？まあ無理もないわね～私にとってはつい最近の事だけどあんたにとっては何千年も昔の事だからね～」

ゾーグ「何？……ッ！！まッ！まさか！！」

ゾーグはファイナの正体を悟ったのか急に態度を変えるかのような姿勢を取り始めた。

ゾーグ「そうか…“あなた様”でしたか…わざわざあなた様がこんな所に来てくださいましょうとは…」

ファイナ「私も面倒くさかったんだけどね～パパが『たまには外で遊びなさい』って言うからきたの。まあ…おかげで面白いものも見られたわ♪」

ゾーグの言葉にファイナはそう答える。ファイナにとってジュドの最後を見たのは娯楽のような物であったようだ。この言葉からもファイナの残酷さが伺えた。

ファイナ「ゾーグ。パパからの伝言よ。この世界とこの世界にいる邪魔者共を消し去った後で戻ってこい。いよいよ計画を第2段階にうつす。いよいよ本格的にお前にも動いてもらう事になるからって♪」

ファイナは笑顔でゾーグに対してそう言う

ゾーグ「さようですか…承知致しました。」
ファイナ「じゃあ後は任せたわよ」
ゾーグ「ハッ」

ファイナはそういって去って行った。

その頃なのは達のいるところでは

ヴィータ「…何だあいつ食われちまったぞ…」
クロノ「どうやら…魔人族の黒幕はジュドではなかったようだな」
シグナム「あの女は一体…？あの怪物と何かを話していたようだが…？」

皆はゾーグの元から離れたファイナを見てそう思った。
あの女は一体何者なのか？それが皆には分からなかった。
しかしシャナだけはファイナを見て何か考えるそぶりを見せていた。

シャナ（始めてみたときから気になっていた…あいつの事…あの喋り方といい声といいどこかで聞いたような……）

シャナはなんだかファイナの正体に覚えがあるような考えをし始めた。

シャナ（……ッ！！まッ、まさか！！いや…そんな筈無い…あいつがここにいるわけが無い……！！）

シャナは一瞬ファイナの正体に気づいた考えをするがそんな事はありえないと首を横に振った。

ゾーグ「さてどうするかな…魔砲はさっき撃ってしまったからな…部下どもに壊させるとするか」

するとゾーグは、両拳を強く握った。

ゾーグ「ゴォオオオオオ！！！」

叫びながら、体に力を入れた。

するとゾーグの背中から、無数の黒い玉が出てきた。黒い玉は宙に浮き、人型になっていき、背中に翼の生えた怪物になった。

その数は数千を超える。

ヴィータ「な…！？アイツ、自分の体から化物を生み出しやがった！！」

クロノ「しかもとんでもない数だぞ！！」

ヴィータとクロノが叫んだ。

ユーノ「アレで街を襲う気だ！」

怪物達を見ながら、ユーノが言った。

銀時「ほら、時間がねーぞ」

剣心「考えている暇は無いでござる」

銀時と剣心が言った。

もう時間も、選択の余地もない。

デジモン達も手伝えない。

クロノ「…わかった」

クロノは頷いた。

銀時「そんじゃ行くか剣心」

剣心「ああ」

銀時と剣心が、アルフに移動を頼もうとした時、

シグナム「待て、銀時」

シグナムが呼び止めた。

銀時「ん？」

銀時は振り向いて、シグナムを見た。

するとシグナムは、レヴァンティンを銀時に差し出した。

シグナム「剣心はともかくお前の獲物は木刀だけだ。木刀だけでは、アレの相手は辛いだろう。使え」

銀時「いいのか？お前の相棒だろ？」

シグナム「構わん。剣心と同じ武神の魂を持つお前にならば我が愛刀も任せられる」

レヴァンティンを差し出したまま、シグナムは答えた。

銀時は少し考えた後、レヴァンティンを受け取った。

銀時「そんじゃ、お前の騎士の誇りってヤツを、少し借りるぜ」

シグナム「ああ。勝って必ず返しに帰ってこい」

シグナムは、剣心と銀時の勝利と無事を祈った。

リィンフォース「銀時、剣心」

今度はリインフォースが呼んだ。

白髪の女性・リインフォースが剣心と銀時の前に現れた。

リィンフォース「本当にすまない。貴方達をこんな危険な目に遭わせて…」

銀時「なァに、気にすんな。厄介事はいつもの事だ」

剣心「そうでござるよ。いつも大変な目にはあっているのでもう慣れっこでござるよ」

申し訳なさそうに言うリインフォースに、銀時と剣心は笑って答えた。

なのは「銀さん」

なのはが呼んだ。

なのは「銀さん達の手助けが、出来ないのは悔しいけど…私達は私達の出来る事をします！！」

強い決意が宿った目で、なのはが言った。

なのは「それと…全部終わったら…また私達の先生をやってください」

銀時「ああ」

剣心「分かったでござる」

短く答えて、銀時と剣心は頷いた。

ヴィータ「銀時！剣心！」

ヴィータが銀時を呼んだ。

少し涙目になっている。

ヴィータ「絶対に……絶対に勝って、帰ってこいよ！！」

シャマル「ヴィータちゃん…」

銀時と剣心の帰りを願ってるヴィータを見て、シャマルは微笑んだ。

どうやらヴィータは、銀時と剣心の事が気に入ったようだ。

銀時「お前が俺達の心配するなんて珍しいな。今夜はハンマーの雨でも降るか？」

ヴィータ「あんだと！？人が心配してやってんのに！！」

と、銀時は空を見上げた。

そしてバカにされたと持ったのかヴィータが銀時に対して怒鳴った。

はやて「私もヴィータやシグナム達と一緒や。二人の事信じてるから」

ヴィータの肩に手を乗せながら、はやてが言った。

銀時「へいへい」

手を振って銀時は応えた。

グレイドモン「すまんな。ああいう奴の相手は本来我々のような物が相手せねばならんのだが」
ガイオウモン「もう、そろそろ実体化しているのも限界のようだ」
シャウトモン「悪いな。二人とも」
スパロウモン「僕らの分までアイツの事ぶっ飛ばしてやってよね！！」
銀時「おお」
剣心「分かったでござるよ」

そう言ってデジモン達はクロスローダーの中へ戻っていった。

シャナ「剣心、銀時」

今度はシャナが話しかけてきた。

シャナ「必ず…戻ってきなさいよ！！戻ってこなかったら…黒焦げじゃすまないからね！！」
銀時「わぁーってるよ。お前に黒焦げにされるのだけは勘弁して欲しいからな」
剣心「約束は死んでも守るでござるよ」

シャナの言葉に剣心も銀時も笑って答えた。

ヤミ「剣心、銀時」
剣心「ん？」

今度はヤミが話し掛けてきた。

ヤミ「はっきり言いますが…あの怪物の強さは今までの相手とは比

べ物になりません…いくらあなた達二人でも殺されるかも知れない……」

ヤミはそう言ってそう言って一瞬顔を伏せるがすぐにまた顔を上げた。

ヤミ「ですが…私も二人を信じています。必ず生きて帰ってきてください」

銀時「ああ」

剣心「もちろんでござるよ」

銀時「どうせ死ぬんなら孫に囲まれて穏やかに死にてーからな」

剣心「あんな怪物には殺されんでござるよ」

銀時と剣心は最後にヤミに向かってそう言った。

フェイト「剣心」

最後にフェイトが、剣心を呼んだ。

涙目で、剣心に抱き付いた。

フェイト「絶対に……帰ってきてね…約束だよ……？」

涙を流しながら、フェイトは言った。

剣心はフェイトを抱きながら、頭を撫でた。

剣心「ああ。侍は果たせない約束はしないでござるよ」

生きて帰ってくる事をフェイトと、みんなと約束する。

フェイトは、ゆっくりと剣心から離れた。

剣心「街の方は頼むでござるよ」
フェイト「うん」

涙を拭いて、フェイトは力強く頷いた。

銀時「それじゃ頼むわ。アルフ、クロノ」

銀時に頼まれ、二人は頷いた。
銀時と剣心を乗せたアルフと、デュランダルを持ったクロノは下に向かった。

シグナム「テスタロッサ」

シグナムが声をかけた。

シグナム「我らは、我らの出来る事をやるぞ」
フェイト「はい」

バルディッシュを構え、フェイトは頷いて応えた。

クロノ「ハッ！」

クロノはデュランダルの魔法で、海を凍らせた。
氷結はどんどん広がっていく。

クロノ「これで足場は出来た」
銀時「ああ。サンキュー」
剣心「すまんでござる」

クロノに礼を言って、銀時と剣心はアルフの背中から降りて、氷の上に立った。

クロノ「…フェイトもなのはも、みんな貴方達の帰りを待っている。負けたら承知しないぞ」

銀時「わーってるよ」
剣心「うむ」

銀時と剣心は軽く応えた。

銀時「テメェも町の方は頼むぜ。クルクル黒河童」
クロノ「誰がクルクル黒河童だ！！」

銀時にふざけたあだ名で呼ばれたのでクロノは銀時に怒鳴った。

クロノ「はァ…全くこんな時まで…行こうアルフ」

クロノはなのは達の所に戻っていった。
だが人型になったアルフは、戻ろうとしなかった。

銀時「ん？どしたアルフ？」
剣心「アルフ殿？」

銀時と剣心が尋ねた。

剣心「あ…あのさ、剣心……」

アルフは顔を赤くして、手をモジモジさせている。
剣心は首を傾げた。

アルフ「…フェイトにも黙ってたんだけどさ……あたし……」

アルフは、意を決して言う事にした。

アルフ「あたし、剣心が好きなんだ！」

剣心「えっ！？」
銀時「マジ！？」

いきなりアルフから告白され、剣心は驚いた。銀時もである。

アルフ「だ…だから…！絶対帰ってきてよ！！」

顔を赤くしながら、アルフはなのは達の所に戻っていった。
残された剣心は、呆然となってアルフが去った後を見つめた。
まさか、このタイミングでアルフから告白されるなどとは夢にも思わなかった。

剣心（こんな時に何を考えてるんでござるか、あの狼は……）

剣心はため息をついた。
まさか主とその使い魔、両方から好かれるとはさすがに剣心も思っていなかった。

銀時「お前もすっかり色男の女たらしだな」
剣心「斬るぞこら」

銀時のからかうその言葉に剣心は思わず殺気を込めてそう言った。
これはゾーグとの戦いより、戦い終わった後の方が大変かもな。
そんな事を思いながら、剣心と銀時は氷の上を歩き始めた。

ゾーグは自分が生み出した怪物達で、街を襲わせようとしていた。

ゾーグ「お前達！久しぶりの外だ！思う存分暴れるがよい！！」

怪物「ギャゴォオオオ！！」

怪物達がゾーグの言葉に応えて、雄叫びを上げた。

ゾーグ「よし、ゆけェエエエ！！」

怪物「ギャゴォオオオ！！」

街を指差しながら、ゾーグは命令した。
怪物達は街目掛けて、一直線に飛んでいった。

ゾーグ「ワシはしばらくここで、見物でもして町の人間共や魔導師共の悲鳴でも聞いて楽しむとするか」

ゾーグが腕を組んだ時、

ゾーグ「ん？」

海が凍った。
ゾーグは首を傾げた。

ゾーグ「これは…魔法か？」

氷の上に降り立ちながら、ゾーグは呟いた。

ゾーグ（何の真似だ？魔導師共め。こんな下らん事をしおって……ん？）

ワシではなくなぜ海を凍らせたのだ？
ゾーグは首をかしげた。
その時、カツンカツンと足音のようなものが聞こえた。
ゾーグは、足音がする方を見た。誰かがこちらに歩いてくる。
人間だ。
しかも大きな『気』の力を感じる
銀髪の男と赤髪の男で、左手には剣を持っていて、腰にも木刀が差してある。

確か『闇の書』と戦っていた人間共だ。

ゾーグ「何だお前達は？」

ゾーグは尋ねた。
すると銀髪の男と赤髪の男は足を止めた。

剣心「拙者達はお前を倒しに来た」
銀時「宇宙一バカな侍だ、コノヤロー！」

赤髪の男・剣心は真面目に銀髪の男・銀時は、ニタァと憎たらしい笑みを浮かべ、手をヒラヒラ動かしながら答えた。
大切なモノを護るため、『紅夜叉』と『白夜叉』再び戦場へ。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『黄色いのなにか』さんから「リィンフォースの説得をした銀時と剣心にプレゼントを上げます。銀×剣と剣×左之助のＢＬ本をプレゼントをします。万事屋とリリカル組の皆さんにプレゼントをしましたので喜んでくれると幸いです。

新八に質問です。万事屋から給料貰っていないのにどうやってお通ちゃんのＣＤを買っているのですか？もしかして万引きとかしているのですか？」はい、ではお答えどうぞ」

銀時「ＢＬ本なんてもらっても大して嬉しくねーよ」
剣心「こらこら、そんな事を言っては失礼でござるよ」
銀時「ちっ…わあーッたよ。はいはいありがとうございました～」

全『うわ～適当だ…』

全員がそう思った。

なのは「私達は嬉しいの」
フェイト「うん♪」
アルフ「あたしも嬉しいよ♪」
シグナム「私も嬉しい」

銀八「はいはい、では質問答え言っちゃってください。万引き君」
新八「誰が万引き君だゴラアァァァァ！！姉上から一応一通りのお小遣いをもらってんだよ！それにいざという時は親衛隊全員でグッズを買うときもあるんだよ！！」
銀時「…それって他人の力を当てにしてるってことじゃねーか……」
神楽「情けねーとは思わないアルかこのダメガネ」
新八「そんな事言われたって碌に給料もらってないんだから他に方法ねーじゃねーかー！！」

銀八「はい、まあたぶん原作でもこういう方法でグッズをそろえてんだと思います。『黄色いなにか』さん。詳しい事は空知先生にファンレターでも贈って聞いてみてください」

なのは「では次の質問です。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから「最終決戦が楽しみです。

土方に質問。
我が小説で『エロ方エロ四朗』と呼ばれています。感想は？

銀さんに質問。

こっちでは、シグナムと結婚しちゃいました。感想は？

新八に質問。
こっちでは、阿良々木や上条にツッコミ役の座を奪われています。
感想は？

阿良々木
「三番目の質問が酷くないか？」

戦場ヶ原
「何言ってるの、こっちでは新八君は、脱アニオタ兼彼女持ちよ。
そっちの新八君なんか、アニメオタクが……いえ、『アイドル＆アニメオタク兼ロリコン駄眼鏡変態少年』になっているのよ。」

阿良々木
「それは流石に言い過ぎだ！？」

戦場ヶ原
「寧ろ、死ねば良いのに。」

阿良々木
「最後はもっと酷い！！」…はいではお答えお願いします…」

土方「誰がエロ方エロ四郎だよコロヤロオォォォォォォォ！！ふざけた事抜かしてんじゃねぇよオォォォォォォォォォォ！！」
沖田「うるさいですぜぃ。ついでに死ねよエロ方コノヤロー」
土方「誰がエロ方だ！つーか死ね言うな！！」
斉藤「お前以外にいるか阿呆。これ以上恥を晒さない内にさっさと腹を掻っ捌いたら如何だ」

土方「んだとゴラァァァァァァ!!俺はエロ方じゃネエェェェェ!!」

二つ目の質問の答え

銀時「まさか俺とシグナムが結婚するとはなぁ～」
シグナム「こっちの私は剣心が好きなんだがな」
銀時「でもほとんどのリリカルなのはと銀魂のコラボ小説じゃお前は俺が好きって事になってんだぜ?」
シグナム「お前の事は嫌いではないがこっちの私は剣心が好きなんだよ」
銀時「へいへいそうですかぃ」
神楽「大体銀ちゃんが女にもてるなんて事自体がおかしいアル」
お妙「そうよね～、原作じゃストーカーの猿飛さん以外には全く女性に相手にされてないのにね～」
土方「銀魂七不思議のひとつだな」
他の銀魂キャラ『うんうん』

この言葉に銀時は

銀時「テメェらアァァァァ!!好き勝手な事ばっか言ってんじゃねー!!本当なら俺だって原作でもモテてる筈何だよ!この天然パーマが悪いんだよ!全部この天然パーマの所為だ!!」
お妙「見苦しいですねぇ言い訳ばっかり」
銀時「言い訳じゃねぇーーーーー!!」

銀時はただ叫び続けるしかなかった。

３つ目の質問の答え

新八「“銀魂”のツッコミは僕が担当なのに…」
銀時「まあ…あの世界じゃ俺達脇役同然だしなぁ……“万事屋奇譚幕”なのに……」
神楽「あっちでの活躍もう諦めたアル…せめてもう一つの小説では活躍させて欲しいネ」
銀時「ああ～、重要大事さんの次元の破壊者の小説のアレンジのやつな」
新八「あそこでは僕ツッコミ担当になれそうですね」
神楽「そうあるか？あの小説バトル中心になると思うアル。だから新八みたいな雑魚助の活躍なんてあるわけないネ。ツッコミもきっと役に立たないアル」
新八「んだとゴラアァァァァァァァァ！！」

銀八「はい、数々の質問の答えありがとうございましたっと。と言う訳で『亀鳥虎龍』さん廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第五十九訓　コンビだと最強はさらに最強（後書き）

支配者「いや～ジュド。なんともあっけない最後でした」

銀時「結局アイツ一度もまともに戦ってねーじゃねーか」

支配者「まあ、初めからああするつもりでしたから、所詮中ボスですし」

剣心「酷いでござるな作者殿…」

銀時「ジュド…ご愁傷様だな……」

支配者「では次回もお楽しみに♪」

その頃、出番がなくなったジュドは

ジュド「どうせやられるにしてももう少し目立ちたかった（泣）」

と嘆いていた。

第六十訓　護る為の剣は強い＝最強（前書き）

支配者「え～今更かもしれませんが、この物語の気の概念は『魔法先生ネギま！』を参考にさせていただいています」

銀時「ホント今更だなおい」

支配者「まあ、なんとなく言いづらくて…つい今まで黙ってました」

シャナ「どうしようもないわね全く…」

支配者「すいませんね。と言う訳でリリカル剣魂スペシャル始まりますよ」

第六十訓　護る為の剣は強い＝最強

ゾーグに生み出された怪物達は、街へ向かって飛んでいた。

怪物「ギャゴォオオオ！！」

叫び声を上げながら、街へ迫る。
その時、

フェイト「サンダー…レイジー！！」
セイバー「エクス…カリバー！！」」

声と共に怪物達に雷が落ち、巨大な閃光と電撃の光線が魔物たちを消し去った。
何体かの怪物に雷は当たり、全身に火傷を負った。
そして政権から放たれた桁違いに巨大な閃光は百体近くの怪物達を一気に消し去った。

怪物「ギャゴォ！？」

怪物達が上を向く。
そこには、バルディッシュを構えたフェイトと、なのは達がいた。
そして近くのビルの屋上には御坂達がいた。

フェイト「街には入れない」
シャナ「その通りよ。怪物」

フェイトとシャナは、怪物達を睨みつける。
怪物達も牙を向いて、フェイト達を睨む。

怪物達の体が一回り大きくなり、ゾーグと同じくらいの大きさになる。

「ギャゴォオオオ！！」

雄叫びを上げ、フェイト達に迫る。

なのははレイジングハートを構え、ディバイン・バスターを放ち、シャナは巨大な火炎弾を放った。怪物達は、桜色の閃光と火炎弾に飲み込まれた。

はやて「町の人達には手を出させへんで！！行くよ、リィンフォース！！」

リィンフォース「はい、マイマスターはやて」

はやても杖を怪物達に向け、石化の槍を放つ。槍に貫かれた怪物達は、次々と石化した。

はやての隣にはリインフォースがいて、障壁を張ったりと、はやてをサポートしている。

アルフ「使い魔としての維持見せてやるよ！行くよザフィーラ！！」

ザフィーラ「ああ。って我は守護獣だ！！」

ザフィーラとアルフは獣形態になり、体当たりや鋭い爪で怪物達を切る。

ヴィータ「オラアァァァァァ！！」

ヴィータはグラーフアイゼンを振回し、怪物達を吹き飛ばす。

シグナム「レヴァンティン自体は今はないが…それでもこの烈火の

将シグナム、お前達如きに遅れは取らん！！」

シグナムは鞘を使って怪物達と戦っている。急所に向かって鞘を振り抜き、怪物達を倒していく。

ヴィルヘルミナ「お嬢様に害をなす物は…すべて排除させて頂くであります！！」

ヴィルヘルミナも仮面をつけ大量の包帯で怪物達を貫いたり、ドリル状に変化させて吹き飛ばしたりしている。

フェイト「プラズマ…スマッシャー！！」

フェイトもプラズマ・スマッシャーを撃つ。金色の閃光に飲み込まれ、怪物達は消滅した。

それでも、怪物達の数はまだまだ空を覆いつくすほどに沢山いる。

フェイトの息が切れていく。

すると、数体の怪物達が後ろからフェイトに迫る。

アルフ「フェイト危ない！！」

怪物達に気付いたアルフが叫んだ。

フェイト「はっ！」

フェイトは後ろを振り返った。

怪物達がフェイトに迫る。

シグナム「テスタロッサ！！」

シャナ「フェイト！！」
ヤミ「危ない！」

シグナムとシャナとヤミも気付いて、フェイトの所へ向かおうとする。
が、間に合わない。
怪物が鋭い爪を振り下ろす。今から障壁を張っても間に合わない。
爪がフェイトに当たる直前、

？？？「フェイトから離れなさい！！」

紫色の雷が怪物達に落ちた。

怪物「ギャアアアアア！！」

怪物達は悲鳴を上げた。やがて雷が消え、黒焦げになった怪物達は動かなくなり、力尽きて海に落ちていった。
フェイト達は上を見た。
そこには、杖を持ったプレシアがいた。

フェイト「母さん！！」
アルフ「プレシア！！」

フェイトとアルフは、驚きの声を上げた。
フェイトは自然と笑顔になった。
プレシアはフェイトに近寄った。

プレシア「フェイト。怪我はない？」
フェイト「うん。ありがとう、母さん」

フェイトは頷いた。

なのは「プレシアさん！」

なのは達もプレシアに気付いた。

プレシア「私も加勢するわ。みんな頑張って！」

「はい！！」

プレシアの登場で、なのは達の士気が上がった。

怪物達がプレシアを囲む。

プレシア「大魔導師の肩書きは、伊達じゃないのよ」

怪物達を一瞥しながら、プレシアは言った。

プレシアが杖を振ると、再び紫色の雷が怪物達に直撃した。

プレシア「行くわよ、フェイト！」

フェイト「うん！」

金色と紫の雷が空に光った。

プレシアも加わって、フェイト達は怪物達の進攻を止めようとするが、数が多すぎて全ては止められなかった。

約半数近くの怪物達が、街に向かう。
そして怪物が街に入った瞬間、

神楽「ほぁちゃあああああ！！」
ハヤテ「おりゃあああああああ！！」

建物の屋上にいる赤いチャイナ娘・神楽とハヤテが、怪物達を回転蹴りで吹き飛ばした。

神楽「ここいらは海鳴市の女王・神楽のモノアル！」

ハヤテ「お嬢様に手を出す者は容赦しません！」

傘を怪物達に向け、神楽とハヤテが言い放った。

怪物「ギャゴォオオオ！！」

怪物達は雄叫びを上げる。

神楽「勝手に入ってくるなアルゥウウウ！！」

ハヤテ「お嬢様の敷地に入ってくるなぁアアアアア！！」

怪物達に向け、神楽は傘からマシンガンのように弾を発射した。

弾は怪物達に当たり、怯んだ隙に神楽は怪物達との距離を詰めた。

傘を振回し、怪物達を吹き飛ばしていく。とんでもない怪力だ。

そして、左之助は得意の拳で怪物軍団をぶっ飛ばした。

左之助「よッしゃあ！やっと喧嘩が出来るぜ！！」

美琴「って！そんな事言ってる場合じゃないでしょうが！！」

黒子「お姉さまの言うとおりですわこの喧嘩バカ！！」

左之助「誰が喧嘩バカだこの野郎！！」

超電磁砲（レールガン）をぶっ放しながら怒鳴る美琴と得意の瞬間移動体術で怪物を蹴り飛ばしている黒子が左之助突っ込んだ。

セト「やれやれ、この仕事代は後で管理局とか言う連中からたっぷりと仕事料をいただくとするか。なあソルヴァ！」

ソルヴァ「そうですね。…と言う訳だから覚悟しろやオラァ！！」

セトは死神の帯剣を振りかざして強力な重力波で怪物達を押しつぶし、ソルヴァは戦闘モードとなって強力な磁力で怪物達を吹っ飛ば

す。

下にいるお妙、薫、すずか、アリサ、クルス、護の所にも怪物達は迫っていた。
怪物達は口を開いて、鋭い牙を見せた。ダラダラと涎を垂らす。

「ギャゴォオオオ！！」
アリサ・すずか
「キャアア！」

叫びながら、怪物達はお妙達に襲い掛かる。
その時、お妙達と怪物達の間に九兵衛とヒナギクとブレイドが現れた。
神速の速さで刀を横薙ぎに振るい、怪物達を真っ二つに切り裂いた。
ヒナギクは特別な力を持つ“木刀・正宗”で怪物達を切り裂いたり殴り飛ばしたりした。
ブレイドはリトルボーイで怪物たちを殴り飛ばした。
上半身がズレて、ドチャッと音を立てて地面に落ちた。下半身の斬り口から紫色の血が、噴水のように噴き出た。

吹っ飛ばされた怪物は黒焦げになって落ちていった。

九兵衛「お妙ちゃん達には、指一本触れさせません」
ヒナギク「三人には手を出させないわよ！！」
ブレイド「女の子をいじめる奴は許さん！！」

九兵衛とヒナギクとブレイドは鋭い目で、後ろにいる怪物達を睨んだ。

「ギャゴォオオオ！！」

怪物達が九兵衛達三人に迫る。
口から黒い魔砲を放つ。三人はソレをかわして、一気に怪物達の所まで駆ける。
怪物達は、拳を九兵衛に向けて振り下ろした。
九兵衛は、静かな川の流れのような動きで拳をかわし、すかさず神速の剣を振るう。
怪物達は血を噴き出して倒れた。

ブレイド「カンダタ・ストリング！！」

ブレイドは神様にしか切れないといわれる強力な念糸で怪物達を縛り上げた。
怪物達はもがいて糸を切ろうとするが無理だった。

ブレイド「無駄だ！！その糸を切れるのは同じ能力者か神だけ何だよ！！食らえ！“テンペスト・スレッド”！！」

ブレイドは今度はカンダタストリングを強化した大技テンペストスレッドで怪物達を吹き飛ばした。

怪物達は血まみれになって落ちていった。
そして今度は怪物達はクルス達にも襲いかかった。
アルカ「私のクルスに何をするかぁ！！」
アルカは手のひら超高温のエネルギーを作り出すと怪物達に向けてはなった。
アルカ「“ヒート・エクスプロージョン”！！」！！
凄まじい縛熱の一撃は怪物達を一瞬で焼き尽くした。
綾子「護に手を出す奴は…叩き潰す！！」
綾子はとてつもない怪力と炎のオーラで怪物の大群を一瞬で叩きのめしてしまう。
とんでもないパワーである。
クルス「さ…さすが姉さんと綾子さんだな。ねえ、護君」
護「う…うん……」
その光景を見て苦笑いしているクルスと護がいた事は言うまでもない。
そして今度は怪物達が、背後から九兵衛とヒナギクを襲おうとする。
その時、
東条「危ない、若ァアアア、姫エェェェ！！！！」

東城が叫びながら、刀を振るって怪物達を斬った。

東条「若と姫を護るのが、この東城歩の務め！何人たりとも若と姫には触れさせん！！」

怪物達に向け、東城は凄まじい気迫を放った。

東条「若と姫になに晒しとんじゃこのボケ共がアァァァァァァァ！！」

東条は怒り狂いながら怪物達を切りまくっていく。おバカでも一応名門柳生家四天王最強の男、並みの剣客ではまるで歯が立たないほどの腕を持っているのだ。

そして三人娘

未央「これ位私達なら楽勝だよね！！」

梔『うむ』

セツナ「当然！」

彼女達の戦法はこんな感じである。

まず梔が『香（フレグランス）』の力で怪物達の動きを止める

梔『“メイデンリストリクション”』

梔は左腕に装着されているファンが内蔵された特殊なアーマー『ジェットガントレット』を起動させ、麻痺の作用のある香を飛ばして怪物達を翻弄する。

セツナ「ディーンドライブB（ブラックバード）・B！！

セツナの音速クラスの動きの攻撃で怪物達を下に叩き落す。

未央「いっくぞ～、未央ちゃんホームラン！！」

未央が鉄の棒で怪物達を空の彼方に吹っ飛ばした。
しかし、怪物達はやっぱりまだまだいる。

セツナ「なんて数…」
未央「きりないね」
セツナ「でも、泣き言言ってる場合じゃないわ。行くわよ！未央！梔！」
未央「んいっ！」
梔『量会×、了解○』

屋上。
桂、エリザベス、ナギ、雪路、新八は怪物達に囲まれていた。
怪物達はニヤリと口元を歪めた。

桂「ふん。俺を捕まえるには甘いな」

桂は懐に手を忍ばせた。
そしてお得意の秘密兵器『んまい棒』を取り出した。

桂「んまい棒、鎖羅魅（サラミ）！！」

んまい棒を床に投げ、屋上は煙に包まれた。
突然煙に包まれ、怪物達は混乱する。

雪路「ホイ、プレゼント！」

そして、雪路が丸い玉のような物が怪物達の前に投げられた。
玉に表示されている数字がゼロになった瞬間、玉は大爆発を起こし、
怪物達は粉々に吹き飛んだ。
爆発で煙も消え、生き残った怪物達は桂と雪路を見つけた。

「ギャゴォオオオ！！」

二匹の怪物が桂に襲い掛かろうとした時、

新八「僕をツッコミだけのダメガネだと思うなァアアア！！」
エリザベス『うおりゃあああ！！』

背後から新八とエリザベスが、それぞれの武器、木刀とプラカードを振り下ろして怪物の頭に攻撃した。
怪物達は痛みで頭を押さえ、その隙に桂が刀で怪物達を斬った。

イヴ「ふん、雑魚の癖に僕に挑むなんて百年早いぞ！！」

イヴはそう言うと手を金属に変えた。

イヴ「金属化！食らえよ“イヴ・キャノン”！！」

そしてその腕から強力なアッパーを食らわせて怪物達を空の彼方に吹っ飛ばした。

神楽「新八ー、ヅラ、ヅラ姉！エリー！ナギ！無事アルカ？」
ハヤテ「お嬢様！ご無事ですか！？」

隣のビルの屋上にいる神楽が呼びかけた。

新八「大丈夫だよ、神楽ちゃん！」
ナギ「うむ！問題ないぞー！！」

新八とナギが返事をした。
すると神楽を背後から襲おうと、怪物達が後ろから迫っていた。

桂「危ないリーダー！！綾崎殿！！」
ナギ「神楽！ハヤテ！！」

桂とナギが危険を知らせた。
その時、

定春「わんっ！！」

定春が怪物達に体当たりをした。

神楽「定春！」

神楽は定春に抱き付いた。

新八「よかった」
桂「うむ」

新八達はホッと一安心した。

エリザベス『まだ気は抜けないですよ』
雪路「そうよ、面倒だけどまだまだいっぱいいるみたいだし」
と、書かれたボードをエリザベスが掲げ雪路が空を見ながらそう言った。
桂「そうだったな」
桂達は気を引き締め直して、まだ残っている怪物達を見つめた。

逆刃刀を構えた剣心と木刀とレヴァンティンを構えた銀時、そしてゾーグがお互いににらみ合う。

ゾーグ（侍？どこかで聞いたことのある名称だな。確か“あのお方”もそんな物がいるとか言っておられたな。まあ、どこだったかは忘れてしまったが……そんな事は如何でも良い）

ゾーグは剣心と銀時の二人を見てそう思った。
だがゾーグにとっては二人の事など同でも良かった。ゾーグが気に入らなかったのは剣心と銀時が自分に向かって言った“倒す”という言葉であった。

ゾーグ「このワシを……倒すだと？」
剣心「そうだ」
ゾーグ「たったの…二人でか？しかも人間のお前達がこのワシを？」
銀時「だったらどうしたんだよ？」

剣心と銀時がゾーグに対してそういう。

ゾーグ「…ふはははっ。正義の味方気取りか？このワシを倒して、世界を護ろうと？闇の書如きにてこずっていたお前達風情がこのワシに勝てるとでも本気で思っているのか？それとも自殺志願者か？力の差もわからずに挑もうとは、やはり人間とはつくづく愚かな生き物よのお！！ガーハハハハハ！！」

ゾーグは思い切り嘲笑って銀時と剣心を馬鹿にした。

一方、銀時と剣心はゾーグの言葉を聞いて、ため息をついた。

銀時「勘違いすんなよ」
ゾーグ「何？」
銀時「俺達ゃ女相手じゃ本気は出せねーんだよ」
剣心「それに拙者達は別に正義の味方でもないし、世界を護ろうとも思っておらぬ」

メンドくさそうに頭を掻きながら、銀時が言い、剣心もそう言った。
ゾーグは、銀時と剣心の言葉に首を傾げた。それ以外に戦う理由が見つからない。

ゾーグ「ふん、あれは本気ではなかったか…言い訳にしか聞こえんが、まあそれでも良かろう…しかし…ならば一体の何のためにお前達はワシと戦おうというのだ？」

ゾーグが戦う理由を聞いた。

銀時「一つは、俺の大事なモンを護るため」
剣心「そしてもう一つは……」

そこで剣心と銀時は一旦言葉を止め、空を見上げた。
視線の先にはリインフォースがいた。
そしてゾーグに向き直る。

銀時・剣心「アイツ「彼女」の笑顔が見てェのさ「見たいのでござるよ」」

親指でリインフォースを指差しながら、銀時と剣心が言った。

ゾーグ「……はァ？」

思わずゾーグは間抜けな声を出した。
世界のためではなく、女のためだと？
女のため、しかもただのプログラムに過ぎんはずの『闇の書』ごときの為にこのワシと戦い、倒そうと言うのか？このワシ“魔人王・ゾーグ”を？

剣心「女子に涙は似合わぬでござる」
銀時「テメーという荷を降ろさせて、アイツの笑顔を取り戻す」

両手に剣を持って、銀時と剣心が言った。
するとゾーグは笑い出した。

ゾーグ「ワハハハハ！笑わせおるわ！いくら気の力が使えるからといって貴様ら如きが“魔人王”たるワシを倒すなどとはな！！しかもあのようなプログラム如きのためにか！？奴の性で散々な目にあったというのにおかしな奴らよなぁ！！」

ゾーグは腹を抱えてしばらく笑っていたが急に態度を変えて二人を凄まじい殺気のこもった目で睨みつけた。

ゾーグ「図に乗るなよ……この虫けら共がアァァァァァァァァァ！！！！」

――ドグオオオオオオオオオオオオーーッ！！！――

ゾーグは大声と共に凄まじい衝撃波を放った。その衝撃に銀時と剣心はとっさに氷上の地面に剣を突き刺したがあまりの威力に後ろへとたじろいた。

剣心「グッ！」
銀時「やっぱ半端じゃねえな…コイツァ…」

銀時と剣心はゾーグに対してそういう。ゾーグの桁違いの威圧感からゾーグがとてつもない強敵だとは二人ともよく分かっていた。おそらく以前二人が戦った最強クラスの敵夜王・宝仙に匹敵する存在であろうと言う事も二人の恩師から聞かされていた。
……だがこの二人がそんな事くらいでたじろく存在なはずがなかった。

ゾーグ「貴様ら…誰を前にしてそんな身の程知らずな事を言っているのか分かってて言っているんだろうなァ…！？」
銀時「はっ、そんなの知るかよ」
剣心「お主が何者だろうと関係ない。拙者達は拙者の護りたい者を護る為にお主をこの剣で黙らせるだけでござる」

そう言って二人は剣を構える。

ゾーグ「やれやれ…時が立つというのと相手の力量を見極められんというのは虚しい物だな…ワシの恐ろしさを全く知らんとは……」

ゾーグは軽く溜息をついた。

ゾーグ「……よかろう。外に出たばかりで運動がしたかったところだ。お前達には、ワシのウォーミングアップの相手になってもらうとしよう」

ゾーグは全身に魔力を漲らせる。
凄まじく黒く禍々しい魔力が、ゾーグの体を包んでいく。

魔力を感じない銀時と剣心にも、その禍々しさが伝わってきた。
桁外れの威圧感と禍々しすぎる殺気、並の人間なら感じただけで死んでしまいそうである。
あまりに恐ろしいまでの異常な威圧感であった。
しかし二人はおそれずにゾーグを睨み付けた。

銀時「俺達をウォーミングアップの相手に選んだ事を、後悔させてやるぜ」

右手に洞爺湖、左手にレヴァンティンを構える。

剣心「当然だ」

剣心も右手に木刀『風牙』、左手に逆刃刀を構える。

銀時「もうアイツに、涙は流させねェ」
剣心「ああ、お主の様な者の為に拙者達の大切な者を奪わせはせぬでござる」

銀時は自分と戦っている時に流した、リインフォースの涙を思い出す。
もうアイツにあんな顔はさせねェ。
コイツをブッた斬って、黙らせて、全てを終わらせる。
剣を構え、地を蹴ってゾーグに向かって、銀時と剣心は駆け出した。
銀時&剣心対魔人王ゾーグ。

人類の……世界の存亡を賭けた決戦が幕を開けた。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生!』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『黒神』さんから「とりあえず質問です。

剣心へ

シャマパイを兵器で食べられる人間はこの世にいると思いますか？

左之助へ

斬馬刀を新しく手に入れる気はありますか？

斉藤へ

以前、新八を侍の恥とか言いましたけど……原因はやはりオタク活動であると思いますか？他に理由があれば教えてください。」シャマパイ食える奴なんているわけないだろ」

剣心「そうでござるな～・・・さすがにあれを食せる者がいるとは思えんでござるな…」

銀時「そうだよな～。シャマル鍋を平気で食ったネプテヌユーヌでも食えなかったもんな～」

神楽「あんなの修羅スバルでも無理だと思うアル」

全『だよね～』

皆の意見は一致したのであった。

銀八「では、次の質問の答えを言ってくれ喧嘩バカ」

左之助「誰が喧嘩バカだこの野郎！…まあそうだな、もういいぜ俺にはこの拳があるしな」

神楽「つまりもう手に入れる積もりないアルか？」

左之助「そうだな」

銀八「あっそ、次は斉藤君答えてくれます？」

斉藤「ああ、奴に侍の資格がないのは下らんオタク道を走っているから、それだけだ」

沖田「だったらトッシー君にも侍の資格なんてありやせんねぇ」

土方「俺はトッシーじゃねぇ！」

沖田「あれ～誰も土方さんなんて言ってやせんぜぇ？とうとう自分の中にトッシーがいる事を認めた事ってですねぇ」

土方「うげっ！」

土方は“しまった！”という顔をした。

沖田「というわけですんで土方さん局中法度を破った罰として今すぐ腹切って死んでくだせぇコノヤロー」

土方「ふざけんなアァァァ！！大体あの眼鏡の質問の答えを言う筈だろーが！何で俺が切腹する話になってんだよ！！」

沖田「そりゃ今すぐ土方さんに死んで欲しいからでさァ」

土方「テメェー！今すぐぶった斬ってやるー！！」

沖田と土方はまたしても喧嘩を始めてしまった。

銀八「ああ～、もううるせぇ勝手に喧嘩してろっつうのたく…と言う訳で『黒神』さん、廊下に立ってなさい」

剣心「次の質問でござる。ペンネーム『真王』さんから「真王「屑魔神が…そんな傲慢ですべてを滅ぼすなど笑止！！」

レーティア「ええ、あれには私も怒りを感じたわ」

ジャンヌ「あの魔神食べたらどんな味なのかなぁ？」

真王「まずいだろうな」

ジャンヌ「フフフ・・・クイタイナァ」

真王「…質問に入る『赤夜叉さんのゾーマをアレンジしたゾーグですがなぜこいつにしてみようかと？』」

レーティア「私も質問。『ザンダガ、ジハード、ドラドス、ついでにファイナは好きな食べ物何なの？』」

ジャンヌ「最後に私だけどさぁ『アノクサレマジンクッテイイヨネ？』」

真王「やばいな…森羅万象を喰らう者（アンリミデッド・グリーダー）の意思か…」

レーティア「さて、もうお開きよ」では質問の答えお願いするでござる」

支配者「はい、まあゾーマが気に入ったって言うのが一番の理由ですね。まあ、もう一つの理由は闇の書事リィンフォースが消えるようになるシナリオにもって行きたくなかったって言うのがもう一つの理由ですね」

銀時「なるほどな」

剣心「まあ…あれは悲しいでござるからな……」

支配者「というわけです。では次は私が作ったオリキャラの皆さんお答えを言ってください」

ジハード「俺の好きな食べ物はやっぱり肉だ」

ドラドス「俺はレタスだな」

銀八「ドラゴンなのにレタスが好きっておい…」
ドラドス「やかましい！俺はベジタリアンなんだ！！」

そうなんですか、では次

ザンダガ「私は…酢の物が好きなんです」
シャナ「何か似合わない」
ザンダガ「うるさいですね」
ファイナ「私は好きなのはイチゴのケーキよん♪」
銀八「あっそ」
ファイナ「何よ！その興味のなさそうな返事は！！」
銀八「はいはい、では次の質問の答え行きましょ～」
ファイナ「無視すんなー！！」

はいはい、では次

支配者「え～次の質問の答えはゾーグ自ら答えてください」
ゾーグ「ああ…このワシを食らうだと…？小娘の分際で身の程知らずな事を抜かすな！！逆にワシが貴様を食ろうてやるわ！！」
銀八「おいおい…アイツとんでもなくやばいと思うぜ、そんな事言っていいのかよ……」
ゾーグ「ふん…奴とてワシの恐ろしさを知らんだろうが！この魔人王・ゾーグの恐ろしさを思い知らせてくれるわ！！」
銀八「あ～、はいはい…こう言う訳ですから『真王』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第六十訓　護る為の剣は強い＝最強（後書き）

支配者「いよいよ次回最終決戦スタート！ゾーグの圧倒的な実力が明らかに！！」

銀時「マジかよ…そんなに強いの？」

支配者「まあ、かなり強いですよ。でもその分銀時と剣心も強くしてますから」

剣心「そうなんでござるか」

支配者「はい、では次回もお楽しみに」

第六十一訓　ラスボスが強いからこそバトルは盛り上がる（前書き）

支配者「いよいよ、ゾーグとの最終決戦スタート！最強の魔人を相手に銀時と剣心に勝ち目はあるのか！？」

銀時「いや、知らねーよ！お前が書いてんだろーが！」

剣心「とにかく。リリカル剣魂スペシャル始まるでござるよ」

第六十一訓　ラスボスが強いからこそバトルは盛り上がる

ゾーグ「貴様ら如き……一瞬で消してくれるわあああああああああ！！！」

ゾーグがそういって魔法陣から巨大な大剣を呼び出し、凄まじい速さ…神速の瞬動の速さで接近し二人に向かって振り下ろした。

ズドガキィン！！！！

ズドォン！！！！

剣心「グウウウウウウウウウッ！！！！！！！！！！」

銀時「ぬうおォォォォォォォォっ！！！！！！！！！！」

剣心は木刀と逆刃刀、銀時は洞爺湖とレヴァンティンの二つを使ってその一撃を止めた。もちろん気を纏わせている。そうしなければレヴァンティンも木刀も逆刃刀も簡単に折れてしまいそうな一撃だったからだ。ゾーグの一撃の余りの衝撃の重さに地面の氷がミシミシと音を立ててめり込んでいき一瞬で巨大なクレーターが出来た。周りの氷も拉げて飛び出してきている。

ゾーグ「ほう……ワシの一撃を止めるとは…言うだけの事はあるか……」

ゾーグは自分の一撃を止めた剣心と銀時を興味深そうに見つめた。

剣心（…なんという重さだ……！！）

銀時（まじで夜王並の一撃じゃねえか…コイツの一撃は……！！）

剣心（たった…一太刀あびただけで…！）

銀時（ここまで…戦う気力や精神を…削ぎ落とされちまうもんなのかよ……！！）

剣心と銀時はゾーグの一撃を受けて冷汗を流しながらそう思った。

想像を超えたゾーグのこの一撃…一瞬で二人に絶望という言葉を頭によぎらせた。

『魔人王』の異名は伊達じゃないという事である。

ゾーグ「だが…それくらいでは相手にならんわ！！」

ゾーグは剣の力を緩めると今度は素早く横薙ぎに振るった。

剣心「ヌウッ！」

銀時「ヌオアッ！」

しかし剣心と銀時は素早く体制をたてなおしその剣も受け止めた。

その後二人は遥か向こうへと吹き飛ばされた。

ゾーグ「…これも防ぎおるか……」

ゾーグは二人の対応のよさに少々驚いていた。

ゾーグ「…だが防ぐだけでは勝てぬわ！！」

ゾーグはそういって素早く剣心と銀時の後ろに回りこんだ。

ゾーグ「グゴオオオオオッ！！」

ゾーグは叫び声ともに衝撃波を放って二人をもっと遠くに吹き飛ばそうとする。

しかしは二人は素早く飛び上がり衝撃波を交わした。

飛び上がった二人はゾーグに向かって木刀を振り下ろす。

ゾーグ「ふん…」

それをゾーグは左手の人差しと中指の二本で止めてしまう。

剣心、銀時「な…！？」

一瞬驚いた剣心と銀時だが、左手のレヴァンティンを横薙ぎに振るい剣心は右から逆刃刀を振るう。しかしゾーグは一瞬大剣を離すと両手を使ってそれらを簡単に受け止めてしまった。

ゾーグ「弱い……遅い！！」

そういってゾーグは二人を投げ飛ばしたと同時に口に魔力を溜め込み魔砲を発射した。

ゾーグ「ゴオオオオッ！！」

とっさに二人は空中で体勢を立て直し地上に素早く落下するとともに左右に飛んで魔砲を交わした。ちなみにその魔砲の威力は先ほどではないがそれでも凄まじいパワーであった。

氷上を深く抉り二人に迫っていったのだから、二人はその光景を見

て冷や汗を流していた。
そしてゾーグは上空に飛ばした大剣を再び右手で受け止めた

ゾーグ「ほう…今の状態であれを交わすか…少しはやるのう…では面白いものを見せてやろう」

そう言ってゾーグは銀時と剣心に向けて右手を上げた。右手に桜色の魔力が溜まる。
ソレを見て銀時と剣心は、顔を引きつらせた。

銀時「おいおい…マジかよ…？」
剣心「あれはまさか…なのは殿の!?」

桜色の魔力が集束され、

ゾーグ「ディバイン・バスター!!」

右手から桜色の閃光が放たれた。
走って銀時と剣心は、桜色の閃光を避けた。

ゾーグ「フハハハッ!ワシは闇の書から、長年少しずつだがずっと魔力を奪い続けておったのだ。その中には闇の書が蒐集した魔力も含まれておる、貴様らの仲間のものもな!…もっとも……これっぽっちの破壊力しかないようだがな……」

ゾーグは高らかに笑いながらそう言った後でなのはの技を見ながらつまらなさそうにそう呟いた。
並みの魔導師の砲撃の威力を上回る破壊力を持つなのはのディバインバスターだが自分の魔砲に比べればたいした威力はなかったからだ。

そしてゾーグも、リインフォースと同じように蒐集した魔力から、魔法をコピーしていたのだ。
恐らくスターライト・ブレイカーやシグナム達の魔法も使えるのだろう。
剣心と銀時はゾーグからはなれようとする。だが、

ゾーグ「遅いわ！！」

ゾーグは一瞬で銀時達の前に現れた。

銀時「なッ！？」
剣心「早…！！」
ゾーグ「吹き飛べい！！」

直後、ゾーグが銀時と剣心の腹目掛けて拳を繰り出す。銀時と剣心はその威力に後ろに吹っ飛んでしまう。

剣心・銀時
「がはっ！！」

氷上に倒れた二人が、口から血を吐く。
ゾーグはじっと銀時と剣心を見て立っている。

ゾーグ「ふむ…やはりやりおるのう…」

ゾーグは自らの拳を見てそう言った。
ホンの少しだけだが金属粉のようなものが手についていたのだ。

ゾーグ「咄嗟に…二人共木刀と刀とデバイスで…ワシの一撃を防いだか…」

銀時と剣心が立ち上がる。

剣心（防御した上からでもこれ程の衝撃か…！！）

銀時（…手がこんなに痺れてやがる…体もフラフラするぜ…！）

二人共体がフラフラしている。ゾーグの拳は桁外れの威力があり二人の剣捌きを持ってしても威力を余り流しきれなかった。

骨が軋む、筋肉が泣き喚く、指一本、筋肉の筋一本たりとも力を抜けない、一瞬で潰される。

それ程の一撃…ゾーグの恐怖は宝仙の時に二人が感じたときと同じだった。

ゾーグ「どうした…？まさかもう終わりなどという訳ではあるまい…？」

銀時「…んなわけねーだろ。こっからが本番だぜ！」

剣心「これくらいで…勝った気にならないでもらおう！！」

ゾーグ「そうこなくてはな…もう少しワシを楽しませろ！！」

ゾーグはそういって二人に向かっていき、二人もゾーグに向かっていった。

その頃離れた海の上空では

？？？「へ～、やるじゃないあいつら、あのゾーグ相手に1分以上持ってるなんて…」

その様子を感心するような視線を向けていたのはファイナであった。

そこに

『姫様』

ファイナ「なぁに？あんた達」

魔人族四天王ザンダガ・ドラドス・ジハードが現れ、ファイナにはなしかけた。

サンダガ「姫様。ゾーグ様に加勢しなくて宜しいのですか？」
ジハード「そうですよ。せめてあの魔導師共位は我々の手で始末したほうがいいのでは…」
ファイナ「必要ないわ～。仮にも、元パパの側近の一人だった奴よ。あれくらいの連中ゾーグ一人で十分よ」
ドラドス「しかし、姫様…」
ファイナ「いいって…いってんでしょ…！」
四天王
『！！』

ファイナは少し力の入った声で四天王を睨みつけながらそう言った。その気迫に四天王は後ろへとたじろいた。その気迫の大きさは明らかにゾーグすらも上回っていた。

ファイナ「あんたたちが気にする事じゃないの…それに…」
四天王
『それに？』
ファイナ「万が一にでもあれ位の連中を全滅させられないようじゃ、戻ってくる資格なんてないわ」
サンダガ「はあ…」
ファイナ「あんた達は先に帰ってなさい。私は最後まで見ていくから…パパにもそう言っといて」
ドラドス「ハ、ハイ」
ジハード「了解致しました」

そう言って四天王の三人はその場から消えた。

ファイナ「さ～て…どうするのかしらねぇ…？白夜叉…紅夜叉…」

ファイナはそう呟きながら銀時達に視線を戻した。

銀時「てぇやあああああ！！」
剣心「はあああああああ！！」

二人は気合ともに両手の武器を振るう。しかしゾーグは軽く動いて交わし、横薙ぎの攻撃もジャンプしてかわしてしまう。
その上神速の剣による突きも小指の一本で止めてしまうほどである。
剣心は土龍閃の巨大な氷砂波を起こす。
しかしゾーグはそれすらも口から出した空気砲らしき物で簡単に吹き飛ばしてしまう。
ゾーグは手にエネルギーをこめる。まずいと感じた二人はうしろへと飛ぶ。
ゾーグは手のひらから連続で黒い魔力弾を発射する。さっき二人がいた辺りの部分が大爆発を起こす。
魔力弾が当たったその場に大きなクレーターが出来る。
そのうえゾーグは二人に凄まじいスピードで接近し拳や剣の一撃を食らわせようとしてくる。
ゾーグが剣を振り下ろすだけで斬撃の波が発生し二人を襲い、氷上を真っ二つにする。
二人はそれ必死で交わし、再び距離をとる。
まるで暴風が巻き起こるかのような恐ろしい戦いを繰り広げていた。

剣心「はあ…はあ…」

銀時「クソッ…たれ…なんて…バケモンだ……」
剣心「ああ…まさか…ここまで…力の差があろうとはな……」

二人はゾーグに対してこう思っていた。パワーもスピードもどれをとっても夜王クラス。
その上魔力弾の威力も半端ではない。
直撃したら自分達の魂もろとも押しつぶされてしまうかのような凄まじい攻撃ばかりだ。
ふざけているとしか言いようがない
一瞬たりとも気を抜けない、瞬きする暇も無い。一瞬で潰される。

ゾーグ「グハハハハッ！」

すると二人に近付いていたゾーグが突然笑い出した。

剣心「何が…おかしい」
ゾーグ「なぁに…手加減してやるのも難しいとおもうてな……」
剣心・銀時
『！！』

その言葉に二人は驚愕した。
なんとゾーグはあれだけの激しい攻撃を放っておきながら手加減していたと言い出す。

ゾーグ「それだけ…このワシの力が強大ということよ……」

ゾーグはにやけた顔をして二人にそういう。

剣心（あれで…手加減していただと…！？）
銀時（おいおい…冗談じゃねえぞ！だったら…本気出したらどうな

っちまうんだ！？）

二人は驚愕しながらも立ち上がり再びゾーグに向かっていく。

ゾーグ「ほお…良い根性だ……まだ戦おうとするか……ザコが」

剣心「ぬらぁあああああ！！」

銀時「てぇやアアアアア！！」

二人は地面を蹴って瞬動に近いスピードでゾーグに接近する。

剣心「龍巻閃！！」

銀時「うおらぁあああ！！」

剣心は回転剣舞である龍巻閃を銀時はレヴァンテインと木刀の連ゲキを神速の早さで繰り出す。

ゾーグ「必死だな……だが…所詮ザコはザコだ……」

ゾーグはそう言うと剣心の龍巻閃を片手で銀時の二本の剣の連撃を大剣を使って簡単に受け止めた。

剣心「龍巻閃！！『凩（こがらし）』！『旋（つむじ）』！『嵐（あらし）』！！！」

剣心は何とかゾーグの隙を見つけて得意である龍巻閃の三連激を繰り出す。

ゾーグ「ほう…なかなか良い技だな…だが！！」

ズガン！ズガキィン！ガキィン！！

剣心「なッ！？」
ゾーグ「どう頑張ろうと……ザコの攻撃など効かぬ！！」

しかしゾーグは大剣をうまく使ってそれらの攻撃を簡単にいなしていた。首から来る『凪』は剣を首の後ろに回して防ぎ、目の前に来た『旋』は剣をすばやく前に回し、最後に空中高く飛び上がり、刀を手前に構え前方宙返りによる一撃である『嵐』も大剣を真上に回して防いでしまった。

カァン！カキィン！ズバキィン！ズガァ！ガキィン！ドガキィン！カキィン！カキィン！バキィン！ドゴォ！ガキィン！ドガキィン！カキィン！バキィン！ゴキン！ドカン！ズバキィン！カァン！カキィン！ズバキィン！ズガァ！ガキィン！ドガキィン！カキィン！バキィン！ズガァ！カキィン！バゴォ！ズバキィン！ドゴォ！ガキィン！ドガキィン！カキィン！バキィン！ゴキン！ドカン！ズバキィン！

銀時「ウォオオオオオオ！！」
剣心「ハァアアアアアア！！」

二人は負けじとさらに力を込めて剣戟を放つ。

剣心「飛天御剣流！『龍巣閃』！！」

剣心は飛天御剣流の超高速乱撃術『龍巣閃』をゾーグに向けて再び放つ
しかし、ゾーグはそれすらも簡単にかわしていた。

ゾーグ「なかなか速いではないか」

剣心（こやつ…一目で『龍巣閃』まで見切ったのか…！？）

剣心は思わず苦虫を噛んだ様な顔をする

ゾーグ「なかなか粘るのう…」

ゾーグが口を開く。銀時と剣心は攻撃を続ける。

ゾーグ「だが…やはり圧倒的よなぁ…」

ゾーグが顔をにやけさせ右拳を握る。

ゾーグ「力の差がな！！」

次の瞬間、銀時と剣心の腹にゾーグの拳と蹴りが入る。

ドゴオォォォォォォ！！！！！

銀時・剣心

『が…っ！！』

モロにゾーグの攻撃を受けて骨が砕け、内蔵もいくつか痛める。

ゾーグが左の手のひらに魔力を溜める。

ゾーグ「消えろ…！」

左手を銀時と剣心の前に出し、手のひらから黒い魔力の塊を放つ。

黒い魔力の中に銀時と剣心が飲み込まれる。

ゾーグが魔力波を放った後、氷の粉塵が立つ。

ゾーグ「…ふん…まだやるのか…？」

ゾーグが後ろを向く。

銀時と剣心が頭から血を流し、着物はボロボロになっていた。

ゾーグ「笑わせおるわ…碌に力も残っとらんくせに……ん？」

しかしそれでも二人の目からは闘気は全く衰えていなかった。

二人の両手の刀にも未だに強いオーラがにじみ出ている。

ゾーグ（ほう…あれだけやられて全く覇気が衰えていないとは……思った以上に楽しめるではないか…この虫けら共）

ゾーグは内心二人の動きの良さに少々驚いていた。封印される前に数多くの強力な魔導師を葬ってきたゾーグだったが、ここまで自分の動きについてこれた人間を見た事がなかったからだ。気の力を使えるといえ二人自身の身体能力ははっきりいって人間の限界を超えるほどであった。

ゾーグ（確かにザコではあるが……ゴミ屑の魔導師如きよりはよほど殺しがいがあるようだな）

ゾーグは再びニヤリと不適に笑う。

剣心「…防戦…一方だな…」

銀時「ああ…」

剣心と銀時もゾーグの強さに驚いていた。もしあの状態で本当に手加減しているのだとしたらゾーグの強さは想像を絶している。

ゾーグ「どうした…？ワシを倒してあのプログラムに笑顔を与えてやるんじゃなかったのか？今までのが貴様らの本気なのだとしたら到底無理な話だぞ？」

ゾーグは二人を挑発するかのような言葉を発してそう言う。

銀時「おい…てめえ…」

ゾーグ「あん？」

銀時「…アイツを…リィンフォースを…プログラムだなんて…いうんじゃねえ…！！」

ゾーグ「…はあ？何をわけの分からんことを……奴は人間共がわしを封印するためだけに作った道具に過ぎんのだぞ？それをプログラムといって何が悪い…」

剣心「彼女には…“心”がある…“感情”がある」

ゾーグ「心？感情？」

剣心の言葉にゾーグは首を傾げる。

銀時「俺達と…かわらねえ…」

剣心「生まれは…俺達とは…違うかも…知れんでござる…だが…」

銀時・剣心

『アイツ（彼女）は人間だ』

二人は声をそろえてそう言う。

ゾーグ「出来損ないのプログラムを人間だと？……ふん…下らんことを言いおるわ……愚か者共めが…では貴様らのその生意気な口を塞ぐ為に少しだけワシの本気の技を見せてやろう……」

そういうとゾーグの周りに黒いオーラが立ちこみ始めそのオーラが

剣に纏わりはじめた。

剣心「何か来るな…」

銀時「ああ…」

剣心と銀時は武器を持つ両手の力を強くする。

ゾーグ自身も武器を構える力を強くした。

ゾーグ「食らえ…『魔人三日月斬』！！」

ドゴオオオオオオオオオッ！！！

ゾーグはそう言って剣を振るうと黒い三日月上の巨大な波導を放った。まあＹ○Ｉ○Ａに出てくる鬼○の出す『魔○○日○剣』的な感じね。

銀時「のわっ！？」

剣心「くっ！？」

二人は何とか紙一重でその攻撃をかわした。しかし完全にはかわせず、二人の服や体に傷跡がついた。

三日月の波動は後方で大爆発を起こした。

氷上に穴が開き底が見えない。

その威力は先ほど二人にはなった魔砲の威力を遥かに上回っていた。

剣心「何という威力だ…！！」

銀時「まるで黒い月○天○だぜ……」

剣心と銀時はゾーグの放った魔人三日月斬の威力に驚いていた。魔人三日月剣の威力は下手をするとセイバーのエクスカリバーを上回

りかねないほどの出鱈目な威力があったのだ。
まるで、ＢＬ○Ａ○Ｈの主人公、○崎○護の月○天○をさらに大きくしたかのような一撃である。しかし威力は凄まじかったがその分速度が遅かったのが不幸中の幸いであった。まあゾーグの最初に放った魔砲に比べれば今の技さえ小技のような物、だがあんなのまともに食らったら一巻の終わりだ。

ゾーグ「まだまだぁ！！」

ドゴオ！！ドゴオ！！ドゴオオオ！！！

ゾーグは連続で剣を振るい波動を放つ。

銀時「ウオオッ！！」
剣心「くっ！！」

銀時と剣心は波動をかわし続ける。しかし完全にはかわせず少しずつだが切り傷が二人に付き始めていた。その傷から血が噴出す。

ゾーグ「どうした！？かわすだけで精一杯か！？少しは反撃してこんか！！」

ドゴオ！！ドゴオ！！ドゴオオオ！！！

剣を振りながらゾーグはそう言う。

銀時「クソッ！あの野郎…好き勝手言いやがって！！」
剣心「全くだな…」

銀時は文句を言いながらも攻撃をかわし続けている。それは剣心も

同じだった。
しかしかわしながらも二人は着実にゾーグに近付いていった。天性の戦闘本能でゾーグの『魔人三日月斬』を見切り始めていたのである。

ゾーグ（こやつら…少しずつだがワシの攻撃を見切り始めておるな…）

ゾーグは心の中でそう思っていた。自分に近づいてきている事もいつの間にか二人はゾーグのすぐ側まで来ていた。

ゾーグ「ぬおっ！？」
銀時「食らいやがれぇ！！」
剣心「龍翔閃！！」

二人は強い気のオーラを纏わせた木刀と逆刃刀を突き上げゾーグを真上に吹っ飛ばした。

ゾーグ「グオアッ！！」

ゾーグは上空に吹き飛ばされた。
しかし二人はすぐにまたゾーグと距離をとった。あれくらいの攻撃ではゾーグにとってはたいしたダメージにはならないということくらい二人には分かっていたからだ。

ゾーグ「ヌグゥウウッ！」

ゾーグは空中で体勢を立て直し地上に着地した。
そしてゾーグは口からたれた血をわずかに拭き取って見つめた。

ゾーグ（こっ…このワシが…人間如きに…傷を…負わされ…た？）

ゾーグは血のついた自分の手を見てプルプルと震えだした。

ゾーグ「グ…グ…グゴオオーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！！！！！！！！」

ゾーグは上空に向けて凄まじい咆哮と同時に二人に向けて衝撃波を放った。

―――ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオーーーーッ！！！―――

銀時「ぐぉおおおおおおおおおおおおおおお！！」

剣心「うわあああああああああああああ！！」

巨大な衝撃破に二人が吹き飛ばされてしまう。

ゾーグ「貴様らぁ、虫けら臭い人間の分際で…よくも…よくも…このワシに……傷をつけ負ったなーーーーーーーーーーーーーッ！！！！」

ゾーグは怒りの咆哮を上げる。

ゾーグ「手加減してやっておれば調子に乗りおって！！もう許さん、許さんぞぉーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！

！！」

ゾーグは再び咆哮をあげる。

ゾーグ「唯では殺さんぞ…貴様等には最高の絶望を与えてくれる…貴様らを動けなくなるまでいたぶった後、貴様らの目の前で虫けらの魔導師共を皆殺しにしてくれるわ！！ワシにたてついた事を死ぬほど後悔させてやる為にな！！」

ゾーグの体が、禍々しい黒い魔力に包まれる。
銀時と剣心は起き上がって、剣を構える。
次の瞬間、ゾーグから黒い魔力が放たれた。放たれた黒い魔力は、ゾーグや銀時、剣心の周辺を包み、黒いドームになって闇の空間が出来上がった。

ズンッ！！

剣心「なッ！？これは……！！」
銀時「何だこいつァ……！！」

銀時と剣心が闇の空間を見渡した。
その瞬間、急に体が鉛みたいに重くなり、氷上に膝をついた。

剣心（これは…一体…なんだ……！？）
銀時（か…体が…重てぇ……！！）

なんとか立ち上がろうとするが、氷上から膝を離す事が出来ない。
立つ事が出来ない。

ゾーグ「どうだ…？ワシの『闇重力領域（ダーク・グラビゾーン）』の味は…？」

銀時・剣心
「『闇重力領域（ダーク・グラビゾーン）』！？」
ゾーグ「そうだ…。この空間ではワシ以外の存在の重力は数倍になる…魔力の重さも加わる。これでもう素早く動くことは出来まい？」
銀時「…チイッ！…せこいまねしやがって…！！」
ゾーグ「ほざけ！この雑魚が！！」

ゾーグはそういって二人に向かって大剣を振り下ろしてきた。立ち上がれない銀時と剣心は、なんとか横に動いて大剣を避けた。
直後、銀時の顔にゾーグの蹴りが入った。蹴られた銀時は、吹き飛んで氷上に倒れた。

銀時「グハッ！！」
剣心「銀時！」
ゾーグ「次は貴様だ！！」
剣心「ガハッ！！」

ゾーグはそういって剣心の顔にも蹴りを入れた。

ゾーグ「……本当にデタラメな人間共だ。常人…いや高ランクの魔導師でもとっくに魔力と重力に押し潰されて死んでいる筈なのだがな……大方気の力か何かで威力を緩めていると言ったところじゃろうが…それでも異常だぞ……」

ゾーグは呆れた顔をする。
初めて見た瞬間から、人間にしてはただ者ではないと思っていたが、まさかここまでやるとは。
ワシに傷をつける。ワシの魔人三日月斬をかわし続ける。
この『闇重力領域（ダーク・グラビゾーン）』の空間内で、押し潰されずにまだ生きている。
本当に人間かと疑いたくなる。

ゾーグ「だが…それもここまでだ」

ゆっくりと二人に近づく。

全身に力を入れ、立ち上がろうとする銀時と剣心。だが『上から降り懸かる力』に圧され、立つ事ができない。

ゾーグ「だがそう簡単には殺さんぞ。さっきも言ったように貴様らの仲間を皆殺しにするといったからな…貴様らの目の前で…といってももう殺される寸前かも知れんがな…」

ゾーグはにやけながら言う。

ゾーグ「それにしても分からんな。あれだけの数のワシの部下を見ておきながらまだ戦っておるとは…呆れ返ってものも言えんわ…ワシの力も見せてやったというのに…」

ゾーグは街の方を見た後顔をさらににやけさせる。

ゾーグ「どれほど抵抗したところで最後には全員ワシに殺されるというになあ!!まあ唯では殺さんさ…そいつの一番大事なものをズタズタにするのを見せ付けてから殺してやるわ。どいつもこいつも…この世界の生きる者全員…最後の一匹までな!!ワーハハハハハハハハハハッ!!」

ゾーグは大笑いをする。

その時だ・・・。

剣心・銀時

「黙れ…」

銀時と剣心はゾーグを睨みつけながらそう言った。しかしゾーグは聞く耳を持たず話し続ける。

ゾーグ「そうだ…特に奴らには…最大級の苦しみを与えてやらねばな……あの出来損ないのゴミ魔道書や守護騎士共にはな！！あの人形の守護騎士共の目の前で奴らの大事な大事な主の小娘をバラバラにしてくれるわ！！それがワシを復活させてくれたせめてもの褒美というものだ！！」

ゾーグは笑い続けながらリィンフォースやシグナム達をバカにする。

ゾーグ「…本当に愚かな守護騎士共だわい。あんな虫けらのような小娘一匹を助けるために必死で闇の書を完成させようと努力しておった。ワシを復活させるとも知らずになあ！奴らの必死になる姿は闇の書を通していつも見ておった。まさに最高の茶番だったわ！！あんなゴミの為にズタボロになりながら動き、ボロボロ涙なんぞ流しおって気色のワルいったらない！！ちょっと優しくされた程度でプログラム風情が下らん知恵などつけおって！！何が家族だバカバカしい！！自分達は唯の出来損ないの人形…いや…屑データに過ぎんというのに！！」

剣心「黙れ…！」

銀時「…黙りやがれ…！」

ゾーグ「あんなゴミ以下のような小娘さっさと見捨てておればこんな事にはならなかったものを！！奴らの努力の全ては始めから何の意味もなかったのだ！！主の小娘がバラバラにされるのを見て奴らの泣き叫ぶ声を聞くのが今から楽しみだ！特に絶望しきった顔を見るのもな！！ワーッハッハッハッハ！！」

剣心・銀時「黙れぇー！！」

ゾーグ「あん？」

剣心と銀時は叫び強く剣を握った。目の前にいるゾーグ。コイツは腐りきっている。
人を殺すのを、心を壊すのを楽しんでいる。
シグナム達がはやてを必死で助けるために行っていた努力の全てをバカにしている。
自分達の誇りや主の命にまで背いてやってきたことをあの辛そうに流した涙を…全てを
負ける訳にはいかない。
こんな奴に、こんな屑野朗に、俺の…俺達の大事な物を壊されてたまるか。
何よりコイツは、殺しを楽しむために戦場で戦ってやがる。相手の心を思いを踏みにじる為だけに戦っている。
気に入らねェ。
氷上に剣を突き刺す。
コイツにだけは…死んでも負けねェ。

銀時「…おいゾーグ」
ゾーグ「ん?」
剣心「ズタズタにされるのは貴様のほうだ」
ゾーグ「……はぁ?」

ゾーグは目の前の二人が何を言っているのかと首を傾げた。もうズタボロの状態だというのに何を言っているんだこいつらは?気に入らん…ザコの分際で…

ゾーグ「ふん…何を言うかと思え……!?」

ゾーグは途中で声を詰まらせた。
二人が立ち上がってきたからだ。

ゾーグ（なッ…！！？立ち上がっただと！！！？）

ゾーグは驚愕した。今の今まで『闇重力領域（ダーク・グラビゾーン）』の中で立ち上がった人間など見た事がなかったからだ。

その上二人はすでにズタボロの状態、普通なら当の昔に動けなくなっている筈なのに…それなのに二人は立ち上がってきたのだ。

ゾーグ（し……信じられん…！こやつら…本当に人間なのか！？）

ゾーグは信じられない光景を目にして思わずその場に呆然と立ち尽くした。

その隙を二人は見逃さなかった。銀時は木刀とレヴァンティンを剣心は逆刃刀と木刀を振り呆然としているゾーグを空間の外に吹き飛ばした。

ゾーグは氷上に着地した。

ゾーグ「ヌオッ…！（は…反撃してきただと！？『闇重力領域（ダーク・グラビゾーン）』の中で！？バカな…ありえん！！）」

予想外の事態にゾーグは驚きを隠せなかった。

ゾーグが外に出た事で、『闇重力領域（ダーク・グラビゾーン）』を維持する者がいなくなり消滅した。

ゾーグ（少々マシに戦える程度のザコかと思っていたが…少し甘く見すぎたか……）

ゾーグは剣心や銀時達への判断を改めた。

銀時「おいゾーグ」

ゾーグ「ン？」
剣心「お前は今まで何のために戦ってきた？」
ゾーグ「は？」

ゾーグは首を傾げた。この二人はいきなり何を言い出すのだろうと

ゾーグ「何を言い出すかと思えば…そんなもの決まっておろう！！
虫けら共を叩き潰し殺しつくすのが好きだからよ！！他に理由がいるか！？それこそ戦いの醍醐味であろうが！！」

ゾーグはそう言う。
すると二人は
剣心・銀時
『フッ…』
と鼻で笑った。

ゾーグ「何を…笑っておるのだ？」
銀時「いや何…テメェは飛んだ腰抜け野朗だと思ってな」

ピク

ゾーグはその言葉に片眉を上げた。

剣心「今の言葉で良く分かった。お前は今まで自分より強い者と戦った事がないな？」
ゾーグ「だったら…どうだというのだ？」
剣心「お前には“覚悟”という物がない」
ゾーグ「“覚悟”？そんなもの必要なかろう…この次元世界にワシより強い者などおらぬのだからな！」

ゾーグはそう言う。
しかし正直その通りなのだ。ゾーグは本気でない状態でもすでにSSSランククラスの強さを誇っている。しかもパワーやスピードだけでもまさに化け物、今まで数え切れないほどの高ランク魔導師を葬り続けてきたゾーグがそう言いたくなるのも仕方なかったりするのだ。
すると銀時が

銀時「俺達はテメーのように、殺しを楽しむために戦場に出ている奴は気にいらねえ」

銀時と剣心は思い出す。
かつて仲間と共に戦った譲夷戦争を。

剣心「戦いに対する”覚悟”もない奴が、戦場に立って命を弄ぶな」

フェイト達も新八達も、自分の大切なモノを護るために”覚悟”して戦ってるんだ。
だが目の前のコイツには、ソレが無い。
銀時と剣心の雰囲気が変わる。鋭い眼でゾーグを射抜く。

銀時「来いよ」
剣心「戦いの恐さを教えてやる」

その眼は、『白夜叉』と『紅夜叉』の眼をしていた。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『ボッスン』さんから「質問です。ＴｏＬＯＶＥるの主人公のリトとリトの妹の美柑とシャナの主人公の悠二ととある魔術のヒロインのインデックスは出ますか？教えてください。」

支配者「はい、出ますよ。というか悠二もう出しましたよ？ほんのちょっとだけですけど」

銀八「前も似たような質問あったよな。」

支配者「そうかも知れませんね。」

銀八「はい、では『ボッスン』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「次の質問いくでござるよ。ペンネーム『黄色いのなにか』さんから「ゴリラ（近藤）に質問。例えイボ同士とはいえゴリラ（近藤）とお妙が夫婦になって妊娠するまでの関係になって嬉しかった

ですか?正直に答えたらお妙の水着写真集を差し上げます。

近藤「嬉しくないな。やはり現実のお妙さんと一緒になりたい。正直に答えた。だからお妙さんの水着写真集をくれ!!」

銀八「おい、それ本当に本音か?嘘ついてんじゃねえのか?」

近藤「嘘なわけあるものか!俺は正直者何だ!真選組でも正直者の勇と呼ばれているんだぞ!」

新八「嘘だろうが本当だろうがあんたと姉上が結ばれる事なんて絶対ありえねーよ。と言うか絶対に認めねーよ」

新八は冷たい目で近藤を見つめながらそう言った。

銀八「あり?ところでお前の姉ちゃんはどこだ?こんな質問されたらぜってーブチキレてあのゴリラ殴り飛ばしに来ると思うんだけど?」

新八「ああ~姉上だったら、『何勝手に水着写真集なんて作ってんだコラァ!!』って言って『黄色いのなにか』さんをぶっ飛ばしに行きました」

銀八「へ…へ~……そう…何だ。『黄色いのなにか』さんお妙から無事に逃げられる事を祈っています」

なのは「では次の質問です。ペンネーム『匿名希望』さんから「剣「何だかこっちの拙者はこれから最終決戦みたいでござるな」

匿名「そーっすね、こっちの剣さんも尖角倒してからが大変ですよ」

剣「そうでござるな…じゃあ質問に移るでござるよ」

匿名「お登勢さんへ、以前万事屋の皆さんは給料も出せないほど金がない状態と言ってたってことは当然、家賃も払ってもらってない

んですか？」

剣「家賃の滞納とは…あまりよくないでござるな…」

匿名「次回の更新も頑張ってください！」はい、ではババアのお答えどうぞ」

お登勢「剣心の奴から毎月少しずつだけど受け取ってるよ．あのダメ天パ野郎と違ってあいつは真面目だからね。何であんなダメ天パと一緒にいるのか分からないよ。まあ、それでも家賃には少し足りないよ．次は何がなんでも無理やりにでも払わせてやるさ」

銀八「はい、そうらしいですよ？と言う訳なので『匿名希望』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第六十一訓　ラスボスが強いからこそバトルは盛り上がる（後書き）

支配者「いかがでしたか？今回のバトル」

銀時「おい、作者！アイツ夜王よか強いんじゃねーのか！？」

支配者「そうかも知れませんけど、さすがにクリス・ロードや修羅王アルカイドよりは弱いですよ」

銀時「そうかもしんねーけど、それでも強すぎんだよ！」

支配者「だって……盛り上げたかったんだもん！」

銀時「かわい子ぶって言うな！キモイんだよ！！」

支配者「次のバトルはもっと過激です。では次回もお楽しみに！」

銀時「挙句の果てには無視かー！！」

第六十二訓　魂を刈る夜叉となれ（前書き）

支配者「いよいよ大詰めが近づいてきましたー！！」

銀時「そうだな。それにしてもあいつホント強いじゃねぇかよ。ゾーマとは偉い違いだぜ」

支配者「まあ、そうですね。後個人的な理由で今回の『教えて、銀八先生』はお休みさせていただきます」

剣心「個人的な理由って何でござるか？」

支配者「ノーコメントで、その代わり今度は残った質問全部お答えしますんで、と言う訳でリリカル剣魂スペシャル」

銀時・剣心『始まるぜ（ござるよ）！！』

第六十二訓　魂を刈る夜叉となれ

町の方では未だに大量の怪物達と超銀魂世界の面々が戦っていた。

セイバー「はあっ！」
九兵衛「ふっ！」
ヒナギク「やあっ！」

セイバーや九兵衛、ヒナギクが見事な剣の腕で怪物達を切り裂く。

セイバー「二人共、大丈夫ですか？」
九兵衛「僕たちがこれ位で参る訳ないだろう。なあヒナギク」
ヒナギク「もちろん！これ位で参るようじゃ柳生家の次女は務まらないわよ！」

セイバーの言葉に二人はそう答える。
因みに東条は

東条「お二人共！危ないですからこれを着て下さいってば！！」

東条はこりもせず二人にまた甲冑を着せようとしていた。

九兵衛「しつこい！！」
ヒナギク「そんな物着たら動けなくなるでしょうが！！」

と言って東条を蹴り飛ばした。

そして、

ズバァ！！

お妙と薫も薙刀を使って怪物達を蹴散らしまくっていた。

お妙「平伏しなさい怪物共」
薫「私達が海鳴市の女王よ」

怪物達は大して聞きもせずに二人に襲い掛かる。
しかし

お妙「キャバ嬢を」
薫「剣術小町を」
お妙・薫『舐めるんじゃねえぇぇぇ！！』

ズッドオォォォン！！

ものすごい威力の薙刀の攻撃に怪物達は碌に抵抗もできずに地面落ちていった。

お妙「ふん」
薫「口ほどにもないわね」

そんな二人を近くで見ていたアリサとすずかは

アリサ・すずか『（こ…恐い……）』

そんな二人を見て震えていたのは言うまでもなかった。

一方こちらは剣心&銀時対魔人王ゾーグの戦いが行われている氷上

ゾーグ「あ?……戦いの怖さを…教えてやる…だと……?」

ゾーグは表情を強める。戦いの怖さ?ふんっ、ばかばかしい!このワシに,この魔人王ゾーグに戦いの怖さを教えてやるだと…?糞弱い下等な人間如きが?瀕死の虫けら風情が?

ゾーグは歯を食いしばり、拳を強く握った。ゾーグは鋭い眼光をぶつける銀時と剣心を睨む。

ビキビキビキッ!!

ゾーグの怒りのゲージが今まさにＭＡＸになろうとしていた。

激しい黒いオーラがゾーグの周りを覆っていた。

それは氷上の崩れた氷が浮かび上がるほどの激しいオーラであった。

ゾーグ「調子に乗るのもいい加減にしろよ…ろくに反撃も出来ておらんくせに…」

ゾーグは激しく銀時と剣心を睨みつける。

ゾーグ「この……虫けら共がアアアアアアアアアアアアアア!!!!!」

――ドゴオオオオオオオオオーッ!!――

ゾーグは再び巨大な衝撃波を放つ。
しかし剣心と銀時はその衝撃波に耐えていた。

ゾーグ「ワシの力を思い知らせてくれる…！！戦いに恐怖を感じるのは貴様らのほうだあああああ！！」

メキメキメキッ！

ゾーグはそう言うと背中から巨大な二つのワニの頭を出現させた。

銀時「なんだありゃあ…」
剣心「さあな…」
ゾーグ「グオオオオ…」

ゾーグが唸る。すると二つのワニの口が桜色に光り始めた。

銀時「おいおい…」
剣心「まさか…あれは…」

二人の顔が引きつる。

ゾーグ「食らえ…Wスターライトブレイカー！！」

――ズドオオオオオーッ！！――

なんと二つのワニの口から二つのスターライトブレイカーが放たれたのだ。
しかもそれはなのはの放つスターライトブレイカーよりも巨大な砲撃だった。

ゾーグ「わはははははっ！消えうせろっ！！ゴミが！！」

ゾーグはそう言い勝利に酔いしれた。
しかし二人は少しもあわてず真剣のほうを右手に構えて、その場にしゃがみ込み居合いの構えを取った。桜色の閃光が二人に当たる瞬間

剣心「…飛天御剣流」
銀時「はあああ…」
剣心「気龍閃…横一文字！！」
銀時「てぇえええやあああああ！！」

二人は気のオーラを纏った逆刃刀とレヴァンティンを振りぬき桜色の閃光を斬り裂いた。二つに割れた桜色の閃光は、銀時と剣心の後ろで爆発した。

ゾーグ「なっ……何いっ！！？あれを斬り裂いた！？」

ゾーグは口をあけて驚愕した。
その時銀時が

銀時「おいバケモン」
ゾーグ「あ？」
銀時「ボーっと突っ立てていいのか？」

銀時がそう言った瞬間

ズバアッ！！

ゾーグ「グォワッ！」

ゾーグの脇腹が切り裂かれた。

ゾーグ「なっ…なんだいまのは！！？なぜワシの体に急に斬られた傷が出来たのだ！！？」

ゾーグはわけが分からないといった顔をする。無理もない。どうして急に自分の脇腹が切り裂かれたと言う理由が思いつかなかったからだ。

剣心「知りたいか？何故急にお前の体が切られた理由を」

ゾーグ「グウウッ！」

剣心「それは俺が今貴様に放った技のせいだよ」

ゾーグ「貴様の…技…だと？」

剣心「そうだ…今の技は気の力を刃にして飛ばす居合いの技だ」

ゾーグ「だからワシの体に切り傷が出来た訳か…」

剣心「そう言う事だ。最も危険な技だから出来れば使いたくなかったのだがな……」

剣心がそうゾーグに言う。

横一文字とは居合いを極めた剣客が放つ技だ。その名の通りすさまじい速さで剣を振るいそれによって生まれる気の刃で相手を文字通り横一文字に掻っ捌く技である。

普通はどんな達人でも４～５Ｍが限界なのだが気の力を極め、なおかつ究極の居合い流剣術でもある飛天御剣流の技は常識で考えられる範囲の技ではない。実際剣心の放った居合いの刃は１００Ｍを軽く越えてゾーグに向かってダメージを与えたのだ。しかもその威力は巨大な岩でも簡単に真っ二つに出来るほどである。普通の人間相手なら確実に命を奪ってしまいかねないほどの危険な技であるため、出来れば不殺（ころさず）を心がけている剣心も使いたくはなかったのだが、相

手があれほどの実力を持っているのでは使わざるを得なかった。

ゾーグ「貴様らにそんな芸当が出来たとはな……」

ゾーグは剣心を見つめながらそう言った。

銀時「如何した？今のでびびったか？」

ゾーグ「何の冗談だ…ワシがあの程度のことでたじろくとでも思うのかぁぁぁぁぁぁ！！」

ゾーグは怒りながらそう言って再生能力で瞬時に傷を治した。そして黒い魔方陣から再び大剣を呼び出しそれを左手に持って神速以上の速さで二人に斬りかかって来た。

剣心「飛天御剣流！気龍閃横一文字！！」

剣心は再び横一文字を放ったが

ゾーグ「同じ技が二度も通用するか！！」

ゾーグはその巨体からは信じられないほどのジャンプ力で飛び上がり横一文字を交わした。

そして近くの氷上に着地したかと思うと再び二人に斬りかかって来た。

銀時「おおおおおおお！！」

銀時はゾーグに向けて、水平に構えた木刀の突きを放つ。

ゾーグは、右手の大剣で木刀を受け止める。

ゾーグ「こんなものが通用すると…ん？もう一人はどこだ！？」

その時、銀時の隣にいたはずの剣心がいない事に気付いた。

ゾーグが剣心がいない事に気付いたのと、剣心がゾーグの背後に回ったのは同時だった。

剣心「はぁあああああ！！『龍槌閃』！！！！！」

剣心は、逆刃刀を使って上段から繰り出す技『龍槌閃』を振り下ろす。気配に気付いたゾーグは、素早く振り返って左手の剣を突き出し、そこから黒い障壁を出して逆刃刀の刃を受け止める。その瞬間、刃と障壁の間で火花が散った。

ゾーグ「そんなものでワシの防御障壁は敗れんぞ！！仲良く吹き飛ばしてくれるわ！！」

ゾーグはそう叫ぶと、木刀を防いでいる右手の剣を振って、銀時を剣心に向けて吹き飛ばした。剣心は瞬間的に体を捻って避けて、銀時は空中で体勢を立て直し氷上を蹴って、ゾーグへ向かって瞬動術で一気に近付く。

同時にゾーグも氷上を蹴って、銀時に向かっていた。腕を振りかぶって、銀時の左頬に向けて大剣を叩き込んだ。

銀時はレヴァンティンで受け止めながら痛みと衝撃に耐えて、氷上に足をつけ、倒れないように必死で踏ん張る。少しでも力を抜けば一瞬で吹き飛ばされそうである。ゾーグを睨みつけると、木刀を振るって、ゾーグの顔を殴り返した。

直後、ゾーグの前に剣心が現れた。逆刃刀を振り下ろして、逆刃がゾーグの体を叩きつける。

その時ダメージを受けたゾーグは吠えた。

剣心「今のは効いたか？」
ゾーグ「虫けらがアァァァ！！調子に乗るなアァァァ！！」

背中のワニの頭が口を大きく開き、巨大な黒い閃光を放つ。
銀時と剣心は、同時に剣を横薙ぎに振りぬいて、閃光を切り裂いた。

ゾーグ「ぬぅ！」

閃光を切り裂かれ、ゾーグは顔を歪める。

銀時「うぉおおおおお！！」
剣心「はぁあああああ！！」

二人はゾーグに向けて、剣を振るう。
ゾーグは右手の剣で木刀を、左手の剣で逆刃刀を弾く。二人は攻撃の手を休めず、木刀とレヴァンティン、逆刃刀を振り続ける。ゾーグも両腕の大剣で攻撃を防ぐ。途中で背中のワニの様な口が開き、二人に向けて黒い閃光を放つ。
二人は同時に両足を蹴ってそれぞれの方向に飛んで閃光をかわした。
その隙にゾーグは後ろへ下がって距離をとりながら剣を構え、超巨大な火炎弾を作り出した。

ゾーグ「『ゾーグ・インフェルノ』！！」

剣を振り下ろし、黒い魔力の大炎塊を銀時と剣心に向けて投げる。
その超巨大な黒い火炎弾は氷上を激しく抉りながら二人に向かって進んでいく
その時剣心が逆刃刀を抜刀の要領で構えた。

剣心「飛天御剣流…気龍閃！『覇月』！！」

剣心は凄まじい神速の勢いで気の力が溜まった逆刃刀を振りぬき巨大な真空の刃を放った。
その刃はゾーグの放った火炎弾とぶつかり相殺された。そのとき大爆発と共に凄まじい暴風が吹き荒れた。

ゾーグ「あれを…防ぐだと…」

ゾーグは驚愕した。今のゾーグが放った『ゾーグ・インフェルノ』はSランクオーバーの魔導師でも一瞬で灰にしてしまうほどの破壊力があるというのにそれすらも剣心はあっさりと相殺してしまったのだから

剣心「如何した？」
銀時「さすがにテメェの技も品切れか？」
ゾーグ「ぐぅぅ…！！」

ゾーグは今の言葉に腹を立てたのか激しく顔をゆがめた。

ゾーグ「そんなに死にたければ今すぐバラバラにしてくれるぅ！！！！」

ゾーグは激怒して再び異常な速さで突撃してきた。
二人も瞬動術を使いこなしてゾーグを迎え撃った。

シグナム「はあっ！！」

シグナムが鞘を振り下ろし、怪物の頭に当てた。
フェイト「プラズマ・スマッシャー！！」
怯んだ怪物に、フェイトの金色の閃光が放たれた。
怪物は消滅した。

シャナ「断罪！！」
シャナは怪物を炎の刀で真っ二つにする。

ヤミ「ふん！」
ヤミは怪物達を髪の毛の槍で貫く。
シグナムは額の汗を拭いた。

シグナム「大分減ったな」
フェイト「はい」
シャナ「そうね」
ヤミ「はい」

四人は周りを見回した。
怪物の数は、ずいぶんと減ったが、まだ百匹以上いる。しかし、セイバー達の力が凄すぎるので百匹くらいならもう倒せたも同然である。

フェイト「もう一頑張り見たいですね」
シグナム「ああ」
シャナ「ええ」
ヤミ「はい」

四人とも気を引き締め直す。
ふとシグナムは、リインフォースに顔を向けた。
リインフォースは、銀時と剣心の戦いを見ていた。二人が心配だったのだ。
ゾーグの強さと恐ろしさを誰よりも知っているからである。
だが様子が少しおかしい。

シグナム「どうした、リインフォース？」

シグナムとフェイトが近寄った。

リィンフォース「……銀時と剣心の雰囲気が変わった。」
フェイト・シグナム『え？』

リインフォースの言葉を聞いた後、二人も氷上を見た。
銀時と剣心がゾーグと戦っている。そこでシグナムも気付いた。

シグナム「私と戦った時よりも、剣心の動きがよくなっている。あのゾーグを相手に後れを取っていない」
フェイト「えっ！？」

シグナムの言葉にフェイトは驚いた。

リィンフォース「〝アレ〟は…あの時と同じ……」

リインフォースは、銀時、剣心と戦った時の事を思い出す。
最後に見せた銀時と剣心の動き。魂を狩るあの眼。獲物に恐怖を与える威圧感。
この戦いで、銀時と剣心の強さがわかる。

ゾーグ「消えうせろ！！虫けら共オォォォォォォォォォォォォォ

ォォ！！！！」

銀時「ウオォォォォォォォォォォォォォォォォ！！」

剣心「ヌアァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！」

ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！ガゴオ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ドゴオオ！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ドガアア！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィ

ン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！ガゴオ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ドゴオオ！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ズバキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ズバキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！ガゴオ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！

ドゴオオ！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ドガアア！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ズガキィン！ドバキィン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ドゴオオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ドゴォ！！ガキィン！ドゴォォン！バキキキキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ズガガガガン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ドゴォ！！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！ガキィン！バキィン！ガキィン！ドゴォ！ガゴオ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ズドドドドド！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ドゴオオ！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ドガアア！ガキィン！ドバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ドガア！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！

！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ドゴォ！ガゴオ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ドゴオオ！バキィン！ズバキィン！ドバキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ドゴオオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！

ォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！ガゴオ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ドゴオオ！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ドガアア！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！ガゴオ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ドゴオオ！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィ

ン！ドガアア！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！ガゴオ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオオ！ズガアア！バキバキィ！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！ドゴオオ！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ドガアア！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ズドオオ！ズドバキィン！バキィン！ドゴォ！！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ズバキィン！ズドオン！ズドバキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドバキィン！ガキィン！バキィン！ドガァ！ズバキィン！ドガア！ガキィン！バキィン！ガキィン！ガキィン！ドゴォ！バキィン！ズガキィン！ズバキィン！ドゴオオオ！ズガアア！バキバキィ！ズバァ

ン！！

ゾーグは怒り狂いながら凄まじい速度で両手の剣を振るう。怒り狂いながらもゾーグのその剣は超一流の剣客が振るう剣捌きそのものだった。

しかしそれでも剣心と銀時はその剣の嵐を受け続けていた。

ゾーグが剣を降るたび氷上が砕け、暴風が荒れ狂う。

二人はそんな剣の嵐の中にいた。

―思い出せ―

剣の嵐をかわし続ける。

―忌まわしき記憶を―

ゾーグの攻撃を木刀やレヴァンティン、逆刃刀で捌く。

―生き残るために―

傷口から血が出る。

―大切な物を護るために―

止まることの無いゾーグの攻撃。

―魂を狩る夜叉となれ―

ゾーグの剣は当たってはいる。しかしどの一撃も致命傷には至らない。

電光石火、瞬間移動の如く神速の速さで、３人は大竜巻のように剣をぶつけ合っている。

魔導師のランクで言えば完全なるＳＳ＋級ランク……いや間違いなくそれ以上と言える恐ろしい戦いだった。ＳＳＳ級かそれ以上に達している事はまず間違いない

常人の目では何が起こっているのかさえも分からないほどの激しい戦いだった。

ゾーグ（こ…こやつ等…ワシの剣を受け流し続けているだと…！？）

ゾーグは内心焦っていた。
如何考えても攻めているのは自分の筈、それなのにまるで自分が押されているかのようだった。
銀時と剣心は巧みに両手の剣を操り、大剣を捌き、防ぎ、かわす。
しかし唯交わしているわけではない。ゾーグの凄まじい破壊力の剣をなるべく力をいれず受け流す要領で受けていた。そのおかげで二人は吹き飛ばされることもなくゾーグの剣を受けていることが出来るのである。

ゾーグ「グォオオオオ！！！」

自分の攻撃が当たらないイラつきから、ゾーグは雄叫びを上げる。
ゾーグの大剣の嵐を、銀時と剣心は二本の剣で捌く。

ゾーグ「グォオオオオ！！『魔人三日月斬』！！！！！」

――――ドゴオ！ドゴオ！ドゴオ！ドゴオ！ドゴオオオー！！――――

ゾーグは怒り狂いながら巨大な三日月の波動を連射し始めた。
二人は瞬動術で距離を取りその巨大な波動をも交わし続けた。

ゾーグ「己ぇ！なら、これはどうだ！！」

ゾーグは両手の大剣を構えるとそれを高速で振り回し、その後銀時と剣心に向けて構えると、足元から黒い魔法陣が現れる。
そして回りから大量に精製された黒い魔力刀が次々と現れ、その数は１００００本以上は作られる。

銀時「なッ、何だこりゃあ！？」
剣心「なんと言う数だ…！！」

剣心と銀時はさすがにこれには驚いた。ゾーグのこの魔法はクロノの『スティンガーブレイド・エクスキューションシフト』に似ているが、ゾーグのは威力も数も最低でも１００倍以上はある。ＳＳＳランククラスのとんでもない大魔法である。

ゾーグ「今度こそ終わりだ！『ダークネス・エクスキューショナーソードマキシマム』！！」

ゾーグは剣を掲げると夥しい数の黒い魔力刀が雨のように放たれ、二人に襲い掛かった。

剣心「銀時！俺の後方に！」
銀時「お前…あれ使う気か！？ボロボロなのに大丈夫かよ！？」
剣心「そんな事を言っている場合じゃない！早くしろ！！」
銀時「ッたく！わぁったよ！」

剣心の後ろに銀時がついた。しかしそれはくっついているわけではなくある程度離れていた。
そして剣心はその場で高速で回転を始めた。
すると周りに竜巻のような風が生まれ、それが上空に上がっていった。その竜巻には螺旋の様な風の刃が纏われていた。

ゾーグ「ん？何だあれは！？」

ゾーグはその光景を見て驚き声を上げた。

剣心「飛天御剣流：気龍閃奥義！『空刃（くうば）・満月（まんげつ）』！！」

剣心の作り出した螺旋の刃の巨大竜巻はゾーグの放った黒い魔力刃

を全て切り裂いた。

ゾーグ「なっ…なんだとぉオオオオオ！！！！！」

ゾーグは驚きの余り悲痛の叫びを上げた。あれだけの大量の魔力刃までもが防がれたのだから無理もない

上空で戦いの様子を見守っている、フェイト、シグナム、リインフォースは驚愕を隠せなかった。

しかし、シャナとヤミだけはその光景を黙って見つめていた。

フェイト『凄い…！』

フェイトは今まで、何度か剣心の戦いを見てきた。

だが今の剣心、そして銀時の強さは、今までのモノとは別物だった。

余りにも桁違い、自分達とは全く次元が違った。

正直何が起こっているのかも良く分からないほどのとんでもない戦いである。

フェイト「あんな剣心…初めて見る」

剣心と銀時の戦いを見て驚いたのは、一体何度目だろう。
するとシグナムが、ぽつりと呟いた。

シグナム「紅夜叉と白夜叉…」
フェイト『え？』

フェイトはシグナムのその言葉に思わず顔を向けた。

シグナム「知らないのかテスタロッサ？剣心と銀時はかつて譲夷戦争という戦で戦い、数多くの強大な敵を倒し、敵味方から恐れられた武神なのだ」

シグナムから聞かされ、初めてなのはとフェイトは剣心と銀時の過去を知った。

シグナム「その時に呼ばれた名が『紅夜叉』と『白夜叉』だ」

シグナムは、ジッと剣心と銀時の動きを見つめた。
自分達とは全く違う強さ。

シグナム「あのゾーグはどうひっくり返っても私達の太刀打ちできる相手ではない。だが…あそこにいる二人の“夜叉”にあの怪物は押され始めている」

シグナムは意味深にその光景を見つめた。

ゾーグ「グォオオオ！！」

ゾーグは叫び声と共に巨大な大剣を二人に向かって振り下ろした。
その剣を銀時は木刀とレヴァンティン、剣心は逆刃刀と木刀で受け止める

ゾーグ「潰れろ！潰れてしまえぇぇぇぇ！！」
剣心「ぐうぅぅぅぅぅ！！」
銀時「ぬうぉおおおお！！」

二人は歯を食いしばって必死に耐える。氷上に大きな亀裂が走り、砕ける。
大きな音を立ててめり込んでいく。
凄まじい衝撃波が起こる。
ゾーグはさらに力を込める。
その凄まじい力は間違いなく夜王・宝仙と同じ或いはそれ以上でもある。
それでも二人はなおも耐えていた。

ゾーグ「なぜだ……！？なぜ倒れんのダァアアアア！！！！？？？？」
剣心「当たり前だ…」
ゾーグ「なに！？」
銀時「テメェには俺達にはない物がある」
ゾーグ「わしにない物だと？」

銀時が右手の親指を立て、フェイト達がいる方向を指す。

銀時「護り護られる」

剣心「大事な物がな」

自分を信じる大切な仲間を指差しながら剣心と銀時がそう言った。

ゾーグ「ほざけ虫けらがアァァァァ！！」

ゾーグは怒り狂い再び剣を振り回してきた。

ヤミ「あれは、極限の命のやりとりの中で」

剣撃の嵐の中、銀時と剣心は剣を振るう。

シャナ「身体の奥底に眠る、戦いの記憶が甦ったのよ」

ゾーグ「死ねぇ！！」

ゾーグは魔力で大剣を巨大化させ、更に大きくなった二本の大剣を神速の速さで振るう。

だが、目の前から銀時と剣心の姿が消えた。

ゾーグ「なッ！？どこへ！？」

銀時と剣心の姿を見失ったゾーグは、慌てて辺りを見回す。

そして、背後にある気配に気付いた。

二人はゾーグが振るった大剣の上に乗っていた。

ゾーグの大剣の上にいる剣心と銀時は、まさに夜叉のような恐怖を与える眼でゾーグを睨みながら、剣を構えていた。

ゾーグ「グゥゥ！！」

ゾーグはとっさに背中に生えているワニの頭を二人のいる方向に向けて魔砲を撃とうとしたが次の瞬間、銀時の剣は振り抜かれ、ゾーマの背中から生えている二体のワニの頭のような物を斬り落とした。
そして、剣心は軽く飛び上がり、龍槌閃の一撃を思い切り食らわせた。
その技を食らった、ゾーグは思わず足元をよろめかせた。
そしてゾーグは再び怒りの咆哮を上げた。

ゾーグ「グオオオッ！！！！」

ゾーグは今度は二本の大剣をレヴァンティンのように連結刃に変形させ二人を襲わせる。巨大な大蛇（オロチ）のように動く変幻自在に動き、スピードまで速いその剣でさえ二人はその攻撃を全て紙一重でかわしゾーグに超速の動きで攻撃を当てる。

ゾーグ「ヌグウウゥ！！」

ゾーグは再び連結刃を操作して二人に向かわせる。
その攻撃を剣心は飛んでかわした。
そして剣心はいきなり鞘に逆刃刀を納めた。

ゾーグ（ん？刀を納めた！？何の真似だ！？）

ゾーグは剣心の行動によく分からないという考えを抱きながらも警戒をした。
しかし剣心はそんなゾーグの考えなどお構いなしに技を繰り出す。

剣心「飛天御剣流！」

ゾーグ「！？」

剣心「飛龍閃！！」

剣心は体を捻って遠心力をつけると、自分の間合いにいるゾーグ目掛けて鞘に収まっていた逆刃刀を弾き飛ばし、それを見ていたゾーグやシグナム達の面々は開いた口がふさがらなかった。

ゾーグ（！？体を捻って鞘に納刀した状態から刀を飛ばしただと！！）

ゾーグは飛んで来た剣心の飛龍閃を咄嗟に連結刃を操作して吹き飛ばす。

ゾーグ（ふん！こんなこけおどしの技など…！）

吹き飛んだ逆刃刀は空中を舞った。しかし剣心は足に気の力を込めると空中を蹴って逆刃刀の方向へと高速移動をした。

ゾーグ「な！？」

剣心のこの技の発動にゾーグは驚きを隠せなかった。

もちろんそれは空中で戦いを見物していたフェイト達も同じだった。

フェイト「剣心が…空中を蹴って高速移動をした！？」

シグナム「あの技は一体！？」

シャナ「あれは“虚空瞬動”よ」

『“虚空瞬動”？』

シャナの言葉にフェイト達3人は首を傾げた。

ヤミ「空中にまるで地面があるかのように足をつけ、それからそれを気の力で一気に踏み抜いて高速の早さで空中を移動する高等瞬動術。それが“虚空瞬動”です」

ヤミが三人にそう説明した。

シグナム「そんな事が…人間に出来るのか！？」

シャナ「実際に剣心がやっている、あれが証拠」

シャナはそう言った。

そういわれてはフェイト達3人はもう納得するしかなかった。

ゾーグ「ヌウ…小ざかしい技を…」

ゾーグは空中で逆刃刀を掴んだ剣心を見つめながらこう呟いた。

その時である。

？？？「おい」

ゾーグ「！！」

突如ゾーグの下から声がした。

ゾーグが下を向くとそこには木刀を構えていた銀時がいた。

銀時「俺を無視してんじゃねぇよ！！」

ドゴォ！！

ゾーグ「グアッ！」

ゾーグは思いっきり木刀を振りぬいた銀時の一撃をまともに食らっ

て後ろへと吹き飛ばされた。

ゾーグ「己！」

ゾーグは連結刃を瞬時に戻して銀時に斬りかかろうとしたが

剣心「飛天御剣流！」
ゾーグ「ヌッ！？」
剣心「龍槌閃！！」

空中から剣心が龍槌閃を繰り出してきたのだ。銀時に集中が言っていた、ゾーグは一瞬反応が遅れまともに龍槌閃を食らってしまった。

ゾーグ「グオアッ！」

まともに食らってしまったゾーグは思わずその場に膝を着いてしまった。
フェイトとリインフォース、シグナムは目を見開いて驚愕した。もう剣心と銀時の動きから、目を離せない。

シグナム・リィンフォース・シグナム
『あれが、紅夜叉と白夜叉…！！』

ゾーグ（なッ……何故だ……）

ゾーグは驚愕していた。

目の前にいる二人の夜叉の強さに

ゾーグ（こやつらはとうの昔にボロボロの瀕死の状態……なのに何故立ち上がってこれる!?その上…ワシの攻撃まで見切り始めてきている…!!如何なっておるのだ!?）

その瞬間ゾーグは体を僅かに振るわせた。ゾーグは始めて戦いという物に恐怖し始めていたのだ。

ゾーグ（このワシが…この魔人王ゾーグがこんな奴らに……こんなボロボロの連中に押され始めている?ありえん……ありえん!!）

ワシが押される事など絶対にありえん。
ましてや人間如きに・・・
ワシより強いのは我が主である“あのお方”ただ一人
こんな連中に…こんな虫けら共に…このワシが…押されるなど!

ゾーグ「あっていい筈がないーーーーー!!!!!」

――――ドゴオオオオオオオーーー!!!!!――――

ゾーグは叫び声と共に衝撃波を放ち銀時と剣心の二人を吹き飛ばしたしかし、二人は飛ばされて倒されながらもすぐに再び起き上がってきた。

ゾーグ「己ぇ…!!」

ゾーグは憎しみの声を上げる。

ゾーグ「何度潰そうと…立ち上がる…!うっとぅしい虫ケラ共が!

！」

ゾーグが剣を強く握る。
銀時はニタァといつもの憎たらしい笑みを浮かべる。
剣心は真面目な顔をしている

ゾーグ「ゴミが！今の貴様らの力など……燃え尽きる前の灯火に過ぎん！！」

剣心と銀時を指差してゾーグが怒鳴る。

ゾーグ「強大なる存在であるこのワシが…魔人王たるワシが……貴様ら人間如きに負ける筈がないのだ！！」

ゾーグがそう叫ぶと銀時は不敵に笑った。

銀時「言ったなゾーグ」
ゾーグ「何？」
銀時「倒される前のラスボスってのは、そういうセリフを吐くんだよ。どっかのゲームみたいにな」

ゾーグを指差しながら銀時がそう言う。

銀時「お前今、敗北フラグが立ったぜ」

不敵な笑みでそう言った。
ちなみにこの銀時の言葉に剣心は

剣心（こんなときまでゲームの話しかこ奴は…）

と呆れていた。

ゾーグ「黙れ！！」

そしてゾーグは銀時の言葉に激怒する。

ゾーグ「その減らず口を今すぐ黙らせてくれる！！」

その直後、ゾーグに異変が起こった。
眼が光り、体の筋肉が盛り上がり、禍々しい黒い魔力が体から溢れ出る。
魔力に当てられ、氷上に大きな亀裂が入る。

クロノ「な…何だ！？」
ユーノ「あれは一体！？」

怪物達を倒し終えたクロノ達が、振り返ってゾーグを見た。

その頃、モニターでその戦いの様子を見ていたエイミィは

エイミィ「な…なんなの…この出鱈目な魔力…」

魔力計を見てエイミィは震え上がっていた。ゾーグの禍々しい魔力がどんどん上がっている。ＳＳＳランクを軽く超えている。下手をすれば測定不能のＥＸにまで及ぶ程に

エイミィ「本当に…こんな奴に勝てるの？こんな化け物に…」
リンディ「…信じましょう」
エイミィ「艦長！？」
リンディ「信じるしかないわ…あの二人を…私達が出来る事は祈る

事だけよ」
エイミィ「はい…」
リンディの言葉にエイミィは頷いた。
大声と共にゾーグの体が一回り大きくなった。両手の大剣が砕け、
その魔力がゾーグに吸収された
ゾーグの口から涎が垂れる。
ゾーグ「グ…ゴ…ォ……！」
大きく口を開く。
ゾーグ「グゴォオオオオオオオ！！！！」
空に向かって禍々しい咆哮を上げる。
咆哮だけで剣心と銀時に凄まじい衝撃が伝わり暴風が荒れ狂う。衝
撃と共に、今まで以上に禍々しい危険な感じが伝わってきた。
ユーノ「な…何だこのデタラメで禍々しい魔力は！？」
青ざめた表情でユーノが言った。
リィンフォース
「……ゾーグは、体に負担が掛からないように、普段は魔力を抑え
ています。そして今、その抑えていた魔力を解放したのです」
リインフォースが顔を青くさせ震えながらそう言った。
はやて「そんな…まだ強くなるってこと！？」

シャナ「嘘…さっきまでも信じられないぐらい強かったのに…」
ヤミ「私達も出来る限りの事をしましょう！」
ヤミがそう言うとその場にいるみんなも頷いた。

ゾーグは禍々しいまでの凄まじい殺気を放ちながら剣心と銀時の二人を睨み付ける。
そしてゾーグは右腕を構えるとその場で振った。

銀時「ん？」
剣心「何をやって…！！」

ゾーグが振った右腕から凄まじい暴風が吹き荒れた。その勢いに銀時と剣心は体制を崩した。

剣心「素振りだけで…この威力か…」
銀時「野郎…！ついにフルパワーになりやがってことか…！！」

剣心と銀時は苦虫を噛んだ様な顔をする
この力は明らかに夜王を超えかねない力を出している。それほどまでに今のゾーグは強い魔力のオーラを放っていた。

ゾーグ「このワシが…貴様ら如きにフルパワーを出さねばならんとはな…正直驚いたわ、力をここまで上げるとワシの体にもかなり負担が掛かるから使いたくはなかったが……だが、今度こそ終わりにしてくれる！！纏めて消えろォ！！！！」

ゾーグはそう言うと体中から魔獣の頭のような物を生やして桁違いの威力のある黒い閃光を所かまわず発射し始めた。
一発一発がなのはのディバインバスターを遥かに超える威力を放っていた。
もはや碌に狙いをつける気もなさそうである。
その閃光は、上空にいるフェイト達にも迫った。宙を移動して、なんとか閃光を避けた。

アルフ「あ…アイツ！無茶苦茶に攻撃し始めたよ！」
シャマル「強大な魔力を解放した事で、理性が吹き飛んだんだわ！」
閃光を放つゾーマを見て、アルフとシャマルが言った。

ヤミ「いいえ…違います…」
シグナム「え？」
ヤミ「奴は私達の方向にも魔砲を放ってきている…私達も消そうとしているのは間違いない…」
シャナ「そりゃそうだろうけど…」
ヤミ「奴は力を解放しても理性を残せる…そうですよねリィンフォース」
リィンフォース「はい…しかもあの状態になったゾーグの強さは先ほどよりも遥かに上です…」
はやて「そ…そんな…」
フェイト「剣心！！」

心配そうな表情で、フェイトは剣心の名前を叫んだ。

閃光を打ち終えたゾーグは二人を睨み付けた。

ゾーグ「ワシの真の恐ろしさを思い知るがいい！！」

ゾーグはそう言うと氷上に手を突っ込んだ。

ゾーグ「ヌウウン！！」

バキバキバキィ！！

ゾーグは掛け声と共に氷上を持ち上げた。

剣心「な…なんと…」
銀時「おいおいおい…」

銀時と剣心はその光景を見て思わず顔を青くした。
ゾーグはまるで小さな島とも呼べるような氷塊を持ち上げていたのだ。

ゾーグ「潰れろ！！！！！！」

ブンッ！！

ゾーグはそう言うと凄い勢いで二人に目掛けて氷塊をブン投げてきた。

剣心「まずい！！」
銀時「やべっ！！」

二人は急いで回避しようとするが

ゾーグ「そうは行かんぞ！！」

ゾーグは体から触手のような物を伸ばして二人を捕まえた。

剣心「なっ！？」
銀時「なんだこりゃ！！」

二人がそう叫んでいる間にも氷塊は二人の頭上に迫る

ゾーグ「これで終わりだぁ！！」

ゾーグは勝利を確信したのかその言葉を叫んだ。

その時である

フェイト「雷光一閃！！プラズマザンバー……」

はやて「響け終焉の笛、ラグナロク……」

「「ブレイカー！！！！！！！！！！」」

シャナ『火龍炎撃波！！』

フェイト、はやてがその氷塊に向かって最強魔法を放ったのだ。

そしてシャナも巨大な火炎龍の炎砲を放った

――――ズドオオオオオオオーーーッ！！！！！！！――――

氷塊は音を立てて崩れ去った。

ゾーグ「グッ！己、魔導師どもが！！」

ゾーグは自分の邪魔をしたシャナ、フェイト、はやての3人を睨み付けた。

ゾーグ「雑魚だと思って放って置いてやっておれば余計な真似を！！こうなれば先に始末してくれる！！」

ゾーグはそう言い飛び上がろうとしたが

グンッ！

ゾーグ「ヌ！？」

何かがゾーグを引っ張った。それは触手を握っていた剣心と銀時である

剣心「貴様の相手は俺達だ」
銀時「俺達を無視して行こうとしてんじゃねえよ！！」

銀時と剣心はゾーグを睨みつけながらそう叫んだ。

ゾーグ「やはり…貴様らから先に始末せねばならんようだなぁ！！！」

ゾーグはそう叫ぶと両腕をゴムのように伸ばして二人に向かって魔力の拳を放つ。

銀時「オイィィィ！！今度は『ル○ィ』の技かアァァァ！！？」

銀時がなんか叫んだけど無視
銀時と剣心は横に跳んでかわし、拳は氷上に突き刺さる。ゾーグは伸縮性を利用して腕を縮め、そのまま銀時と剣心の所に迫って同時に蹴りを放つ。剣心と銀時は両手のオーラ刀で防ぐ。防御の上から吹き飛ばされ、氷上に倒れる。
ゾーグが走って迫ってくる。

ゾーグ「ガアアアアアア！！！」

雄叫びを上げ、拳を振り下ろす。
銀時と剣心は起き上がって、木刀とレヴァンティンと逆刃刀を頭上に構え防御する。
気のオーラを全快にして防御力を極限まで上げる。
拳は剣に当たり、体中に衝撃が走る。

ゾーグ「死ね！」

また拳を振り下ろす。

ゾーグ「死ね死ね！」

凄まじく重い拳カドリングの様に、銀時と剣心に向かって上空から振り下ろす。

ゾーグ「死ね！！虫けらがぁーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

何発も何発も拳を振り下ろす。

拳が当たる度に、剣心と銀時の足は氷上にめり込んでいく。

拳は氷上にも当たって巨大なクレータが出来上がっていく。
氷上が破壊されていく。
このままこんな拳を受け続けていたら、体が持たない。
銀時と剣心は必死で剣を振るいなんとか拳を弾いて、ゾーグから離れた。

ゾーグ「ゴォオオオオ！！！」

ゾーグの叫び声と共に、剣心と銀時の周りに無数の黒い魔力弾が出現した。

ゾーグ「バァアアアアア！！！」

ゾーマの声を合図に、無数の魔力弾が銀時に襲い掛かる。
銀時と剣心は二本の剣を振るって魔力弾を弾く。弾けない魔力弾は、体を捻ってかわす。
だが、やはり数が多く、何発か銀時と剣心の体に当たってしまう。

銀時「ぐあっ！！」
剣心「ぬあっ！！」

傷つきながらも、銀時と剣心は剣を振るって魔力弾を弾く、斬る。
なんとか、全ての魔力弾の攻撃を耐え切った。
直後、銀時と剣心は危険を察知して前を見た。
ゾーグが口に魔力を溜めている。最初に撃った、海も吹っ飛ばす魔砲だ。

ゾーグ「消えてなくなれ！！！冥府魔砲（ハデス・ブレイカー）！！！！！！」

ズドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオーーーーーーーーーーーーー！！
！！！！！！！

ゾーグは自身の最強最大の一撃、黒い大魔砲、冥府魔砲（ハデス・ブレイカー）を放った。
その桁違いに巨大な魔砲は剣心と銀時に迫り、数十キロ先まで飛び、
全てを吹き飛ばすほどの大爆発を起こした。
ゾーグは大爆発が起きた場所を見つめた。

ゾーグ「グオオオオオオオオオオオオ！！！」

ゾーグは両手を上げ、勝利の雄叫びを上げた。
その時、

？？？「デケー大砲も…」

声が聞こえた。
ゾーグの動きがピタリと止まる。

ゾーグ「ヌ！？」
？？？「当たらなければ意味がないな」

下から声が聞こえる。
ゾーグはゆっくりと、下を向いた。
そこには服をボロボロにし、肩や頭から血を流し、剣を構えている銀時と剣心の姿があった。
ギリギリで魔砲を避けて、ゾーグの所まで走ってきたのだ。

ゾーグ「バ…バカな…ワシの…最大の…砲撃を……」

ゾーグは自分の目を疑った。

ゾーグ「グ……ガアァァァァァァァ！！！！」

動揺しながらも、剣心と銀時目掛けて右拳を振り下ろす。

銀時はレヴァンティンを振り抜いた。

次の瞬間、ゾーグの右腕は宙を舞い、ドサッと音を立てて氷上に落ちた。

ゾーグ「グギャァアアアア！！！己…己ぇーーーーーー！！！！！」

ゾーグは右腕を押さえながら、悲鳴と憎しみの声を上げた。

銀時「うぉおおおおおお！！！！」

剣心「はぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

銀時は、ゾーグの顔目掛けて木刀を振る。

顔に木刀が当たり、重い打撃音が響いた。また木刀を振るう。剣心も次々と飛天御剣流の剣技を神速の速さで振るう。

嵐のような刀の連撃が、ゾーグを襲う。

――反撃する暇を与えるな！息さえさせるな！――

木刀と逆刃刀を振るい続ける。

ゾーグは剣撃を受け続ける。殴られる度に意識が失いそうになる。

――攻撃の手を休めるな！動きを止めるな！――

力の限り、体が動く限り二人は刀を振るい続ける。

――もうこれ以上戦う体力は残っていない！これで終わりにするんだ！――

ゾーグは残った左腕で、なんとか防御しようとする。
だが片腕だけでは、剣心と銀時の刀による剣撃の嵐は防ぎ切れない。
剣撃の嵐は、ゾーグの左腕を弾いた。
そして二人は勝負に出た。
木刀と逆刃刀を水平に構え、

銀時「おおおおおおお！！！」
剣心「はあぁぁぁぁぁぁ！！！」

叫び声を上げながら、ゾーグの腹に気のオーラを全快にさせた銀時の木刀の突きと剣心の龍巻閃を放った。

ドゴオォォォ！！

ゾーグ「ゴファッ！！」

攻撃をまともに食らったゾーグは、口から紫色の血を吐いた。
遂に決着の時が近づいてきた。

第六十二訓　魂を刈る夜叉となれ（後書き）

支配者「次回はいよいよ決着！」

銀時「ゾーグとの決戦も終了だな」

支配者「はい、では次回もお楽しみに！」

第六十三訓　腐れ外道は徹底的にぶっ潰せ（前書き）

支配者「ついに今回でゾーグとの決戦も終わりです」

銀時「長かったな」

支配者「そして、ついにファイナの正体が判明します」

銀時「エッ！？アイツの正体！？」

剣心「リリカル剣魂スペシャル始まるでござるよ」

第六十三訓　腐れ外道は徹底的にぶっ潰せ

セイバー「はあっ！」

ズバアッ！

怪物「ギャアアアッ！！」

セイバーが最後の怪物を切り裂いた。
街の方でも、怪物達は全滅した。

新八「みんな大丈夫ですか？」

肩で息をしながら、新八が皆に聞いた。

桂「ああ。大丈夫だ新八君」
エリザベス『全然平気だぜ！』
雪路「平気、平気」
セイバー「私がこれ位で疲れるはずないでしょう」

桂とエリザベスと雪路とセイバーがそう答えた。
本当に四人とも平気そうである。
隣のビルの屋上では、神楽が定春に抱き付いている。
ナギとハヤテも元気そうである。
屋上の端に移動して、下にいる九兵衛達の様子を見た。
九兵衛とヒナギクと東城も他の皆もほとんど無傷だった。お妙と薫とアリサとすずかの四人も皆無事だった。
みんなが無事で、新八は安心した。空の方を見ると、フェイト達も怪物達を倒し終えたみたいだ。

残るはゾーグ唯一人。

新八（銀さん、剣さん）

新八は海に出来ている氷の陸を見つめた。

大丈夫。きっと銀さんと剣さんなら勝ってくれる。

新八はそう信じた。

銀時と剣心の放った木刀と逆刃刀の超速の突きが、ゾーマの腹に突き刺さる。

ゾーグ「この程度…痛くも痒くもないわあぁぁぁぁぁぁ！！！」

しかし、顔を空に向けながら、ゾーグは叫んだ。
すると右腕の斬り口から、大量の血が噴き出た。
直後、新たな腕が生えて再生した。

剣心（なっ！？）
銀時（こいつ！腕を元に戻しやがった！？）

ゾーグの再生能力に、銀時と剣心は驚いた。

ゾーグ「吹き飛べえい！！」

ゾーグは両手に力を込めると銀時と剣心の二人を吹き飛ばした
吹き飛ばされた二人は何とか氷上に着地した。

銀時（あの野郎…）
剣心（追撃してくるか！？）

しかしゾーグはその場にじっとしていた。

銀時・剣心（！？）

銀時と剣心の二人はその場にじっとしているゾーグを見て首を傾げた。
あのままの勢いならすぐにでも再び攻撃を仕掛けてくる思っていたのにじっとしているのだから

ゾーグ（己ぇ…たった二人の人間相手にワシがここまで追い詰められるとは何たる失態……！！）

ゾーグは心の中でそんな風に思っていた。ゾーグは立った二人の人間相手にここまで追い詰められている事を情けなく思っていた。

ゾーグ（たった二人の人間相手にこの様……このままでは“あのお方”に顔向けができぬ…！！）
？？？（ゾーグ聞こえる？）
ゾーグ（こっ、この声はべ…ベイ）
ファイナ（今の私はファイナよ。そう呼びなさい）
ゾーグ（は…はい。ファイナ様）

突如ゾーグの心の中に誰かが話しかけてきた。ファイナである。ゾーグはとっさに
本当の名を呼ぼうとしたがファイナに止められた。

ゾーグ（申し訳ございません…こんな虫けら二人を未だに始末出来ぬとは……）
ファイナ（まあまあ落ち着きなさい。心の広いパパがそれ位の事で怒るわけないでしょ？）
ゾーグ（し…しかし……）
ファイナ（だから落ち着きなさいってば、落ち着いて掛かればあんたならそれくらいの相手簡単に始末できるはずよ。憤怒してかからそんな相手に翻弄されてんのよ）
ゾーグ（は…はぁ…）
ファイナ（ほら深呼吸）
ゾーグ「すぅーはぁー」

ファイナに念話でそう言われゾーグは深呼吸を始めた。

銀時「な…何だ?深呼吸を始めやがった!?」

剣心（何を考えている…!?）

銀時と剣心はゾーグの突然の行動に首を傾げた。

剣心「だがとにかく…」

銀時「じっとしてる今がチャンスだな!!」

剣心と銀時は瞬動術で一気に近づき神速で剣を振るった。

しかし、ゾーグは二人の気配を読み軽く動いて二人の攻撃をかわした。

ゾーグ（なるほどな…ファイナ様の言うとおりよ）

ゾーグは心の中でファイナの助言を聞いて冷静さを取り戻したのか二人の連撃を簡単にかわしていた。

剣心（こ奴…ここに来て……!!）

銀時（急に動きが良くなりやがった……!!）

剣心と銀時はここに来てゾーグの動きが急に良くなった事に驚いたがそれでかまわず二人は攻撃を続ける。

ゾーグ「次はワシの番だな」

ゾーグはそう言うと両手に巨大な魔力弾を作り出し二人に向かって投げつけた。

二人は瞬動を使って後ろへと避けるが爆発した時の爆風の余りの威

力に飛ばされる。

ドオォォォーン！！

銀時「ぐあっ！」

剣心「ぬあっ！」

二人は氷上に倒れた。

ゾーグはそれを黙って見つめた後声を発した。

ゾーグ「ククク…さすがにもう息も絶え絶えだな……」

剣心「はあ…はあ……」

銀時「くそっ…たれが……！」

剣心と銀時はゾーグを睨む。

ゾーグ「お前達は良く戦ったが…これまでだな……そうだ…冥土の土産に面白い技を披露してやろうか」

ゾーグはそう言うと右手にありったけの魔力を込め始めた。

ゾーグ「グオオオオ……！！」

剣心（な…何だ…！？）

銀時（何を…しやがる気だ…！？）

魔力を溜め終わったゾーグはその場から高く飛び上がった。

ゾーグ「受けよ！“魔人王激衝”！！」

ゾーグが地面に向かってはなったその一撃はとてつもない威力で衝

撃だけで剣心と銀時の二人を吹き飛ばした。

銀時・剣心『うわあぁぁぁぁ！！』

二人は吹き飛ばされた後ゾーグがいる方向を見た。
するとゾーグを中心に半径４ｋｍ以上の超巨大なクレーターが出来上がっていた。

剣心「な…！？」
銀時「う、嘘だろ……」
ゾーグ「どうだ？これがワシの真の力だ。もはやおまえ達に勝ち目がないのは明白だ」

ゾーグが拳を握り締めてそう呟く。
まさに常軌を逸した強さだ。
ゾーグの強さはもはや夜王すらも明らかに上回っていた
あんな物まともに食らえば五体がバラバラになってしまう。

銀時「ちっ、冗談じゃねぇ！」
剣心「ここで…果てるわけにはいかぬのだ！」

殺される訳にはいかない。
銀時はそう決して飛び上がり木刀を振るう。
剣心も瞬動で後ろに回りこみ龍巻閃を打ち込む。
だが、

ゾーグ「無駄だ！」

ゾーグは二人の攻撃を受け止めてしまった。
そして投げ飛ばす。

そして、その後でゾーグは背中から十以上もの魔獣の頭のような物を出して二人に向けて次々と魔砲を放った。

ズドオォォォン！！

爆発が晴れた後二人は全身血まみれのボロボロになって倒れていた。

ゾーグ「勝負あり、だな…」

ゾーグはその様子をにやけながら見つめた。

その頃、フェイト達は上空でその様子を見つめていた。

フェイト「そ…そんな…剣心が……」

二人がゾーグにボロボロにされているのを見てフェイトの顔が真っ青になった。

シグナム「クッ…」

シグナムも悔しくて唇をかみ締めていた。

怪物達を掃討するのに最早全員が相当な魔力と体力を消耗していた。

それに先ほど二人を助けたときの砲撃でもう魔力は残っていない。

飛んでいるだけで精一杯なのだ。

リィンフォース（やはり…無理なのですか……ゾーグを倒す事など……）

リィンフォースもさすがに諦めムードに入っていた。

やはりゾーグは強すぎる。

あの二人の力でもどうしようもないのか

リィンフォース「銀時…剣心…！！」

ヤミ「大丈夫ですよ。リィンフォース」

リィンフォース「え？」

ヤミの言葉にリィンフォースは思わずヤミの方に顔を向けた。

ヤミ「あの二人の本当の強さはまだまだこれからです」

ヤミはそう言って氷上に視線を向けた。

ゾーグ「まあ、ワシを相手にここまで良くがんばった。褒めてやろう」

氷上に倒れている銀時と剣心の二人を見つめてゾーグはそう言った。

ゾーグ「だが、やはり最後に勝つのはこのワシであったな」

ゾーグは二人を見つめる

ゾーグ「まあ、久しぶりにワシも本気になれて楽しかったぞ。褒美だ。死体位は残しておいてやろう」

ゾーグはそう言って後ろを向いて歩き出した。

しかし、その時何かの気配を感じたのかゾーグは剣心と銀時の倒れている方向に目を向けた。

ゾーグ「いい加減にしろ…。勝ち目がないと言うのがまだ分からんのか…？」

ゾーグが後ろを向くと剣心と銀時の二人はズタボロの体で立ち上がって来ていたのである。

銀時「勝ち目があるとかないとか…んなもん俺達にとってはどうでも言い事何だよ…」

剣心「そうだ…。お前に拙者達の大切な物を奪わせるわけには行かないんだ…」

ゾーグ「ふん…あんなゴミ共の事など考えるだけ無駄だ…。大人しくして置けば楽に死ねるものをどうあっても苦しんで死にたいらし

いな…」

ゾーグはそう言って再び大剣を魔法陣から呼び出し二人に近づいていく。
しかしその時である。後ろに攻撃の気配を感じたのは

ゾーグ「ヌオッ！」

ゾーグは思わず剣を後ろに振りぬいた。
しかしそこには何もない。

ゾーグ（何だ今のは？奴らが何かしたのか？）

ゾーグは剣心と銀時のほうに顔を向ける。
しかしその場に二人は武器をもって構えているだけだった。

ゾーグ（気のせいか…？）

ゾーグは再び二人に向かって行こうとしたが
そこにまたしても大量の剣が現れゾーグに襲い掛かった。

ゾーグ「グオオッ！？なっ、なんだこれは！？」

ゾーグは驚いて自分に襲い掛かる剣撃を全て斬りおとす。
その時

銀時「けっ…、やっと出せるようになってきたかよ…。剣の修行なんてもう随分碌にやってねーからコツを戻すのに苦労したぜ…」
ゾーグ「なにぃ！？貴様！一体何をした！？」
銀時「ケッ！テメェの目で確かめやがれ！！」

銀時は走ってゾーグに向かってレヴァンティンを振り下ろす。

ゾーグ「バカめが！そんな見え見えの攻撃が通用するか！！」

ゾーグはそう言ってレヴァンティンを受け止めようとしたが

ズバアアアア！！

ゾーグ「ヌオッ！？」

またしても大量の剣撃がゾーグを取り囲んだ

ゾーグ「ヌオアアアアア！！」

ゾーグは驚いて大剣を振り回し剣戟を全て消し去る

だが銀時の攻撃の対処が遅れてダメージを受けてしまう。

ゾーグ「グアアッ！な…何だ…今のはあぁぁぁ！！」

ゾーグは訳も分からず叫び続ける。

ゾーグ「回を重ねるごとに気配が増えていきよる……一体何だこれは！？」

するとその時剣心が口を開いた。

剣心「今のは“闘刃”でござるよ」

ゾーグ「“闘刃”！？何だそれは！？」

ゾーグは剣心の言葉を聞いて驚く
因みに上空で見ていたシグナム達も驚いていた。

フェイト「な…何？」
シグナム「何だ、今のは一体？」
シャナ「だぶんあれは…“闘刃”よ」
『“闘刃”？』

皆はシャナのその言葉に首を傾げた。

ヤミ「“闘刃”と言うのは剣の道を極めた者が極限状態に追い詰められたとき研ぎ澄まされた闘争本能が幻の刃を生み出すものだと昔剣心に聴いたことがあります。幻の刃だから実態はありませんが気配はあるんです。目で見てみるより先に気配を察知する達人であればあるほどその“闘刃”に惑わされ本物の剣を見失ってしまう物だと聞いています」
フェイト「達人であればあるほど…」
シグナム「惑わされる…か…」
ヤミ「はい」

そしてゾーグも剣心から闘刃についての話を聞いた。

ゾーグ「ふん、つまりは唯の残像か」
剣心「そう言うことでござる」
ゾーグ「何故ワシに話した?黙っておればよい物を」
剣心「黙っていたところでお前ほどの実力者ならすぐに気付くでござろう。それに“闘刃”は所詮は幻、攻撃技ではない」
ゾーグ「ほう…、よく分かっておるではないか。まあ、何をしたところでワシに勝てる筈がないがな」

ゾーグはそう言う。
しかし二人は一緒になってこんな話をしていた。

剣心（銀時。あの技今も撃てるでござるか?）
銀時（ああ…何とかな……）
剣心（では、拙者が何とか隙を作る。奴もかなり弱っているはずだ）
銀時（大丈夫かよお前）

剣心（心配はいらぬ。と言うよりもう他に方法はないでござろう）

剣心はそう言う。

銀時（ちッ、わーったよ。絶対死ぬんじゃねーぞ）

剣心（それはこっちの台詞でござるよ）

剣心はそう言ってゾーグに向かって目にも留まらぬ速さでゾーグの懐に突っ込んでいった。

ゾーグ（ヌッ、こやつ、まだこれほどの速さで動けたのか！）

ゾーグは懐に飛び込んできた剣心を見るなりすぐさま左腕を振り上げ叩き潰そうとしてきた。

ゾーグ「くたばれ！！」

剣心「ヌアアアッ！！」

剣心もそんなゾーグの左腕の関節に狙いを定めると、逆刃刀を突き上げて飛天御剣流の技を発動する。

剣心「飛天御剣流、龍昇閃！」

剣心が龍昇閃を発動すると、ゾーグの右腕は激しく浮き上がり、ものの見事に関節破壊されゾーグは激痛に襲われ喚き声を上げる。

ゾーグ「グアアアアアッ！」

そして剣心は休む間も無くゾーグの背後に回りこみ次々と飛天御剣流の技を炸裂させる。

剣心「飛天御剣流、龍巻閃！！」

龍巻閃が連撃がゾーグの脇腹に叩き込まれ更に苦しみの声を上げるゾーグ

ゾーグ「グアアアアッ！調子に乗るな虫けらぁ！！」

ゾーグはその直後すばやく後ろを向いて魔砲を放った。
しかし、その魔砲を剣心はすばやく逆刃刀で切り裂いた。

ゾーグ（バ…バカな！この至近距離でワシの魔砲を…そんなバカな……！！）

俄かには信じ難い光景を見て唯々驚くゾーグ。

剣心「最初に比べれば随分と魔砲とやらの威力も落ちているでござるな。さっきの技で力を使いすぎたんでござろう」

ゾーグ「ほざけ！！」

ゾーグは剣を振り下ろす。
剣心はその剣をなんとか受け止める。

ゾーグは剣を振るう。
剣心は体を捻り逆刃刀を器用に高速旋回させてゾーグの剣を受け流し、逸らしていく。
剣心の見事な剣術にゾーグは再び焦りを見せ始める。

ゾーグ（刀を旋回させて風の盾を使って受け流しているのか！？グウウッ！これほどの動きがまだ出来るというのか！？こやつ疲れ知

らんのか！？）
剣心「そんな物は知らんでござる！」
ゾーグ（心読んだ！？）

ゾーグは剣心に心を読まれた事にかなり驚いた。
そして剣心が激しく動く事によって氷上の砕けていた氷もさらに細かく砕けていく。

ゾーグ（ここに来て奴の剣気も上がっているか…！！）

ゾーグは再び苦虫を噛んだ様な顔を見せる。

剣心「飛天御剣流！『龍翔閃』！！」
ゾーグ「グアッ！」

剣心は刀の峰から放たれる龍翔閃で再びゾーグの顎を打ち上げる。
その一撃にゾーグは足をふらつかせる。

ゾーグ「己ぇ！！」

ゾーグは再び憤怒して剣心に走って向かっていく。

剣心「龍巻閃・『凩』！」

龍巻閃の派生技である凩をゾーグの首筋にぶつけ、その直後に更に一撃。

剣心「龍巻閃・『旋』！！」

そして、最後に空中高く飛び上がり、刀を手前に構え前方宙返りに

よりゾーグの身体を叩きつける。

剣心「龍巻閃・『『嵐』！！！」

ゾーグ「グハアッ！」

ゾーグは目にも止まらぬ怒涛の三連撃をもろに体に食らうと、その場に倒れこんだ。

ゾーグ「虫けらがあっ！！」

ゾーグはすぐに起き上がると怒り狂って剣心に向かっていく

剣心は再びゾーグと剣を合わせる。

しかし、ゾーグの力は相変わらずで剣心の力ではゾーグの剣を受けきれず氷上に飛ばされる。

ゾーグ「死ねぇ！」

ゾーグはその場で大剣を振り下ろし剣の衝撃波を発生させる。

剣心は素早く体を起こして衝撃波を交わす。

ゾーグ「ザコがぁ！いつまでも調子に乗るな！」

ゾーグは再び剣を振り下ろす

剣心は神速の速さで飛天御剣流の技を放つ。

剣心「次はこの技でござる」

そう言うと剣心はその瞬間自分の神速と瞬動術の突発力を最大限に利用してゾーグの視界から消えた。

ゾーグ「なッ！？」

ゾーグは思わず急いで剣心の気配を探った。
だが、気配を追おうとした矢先、ユーノの身体、剣術における斬撃の基本である「唐竹（からたけ）、もしくは切り落ろし」「袈裟斬り（けさぎり）」「右薙（みぎなぎ）、もしくは胴（どう）」「右切上（みぎきりあげ）」「逆風（さかかぜ）」「左切上（ひだりきりあげ）」「左薙（ひだりなぎ）、もしくは逆胴（ぎゃくどう）」「逆袈裟（ぎゃくげさ）」「刺突（さしとつ）」の場所一度に剣心の剣技が仕掛けられた。

剣心「飛天御剣流『九頭龍閃』！」

ゾーグは一瞬の出来事に微動だにすることも出来ず、九つの場所に同時且つ一撃必殺を秘めたその剣技を狂った途端、口から反吐を出してその場に倒れこんだ。

ゾーグ「がはっ…！！」

剣心はゾーグを昏倒させるとすぐさま次の技の準備をする。

剣心「お前のような奴を相手に加減をするつもりはない」
ゾーグ「己！死ね！！」

ゾーグは渾身の力を持って大剣を振り下ろす。
剣心は逆刃刀を逆手に持つと氷上に突き刺しすぐさま両手で握り返す。
すると氷上が光る。

ゾーグ「ヌアッ！」

ゾーグはその光に思わず目を眩ませる。

その隙に剣心が龍翔閃の強化型ともいえる『九頭龍閃』並みの大技を放つ。

剣心「飛天御剣流『爆龍翔閃』！！」

『爆龍翔閃』とは刀身に溜めた剣の気をいったん地面に集め龍翔閃の様に斬り上げると同時に一気に爆発させ相手を上空に吹き飛ばす大技である。その凄まじい爆風を浴びながらその太刀を交わせる物などまずいないのだ。

ゾーグ「グアアアアッ！！」

その余りの威力にゾーグは悲鳴を上げながら上空に吹き飛ばされ氷上に落下する。
しかし、再びゾーグは立ち上がってくる。

剣心「お前も本当にしつこいでござるな…」
ゾーグ「己ぇ……！！」

ゾーグは再び憎しみの声をあげる。
その時剣心がゾーグに向かって話し掛ける。

剣心「ゾーグ」
ゾーグ「あ？」
剣心「拙者ばかり気にして良いのでござるか？」
ゾーグ「何？そういえばあのちり毛男がかかってこんな？」

ゾーグはそう言って思わず銀時を探した。
その時上空から銀時の怒鳴り声が聞こえてきた。

銀時「ちり毛じゃねぇ！！天パだこのヤロー！！」
ゾーグ「何！？」

ゾーグは急いで上を見た。
すると銀時がレヴァンティンと木刀を振りかざしてゾーグに向かって振りかざそうとしていた。
しかもレヴァンティンと木刀はすさまじい光を放っていた。

銀時「食らいやがれぇ！！」
ゾーグ「ヌオオッ！！」

ゾーグは思わず剣を構えて銀時の攻撃を防御する。
しかし

ズドオォォォォォォォォォン！！！！！！！！！！！！！

ゾーグ「グオアアアアアアッ！！なっ何だこの凄まじいパワーは！！？」

その太刀はとてつもないパワーでゾーグの剣をたたき折った。

ゾーグ「バッ、バカな！ワシの剣を！？」
銀時「それだけですむと思ってんのか？」
ゾーグ「なっ！？」

なんと銀時の放った光る両手の立ちはそのままゾーグの両腕を引き千切るかのように斬り落とし、ゾーグを吹き飛ばしそのまま氷上にとてつもなく巨大なクレーターを作った。

ゾーグ「ギャアアアアアーッ！！」

ゾーグは余りの痛みに悶絶しそのまま銀時が太刀を振り下ろした場所を見て絶句した。

ゾーグ（バッ、バカな…！あれが人間の力だと…！）

因みに上空にいたフェイト達も見て唯驚いていた。

フェイト「な…何？今の…！？」

シグナム「なんと言う凄まじい威力の太刀だ…！！」

リィンフォース「ですが、今の銀時の攻撃…斬ったと言うより押し潰したというような感じが…」

シャナ「その通り」

全（ヤミ以外）『え？』

皆の視線がシャナに集まる。

シャナ「あれは銀時がみなぎる全身の気の力を剣の切っ先に集中し気の結界を張り、出来た空間に何万tもの重力を発生させその巨大なパワーの塊を叩き付けたのよ」

シグナム「バ、バカな！？そんな事人間に出来るわけが！」

ヤミ「ああ見えても銀時は心・技・体を極める修行を剣心と一緒にやっていましたからね。あれを完璧に極めれば銀時のほどの力量を持ってすれば不可能ではありません」

ヤミはシグナム達にそう説明する。

フェイト「ま、まさかそこまで凄いなんて…」

シグナム「ああ…」

リィンフォース「はい」

ゾーグは銀時の攻撃を受けて仰向けになって倒れていた。
しかし、怒号の叫びを上げて再び立ち上がる
ゾーグ「ゴオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」
ゾーグは腕を再び再生させ銀時と剣心に血走った瞳を浴びせる
銀時「ま、まだ立ちあがんのかよ！」
剣心「タフすぎるでござるな…」
銀時と剣心はあれだけやってもまだ倒れないでいるゾーグの耐久力に恐れを通り越して呆れていた。
ゾーグ「ハァ、ハァ、ハァ……貴様らあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！殺す…殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！！！！！！！」

ゾーグは先ほどの攻撃で完全に理性をが吹っ飛び、唯目の前の剣心と銀時を殺すことに頭がいっぱいになった。

銀時「駄目だ。完全に正気を失いやがった」

剣心「そのようでござるな…」

そしてゾーグは怒り狂ってそこら中に向かって魔力弾や魔砲を放ち始めた。

ゾーグ「死ねぇ……死ねえぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！」

ズドォン！ズドォン！ズドオォォォォォォォン！！！！！！！

銀時「クズ野郎が…いい加減にしやがれえぇぇぇぇぇぇ！！」

魔力の砲撃が放たれた瞬間、銀時はそう言うと再び全身の気の力をレヴァンティンに集め目にも止まらぬ速さでゾーグの懐に飛び込んだ。

『！！』

攻撃を行ったゾーグを離れた場所で剣心達を見ていたフェイト達目を疑う中、ゾーグは懐に飛び込んできた銀時を見るなり

ゾーグ「潰れろオォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！！！！！！」

左腕をドリルの様に回転させた一撃を食らわせた。

一同はそれを見た瞬間、一瞬身の毛が凍った。

シグナム「なッ、腕が回転した!?」
フェイト「銀時!」
はやて「銀ちゃん!!」

高速回転する腕によるドリルのような攻撃がヒットすると、銀時は土煙と共に姿を消してしまう。

『…!!』

フェイト達は目の前で姿を隠し、一瞬やられてしまったのではないかと言う思いから涙を浮かべてしまい、ゾーグ本人も手ごたえを感じ不敵な笑みを浮かべる。

ゾーグ「ふん…ん!?」

と、その時ゾーグは手に違和感を感じ、煙の中の光景をじっと見ていたシャナは涙目のフェイト達に言う。

シャナ「ばか。なに涙目浮かべてんの?よく見る」

シャナに言われ、フェイト達が晴れていく土煙の中の様子を窺うと、目に映ってきたのは意外な光景だった。

『あ!』
ゾーグ「な…!!」

フェイト達やゾーグ、シャナ達が目撃したのは高速回転する腕の薄い皮の間にレヴァンティンの刃の部分を突き立て、咄嗟に衝撃を最小限のものに抑え込んだ銀時の姿だった。

ゾーグ（な！あんな状態でワシの一撃を抑え込んだ…そんな…バカな…！！）

またしても俄かには信じがたい光景に唖然とするゾーグ。
そんなゾーグに向かって鋭い夜叉のような瞳を宿した銀時はこう言う。

銀時「血の味も碌に知らねぇ…命を奪うことの重さも知らねぇ、そんなテメェになんぞ俺達の大切な物を奪われてたまるか！！」
ゾーグ「黙れぇ！！」

ゾーグは再び攻撃を仕掛けてこようとするが、銀時は軽く動いて交わした後、一瞬でゾーグの腕をレヴァンティンで再び切り裂き、ゾーグの体をも切り裂いた。

ゾーグ「グガアアアアアアーッ！！まッ、またしてもワシの腕をーッ！！」
銀時「どうだ…。どういう気分か分かるかよ……」
ゾーグ「！！」

銀時はそう言いながらゾーグに近づくと、吹き飛んだ左腕にレヴァンティンの切っ先を突き刺し、鬼のような形相を浮かべて言う。

銀時「少しは味わえただろ…“殺される側の気分”って奴がよ……！！」
ゾーグ「グッ…うああ……」

ゾーグは初めて恐怖したのか思わずその場に尻餅をついてしまった。

ゾーグ（な…なんなのだ……こやつ等は……）

銀時、そして剣心は一歩一歩と恐怖を与える夜叉の瞳でゾーグを睨み付けながら近づいていく。ゾーグは恐怖に耐えられなくなったのか心の中でこう叫び始めた。

ゾーグ「あ…あああ（何なんだ…何なんだ奴らは一体……！！止めろ！…来るな！来るな来るな来るな来るな来るな！！！！！！）来るなあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！」

ゾーグは恐怖しながら背中から魔獣の頭を大量に出して魔砲を剣心と銀時向かって放ち始めた。

剣心「一度恐怖と痛みを味わってみるといい。さすれば自他共々の命の重さ、十二分にかみしめられる。その大きな図体に今ここで拙者の逆刃の一刀をお見舞いする！」

魔力の砲撃が放たれた瞬間、剣心は目にも止まらぬ速さでゾーグの懐に飛び込み左足を軸足にして抜刀術の構えを見せる。

シャナ「剣心！」
ヤミ「まさか！」
『！！』

攻撃を行ったゾーグを離れた場所で剣心達を見ていたフェイト達目を疑う中、ゾーグは懐に飛び込んできた剣心を見るなり

ゾーグ「潰れろオォォォォォォォォォォォォォォォ！！『魔人王撃衝』！！！！！！！」

ゾーグは先ほどの数キロメートルにも及ぶクレーターを作り出した

自身の最強の一撃である拳『魔人王撃衝』を放った。
しかし、剣心の抜刀術のほうがはるかに早く剣心は最強の一撃を放つ

剣心「飛天御剣流最大奥義！！」
ゾーグ「！！」

その瞬間、彼らの眼では全くと言っていいほど視認することの出来ぬ究極の超神速の斬撃が放たれ、ゾーグは体中を引き裂かれながら空中へと高く飛び上がる。これこそが完全不敗を誇る飛天御剣流の最大の奥義

剣心「天翔龍閃（あまかけるりゅうのひらめき）！！！！」い
ゾーグ「ギアアアアアアアアアアー！！」

ゾーグはその巨体からは信じられないほど高く飛び上がった。

ゾーグ（体が…引き千切られる！！）

ゾーグは天翔龍閃（あまかけるりゅうのひらめき）の余りの威力に意識を失いそうになりながらもそう思った。

ゾーグ（ワシが…このワシが死んでたまるか！！）

ゾーグはボロボロの体でも何とか再び氷上に着地しようとするが

剣心「拙者としてこれで許してやりたい所だが…」
ゾーグ「！！」
剣心「奴はお前を許すつもりはないらしい」

剣心が指を上空に向けてそう言った。

ゾーグはとっさに上を見た。
すると銀時はゾーグに向かってレヴァンティンを振り下ろそうとしていた。
その光景を見てゾーグは一気に絶望の表情を浮かべる

銀時「うおおお！」
ゾーグ「あ…あああ……」
銀時「貫けえぇぇぇぇぇ！！！！」
ゾーグ「止めろおおおおおおおお！！！！！！！！」

ドスウッ！！

その時鈍い音が表情全体に響きわたった。
銀時がレヴァンティンを使ってゾーグの喉元を貫いたのだ。

銀時「これで…」
ゾーグ「ガ…ガボッ…！」
銀時「シメーだアァァァ！！！！！！！！」

ズバアッ！！

銀時は喉元から下に向けて力を入れてゾーグの体を真っ二つに斬り裂いた。

ゾーグ（バ…バカな…このワシが人間如きに…負ける…など……）

ゾーグは意識を失い死ぬ瞬間最後にこんな事を思っていた。

ゾーグ（ワシが…ワシが…こんな…所で……お許しを……ダ…ク…ワ……さ……ま……）

ゾーグは最後に心の中で誰かに詫びを入れて氷上に落ちて絶命した。

銀時（はあっ…はあっ…クソッ…タレ…）

剣心（もう…限界…か……）

すでに力を使い果たしていた二人は事切れたように氷上にそのまま倒れた。

フェイト「剣心！！」

シグナム「銀時！！」

はやて「銀ちゃん！剣ちゃん！」

フェイト達が倒れた銀時と剣心の元へと急いで駆けつける。

ヤミ「心配ありません。どうやら二人共気絶しているだけです」

シャナ「でもこのまま放っておいたら不味い」

シグナム「急いでシャマルの元へと連れて行こう」

フェイト「はい！」

フェイト達がそう言って飛び上がろうとした瞬間リィンフォースは息絶えているゾーグを見つめていた。

リィンフォース（本当に…本当に……あのゾーグを倒してしまうなんて……）

リィンフォースは未だに信じられないという顔をしてゾーグの死体を見つめていた。

はやて「リィンフォース！何しとるんや！早く行くで！！」

リィンフォース「は、はい！主はやて！！」

リィンフォースははやてに言われて急いで飛び上がった。

リィンフォース（ありがとう…剣心、銀時…これで私は…闇から開放された……）

最後に二人にお礼を言いながら

そしてはるか離れた氷上の上空でファイナ戦いの結果を眺めていた。

ファイナ「あ～あ、ゲームオーバーか…」

ファイナが戦いの結果を見て詰まらなそうにそう呟いた。

ファイナ「まさか…マジでやられちゃうなんて…でも、まッ、イッか」

ファイナはその様子を『まッ、イッか』で済ませてしまった。

ファイナ「念の為にゾーグの細胞は採取して回収しておいたし…ジュエルシードも手に入ったし『プロジェクトF』のデータも手に入れておいたし…何よりも最大の目的だった。『アルハザード』の居場所も分かった事だしね」

ファイナが懐から取り出したゾーグの血が入ったカプセルを見つめながらそう言った時である。

???『姫様』

ファイナ「ん?アラ、『ゴア』じゃない。何でこんな所に?」

ファイナはそう言うと後ろにいる機械球のような存在に向かってそう言った。

ゴア「姫様、陛下が今すぐ戻るようにと」
ファイナ「パパが？ええ、分かったわ」
ゴア「姫様。ゾーグは？姿が見えませぬが？」
ファイナ「殺されちゃったわ」
ゴア「！！なっ、何ですと！！」

ゴアは信じられない言葉をファイナから聞かされて絶叫した。

ゴア「バ…バカな…いかに奴が我らの中では“相当弱い方”とは言え陛下の側近の一人である奴がこの世界の魔導師如きに敗れたと！？」
ファイナ「違うわ。ゾーグをやったのは侍よ」
ゴア「侍？地球にいたという前時代の異物の事ですか？」
ファイナ「そうよ。とは言えさすがの私も驚いたわ。まさか本当にゾーグがやられるなんて思わなかったもの」
ゴア「これは少々由々しき事態なのでは？まさか奴を倒せる物がこの世界にいたなどとは…」
ファイナ「あいつらは私達の世界からやってきた連中よ。アンタもジュドからの報告でそう聞いてるでしょ？」
ゴア「確かにそうですが…ゾーグが敗れる等とは……」
ファイナ「もういいわ。この話はおしまい。パパが呼んでるんでしょ？いいから帰るわよ。あ～あ、いい加減このダッサイ姿にも飽きちゃったわ」

ファイナはそう言うと怪しい光に包まれると姿が変わった。サキュバスのような姿ではなく、赤と白の帽子をかぶり長いピンク色の髪にドレスを着た猫のようなの鋭い目をした人間型の姿になった。

？？？「さっ。帰るわよゴア」
ゴア「かしこまりました姫様。いえ…“暗黒皇女ベイルファード”

様」

ベイルファード「その名前で呼ばれるのもなんか久しぶりね～。ふふふ♪」

ファイナ…いや…ベイルファードはそう言うとゴアと共に闇の中へと消えて行った。

おまけ

銀八「教えて」

生徒全員

『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『真王』さんから「ジャンヌ「キャァ～怖～い（わざとらしい）」」

真王「相手さんに喧嘩売ってる様な態度すんな」

ジャンヌ「まぁ食う食われるはどうでもいいとして、出来ればあいつの舌とかアレとかで私のアソコを弄り尽くす方が…」

真王「黙れマゾ野郎…。『ゾーグは好きな食べ物あるか？』『ファイナは恋愛物って好きか？』『悪役組はスポーツで得意なのは？』の3本だ」

ジャンヌ「それじゃあまったね～」はいと言うわけでお答えどうぞ」

ゾーグ「ふん、腹の立つ小娘だ。ワシが好きなのは人肉だ。頭からバリボリ行くのがすきだな」

銀八「オイィィィィ！！何気色の悪いこと言ってんだあぁぁぁぁ！！」

ゾーグ「やかましいわ！何を言ってもワシの勝手だ！！」

銀八「へいへい、じゃあ次はファイナさ～ん。お答えお願いしまッす」

ファイナ「は～い。恋愛物ねぇ～ドロドロとした三角関係とか四角関係の話とかなら好きね」

銀時「正確悪いな…お前……」

ファイナ「うるさいわね」

銀八「んじゃ次だな答えてくれ」

悪役組『スポーツなんてやったこと無いから分からん。』

ジハード「筋トレとかならしてるけどな」

ドラドス「ああ」

ザンダガ「私はやってませんけどね」

銀八「だそうです。魔人族は筋トレとかするんですな…。てな訳で『真王』さん廊下に立ってなさい」

剣心「次の質問でござる。ペンネーム『ケン』さんから「統夜「銀さん達リンカーコアが無い人達に質問だ。もしリンカーコアがありデバイスが使えたら使ってみたいデバイスをこの中から選んでください」

1. フォーチュンエターナル
2. クリムゾンフレイム
3. アストラルフリーダム
4. ラピスブレイブ
5. サーディオン
6. ペンドラゴブレイド

バトンを渡しましたのでよろしくお願いします。」と言う訳で皆さんお答えください」

銀時「まあ…やっぱ主人公が一番良く使ってるデバイスじゃねぇか

？主人公の一番の相棒を使うって言うのが主人公っぽいし」
剣心「別に拙者は興味がないでござる。危険でござるからな」
桂「俺も興味がない。強い力を持ちすぎると慢心で心がゆがんでしまうだろうからな」
エリザベス『同じく』
雪路「私も」
ナギ「私で使える簡単な奴なら使ってもいいぞ」
ハヤテ「お嬢様を護る力が手に入る何でもいいですよ」
ヴィルヘルミナ「同じく」
セイバー「私はペンドラゴンブレイドでしょうか」
シャナ「私も」
ヤミ「私は興味がありません」
神楽「私は『クリムゾムフレイム』が言いアル！なんか名前がかっこいいし」
新八「『アストラルフリーダム』がなんか使いやすそうですね」
セト「僕は大剣型の『サーディオン』だな」
イヴ「僕もそれで」
ブレイド「俺も黒い大剣だってんなら『サーディオン』がいいな」
ソルヴァ「私は特には」
箒「私は『ペンドラゴンブレイド』かな…」
ラウラ「私もそれかもな」
綾子「私は『ラピスブレイブ』かしら」
護「僕は特には…」
源外「俺は別に何でも言い」
ララ「私も」
ナナ「あたしも」
モモ「私も別にこれといったものは…」
セツナ「私は早く動いて攻撃するタイプだし、別にアーマーも剣もいらないわよ」
未央「未央はアーマータイプなら欲しいかも」

梔『疲れるから興味なし』
残りの人達『以下同文』

銀八「はい、と言うわけです。デバイスを誰もが使いたいわけではありませんので、と言う訳で『ケン』さん廊下に立ってなさい」

なのは「次の質問です。ペンネーム『黒神』さんから「質問

銀さんへ

最近、ジャンプでの『銀魂』が徐々に人気上がっています。
その感想をどうか一言。

眼鏡(しんはち)へ

斉藤は貴方のことを侍の恥であると言いましたが、原因は貴方のオタク活動だと言います。
だから侍として自覚する為に、オタク卒業したほうが良いと思いますが・・・

神楽へ

僕の小説では、今は新八は出てきませんが次のシリアスでは新八は出てきます。
出来ればもっと早く出して欲しいですか?」それではお答えお願いします」

銀時「人気上がってんのかそりゃ嬉しいよな。読者のみなさ～ん。これからも応援よろしく～」

銀八「じゃあ、次新八君どうぞ」
新八「あの～僕の紹介文眼鏡になってるんですけど…」
神楽「めがね以外に何にもないくせに何言ってるあるか、さっさと答えるアル眼鏡」
新八「いい加減にしろよ！僕には眼鏡しかないのかー！！ああ、質問に答えですね。そんなこと言ってもお通ちゃんは僕の命なんですよ！お通ちゃんファンを辞めるつもりはありませんよ！！アニメを見るのは辞めるのはともかく！」

銀八「あっそ、んじゃ次、神楽ね」
神楽「はいアル。新八の出番なんて永遠になくていいね。あんなオタメガネ邪魔なだけアル」
新八「ちょっとおー！神楽ちゃん、なんてこと言うの！」
銀時「まあ、確かに今更ぱっちぃん何ていらねえよな。ツッコミもティアとヴィータがいるし」
神楽「そうアル」
新八「オイィィィー！！銀魂のツッコミって言ったら僕だろうがー！！僕の存在を否定すんなー！！！！」

銀八「はい、相変わらずうるさい眼鏡ですね。てなわけで『黒神』さん廊下に立ってなさい。次の質問行くぞー。ペンネーム『？？？』さんから…って何だこれ？」

銀八はとりあえず質問文を読み始めた。

銀八「何々…『銀八先生と言う人に質問。自分の名前が何故か思い出せません。一つだけ覚えているとしたら、和服を着ていて物凄く

怖い形相した女性だけが覚えていました。誰か僕の名前を教えてください。』って記憶消されてるー！！」

銀八はおもいっきりさけんだ。

銀時「オイィィィー！こいつお妙に記憶消されんてんじゃねーかー！！」

新八「ってかなにやってんですか姉上！！何質問者の記憶消してんですかー！！」

お妙「え～？何の話かしら？」

お妙はごまかした

銀時「なにごまかしてんだテメェー！！」

新八「『黄色いのなにか』さん！貴方はたぶん『黄色いのなにか』さんですから！！本名は知りませんけどあなたは『黄色いのなにか』さんですから！！」

銀八「と言う訳で『黄色いのなにか』さんしっかりしろー！！…んじゃ次の質問行くぞー」

神楽「切り替え早いアルな」

銀八「うるせぇな。こういうのは個々の切り替えが大事なんだよ。と言う訳で読むぞー。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから「剣心に質問。
僕の小説では、左之助と斎藤の出番が多いです。
感想は？

左之助
「おい、この質問、2度目じゃね？」

虎龍
「いや～、全く『教えて銀八先生』に出てなかったから。」

左之助
「何だそりゃ・・・・」

銀時と御坂に質問。
僕の小説の第一部の主人公である上条の活躍はどうでしたか？
感想を。

銀時に質問。
僕の小説の第二部では、『テイルズオブヴェスペリア』のユーリ・ローウェルが主人公です。
感想は？」

剣心「そうでござるな。別に拙者は出番とかには執着せんでござるよ」
銀時「まッ、剣心ならそうだよな。ちなみ結局俺は第二部でも主人公にはなれねーんだな…それなのになんで『万事屋奇譚幕』題名何だよ…当麻の活躍も多くてムカつくし…」
美琴「そうねぇ～因みにあいつの活躍ね。まあ、カッコ…いいんじゃない？」
新八「何で疑問系なんですか？」
美琴「何でもいいでしょ別に」
銀時「ツンデレだな」
神楽「ツンデレアルな」
美琴「違う！！」

ツンデレ扱いされて美琴がキレた。

銀八「はい、これが皆さんの答えです。と言う訳で『亀鳥虎龍』さん。銀さんの活躍も少しは上げてください」
フェイト「次が最後の質問です。ペンネーム『匿名希望』さんから「質問です
この小説の全キャラへ
このキャラクターに勝てますか？
名前　ハオ（麻倉葉王）
登場作品　シャーマンキング
持ち霊　グレートスピリッツ（GS）
基本的な能力
・GSとの融合でハオ自身が宇宙の節理であり全ての魂の還る場所になってる
・巫力でつくったオーバーソウル以外の攻撃は一切効かない
・魂を吸い取ることが可能
・ブラックホールを発生させられる
・つーか死亡という概念がない

皆さん、勝てますか？（黒笑）」って勝てるかあぁぁぁぁ！！！」

銀時「何でハオ！？つーかなんでハオ！？」

新八「勝てるわけないでしょうが！と言うか実際上のステータス見たら無敵と一緒じゃん！葉さん達でもいないと勝てませんよ！」

支配者「そうですよね。オーバーソウルなんて誰も使えませんし、戦闘狂のシグナム当たりは戦いたいとか言うかもしれませんけど、誰も勝てませんよ」

銀八「はい、つまりは誰もこんな奴には勝てないと言う事です。と言う訳で「匿名希望」さん。廊下に立ってなさい

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第六十三訓　腐れ外道は徹底的にぶっ潰せ（後書き）

支配者「次回はいよいよA，S編最終回！そしてついに”真の黒幕の正体も判明し、いよいよ最終章へと入る準備となります」

剣心「最終章は新しく始めるんでござったな」

支配者「はい」

銀時「どんな話になるんだ？」

支配者「黒神さんの小説をベースとしたかなりの長編ストーリーにしてみたいと思っています。はい」

神楽「なるほどアル」

支配者「どうかご期待ください。因みにA，S編終了後はギャグ多目の日常編を予定しています。では次回もお楽しみに」

第六十四訓　アームストロングって結局なんだろう（前書き）

支配者「今回でA、S編はおしまいです。そして最後に重大発表があります」

剣心「重大発表？」

銀時「何だよ一体？」

支配者「最後まで見れば分かりますよ。そしてついに真の黒幕が姿を現します」

なのは「リリカル剣魂スペシャル始まります」

第六十四訓　アームストロングって結局なんだろう

銀時と剣心は意識を取り戻した。
ゆっくりと瞼を開けて、目を覚ました。目に入ったのは白い天井だった。
まだ少し意識がぼやけてる。頭を触ると、包帯が巻かれてある。
と言うか全身包帯まみれである。
当たり前だ。あんなとんでもない強さの化け物と戦ってきたのだからまあ、その割には痛みはあまりなかった。
もう、動き回っても平気なくらいである。
治療してくれたシャマル辺りの腕がよかったんだろうか
銀時と剣心は上半身を起こした。すると小さな寝息が聞こえてきた。
寝息のする方を見ると、フェイトとなのはとヴィータ、アルフがベッドの隣で寝ていた。その後ろには、椅子に座って寝ている新八と神楽、シャナ、セイバーもいた。
銀時と剣心は壁の方を見た。
そこには、壁に寄り掛かって、腕を組んだまま寝ているシグナムとリインフォースがいた。
ゾーグとの激戦の後、倒れた銀時と剣心はアースラの医務室に運ばれた。
フェイト達は、銀時と剣心が起きるまで付き添うと言い出したのだ。
銀時はぼりぽりと頭を掻いた。
剣心も腕を組んだ。
たくっ、テメーらも疲れてるくせに。
まあ、嬉しくはあるでござるがな。
それでも、悪い気はしなかった。

銀時「オーイ。起きろテメーら」

銀時は少し大きめの声を出した。

剣心「風邪を引くでござるよ」

剣心も声を発した。

フェイト達は、眠い目を擦りながら体を起こした。
重い瞼を開けて、起きている銀時と剣心を見た。

なのは「銀さん！！」
フェイト「剣心！！」

なのはとフェイトが声を上げた。
その声で、他の皆の眠気が吹っ飛んだ。

ヴィータ「銀時、剣心！起きたのか！？」
アルフ「剣心！良かったぁ！目が覚めたんだね！」

ヴィータが銀時にアルフが剣心に、飛び付いた。

銀時「が…！！バッカお前！ヴィータ！！俺達、怪我人だぞ！イダダダダッ！！」
剣心「痛いでござるよ！アルフ殿！！」

二人に抱き付かれ、傷が痛んで銀時と剣心は顔を歪めた。

新八「アルフさん！ダメですよ！また剣さん意識失っちゃいますよ！！」
シグナム「ヴィータ止せ！銀時の傷に触るだろ！！」
薫「コラァ！！銀時はともかく剣心になれなれしく抱きついてんじ

ゃないわよこの犬が！！」
銀時「オイィィィ！！俺はともかくってどういう意味だゴラァ！！」

新八とシグナムと薫が、アルフとヴィータを銀時と剣心から引き離した。
そして薫の言葉に銀時がツッコンだ。

すると、医務室の扉が開かれ、はやてとナギとヤミが入ってきた。

はやて「二人共目ぇ覚めたんやな！元気そうで、良かったわ」
ナギ「だからコイツラなら心配ないと言っただろう。コイツラ殺したって死ぬような奴らじゃないんだよ」
ヤミ「まあ、そうですよね。とにかく元気そうで良かったですよ」

ナギとはやてとヤミが銀時と剣心に近寄る。ちなみに、はやては車椅子に乗っている。
因みにヤミが車椅子を引いているのだ。

銀時「よぉ。お前らも元気そうだな」
剣心「怪我はなかったでござるか？」
はやて「はい！」
ナギ「当たり前だ。この三千院ナギの辞書に敗北の二文字はない」
ヤミ「あれ位で怪我なんかしませんよ」

三人は笑顔で、元気よく応えた。
ふと銀時と剣心は、車椅子に乗ってるはやての足を見た。

銀時「はやて。足は大丈夫なのか？」
はやて「うん。侵食はなくなったから、リハビリをすれば歩けるようになるって」

銀時「そうか」
剣心「良かったでござるな八神殿」
はやて「うん。それにナギさんがもっといい病院に入れてくれるって言いはったんやけど断ったわ」
ナギ「断る必要などないと言ったんだがな」
はやての言葉に銀時と剣心は安心した。
シグナム「剣心、銀時。体の方は大丈夫なのか？」
心配していたのかシグナムが聞いてきた。
銀時「ああ。まぁまだ結構痛むが、大したことねーよ」
剣心「なんとか大丈夫でござるよ」
シグナム「そうか…。まあ、無理もないな…相手がそれほどまでに強かったのだからな」
シグナムはとりあえず安心して微笑んだ。
銀時「そういや、あの後ゾーグはどうなったんだ？」
剣心「そう言えばそうでござるな」
銀時が尋ねた。
シグナム「ああ…実はな」
そしてシグナムがあの後の出来事を語りだした。
あの後、ゾーグの死体はアースラに回収された。本局に着いたら焼却処分される事が決まったらしい。
管理局に利用されるような事にならなければいいが……まあ、死ん

でるんだから大丈夫だろう。
はやてやリインフォース、シグナム達守護騎士は、管理局の保護観察を受ける事になった。
リインフォースの中にあった防衛プログラムは、元々ゾーグを封印するために作られた物なので、ゾーグがいなくなった今、防衛プログラムを作る意味はなくなり、二度とあのような事は起こらないそうだ。
ナギの場合はリィンフォースがはやての元からいなくなるのは避けられないと思っていたので安堵した。リィンフォースは消えなくてもすんでいるのだ。ナギが知る限りの理由でははやてを助ける為にリィンフォースは消滅しなければいけなかった。しかしこの世界の夜天の書はゾーグを封印する為の封印の魔導書であった為にそんな必要はないとの事だ。
そしてファイナ達魔人族は、ＳＳＳランクの超危険次元犯罪者集団として指名手配されたらしい。
結局あの後見失ってしまったらしいが

銀時「まっ、言いやな」

と、銀時はまとめた。

剣心「…良いんでござろうかなぁ……これで」

剣心は軽く溜息をついた。

銀時「そんじゃ行くかな」

銀時がベッドから起き上がった。

新八「え?行くってどこに?」

新八が尋ねた。

銀時「決まってんだろ。管理局の連中から報酬ガッポリもらうんだよ」

剣心・新八・ナギ
『金とんのかよ!!』

邪悪な笑みを浮かべる銀時に、剣心、新八とナギはツッコんだ。

銀時「当たり前だろうーが、こちとらあんな化け物と殺りあったんだぞ。報酬もらわなきゃ割りにあわねーだろうが」

銀時はそう言って外に出て行った

クロノはリンディに報告を済ませ、部屋を出た。
廊下にはシャマルがいた。

シャマル「あの～…本当にいいんですか?私達を逮捕しなくて?」

シャマルがクロノに尋ねた。

クロノ「ああ。幸い死者は出ていないし、君達も悪意があってやっていた訳じゃないからね。それに彼女を助ける為には他に方法もなかったんだし」

歩きながらクロノが答えた。
ふとクロノの表情が暗くなった。

クロノ「それに…正直また彼らと討論したくないし……」
シャマル「え？」

シャマルは首を傾げた。
クロノは、プレシアを弁護した銀時と剣心の姿を思い出していた。
彼らの無茶苦茶な弁護は、時空管理局の検事にも誰にも崩す事は出来ない。特に銀時の憎たらしい顔が思い浮かぶ。
クロノはため息をついた。

クロノ（あいつのあの顔は二度と見たくない……）

クロノはまたまた深い溜息をついた。
シャマルは首を傾げるばかりだった。

銀時と剣心は医務室のベッドで横になっている。
銀時は『管理局からガッポリ報酬いただくぞ作戦』をやろうとしたのだが、

セイバー「銀時。時空管理局の払うお金は多分私達の世界では使えないと思いますよ」
銀時「イイーッ！！マジでか！？」

というセイバーの言葉で、銀時は報酬ゲットを断念した。
時空管理局が払う通貨と銀時達の世界のお金は違うから、報酬を受け取っても意味がない。

銀時「ちくしょ～…せっかく大金が手に入ると思ってたのによぉ～」
と落ち込む銀時。
仕方ないので今度はナギに金をせびったのだが
ナギ「なんで代わりに私が払わないかんのだ。調子に乗るなこのチリ毛」
とあっさり断られてしまった。
因みにセトやソルヴァも銀時と同じ事を企んでいたらしく銀時の時と同じ事を聞かされて唯落ち込んでいた。
そんな銀時達を見て剣心やヤミは呆れるばかりだった。
すると医務室の扉が開かれ、リインフォースが入ってきた。
リィンフォース「剣心、銀時」
銀時「ん？」
剣心「おろ？」
銀時と剣心は体を起こして、リインフォースに顔を向けた。
リィンフォース「その…今回は、貴方達には世話になりました」
顔を軽く赤らめ、少し恥ずかしがりながら、リインフォースがそう言った。

今回の事で二人には本当に感謝している。本当ならお礼の言葉位では足りないのだが他にどうしていいのかリィンフォースには分からないのでとりあえず御礼を言ったのである。

リィンフォース「ありがとう」

微笑みなから、銀時と剣心に礼を言った。
その微笑みを見て、銀時と剣心も笑い返した。
報酬は手に入らなかったが、見たかったモノは見れた。

銀時「いい顔するじゃねーかよ、リィンフォース」
剣心「うむ」
リィンフォース「！！」

銀時の言葉にリインフォースは顔を赤くした。
彼女は少し照れながら笑った。
やっぱ女は笑顔が一番だな。
リインフォースの笑顔を見ながら、銀時と剣心がそんな事を思っていると、

「剣心」
「銀さん」

フェイトとシグナム、なのはが病室に入ってきた。二人の手には、ゾーグに折られた木刀がある。
実はゾーグのあの時の魔力パンチの衝撃で二人の木刀は折れてしまったのである

銀時「あ。俺の木刀」
剣心「拙者のも折れてしまったでござるか」

フェイト「二人の木刀…壊れちゃったけど……どうする？」

フェイトが尋ねた。

銀時はメンドくさそうに頭を掻いた。

銀時「しょうがねーな。俺のはまた通販で買うか」

『え？』

銀時の言葉を聞いて、四人は同時に声を出した。

銀時「奮発して新しいの買うとするか」

と銀時。

なのは「ねぇ銀さん」

なのはが口を開いた。

なのは「この木刀、確か銀さん仙人に貰ったって言ってましたよね？私に嘘ついたんですか？」

なのはは、レイジングハートを構えた。

なのはは冷めた顔で銀時を睨んでいる。

リインフォース、フェイト、シグナムは後ろに下がって、両手を合わせて合掌している。

剣心も巻き込まれたくないので後ろに下がった

銀時は、デバイスを構えているなのはを見て、冷汗を流しながら後ずさった。

銀時「ちょ待てよ。俺、怪我人よ？暴力反対」

なのは「問答無用！」

なのはは銀時に向かってデバイスを構える。

銀時「おい！お前ら助けてくれ！！ヘルプミー！！」

しかし、剣心達は目をそむけていた。

なのは「スターライトブレイカー！！」

なのはは銀時に向かってスターライトブレイカーを発射した。

銀時「ギャアアアアアア！！！」

医務室に、銀時の悲鳴が響いた。

そして黒焦げの銀時が横たわるのであった

九兵衛「平和だね」

ヒナギク「平和ね」

お妙「ホント平和ね」

ナギ「ホント平和だな」

ハヤテ・ヴィルヘルミナ

「はい」

廊下を歩きながら、九兵衛とヒナギクとお妙とナギとハヤテとヴィルヘルミナが呟いた。

エリザベス『王手』

桂「なッ！待った！エリザベス！！」

エリザベス『待ったはなし』

エリザベスと桂はこんな風に部屋で囲碁対決をしていた。
それをセツナ、梔、未央が観察していた
雪路はミッドチルダ産のお酒をもらって飲んでいた

定春「あんっ！」

ガブッ！

局員「ギャアアア！！」
局員「止めてくれー！！」

定春は局員達の頭を、次から次へと噛みまくっていた。
ブレイドはヴィータに構っていた。
イヴはデロドロンドリンクを飲んでいた。

エイミィ「ねえ、イヴちゃん何飲んでるの？」

エイミィが尋ねて来た

イヴ「“スーパーゲル状デロドロンドリンク”だよ。飲むか？『臼井』」
エイミィ「いや、私エイミィなんだけど」

エイミィがイヴに突っ込んだ。

エイミィ「まあ、折角だから…」

エイミィが口をつけた。
その時

クルス「わーっ！エイミィさん！それ飲んじゃ駄目です！！」

クルスが止めようとした
しかし、時既に遅し

ゴク
ブーッ！！
バタ

エイミィはぶっ倒れた。

クルス「あ～、遅かった…」

クルスが頭を抱えた。
“スーパーゲル状デロドロンドリンク”はカロリーが高すぎる上にとんでもなく不味いのである。
味に慣れてない奴が飲むとこうなる。

イヴ「何だ、情けないぞ臼井」

イヴはそう言ってまたデロドロンドリンクを飲み始めた。
他の皆はアースラ内を見学していた。
そして、

グレアム「本当に済まなかったはやて君。君達や守護騎士達には本当に申し訳ない事をしてしまった」

グレアムがはやての前で土下座して謝っていた。

はやて「もうええんですよグレアムおじさん。おじさんがうちの面倒を見ていてくれたんは本当なんやし」

はやては笑顔でグレアムにそう言った。

グレアム「ありがとう。これからも君の面倒は私が見ると言う事でもかまわんかね」

はやて「はい。お願いしますわ」

グレアムの言葉にはやては頷いた。

そして、次の日

八神家。

家にははやて、シグナム達とリインフォースがいる。

はやて「まだ雪が降っとるな」

はやては、窓から外を眺める。

雪は、昨日の夜から降り続いていて、もう随分積もっている。

ヴィータ「そういえば今日、銀時やヤミ達が来るんだよな？」

ヴィータが言った。

シグナム「ああ。授業が終わったら、高町達を連れてくると言っていた」

ヴィータの質問にシグナムがそう答えた。
銀時は、なのは達のクラスの臨時担任を続けている。授業の内容は、相変わらず適当だが。

シャマル「そろそろ来る頃じゃないかしら」

時計を見ながらシャマルが言った。

はやて「ほな、外に出て待ってようか」

はやてが車椅子を動かす。
リインフォースが、はやての首にマフラーを巻いた。
玄関の扉を開ける。
門の外に出た。
すると、門の側に銀時達がいた。
フェイトとなのはが雪で玉を作っていた。雪だるまを作る感じに、コロコロ転がしながら大きな玉を作っている。
シャナやヤミもそんな感じで雪だるまを作っていた。
新八と剣心は険しい表情で、様子を見ている。
セイバーはなぜか鍋焼きうどんを食べていた。
玉を作り終えた四人は、銀時の指示で玉を指定の場所に置いた。

なのは「これでいいんですか？銀さん」

なのはが尋ねた。

銀時「ああ。後は真ん中に棒を立てれば完成だな」

真ん中に間を空けて、左右に雪の玉が置いてある。

シャマル・シグナム
『完成させるなァアアア！！』

シグナムとシャマルが、左右の玉を同時に蹴って壊した。

銀時「おいおい、お前ら何すんだよ。フェイト達がその玉を作るのに、どんだけ苦労したと思ってんだ？」

言いながら銀時は、玉を作り直す。

シャマル「何、なのはちゃん達に卑猥な物を作らせてるんですか！？」

シグナム「貴様それでも侍か！？」

シャマルとシグナムが、銀時に怒鳴った。

その時、

すずか「銀さん。棒ができましたよ」

アリサ「お待たせ～」

神楽「銀ちゃ～ん完成したアルよ～」

すずかとアリサがやってきた。

二人の後ろに、棒を担いでる神楽がいた。

神楽「きゃあああ！！神楽ちゃん何持ってるんですか！？」

シャマルが顔を赤くしながら、神楽に叫んだ。

はやてとヴィータ、リインフォースは呆然となって様子を見ている。

ザフィーラはため息をついた。

玉を作り直し終えた銀時が口を開いた。

銀時「お前らよォ。何を勘違いしてんの？これアレだよ？ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲だよ」

シグナム「アームストロング二回言ったぞ！こんな卑猥な大砲があるわけないだろ！」

シグナムが反論した。

銀時は、やれやれと首を横に振った。

銀時「たくっ。お前らエロい大人は、棒と玉があればスグそっちに話もってくんだよな」

神楽「マジキモイアル。しばらく私に話し掛けないで」

シャナ「全くよ、お前達変態じゃないの」

ヤミ「そうですよ。えっちい事言わないで下さい」

銀時と神楽とシャナとヤミは、作り直した玉の間に棒を立てた。

シグナムは顔をしかめた。

シグナム「いや…明らかにおかしいだろ。だったらソレがどういう武器か言ってみろ」

シグナムが説明を求めた。

銀時「江戸城の天守閣を吹き飛ばし、江戸を開国させちまった戌威族の決戦兵器だ」

シグナム「はあ！？こんなふざけた兵器に、お前の国はやられたのか！？」

シグナムは、信じられないと言った顔をした。

はやて「変わった大砲やな」

はやてが珍しそうに、ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を見つめた。

「はやてちゃん！あんまり見ちゃダメです！」

シャマルがはやての前に立った。

シグナム「剣心、新八。何とかならないのか？」

シグナムが小声で尋ねた。

新八「この人達を止めるなんて無理です」

剣心「すまぬが諦めて欲しいでござる」

諦めた口調で新八と剣心が答えた。

銀時「おい、そう言えば翼忘れてたわ、後、すべりだいも、お前ら早く作ってくれ」

シグナム「いや、これ以上おかしくするな。もう大砲の面影全くないぞ」

銀時の言葉に又してもシグナムが突っ込んだ。

「ん？みんな八神殿の家に来ていたのか」

桂がエリザベスを連れてやってきた。

「桂」

シグナム達が桂に気がついた。
すると桂は、銀時達が雪で作った物に気付いた。

「むっ。これはネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲ではないか。完成度高けーなオイ」
「お前も知ってるのか？」

目を細めて、シグナムが尋ねた。

「別名『走る雷』。バルカン戦役における惨劇『火の七日間』を引き起こした地獄の兵器だ」
「おい、さっきと話が違うぞ」

ザフィーラがツッコんだ。
すると今度はナギとハヤテがやってきた。

ナギ「ん？何を作っているんだ」

そう言ってナギも作った物に気付いた。

ナギ「おお、これはネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲ではないか。完成度高けーなオイ」
ヴィータ「…って、お前も知ってんのかよ」

目を細めたヴィータがナギに尋ねた

ナギ「別名、『リーマンショック・キャノン』これを撃った為にア

メリカの経済や雇用率が著しく悪くなった言われる大人泣かせな兵器だ」
ヴィータ「は！？こんなんで経済が悪く何のかよ！！しかもアメリカ！？」
ナギの言葉にヴィータが突っ込んだ
？？？「あら。皆もはやてさんの家に遊びにきたの？」
今度はリンディ、そしてクロノがやってきた。
桂「おお、リンディ殿にクロノ殿」
「何だリンディとＫＹか」
「僕をＫＹとよぶな！！」
ナギの言葉にクロノが怒鳴った
「桂さんやナギちゃん達もいたんですか」
「うむ。そうだリンディ殿。この近くに旨いそば屋があるのだが、今度一緒にどうだろうか？」
「ええ。いいですよ」
桂とリンディは、なんかいい感じに会話をする。
シグナム達とクロノは目を細めて、ジッと二人の様子を見ている。
銀時の話によれば、桂は人妻好きらしい。
クロノは油断ならない奴と桂を睨んだ。
するとリンディとクロノも、銀時達が作った卑猥な作品に気付いた。
クロノ「なっ、何だこのおかしなものは！！？」
リンディ「あら。ネオアームストロングサイクロンジェットアーム

ストロング砲じゃない。完成度高けーなオイ」
『えええええ!!?』

リンディの口から意外な言葉が出て、剣心と新八やクロノ、シグナム達は驚いた。

新八「ちょっ…何でリンディさんが、この卑猥な大砲の名前知ってるんですか!?」
剣心「おかしいでござろう!」
クロノ「何で母さんがこんな卑猥な造形物の名前を知っているんですか!!?」

動揺しながら新八と剣心とクロノは尋ねた。

「その昔、大魔導師クラガ・ラーンとスルバ・ジェックの魔法決戦において、スルバ・ジェック側を勝利に導いた奇跡の兵器……と呼ばれかけたけど実際は出番がなくて倉庫の奥底で眠っていた悲しき兵器よ」

真面目な顔で、リンディは新八達に説明した。

新八「何なんだよ!?何なんだよアームストロング砲って!?」
剣心「もう訳分からんでござる……」
クロノ「しかも呼ばれかけたって……」

新八は頭を抱えながら叫んだ。
剣心とクロノは頭を抱えるしかなかった。
アームストロング砲の謎は深まっていった。
様子を見ていたフェイト達は苦笑いをした。
はやては銀時達の騒ぎを見て、腹を抱えて笑っている。自然と周り

にいるヴィータ達も笑った。
シグナムも笑いながら思った。
こんなに大声で笑ったのは何時ぶりだろう？
いや、もしかしたら初めてかもしれない。
その後、みんなで雪合戦をやった。

銀時「食らいやがれヅラ！」
桂「ヅラじゃない！桂だ、ってグバァ！！」

銀時が、雪の中に石を入れて投げるという反則行為をした。もちろん、投げた先にいた人物は桂である。

ヴィータ「食らえ銀時ィ！！」

ヴィータは、アームストロング砲の玉を投げた。

銀時「そうか行くかっつうの！！」

カキィン！

銀時はアームストロング砲の棒で打ち返した。

やったなコノヤロー！おい、アークセイバー投げるな！ディバイン・バスター！火炎弾！！
斬ります。ハヤテ！ヴィルヘルミナ！やってしまえ！はい！お嬢様！
これ雪合戦ですか？的な雪合戦をやっている途中で、お妙と薫と九兵衛、ヒナギク、東城ブレイド、イヴ、クルス、アルカ、綾子、護、美琴、黒子、セツナ、未央、梔、ナナ、モモ、左之助がやってきた。
そして遂にこの時がやってきた。

お妙「雪合戦で疲れたでしょ。疲れたときには甘い物が一番よ」

持っていた箱の蓋を開けた。
箱の中身を見て、全員の顔色が青くなった。
銀魂読者ならお分かりでしょう。箱の中に入っていた物。
それは。

お妙「卵焼きよ」

ダークマター暗黒物質。

お妙の究極の殺人料理である。
お妙はニコニコ笑いながら箱を差し出した。
シグナム達は戸惑った。
シャマルも料理は下手だが、この料理は次元が違う。
はやてはこの真っ黒い物体が『卵焼き』なんて信じられなかった。
一言文句でも言いたかったが、言えなかった。なんか…文句も言わせない、物凄い威圧感があったから……。ついでに食べないと、許してくれなさそうな感じもした。
諦めたはやては、卵焼き…いや『かわいそうな卵』に手を伸ばした。
その時、銀時と剣心と新八、シグナムとヴィータが、はやてよりも速く手を伸ばし、かわいそうな卵を掴み、口に入れた。
はやては驚愕した。
まさか、私を護るために!?
銀時達の口から、ガリガリと卵焼きからは聞こえないはずの噛み音を立てながら、かわいそうな卵を食べ、飲み込んだ。
直後、顔面蒼白になり、意識を失って五人は倒れた。

銀時と剣心と新八、シグナムとヴィータは、なんとか一命を取り留めた。
五人は、回復魔法で助けてくれたシャマルに、深々と頭を下げて感謝した。
その後軽い雑談をし、空が暗くなってきたので、銀時達は帰ることにした。
明後日、銀時達は元の世界に帰る予定だ。
はやて達は、見送りの約束をした。
銀時達が帰ろうとした時、

「剣心」

シグナムが呼び止めた。
剣心は足を止めて、シグナムに振り返った。

剣心「少し…いいか？」

頬を少し赤くしながら、シグナムが言った。

シグナムと剣心は、近くの公園に来ていた。
公園には、二人以外誰もいない。

剣心「それで？何の用でござるかシグナム殿？」

剣心がシグナムに尋ねた。

「あの……その……」

シグナムは顔を赤くし、剣心から目をそらしながら呟く。
今日、私は剣心に告白すると決めた。たが、なかなか剣心に自分の想いを伝える事ができない。告白というものが、こんなに難しい事だったとは……告白を少し侮っていた。
いつの間にか、雪は止んでいた。時間だけが過ぎていく。

剣心「済まぬが…用がないなら帰るでござるぞ?皆を待たせておるのでな」

剣心がそう言ってベンチから立ち上がろうとした。

シグナム「ま…待て、剣心!」

慌ててシグナムは、剣心を呼び止めた。

「わ…私は……!」
「おろ?」

これ以上ないくらい顔を真っ赤にし、シグナムは今度こそ告白する決意をした。

シグナム「剣心が…好きなんだ!」
剣心「……は?」

剣心を真っ直ぐに見つめ、ついにシグナムは告白した。
剣心は目を大きく見開き、思わずマヌケな顔をして驚いた。
場が沈黙した。
冷たい風が二人の頬に触れた。

「……マジでござるか？」

沈黙を破って、剣心が尋ねた。

「私は本気だ」

剣心を見つめながら、シグナムは答えた。
告白した事で吹っ切れたのか、シグナムは歩き出し、剣心に抱き付いた。
シグナムの豊満で柔らかい胸が、剣心に当たる。
こういう状況に慣れていない剣心は、どうしたらいいかわからず、顔を真っ赤にしながら首を左右に振りながら動揺する。
シグナムは両手を剣心の顔に添えた。
そしてゆっくりと顔を近づけ、自分の唇を剣心の唇に重ねた。

シグナム「んっ…」
剣心「ムグッ！」

シグナムにキスされ、剣心の体は固まった。
フェイトの時とは違って、長い時間キスをした。
舌まで入れられてしまった。
シグナムは、剣心から唇を離した。

「フフ。私のファーストキスだ」

シグナムは、嬉しそうな笑みを浮かべた。
一方剣心は、キスをされて呆然としている。フェイトとは、また違った感触のキスだった。
なんせ大人のディープキスだしね

シグナム「テスタロッサやあの薫と言う女にも負けん。剣心。必ずお前を、私の男にしてみせるからな」

じゃあな、と言ってシグナムは八神家に帰っていった。

残された剣心は、呆然と立ち尽くした。

「……何でこうなるんでござる？」

小さく呟いた。

「フェイト殿に告白されるわ、アルフ殿にまで告白されるわ、挙句の果てにはシグナム殿にまで……これでは銀時の言うように本当に女たらしになってしまうでござる……拙者はどうすればいいんでござるか？」

この時、剣心は人生で一番悩んだ。

「誰でも良いから教えて欲しいでござるうぅぅぅぅぅ！！！！」

空に向かって剣心は思いっきり叫んだ。

因みにこんな事が薫にばれれば剣心は死ぬよりも恐ろしい目に会うかも知れないのであった。

そして……あっという間に、別れの日がやってきた。

街の近くの丘に銀時達はいた。見送りにフェイト達やシグナム達、アースラの局員、すずかやアリサもいた。

クロノ「今回も、また貴方達には世話になった。礼を言う」
銀時「まぁお前もこれから大変だろうが、頑張れよクルクル黒河童」
クロノ「誰がクルクル黒河童だ!!この駄目ちり毛男!!」
銀時「誰が駄目ちり毛だこのヤロー!!まるで空気読めないガキ、略して“マクガ”の癖に!!」

クロノと銀時が挨拶を交わした後に怒鳴りあった。

「銀ちゃん。他の皆も、ほんまにありがとう!」

はやてが銀時達に礼を言った。

剣心「早く足が良くなる様祈ってるでござるよ」
ヤミ「闘病生活は辛いでしょうががんばってくださいね」
「うん!」

剣心とヤミの言葉に、はやては頷いた。

「今度、私達の世界に遊びにくるアルよ」

と神楽が言った。

ヴィータ「おう!絶対に行くからな!」

ヴィータが応えた。

「なのはちゃんも元気でね」
「はい。新八さん達もお元気で!」

新八となのはも挨拶を交わした。

他の皆もそれぞれ別れの挨拶をした。
すると銀時が無線機に向かって、新八達を先に帰してくれ、と言った。無線機で銀時の言葉を聞いた源外とララは、言われた通りにした。
フェイト達の前から、新八達がいなくなり、剣心と銀時だけが残った。

「フェイト殿、アルフ殿、シグナム殿」
「なのは」

剣心が三人の名前を呼んだ。
銀時もなのはの名前を読んだ

「悪いが。拙者は誰と付き合うかは、まだ決められぬでござるよ。薫殿の事あるし…けれど…」
「俺もお前と付き合うかなんてのはすぐには決められねぇよ…けどな……」

そこで剣心と銀時は、一旦言葉を切った。
改めて四人を見て言った。

「ありがとう。お主らの気持ちは、凄く嬉しい」
「俺もお前の気持ちは嬉しかったぜ、なのは」

笑って剣心と銀時は言った。
フェイト、アルフ、シグナム、そしてなのはは顔が赤くなった。同時に嬉しくもなった。

「じゃあな」
「さらばでござる。またいずれ」

そう言い残し、銀時と剣心も消えた。
フェイト達は、銀時達がいなくなった後もしばらくその場にいた。

フェイトとプレシア、アルフは、部屋に戻ってきた。

「フェイト、アルフ」

プレシアが声をかけた。

「何、母さん？」
アルフ「何だい？プレシア」

プレシアを見ながら尋ねた。

「貴女達……剣心が好きなの？」

先ほどの剣心の言葉が気になり、二人に聞いてみた。
二人は少し頬を赤くした。

「うん。大好きだよ」
「あたしも」

顔を軽く赤らめ頷きながら二人はそう答えた。

プレシア「…そう」

プレシアは短く返事をした。

何だか胸の奥がモヤモヤする。
この気持ちは一体……？
初めての感じに、プレシアは戸惑った。

＊

八神家。

「シグナムは、剣ちゃんの事が好きやったんか～」
「…はい」

顔を赤くして、シグナムは答えた。

「剣心さんのどこを好きになったの？」

シャマルが尋ねた。

「そ…それは……」

シグナムは戸惑った。
家に帰ってきてから、ずっとこんな感じだ。

ヴィータ「そうか…シグナムは剣心が好きなのか……」

ザフィーラは、ヴィータの方を見た。
何やら少し機嫌が良さそうな感じがする気だった。

（あたしもアイツに告ればよかったかな…）
「どうした、ヴィータ？」

ザフィーラが尋ねた。

「なんでもねーよ！」

ヴィータはそっぽを向いた。

実はヴィータはぎ……

ヴィータ「ワー！ワーワーワー！！言うなーーー！！！！」

ヴィータはナレーションの言葉を無理やり遮らせた。

何を慌てているんでしょうかねぇ～ククククク……

ヴィータ「なんか凄ぇむかつくんだけど……」

ヴィータはナレーションに対して僅かな殺意を覚えた。

リインフォースは、ソファーに座ってソワソワしている。

自分も彼に告白するべきだろうかと……

「それじゃ昼ご飯にしよか」

「はい」

はやてが調理の支度をする。シグナム達も手伝いを始める。

すると、

「なぁシグナム！」

ヴィータがシグナムを呼んだ。

「何だ？」

シグナムは振り返って、ヴィータを見た。
ヴィータは、少し迷ってから言った。

シグナム「剣心のどこが好きなんだよ？」
ヴィータ「その話はもういいだろう！！」

間髪入れず、シグナムが怒鳴った。顔は真っ赤になっている。
はやてはその様子を見て微笑んでいた。
今日も八神家は平和である。

そして……時を同じくして……

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

そしてここは超銀魂世界の地球から遥か離れた銀河の最果て
その更に先にある仮想宇宙空間
そこにそれはあった。
地球の十倍以上はあるかと言うほどの異常なまでに巨大な要塞
それは超銀魂世界に存在する最悪の組織
全宇宙の全てから恐れられている全宇宙最強最悪の大軍事国家

『宇宙帝国アークス』の総本部『宇宙帝都ヴォルグバイスト』がそこに存在していた

？？？「ゾーグが…倒されただと？」
ベイルファード「そうなのよパパ～、まさかマジであんな事になるなんて思いもしなかったわ」

暗黒皇女ベイルファードが要塞の中心部に位置する部屋の玉座に座っている黒ローブの男と話し合っていた。実はこの男こそがアークスの皇帝であるのだ。
そう…つまり……魔人族を影で操ったり、ゾーグを作り出し卵にまで退化させて遥か大昔の異世界送り込んだりとなのは達の世界で裏で暗躍していた魔人族の黒幕とはなんとこの『宇宙帝国アークス』の皇帝だったのである

皇帝「何の冗談だ…？あの次元世界の弱々しい魔導師如きにゾーグを倒せる者がいるとは到底思えないんだが……？」
ベイルファード「それが違うのよ～。パパ、“侍”って覚えてる？」
皇帝「“侍”？」

皇帝はベイルファードの言葉に首を傾げた。
そして思い出したかのように言葉を発した。

皇帝「確か…地球にいた前時代の異物だったな。…それが如何したんだ？」
ベイルファード「そいつらにやられちゃったのよ。ゾーグの奴」
皇帝「何？」

ベイルファード「そっ、しかもその侍があの白夜叉と紅夜叉だって言うんだから驚きよね～」

ベイルファードは笑いながらそう言う。

？？？「ふん、あの馬鹿者が…皇帝陛下の顔に再び泥を塗りおってからに……」

皇帝の近くにいる割と大きい天人がそう言った。

？？？「ハッ、所詮アイツは唯の雑魚野朗だった話だろ……俺達『二十の盾（トゥエンティ・ガード）』のヘボ中のヘボの上に弱虫野朗何だしよ」

今度は子龍の様な存在がゾーグに大してそう呟いた

？？？「お父様の顔に泥を塗った者の復帰などもともと私は反対でした。ちょうどよかったじゃありませんか出来損ないを切り捨てられたんですから」

今度は青い帽子をかぶった金髪の女の子がそう言った。

皇帝「お前達は相変わらず冷たいな…まあ、良いわ。正直ゾーグがやられると言うのは計算外であったが収穫はあった。『アルハザード』が見つかったのだからな。それに…“ミッドチルダ”への侵攻作戦も退屈せずに済むかもしれんな……ゴアよ」

ゴア「ハッ」

皇帝「別次元の制圧に向かわせている我が『二十の盾（トゥエンティ・ガード）』及び全精鋭部隊を呼び戻せ！之よりミッドチルダ及び全管理世界、管理外世界の完全壊滅作戦を執り行う」

ゴア「『二十の盾（トゥエンティ・ガード）』と全精鋭部隊を…で、ございますか！？」

皇帝「そうだ…。ついでに地球で同盟を結んだ『鬼兵隊』の者達にも連絡しておけ。準備は整ったと言ってな。そして他の異世界の我が同士達にもな」
ゴア「こっ、皇帝陛下……本当に地球人如きと手をお組みになるおつもりで!?」
皇帝「何だ…?私の決定に文句があるのか?」
ゴア「い…言え、ですが…しかし……」
皇帝「この話は以上だ。次、バルバモン」
バルバモン「ハッ」

皇帝にそういわれ今度はバルバモンが現れ皇帝の前に立った。

皇帝「バルバモン。ジュエルシードのエネルギーを利用した『超強化生命体プログラム』はどれくらい進んでいる?」
バルバモン「すでに何体かの強化生命体は完成しております。『ヘルダーク』様のお力によってジュエルシードの力は以前より遥かに増しておりますゆえ」
皇帝「そうか、ご苦労。引き続き作業に当たれ」
バルバモン「ハッ!」

バルバモンはそう言って部屋から出て行った。

皇帝（私の野望…いや…夢を邪魔をするものは誰であろうと消す…。だが、ゾーグを倒したと言うその侍共。少しは私を楽しませてくれるかも知れん。あっさりと滅ぼしても詰まらんしな……。精々、私を楽しませてくれよ…紅夜叉君…白夜叉君。ククク……フハハハハ……）

皇帝は心の中で高らかに笑った。
全宇宙全てにおいて敵なしと言われた究極にして超銀魂世界最強の

悪の存在
宇宙帝国アークスの皇帝
全ての黒幕

“暗黒王のダークワン”は

新小説に続く

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生!』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『ボッスン』さんから「皆さんに質問です。

仮面ライダーで好きなライダーはなんですか？

同じ質問なら無視してもいいです。

次回も楽しみにします」

支配者「はい。この質問には私がお答えします。はっきり言って皆さん仮面ライダーには興味ありません。興味あるのは神楽と近藤の二人だけです。因みに好きなライダー“クウガ”だそうです」

銀八「はい、と言う訳ですんで『ボッスン』さん廊下に立ってなさい。」

フェイト「次の質問です。ペンネーム『真王』さんから「真王「ベイルファード・・・それがファイナの正体か」

神「ま、俺様ならあれやこれやとやったあとすぐに俺の妻にしてやるがな」

真王「規格外通りこして超最強だもんなあんたは…」

神「その通りＳＡ☆！」

真王「語尾に英語付けるな。『銀時か剣心に新しい武器か能力を出しますか？』」

神「ラスボスにゃいるだろ？『銀時よぉ、もしよかったら俺様が超強力のかめはめ波ならぬ『銀龍絶殺砲（真王命名）』を習得させようか？』」

真王「それではまた会いましょう（・・・あ、支配者さんにトラップバトン入れるの忘れた…；）」

銀時「銀龍滅殺砲!?無茶苦茶イイネーミングじゃねーか！やっべえ！俺興奮して来ちゃったんですけど!!」

支配者「つまりは習得させて欲しいって事？」

銀時「オオ！ぜひ頼んます!!」

銀八「と言う事らしいんで『真王』さん。よろしくお願いします」

なのは「次の質問です。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから「剣護「作者の新連載『銀魂ライダーディケイド』の主人公の神地剣護だ、」

御坂
「同じく、『銀魂ライダーディケイド』の御坂美琴よ。　応援宜しく。」

詩樹
「、『銀魂ライダーディケイド』のヒロイン・村崎詩樹です。　応援宜しくお願いします。」

虎龍
「そう言う訳なんで、応援してくださいね。」

剣心と斎藤に質問。
『万時屋奇譚幕』のユーリと斎藤のバトルを見てどう思いますか？

剣心、銀さんに質問。
第二部の主人公達の実力を見て、どう評価しますか？

剣心に質問
フェイトとシグナムと薫、誰を選びますか？

御坂に質問。
『銀魂ライダーディケイド』のアナタはクウガで、『万時屋奇譚幕』のヒロインの炎華はレベル４の超発火（パイロキネス）の能力者です。
戦ってみたいですか？」では、お答えお願いします。」

剣心「そうでござるな。斉藤の戦い方は相変わらずだと思ったでござるな。ユーリ殿も見事な技を使っていたので強い戦士だと言う事は分かったでござるよ」
斉藤「まあ、お前に比べれば奴のほうが数段ましだからな。どいつもこいつも阿呆ではあるが」
剣心「相変わらずの毒舌ぶりでござるな…斉藤」
斉藤「ふん…。まあ、向こうの俺に一言言う。阿呆共の相手は大変だろうが頑張れ。俺も阿呆共の相手は大変だが頑張る」
銀八「じゃあ、次だ剣心」
剣心「生む。今は選びようがないでござるよ。とりあえずそれだけでござる」
銀八「まあ、そうだろうな～選びようがねえよな…。んじゃ次ビリビリ」
御坂「ビリビリ言うな！そうね。まあ、強い人なんでしょうから戦ってみたいわね」

銀八「そうですか、ではそう言う訳なんで『亀鳥虎龍』さん廊下に立ってなさい

剣心「では今回はここまででござる」

銀八「そんじゃ前書きでも言った、重大発表をする」

支配者「それでは、どうぞ」

緊急告知！

近日掲載決定！

『リリカル剣魂スペシャル』

――最終章　開始！――

『超リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』～大次元鎮魂歌～

黒き獣の呻き

地獄の炎を操る最強の悪鬼

かつてない脅威
最悪の暗黒のロストロギア
リリカル銀魂シリーズ始まって以来最強の悪しき存在
そして――

銀八「はい。という訳で、『リリカル剣魂スペシャル』とは別にして最終章を連載します」

フェイト「どんな話になるんだろ？」

銀八「物凄～くグダグダになる予定だから、読者のみんなは覚悟するように！」

支配者「銀八先生！読者を不安にさせるような事は、言わないでください！」

銀八「あっ、次からはギャグ多目の『日常編』らしいんで楽しみにお待ちくださいっと、んじゃ次回も

全『お楽しみに！！』

第六十四訓　アームストロングって結局なんだろう（後書き）

銀時「次回はいよいよフェイト達が超銀魂世界にやってくるお話で～す」

支配者「では、楽しみにお待ちください」

第六十五訓　初めての経験はいろいろあるもんだ。（前書き）

支配者「はい、とうとう日常編スタートです」

銀時「遅ーんだよてめぇ！！もっと早く更新しろよ！！」

支配者「すいません。暑くてだるくてしんどくて……」

シャナ「次からはもっと早く更新してよね」

支配者「はい、努力します……」

なのは「リリカル剣魂スペシャル始まります」

第六十五訓　初めての経験はいろいろあるもんだ。

ここは超銀魂世界、江戸
江戸の空は、雲一つない青空。あっ、微妙に雲がありました。すいません。
銀時達が『リリカルなのは』の世界から戻ってきて二週間。今日も江戸は平和である。
そんな平和な江戸の街に、平賀源外の工場があった。工場内から強い光が発せられた。やがて光は収まり、工場内にある装置から五人の人物が出てきた。

???「着いたのかな…？」

フェイト・テスタロッサ。

???「多分、そうだと思うよ…」

高町なのは

???「意外とあっという間だったね」

アルフ。

???「ここが剣心達の世界か」

シグナム。

???「源外ってジーさんの工場だろ？」

ヴィータ。

源外の装置で、五人は銀時達の世界にやってきた。

???「おー、よく来たな」

???「いらっしゃ～い」

五人の前に源外とララがやってきた。

なのは「あ、こんにちは…」

フェイト「は、はじめまして…でいいんでしょうか？」

なのはとフェイトが戸惑いながら言った。

源外「まぁ実際に会うのは初めてだが、無線で何度か話してるからいいだろう」

ララ「そうそう」

源外とララはそう言った。

シグナム「私とヴィータは、はじめましてだな。私は『剣の騎士』シグナムだ」

ヴィータ「『鉄槌の騎士』ヴィータ」

二人は源外とララに自己紹介した。

源外「俺は平賀源外だ。まぁよろしくな」

「私はララだよ。こう見えても王女様だよ」

軽く自己紹介した。

フェイト「ところで剣心達はどこにいるの？」
源外「ああ、剣の字達だったら…」

それからフェイト達は、源外から銀時の家までの道のりを聞いて工場を出た。

源外「しかし、別品ばかりだな」
ララ「本当きれいな人達だよね」

フェイト達の後ろ姿を見ながら、源外とララは呟いた。

源外「まあ、ララ譲ちゃん程の別嬪はそうはいねぇだろうがな」
ララ「もうおじいちゃんたら上手いんだから～」

バチコーン！！

源外「ブヘェー！！」

ドガアッ！！

源外は照れたララにぶっ飛ばされ壁に激突して気絶した。
デビルーク星人はこの小説では夜兎族と同等クラスの戦闘民族なのでパワーがもの凄いのである。まあ、元々ララのパワーは化け物染みているが

そして外に出た五人は驚いた。
建物の形が違う。まあ、なのはの町にあるような近代型の住宅も結構あるがそれでも自分達が知るような町並みとは違っていた。
皆さん今更ですがこの世界は『超銀魂世界』であって銀魂世界では

ありません。ですから銀魂世界の町並みとは少し違って近代的な部分も多いのです。科学も銀魂世界以上にかなり進んでいますし魔術や超能力の研究も大々的行われている世界です。
それにターミナルも江戸だけではなくイギリスやドイツ、フランスなどにもあります。
だから銀魂と同じように考えないでください。
ここ重要ですよ。テストに出ますから

ヴィータ「何のテストだよ」

ん？なんか聞こえたかな？

そして、街を歩く人達の中に、アルフのように頭に獣の耳を生やしている者がいる。
他にも顔が魚のような者や、体の色が赤い者など異形の人達が歩いてる。

なのは「之が銀さん達の世界…」
シグナム「アレが剣心達が言っていた『天人』か…」
ヴィータ「『妖怪』ってのもいるって聞いたぞ」

五人は興味深そうに天人達やそれに紛れている妖怪達を見た。

フェイト「この世界なら、アルフも耳と尻尾を隠す必要はないね」
アルフ「うん」

フェイトの言葉に、アルフは頷いた。

ヴィータ「それにしてもヘンテコな奴らだな」

天人達や妖怪達を見つめながら、ヴィータが言った。

シグナム「さて、そろそろ行くぞ」

シグナムが歩き出した。
フェイト達も後に続いて歩き出す。源外とララに教えてもらった道のりを歩いて、しばらくすると『万事屋銀剣ちゃん』の前に到着した。

シグナム「ここが剣心と銀時達の家か…」

五人は少しドキドキした。
階段を上って、二階にある万事屋に向かう。
階段を上り終えた時、

？？？「いい加減にしろよ天然パーマ！！」
？？？「うるせークソババァ！！」

誰かの怒鳴り声が聞こえた。
五人は玄関前を見た。タバコを持った、五十代くらいの女性が、玄関の中を睨んでる。
玄関の中にいるのは、もちろん銀時とそれを宥めている様子を見せている剣心。

銀時「家賃家賃うるせーんだよこのクソババァ！払えねぇモンは払えねぇって言ってんだろ！！」
お登勢「ナメてんじゃねーぞゴラァ！テメェの場合は五ヶ月分も家賃がたまってんだぞ！さっさと耳を揃えて払わんかいクソッたりゃアァァァァ！！」
銀時「大体なんで払わなきゃらいけねぇんだよ！いつも剣心が家賃

払ってんじゃねーかアァァ！！」
お登勢「テメェは剣心に頼らなきゃ何も出来ねーのか！！テメェの分の家賃ぐらいテメェで払いやがれって何時も言ってんだろうがクソ天燃パーマアァァァァ！！！！」
剣心「お登勢殿！銀時！近所迷惑でござるよ！もう少し静かに！」

どうやら家賃の事でモメているようだ。
五人は目を細めて、呆れた顔で様子を見つめた。ゾーグを倒して世界を救った男の一人が、家賃も払えないとは。しかも五ヶ月……。
あの女性は、大家さんだろう。剣心はちゃんと払っているようだが銀時は滞納しまくっているようだ。よくそこまで家賃滞納を許していたな。まぁ今日で我慢の限界のようだが。

五人はそれぞれ、そんな事を思った。
この後、銀時は女性に体を持ち上げられ、地面に向かって投げられた。

銀時「よ…よォ。よくきたな……」
剣心「元気で…ござったか……五人共」
神楽「よくきたアルな」

ボロボロになった銀時が言った。
剣心も苦笑いしながら挨拶した。
ついでに神楽も二階から降りてきて五人に挨拶した。

フェイト達は苦笑した。今みんなは一階にある『スナックお登勢』にいる。
カウンターには先ほど銀時と争っていた、『スナックお登勢』のオーナーで『万事屋銀剣ちゃん』の大家さんのお登勢がいる。

お登勢「アンタ達に、こんな可愛い知り合いがいたとは驚きだね」

タバコの煙を吐きながらお登勢が言った。

フェイト「はじめまして。フェイト・テスタロッサです」
なのは「高町なのはです」
アルフ「アルフです」
シグナム「シグナムです」
ヴィータ「ヴィータだ」

五人はお登勢に自己紹介した。

「私はこのスナックのオーナーで、このダメ男とそこの真面目男の事務所の大家のお登勢だよ。まぁゆっくりしていきな」
「はい。ありがとうございます」

フェイト達は礼を言った。
銀時との喧嘩の様子を見て、怖い人だと思っていたが、そうでもないみたいだ。
アルフは、さっきから敵意の視線を受けていた。恐る恐る後ろを振り返った。
そこには、頭に猫耳があるのに顔が濃くて全く萌えられない女性がいた。スナックお登勢の従業員、キャサリンである。

キャサリン「ソコノオ前、頭ニ獣ノ耳ナンカ付ケテ、私トキャラガカブルンダヨ！！」
アルフ「え？」

アルフを指差しながら、キャサリンが怒鳴った。

銀時・神楽『いや、かぶんねーよ』

銀時と神楽が細い眼で言った。

銀時「アルフとお前とじゃ、可愛さが天と地ほどの差があるだろ」
キャサリン「差別ハヨクナイト思イマース」
銀時「差別じゃねェ。分別だ」
神楽「そうアル」
キャサリン「ゴミカ？私ハゴミカ？」

キャサリンは銀時と神楽を睨んだ。

銀時「正解！」
キャサリン「正解ジャネーヨ！」
神楽「お前は生ゴミで十分アル」
キャサリン「誰ガ生ゴミダ！テメェハゴミデモクッチマウヨウナオオグライ小娘ノクセニ！！」
神楽「んだとぉー！！この泥棒猫耳星人！！」
キャサリン「ウルサイ！コノ小娘星人！！」
神楽「気お付けるアルよ！この糞年増星人！！いつかポストに生魚ブチコンデヤルヨ！！」
キャサリン「匂イガ我慢デキルナラヤッテミロヨ！コノクソオオグライ星人！！」

キャサリンが怒鳴った。
そして神楽と喧嘩を初めた。
お互い鼻フックなどを掛け合ってたり首を絞めあったりしている

お登勢「まあ、確かにお前には萌え要素なんて全くないね。いい年こいて若いモンと張り合うんじゃないよ」
キャサリン「オ登勢サン！ヒドイヨ！！」

そしてお登勢がキャサリンに対して冷たい言葉を投げかけるのであった。
銀時と神楽とキャサリンが騒いでいる中、フェイトはもう一人の従業員と目が合った。
緑色の髪でキャサリンと違ってなかなかの美人。機械家政婦の『たま』である。

たま「はじめまして。たまと言います」

たまが自己紹介をした。

フェイト「あっ、はじめまして。フェイト・テスタロッサです」

慌ててフェイトも自己紹介した。
たまの事は、銀時と剣心から少し聞いている。
ある天才機械技師が、死んだ娘を生き返らせようと、人格データをたまさんに移した。
私とたまさんは似ている。私も死んだアリシアの代わりとして、母さんに造られたから。
最も分かり合え一緒に暮らす事が出来ているからたまに比べればまだマシだけど

たま「どうかしましたか？」

たまがフェイトに声をかけた。

フェイト「あ、いえ。何でもありません。大丈夫です」
たま「そうですか」

フェイトの返事を聞いて、たまは安心したように笑った。
そう、もう大丈夫。
たまさんには、お登勢さん達や銀時達がいる。私の母さんも、私を『フェイト』として、『娘』として見てくれてる。
ふとフェイトは、ある事を思いついた。

フェイト「あの、たまさん」
たま「何でしょうか？」
フェイト「私と…友達になってくれませんか？」

少し照れた感じにフェイトが言った。

たま「友達…」

たまは小さく呟いた。
それから嬉しそうに笑い、

たま「はい。よろしくお願いします」

フェイトの友達となった。
フェイトも嬉しそうに笑い、たまと握手をした。

「よかったねぇたま。新しい友達が出来て」
「はい」

銀時と剣心やシグナム達は、微笑みながらその光景を見守った。
そしてまたキャサリンがまたしても話しかけてきた。偉そうに

キャサリン「オイガキドモ！オマエラトリアエズアイサツガテラワタシニタバコカッテキナ！ソシテワタシヲジョウオウサマトオヨビ！！」

ヴィータ「なあ、シグナム。この猫耳おばさんさっきからなに言ってんだ？なんか偉そうなんだけど」

シグナム「さあ…私にも分からん……」

アルフ「と言うか聞きづらいし、読みづらいよ。もう少し分かりやすく日本語言ってくんない？キャラ被ってないおばさん」

「ナンダトォ！！」

アルフの自分をバカにしたような言葉にキャサリンは怒鳴る。

お登勢「キャサリンおよし」

お登勢はキャサリンを止めた。

銀時「ッたく喧嘩ばっかしてんじゃねぇよ…ん？」

銀時は何かの気配を感じたのか腰に指してある木刀を天井に向かって投げた。

グサッ！

何か刺さるような音を立ててそれは天井から落ちてきた。

「なっ、なんだ？」

シグナムが思わずレヴァンティンを構えながらそう言った。

しかし銀時と剣心やお登勢達は至って冷静だった。

銀時の方はまたか…という顔をしていた。

？？？「いたた…」

落ちてきたのは、長いロングヘアーに眼鏡をかけた。銀時のストーカー、猿飛あやめであった。頭に銀時の投げた木刀が刺さっている。

ヴィータ「オイィィィ！！頭に木刀刺さってんぞ！大丈夫かよォ！？」

ヴィータが大声で言った。

神楽「心配ナイネ。この世界では普通アル」

とご飯を食べながら神楽が答えた。

銀時「おい、またか納豆ストーカー女」

そう言いながら、銀時は猿飛の頭に刺さっている自分の木刀を引き抜く。

猿飛「触らないで!!」

銀時「触ってねぇよ変態女。つーかさっさと出てけ」

猿飛の訴えに銀時は冷ややかに返す。

猿飛「銀さんがアニメの世界に行ったって聞いて、いてもたってもいられず忍び込んでみたら、何なのよこの状況!何よ!このいかにも憎たらしい女共は!?しかも銀さん。向こうフラグ立ててきたって言うじゃない!しかも幼女!?」

シグナム「本人達の前でよくもまあ、憎たらしいなんて言えるな…」

目に涙を浮かべる猿飛にシグナムは青筋を浮かべながら言った

なのは「銀さん。なんなんですか?この人」

なのはは銀時に猿飛の事について尋ねた。

剣心「…彼女は猿飛あやめ殿といって、元お庭番州のエリートくの一だったのでござるが、今は始末屋をやっているんでござる。と言っても…はっきり言って銀時のストーカーなんでござるよ……」

銀時の代わりに剣心が答えた。

『ス、ストーカー…』

なのは達五人はその言葉を聞いて苦笑いした。

神楽「ゴリラやギル、テツと同じアル」

神楽がそう言った。

因みに神楽がこのとき言った3人はもちろんゴリラとは近藤の事、ギルとはこの世界では衛宮士郎のサーヴァントという事になっているギルガメッシュ、テツとはハヤテのストーカーである、瀬川虎鉄の事である。

銀時「おい、ストーカー女。いい加減、やめてくんねぇか？銀さんもう納豆臭い奴とはおさらばしたい訳よ」

なのは「そうです！銀さんに纏わりつかないでくださいこのストーカー！！」

銀時となのははそう言った。

猿飛「ちょっとそこのお譲ちゃん…。銀さんはともかく何で貴方にまでそんなさげすまれた言葉掛けられなきゃいけないのかしら？貴方銀さんの何な訳？」

猿飛は細い眼でなのはをにらんだ。

なのは「私は銀さんと将来を誓い合った仲です！」

銀時「オイィィィー！！なのはさん！？お前どさくさにまぎれてなんて事いってんだぁー！！そんな誓い立てた覚えねぇよ！！俺はロリコンじゃねーんだから！！」

銀時はなのはの言葉に驚いて思いっきり慌てながら否定し怒鳴った

猿飛「この小娘！なに寝ぼけた事言ってんのよ！いい事！よくお聞き！！銀さんはね、私の物なの！！」

銀時「オ～イ、お前も誤解を招く発言は止めてくんない。銀さん、お前の物になった覚えないから」

猿飛「照れなくても良いじゃない！私達、ＳＭプレイを一緒に楽しんできた仲じゃない！」

銀時「ＳＭプレイなんてした覚えはねーよ！！」

勝手な事を言うさっちゃんに、怒鳴る銀時。

猿飛「良いじゃないの銀さん！銀さんにふさわしいメ○豚は私だけなんだから！銀さんのお○ん○んは私のも……」

銀時「退場うぅぅぅ！！」

ドッガア！！

猿飛「あああああああ！！」

さっちゃんは銀時に蹴っ飛ばされ空の彼方に飛ばされていった。

銀時「ったく…」

銀時が溜息をつくと扉から二人の人物が入ってきた。

？？？「緋村いる～？」

？？？「邪魔するぞ」

剣心「蒼紫、操殿」

スナックお登勢に入ってきたのは幕府特殊隠密部隊お庭播州のお頭である四乃森蒼紫とお庭播州の見習いである巻町操が入ってきた。

銀時「何だお前らか、なんか用か?」

蒼紫「別にお前らに用はない。猿飛がここに入ると聞いて来たんだが」

神楽「ストーカーなら星になったアル」

神楽が外を指差しながら蒼紫にそう説明した。

操「また…どうせ銀時になんかやらかしてぶっ飛ばされたんでしょ、緋村はともかく何でこんなのにストーカーなんていんのかしらね」

銀時「おいコラそりゃどういう意味だ。イタチ女」

操「誰がイタチ女だ!必殺“毛長蹴り”!!」

銀時「スダコッ!」

銀時の言葉に怒った操が銀時に飛び蹴りを食らわせた。

剣心「猿飛殿に何か用事があったんでござるか?蒼紫」

蒼紫「奴に仕事の以来があったんだ。まあ、いないんなら仕方がない出直すか。行くぞ操」

操「は〜い。蒼紫様」

蒼紫と操がそう言って店を出ようとしたが

シグナム「ちょっと待て」

蒼紫「ん?」

シグナムがそれを呼び止めた。

蒼紫「何か用か？」
シグナム「私と勝負してくれないか？」
『は？』

みんなはその言葉に眼を点にした。

蒼紫「一応理由を聞いておこうか？何故だ」
シグナム「一目見て分かったんだ。お前は強いとな。だから戦ってみたいんだが」
ヴィータ（ったく、このバトルマニアが……）

いかにもシグナムらしい理由にヴィータは心の中で呆れた。

蒼紫「今は俺は忙しいんだ。そんな理由でどこの馬の骨とも分からん奴と戦うつもりはない」
操「そうよ。大体アンタ誰よ。蒼紫様と戦いたいだなんて、大体勝てるわけないでしょ。蒼紫様はお庭播州のおかしらなのよ。あんたなんかが勝てるわけないでしょ」
ヴィータ「何だと！シグナムを舐めんなよ。あたしらヴォルゲンリッターの将なんだぞ！」

操の言葉に怒ったのかヴィータが怒鳴った。

操「…緋村、何なのこの連中？」
剣心「ああ、彼女達は拙者達の知り合いで…」
フェイト「フェイト・テスタロッサです」
なのは「高町なのはです」
アルフ「あたしはアルフ」
シグナム「シグナムだ」

ヴィータ「ヴィータだ」

フェイト達が操達に自己紹介をした。

操「ふ～ん。あたしは巻町操。んでこっちが幕府の特殊隠密部隊お庭播州のお頭であたしの蒼紫様♪」

蒼紫「いつ俺がお前の物になった操」

操の言葉に蒼紫がツッコンだ。

蒼紫「とにかく俺は忙しい。お暇させてもらうぞ。行くぞ操」

操「は～い。蒼紫様」

蒼紫と操はそう言って店を出て行った。

シグナム「剣心」

「おろ？何でござるか、シグナム殿」

シグナム「あの蒼紫と言う男…相当強いだろう」

「ああ、拙者や銀時でも一対一では勝てるかどうか分からぬほどの手誰でござるよ。蒼紫は」

シグナム「そうか、それはなんとしても戦ってみたかったな」

剣心の言葉にシグナムは軽く口元を上げながらそう答えた。

銀時・ヴィータ（バトルマニアもここまで来ると救いようがねぇな……）

銀時とヴィータは心の中でお互いにこう思っていた。

そして銀時達は『スナックお登勢』を出た。
その時ちょうど他の道場に出稽古に出ていたセイバーと鉢合わせて一緒に江戸見学に出かけた。
これからフェイト達に、江戸の街を案内させるのだ。ちなみに、たまもいる。お登勢に”今日は休んでいいよ”と言われ、フェイト達の案内に付き合っている。

アルフ「そういえば、新八とシャナとヤミは？」

歩きながらアルフが尋ねた。

銀時「今日は仕事は休みだ。シャナは学校。ヤミは定春と散歩だ」
アルフ「ふ～ん」
なのは「って、シャナちゃんって学校に行ってたんですか？」
なのはがそう聞いて来たので銀時が向こうにあるビル郡を指差した。

銀時「向こうのほうにビルがいっぱい並んでるところがあるだろ、あれは“学園都市”って場所なんだ」
「学園都市？」

シグナム達が首を傾げた。

セイバー「“学園都市”と言うのはこの国の学生達の特別教育機関なんです。最も最大の目的は地球人の中にいる“能力者”や“魔術師”と呼ばれる人達の能力を解析する為に幕府の天人たちが作った場所なんです。学生の内から能力者の管理なども義務付ける為の機関でもあります」
剣心「因みにシャナ殿は武偵高校と言うところに通っているんでござるよ。理事長であるナギ殿のコネで」

アルフ「シャッ！シャナって高校生だったのかい！？」
ヴィータ「しかも理事長って…ナギがかよ！」

剣心の言葉にアルフとヴィータが驚く

銀時「まあな。ナギの奴が金に物言わせて幕府から学園都市の権利の半分を買い取りやがったんだ。今じゃナギの奴が学園都市の一番の運営者なんだよ」
なのは「そ、そうなんですか」
ヴィータ「アイツ……どんだけ金持ちなんだよ……」

銀時の言葉を聞いてフェイト達はナギが桁外れのお嬢様である事を改めて思い知った。因みにナギの総資産は原作の十倍にしました。
株に成功したとだけ言っておきましょう。

そしてしばらく歩くと真選組と真女組の屯所が見えてきた。

銀時「は～い。ここが警察と言うなの」
神楽「税金泥棒共の家アル」

銀時と神楽が屯所を指差してそう言った
フェイト達が苦笑いしながらそれを見ている

なのは「銀さん…。いきなり税金泥棒はないんじゃ……」
銀時「いいんだよ、どうせあいつら仕事なんか碌にしねーで遊びまわってんだからよ。その証拠に局長や警察庁長官はキャバクラに通い詰めたりしてやがるし、副長とかはアニオタで犬の餌ばっかり食ってやがるし、ドS隊長とかもいやがるし、ブラコン隊長とかもいるし、それにそれに仕事とかいってバカンスとか平気で行きやがるし、コイツラの呼び名なんて税金泥棒で十分なんだよ」

銀時がそう言っていると

???「誰が税金泥棒ですか。失礼な」
剣心「おや、之は神裂殿」
銀時「よう。女税金泥棒の親玉」
神裂「斬り殺されたいんですか?坂田銀時」

銀時に向かって細い眼でこう言ったのは真女組の局長“神裂火織”である。幕府の女剣士では1，2を争う腕の持ち主でもある。“七閃”と言う特殊な糸剣術みたいな物を使うのだ。原作と同じく

神裂「全く…、相変わらず貴方は失礼な人ですね。おや、そちらは？」

神裂は銀時たちと一緒にいるフェイト達に気づいてそう尋ねた。

フェイト「フェイト・テスタロッサです」
なのは「高町なのはです」
アルフ「あたしはアルフ」
シグナム「シグナムだ」
ヴィータ「ヴィータだ」

フェイト達が神裂に挨拶した。

神裂「そうですか貴方達がナギお譲様が言っておられた。私は真女組の局長の神裂火織と申します。いつぞやはアルカがお世話になったそうで」
フェイト「あ、言え、寧ろお世話になったのはこっちのほうですし」

神裂の挨拶にフェイトは丁寧に返事をした。
すると
？？？「おい、阿呆共。うちの屯所の前で何をやっている」
剣心「斉藤」
銀時「ちっ、何だテメェかよツリ目」
そこにいきなり人を罵倒するような言葉を発して現れたのは真選組三番隊隊長である斉藤一が現れた。斉藤の姿を見て銀時が思わず嫌な顔をした。
なのは「斉藤さん。お久しぶりです」
斉藤「ん？」
なのはが斉藤に挨拶をした。そんななのはを斉藤が見つめた。
斉藤「ふん。何だあの時のイタチ娘か。何でお前達がこんな所にいる？」
なのは「イッ、イタチ！？」
いきなり斉藤にイタチ娘呼ばわりされてなのはは思わず驚いた。
フェイト「なっ！？いきなりなのはに向かってなんて事言うんですか！！」
ヴィータ「そうだ！いきなりそんな事を言うなんて何さまだテメェ！！」
フェイトとヴィータが斉藤に向かって怒鳴った。しかし斉藤はそんな怒鳴り声などガン無視してヴィータを見た。

斉藤「おい、なんだこの……猿娘は」
ヴィータ「さっ！猿！？」

斉藤はヴィータを見た途端猿娘呼ばわりした。

ヴィータ「テメェ！誰が猿だコラ！！」
斉藤「そうやってキーキー言っているところが猿だと言うんだ阿呆」
ヴィータ「テメェー！ぶっ潰してやるー！！」
剣心「まあまあヴィータ殿、斉藤はこういう男なんだ。怒っても仕方ないんでござるよ」

斉藤の言葉にブチキレたヴィータが斉藤に襲いかかろうとするのを剣心が必死で止める。
結局あの後暴れるヴィータをなだめた後、銀時達は屯所を後にした。

しばらくして銀時達は歌舞伎町公園にやってきた。

神楽「ここが歌舞伎町公園アル」
なのは「へ～大きな公園ですね。」

神楽の言葉になのはが感心したように答えた。実際にこの歌舞伎町公園は広い公園である。立派な噴水もあるしね。
すると噴水の前で箒を持って木の葉を掃いている緑髪の少年がいた。

銀時「何だ。今日はここの掃除か？」
剣心「今日はこの公園で掃除でござるか？植木殿」
植木「ん？なんだ。銀さんと剣心か」

そう言って軽く返事したのは植木耕介。漫画『うえきの法則』の主人公である。
この世界での彼は別に天界人ではありませんが能力者ではあります。しかもＲＥＶＥＬ７です。能力はゴミを木に変え、その木を『鉄（くろがね）』や『百鬼夜行（ピック）』に変えて攻撃できるという物です。しかも連続発動も出来ます。原作みたいにネ。まあ、都合のいい設定かもしれませんけど、ご都合主義ってことで勘弁してください。
わっ！！やめて！石投げないで！！

植木「皆で散歩か？昼間っから、相変わらず仕事してねーんだな銀さんは」
銀時「うるせーよ。そう言うテメェこそ学校は如何したんだよ」
植木「今日は創立記念日で休みなんだよ」

植木の言葉に銀時がツッコミ、銀時の言葉に植木がそう答えた。

植木「ん?そっちの連中誰だ?見た事ねーけど」
剣心「ああ、彼女達は拙者達の知り合いで…」
フェイト「フェイト・テスタロッサです」
なのは「高町なのはです」
アルフ「あたしはアルフ」
シグナム「シグナムだ」
ヴィータ「ヴィータだ」

フェイト達が植木に挨拶した。

植木「そうか、俺は植木耕介だ。よろしくな」

植木もフェイト達に挨拶した。

アルフ「何でアンタ公園の掃除なんかしてるんだい。今日は学校休みなんだろ?家でゆっくりしとけばいいじゃないか」

アルフが植木にこうたずねた。
すると銀時が

銀時「こいつはな、いい事をするのが趣味みたいな物なんだよ。」
植木「趣味じゃねぇよ別に。唯俺は『一日百善』を心掛けてるだけだよ。まあ、掃除は趣味だけど」

銀時の言葉に植木は特に表情を変えずにそう答えた。
すると神楽が公園のベンチに一人の男が座っているのを見つけた。

神楽「あ、『マダオ』アル」

神楽はその人物を見た途端そう言った。

マダオ？「ゲッ！激辛毒舌娘」

マダオも神楽を見た途端急に嫌な顔を見せた。

マダオ？「チョット待ってエェェェ！！俺の紹介文マダオになってんじゃねぇか！！」

だってアンタ『マダオ』じゃん

マダオ？「せめて名前紹介してよ！俺は『長谷川泰三』だよ！何！初登場でこの扱い！？酷すぎない！？」

マダオ…もとい長谷川泰三はそう叫んだ。

とりあえず話を戻す。

銀時「何だ。また面接落ちたのか？長谷川さん」

長谷川「ほっといてくれ……。どうせ俺なんて」

銀時が長谷川にこう尋ねると長谷川がこう返してきた。また仕事の面接に落ちてしまったようである。

フェイト「神楽、『マダオ』って何？」

フェイトが首を傾げながら尋ねた。

神楽「まるでダメなオッサン。略して『マダオ』アル」

神楽は平然とした顔でそう答えた。

アルフ「ま…まるでダメなオッサン？」

アルフは思わず細い眼で長谷川を見つめた。
確かに何かこう…ダメそうな雰囲気がある。アルフは若干引いた。
ヴィータやシグナムも引いている。

長谷川「いや、別に教えなくてもいいでしょ！ほらっ！金髪の女の子とか引いちゃってるよ！！」
神楽「意味は他にも”マジでダサいオッサン”とか”まだまだ堕落していくオッサン”とか”まるでダメな夫”、“何をやってもまるで無意味な駄目なオッサン”とかいろいろあるアル」

長谷川の言葉を無視して神楽が何の遠慮もなく言った。人の心にグサグサと突き刺さる嫌な言葉を
それを聞いたなのは達は、哀れみと同情の視線を長谷川に向けた。
さっきまで引いていたアルフもだ。

長谷川「ちょっ…やめろ！ホントやめて！そんな目で俺を見ないで！なんで初登場でこんな扱いなんだよ！！」

ちくしょオォォォォ！！、と長谷川は涙目で叫んだ。

植木「大変だな。オッサンも」

植木はそんな事を言いながら木の葉を掃いていた。

公園を出た銀時達は今度は神社にやってきた。
しかし別にここはあの巫女姉妹の神社ではなく『犬夜叉』に出てくる日暮神社である。
そこには先ほどの植木の様に掃除をしている巫女姿の少女がいた。

剣心「かごめ殿。神社の掃除でござるか」
？？？「あら、剣さん達、いらっしゃい」

剣心の言葉に返事をしたのは『日暮かごめ』犬夜叉のヒロインである。

銀時「よォ、ゴリラ巫女」

銀時がこんな事を言うとかごめは無言で箒の先っちょを向けて思いっきり投げつけた。

ドゴオッ！！

銀時「ホベリバッ！！」

箒の先っちょは見事に銀時に当たり顔をめり込ませながら銀時はそう言ってぶっ倒れた。

剣心と神楽は“自業自得”といってその場に倒れた銀時を見つめた。
フェイト達は顔を青くしてその場に倒れた銀時を見つめた。

かごめ「全く、相変わらず腹の立つ…あれ？剣さん、その子達は？」
剣心「ああ、彼女達は拙者達の知り合いで…」
フェイト「フェイト・テスタロッサです」
なのは「高町なのはです」
アルフ「あたしはアルフ」
シグナム「シグナムだ」
ヴィータ「ヴィータだ」

フェイト達がかごめに挨拶した。

かごめ「そう、私はこの神社の巫女で日暮かごめよ。よろしくね。」

かごめもフェイト達に挨拶した。

神楽「かごめの姉御、犬っちはどこあるか？」

神楽がかごめにそうたずねた。

かごめ「“犬夜叉”の事？待ってて、今呼ぶから。犬夜叉―！！」
？？？「うるっせぇな。なんだよかごめ」

かごめが呼ぶと寺の中から赤い着物を着た長い白髪に犬耳の青年が出てきた。
『犬夜叉』の主人公である犬夜叉本人である。

かごめ「お客さんが見えたのよ。あんたも挨拶しなさい」
犬夜叉「あ？何で俺がそんな面倒くせぇ事……」

かごめ「おすわり！！」
犬夜叉「んぎゃっ！！」

かごめがそう言うと犬夜叉がかけている首の宝珠が一瞬光、犬夜叉がその場にぶっ倒れた。

フェイト「えっ、えっ！？」
アルフ「なっ、なんだい！？今のは！？」

突然犬夜叉がその場にぶっ倒れたのでフェイト達はびっくりした。

なのは「あ、あの～…今のは一体……」
かごめ「ああ、今の？犬夜叉が首から掛けている宝珠にはちょっと木霊が掛けてあってね。今みたいに“お座り”って言うとこうなるの。言う事聞かない時はこうするのが一番なのよ」

かごめはなのはにそう説明した。

神楽「大丈夫アルか？犬っち」
セイバー「相変わらず尻に敷かれてますね」

神楽とセイバーが倒れている犬夜叉に近づいてそう言った。

犬夜叉「いてて…かごめテメェ！いきなり何しやがる！！」
かごめ「何よ！あんたが言う事聞かないのが悪いんでしょ！」
犬夜叉「俺はテメェのお手伝いさんじゃねぇぞ！」
かごめ「何よ！犬なら犬らしくご主人様の言う事ちゃんと聞きなさい！！」
犬夜叉「俺を犬コロ呼ばわりするんじゃねぇ！！」

かごめと犬夜叉は口喧嘩を始めてしまった。

アルフ「ねぇ、剣心」
剣心「何でござるか？アルフ殿」
アルフ「あの犬夜叉って奴“天人”なのかい？人間には見えないけど」
フェイト「アルフ見たいに動物の耳がついてるけど？」
剣心「犬夜叉殿は“天人”ではなく“半妖”なんでござるよ」
ヴィータ「半妖？何だよそれ？」

ヴィータが剣心に尋ねる。

剣心「人間と妖怪の間に生まれた者の事を半妖と呼ぶのでござるよ」
シグナム「そんな者達がいるのか？」
剣心「まあ、珍しい者達である事に違いはないでござるがな」

剣心はそう説明する。
そして銀時が犬夜叉に近づいた。

銀時「おめぇも相変わらず大変だな、犬っコロ」
犬夜叉「誰が犬ッコロダ！このちり毛野朗！！」
銀時「之はちり毛じゃなくて天パだっていつも言ってんだろうが！！お座りなんてお座りなんてさせられてる時点で十分犬っころじゃねぇかテメェは！！どうせその鼻とかで物探して後ろ足で穴でも彫って埋めたりとかしてんだろそこらの犬と一緒で！！」
犬夜叉「俺を犬コロ呼ばわりするんじゃねぇ！ぶった切られてぇのか！！」
銀時「上等だコラァ！！逆に俺がテメェをぶった切ってやらぁ！！」

今度は犬夜叉と銀時が鉄砕牙と木刀を構えて喧嘩を始めようとした

ので間やかごめがお座りで犬夜叉をおとなしくさせ剣心が銀時を抑えてそのまま日暮神社を跡にした。

それから少し歩いて行くと、

フェイト「あっ、お花屋さんだ」

フェイトが花屋を見つけた。
銀時と神楽とセイバーは顔色を青くし、冷汗を流した。そんな銀時と神楽とセイバーの異変に気付かず、フェイト達は花屋に寄って、外に並べられている花を見た。

ヴィータ「へぇ～。綺麗だなぁ」
シグナム「それに、どれも見た事もない種類だ」

見た事もない珍しい花を見ながらヴィータとシグナムが言った。
すると、

？？？「いらっしゃいませ」

店の中から野太い声が聞こえた。
フェイト達は顔を上げて、声の主を見た。見た瞬間、全員顔を引きつらせ、大量の冷汗を流した。
店の中から出てきたのは、身長ニメートルくらいの巨体で、顔は鬼のような形相をしている。ライオンのような黒いたてがみが後頭部から首の周りを覆い、側頭部から角が一対生えている。
屁怒絽「はじめまして。僕、ここで花屋をやっています、屁怒絽（ヘドロ）です」

赤い眼を光らせ、最凶ボイスで自己紹介した。

屁怒絽「放屁の『屁』に怒りの『怒』、絽便マスクの『絽』と書いて……屁怒絽（ヘドロ）です」

屁怒絽は自分の名前の詳しい説明を何故かした。
鬼の形相で睨まれ……いや、屁怒絽さん本人は睨んでるつもりはないのだが、五人は屁怒絽に恐怖した。
え…？何ですかこの人？この人も天人？それとも妖怪？ゾーグみたいな魔導生物兵器じゃないのか？っていうかゾーグより怖いんですけど！ゾーグよりも強そうなんですけど！何でこんな化物が花屋？シュールだわー！つーかありえないでしょ！こんな花屋！化け物屋敷にしか見えないんですけど！！すべてのお花が生物兵器にしか見えなくなるんですけど！！
五人は心の中で、それぞれそんな事を思ったが、決して口には出さない。

口に出した瞬間、殺されるかもしれないから。
フェイトとなのはは目を大きく見開き、冷汗を流し、尻餅を着いている。
シグナムはレヴァンティンを出すが、恐怖のあまり鞘から剣を抜けなかった。
アルフとヴィータは目に涙を浮かべ、それぞれフェイトとシグナムに抱き付いてガタガタ震えている。
後ろにいる銀時と神楽とセイバーも顔を引きつらせている。たまと剣心は特に怖がっている様子はない。
屁怒絽は視線をフェイト達から外し、

屁怒絽「おや。坂田さんと緋村さんと神楽さんとセイバーさんとたまさんじゃないですか」

五人に気付いた。

銀時「ど…どうも……」
神楽「こんにちは……アル……」
セイバー「は…はい……」
たま「こんにちは、屁怒絽様」
剣心「こんにちはでござる、屁怒絽殿」

銀時と神楽とセイバーとは震える声で挨拶し、剣心とたまは普通に挨拶した。

屁怒絽「このお嬢さん達は、坂田さんと緋村さんのご友人ですか？」

フェイト達を見ながら、屁怒絽が尋ねた。
見られた瞬間、フェイト達はビクッと体を大きく震わせた。

銀時「あ…ああ…そうだ…いや、そうです」
剣心「うむ、遠くに住んでる知り合いなんでござるよ屁怒絽殿」

銀時は、体中から嫌な汗を流しながら答えた。
剣心は全く恐がった様子もなく普通に答える。
剣心は人を見た目で判断するのではなく心で判断するので屁怒絽が恐い人物でない事が分かりきっているので全く恐がっていないのである。之も“飛天御剣流”の読みの力なんであろうか？

屁怒絽「そうですか。ではお近づきの印に、コレをどうぞ」

屁怒絽は小さな花が植えられている植木鉢を、一つずつフェイト達に渡した。
震える手で、フェイト達は受け取った。

屁怒絽「坂田さん達のご近所ですから、これからもよろしくお願いします」

赤い目でフェイト達を見つめる。
誤解がないように言っておくと、屁怒絽さんは悪い人ではありません。見た目メチャクチャ怖いですが、中身は清廉で生き物を愛する優しい人物です。ちなみにかなり強い傭兵部族の一つ『茶吉尼族』の天人で、メチャクチャ強いです。

『は…はい。ありがとうございます』

五人は声を揃えてお礼を言った。
フェイト達が、屁怒絽さんの優しさに気付く日は来るのか？

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『真王』さんから「ダークワン・・・やつこそ真のラスボスか」

神「ま、俺様が一番強いけどな」

真王「銀河系潰した本人がそれをいうか？」

神「ＫＩ☆ＮＩ☆ＳＵ☆ＲＵ☆ＮＡ！」

真王「だから英語で言うな。質問行こう『『超リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』～大次元鎮魂歌～、スーパークロスバトルアルティメット』でもしかしてゲストキャラ参戦の予定がありますか？』」

神「おお！いいねそれ・・・って俺『リィーン』のとこに許可がな

きゃ出れねぇ」

レーティア「次は私が…『『超リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』～大次元鎮魂歌～、スーパークロスバトルアルティメット』でもしかして転生者も出るの？』」

ジャンヌ「最後は私。『銀さん達も悪役組も『スマブラハーツ』のマリオさんに勝てるの？』」

真王「たしか幻想郷風に言うなら『ありとあらゆるチートとバグに神より授かりし力を無効にする程度の能力』…だったな？それにマリオの格闘レベルは神以上のクラスらしい」

レーティア「それじゃあ待ったね？さて、ギルシアと子供作ろうかな？？？」

真王「なぜ宣言する？」

支配者「質問の答えですが、『超リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』～大次元鎮魂歌～では転生者を出そうと思っていますがスーパークロスバトル・ザ・アルティメットではとりあえずその予定はありません。ゲストキャラは他の小説の方にいつか頼むかもしれませんね。両方とも」

銀八「はい、そうらしいですよ。と言う訳で「真追う」さん。楽しみに待っててくださいっと」

剣心「次の質問でござる。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから「銀さん、御坂、剣心、シグナム、ナギに質問。
僕の『銀魂ライダーディケイド』で、一番良かったと思う話は？

剣心に質問。
シグナムにキス去れた時の場面をもし薫に見られて、殺されそうになった時に自分の余命が残ると思いますか？

銀さんに質問。
僕の『銀魂ライダーディケイド』で、羽美を怒らせて殺されそうになった自分をどう思いますか？」ではお答えお願いするでござる」

銀時「第四話だな。新八のオタクっぷりが面白かった」
御坂「第六話じゃない。新八が弄ばれる所が面白かった」
剣心「拙者は皆面白いと思うでござるよ」
シグナム「私はよく分からんな」
ナギ「新八が遊ばれている第四話と第六話面白かったな」

銀八「んじゃ次はシグナムだな」
シグナム「ああ、確かに奴は怖いが私とて騎士だ。返り討ちにして見せるさ必ずな」

銀八「そうか、んじゃ次お前な」
銀時「何で俺があんな奴に殺されかけなきゃいけねぇんだよ……」
羽美「あんたが悪いんでしょうが！このクソ天パァァァァァァ！！！」
銀時「ウギャアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

銀時はまたしても羽美に追いかけられた。

銀八「はあ、勝手にやってろっての…。と言う訳で『亀鳥虎龍』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第六十五訓　初めての経験はいろいろあるもんだ。（後書き）

支配者「次回は江戸見学の続きの話です」

銀時「またキャラ増えやがったな……」

支配者「次回はまたまたあんなキャラやこんなキャラが出ますよ」

全『まだ出てくんのかよ！！』

第六十六訓　人の嫌がる事はするな（前書き）

支配者「はい、前回の続きですよ」

銀時「今回はどんなキャラを出す気なんだよ」

支配者「それは見てのお楽しみですよ」

剣心「リリカル剣魂スペシャル始まるでござるよ」

第六十六訓　人の嫌がる事はするな

屁怒絽さん…いや、屁怒絽様との対面を済ませたフェイト達は、江戸の街を歩いていた。
手には、屁怒絽様から貰った植木鉢がある。

フェイト・なのは
「こ…恐かった……」
アルフ「そうだね…」
ヴィータ「あれはねぇだろ……」
シグナム「生きた心地がしなかったな……」

フェイト達は、屁怒絽さんとの初対面でかなり疲れている。
無理もない。あの最強顔面に睨まれたら、生きた心地がしない。

銀時「まぁ、よく頑張ったよ」

銀時はフェイトの肩を叩きながら言った。

剣心「人を見かけで判断してはいけないと思うでござるがな」

剣心はそう言うが

神楽「あれは人じゃないネ」
セイバー「そうです。あれは“化物”です」

神楽とセイバーはそう言うのであった。
剣心は苦笑いをした。

ヴィータ「ところでさァ銀時」

その時ヴィータが口を開いた。

ヴィータ「この世界、暑くねーか？」

汗を拭きながら、ヴィータは言った。

ヴィータ達の世界は、まだ冬だ。だけどこの世界の暑さは、まるで夏みたいだ。

銀時「当たり前だろ」

剣心「夏なんでござるから」

さらっと銀時と剣心は言った。

『夏！？』

ヴィータ達は驚いた。

銀時「お前らの世界と、この世界は季節がズレてんだよ」

シグナム「そうなのか」

アルフ「道理で暑いはずだよ」

シグナムとアルフは、手をパタパタ振って涼もうとしている。

シグナム達は長袖を着ているので、尚更暑い。

そして、しばらくまた歩くと源外の工房に似た感じの建物が見えてきた。

なのは「あっ、工場だ」

ヴィータ「源外の爺さんの工場に似てるな」
なのはとヴィータは興味深そうにその工場、というか研究所にも見えなくもない建物を見つけた。
フェイト「ねぇ、剣心。ここは？」
剣心「ああ、ここはでござるな……」
剣心がこの建物の説明をした途端銀時が
銀時「ここではな、こういうんだよ。お～い“チビ錬金術師”～」
銀時がこう言った瞬間
ドドドドドドドドドドッ！！
何かが走ってくるような音が聞こえた。
そして、次の瞬間
？？？「誰が“スーパーウルトラダイナマイトドチビ”だぁー！！！！（怒）」
銀時「グベラハッ！！！！！」
金髪の少年が飛び出してきて銀時の顔に思いっきり飛び蹴りを食わせた。
アルフ「わわっ！！」
ヴィータ「なんだなんだ！？」
フェイト達は突然の出来事に唯驚いた。

？？？「オイコラクソ天パ！もういっぺん言って見ろ！！誰が“ウルトラグレートボンバードチビ”だぁ！？（怒）」

金髪の少年がぶっ倒れた銀時の胸倉をつかんで叫び続ける。

剣心と神楽とセイバーは“自業自得”と銀時を見つめた。

アルフ「イヤイヤイヤ！そこまでは言ってないよ！！」

ヴィータ「それに最初に言ったのと違ってるぞ！！」

アルフとヴィータがその少年の問答が明らかに間違っているので突っ込んだ。はっきり言って半分は理不尽な怒りである。

？？？「うるせぇ！誰だかしらねぇが“ドチビ”は黙ってやがれ！！」

金髪の少年がヴィータに向かってそう怒鳴る。

之を聞いたヴィータは

ヴィータ「んだとぉ！！テメェだって十分“ドチビ”じゃねぇか！！！」

？？？「ああ！？誰が“アルティメットハイパードチビ”だ！！！」

ヴィータ「だからそこまでは言ってねぇよ！！！！」

金髪の少年がヴィータに怒鳴り、その見当はずれな言葉にヴィータはツッコンだ。

？？？「その辺にしときなよ、兄さん」

すると、また金髪の少年が出てきた。最初に出てきた金髪の少年よ

り少し大きめの少年である。

???「うるせぇ！アル！！お前は黙ってろ！！」

金髪の少年はその少年をアルと呼び“黙ってろ”と一喝した。

アル「そう、じゃ“ウィンリィ”～兄さんが～」

???「わーっ！！バカアル！アイツを呼ぶな！！」

少年は急に慌ててその少年を止めた。

その後、金髪の少女が出てきて金髪の少年をぶん殴った。

しばらくして

???「ホントすいません。剣さん、家のバカが…」
剣心「イヤイヤ、悪いのは人のコンプレックスを指す言葉を言ったうちの馬鹿者でござるよ」
神楽「そうアル、ウィンちゃんが気にする事ないね」
セイバー「そうですよ。悪いのは銀時ですから」

金髪の少女に対して剣心と神楽とセイバーがこう言った。
因みに金髪の少年と銀時にはこぶが出来ていた。銀時を殴ったのは神楽であった。

アルフ「あのさ～剣心」
剣心「何でござるか？アルフ殿」
アルフ「コイツラ結局誰なんだい？」

アルフは剣心に質問する。

剣心「ああ、紹介するでござるよ。彼らは」
アル「ああ、良いですよ剣心さん。自分で言いますから」

剣心は紹介を始めた用としたがアルが自分で言うといった。。

アル「始めまして僕は“アルフォンス・エルリック”といいます。アルで良いですよ。で、こっちが幼馴染の」

ウィンリィ「ウィンリィ・ロックベルです」
アル「ほら、兄さんも挨拶しなよ」
エド「エドワード・エルリックだ……。エドで良い」

アルとウィンリィが普通に事項紹介をし、エドが渋々と自分の名前を言った。
ちなみに分かっているとは思いますがこの“エドワード・エルリック”と“アルフォンス・エルリック”は漫画『鋼の錬金術師』の主人公達です。この世界での彼らは錬金術は使えますがエドは右腕と左足は機械鎧（オートメイル）である。アルは鎧ではなく普通の人間のままだけど。まあ、エドの場合は小さい頃に事故を起こしてあんな風になってしまったと言う事にしておきましょう。ウィンリィは勿論原作通りに二人の幼馴染で、原作の最終話ではエドにプロポーズ紛いの告白を受け取った。

エド「作者アァァァ！！　恥かしいからソレ言うなアァァァ！！！！」

ココではエドの婚約者のウィンリィという事になっている。
因みに之は『亀鳥虎龍』さんの小説『万事屋奇譚幕』のネタだが人物設定を借りて良いという許可を頂いている筈なので大丈夫だと思います。でも一応すいませんといっておきましょう。

フェイト「始めまして、フェイト・テスタロッサです」
なのは「高町なのはです」
アルフ「アルフです」
シグナム「シグナムだ」
ヴィータ「ヴィータだ」

フェイト達もエド達に自己紹介した。

アル「この人達は剣さん達の知り合いなんですか？」
剣心「うむ、遠くに住んでる知り合いなんでござるよ。今日は江戸見学に来ているんでござる」
ウィンリィ「へ～、そうなんですか」
剣心はエド達にそう説明した。

神楽「ところでエドッチ、今日は特に苛ついてたアルな」
セイバー「そうですね。いつもかなり怒りますけど、慣れた相手に対してはそんなに怒らないはずなのに」
神楽とセイバーがそう質問する

アル「大佐から無茶な量の仕事を押し付けられて兄さん3日ほどろくに寝てないんですよ。だからずっとイライラしてるんです。そのうえ兄さんが一番気にしている事を言われたもんだから……」
剣心「怒って銀時に飛び蹴りを食らわせたと…」
ウィンリィ「はい……」
神楽「なるほどアル」
アル達の説明に神楽が納得した

エド「そうだぜ。唯でさえ大佐の奴に無茶な仕事押し付けられて3日も徹夜してイライラしてんのに人の一番腹立つ言葉を言いやがって……」

エドはチビと呼ばれる事に対してコンプレックスを抱いています。
原作同様
後、この世界のマスタング大佐は幕府とはまた違う軍隊のお偉いさ

ん、とでもして置きましょう。江戸以外にも大きな国家はこの世界にはいくつかありますので

銀時「だからっていきなり蹴り飛ばす事ねーだろーが、銀さん之で今日何回酷い目にあったと思ってんだ」

剣心「全部銀時が悪いんでござろうが」

銀時の言葉に剣心がツッコンだ。

フェイト「ねえ、剣心」

剣心「おろ？何でござるかフェイト殿」

フェイト「“錬金術”って何？」

フェイトが剣心に錬金術について質問してきた

アル「ああ、それなら僕が説明しますよ」

アルは錬金術に関して説明を始めた。まあ、この世界の錬金術は魔術の一種みたいな物である。錬成陣という物を書いていろいろな物を練成する。最もエドの場合は原作通り特別だが、ついでに国家錬金術師の制度についても説明した。

アルフ「つまり錬金術ってのは言わゆるこの世界の魔法の一種って奴かい？」

剣心「まあ、そんな所でござるな」

アルフの言葉に剣心はそう答えた。

その後で軽く工場や研究所の中を見せてもらいフェイト達はその場を後にした。

銀時「あ、そうだ」

エド達の工場を後にして歩いていた所で銀時に急に立ち止まった。

神楽「銀ちゃん如何したアルか？」

銀時「いやあ、なのは達に江戸を案内するのと一緒についでにと思ってワタルから借りてた“レディース４”のビデオを返そうと思ってたんだわ。いろいろあって忘れるとこだった」

ヴィータ「あたしら案内するのとついでにビデオ帰そうとしてたのかよお前……」

銀時の言葉にヴィータが呆れたようにツッコンだ。

んで、見学がてらのついでにビデオ屋に行く事になった。なのは達の世界でもビデオ屋なんて珍しくもないのに

～レンタルビデオ橘～

？？？「ワタル君っていつも不機嫌そうな顔してるけど、今日は特に不機嫌そうだね。」
？？？「……」

ここは超銀魂世界のレンタルビデオショップ橘。
そのレンタルビデオ屋のレジの前に立っているのは西沢歩。ハヤテのことが好きな目立たない普通すぎる女子高生である。
んでもって、その歩が話しかけている相手はレジに座っている少年橘ワタル。
何を隠そうこのレンタルビデオ屋の店長なのだ。
そして、橘グループの一人息子である、と言っても落ちぶれてます

けどね。
年齢はナギ達と同い年。

と言うかこの店は、橘グループのエンターテイメント部門であり、
また壊滅状態の橘グループの最後の砦となっている。

ワタル「別にいつも通りだよ……。だけどさぁ、俺だって一応『ハヤテのごとく』のレギュラーメンバーの一人な訳。この小説って『ハヤテのごとく』キャラも結構関わってるだろ、なのに放置される事五ヶ月……散々待たされりゃ不機嫌にもなるだろ……」
歩「まぁまぁ良いじゃない。私だってずっとほっとかれてたけど一応こうして出れたんだから」
ワタル「まぁ、別に大して気にはしてねぇけどな…」

ワタルはそう言ってレジのＤＶＤを脇の押しやる。
なんかメタ発言っぽいですけどね。

ワタル「うるせぇよ。バカ作者」

酷い！まあ、とりあえず話を戻す。

ワタル「あ、そういや今日はナギの野郎が来るとか言ってやがったな…」
歩「ナギちゃんが…？じゃあ！ハヤテ君も来るのかな！どうなのかな！！ワタル君！！」
ワタル「知るか」
歩「う……」

歩はひょっとしたらハヤテに会えるんじゃないかと思ってワタルにそう尋ねるがワタルに“知るか”と一喝されてしまったのであった。

すると

???「本当か!?ワタル!」
ワタル「わ!?一樹?」
一樹「本当にナギさんがここに来るのか!?ワタル!!」

ガバッと歩の後ろから姿を現したのは西沢一樹。
歩の弟で普通すぎる男の子だ。
因みに、年齢はワタルと同じくらい。
ワタルの数少ない友達でもある。

ワタル「……あぁ、本当だよ…」
一樹「ナギさんが……」

一樹は目を閉じて想いを馳せる。
そう一樹はナギ初めて会った時に一目惚れしているのだ。
ワタルとしては信じられなかった。なぜならワタルから見たナギとはただの自己中の漫画バカのお嬢様に過ぎないからだ。
彼としてはそんな奴の許婚である事は嫌な事以外の何物でもなかった。

ワタル「……お前いい加減目を覚ませよ。あんな奴の何処が良いんだよ?」
一樹「全部だ!彼女の一挙一動全て!だってかっこいいじゃないかナギさんは!全てにおいて僕の理想の女性なんだ!!」
ワタル「はぁ……」

ワタルは溜め息を吐くと一樹を気の毒そうに見上げた。

ワタル「んじゃ、暫く待ってるか?」

一樹「モチのロンさ！」
ワタル「……」

すると

銀時「お～い、ワタルいるか～？」
ワタル「ん、なんだ銀さんたちじゃねぇか」

銀時達がやって来たのにワタルが気づいた。

銀時「相変わらず不機嫌そうな面してんなお前、ずっとホッタらかしにされてたからか？」
ワタル「うるせぇよ」

銀時の言葉にワタルは不機嫌そうにそう答えた。

神楽「あ、『ハムスター』アル」

神楽が歩を見た途端そう言った。

歩「神楽ちゃん！私は『ハムスター』じゃなくて西沢！西沢歩！！」

神楽の言葉に歩はこう怒鳴るが

神楽「うるさいアル、新八（ダメガネ）同様に目立たない上にめったに出ない地味キャラの癖にレギャラーキャラの私に意見するんじゃないネ」
歩「なにその言い方！酷過ぎるんじゃないかな！？かな！！」

神楽のこの新八に対して並みに酷い言い方に軽く青筋を立てて怒る歩であった。

一応いっておくがこの世界での彼らは原作通りである。別に対して目立つキャラでもないので、オリ設定はいらねぇだろ。

ワタル「おい、その言い方なんかムカつくぞ（怒）」
歩「その言い方は差別なんじゃないかな!?（怒）」
一樹「その言い方だと俺もまったく目立たない奴みたいだぞ！（怒）」

すいません

ワタル「まあ、別にいいけどよ…。で、銀さん。今日はなんの様だよ？」
銀時「借りてたビデオを返しに来たんだよ」

銀時はそう言って“レディース４”が録画されてたビデオをワタルに渡した。

ワタル「あっそ、ご苦労さん……ん？」

するとワタルは銀時や剣心の後ろにいる五人組を見て驚いた

ワタル「うわあぁぁぁぁぁ！！！！」
歩「おわわっ!?どっ、如何したのかな!!ワタル君!?」
ワタル「なっ…なんでここに『リリカルなのは』に出てくる高町なのはやフェイト・テスタロッサがいるんだアァァァァーっ！！！？？？？」

ワタルはそう叫んだ。ワタルの家はビデオ店。アニメのキャラにはかなり詳しいのだ。リリカルなのはフェアなんかもやった事があるらしい。だからリリカルなのはのキャラクターである五人を見た途

端驚いたのだ。

ヴィータ「なんだよテメェ、人を天然記念物みたいな眼で見やがって」

剣心「おろ？ワタル殿はナギ殿から聞いてないのでござるか？」

ワタル「あ？ナギから何を聞くんだよ！？」

セイバー「私達が『リリカルなのは』の世界に行ったって事をですよ」

ワタル「あ！？なんだそりゃ！？俺聞いてねぇぞ！！」

ワタルはそう叫ぶ。すると

？？？「別にお前に言うことでもないだろ」

なぜかタイミング良く金髪ツインテールの少女がはいってきた。

説明するまでもないと思うがこの少女はナギである。

ワタル「おい、ナギてめぇ！何で俺には別に言う事じゃないんだよ！！」

ナギ「イヤァ、だってさぁお前アニメキャラに詳しいだろ。だから……」

ワタル「だから？」

ナギ「コイツラを始めてみたときにお前がどんな顔をするかと思ってさ。それが見たくて黙ってたんだ。いやぁ、予想したとおりの反応だったな♪」

全（一樹・剣心以外）『（こいつ“ドS”だアァァァァ！！）』

一樹と剣心以外の全員が心の中で思いっきり叫んだ。

ワタル「テメェ、ナギ！俺を弄ぶ為にワザと黙ってたのか！？」

ナギ「お～、お前達良く来たな」
ワタル「おい！無視すんな！！」

ワタルの叫びをナギは完全無視してフェイト達に挨拶する

歩「ナギちゃん。ワタル君がなんか叫んでるよ？」
ナギ「ん？何だ『ハムスター』もいたのか」
歩「だから『ハムスター』じゃないってば！！あれ？ナギちゃん？ハヤテ君は？」

歩は周りを見渡すがハヤテの姿は無い。

ナギ「今日はハヤテは来てない。」
歩「え？じゃあ一人で来たのかな？」
ナギ「いや、ヴィルヘルミナと来た」

するとナギに遅れてヴィルヘルミナが店の中に入ってきた。

ヴィルヘルミナ「皆様。こんにちはなのであります」
全『あ、こんにちは』

ヴィルヘルミナの挨拶にナギ以外の人物が思わず頭を下げて挨拶した

ワタル「じゃなくて！おい、ナギてめぇ！よくもからかってくれやがったな！！」
ナギ「うるさいのだ。チビでモテないくせに」
ワタル「それは関係ねーだろ！！！つーかお前みたいな自己中で我が侭な引きこもりに言われたくねーんだよ！」
ナギ「うっさい！バーカバーカ！！」
ワタル「バカつった方が馬鹿なんだよ！バーカ！！」

何やかんやで二人の物の投げ合いが始まった。

ナギ「黙れチビ！」
ワタル「うるせーよ！てめーもチビだろうが！」

ナギ・ワタル「うがァァァァ！！！！」

ナギとワタルは悪口を言い合いながら物を投げまくっていた。

フェイト「ねぇ、剣心」
剣心「おろ？何でござるか？フェイト殿」
フェイト「あの二人仲が悪いの？」
剣心「え？まぁ……」

フェイトの質問に剣心は苦笑いしながらそう答えた。
すると

？？？「若！ナギお嬢様に何をしてるんですか！」
ワタル「サキ…」

ワタルの手を止めていたのはメイドの格好をした緑髪の長髪の眼鏡を掛けた女の人だった。

サキ「ナギお嬢様に何かあったら怒られるのは私なんですよ？」
ワタル「ハイハイ…」

ワタルは渋々物をレジにおいた。

サキ「全く若と来たら…って…あれ？」
サキもなのは達を見た。
そして
サキ「キャアアアアアア！！？？」
凄く驚いた
サキ「なっ、なななななんでこんな所にアニメ『リリカルなのは』出てくるなのはちゃんとかシグナムさんとかがいるんですかアァァァアアア！！！？？？」
銀時「いや。もうそれいいっつの！」
そして、驚いたサキが持っていたビデオテープが棚に当たりその棚にあったビデオテープが全部ぶちまけられた。
結局みんなでそれをかた付ける羽目になったりした。
一樹「あ、あの～ナギさん。お久しぶりです」
ナギ「ん？一樹か。お前もいたのか」
一樹「は、はい／／／／」
ナギの言葉に照れたように挨拶をする一樹
しかし残酷な用ですがナギは一樹など眼中にありません。
まあ、一応、アニメに関する話などでは結構いい話し相手ではあるようですが
その後一樹とある程度話し合った後でナギが予約していたＤＶＤを借りて店を後にした。
その間ずっとワタルがいろいろと唸っていたのは言うまでもない

ナギ「それにしてもお前ら良く来たな」

歩いている途中でナギがフェイト達に向かってそう言った。

ヴィータ「おう、ナギも元気だったか？」
ナギ「まあな」
銀時「引きこもりで体力ないわりには元気はあるんだよな」
ナギ「うるさいぞプー太郎」
銀時「誰がプー太郎だごらぁ！！俺はちゃんと働いてるつうの！！テメェこそ引きこもりお嬢様の癖に！！」
ナギ「何だとぉ！！今日はちゃんと外に出てるだろうが！！」

銀時とナギが怒鳴りあった。
すると

ビシュン！！

銀時の頬を何かが掠った。
銀時の頬からは血らしき物が垂れた。
銀時はそれを見て顔を青くした。

ヴィルヘルミナ「お嬢様への無礼な態度は許さないのであります」

そこには包帯をたらして銀時を睨み付けているヴィルヘルミナがいた。
銀時は無言で顔を縦に思いっきり振った。
そして今度はたまが口を開いて
たま「銀時様はずっと五ヵ月もの間家賃を滞納しておられました」
こう言った。
銀時「おいたま！テンメェ余計な事言うな！！テメェは“妖怪告げ口女”か！？」
ヴィータ「いや、意味わかんねーよ。なんだよ“妖怪告げ口女”って」
銀時の言葉にヴィータは思わずツッコンだ。
ナギ「やっぱりプー太郎ではないか。と言うかお前この間やった金もうないのか？」
神楽「銀ちゃんには生活力ないから大金でもすぐ使い切っちゃうアル」
セイバー「ホント、駄目人間ですね。銀時は」
銀時「ふっざけんな！！ナギからもらった報酬のほとんどがテメェらの食費で消えたんじゃねぇか！！」
神楽とセイバーに対して銀時がこう怒鳴った。この二人はバカみたいに食いまくるので、いくら金があっても足りないくらいなのである。まあ、さすがにナギほどの大金持ちなら一生好きなだけ食わせていけるだろうが
ナギ「まあ、別に何でもいいがな。それよりはやて達は如何したん

だ？」

ナギがフェイト達にこう質問した。

シグナム「主はやてならば後から来る」

シグナムがナギの質問に答えた。

ナギ「そうか。じゃあ、お前ら家来るか？」

ヴィータ「ナギの家にか？」

ナギ「ああ」

アルフ「あたし行ってみたいかも」

なのは「私も」

なのはとアルフがこう答える。

ナギ「じゃあ、行くか」

ナギがこう言う

すると

アルフ「アッ、あそこにいるのってヤミと定春じゃないかい？」

フェイト「あっ、ホントだ」

遠くのベンチで座ってるヤミと定春をフェイトとアルフが見つけた。

ヴィータ「ん？隣にいんの誰だ？」

ヴィータがそう言った。どうやらヤミ達の近くに誰かいるようだ。

ナギ「多分、“蜜柑”の奴だろ」

ナギがそう言った

ヴィータ「おいナギ、蜜柑って誰だ？」

ナギ「ヤミと一番中の良い友達だよ」

ナギがヴィータにそう言った。まあ、実際にヤミと一番の中の良い友達は原作でも蜜柑であるからね。

ヤミ「タイヤキ一つどうぞ」

？？？「ありがとうヤミさん」

その頃、ヤミとＴｏ　ＬＯＶＥるの主人公、結城リトの妹、結城蜜柑と一緒にベンチでタイヤキを食べていた。

蜜柑「いやぁ～、それにしてもびっくりしたよ～。こんな所でヤミさんに会うなんて」

ヤミ「今日は朝から定春の散歩をしていましたから」

定春「あんっ！」

蜜柑の言葉にヤミが表情を特に変えずにそう答える。

定春も返事をした

蜜柑「そうなんだ、ねぇこれからカラオケとか行く？ルンさんの新曲入ったらしいから」

ヤミ「ルン？アア、あのメモルゼ星人の」

蜜柑の言葉にヤミはそう答えた。

因みにこの世界のルンも原作通りである。

蜜柑「アイドルになって有名人になったからね～」
ヤミ「そうなんですか」

蜜柑の言葉にヤミは普通にそう答える
特に興味もなさそうですが
すると

？？？「お～い、ヤミ～」
ヤミ「ん？銀時ですか」

銀時がヤミに呼んだ。
ヤミも呼びかけに答えた。

フェイト「ヤミ、久しぶり」
ヴィータ「よお、ヤミ」
シグナム「久しぶりだな」
ヤミ「フェイトになのは、アルフにヴィータにシグナム、来てたんですか？」
アルフ「うん」

ヤミの言葉にアルフは頷いた。

蜜柑「あの～ヤミさんこの人達は？なんかどっかで見た事あるきがするんだけど…」
ナギ「そりゃそうだ。こいつら『リリカルなのは』の世界から来たんだからな」
蜜柑「ええーっ！？」

ナギの言葉に蜜柑がかなり驚いた。

蜜柑「なっ、ナギさん！『リリカルなのは』ってＴＶアニメじゃ…
…」
ナギ「リリカルなのはのアニメの世界によく似た世界から来たんだ
よ。コイツラは」
蜜柑「そっ、そんな事ってあるんですか……？」
銀時「俺らだって未だに信じられねぇ時もあるんだけど現実に起こ
ってんだから仕方ねぇだろ」
剣心「うむ……」
蜜柑「そっ、そうなんですか…アハハ……」

銀時と剣心の言葉に蜜柑は苦笑いしながら答えた。まあ、実際にア
ニメのキャラが現実に存在しているなんて信じられないだろう。し
かし……彼らは知らない。自分達も別の世界ではアニメや漫画だけ
の存在であるなどと言う事は……。まあ、之は関係ないので余談に
しておくが

ヤミ「ところでこれからどこに行くんですか？」

たいやきを食べながらヤミが聞いてきた。

ナギ「私の家だよ。お前らも来るか？」
ヤミ「そうなんですか、如何します蜜柑？」
蜜柑「あの～、私が行ってお邪魔にならないんですか？」

蜜柑が遠慮がちにこういってくるが

ナギ「別に何人来たって問題じゃない、なあヴィルヘルミナ」
ヴィルヘルミナ「はいなのであります」

ナギとヴィルヘルミナはそう答えた。

ナギ「お前らも別にいいだろ」
銀時「アア」
剣心「うむ」
なのは「別にいいですよね。というか私達が嫌がる理由なんてないし」
フェイト「うん」
ヴィータ・シグナム『ああ』
たま・セイバー「はい」

皆こういって来た

蜜柑「そうですか。じゃあお言葉に甘えて」

一同はヤミと蜜柑を加えてナギの家を目指して歩き出した。

ナギ「あ」

ナギの家目指して歩いている途中、急にナギが立ち止まった。

銀時「あ、なんだよ？ナギ」

急に立ち止まったナギに銀時がそう聞いた。

ナギ「いや、急に“スイカ”が食いたくなった」

全（ヴィルヘルミナ以外）『は？』

ヴィルヘルミナ以外の全員がナギの突然の言葉に目を点にした。

ナギ「と言う訳で家に帰る前にスイカ畑に行くぞ」

ヴィータ「いやいや、どう言う訳だよ」

シグナム「突然すぎてわけが分からないんだが」

ヴィータとシグナムがツッコムが

ナギ「いいから行くのだ！」

ナギはそう言うとそそくさと行ってしまった。

しかしその時ヤミがナギに近づいて小声で話しかけてきた。

ヤミ「ナギ」

ナギ「何だ？」

ヤミ「こんな大勢の女性をあのスイカ畑に連れて行って大丈夫なんですか?私正直あそこには会いたくない“あの男”がいるんですが」
ナギ「“アイツ”の事だろ?良いんだよ。いざとなったら……“殺す”から……」
ヤミ「そうですか、なら良いんですが」

なんだか物騒な会話をしながらヤミとナギは銀時達の了解も碌に得ずにスイカ畑に向かった。

銀時達はスイカ畑に到着した。
どこを見てもスイカしかない。他にあるのはビニールハウスくらいだ。

なのは「へえ～大きなスイカ畑ですね」
ヴィータ「ホント見事なまでにスイカしかねえな」

そう言ってヴィータがスイカ畑に入ろうとした。
すると

ナギ・銀時『おい、勝手に入ると死ぬぞ』
ヴィータ「え？」

二人がそう言った時である。

ズドドドドッ！！

宝石型のミサイルがヴィータに向かって大量に放たれた

ヴィータ「わあああああっ！！」

ヴィータは死ぬ気で動いて避けた。

シグナム「なっ、なんだ敵か！？」

シグナムが思わずレヴァンティンを出して構えた。なのは達も思わずデバイスを出しそうになった。

???「貴方達は何者です?スイカ泥棒ですか?」

するとなんか羽を生やした女の子がヴィータ達に向かってそう言ってきた。

近くで見るとかなり可愛い女の子だ。

無表情だがそれでも可愛い顔で、しかも胸が大きいのである。

ヴィータ「てっ、てめぇか!!?攻撃して来やがったのは!!?」

???「答えてください。貴方達はスイカ泥棒ですか?」

女性はヴィータの言葉を無視してそう問いかける

ナギ「待て待て、“イカロス”。こいつらはスイカ泥棒じゃない」

神楽「そうアル、ここにいるのは私達の友達ネ」

ナギと神楽が目の前にいる女性に向かってそう言った。

イカロス「スイカ泥棒……ではないのですか?」

ヴィータ「チゲーよ!!誰がスイカ泥棒だ!!」

イカロス「…失礼しました……」

イカロスと呼ばれた女性がヴィータ達に謝った。

因みにこのイカロスと言うのは“そらのおとしもの”にでてくるあのイカロスである。

この世界での彼女はどっかの天人がおいていったエンジェロイドとでもしておこう。

銀時「おいなんか適当じゃねぇか？」

すいませんね

ヴィータ「なあ、ナギ。こいつ何なんだよ？」

ナギ「強いて言うならたまみたいなからくりだ」

フェイト「たまさんみたいな？」

フェイトがナギにそう質問する

ナギ「そうだ。まあ、こいつの方がかなり高性能だけどな」

ナギがそう説明した。

ヴィータ「そうなのか」

ヴィータがナギの説明を聞いたときである

？？？「アルファー、なんか合ったのー？」

？？？「イカロス先ぱ～い」

イカロス「ニンフ、アストレア」

するとイカロスみたい荷翼を生やしている女の子と胸のでかい女性がやってきた。

同じエンジェロイドのニンフとアストレアである。

ニンフ「何だ銀時達じゃない」

アストレア「あ、ホントですね」

ニンフ「相変わらず死んだ魚みたいな目してるわね」

銀時「ふん、そう言うテメェこそ相変わらずほかの二人と違ってドチビだな」
ニンフ「なっ、なんですってー!!（怒）」

銀時の言葉に怒ったニンフが銀時に殴りかかってきた。

銀時「いだっ!!何しやがんだ!!」
ニンフ「うっさいわね!地球のバカ猿の分際でバカにしてんじゃないわよ!このちり毛駄目人間!!」
銀時「んだとごらぁ!!」

銀時とニンフは喧嘩をしている。この通り二人は仲が悪かったりする

剣心「やれやれ」

剣心は呆れた様子でその光景を見つめた。

アストレア「それで何か用なんですか?」

アストレアがこう聞いてきた。

ナギ「スイカをもらいに来たんだよ」

ナギが用件を言った。
するとヴィータがイカロスとアストレアを見て

ヴィータ「どうでも良いんだけどさ」
イカロス「何ですか?」
ヴィータ「お前ら、シグナムより胸でかいよな」

などといきなり言いだした。

なのは「ヴィータちゃん！？」

シグナム「って、ヴィータ！！お前何言ってるんだ！？」

ヴィータの思わぬ言動になのはとシグナムが慌ててツッコンだ。

ヴィータ「あ…悪い……つい気になっちまって……」

イカロス「……マスターからよく言われます…」

ヴィータ「へ？」

イカロス「お前は相変わらず胸がでかいな、と……」

その言葉を聞いてフェイト達はそのマスターと言う人物に対して嫌悪感を抱いた。

アルフ「マスターって？」

アストレア「あそこにいるバカがそう」

アストレアがそう言った指さした先にかかしがいた。

『かかし？』

なのは達が気になってそのかかしに近づいてみた。

アルフ「ねえ、之なんかおかしくないかい？」

シグナム「というか之って……」

そうそれはかかしでなくボロボロになっている少年であった。

しかも裸で！！

『キャアアアアア！！！！』

思わずその姿を見てフェイトとなのはとアルフは悲鳴を上げた。

シグナム「なっ、何だこいつは！？」

イカロス「マスターです」

ヴィータ「こいつがマスター！？ただの変態じゃねぇか！！」

裸で吊り下げられているその少年を見てヴィータは思いっきり叫んだ。

ヴィータ「て言うか生きてるのかこいつ！？」

ヤミ「一応生きてますよ。えっちいゴキブリなんで生命力だけはありますから」

ヤミがそう言った。

？？？「誰がゴキブリだあぁぁぁぁぁ！！！！！」

ヴィータ「わっ！マジで生きてた！！」

？？？「勝手に殺すなあぁぁぁぁぁ！！！！」

神楽「何だホントに生きてたアルかゴキブリ」

？？？「当たり前じゃボケエェェェェェ！！！！」

イカロス「マスターおはようございます」

イカロスは裸の男に挨拶をした。

？？？「おはようじゃねーよ！！！イカロスさっさとこの縄をほどけ！！」

イカロス「ですがそんなことをしてしまったら、そはらさんに怒られてしまいます…」

イカロスは困惑の表情で悩んでいた。

アストレア「そうよバーカ。そんなことしたらそはらさんに怒られちゃうじゃない」

???「あんだと!!お前にだけはバカって言われたくねーんだよ!バーカバーカ!!」

アストレアと口喧嘩した後裸の少年は銀時達を見て言った。

???「あのすいませんが、誰かこの縄を解いてくれませんか?」

申し訳なさそうに言ってきた。

銀時「……仕方ねぇな。このまま裸でいられても困るしな」

そう言って銀時は少年の縄を解こうとした。

なのは「……所で…なんで裸で吊るされてるんですか?」

なのははは恥ずかしそうにしながらもその少年にそう聞いてみた。

すると少年は笑いながら

???「いや〜、実は学園都市の女子寮の女湯をこっそりと覗いてるところをそはらに見つかっちまってそれで……」

銀時「何?」

その言葉を聞いて銀時はそこら辺に落ちている鍬を持った。

???「え?あの何してるんですか?」

銀時「死ねやあぁぁぁぁぁぁ！！！！」
？？？「えええええええええ！！？？」

銀時はそこら辺においてあった鍬を持ってその変態に襲いかかった

？？？「おわあああああああ！！？？」

変態はすでにロープから解かれていたので何とか鍬を交わした。

？？？「ちょっ！ちょっといきなり何するんですかぁ！！？？」
銀時「うるせぇ！！エロ猿！！死にやがれえぇえぇえぇ！！！！」
？？？「えええええええ！！！？？？」
剣心「ぎっ、銀時！止めるでござるよ！！」
シグナム「とにかく落ち着け！！」
銀時「離せ！！剣心、シグナム！！あいつは女子学生の若い女達の裸を見たんだ！！俺だって見てぇのにいいいいいいいいいーーーーー！！！！！」
剣心「って銀時！お主どさくさにまぎれてなに言ってるんでござるか！！」
セイバー「銀時の言うとおりですね」
？？？「え？」

そう言うと今度はセイバーが自分の剣を抜いて変態に迫って行った。

神楽「そうアル。こんな女の敵でしかないやつ生かしておく価値ナイネ」
ヤミ「懲りずにまたえっちい事をしていたんですか。今日こそは引導を渡してあげましょう」
なのは「お兄さん……少し頭冷そっか……」

他の女性陣フェイト、アルフ、蜜柑、ヴィータ、ナギ、ヴィルヘルミナ、シグナム以外の女性陣が武器を持ってその変態に襲いかかろうとした。

ヴィータ「オイィィィィ！！お前ら気持ちは分かるが落ち着けえぇえぇえ！！！！」

剣心「少し落ち着くでござるよ！皆の衆！！」

蜜柑「ヤミさんも落ち着いて！！」

フェイト「なのは！ちょっと落ち着いてえぇえぇえぇえ！！！！」

四人はなんとかなのは達5人を止めようとした。

ナギ「おい、何故止める。こんな奴さっさと殺ってしまえ」

ヴィータ「オイィィィ！！ナギ！お前まで何言ってんだあぁぁぁぁ！！！？？？」

ナギの言葉にヴィータがツッコンだ。

？？？「おい！イカロス！！助けてくれぇエエエエエエエ！！！」

変態がイカロスにそう言った。

するとイカロスは突然背中に生えていた翼を全開に広げた。

しかもよく見るとイカロスの目が赤くなったのである。

なんか嫌な予感がする……。

イカロス「了解、マスターを救出する為にアルテミスを発射します。ターゲットロック、発射」

彼女の一声と共に翼から小型のミサイルが一斉に発射した。

小型ミサイルは上空に上がりそして……

銀時達に向かっている！

銀時「おい…あれ……やばくない……？」
剣心「不味いでござるな……」
アルフ「さっきのミサイルかい……？今度は数が半端じゃないんだけど……」
フェイト「はわわわわ……」
たま「危険ですね」
蜜柑「なに！なに！なんなのあれ！？」
ナギ「おい蜜柑。お前はこっちに来い」
蜜柑「え？」
？？？「おい！イカロス！！そんなことをしたら俺も巻き添え…」

そしてミサイルは銀時達に命中し……

ドオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォーーーーーン！！！！！！！

『ぎゃあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！！！！！！』

銀時達は全員吹き飛ばされたのである……。
最もナギとヴィルヘルミナと蜜柑は

ナギ「備えあれば憂いなしだな。ヴィルヘルミナ」
ヴィルヘルミナ「はい、お嬢様」
蜜柑「いいのかな…私達だけ……」

ナギと蜜柑とヴィルヘルミナはヴィルヘルミナの包帯の防御壁でちゃっかり助かっていた。

ニンフとアストレアは離れていたので被害はなかった。

そして

イカロス「先程は失礼しました。お詫びにこれをどうぞ」

イカロスはボロボロになった銀時達にコサック人形をプレゼントした。

なんでコサック人形なんだ?と本来ならツッコミが入るところだが、全員が疲れていたのでツッコミは無しにすることにしよう。

イカロスは自分のマスター＝変態に近づいて声をかけた。

イカロス「マスター大丈夫でしょうか?」

???「……」

返事がない、屍のようだ。

???「だから屍じゃねぇぇぇぇーーー!!!!」

まだ生きていたようだ、本当にゴキブリ並の生命力である。

でもあのミサイルを受けて生きている銀時達もどうかとおもうが。

アルフ「ところであんた結局名前なんて言うの?」

アルフが変態にそんなことを聞いた。

確かにこいつの名前をフェイト達は聞いていなかった。

智樹「俺か?俺の名前は桜井智樹って言うんだ」

ナギ「何を言っている。お前の名前はゴキブリだろうが」

智樹「チゲーよ！！」

桜井智樹はナギに向かって怒鳴った。
この世界での桜井智樹は原作通りの変態ではあるが心の優しい少年でもある。
しかし、かなりの数の女の子に嫌われているのは事実である。
まあ、こいつが生粋のドスケベなのだから仕方がない

ヴィータ「なあ、ナギなんでこいつ“ゴキブリ”なんだ？」
ナギ「女湯は平気で覗く、女子寮の女子更衣室には平気ではいる、胸のでかい女の胸を平気で揉む。そんな奴ゴキブリ以外の何物でもないだろ」

ナギの言葉を聞いてシグナムは思わず胸を隠した。

ヤミ「本当に生かしておく価値のない変態ですね。今すぐ止めを刺してしまいしょう」

そう言ってヤミが腕を剣に変えて智樹を刺し殺そうとする

智樹「おわあぁぁぁぁぁ！！！おい！お前ら助けてくれ！！」
ニンフ「何よ。智樹が悪いんでしょ」
アストレア「そうですよ。いっその事ホントに殺されちゃいなさいよ。変態バーカ！」
智樹「何だとぉー！！」

アストレアの言葉に怒鳴る智樹であった

ナギ「まあ、待てヤミ。やっぱ刺し殺すのは止めろ」
ヤミ「なんですか、どうして止めるんですか？ナギ」

ナギ「死体の片づけがメンドクサイ。近藤達を呼ぶにしても時間がかかる」

それだけか……。みんなはナギの言葉に顔を少し青くした。ナギがこう言うと

セイバー「では私の“エクスカリバー”で跡形もなく消し去りましょうか？」

ナギ「ああ、それだったら良いぞ」

智樹「止めてぇー！！お願いだから命だけはー！！！！」

セイバーの言葉に智樹は思わず命乞いをした。

剣心「皆の衆！！止めるでござるよ！！」

その後剣心が何とかセイバーを止め、銀時達はイカロスからスイカを幾つかもらってお礼を言った後その場を後にし、ナギの家へと向かうのであった。

そして智樹は言うと

智樹「何でまた吊るされてんだぁー！！」

智樹は命は助かったがヤミや神楽にボコボコにされ、また裸で吊るされてしまったのであった。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『キングオブカオス』さんから「質問です

この小説の全キャラへ

このキャラに勝てますか？（ハオよりはまし・・なわけなかった。）

名前　赤屍蔵人

登場作品　ＧｅｔＢａｃｋｅｒｓ－奪還屋－

能力紹介

・本気で動くと周囲の空間がその衝撃で崩壊する

・生死の境を超えた超越者であるため死なない（本人は死がイメージできないので死なないと思っている）それゆえ息が無くなって脈が止まっても肩が取れかかるほど切られても臓器をズタズタに引き裂かれても触れただけで皮膚が溶ける猛毒の煙の中にいても無事完全に無に還されても何処からともなく無く血の１滴が相手の背後の影にポタリと落ち、そこから瞬時に復活して攻撃を行える。

・自分の血液が混じったものを支配する。壁や柱に垂直に立ったり宙に浮いたり瞬間移動したりできる。プルトニウムをそのままポケットに入れながら長時間戦闘することができる。直接手で持つことも可能。

・赤い分身：少量の血から実体であり本物の分身を無数に生み出す（簡単に言えばもう一人の「自分」と言う存在を作り出すのと同じ）

多すぎて紹介しきれない・・・
他にも知りたいときは全ジャンル敵役最強スレまとめ@　Ｗｉｋｉを見てください。

皆さん、勝てますか？（失笑）

支配者「はい。お答えします。はっきり言って強すぎるので多分勝てません。唯一可能性があるとしたら『幻想殺し（イマジンブレイカー）』を持つ当麻だけですね。当麻の力で赤屍蔵人の能力を無効化して殴り飛ばすといったところでしょうね」

銀八「はい、と言うわけだから『キングオブカオス』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「次の質問でござるな。ペンネーム『アカイコイ』さんから「質問です

このキャラは次回作に出るのですか？

神威（銀魂の）」

支配者「今のところ予定はありません。まあ、多分でないと思います」

銀八「多分かよ」

支配者「仕方ないでしょうが、まだ決めてないんだから」

銀八「だそうです。『アカイコイ』さん。こんないい加減な作品でよければこれからも見てやってください

なのは「次の質問です。ペンネーム『黒神』さんから「犬夜叉へ

お妙と薫に傲慢ゴリラと言える勇気はありますか？
半殺し処刑が待っていますが？

お妙と薫へ

貴女達は自分の事を料理下手な傲慢雌ゴリラと自覚しているでしょうか？
もしそうだとすれば、もっと女らしくしたほうが良いですよ？

蒼と弥彦へ

僕が送ったオリジナル技レピシは気にってくれましたか？
また思いついた事があれば送ります。」

犬夜叉「ねぇよ。さすがに殺されたくねーしな。かごめはともかくあの女はやばすぎる」
かごめ「ふ～ん…じゃあお妙さんはともかくあたしには言えるって事？」
犬夜叉「オメェがゴリラだって事は今に始まったことじゃねーだろうが」
かごめ「お座り！！（怒）」
犬夜叉「グヘェッ！！」

犬夜叉はかごめの“お座り”を食らってしまった。

支配者「で、二番目の質問ですけどそれは却下と」

銀八「何でだよ！ちゃんと答えろよ！！」
支配者「あれを見ても答えられると思うの？」
銀八「ん？」

するとそこにはとんでもなくバカでかい黒いオーラをまとった薫とお妙がいた。
そしてなぜかプラカードを持っており、そこには『黒神ぶっ殺す♪』と書かれていた。
それを見て支配者と銀八の顔は思いっきり青ざめた。

銀八「ハハハ…じゃあ最期の質問な」

蒼紫「俺としては一応気に入っているつもりだ。お庭播州の小太刀二刀流の究極奥義まで考えてくれたようだからな」
弥彦「俺としてはもう少し俺っぽさがある技が欲しいって思っちまったな。なんか銀時と剣心のお下がりって感じがすんだよな」

銀八「はい、だそうです。と言う訳で『黒神』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第六十六訓　人の嫌がる事はするな（後書き）

支配者「次回はナギの家でのお話です」

銀時「あの馬鹿でかい家でのか」

支配者「はい、と言う訳で次回もお楽しみに」

第六十七訓　でっかいお屋敷に住んでる人と仲良くなればラッキーだと思う

支配者「すいませんでしたあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

いきなり土下座をする支配者

銀時「おい、何でこんなに更新が遅れたんだ？」

支配者「このところ忙しかったんですよ！出かける日も多かったし、それに……」

全『それに？』

支配者「実は面白い小説サイトを見つけちゃいまして…そこの小説に夢中になってるうちに書くのを忘れちゃいまして…てへ♪」

銀時・新八『てへ♪……じゃねえぇぇぇ！！！！！！（怒）』

支配者「ギャアアアアアア！！！！」

銀時「そんな理由で遅れたのかコラアアアアアア！！！！」

新八「ふざけんじゃねぇぞごらアアアアアアアア！！！！」

銀時と新八は支配者をボコボコにしている

支配者「すいません！許してえぇぇぇぇぇ！！！！」

剣心「ハハハ…リリカル剣魂スペシャル始まるでござるよ」

第六十七訓　でっかいお屋敷に住んでる人と仲良くなればラッキーだと思う

銀時達はイカロス達にスイカを貰ってからナギの家に到着した。

アルフ「あの～、何ですか、コレは…」

フェイト「……」

アルフ・フェイトは目の前の景色を指して唖然としていた。

ナギ「何って、ここが私の家だぞ。」

そう言ってナギは真顔で門を指差した。

門、と言っても高さにして軽く5メートル以上。支柱と支柱の間に波のように鉄格子が張ってあり、正面には扉。その扉の右側の支柱に大きな文字で『三千院』と掘られている。

因みに、門の外からだと中の様子は分からない。見えるのは森だけだ。

まぁ要するに、とてつもなくでかい敷地と言う事。

ヴィータ「家だぞ、じゃねーだろ!!お前コレ…」

動揺し過ぎてもはや言葉が続かないヴィータ。

まあ、無理もない、それほどナギの家はでかい。

なのは「ま、まさか…ここまで大きかったなんて……」

はっきり言ってなのはまで驚いていた。

すずかやアリサと言った大金持ちの友達を二人も持っているので大抵のでかい家を見ても驚かないなのはなのであったが、ナギの家は

桁が違った。はっきり言ってアリサとすずかの家を二つ一緒にしたかのような家なのである。いや、それ以上に広いかも……

因みに、この世界の三千院家の広さは練馬区の７０％！およそ３２，５００キロ平方である

ヴィータ「練馬区？何だよそれ？もっと分かり易い例え方してくれよ」

江戸城が１３個以上入ってもまだまだ余裕…

「どんだけだよ！聞いた事ねぇよ！江戸城１３個分なんて！」

「さっきから誰と話してるんだ？ヴィータ」

「いや…なんか、声が聞こえたから……」

一人なぜか叫んでいるヴィータにシグナムが突っ込んだ。

銀時「まあ、無理もねぇよ。最初俺だってこの家見た時、もう将軍のなんてただの将ちゃんにしか思えなくなっちまったからな」

美柑「銀さん、一応この国で一番偉い人にそんなこと言っちゃいけないと思いますよ……」

剣心「そうでござるよ、銀時」

銀時の“将ちゃん”発言に美柑と剣心が思わずツッコンだ。

ナギ「まあ、とにかく門をあけるか。お～い、お前達～」

ナギが誰かを呼んだ。すると

すると大剣を背負った巨大な騎士甲冑の男二人が現れた。

ヴィータ「ウワッ!?」
アルフ「なんだいコイツラ!?」

突然現れた二人の騎士を見て思わずなのはたち五人は身構えた。

ナギ「おい、よせ。この二人は家の門番だ」
『門番?』
???「お帰りなさいませ、ナギお嬢様、ヴィルヘルミナ様」
???「そちらの五人は初めて見ますが、お知り合いの方ですか?」
ナギ「ああ、そうだ。とにかく門を開けてくれ“ナイトモン”」
ナイトモン×2『ハッ』

ナギにそう言われ騎士甲冑を着たデジモン“ナイトモン”の二人は5M以上の巨大な門を軽々と開けた。　因みにこの三千院家の門はかな〜り重いです。

シグナム「す…凄いな……」

シグナムはナイトモン二人の怪力に少し驚いた。

ヴィータ「おいナギ、コイツラもデジモンか?」
ナギ「ああ」

ヴィータの質問にナギが短く答えた。

シグナム（そうか、やはり“デジモン”は強いのだな……ここに来たからにはぜひとも“奴”と戦ってみたいな……）

シグナムは心の中でこんな事を考えていた。ホント、バトルマニアですな。

因みにシグナムが言った『奴』とは跡で分かります。

ナギ「さてと、門が開いたところで行くぞ」
ナイトモン「お嬢様」
ナギ「ん？」

ナイトモンの一匹がナギに話し掛けてきた。

ナギ「何だ？ナイトモン」
ナイトモンA「先ほど、車椅子に乗った茶色髪の少女とそれを引いたその男と似たような色の髪の長い女が尋ねてきました。ナギお嬢様の知り合いだと言ってきました」
ナイトモンB「一応、マリア様やハヤテ様に確認したところ、ハヤテ様が確かにナギお嬢様の知り合いだと申されましたので通したのですが、よろしかったでしょうか？」
ナギ「車椅子に乗った少女とそれを引いていた女？ひょっとして…おい、そいつら名前はちゃんと名乗ったのか？」
ナイトモンA「はい、“八神”と名乗っておりました」
ヴィータ「はやてだ！」

ナイトモンの言葉を聞いてヴィータが叫んだ。

剣心「おろ？八神殿が来ているのでござるか？」
銀時「アイツなんでナギの家の場所知ってんだ？」
ナギ「大方源外の爺かバカ王女ララに場所を聞いたってとこだろ、しかしアイツすでに来ているということは、最初から私の家に向かっていたと言う事か？」

ナギはそう考えた。他になんではやてとリィンフォースがナギの家に来ているのか理由が思いつかない。

シグナム「主はやてはこの世界にきたらお前に家に行きたいといっていたからな」
ナギ「何だ、そうだったのか、だがそう言うことはもっと早く言え牛乳（うしぢち）」
シグナム「牛乳（うしぢち）！？」

行き成りナギに牛乳（うしぢち）と呼ばれたのでシグナムは思わず叫んでしまった。

ナギ「ヴィータ見たいに貧乳呼ばわりされるよりは良いだろうが」
ヴィータ「おい！何であたしが貧乳呼ばわりされるんだよ！？」
ナギ「うるさいのだ。永遠の八歳が」
ヴィータ「何だとぉ！！誰が永遠の八歳だゴラー！！」

ナギにそう言われ切れたヴィータがナギに襲い掛かろうとしたがヴィルヘルミナの包帯にグルグル巻きにされて捕まえられてしまった。

ヴィルヘルミナ「ヴィータ様、お嬢様への暴力は一切許さないのであります」

ヴィルヘルミナはグルグル巻きになっているヴィータに向かってそう言った。

ナギ「……とにかく行くぞ」

ナギはその光景を見てから家のほうに向かった。……ナイトモンの肩に乗せてもらってから

銀時「歩かねーのかよ……（ぼそっ）」

銀時は小声でツッコンだ。

ナギ「これが本宅だ」

銀時達一行はナギの豪邸の家にたどり着いた。
ナイトモンは途中で戻らせた。
なのは達五人は予想はしていた物のやはり驚きを隠せなかった。

銀時「何度見ても……ホンとでけぇ家だよな……」
剣心「まあ…江戸一番の豪邸でござるからな」
セイバー「私の住んでた城より大きいですからね……」
アルフ「メ…メチャクチャでかいね……」
なのは「やっぱりアリサちゃん達の家よりおっきい……」
フェイト「うん……」

神楽「銀ちゃん、いつかこんなでっかい家に住みたいアル」
銀時「不可能」

神楽の言葉に銀時はこう答えた。
まッ、絶対無理ですよね。
生まれついてか、よほどの人生の成功者でもない限りは

ナギ「おい、何ガタガタ言ってるんだ。入るぞ」

ナギの言葉を皮切りに全員が家の中に入った。

なのは「うわ～、やっぱり中も広いね。フェイトちゃん」
フェイト「うん……」

玄関から中に入ると大きな階段とシャンデリアがあった。階段は左右に分かれている

ヴィータ「どこの宮殿だよ……」
シグナム「全くだな……」

ヴィータとシグナムは入った途端のこの広すぎる空間を見て唖然とした。自分達の家も結構大きい家なのだがこの家に比べたらまるで犬小屋である。

???「お帰りなさい、ナギ、カルメルさん」

その時メイド服を着た女性がやってきた。

ナギ「おお、今帰ったぞマリア」

ヴィルヘルミナ「ただいま戻りました」

そう、このメイドさんはマリア、三千院家のメイド長である。
因みに彼女はピッチピチの17歳だ。
そうは見えないが……

マリア「何か言いましたか？作者さん」

マリアが黒いオーラを出した。顔は笑っているが黒いオーラがかなり恐い。
すいませんでした。
そして

マリア「始めましてこの三千院家でメイド長をしております。マリアと申します。」
フェイト「始めまして、フェイト・テスタロッサです」
なのは「高町なのはです」
アルフ「アルフです」
シグナム「シグナムです」
ヴィータ「ヴィータだ」

マリアとフェイト達が挨拶した。

マリア「シグナムさん達にはナギ達がお世話になったそうで……本当に申し訳ありません」
シグナム「いえ、世話になったのはむしろこっちの方ですし」
ヴィータ「はやての事あたし達と一緒に心配したり世話してくれたりしたし」
ナギ「そうだぞ、マリア。むしろ世話してやったのは私の方だ」
マリア「調子に乗らないの」

コツン

マリアはそう言うとナギに軽く拳骨をした。

ナギ「いたっ！何するのだー！」

マリア「ナギが調子に乗るからです」

ナギの言葉にマリアはこう言った。

ヴィータ「あの～、それよりはやてとリィンフォースが来てる筈なんだけど……」

マリア「ああ、そのお二人でしたら５６５３号室のナギのゲーム部屋に案内してますよ」

『ごっ、５６５３号室！？』

メチャクチャな数の部屋番号を言われフェイト達は混乱した

マリア「とりあえず案内しますのでついてきてください」

マリアの案内に従って銀時＆フェイト達ははやて達がいるという５６５３号室のナギのゲーム部屋に

ナギ「ああ、ヴィルヘルミナ、スイカ冷蔵庫に入れといてくれ、後でみんなで食うから」

ヴィルヘルミナ「はい」

しばらく歩いてフェイト達はナギのゲーム部屋に着いた。

フェイト「ここまで来るのに２０分もかかった……」
ヴィータ「この屋敷…マジで広すぎだろ……」
銀時「俺達ゃもうなれたけどな…」

フェイトとヴィータの言葉に銀時はこう言った。

はやて「オオ、皆も来たんか」
ハヤテ「お帰りなさいませ、お嬢様」
リィンフォース「お邪魔しています」

部屋の中に入るとはやてとハヤテ、そしてリィンフォースが部屋の中でゲームをしていた。

ナギ「何だゲームしていたのか？」
ハヤテ「あ、はい、八神さんがやってみたいと申されましたので」
ナギ「別に構わんが…私の今やっているＲＰＧゲームのセーブデータはいじってないだろうな」
ハヤテ「ああ、それなら大丈夫です。こっちにちゃんと移してありますから」

ハヤテはそう言ってナギに今やっているゲームのカセットを見せた。

ナギ「うむ、ならば良い」
神楽「ナギ、私もゲームやりたいアル！」
ナギ「そうか、じゃあ皆で出来るゲームにするか」

ナギはそう言うとプラスチックのゲーム箱から“大〇闘スマ〇シュブラ〇―ズX”のゲームを取り出した。

しばらくして

銀時「おい！はめコンボ辞めろ！動けなくなるだろーが！！」
ヴィータ「ゲームなんだから硬いこと言うな！」
銀時「神楽！ハンマー独占してんじゃねぇよ！汚ねーぞ！！」
神楽「勝負に卑怯もクソもナイネ、そんなの負け犬の遠吠えにしか聞こえないある」
銀時「んだとごらぁ！！」
アルフ「おい！誰だい！？今ボム兵投げた奴！！」
はやて「うわあ！何でこのタイミングで“ファイヤー”が出て来るんや！？」
なのは「キャッ！“毒キノコ”取っちゃった！」
美柑「ワアッ！地雷踏んだ！！」
ナギ「フハハハハ！ずっと私のターンなのだ！」
銀時「止めろナギ！オメーがそれをやると…終わったアァァァァァァ！」

三千院家にてナギ達がスマブラXで遊んでいた。どうやら今の勝負はナギの一人勝ちのようだ。

ヴィータ「チクショー。また負けたー。」
ナギ「ワハハハハ！ゲーム女王である私に勝とうなど１００年早いわ！！」

神楽「もう一回勝負アル！」
アルフ「今度は負けないよ！」
ナギ「おお！何度でもかかってこい！私は誰の挑戦でも受けるぞ！！」

コントローラーを置いてうなだれるヴィータ。隣にはまだやる気満々の神楽とアルフとその様子を見て笑っているシグナムとリィンフォースと剣心がいた。

リィンフォース「皆さん楽しそうですね」
シグナム「ああ、主はやても楽しそうに笑っている」
剣心「うむ、やはり皆で仲良く遊ぶのが一番でござるな」

三人はこんな会話をしていた。

ヴィータ「ううぅ……」

するとヴィータがなにやら体を僅かに振るわせた

ナギ「ん？」
はやて「どないしたんや？ヴィータ」
ヴィータ「いや、トイレに行きたくなっちまって……」
神楽「う○こか？う○こアルか？」
なのは「ちょッ！神楽ちゃん！女の子がそんなこと言っちゃ駄目だよ！」
美柑「そうだよ！」

神楽がヴィータに下品な事を言ったのでなのはと美柑が思わずツッコンダ。

ヴィータ「なあナギ、トイレってどこにあるんだ？」
ナギ「この廊下を出て真っ直ぐ行って突き当たりを右だ」
ナギはヴィータにトイレの場所を教えた。
ハヤテ「一人で大丈夫ですか？」
神楽「何なら付いてって上げようか？」
神楽がワザとらしくニタリとした顔を見せてヴィータに向かってそう言った。
ヴィータ「バカにすんな！トイレぐらい一人で行けるっつうの！ガキじゃねーんだから！！」
ハヤテ「あ、でも初めての人がこの屋敷をひとりでに歩くと迷子にな……（バタン！）行っちゃった。大丈夫でしょうか？」
ヴィータはそう言って部屋から出てトイレに向かった。ハヤテの忠告も聞かずに
ナギ「心配なら後で見に行けば良いだろ、戻ってこなかったらの話だが」
ヴィータ「ふう～すっきり」

ヴィータはトイレを済ませ部屋に戻ろうとした。所が

ヴィータ「あれ…？部屋どこだっけ？」

そう、迷ってしまいました。

この屋敷は広すぎる。

ホント改めて言うまでも無くとてつもなく大きい。

庭や別館を差し引いても、屋敷の大きさは目を見張るものがある。

当然、一日やそこらで屋敷を把握する事は不可能に等しい。

まして、屋敷に来たばかりとなると迷子になるのは当然だ…

ヴィータ「アレ…？こっちの道を真っ直ぐだったっけ？」

と言う訳でトイレに行った後で早速ヴィータは迷子になっていた。

ヴィータ「ったく、もう訳分かんねぇよ……。あのすずかの家より広いじゃねぇかよ……」

ぶつぶつ文句を言いながら適当に歩いていると…

？？？「よぉ、お前か？今来てるお嬢の新しい“ダチ”ってのは」

二足歩行したトラ？にあった…

？？？「しかしお嬢にしては珍しいな……。ワザワザ外に出てそんな事をするなんて……」

ヴィータ「……」

タマ「あぁ、悪い悪い！俺はタマって言うんだ。お嬢のペットだ。

……おっと、喋れる事はお嬢達には内緒だぞ？知っているのはあの

借金執事と銀髪と赤髪とダメガネだけだからな…あ、念のため言っとくけどよ、俺はデジモンでもましてや腐れ“天人”でもねえからな。俺はいたって普通の“ホワイトタイガー猫”だから、まあ、最もお譲のデジモン軍団は皆俺様の舎弟みたいなもんだからよ。そこんとこは勘違いすんなよ」

ヴィータ「……」

タマ「それじゃ、同胞達が待ってるんでな、これで失礼するぜ。ゆっくりしてけよちび助、さ～てブログ、ブログっと……」

タマはそんな事を呟きながら二足歩行で去って行った。

ヴィータ「…いやいや、ナイナイナイ。」

ヴィータはまた思った方向へ歩き出した。

ヴィータ「唯の動物が立って歩くなんてなんかの見間違いだ、見間違い……」

そう自分に言い聞かせながら

そして30分ほどさまよってやっと部屋に戻った

ヴィータ「やっとついた……」

ヴィータは思わず溜息をついた。

はやて「遅かったなあ、ヴィータ」

ナギ「トイレに行っていただけでなんでこんなにかかる」

ヴィータ「この屋敷が広すぎて道に迷ったんだよ！て言うかなんでお前らだけでスイカ食ってんだよ！？」

はやてやナギ達が自分がいないのに勝手にイカロスに貰ったスイカを切って食べていたのでヴィータが怒った。

ヴィータ「ったく、さっきはさっきで妙な二足歩行動物に会うし…」

ハヤテ「ヴィータさんどうしたんですか？」

剣心「顔色が良くないでござるよ、ヴィータ殿」

ヴィータが少しを顔を青くさせていたので気になったハヤテと剣心がたずねた。

ヴィータ「いや…何て言うか……この屋敷にはデジモン意外にも面白いペットがいるんだな……」

ナギ「あぁ、ひょっとしてタマに会ったのか？」

ヴィータ「え…あぁ、あれトラ？だよな？」

ナギ「いや、初めて見た奴は皆そう言うんだけどな。あれはネコだ。」

ヴィータ「…えぇ！ネコなの！？マジで！？」

ナギ「あぁ、タマが赤ちゃんの時にアフリカで拾ってな…あそこまで育てたんだ。」

ヴィータ「…ああ……確かにあいつ自分の事“ホワイトタイガー猫”とか言ってたな……」

ナギ「はぁ？何を言っている？唯のねこが喋る訳ないだろうが“デジモン”じゃあるまいし」
ヴィータ「い！？だってさっき現に……」
ナギ「夢でも見たんだろ。そんな事よりお前もスイカ食え」
ヴィータ「あ、ああ……」

ヴィータが困惑しながらもスイカにかじりついた。

ヴィータ「上手いな、このスイカ（あれ？今ナギの奴“アフリカ”で拾ったとかいったような……トラってアフリカにいたっけか？もういいや分けわかんないし）」

スイカを食べ終わった後、皆は庭に出た。最も、ナギとヤミとセイバーとたまとヴィルヘルミナとマリアは屋敷の中に残ったが

アルフ「ホント広い庭だね……」
リィンフォース「地平線が見えますね……」
はやて「広すぎてあっと言う間に迷子になりそうやな……」
アルフとリィンフォースとはやてはナギの家の庭の広さに改めて唖然としていた。

銀時「まッ、仕方ねぇわな」
ハヤテ「誰だって始めてみた時はそう思いますよ」
銀時とハヤテはそう言った。まあそうなるわね。

神楽「ヒャッホーッ！定春もっと早く走るアルー！！」
定春「アンッ！」
美柑「わあ！神楽ちゃん！もっとゆっくり！」
なのは「早すぎるよー！落ちる落ちる！！」
フェイト「もうちょっとゆっくり走ってよー！！」

神楽と美柑となのはとフェイトは定春に乗って庭を駆け回っていた。
と言ってもなのはと美柑とフェイトは振り回されているだけのようだが
剣心とはやてとリィンフォースとアルフはその様子が“不味い”と思ったのか四人と一匹を追いかけていった。
すると

ヴィータ「…なあ…銀時、綾崎…」

ヴィータは銀時とハヤテにそっと耳打ちした。

銀時「何だ?ヴィータ」
ハヤテ「どうかしたんですか?」
ヴィータ「いや……さっき廊下でトラみたいなのが…」
ハヤテ「……あぁ、タマですか…」
銀時「…あぁ、タマエモンか……」
ヴィータ「やっぱりアレ、トラなのか?」
銀時「まぁ…トラって言えば……」
ハヤテ「トラですね…」

二人はあまり自信がなさそうにそう答えた。

ヴィータ「……」

口に手を当てて考え込むヴィータ。
やっぱアイツが“トラ”なんて可笑しいんだろうか?

ハヤテ「…ヴィータさん…タマがどうしたんですか?」
ヴィータ「…いやさ、話しかけられたような気がしたんだけどよ…、夢でも見てたのかな……」
ハヤテ「……忘れて下さい。覚える必要ありませんよ…」
銀時「そうそう忘れろ、そりゃ夢だ夢」

二人がヴィータにそう言ったときである。

???「誰が覚える必要無いだって?」

銀時とハヤテとヴィータが声の方向を振り返ると…

???「よぉ!借金執事、それと銀髪パーマにさっきの赤チビ。」

トラが岩の上に腰かけていた。

ハヤテ「タマ、お前……登場の仕方位考えろよな…」
銀時「そうだコラ、何かっこつけてんだ。トラの癖に」
タマ「堅い事言うなよ、借金執事に銀髪パーマ。っーかその赤チビとはもう挨拶しちまったしな。なぁ？」

タマがヴィータに振る。

ヴィータ「…あぁ。ヴィータだ。」
タマ「そこの胸のでかい姉ちゃんもお譲の知り合いか？俺はタマって言うんだ。ヨロシクな。」

タマがシグナムにも挨拶した

シグナム「あぁ、シグナムだ。よろしくお願い……って、えぇぇぇぇ！！！？？？」
タマ「何だよ姉ちゃん？どうした？」
シグナム「何だよじゃないだろ！何でトラが立っているんだ！？何で喋ってるんだ！？魔力も感じないのに！？」
ハヤテ「あ～、タマは大分変ですから一緒にしないほうがいいですよ。もちろん普通は違いますけど」
銀時「そうそう、アイツは可笑しいんだよ全てにおいて、なんせ“タマエモン”だからな」

シグナムに説明する銀時とハヤテ。

シグナム「変って言うレベルじゃ無いだろ！？」
銀時「落ち着けよ…銀魂の世界じゃこんな事しょっちゅうだろ？それに喋るペットならエリザベスとザフィーラが居るだろ？」

シグナム「確かにそうだがアイツは宇宙生物だろ！それにザフィーラは守護獣なんだ！アイツらは例外だ！それに私は銀魂のキャラじゃないんだ！そんなの分かる訳無いだろ！！」

シグナムが銀時の言葉に必死でツッコンダ。

すると、ハヤテがシグナムに近づいて、

ハヤテ「あの…この事はお嬢様達には内緒に……」

タマ「そこは頼むぜ？これが知れたら俺のイメージががた落ちだからな…」

シグナム「いや、もう既に大暴落だと思うぞ、イメージも何もないだろ」

銀時「まぁ世の中知らない方が良いこともあらぁ。」

四人と一匹で庭を歩いていると…

神楽「銀ちゃーん！」

神楽が定春に乗ってこちらにやって来た。

銀時「神楽！やっと戻って来たやがった。定春も。」

ハヤテ「あれ？なのはちゃん達は如何したんですか？」

神楽「あいつらだったら定春に乗ってる時に酔ったとか言って向こうで剣ちゃん達に介抱されてるアル、全く最近のガキは軟弱で困るアルナ」

銀時「オメーもガキだろうが、何オバン臭い事言ってんだよ．それにオメーと普通のガキを一緒にすんな」

神楽に対して銀時がツッコンだ。

定春「ワン！」

そして、定春から降りる神楽。

ヴィータ「間近で見ると…ほんとでけぇよな定春は」

改めて定春を見上げるヴィータ。

すると…

タマ「よう、定春」

タマがハヤテの横から現した。

ハヤテ「…？タマ？」

タマ「よう、定春、分かってんな。ここは三千院家だ。つまりここでは俺がリーダーなんだ。分かるよな」

タマは定春を指差して説教を始めた。

ハヤテ「何言ってるんだお前……」

銀時「つーか、何で今そんな話するんだよ」

タマ「この小説でマスコットを語る上では上下関係が必須だからな…ここら辺でビシッと言ってやらないとな。…いいか？定、分かっているとは思うがここにいる間はお前は俺の舎弟だからな…俺の事はちゃんと兄貴と……」

ガブッ！

タマ「……え？」

タマが話している途中で定春がタマに噛み付いた。

定春「ワン！」

定春はタマに噛み付きそのまま遠くに行ってしまった。因みに定春が走った後にはタマの物と思われる血の後が続いていた。

ハヤテ「……行きましょうか？」

ヴィータ「マスコットも色々と大変だな…」

銀時「つーかあいつマスコットか？」

ハヤテ達は屋敷に向かった。

銀時「…ところで神楽、ソレ何だ？」

銀時は神楽の手を見て尋ねる。

神楽「定春３１号ネ！銀ちゃん、これ飼っても良いアルか？」

銀時「ってお前それヒルじゃねぇか！！馬鹿かお前！今すぐ捨てて来い！！」

神楽「いやアル！ペットにするアル！地面に埋められてたヨ。私が助けてやったら私に懐いてきたヨ、これこそまさに定春３１号を名乗るにふさわしいアル！」

銀時「それ埋められてたんじゃ無いから！そいつは自分で埋まってたの！元の場所に戻してあげなさい！！」

神楽「銀ちゃん酷いネ！ホラ、私にこんなに懐いているのに。」

神楽の腕には大きいヒルが引っ付いていた。

銀時「違うから！神楽違うからソレ！それ血吸われてるだけだから！お前が勝手に思い込んでるだけなんだよ！それはな叶わぬ恋なんだよ！ナポレオンとキンニクマンが結ばれないのと同じくらいのありえない恋なんだよ！！」

ヴィータ「いや、何だよその例え」

銀時の言葉に思わずヴィータがツッコンだ。

神楽「何だヨー！カッケーじゃん、定春３１号！」

銀時「オーイ！誰かコイツを病院に連れてってくれー！！」

銀時は思わずそう叫んでしまった。

シグナム「お前も行った方がいいと思うぞ……」

シグナムはこんな事を口走っていた。

なのは達はナギのいる部屋に戻った。

ヴィータ「なあ、ナギ」

ナギ「何だ?ヴィータ」
ヴィータ「気になってたんだけどよ、“デジモン”達ってどこにいるんだよ。あの“ナイトモン”って奴らを見てから一人も見かけねーんだけど、特にあの生意気なおもちゃ飛行機とか、全然みねーぞ」
ナギ「ああ、あいつらだったら“デジモンドーム”にいるぞ」
『デジモンドーム?』

ナギの言葉になのは達リリカル組は首をかしげた。

ナギ「だいぶ向こうのほうにある、私のデジモン達の家だ、行ってみるか?」

ナギの言葉になのは達が頷いたのでナギ達は“デジモンドーム”に向かった。

ナギ「ここが“デジモンドーム”だ」

ナギが指差した。
そこには三千院家本宅よりも大きいかもしれない超ばかでかいドームがあった。

なのは「おっ、おっきい……」
フェイト「うん……」
はやて「ほんまやな……」
ヴィータ「三千院家って何でもでけぇんだな……」

四人はもの凄く驚いた。もちろんシグナム達も驚いている

ナギ「じゃあ、中に入るぞ」

そう言ってナギ達は全員ドームの中に入った。

ドームの中はやっぱりだだっ広かった。
とりあえずナギ達は真ん中のデジモン達がいる広場に向かった。
そこではデジモンがたんまりといて大きいデジモン達がいろいろと訓練をしていたり、小さいデジモン達が遊具で遊んだりしていた。

銀時「まさに怪獣映画だな、おい……」
ヤミ「そうかもしれませんね」

銀時とヤミはその光景を見て思わずそう呟いた。

ナギ「お〜い、お前達集ご〜う」

ナギが号令を掛けた、すると

「おっ、ナギお嬢様がお見えになったぞ」
「あッ、ホントだナギだ！」
「行こうぜ〜」

ナギ達の所にデジモン達が集まってきた。

???「あ、チビ助」
ヴィータ「チビ言うな！おもちゃ飛行機！！」
スパロウモン「誰がおもちゃ飛行機だ！僕はスパロウモンだって言ってるだろ！！」

ヴィータの言葉に怒ったのはナギの近くにいるスパロウモン、ヴィータとは犬猿の仲である。

???「おお、シグナム殿も来たのか？」
???「よぉ」
シグナム「久しぶりだな、グレイドモンにシャウトモン」

シグナムはグレイドモンとシャウトモンに挨拶した。

???「シャウトモン、シリアイ？」
シャウトモン「まぁな、前にナギに連れられて異世界に言っただろ、そん時に知り合ったんだ」
???「ふん、お譲のわがままに付き合うなんてお前も暇だなシャウトモン」

？？？「まったくっキュッ！」
？？？「ほんとだぜブラザー！！」
シャウトモン「うるせぇな！お前ら黙れっつうの！！」

シャウトモンに最初に話し掛けてきたのは親友のバリスタモン、小ばかにしたのはシャウトモンのチームであるドルルモン、キュートモン、スターモンズである。

なのは「凄い数だねフェイトちゃん……」
フェイト「うん……」
アルフ「ホント多種多様だね」

デジモン達を見たなのは、フェイト、アルフはそう呟いた。
正直ここにいるのはデジモンの数は百匹以上である。
しかも物凄く大きいのもいるのだ。

ナギ「では、とりあえずとっておきの“七匹”を紹介してやろう」
ヴィータ「っておい、ちょっと待て」
ナギ「何だ…ヴィータ？」

ヴィータがナギの言葉を遮って来た。

ヴィータ「お前、とっておきは四匹とか言ってなかったか？」
ナギ「それはあの時連れてきた奴らの中での話しだろうが、実際のとっておきは全部で七匹だ」

ヴィータの言葉にナギはこう答えた。確かに全体で合わせて四匹とはナギは一言も言っていない。

ヴィータ「なんだよ、それ……」

銀時「ナギはこういう奴なんだよ」

ヴィータは思わず溜息を吐いた。

ナギ「では、まずはお前達も知っているとは思うが武者デジモンの“ガイオウモン”だ」

ガイオウモン「久しぶりだな、お前達」

シグナム「ああ」

なのは「あ、はい」

フェイト「お久しぶりです……」

アルフ「うん」

はやて「あたしは…始めましてでええんかな」

ガイオウモンが挨拶してきたのでなのは達も挨拶した。

ナギ「んで、次にこの馬鹿でかい鳥みたいな奴が“オニスモン”だ」

オニスモン「ギュオオーッ!!」

ナギの言葉に答えるかのように大きな幻獣型のデジモンオニスモンが雄たけびを上げた。

アルフ「メ…メチャクチャデカイね…フェイト……」

フェイト「うん……」

はやて「ほえ～おっきい鳥さんやな～」

ヴィータ「いや！これ鳥か!?」

はやての言葉にヴィータが突っ込んだ。自己紹介は続く

ナギ「そしてこいつがガイオウモンの相棒でもある“スレイヤードラモン”だ」

スレイヤードラモン「おう！よろしくなお前ら！！」
リィンフォース「あ、ああよろしく」

スレイヤードラモンが大声でそう答えリィンフォースがうろたえながらも何とか返事をした。

ナギ「そして、この立派な黄金の龍が“オウリュウモン”この中で一番知的な奴だ」
オウリュウモン「よろしくのう、皆の衆」
『は、はい……』

リリカル組はオウリュウモンの言葉にまたしてもオロオロしながら答えてしまった。
しかも、オニスモンに負けず劣らずのでかさである。

ナギ「そして、喧嘩番長事“バンチョーレオモン”なのだ」
バンチョーレオモン「おっす！」
ヴィータ「今度は喋るライオンかよ……」

ヴィータはバンチョーレオモンを見て思わずタマの事を思い出してしまった。

ナギ「そしてここのデジモン達の二大リーダーである、騎士デジモン“クレニアムモン”と“デュナスモン”だ、コイツラは聖騎士と呼ばれる立派なデジモンだぞ」
クレニアムモン「よろしく頼む、客人方」
デュナスモン「よろしく頼む」
シグナム「あ、ああ…（この二人も騎士なのか……）」

シグナムはクレニアムモンとデュナスモンを見て思わずそうおもっ

てしまった

ナギ「さて、とりあえずとっておきはここまでで（おい、ナギ！！）…なんだシャウトモン？」
シャウトモン「なんで取って置きの中に俺が入ってねぇんだよ！」

シャウトモンが文句を言ってきた。どうやら何か納得できなかったらしい。

ナギ「お前は別にとっておきでもないだろうが、確かに合体すれば強いけど、お前自体はそれ程でもないだろ」
シャウトモン「なんでだよ！俺は“デジモンキング”だぞ！！」
ナギ「そりゃお前が勝手に名乗ってるだけだろ」
銀時「そうだぞ～、現実を見ろ。お前は精々“足軽”がいいとこだろ」
シャウトモン「誰が足軽だこら！お前はクルクルパー侍の癖しやがって！！」
銀時「んだとごらぁ！せめて天パ侍って言え！！」

銀時とシャウトモンが喧嘩を始めてしまった。
すると

シグナム「ナギ！」
ナギ「おわっ！？」

急にシグナムがナギに向かって叫んだ。

ナギ「びっくりした…。何だいきなり！！」
シグナム「頼みがある！」
ナギ「頼み？」

シグナム「デジモンと模擬戦をやらせてくれ！！」
『は？』

シグナムの言葉にその場にいた全員が目を点にした。

ナギ「模擬戦ってお前……」
シグナム「そうだ！」
剣心「どうして模擬戦がしたいんでござるか？シグナム殿」
シグナム「強い者と戦いたいと思うのは騎士の本能だ！！」
ヴィータ「いや、そんなの初めて聞いたけど……」

シグナムの言葉にヴィータがツッコンダ

はやて「シッ、シグナム喧嘩はあかんで？」
シグナム「喧嘩ではありません、戦士同士の試合です！之ばかりは主はやてと言えど口出し無用です！！」
はやて「う…」

シグナムのこの言葉にはやては黙ってしまった。

ナギ「……で？誰と模擬戦がしたいって言うんだ？」
シグナム「『奴』とだ！！」

シグナムはそう言うとガイオウモンを指差した。

ガイオウモン「…俺とか？」
シグナム「そうだ！」
ガイオウモン「何故俺と何だ？」
シグナム「始めてお前の戦いを見たときからずっと戦いたいと思っていたんだ！！」

シグナムがあまりにもシグナムらしい理由を答えた。

ナギ「（やれやれ…ホントバトルマニアだなこいつ……）如何するんだ？ガイオウモン」

ガイオウモンは少し考える素振りを見せた後

ガイオウモン「…いいだろう」

シグナム「本当か！？」

ガイオウモン「ああ」

スレイヤードラモン「お、おい、いいのかよガイオウモン？」

デュナスモン「相手は人間だぞ？坂田銀時や緋村剣心が相手なら分かるが…」

ガイオウモン「心配ない、この女はかなりの実力者だ。戦士としての目を持っているしな」

ナギ「お前が、そう言うなら…まあ、いいだろう」

ガイオウモン「ありがとうございます。お嬢様」

シグナム「それでどこで戦うんだ？」

ガイオウモン「向こうに俺達専用の練習試合場がある、そこでいいか？」

シグナム「ああ！」

ナギ「まッ、せっかくだから私達も観戦させて貰うか」

銀時「そうだな」

ヤミ「はい」

セイバー「なんだか面白い事になりましたね」

神楽「本当アル！」

剣心「別に面白いとは思わんでござるがな」

ヴィータ「シグナム、やるからには勝てよ！」

シグナム「もちろんだ！」

ナギ「じゃあ、行くぞこっちだ」

ナギの案内で皆はついて行った。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『ケン』さんから「凄いよね・・・

統夜「何が？」

支配者さんのスキルだよ・・・様々な作品を取り入れてクロスオーバーさせてるから・・・

統夜「確かに凄いよな・・・ハガレンやそらおとも取り入れて・・・」

俺の作品で参戦作品はリリカルなのはとＳＨＵＦＦＬＥ！、迷い猫オーバーラン、夜明け前より瑠璃色な、バカテス、真恋姫無双、ミルキィホームズかな。

統夜「てか雪蓮達の種族を虎の妖怪に変えたり、華琳をユニゾン出来る精霊にした貴方も凄いよ。キャラ改変し過ぎでしょ！？」

明久や康太、達哉に魔力を持たせたからね・・・

統夜「その時点で改変だ・・・智樹には呆れるな・・・そんな女性陣は大丈夫・・・俺の蒼炎で奴の精神を絶望の淵に叩き落とし肉体を灰に出来る・・・今すぐお電話を・・・」

ボケとツッコミが使える真祖の吸血鬼と堕天使の力を持つ統夜を以後よろしくお願いします。

統夜「チョイ待ち！今ネタバレしなかった？！」

お前の半分は真祖の吸血鬼の血を引いているなんて言って無いぞ？

統夜「言ってるじゃん！？」

銀さんと剣心に質問です。貴方達はダイの大冒険に出てくるダイの実父であるバランに勝てる自信はありますか？

はやて「次回も楽しみにしてるで～」

銀時「いや、無理だろあんな化け物、はっきり言って夜王以上だし」

剣心「『竜闘気（ドラゴニック・オーラ）』など出されては正直勝負にならんかも知れんでござるな」

銀時「まぁ…魔法が使えるようになったら少しは戦えるだろうけどな」

銀八「と言う訳です。魔法が使えるようになったら勝てるかもしれないという事かも知れませんね。と言う訳で『ケン』さん、廊下に立ってなさい」

なのは「次の質問行きますよ。ペンネーム『黄色いのなにか』さんから「個人的に出して欲しい作品は『龍が如く』をお願いします。チビアホ毛に質問。婚約者であるウィンリィ・ロックベル（エドワード・エルリック）とはＡＢＣの内どこまで行きましたか？

桜井智樹に質問。学園都市の女子寮の女湯を覗いてよく死ななかったですね？ある意味その耐久力が智樹の能力なんじゃないでしょうか？」ではお答えお願いします」

エド「誰が『チビアホ毛』だあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！（怒）」

銀八「おい、怒る前に質問に答えろ」
エド「こんな質問に答えられるか！！！」
支配者「じゃあ、私が代わりにお答えしましょう。たぶんＢくらいじゃないですか？エドには恥ずかしがり屋のところがありますから」
エド「答えんなアァァァァァァァ！！！！（怒）」

ドカバキ！！

支配者「ギャアアアアア！！！？？？」

支配者はエドにボコられてしまった。

銀八「じゃあ、次の質問の答えな、おい答えろ“エロゴキブリ”」
智樹「誰が“エロゴキブリ”だアァァァァ！！！！（怒）」
銀八「お前以外にいるか、さっさと答えろ」
智樹「ちぇ……、そはらに昔からボコボコにされて、生死の境を彷徨いまくった経験があるんだよ、昔から」
銀八「お前ホントこりねえエロ猿だな」
智樹「うるせえ！女の体は男の夢なんじゃ！！だからこそ俺は女子更衣室を除…」

智樹がそう言いかけたとき

？？？「智ちゃ～ん」

誰かが腕をボキボキさせながら近づいて来た。もちろんそれは

智樹「そ、そはら……」

そうもちろんそはらである

そはら「智ちゃ～ん、ちょっと向こうに行こうか？」
智樹「あ、いや、その、ちょっ！ちょっと待ってくれそはら！俺はまだ、銀さん助け」
そはら「うふふふふふ♪」

智樹は襟首を掴まれ向こうのほうに連れて行かれた。
そして

ドガグシャドガバキズドバキボカグシャズドバキボキバキドカズカバキグシャ！！！！！！

智樹「ギャアアアアアアアアアアアアアア＃＄％＃％＄＄＃％＄＃、、＊＜！！！！！！！」

智樹の断末魔の叫びが聞こえた。

銀八「ハハハハハ……、智樹のやつご臨終だな……。『黄色いなにか』さん、智樹の無事を祈ってやってください」

剣心「次の質問でござる。ペンネーム『ボッスン』さんから「バナージ「ハガレンとそらおとのキャラが出たな。」

アラド「ニンフはそらおとのキャラだったよな。」

ニンフ（ボッスン（作者）の方の）「あちらの私は銀さんと仲が悪いね。」

バナージ「そうだな。」

質問です。

美柑ちゃんとヤミさんは魔法少女に憧れていますか？もし憧れているならどんな魔法少女になりたいですか？同じ質問がありましたら、答えなくてもいいです。

家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！は参戦出来ますか？無理ならいいです。

バナージ「作者が書いているスーパーヒーロー大戦では美柑は魔法少女でヤミは魔法少女になる予定だけどな。」

ニンフ「あちらの私。あちらにはいろんな人達がいるけど、頑張ってね。」

次回も楽しみにします。」だそうでござる」

ヤミ「魔法少女？興味ありませんね」
銀八「ズバッっと言い過ぎじゃねぇか？」
ヤミ「いいんですよ。興味ないんですから」
美柑「私も…恥ずかしいから…ちょっと……魔法には興味あるけど」

美柑は恥ずかしそうにそう答えた。

支配者「家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！は最終章で登場予定です」
銀時「お前まだクロスオーバーさせんのかよ」
支配者「前々から考えたんですよ家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！の参戦は」
銀時「あっそ」

銀八「だそうです。と言う訳で『ボッスン』さん楽しみにしてて下さいっと」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第六十七訓　でっかいお屋敷に住んでる人と仲良くなればラッキーだと思う

支配者「次回はガイオウモン対シグナムの対決話です」

銀時「今度こそ早く更新しろよ」

支配者「はい……」

新八「それにしても新しいのがいっぱい出ましたね」

銀時「”ロイヤルナイツ”のデジモンまで出すか？普通」

支配者「いいじゃないか別に！人の勝手だ！！」

ナギ「では次回も見るのだ！！」

第六十八訓　戦闘も盛り上げてこそ意味がある（前書き）

支配者「今回はガイオウモン対シグナムのお話です」

剣心「どんな戦いになるんでござろうな」

支配者「それは見てのお楽しみです」

銀時「リリカル剣魂スペシャル始まるぜ」

第六十八訓　戦闘も盛り上げてこそ意味がある

模擬戦…それは練習試合みたいなものである。
普通は軍隊とかでやるものなのだが……
まあ、それはおいておこう。
とにかく今日はここ『超銀魂世界』三千院家の屋敷
デジモン達の家『デジモンドーム』にて

シグナム対ガイオウモンの戦いが始まろうとしていた。

銀時「はい、と言う訳で世紀の一戦『烈火の将シグナム対鎧将軍ガイオウモン』の戦いが始まろうとしています。実況は私坂田銀時、解説はデジモンの戦いを見ておよそ十年の大ベテラン、三千院ナギさんでお送りします」
ナギ「三千院ナギだ。よろしくな」

そして、なぜか放送室の様な所でスーツを着込み、眼鏡をつけた銀時とナギが座っていた。

銀時「三千院さん、この戦い如何見ますか？」
ナギ「そうだな、ガイオウモンは私の持つデジモン達の中でかなりの実力者であり侍の魂を持つまさに生粋の戦士と言える。一方のシグナムは烈火の将と呼ばれ『夜天の書』の中でずっと戦い続けてきたこれまた生まれながらの騎士だ。その戦闘経験はかなりの物だろうな」
銀時「では、この戦いは互角と言う事になるんでしょうか？」
ナギ「う～ん、だが『デジモン』は夜兎族みたいに宇宙最強の戦闘生物と呼ばれているからな。やはりシグナムの方が少し不利かも知れん」

銀時「そうですか、詳しい解説をありがとうございます。では次は」
ヴィータ「なにやってんだテメーらアァァァァァ！！！！」
銀時・ナギ『ゲフウゥゥゥゥゥ！！』

銀時が誰かに話を回そうとした時に後ろからヴィータが銀時とナギの頭に蹴りを入れた。

銀時「いってぇ～な、なにすんだこのヤロ～」
ナギ「そうだ、なにすんだこのヤロ～」
ヴィータ「何すんだじゃねーよ！！何やってんだ！？何で実況とか解説者とかつけてんだよ！？」

ヴィータが二人にそう怒鳴る

銀時「おいおい、なに言ってんだ？こういう場に実況とか解説者とかつけるのは当たり前の事だろ？野球中継然り、ボクシングの試合然り」
ヴィータ「いや、関係ねーだろ！之は模擬戦だろ！そんな本格的な物必要ねーだろ！！」
ナギ「どんな物でも本格的に行うのが三千院家の流儀だ！！」
ヴィータ「どんな流儀だ！！」

ヴィータはナギにツッコンだ。

はやて「まあまあヴィータ。そない怒らんと」
剣心「そうでござるよ、別に悪い事でもないでござろうに」
セイバー「そうですよ、短気は損気ですよ？」
ヴィータ「こいつらのしてる事を見るとなんかイラッと来るんだよ！！」

ヴィータは怒鳴り続ける。まぁ、確かにイラっと来る時はある。

シグナム「おい」

その時下にいるシグナムが声を出してきた。

シグナム「そろそろ始めたいんだが？」

シグナムは待っていた。銀時達が悪ふざけをするのを黙ってみていたが我慢できなくなったんであろう。

ナギ「始めたいと言ってもな……」

ヤミ「ガイオウモンがまだ来ていませんよ」

ナギとヤミがそう言っていると

ガイオウモン「待たせたな」

ガイオウモンがやってきた。

なぜかずぶ濡れになって

隣にはタオルを持ったスレイヤードラモンがいた。

シグナム「来たか、ガイオウモン。…なんでそんなに濡れているんだ？」

ガイオウモン「滝にうたれて精神を鍛えなおしてきた。真剣勝負の際に万全の状態で挑むのは相手に対する礼儀だろう」

ガイオウモンはこう答える。ガイオウモンは戦いに対する礼儀や作法を何より大切にする性格である為こういうのは忘れた事がないのだ。因みにこの施設にはデジモン達のリクエスト応じてナギが施設

を増やしてあげているのである。だから人工の滝なんてものもあるのだ。

スレイヤードラモン「ホント、そう言うことに関しちゃまめだな、お前は」

スレイヤードラモンがガイオウモンにタオルを渡した後そう言った。

ガイオウモン「お前が単純で大雑把過ぎるだけだ。少しはお嬢様にお仕えする“七強”としての自覚を持て」

スレイヤードラモン「あんだとぉ！！」

スレイヤードラモンはガイオウモンに罵倒されたので怒った。

そして、シグナムは

シグナム（やはりガイオウモンは一流の戦士のようだな、戦う相手に対しても礼儀を常に忘れない…一流の戦士の証だ。戦士に性別も種族も関係ないと言う事だな）

シグナムもガイオウモンの事を改めて一流の武人の心を持つ戦士だと認識した。

ガイオウモン「では、始めるか？」

シグナム「ああ」

ガイオウモンとシグナムはお互いに武器を構える。

シグナムはレヴァンティンをガイオウモンは双剣・菊燐を構える。

オウリュウモン「では、審判はこのワシ、オウリュウモンが勤めさせてもらおうかのう、勝負方法の決着はお互いのどちらかが戦闘不

能になるか、ギブアップするかじゃ。双方、問題ないな」

ガイオウモンとシグナムはお互いに頷く。

そして観戦室

銀時「いよいよ始まるな」

剣心「そうでござるな」

ヤミ「どっちが勝つと思います？」

ヤミが皆に聞いてみた。

フェイト「私はシグナムの強さを知ってるからシグナムが勝つと思うけど……」

リィンフォース「私もそう思いますね。確かに彼、ガイオウモンは強いとは思いますが私と戦っていたときは鈍い動きでしたし……」

フェイトとリィンフォースはこう思う。シグナムは相当な実力者だ。それにリィンフォースと戦っていたとき正直言ってガイオウモンは押されていたし、シグナ無のほうが強いんじゃないかと思う。

所が

ナギ「アホか、お前らは」

ナギが二人に向かってそう罵倒した。

フェイト「なっ、アホって！」

リィンフォース「如何してそんな言い方されなきゃいけないんですか！！」

ナギ「私はあの時ガイオウモンには特に手加減するように指示して

いたんだぞ」
フェイト・リィンフォース『え？』
ナギの言葉を聞いてフェイトとリィンフォースの二人は驚く
ナギ「アイツに本気で相手なんかさせてたら下手すりゃ町にまで被害が出るだろうが、それに万が一にでもお前を破壊させるわけにもいかなかったし」
ナギは二人にそう説明した。
剣心「まぁ、確かにガイオウモン殿メチャクチャ強いでござるからなぁ……」
銀時「あぁ…本気でやられたら殺されるかもしんねぇし……」
剣心と銀時もそう言う。
なのは「そ、そんなに強いんですか？」
ナギ「強いなんてモンじゃないぞ。まぁ、さすがにこの二人を殺しかけた“ゾーグ”って奴程じゃないがな」
ナギは銀時と剣心を指差して最後にそう言った
バンチョーレオモン「あまり俺達“七強”に対して舐めた考えを持たないで貰いたいな」
デュナスモン「無論だ。先程お嬢様が言ったように我ら“デジモン”が宇宙最強の戦闘生物と言われている理由すぐに分かるだろう」
クレニアムモン「そうだな、あの騎士が弱いと言わんがな」
フェイト達リリカルメンバーは唾を飲んでその戦いを見ることにし

た。

そしてガイオウモンとシグナムのいる試合場

シグナム「ガイオウモン。始める前に一言言っておく」
ガイオウモン「何だ？」
シグナム「お前は相当な実力者だ。それは先の戦いで十分把握させてもらった。だが、だからといってそう簡単に私に勝てると思うな。舐めていると痛い目に会うぞ！」

すると、シグナムの最後の言葉を聞いた時ガイオウモンが不敵な笑いを浮かべこんな事を言ってきた。

ガイオウモン「ほぅ…痛い思いか……」
シグナム「？」
ガイオウモン「考え方が甘いなシグナム。俺達最大級ランククラスのデジモンと戦うと言うことが分かっていないようだから教えておく」
シグナム「何？」

ガイオウモンはシグナムを見つめながら話を続ける。

ガイオウモン「痛い思いだけで済むのならばすでに勝負と言う物は

つんでいる。どんな戦いでも俺にとっては己の全てをかけた真剣勝負だ。本気でこの戦いに勝ちたいのであれば…俺を……」

直後、ガイオウモンは凄まじいまでの殺気を出しシグナムにこう言った。

ガイオウモン「殺す気で来い」

シグナム「う！」

今までヴォルゲンリッターとしてそれなりの修羅場をくぐってきたシグナムもガイオウモンから発せられる殺気に当てられ思わず後ずさりした。

シグナム（なっ、なんと言う殺気だ…。あの時感じた剣心や銀時の殺気と同等…いやそれ以上かも知れない……。まさに生まれながらに戦闘生物としての名残があると言う事なのか……）

シグナムは心の中でもこんな事を思いながらもレヴァンティンを構えなおす。

シグナム（だが…ここで引くわけには行かない！！）

シグナムもガイオウモンをありったけの気迫で睨み付ける。

オウリュウモン（ほぅ…この譲ちゃん結構肝が据わっとるのう…。大抵の物はあの殺気を感じただけで動けなくなるもんなんじゃがな……）

スレイヤードラモン（中々の戦士の目をしてんじゃねぇかよあの姉ちゃん…）

オウリュウモンはシグナムを軽く関心したような表情で見つめる。

ガイオウモン「ふっ、いい目だ。では今度こそ始めるとするか」
シグナム「ああ！」
オウリュウモン「では、初め！！」

こうして試合が始まった。

シグナム「ヴォルゲンリッターが将・シグナム参る！」
ガイオウモン「我が名はガイオウモン、推して参る！」

お互いに名乗りあった二人は駆け出し

シグナム「ハアァァァァァ！！」
ガイオウモン「ヌオオオオッ！」

ガキィン！

お互いに剣を打ち合いを始めた。火花が発生する。

はやて「始まった！」
フェイト「どっちも速い！」
剣心「さて、どうなるでござるかな」

皆は黙ってその光景を見つめた。

ガイオウモン「ほぅ…見かけによらずなかなか力があるじゃないか」
シグナム「クッ…」

ガイオウモンとシグナムはギシギシと剣を抑えあっている。
しかし、やはりパワーはガイオウモンの方が上であり、シグナムが押されている。

ガイオウモン「ふん！」

ガイオウモンは右手に持っている“菊燐”を横に振るう。

シグナム「グッ！」

シグナムはそれを急いで飛んで交わした。
しかし、
ガイオウモン「逃がさんぞ！」
シグナム「なっ！？」

ガイオウモンはもの凄い跳躍力でシグナムの上を取り技を放ってきた。

ガイオウモン「鎧王流剣術！」
シグナム「！！」
ガイオウモン「“天燐”！！」

ガイオウモンはそのまま上空から右手の菊燐を思い切り振り下ろした。
シグナムは咄嗟にレヴァンティンを使って何とか受け止めようとする。
だが余りの威力に地面に叩き付けられた。

シグナム「ぐわっ！」
ガイオウモン「どうした？そんなものか？」

シグナム「くっ！まだまだぁ！！」

シグナムはすぐに立ち上がって再びガイオウモンに向かっていく。

ガイオウモン「ふっ、そうだ。そう来なくては張り合いがないぞ！」

ガイオウモンも再びシグナムに向かっていった。

ガイオウモン「ヌオオッ！」

ガキィン！ガキィン！ガキィン！

ガイオウモンは2つの竜剣を神速に振るい、連続剣を炸裂させてシグナムを襲う。

その速さは剣心の神速抜刀剣術に匹敵しかねない程の速さで、剣心とは違う神速にシグナムは翻弄されながらも剣を振るいながら防ぐ。

しかも一太刀一太刀が重くて、防ぐのもつらい。

シグナム（はっ、速い！ガイオウモンの剣術も神速剣術なのか！？しかも一撃一撃が相当重い！！）

シグナムは改めてガイオウモンの相当な実力に驚かされた。

そして観戦室。

ヴィータ「はっ、速ぇ！」

リィンフォース「私と戦っていたときとは比べ物にならない動きだ…」

ヴィータとリィンフォースはガイオウモンの驚異的な実力に驚いて

いた。剣術の速さは神速並み、そのうえかなりの剛剣を持っているのだから

なのは「凄い…。あのシグナムさんが防戦一方だよ……」

フェイト「之が最大級ランクデジモンの実力…」

ナギ「まだだぞ」

『え？』

ナギの突然の言葉にリリカルメンバーはナギを見つめる。

ナギ「ガイオウモンはまだ本気じゃない。そうだろうお前達」

バンチョーレオモン「ああ、まだ様子見といったところだろうな」

クレニアムモン「まぁ、あの女も本気ではないようだが……」

デュナスモン「その様だな」

ナギやデジモン達も意味深な様子でその光景を見つめた。

そして、試合場

シグナム（何て重い剣だ……豪傑の力を持っている上にこの速さとは……ならばこっちも遠慮はいらない！！）

シグナムは『レヴァンティン』を豪快に振ってガイオウモンの一撃をなんとかなぎ払い、バックして剣を構える。

シグナム「レヴァンティン！！」

レヴァンティン『Ｒｏｒｄ　ｃａｒｔｌｉｇｅ』

ガシャン

シグナムは『レヴァンティン』のカートリッジを1回ロードすると、

紫色の炎が『レヴァンティン』を包み込む。

ヴィータ「おお、いきなり行くか！！」

ヴィータはいきなり、シグナムの必殺魔法が炸裂する事に興奮する。

シグナム「紫電一閃！！」

シグナムは必殺技炎の魔剣“紫電一閃”を炸裂させようとするシグナムは、凄まじい勢いでダッシュしてガイオウモンを襲う。

ガイオウモン「それがお前の必殺技か……受けて立とう！」

ガイオウモンはそう言って剣を構える。

シグナム「ハアァァァ！！」

ドゴオオオオォォォォォォン！！！

シグナムの十八番である紫電一閃が炸裂した。

ヴィータ「決まった！」

なのは「ああっ！」

フェイト「まともに入った！」

リィンフォース「これは決まりましたね」

はやて「凄いな！シグナム！」

アルフ「おおーっ」

シグナムの実力を知っているリリカルメンバー達はこれは決まったと思った。

しかし、ナギが

ナギ「全くお前達つくづく呑気だな」

『え？』

ナギの言葉を聞いてリリカルメンバー達は驚きだす。

バンチョーレオモン「あれ位の事でガイオウモンは如何にかはならん」

ヴィータ「如何いう事だよ？」

剣心「見ていれば分かるでござるよヴィータ殿」

ここにいるメンバーは一応ガイオウモンのことは分かっている物が多い。

だからこそあれ位でガイオウモンが如何にかなるとは思っていなかったのである。

そして煙がはれると、最初にシグナムが現れる。だが彼女は驚いた顔をしている。

シグナム「なん…だと……」

ガイオウモン「ふむ…なかなか物だ」

ガイオウモンは両手の剣を交差させて紫電一閃を受け止めていた。

ヴィータ「なっ！？マジかよ！」

フェイト「シグナムの紫電一閃を…」

リィンフォース「簡単に受け止めた！？」

この光景を見たリリカルメンバー達の驚きは隠せなかった。

シグナム「クッ…」

シグナムは顔を顰めた後思わず距離を取った。

シグナム「…私の紫電一閃をああも簡単に防ぐとは……」

ガイオウモン「なかなかの威力だったぞシグナム、並のデジモンならば今の一撃で倒せていただろうな。だが、俺位にもなるとそれくらいでは通用せんぞ」

ガイオウモンはニヤリと笑う。

ガイオウモン「では今度はこちらから行かせて貰おう！」

ガイオウモンはそう言うと両手の剣をエネルギーを溜めるそぶりを見せる。

すると剣のほうに風が集まっていった。

シグナム「な、何だ…？何をする気だ？」

シグナムは警戒しながらレヴァンティンを構える。

ガイオウモン「鎧王流剣術“閃雲”！！」

ガイオウモンはそう言うと剣先から圧縮された竜巻のようなエネルギー弾を放った。

シグナム「うわっ！」

シグナムは急いでその竜巻弾をかわした。

シグナムがかわした竜巻弾は後方で大爆発を起こした。

ドッゴオォォォォォォン！！

シグナム「なっ、なんという威力だ…」

シグナムはガイオウモンの放った竜巻弾“閃雲”の威力に思わず冷や汗を流した。

ガイオウモン「余所見をしている暇はないぞ！！」

シグナム「！！」

ガイオウモンは凄まじい速度で接近しシグナムに攻撃を仕掛ける。

ガイオウモン「鎧王流剣術“連牙の太刀”！！」

ズガアアッ！！

シグナム「うわあああっ！！」

ガイオウモンが放った二段重ねの突きである“連牙の太刀”を受けて吹き飛ばされるシグナムは吹き飛ばされた。

シグナム「クッ、レヴァンティンカートリッ「させん！」グゥ！」

ガキィィィィン！！

シグナムガレヴァンティンのカートリッジをロードする前にガイオウモンが神速の速さで近づきシグナムに剣を振るう。

ガキィン！ガキィン！ガキィン！！

ガイオウモン「如何した！？もう終わりか！！」
シグナム「グウゥ！！」

シグナムはガイオウモンの連続攻撃に苦戦する。

ヴィータ「マジかよ、シグナムが追い込まれていやがる！？」

信じられないような表情でヴィータは驚く。

フェイト「あの巨体でシグナムよりも速いなんて……」
アルフ「力も半端じゃないってのに……」

フェイトとアルフも驚いている。

剣心「さすがはガイオウモン殿でござるな」
神楽「やっぱり強いアル！」
セイバー「さすがの剣の腕ですね」
ナギ「当然だ。あいつは毎日毎日訓練に明け暮れているからな。あれくらいはあたりまえなんだよ」

そして剣心達もガイオウモンの強さにやはり目を見張る物があった。特に驚くべきはシグナムよりも体が大きいガイオウモンが力だけでなく速さでもシグナムを上回っている事だった。それは最早神速の領域であり、瞬間移動の如き速さであった。リリカルメンバーは魔法でも使っているのではないかと最初誰もが思ったが、あれはあくまでガイオウモンの身体能力と鍛えぬいた運動神経のなせる技であ

った。

シグナム「クソッ！」

シグナムは思わず上空へと飛び上がる。

ガイオウモン「無駄だ！！」

ガイオウモンは叫ぶと左足を後ろに出して軸足のようにすると剣を両脇に構える。

シグナム（あんな所から何をする気だ！？）

シグナムはガイオウモンの突然の行動に驚くがすぐに殺気を感じレヴァンティンを構える。

ガイオウモン「鎧王流剣術“牙龍天嵐”！！」

ガイオウモンはそう言い剣を超速で振るい技を放つと巨大な竜巻を生み出す。

シグナム「うわあぁぁぁぁ！！！」

上空にいたシグナムはその竜巻に巻き込まれ吹き飛ばされた後地面に激突した。

銀時「オイィィィ！！今のってＯ○ＥＰ○Ｅ○Ｅのゾ○のタ○巻○じゃねぇのかあぁぁぁー！？」

銀時がなんかメタ発言のような感じの言葉を叫んだが無視

そして、シグナムは何とか立ち上がるが

ガイオウモン「回復の暇は与えんぞ！“燐火斬”！！」

ガイオウモンは得意技である十字の閃光剣を放つ。

シグナム「グッ…アアアア！！」

ドカアァァァン！！

シグナムはレヴァンティンを使って何とか受け止めようとすがあまりの威力に後ろへと飛ばされ壁に衝突してしまう。

『『シグナム（さん）！！！』』

シグナムが吹き飛ばされた事でフェイト達は悲痛な声をあげる。

ガイオウモンの強さはシグナムをも凌駕する圧倒的強さである。

スレイヤードラモン（おいおい…女相手に容赦ねぇなぁ、アイツ…）

スレイヤードラモンは思わずガイオウモンに対してそう呟く。

そして観戦室では

ヴィータ「そんな、アイツめっちゃ強ぇじゃねぇか！！」

リィンフォース「あれほどとは…確かに本気を出した彼には私も勝てそうにありませんね……」

ガイオウモンの強さに驚きを隠せないヴィータとあの時本当に本気を出されていたら間違いなく自分もやられていただろうと確信するリィンフォース。確かにあれほど実力では本当にリィンフォースを破壊しかねない。

ナギ「だから言っただろ。手加減させていたと」

ナギはリィンフォースに向かってそう言う。

ガイオウモン「シグナム？それで終わりか？」

ドカァーン！

すると壁から爆発音が聞こえバリアジャケットをボロボロにしてシグナムがガイオウモンの前に飛び出してきた。
そして豪快にレヴァンティンを振るう。

ガキィン！！

ガイオウモンもそれを右手の剣で受け止める。

ガイオウモン「ほぅ…まだやるようだな」
シグナム「そう簡単には負けん！！」

口ではそう言うシグナムだがやはりガイオウモンの実力に圧倒的に押されていた。

シグナム（（なんて奴だ！！神速の速さに豪傑なる剣技！！これほどまでに剣に優れた相手と戦ったのは剣心以来だ！！！！）
ガイオウモン（思った以上にタフな女だ。さすがに坂田銀時や緋村剣心に比べれば実力ははっきりいって劣るが、それでも人間でこれほどの実力を持つ剣士はそうはおらん）

ガイオウモンもシグナムの実力を認めていた。

互いに力を認め合い、全力で剣をぶつけ合う2人はどこそこもなく楽しんでいる。
そして互いに剣をなぎ払ってバックすると見詰め合う。

シグナム「レヴァンティン！！」
レヴァンティン『シュランゲフォルム』

ガシャン×1

シグナムはカートリッジをロードしレヴァンティンを連結刃形態『シュランゲフォルム』にした。そして連結刃に炎を纏わせた。

ガイオウモン「ほぅ…あの時の連結刃か……」

ガイオウモンは興味深そうにその光景を見つめた。

ガイオウモン「ならば俺もそろそろ決着をつけさせて貰うとしようか！！」

ガイオウモンもそう言うと両手の剣“菊燐”を一つにした

剣心「これで決着がつくでござるな」
銀時「ああ」

剣心と銀時はこれでこの戦いに決着がつくと確信した。
そしてガイオウモンとシグナムはお互いに技を繰り出す。

シグナム「飛龍…一閃！！」
ガイオウモン「鎧王流剣術奥義“燐火撃”！！」

シグナムは連結刃から繰り出される紫色の炎の一撃をガイオウモンは一つになった“菊燐”から凄まじい威力の剣の衝撃波を放った。

お互いに一度エネルギーが拮抗しあった後にもの凄い大爆発が起こり閃光が走った。

ドッガアアアアーン！！！！！！

オウリュウモン「ヌオッ！」
スレイヤードラモン「グッ！」

近くにいたオウリュウモンとスレイヤードラモンは思わず目を瞑った。

そして観戦室でも

銀時「うわっ！まぶしっ！」
剣心「ぬっ！」
セイバー「凄い光です！」
ヴィータ「グッ！」
リィンフォース「なんて閃光ですか！」
フェイト・なのは・はやて『キャアア！！』
ナギ「ウオッ！」
神楽「まともに目を開けてられないネ！！」
ヤミ「ウッ！」
クレニアムモン「ウオオッ！」
デュナスモン・バンチョーレオモン『ヌオッ！』

思わず観戦室にいた全員も目を瞑った。
そして煙が晴れた。

ヴィータ「どうなった…？」
はやて「どっちが勝ったんや？」
フェイト「シグナム…」

リリカルメンバーはシグナムの心配をしている。

アルフ「皆！あれ見て！！」

アルフが試合場の真ん中を見た。

するとそこには普通に立っているガイオウモンと大の字になって倒れているシグナムがいた。
ガイオウモン「なかなか楽しめたぞ。シグナム」

ガイオウモンはそう言って倒れているシグナムを見つめた。

オウリュウモン「（勝負ありじゃな…）この勝負！ガイオウモンの勝ち！！」

オウリュウモンはガイオウモンの勝ちを宣言した。

ヴィータ「シグナムが負けた…」
リィンフォース「無理もない。相手があれほどの実力者ではな」
はやて「せやな…シグナムもようがんばったわ」
アルフ「それにしてもマジでアイツ強いね。フェイト」
フェイト「うん」
なのは「本当ですね…」

リリカルメンバーはシグナムが負けてしまったことにはやはりショ

ックだった用だ。

銀時「やっぱ強ぇえなぁ、アイツ…」
剣心「うむ、さすがはガイオウモン殿と言った所か…」
セイバー「そうですね」
ヤミ・たま『はい』
神楽「でもいい勝負だったアル！」
ナギ「まぁな、お前達もそう思うだろ」
バンチョーレオモン「ああ」
クレニアムモン・デュナスモン『はい』

銀時達もそれぞれ感想を言った。

スレイヤードラモン「お疲れ、ガイオウモン」
ガイオウモン「ああ」

スレイヤードラモンはそう言ってガイオウモンにタオルを渡した。

ガイオウモン「立てるか？シグナム」

そして、ガイオウモンはシグナムに手を伸ばした。

シグナム「…ああ」

シグナムは何とかガイオウモンの手をとり立ち上がった。

シグナム「やはり強いな。ガイオウモン」
ガイオウモン「何、お前も強かったぞ。さすがに騎士を名乗るだけの事はある」
シグナム「もう一度お前とは戦いたい物だ。今度こそお前に勝って

見せるぞ」
ガイオウモン「ふっ、望む所だ」
ガイオウモンとシグナムは再戦の約束を果たし硬い握手をした。
そして、その後フェイト達はデジモン達と遊んだりゲームをしたりした。
しかし、楽しい時間はあっという間に楽しい時間は過ぎて行きそろそろ帰る時間となった。

はやて「ありがとうな銀ちゃん。こんな大勢で楽しんだのは初めてや」

はやては嬉しそうに笑った。
源外の工場内に集まって、別れの挨拶をする。

なのは「ホント。楽しかったね」

なのはも笑顔で言った。

セイバー「私達も楽しかったですよ」
神楽「また遊びに来るアルよ」
ナギ「いつでも来ていいからな」

セイバーと神楽とナギが笑顔でそう言った。

シグナム「ではな剣心、銀時」
フェイト「また来るね」

シグナムとフェイトが言った。

銀時「ああ。またな」
剣心「いつでも遊びに来るでござるよ」

銀時と剣心が別れの挨拶をした。
その直後に、フェイト達は装置で元の世界に帰った。

銀時「さーて、俺らも帰るか」
剣心「そうでござるな」

ヤミ「そうですね」

銀時達は工場を出ようとした。

たま「銀時様」

たまが銀時を呼び止めた。

銀時は足を止めて、たまに振り返った。

たま「またフェイトさん達が来たら、誘ってくれますか？」

たまの言葉を聞いて、銀時達は少し驚いた。

同時に嬉しくもなった。たまには『友達』と言える者が少ないから、

今回のフェイト達との出会いは良い事だ。

銀時「ああ。またみんなで騒ごうぜ」

笑みを浮かべながら、銀時が言った。隣にいる剣心達も微笑んでる。

銀時達は歩きだし、たまは銀時達の後ろ姿を見つめながら微笑んだ。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『黒神』さんから「質問で

す。

剣心と左之助へ

『リリカル銀魂ゲスト杯』でのスバルとセイバーの剣士としての誇りをぶつけ合った対決、どんな感想でしょうか？

弥彦へ

斉藤は新八の事を侍の恥だと言いますが、弥彦自身も新八の事をどう思いますか？

薫へ

１０年後のフェイトはメッチャ美女になってますので、はっきり行って貴方には勝ち目ありませんので、剣心の事は諦めたほうが良いのでは？（黒笑）」ってまたこんなしつもんかあぁぁぁぁ！！！！」

銀八はまた薫や新八に喧嘩を打ったような質問があったので思わず叫んでしまった。

銀八「まぁ、その前に…剣心と左之助感想言ってくれ」

剣心「そうでござるな…。やはり二人とも相当な実力でござった。正直拙者でも勝てるかどうか思ってしまったでござる」

左之助「俺もあいつらとなら面しれぇ喧嘩が出来ると思ったな。正

直勝てるとは主ワねぇけどよ。俺もあいつらと喧嘩して見てぇと思ったぜ」

銀八「女相手に喧嘩かよ……」

左之助「喧嘩に男も女もねぇよ」

銀八「あっそ、んじゃ次弥彦」

弥彦「おう、そうだなぁ～如何考えてもロリコン野朗に侍の資格なんかねぇと思いたいんだけど」

新八「ちょっとぉー！弥彦君まで何言ってんの！？僕はロリコンじゃないってば！！」

弥彦「あんなの見せられてロリコンじゃないって言ったって言われても説得力の欠片もねぇだろ…」

弥彦は軽蔑の眼差しで新八を見つめる。

新八「ちょっとそんな目で僕を見ないでぇー！！」

新八は思わずそう叫んでしまった。

銀八「で…次は薫何だけど……」

銀八は恐る恐る薫を見つめた

薫はもの凄い黒いオーラを放っていた。

薫「相手が誰だろうと剣心は渡さないわよ・・・。ましてやいい年こいて“魔法少女”ぬかしてる恥ずかしい女なんかに誰が…剣心を渡すもんですかアァァァ！！」

ドカァーン！！

薫は怒りのオーラを爆発させ大爆発を起こした。

銀八「ギャアアアアア！！！！」

銀八はその爆発に巻き込まれて気絶した。

剣心「気絶しちゃったでござるな。ではこれから拙者が引き継ぐでござる。とりあえず『黒神』殿は廊下に立っているでござる」

なのは「では次の質問です。ペンネーム『ボッスン』さんから「バナージ「凄いな！三千院家はデジモンをいっぱい持っていて！！」

ニンフ「そうだね」

質問です

ナギさんはアグモンやブイモンなどの主役デジモンやアルファモンやデュークモンなどのロイヤルナイツのデジモンを持っていますか？クロスローダーを持っている人達はデジヴァイスはクロスローダー以外のデジヴァイスを持っていますか？二つとも同じ質問がありましたら答えなくてもいいです

ニンフ「デジヴァイスはクロスローダーだけでいいんじゃないの？」

クロスローダー以外のデジヴァイスにはクロスローダーには付いていない機能があるから。例えばデジソウルチャージやカードスラッシュなどがクロスローダーには付いていない機能だから

バナージ「まあ、そうだな」

次回も楽しみにします」
剣心「では、お答えお願いするでござる」
ナギ「一応初代から一通り持ってるぞ」

そう言ってナギは歴代形のデジヴァイスを見せた。

剣心「それは本編でも出るんでござるか？」
支配者「古いタイプはあんまり出さないと思います。。出しても“デジトライブ”くらいですね」
剣心「そうなんでござるか。では『ボッスン』殿。そう言う事らしいでござるよ」

フェイト「次の質問です。ペンネーム『ケン』さんからです。「遅れた気持ちは分かります・・・自分なんかD．C．？とD．C．？．SSのDVDを見てて遅れましたから・・・大丈夫です。
統夜「よく見れたな・・・作者（ケン）の好きなものだしな・・・」

うん。完全に見終えた・・・枯れない桜の木が絡んでいたなんて・・・質問に入りますか。

新八へ

侍を目指している貴方は直ぐにアイドルオタクを卒業した方がいいですよ。あっても・・・他人から奪ったDVDやアニメグッズを奪ったから侍失格だから無理か・・・

沖田へ

土方を殺そうと計画を立てている貴方はもしセイヴァー・ロード・サーディオンが使えたらどのフォームで痛めつけて殺しますか？

支配者さんへ

週刊少年ジャンプに掲載されていた戦国ＡＲＭＯＲＳをご存知ですか？
自分は読んで甦土武と呼ばれる兵器をデバイスネタにしました。

差し入れとして万事屋メンバー達にＨＥＲＯ's　ＥＰＩＳＯＤＥの第五十一話から第五十三話まで入ったＤＶＤを差し上げます。」
だそうです」

新八「余計なお世話だアァァァ！！て言うか人を泥棒みたいにいってんじゃねエェェ！！」
支配者「実際泥棒したじゃんアンタ」
新八「あれは親衛隊の掟を破った罰だぁぁぁ！！無礼なこと言うなぁぁぁ！！
神楽「言い訳は見苦しいアル。ロリコン泥棒」
シャナ「そうよ、ロリコン泥棒。偉そうな事言ってんじゃないわよ。人の物かっぱらって自分の物にしたくせに」
ヤミ「そうです。貴方に偉そうに『寺門お通親衛隊隊長』を名乗る資格なんてありませんよ」
新八「そこまで言う！？」
銀時「オメェが悪いんだろうが、ロリコン泥棒」
新八「だからロリコン泥棒って言わないで下さいってばぁー！！」

新八は叫び続けた。

次は沖田

沖田「そんなもん全部のフォームを使って徹底的に土方をズタズタにしてやりまさぁ」

土方「てめぇ総悟！お前どんだけ俺の事嫌いなんだコラ！！」

沖田「この世の何よりアンタがきらいでさぁ。だからさっさと死んでくだせぇ土方このヤロー」

土方「あぁ、そうかい…だったら俺もデバイスを使っててめぇをぶっ殺してやるー！！」

そして沖田と土方はいつものように喧嘩を始めた。

支配者「んで、次の質問ですね。私も戦国ＡＲＭＯＲＳは好きでしたよ。毎回よんでましたから、私もデバイス作りの参考にしたいですね。後ＤＶＤの差し入れありがとうございます」

剣心「だそうでござる。と言う訳で『ケン』殿。ＤＶＤのプレゼントありがとうでござる」

銀時「では、今回はここまでだ」

支配者「次回もお楽しみに」

そして、薫に爆発で気絶していた銀八が目を覚ました。

銀八「アイテテテ…、ったく、っておい！いつの間にか『銀八先生』おわってんじゃねぇかあぁぁぁぁー！！」

いつの間にかコーナーが終わっていた事に気付いて銀八が叫んでいた。

第六十八訓　戦闘も盛り上げてこそ意味がある（後書き）

支配者「如何でしたか？今回のお話」

銀時「えらくいろんな技出してたな…ガイオウモンの奴」

支配者「別にいいじゃありませんか」

ナギ「デジモンの技って決まってるんだぞ。何だよ『鎧王流剣術』って」

支配者「別にいいじゃん！何でも」

新八「と言うかいつになったら僕の出番が来るんですか？」

支配者「んー？次の次の位ですね。次はシャナちゃんメインなので」

シャナ「私メインなの？」

支配者「はい、と言う訳で次回をお楽しみに」

新八「速く僕を出せー！！」

支配者「うるさい！」

第六十九訓　仲が悪いからと言ってコンビネーションが悪くなるわけではない

支配者「今回はシャナとアルカの物語です。二人のファンにはマジでごめんなさいと言っておきましょう」

銀時「なんでだよ？」

支配者「見れば分かりますよ」

なのは「リリカル剣魂スペシャル始まります」

第六十九訓　仲が悪いからと言ってコンビネーションが悪くなるわけではない

朝の早い時間帯
こんな時に誰かが双眼鏡で誰かの家を覗いていた。
それは真女組一番隊隊長、アルカ・シルトであった。

アルカ（ク～ッ。神裂め…いくらしばらく仕事をサボっていたからって……こんな地味な張り込みをさせる何て…もう二週間だぞ！いつまでこんな地味な張り込みをしなきゃいけないんだ！！）

そうアルカはリリカルなのはの世界に行っていたので、しばらく真女組の仕事をしていなかった。仕事をサボっていた罰として本来は一般隊員がやるような張り込みの仕事をさせられていた。
ちなみに今覗いている家にいるのは指名手配中の過激は攘夷浪士のいる家である。
その男はある過激派組織に深く関わっている男らしくその男を皮切りにその組織を全滅させる為にその男が仲間と接触するまで張り込んでいるのである。
ちなみに今家の中では

「うっふ～ん」
「デヘヘヘヘ…」

その男が攘夷浪士が家の中で女とイチャイチャしていた。

アルカ（ムギ～ッ！何をやっているんだあいつらは！私だって早く家に帰ってクルスとイチャイチャしたいのに～！！）

この人は警官のくせして何を言っているんでしょうか？
と言うか余りにも原作と違いすぎだ。もう欠片も残ってないな。

アルカ「ナレーションうるさい！！」

アルカがナレーションに文句を行った。

アルカ「あ～眠いし、イライラする～！！あれから動きもないし、だがいい加減動きあるだろ」

するとアルカは携帯を取り出した。

アルカ「こちらアルカだ。まだこっちに変化はない。そっちはどうなってるんだ？」
？？？『ラ～ジャ』
アルカ「いや、ラージャじゃない。裏口の状況を聞いてるんだ。そっちはどうなってるんだ？」
？？？『ああ、そうねぇ～もうちょっとコシが入ってるほうが私は好きね』
アルカ「は？」
？？？『あぁ、いやこっちの話よ。ていうか味の話』

ズルズル

アルカとトランシーバーで話している金髪の少女がズルズルと何かを食べていた。

アルカ「おい！お前張り込み中になに食べてるんだ！？と言うかズルズルうるさいぞ！！」
『あのさ～お譲ちゃん。他の客に迷惑だからさ。携帯で話すの止め

てくれないかな？』
？？？『ラ～ジャ』
アルカ「ラージャじゃないー！と言うか早く持ち場に戻『ブツッ！』
切った…」

アルカの話も聞かずに相手は通信を切った。

アルカ「上等だ……あの金髪小娘…！！」

アルカは通信の相手に対して怒りの余り拳を振るわせ炎をも出した。
その時である。

？？？「あの～…悪いんだけど退いてもらえない……？」
アルカ「あ！？」

アルカが後ろを振り返った。
そこにはゴミ袋を持った万事屋のシャナがいたのであった。

アルカ（ゲッ！何でこんな所にこいつが！？）

アルカは思わず嫌な顔をした。
実は今更だがアルカとシャナはものすごく仲が悪いのである。
フェイトの家にいたときも一度も話したり等していない。
同じ炎能力使いだからかも…

シャナ「あ～…じゃんけんに負けたからって何で私がゴミだしなんかしなきゃいけないのよ～……」

シャナはふらふらした足取りで寝ぼけていた。

シャナ「あ～…ここはあんたの道じゃないでしょ…皆の道なんだから…さっさとのいてよ……」
アルカ（こいつ寝ぼけてるのか？）

アルカはシャナを見ながらそう思った。

アルカ（全く…こんな朝から何でこんないらいらする小娘を見なきゃいけないんだ！！クソ～絶対神裂に復讐してやる…！！）

アルカは心の中で神裂に復讐を誓った。

シャナ「ね～…早くのきなさいよ。ここ通らないと…」
アルカ「あ～、分かった分かった。分かったら別の道へ行ってくれ」

アルカがそう言ってシャナを向こうへとやろうとするが

シャナ「何よ…その態度…分かったって言えば…なんでも通ると思ったら大間違いなのよ…結婚仕立てでいきなり倦怠期迎えた夫婦じゃないんだからさ…」
アルカ「あ～もういい！分かったから静かにしていろ！！」

アルカはそう言ってまた部屋のほうに双眼鏡を向ける。

シャナ「何よその返事は…！！返事をする時は人の顔をちゃんと見なさいよ！！」

そう言ってシャナはアルカの襟元掴んでアルカの顔を見て

シャナ「あ」
アルカ「あ…じゃない！こっちは仕事中だ！逮捕されたくなかった

らさっさと消えろ！！」

アルカはそう言ってシャナを突き飛ばした。
後ろの箱に当たった
アルカは再び双眼鏡を構えた。

シャナ「いたっ！何すんのよ！この暴力警官！！」

シャナはそう言ってアルカを殴ろうとしたが

ヒョイ

アルカは軽くかわした。

シャナ（心底ムカつく…この女…！！）

シャナはそう言って今度は蹴り飛ばした。

ゲシッ！

今度は当たった。
アルカは壁に当たり軽く鼻血をたらした。

シャナ「何よ…こんな朝早くから覗き？しかも鼻血まで流しちゃって興奮しちゃったわけ？男の裸なんか見て気持ち悪いわね。洒落になんないわよそれ、小説的にもやばいわよそれ」
アルカ「誰が覗きなどするかこら！うるさいと言ってるだろーが！いいからさっさとこの場から消えろ！！これ以上邪魔をするな！さもないと公務執行妨害で逮捕するぞ！！」
シャナ「やってみなさいよ！それにしても覗きなんてとうとう弟と

あんな事やこんなことするの飽きたわけ?それともブラコン過ぎていい加減嫌気さされたわけ?あ～あ～ホント嫌よね。これだからブラコンは…」

ガシャン!

アルカはシャナの言葉にキレタのかシャナに手錠を掛けた。

シャナ「ちょっと!なにすんのよ!!」
アルカ「公務執行妨害と並びに警官侮辱罪で逮捕だばか娘!!」
シャナ「冗談じゃない!早くはずしなさいよコレ!!」

アルカは無視して自分にも手錠掛けた。

シャナ「何よもう!こんなのその気になれば簡単に外せ…ってあれ?」
アルカ「無駄だ。それは高ＲＥＶＥＬ能力者用の特別な手錠だ。鍵が無きゃはずせん。もちろん私の能力を持ってしても壊せない」

そしてトランシーバーを取り出した。

アルカ「あ～、カーチャか?公務執行妨害の奴を現行犯逮捕した。私の代わりに署まで連行してくれ」
カーチャ『ラ～ジャ。おじさん替え玉一つもうちょっと太くしてくれる?』
『ラージャ』

さっきの通信の相手であるカーチャはうどんの屋台でうどんを食べていた。

アルカ「ラージャじゃないー！！何かってに替え玉なんかしてるんだ！さっさとこっちに来いー！！」

勝手に仕事をサボってうどんを食べているカーチャに対してアルカが思いっきり怒鳴ったのであった。

15分後

アルカ「遅いぞ」

カーチャ「シャナ？あんた何やってんの？」

この少女の名前はカーチャ。聖痕のクェイサーに出てくるあのカーチャだ。真女組のドS女王と呼ばれている。そして真女組一のサボリ魔でもある。ちなみに銅使いの能力者であり四番隊の隊長だ。

シャナ「何にもしてないわよ。こんなの不当逮捕よ！不当逮捕！私は無実よ！何もやってない！！」

シャナはこう訴えるがアルカは聞く耳を持たず、カーチャも全く興味がなさそうである。

アルカ「カーチャ。どうせお前は仕事なんかしてないんだから、私の代わりにこいつを署まで連行して独房に入れておけ」

カーチャ「そうは行かないわよ～。私は命よりも任務のほうが大事だから～」

アルカ「さっきまでうどんを食べていたくせに何を言っているんだお前は！！」

カーチャに向かってアルカがそう言った。こういいたくなるのも当たり前だが

アルカ「まあ…取り合えずいったん手錠を外すから…ってあれ？鍵が無い」
シャナ「えぇ！？」
アルカは懐に手を入れて鍵を取り出そうとしたが鍵が無かった。
アルカ「カーチャ。鍵が見つからないんだ。お前の鍵で手錠を外してくれ」
シャナ「そうそう。外してよ早く」
カーチャ「……」
しかしカーチャは無言で二人を見つめた。
アルカ「ん？如何した早く外してくれ！！」
そして
ガシャン！
なんとカーチャが手錠を取り出して二人の空いている方の手に新しく掛けた。
シャナ「なっ！？ちょっとなにすんのよ！？」
アルカ「おいカーチャ！私に新しく手錠をつけて如何するんだ！！？」
カーチャ「じゃ、私持ち場に戻るから」
シャナ・アルカ『ええー！？』
カーチャはそう言って後ろを向いて歩き出した。

シャナ「ちょっとお前！何よコレ！！」
アルカ「というか外せ！何考えてるんだ貴様は！！」
二人はカーチャの服を思わず掴んで訴えた。
カーチャ「だってそっちの方が……」
カーチャはシャナ達の方に振り向くと
カーチャ「なんか面白そうじゃない」
もの凄いドSの笑顔で二人を見つめた。
カーチャ「じゃ、私行くから」
ドカッ！
アルカ「ぬわっ！」
シャナ「のふっ！」
そう言ってカーチャはシャナとアルカの二人を当たり飛ばしてその場から離れようとする。
アルカ「おいコラ待て！」
シャナ「あんたいい加減にしなさいよちょっと！」
しかしカーチャは無視してどんどん行く。
アルカ「分かった鍵をよこせ！鍵だけよこせ！！」

アルカは必死でそう叫ぶ。
するとカーチャは振り返って。

ヒョイ

アルカの制服のポケットに“ケチャップ”を入れた。

アルカ「鍵をよこせって言ったんだ！つかなんで“ケチャップ”！？」
カーチャ「何言ってんのよ～。確かあんた弟の次にケチャップが好きだったでしょ？あんたに必要なのは弟とケチャップでしょ？」

カーチャはワザとらしい笑顔を二人に向ける

シャナ「上手い！上手いけどいらないわよ！この状況でそんな笑点みたいな台詞！！」
カーチャ「じゃ～二人とも養生してね～」

カーチャはシャナのツッコミも完全に無視してどんどんと行く。

シャナ「オ～イカーチャちゃん！？頼むから早まんないでよ！人生はもっとポジティブに楽しく生きていくもんなのよ！？」
アルカ「カーチャ！よく聞けよ貴様、後で塵も残さず灰にするぞコラ！！おいカーチャ！！」

しかしやっぱりカーチャは無視。

シャナ「ちょっとカーチャちゃん！戻ってくるんだよね！？同僚を見捨てたりしないわよねちょっと！？」

アルカ「カーチャゴラー！！！！」

そして二人の叫びも虚しくカーチャは行ってしまった。
二人の間に沈黙が走った。
そしてお互いを見つめ

シャナ・アルカ『こっち見んな！！』

二人は見事にはもった。

アルカ（おいおいおい、何でこうなるんだ？何でこんな気持ち悪いぐらいの甘党小娘と一緒にこんな目にあっているんだ？）
シャナ（ちょっと待ってよ…。今日はまだ星占いも見てないのに唯ゴミを捨てに来ただけなのに何でこんなブラコン犬餌女とこんな目に会わなくちゃいけないわけ？）

二人はどうしてこんな事になってしまったのかと必死で考える。

アルカ（このままでは今までの捜査が台無しになってしまう……！！家にも帰れない…クルスにも会えない……！！）
シャナ（とにかくこの状況を何とかしないとどうしようもない……！！）

二人はこの状況を何とかしようとした。
すると部屋の中にいた攘夷浪士が動いた。

アルカ「うおっ！犯人が動いた！！」

アルカは追おうとするが

アルカ「おいコラ！お前なんでそっちに行ってるんだ！？」

シャナはアルカと反対方向に行こうとしていた。

シャナ「お前達の屯所に行くのよ。手錠の合鍵くらいあるでしょ？」

アルカ「お前こんな時に何ふざけてるんだ！アイツは私達がずっと追い続けていた過激派攘夷浪士の一人！指名手配中の奴なんだぞ！？」

シャナ「そんなの知らないわよ。さっさと屯所に行って手錠を外すの」

アルカ「ここで逃すと今までの捜査が台無しになってしまうんだぞ！？」

シャナ「台無しでも茶碗蒸しでも知らないわよ。とりあえずこの知恵の輪ロックを取り外しに行きましょうよ！」

二人は醜い言い争いをする。

アルカ「最悪のタイミングだー！！」

アルカは叫ぶ。確かにこのタイミングで犯人が動くと言う事は最悪以外の何物でもない。

アルカ「おいカーチャ！犯人が動いた！追え！おいカーチャ！！」

アルカは携帯でカーチャを呼ぶがカーチャは無視している。

アルカ「くそっ！あの金髪小娘！おい追うぞ！！」

シャナ「いたたた！お前！しつこく追いかけてばかりじゃね！相手に嫌われるわよ！！恋愛でもそうなんだから！！」

アルカ「知るかそんな事！いいから追うんだ！ここは奴を逃がすわ

けには行かないんだ！」
シャナ「関係ないわねそんな事！」
アルカ「貴様っ！公務執行妨害で逮捕するぅ！！」
シャナ「もう逮捕されてるわよ！！」

シャナとアルカはお互いに引っ張り合う。
そして

シャナ・アルカ『いい加減にしろお前！！』

二人はお互いに胸倉を掴んでまた見事にはもった。
何だかんだいって仲いいんじゃ…

シャナ・アルカ『良くない！！』

あ～はいはい…。
話を戻します。

シャナ「このブラコン女！」

バキィッ！

アルカ「ブッ！やってくれたな貴様！」

どごっ！

シャナ「ゲホッ！」

とうとうふたりは殴り合いを始めそして取っ組み合う。

シャナ「それが人に物を頼む態度な訳！？え！？」
アルカ「グウッ…！」
アルカ（そうだ。今はこいつを説得しない事にはなにも始まらない…！）

アルカは少しシャナから離れた。
そして何かを考える素振りを始めた。

シャナ「…何してんの？」
アルカ「決心してるんだ！」

シャナに頭を下げるなどアルカのプライドが許さないが今はそんな事言ってられない。

アルカ「あの～…私と一緒に…犯人を追って欲しいと言うかまぁ…みたいな感じ？」
シャナ「は？何それ？」

すると携帯から声が響いてきた。

カーチャ『そんなんじゃ駄目よアルカ～。ちゃんと地面に手をつけて土下座しろぉ』
アルカ「うるさい！と言うかお前犯人を追えー！！（怒）」

アルカの叫びをやっぱりカーチャは無視。

シャナ「そうよアルカちゃん。人に物を頼む時は土下座よ。そんなの基本じゃない」
アルカ「クッ…分かったよ……」

そう言うとアルカは腕を振りかぶって

アルカ「はい土下座―！！」
シャナ「ヌワッ！？」

シャナを思いっきり地面に叩きつけた。

アルカ「はい土下座―！！」
シャナ「ちょっ！何すんのよやめ…」
アルカ「はい土下座―！！」
シャナ「ぐえっ！ちょっ、止め…」
アルカ「私と一緒に犯人を追ってくださーい！！」
シャナ「ぐへぇあっ！」

こんな事がしばらく続いた。
そして

二人は手錠を付けたまま犯人を追うことになった。
アルカの説得と言うか、暴力が効いたのだ。

シャナ「とりあえずお前がいないと手錠が外れないのは分かったわよ。とりあえず言う事聞いてやるからパフェ奢んなさいよ。パフェ」
アルカ「後でな、今奴を見失うわけには行かないんだ」
シャナ「あんな奴さっさと捕まえなさいよ」
アルカ「奴だけ捕まえても意味はないんだ！アジトを見つけて組織ごと潰さないと…」

アルカはそう言う。犯人達を一網打尽にするのが今回の作戦だからだ。あいつだけ捕まえても意味はないのだ。

シャナ「組織だか、そうめんだか知らないけどまどろっこしいのよ！全く面倒くさいわね～さっさと終わらせなさいよ」
アルカ「うるさい！素人は黙ってろ！」

アルカがこう言うと携帯が反応した。すると

カーチャ『アルカあんた、手伝ってもらってる分際で偉そうなのよ、“さん”付けで呼べよごら～』
アルカ「お前はもっと黙ってろ！！」

アルカはそう叫ぶ

「ね～、何あれ？」
「ママ～さっきからあの人達何言ってるの？」
「シッ！見ちゃいけません！」

野次馬までアルカとシャナを見ながらこんな事を言い出した。

アルカ「見るなー！そして陰口を叩くなー！！」

アルカは叫び続けるしかなかった。
すると犯人がなぜか喫茶店に入った。

シャナ「あれ？何で喫茶店なんかに？」
アルカ「知るか。いいから私達も入るぞ。自然にしてろよ」

アルカの言葉で二人は喫茶店に入った
社交ダンスを踊り薔薇を加えながら

アルカ「って！どこが自然―！？」

アルカは思わずそう叫んでしまった。そりゃ周りから見ればこんな不自然な光景はない

シャナ「いやあれよ。親から言われて自然に歩きながら社交ダンスの練習が染み付いている姉妹って設定で…」
アルカ「自然のポイントがぜんぜん違うだろ！」
カーチャ『いや、まず薔薇を銜えてる所ツッコミなさいよ』
アルカ「お前はさっきからどこで見てるんだー！？」

アルカはカーチャに突っ込む。確かにどこでこの光景を観察してるのやら

そして二人は席に座った。
シャナはジャンボチョコパフェ
アルカはコーヒーを頼んだ。
アルカはコーヒーにケッチャプを入れ用とする。
しかし、シャナがパフェを食べようとするせいでケッチャプが零れた。
その光景を見てアルカの顔が歪んだ。

アルカ「おい、どういうつもりだ？」
シャナ「は？普通にパフェ食べてるだけじゃない」
アルカ「お前が動くと私のケチャップの照準が狂うんだよ」
シャナ「何よ？ケチャップの照準って？というかなんでコーヒーにケッチャプ？」
アルカ「ケチャップは私のクルスと同じで万物森羅万象に対応できるオールマイティアイテムなんだよ！」
シャナ「バッカじゃないの」

するとシャナのパフェにケッチャプがかかった。

ベチョ

シャナ「アー！」

シャナは思わず叫んだ。

シャナ「お前！私のパフェ汚すんじゃないわよ！！」
アルカ「汚してないわ！！」

シャナのこの言葉にキレタのかアルカがパフェを蹴り飛ばした。

シャナ「グホ！」

パフェは思いっきりシャナの顔面に激突した。

アルカ「ふん、素人が」

アルカは改めてケッチャプ入りのコーヒーを啜る。
すると携帯がなった。

カーチャ『アルカ、アルカ』
アルカ「なんだ一体？」
カーチャ『そういえば言い忘れてたんだけどさ～』
アルカ「ん？」
カーチャ『さっきのケチャップだけど』

するとシャナの顔が青ざめ始めた。

シャナ「ア～ル～カ～ちゃ～ん」
カーチャ『中に下剤を入れちゃったのよ』

そしてアルカの顔も青ざめ始める。
グ～～～ギュルルル～～～～

シャナ「おなか……痛い……」
アルカ「嘘……？」

シャナとアルカは絶望した

アルカ・シャナ『ウオオオオオオ！！』

二人は女子トイレに駈けずり入った。

シャナ「ちょっと待った！」
アルカ「なんだこんな時に！？」
シャナ「お前こんな状態で一緒の個室でトイレするの！？」
シャナはそう叫ぶ。二人は手錠でつながれている。二人共（ピ――――！！）状態である。こんなんでトイレなど
アルカ「出来る訳ないだろー！！」
その通りである。しかし二人とも死にそうだ。
シャナ「お前ね～！それこそトイレでランデブー！じゃないの！いくらなんでも洒落になんないわよこれ！？」
アルカ「かっ、考えただけで恐ろしいが……じゃあ如何しろって言うんだ～！！！？？？」
シャナ「力を入れるな～！！」
シャナは叫び続ける。こんな所で漏らしたりなんぞしたらにじファン小説のヒロイン史上最低の暴挙となってしまう。
シャナ「幸いなことに私達には紙も知恵もあるわ…何とか最善策を考えるのよ」
アルカ「な…なんだ…その最善策というのは……」
アルカがシャナに質問する。
シャナ「まずはプランAよ。“一人はトイレをしてもう一人は扉の上の外で待機するのよ…ただしこれは待機している人間が現場を見なきゃいけなくなっちゃうわ……」
アルカ「プランBはないのか…！？」

シャナ「プランB！？外で待機している人間が扉から手をツッコムのがあるわ……。ただしこれは扉を閉められなくなっちゃうけど……」

アルカ「プラン…Cは？」

シャナ「C！？…鍵も閉めて現場の目撃も回避できるけど、その代わり低姿勢を保ち続けなきゃいけなくなり待機している方は地面に体を押し付けなきゃいけなくなるけど…」

シャナはそう言って3つのプランを出した。

シャナ「さぁ…如何すんのよ…！？」

アルカ「鍵を閉められないと言う点はあるがわたしはプランBがいい……！！」

シャナ「私も……！！」

アルカ「じゃあ…後は順番だけだな……！」

シャナとアルカはそう言ってお互いに向き合いジャンケンを始めた。

アルカ・シャナ『最初はグー！ジャンケンポン！！』

そしてアルカがパー、シャナがグーを出した。

アルカ「ヨッシャー！！」

アルカは勝利の喜びに浸り急いで個室に入ろうとする。ところが

ガシッ！

シャナ「ちょっと待ちなさいよ、お前、後出ししたでしょ」

シャナが言いがかりをつけてきた。

アルカ「この非常時に言いがかりを付けるなー！！」

バキィッ！！

シャナ「非常時だからこそでしょうがー！！」

ドカァッ！！

二人は殴り合いを始めてしまった。

シャナ・アルカ『譲れないー！！』

もう順番なんて無視して二人は個室にかけずりこんだ。ところが

シャナ・アルカ『！！』

個室に入ったときに二人は驚愕した。

シャナ・アルカ『和式ー！？』

なんとそのトイレは女子トイレであるにもかかわらずなんと“和式”だったのである。

シャナ「なんで和式！？ありえないでしょ！いまどき女子トイレで和式なんて！」

アルカ「しかも扉との距離が無駄にある…これではプランA，B，Cどれも…」

そう二人は洋式でプランを考えていたのである。
しかし、こともあろうに和式であった。これでは高さが必要なプランAが成り立たない。Cも厳しい。そのうえ扉との距離が無駄にあるために最良のプランBも無理だ。

シャナ「そ、そんな……」
アルカ「もう無理なのか……」
シャナ「私達に……」
アルカ「救いの“神”はいないのか…？」

二人は絶望した。しかしその時シャナが閃いた。

シャナ「いや！待ちなさい！まだプランDがあったわ！」
アルカ「何！？プランD！？」

シャナは説明を始めた。

シャナ「プランD！一人がトイレをしている間にそのうえでもう一人が逆立ちするのよ！！そうすれば外からも見えないし鍵もかけられる！！でもかなりやばい戦法だけど…」
アルカ「そ…そんな事…出来るのか…？」
シャナ「やるしかないでしょー！！」

そして二人はやむなくそのプランDを実行した

シャナ・アルカ『＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃＃！！！！？？？？』

シャナとアルカはもう言葉にならない位うなっていた。

カーチャ『シャナ～、アルカ～、大丈夫～？（黒笑）』

この二人がこんな目にあってしまった原因を作ったカーチャはどこかからその光景を見て茶化していた。
もう、これは最低の光景だな

シャナ・アルカ『うるさーい！！』

もう二人にはこの言葉しかなかった。

そして２０分後
二人は何とかトイレを済ますことが出来た。

アルカ「お前長すぎだぞ！」
シャナ「何よ！そう言うお前こそ紙使いすぎよ！私のほとんど紙なかったわよ！！」

二人は外に出ても相変わらず喧嘩をしていると、犯人が外に出ていた。

アルカ「あっ！犯人が外に！！」
シャナ「え？」
アルカ「追うぞ！」

アルカはそう言ってシャナを引っ張り店の外に出た。
あぁ、勘定はちゃんと払いましたよ。
しかも犯人は車に乗っていってしまった。

アルカ「クソッ！逃がしてたまるか！！」

そう言うとタイミング良く二輪車がやってきた。

アルカ「追い止まれ！警察だ！！」

ドガッ！

男「うわあっ！？」

アルカはその男から無理やり二輪車両を奪い発進させた。

アルカ「おいどけ！前が見えないだろうが！！」
シャナ「どけるわけないでしょうが！！こんな体制で！！」

すると後ろから巨大なトラックが迫ってきた。

シャナ「後ろからトラック来る！トラック！右よ右！」

しかしアルカはシャナから見て左にハンドルを切った。

シャナ「バカ違うわよ！」
アルカ「右だと言ったろーが！」
シャナ「お箸を持つ方よ！バカ！！」
アルカ「バカとは何だ！バカとは！！」

二人は二輪車の上で喧嘩をしながら道路を走っている。
何とか後ろから来たトラックもかわした。
しかしまたしてもトラックが迫ってきた。

シャナ「お前殺す！右だって言ってんでしょうが！！」
アルカ「黙れ貴様！！」

バキィッ！！

シャナ「んがっ！」
アルカ「ぬわっ！」

アルカはぶち切れながらシャナをぶん殴った。
そのせいで体制がおかしくなったがまたしても何とかトラックをかわした。
もうほとんど奇跡に近い。

シャナ「なにすんのよ！」
アルカ「右だといったろうが！甘党女！！」
シャナ「私から見て右でしょうか！二回目なんだからそれくらい気付け！！」

バキッ！

アルカ「ぐわっ！誰が貴様の指図に従うか！！」

バゴッ！

シャナ「いだっ！もう少し大人の目線で物事を考えなさいよ！」

ドカッ！

アルカ「うるさいバカ娘！」

ズガッ！

シャナ「もう訳分かんないわよ！もー！」

ドガッ！

アルカ「それはこっちの台詞だこのー！！」

ドガアッ！！

シャナ「のおあっ！」

二人は性懲りもなく二輪車の上でずっと喧嘩し続けた。

そしてしばらくして

アルカ「何とか居場所を突き止めたな…」

そう、あの後奇跡的に犯人とその仲間達の居場所を突き止める事に成功したのである。
どうやらどこかの工場の様だ。

シャナ「まだやるわけ？もういい加減にしてよ」
アルカ「うるさい！おいカーチャ！応援頼む、おいカーチャ！！」

アルカはカーチャに頼んで応援を呼ぼうとするがカーチャはやっぱり無視

シャナ「まだ無駄だってのが分かんない訳？」
アルカ「ちっ、こうなったら」

アルカは工場の方に歩いていった。

シャナ「ちょっとアルカちゃん。何考えてんのよ。まさかこのまま乗り込もうなんて考えてんじゃないでしょうね？」
アルカ「当たり前だろうが、ここまで来てチャンスを潰してたまるか！」
シャナ「もう私疲れちゃったんだけど、精神的に」

するとアルカは思いっきりシャナを睨んで

アルカ「土下座するぞゴラ！！（怒）」

そして二人は工場内に潜り込んだ。
ダクトを通じて

シャナ「なんでこんな所通らなきゃいけないのよ…クッサイ臭いが染み付いちゃうじゃない……」
アルカ「黙れ！いい加減にしろ！文句を言うな！！」

そして攘夷志士達が密会している工場内の所を見た。ダクトの穴を通じて

攘夷志士リーダー「おい！誰にも気付かれてないだろうな？」
攘夷志士「バッチリでさぁ！」
攘夷志士リーダー「よし港に船を止めてある。物を急いで運び出すぞ！そしてズラかるぞ！」
全攘夷志士『ヘイ！』

攘夷志士達がリーダーの言葉を聞いて動き始める。

アルカ「クソッ！そうはさせる」

アルカがそう言うと

カーチャ『アルカ～呼んだかしら～？』

なんとカーチャが大声で返事をしてきたのである！
そして攘夷志士達も気付いた。

アルカ「わっ！バカ！！」

アルカは慌てたせいで通信機を落としてしまった

カーチャ『アルカ～犯人は見つかった訳？アルカ～？』
攘夷志士「誰かいるぞ！」
シャナ「やばっ！」

二人はカーチャの性で見つかってしまった。
絶対今のはワザとだろう。
そして、

シャナ「うわわっ！？」

攘夷志士達が下から槍で攻撃してきた。

アルカ「ぐわっ！？」
シャナ「ひえっ！？」

二人は縦横無尽に槍の攻撃を避けまくる。

シャナ「だあぁ！もう！お前が通信機落とすから！！」
アルカ「うるさい！悪いのはあの金髪小娘だ！！」

二人は喧嘩しながらも槍を避けまくる。しかし

シュパァン！

天井を切られて二人は落ちてしまった。

アルカ「うわわっ！」
シャナ「あんた下になんなさい！」
アルカ「ふざけるな！貴様がなれ！！」

そして地面に落下した。

アルカ「へブッ！」

アルカを下敷きにして

攘夷志士「何だ？ネズミ二匹か？しかも女か」
攘夷志士「その上手錠までつけてるぞ」
攘夷志士「ずいぶんと中の良いこったな。ワハハハ」

その言葉を聞いて二人はキレタ。

シャナ「（ブチッ！）だ～れが」
アルカ「（ブチブチッ！）仲がいいだと～！？」
攘夷志士「仲良くあの世へいけー！！」

そう言って攘夷志士の一人が二人に斬りかかった。
しかし

ドガッ！！

攘夷志士「グホッ！？」

シャナがその攘夷志士の顔面を蹴り飛ばした。

シャナ「だ～れ画仲が良いですって？ふざけんじゃないわよこんな…」

そして

シャナ「弟ケチャップ依存症なんかと！！」

そして攘夷志士は吹き飛ばされた。

攘夷志士「クソッ！死ねー！！」

他の攘夷志士が切りかかるが

アルカ「…全国の姉とケチャップに謝れ、この糖分フェチがー！！」

そう言った瞬間二人は目の前の攘夷志士を同時に蹴り飛ばした。

攘夷志士が吹き飛ばされる。

アルカ「真女組一番隊隊長、アルカ・シルトだ！神妙にしろー！」

シャナ「お前達！公務執行妨害ならびに警官侮辱罪逮捕状よ！観念しろコラー！！」

アルカとシャナは青筋を浮かべながら攘夷志士達にそう宣言する。

攘夷志士「何だと～！？小娘二人の分際で笑わせやがって」

攘夷志士「やっちまえー！！」

攘夷志士達が一斉に二人に切りかかってきた
一人の攘夷志士の刀を手錠の鎖で受け止め同時にパンチを食らわす。

攘夷志士「グハッ！」

そして次々と攘夷志士たちを蹴り飛ばす。後ろのコンテナに激突させる。

シャナ・アルカ『オラアアアアア！！』

シャナとアルカはダンスポーズのような形を取り攘夷志士にパンチを連打させる。

バキン！！

攘夷志士「％＄％＃％％％＃＄％！！！！？？？？」

そして今度は同時に攘夷志士の股間を蹴り飛ばす。
同時に切りかかってきた攘夷志士二人の攻撃をかわし、シャナの馬乗りになったアルカが攘夷志士二人を蹴り飛ばす。

攘夷志士「ウオオオオオッ！！」

上から斬りかかって来る攘夷志士に対しては鎖で受け止め巴投げの要領で後ろに投げ飛ばす。

攘夷志士「なっ、何だこいつら化け物か！？」

攘夷志士の一人が思わずそう叫んだ。そりゃそうだ。手錠をかけら

れて全く手が使えないというのに何十人もいる自分たちがたった二人の女にボコボコにされているのだから

そして今度は後ろから攘夷志士がアルカに向かって斬りかかって来る。

シャナ「ふんぬっ！」

シャナがとっさにあるかの頭を押さえつけて攘夷志士に飛び蹴りを食らわす。

アルカ「せいっ！」

そして今度はアルカが攘夷志士の攻撃を手錠で防ぎまわし下痢を食らわせ攘夷志士を吹き飛ばす。

攘夷志士「何をやってるんだ！一気にかかれー！！」

攘夷志士「ウオオーッ！！」

攘夷志士達が今度は四方八方から斬りかかって来た。

しかし二人は

アルカ「ぬっ！」

シャナ「だあっ！」

ジャイアントスイングの要領で纏めて攘夷志士達を吹き飛ばし、

シャナ・アルカ『オリャアアアアア！！！』

回転ドリルキックを食らわせ攘夷志士達を纏めて壁にめりこませ

た。
そしてシャナが攘夷志士のあごを蹴り上げその勢いで天井のパイプに足を引っ掛け

アルカ「うおーーーーっ！！」

まるで空中ブランコのようにして攘夷志士達をアルカに蹴り飛ばさせた。
ここまでしてはもうサーカスの曲芸である。
そしてその後も二人は攘夷志士達を蹴り飛ばしまくり、斬りかかって来た攘夷志士の加担を両手の手錠を交差させて折った。

攘夷志士「ヒッ！ヒエエエエエ！！」

思わず攘夷志士の一人が逃げ出した。

アルカ「ふんっ！」
攘夷志士「グヘエアッ！！」

しかしその攘夷志士はアルカの投げたケチャップに当たって気絶した。
すると入り口のシャッターが開き攘夷志士の一人がバイクに乗って現れた。

攘夷志士「クッソオ～、なんてコンビネーションだ…。お前ら！何だかんだ言って仲良いじゃねぇか！！」
アルカ・シャナ『仲良くない！！（怒）』

二人は見事にまたはもった。

そして攘夷志士がバイクに乗って突っ込んできた。

攘夷志士「一緒に死ねぇー！！」
シャナ・アルカ『仲良くないって…』

二人は同時に走り出し

攘夷志士「ウオオオオオオオッ！」
シャナ・アルカ『言ってんでしょうがぁー！！』

そして二人はラリアットを食らわせて攘夷志士を壁に激突させた。
バイクはそのまま走って後方で大爆発した。
そして倉庫内に煙が充満した。
すると人影が現れた。
それは

カーチャ「あらま」

カーチャであった。

シャナ「遅いわよお前…！」
アルカ「始末書だぞ貴様…！」

こうして攘夷志士達の組織は二人の活躍によって壊滅した。

攘夷志士「ちくしょぉ～」
攘夷志士「覚えてやがれ」

攘夷志士達は見事なまでに負け惜しみを言って連行されていった。
そして二人の手錠はようやく外れた。

シャナ「あ～やっと外れわ…」
アルカ「おい…やっぱりこれは始末書じゃすまないぞ」
カーチャ「まぁまぁ、終わりよければ全てよしって言うじゃない。結果オーラ言ってことで、んでどうすんの？シャナを独房に入れんの？確か公務執行妨害と警官侮辱罪だったっけ？」
シャナ「冗談じゃないわよ！こう上まで逮捕されるって言うの！？」
アルカ「止めておけ、カーチャ」
カーチャ「なんで？」

カーチャは質問する。

アルカ「当分ソイツの顔は見たくない」
シャナ「何言ってんのよ！それはこっちの台詞だっての！！」

そう言って二人は反対方向に歩き出した。

カーチャ「やっぱり仲が良いわね。二人とも」

カーチャがそう言うと二人は舌打ちして

シャナ・アルカ『仲良くないわよ』

そう言って去っていったのであった。

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生！』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『亀鳥虎龍』さんから「御坂に質問。
互いに本気を出したなのはと上条が戦ったら、どっちが勝つと思いますか？
ぶっちゃけ僕は上条だと思います。
理由は例えなのはが空襲戦に持ちかけても、上条には『幻想殺し（イマジンブレイカー）』があるので、当たらなければ意味が無いですし、仮に当たったとしても最強である一方通行ですら背筋を凍らせる程の彼の絶対に諦めない強い意志と信念に脱帽ですから。

剣心、銀さん、新八、左之助、シグナムに質問です。
1．僕の『万時屋奇譚幕』の鑢七花の強さを見てどう思いますか。
僕の中では『最強』の称号を持ってしまったような感じなので・・・
2．『完成形変体刀』の中で使ってみたい『刀』はどれですか？
僕的には剣心には、持ち主の心を穏やかにしてさらに正しい方向に

導く王刀『鋸』か己を試す誠刀『銓』がお勧めです。

3．“刀を使わない”のではなく“刀を使えない”剣術・虚刀流であり、流派自体が刀である虚刀『鑢』をどう思いますか？

支配者さんに質問。
好きなデジモンは何ですか？
因みに僕はアグモンです。」だそうだ」

美琴「まぁ、私もあいつが勝つと思うわよ。」
当麻「空を飛ぶ相手に勝てる気しねーんだけど」
美琴「男だった根性見せなさいよ」
当麻「へいへい」

2つめ

剣心「そうでござるな、あの七花殿には拙者も勝てる気がせんでござる。因みに『完成体変刀』には興味はござらんよ。持ち主の心を穏やかにしてさらに正しい方向に導く王刀『鋸』は少しと思うでござるがな。虚刀『鑢』に至っては飛天御剣流より危険でござるな」
銀時「ぶっちゃっけアイツ強すぎだろ…。あんなのに勝てる奴なんていねーんじゃねぇの？夜王でも無理な気がしてきた。後、虚刀にも『鑢』興味ねぇよ」
新八「僕も銀さんと同じですね。僕もあれ位強ければなのはちゃんに惚れて貰えたかも・・・」
左之助「俺も七花とはもう一度喧嘩したいと思っちまったぜ。刀のほうはよくわかんねーけど」
シグナム「私もぜひ奴と戦ってみたいぞ！虚刀流にも興味がある！変体刀についてはよく分からん」

３つ目

支配者「私の一番好きなデジモンは実は“ベルフェモン”なんですよ。なんか悪魔の帝王って感じが良いんですよね」
銀八「お前、結構マニアックだな」
支配者「うるさいよ」

銀八「まぁ、こういうわけです。と言う訳で『亀鳥虎龍』さん。そちらも更新頑張って下さい」

剣心「次の質問でござる。ペンネーム『ケン』さんから「統夜「凄いな～」」

クロスオーバーならではの戦いだからね。

統夜「いい戦いだ・・・」

お前はＢＡＳＡＲＡの政宗や三成の技をベースにしてるからね・・・
さて・・・質問をしますか。

銀さんと剣心へ

統夜の六つの刀を用いた六爪流をどう思いますか？

万事屋メンバーへ

セイントクルセイダーズの大将であるセイラをどう思っていますか？

支配者さんへ

戦国ＢＡＳＡＲＡの中でお気に入りのキャラはいますか？

以上です。」だそうだ」

銀時「そうだな、お前は戦国ＢＡＳＡＲＡの“伊達政宗”かって思ったよ」

剣心「しかし、六刀流とは…たいした剣捌きでござるな、感服したでござるよ」

次、

銀時「最低の下衆野朗だな。あのクソ女」

剣心「権力と地位に溺れ、自分の行動だけが正しいと思い込み仲間を捨て駒としか思わないとは…それで絶対正義を名乗るなど愚か過ぎてあきれ返るでござる」

シャナ「全くね…。最高評議会の脳みそどもより酷いじゃない」

ヤミ「グレアムのやった事など可愛く思えてきますよ」

セイバー「今すぐエクスカリバーで消し去り地獄に送ってやりたいと思いましたね」

神楽「アンのクソ天最低アル！女の風上にも置けないネ！もし会ったら木っ端微塵にしやるアル！」

新八「僕も彼女のような外道が絶対正義を名乗るなんて、自分勝手すぎると思いました。自分だけが正しいと思うなんて思い上がりもはなはだしいですよ！最低を通り越したゴミ人間ですね！！」

３つ目

支配者「私は伊達政宗と長曾我部元親が好きですね。仲間を大事に思う所がまさに“兄貴”って感じがします」

銀八「はい、だそうでよ。と言う訳で『ケン』さん。廊下に立ってなさい」

剣心「では今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第六十九訓　仲が悪いからと言ってコンビネーションが悪くなるわけではない

銀時「今回は酷かったな…」

剣心「うむ…」

シャナ・アルカ『作者アァァァァ！！！』

銀時「うわっ！？如何したんだよお前ら！！」

シャナ「作者どこだ！」

アルカ「今すぐ溶かし殺す！！」

シャナとアルカは今回の話が凄く気に入らなかったらしく作者に怒りをぶつけていた。

シャナ・アルカ『作者アァァァ！！どこに行ったアァァァァ！！！！』

2015

支配者「今回の話はちょっとやりすぎたかなと思いました…。では次回もお楽しみに」

シャナ・アルカ『ここにいたか作者…』

支配者「ゲッ！？」

シャナ・アルカ『死ねえぇぇぇぇぇぇ！！！！！！』

支配者「ギャアアアアアアアア！！！！」

2017

第七十訓　偉い人は大抵ワガママだ（前書き）

支配者「やっと、Ｗｏｒｄ機能が復活しました。また執筆再開です」

銀時「今度からはもっと速くしろよ」

支配者「壊れてたんだから仕方ないでしょ！！」

新八「その割には感想とかはよく書いてましたよね」

支配者「それ位はできたんですよ。とにかく楽しみにしてた皆様遅れて申し訳ありませんでした。今度からはこんなことがないよう努力します。ではご覧ください」

2018

第七十訓　偉い人は大抵ワガママだ

ここは江戸城

？？？「は～暇だわ～。なんでこんなに暇なのよ～」

一人の少女が暇だ暇だと唸っていた。

彼女の名は徳川千。将軍の妹である。そして『百花繚乱サムライガールズ』に出てくるあの徳川千である。性格は原作どおりツンデレでわがままである。ちなみに彼女はこの物語では雷撃系の能力者でレベルは6、通称『雷撃姫』なんて呼ばれている。そして薙刀の達人で攘夷志士の百人位を簡単に叩きのめせるほどの実力者だ。後余談だが柳生宗明はこの世界には存在していません。いたらなんかややこしい事になりそうだし……そして千の兄貴は吉彦ではなく徳川茂茂の方なのであしからず

千「全くも～なんでこんなに千が暇でなきゃいけないのよ～」

千はうなだれていた。彼女は暇でいるのが嫌いな性格である。結構わがままだし…

千「いっそのこと攘夷浪士が江戸城に攻めてきたりしないかしら…」

なんて事も言っていた。

コラコラめったな事言うもんじゃねえよ。

千「うっさいわね～。暇なんだから仕方ないでしょ」

千は愚痴っていた。

千「……そうだ」

千は何かを思いついた。

千「こうゆう時はやっぱり城下に出ましょ♪銀時達にでもお付きをさせればいいわ」

千はこんな事を言っていた。この言葉から分かるように千は銀時達万事屋の知り合いである。千は実は家出魔で何度も何度も江戸城を抜け出した事がある。その時に剣心や銀時たちと出会い歌舞伎町を案内させた事があるのだ。ちなみに神楽とは遊び友達である。

千「そうと決まれば早速出掛けましょっと」

千は城から抜けだすための準備を始めた。

？？？「おひい様～。そろそろお勉強のお時間ですよ～」

千の部屋の前にいる眼鏡をかけたメイド服の少女が千を呼んだ

彼女の名は、服部半蔵。千のお付メイドである。そして忍者だ。ちなみにこの物語では半蔵は服部全蔵のいとこにしてある。

半蔵「おひい様～。聞いてらっしゃいますか～？」

半蔵は千を呼ぶが千の返事はない。

半蔵「おひい様～？あれ？」

千はやっぱり返事をしない。

半蔵（どうして返事がないんでしょう…ハッ！）

その時半蔵は“まさか！”と思った。

半蔵「おひい様！失礼します！」

半蔵は大慌てで千の部屋に入った。
千は部屋にいない。すると部屋の窓が開いていた。
そして窓の外を見るといくつ物着物が結ばれてロープのように釣り下がっていた。
そして手紙がおいてあった。
半蔵が見るとその手紙には千の字で『暇だから外に遊びに行って来るわ』とかかれていた。

半蔵「あ～んおひい様ぁ～。また勝手にお城を抜け出しましたねぇ～（泣）」

半蔵は千がいなくなったのを見て泣きながらこう言った。

2022

千「はあ～やっぱり外はいいわねえ～。退屈な城の中なんかとはえらい違いだわ～」

江戸城から抜け出した千は町の中を歩いていた。ちなみに今の千の格好は普通の町娘の格好である。

千「さ～てと。銀時達の万事屋はどこだったかしら？」

千は万事屋を探しながら歌舞伎町の中を歩いていた。

？？？「あれ？千姫様じゃありませんか？」

千「ん？」

すると前からメイド服を着た二人の女性が声をかけて来た。ナギのメイド、マリアとヴィルヘルミナである。

ヴィル「こんな所で何をしているんでありますか？」
千「え？あ…いや…それは……」
マリア「……はは～ん。さてはまたお城から抜け出しましたね？」
千「ウッ…」

マリアに図星を指されて千はギクリとした顔をして後ろにたじろいた。ナギは幕府に多大な金を貸してやっているため、江戸城に出入りが自由にされている。その為千も三千院家に時々遊びに行ったりしていたのだ。そういう事が合ったので当然マリアも千の人柄は理解していた。

マリア「やっぱりそうでしたか…あんまり半蔵さんを困らせちゃだめですよ？」
千「うっさいわね～。半蔵なんか千の犬みたいなモンなんだから困らせようが何しようが別にいいのよ」

開き直った千はマリアに対してこう言った。

マリア「まあ…別にいいですけど」

…おいおいマリア良いのかよ。
すると千がマリアに尋ねてきた。

千「ねえマリア。剣心達の万事屋ってどこだったかしら？」
マリア「万事屋ですか？それだったらこの道をまっすぐ行って3つ目の角を左に曲がって進んで行ったらしばらくしたら見えてきますよ？」

千の質問にマリアはそう答えた。

千「ありがとマリア。察すが年の功！年上は違うわね～。お母さんの知恵袋って奴？」

千がこう言った。しかしマリアからは

ブチッ！

と何かが切れる音がした。

千「ん？」

ヴィルヘルミナ「ゲッ！」

その音に千が首を傾げ寡黙である筈のヴィルヘルミナが思わず『ゲッ！』と言ってしまった。

そしてマリアは顔は笑っているが黒いオーラを放っていた。

マリア「千姫様ぁ～？確か私たちって同い年でしたよねぇ～！？」

千「え？……あっ！」

千はいかにも忘れていたかのような事をいった。そう千の年は十七。つまりマリアと同い年の筈なのだ。

千「ごっ…ごめん。だってマリアって以下にも年上って感じがするから…」

マリア「それどういう意味ですかぁ～！？私の事何歳ぐらいだと思ってたんですかぁ～！！？（怒）」

千「え～ッと……三十七くらい？」

ビキィッ！！

この言葉で完全にマリアの堪忍袋の緒が切れた

マリア「コラァーーーーーーーーーーーーーーーーッ！！！！！（激怒）」

千「ヒイィィィーーーッ！！！ごめんなさーーーい！！！」

マリアが怒り出し、千が土下座をした。ヴィルヘルミナは軽く震えていた。

１０分後

マリア「全くも～～！」

千「ホンットにごめんなさい」

マリアに千はまだ謝っていた。マリアはまだ怒っていたが何とか少しは怒りは収まったようだ。

マリア「今度からはちゃんと気をつけてくださいね！？」

千「はい…気をつけます」

そして話は戻る

千「とりあえずこっちの道を行けばいいのね」

マリア「そうですよ」

千「そう、じゃあ道をおしえてくれてありがと♪じゃあねナギにも宜しく」

マリア「エエ」

そういって千は走って行ってしまった。

ヴィルヘルミナ「……マリア様」
マリア「ん？何ですかカルメルさん」

千がいなくなった後、急にヴィルヘルミナが口を開いた。

ヴィルヘルミナ「千姫様にあのこと言って置かなくてよろしかったんでありますか？」
マリア「あの事？……あっ！そういえば今日は…」

マリアは千に何かを伝え忘れたようだ。

マリア「千姫様…何か勘違い……っていうかややこしい事にならなきゃいいんですけど…」
ヴィルヘルミナ「そうでありますな…」

二人は何を心配しているのでしょう？

マリア「…念のために私達も行きますか？」
ヴィル「…そうでありますな」

二人は千の後を追っていった。

ここは幕府特殊部隊『真女組（しんじょぐみ）』の屯所。

『ええー！！また千様が城から抜け出したぁー！！』

半蔵「…はい」

半蔵がこう言った。半蔵はあの後『真女組』の屯所に駆け込んできたのだ

？？？「ああ～！あんのヒステリー女！！また勝手な事をしおって～！！！」

？？？「まあまあ幸村様。落ち着いてください」

軍師のような格好をした小さい黒髪の少女が千に向かってそう言い、灰色でかんざしをつけた大きい女性がそれを宥めた。

彼女の名は真田幸村『真女組』二番隊隊長であり真女組の頭脳と言われている。ＲＥＶＥＬ７クラスの風系の能力者でもある。原作通り千とはあんまり仲が良くない。

もう一人の方は後藤又兵衛、幸村の配下で苦労人だ。

アルカ「コラコラ幸村！千様に対してヒステリー女はないだろう！！」

幸村「うるさいわ！あんな我侭な奴の呼び名などそれで十分じゃ！！」

？？？「そうじゃのう。さすがにこうも城を抜けだされてはそうも言いたくなるかも知れん」

長剣を持った猫耳の女性が幸村の言葉に賛成するかのようにそう言った。

彼女の名は野井原緋鞠『おまもりひまり』のヒロインである。この小説では彼女は『真女組』３番隊隊長を勤めている。彼女は猫の妖怪だがその剣術の腕を買われて『真女組』にスカウトされた。もともと江戸にも長く住み着いていたそうだ。

？？？「…確かに猫や幸村さんの言うとおり、これは我侭といわれても仕方ないですわね」

銀色の長い髪をし額に月のマークを入れているゴスロリ服の少女がそう言った。彼女の名は神宮寺くえす。『真女組』の魔術顧問である。神宮寺家はもともと幕府に使える陰陽師の一族だったが、新たな力を得るために西洋魔術を近年から取り入れるようになったらしい。そしてもちろん彼女は原作通り緋鞠とは天川優人をめぐった恋のライバルである。
後、これは余談だが彼女は凛と一緒にイギリスで魔術を習っていた事があるため彼女とは結構親しい友人関係を築いている。

アルカ「仮にも将軍様の妹君だぞ!そんな口を利いていいはずないだろう!大体我々『真女組』の最大の目的は千姫様の護衛と安全を守る事なんだぞ!!」
幸村「仕事サボって異世界に行ってたような奴にそんなこと言われたくないわ!!」
アルカ「なんだとぉ!!」

二人は喧嘩を始めようとするが

???「二人共お止めなさい!!」

突然刀を持って入ってきた女の人が二人を止めた。

アルカ・幸村『かっ…神裂』

彼女の名は神裂火織『真女組』の局長である。
若くして真女組の女性隊士達をまとめるカリスマ的存在である。

神裂「何ですかあなたたちは!こんなときに喧嘩をしている場合じゃないでしょう!!」
幸村「だ…だが…神裂…こいつが」

アルカ「何だチビ助！私のせいだと言いたいのか！？」
幸村「そのとおりじゃろうが！このサボり女！！」
アルカ「なんだとぉ！！」
神裂「止めろって言ってんでしょーが！！！！」
アルカ・幸村
『はいっ！！』

神裂の怒鳴られ二人は黙った。

カーチャ「全くどうしようもないわね千の奴…ああ、花もうちょっと右」
花「はい♪カーチャ様」
神裂「カーチャ！貴方何やってるんですか！！」
カーチャ「何って…見たら分かるでしょ？花にマッサージさせてるの」
神裂「今は隊首会議中ですよ！真面目に話を聞きなさい！！大体千様を呼び捨てするな！！」

そして寝そべって話を聞いているのは四番隊隊長のカーチャ。そしてカーチャのマッサージをしているのは同じ作品の人物、桂木花。
カーチャの下僕と言うか奴隷である。
カーチャが千のことを呼び捨てしたのとだらしない格好しているので神裂が怒鳴ったのだ。

神裂「貴方はもう少し人の話を真面目に聞くということは出来ないんですか！？」
カーチャ「私は女王なのよ。何でそんなメンドクサイ話一々聞いてなきゃいけないのよ」
神裂「女王というのは貴方の唯の肩書きでしょうが！！いくらロシア帝国の皇室、ロマノフ家の末裔だからって！」

神裂はカーチャに怒鳴るがカーチャは無視。

神裂「全く…それで半蔵。千姫様がどこに行ったか心当たりはないのですか?」

半蔵「姫様はいつもふらふらと出かけられるものですから、どこに行ったのかまでは…」

神裂「全く…あなたはそれでも姫様のお付ですか?」

半蔵「面目ありません…」

神裂にこういわれ半蔵は下を向いた。

神裂「はあ…とにかくこの事をほかの隊長達にも伝えてください。念のために真選組や奴良組にも連絡を」

緋鞠「わかった」

くえす「了解しました」

そう言って真女組の隊長達は動き出した。

その頃千は万事屋の玄関の前に来ていた。

千（いまさらなんだけど…剣心って結構私のタイプなのよね～。顔はいいし。剣の腕は超一流だし♪言う事ないわ～。銀時みたいな天パはどうでもいいけど…）

千は心の中でこんな事を思っていた。どうやら千は剣心に気があるらしい。銀時には興味なさそうだが…

千「んじゃ。呼び出しますか」

ピンポ～ン。

千は玄関のチャイムを押した。

千「剣心～。銀時～。神楽～。誰かいる～？わざわざ千がお城から遊びに来て上げたわよ～。感謝しなさ～い」

千はこんな偉そうな事を言って剣心を呼び出そうとした。

「はい」

千「ん？」

部屋の中から女の声が聞こえた。しかしその声に千は聞き覚えがなく千は首を傾げた。

千（誰今の声？セイバー？ヤミ？いや…違うわよね。二人ともあんな声じゃないし…）

千は今の声が誰なのか気になった。

ガラッ

？？？「一体誰だ？」

千「え？」

扉が開き一人のピンクのポニーテールの女が出てきた。しかし千はその女性を見たのは初めてだった

千「…誰？…あんた？」

？？？「それはこちらのセリフだ。貴様こそ何者だ？」

千「って！質問してるのは千よ！千の質問に先に答えなさい！」

？？？「何者かも知れん奴の質問など答える気にはなれん」

千「なッ…なんですってー！！あんた千が誰だか分かっててそんな

事言ってんの!?」
???「そんな事はしらん」
千「ムカーッ!!何なのよあんたは!千に対してそんな偉そうな口聞くなんて!!大体ここ剣心達の家でしょ!何であんたみたいな見ず知らずの奴が家の中から出てくんのよ!!」
???「…なんだ貴様剣心達の知り合いか?」
千「え?」

千はその女性の言葉に思わず首を傾げた。
その時だ

???「シグナム~。誰か来たのか?」
千「ん?」

部屋の中から誰か出てきた。

???「シグナム。誰だこいつ?」

赤い髪の小さな女の子が千を指差してそう言った。

千(むかっ!こっ…こいつ?)
千「ちょっとお譲ちゃん?年上のお姉さんに対してこいつはないんじゃないかしら?」

千は赤毛の女の子に対してそういうが

???「誰がお譲ちゃんだ!この女(あま)!あたしのほうがお前より年上だぞ!」
千「はあ?そんなチビ助の癖して何いってんのよ!!」
???「あたしはチビじゃねえ!このアバズレ!!」

千「（ブチッ！！）誰がアバズレじゃこのガキーーーーー！！」

千とその女の子は喧嘩を始めてしまった。

すると

マリア「ああ～…やっぱりややこしい事になってましたね」

ヴィル「はい…」

マリアとヴィルヘルミナがやってきたのだ。

とりあえず二人は喧嘩している二人を止めた。

ここは万事屋のなか

千「異世界からきた？この二人が？」

マリア「はい」

千の質問にマリアはそう答えた。

マリア「この二人はシグナムさんとヴィータさんと言いまして、銀さんたちが異世界に行ったときに知り合ったそうなんです」

千「……ああ～、そういえばナギがこの間江戸城に来た時そんなこと言ってたわね…」

千は思い出したかのようにそういった。千もナギから剣心達が『リリカルなのは』の世界に行っていた事を聞いていたのである。

シグナム「マリア、結局彼女は誰なんだ？」

マリア「彼女は千姫様といって将軍様の妹君であらせられるお方です。まあ…この国で実際二番目に偉いお方ですわ」

ヴィータ「いいっ？こいつそんなに偉いの？」

千「こいつ言うな！！」

千はヴィータに対してそう怒鳴る。

シグナム「そうだったのか…それは失礼したな」

千「…別にいいわよ……将軍の妹なんて言ったって天人たちが来てからは飾りの地位になっちゃったからね……」

千は寂しそうにそう言う。実際幕府の実権は天道衆を始めとする天人たちが握っている。将軍の地位など実際飾りに過ぎない。

千「まあ、つまりようするに…剣心達はいないのね」
シグナム「ああ、仕事に行くと言ってな」
ヴィータ「あたしら遊びに来ただけなのに、ほとんど無理やり強制的に留守番させられたんだ」

シグナムとヴィータは顔を顰めながら千にそう言う。はっきり言って留守番させられている事に納得がいかなかった。

千「じゃあ…どうしようかしら…そうだ千と一緒に遊びに行かない？」
シグナム「あ…いや…でも剣心達に留守番を頼まれた身だし…」
千「かまやしないわよ。どうせこんななんもない家に泥棒なんて入るわけないんだから、鍵さえ閉めときゃ大丈夫よ」
ヴィータ「それもそうだな。行こうぜシグナム。せっかく誘ってくれてんだし」
シグナム「いや…だが…」
千「も～いいから行きましょ！！」
シグナム「あっ！おい！」

こうして千とシグナムとヴィータは外へと出て行こうとした。
すると、

???「ただいま戻りました～」

万事屋の新八（ダメガネ）が帰ってきた。

新八「オイィィィ！！今なんて書いて新八って読んだ！！」

新八が文中に文句を言った。
だってお約束だし

新八「お約束だしじゃねーよ!!もうこのネタにじファンの読者に飽きられてんだよ!!…はぁ…もういいや……シグナムさん達すいません。留守番なんかさせてって……千姫様!?」
千「あら、眼鏡じゃない」

千は新八を見た途端新八の眼鏡を見つめながらそう言った。
新八は千を見た途端もの凄く驚いた。そりゃそうだ、将軍の妹が目の前に現れたのだから

新八「なんで千姫様がこんな所にいるんですか!?…さては…また城を抜け出しやがったな!!」
千「固いこと言うんじゃないわよ眼鏡。ああ、そうだちょうどよかった。あんた留守番しといてよ。千はこれからこの二人と一緒に遊びに言ってくるから」
新八「何言ってんですか!今すぐ屯所に連絡しますからここにいてください!!後、僕は眼鏡じゃなくて新八ですから!!」

新八はそう言って家の中に入り屯所に連絡しようとした。
しかし

千「えい♪」

ズバババババ!!

千が新八に向かって電撃を放った。

新八「ギョバババババババババ！！！！」

新八は痺れまくって気絶した。

千「ふん、素直に千の言う事を聞いていればいいのよ」

シグナム「お、おい、こんな事して良いのか？」

千「いいのよ。これ位でどうにかなるような眼鏡じゃないんだから。

マリア～、カルメル～そいつのこと任せたから、じゃあね～♪」

マリア「あっ！ちょっと千姫様！！」

そう言って千はシグナムとヴィータを連れて行ってしまった

マリア「いいんでしょうか？これで…」

ヴィル「さあ……」

マリア「とりあえず新八君を万事屋の中に運び入れますか」

ヴィル「そうでありますな…」

マリアとヴィルヘルミナはこう言いながらも3人を見送った後ボロボロになった新八を万事屋の中に運び入れた。

新八「あれ……何……僕の……出番……これ……だけ……？」

新八は最後の力を振り絞ってこう言った後、完全に気絶した

おまけ

銀八
「教えて」

生徒全員
『銀八先生!』

銀八「では早速質問行くぞ。ペンネーム『ケン』さんから「カーチャってクイーンズゲイトで知った自分です。俺の作品に出てくるカナのイメージ声優は平野さんだからコスプレネタをした・・・

統夜「クェイサーは知らないもんな・・・カーチャと銀さんでハ○ヒネタが出来るよ」

んだな。セイラに関しては万事屋さんの意見が正しいですね。筆頭と兄貴ですか・・・自分もよく使ってます。

質問しますか。

新八へ

リリカルなのはのＤＶＤやアニメグッズを盗んだ貴方は一回警察に行きましたか?そこが気になりましたから・・・カーチャ様に調教され真人間になるといいっすよ（黒笑）

銀さんへ

もし貴方が魔導師の力に目覚めたら真虎龍王みたいなアーマードデバイスを使ってみたいですか?中の人ネタですが・・・

カーチャ様へ

クイーンズゲイトに出れて良かったですか?

新八「いや、あの子に調教されるのはちょっと…それに警察には行ってませんよ。何度も言いますけどね!あれは親衛隊員への罰なの!!」

神楽「まだそんな事言ってるアルカロリコン泥棒」

新八「だからロリコン泥棒じゃないって言ってんでしょ!!」

カーチャ「うっさいわよロリコン。それと質問の答えだけど、何で私がこんな不快なやつ調教しなきゃいけないわけ?私は雌豚しか調教しないのよ。そういうことは沖田に頼みなさいよ」

沖田「そう言う訳でさぁ。というわけでたっぷり痛めつけてやるぜロリコン」

新八「ちょっ、まっ、やめ、ギャアアアアア!!!!」

新八はカーチャにではなく沖田に地獄を見せられたのであった。

銀時「おい！中の人ネタはいい加減にしやがれ！！俺はもうコスプレなんかしたくねぇんだよ！！」
支配者「でも私としてはそのネタ使用させてもらいたいですね。」
銀時「止めろおぉおぉぉ！！俺を三作品にわたってコスプレ野朗にすんなあぁぁぁぁぁ！！」

銀時はまたコスプレ男になってしまうのであろうか？

カーチャ「そうねぇ、奴隷候補も一応いたことだし、よかったわよ。それに題名もいいしね。女王の私にぴったり♪」
銀時「お前はただのドS娘じゃねぇか」
カーチャ「女王って言うのは嫌がるおもちゃを痛めつけて楽しむもんなのよ♪」
全『こいつ最悪だー！！』

銀八「ハイ、とまあこんな感じです。というわけで『ケン』さん廊下にたってなさい」

剣心「次の質問でござる。ペンネーム『黒神』殿から「質問します。

ヒナギクへ

もし姉の九兵衛がチンクの事を嫌っているなら自分も嫌いますか？

弥彦へ

新しい新必殺技を思いついたので、それを送っていいでしょうか？

銀時へ

貴方もデジモンを育ててみる気はありますか？

以上です。

ヒナギク「姉さんが嫌ってるからって嫌うとは限らないわよ？まぁ、私に向かっても散々な態度をとられたら嫌な気分にはなるだろうけど」

九兵衛「ヒナギク、姉に敵は妹の敵だろう！お前も一緒に憎きチ○」

ヒナギク「卑猥な言葉を使わない！！」

バシッ！

九兵衛「へぶっ！」

ヒナギクは九兵衛にツッコミの面を食らわせた。

弥彦「俺の必殺技作って送ってくれて感謝してるぜ」

銀時「俺はブリーダーじゃねぇし金もねーんだよ。ペットは定春だけで十分だっつの」

銀八「ハイ、というわけです。『黒神』さん、廊下にたってなさい」

なのは「次の質問です。ペンネーム『ボッスン』さんから「バナージ「今回の話は銀さんと土方さんがやったあの話か」

ニンフ「よかったね。二人ともにじファン小説のヒロイン史上最低にならなくて」

アラド「本当っす」

質問です。

シャナさん以外の万時屋の皆さんと悠二君とアラストールさん。もしシャナさんが漏らしてにじファン小説のヒロイン史上最低になったらどうしますか？

ニンフさん。君は貧乳で悩んでいますが君がどんなに成長しても貧乳のままです。諦めたらどうですか？」喧嘩売ってる質問が来ましたね…」

悠二「ショックですね……」

アラストール『我も娘同然の存在がそんな事になったら死にたくなる』

二人はこういう。そしてシャナは

シャナ・ニンフ『……（ゴゴゴゴゴゴッ！！！！）』

ニンフと一緒にとんでもなく黒いオーラを放っていた

銀八「オイィィィ！！あんな質問するからこの二人がとんでもなくキレチャッテるよおぉぉぉ！！！！」

二人の様子を見て銀八は思いっきり叫んだ。

シャナ・ニンフ『死ねボッスゥゥゥゥン！！！！』

シャナは超巨大な火炎龍をニンフは破壊超音波をボッスンさんに向けて発射した。

銀八「あ～あ、とんでもねぇことに……『ボッスン』さん生き延びてください」

フェイト「次の質問です。ペンネーム『匿名希望』さんから「いろいろ凄かったですね、今回。

何というか……うぅむ…何と言うか……言葉にできない……。

質問

フェイトさんへ

”拙者、ロリコンになるからお主とは付き合えぬでござる”と剣さんから言われたら剣さんの事諦めれますか？

薫さんへ

”拙者、暴力的な女性とは付き合えぬでござる”と剣さんから言われたら剣さんの事諦めれますか？（笑）

支配者さんへ

新八いじるの飽きたならクロノ君やっちゃってください（黒笑）

p.s

るろうに剣心の新作アニメ、新京都編だそうですね（新訳・紅桜編と同じと見てる自分、似てるのが嬉しいな）

人誅編期待してたの自分だけじゃないはず…。」諦めません！１０年後にリベンジします！！」

銀時「オイィィィィ！いきなり何大声で恥ずかしい事宣言しちゃってんのオォォォォォ！！」

フェイトのいきなりの発言に銀時は思いっきりツッコンダ。

銀八「で、次は薫なんだけど」

薫「剣心の理想の女性になれるよう努力するわ。でもね、原作でも暴力は振るったけど最終的には私が剣心と結ばれてるのよ。問題ないわよ」

銀八「あっそ、じゃあ作者」

支配者「ハイです。機会があったらね♪」

クロノ「僕をイジルなぁぁぁぁ！！」

銀八「ハイ、『匿名希望』さん廊下にたってなさい」

剣心「次が最後でござるな。ペンネーム『‥』殿から「シャナとアルカに質問。第六十九訓で互いに喧嘩しながらトイレに行くくらい

ならいっその事漏らしてにじファン小説のヒロイン史上最低の称号を貰っちゃえば良いんじゃないんでしょうか？（黒笑）」初めてでこんな質問でござるか……」

シャナ・アルカ『死ねえぇぇぇぇぇぇ！！！！』

シャナとアルカは怒り任せに問答無用で超強力な火炎砲を放った。

銀八「やっぱこうなったか…『‥』さん。何とか生き残ってください」

剣心「では、今回はここまででござる」

支配者「次回もお楽しみに」

第七十訓　偉い人は大抵ワガママだ（後書き）

支配者「ハイ、こんな感じの話でした」

新八「ちょっと！何で久しぶりに出て僕があんな目にあわなきゃいけないんですか！！？」

支配者「だってお約束だし」

新八「もうそのネタいいんだよ！いい加減僕をいじめんな！！」

神楽「新八なんてああいう目に合う為だけに生まれてきたようなもんアル」

シャナ「出してもらっただけでも感謝しなさいよ」

新八「感謝できるか！！」

千「では次回だけど私の話の続きよ」

支配者「では、次回もお楽しみに」

新八「僕を無視すんなー！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1054r/

リリカル剣魂スペシャル　侍たちと魔法少女

2011年10月12日10時58分発行